

長崎県文化財調査報告書 第99集

九州横断自動車道建設に伴う  
埋蔵文化財緊急発掘調査報告書

VIII

1991

長崎県教育委員会

## 序

埋蔵文化財の保存と活用は、郷土の歴史と文化の伝統に基づく特色のある地方文化の形成に大きな役割を果たすものであります。

県教育委員会は、これまでも各種開発事業について、協議・調整を重ね、文化財保護に努めてまいりました。

九州横断自動車道建設事業につきましても、計画段階から可能な限り埋蔵文化財の保存に努めていただくよう関係機関と多くの協議をしてきましたが、18カ所の遺跡については計画変更が出来ないため、県教育委員会は、日本道路公団の要請を受け、昭和60年度から昭和62年度の3年間にわたって緊急発掘調査を実施し、その後平成2年度まで整理作業を進めてまいりました。

この報告書は、通巻第Ⅷ分冊として、坂口館跡ほか4遺跡について調査成果を取りまとめ収録したものです。

本書を文化財の愛護と活用、並びに学術研究の資料として役立てていただければ幸いに存じます。

平成3年3月

長崎県教育委員会教育長

吉 次 邦 夫

## 例 言

1. 本書は、九州横断自動車道建設工事に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書の第Ⅷ分冊である。

調査は長崎県教育庁文化課が日本道路公団福岡建設局の依頼を受け昭和60年度から62年度まで実施した。

今回報告の遺跡と編集責任者は下記のとおりである。

坂口館跡	大村市	昭和61・62年度調査	宮崎貴夫
上八竜遺跡	〃	昭和62年度調査	伴耕一朗
里郷遺跡	東彼杵町	昭和60・61年度調査	高野晋司
大久保遺跡	〃	昭和60年度調査	藤田和裕
小蘭城跡	〃	昭和61年度調査	町田利幸

2. 本書は、各遺跡ごとに分担執筆し、執筆者は各項文末に記した。

なお、松下孝幸・佐伯和信・小山田常一（長崎大学医学部解剖学第二教室）氏の玉稿をいただいた。

3. 本書の総編集を副島和明が担当した。

4. 出土遺物は、現在長崎県文化課が保管の任にあっている。

# 総目次

	頁
序	
例言	
I. 発掘調査の端緒と経過 .....	1
II. 遺跡の地理的環境 .....	9
III. 大村地区の調査 .....	17
1. 周辺の歴史的環境 .....	19
2. 坂口館跡 .....	27
3. 上八竜遺跡 .....	187
IV. 東彼杵地区の調査 .....	229
1. 周辺の歴史的環境 .....	231
2. 里郷遺跡 .....	237
3. 大久保遺跡 .....	341
4. 小藺城跡 .....	421
V. 附 篇 .....	831
長崎県東彼杵町小藺城跡出土の中世人骨 .....	831

## 挿図目次

Fig. 1	調査地点位置図	2
Fig. 2	周辺概念図	11
Fig. 3	周辺地質図	13
Fig. 4	周辺の地形分類図	14
Fig. 5	周辺遺跡分布図（大村市）	23・24
Fig. 6	周辺遺跡分布図（東彼杵町）	235・236
Fig. 7	遺跡の位置	834
Fig. 8	人骨の残存部，アミかけ部分	836

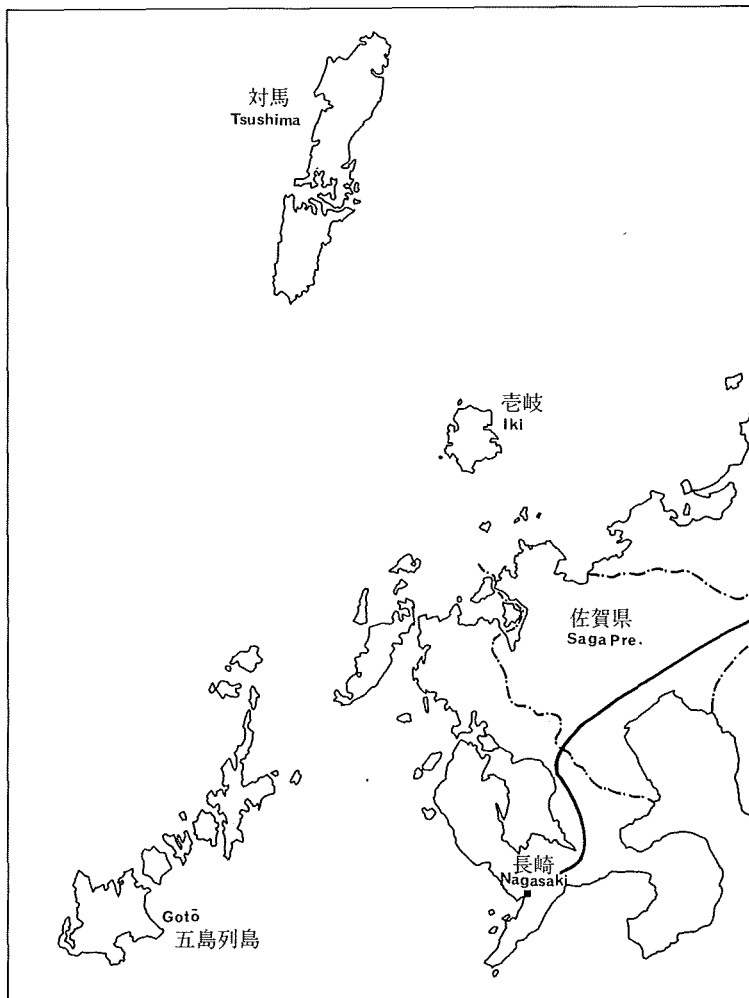
## 表目次

Tab. 1	九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査一覧表	4
Tab. 2	九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査一覧表	6
Tab. 3	大村市遺跡地名表	20
Tab. 4	大村市遺跡地名表	21
Tab. 5	大村市遺跡地名表	22
Tab. 6	東彼杵町遺跡地名表	233
Tab. 7	東彼杵町遺跡地名表	234
Tab. 8	資料	833
Tab. 9	歯の計測値（mm）	839
Tab. 10	齧 触	839

## 図版目次

PL. 1	461・481土壙墓人骨	842
-------	--------------	-----

# I. 発掘調査の端緒と経過



九州横断自動車道ルート図



Fig. 1 調査地点位置図 (●今回報告分 ■報告済み)

# I 発掘調査の端緒と経過

昭和41年北九州市と鹿児島市を結ぶ九州縦貫自動車道、大分市と長崎市を結ぶ九州横断自動車道建設（総延長250km）が計画された。

本県では、昭和45年6月に長崎市と大村市を結ぶ17.6kmの基本計画が策定され、昭和48年9月に路線発表がなされた。

当該区域内に含まれる文化財の取扱いについて日本道路公団と協議を重ねた結果、29箇所（遺跡）について、昭和50年度～昭和60年度にかけて緊急発掘調査を実施した。（その成果については、報告書を刊行している。）

昭和53年に第2期工事として、大村市と佐賀県嬉野町間の21.6kmの建設計画が採択された。道路公団と事前協議を重ね、当該路線内の分布調査を実施し路線変更が不可能な18箇所の遺跡について、昭和60年度～昭和62年度にかけ緊急発掘調査を実施することとなった。

また、発掘調査後、平成2年度まで遺跡の整理作業と報告書作成作業（通巻Ⅵ号～Ⅷ号）を実施し、本書の刊行をもって九州横断自動車道に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査事業も終了することとなった。各遺跡の調査概要は表（Tab. 1, 2）のとおりである。

（副島）

- |    |          |      |   |
|----|----------|------|---|
| 註1 | 長崎県教育委員会 | 1981 | 「九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書 I」<br>長崎県文化財調査報告書 第54集   |
|    | 長崎県教育委員会 | 1982 | 「九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書 II」<br>長崎県文化財調査報告書 第56集  |
|    | 長崎県教育委員会 | 1983 | 「九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書 III」<br>長崎県文化財調査報告書 第64集 |
|    | 長崎県教育委員会 | 1984 | 「九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書 IV」<br>長崎県文化財調査報告書 第69集  |
|    | 長崎県教育委員会 | 1985 | 「九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書 V」<br>長崎県文化財調査報告書 第72集   |
| 註2 | 長崎県教育委員会 | 1989 | 「九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書 VI」<br>長崎県文化財調査報告書 第93集  |
|    | 長崎県教育委員会 | 1990 | 「九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書 VII」<br>長崎県文化財調査報告書 第98集 |



Tab. 1 九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査総括一覧表

No.	遺跡名	所在地	面積(m <sup>2</sup> )	調査期間	遺跡の概要
1	坂口館跡	大村市荒瀬町	分布面積 3,040m <sup>2</sup>	①61.3.3～3.27 ②61.4.7～5.31 ③62.2.9～3.28 ④62.4.6～6.2 ⑤62.8.18～9.30	キリシタン大名大村純忠(1586没)の終焉の地。泉水のみ現存する。中世と近世の様々な柱穴群が検出されたが、純忠との直接的資料となるかは今後検討を要する。
			調査面積 2,420m <sup>2</sup>		
2	葛城	大村市鬼橋町荒瀬郷	分布面積 23,000m <sup>2</sup>	61.4.21～11.7	標高50mの丘陵上に位置し野田A遺跡と対峙する。鞍部には比較的良好な遺物包含層が残存しており、かなり広範囲に分布している。幼児の埋葬甕棺5基は県下でも貴重な例である。
			調査面積 2,850m <sup>2</sup>		
	野田A遺跡	大村市鬼橋町	分布面積 18,000m <sup>2</sup>	①61.11.12～62.3.20 ②62.4.6～6.5	江戸時代の墓を11基検出した。その中に僧侶の墓と推定される墓がある。
			調査面積 3,450m <sup>2</sup>		
3	野田B遺跡	大村市野田町	分布面積 550m <sup>2</sup>	61.9.29～10.6	標高40mの丘陵上に位置する。遺物包含層は開墾時の削平で消失したものと考えられる。
			調査面積 212m <sup>2</sup>		
4	野田古墳	大村市野田町	分布面積 2,390	61.6.16～9.19	開墾によりかなりの損壊を受けていた。封土はなく石室が天井石を欠いた状態で1基露出していた。7世紀の群集墳中の1基と考えられ、台地上の浅い谷の西側に2基追加確認した。玄室(遺体を安置する部屋)は、床に板石を敷きつめていた。副葬品の出土は少ない。
			調査面積 2,390m <sup>2</sup>		
5	野田の久保遺跡	大村市立福寺町弥勒寺町	分布面積 5,270m <sup>2</sup>	①61.10.7～62.3.20 ②62.4.6～6.2	丘陵平坦部および南面するなだらかな傾斜地に遺物の散布が多く見られる。縄文時代から弥生時代にかけて営まれた遺跡である。
			調査面積 4,100m <sup>2</sup>		
6	上八竜遺跡	大村市弥勒寺町	分布面積 3,450m <sup>2</sup>	62.1.13～3.26	丘陵斜面上に位置し浅い谷を挟んでA、B地区に区別される。A地区の状況は良かったが、B地区は良好な遺物包含層が残存しており、多くの遺物が出土した。また、柱穴群の検出により生活址も確認した。
			調査面積 1,380m <sup>2</sup>		
7	東光寺遺跡	大村市内原1丁目	分布面積 2,500m <sup>2</sup>	60.10.28～12.7	標高約125mの丘陵上に位置する。遺跡は開墾時の損壊を受けていたが、台地の辺縁部には縄文時代早期と晩期の比較的良好な遺物の包含状況が見られた。
			調査面積 750m <sup>2</sup>		
8	長石遺跡	大村市松原3丁目	分布面積 450m <sup>2</sup>	60.11.25～12.6	ゆるやかに傾斜する標高約140mの丘陵先端部に位置する。遺物包含層の大半は開墾等により消滅していた。遺跡の中心は調査区の東側と推察される。
			調査面積 212m <sup>2</sup>		
9	里郷遺跡	東彼杵郡東彼杵町里郷	分布面積 12,730m <sup>2</sup>	①60.12.5～61.3.27 ②61.4.7～5.31	標高約117mの丘陵上に形成された縄文時代を主体とした遺跡。遺物としては、旧石器時代から近世までと幅広い時代にわたって出土している。遺跡は広範囲に形成されているが、かなり損壊を受けていた。
			調査面積 6,065m <sup>2</sup>		

遺物・遺構等	時代	調査担当	整理担当	報告年
<ul style="list-style-type: none"> <li>・縄文式土器</li> <li>・石器（石鏃・石匙・剥片）</li> <li>・輸入陶磁器・近世陶磁器</li> <li>【建物址・箱式石棺】</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・縄文時代</li> <li>・弥生時代</li> <li>◎中世</li> <li>・近世</li> </ul>	副島・宮崎・立平 福田・本田・浦田 長嶋・村川	副島・宮崎 村川	1991
遺物総点数 28,300点				
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ナイフ形石器・縄文式土器</li> <li>・石器（石鏃・搔器・剥片）</li> <li>・甕棺</li> </ul>	◎縄文時代 ・弥生時代	藤田・立平・川畑	藤田	1990
遺物総点数 22,000点				
<ul style="list-style-type: none"> <li>・縄文式土器</li> <li>・石器（石鏃・搔器・剥片）</li> <li>【集石・墓穴・柱穴】</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・縄文時代</li> <li>・弥生時代</li> <li>◎近世</li> </ul>	藤田・立平・川畑	藤田	
遺物総点数 11,700点				
<ul style="list-style-type: none"> <li>・縄文式土器</li> <li>・石器（石鏃・石核・剥片）</li> <li>・陶磁器</li> </ul>	◎縄文時代 ・近世	宮崎・福田	宮崎	1990
遺物総点数 85点				
<ul style="list-style-type: none"> <li>・縄文式土器・石器</li> <li>・須恵器・陶磁器片</li> <li>【円墳・横穴式石室】</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・縄文時代</li> <li>◎古墳時代</li> </ul>	宮崎・福田・本田	宮崎・福田 本田	本書
遺物総点数 930点				
<ul style="list-style-type: none"> <li>・縄文式土器・弥生式土器</li> <li>・石器類・陶磁器片</li> <li>【不定形土壇・柱穴群・甕棺】</li> </ul>	◎縄文時代 ・弥生時代 ・近世	高野・久原・川道	高野	1990
遺物総点数 110,000点				
<ul style="list-style-type: none"> <li>・縄文式土器・弥生式土器</li> <li>・石器類</li> <li>【柱穴群】</li> </ul>	◎縄文時代 ・弥生時代	久原・伴	伴	1991
遺物総点数 12,000点				
<ul style="list-style-type: none"> <li>・縄文式土器</li> <li>・石器（石鏃・剥片）</li> <li>・近世陶磁器</li> </ul>	◎縄文時代 ・近世	安楽・町田	安楽・町田	本書
遺物総点数 9,000点				
<ul style="list-style-type: none"> <li>・石器類（石核・剥片）</li> <li>・須恵器片</li> <li>・陶磁器片</li> <li>・土錘</li> </ul>	◎縄文時代 ・古墳時代 ・近世	宮崎・草野	宮崎	1990
遺物総点数 294点				
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ナイフ形石器・縄文式土器</li> <li>・石器類（石鏃・搔器・削器）</li> <li>・陶磁器片</li> <li>【住居址・土壇墓・集石遺構】</li> </ul>	旧石器時代 ◎縄文時代 ・近世	高野・久原・川道 福田・川畑・小野	高野・小野	1991
遺物総点数 35,000点				

Tab. 2 九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査総括一覧表

No	遺跡名	所在地	面積(m <sup>2</sup> )	調査期間	遺跡の概要
10	大久保遺跡	東彼杵郡東彼杵町平似田郷	分布面積 2,730m <sup>2</sup>	60.9.2～10.31	標高約65mの緩やかな尾根上に位置する。良好な縄文時代の遺物包含層が確認されたが、削平・石取り等後世の人為的攪乱によりかなりの損壊を受けていた。
			調査面積 624m <sup>2</sup>		
11	野中墓地	東彼杵郡東彼杵町瀬戸郷	分布面積 190m <sup>2</sup>	61.12.13	標高約55mの丘陵上に祠られている。墓碑には、元禄年間の紀年銘が刻まれているが、単なる拝み墓で、遺体埋蔵墓地は別地と考えられる。
			調査面積 190m <sup>2</sup>		
12	野中遺跡	東彼杵郡東彼杵町瀬戸郷	分布面積 5,000m <sup>2</sup>	①62.3.2～3.18 ②62.4.6～4.21	野中墓地と同じ立地にある。墓地改葬中に縄文時代の遺物が発見され、遺跡の存在が確認された。縄文時代の包含層はごく一部の狭い範囲に堆積していたが、遺跡の主体は中～近世であり建物跡が検出された。
			調査面積 2,520m <sup>2</sup>		
13	小園城跡	東彼杵郡東彼杵町瀬戸郷字小園	分布面積 5,300m <sup>2</sup>	61.11.25～62.3.27	標高約30mの海岸段丘上に位置する。大村郷村記「小園城」の記録がある。調査の結果、城跡の遺構の他に、それ以降の近世の屋敷跡が存在したと考えられる。また、16世紀頃の墓4基(その内3基には人骨が埋納されたまま)を検出した。
			調査面積 4,800m <sup>2</sup>		
14	宮田A遺跡	東彼杵郡東彼杵町千綿宿郷	分布面積 1,960m <sup>2</sup>	61.6.16～9.26	千綿川の堆積作用で作出された沖積地と微高地上に縄文時代後・晩期から弥生時代中期にかけて形成され集落址・生活址が付近に存在すると考えられる。特に、扁平打製石斧の出土量が多く(400本)、農耕と関連する生産背景が注目される。
			調査面積 1,720m <sup>2</sup>		
15	外園遺跡	東彼杵郡東彼杵町千綿宿郷	分布面積 4,170m <sup>2</sup>	61.3.3～6.11	標高約65～80mの緩やかに傾斜する丘陵上に位置する。縄文時代中期から晩期の遺物の出土があったが、遺跡の主体は中世～近世に至る時期と考えられる。小礫を集めた集石土壙や帯状の石敷遺構・石垣等の遺構の検出があるが、いずれも性格不明。
			調査面積 3,225m <sup>2</sup>		
16	名切D遺跡	東彼杵郡東彼杵町千綿宿郷	分布面積 4,790m <sup>2</sup>	61.8.25～10.9	標高約60～70mの丘陵斜面上に位置する。遺跡の主体部は町営グラウンドの下にあり、調査区域は辺縁部と考えられる。遺物包含層は流失していた。
			調査面積 1,100m <sup>2</sup>		
17	名切A遺跡	東彼杵郡東彼杵町彼杵宿郷	分布面積 640m <sup>2</sup>	61.4.21～5.10	標高約60mの丘陵上に位置しており、遺物の散布はわずかに見られるが、遺物包含層が流失してしまっており、地山までの深度が浅く状況は良くなかった。
			調査面積 335m <sup>2</sup>		
18	松山A遺跡	東彼杵郡東彼杵町彼杵宿郷	分布面積 8,110m <sup>2</sup>	①61.7.7～62.3.20 ②62.4.6～6.19	標高約70mの丘陵上に位置する。谷部に面した斜面上に形成されている。かなり広範囲に分布しており多くの遺物が出土している。特に、石鍬の出土量の多さには注目され、石鍬60点の出土は県下最多例である。
			調査面積 5,125m <sup>2</sup>		
合 計		・分布面積 104,720m <sup>2</sup> ・調査面積 43,568m <sup>2</sup>			

遺物・遺構等	時代	調査担当	整理担当	報告年
・ナイフ形石器 ・石槍 ・縄文式土器 ・石器類(石鏃・剥片等)	・旧石器時代 ◎縄文時代	藤田・久原・川畑	藤田	1991
遺物総点数 15,300点				
・古銭(寛永通宝) ・土瓶	◎近世	田川・宮崎	宮崎	本書
遺物総点数 4点				
・縄文式土器 ・石器類(磨製石斧・剥片等) ・陶磁器片 【柱穴群・土壙】	・縄文時代 ・弥生時代 ◎中世 ◎近世	副島・町田・村川 小野	町田・村川 小野	本書
遺物総点数 1,500点				
・縄文式土器・石器類 ・陶磁器類(中世・近世) 【空壕2条・石垣・土壙・集石・遺構 土器溜】	・縄文時代 ・弥生時代 ◎中世 ◎近世	町田・福田・村川 本田・伴・小野	町田・村川 伴・小野	1991
遺物総点数 50,000点				
・縄文式土器・弥生式土器 ・石器類 【集石土壙・不明土壙】	・縄文時代 ◎弥生時代	高野・久原・川道	高野・川道 宮崎	本書
遺物総点数 28,900点				
・縄文式土器・石器類 ・輸入陶磁器類 【柱穴群・集石土壙・石敷遺構・石垣】	・縄文時代 ◎中世 ・近世	安楽・藤田・町田 浦田・長嶋	安楽・藤田 町田	1990
遺物総点数 12,000点				
・縄文式土器 ・石器類(石鏃・剥片等) ・陶磁器片	◎縄文時代 ・近世	町田・伴	町田・伴	本書
遺物総点数 8,000点				
・縄文式土器 ・石器類(剥片)	◎縄文時代	町田・浦田	町田	本書
遺物総点数 500点				
・ナイフ形石器・縄文式土器 ・石器類(石鏃・剥片・石斧) ・石鍋片・陶磁器類 【集石遺構・土壙】	・旧石器時代 ◎縄文時代 ・近世	安楽・浦田・長嶋	安楽	本書
遺物総点数 65,000点				
遺物総点数 410,513点				

【 】内は遺構 ◎主体となる時代

本年度報告遺跡の発掘調査ならびに整理作業担当者は下記の通りである。

田川 肇	長崎県教育庁文化課副参事兼調査係長		
高野 晋司	〃	主任文化財保護主事	
副島 和明	〃	〃	
藤田 和裕	〃	〃	
宮崎 貴夫	〃	〃	
立平 進	〃	〃	(現県立美術博物館主任学芸員)
町田 利幸	〃	文化財保護主事	
村川 逸朗	〃	〃	
久原 卷二	〃	指導主事	(現長崎県立島原高等学校教諭)
川道 寛	〃	〃	(現長崎県立西陵高等学校教諭)
川畑 敏則	〃	〃	(現佐世保市立山手小学校教諭)
福田 一志	〃	文化財研究員	(現長崎県立上対馬高等学校教諭)
浦田 和彦	〃	〃	(現長崎県立壱岐高等学校教諭)
本田 秀樹	〃	〃	(現長崎県立富江高等学校教諭)
長嶋 徹	〃	〃	(現長崎県立長崎南高等学校教諭)
正林 護	〃	文化財調査員	
伴 耕一朗	〃	〃	(現唐津市教育委員会)
小野ゆかり	〃	〃	

## Ⅱ．遺跡の地理的環境

## II 遺跡の地理的環境

本報に関わる地域は、大村市北部から東彼杵郡東彼杵町にかけての長崎県本土部の中東部に当る。東は佐賀県、西は大村湾に面し、南は諫早市、北は佐賀県・東彼杵郡川棚町がある。

大村市は大村湾の南東岸に位置し、面積126.45km<sup>2</sup>、人口72,039（昭和63年12月末）は、県内8市中それぞれの6位・4位である。昭和17年県内5番目の市として市制を施行した。東に多良山系の山波があり、東高西低の地勢を呈している。多良山系からは深い谷を穿って郡川が西流し、大村扇状地をつくって市の主な生活舞台を提供している。

994（正暦5）年藤原直澄が入って大村氏の藩祖となり、郡川河口近くに本拠を構えたが、大村純忠により三城城、その子喜前によって玖島城が築かれた。純忠は、キリシタン大名として知られ、長崎開港や天正遣欧少年使節を派遣したりしている。玖島城址の東部地区には、藩校五教館御成門や武家屋敷が残り、江戸時代の面影を伝えている。明治30年に放虎原に陸軍歩兵連隊が置かれ、大正12年には海軍航空隊も開設されて大村は軍都の様相を呈した。現在も自衛隊基地として受け継がれている。大村湾に浮ぶ箕島には、世界初の海上空港として長崎空港が設けられた。九州横断自動車道の建設など高速交通体系が次第に整うにつれ地域浮揚の要素が増大し、臨空港型の工業立地や農業の集約化など県央の中核地域として地域の変容が起りつつある。従って人口も昭和40年以来増加傾向がつづいている。産業別就業人口をみると、第一次産業12.4%、第二次産業20.8%、第三次産業66.7%となっており、県平均（17.3, 23.3, 59.3）と比べ第一次産業が少なく、第三次産業が<sup>註1</sup>多い。市の行政・経済や文化面での機関のほとんどは大村平野南部の市街地に集中し、近世以来の中心機能を継承している。

東彼杵町は、大村湾の北東岸にあり、北西—南東方向の海岸線を一長辺とする略平行四辺形の町域をもつ。面積74.21km<sup>2</sup>、人口10,387（昭和63年12月末）。全体に山がちで、南東部の遠目山（849m）を最高所とし、

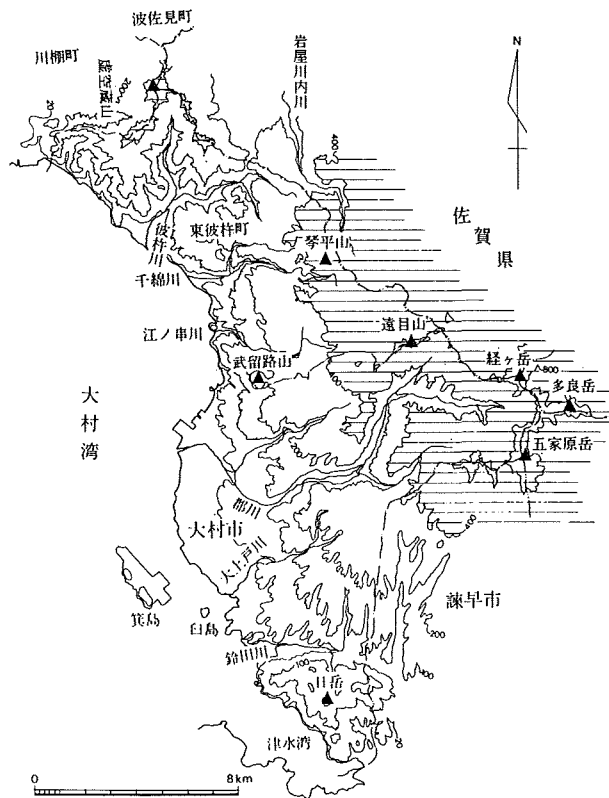


Fig. 2 周辺概念図

北及び西へ高度を逡減して多良山系の山地・溶岩台地がつづき、彼杵川をはさんで北には虚空蔵山塊が占めている。海岸に沿って大音琴・彼杵・千綿や里のまとまった集落がほぼ等距離で並び、国道・JR大村線がこれらを結んでいる。その他彼杵川の河谷や丘陵状の山麓傾斜面にも古い集落がみられる。産業別就業人口は、第一次産業31.5%、第二次産業26.9%、第三次産業41.5%で、県平均に比べ第一次産業が多く、第三次産業が少ない。大村市と好対称をなす。第一次産業は、農業・林業がさかんで、中でも県内の51.6%もの茶園面積をもつ県内一のお茶どころとして知られる。彼杵が町の中心地で江戸時代の長崎街道の宿駅として発達した。今も国道34号、205号が分岐し、九州横断自動車道のインターチェンジが建設されており、交通要衝として今も昔も変わらない。

大村市・東彼杵町両地域は、多良山系や虚空蔵山などの山々が広い面積を占め、大村扇状地や彼杵川河口部などに平野がみられるだけである。これらの基盤をなすのは、第三紀の堆積岩（杵島層群）で、彼杵川の谷底などに一部みられる。この上に安山岩や玄武岩質の火山性岩石が何層も噴出して、複雑な地形区をつくっている。<sup>註2</sup>

多良山系は、経ヶ岳（1076m）を最高峰とする火山で、有明海と大村湾との間に噴出し、諫早地峡で狭まりながら島原半島や長崎・西彼杵半島を肥前半島胴部と繋いでいる。基底部には玄武岩や変朽安山岩があり、その上に安山岩質の火山岩が噴出して、五家原岳（1058m）、多良岳（983m）、経ヶ岳（1075m）、遠目山（849m）や郡岳（826m）などの溶岩円頂丘群が形成されている。これらの諸峰が郡川上流の黒木谷をとり囲むようにみられるところから、黒木の盆地状地形を火口とする考えもある。大村市と東彼杵町との境界付近には、美しい武留路山（341m）や飯盛山（335m）、鉢巻山（335m）があり、寄生火山としての性格をもつ。

多良山系北部は玄武岩が広く、溶岩台地となる。大野原台地と呼ばれる高位の玄武岩台地と中位の赤木台地とに分類される。大野原台地は、遠目山や郡岳の北麓に県境にそって広がり、琴平山や大野原を中心とした標高400mほどのゆるやかに起伏する台地で、一部は自衛隊の演習場として利用されている。北から彼杵川・塩田川支流の岩屋川内川、西から千綿川が深い谷を刻み、台地に上る所に大きな遷移点がみられる。赤木台地は、彼杵川と千綿川とにはさまれた標高200m内外の台地である。両台地とも周辺に急斜面が発達し、地形区の境界に溜池がみられ、茶園の土地利用が広いなどの共通点がみられる。

多良山系の南部は有明海へゆるやかに裾をひく山麓面が発達して、放射状の多くの谷がみられる。この山麓地形は、多良火山初期に噴出した火山泥流（火山砕屑岩）によるもので、西端は大村扇状地にも接しており Fig. 3 にもみえる。鈴田川以南は第三紀層の丘陵に日岳などの玄武岩がのこって平頂性の山地となっている。

虚空蔵山地は、東彼杵町の北部を占める山地で輝石安山岩・集塊岩状安山岩や安山岩質凝灰角礫岩などの安山岩質溶岩からなる。主峰の虚空蔵山（608.5m）ほか不動山・高見岳などの峰がいくつかに分かれ、Fig. 4 のとおり侵食谷が樹枝状に深く入り込み、開析が進んでいる



ことを示している。山容は壮年期性を呈し、山頂はビュート状に尖っている。

山地や台地の周辺にはゆるやかな起伏の山麓地形がみられる。大村市街地の東方、江ノ串川から彼杵川にかけての海岸沿いによく発達している。本報に関わる九州横断道はこの緩斜面をぬって走るため、山麓端に立地する遺跡が大半を占める。

以上の山地地形を切って流れる諸河川は、東高西低の地勢を反映して西へ流れて大村湾へ注ぐものばかりである。郡川・彼杵川や千綿川などを代表的河川としてあげることができる。

郡川は当地域最大の河川で、延長14.6km、流域面積54.7km<sup>2</sup>を測る。多良岳の西麓に源をもち、多良火山に深いV字谷をつくる。黒木盆地の出口には萱瀬ダムが多目的ダムとして建設され、長崎市へも送水されている。中流で南川内川、下流で佐奈川内川などの比較的大きな支流を集めて河道を広げ、大村湾へ注ぐ。田下の集落付近からは、両岸に細長く河岸段丘が発達し、坂口以下は大村扇状地となる。大村平野の大部分を占める大村扇状地は、扇頂の坂口から約135°の角で半径4kmにわたって西へ開いており、坂口（標高45m）から約1/100のゆるい傾斜をもつ。扇端は海に没しているといわれる。最終氷期の海面上昇に形成されと考えられ、主に多良火山から供給された砂礫層は150mをこすという。郡川はかつては扇状地の主軸にそって西へ直流しており、旧河道を示す小凹凸が扇頂から放射状にみられる。完新世の海面上昇にともない基準面が変動して旧扇状地は侵食を受けるとなり、郡川の河道は北転して一段低い新しい扇状地をつくって今日に至っている。一段高い旧扇状地は畑の土地利用が多く、新扇状地は主に水田に利用されている。また海進にともなって海岸近くの扇面は、一部侵食を受

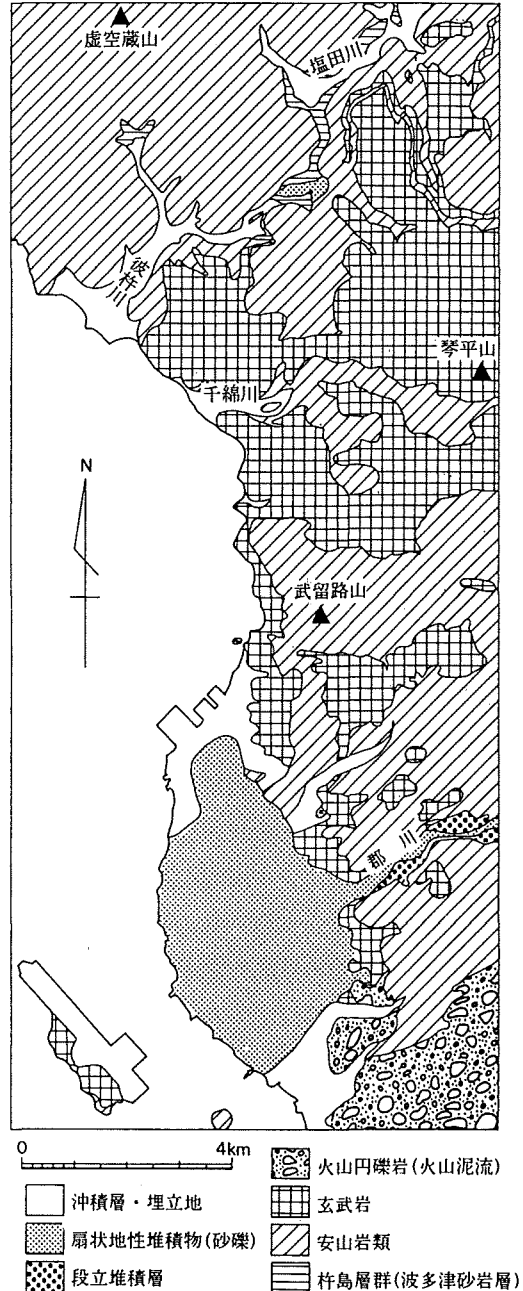


Fig. 3 周辺の地質図

け、波食台をつくっている。現在の河道の下流部には、自然堤防の微高地があり、川端・竹松遺跡などの縄文・弥生時代遺跡がみられ、地形発達史をうかがうことができる。河口部には沖田三角州と呼ばれる扇状地状三角州がみられ、条里制地割が認められている。大村扇状地南部の大上戸川河口部にも小三角州が形成され、同様に条里遺構がみられる。両地域周辺には古墳も多く、水田可耕地をもつ大村扇状地の両扇側から開発が進んだことが知られる。扇中央部は地下水位が深く開発が遅れたが、江戸時代になって千葉ト枕による放虎原開拓が有名である。

彼杵川は延長6.8km、流域面積25.4km<sup>2</sup>、東彼杵町北半部を流域とする。大野原台地北部の中山を水源とし、北西流する支流を合わせて西へ向きを変え、次第に広い河谷となる。虚空蔵山南麓を侵食する川内川を合流して西南へ向きを転じ、大村湾へ注ぐ。中流域には3～4段の河岸段丘が断片的にみられ、低位面の残りがよい。扇状地性の山麓堆積面も谷底平野に接して一部みられる。下流部はやや広い低平地となる。標高20m以下には流路の変動を示す旧河道があり、5mの等高線は河道部で下流に凸となり、荒れ川の性格をもつ扇状地性、あるいは天井川の性格をもつ平野であることを示している。この平野が東彼杵町最大の平地で、東彼杵町の中心部をのせている。下流部両岸には、彼杵川古墳群、上杉古墳群やひさご塚などの古墳があり、縄文～古墳時代の住居址・墳墓群を検出した白井川遺跡、中世の輸入陶磁器などを多量に出土した岡遺跡などがあり、開発の古さを物語っている。

千綿川は延長2.8km、流域面積27.5km<sup>2</sup>、東彼杵町の中央部を流域とする。遠目山北麓に源を発し、玄武岩台地を侵食して西へ流れ、

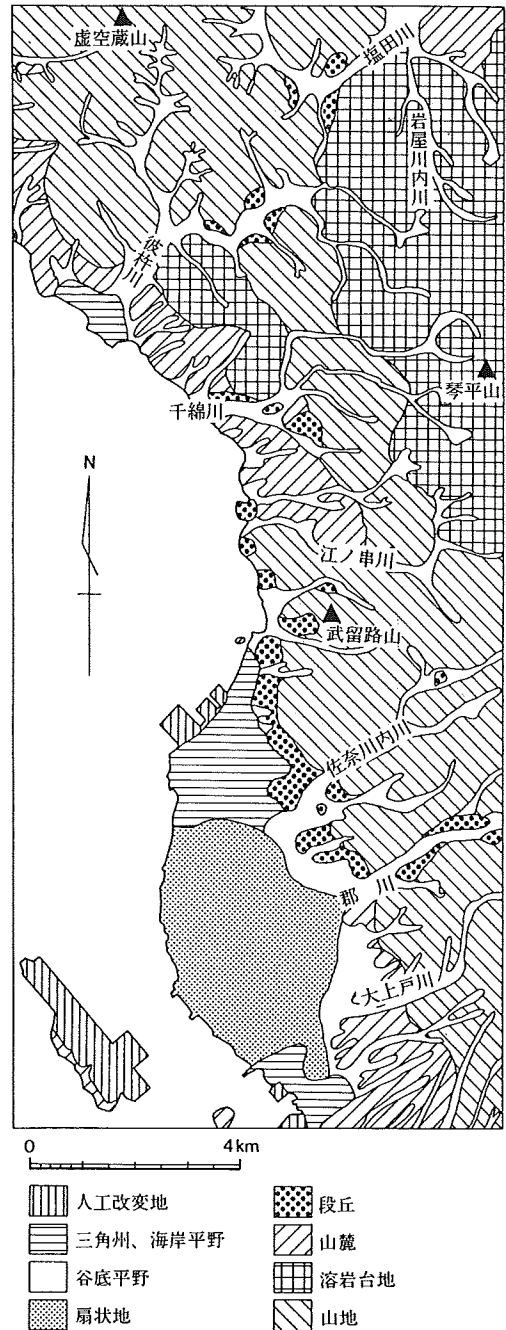


Fig. 4 周辺の地形分類図

標高400m以下の中流に滝や淵の連続する溪谷美をつくっている。幕末の儒者広瀬淡窓はここを訪れ、48の淵にそれぞれ命名し、龍の勢になぞらえて龍頭泉と総称したという。東彼杵町を代表する観光地となり、夏にはそうめん流しや鯉料理とともに涼を求める人々でにぎわう。江ノ串川にも大樽滝・小樽滝があり、佐奈川内川の裏見ノ滝、大上戸川の山田ノ滝などいずれも下位の火山砕屑岩と上位の安山岩や玄武岩との侵食の差から生じたものである。千綿川の下流部にも細長い谷底平野があり、河道が左岸山麓に寄るため、右岸に段丘が認められ、宮田遺跡が占地している。河口部に千綿宿の集落がある。

これらの河川が流れ込む大村湾は、西彼杵半島に抱かれた閉鎖的の海湾で、佐世保湾との間に針尾島があり、狭い針尾瀬戸・早岐瀬戸で通じるのみである。南北26km、東西11km、面積320km<sup>2</sup>、周囲280km。中央部でも20mと比較的浅い。西彼杵半島側には多くの島や支湾があり、リアス式の出入りの多い海岸線をなしている。東海岸にあたる大村・東彼杵側は、大村扇状地や彼杵川三角州などの堆積作用も活発で、単調な海岸線をしている。ナマコ・イワシ・エビなどの沿岸漁業や真珠・ハマチ・タイ・マダイなどの養殖業でも知られる。湾内には24水系35河川が流入しており、生活排水の増加や自然海岸の減少などによって地先水域の汚染が進行し問題となっている。

この地域にナイフ形石器が盛行した旧石器時代の後期ごろは、寒冷で著しく海面が低下していたという。そのころは大村湾はひとつの盆地をなし、今湾内に注ぐ諸河川はひとつになって流れ出ていた。完新世になるころ湾内に海水が進入してきたと考えられる。 (久原)

註1 長崎県 (1987)「第34版長崎県統計年鑑」その他の統計も本書による。

註2 ♪ (1973)「土地分類基本調査 大村」

♪ (1975)「 ♪ 早岐」

註3 田中正央 (1977)「大村扇状地の地形」『日本大学農獣医学部一般教養研究紀要No.13』

註4 長崎県教育委員会 (1987)「長崎県遺跡地図」『長崎県文化財調査報告書第87集』

註5 東彼杵町教育委員会 (1988)「岡遺跡」『東彼杵町文化財調査報告書第2集』

参考文献 大村史談会 (1977)「大村史談 上・中・下巻」

角川書店 (1987)「角川日本地名大辞典 42長崎県」

### Ⅲ．大村地区の調査

坂口館跡

上八竜遺跡

### Ⅲ 大村地区の調査

#### 1. 周辺の歴史的環境

大村市は、県中部に位置し、東側は経ヶ岳、五家原岳、多良岳からなる多良山系を背に佐賀県と境をなし、西側に大村扇状地が広がり大村湾に面している。大村湾に注ぐ郡川等の河川流域には、肥沃な沖積扇状地が形成され、多くの遺跡が営なまれている。

ここでは、本書掲載遺跡の周辺遺跡について記すことにする。

大村市内には、先土器時代～江戸時代に至る周知の遺跡<sup>註1</sup>が131箇所程知られている。

先土器時代の遺跡は、20箇所を数える。昭和21年頃に東彼杵町本地寺住職井手寿謙氏によって発見された野岳遺跡<sup>註2</sup>や大久保遺跡、坂口館跡（本書掲載）等でナイフ形石器から細石器文化所産の時期の遺物が発見されている。

縄文時代の遺跡は、59箇所を数えるが、縄文早期～後期の遺跡については、今の所詳細は不明である。縄文晩期の時期になると、昭和52年黒丸地区下水道工事関係の発掘調査で、甕棺が検出された黒丸遺跡<sup>註3</sup>がある。この遺跡は、大村扇状地に位置し、墳墓群と共に甕、鉢等の土器類や石鏃、扁平打製石斧等の石器類が数多く発見されるなど集落跡が形成されていたことが窺い知られる。また、弥生時代の甕棺墓や石庖丁等の遺物、古墳時代の遺物、鎌倉、室町時代の青白磁の碗等の輸入陶磁器片や条里制の跡等、古代に至るまで複合した遺跡である。

弥生時代の遺跡は、8箇所程を数え、郡川流域の扇状地に立地する。特に、昭和56年から昭和61年まで、遺跡の範囲確認調査が実施された富の原遺跡<sup>註4</sup>は、弥生中期初頭～後期初頭の住居跡、甕棺墓、石棺墓等発見された集落跡である。甕棺墓の副葬品として、鉄戈・銅剣が4本出土するなど、この地域における弥生時代の村の様相をもつものである。

古墳時代の遺跡は、45箇所を数え、その内古墳は38基確認されている。昭和39年に九州大学考古学研究室の小田富士雄氏等によって、2箇所の古墳が発掘調査された。黄金山古墳<sup>註5</sup>は、径15m程の円墳で、石室の主体部は、5世紀初頭の「石棺系横口式石室」であることが確認され、一方の玖島崎古墳群<sup>註6</sup>は、7世紀後半の群集墳であることが判明した。

また、昭和62年に宅地造成工事関係で発掘調査された小佐古石棺群<sup>註7</sup>は、4世紀後半から5世紀前半の時期の石棺墓群が明らかになった。

平野部において、稗田遺跡<sup>註8</sup>、大堂遺跡<sup>註9</sup>等が知られている。また、中世の寺院跡が多く知られている。

近年、郡川流域を含めて、ほ場整備事業および九州横断自動車道関係、都市計画街路等の種々の開発で、発掘調査が実施され、寿古遺跡、黒丸遺跡、稗田遺跡等大村扇状地を生活基盤とする遺跡群が明らかにされつつあり、遺構の様相については、今後の詳細な報告に待ちたい。

(副島)

Tab. 3 大村市遺跡地名表 ①

番号	遺跡名	遺跡所在地	立地	出土遺物	時代	文献
1	御伊勢堂堤遺跡	大村市東野岳町久津920, 921	台地 標高 280m~300m	石鏃, 黒曜石剥片, サマカイト剥片	縄文	
2	後平原遺跡	〃 〃 〃 後平原1025, 1026	〃 〃 290m~		先土器・縄文	
3	御伊勢堂遺跡	〃 〃 〃 御伊勢849	〃 〃 270m~290m	黒曜石剥片	〃 〃	
4	野岳遺跡	〃 〃 〃 1097—2県立野岳公園内	〃 〃 260m~280m	細石核, 細石器剥片, ナイフ型石器, 骨燵式土器	〃 〃	12
5	鏡山遺跡	〃 〃 〃 鏡山	〃 〃 270m~	マイクロコア, マイクロブレイド, サマカイト, ブレイク, サマカイトコア, 黒曜石コア	先土器	
6	野岳平遺跡	〃 野岳町野岳平	〃 〃 260m~270m	石核, スクレイパー, 剥片, マイクロブレイド, 石鏃他	先土器・縄文	
7	丸尾遺跡	〃 丸尾1640—1, 1640—2	〃 〃 250m	ナイフ型石器, 石核, スクレイパー, 石刀, 石鏃他	〃	
8	野中遺跡	〃 武留路町野中	丘陵 〃 80m~90m	黒曜石剥片	縄文	
9	久津石楢群C地点	〃 松原二丁目石見317	台地 〃 10m		古墳	
10	久津石楢群D地点	〃 〃 〃 二丁目小川	〃 〃 0m~10m		〃	
11	久津石楢群B地点	〃 〃 〃 小川251	〃 〃 10m~20m		〃	13
12	久津石楢群A地点	〃 〃 〃 久津216	〃 〃 10m		〃	13
13	鹿の島古墳群1号墳	〃 〃 〃 松原鹿の島	島 〃 0m~10m		〃	
14	鹿の島古墳群2号墳	〃 〃 〃 〃	〃 〃 〃		〃	
15	鹿の島古墳群3号墳	〃 〃 〃 〃	〃 〃 〃		〃	
16	鹿の島古墳群4号墳	〃 〃 〃 〃	〃 〃 〃		〃	
17	鹿の島古墳群5号墳	〃 〃 〃 〃	〃 〃 〃		〃	
18	鹿の島古墳群6号墳	〃 〃 〃 〃	〃 〃 〃		〃	
19	鹿の島古墳群7号墳	〃 〃 〃 〃	〃 〃 〃		〃	
20	鹿の島古墳群8号墳	〃 〃 〃 〃	〃 〃 〃		〃	
21	鹿の島古墳群9号墳	〃 〃 〃 〃	〃 〃 〃		〃	
22	鹿の島古墳群10号墳	〃 〃 〃 〃	〃 〃 〃		〃	
23	鹿の島古墳群11号墳	〃 〃 〃 〃	〃 〃 〃		〃	
24	久保田遺跡	〃 〃 〃 久保田710	台地 〃 40m~50m	黒曜石剥片	縄文	
25	長石遺跡	〃 〃 〃 三丁目長石	丘陵 〃 140m	〃	〃	24
26	地炉石遺跡	〃 〃 〃 地炉石	台地 〃 145m~150m	〃	〃	
27	西の谷遺跡	〃 〃 〃 西の谷	丘陵 〃 40m	〃	〃	
28	尾ノ上遺跡	〃 〃 〃 二丁目尾ノ上	〃 〃 30m	〃	〃	
29	今山・中野遺跡	〃 〃 〃 三丁目今山・中野	台地 〃 60m~70m	〃	〃	
30	延命寺跡	〃 〃 〃 三丁目今山	〃 〃 70m~80m	五輪塔	奈良~中世	8, 14
31	南遺跡	〃 〃 〃 一丁目南	〃 〃 90m~100m	黒曜石剥片	縄文	
32	大忠平遺跡	〃 草場町大忠平667, 673	〃 〃 20m~30m		〃	
33	東光寺跡	〃 松原一丁目東光寺	〃 〃 70m		中世	
34	東光寺遺跡	〃 〃 〃	〃 〃 116m~120m	黒曜石剥片	縄文	23
35	中谷遺跡	〃 野岳町中谷	〃 〃 158m~160m	〃	〃	
36	下松尾遺跡	〃 草場町下松尾362	丘陵 〃 50m~60m	〃	〃	
37	上松尾遺跡	〃 草場町上松尾153, 154	台地 〃 80m~90m	〃	〃	
38	八龍古墳	〃 弥鞆寺町上八龍	丘陵 〃 90m		古墳	2
39	上八龍遺跡	〃 〃	〃 〃 100m~110m	黒曜石剥片	縄文	25
40	釈迦の峰遺跡	〃 〃 〃 釈迦の峰	〃 〃 110m~120m		中世	
41	中田平遺跡	〃 〃 〃 中田平	〃 〃 120m~130m	黒曜石剥片	縄文	
42	ハツ久保遺跡	〃 立福寺町ハツ久保	〃 〃 100m~110m	〃	〃	
43	金石原遺跡	〃 弥鞆寺町金石原	〃 〃 〃	〃	〃	
44	赤木遺跡	〃 立福寺町赤木	〃 〃 90m~100m	〃	〃	24
45	赤木五輪塔	〃 〃 〃 松山開	〃 〃 70m~80m		中世	
46	立福寺松山開	〃 〃 〃	台地 〃 70m		古墳	
47	弥鞆寺跡	〃 弥鞆寺町清水	〃 〃 30m~40m		中世	8
48	弥鞆寺線刻石仏群	〃 〃 〃 赤坊園	〃 〃 〃	首から上の頭部のみ3体, 座像6体	〃	
49	深山遺跡	〃 矢上町深山111~114	丘陵 〃 60m~70m	黒曜石剥片	縄文	
50	山の上石棺	〃 〃 〃 山の上	台地 〃 30m~40m		古墳	

Tab. 4 大村市遺跡地名表 ②

番号	遺跡名	遺跡所在地	立地	出土遺物	時代	文献
51	強力遺跡	大村市矢上町強力	平野 標高 10m~20m		古墳	
52	石走古墳群 1号墳	〃 〃 石走	台地 〃 10m	滑石製経筒片, 青磁片	〃・中世	
53	石走古墳群 2号墳	〃 〃 〃	低台地 〃 〃		〃	
54	好武城跡	〃 寿古町好武	台地 〃 10m	黒曜石剥片, 土器片	縄文・中世	1,7,15
55	今福城跡	〃 皆同町古城	〃 〃 20m	〃	中世	1
56	中牟田遺跡	〃 〃 中牟田	平野 〃 10m~20m	〃	縄文	
57	冷泉遺跡	〃 今富町冷泉	台地 〃 〃 〃	〃 土師器	古墳	
58	皆同郷古城石棺	〃 皆同町古城	平野 〃 10m		〃	
59	稗田遺跡	〃 弥穀寺町稗田	台地 〃 10m~20m	黒曜石剥片, tool	縄文・弥・古	21
60	憩場石棺遺跡	〃 〃 野中(22)	〃 〃 20m~30m	〃 (流れ込み), 弥生後期前半の土器	古墳	16
61	帯取遺跡	〃 今富町帯取	平野 〃 30m~40m	〃	縄文	
62	鳥越遺跡	〃 〃 鳥越	台地 〃 50m~60m	〃	〃	
63	黄金山古墳	〃 〃 帯取	〃 〃 40m	鉄刀, 鉄鏃, 刀子, 土師器, 須恵器	古墳	17
64	地堂古墳	〃 〃 地堂614	〃 〃 30m~40m		〃	
65	大村市今富のキリシタン墓群	〃 〃 〃	〃 〃 〃 〃		中世	18
66	中田遺跡	〃 〃 中田	平野 〃 20m~30m	黒曜石剥片	弥生・古墳	
67	野田B遺跡	〃 野田町山田822-イ, 822-ロ, 823	台地 〃 40m~50m	〃 ナイフ型石器	先土器	24
68	野田古墳	大村市野田町大村田4332	丘陵 〃 80m	須恵器(杯蓋1, 坏身3)	古墳	2,23
69	大村田遺跡	〃 〃 大村田	台地 〃 70m~100m	黒曜石剥片	縄文	
70	平原B遺跡	〃 〃 平原	丘陵 〃 100m	〃	〃	
71	中高野遺跡	〃 〃 中高野1180-3	〃 〃 100m~110m	〃	〃	
72	四方白遺跡	〃 〃 四方白1226	〃 〃 150m~160m	石核, ポイント, ナイフ型石器, 黒曜石剥片	先土器	
73	赤似田堤遺跡	〃 〃 石坂1435	〃 〃 120m	〃	先土器・縄文	
74	宮代遺跡	〃 宮代町米山	〃 〃 170m~190m	ナイフ型石器, 石鏃, スクレイバー, 黒曜石剥片	〃 〃	
75	米ノ山遺跡	〃 〃 〃	〃 〃 140m~150m	黒曜石コア・剥片	縄文	
76	大似田堤遺跡	〃 荒瀬町大似田	〃 〃 80m~90m	黒曜石剥片, 縄文土器片, マイクロブレイド	先土器・縄文	
77	山田遺跡	〃 〃 山田476~513	〃 〃 65m~70m	ナイフ型石器, 黒曜石剥片, 古墳時代土器片, 他	〃・古墳・中世	
78	岩名遺跡	〃 今富町岩名	平野 〃 20m~30m	弥生土器片, 黒曜石剥片	弥生	
79	野田遺跡	〃 鬼橋町野田340	台地 〃 50m~60m	石核, 細石核, スクレイバー, 黒曜石剥片	先土器	24
80	葛城古墳	〃 〃 葛城	〃 〃 40m~50m		古墳	2
81	葛城堤遺跡	〃 〃 〃	〃 〃 〃	ポイント, 黒曜石剥片	先土器	24
82	水頭遺跡	〃 〃 水頭346	丘陵 〃 60m~70m	石核, 黒曜石剥片, 石鏃	縄文	
83	山下遺跡	〃 〃 〃	〃 〃 40m~50m	石鏃, 黒曜石剥片, 弥生土器片	先土器~弥生	
84	山下中世墓群	〃 荒瀬町	台地 〃 40m~45m	中世土器片, 人骨, 近世陶磁器, 黒曜石石核	縄文・中世・近世	
85	荒瀬遺跡	〃 〃	扇状地 〃 50m	黒曜石剥片	〃	
86	黒丸遺跡	〃 黒丸町~沖田郷316~246	〃 〃 0m~10m	縄文土器・石器, 甕棺, 弥生土器・石器, 他	縄文・古墳・中世・近世	5
87	竹松遺跡	〃 竹松町	〃 〃 10m~20m	石包丁	〃	
88	竹松小学校遺跡	〃 宮小路1丁目竹松小学校内	〃 〃 10m~20m	打製石斧, 磨製石斧	〃	
89	平野遺跡	〃 〃	〃 〃 20m~30m	土師器, 黒曜石剥片古墳	古墳	
90	立小路遺跡	〃 〃 立小路	〃 〃 〃 〃	石鏃, 黒曜石剥片古墳	縄文	
91	蔦木遺跡	〃 富の原2丁目蔦木	〃 〃 0m~10m		弥生・古墳	
92	富の原常盤遺跡	〃 〃 常盤, 広野	〃 〃 〃 〃	甕棺, 土器, 石斧, 鉄戈2本	弥生	6
93	小路口遺跡	〃 小路口本町下小路口	〃 〃 30m~40m		縄文	
94	鬼の穴古墳	〃 〃 〃 492	〃 〃 30m	須恵器片	古墳	2
95	上小路口古墳	〃 小路口町坂口	〃 〃 40m~50m		〃	2
96	今津遺跡	〃 今津町草木原	〃 〃 10m	黒曜石剥片	縄文・弥生	
97	原口・山下遺跡	〃 原口町山下	〃 〃 15m	〃	〃	
98	坂口・内高野遺跡	〃 坂口町内高野	〃 〃 10m~40m	〃		
99	坂口館跡	〃 荒瀬郷大門	〃 〃 50m		中世	7,25
100	チサイノ木遺跡	〃 池田2丁目チサイノ木	〃 〃 30m~40m	石鏃, 黒曜石剥片	縄文	

Tab. 5 大村市遺跡地名表 ③

番号	遺跡名	遺跡所在地	立地	出土遺物	時代	文献
101	坂口・横道遺跡	大村市坂口町坂口・横道	扇状地標高 30m~40m	黒曜石剥片	縄文	
102	タブノ木原遺跡	池田新町タブノ木原	20m~30m			
103	柴田遺跡	三城町柴田	台地	石皿, ob剥片, 須恵器, 土師器, 五輪塔	古墳・中世	
104	乾馬場遺跡	古町2丁目裏馬場	平野 標高 10m~20m	磨製石斧, 土器片		
105	狸ノ尾遺跡	雄ヶ原町字狸ノ尾	谷間 210m~220m	有柄刃器	先土器	3
106	雄ヶ原遺跡	雄ヶ原951-1, 2	丘陵端 170m~200m	横型石匙, 尖頭器, 縦長剥片, 押型文	縄文	
107	葛蒲ヶ谷遺跡	葛蒲ヶ谷1315	台地上 230m~240m	黒曜石剥片		
108	ホースキ谷遺跡	池田2丁目ホースキ谷162, 163	150m	細石核, 石鏃, 剥片	先土器, 縄文	
109	野口遺跡	上諏訪町野口	丘陵上 60m~70m	黒曜石剥片	縄文	
110	沖田黒丸条里遺構	黒丸町~沖田郷	扇状地 0m~10m		平安・中世	
111	田下キリシタン墓碑	田下郷下田下355	台地		中世	
112	陣の内遺跡	諏訪1丁目陣の内			縄文	
113	長久寺跡		平野		中世	8
114	杭出津遺跡	水田町水田	標高 9m~11m	石鏃	縄文	
115	琴平神社古墳	水計町大園寺	丘陵 50m~54m		古墳	9
116	上水計遺跡	上水計			先土器・縄文	10
117	三城跡	三城町	標高 30m		平安・中世	1, 7
118	武部遺跡	武部町佐古	40m~50m	黒曜石	先土器・縄文	
119	小佐古遺跡	小佐古	32m~38m	石棺	古墳	22
120	大上戸川条里遺構	水主町2丁目~西三条町	扇状地 4m~6m		奈良・平安	11
121	八幡神社遺跡	武部町	10m		古墳	
122	川内郷鬼塚遺跡	赤佐古町鬼塚	丘陵			
123	鵜石遺跡	徳泉川内町鵜石			縄文	10
124	桜A遺跡	赤佐古町鉢久保	台地 標高 76m~84m		先土器・縄文	10
125	桜B遺跡	徳泉川内町桜	丘陵 60m~76m		縄文	10
126	足形遺跡	足形	94m~102m		先土器・縄文	
127	大堂遺跡	皆同郷大堂	扇状地 3m	土師器	古墳	16
128	土井の浦古窯跡	陰平町土居の浦	丘陵	甕, 茶碗, 摺鉢	江戸時代前期	
129	寿古遺跡	寿古町	扇状地	木棺墓, 中世輸入陶磁器片	先土器~中世	17
130	如法寺跡	草場町470ほか	丘陵	五輪塔	中世	
131	旧円融寺庭園	玖島郷字上小路505		名勝(国指定)	江戸時代初期	

註1 長崎県教育委員会 「長崎県遺跡地図」 長崎県文化財調査報告書 第87集 1987

註2 鈴木忠司 「野岳遺跡の細石刃と西日本における細石刃文化」『古代文化』 23—8 1971

註3 大村市・黒丸遺跡調査会 「黒丸遺跡」 1980

註4 長崎県大村市教育委員会 「富の原遺跡群確認調査概報」 大村市文化財調査報告 第3集 1982

長崎県大村市教育委員会 「富の原遺跡群確認調査概報」 大村市文化財調査報告 第4集 1983

長崎県大村市教育委員会 「富の原遺跡群確認調査概報Ⅳ」 大村市文化財調査報告 第9集 1985

長崎県大村市教育委員会 「富の原遺跡群確認調査概報Ⅴ」 大村市文化財調査報告 第11集 1986

長崎県大村市教育委員会 「富の原」 大村市文化財調査報告書 第12集 1987

註5 小田富士雄 「長崎県大村市・黄金山古墳調査報告」 九州考古学39・40 1970

註6 昭和39年12月九州大学調査。7世紀代の群集墳で、10教基が残る。報告書は、未刊である。

註7 長崎県大村市教育委員会 「小佐古石棺墓群」 大村市文化財調査報告書 第13集 1988

註8 稗田遺跡調査会 「稗田遺跡」 1988

註9 長崎県教育委員会 「長崎県埋蔵文化財調査集報Ⅱ」 長崎県文化財調査報告書 第45集 1979





Fig. 5 周辺遺跡分布図(大崎市)

参考文献

- 1 新人物往来社 「日本城郭体系 17」 1980
- 2 長崎県教育委員会 「長崎県埋蔵文化財調査集報 Ⅲ」 長崎県文化財調査報告書 第50集 1980
- 3 長崎県教育委員会 「長崎県遺跡地図」 長崎県文化財調査報告書 第87集 1987
- 4 『大村家記』・『深江記』
- 5 大村市・黒丸遺跡調査会 「黒丸遺跡調査報告書」 1980
- 6 大村市教育委員会 「富の原常磐遺跡発掘調査報告書」 1981
- 7 『郷村記』
- 8 長崎県教育委員会 「諫早・大村・北高来郡の文化財」 長崎県文化財調査報告書 第53集 1980
- 9 長崎県教育委員会 「九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書 Ⅱ」 長崎県文化財調査報告書 第56集 1982
- 10 長崎県教育委員会 「九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書 Ⅰ」 長崎県文化財調査報告書 第54集 1981
- 11 土肥利男 「多良山麓の研究」 1956
- 12 鎌木義昌他 「九州地方の先土器文化」『日本の考古学 Ⅰ』所収 河出書房 1975
- 13 長崎県教育委員会 「長崎県埋蔵文化財調査集報 Ⅰ」 長崎県文化財調査報告書 第35集 1987
- 14 「紫山延命縁起」『大村史話』所収
- 15 「大村記」
- 16 長崎県教育委員会 「長崎県埋蔵文化財調査週報 Ⅱ」 長崎県文化財調査報告書 第45集 1979
- 17 小田富士雄 「長崎県大村市・黄金山古墳調査報告」『九州考古学』39・40 1979
- 18 長崎県教育委員会 「長崎県の文化財 下」1970
- 19 長崎県東彼杵郡東彼杵町教育委員会 「岡遺跡」 東彼杵町文化財調査報告書 第2集 1988
- 20 大村史談会 「大村史談上・中・下巻」 1977
- 21 稗田遺跡調査会 「稗田遺跡」 1988
- 22 大村市教育委員会 「小佐古石棺群」 大村市文化財調査報告書 第13集 1988
- 23 長崎県教育委員会 「九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書 Ⅵ」 長崎県文化財調査報告書 第93集 1989
- 24 長崎県教育委員会 「九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書 Ⅶ」 長崎県文化財調査報告書 第98集 1990

## 2. 坂口館跡



## 本文目次

I 調査	35
1. 地理・歴史的環境	35
2. 調査概要	37
① 第1区	38
② 第2区	41
③ 第3区	41
④ 第4区	41
II 遺構	43
1. 古墳時代の遺構	43
① 箱式石棺墓	43
2. 中・近世の遺構	44
① 建物跡	44
② 土壙	58
③ 敷石遺構	67
④ 壇状遺構	67
⑤ 石垣	67
III 遺物	69
1. 先土器・縄文時代の遺物	69
① 縄文式土器	69
② 石器	71
③ まとめ	89
2. 弥生～古墳時代の遺物	97
① 土器	97
② 石錘	98
③ ガラス小玉	98
3. 中世の土器・陶磁器	99
① 輸入陶磁器	99
② 国産土器・陶器	105
③ まとめ	110
4. 近世陶磁器	114
① 建物S B 6出土陶磁器	114
② 土壙S K 3出土陶磁器	114

③ 土壙S K 5 出土陶磁器 .....	115
④ 土壙S K 6 出土陶磁器 .....	115
⑤ 土壙S K 7 出土陶磁器 .....	120
⑥ 土壙S K 9 出土陶磁器 .....	120
⑦ ピット出土陶磁器 .....	122
⑧ まとめ .....	122
5. その他の遺物 .....	123
① 石製品 .....	123
② 円盤状陶磁製品 .....	129
③ 土製品 .....	129
④ ガラス製品 .....	130
④ 古 銭 .....	130
⑥ 製鉄関係遺物 .....	130
IV 総 括 .....	131

## 挿 図 目 次

Fig. 1	坂口館跡周辺地形図 (1/2,000) .....	36
Fig. 2	坂口館跡調査区域図 (1/1,000) .....	37
Fig. 3	坂口館跡調査進行図 (1/1,000) .....	38
Fig. 4	出土遺物による遺構の時期 .....	39・40
Fig. 5	箱式石棺墓 (1/30) .....	42
Fig. 6	建物跡配置図 .....	45・46
Fig. 7	建物跡① (1/100) .....	47
Fig. 8	建物跡② (1/100) .....	48
Fig. 9	建物跡③ (1/100) .....	49
Fig. 10	建物跡④ (1/100) .....	50
Fig. 11	建物跡⑤ (1/150) .....	51・52
Fig. 12	建物跡⑥ (1/100) .....	53・54
Fig. 13	建物跡⑦ (1/100) .....	55
Fig. 14	建物跡⑧ (1/100) .....	57
Fig. 15	土壙配置図 (1/600) .....	59
Fig. 16	土壙① (1/40) .....	60
Fig. 17	土壙② (1/40) .....	61
Fig. 18	土壙③ (1/40) .....	62
Fig. 19	その他の遺構 (1/600) .....	63
Fig. 20	敷石遺構 (1/40) .....	64
Fig. 21	壇状遺構周辺図 (1/100) .....	65
Fig. 22	石垣 (1/40) .....	66
Fig. 23	縄文時代の土器① (1/2) .....	69
Fig. 24	縄文時代の土器② (1/2) .....	70
Fig. 25	先土器時代の石器 (2/3) .....	71
Fig. 26	縄文時代の石器① (2/3) .....	73
Fig. 27	縄文時代の石器② (2/3) .....	74
Fig. 28	縄文時代の石器③ (2/3) .....	75
Fig. 29	縄文時代の石器④ (2/3) .....	76
Fig. 30	縄文時代の石器⑤ (2/3) .....	77
Fig. 31	縄文時代の石器⑥ (2/3) .....	79
Fig. 32	縄文時代の石器⑦ (2/3) .....	80

Fig. 33	縄文時代の石器⑧ (2/3) .....	81
Fig. 34	縄文時代の石器⑨ (1/2) .....	82
Fig. 35	縄文時代の石器⑩ (2/3) .....	84
Fig. 36	縄文時代の石器⑪ (2/3) .....	85
Fig. 37	縄文時代の石器⑫ (2/3) .....	86
Fig. 38	縄文時代の石器⑬ (2/3) .....	87
Fig. 39	縄文時代の石器⑭ (2/3) .....	88
Fig. 40	調査区別・遺物出土状況 .....	90
Fig. 41	調査区別・器種別石器出土状況① .....	91
Fig. 42	調査区別・器種別石器出土状況② .....	92
Fig. 43	出土石器の器種別・石材別割合 .....	93
Fig. 44	弥生～古墳時代の土器出土分布状況 .....	97
Fig. 45	弥生～古墳時代の土器 (1/3) .....	98
Fig. 46	石錘 (1/2) .....	98
Fig. 47	ガラス小玉 (1/1) .....	98
Fig. 48	輸入陶磁器① (1/3) .....	100
Fig. 49	輸入陶磁器② (1/3) .....	101
Fig. 50	輸入陶磁器③ (1/3) .....	102
Fig. 51	国産・土器陶器① (1/3) .....	106
Fig. 52	国産・土器陶器② (1/3) .....	109
Fig. 53	中世土器・陶磁器組成グラフ .....	110
Fig. 54	中世土器陶磁器の出土分布① .....	111
Fig. 55	中世土器陶磁器の出土分布② .....	112
Fig. 56	近世陶磁器① (1/3) .....	114
Fig. 57	近世陶磁器② (1/3) .....	116
Fig. 58	近世陶磁器③ (1/3) .....	117
Fig. 59	近世陶磁器④ (1/3・1/4) .....	118
Fig. 60	近世陶磁器⑤ (1/3・1/4) .....	121
Fig. 61	滑石製石鍋の出土分布 .....	123
Fig. 62	石製品 (1/3・1/4) .....	124
Fig. 63	石製品その他の遺物 (1/2・1/3・1/4) .....	126
Fig. 64	円盤状陶磁製品 (1/2) .....	127
Fig. 65	円盤状石製品・土製品 (1/2) .....	129
Fig. 66	遺構の主軸方向 .....	131

## 付 図 目 次

Fig. ① 坂口館跡遺構配置図 (1/200)

## 表 目 次

Tab. 1	石核の形態別・石材別一覧表	83
Tab. 2	出土土器の地区別・時期別一覧表	93
Tab. 3	出土器の石材別・層位別一覧表	94
Tab. 4	円盤状陶磁製品一覧表	128

## 図 版 目 次

PL. 1	坂口館跡と横断面 第1区 (4次調査)	135
PL. 2	(1次調査～5次調査)	136
PL. 3	第1区遺構検出状況 (2次調査)	137
PL. 4	第1区遺構検出状況 (4次調査)	138
PL. 5	第1区遺構検出状況 (4次調査)	139
PL. 6	第1区遺構検出状況 (5次調査)	140
PL. 7	第2区全景 (4次調査) 第3区全景 (5次調査)	141
PL. 8	箱式石棺墓 (S X 1)	142
PL. 9	建物跡 (S B 1) 建物跡 (S B 2)	143
PL. 10	板石を敷く柱穴 (第1区)	144
PL. 11	土壙の集石状況 (S K 4, S K 5), 土壙 S K 1	145
PL. 12	土壙 S K 3	146
PL. 13	土壙 S K 4, 線刻石	147
PL. 14	土壙 S K 5, 土壙 S K 6	148
PL. 15	土壙 S K 7	149
PL. 16	割石の状況, 五輪塔水輪出土状況	150
PL. 17	敷石遺構 (S X 2), 凹状の落ち込み (B 7, 8区)	151
PL. 18	壇状遺構 (S X 3)	152
PL. 19	石垣 (S X 4)	153
PL. 20	縄文時代の土器	154
PL. 21	先土器時代・縄文時代の石器①	155



PL. 22	縄文時代の石器②	156
PL. 23	縄文時代の石器③	157
PL. 24	縄文時代の石器④	158
PL. 25	縄文時代の石器⑤	159
PL. 26	縄文時代の石器⑥	160
PL. 27	縄文時代の石器⑦	161
PL. 28	縄文時代の石器⑧	162
PL. 29	縄文時代の石器⑨	163
PL. 30	黒曜石原石	164
PL. 31	弥生～古墳時代の遺物 (1/2)	165
PL. 32	青磁 (1/2)	166
PL. 33	白磁 (1/2)	167
PL. 34	明染付 (1/2)	168
PL. 35	輸入陶器 (1/2)	169
PL. 36	土師質土器 (1/2)	170
PL. 37	瓦器・陶器 (1/2)	171
PL. 38	近世陶磁器① (1/2)	172
PL. 39	近世陶磁器② (1/2)	173
PL. 40	近世陶磁器③ (1/2)	174
PL. 41	近世陶磁器④ (1/2)	175
PL. 42	近世陶磁器⑤ (1/2)	176
PL. 43	近世陶磁器⑥ (1/2)	177
PL. 44	近世陶磁器⑦ (1/2)	178
PL. 45	近世陶磁器⑧ (1/2)	179
PL. 46	近世陶磁器⑨ (1/2)	180
PL. 47	近世陶磁器⑩ (1/2・1/3)	181
PL. 48	石製品① (1/2)	182
PL. 49	石製品② (1/2・1/3)	183
PL. 50	石製品③, 円盤状陶磁製品, 土製品 (1/2)	184
PL. 51	古銭, ガラス製品, 基石, 製鉄遺物 (1/2)	185

# I 調 査

## 1. 地理・歴史的環境

本遺跡は、大村市中央部に位置し、現況地名では大村市荒瀬町に所在する。古くは、東彼杵<sup>かやせ</sup>郡萱瀬村荒瀬郷字大門という地名であり、坂口という名称は萱瀬、黒木に至る坂の入口という<sup>註1</sup>意の通称であるらしい。

多良山系に源を發する郡川<sup>こおりがわ</sup>は、萱瀬谷と呼ばれる細長く深い谷を開折して西に流れ、下流域に大村平野の扇状地を形成している。この郡川は、扇頂部付近から北西に変流して、大村湾に注ぎ、市北部の水田地帯を潤しているが、遺跡は扇頂部の郡川南岸にあり、背後に丘陵が迫る標高45m前後の狭隘な段丘上に立地する。

当地は、日本最初のキリシタン大名として著名な大村純忠の終焉の地であり、坂口の館と呼ばれていたが、ここで二、三の文献<sup>註2</sup>によってその歴史を整理し紹介したい。

ここは、もともと大村家の重臣であった庄頼甫<sup>しょうよりすけ</sup>の屋敷であったが、純忠が隠居所を構えて晩年を過ごし、天正15年（1587）に55歳の生涯を閉じた所である。

純忠卒去の後には、未亡人が宣教師に館を提供し、日本語学校も開かれていた。しかし、文禄元年（1592）に放火により焼失したが、まもなく再建される。

慶長11年（1606）に純忠の子息の喜前<sup>よしあき</sup>が宣教師を追放したが、その後は喜前の娘で武藤右馬助敏武の後室が居住し、武藤恒五郎という者が住んだといわれている。

樹木が茂る山の麓には、清らかな水がこんこんと湧きでる「館の川<sup>たちかわ</sup>」と呼ばれる泉水池が今も残り、往時の面影をしのぶことができる。この庭園の泉水は、昭和44年に市の史跡に指定されている。

その後の歴史を、調査時に周囲の方々から得ることができた聴き取り<sup>註3</sup>によって辿ってみたい。武藤氏<sup>たけふじ</sup>は明治20年代頃まで当地に居住されていたが、子孫は現在長崎市におられるとのこと。

大正～昭和30年頃まで山裾に萱瀬窯<sup>註4</sup>（地元では皿山と称していた）という波佐見系の窯があり、徳利・酒容器・朝鮮向けの製品を焼いていたが、朝鮮動乱によって輸出ができなくなり廃窯し、その後壊され果樹園にされた。この窯の製品や窯道具は、調査中に数多く出土した。

戦前には、調査区付近に大きな屋敷があったこと。昭和20年頃まで、泉水付近に店があり、夏場はソーメン流しで賑ったこと等の情報を得た。（宮崎）

註1 『角川日本地名大辞典 42 長崎県』 角川書店 1987

註2 註1文献と『日本城郭大系第17巻 長崎・佐賀』 新人物往来社 1980等を参考にし整理した。

註3 調査区域の田中・伴・吉原・松崎・橋本氏をはじめ地元の方々からは調査に便宜をはかっていただくとともに多くの情報を得ることができた。ここに記して感謝の意を表わしたい。

註4 太田新三郎『波佐見地方陶祖の探究』 波佐見町・波佐見町教育委員会 1962



Fig. 1 坂口館跡周辺地形図 (1/2,000)

## 2. 調査概要

横断道の路線は市指定の泉水庭園の西側および北西側を貫通する予定になっており、坂口館跡関係の埋蔵文化財に係ることが十分に予想されるために今回の調査が実施された。調査区域は、個人宅地および畑地であり、調査は用地取得に応じて段階的に1次～5次に分けて実施し、対象面積3,040㎡の内、2,426㎡を発掘した。各回次の調査期間は以下のとおりである。

- ・ 1次 昭和61年3月3日～昭和61年3月27日 (第1区)
- ・ 2次 昭和61年4月7日～昭和61年5月31日 (第1区)
- ・ 3次 昭和62年2月9日～昭和62年3月28日 (第1・4区)
- ・ 4次 昭和62年4月6日～昭和62年6月2日 (第1・2・4区)
- ・ 5次 昭和62年8月10日～昭和62年9月30日 (第1・3区)

調査区は、結果的に第1～4区に分けられるが、5mメッシュの方眼を基本としてグリッドを切り調査を行った。南北軸は南からA～O、東西軸は東から1～13の記号を付けたが、南端の張り出し部分についてはA'・B'とした。

遺物の取り上げは、このグリッドを基本として行ったが、規模が小さな第3区と第4区は一

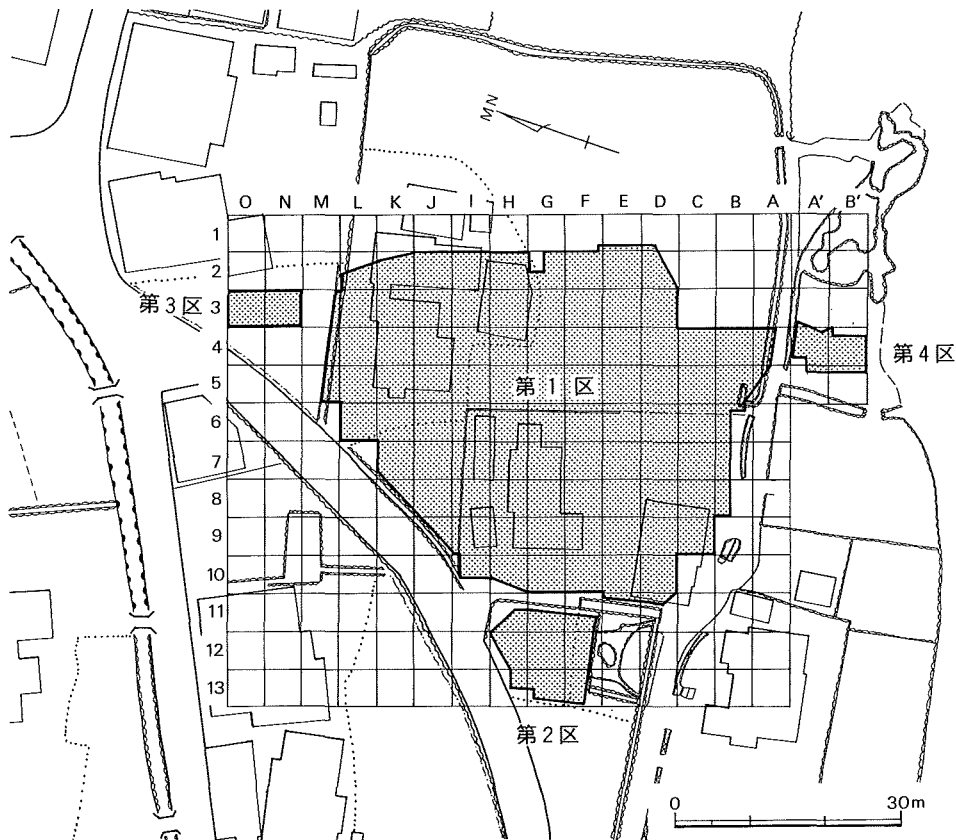


Fig. 2 坂口館跡調査区域図 (1/1,000)

括して取り上げを行った。

今回の調査によって、先土器時代から現代に至る28,300点余の遺物が出土し、中世～近世を主体とする夥しい落ち込みや各種の遺構が検出された。以下、各調査区ごとに状況を概観したい（付図1・Fig. 4）。

① 第1区

今回調査のメインの調査区であり、調査面積は2,195m<sup>2</sup>である。調査区域の地目は宅地と畑地であり、標高は、45.3m～45.6mほどの平坦な地形をなしている。

土層の状況は、基本的には現代までの遺物を包含する表土層が約20～60cmの厚さで覆い、基盤は扇状地形成時の堆積物である円礫を多く含む黄褐色土層である。しかし、ごくわずかであるが、縄文時代の堆積と推測される黄色土が部分的に薄く残っている所もみられたが、弥生時代～中世期の包含層は存在せず、おそらく度重なる洪水等の自然営力によって流失してしまったことが考えられる。

また、本地区で確認された夥しい数の落ち込みは、円礫を含んだ黄褐色の基盤層を切り込んでおり、発掘が完了した時の状況は氾濫原に無数の穴が穿かれた、まさに賽の河原のような様相を呈していた。

調査区は、全体を1/20で、小規模な遺構は1/10で実測を行った。しかし、円礫を含んだ基盤層に遺構が切り込まれているために、表面に礫が突き出る格好となり、図面に全てを表現すると繁雑なものになることが予想された。そこで、遺構の形状に影響を及ぼさない小さな石は省いて、本質的なものを重視し図化することにした。

検出された遺構は、E10区の古墳時代に位置づけられる箱式石棺墓（S X 1）を除くと、全

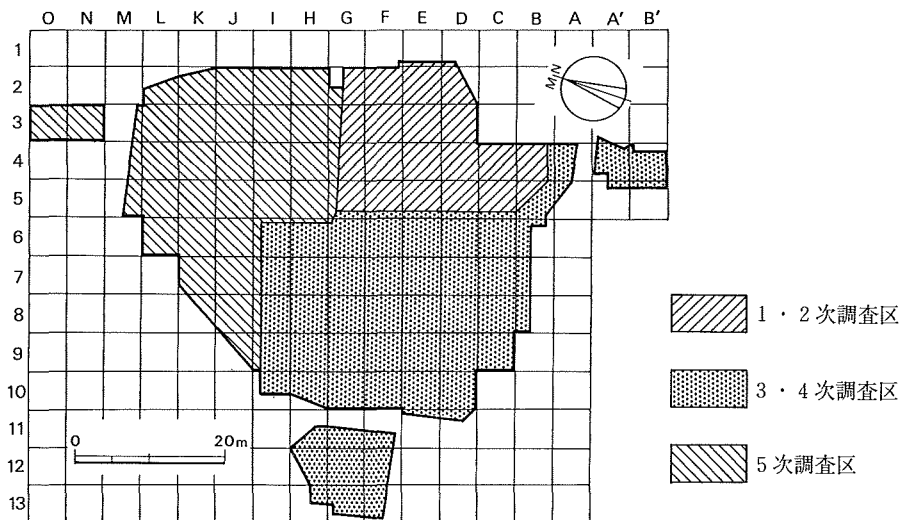


Fig. 3 坂口館跡調査進行図 (1/1,000)

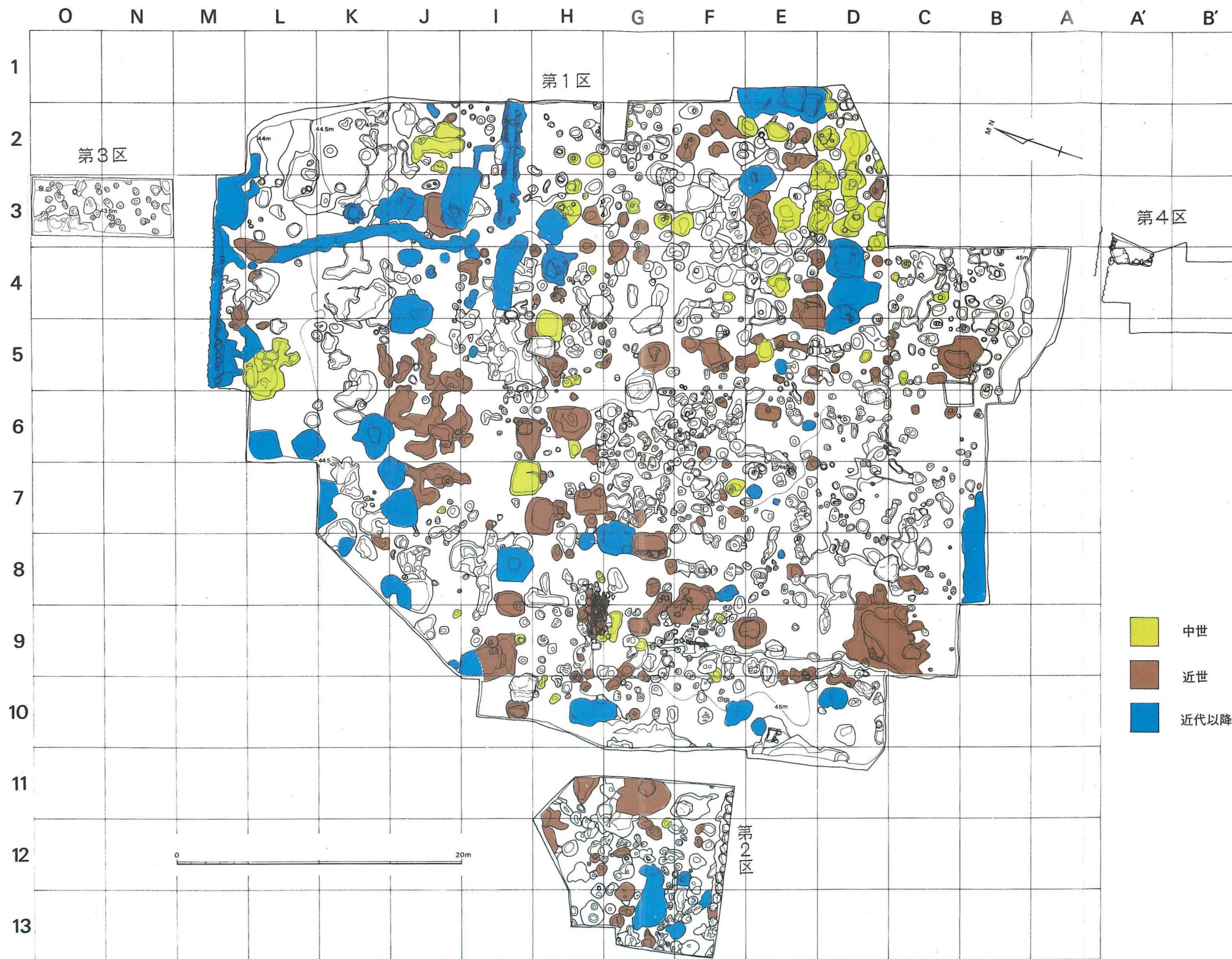


Fig. 4 出土遺物による遺構の時期

て中世～現代にかけて設けられたものである。建物の柱穴と思われる夥しい数の小穴群を主体とし、土壌、敷石、壇状の中世～近世の遺構が検出された。また、近代以降のものとして、K 3・I 8の井戸、I 2・3とM 3～5およびJ 2・K 2・L 3の溝など最近築かれたものも確認され、A 4・B 5とB 7・8の浅い凹地は、現在西流する小川の影響を受けたもので、B 7・8では最近の陶磁器類等が出土している。なお、中・近世の遺構については、別項で詳しく説明を行いたい。

遺物は、24,000点余が出土しているが、その殆んどを占め圧倒的に多いのは中世～現代にかけての土器・陶磁器類である。次に多いのは、先土器時代～縄文時代の遺物で2,200点余出土している。先土器時代の遺物は、1点ではあるが三稜尖頭器が出土し、扇状地の形成と居住利用開始の時期について興味を投げかける資料と思われる。縄文時代の遺物では、縄文早・前期のものが若干認められるが、主体は縄文晩期の資料と考えられる。弥生～古墳時代の遺物は少なく、弥生土器・土師器・須恵器等の土器類が138点、滑石製石錘1点と、箱式石棺墓のなかからガラス小玉1点が出土しているにすぎない。

## ② 第2区

第1区の西側にあり、第1区付近とは1mほど低くなり、段丘の微地形が残されている。調査面積は134m<sup>2</sup>である。調査地は畑地であるが、南側には石で組まれた小規模な池があり、石垣も残っているので、もとは屋敷地であったことが考えられる。

地表から20～30cmほど下に基盤があらわれ、それを掘り込んだ柱穴状の小穴と礫や砕いた岩のズリを詰め込んだ土壌が検出され、第1区と同様の様相をもっていた。それらの遺構は、出土した遺物から近世とそれ以降の時期のものと考えられる。

## ③ 第3区

第1区の北側にある調査区で、調査面積は40m<sup>2</sup>である。地表から60cmほど下に基盤層があらわれ、小さな落ち込みが多数認められたが、柱穴として明確に捉えられるものはなかった。

遺物は、近世とそれ以降の陶磁器（以下「近世陶磁器」と呼ぶ）を主体とし、330点余が出土している。少量ながらも、弥生時代後期～古墳時代初頃の土器が16点出土し注目されるが、他区同様包含層は残っていなかった。

## ④ 第4区

第1区の南側に位置する調査区で、調査面積は57m<sup>2</sup>である。地表から120～130cmほどが礫を多量に含む土層で埋め込まれており、北東隅に石垣が「コ」字形に築かれているのが判明した。泉水の西側に位置しているところから、この石垣は「中の島」の一部とも推測され、もとの池は現在のものよりもっと大きく西側に広がりを持っていたことが考えられる。

遺物は296点出土したが、黒曜石剥片1点、弥生土器1点、土師質土器1点以外は近世陶磁器であった。石垣が埋め込まれた時期は、大正時代に窯が開かれた際になされた造成である可能性が強いことが、近世陶磁器等の出土遺物から考えられよう。

(宮崎)

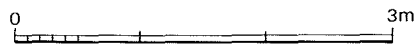
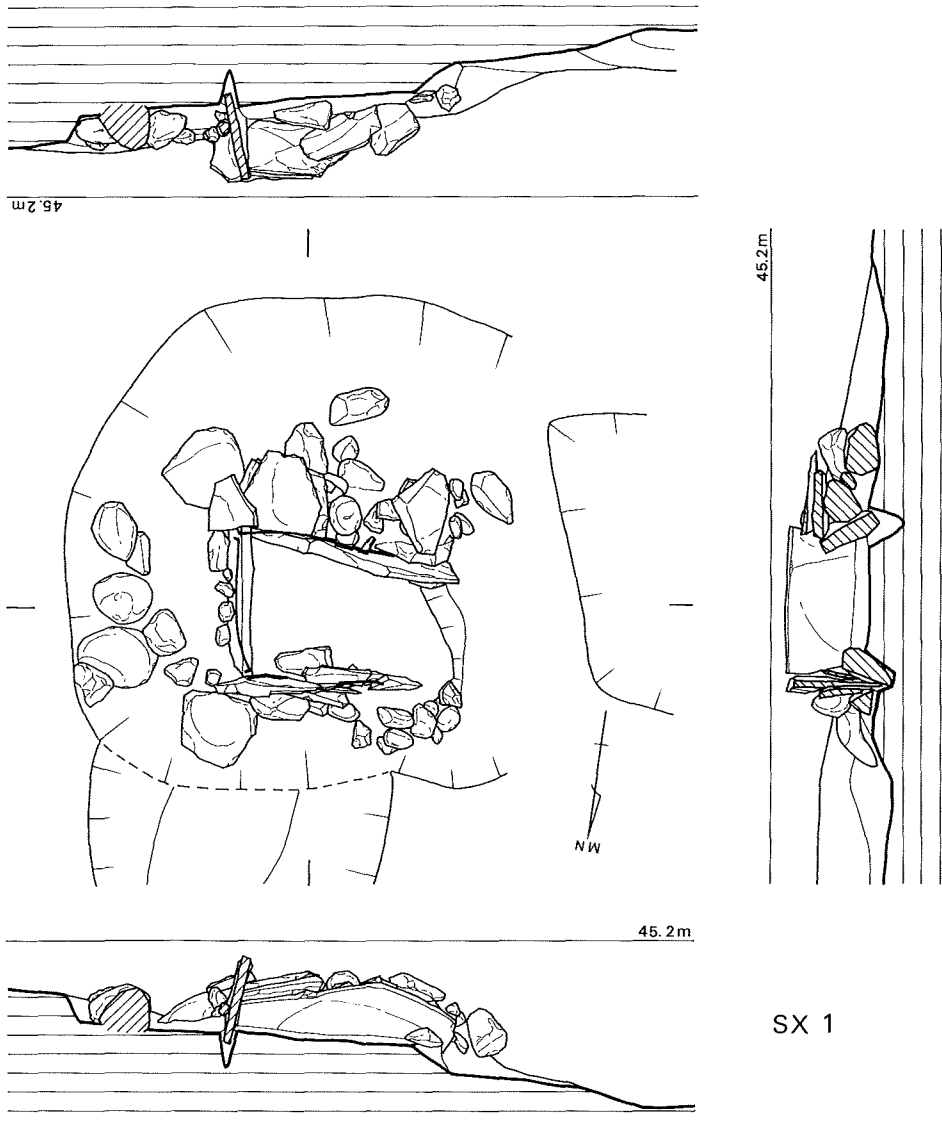


Fig. 5 箱式石棺墓 (1/30)



## Ⅱ 遺 構

### 1. 古墳時代の遺構

古墳時代の遺構として明確に捉えることができたのは、第1区のE10区で検出された箱式石棺墓1基である（SX1）。以下、その石棺の内容について説明を行いたい。

#### ① 箱式石棺墓（Fig. 5）

第1区南端に位置する石棺である。蓋材は認められず、棺身は西半部を欠失している。おそらく、西側にある石垣を後世に築く際に破壊されたことが推測される。

棺身は、安山岩の板材が使用され、東小口と両側石が残っている。棺身の内容は、幅57cm、残存長約80cm、深さ約30cmを測る。主軸の方位はN82°Wで、東西方向を向く。

南側石は、やや厚手の板石を用いている。この板石は半月状になっており、小口石と接する部分では間隙をなくすために、板石を平積みしてレベルのバランスをとっている。裏込めも、しっかりしており、地山にあるような人頭大の塊石と小石を詰めて補強している。

北側石は、薄くて貧弱な板石を用いているため、2・3枚を組み合わせて使用している。基部は、内外両方向から根固めの石で板石を固定している。また、北側石と小口の板石の上端はほぼ同じレベルで、比較的当時の状況を残している。

東側の小口は、若干内方へ傾いている。裏込めには拳大の小石を詰めて固定しているが、あまり根固めの効果はないようである。

墓壙は、隅丸長方形を旧状はなししていたと思われるが、かなり攪乱を受けている。棺身の側石および小口石の掘り方は、板石のぎりぎりに掘り込まれている。

棺内からは、打製石斧、黒曜石剥片、近世陶磁器が出土し、これらは後世に混入したものと考えられるが、覆土をフルイを用いて水洗選別することによって、ガラス玉1点を採取することができた。

この石棺は、時期を決定づける土器等の資料が出土していないので、細かい時期を押さえることはできないが、棺材の裏側に板石を小口積にする構造は、大村市武部町の小佐古石棺群（B地点）<sup>註1</sup>にみることができると考えられる。小佐古遺跡の石棺は、4世紀の終わりから5世紀中頃にかけてのものとして位置づけられ、本石棺も古墳前期に所属するものと考えておきたい。

なお、西方100m付近にある川添氏宅からも石棺が発見されたとの情報も得た。周辺には、まだ石棺墓が埋蔵されている可能性も持っている。（宮崎）

註1 稲富裕和・橋本幸男『小佐古石棺群—B地点—』大村市文化財調査報告書第13集 大村市教育委員会 1988

## 2. 中・近世の遺構

中世～近世にかけての時期の遺構として把握できたものは、建物跡、土城、敷石、壇状、石垣である。以下、各遺構ごとに内容の説明を行いたい。

### ① 建物跡（SB1～8）

建物跡については、夥しい数存在する柱穴状の小穴群を組み合わせ、建物として蓋然性の高いと思われる8棟を抽出した。また外に多数の柱穴群が存在するところから、建物として識別されていないものがあることが十分に予想されるが、文責者の力量不足に原因することとして了承されたい。以下、各建物跡について順を追って観ていきたい。

#### SB1 (Fig. 7)

第1区の南東部、D～Fの2～4区付近に位置する建物で、SB2と重複している。建物は、3間×3間の長方形プランの南側に2間分が張り出した格好になっている。柱穴は、1～1.5mほどの割に大形の掘り方で、基盤面から40～90cmの深さをもっている。また、西側と南側は、それぞれ4個と3個の柱穴をつないだ布掘構造をなしている。柱穴には、板状石を敷いたものと、無いものの両者がある。建物の主軸方位は、N80°Eで、建物は、90.3m<sup>2</sup>の規模をもつ。

柱穴から出土した遺物は、青磁2点、白磁4点、明染付1点、天目1点、輸入陶器1点、土師質土器17点、近世陶磁器1点、鉄釘(?)1点などがある。近世陶磁器は皿小片で、F2区P3から出土している。このピットは、楕円形の平面プランで重複した可能性をもっている。この皿片以外は、中世期のまとまった資料であり、D2P5のピットからは完形の土師質小皿(Fig. 51)まで出土している。したがって、近世陶磁器は混入の疑いが強く、建物は中世期の可能性を考えておきたい。また、それらの時期は、明染付皿が小野正敏氏分類<sup>註1</sup>の皿Cであるところから、16世紀(後半)代に位置づけられよう。

#### SB2 (Fig. 8)

第1区の南東部にあり、SB1と重複する。南北に長い建物として捉えたが、南端は調査区域外になり明瞭でない。建物の主軸方位は、N16°Wである。柱穴は、平面形が0.9～1.2mの大きさで、基盤面から40～70cmほど掘り込まれている。板石は1箇所を除き、敷かれていない。建物の大きさは、南端が明確でないが、調査区域内で62.1m<sup>2</sup>を測る。

柱穴内からは、近世陶磁器が7点出土している。染付の瓶、唐津系の播鉢などの小破片があり、江戸後期の資料であろう。

#### SB3 (Fig. 9)

第1区の東側、F～Hの2・3区に位置する建物である。東端が調査区域外となり明瞭でないが、3間×5間の長方形プランの北側に1間×3間分が張り出す形状をもつ。建物の主軸は、N74°Eである。柱穴は、0.8～1.3mほどの大きさで、基盤面から50cmほど掘り込まれている。底面に板石を敷くものと無いものの両者がある。建物の規模は、東端が明確でないが、区域内で72.3m<sup>2</sup>を測る。



Fig. 6 建物跡配置図

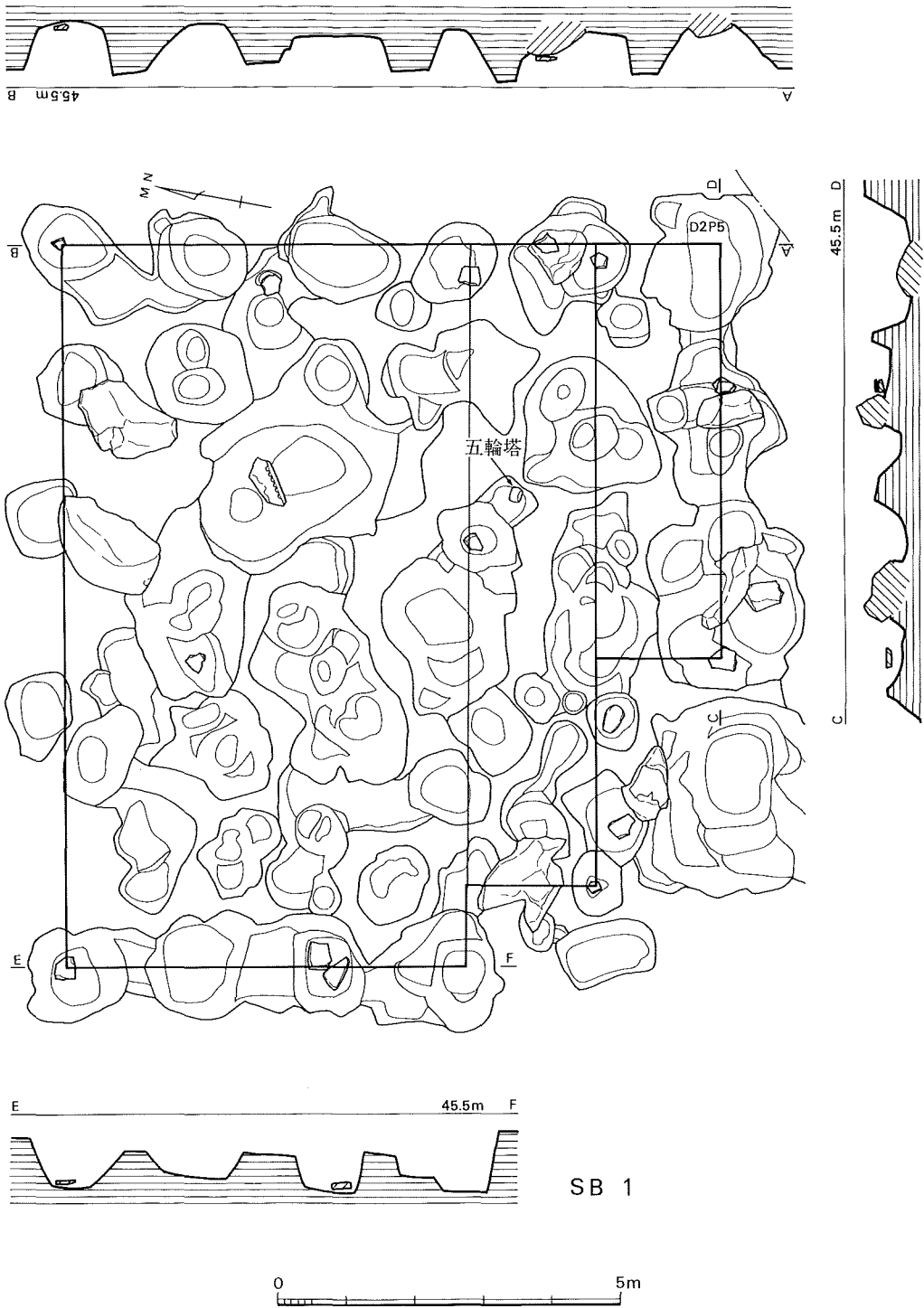
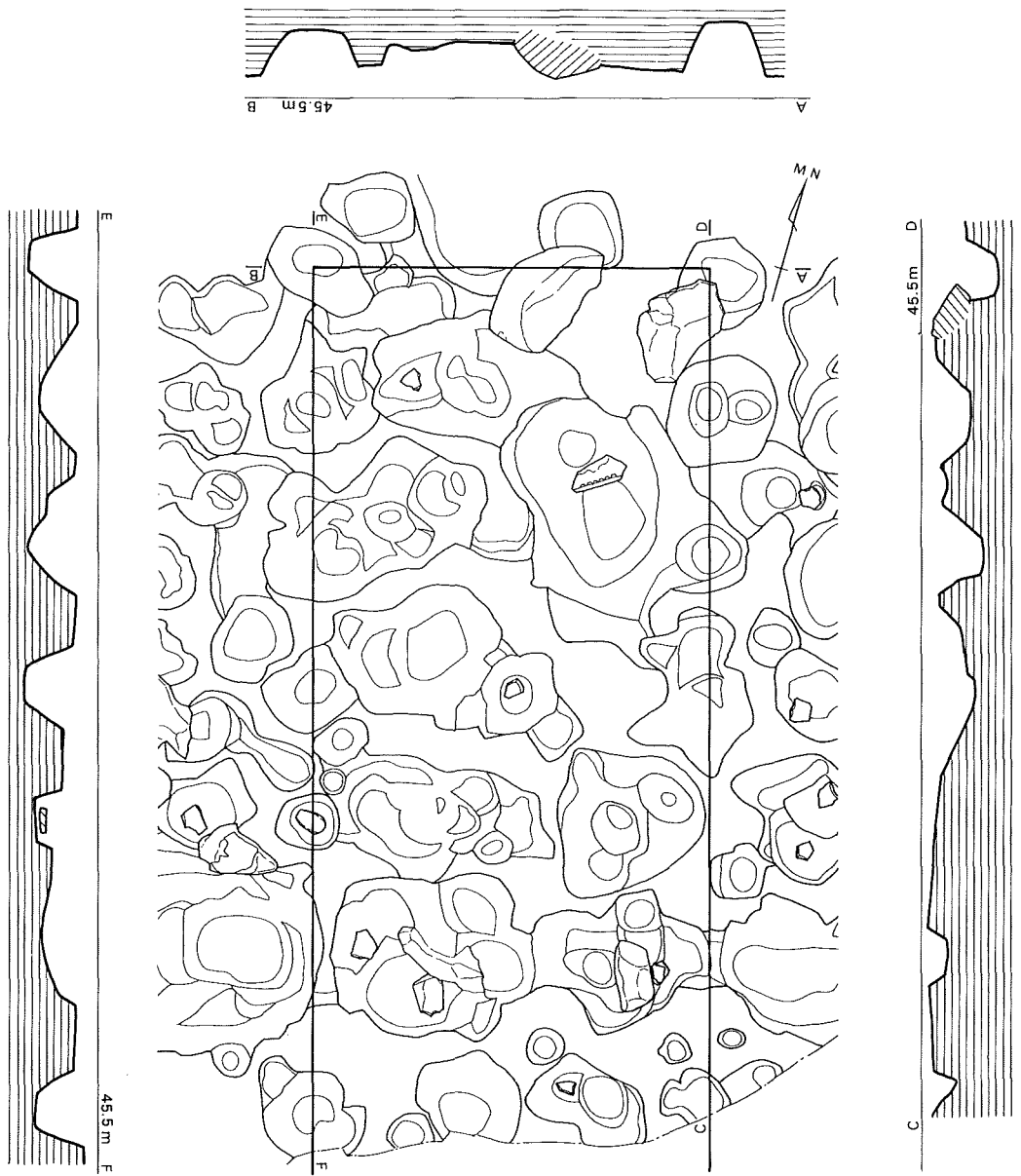


Fig. 7 建物跡① (1/100)



SB 2



Fig. 8 建物跡② (1/100)

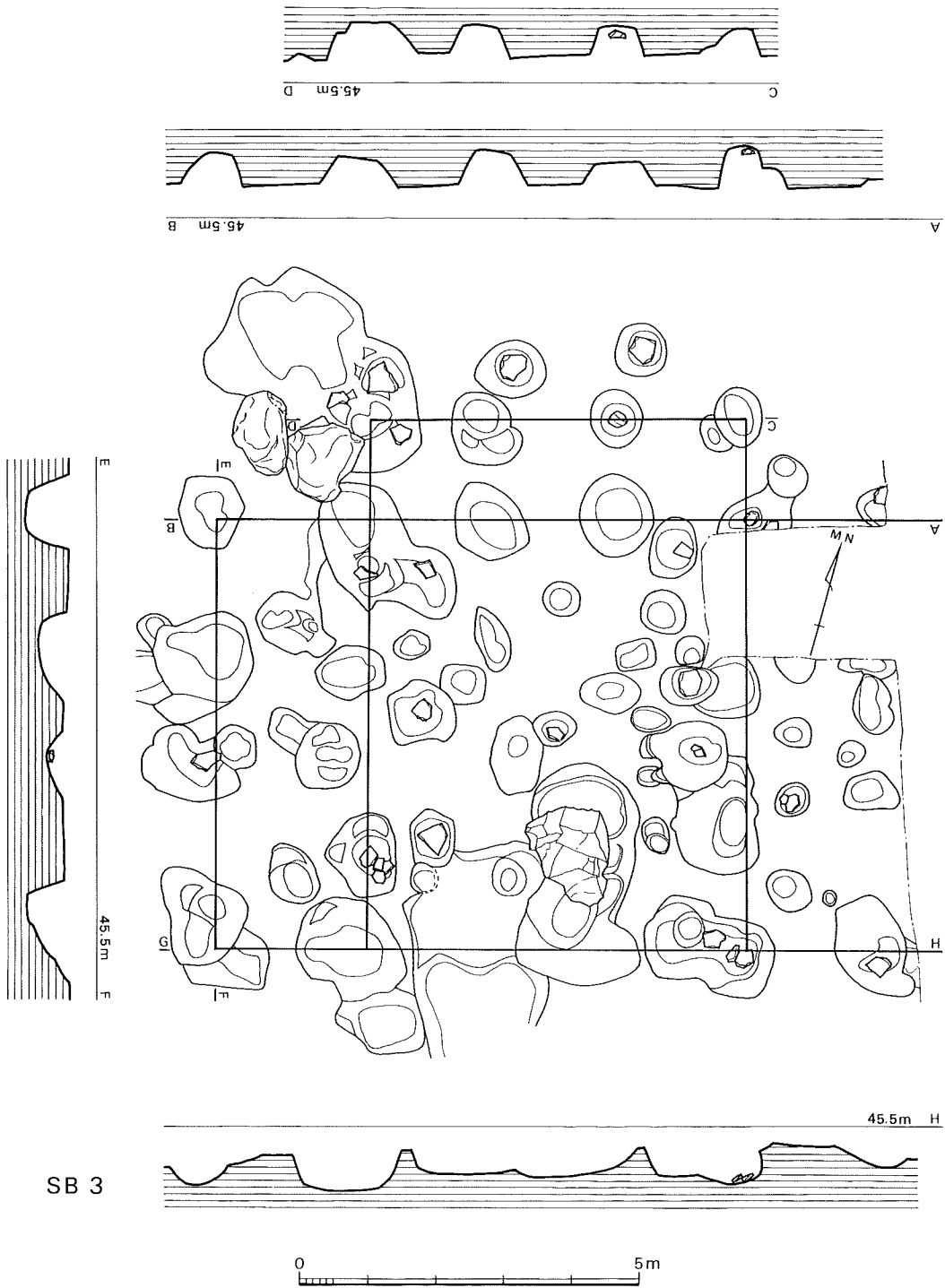


Fig. 9 建物跡③ (1/100)

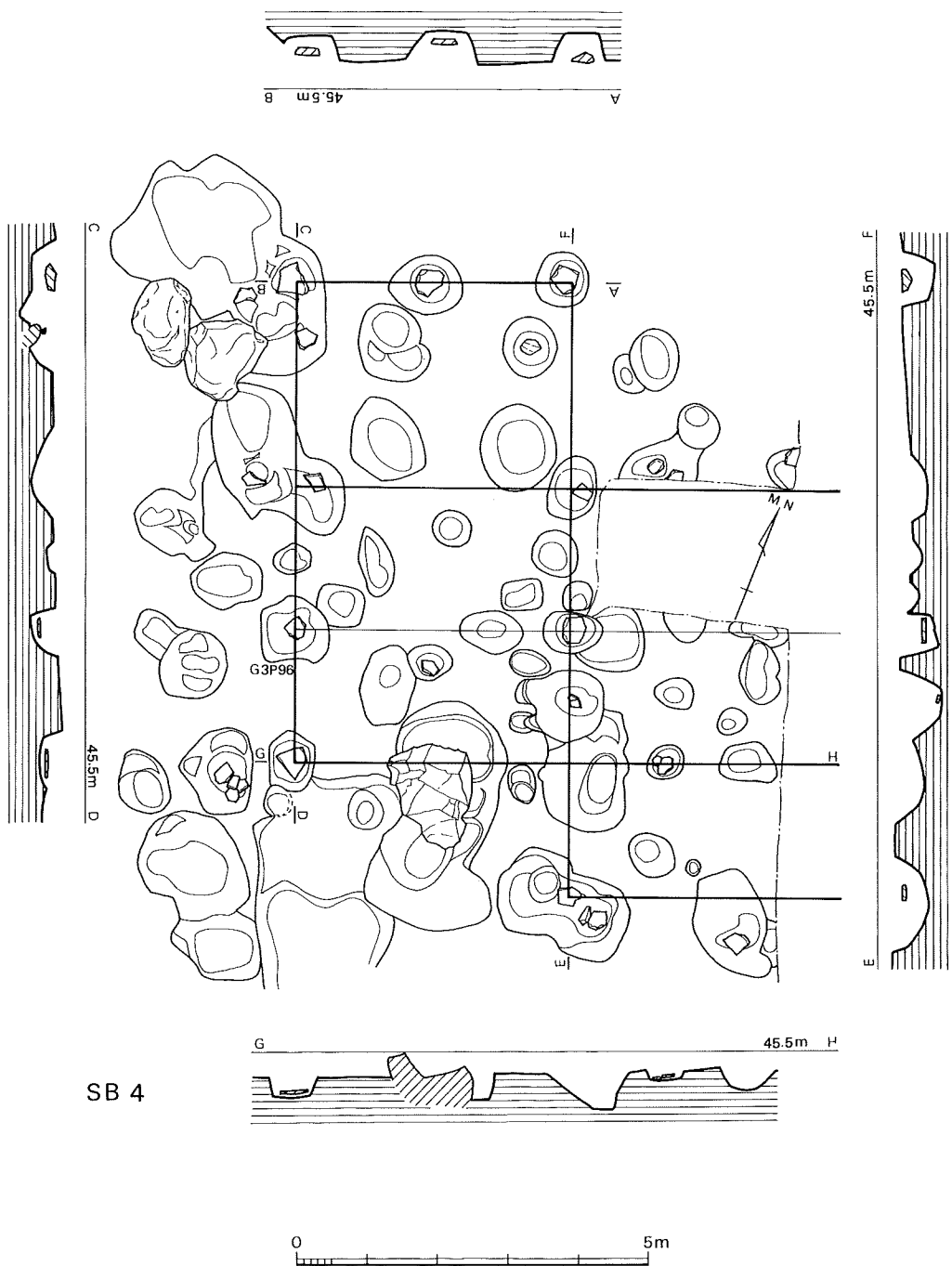


Fig. 10 建物跡④ (1/100)

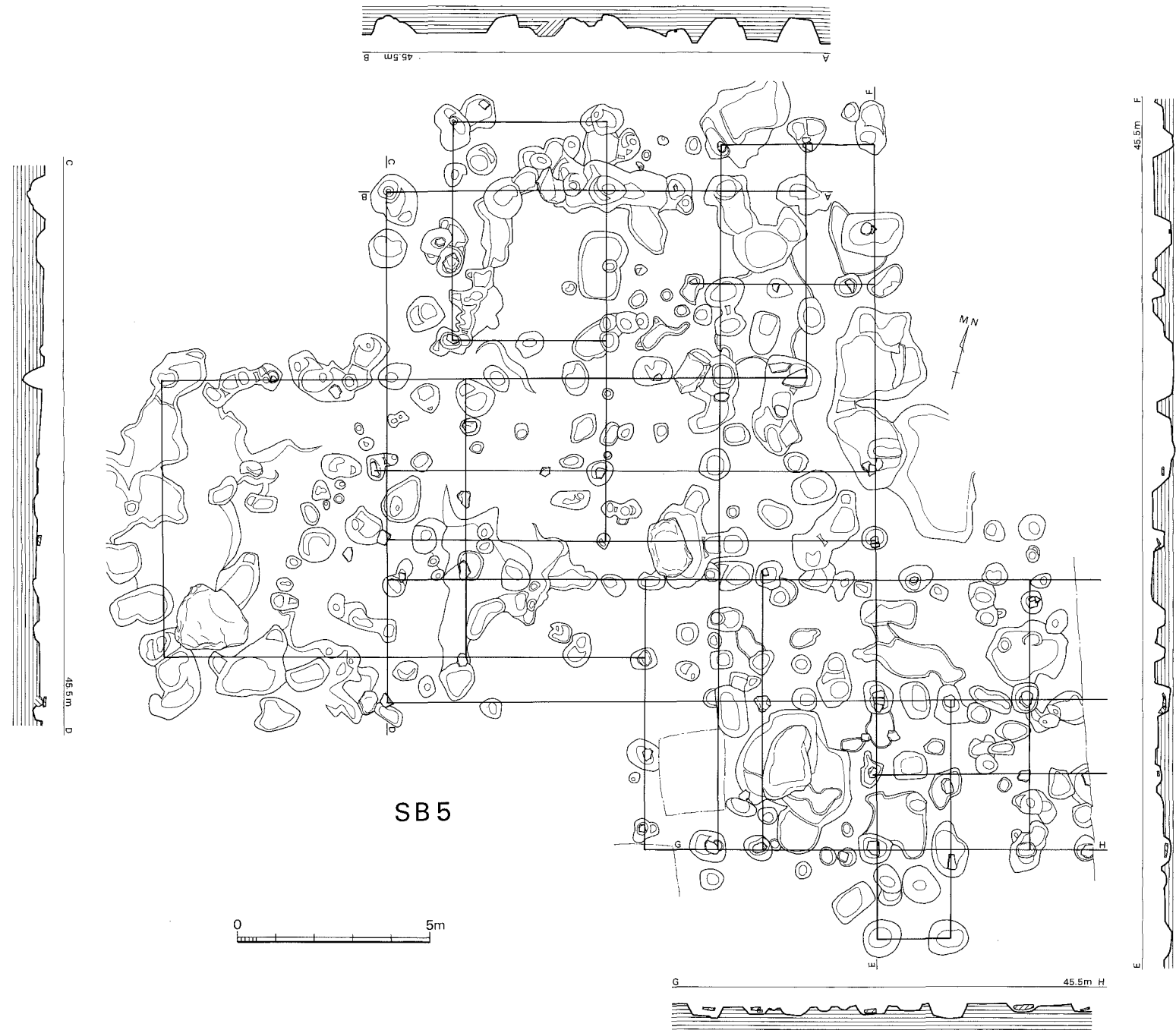


Fig. 11 建物跡⑤ (1/150)



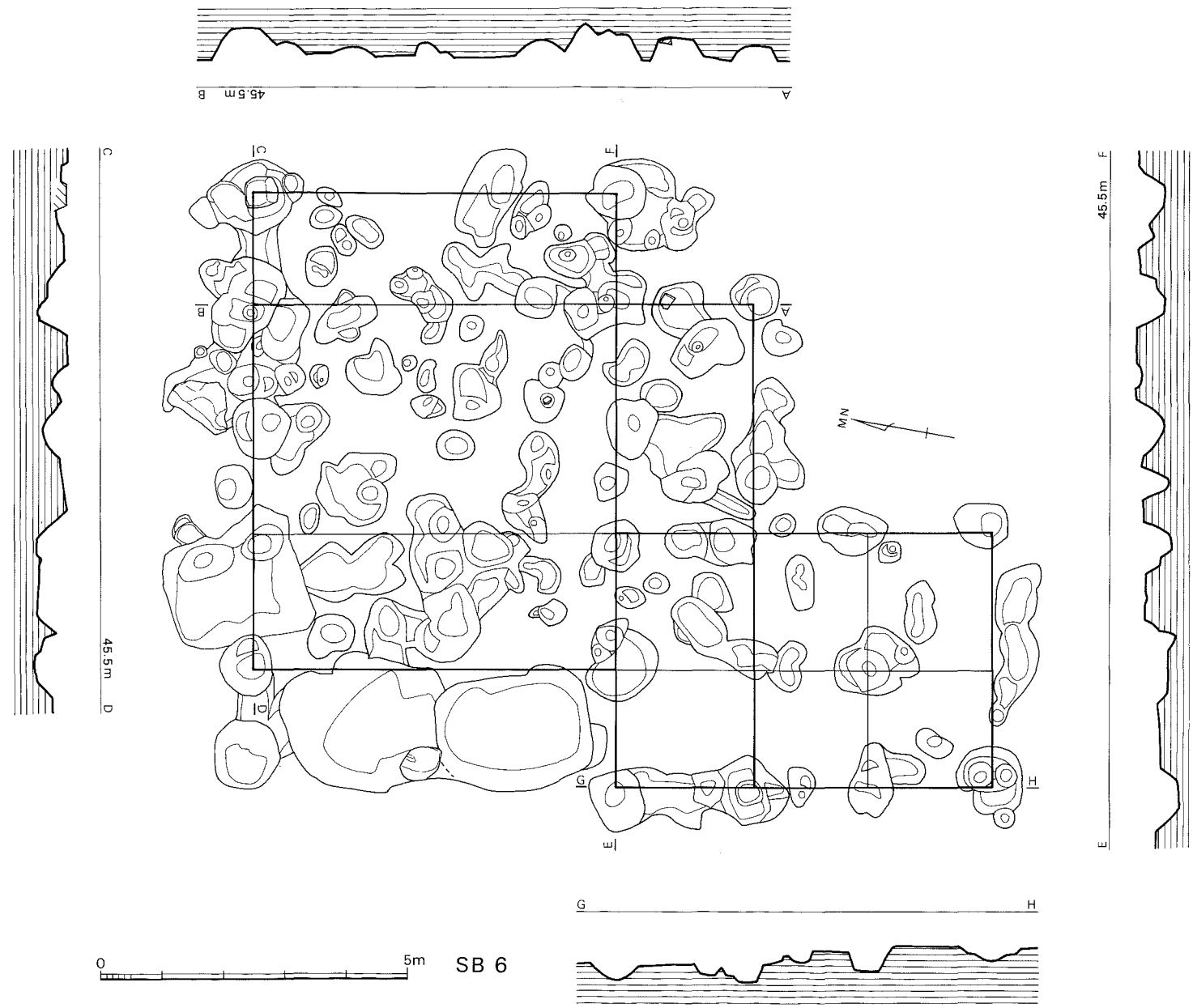
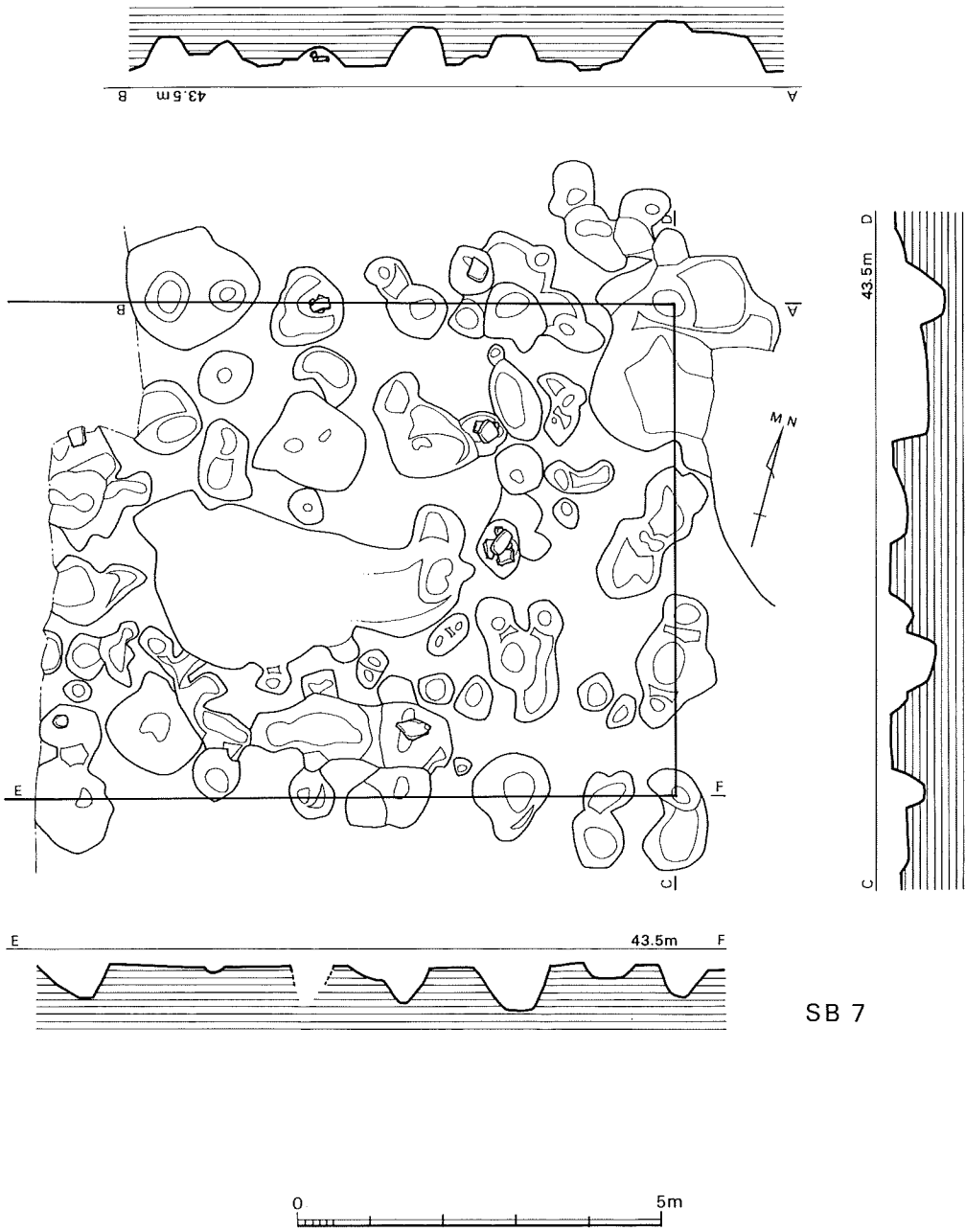


Fig. 12 建物跡⑥ (1/100)



SB 7

Fig. 13 建物跡⑦ (1/100)

柱穴内からは、近世陶磁器が6点出土しているが、染付碗、青磁皿などの小破片である。

S B 4 (Fig. 10)

第1区東側にあり、S B 3と重複している。鍵の字形の建物で、南側に張り出す形状として捉えられた。建物の主軸は、N69°Eである。柱穴は、0.7～1.0mの大きさで、基盤面から20～60cmの深さをもつ。ほとんどの柱穴は、板石を敷いている。建物の規模は、東端が調査区外になり明確でないが、区域内で43.9m<sup>2</sup>を測る。

出土遺物は、近世陶磁器がG 3 P 96から2点出土している。そのうち碗小片は極く新しいものである。段階的に分けて発掘した境界にあたっているのが、混入したことが充分に予想される。もう一方は玉縁をもつ唐津系の播鉢片のようで、江戸後期の製品であろうか。

S B 5 (Fig. 11)

もっとも規模が大きい建物跡で、第1区南側のB～Fの4～8区一帯に広がる。調査区域内の面積は、290m<sup>2</sup>を測る。建物の主軸方位は、N75°Eである。南東側の柱穴は浅く、ほとんどが板石を敷いており、なかには掘り込みをもたず基盤面に直接板石を敷いている所もみられる。それに比較すると、北西部の柱穴群は深いものが大半で板石を敷かないものの方が多い。したがって、建物は前者と後者に分離する可能性をもっているが、ここでは建物が最大限に広がる場合の方を採用した。柱穴の構造などの差は、建物内における室の機能の差と理解できないだろうか。この建物は、大岩を落した土壌をまたいでいるので、土壌と何らかの関連をもつことが考えられる。規模からみても、主屋的な性格をもつものであることは明らかであろう。

柱穴内からは、17点の近世陶磁器が出土している。染色碗、赤絵盃、陶器碗・皿・播鉢などの破片である。播鉢の形状などからみると江戸後期に所属するものであろう。

S B 6 (Fig. 12)

第1区中央に位置する建物跡である。L字形の形状で、南東部に1間分張り出している。建物の主軸方位は、東西方向軸を中心にするるとN80°Eである。建物の規模は、80.2m<sup>2</sup>を測る。柱穴は、0.8～1.2mほどの大きさで、基盤面から30～50cmほど掘り込んでいる。柱穴の底面に板石を敷くものではなく、一部布掘状の構造をもっている所もみられる。

柱穴内からは、近世陶磁器が10点出土している。染付の碗・皿、青磁器、陶器の壺・急須などの破片があるが、図示した碗片 (Fig. 52—1) は所謂くらわんか茶碗であり、18世紀代の波佐見産である。したがって、建物は江戸後期に所属するものであろう。

S B 7 (Fig. 13)

第2区にある建物跡で、西端は調査区外で明確でない。建物の主軸方位は、N75°Eである。柱穴は、0.7～1.0mの大きさで、基盤面から30～60cmの深さをもつ。柱穴内の板石は、1箇所認められるが、他には板石はない。建物の大きさは、調査区域内で60.5m<sup>2</sup>を測る。

柱穴内からは、17点の近世陶磁器が出土している。染付や白磁の碗・盃・瓶・紅皿、陶器蓋などの小破片がみられるが、新しい様相をもつようで、江戸末期頃のものであろうか。

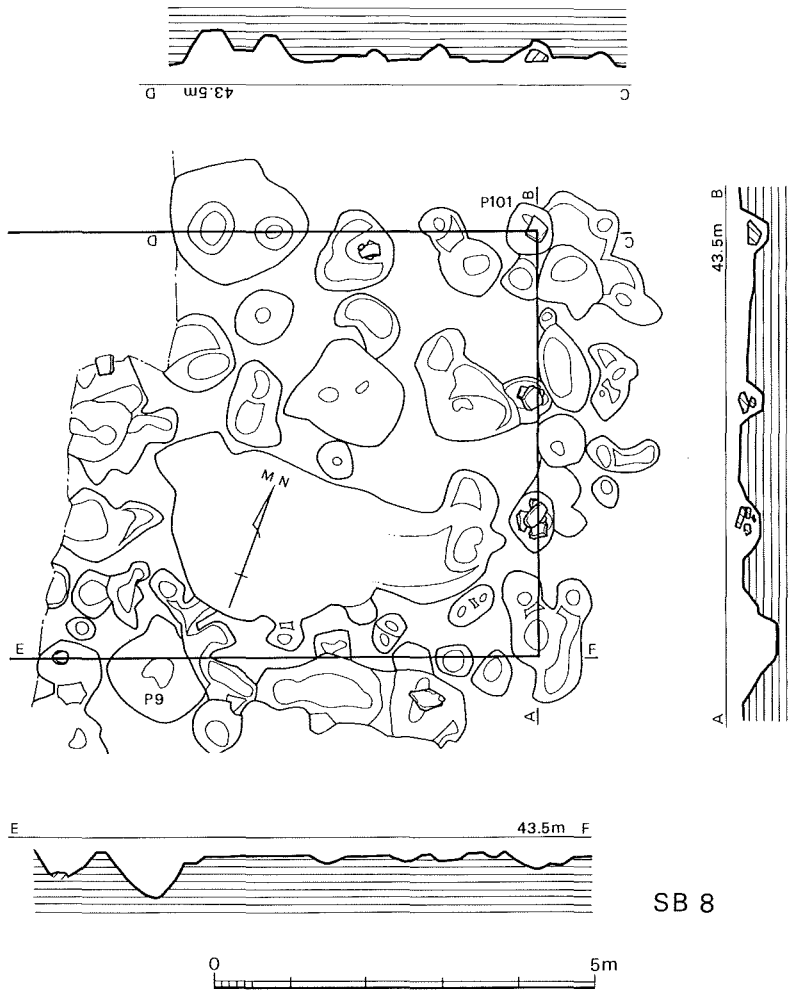


Fig. 14 建物跡⑧ (1/100)

SB 8 (Fig. 14)

第3区にある建物で、SB 7と重複する。西端は、調査区外になるために明確でない。建物の主軸方位は、 $N70^{\circ}W$ である。柱穴は、60~80cmほどの大きさの割合に小形で、基盤面から20~50cmほどの深さをもつが、東側の3箇所は板石を敷き浅い。建物の規模は、区域内で $35.3m^2$ を測る。柱穴内からは、P 9とP 101から近世陶磁器が出土しているが、P 9出土品はプリント柄の染付椀片があり、混入品でなければ、近代以降の建物ということになる。

## ② 土 壙 (Fig. 15)

第1区と第2区に34基の土壙が検出された。SK1とSK2の中世期の土壙以外のほとんどは、基盤層に含まれる大岩を壙に落下させたり、円礫を詰め込んだ集石土壙と、大岩を割りそのズリを詰め込んだ割石土壙の近世とそれ以降の時期に所属するものがある。

土壙の出土遺物からみると、集石土壙は近世の、割石土壙は近世以降の時期に属するものが多いようである (Fig. 4)。割石土壙の岩には矢の根痕が残り、ある時期にまとまって岩を砕く作業がなされた可能性が推測される。

なお、I・Jの3区とI9区の土壙で「新」としたものは、近世の土壙が新しいゴミ穴によって攪乱されているものである。

以下、個別に図化した6基の土壙について説明を行う。

### SK1 (Fig. 16)

第1区中央のH5区に位置する土壙である。平面形は、ややいびつな隅丸方形状を呈し、西辺は地山にくい込んだ大岩の根元を掘り込んだ格好になっており、南北2.0m、東西1.5mを測る。断面の形状は、逆台形状をなし、50cmほどの深さをもつ。覆土は、黒っぽい茶褐色土で、炭化物を多く含んでいる。柱穴の敷石に使われる板石が投げ込んだような状況であったのが、印象に残った。

土壙内からは、白磁30点、明染付10点の輸入陶磁器と、土師質土器7点、瓦質土器1点が出土している。白磁には、森田勉・横田賢次郎氏分類の椀IV類もあるが、主体は端返りの高台付皿で、森田氏分類のE-2a類としたもので、口縁を稜花にしたものもある。(Fig. 49)。明染付は椀と皿があり、小野正敏氏分類によると、椀Eと皿Eである。土師質土器は、小皿と杯の小片である。瓦質土器は、格子目タタキの土鍋である (Fig. 51-15)。以上の遺物の年代では、染付皿Eが16世紀後半に位置づけられるので、本土壙は16世紀末頃埋められたことが推測される。その点で、文禄元年 (1592) の火災によって日本語学校が焼失したという事件は、土壙内に炭化物を多く含むところから、興味深いデータで、本土壙が火事場の整理の際に設けられた可能性をもっている。

### SK2 (Fig. 17)

第1区中央付近のI7区に位置する土壙で、平面形はややいびつな隅丸長方形状を呈する。規模は、東西2.3m、南北1.9mを測る。断面の形状は、逆台形をなし、基盤面から30～50cmの深さをもつ浅い土壙である。

土壙内からは、青磁椀1点、白磁椀1点、明染付皿3点、盃1点、三彩陶器壺3点の輸入陶磁器と、土師質杯2点、小皿1点の国産土器、土錘1点が出土している。また、近世陶磁器が4点混入しているが、これは南側のピットの掘り込みによる攪乱と判断した。

輸入陶磁器のなかで、明染付皿は小野氏分類の皿Cと皿Fである。皿Fは、比較的小形のつば皿で口縁を稜花にした小片である。小野氏によれば皿Fは、16世紀後半代から加わるもので

あるので、土壙の年代は16世紀末から17世紀初頃に位置づけられ、可能性としてはSK 1と同様に1592年の火事に関係した土壙として捉えられるのではなかろうか。

### SK 3 (Fig. 18)

第1区のE 6に位置し、小判形の平面形をもつ土壙である。長さ1.8m、幅1.0m、深さ25～30cmを測る。東側底面に確認された柱穴は、土壙以前のものであろう。長軸方位は、N12°Wである。土壙覆土は茶褐色土で、拳大から人頭大の礫が北側上部に集中してみられた。

土壙内からは、近世陶磁器が8点出土している。その内訳は、染付碗1点、白磁碗3点、青磁皿2点、唐津系播鉢1点、縁袖陶器碗1点である。そのなかで染付碗と唐津系播鉢を図化した (Fig. 47)。碗や播鉢の形態からみると、18世紀前半代に位置づけられる資料のようである。土壙の時期もそれに近い年代が与えられるのではなかろうか。

### SK 4 (Fig. 18)

第1区G 8にある隅丸長方形のプランの土壙である。北側の土壙とつながった格好になっているが、それはSK 4よりも新しい遺構で、北側の立ち上がりを壊している。長軸方位は、

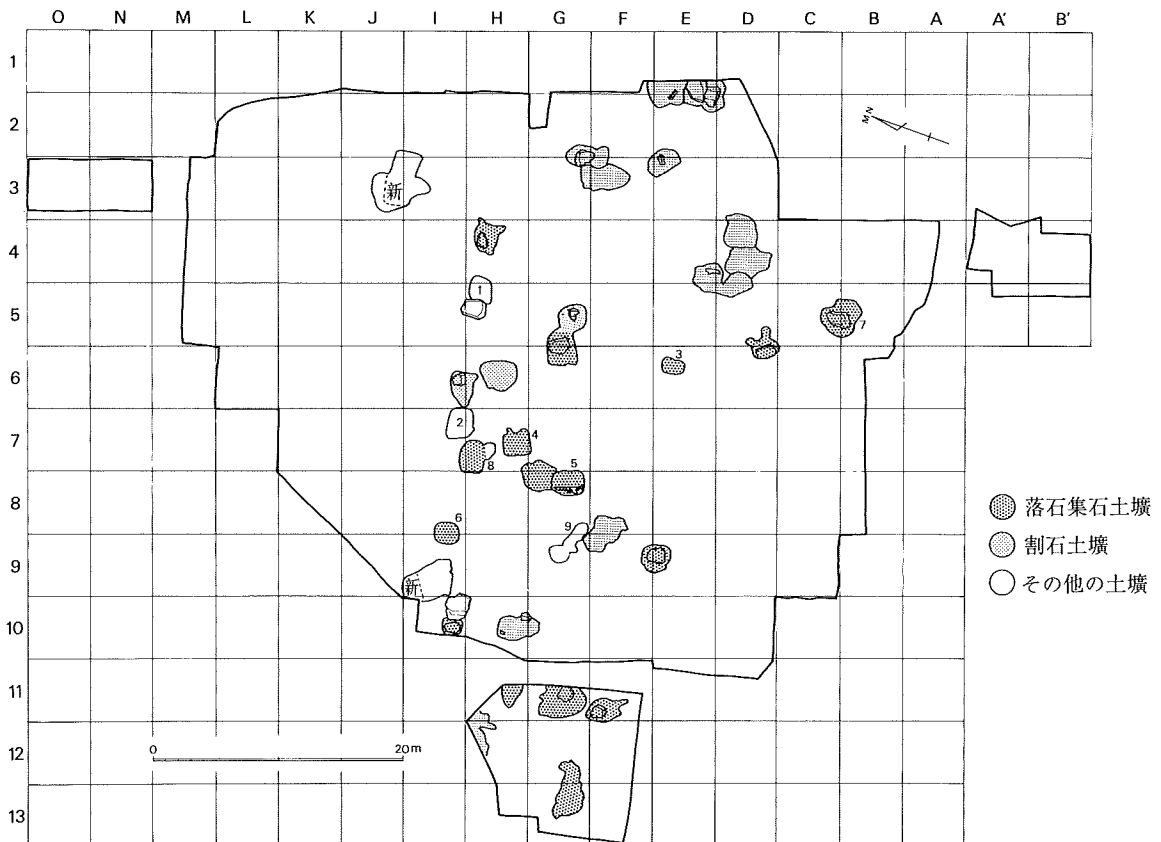


Fig. 15 土壙配置図 (1/600)

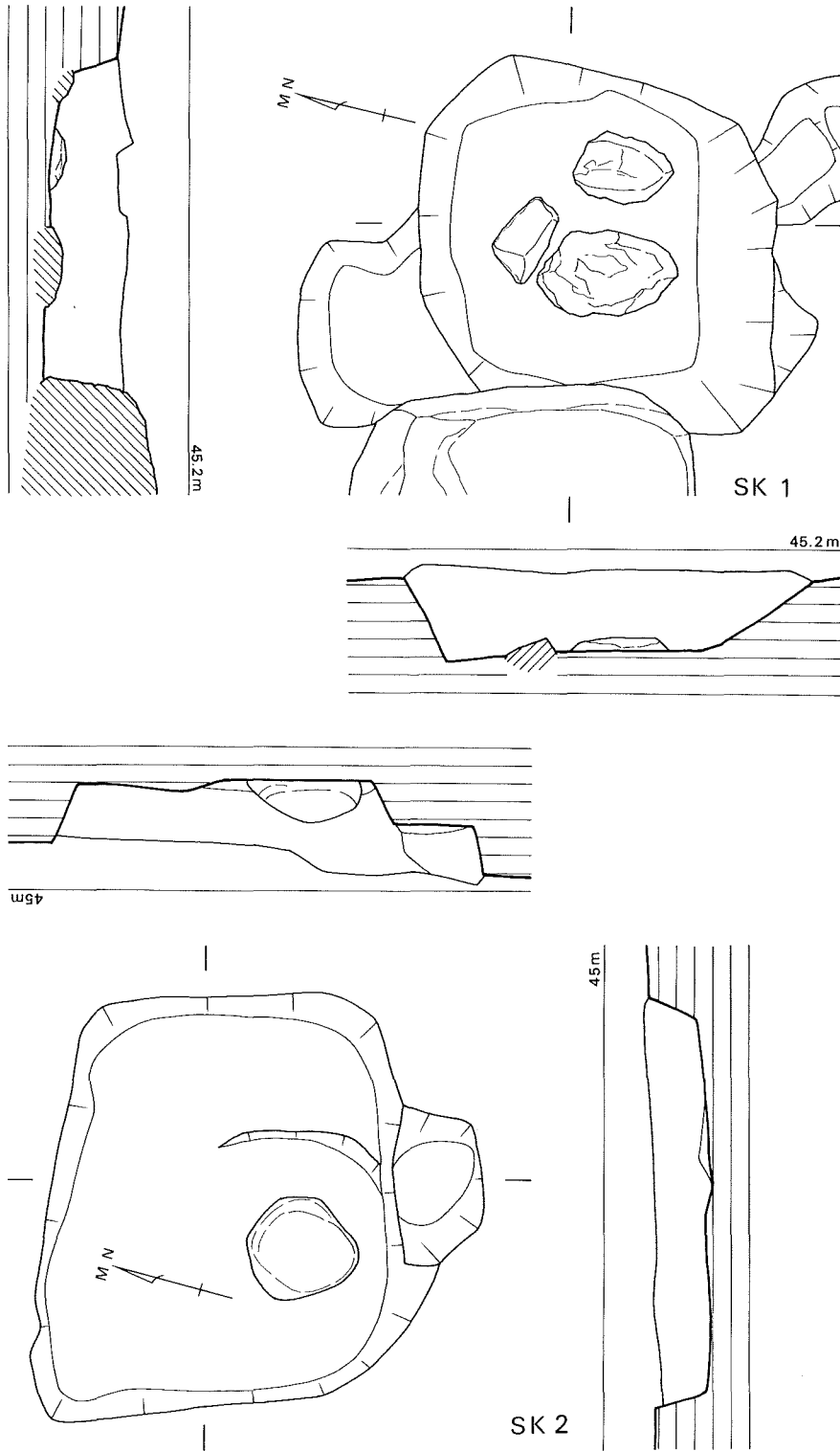
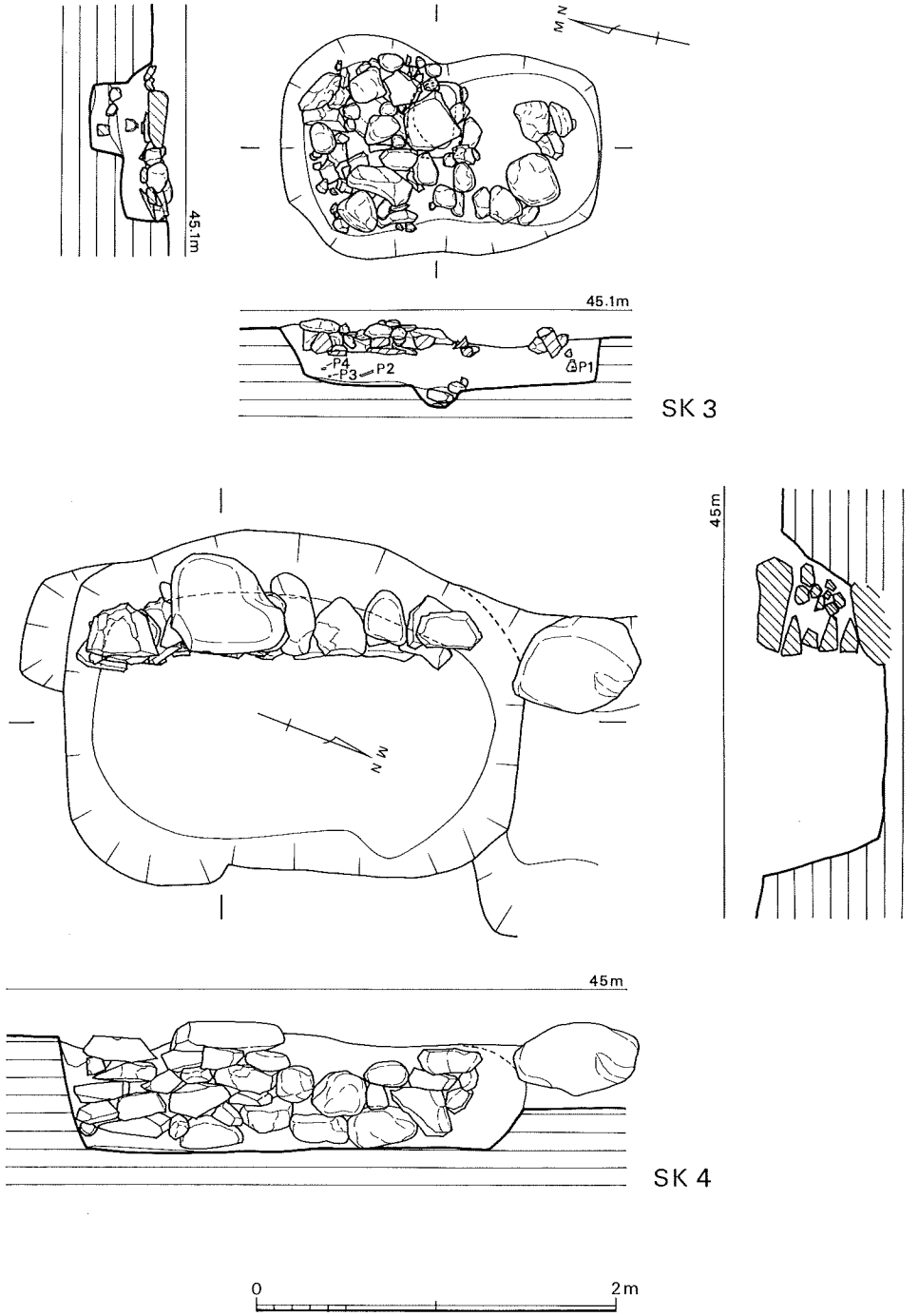


Fig. 16 土壇① (1/40)

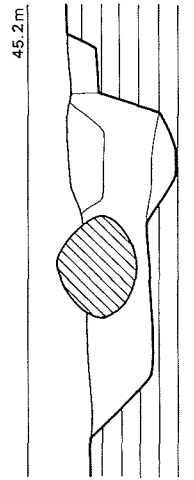
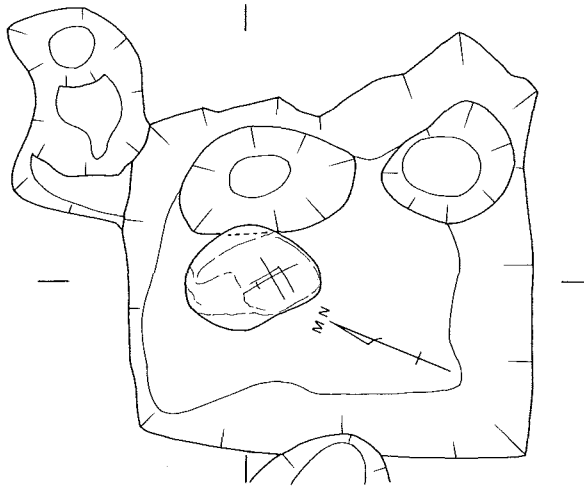


SK 3

SK 4

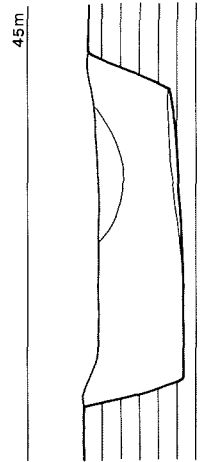
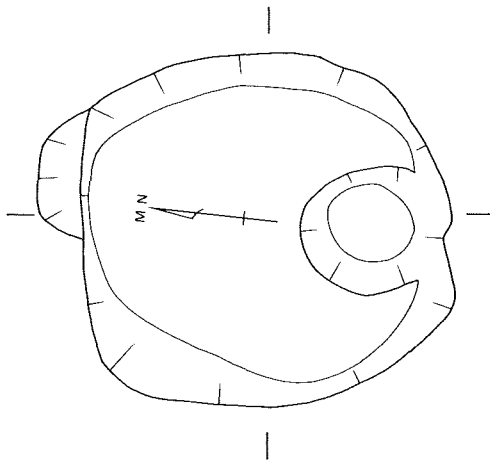
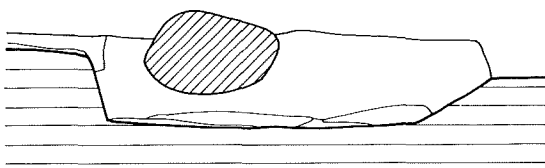
Fig. 17 土壙② (1/40)





45.2m

SK 5



45m

SK 6

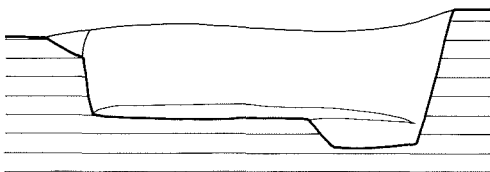


Fig. 18 土壇③ (1/40)

N19°Wである。長軸2.55m、幅1.9mを測る。底面は平坦で、基盤面から60cmほど掘り込まれている。

土壌の覆土は、粘質ぎみの暗茶褐土で、礫が詰め込まれていた。投げ込まれた礫とは別に、西壁だけに石垣があるのが分った。東側の面を合わせ、角礫と円礫を比較的に積み上げている。また、石垣内は小円礫を裏込めに詰めていた。

土壌内からは、近世陶磁器が4点出土している。それは、白磁盃1点、皿1点、青磁皿1点、褐釉のかかる陶器天目茶碗1点であるが、いずれも小破片であり、時期の決めてを欠く。

#### SK 5 (Fig. 18)

第1区のH7区に位置する方法の土壌である。平面の規模は、南北2.25m、東西1.8mを測り、基盤面から50cmほど掘り込まれている。底面は平坦で、東側にある2個の柱穴状のピットは、土壌以前の掘り込みと考えられる。土壌には、ぎっしりと礫が底まで詰め込まれていたが、上面に線刻をもつ礫があることが分った。浅学なため、調査時には奇妙な石がある程度にしか考えず、一応図面にはとったが、調査後に、熊本県浜の館跡の報告書<sup>註5</sup>のなかで同様の線刻をも

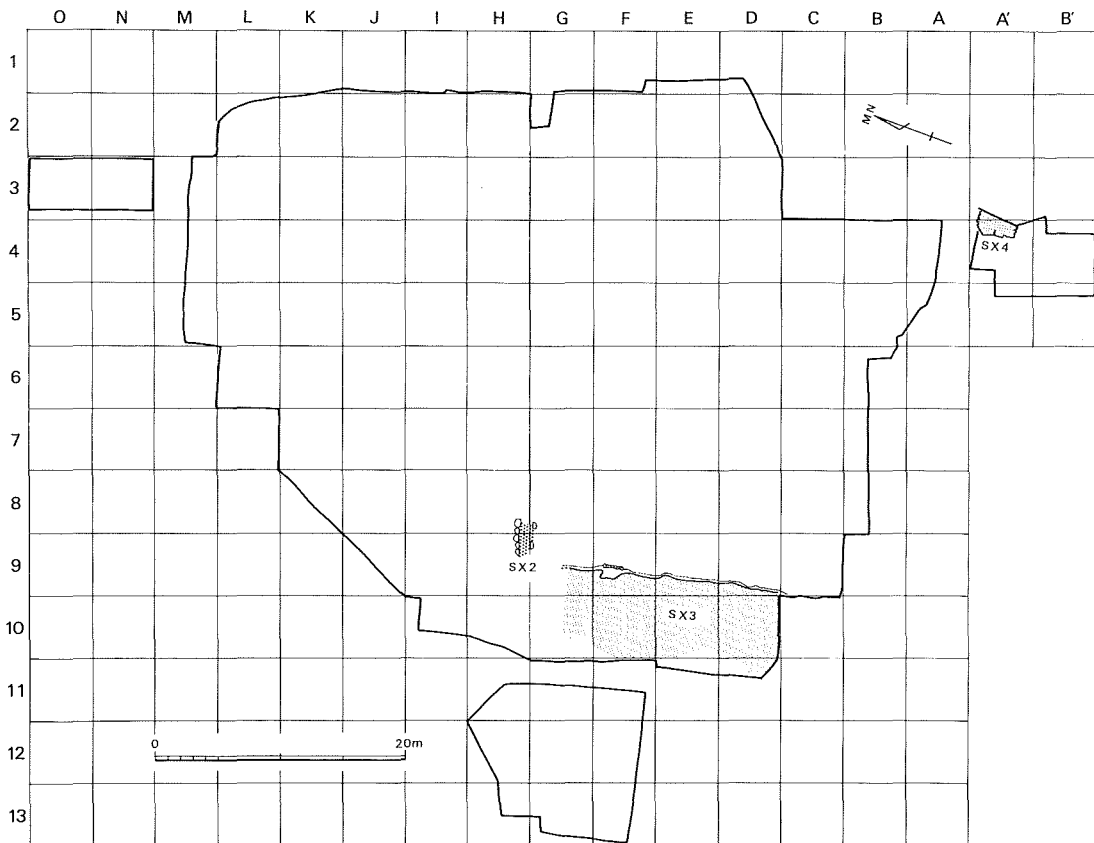


Fig. 19 その他の遺構 (1/600)

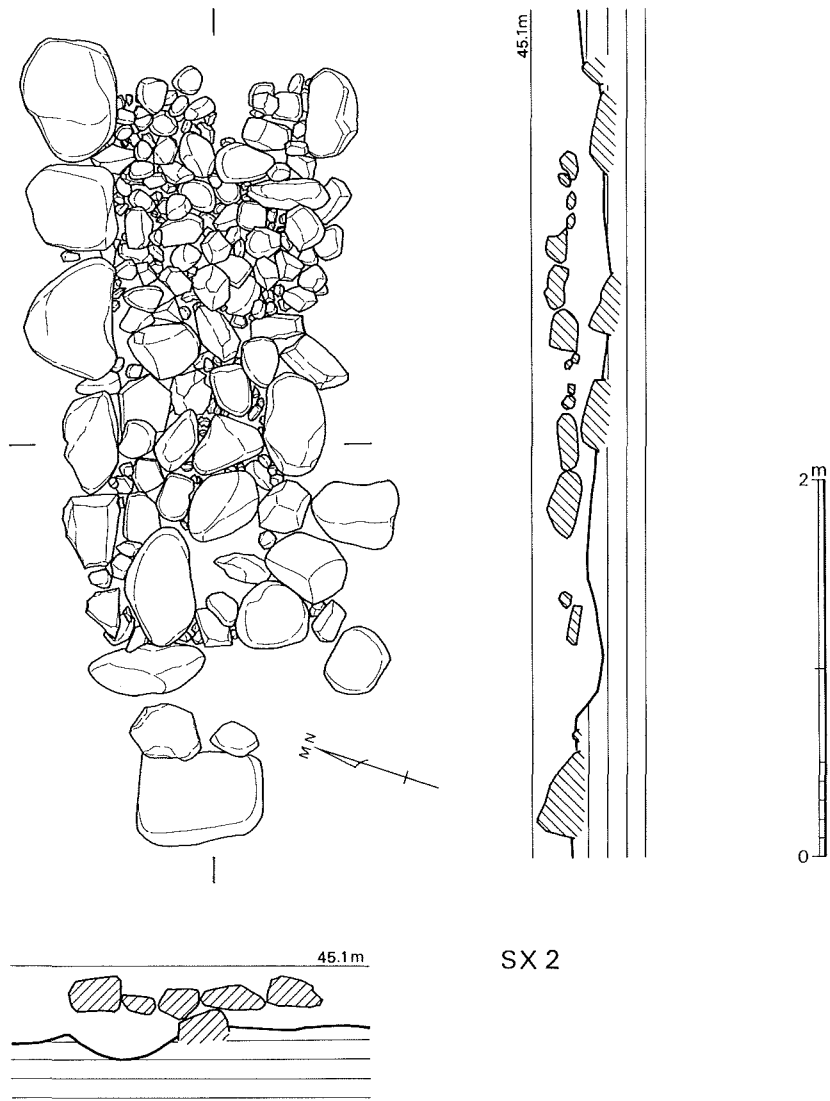


Fig. 20 敷石遺構 (1/40)



Fig. 21 壇状遺構周辺図 (1/100)

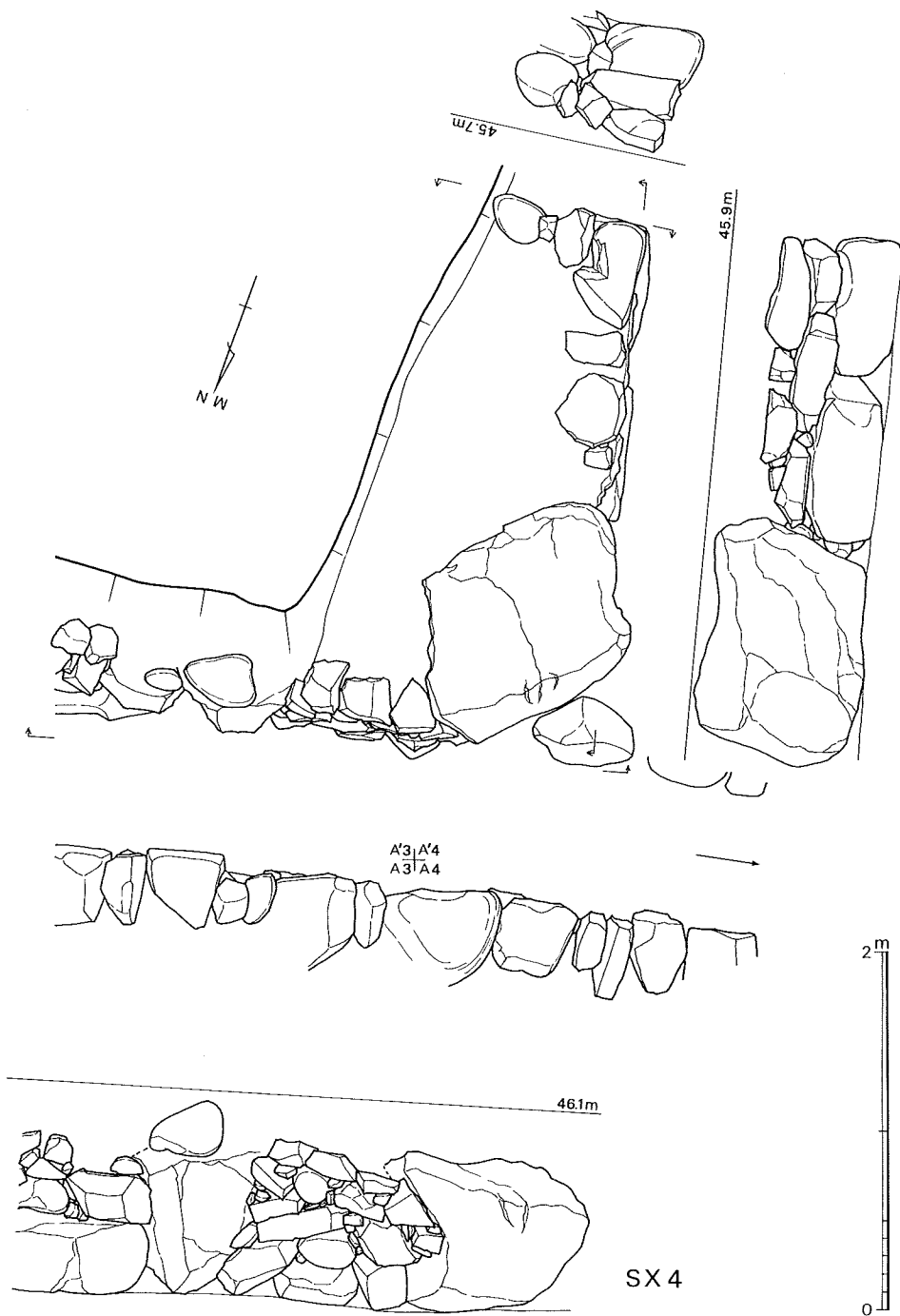


Fig. 22 石垣 (1/40)

つものが、礎石として使われていることを知った。本土壙自体は、礎石の掘り方ではないので礎石として使われていたものが不用となり、土壙内へ投棄されたものであろう。

土壙内からは、近世陶磁器が14点出土しており、そのうち2点を図化した。1点は波佐見系の「くらわんか手」の皿であり、18世紀後半代の資料である。したがって、土壙の時期は江戸後期頃のものと考えられる。

#### S K 6 (Fig. 18)

第1区のI 8・9に位置する土壙で、いびつな円形状のプランである。南北・東西軸ともに1.9mを測る。基盤面から40～50cm掘り込まれ、底面は平坦な形状である。南端にある柱穴状のピットは土壙以前の掘り込みと考えられる。土壙内にはぎっしりと礫が詰め込まれていたが、多数の近世陶磁器も出土した。

近世陶磁器は71点あり、そのうち20点を図化した (Fig. 57—59)。これらの遺物は、18世紀後半～19世紀前半頃までを含んでいる。これらによると土壙は、江戸後期～末期頃に設けられたことが推定できよう。

#### ③ 敷石遺構 (Fig. 20)

第1区の西側、G・Hの8・9区に位置する敷石遺構 (S X 2) である。北側には南面を合せた人頭大の礫を5個並べ、内側には1mほどの幅に礫を一面に詰め込み、上面を平坦にしている。南側は攪乱が著しく、2個の側石を除いて取り去られているようである。長さは現存で約3mを測るが、上・下端とも完結した状態ではないので、旧状はまだ長いものであったことが推測される。主軸の方位は、N71°Eである。

#### ④ 壇状遺構 (Fig. 21)

第1区の西端、D～Gの9・10区に南北に長く帯状に把えられた壇状遺構 (S X 3) である。幅約6m、現存では20～40cmほどの低い壇状をなす。またF 9区では、壇の下端に沿って長さ20cmほどの礫を1.6mの長にわたって並べており、壇と密接な関係をもつことが考えられる。この壇状遺構については、本来はもっと高かった可能性をもち、築地の機能を果していたことが想定されよう。北端と南端が不明瞭だが、主軸方位は、N13°Wを測る。

#### ⑤ 石垣 (Fig. 22)

第4区北東隅に「コ」の字形に検出された石垣遺構 (S X 4) である。北側は現在の溝の南壁を兼ねており、西壁はほぼ3mの長さをもつ。石垣は大小の礫、岩を組み合わせ、丁寧な作りではない。下端から上端までの高さは90cmほどあるが、上面が揃っておらず、まだ高かった可能性をもっている。石垣の東側が調査区域外になるので断定はできないが、本遺構は市指定の泉水のすぐ西側にあるところから、もともとは泉水の規模が大きく、石垣はその「中の島」であったことが想定される。

(宮崎)

坂口館跡

- 註1 小野正敏「15～16世紀の染付碗, 皿の分類と年代」『貿易陶磁研究No.2』 日本貿易陶磁研究会 1982
- 註2 森田勉・横田賢次郎「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集4』 九州歴史資料館 1978
- 註3 森田勉「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究No.2』 日本貿易陶磁研究会 1984
- 註4 註1文献
- 註5 隈昭志・桑原憲彰『浜の館』熊本県文化財調査報告第21集 熊本県教育委員会 1977

### Ⅲ 遺物

#### 1. 先土器・縄文時代の遺物

##### ① 縄文式土器 (Fig. 23, 24)

出土土器は、縄文早期7点、縄文前期4点、縄文晩期151点の計162点を数え、縄文晩期の土器が大半を占めるようだ。

**縄文時代早期の土器 押型文土器 (Fig. 19—1, 2)** 1は、器表面および裏面の口唇部に $2\text{mm} \times 4\text{mm}$ 程の小粒の楕円文を横位に施文したもので、口縁部は若干外反気味である。2は、深鉢形の胴部で、外面に $5\text{mm} \times 7\text{mm}$ 程の楕円文を施文したもの。1, 2共に胎土に石英、角閃石、砂粒を含む。

**塞ノ神式土器 (Fig. 23—3)** 3は口縁部に半載竹管状のもので刺突文を施したもの。器表裏面は粗れている。色調は茶褐色を呈し、胎土に石英、砂粒、角閃石、長石を含む。

**縄文時代前期の土器 曾畑式土器 (Fig. 23—4, 5)** 4は、胴部で横走る沈線文がほぼ平行に整然と描かれている。胎土に滑石を含み、茶褐色の色調を呈す。5は、胴部で外面は横位の条痕をナデ仕上げし、内面は貝殻条痕文が残る。焼成は良好で、胎土に滑石を含む。

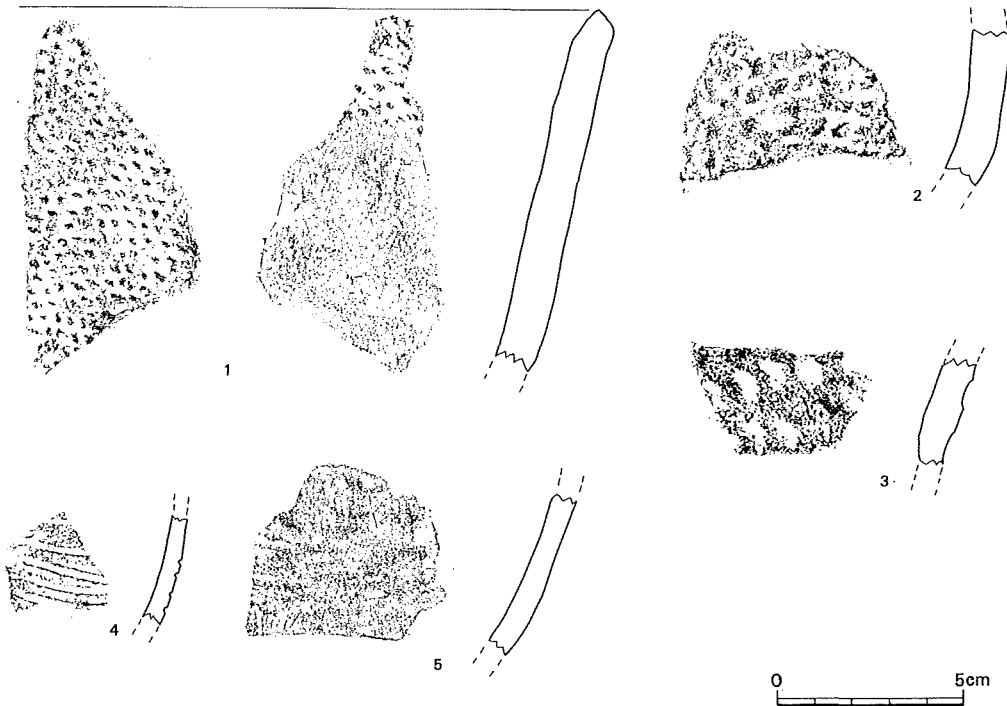


Fig. 23 縄文時代の土器① (1/2)



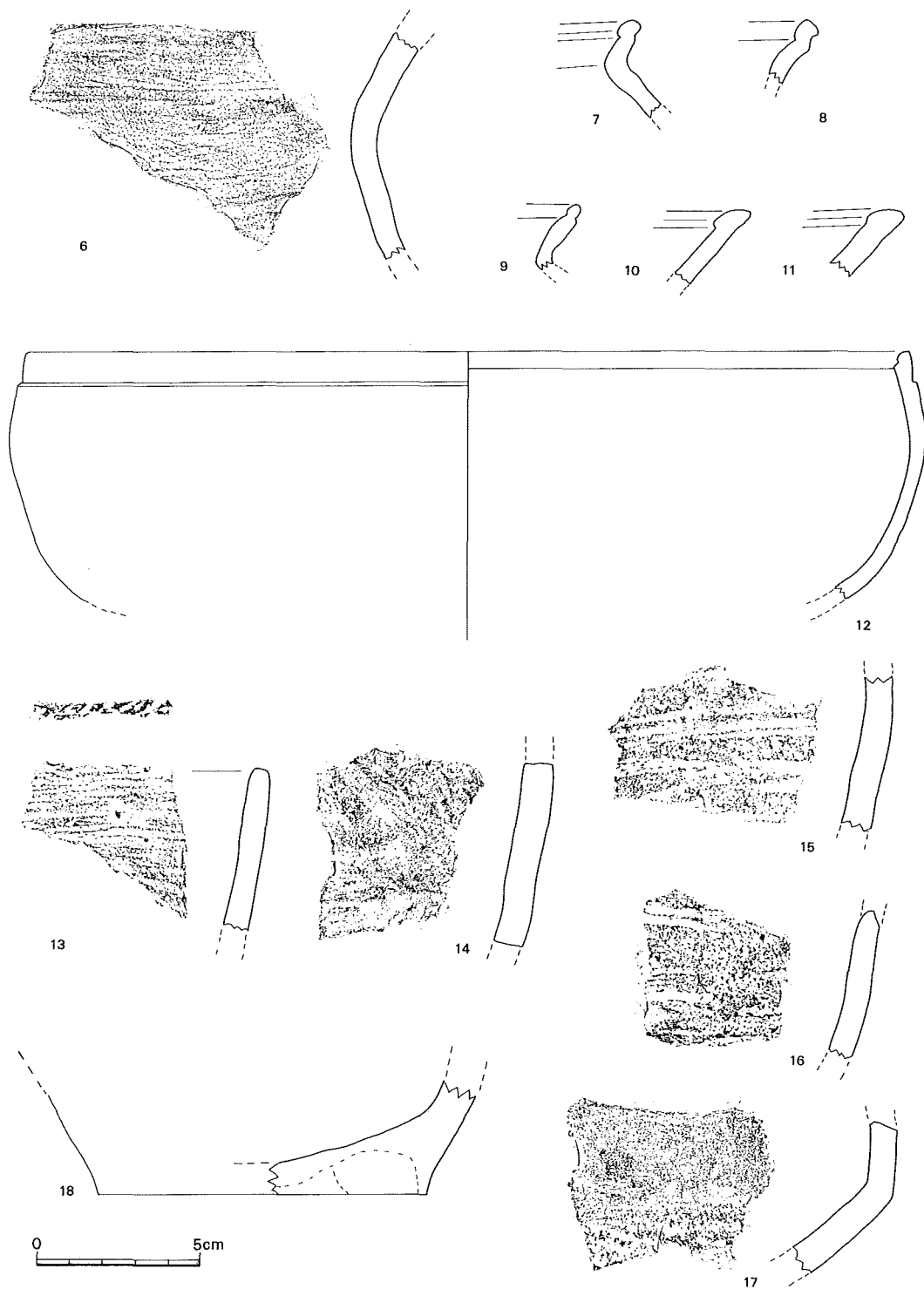


Fig. 24 縄文時代の土器② (1/2)

縄文時代後期～晩期の土器 (Fig. 24—6～18) 6を除いて、他は縄文時代晩期の土器である。6は、深鉢の頸部から胴部の部分で、表裏面ともに横走る条痕文を施す。胎土に石英、砂粒を含む。色調は黄褐色を呈す (北久根式土器)。7～10は精製、11は粗製の浅鉢形土器の口縁部分で、頸部から胴部を欠損している。7～9は、玉縁状の口縁を有し、口縁はわずかに外反する。ヘラ削りによる沈線状の段をもち、短かめの頸部から胴部に湾曲するものである。いずれも、色調は茶褐色を呈し、研磨されている。10、11は、口縁部が尖がり、外反する。口唇部内面はヘラ削りによる段をもつ。器形は皿状を呈す。10は、ヘラ磨きが施され、焼成も良好である。色調は茶褐色を呈す。11は粗製土器で、赤褐色の色調を呈す。12は、碗形土器で胴下半部から底部を欠損している。玉縁状の口縁を有し、口縁は直立し、肩部から胴部にかけて丸味を帯びる。口唇部内面および外面は、ヘラ削りによる段をもつ。13は、口縁部分で、若干外反する。外面は条痕を施し、内面はヘラ削りで成形している。口縁部直上は、施文原体によって、きざみを付ける。色調は黄褐色を呈す。14～17は、深鉢形土器の胴部片で、器の内外面に粗い条痕を施している。17は、鉢の肩部から胴部にかけて、く字状に湾曲する部分のものである。14、15の色調は黄褐色、16、17は茶褐色を呈す。18は、粗製深鉢土器の底部で、平底である。外面は赤褐色の色調を呈する。

## ② 石器

### 先土器時代の石器

#### 三稜尖頭器 (Fig. 25—1)

肥厚する横長の不定形剥片を利用し、器表面は両側縁部、裏面は一側縁部から粗い2次加工を施し整えている。稜上からの調整剥離はない。黒曜石A製。

先土器時代のナイフ形石器を主体とする石器群の終末期頃の石器と考えられる。この石器を出土する遺跡は、百花台遺跡群 (国見町)、西輪久道遺跡上層石器群、鷹野遺跡 (諫早市) 等で、ナイフ形石器、台形・台形様石器、削器等の石器類と共に検出されている。

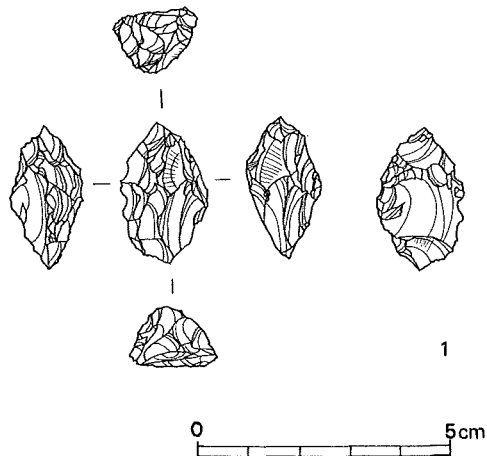


Fig. 25 先土器時代の石器 (2/3)

## 縄文時代の石器

### 石 鏃 (Fig. 26~29)

石鏃は、49の局部磨製石鏃を除き打製石鏃で、形状からⅠ～Ⅲ類に分類され、Ⅲ—1、2類と細分される。総数70点の出土を数える。

Ⅰ類は、円基鏃で、基部がきるみを帯びるもの。2点出土。

Ⅱ類は、平基無茎鏃で、基部が直線的なもの。形状は正三角形を呈す。11点出土。

Ⅲ類は、凹基無茎鏃で、基部に扶入状の2次加工を施し、形状が二等辺三角形を呈すもの。その中で、Ⅲ—1類は基部の扶入が浅いもの20点と扶入が深いもの38点に細分される。

Ⅰ類 (Fig. 20—2) 1は、不定形剝片を利用し、器表面は主要剝離面側から粗い調整加工、器裏面は押圧剝離で整え、基部はまるみを帯びている。石材は黒曜石A製を利用している。他に先端部から胴部を欠損しているが、同様な遺物が1点出土している。(黒曜石B製)

Ⅱ類 (Fig. 20—3~13) 器形は、完形のもの3点(6, 8, 12), 先端部分欠損のもの4点(4, 7, 9, 13), 片脚部分欠損のもの4点(3, 5, 10, 11)がある。

いずれも、長さが1.5~2.2cm内の比較的小形の石鏃である。石材は、黒曜石A製7点(3~5, 9, 10~13), 黒曜石C製3点(6~8), その他の黒曜石製1点(2)を利用している。

Ⅲ—1類 (Fig. 20—14~18, Fig. 21—19~30) 基部加工の挟りが浅いものである。中でも14~18は、基部の両端部分が若干突出し、基部の大部分が浅い扶入状の凹みをもっている。

19~30は、基部の中央部分の2次加工が浅い凹状を呈すものである。

器形は、完形のもの6点(14, 15, 17, 19, 22, 24), 先端部分欠損のもの6点(16, 18, 20, 23, 25, 26), 片脚部分欠損のもの6点(20, 21, 26, 27, 29, 30), 両脚部分欠損のもの3点(20, 21, 28)がある。

石材は、黒曜石A製11点(15~19, 22, 25, 27, 29, 30), 黒曜石B製2点(23, 24), 黒曜石C製3点(14, 20, 26), その他の黒曜石製2点, 安山岩製2点(21, 28)である。

Ⅲ—2類 (Fig. 21—31~35, Fig. 22—36~53, 23, Fig. 29—54~61) 基部加工の挟りが深いもので、38点を数える。

器形は、完形のもの2点(39, 53), 先端部分欠損のもの13点(33, 35~37, 41, 43, 44, 48, 52, 55~58), 片脚部分欠損のもの16点(31~34, 40, 42, 47, 48, 52, 54, 57~59), 両脚部分欠損のもの7点(45, 46, 49, 51, 55, 60, 61), 片脚部分のみ1点(38)がある。

石材は、黒曜石A製23点(31~35, 37~41, 43, 45, 47, 50, 51, 55~57, 59, 60), 黒曜石B製5点(42, 48, 49, 54, 61), 黒曜石C製5点(36, 52, 53, 58), 安山岩製2点(44, 46), その他の黒曜石製2点を利用している。

49は、器表裏面を研磨し、他を押圧剝離で整えた局部磨製石鏃で、1点出土している。

31~36, 49のⅢ—1類の石鏃は、縄文時代早期に伴出するものと考えられ、県内でも百花台、鷹野、弘法原遺跡等で、縄文時代早期の押型文および塞ノ神式土器と共に出土している。

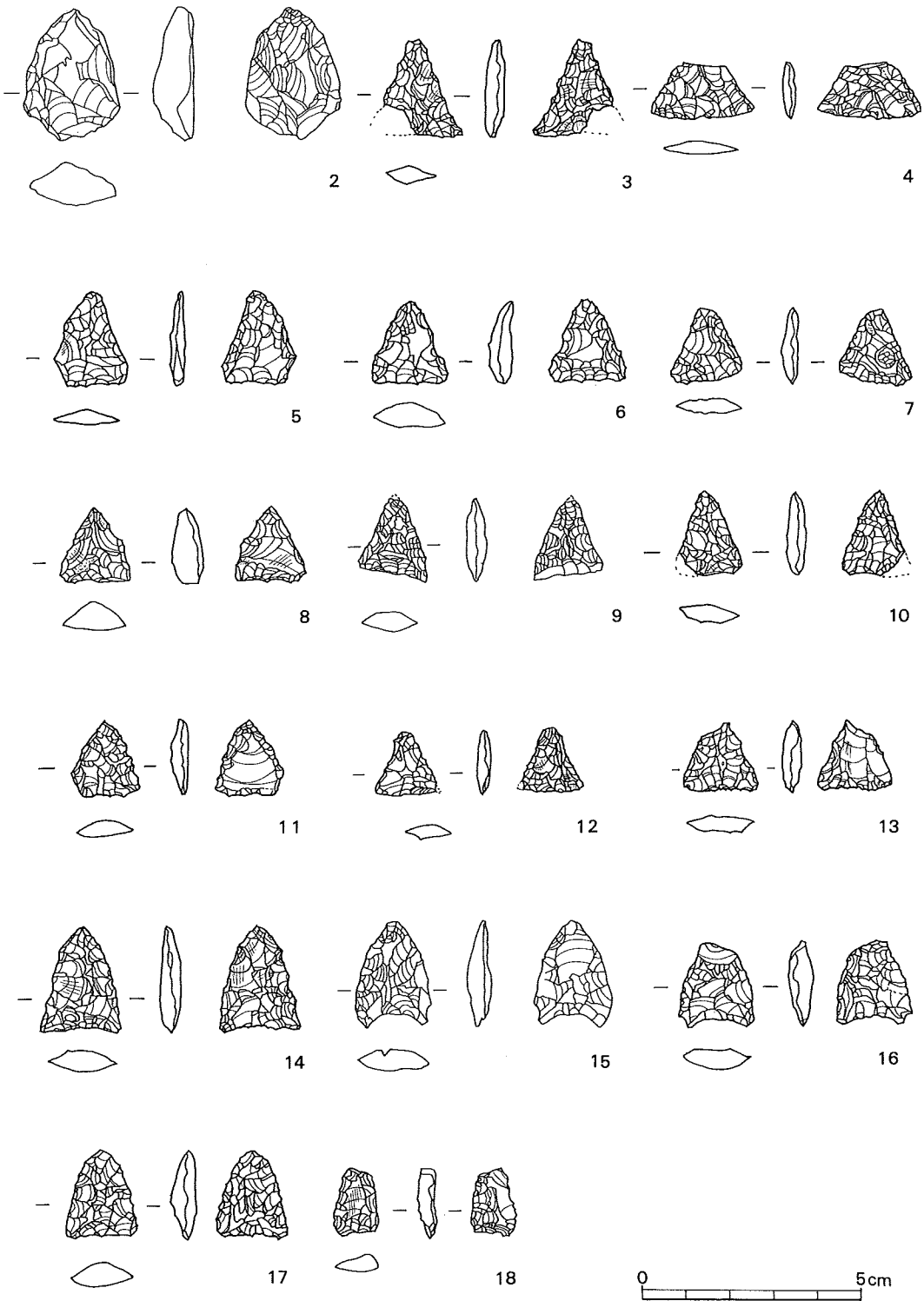


Fig. 26 縄文時代の石器① (2/3)

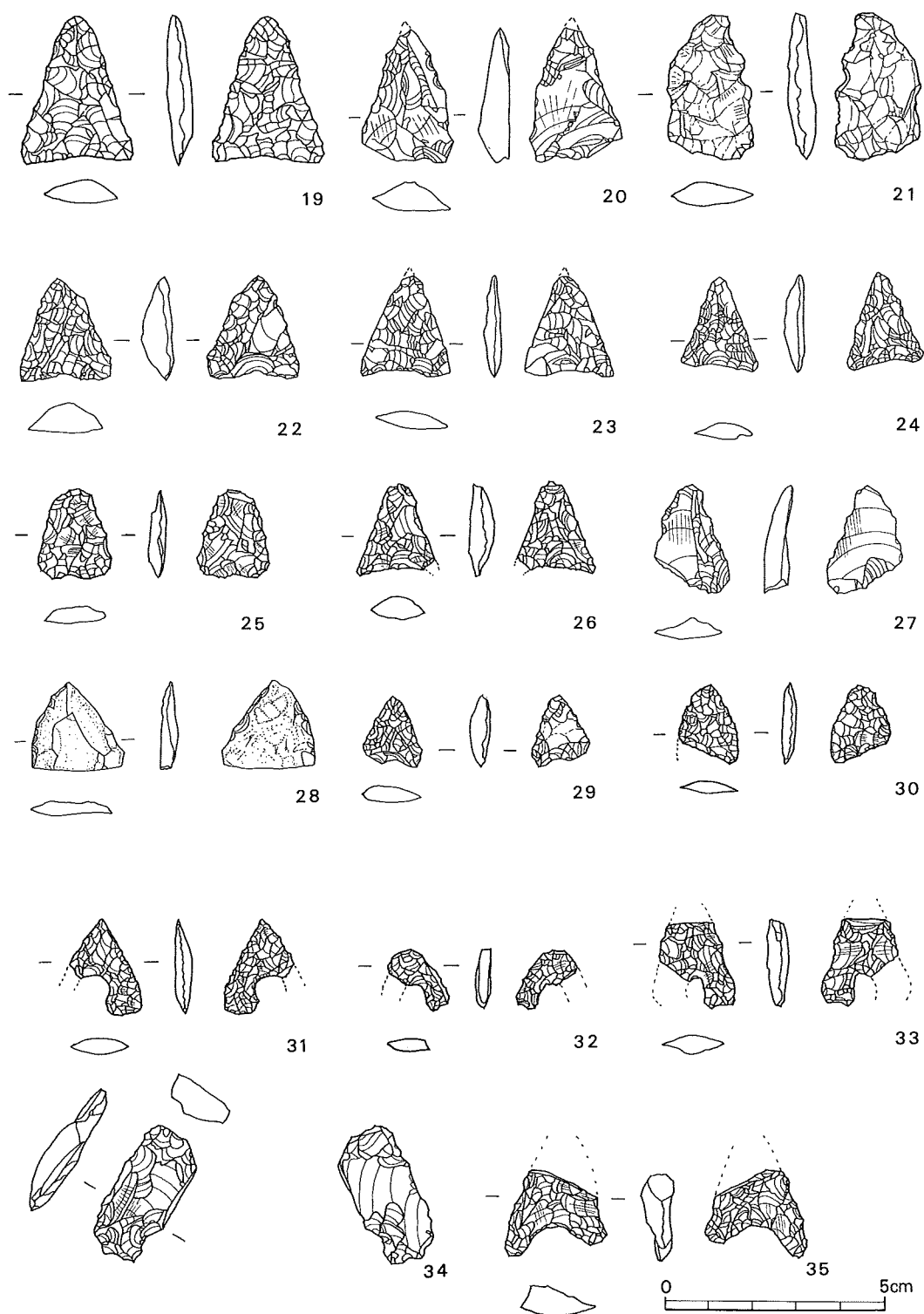


Fig. 27 縄文時代の石器② (2/3)

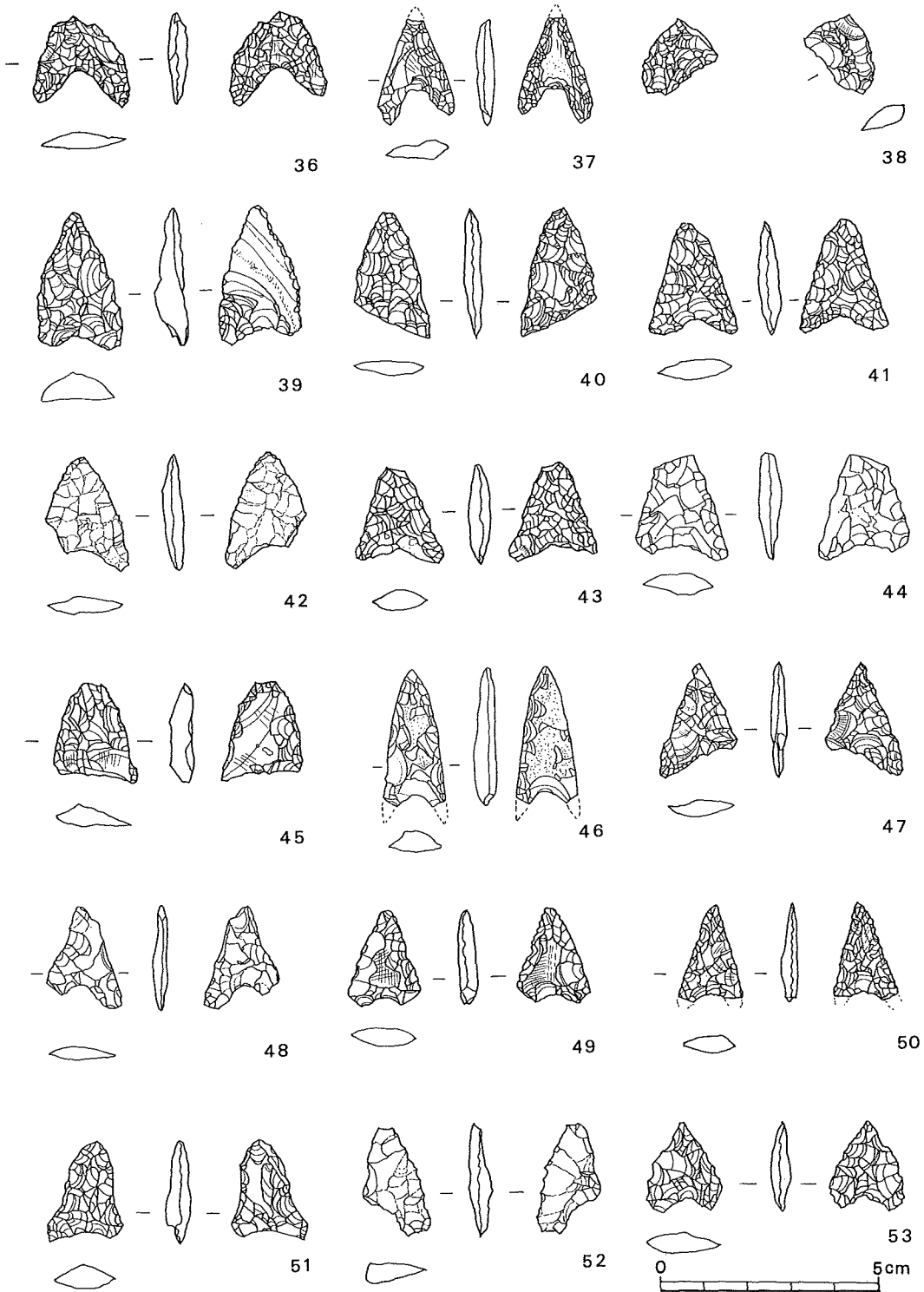


Fig. 28 縄文時代の石器③ (2/3)

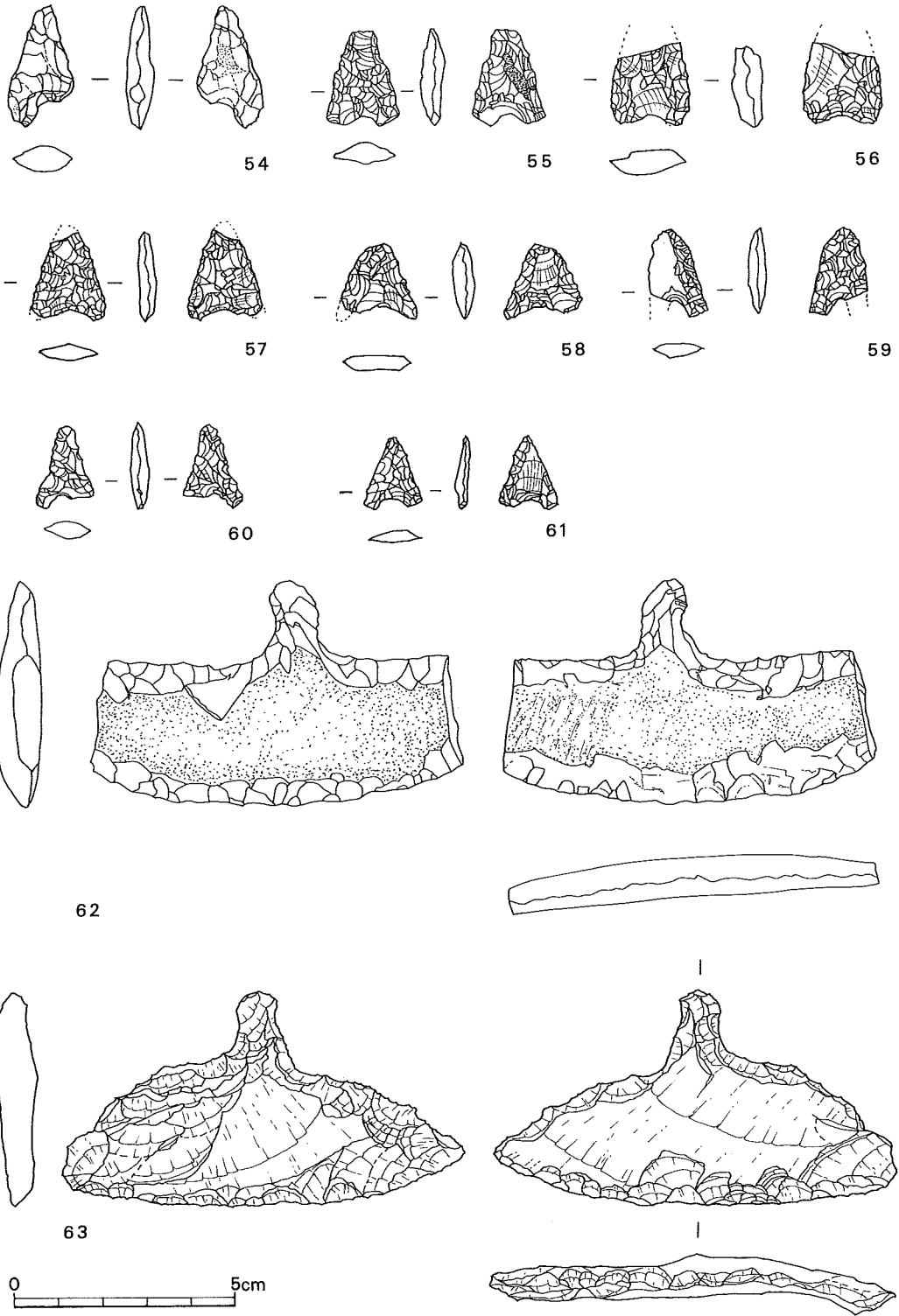


Fig. 29 縄文時代の石器④ (2/3)

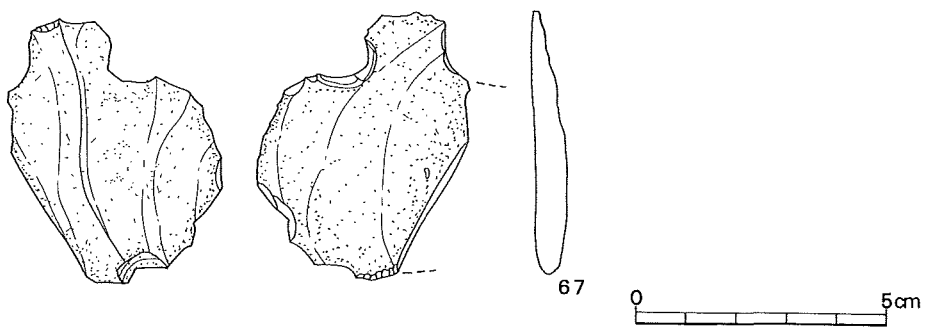
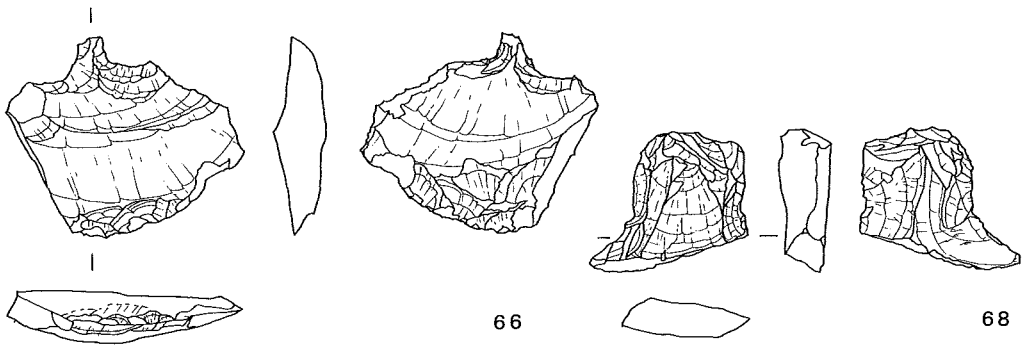
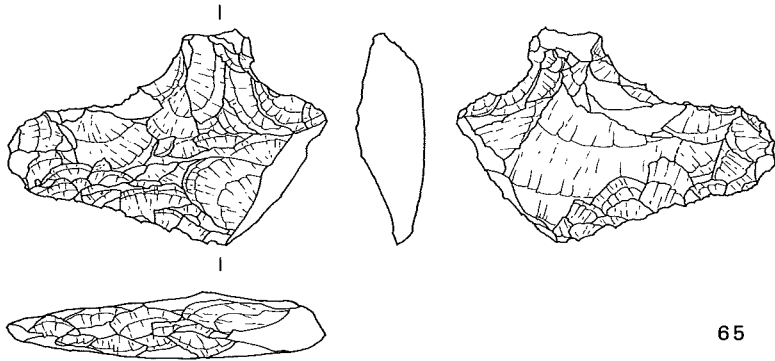
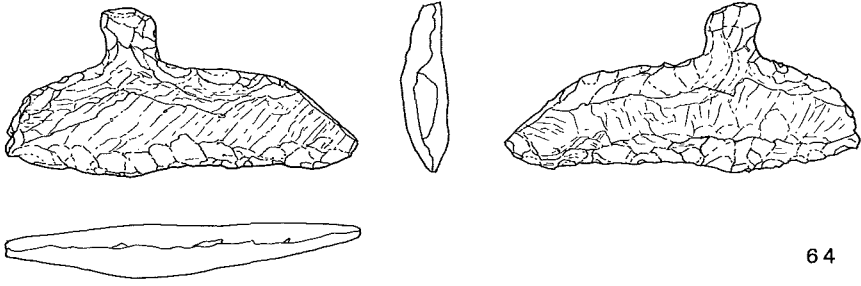


Fig. 30 縄文時代の石器⑤ (2/3)



石 匙 (Fig. 29—62, 63, Fig. 30—64~67)

大形の横長剥片の弯曲する素材を利用した横型石匙が7点出土している。

62~65は、刃部が長く、胴部が幅狭のもので、器表裏面から入念な2次加工を施し、作出している。63, 64の器形は完形で、他は刃部の両端および一端を欠損している。

66, 67は、胴部が扁平で、幅が広いものである。器表裏面側より小かい2次加工を施し刃部を整えている。刃部および胴部の1/2程を欠損している。

68は、胴部のつまみ部分が幅広のもので、大部分を欠損している。

石材は、黒曜石B製1点(68)、安山岩製6点(62~67)。

削 器 (Fig. 30—69~75, Fig. 32—76~84, Fig. 33—85~88)

利用素材は、69~74, 76~85が不定形剥片、75, 86~88が縦長剥片を用いた削器である。この他に9点が出土した。

刃部の形成は、素材の器表裏面から2次加工を施したものの13点(69~71, 75~78, 80, 82, 85)と器裏面(主要剥離面)側から施したものの10点(72, 73, 79, 81, 84)、器表面から施したものの1点(85)である。

86~88は、素材剥片の側縁部に挟入状に刃部を作り出し、他縁にも2次加工および刃こぼれが顕著なものである。(外に1点出土)

素材剥片の打面は、自然面5点(73, 84, 86)、平坦打面4点(81, 88)、調整打面4点(70, 72, 74, 75)が観察される。

石材は、黒曜石A製18点(72~75, 79, 81, 82, 84, 86~88)、黒曜石B製1点(80)、黒曜石C製3点(83, 85)、安山岩製6点(69, 70, 76, 77, 78)、チャート製1点(71)。

加工痕ある石器

図示していないが、不定形剥片を利用し、器裏面から入念な2次加工を施したもので、器の大部分を欠損しているもの(黒曜石C製)と素材剥片の打面部分から光端部分にかけて、2次加工を施したもの(黒曜石A製)が2点出土している。

使用痕ある剥片 (Fig. 33—89~91)

89, 90は縦長剥片、91は不定形剥片を利用し、側縁部に刃こぼれが顕著なものである。他に縦長剥片利用のもの4点、不定形剥片利用のもの2点の計6点が出土している。また、素材剥片の打面は、自然面のもの2点(89, 90)、調整打面のもの1点(91)、線状打面のもの2点を数える。

石材は、黒曜石A製8点(89~91)、その他の黒曜石製1点を利用している。

異形石器 (Fig. 33—92)

胴部の一部を欠損しているが、長形状を呈し、器表裏面より押圧剥離で整え、二側縁に挟入状に2次加工を施したもの。黒曜石B製。

この石器については、機能、用途等明らかではないが、全国的にも出土例が増えている。本

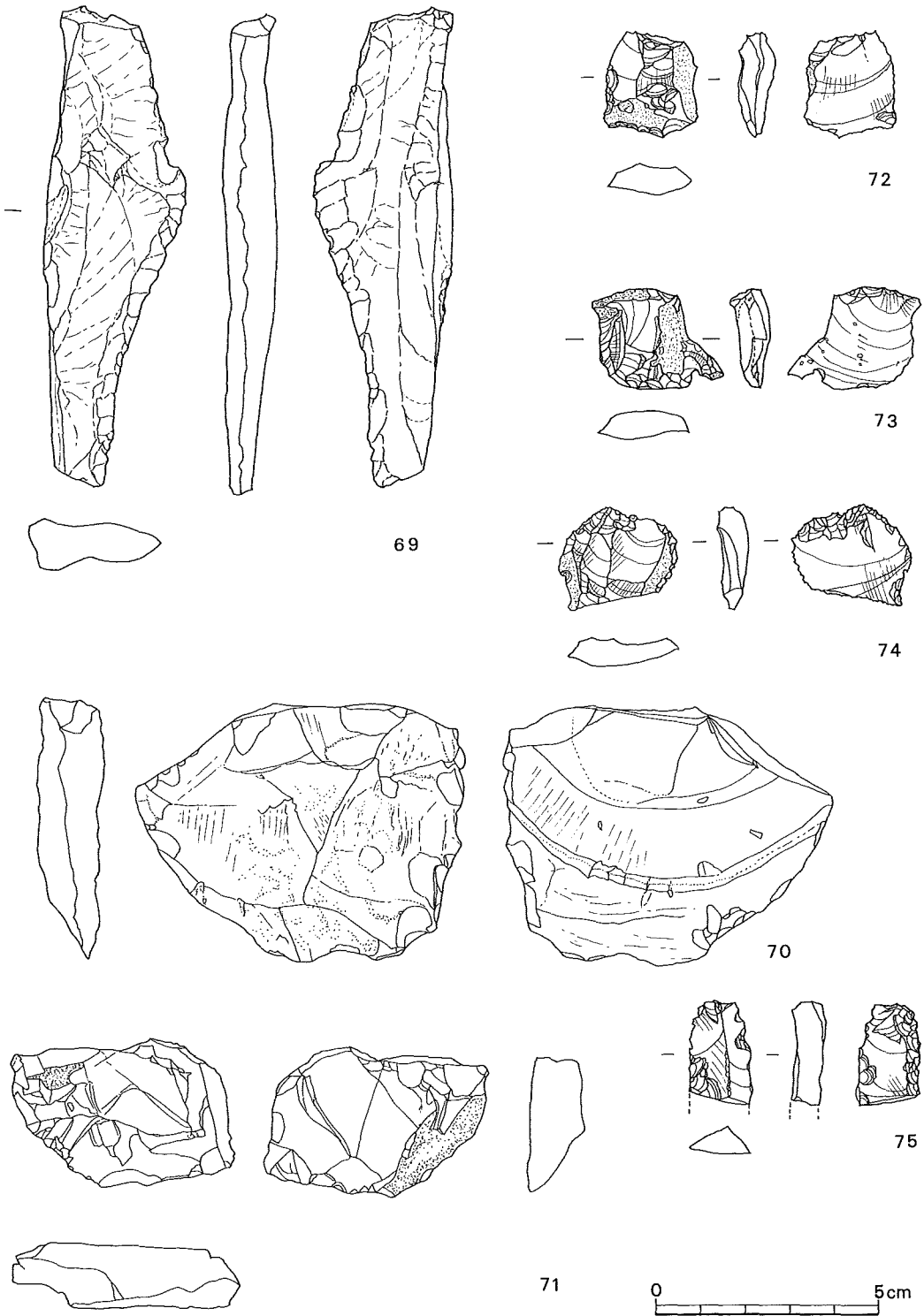


Fig. 31 縄文時代の石器⑥ (2/3)

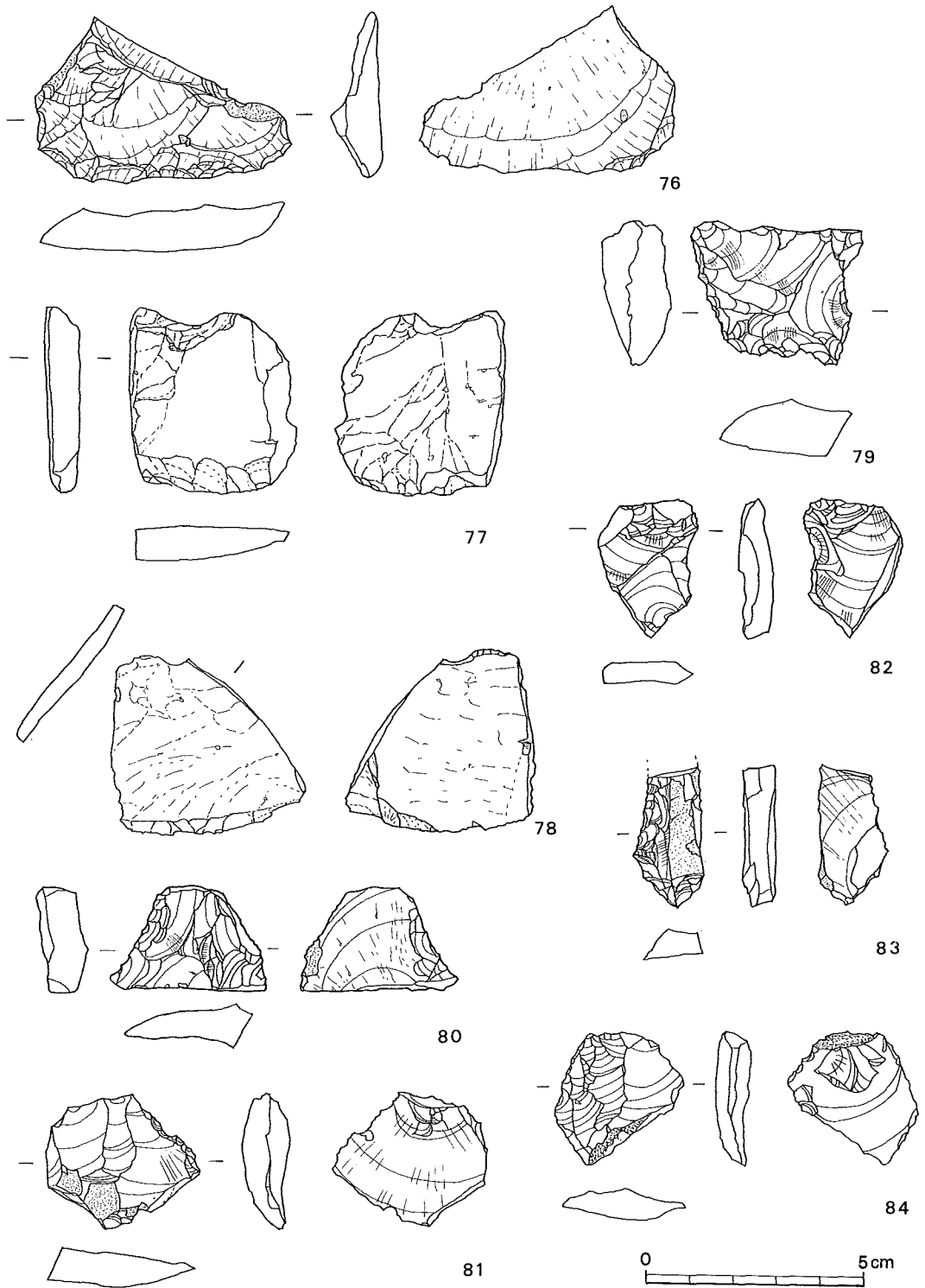


Fig. 32 縄文時代の石器⑦ (2/3)

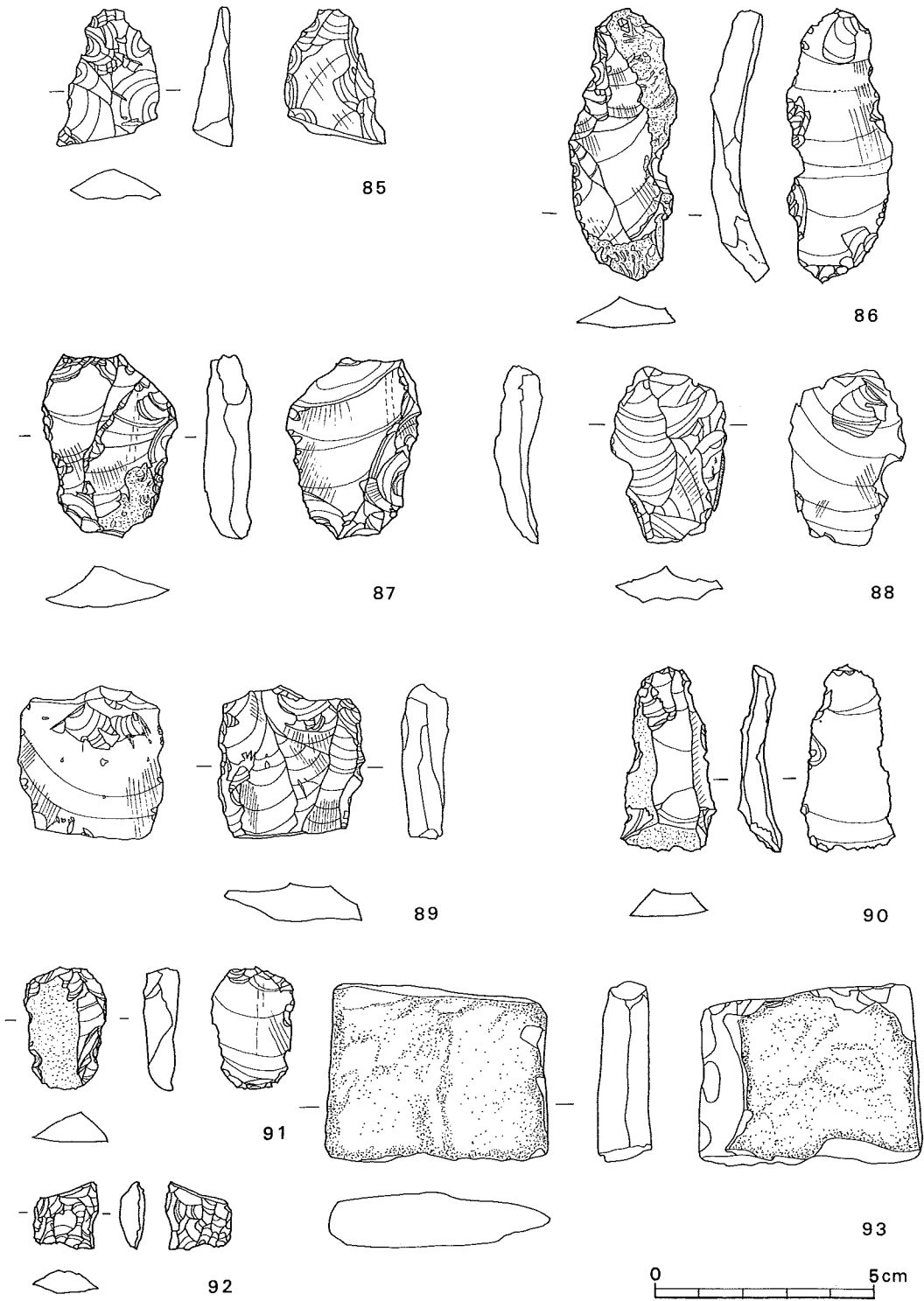


Fig. 33 縄文時代の石器⑧ (2/3)

県でも九州横断自動車道関係調査遺跡の牛込B遺跡（諫早市）、上水計遺跡（大村市）、松山A<sup>註3</sup>遺跡（東彼杵町）、諫早中核工業団地造成関係の鷹野遺跡、西輪久道遺跡（諫早市）と明賀谷遺跡（松浦市）等で出土している。

時期については、上述の遺跡で縄文時代早期の押型文土器、塞ノ神式土器と伴って出土していることと、当該遺跡でも同様な土器類が出土していることから、縄文時代早期頃の所産と考えられる。

石 斧 (Fig. 33—93, Fig. 34—94)

93は、扁平磨製石斧で刃部および基部を欠損している。短冊形状を呈し、器表面を研磨している。安山岩製。

94は、扁平打製石斧で洋梨の形状を呈す。器表裏面から刃部と両側縁部に2次加工を施している。安山岩製。

石 核 (Fig. 35~38)

黒曜石製の石核が79点出土し、その内14点を図示した。

石核は、打面形成および剥片剥離面、形状等からⅠ～Ⅲ類に分類した。

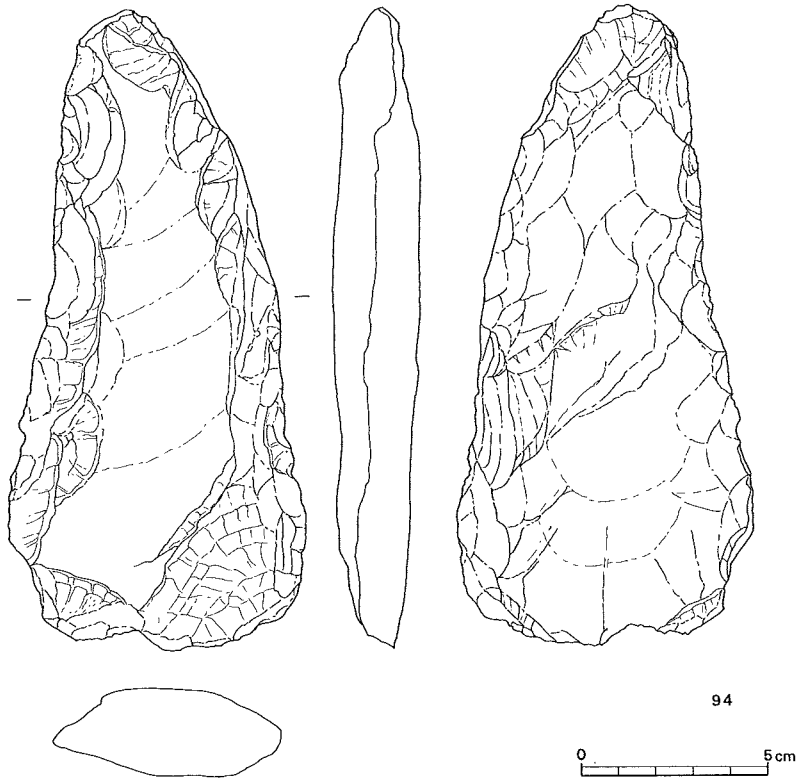


Fig. 34 縄文時代の石器⑨ (1/2)

I類は、角礫の平坦な部分を利用および作成し、打角が直角および鋭角の角度で剥片剥離作業を施したもので、石核の断面が角錐状もしくは三角形を呈すもの。56点（95～101）。

II類は、剥片剥離作業と打面部の調整を交互に行い、剥片剥離作業を施したもので、石核の断面が三角形もしくは石核の背面が丸みを帯びて楕円形状を呈すもの。打角は鋭角で、打面と剥片剥離面のなす稜が波状で凸凹を呈す。17点（102～107）。また、上下両面に打面を有するものも3点（105～107）ある。

III類は、I、II類の分類に含まれないもので、6点程出土している。

I類（Fig. 35—95～97, Fig. 36—98～101）打面は、自然面のもの28点（95, 96）、調整打面のもの10点（100）、平坦打面のもの18点（97～99, 101）である。

利用石材は、黒曜石A製33点（95～101）、黒曜石B製5点、黒曜石C製3点、その他の黒曜石製15点で、黒曜石Aの原石を多く用いている。また、石材の自然面を打面として利用するものが28点を数えるが、その内17点は黒曜石A、7点はその他の黒曜石を用いている。

I類は、背面・側面・底面部分および打面部分に自然面を多く、残すようだ。

II類（Fig. 37—102～105, Fig. 38—106～108）不定形剥片を目的に剥片剥離した痕跡をもつ石核である。

打面は、調整打面のもの12点（102～104, 106）、平坦打面のもの2点（105）、自然面のもの3点（107, 108）である。II類の打面は、I類の自然面や平坦打面を利用するものが多いのに対して、調整加工による打面形成が多いことが特徴であろう。

108の石核は、黒曜石Cの円礫を利用し、第一次の剥片剥離を施した剥離痕跡が残存したものである。当該遺跡から数点の原石が出土しているが、この石核と同様な大きさである。

III類は、I、II類に分類出来なかった石核で、3cm以下の小形のもので6点出土している。

打面は、自然面のもの1点、平坦打面のもの5点で、不定形な剥片剥離を目的とした石核と考えられる。

以上で、石核のI～III類の割合は、I類71%、II類22%、III類7%で、I類が多いことが特徴であろう。また、石材の原石は、黒曜石Aが多く利用され、大きさも拳大よりも小さな角礫を利用しているようだ。

石核再生剥片（Fig. 35—109, 110）共に、自然面を打面とする石核の底面部からの一撃

Tab. 1 石核の形態別・石材別一覧表

分類	石 材 打 面	黒曜石A	黒曜石B	黒曜石C	黒曜石他	計
		I類	自然面	17	1	
	調整打面	4	1		5	10
	平坦打面	12	3		3	18
	小計	33	5	3	15	56
II類	自然面	2		1		3
	調整打面	7			5	12
	平坦打面	2				2
	小計	11		1	5	17
III類	自然面				1	1
	平坦打面	4			1	5
	小計	4			2	6
合計		48	5	4	22	79

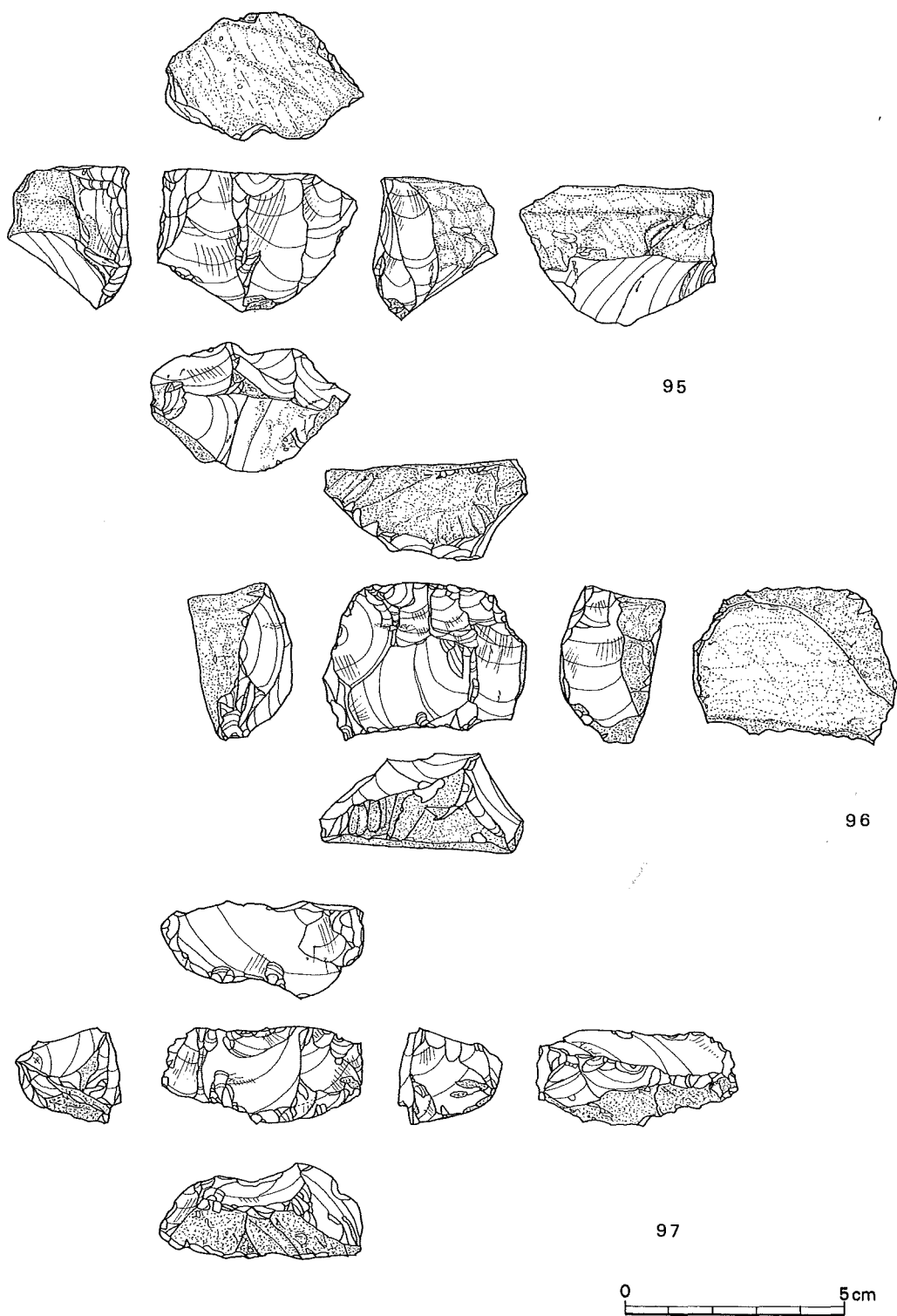
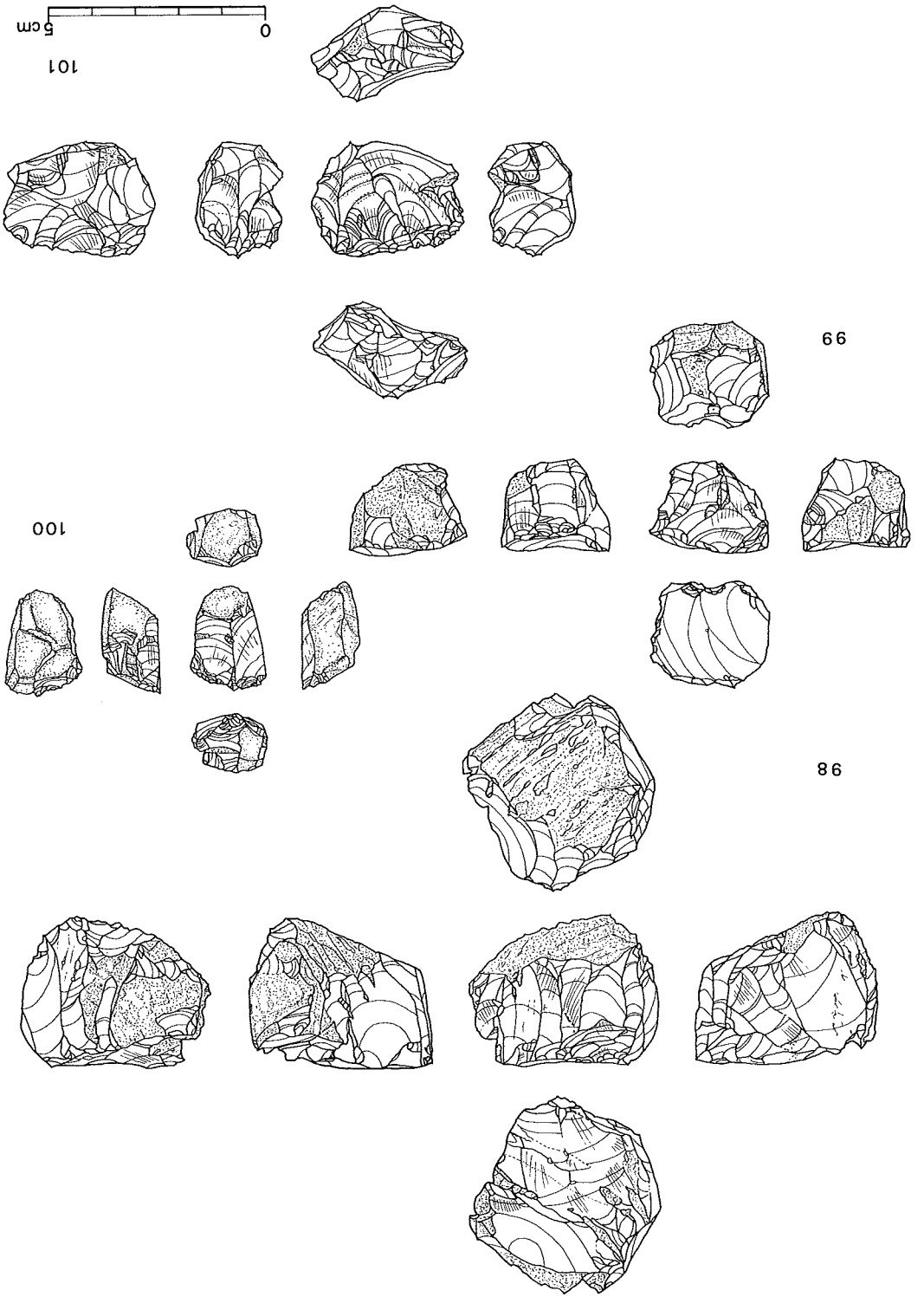


Fig. 35 縄文時代の石器⑩ (2/3)

Fig. 36 縄文時代の石器① (2/3)





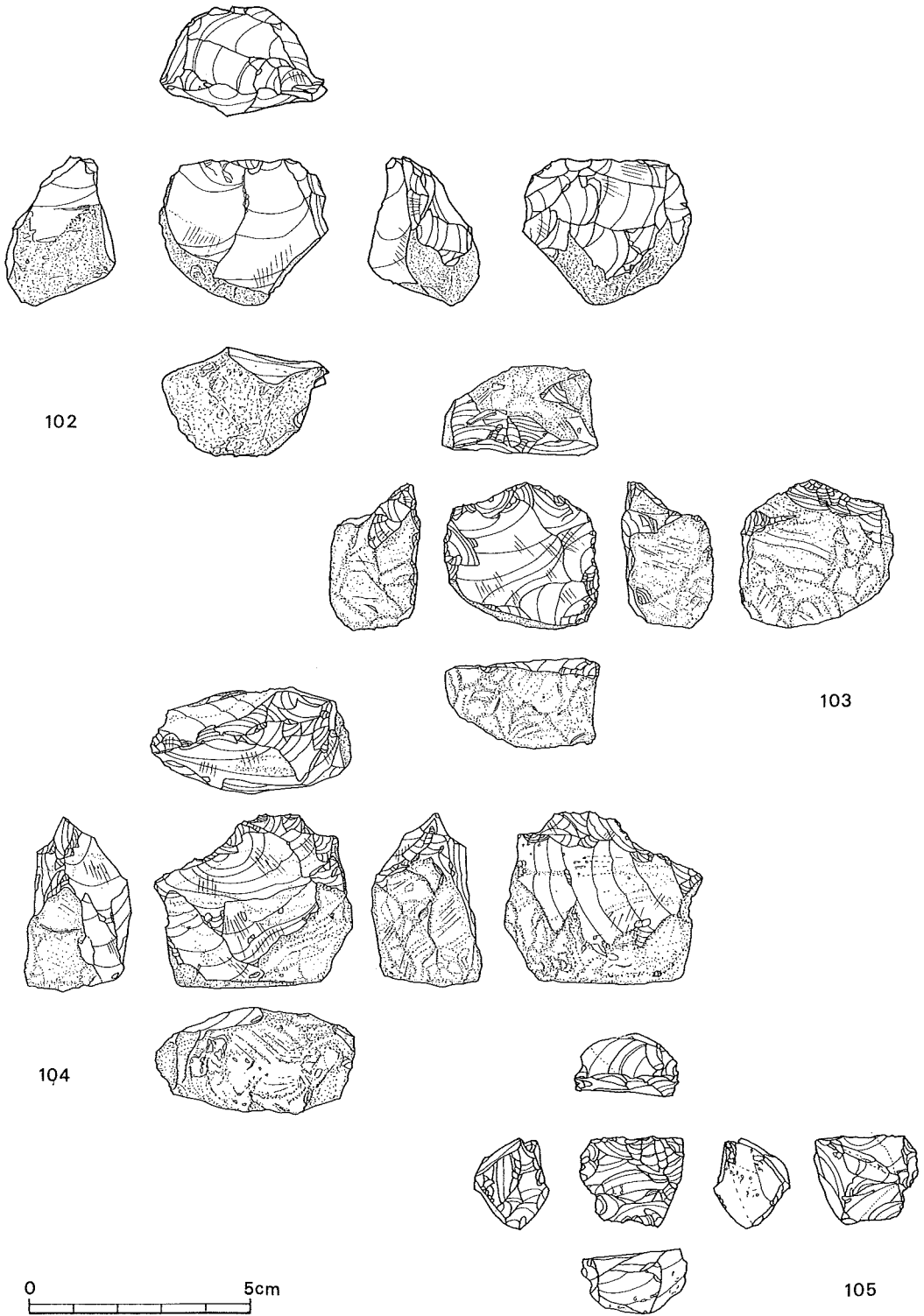


Fig. 37 縄文時代の石器⑫ (2/3)

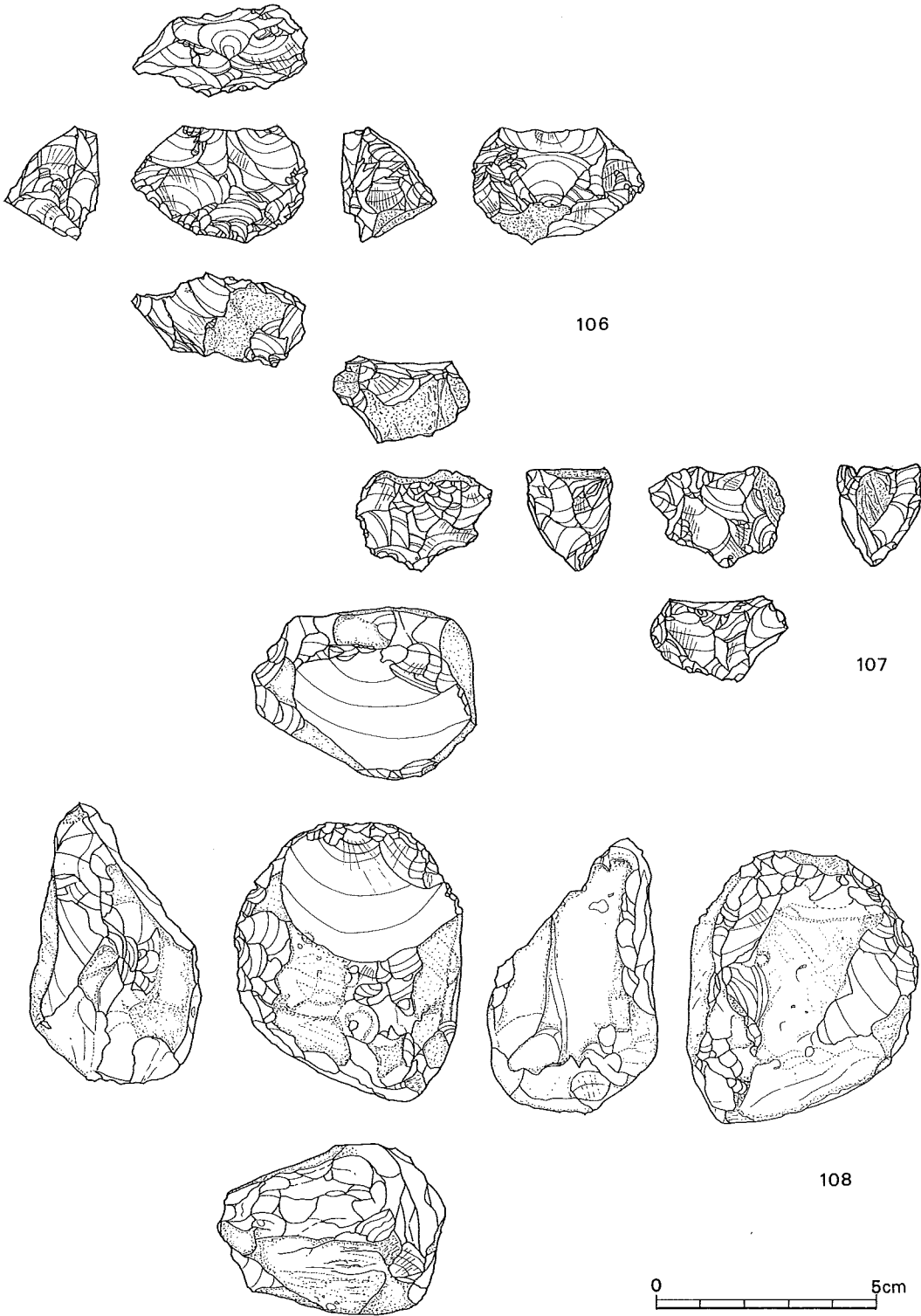


Fig. 38 縄文時代の石器⑬ (2/3)

を受けて調整剥離された剥片で、分厚い。上下両設打面から作出された剥離痕が残っている。黒曜石A製。この他に、2点（黒曜石A製、その他の黒曜石製）が出土している。

剥片 (Fig. 35—111～115) 剥片の出土は、501点を数える。縦長剥片および不定形剥片であるが、剥片の器長が3cmを越えるものは81点程で、剥片の83%が3cm以下の小形の剥片である。

剥片の打面部分は、自然面のもの188点（111, 112）、調整打面のもの111点、平坦打面のもの65点、線状打面のもの104点（113, 114）の計468点が明らかであるが、他は折断剥片および打面欠除のものである。この中で、石材の自然面を打面として剥片剥離された剥片が40%を占

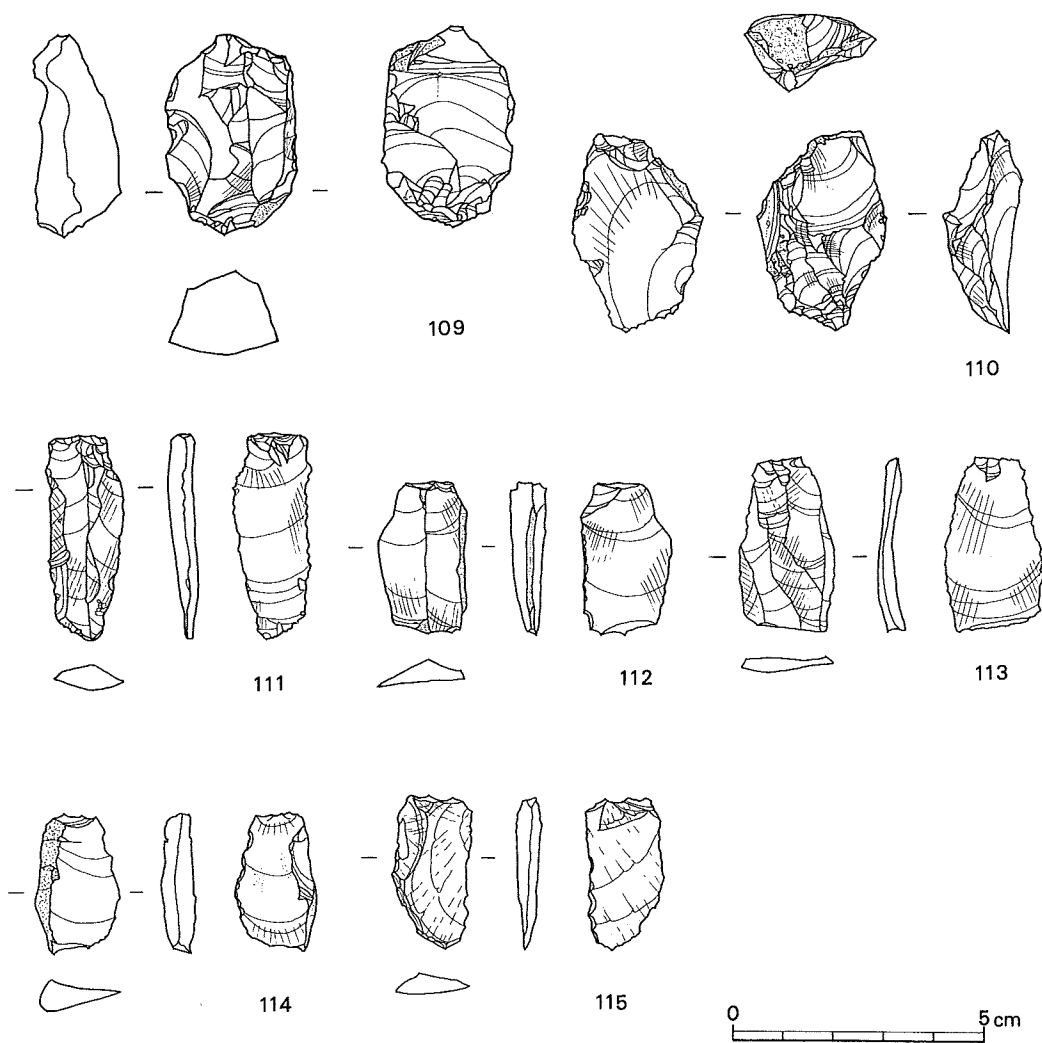


Fig. 39 縄文時代の石器⑭ (2/3)

める程多いことは、石核の打面として自然面を利用するⅠ類の石核が多いことと無関係ではないと考えられる。

また、削器、使用痕ある剥片に利用された素材剥片の打面は、自然面のもの7点、調整打面のもの5点、平坦打面のもの4点、線状打面のもの2点で、自然面の打面をもつ素材剥片を利用したものが若干多い程度である。

石材は、黒曜石A製381点(111～113)、黒曜石B製20点、黒曜石C製28点(114)、その他の黒曜石製54点、安山岩製18点(115)である。

原石(PL. 30) 図示していないが、拳大よりも小さい黒曜石の角礫が7点(黒曜石Aが6点、黒曜石Cが1点)出土している。

これらの原石は、断口観察から良質でガラス光沢に富み、不純物を含まないものである。

### ③ まとめ

出土遺物を概観して見たが、石器の利用石材、石器組成、時期および土器についてまとめてみたい。

利用石材について 黒曜石は、断口の色調、特徴によって3種類に分けられ、該当しないものを含めてその他の黒曜石として分類した。

黒曜石Aは、漆黒色、黒色を呈し、ガラス光沢に富み、良質である。黒曜石Bは、灰青色、灰緑色を呈し、パテナーが顕著である。黒曜石Cは、灰白色、灰色を呈し、ガラス光沢に富む。

その他の黒曜石は、黒色を呈し、ガラス光沢に富むが、不純物を多く含有している。この石材では、含有物のため縦長剥片剥離作業は困難で、原石も小形のものが多い。また、この特徴を有するもの以外のものも、この分類の中に含めた。

これらの黒曜石の原産地は、黒曜石Aが腰岳産(佐賀県伊万里市)、黒曜石Bが針尾、淀姫・東浜産(佐世保市)、亀岳産(西彼町)、黒曜石Cが針尾産と乳白色の色調をもつ石材で産地不明のもの、その他の黒曜石か星鹿半島(松浦市)、阿蘇産(熊本県)に該当すると考えられる。

坂口館跡出土石器の石材利用について、石器は、総数3,500点程の出土を数える。石材の依存度は、黒曜石製3,419点、安山岩製77点、その他の黒曜石B製151点、黒曜石C製161点、その他の黒曜石製213点の出土を数え、黒曜石A製が多く利用されたことが明らかである。

石器の器種上における石材の利用頻度を見ると、石匙、石斧類が安山岩を利用し、その他は黒曜石が主で、中でも黒曜石A製が多く用いられている。また、石核は79点の出土を数えるが、良質の黒曜石A製が48点と多く、その次に小さな円礫で質の悪い原石であるその他の黒曜石製が22点と多いのが特徴である。

出土した剥片の長さが3cm以下のものが大部分であることは、石器の素材である剥片が約3cm以上の縦長剥片よりも小さくて、不定形な形状を呈す剥片を多量に生産していることが出土数から明らかであるが、その素材である剥片を石器として利用された痕跡は余り多くないよう

である。

石器について 先土器時代、縄文時代早期～晩期の遺物が出土しているが、石器の器種上からは、縄文早期に特有な石鏃、石匙、異形石器と縄文晩期の打製・磨製石斧、石鏃、石核、その他の器種等大きく二つの時期の所産の石器が出土している。

石器類は、出土遺物の大部分が剥片、碎片で94%を占め、主要器種の割合は6%である。

主要器種別の割合は、石核40%、石鏃35%、削器等25%で、石核の数量が多いことが大きな特徴であろう。(Fig. 37 参照)

また、生活用具および工具類である石皿、敲石、磨石等の石器類の出土を見ないし、扁平打製石斧等の出土数も、周辺遺跡に比して少ないようだ。

先土器時代のナイフ形石器を主体とする石器群の終末期の所産と考えられる三稜尖頭器が出土しているが、包含層も無く、混入したものと考えられる。また、縄文時代前期の土器片も若干出土しているが、それに伴う明確な石器類については不明である。

石器類の出土地区も第1区(2,108点)、第2区(1,323点)、第3区(68点)、第4区(1点)にまたがるが、特に第1区、2区に集中して出土し、土器類の出土状況も同様な傾向が窺える。

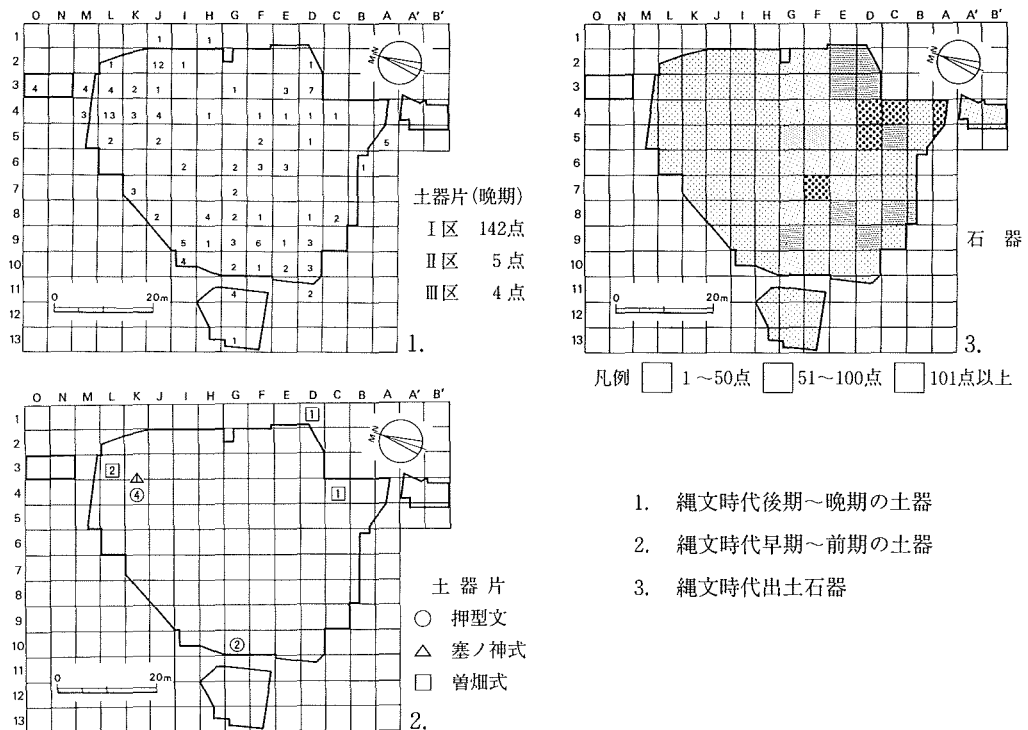
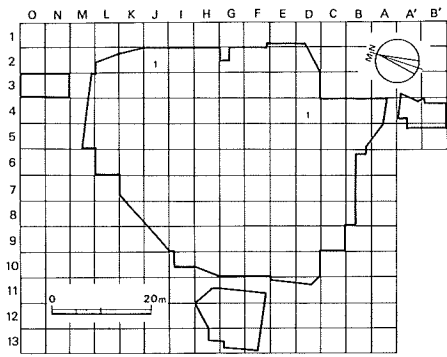
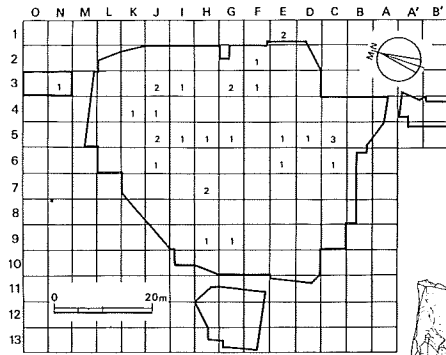


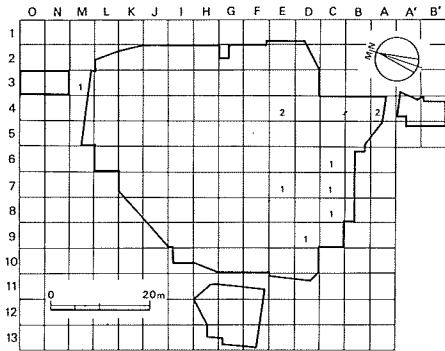
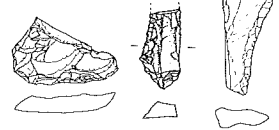
Fig. 40 調査区別遺物出土状況



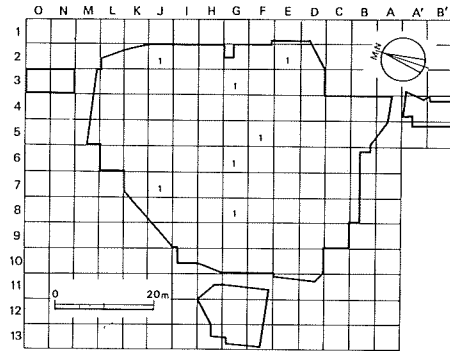
石鏃Ⅰ類 (2点)



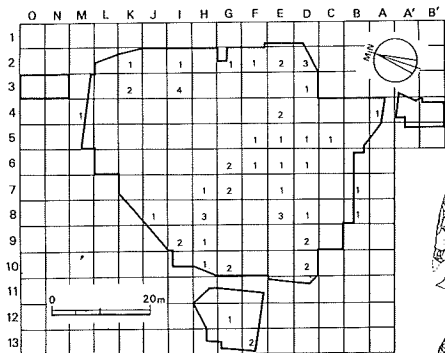
石器 (29点)



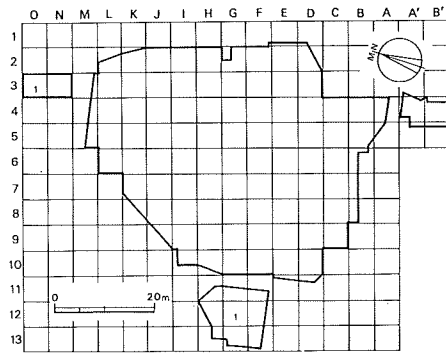
石鏃Ⅱ類 (11点)



石匙 (7点)



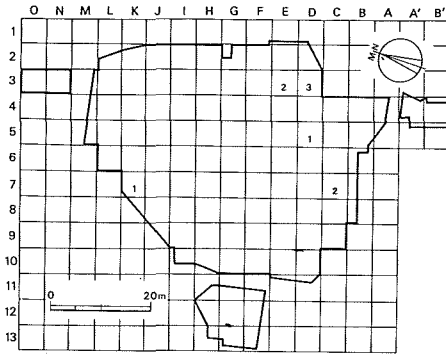
石鏃Ⅲ類 (57点)



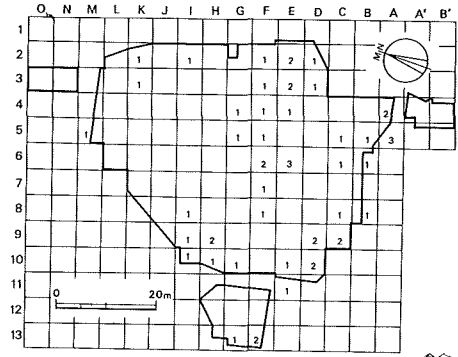
加工痕ある石器 (2点)

Fig. 41 調査区別・器種別石器出土状況①

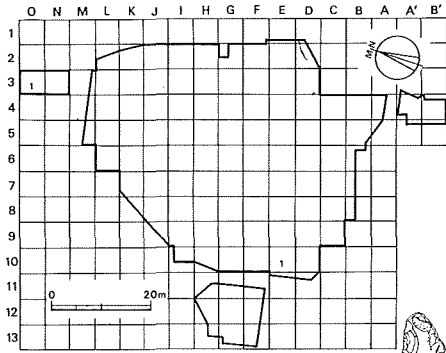
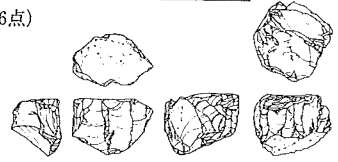
坂口館跡



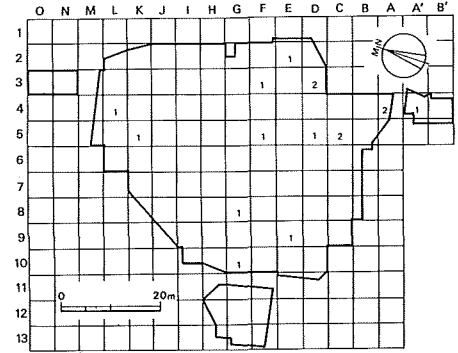
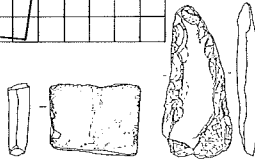
使用痕ある剥片 (9点)



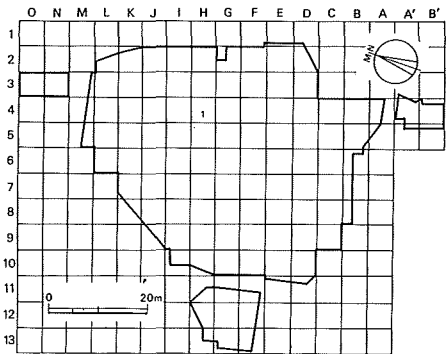
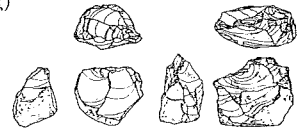
石核 I 類 (56点)



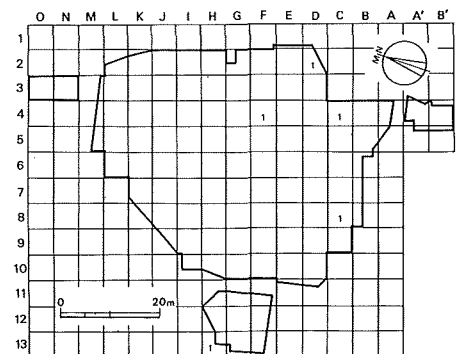
石斧 (2点)



石核 II 類 (17点)



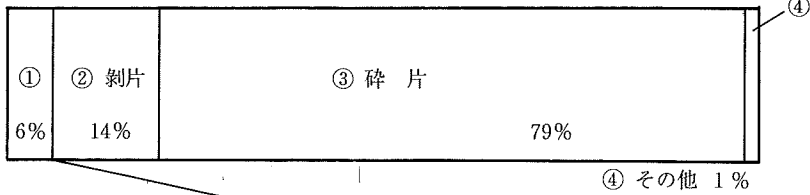
異形石器 (1点)



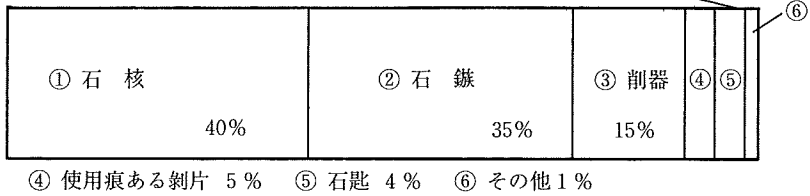
石核 III 類 (6点)

Fig. 42 調査区別・器種別石器出土状況②

○ 器種別の割合



○ 主要石器別の割合



○ 石材別の利用別

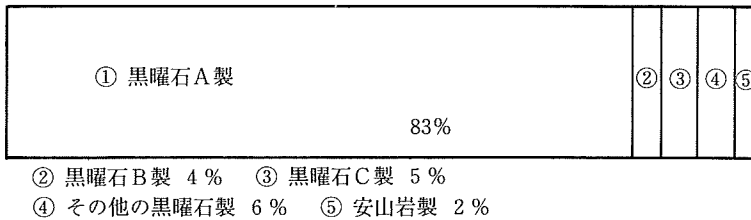


Fig. 43 出土石器の器種別・石材別割合

Tab. 2 出土土器の地区別・時期別一覧表

時期 調査区	縄文 早期		縄文 前期	縄 文 後期～晩期			計	
	押 型 文	塞 ノ 袖 式	曾 畑 式	深 鉢 形	浅 鉢			そ の 他
					精製	粗製		
第 1 区	6	1	4	99	24	18	1	152
第 2 区				1	4			5
第 3 区								4
第 4 区								0
合 計	6	1	4	100	28	18	1	162



Tab. 3 出土石器の石材別・地区別一覧表

層位	器種 石材	三稜光頭器	石 鏃	石 匙	加工痕ある石器	削器・搔器	使用痕ある剥片	石 斧	異形石器	石 核	剥 片	石核再生剥片	碎 片	原 石			計	
第 I 区	黒曜石 A	1	41		1	17	6			45	202	3	1,401	6			1,723	
	黒曜石 B		8	1		1			1	3	14		65				93	
	黒曜石 C		10			3				2	19		66				100	
	黒曜石他		4				1			21	28	1	74				129	
	安山岩		4	6		6		1			11		32				60	
	チャート					1												1
	水晶													2				2
	小計	1	67	7	1	28	7	1	1	71	274	4	1,640	6				2,108
第 II 区	黒曜石 A		2				2			3	166		950				1,123	
	黒曜石 B										6		49				55	
	黒曜石 C		1		1						9		46				57	
	黒曜石他									1	23		48				72	
	安山岩										7		8				15	
	チャート												1					1
	小計		3		1		2			4	211		1,102					1,323
第 III 区	黒曜石 A					1					13		34				48	
	黒曜石 B									2			1				3	
	黒曜石 C									2			1				3	
	黒曜石他										3		9				12	
	安山岩							1					1				2	
	小計					1		1		4	16		46				68	
第 IV 区	黒曜石 A																	
	黒曜石 B																	
	黒曜石 C													1			1	
	黒曜石他																	
	小計																1	
合計		1	70	7	2	29	9	2	1	79	501	4	2,788	7			3,500	

出土土器について 縄文時代早期～晩期（中期を除いて）の時期の土器が出土しているが、土器の大半は縄文晩期の土器である。（Tab. 2 参照）

縄文晩期の土器は、粗製の深鉢形土器が100点、浅鉢形土器の精製のもの28点、粗製のもの18点、その他1点の152点を数える。浅鉢は、玉縁状の口縁を有し、口縁はわずかに外反し、ヘラ削りによる沈線状の段をもち、短かめの頸部から胴部にかけて湾曲するもので、黒色研磨された精製の土器である。深鉢は、口縁がわずかに外反し、内外面に条痕文を施すもの。椀形は、玉縁状の口縁は直立するもので、研磨された精製品である。

これらの土器の特徴から、礫石原式土器の範疇に含まれるものと考えられる。縄文時代晩期前葉～中葉末頃に比定されよう。

当該遺跡は、河川により形成された沖積地で、河川の蛇行、氾濫等によって縄文時代の包含層の大部分を流出および後世の館跡の建設等によって破壊されているが、石器類の出土状況から、この遺跡の周辺に縄文時代晩期の居住地域に存在している可能性が考えられ、今後の周辺地域の調査により明らかにされるのを待ちたい。

（副島）

#### 参考文献

- ・橋口達也外『石崎曲り田遺跡Ⅲ』今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第11集 福岡県教育委員会 1985
- ・副島和明外『百花台広域公園建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書』長崎県文化財調査報告書第92集 長崎県教育委員会 1988
- ・宮崎貴夫・伴耕一郎「長崎県埋蔵文化財調査集報Ⅲ」長崎県文化財調査報告書 第97集 長崎県教育委員会 1990
- ・町田利幸・浦田和彦「礫石原遺跡」島原市文化財調査報告書第4集 島原市教育委員会 1988
- ・古田正隆「礫石原遺跡」—縄文晩期農耕生産文化の姿相—百人委員会文化財報告第7集 百人委員会 1977
- ・安楽 勉・藤田和裕『朝日山遺跡』小浜町文化財調査報告書 第1集 長崎県小浜町教育委員会 1981
- ・古田正隆「筏遺跡」—縄文後晩期の埋葬遺跡— 百人委員会文化財報告第4集 百人委員会 1974
- ・古田正隆「重要遺跡の発見から崩壊までの記録」—縄文晩期原山埋葬遺跡— 百人委員会文化財報告第3集 百人委員会 1974
- ・古田正隆「山の寺梶木遺跡」長崎県南高来郡深江町山の寺梶木遺跡の報告 百人委員会 1973
- ・高野晋司外「弘法原遺跡」吾妻町の文化財7 長崎県吾妻町教育委員会 1983
- ・古田正隆「小原下遺跡報告」長崎県立国見高等学校 1967

坂口館跡

- ・正林 護「長崎県埋蔵文化財調査集報 Ⅲ」長崎県文化財調査報告書 第50集 長崎県教育委員会  
1980
- ・副島和明外「諫早中核工業団地造成に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書 Ⅱ」長崎県教育委員会  
1985
- ・副島和明外「諫早中核工業団地造成に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書 Ⅲ」長崎県教育委員会  
1986
- ・稲富裕和「黒丸遺跡調査報告書」大村市・黒丸遺跡調査会 1980

## 2. 弥生～古墳時代の遺物

弥生～古墳時代の遺物は、164点が抽出された。他の時期に比較すると、最も少ない点数で、それだけ生活に利用された頻度が少なかったことを表わしているように思われる。

### ① 土器 (Fig. 45)

弥生土器と土師器、および須恵器が162点出土している (Fig. 38)。この出土分布を観ると、E10区の古墳時代の石棺墓とは、関連性がないような状況を示している。当期には墓域として利用されることが多く、居住域とは離れていたためであろうか。

ここに図示したのは、4点の資料である。

#### 弥生土器 (1)

1は、器台の底部片と思われる。ゆるやかに外湾する裾部で、外方は平坦に面取りされている。内外面とも縦位にハケを施し、下半部はヨコナデ調整されている。浅黄橙色の色調で、石英砂を含むが、焼成は良好である。第3区から出土している。弥生時代末頃から古墳時代初頭頃の長方形透しをもつ器台と考えられる。第3区からは他にも、同様の資料が数点出土している (PL)。

#### 土師器 (2)

2は、高杯の脚部片である。杯部と裾部を欠失する筒部である。外面と裾内面はナデによって仕上げられ、杯内面と筒上端には指オサエ痕が残る。赤っぽい浅黄橙色を呈し、石英砂と角閃石を含んでいる。焼成は良好である。中実の高杯であるので、古墳時代初頭期の資料と考えられる。

#### 須恵器 (3・4)

須恵器は63点あるが、形状が復原可能な2点を図化した。3は、天井部が丸味をもつと思われる杯蓋で、口径12.6cmを測る。外面から内面にかけて回転ナデ調整され、天井部内面付近は静止ナデが施されている。灰色を呈し、石英砂を含む。焼成は良好である。G5区から出土した。4は、立ち上がりが小さく内傾する杯身片である。復原口径は、10.5cmの割合小形の品で、

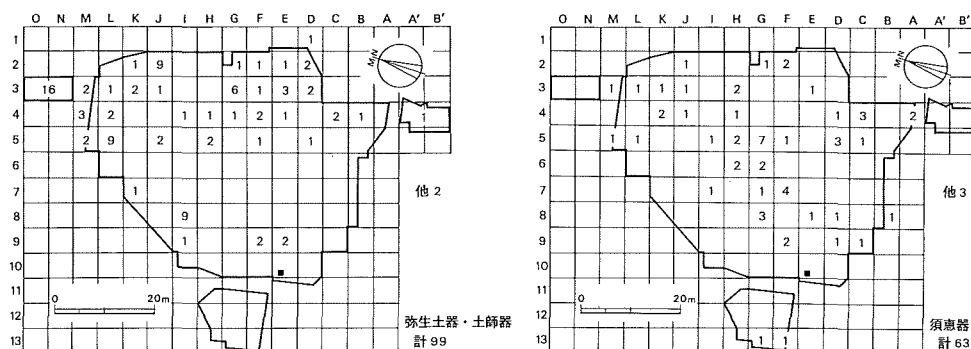


Fig. 44 弥生～古墳時代の土器出土分布状況

蓋受部径は、13.2cmを測る。調整は、全体に回転ナデにて仕上げされる。灰色の色調で、胎土に細かい石英砂を含み、普通の焼成である。D 8 区から出土している。

両者は、いずれも小田富士雄<sup>註1</sup>氏編年のIV期に相当し、6世紀末～7世紀初頭頃の資料であろう。

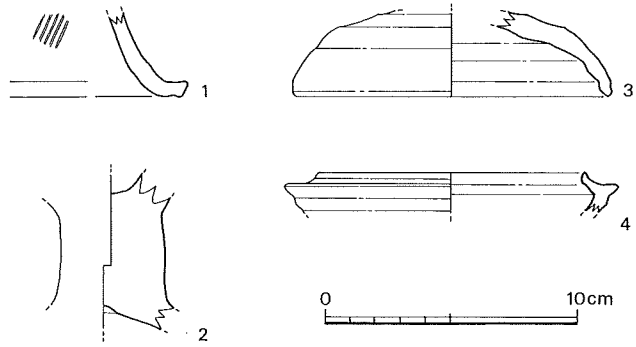


Fig. 45 弥生～古墳時代の土器 (1/3)

② 石錘 (Fig. 46)

滑石製の石錘が、J 2 区ピット68から出土している。全体を円柱状に整形し、両端と中央に紐つけの溝がめぐる形態の石錘であるが、端部の一方が欠損している。また、端の溝より5mmほど内側に、相方1箇所ずつ刻目が施こされている。残存する長さは8.0cm、径は楕円形であるため1.7×1.9cm、重さは41.4gを測る。

③ ガラス小玉 (Fig. 47)

箱式石棺墓の覆土を水洗選別して発見されたガラス小玉であり、この石棺に関係した唯一の資料である。小形の部類で、径2mm×3mm、厚さ2mm、孔径1mmを測る。薄い赤紫色の色調を呈している。

(宮崎)

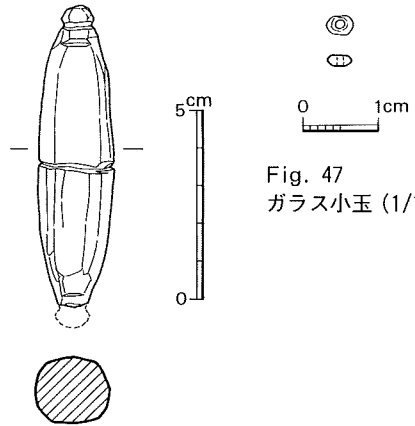


Fig. 46 石錘 (1/2)

Fig. 47  
ガラス小玉 (1/1)

註1 小田富士雄氏『八女古窯跡群調査報告I～IV』八女市教育委員会 1962～1972

### 3. 中世の土器・陶磁器 (Fig. 47～57)

中世～現代に至る遺物が最も多く、21,000点余出土している。これは、遺跡の主体がこの時代にあり、中世以降に屋敷地として盛んに利用されていたことを示していると思われる。また、近代に萱瀬窯が開かれ、そこで廃棄された製品類の破片が多量にあったことも遺物量が増える原因となっている。中・近世の遺物のなかでは、土器・陶磁器類が圧倒的な量で、その他石製品、土製品、ガラス製品、金属製品などが若干出土している。ここでは、まず中世の土器・陶磁器をとりあげる。

中世の土器・陶磁器として抽出したものは、810点ある。その内、輸入陶磁器は586点、国産土器・陶器は224点である。

#### ① 輸入陶磁器 (Fig. 48～52)

輸入陶磁器には、中国製品578点と朝鮮製品8点があり、圧倒的に中国産の資料が多い。中国製品と朝鮮製品に分けて記述する。

##### A. 中国製輸入陶磁器

中国製品には、青磁、白磁、青白磁、明染付、赤絵、陶器類等がある。

##### 青磁 (Fig. 48)

青磁は194点あり、全て中国製品である。13点を図示したが、同安窯系(1・2・13)と龍泉窯系(3～12)に分けられる。

1は、同安窯系の椀で、森田勉・横田賢次郎氏分類<sup>註1</sup>(以下、森田・横田分類とする)のI-1b類である。分厚いつくりの底部片で、高台内は兜巾状に削り出している。体下端には、飛鉋状の削り痕が残る。体部には細かい櫛目を施す。見込と体部との境には段を有する。内面から外上端にかけて、淡灰緑色のガラス質釉が薄くかかり、貫入がはいっている。第1区出土。2は、森田・横田分類の皿I-1b類である。灰緑色のガラス質釉がかかるが、底部までは及んでいない。見込には、櫛によるジグザグ文様を施している。D2区のピット出土。無文の皿で、底部が広めの形状をもつところから、同安窯系と考えた。青緑色のガラス質釉が薄くかかるが、底部まで及んでいない。復原口径は9.5cmの小形品である。E11区出土。

3～10は、龍泉窯系の椀である。3は、内面にヘラによる片彫りと櫛状の文様をもつもので、森田・横田分類のI-3類に近いものであろう。灰緑色の釉が薄くかかり、内面と外面上端にかけて細かい貫入がはいっている。I2区出土。4は、森田・横田分類のI-2a類で、内面に蓮華文を片彫りしている。薄いオリーブ色(利休色)のガラス質釉がかかり、光沢をもつ。F6区出土。5～8は、外面に鎬蓮弁文を有する。森田・横田分類のI-5b類である。5・7・8はくすんだ黄緑色、6は淡灰緑色のガラス質釉がかかり、いずれも光沢をもつ。美しいつくりである。7・8は細かい気泡を多く含み、5は細かい貫入が著しくはいっている。5は第1区、6はK3区、7はH10区ピット13、8はJ3区ピット63出土。9は、中央に「玉」の字をもつ印花弁を見込に型押しした。分厚いつくりの底部である。明るい灰緑色のガラス質釉が高台畳付ま

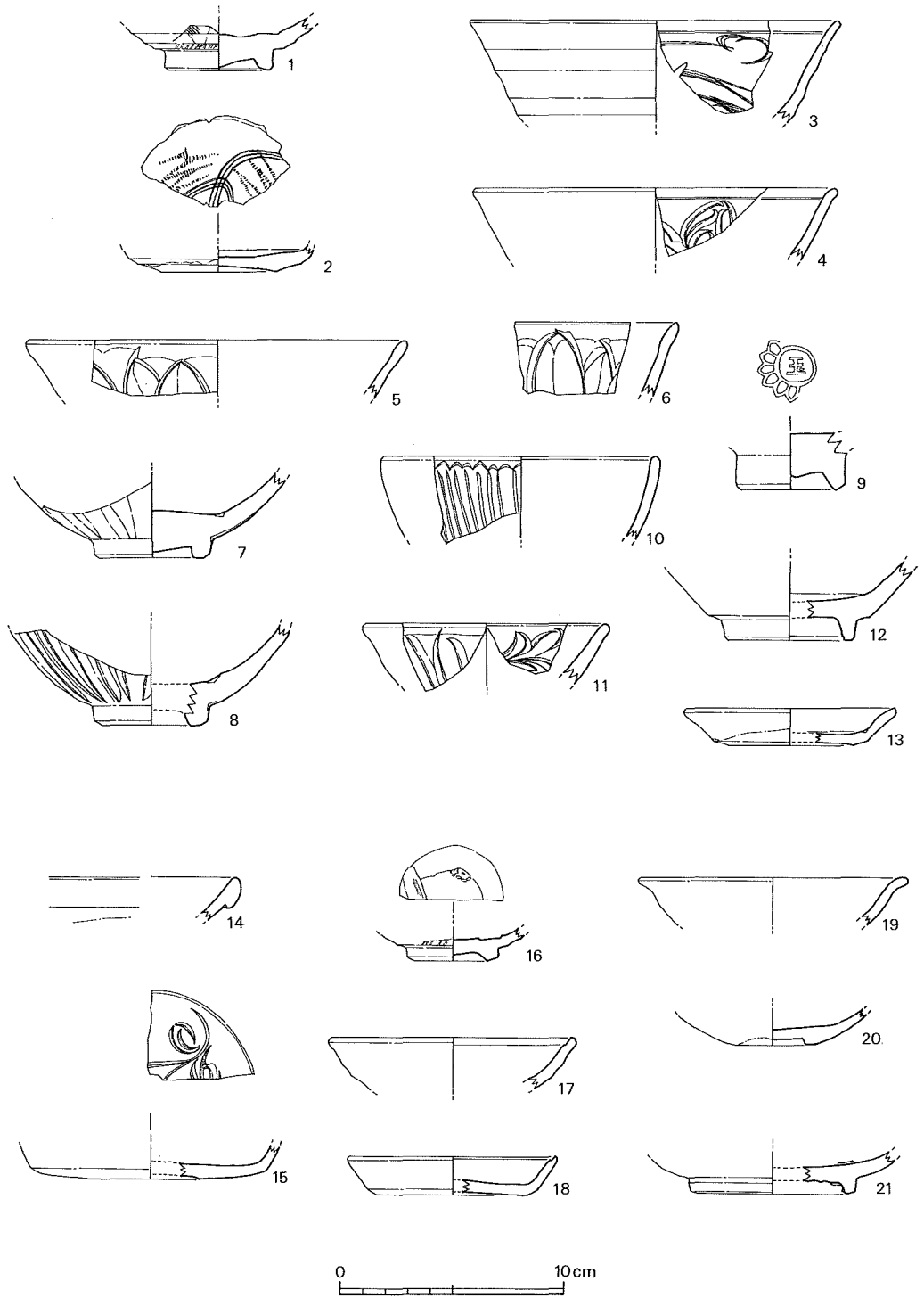


Fig. 48 輸入陶磁器① (1/3)

でかかり、高台内は輪状に釉がかき取られている。上田秀夫氏分類<sup>註2</sup>の椀E類であろう。C13区から出土。10は、細蓮弁文椀で、蓮弁が筒略化した亀井明德氏分類<sup>註3</sup>のB2類である。やや灰味をもつ緑色のガラス質釉が割と厚くかかる。G3区から出土。

11・12は、杯破片である。11は、体部が皿形で高台が付く杯である。外面には片彫りの蓮弁がはいり、内面には草花文を施している。形式的には、森田・横田分類の杯Ⅲ—5類であるが、時期的には15世紀代に下るものと考えられる。D3区出土。12は、体下位が「く」字状に屈曲し、ほぼ直線的に立ち上がる杯である。高台畳付の他は明るい緑色のガラス質釉がかかり、釉面には亀甲状の細かい貫入がはいる。器肉は、浅黄橙色を呈する。E4・7、F9区から出土している。森田・横田分類の杯Ⅲ—1a類であろう。

以上の青磁は、同安窯系の1・2・13と龍泉窯系の劃花文椀である3・4が12世紀後半～13世紀前半代、5～8の鎗手蓮弁文椀と12の杯が13世紀後半～14世紀前半代、9・10・11の椀・杯は15世紀後半～16世紀前半代に位置づけられる資料と考えられる。

#### 白磁 (Fig. 48, 49)

白磁は、116点出土している。そのうち10点を図示した。

14は、玉縁をもつ椀口縁部片である。ややにごったガラス質の釉が体上端までかかり、灰白色を呈する。F5区ピット1出土。森田・横田分類のⅣ類で、不透明の黄白色釉がかかる同様の製品がH5区の土壌SK1と、J2区から出土している。福建・広東系統のものであろうか。

他のものは、皿である。15は、内底見込に草花文様を彫るもので、施釉後に削りとられた底

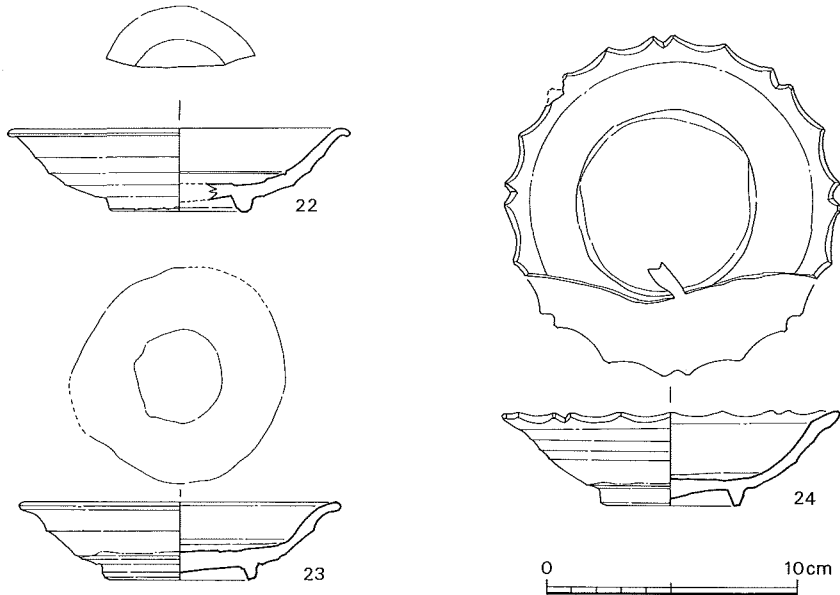


Fig. 49 輸入陶磁器② (1/3)



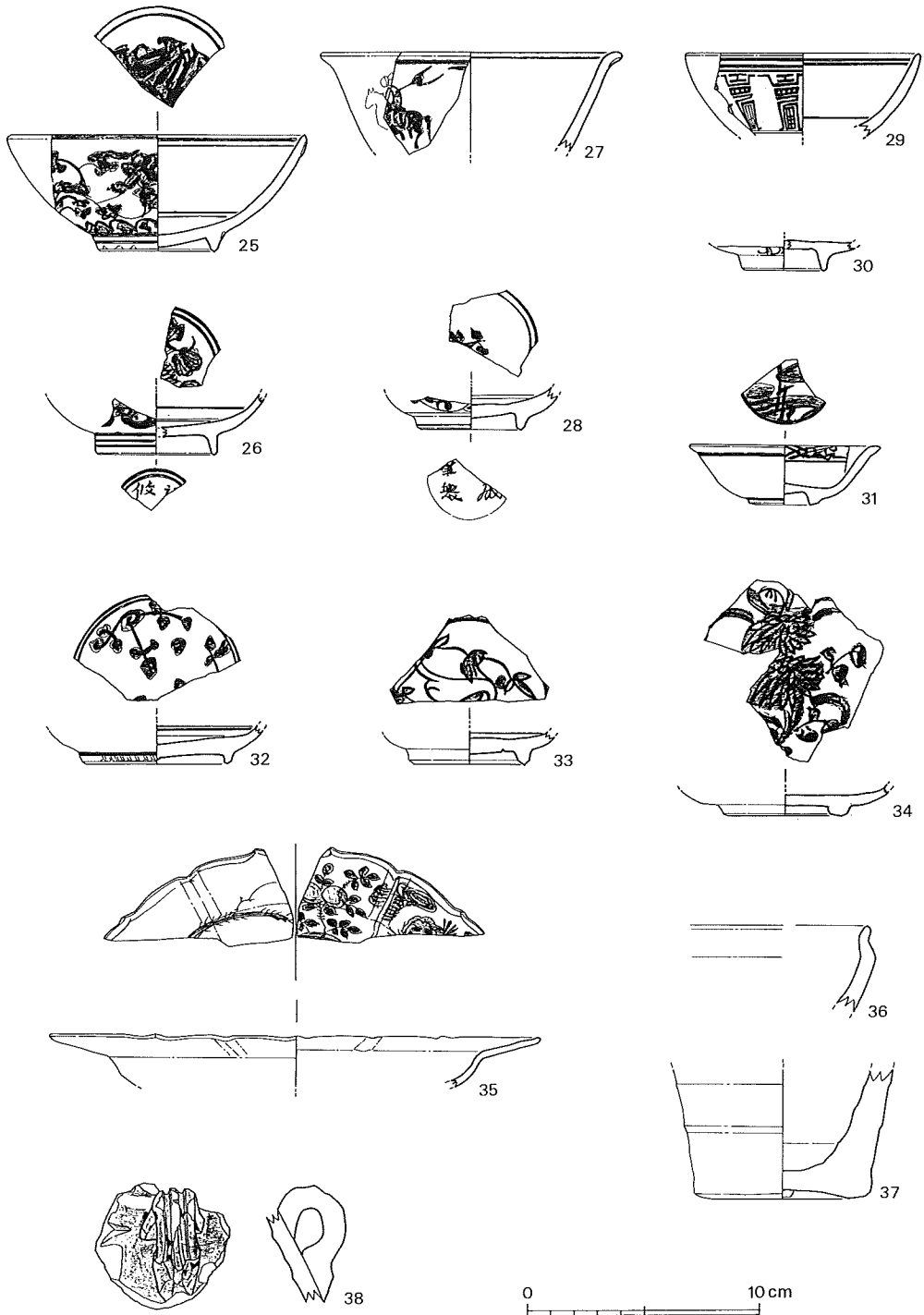


Fig. 50 輸入陶磁器③ (1/3)

部以外は、ガラス質釉がかかり灰白色を呈する。森田・横田分類のⅧ—1類であろう。16は、見込を輪状にかき取る高台付皿で、体部が内湾しながら口縁部にのびる浅い皿状をなすものであろう。灰白色のガラス質釉は、体下半から高台にまで及んでいない。小野正敏氏分類（以下、小野分類とする）の皿B群であろう。G 2区から出土。17・18は口秀げの皿である。両者ともやや青緑色を帯びた白濁釉がかかるが、18は底部まで施釉されている。森田・横田分類のⅨ類である。17はE 3区、18はK 3区から出土。19は、端反りの高台付皿の口縁部片である。淡灰色のガラス質釉が割と厚くかかり、貫入が認められる。森田勉氏分類（以下、森田分類とする）の皿E—2類である。J 8区ピット111から出土。20は、碁笥底皿で森田分類のE—3類である。青みがかった白濁釉が体下端付近まで及ぶが、高台内にもかかっている。D 7区から出土。

22～24は、S K 1から出土した土壙一括品で、いずれも端反りの高台付皿である。22は半欠品で、青みがかった白濁釉が高台の畳付を除いてかかり、見込みは輪状にかき取ってある。釉面は光沢をもち、貫入が著しい。口唇はややたれ気味だが、青白磁風の釉色の美しい品である。23・24は、浅黄橙色のややザングリした胎土をもち、体下端から高台を除いて淡黄色の不透明な釉がかかるものである。釉面は貫入がはいり、見込を23は輪状、24は丸くかき取っている。両者の違いは、口唇を24が綾花にしている所に見ることができるが、口縁を「く」字状に外反する特徴など非常に類似した品である。胎土からみると、福建・広東系の製品であろうか。

以上図示した白磁では、14の玉縁椀が最も初源的な資料で11世紀後半から12世紀前半代のものである。15の見込に劃花文をもつ皿は12世紀後半～13世紀前半代、17・18の口秀げ皿が13世紀後半～14世紀前半代、16の体部が内湾する高台皿は14世紀後半～15世紀代、20の碁笥底皿と19の高台付端反り皿は15世紀後半～16世紀前半代、22～24は16世紀後半代に位置づけられる資料であろう。S K 1出土の22～24は、一括品として注目される。

### 青白磁

青白磁は7点しか出土しておらず、数が少ない。小片であるために図化していない。器種別にみると、椀3点、壺・瓶3点、皿1点の内訳となり、壺や瓶の把手となるもの、碁笥底の皿もある。年代的には、15～16世紀代に包括されるものであろうか。

### 染付 (Fig. 50)

明染付は、220点出土している。そのうち11点を図化した（25～35）。

25～28・33は椀である。25は胴部に唐草文、腰部に蓮弁文帯を配した蓮子椀である。見込には花卉状の文様<sup>註5</sup>を施している。細く尖った高台畳付の他には淡青色のガラス質釉が割と厚くかかる。小野氏分類の椀C群である。F 3区出土。26は、体下半～底部にかけての破片で、小さな高台畳付を除いて、やや青味をもつガラス質釉がかかる。外面には不明文様、見込みに折菊文様、高台内に「福攸」の字款を描いている。見込が盛り上がっていないが、小野分類の椀E群の饅頭心椀と同様の構成・質をもっている。G 9区出土。28も、外面に唐草文、見込みに

折菊文、高台内に「□年製」の年款を描き、見込は盛り上がらないが、26と同様の特徴をもっている。青みがかったガラス質釉は、高台畳付以外に割と厚くかかり、細かい気泡を多く含んでいる。27は、端反碗である。外面には人物と馬が描かれている。淡青色のガラス質釉が割に厚くかかり、細かい気泡を多く含む。端反りであるが、人物の文様を描く点で碗Eと同様の段階のものであろう。<sup>註6</sup>D7とF8区で出土している。33は当初、皿と考えていたが、高台径が小さく、腰部の立ちあがり強いところから碗に含めた。ややザクザクしたにぶい橙の胎土で、高台畳付を除くと淡黄色の不透釉がかかる。畳付は丁寧に釉を削り、山形に整えている。見込には草花の唐草文が描いてあるが、染付の発色は黒ずんでいる。形態的には、見込中央がやや盛り上がるところから、小野分類の碗E群に類似するものであろうが、胎土・釉の特徴からみると福建・広東系の製品であろう。

29・30は小碗である。29は外面に福寿文を描くもので、細かい気泡を多く含んだガラス質釉が割と厚くかかる。F9・10、G9区出土。30は、小さな高台の小碗と思われ、見込残存部は平坦面をなしている。体下端に、草花文状の染付を描いている。高台畳付付近を除いて、不透明の白濁釉がかかる。SK2土壙出土。

31は、高台付の端反り小杯である。口縁内面に四方禳文、見込に山水文を描いている。青味を帯びたガラス質は全面にかかり、細かい気泡を多く含む。高台畳付は平坦で、硅砂が付着している。E9区のピット334から出土。

32・34・35は皿である。32は、細く削られた高台畳付から内側が無釉のもので、高台内は放射状に削り根が残っている。釉は淡青色のガラス質釉で、光沢をもつ。折枝文状の文様を描かれている。小野分類の皿B<sub>1</sub>群で、高台付端反り皿であろう。34は、見込に鮮やかな染付の折菊を対に描く皿で、口縁部を欠損しているが、小野分類のB<sub>2</sub>群で高台付の端反り皿になると思われる。青味をもつガラス質釉は、光沢をもつ美しい釉色であるが、高台畳付と高台にはかからない。幅広の高台は、釉を丁寧にかき取り、高台内には放射状の細かい削り痕が残っている。第1区C8と第2区F12出土のものが接合している。35は、薄手づくりの優美な芙蓉手皿破片である。口唇は稜花をなし、口縁から体部にかけて型押しによる浅い溝がはいる。口縁裏面には部分的に布目痕を観察できる。皿の縁から体部にかけて、繊細な線で果樹文などが描かれ、外側には木の枝と思われる文様がみられる。釉は青味をもつガラス質釉で、光沢を有する。G2区出土。

以上の染付は、小野正敏氏の編年観によれば、15世紀後半～17世紀初頭にかけてのものである。25の蓮子碗C群と32の高台付端反り皿B<sub>1</sub>群が15世紀後半～16世紀前半代、26・28の碗と34の皿B<sub>2</sub>群が16世紀後半代、27の端反り碗と35の芙蓉手皿、29の小碗、31の杯が16世紀末～17世紀初頭に位置づけられよう。30の小碗は、釉調が小野分類の白磁皿C群に類似しており15世紀後半～16世紀前半にかけての資料であろう。33の福建・広東系の碗は、16世紀後半のものか。<sup>註7</sup>35の芙蓉手皿は、三杉隆敏氏の分類と年代観によれば、カリフォルニア・ドレイク湾出

土のものに特徴が似ており、「アーリー・タイプ」と名付けられた1600年を下らない資料である。1592年の火災以前にもたらされたものとすれば、SK 1・2土壙出土品と関連づけることができるであろう。

#### 赤絵 (PL. 34 右下)

小片であるために図化していないが、D 2区から1点だけ出土している。型押し成形による菊皿で、くすんだ赤色と緑色で圏線と草花文を描いている。胎土はくすんだ橙で、灰黄色の不透明釉がかかる。福建・広東系の製品で、16世紀後半代のものであろう。

#### 天目・輸入陶器 (Fig. 50)

中国製の陶器と天目磁は、40点出土している。3点を図示した。36は、暗赤褐色の釉が厚くかかる天目茶椀である。胎土は淡灰色で、堅く焼かれている。F 13区から出土。37は、褐釉陶器の底部片である。黒褐色釉が内面から底部端までかかり、胎土は褐色砂を含み茶色に近いぶい橙色を呈する。I・J 3区のピット62から出土。38は、三彩壺の耳付近の破片である。細かい白色砂を含む浅黄橙色の胎土で、緑釉と部分的に黄色釉がかかる。さらに金泥が部分的に残っており、かなり華美な品であったことが想像される。F 2から出土している。

以上の陶器類のなかで注目されるのは、38の三彩壺である。これと同一個体あるいは同一系統の品と思われる三彩片が10点出土しており、なかには葉文を貼り付けたものもある。これは、亀井明德氏が明代華南彩釉をとりあげて論じた<sup>註8</sup>論考によると、三彩貼花牡丹文四耳壺であり、奈良市興福寺一乗院跡から同様の資料が出土していることを指摘されている。また、出土状況から17世紀中葉以前で、16世紀までに遡る製作年代であるとされている。坂口館跡の場合には、土壙SK 2から3点出土しており、本土壙が1592年の火災にともなうものとすれば、16世紀後半代の年代が与えられ、器種構成を考えるうえで注目される資料であろう。

#### B. 朝鮮製陶磁器 (Fig. 48—21)

朝鮮産の製品として抽出できたのは8点で、中国製品に比較して量が少ないのが特徴である。<sup>註9</sup>図示したのは、粉青沙器椀の底部片である。淡黄色の割と焼きしまった胎土で、器表は白化粧され、細かい貫入のはいるガラス質釉が薄くかかる。見込に砂目跡と高台部に砂が付着する。高台内は成形時のうず巻状の段がはいる。B 8区出土。

朝鮮産の8点を器種別に分けると、白磁椀1点、同皿2点、粉青沙器椀1点、同瓶4点の内訳となる。これらのなかで、粉青沙器瓶は、印花象嵌文様をもつもので、15世紀代に位置づけられる。他も李朝時代の資料と考えられる。

#### ② 国産土器・陶器 (Fig. 51・48)

国産土器・陶器は、224点出土し、土師質土器、瓦質土器、須恵器系およびその他の陶器類がある。

#### 土師質土器 (Fig. 51)

土師質は160点出土し、国産品のなかでも最も多く、そのほとんどは杯と小皿によって占め

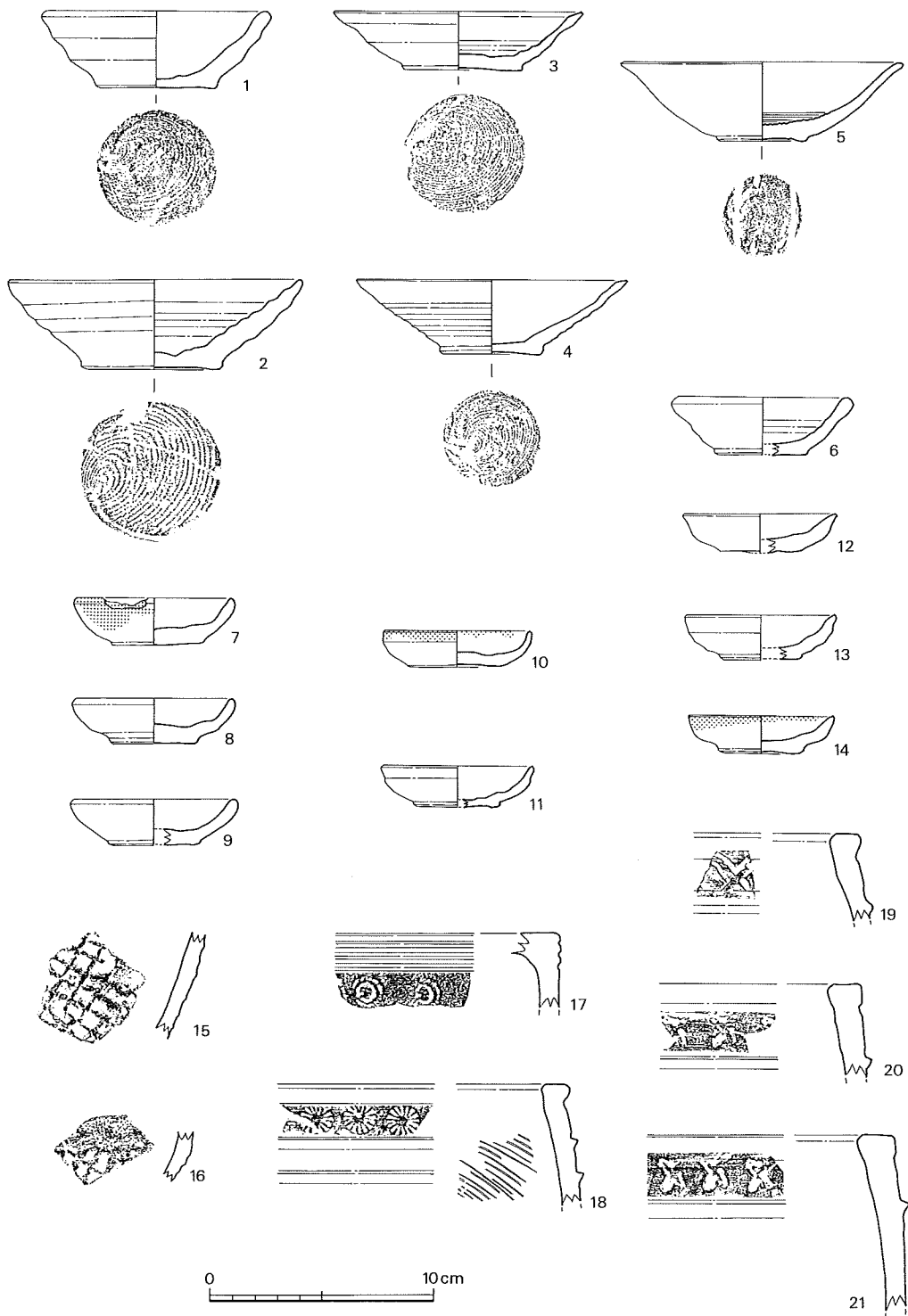


Fig. 51 国産土器・陶器① (1/3)

られ、若干鉢等の製品が認められる。ここでは、杯5点、小皿9点を図示した。

1～5は、平底の底部から体部が直線的に開く形態の杯で、いずれもロクロ回転による糸切底の資料である。形態的にみると、分厚いつくりで口縁端部を丸くおさめるⅠ類（1）、口縁端部を尖り気味におさめるⅡ類（2～4）、体部が丸みを持ち口縁が小さく外湾するⅢ類（5）に分けられる。Ⅱ類については、厚手つくりのⅡ1類（2）と薄手つくりで口縁端部を摘み気味に鋭くおさめるⅡ2類（3・4）に細分できる。

1は、他に比較しやや身が深く、開きも小さい品で、浅黄橙色を呈し、細かい石英砂を若干含み、焼成はやや甘い。分厚いつくりの割に手にもっと軽い感がある。口径10.1cm、器高3.4cm、底径5.3cmを測る。E2区出土。

2は、全体に分厚く重厚なつくりで、水引によって体部に凹凸をもっている。赤みの強い橙色の色調で、石英砂と赤色砂を含み、普通の焼成である。口径13.2cm、器高4cm、底径6.3cmを測る。3と4は、口縁端部を外方に摘みだして鋭く仕上げたもので、内面の口縁と体部境界付近には淡い段がつく。両者ともに薄手つくりで、見込は静止時のナデを施している。また4は、体中位に調整具による幅狭の凹凸が認められる。両者ともに、茶色っぽい橙色の色調で、石英と赤色砂を含み、焼成は良好である。器の大きさは、3が口径11.1～11.7cm、器高2.6cm、底径5.3cm、4が口径12cm、器高3.3cm、底径4.6cmを測る。3はG10区出土。4はJ9区から出土した。

5は、薄手つくりで軽い器である。器表にはハケ状の調整痕が残り、見込付近には細い調整具によるうず巻状の溝がめぐる。白みの強い黄白色を呈し、精良な胎土には極小の金雲母を含む。焼成は甘く、ナマ焼のようなつくりである。また、底には板状圧痕が認められる。大きさは、口径12.6cm、器高3.5cm、底径4cmを測る。J9区出土。

6～14は、小皿である。形態的特徴から4者に大別される。Ⅰ類は、身がやや深めの小皿で、形態的に杯Ⅰ類と相似な形状をもつもの（6）である。Ⅱ類は、やや分厚いつくりで、体部が内湾して口縁に至り口唇を丸くおさめるもの（7～9）である。Ⅲ類は、薄手つくりで、内湾気味にのびる体中位から屈曲し立ち上がるもので、底部と体部との境に段をもつものⅢ1類（11）と平底のものⅢ2類（10）に細分できる。Ⅳ類は、やや分厚いつくりで、内湾気味に立ち上がる体中位から「く」字状に屈曲し、口縁端部を摘み気味に鋭く仕上げるものである（12～14）。

6は、深めの小皿で、口唇が丸くふくらみをもつⅠ類である。浅黄橙色の色調で、赤色・桃色の砂粒を含み、普通の焼成である。口径8cm、器高2.6cm、底径4.1cmを測る。分厚い割に軽く、形態的にも杯Ⅰ類の1に類似している。D7区ピット250出土。

7～9は、Ⅱ類としたものである。7は、灯明皿として使用されたようで、口縁に油煙が附着している。口縁を2箇所欠失している他は完形であるが、全体に風化を受け器表は粗い。色調は黒色を帯びた褐灰色で、石英・赤色砂を胎土に含む。焼成は普通。大きさは、口径7.2cm、

器高2.1cm, 底径4.1cmを測る。建物S B 1のD 2区ピット5から出土している。8・9は、I・J 8区ピット39から出土したもので、ほぼ同じ形状をなす。橙色の色調をもち、胎土に石英・赤色砂を含み、焼成は良好である。両者とも見込には静止時のナデが施されている。大きさは、8が口径7.3cm, 器高2cm, 底径3.9cm, 9が口径7.4cm, 器高2.1cm, 底径4cmを測る。

10・11はⅢ類である。10は、見込付近がやや盛り上がり有し、口唇付近には油煙が付着する。灯明皿として使用されたのであろう。橙色の色調で、石英・赤色砂を含み、焼成は割と良い。大きさは、口径6.6cm, 器高1.6cm, 底径4.3cmを測る。J 8・9区ピット68(土壙S K 9)出土。11は、10と同様の色調・胎土・焼成である。大きさは、口径6.8cm, 器高1.8cm, 底径3.8cmを測る。H 2区ピット3(S B 3)出土。

12~14はⅣ類である。3者ともに器表は平滑に仕上げられており、14は口唇付近に油煙が付着し、灯明皿として使用されたのであろう。Ⅲ類の細分にならえば、平底の12(Ⅳ2類)と体部と底部の境に段をもつ13・14(Ⅳ1類)とに区分ができる。3者とも、橙色の色調で、胎土に石英と赤味砂を含んでいる。焼成は、12が良好、13・14が普通である。大きさは、12が口径6.9cm, 器高1.7cm, 底径3.5cm, 13が口径6.8cm, 器高2cm, 底径3.6cm, 14が口径6.5cm, 器高1.7cm, 底径3.7cmを測る。12はG 3区ピット3出土。13はD 3区ピット2(S B 2?)出土。14はE 1ピット8出土。

以上の土師質土器については、杯が底径に対して口径が大きく開く形態をもつこと、小皿が内湾気味の体部であるこの等から、室町時代の一群と考えられる。本県ではまだ一括出土の良好な資料が少ないので、年代を細かくつめることが難しいが、諫早市林ノ辻遺跡<sup>註10</sup>2号土壙出土品より後出し、南高来郡北有馬町今福遺跡<sup>註11</sup>での年代観によれば、V期(15世紀後半~16世紀末頃)に包括される資料と推定する。しかし、この細分については、今後の資料の蓄積を待ち改めて検討を行いたいと思う。

#### 瓦質土器 (Fig. 51)

瓦質土器は、50点出土している。器種的には、火舎・風炉類が多く、他に鉢、鍋、椀等があるが、ここでは鍋2点と火舎5点を図化した。

15・16は、外面に格子目タタキを有する鍋体部片である。15は、外面に煤が付着し、内面には細かいハケ調整がなされている。外面はにぶい赤褐色、内面は黒灰色を呈する。胎土に石英砂を含み、焼成は良好である。16は、体部の屈曲部分の破片で、下半のみ格子目タタキが施される。内面は、15同様細かいハケ調整がなされている。外面は灰褐色、内面は灰色を呈する。細かい石英砂を含み、普通の焼成である。15は、土壙S K 2出土。16はH 5区から出土。

17~21は、火舎体上部破片である。隆線間に、17は花卉文、18は菊花文、19~21はX字文をそれぞれ型押ししている。17は、にぶい橙色を呈し、赤色・白色などの砂粒を含み、焼成は良好。F 9出土。18は、黒褐色を呈し、赤色・白色砂の他に金雲母を含み、焼成は良好である。

19は、淡灰色を呈し、白色砂を含み、焼成は良好。H10ピット13出土。20は、褐灰色を呈し、赤色・白色砂と金雲母を含み、焼成は良好である。G 7区出土。21は、20と同一個体の可能性があり、ほぼ同様の色調・胎土・焼成である。F 5区出土。

以上の、瓦質土器は室町時代に包括されるものであろうが、15・16の格子目タタキを有する鍋は豊前・周防型といわれるもので、15は土壙SK 2から出土しているところから16世紀後半代の年代が推測できよう。

#### 陶器 (Fig. 48)

陶器類は、14点あり、須恵器系8点、備前系4点、美濃・瀬戸系2点に分けられる。ここでは4点を図化した。

22は、東播系のこね鉢片である。淡灰色の色調で、口縁外方が暗灰色を呈する。白色と黒色砂を少量含み、普通の焼成である。第1区出土。23は、須恵質播鉢の片口付近の破片で、4条の筋目がはいる。口縁上方は平坦で少し凹む。外面は灰褐色、内面は灰色を呈する。大粒の石英砂を含み、焼成は良好である。G 9区出土。

24と25は、備前系の播鉢である。24は、長めの玉縁口縁で、外方は平坦で3条の淡い条線がめぐる。口縁外方が赤褐色、他は明るい赤褐色を呈する。白色砂を含み、焼成良好で堅く焼きあがっている。25は、底部片で、8条の筋目がはいる。赤橙色を呈し、白色砂を多く含む。焼成は良好である。内面は、長い使用によるものかスベスベしている。

以上の陶器類について、荻野繁春氏の年代観<sup>註12</sup>によると、22の東播系こね鉢がⅥ期の13世紀前葉～中葉、25の備前系播鉢がⅪ期の16世紀後葉～17世紀前葉に位置づけられる。また図示していないが、東播系こね鉢で丸い玉縁の破片もあり、Ⅶ期の13世紀後葉～14世紀前半に位置づけられる資料であろう。

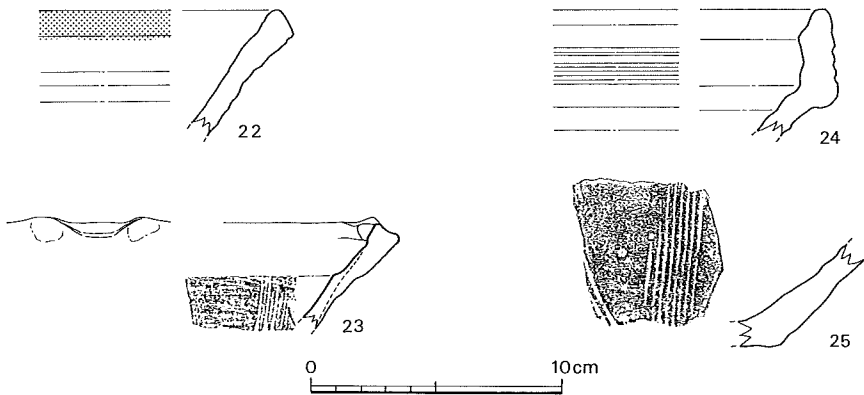


Fig. 52 国産土器・陶器② (1/3)



③ まとめ

中世の土器・陶磁器は、810点出土している。輸入品と国産品に分けてみると、輸入586点(72.3%)、国産224点(27.7%)という割合になり、輸入陶磁器の占める比率の高いことが注目される。これは、当地に居住した人の地位の高さを示唆するデータのようである。本遺跡が大村家の重臣の屋敷であり、後に大村純忠が隠居所として居住したことから密接な関係をもつことが十分に考えられよう。

輸入陶磁器は、586点出土し、中国製品578点(98.6%)、朝鮮製品8点(1.4%)に分けられる。圧倒的に中国製品が多く、この現象は、長崎県本土部では一般に認められる傾向である。これは、中国陶磁の生産量が高かったこと、需用側の趣好などの要因があげられるが、最も主因となるのは、私・密貿易を含めた取引に介在した中国商人の活発な活動を見ることのできるようである。

輸入陶磁器は、11世紀後半～12世紀前半代の白磁を初源として、13～15世紀代の青磁・白磁、16世紀代の染付・白磁のグループを中心とした流れを追うことができる。種類別にみると明染付・赤絵が221点(38.2%)と最も多く、白磁の新しい一群を含めて、16世紀代に本遺跡の主体があったことを示している。

国産品では、土師質土器が最も多く、71.4%(160点)を占める。この土器の大半を占める杯・小皿は、糸切底の資料で、現在細分することはできないが、15世紀後半～16世紀代に包括される年代に主体があるようである。また、瓦質土器も大半はこの段階に包括される資料と考

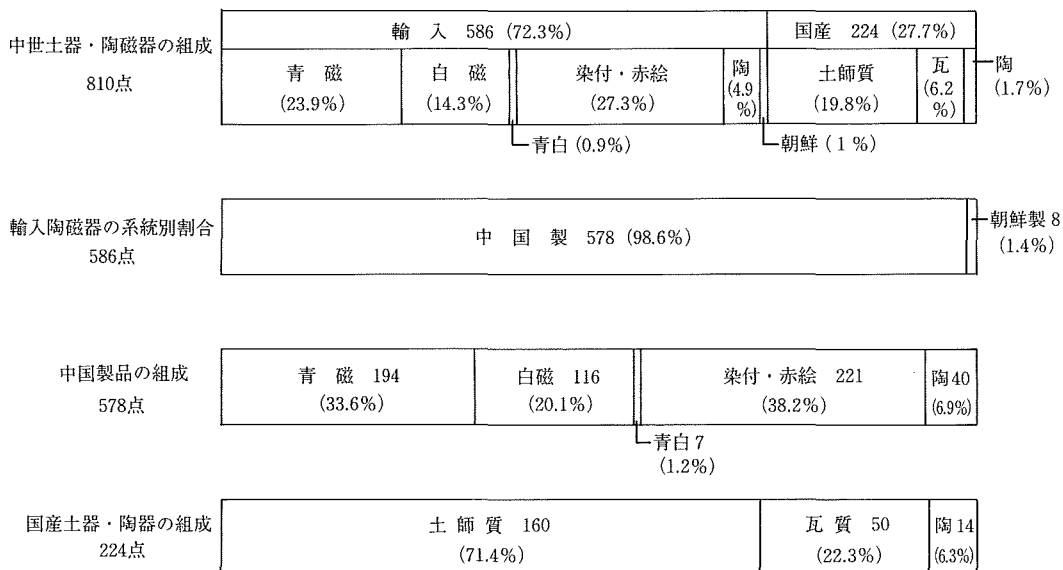
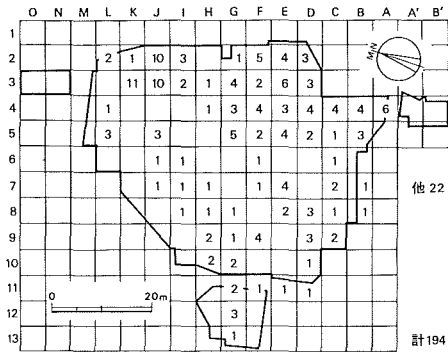
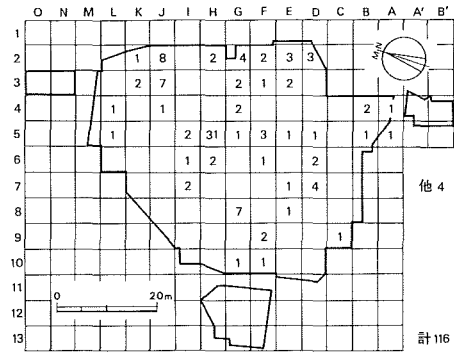


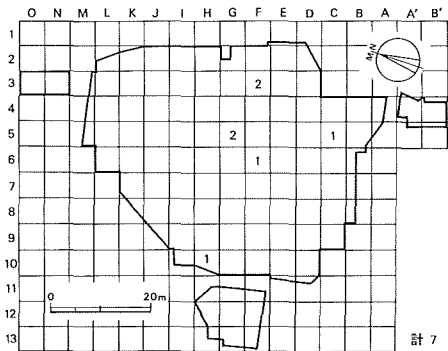
Fig. 53 中世土器・陶磁器組成グラフ



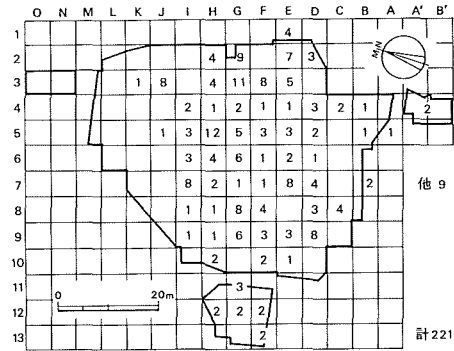
① 青磁



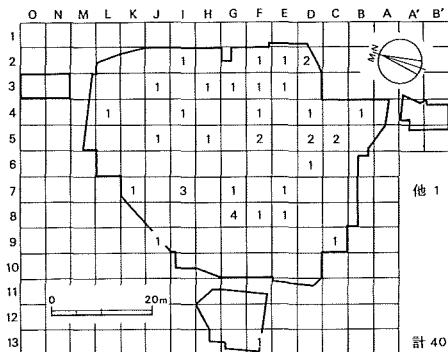
② 白磁



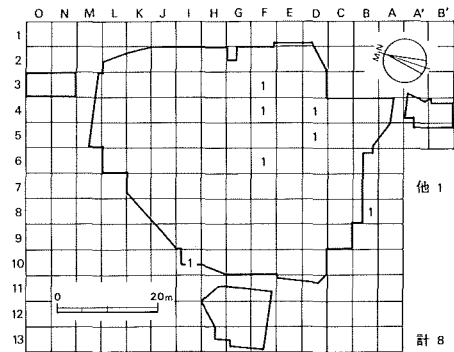
③ 青白磁



④ 明染付・赤絵



⑤ 輸入陶器等



⑥ 朝鮮製品

Fig. 54 中世土器・陶磁器の出土分布①

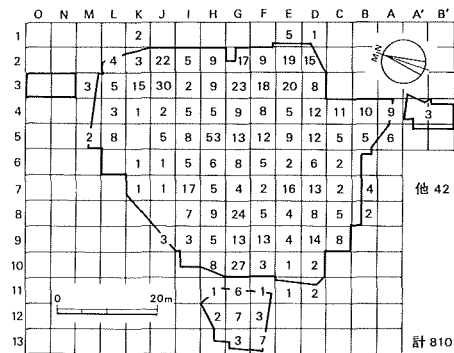
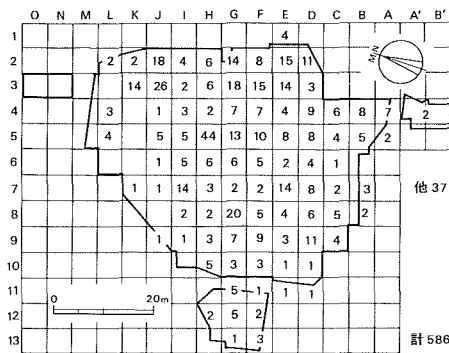
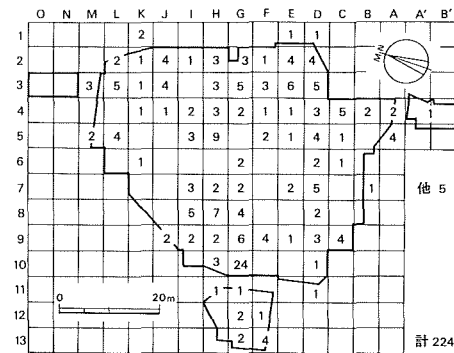
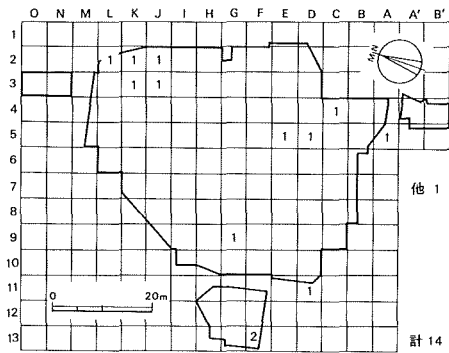
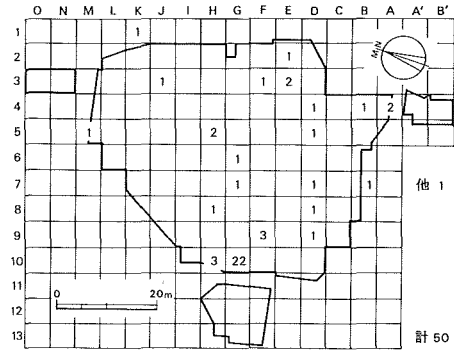
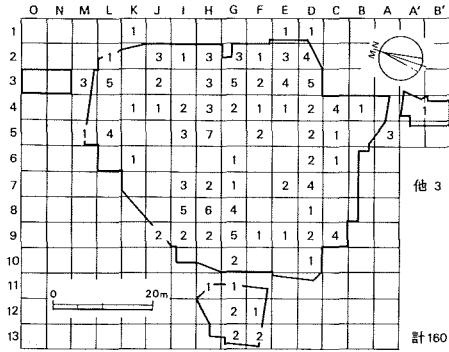


Fig. 55 中世土器・陶磁器の出土分布②

えてよいと思われる。

資料的には、土壙S K 1・2の一括出土品が注目される。文禄元年（1592）の火災に伴って設けられた土壙であれば、年代を押えることが可能である。芙蓉手皿、華南彩釉陶など注目される資料も出土している。

以上の中世土器・陶磁器については、もう少し詳細に論を展開したかったが、時間的に余裕がなく舌足らずの内容になってしまった。問題・課題等については別稿で検討したいと考えている。

（宮崎）

- 註1 森田勉・横田賢次郎「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集4』九州歴史資料館 1978
- 註2 上田秀夫「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究No.2』日本貿易陶磁研究会 1982
- 註3 亀井明德「日本出土の明代青磁碗の変遷」『鏡山先生古稀記念古文化論攷』1985
- 註4 森田 勉「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究No.2』日本貿易陶磁研究会 1982
- 註5 小野正敏「15～16世紀の染付碗、の皿の分類と年代」『貿易陶磁研究No.2』日本貿易研究会 1982
- 註6 以前、端反り碗で新しい一群を碗B群と混同したことがあったので誤謬を明記しておく。  
宮崎貴夫「歴史時代の土器・陶磁器、滑石製容器について」『今福遺跡Ⅲ』長崎県文化財調査報告書第84集 長崎県教育委員会 1986
- 註7 三彩隆敏『海のシルクロード』新潮社 1981
- 註8 亀井明德「明代華南彩釉陶をめぐる諸問題・補遺」『九州歴史資料館研究論集10』九州歴史資料館 1985
- 註9 これは長崎県本土部全般にいえる傾向である。宍岐・対馬でも朝鮮製品が増えるが、なお中国製品の量が多い。貿易の全体量の内の陶磁器の占める割合、生産地や生産量の差、受け入れ側の趣好等が要因としてあげられ、中国商人の活躍も見逃せないであろう。
- 註10 秀島貞康『林ノ辻遺跡』諫早市文化財調査報告書第4集 諫早市教育委員会 1983
- 註11 註6文献。  
宮崎貴夫『長崎県今福遺跡における中世期の様相』1987
- 註12 荻野繁春「『財産目録』に顔を出さない焼物」『国立歴史民俗博物館研究報告第25集』国立歴史民俗博物館 1991

#### 4. 近世陶磁器 (Fig. 56~60)

近世およびそれ以降の遺物は、20,000点余の出土がみられたが、ここでは遺構から出土した資料をとりあげて説明を行う。

##### ① 建物S B 6 出土陶磁器 (Fig. 56—1)

###### 椀 (1)

1は、所謂波佐見系のくらわんか茶椀である。外面には丸文と蔓草状の曲線文を、灰青色の呉須で描く。青緑色がかったガラス質の釉がかかり、光沢をもっている。18世紀後半代の製品であろう。

##### ② 土壌S K 3 出土陶磁器 (Fig. 56—2・3)

###### 椀 (2)

半卵形の体部に、小ぶりの高台がつく椀である。薄手づくりで、手に持つと軽い感がある。外面には、笹や柳のような文様を細いタッチで描いている。淡黄色の胎土をもち、全面に細かい貫入の著しい釉が薄くかかる。陶胎染付で、18世紀前半代に位置づけられる資料であろうか。

###### 播鉢 (3)

唐津系の播鉢底部片である。無釉の焼きしめで、焼きは良い。内面は全体に筋目がはいり、

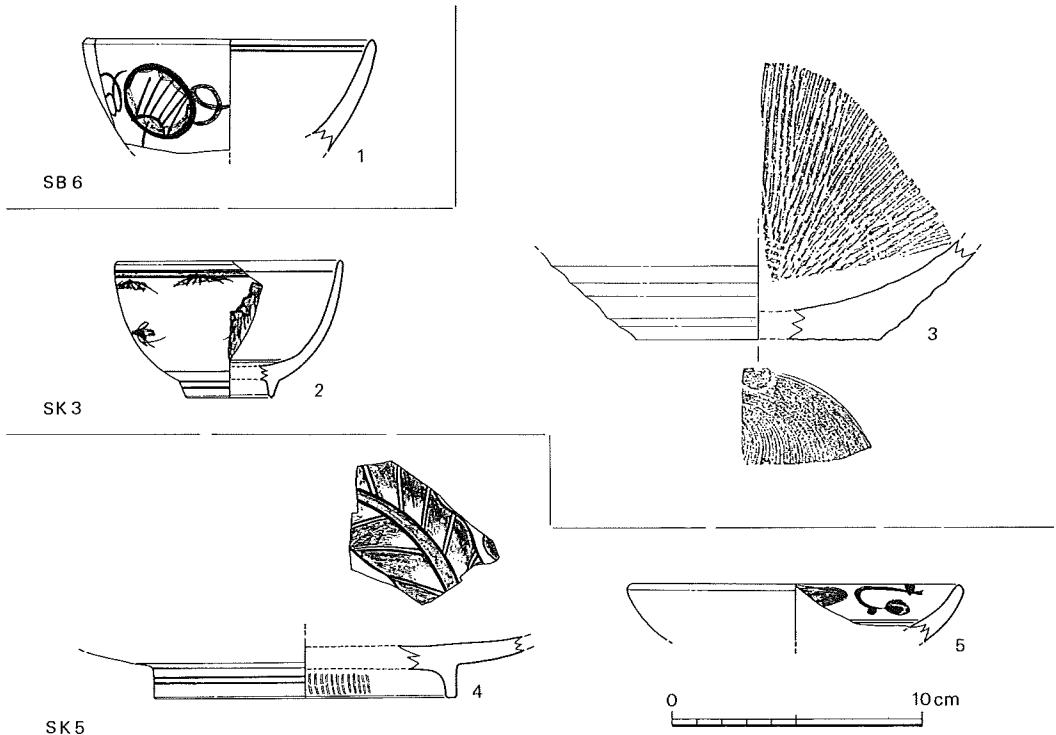


Fig. 56 近世陶磁器① (1/3)

平底の底部は回転糸切りによるものである。器肉はにぶい赤褐色、他は褐色を呈する。

③ 土壙S K 5 出土陶磁器 (Fig. 56—4・5)

皿 (4・5)

4は、底径12cmを測る大皿である。見込に成り物(大根か)の葉を明るい呉須で描き、割と上質の皿である。直立する高台内側には、とびカンナ状の削り痕が釉の下にうかがえる。やや青みをもつガラス質の釉が幅狭の高台畳付を除いてかかる。5は、くらわんか手の皿で、簡略な唐草状の文様を灰色味の強い呉須で描いている。18世紀後半代の製品であろう。

④ 土壙S K 6 出土陶磁器 (Fig. 57~59)

猪口 (6・7)

6は、ラップ口の白磁猪口である。光沢をもつ白濁釉がかかるが、小さな高台畳付は無釉で砂が付着している。7は、体部が高台まで直線的な器形で、外面には青黒い呉須で蘭を描いている。高台畳付を除いて、青緑色を帯びたガラス質釉が全面にかかる。

盃 (8)

8は、外面に松を描いた盃である。やや黄色を帯びる白濁釉が全面にかかり、小さな高台畳付は釉を剥ぎ取っている。

椀 (9~17)

9・10は、白磁椀である。9は、内湾する丸い体部の小椀である。小さな高台畳付を除いて、やや青緑色帯びる釉がかかる。10は、丸い体下半から口縁へ直立気味に立ち上がる椀である。9・10とも畳付には砂が付着している。

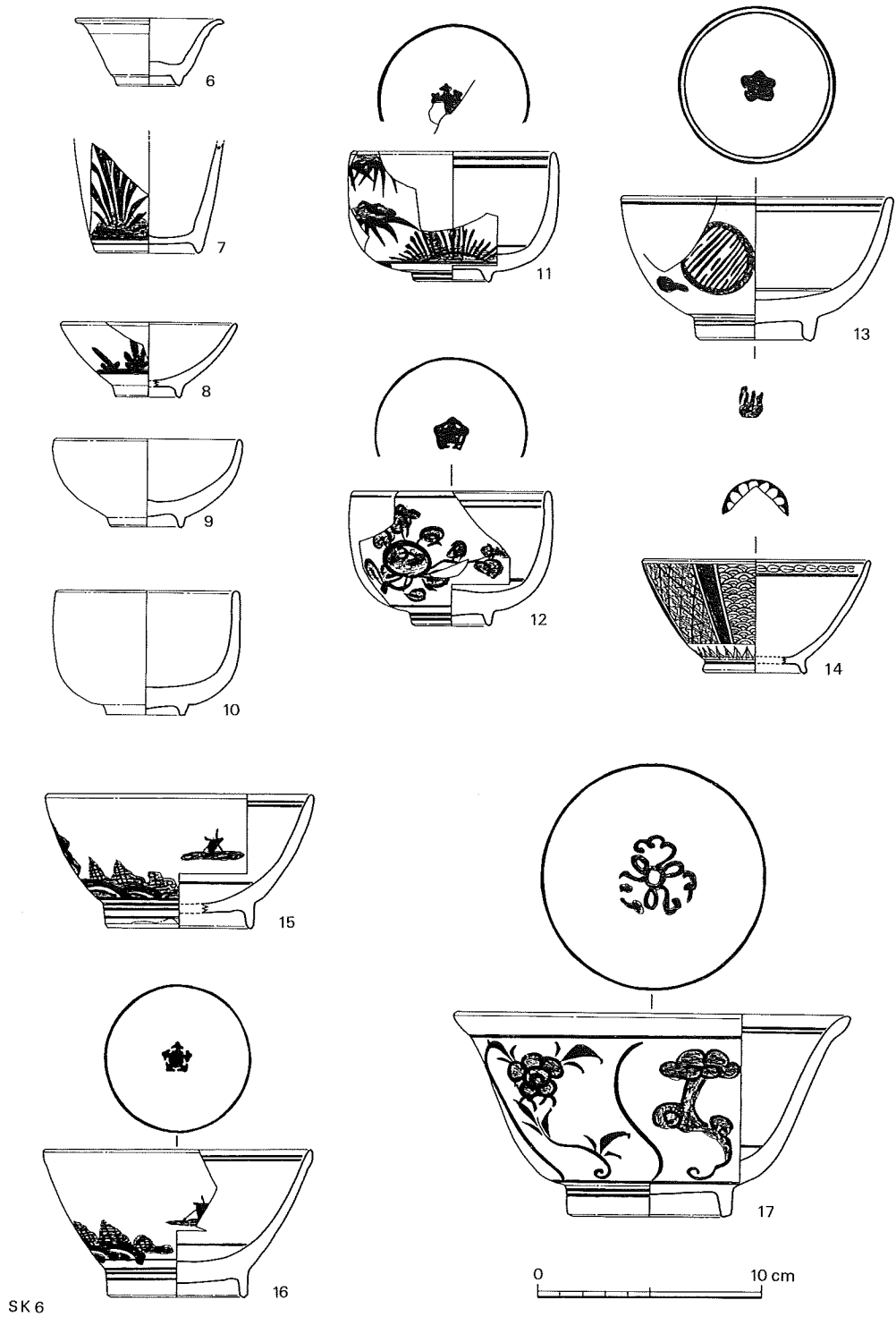
11~17は染付椀である。11・12は、10に器形が類似するが、10より高台部が小さい。11は、外面に竹・笹を描き、見込中央にコンニャク判五弁花を施す。12は、果樹文を描き、見込中央に11と同様にコンニャク判五弁花を施している。

13は、所謂くらわんか茶椀で、分厚いつくりである。外面には丸文、高台内には簡略化された字銘を描き、見込中央にコンニャク判五弁花を施す。

14は、腰部から直線的に開く、非常に薄手の椀である。外面は、幅広の帯の区画内に、扇形の波文様と格子目内に卍形を加えた緻密な図柄を描き、腰部には先が尖った蓮弁文を配する。内面には、縁に丸い鎖形の文様と、見込に菊花弁を描き、いずれも明るい呉須である。

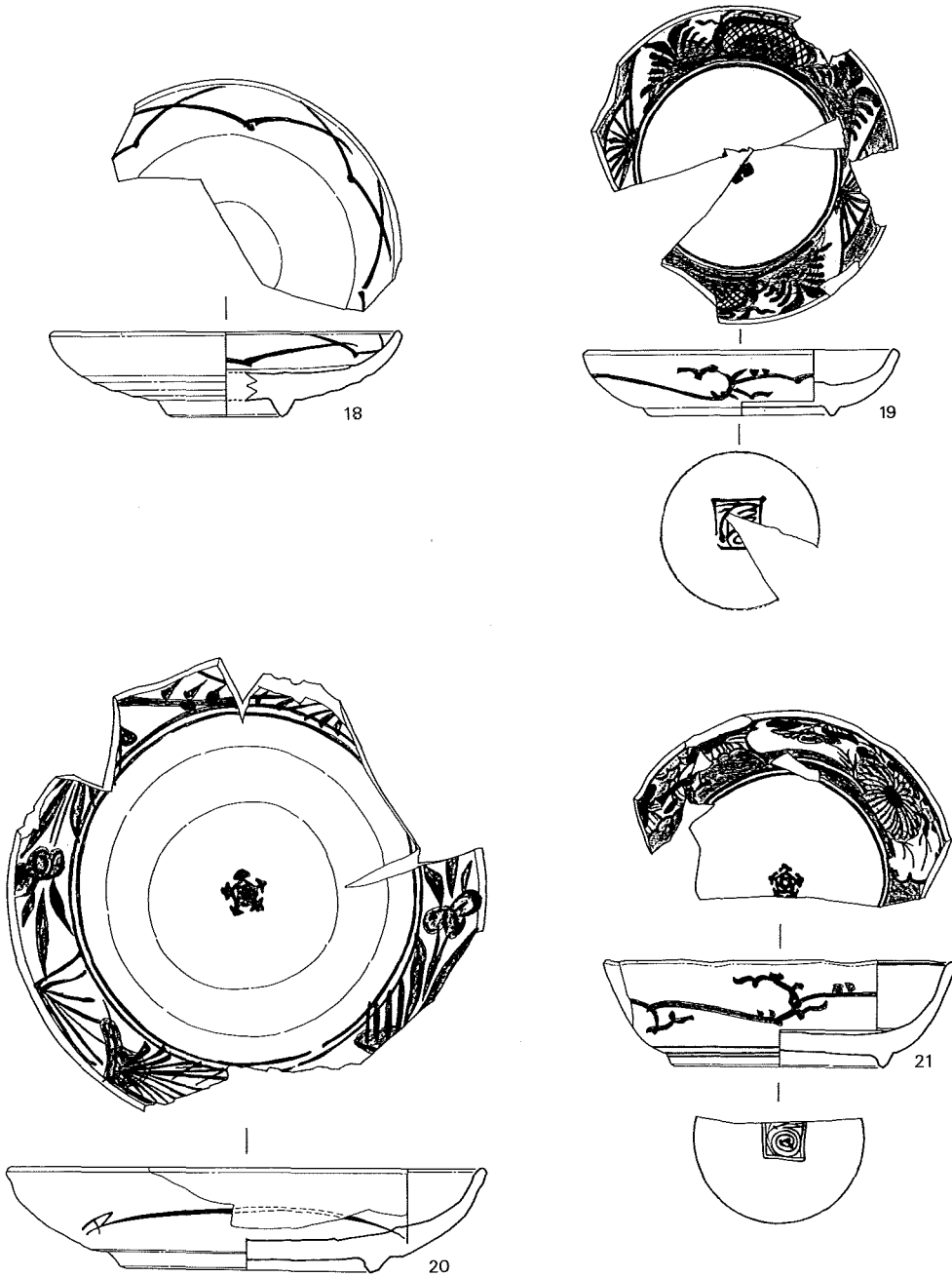
15・16は、高い高台の広東椀である。両者は同一の文様、形状をもっている。外面には、海浜風景が軽妙な筆づかいで描かれ、見込中央にはコンニャク判五弁花を施している。

17は、口径17.6cmを測る大形の椀である。口縁と体部を一部欠失する他は完形に復元できた。6本のS字状の区画線を描き、内側に立涌草花文を配している。また、見込中央には花卉状の文様を軽やかに描いている。以上の椀は、いずれも青緑色を帯びたガラス質釉が高台畳付部分を除いてかかるが、13・15・16は畳付の釉を丁寧に剥ぎ取っている。



SK 6

Fig. 57 近世陶磁器② (1/3)

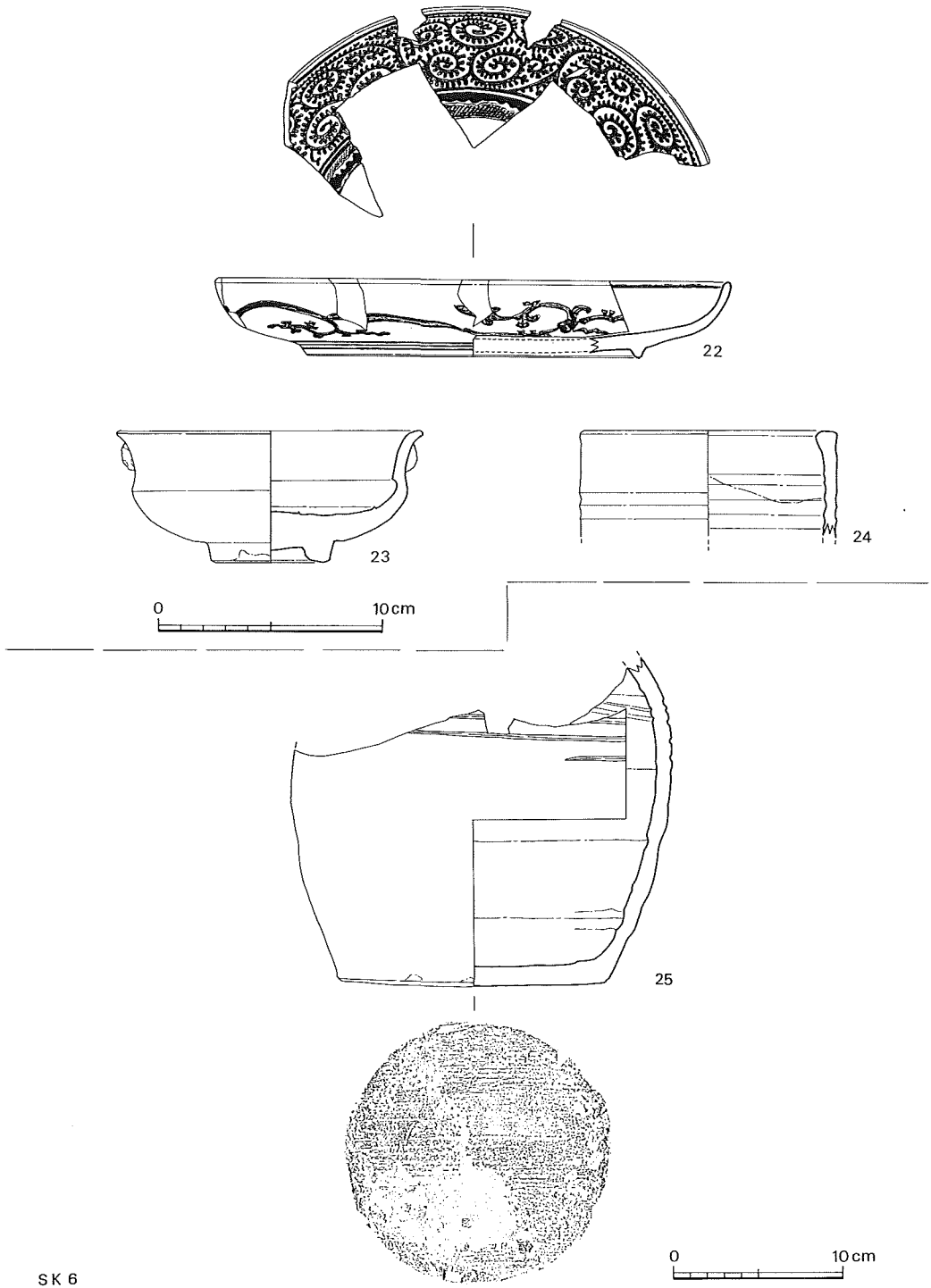


SK 6



Fig. 58 近世陶磁器③ (1/3)





SK 6

Fig. 59 近世陶磁器④ (1/3・1/4)

## 皿 (18~22)

18は、内湾気味に開く皿で、狭い高台である。見込は幅広く蛇ノ目状に釉を剥ぎ、縁には松葉状の斜交線文を描く。釉は灰緑色を帯び、小さな高台畳付は釉を削り取っているが砂が付着している。19は、浅い身の皿である。焼成時に生じたのであろうが、灰緑色の釉が、部分的に弾けたように露胎になった所も認められる。縁には草花文と扇文、外側には蔓草状の唐草文、高台内には「福」の字銘を描いている。また見込中央にはコンニャク判五弁花を施す。20は、口径19.4cmの大皿で見込は蛇ノ目状に釉を剥いでいる。全体にやや歪んだ形状である。縁には菖蒲・水仙文、外側には唐草の簡略化された文様を緑灰色気味の呉須で描き、見込中央にコンニャク判五弁花を施している。高台畳付と蛇ノ目剥ぎ部分を除いて、青緑色を帯び少し白く濁ったガラス質釉がかけられている。21は、口縁が稜花になった深皿である。縁には、草木のなかに窓があり、内に菊などの文様を描いている。外側は蔓草状の唐草文様、高台内には「福」の字銘を描き、見込にはコンニャク判五弁花を施している。釉は淡青緑色のガラス質釉で、高台畳付は釉を丁寧に剥ぎ取っている。22も、口径22.8cmの大皿である。広い高台で、身は浅い。縁には蛸唐草文、外側には蔓草状の唐草文を鮮やかな呉須で濃密に描いている。釉はやはり青緑色を帯びており、高台畳付は釉を剥ぎ取り、丸く仕上げている。

## 香炉 (23)

23は、ぶ厚いつくりの青磁香炉である。底部は、幅広の蛇ノ目高台である。体下半が丸く内湾気味に延びて、体中位付近で「く」字状に屈曲し、口縁はさらに外湾する。内面は、体中位に鋭い段がつき、内は露胎となり、にぶい橙色を呈する。見込付近は、幅広く蛇ノ目状に砂目が残る。口縁下には、花卉状の突起が貼付してある。灰色味をもつ青磁釉で、高台畳付は無釉である。

## 火入れ (24)

24は、火入れの体上半片である。直立気味の体部で、口縁部はふくらみをもち、上方は平坦になっている。青磁系であろうが、茶色っぽい黄橙色釉が内面中位まで及んでいる

## 甕 (25)

25は、胴上半に4条~5条の沈線をめぐらす唐津系の小形甕で、体上部を欠失している。広い底で安定感がある。胎土は、赤褐色を呈し、白色砂を含んでいる。全体に極暗赤褐色の釉がかかり、底部には板目痕が付いている。

以上のSK5出土品は、唐津系の甕を除いて波佐見系の製品と考えられる。大橋康二氏の<sup>註1</sup>編年および年代観によれば、皿18がやや遡る可能性をもつが、椀13と皿19~21が18世紀後半代、椀14~17が18世紀末~19世紀前半代の製品として位置づけられよう。

⑤ 土壙 S K 7 出土陶磁器 (Fig. 60—26)

鉢 (26)

26は、唐津系の鉢である。口径22.2cmで、比較的小形の部類であろう。内面には、花卉状のスタンプと刻目を施している。見込には、淡黄色の砂目が幅広く付着している。外面は体下半に極暗赤褐色釉、体上半は暗褐色の鉄釉がかかり、厚く面取りされた高台からその内側にかけては露胎である。内面には白っぽい灰釉がかけられている。高台にも部分的に砂が付着している。

⑥ 土壙 S K 9 出土陶磁器 (Fig. 60—27~33)

猪口 (27)

27は、体部に蘭を描いたラッパ口の猪口である。若干青緑色味もつガラス質釉がかかるが、平坦な高台畳付は無釉である。

椀蓋 (28)

28は、反り椀の蓋と考えられ、外面には印判手の菊文が施されている。淡青緑色味もつ白濁釉がかかり、つまみ部は無釉で砂が付着している。

椀 (29・30)

29は、丸い体下半から直立気味に立ち上がる形態で、厚みがあり重い。外面には鶴?と桐?のような印判手文様を施している。30は、やや身の浅い椀でいびつに歪み、体部に他個体の破片が付着している。外面には格子目状の文様を描き、菱形の格子目の印判手文様を施す。見込中央には、菊花弁の印判手文様を施している。両者ともに、淡青緑色のガラス質釉で、高台畳付は無釉である。

皿 (31)

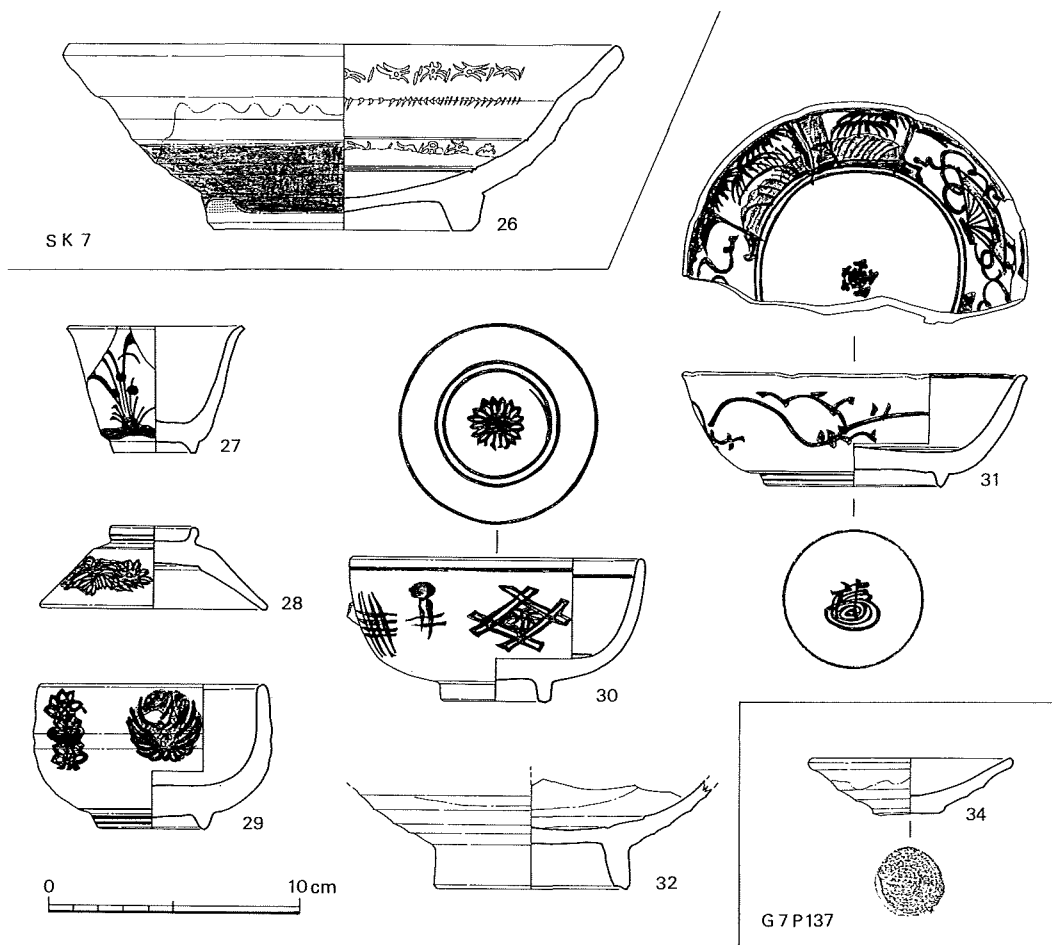
31は、口縁が稜花になった深皿である。縁には、竹・笹・扇子などを描き、見込中央には、コンニャク判五弁花を施している。さらに、外側には蔓草状の唐草文、高台内には「寿」の簡略化された字銘を描いている。高台畳付以外には、細かい気胞を含んだ淡青緑色のガラス質釉がかかる。

鉢 (32)

32は、唐津系の陶器鉢であり、高台は高く、全体に薄手づくりである。緑灰色の釉が内面と体下半近くまでかかるが、見込は蛇ノ目に剥がれ、体下半から高台内まで露胎である。また、蛇ノ目剥ぎの上位には、淡く白刷目が施されている。蛇ノ目剥ぎ付近には、砂が付着している。胎土は灰色、露胎部分は暗赤褐色を呈する。

甕 (33)

33は、唐津系半胴甕で、武雄南部系統のものであろう。ぶ厚く面取りされた高台から、体部は丸みをもって立ち上がり卵形をなすようである。体中位には、白化粧を施し、鉄釉とたんばんによる植物文様(松であろう)をのびやかに描いている。体下半は白刷目が縞状になり、体



SK 9

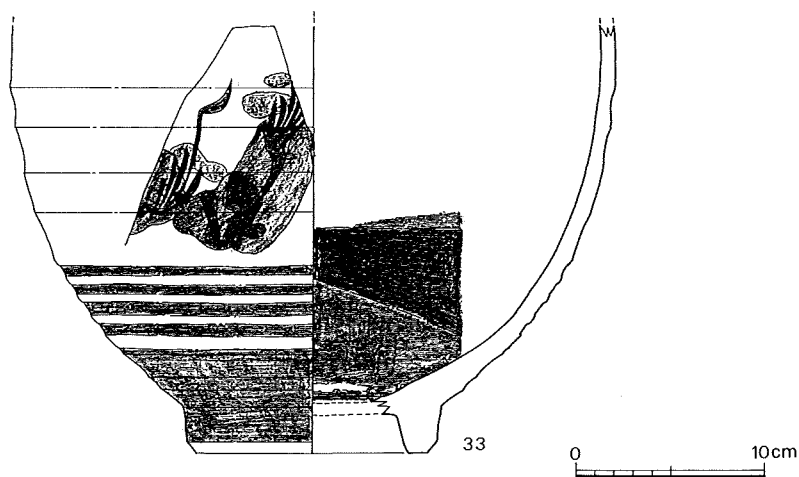


Fig. 60 近世陶磁器⑤ (1/3・1/4)

下端付近には暗赤褐色釉が薄くかけられている。内面は、下半が黒褐色と暗赤褐色釉で、上半には白濁の灰釉がかけられている。胎土は、やや赤紫色を帯びた淡赤橙色を呈し、石英砂を若干含んでいる。

SK9一括出土品は、染付は波佐見系で、陶器は唐津系・武雄系の製品が中心となっている。大橋氏の年代観によれば、碗29・30が1700～1750年代、27の猪口が17世紀後半～18世紀初頃に位置づけられる資料であろう。

⑦ ピット出土陶磁器 (Fig. 60—34)

盃 (34)

34は、G7区ピット137から出土した唐津系の陶器盃で完品である。小さな平底は回転糸切り底で、大きく開く形状である。胎土は赤みの強い赤褐色で、内面から体上端にかけて黄濁釉がかかり、暗赤褐色を呈する。

⑧ まとめ

以上、遺構一括出土の近世陶磁器をとりあげてきた。その製品は、波佐見系の磁器が中心で、半胴甕・鉢等の唐津系陶器類が加わる構成をもっている。年代的には、17世紀後半～19世紀前半代の江戸後期～末期に包括される資料であった。江戸前期の資料が欠落しているが、遺構以外の各地区出土品をみても、当期の製品は少ないようである。

明染付・白磁を中心とした16世紀代の中国輸入製品が際だった様相をもっているのに対して、17世紀前半代の状況は弱体化した感がある。

江戸後期以降に生活地として盛んに利用されるようになった状況は、陶磁器のみならず、遺構群にも反映されているようである。

また、波佐見系製品で占められるのは、自明のことと思われるが、本遺跡が大村藩内にあり、領内の波佐見焼を使用したことは必然性をもった事象と考えられる。

(宮崎)

註1 大橋康二「肥前陶磁の変遷と出土分布」『国内出土の肥前陶磁』九州陶磁文化館 1984

同 「波佐見焼の変遷」『長崎の陶磁』九州陶磁文化館 1984

同 『肥前陶磁』ニューサイエンス社 1990

以上の文献と、次の文献を参考にした。誤謬については浅学である筆者の責任である。

山下行男・矢野鉄也『波佐見古陶磁文様集』長崎県窯業試験場 1982

## 5. その他の遺物

中世～近世期の土器・陶磁器については前述したので、ここではそれ以外の石製品、円盤状製品、土製品、ガラス製品、古銭、製鉄関係遺物を取りあげる。

### ① 石製品 (Fig. 62・63・65)

#### 砥石 (Fig. 62-1～3)

1は、両端が自然面で、側面は5面に面取りされている。重さ58.3gの小形品で、黄褐色砂岩を利用した荒砥である。F3ピット6出土。2は、上端が丸みをもった自然面を有し、下端は折れているが、端部が使いべりされているので折断後も使用されたことが考えられる。面は4面あり、上面と下面には鋭い稜をもつ細い溝が数条はいつている。淡黄色の割りと木目の細かい砂岩を利用した中砥である。340gの重量をもつ。J7区ピット48から出土。3は、角を面取りした長方形をなすものであろうが、下端を欠失している。砥石としての使用面は上面だけで、非常に木目の細かい膚の仕上砥である。やや緑色を帯びた灰黄色の堆積岩(頁岩?)を利用して。現在の重量は、83.2gを測る。G12区ピット26から出土。他に、A4, F4, G9から出土しており、計6点となる。

#### 硯 (Fig. 62-4)

長方形石硯で、海の部分を欠失している。縁部は段をもち、裏面は平坦なつくりである。赤紫色の堆積岩を用いており、赤褐色や灰白色の砂粒を含んでいる。残存長7.3cm、幅6.6cm、厚さ1.1cm、重さ150gを測る。I7区の1点だけ出土している。

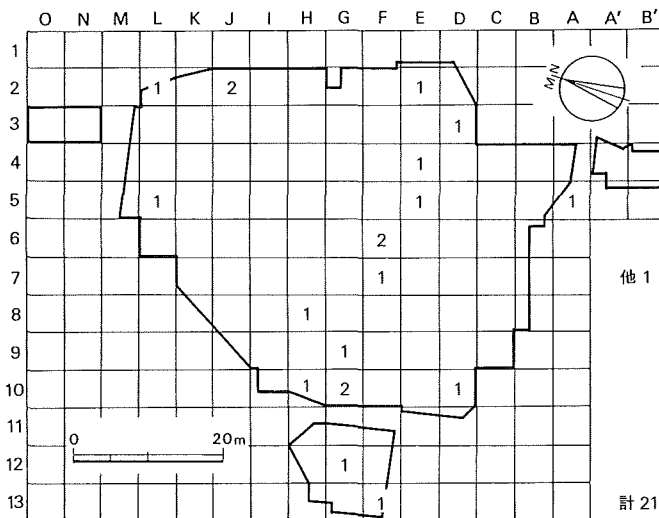


Fig. 61 滑石製石鍋の出土分布

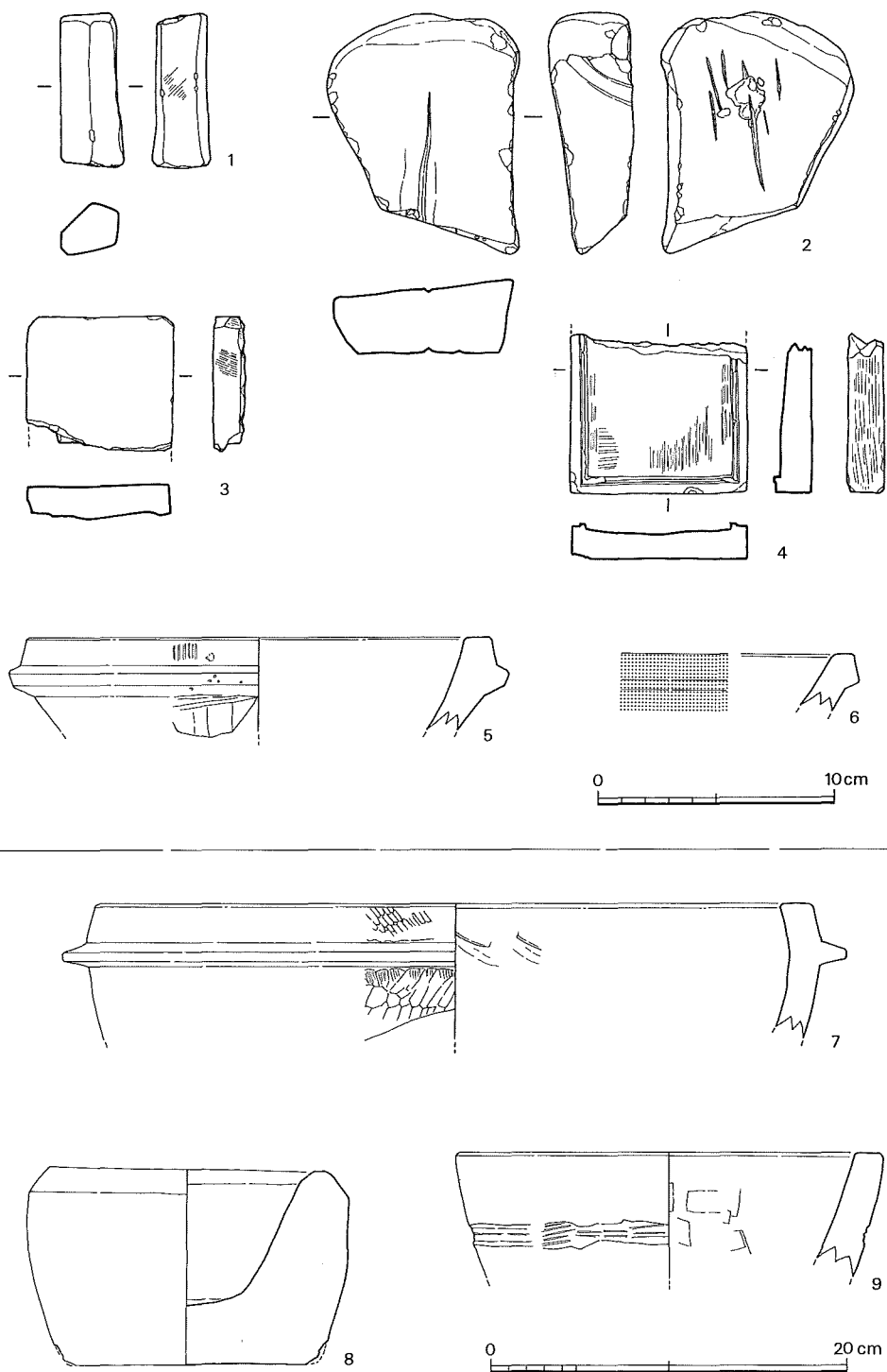


Fig. 62 石製品 (1/3・1/4)

## 滑石製石鍋 (Fig. 62—5～7)

5・7は、鐙が付くものである。5は口径19.6cmの小形品で、7は口径40.4cmを測る大形品である。森田勉氏の石鍋の分類<sup>註1</sup>によると、7は体部が内湾するものでB群（B—1類）、5は体部が直線的に開くものでC群（C—1類）に相当しよう。6は、口縁を斜めに削り出し、鐙が突起状に退化したもので、木戸雅寿氏分類<sup>註2</sup>のIV類に該当する。5はF13区、6はE5区ピット2、7はL2区から出土し、他に18点出土している。

森田・木戸両氏の年代観によれば、7がB—1類で12世紀～13世紀前半代、5がC—1類で13世紀後半～15世紀代、6がIV類で15世紀後半～16世紀前半代に位置づけられる資料であろう。

## 石製容器 (Fig. 62—8・9)

8は小さな臼状の石製容器で、口縁から底部まで残るが、体半分を欠失している。広い平底で安定感があり、厚手づくりである。灰褐色の安山岩を用い、2.8kgを測る。H10区出土。9は直線的に開く鉢形をなし、体部には幅広の溝がノミ状の工具で施されている。また、内面にも横位のノミ状工具痕が残っている。安山岩を用い、外面は灰褐色、内面は赤褐色を呈する。敷石遺構SX2の下の下から出土。図示していないが他に、石臼の片口部分がF9区から出土している。なお、8と類似した製品が、南高来郡北有馬町今福遺跡から出土している。

## 球状石製品 (Fig. 63—10・11)

10は、真球に近い形状で、素材は灰褐色の安山岩である。部分的に表面が剝落している。重量は230gを測る。G7区出土。11は、やや歪みをもった丸玉で、器表には溝状のヒビと、欠落部が観察される。素材は黄褐色の安山岩である。重さ370gを測る。H6区ピット70出土。

この製品は、用途については明確でないが、祭祀具、遊具などの可能性をあげることができると。遊具であれば、毬打遊びの毬の可能性を考えたいが想像の域を出ない。

## 円盤状石製品 (Fig. 65—30)

30は、灰赤色～にぶい橙色を呈する安山岩を素材とし、周縁を打欠き丸く仕上げている。長径6.8cm、短径2.1cm、厚さ2.1cm、重さ165gを測る。第1区の表採品である。用途については、円盤状陶磁製品と同様に遊具と想定される。

## 碁石 (PL. 51)

7点出土している。黒5点、白2点ある。白1点と黒2点は器表に細かい布目が観察でき、焼物であることが分かるが、他は石を用いている。径は1.6～2.1cm、重さは2.2～5.9gを測るB7、H5、H7、H9、G7、G8から出土し、1点は地区が明確でない。

## 石塔 (Fig. 63—14)

14は、緑色の滑石を利用した、五輪塔の水輪である。平面形はいびつな円形で、体部も歪んだ胴張形であり、つくりは丁寧でない。上面と下面には、溝状の工具痕が残っている。重さ14kgを測る。E3区ピット2出土。



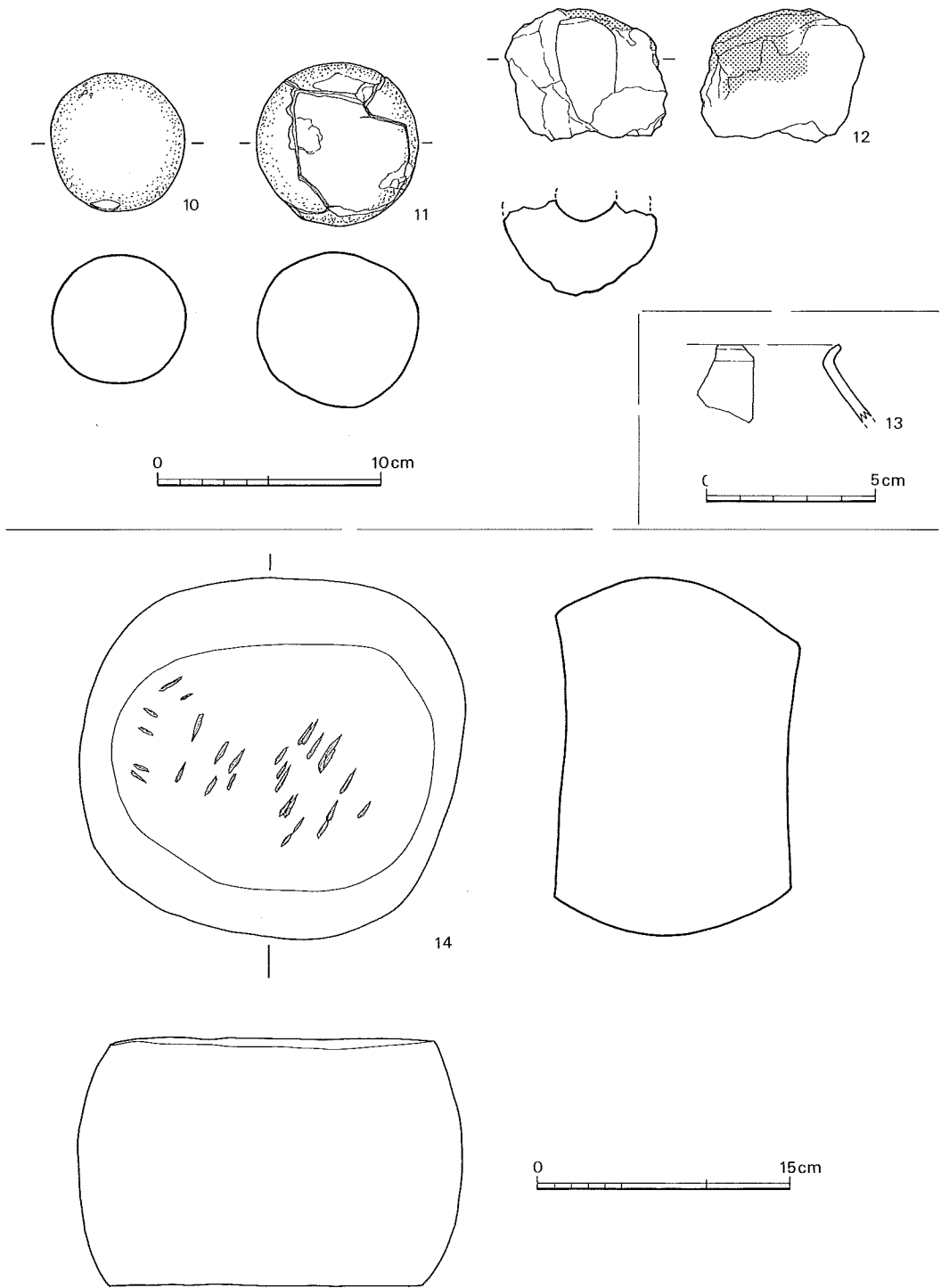


Fig. 63 石製品その他の遺物 (1/2・1/3・1/4)

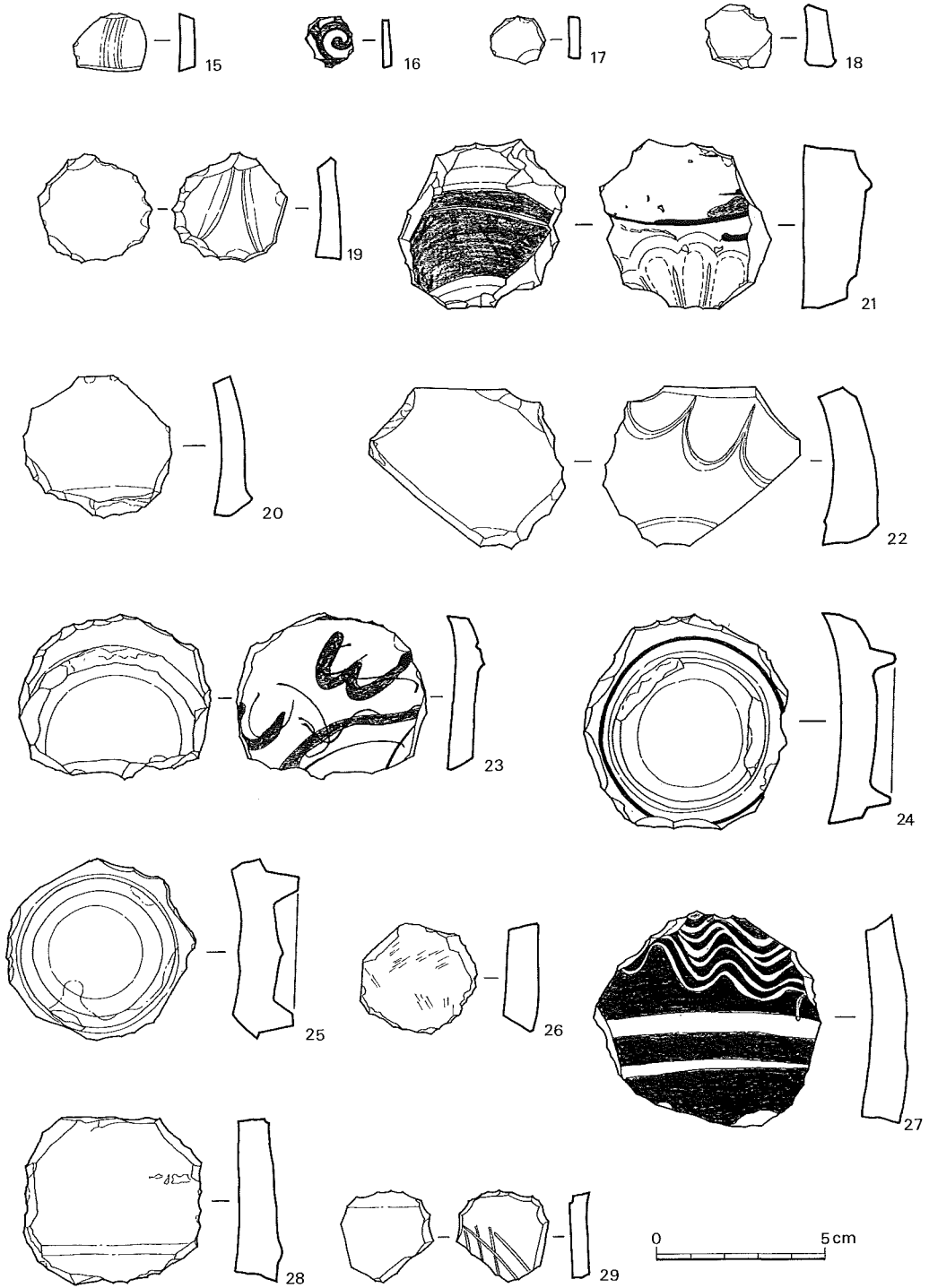


Fig. 64 円盤状陶磁製品 (1/2)

Tab. 4 円盤状陶磁製品一覧表

(単位: cm, g)

番号	長径	短径	径平均	厚さ	重量	素 材	器 種	部 位	欠 損	地区・遺構	備 考
1	2.1	1.7	1.9	0.4	3.1	中国製陶磁器 青磁	椀	体部		F 3	15
2	1.5	1.3	1.4	0.2	0.8	〃 明染付	〃	〃		G11 P 4	16
3	4.2	4.1	4.15	0.3	14.7	〃 〃	〃	底部		E 6	
4	1.6	1.3	1.45	0.3	1.2	近世陶磁器 白磁	〃(?)	体部		I 7 P36	17
5	1.2	1.1	1.15	0.6	0.9	〃 染付	〃	〃		J 6 P52	
6	1.9	1.8	1.85	0.8	4.2	〃 白磁	〃	〃		D 5	18
7	2.1	2.0	2.05	0.6	4.4	〃 〃	〃	〃		G 2	
8	2.3	1.7	2.0	0.5	3.6	〃 染村	〃	〃		N 3・O 3	
9	2.5	2.4	2.45	0.6	5.5	〃 〃	〃	〃		H12	
10	3.3	3.2	3.25	0.6	11.0	〃 青磁	〃	〃		C 5	
11	3.2	3.1	3.15	0.6	9.0	〃 〃	〃	〃		G 6	19
12	3.0	2.9	2.95	0.7	11.0	〃 〃	〃	〃		F 3	
13	3.9	3.6	3.75	0.8	19.0	〃 〃	皿(?)	〃		H10	
14	4.4	4.0	4.2	0.7	19.3	〃 〃	〃	〃		第1区 表採	20
15	4.2	3.9	4.05	0.8	18.2	〃 〃	〃	〃		G10	
16	3.8	3.5	3.65	1.2	25.0	〃 〃	〃	〃		E 6	
17	5.4	4.5	4.95	1.1	43.1	〃 〃	〃	〃		A'4・B'4	22
18	3.2	2.4	2.8	0.6	6.8	〃 染付	〃	底部		H 7 P35	
19	5.1	4.6	4.85	0.6	23.6	〃 〃	〃	〃		E 4	
20	5.7	4.8	5.25	0.8	38.0	〃 〃	椀	〃		B 6	23
21	4.9	4.6	4.75	1.6	60.1	〃 青磁	皿	〃		D 7	21
22	5.2	5.1	5.15	1.0	46.3	〃 染付	椀	〃		I 10	
23	5.1	4.6	4.85	0.7	38.2	〃 〃	〃	〃		D 7	
24	5.4	5.2	5.3	0.9	55.1	〃 〃	〃	〃		H10	
25	6.4	5.8	6.1	1.0	60.5	〃 〃	〃	〃		H 7	24
26	3.5	1.9	—	0.7	8.1	〃 〃	〃	〃	半欠?	G 6	
27	5.7	1.9	—	0.6	9.5	〃 〃	〃	〃	大半欠	E 7	
28	5.4	5.0	5.2	1.2	57.5	〃 青磁	〃	〃		G 7	25
29	5.5	4.2	4.85	1.2	56.1	〃 〃	〃	〃		G 8	
30	5.3	2.6	—	0.6	21.0	〃 〃	〃	〃	半欠	C 9	
31	3.1	2.9	3	0.6	7.3	〃 陶器	甕(?)	体部		G 4	
32	3.4	2.9	3.15	1.0	16.5	〃 〃	〃	〃		G 8 P111	26
33	3.6	3.5	3.55	1.1	21.0	〃 〃	〃	〃		I 9 P 8	
34	2.9	2.9	2.9	1.0	14.0	〃 〃	〃	〃		H 7	
35	6.7	6.4	6.55	1.0	60.4	〃 〃	こね鉢	〃		A'4・B'4	27
36	5.1	4.8	4.95	1.1	46.2	〃 〃	鉢	〃		E 7	28
37	2.5	2.5	2.5	0.5	5.2	〃 〃	すり鉢	〃		F 3	29

## ② 円盤状陶磁製品 (Fig. 64—15~29, Tab. 4)

当製品は、37点出土している。輸入陶磁器片を利用するものは、青磁1点と明染付2点の3点があり、そのうち2点を図示した。15は龍泉窯系の鎬蓮弁文椀の体部片、16は明染付の体部片を利用している。他の1点は、明染付の椀底部片である。

近世陶磁器片を素材とするものは、34点ある。系椀別にみると、磁器27点、陶器7点に分けられ、器種別には椀が最も多く22点、皿8点、甕4点、鉢3点という順になる。部位別には、体部21点、底部13点に分けられる。13点を図化した。

17・18は、白磁椀の体部片利用で、比較的小形の部類である。19~22は青磁皿、25は青磁底部片を素材としている。23・24は、染付椀底部利用で、23は見込荒磯文を描くものである。

26~29は唐津系の陶器片を素材とするもので、26は甕、27~28は鉢、29は播鉢片を用いている。26の釉面には使用時のものであろうか、細かい擦痕状の傷がはいっている。

以上の円盤製品は、大きさが1.1~6.6cm、重量が0.8~60.5gにまでわたるが、性格的には遊具であり、小形品がおぼじき、穴一（銭打）に、中・大形品がお手玉・石ケリとして使用されたことが想定<sup>註4</sup>される。

## ③ 土製品 (Fig. 65)

## 土錘 (31~33)

31~33は、素焼きの管状土錘である。33と34は側辺が直線的な形態で、33は紡錘形の形状である。31は赤橙色の色調で、細かい赤色砂を含む。全体に磨滅している。長さ3.3cm、径1.1cm、重量2.2gを測る。F3区ピット5出土。32は褐灰色を呈し、全体にローリングしている。長さ3.7cm、径1.1cm、重量4gを測る。土壙SK2出土。33は、にぶい橙色で細かい赤色砂を含む。焼成は良い。長さ4cm、径1.3cm、重量5.8gを測る。B6出土。土錘は以上の3点だけが出土している。

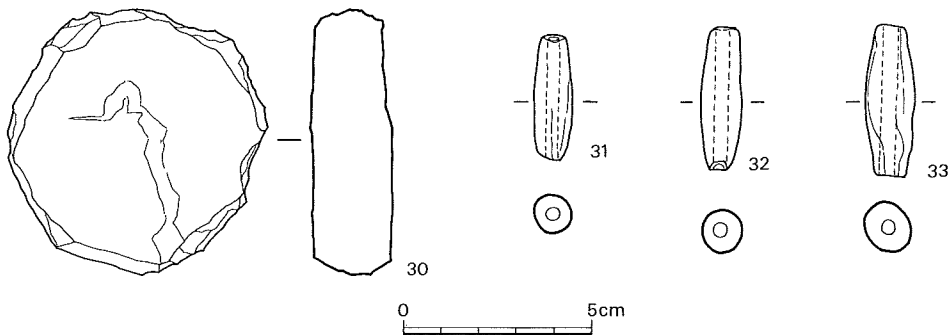


Fig. 65 円盤状石製品・土製品 (1/2)

④ ガラス製品 (Fig. 63)

瓶 (13)

13は、ガラス瓶の口頸部片である。薄いピンク色の透明ガラスで、表面は銀化し、オパール光沢をもっている。F 3区出土。

⑤ 古銭 (PL. 51)

古銭には6点あり、そのうち4点は寛永通宝である。他の2点については錆が付着しており字銘が読めないが、径が2.2cmと2.3cmの小形品である。寛永通宝は、C 6区、F 2区、F 9ピット66と第1区から出土し、他はC 7区とF 11区から出土している。

⑥ 製鉄関係遺物 (Fig. 63)

羽口 (12)

12は、ファイゴの羽口片である。外面は灰褐色を呈し、端部には漆黒色のスラッグが付着している。内面は、淡橙色を呈する。胎土には、1～4mm大の黄色・赤色砂を含んでいる。建物S B 3のH 2ピット3から出土している。

製鉄関係遺物として、他に握大の鉄滓が3点出土しており、計476gを測る。出土地区は、H 6区、G 9区と、敷石遺構S X 2から出土している。

(宮崎)

註1 森田勉「滑石製容器—特に石鍋を中心として—」『仏教芸術148号』 毎日新聞社 1983

註2 木戸雅寿「草戸千軒町出土の石鍋」『草戸千軒No.112』 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所 1982

註3 町田利幸「石製品」『今福遺跡Ⅱ』 長崎県文化財調査報告書第77集長崎県教育委員会 1985

註4 宮崎貴夫「円盤状陶磁製品」『風呂川遺跡』 西有家町教育委員会 1982

## IV 総括

坂口館跡の今回の調査によって、先土器時代から現代に至る長期間にわたる生活の営みがあったことが判明した。

先土器時代の遺物は、三稜尖頭器が1点出土している。本遺跡が、大村扇状地の要付近に立地している所から、扇状地の形成を考えるうえで興味深い資料として評価できよう。

縄文時代は、早期と晩期の二つの段階に中心をもつが、特に後者の資料が大半を占めるようである。晩期の石器組成では、当期に盛行する扁平打製石斧が少なく、石核と剝片・碎片が著しい。遺跡占拠の利点として湧水点があることが第一にあげられるが、本遺跡が多良山系の山並みへの途筋である狭谷への入口に位置していることも指摘できよう。狩場への基点（第1ベース）となった遺跡ではなかったのかと推察したくなる。

弥生時代～古墳時代（古代も含めて）の遺物は少なく、遺構も古墳時代前期の箱式石棺1基が検出されたにすぎない。居住地としてほとんど利用がなされていなかったのであろう。

遺物のうえで、再び活況を呈してくるのは、11世紀中頃～12世紀前半代の中世初期の段階で、屋敷地として利用が開始されたことが考えられる。それ以後、16世紀末頃までが本遺跡をもっとも特徴づける華やかな時代であったようである。それは、中世の土器・陶磁器のなかで輸入陶磁器の占める割合が72.3%と非常に高率であること、輸入陶磁器は質の良いものが多く、優美な芙蓉手皿や華南彩釉陶器など貴重な品々が出土していることから、居住した人の地位の高さを物語っている。大村純忠も関係する人物の1人であろう。中世の遺構として明確に把握できたのは、建物1棟（SB1）と2基の土壙（SK1・2）にすぎず、調査区外の東側地域に中世期の拠点があることが予想される。また2基の土壙は、文禄元年（1592）の火災の後、整理のために設けられた可能性をもち、一括資料として重要である。

近世期の遺構として、建物跡（SB2～8）、土壙、敷石（SX2）、壇（SX3）、石垣（SX4）が捉えられた。これらの遺構は、江戸後半期を中心としており、江戸前半期の遺構は確認できなかった。このことは、江戸前半期に生活地として利用が少なかったことを示している。主軸方位別にみると、I（SB6）、II（SB2・3・5・7、SX3）、III（SB4・8、SX2）の群に分けられ、I→IIIへの変遷を想定できるが、今回の資料操作は充分とはいえず、あくまでも仮定の域を出ない。

最後になったが、賽の河原のような過酷な現場で、無事調査が終了したのは、地主はじめ地域住民の方々の協力なしには完遂でき得なかったと思われる。末筆ながら感謝申し上げる次第である。（宮崎）

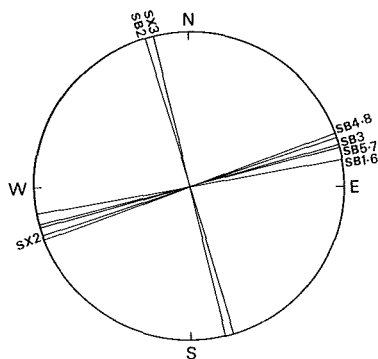


Fig. 66 遺構の主軸方向

# PLATES

(坂口館跡)



坂口館跡と建設が進む横断道



第1区（4次調査）

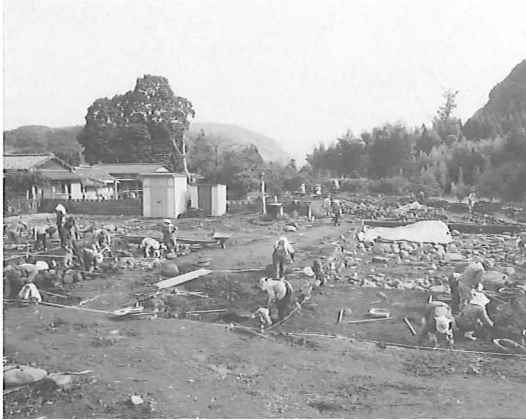




(1次調査)



(2次調査)



(3次調査)



(4次調査)



調査風景 (4次調査)



(5次調査)



第1区遺構検出状況（2次調査）



第1区遺構検出状況（4次調査）



第1区遺構検出状況（4次調査）



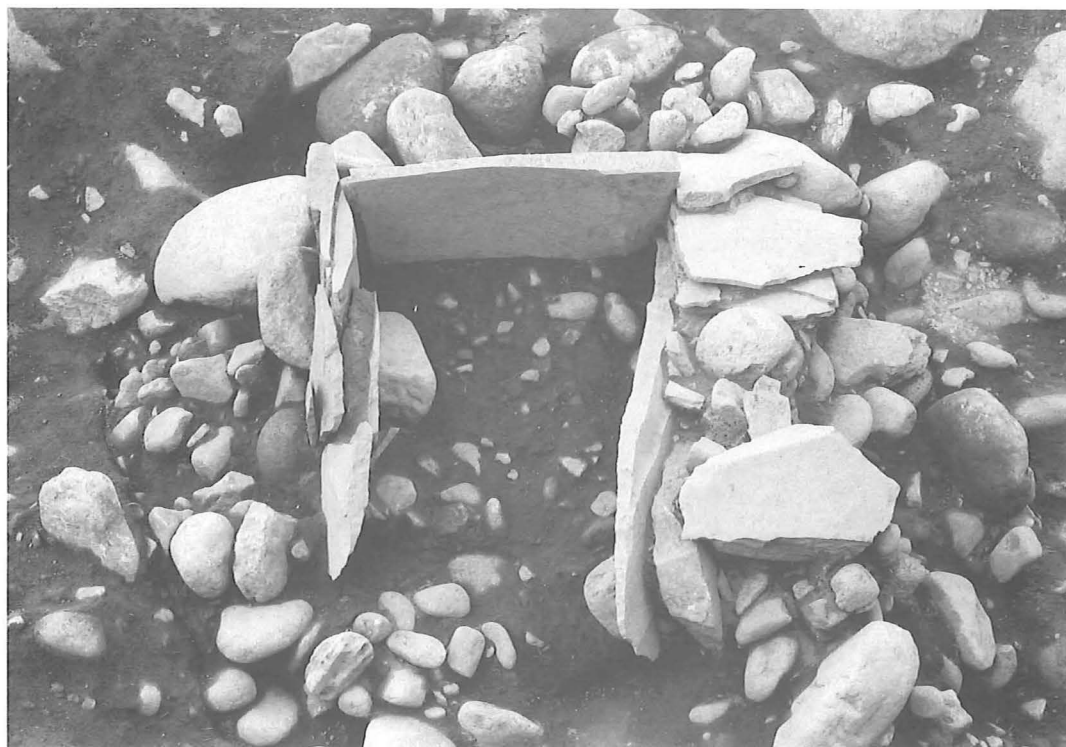
第1区遺構検出状況（5次調査）



第2区全景（4次調査）



第3区全景（5次調査）



箱式石棺墓 (S X 1)

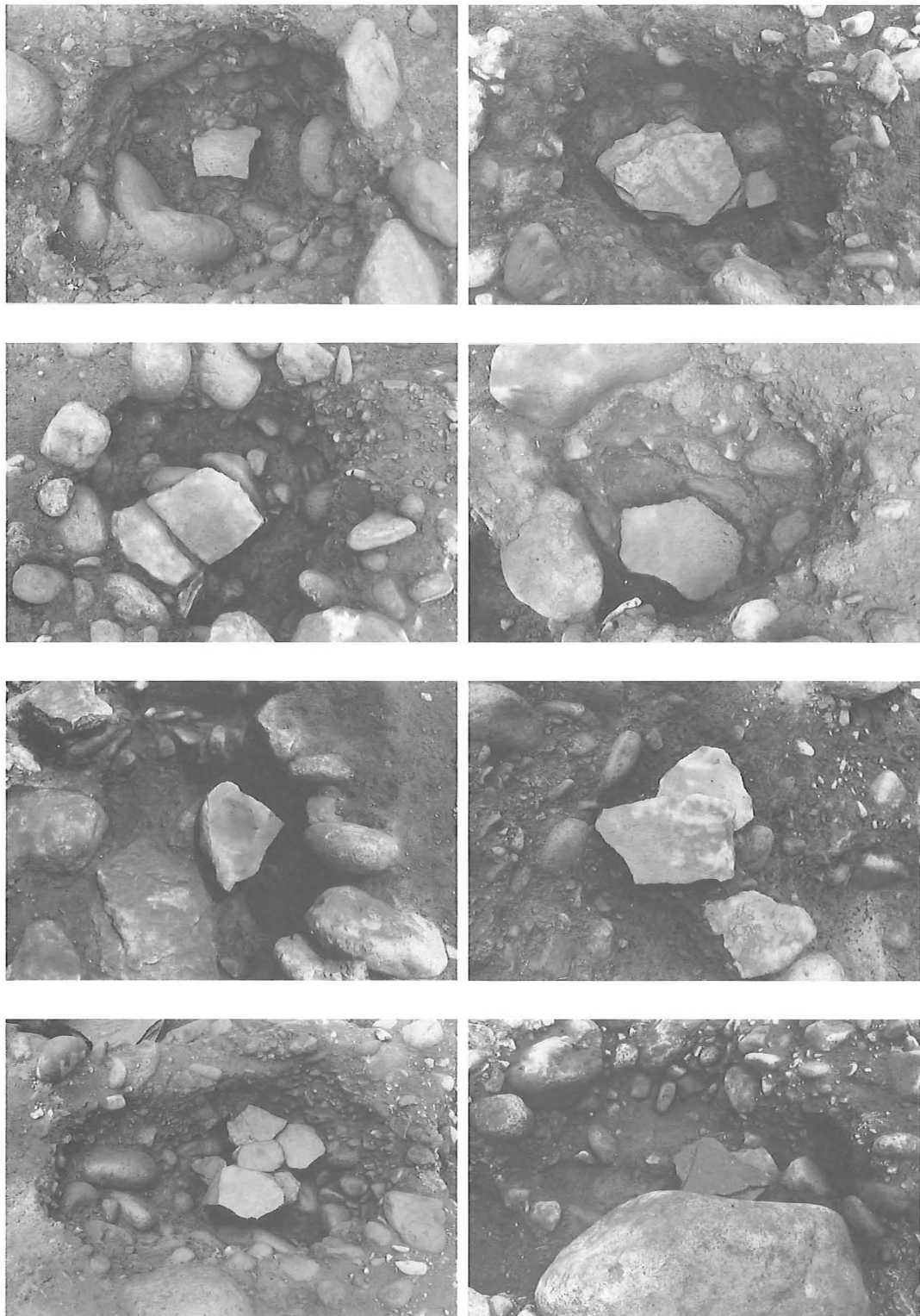


建物跡 (SB 1)



建物跡 (SB 2)





板石を敷く柱穴（第1区）



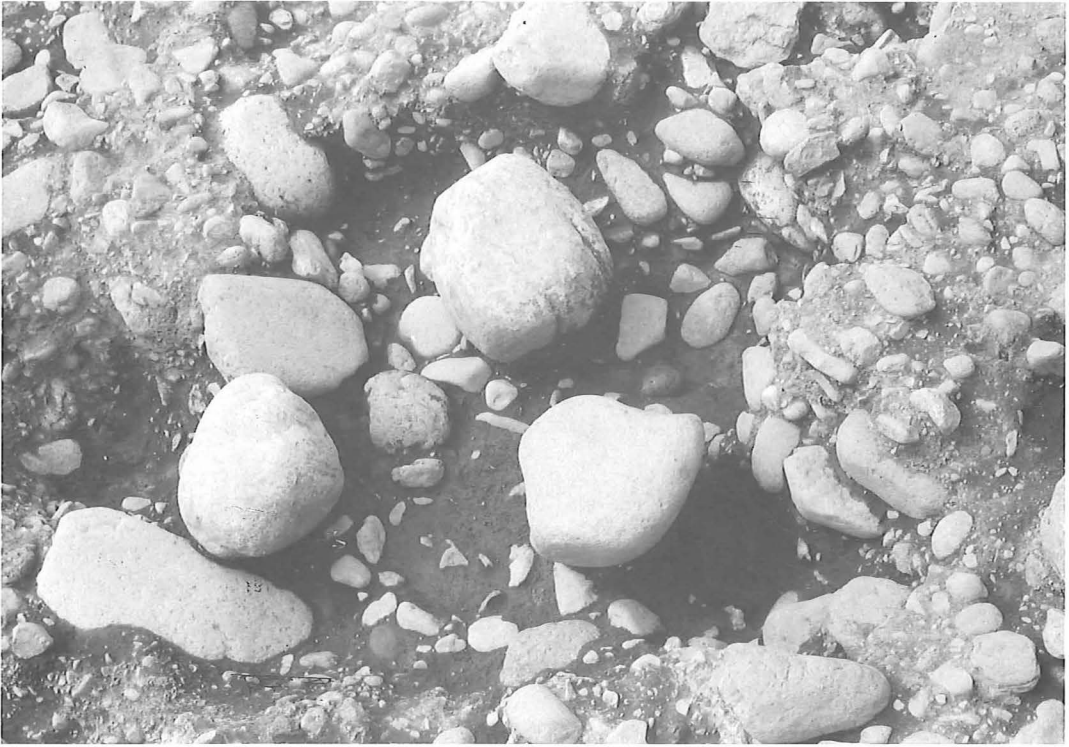
土壌の集石状況 (SK4・SK2)



土壌SK1



土壇SK3



土壙SK 4



線刻石



土壙 SK 5



土壙 SK 6



土壇SK7



割石の状況



五輪塔水輪出土状況



敷石遺構 (S X 2)



凹状の落ち込み (B 7・8区)

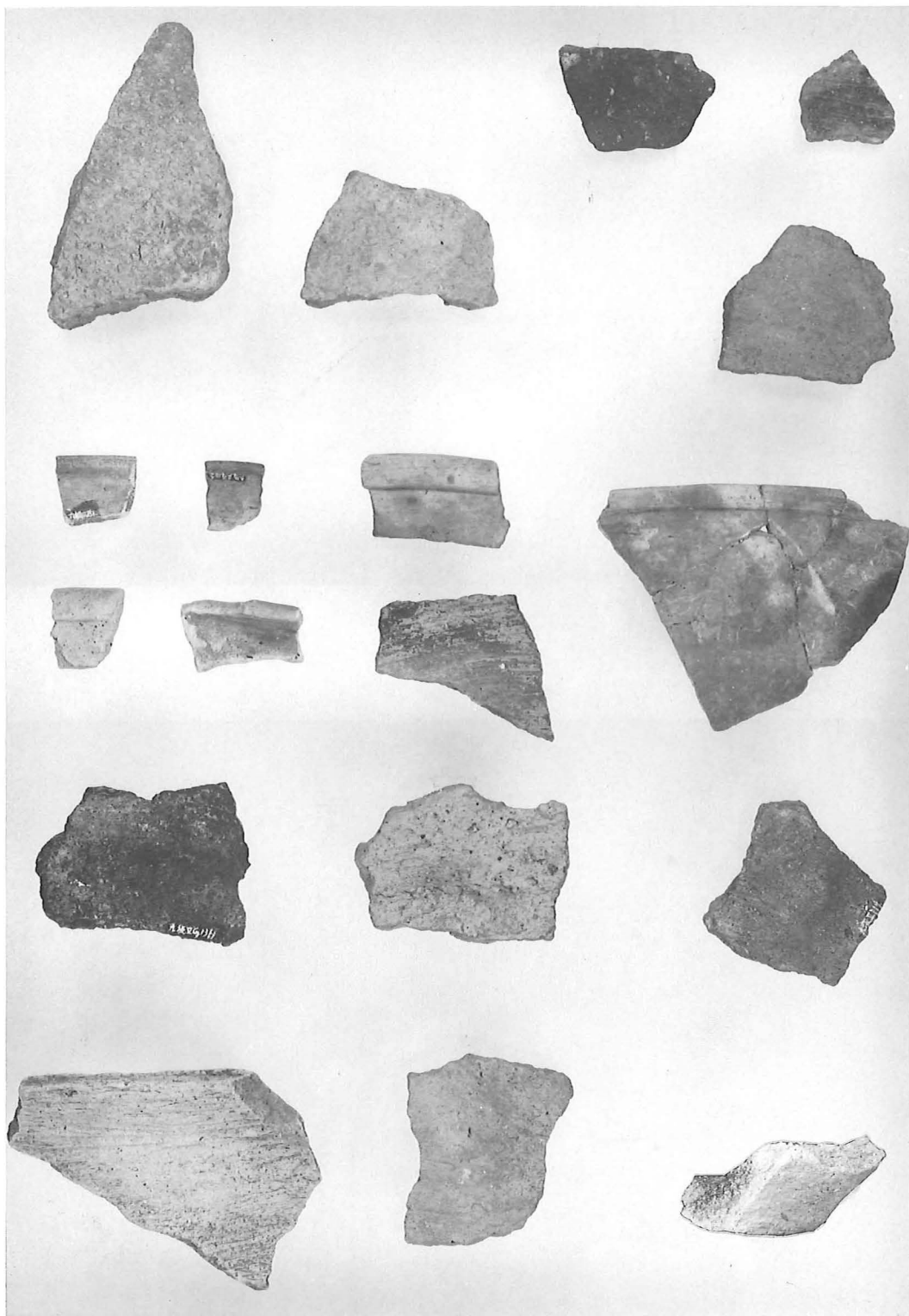




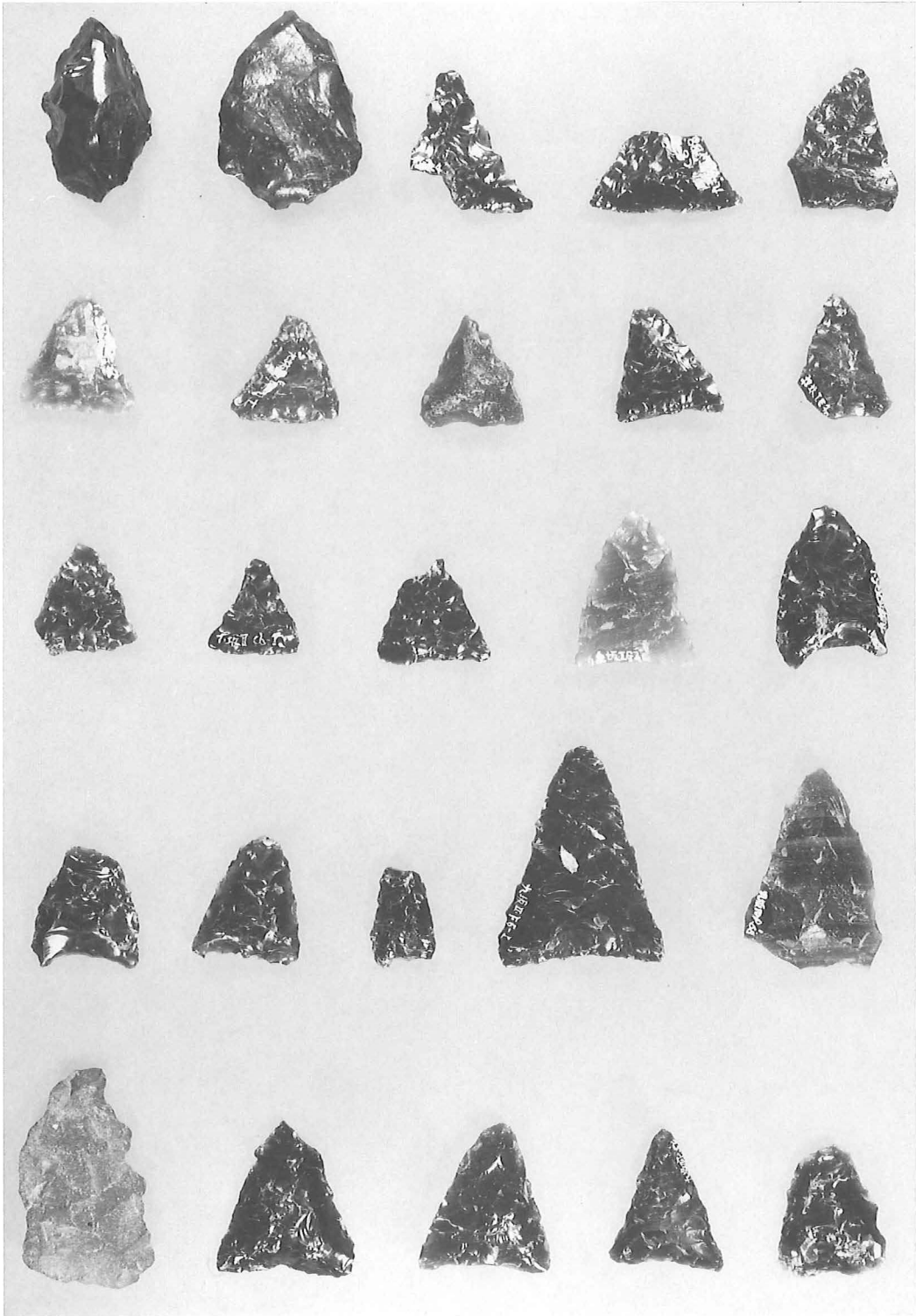
壇状遺構 (S X 3)



石垣 (S X 4)



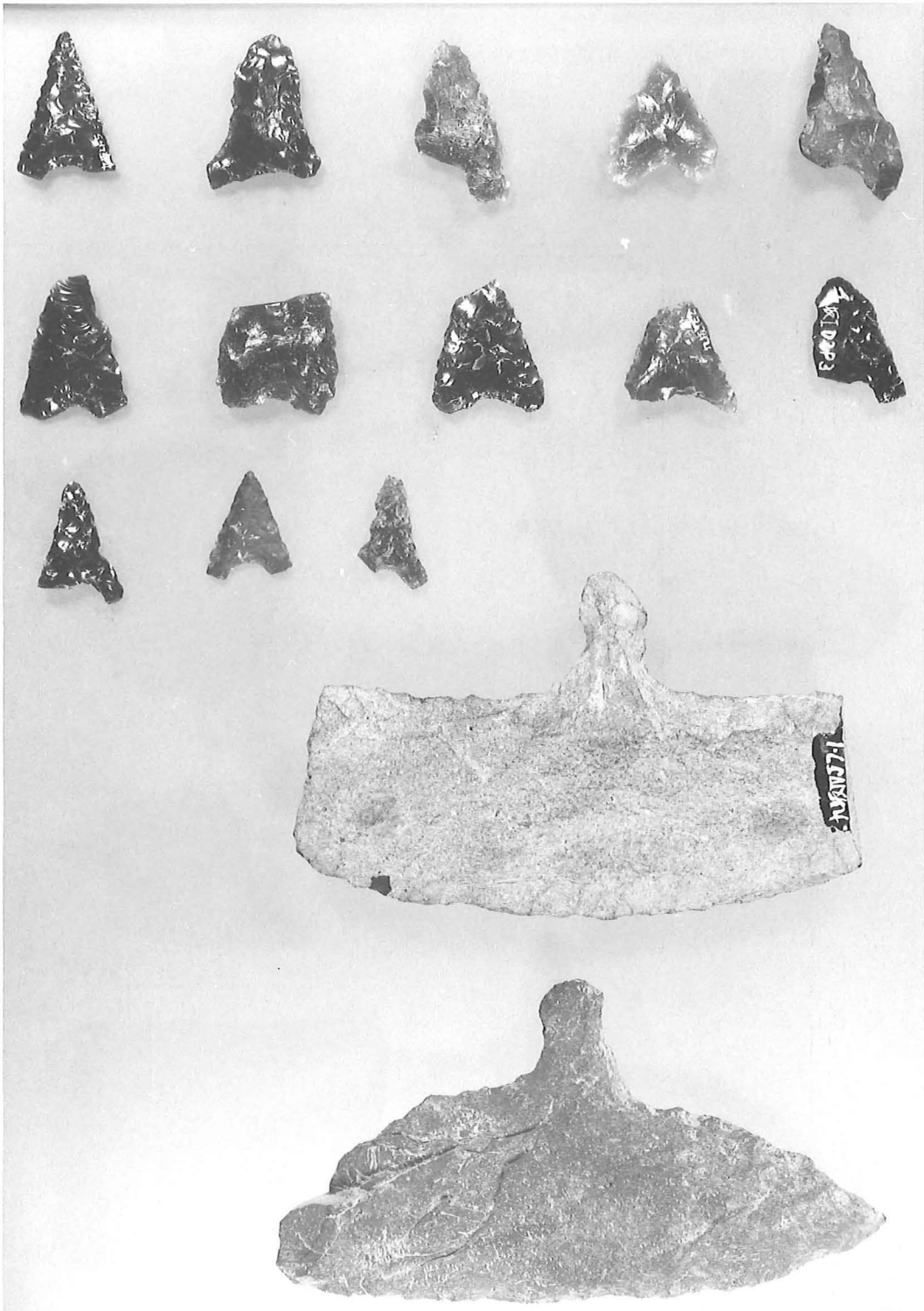
縄文時代の土器



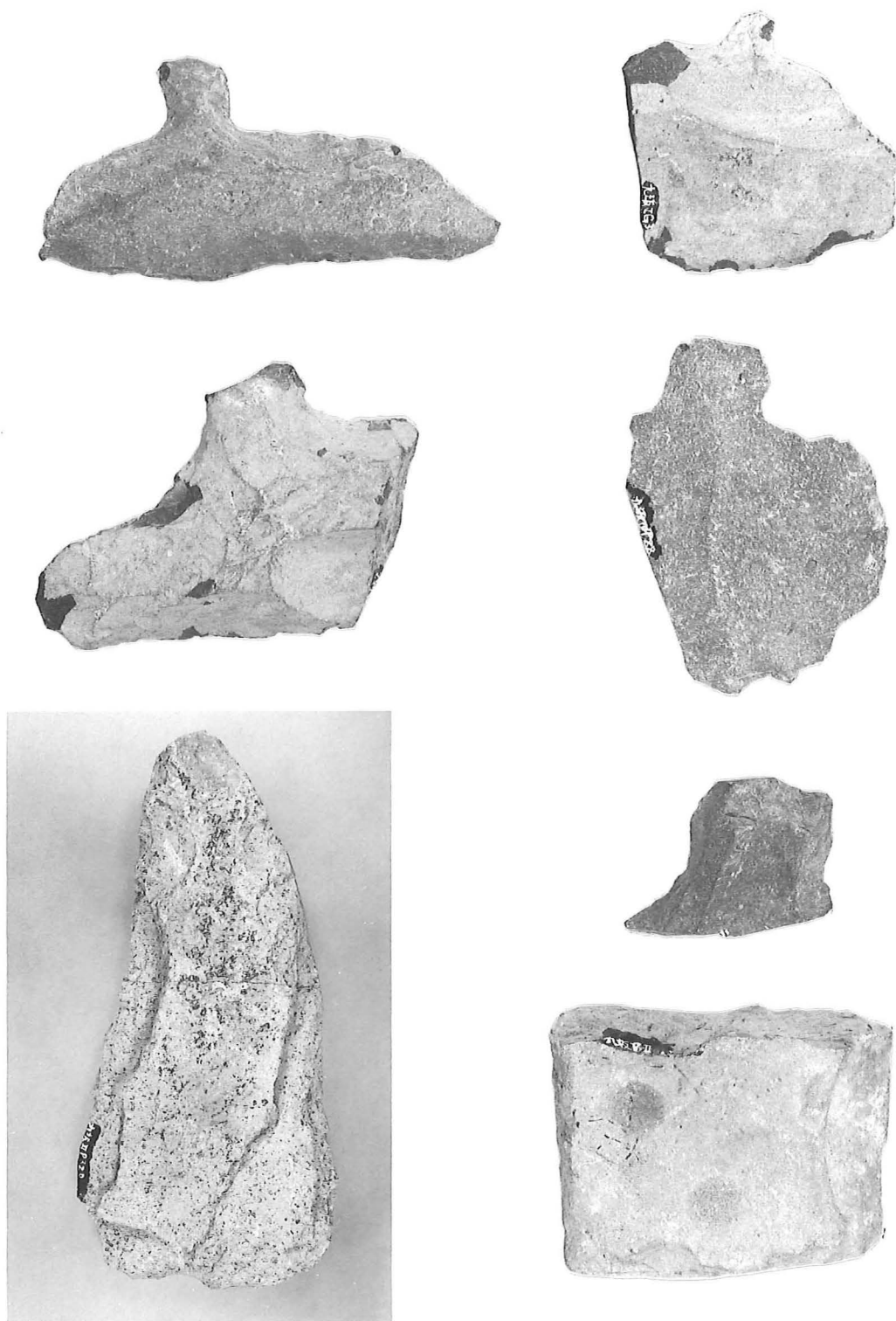
先土器時代・縄文時代の石器①



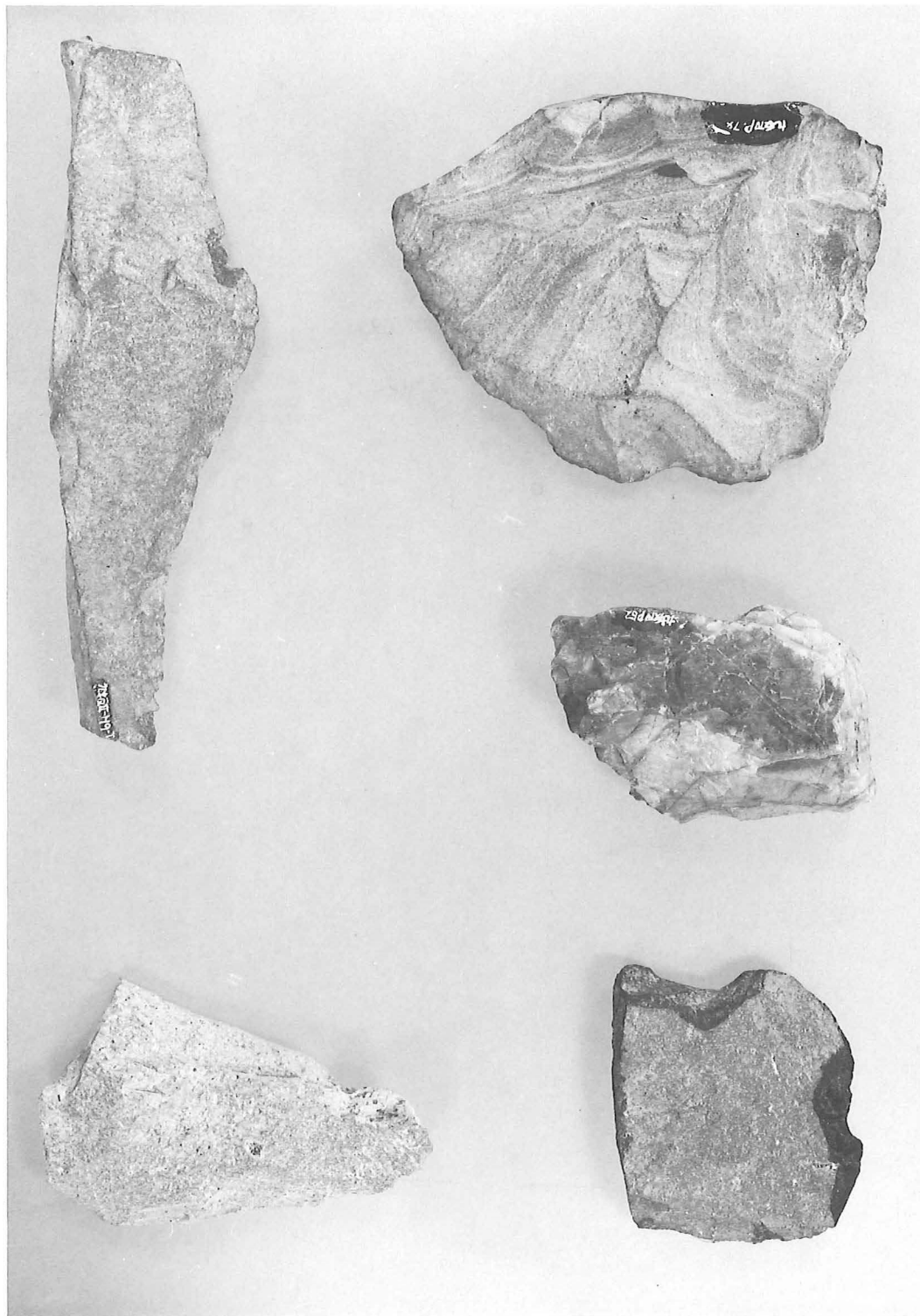
縄文時代の石器②



縄文時代の石器③

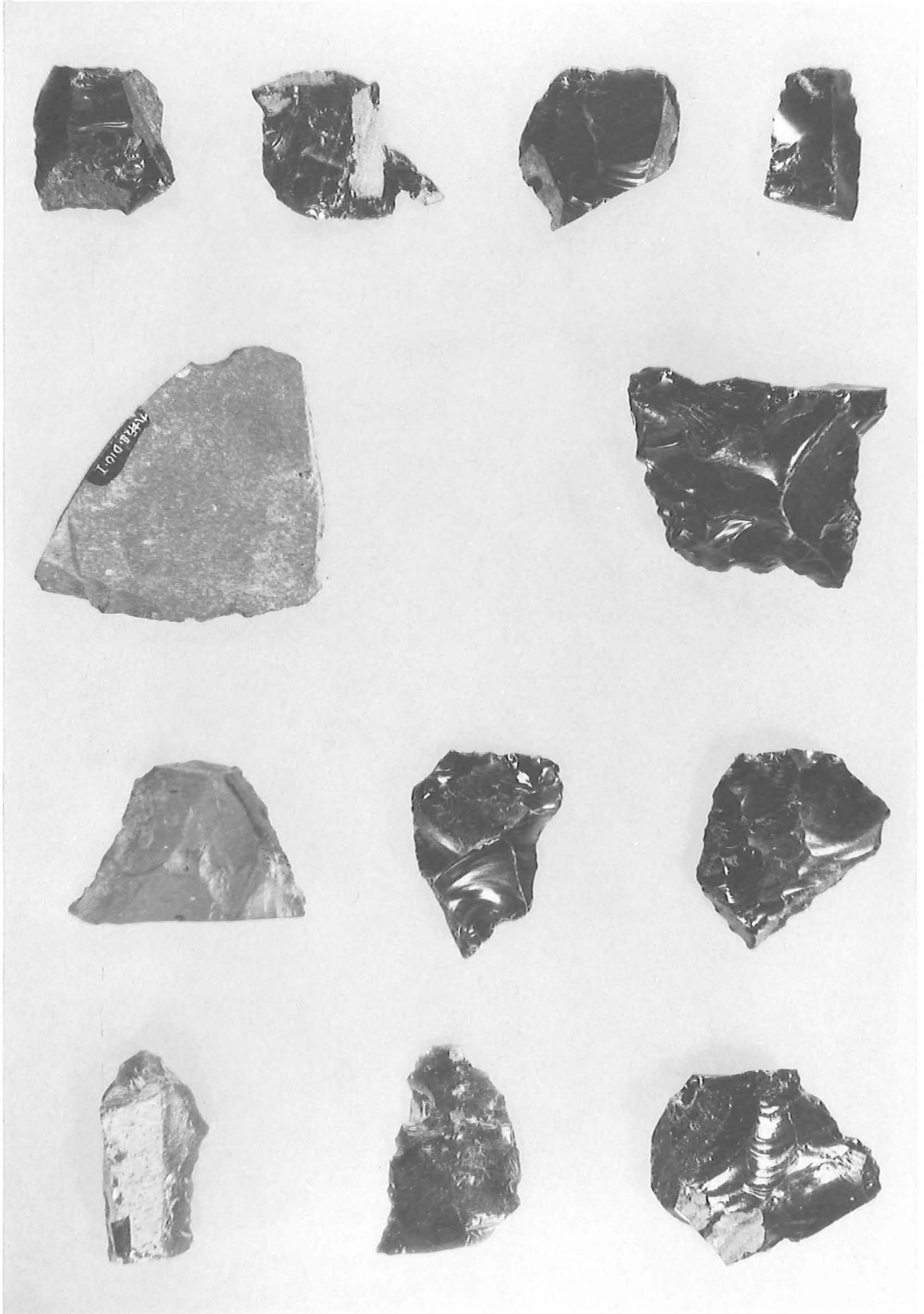


縄文時代の石器④

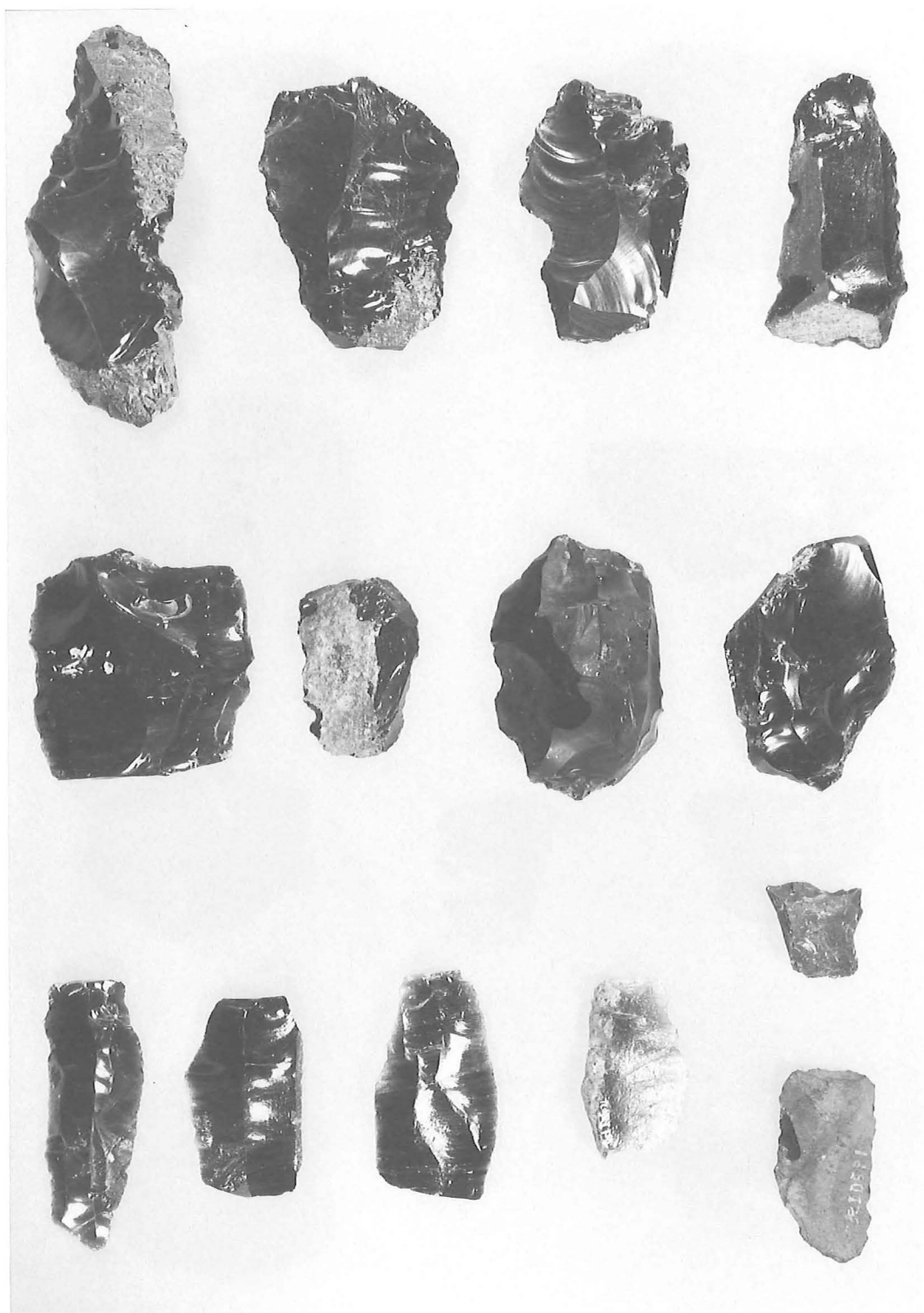


縄文時代の石器⑤

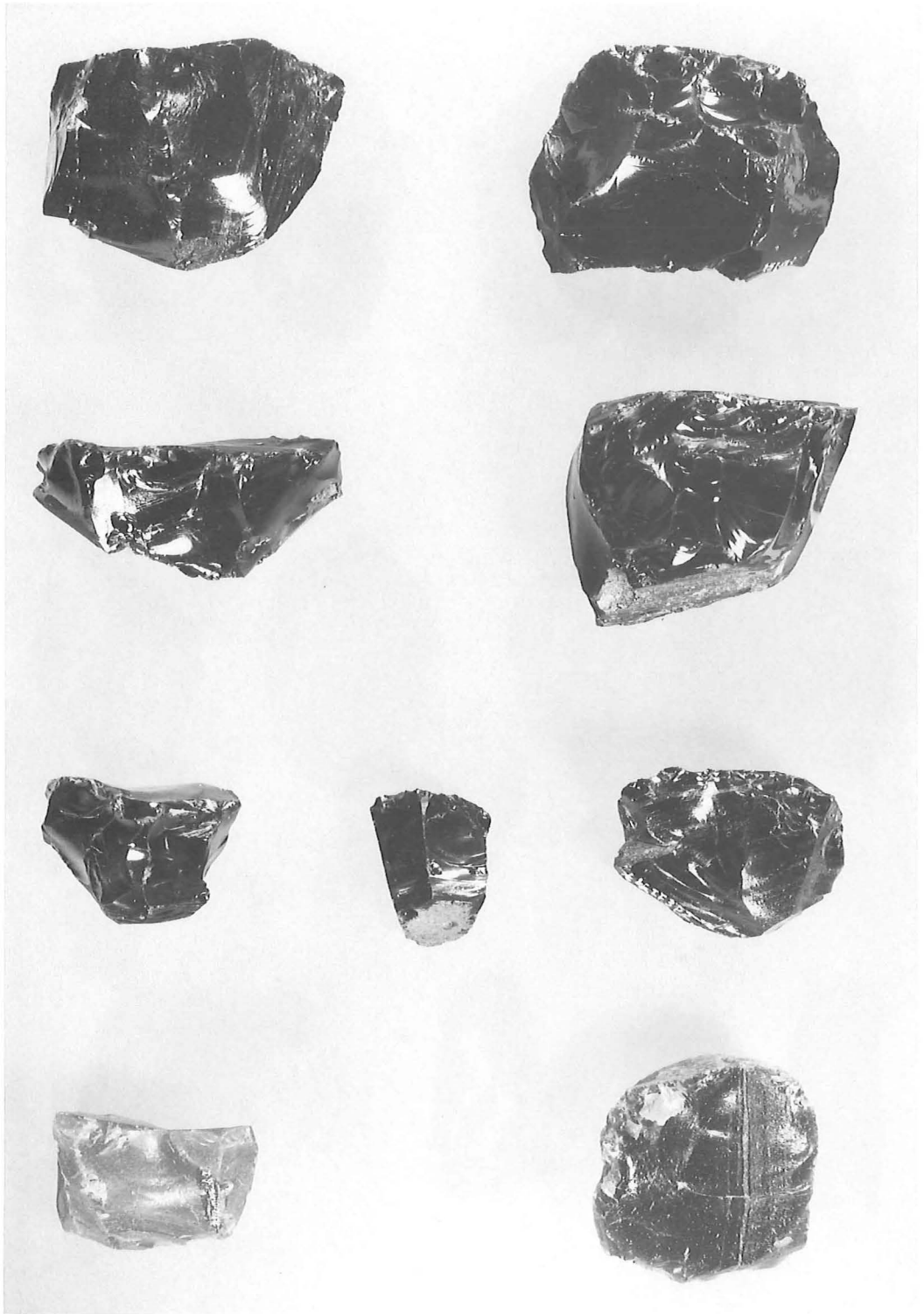




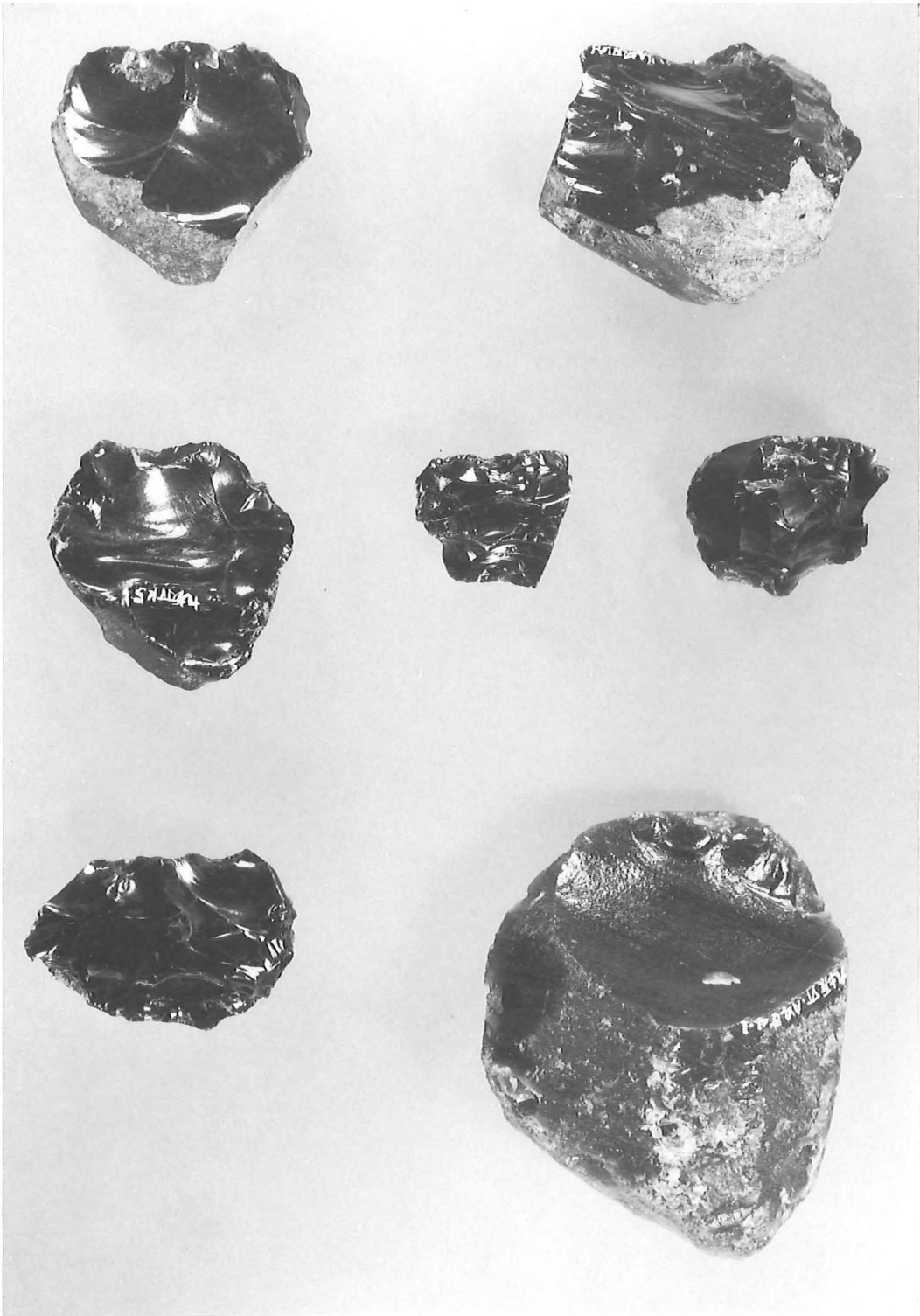
縄文時代の石器⑥



縄文時代の石器⑦



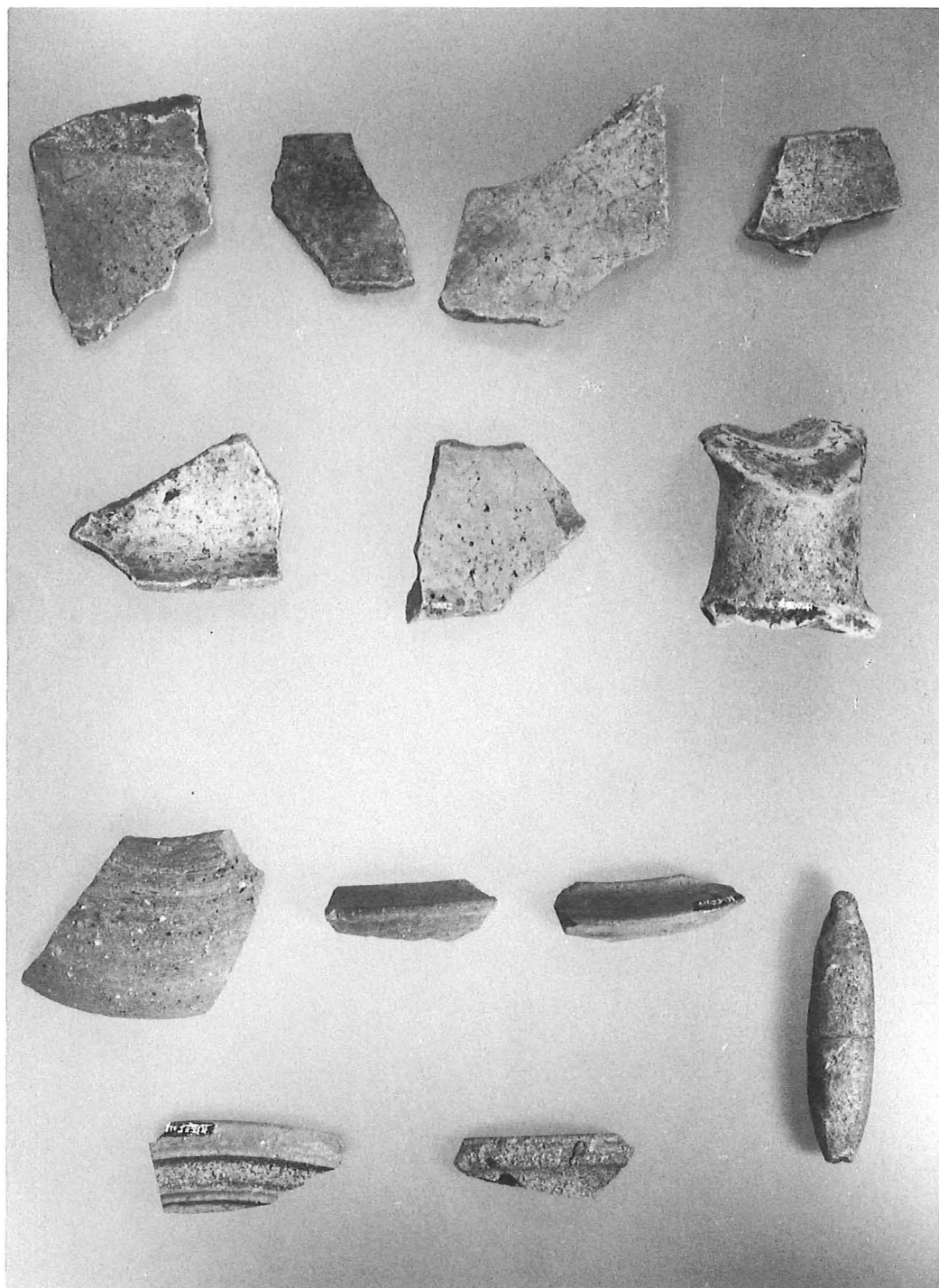
縄文時代の石器⑧



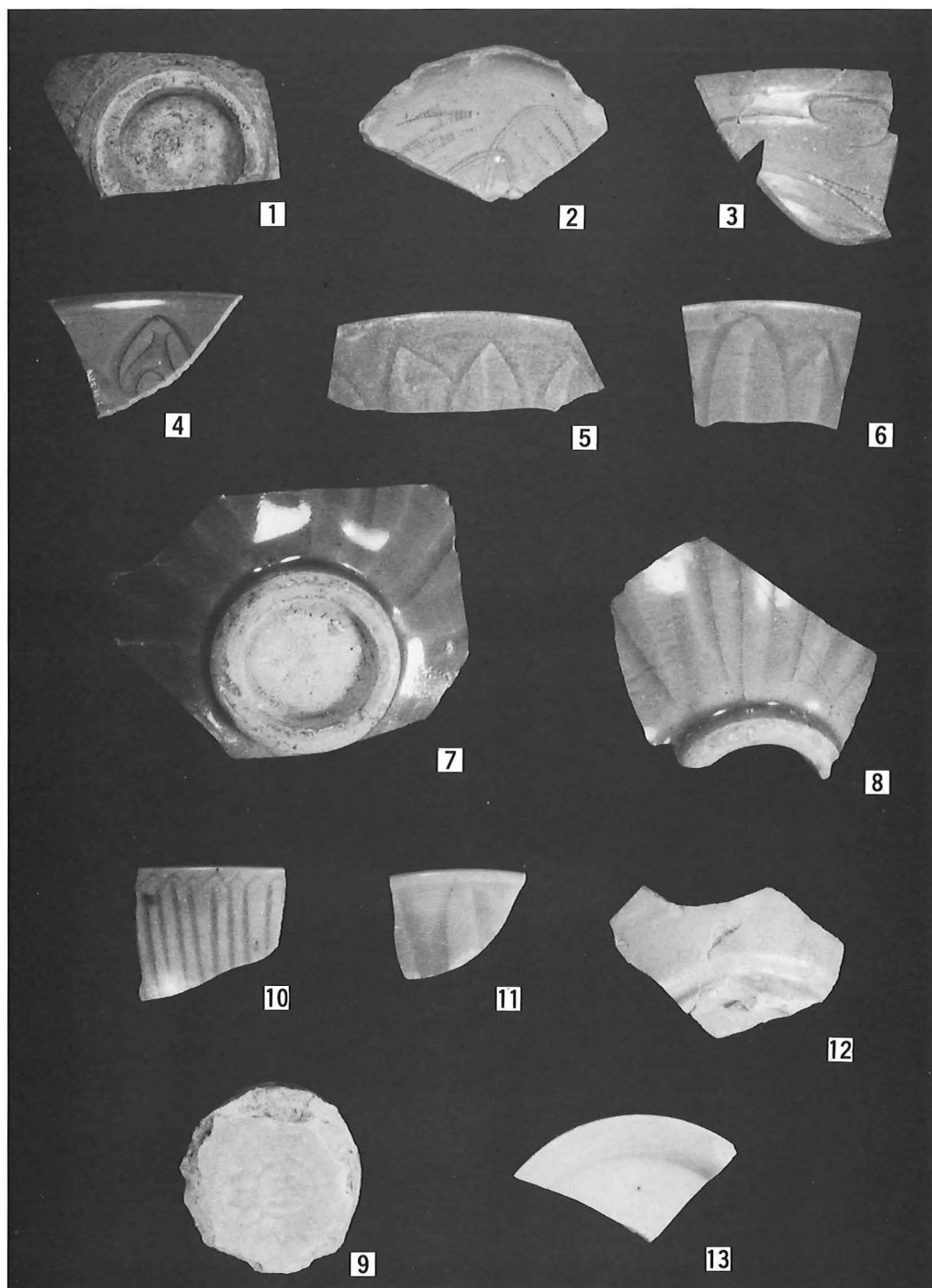
縄文時代の石器⑨



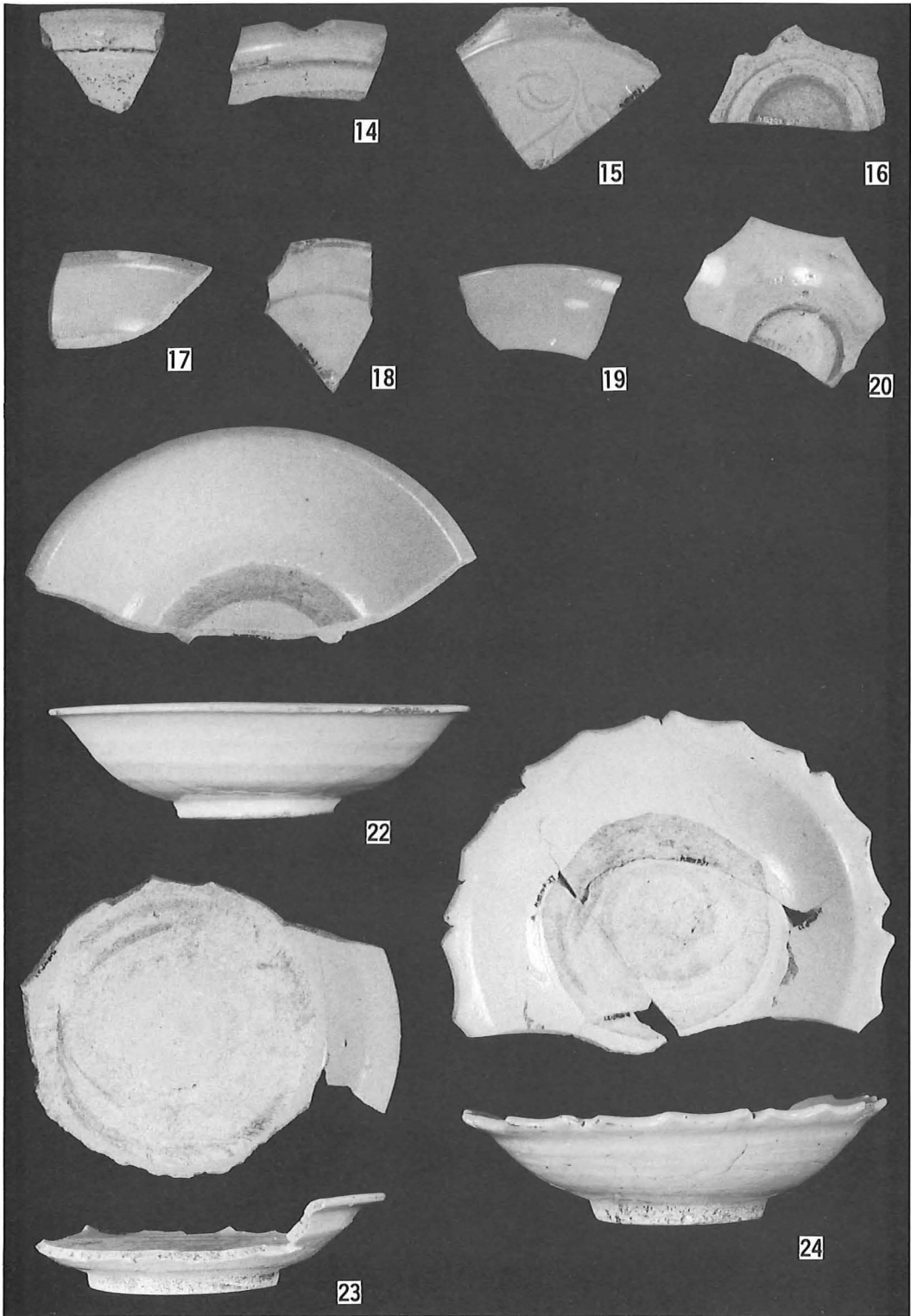
黒曜石原石



弥生～古墳時代の遺物 (1/2)

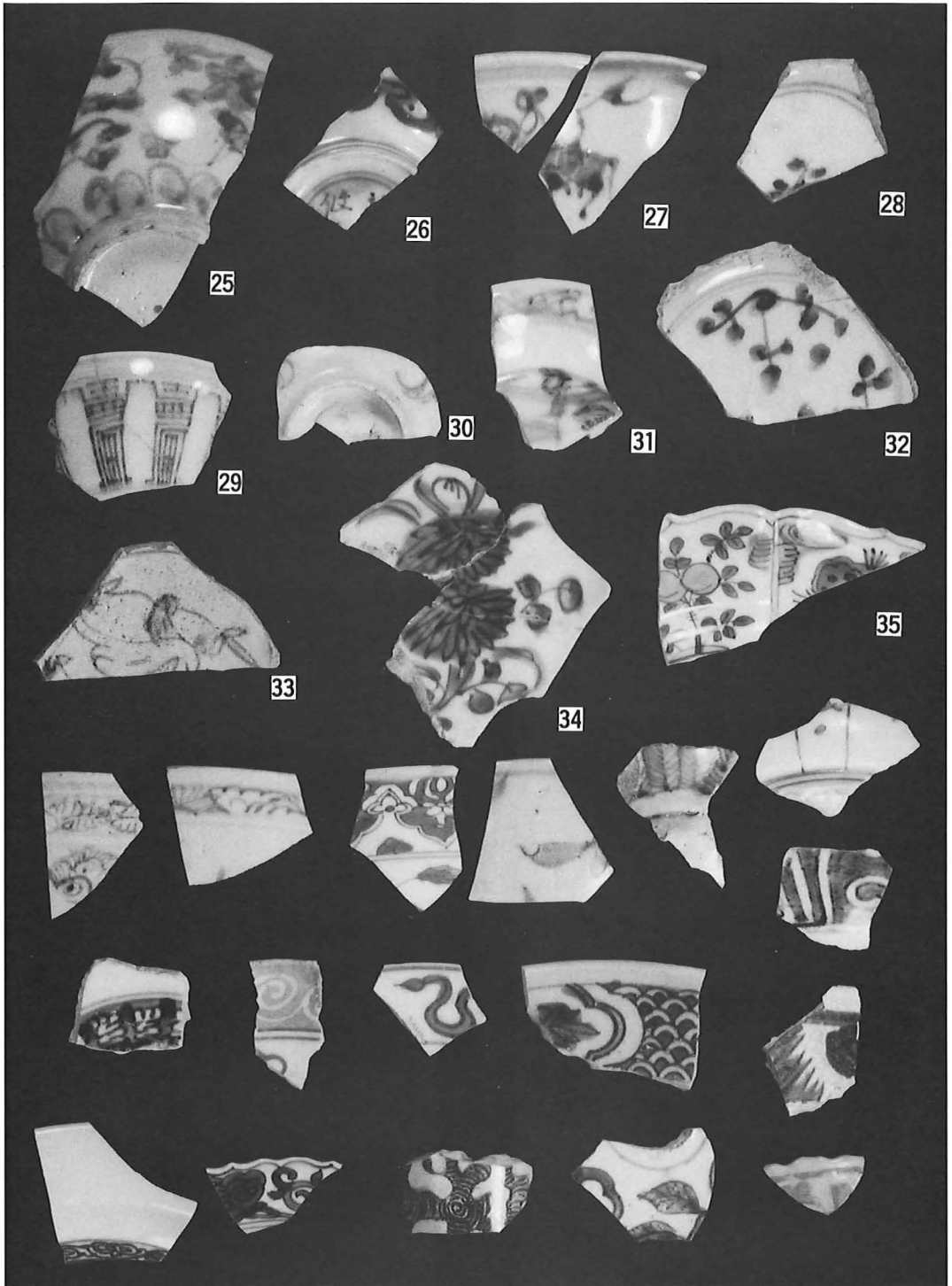


青磁 (1/2)

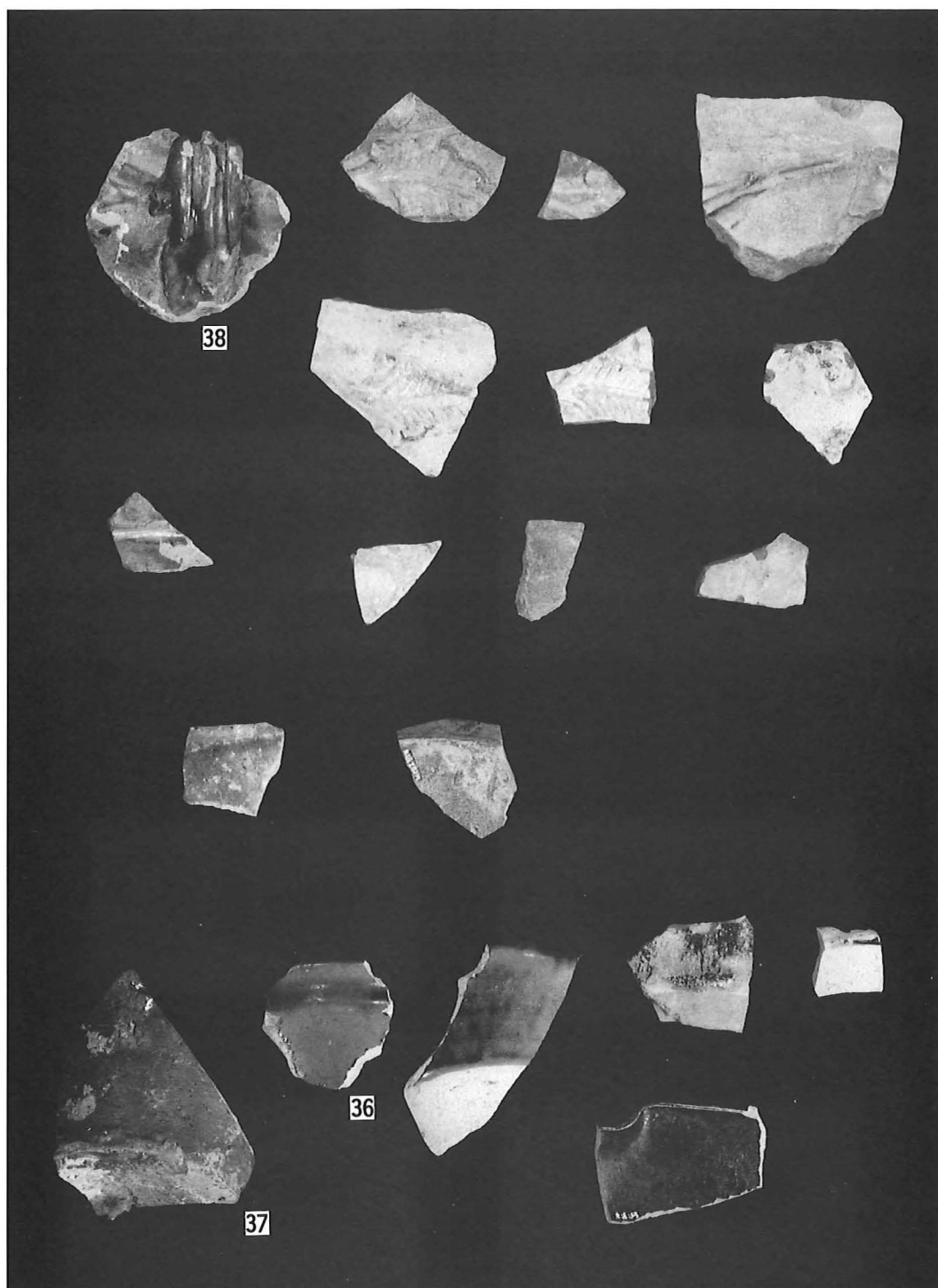


白磁 (1/2)

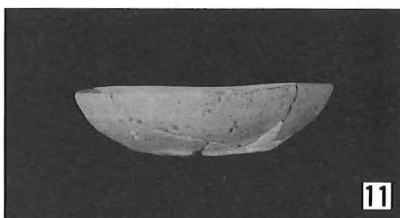
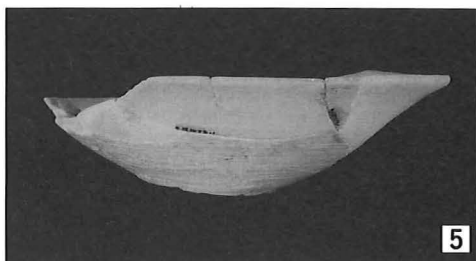
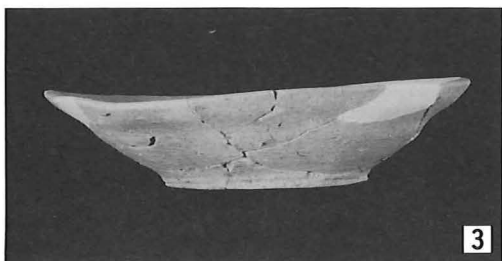
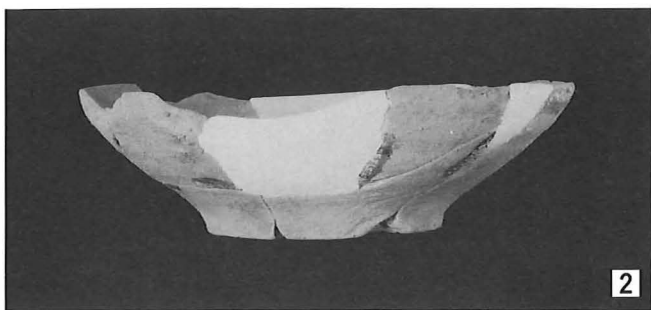




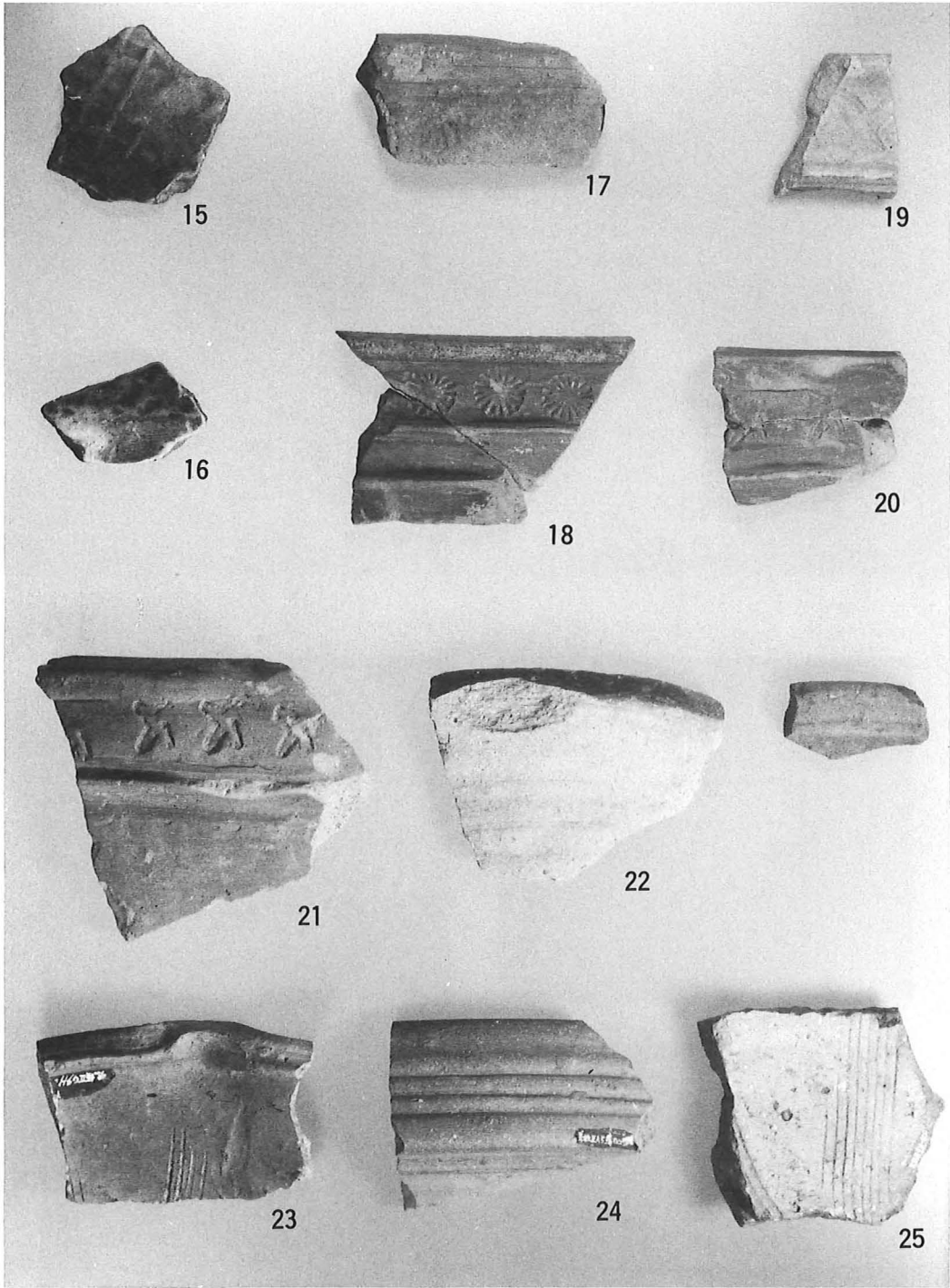
明染付 (1/2)



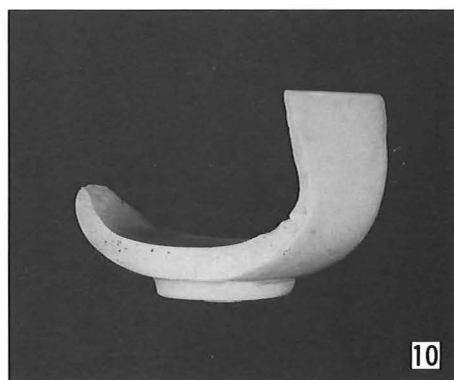
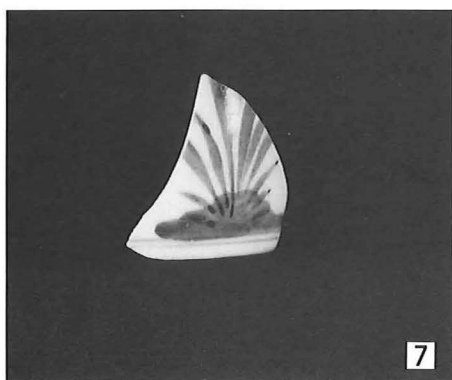
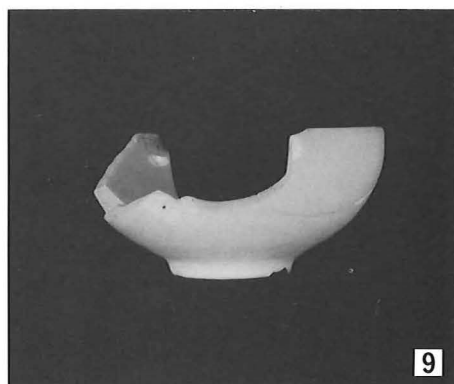
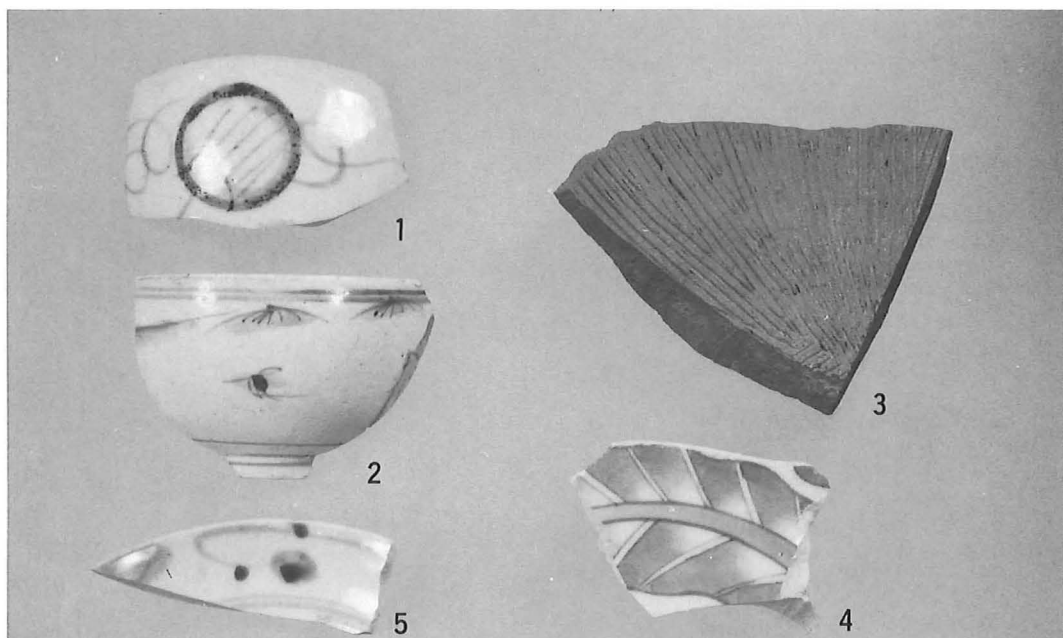
輸入陶器 (1/2)



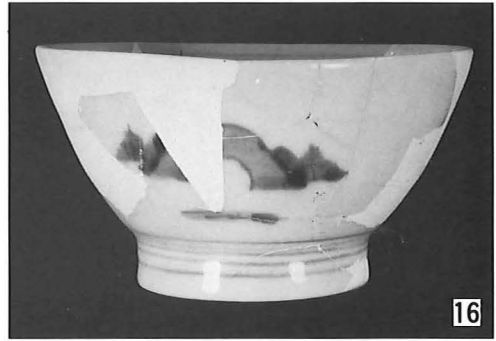
土師質土器 (1/2)



瓦器・陶器 (1/2)



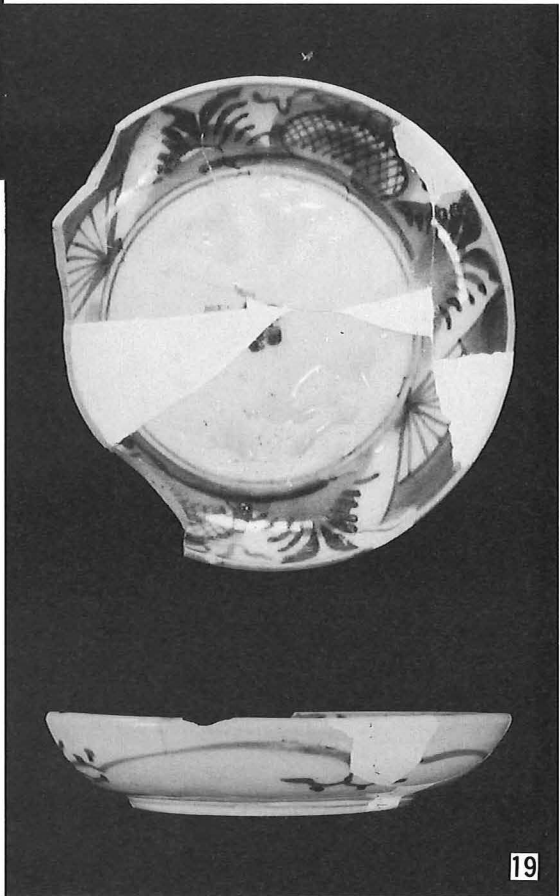
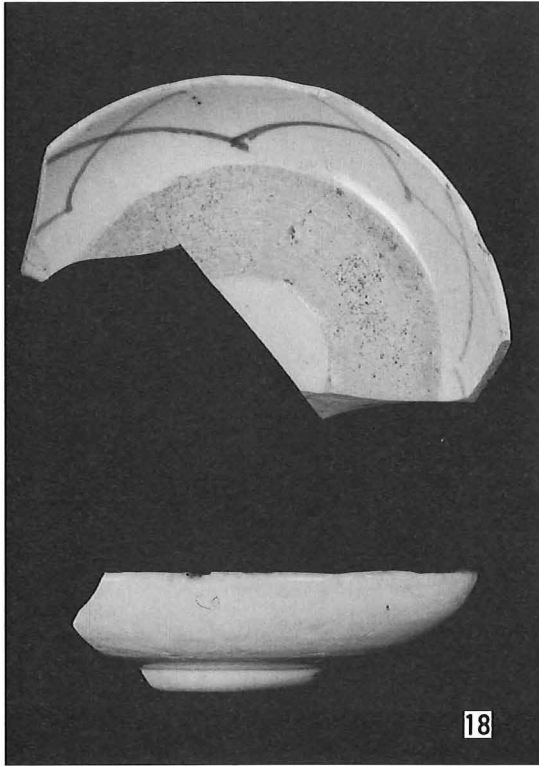
近世陶磁器① (1/2)



近世陶磁器② (1/2)

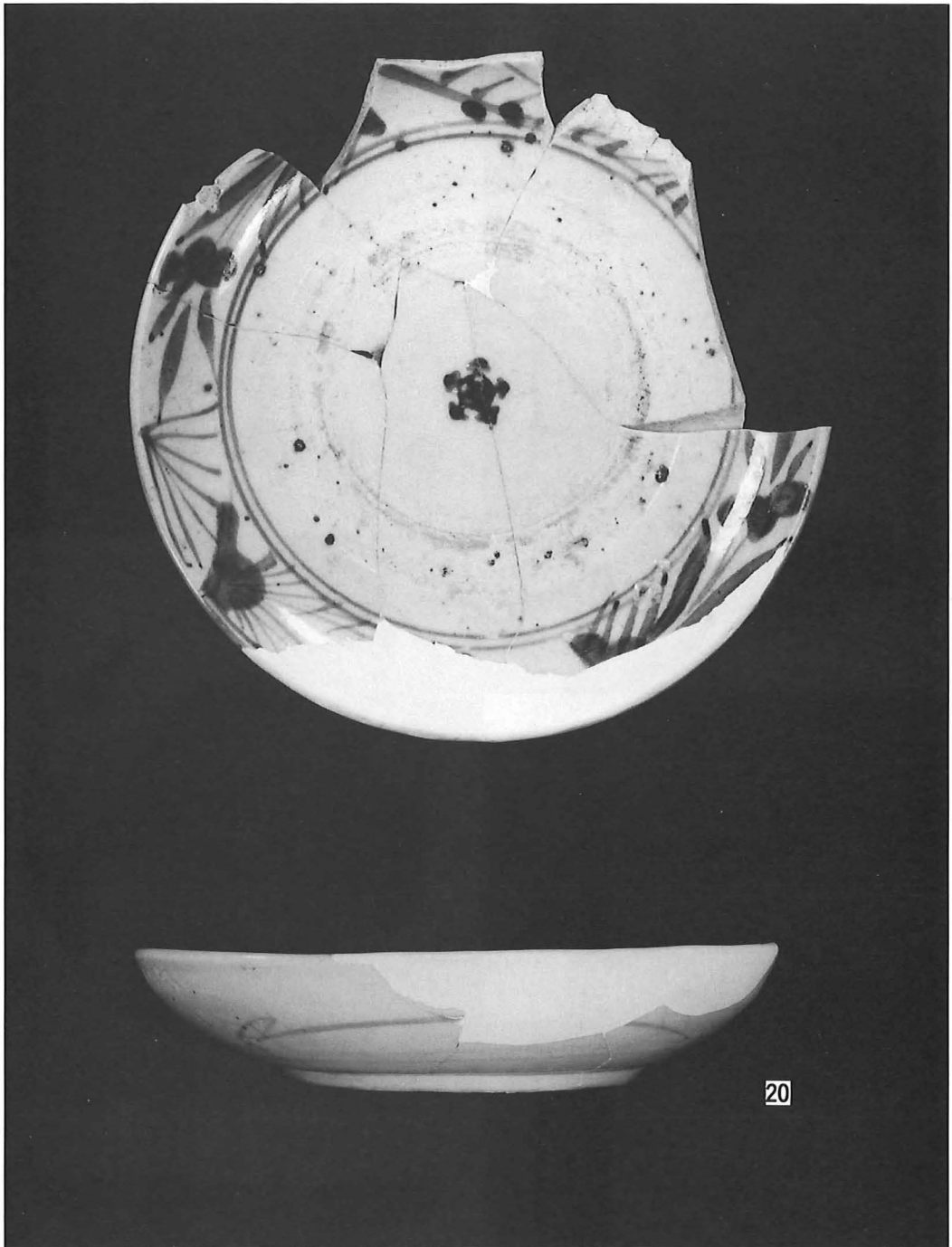


近世陶磁器③ (1/2)

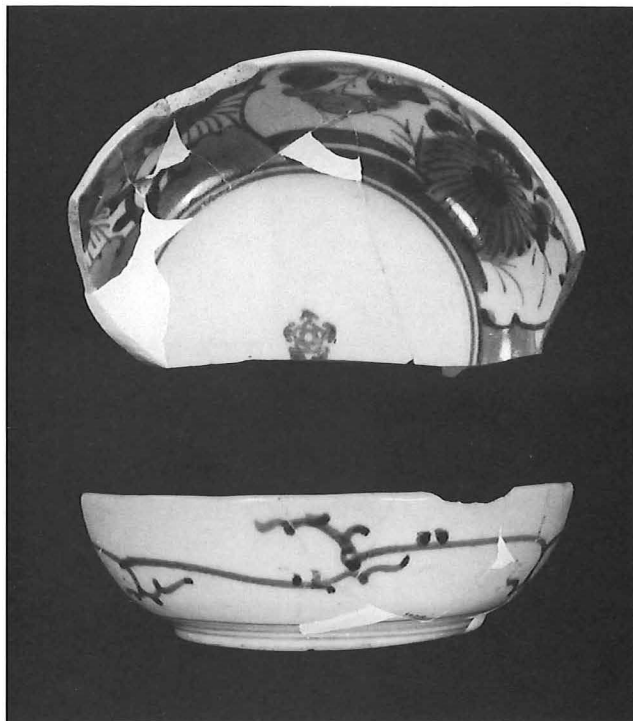


近世陶磁器④ (1/2)

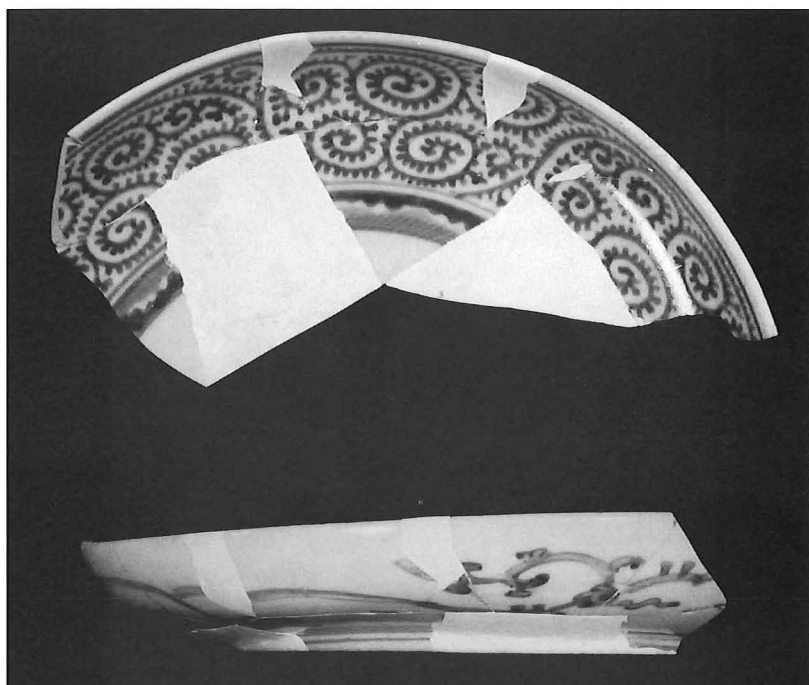




近世陶磁器⑤ (1/2)

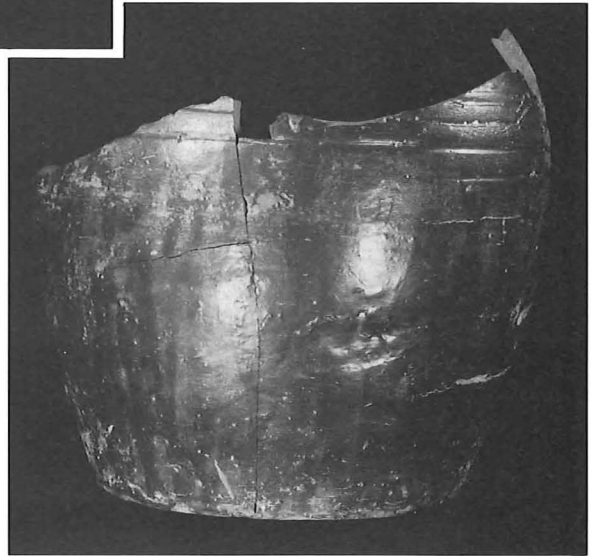
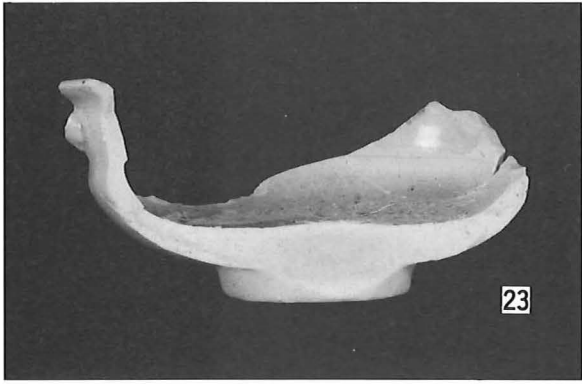


21



22

近世陶磁器⑥ (1/2)



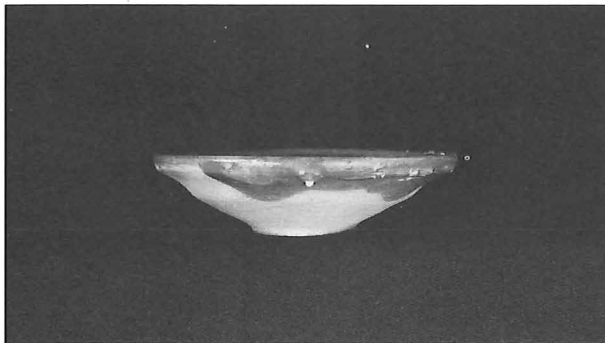
S K 6



近世陶磁器⑦ (1/2)

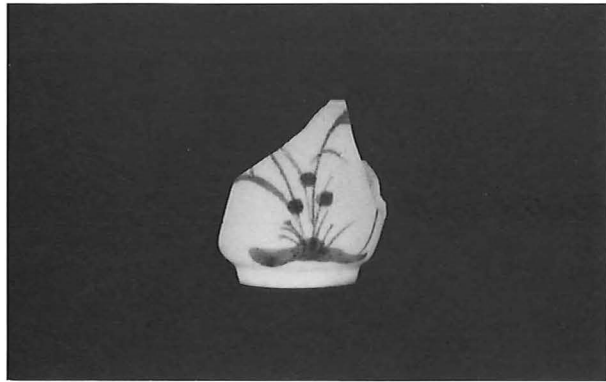


26



34

近世陶磁器® (1/2)



27

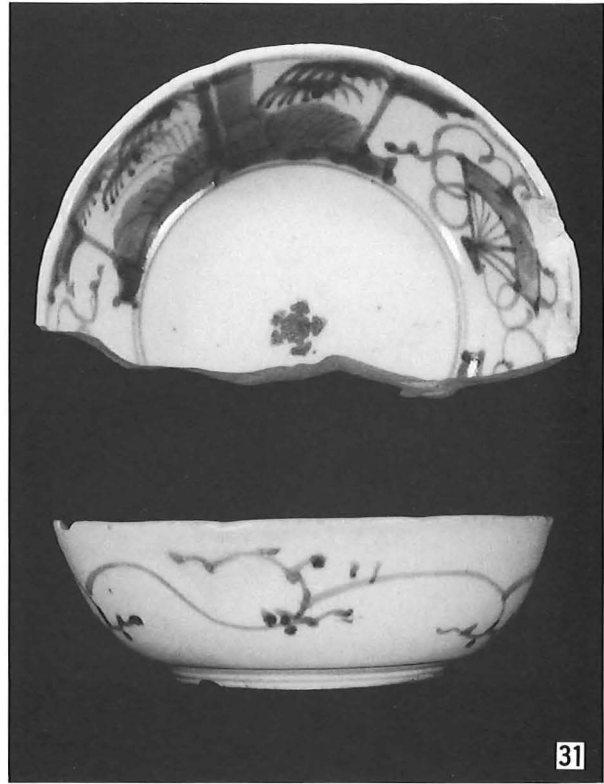


29

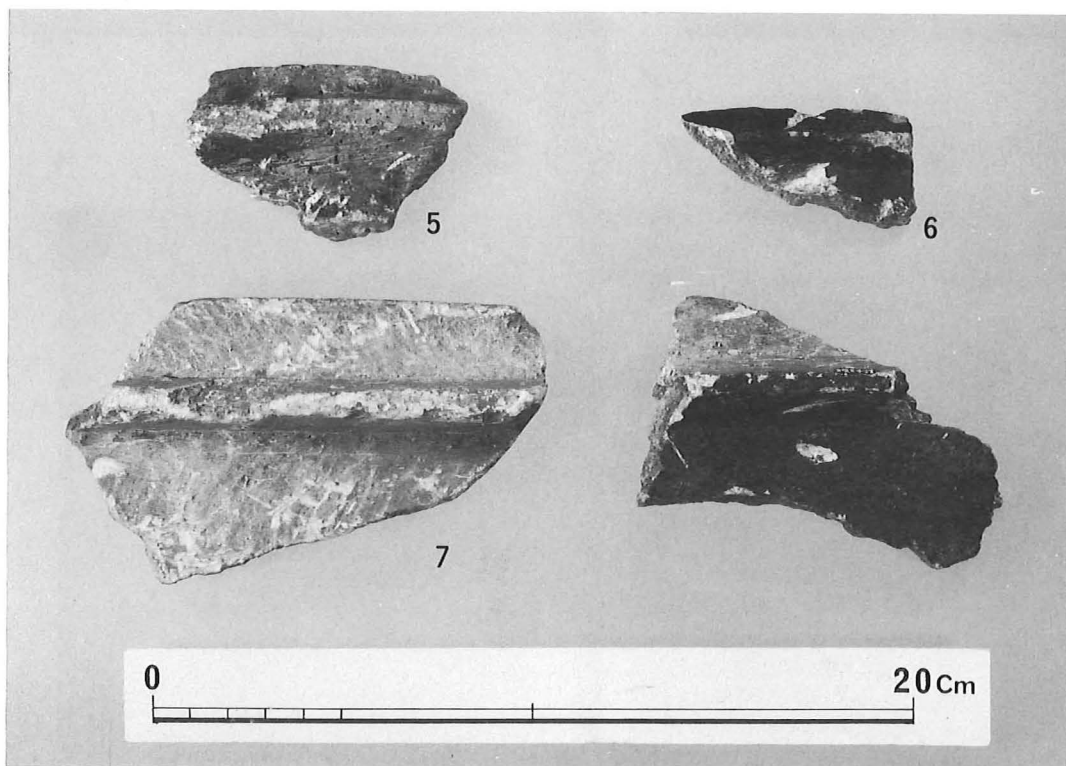
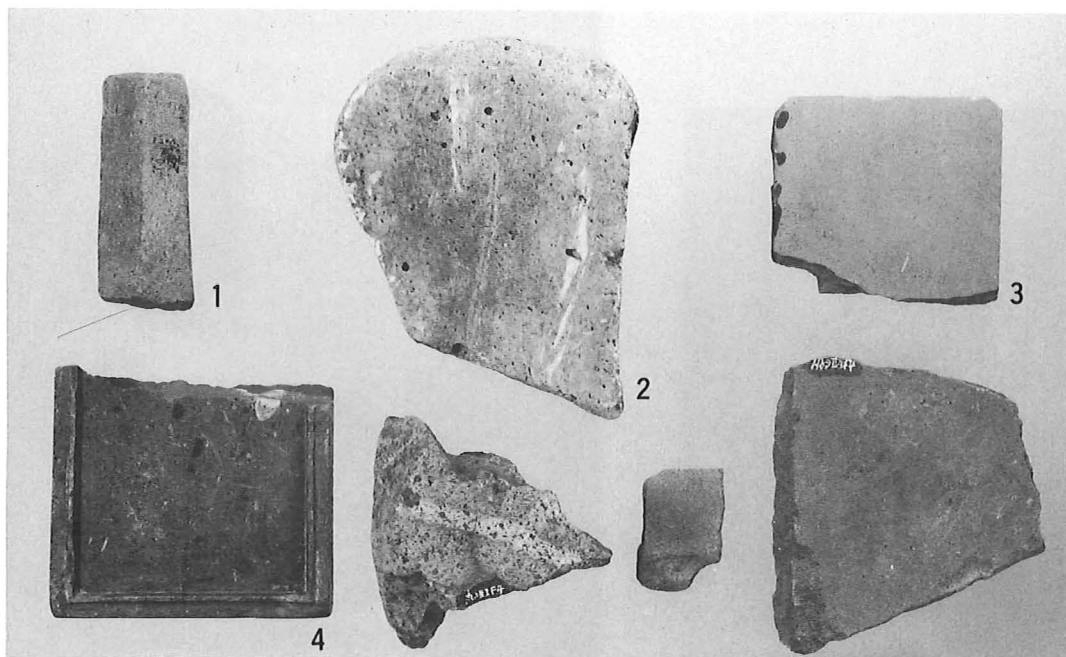


30

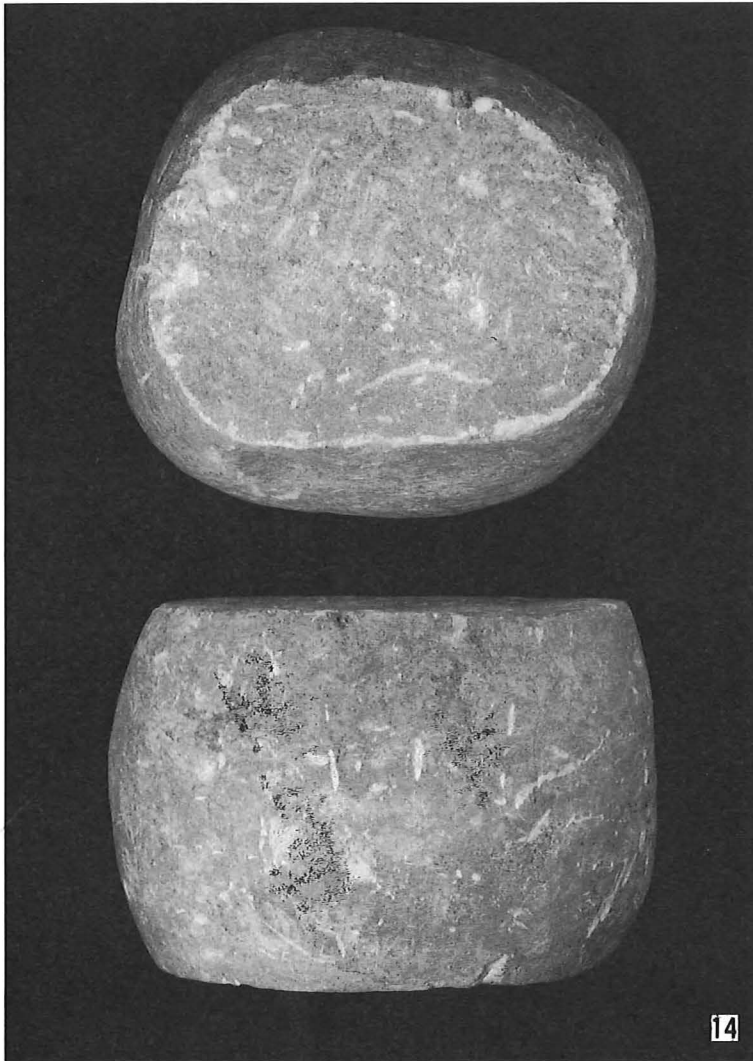
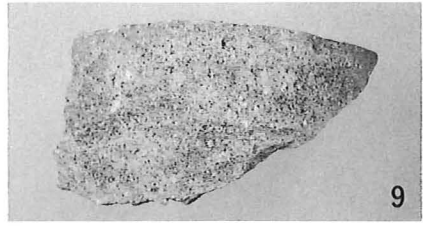
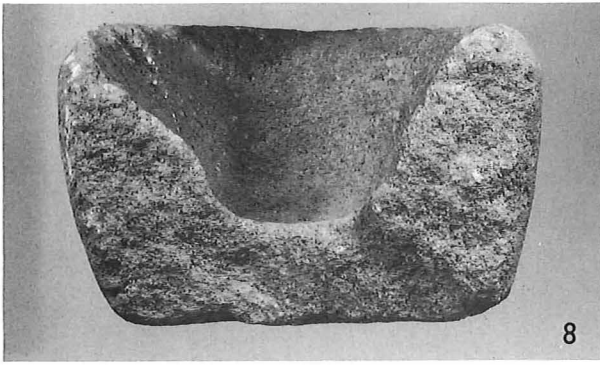
近世陶磁器⑨ (1/2)



近世陶磁器⑩ (1/2・1/3)

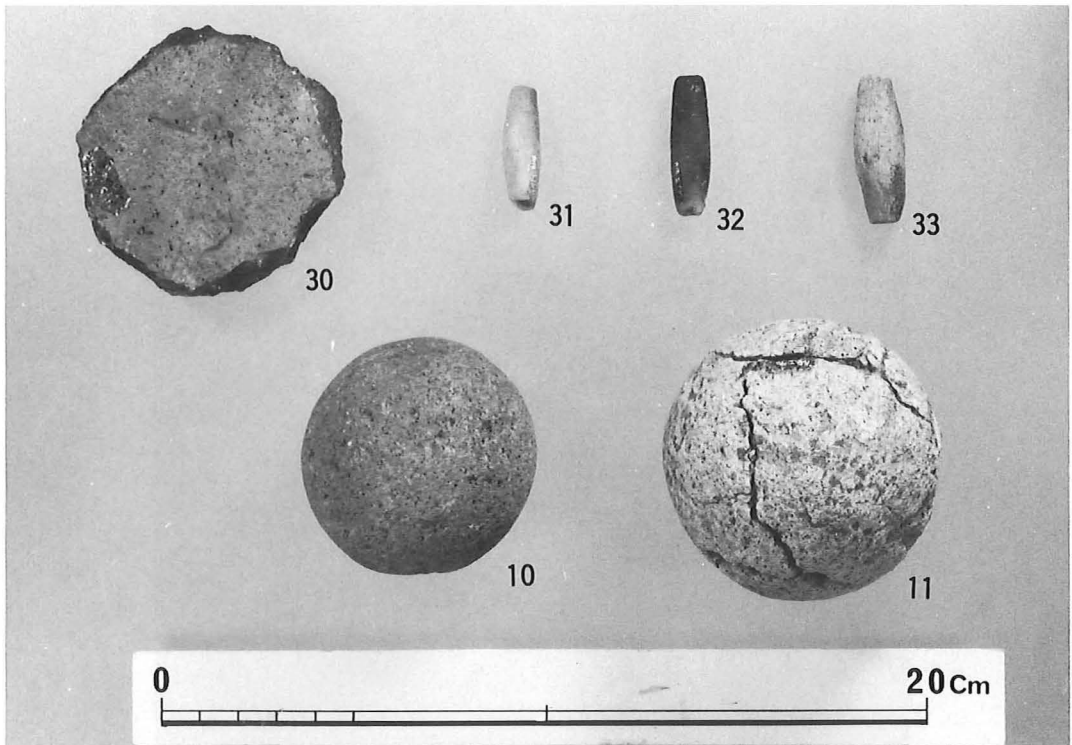
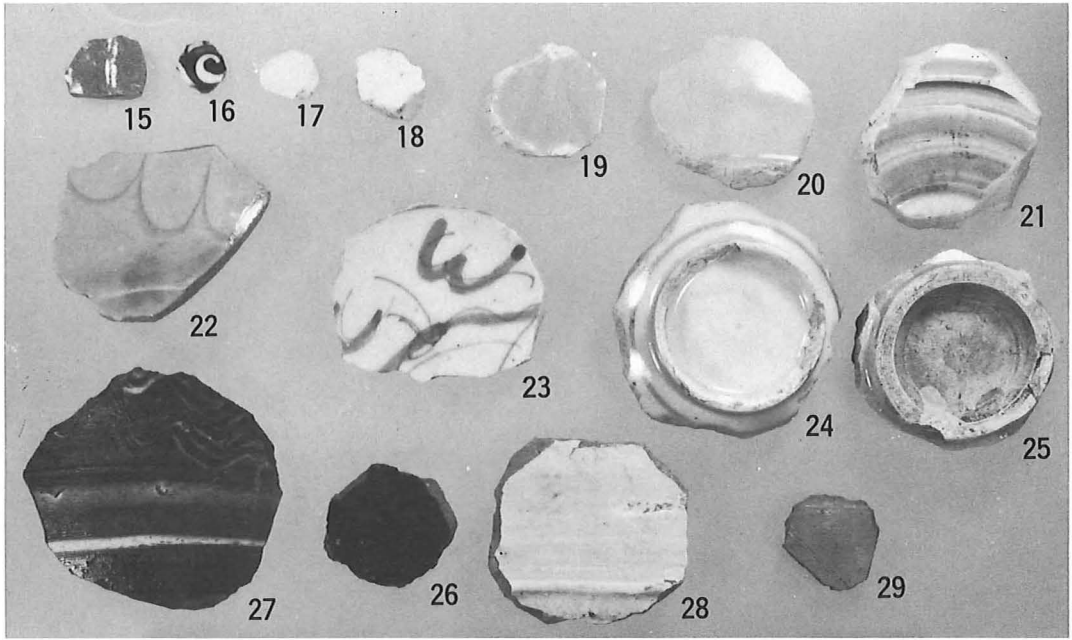


石製品① (1/2)

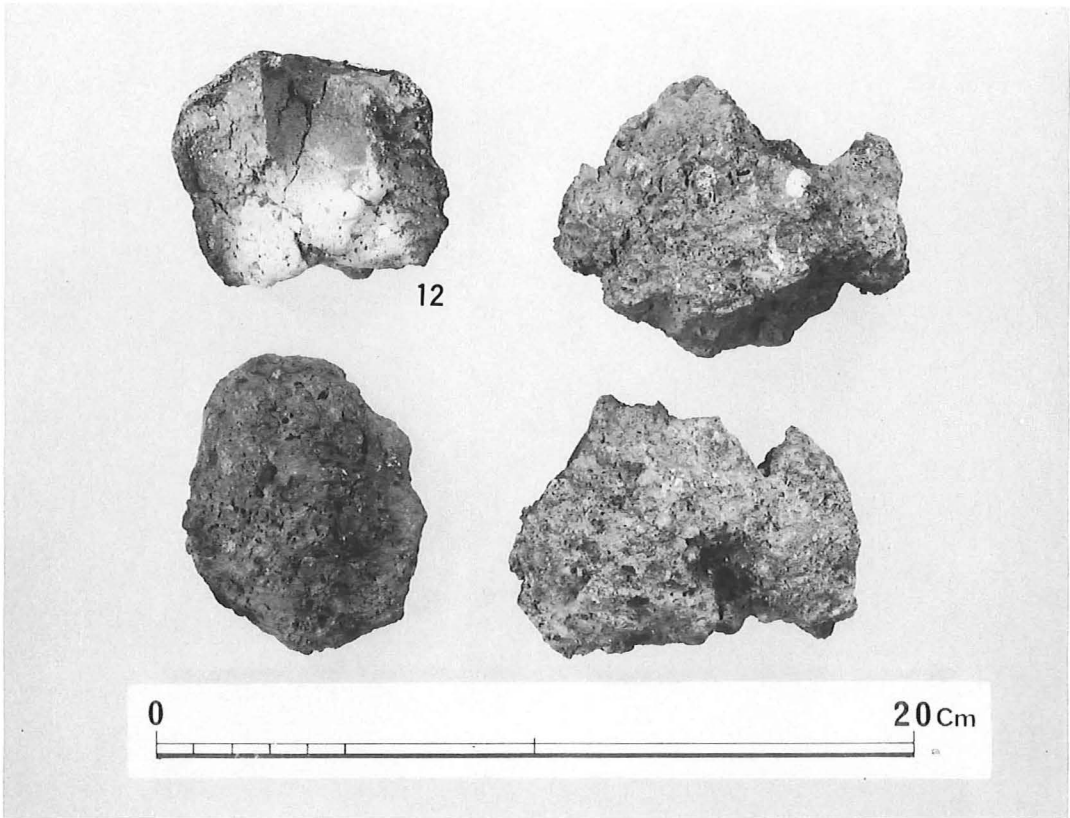
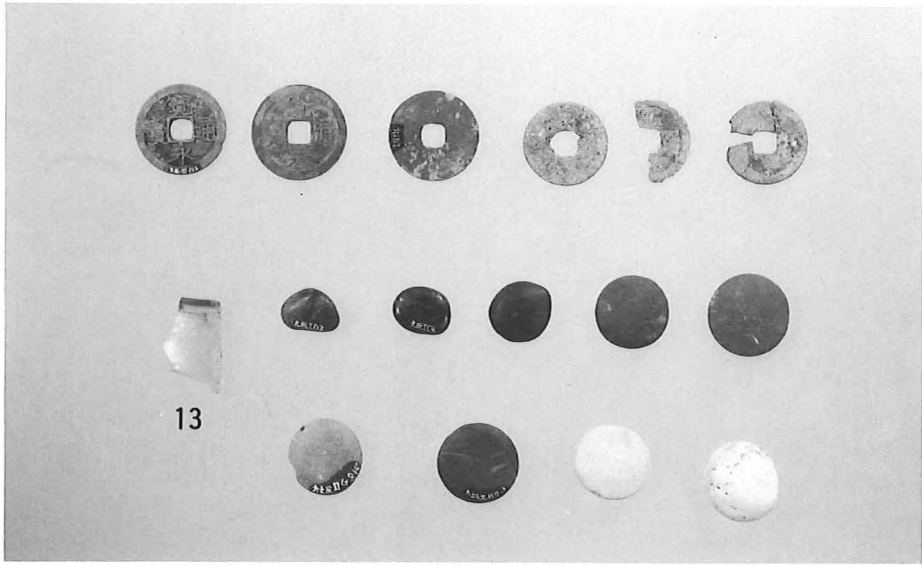


石製品② (1/2・1/3)





石製品③、円盤状陶磁製品、土製品 (1/2)



古銭、ガラス製品、基石、製鉄遺物 (1/2)

### 3. 上八竜遺跡



## 本文目次

I 調査	191
1. 地理的位置	191
2. 調査の概要	191
3. 土層	195
II 遺構	195
1. ピット群	195
2. 性格不明の落ち込み	197
III 出土遺物	197
1. 旧石器時代の遺物	197
2. 縄文時代の遺物	197
① 石器	197
② 土器	205
3. 弥生時代の遺物	206
① 石器	206
② 土器	207
4. 古墳時代の遺物	207
5. 輸入陶磁器	207
6. その他の遺物	207
7. 線刻仏	207
8. 上八竜遺跡出土の黒曜石について	212
IV 総括	212

## 挿図目次

Fig. 1 遺跡地形図 (1/2,000)	191
Fig. 2 調査区配置図 (1/1,500)	192
Fig. 3 土層図 (1/80)	193・194
Fig. 4 遺構配置図 (1/200)	196

Fig. 5	性格不明の落ち込み (1/40) .....	197
Fig. 6	先土器時代・縄文時代の石器① (2/3) .....	198
Fig. 7	縄文時代の石器② (2/3) .....	199
Fig. 8	縄文時代の石器③ (1/2) .....	201
Fig. 9	縄文時代の石器④ (1/2) .....	203
Fig. 10	縄文時代の石器⑤ (1/2) .....	204
Fig. 11	縄文時代の土器 (1/2) .....	205
Fig. 12	弥生時代・古墳時代の遺物 (1/2) .....	206
Fig. 13	線刻仏実測図 (1/30) .....	207
Fig. 14	遺物出土状況① .....	208
Fig. 15	遺物出土状況② .....	209
Fig. 16	黒曜石分類グラフ .....	212

## 表 目 次

Tab. 1	石器計測表 .....	210
--------	-------------	-----

## 図 版 目 次

PL. 1	遺跡遠景・遺跡近景 .....	215
PL. 2	調査風景①・② .....	216
PL. 3	調査風景③・④ .....	217
PL. 4	N—7区東壁土層状況・H—4区北壁土層状況 .....	218
PL. 5	遺構検出状況・線刻仏 .....	219
PL. 6	遺物出土状況 .....	220
PL. 7	先土器時代・縄文時代の石器(1) .....	221
PL. 8	縄文時代の石器(2) .....	222
PL. 9	縄文時代の石器(3) .....	223
PL. 10	縄文時代の石器(4) .....	224
PL. 11	縄文時代の石器(5) .....	225
PL. 12	縄文時代の石器(6)・弥生時代の石器 .....	226
PL. 13	縄文時代・古墳時代・中世の土器類 .....	227

# I 調査

## 1. 地理的位置 (Fig. 1)

上八竜遺跡は、行政上では長崎県大村市弥勒寺町に所在する。

地形的には、多良山系から大村湾（西側）に向かって派生する舌状の丘陵上に位置し、中ほどの小さな谷を挟んで、南側丘陵をA地区・北側丘陵をB地区とし2つの地区に分かれる。A・B両地区とも標高は90～105mを測る。なお、本遺跡A地区より100m程の所に位置する南側の丘陵には、野田の久保遺跡が隣接する。

遺跡およびその周辺は、畑地や水田地帯が主体をなすものの、ナシ・ミカン等の果樹園も盛んに行われている地域でもある。特に、ナシは大村市の特産品「福重ナシ」として有名である。

## 2. 調査の概要 (Fig. 2)

調査区は、横断道路の中心杭 (STA 39+40) と (STA 39+80) を結んだ線を主軸として、南北を1・2・3……、東西をA・B・C……として5×5mの調査区に設定した。

調査は、ネジリ鎌等によりすべて手掘りで行った。

調査期間は、昭和62年1月13日から同年3月26日まで実施した。

調査面積は、1,380㎡である。



Fig. 1 遺跡地形図 (1/2000)

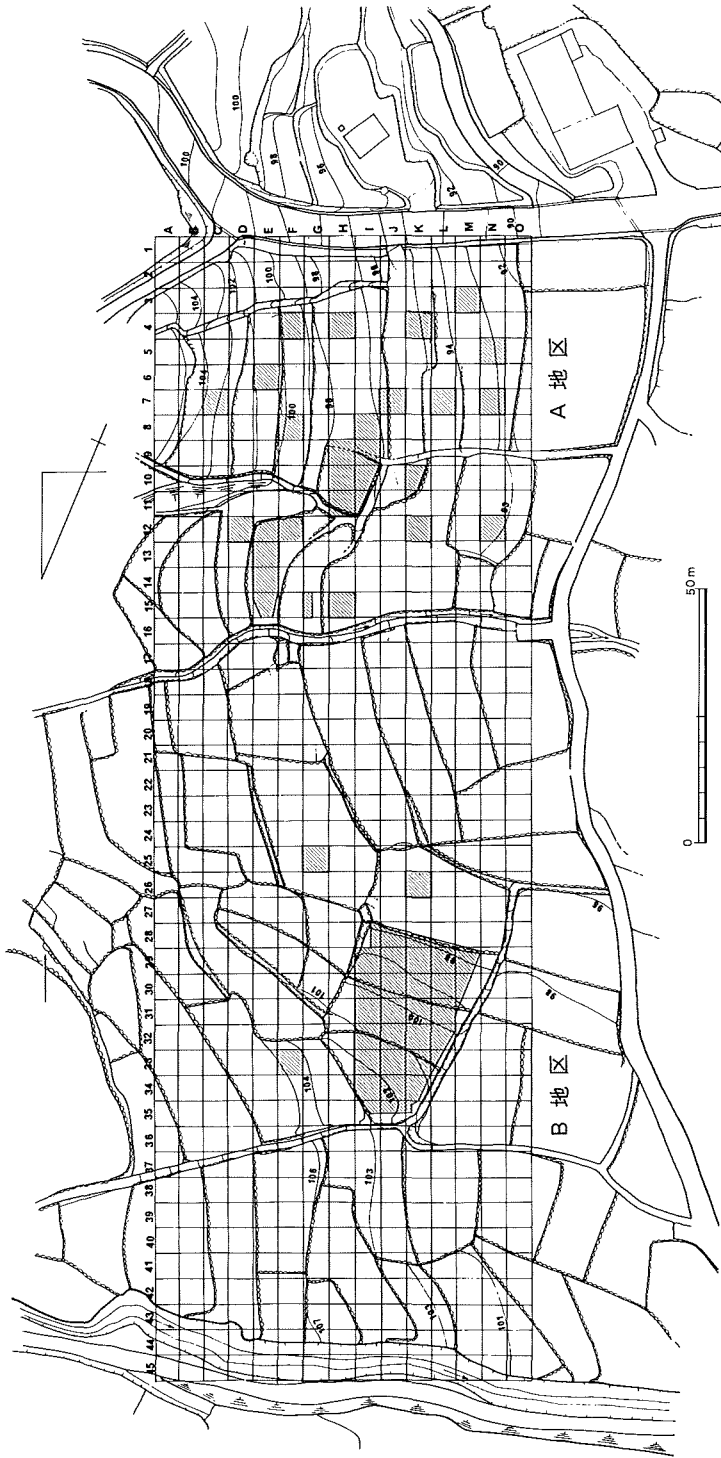


Fig. 2 調査区配置図 (1/1500)

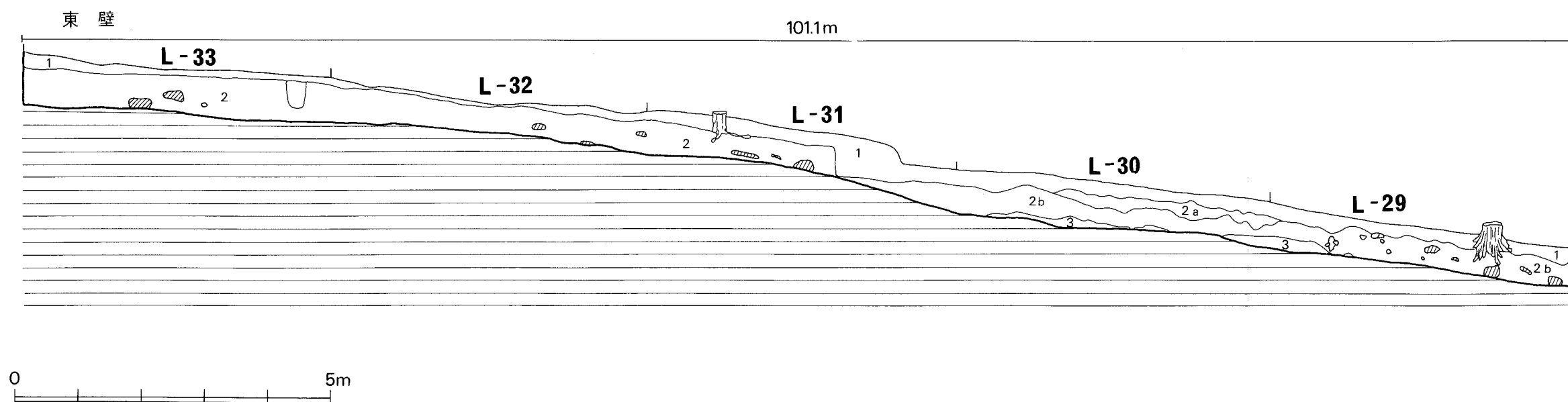
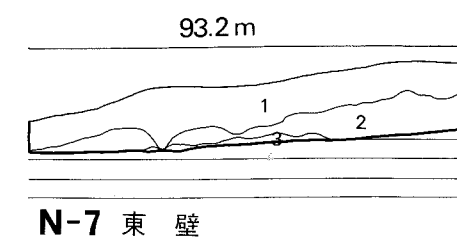
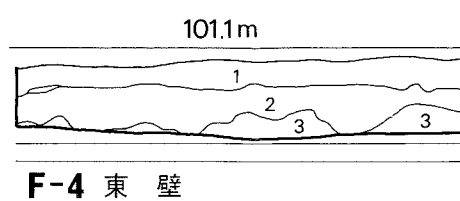
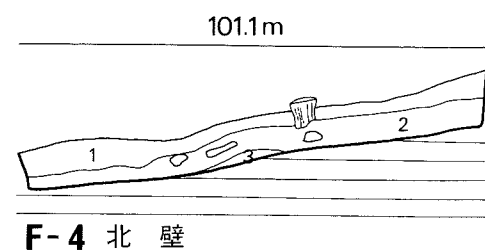


Fig. 3 土層図 (1/80)



### 3. 土層 (Fig. 3)

各地区や部分においては若干の差は認められるものの、遺跡全体としては耕作や攪乱が著しく、しかも岩盤までかなり浅いことも手伝って土層の堆積状況は良好ではなかった。

#### ・ A地区, 畑地部分

- 第 1 層…表土 (耕作土)
- 第 2 層…暗赤褐色粘質土層 (よくしまった粘質土で風化礫を混入する)
- 第 3 層…岩盤 (基盤)

#### ・ A地区, 水田部付近 (E-12・13・14区付近)

- 第 1 層…水田耕作土
- 第 2 a 層…水田床土
- 第 2 b 層…暗茶褐色粘質土層 (小礫を混入し下位ほど多くなる)
- 第 3 層…黒褐色粘質土層 (下位に多くの角礫を含む。黒曜石片が多く出土)
- 第 4 層…暗赤褐色粘質土層 (上部より黒曜石片が出土した。しまっている)
- 第 5 層…岩盤 (基盤)

#### ・ B地区, 畑地部分

- 第 1 層…耕作土
- 第 2 a 層…暗茶褐色粘質土層 (遺物が多く出土し、遺構も検出された)
- 第 2 b 層…茶褐色粘質土層 (しまりがあり、小礫を多く混入する)
- 第 3 層…岩盤 (基盤)

B地区は、比較的良好な土層堆積をなす部分が多く認められる。

## II 遺構

検出された遺構はすべてB地区のみからで、ピット状の遺構、L-32区で性格不明の落ち込み、M-29・30区で土坑などが検出された。

### 1. ピット群 (Fig. 4)

B地区全体において、直径20~30cm、深さ30cm前後程のピット群が検出された。すべて第2 a層を確認面とする。ピット内の覆土は、第2 a層よりやや粘性が強く、若干暗い程度であった。ピット内から直接の遺物の出土がなく、時代的なものは不明である。また、このピット群

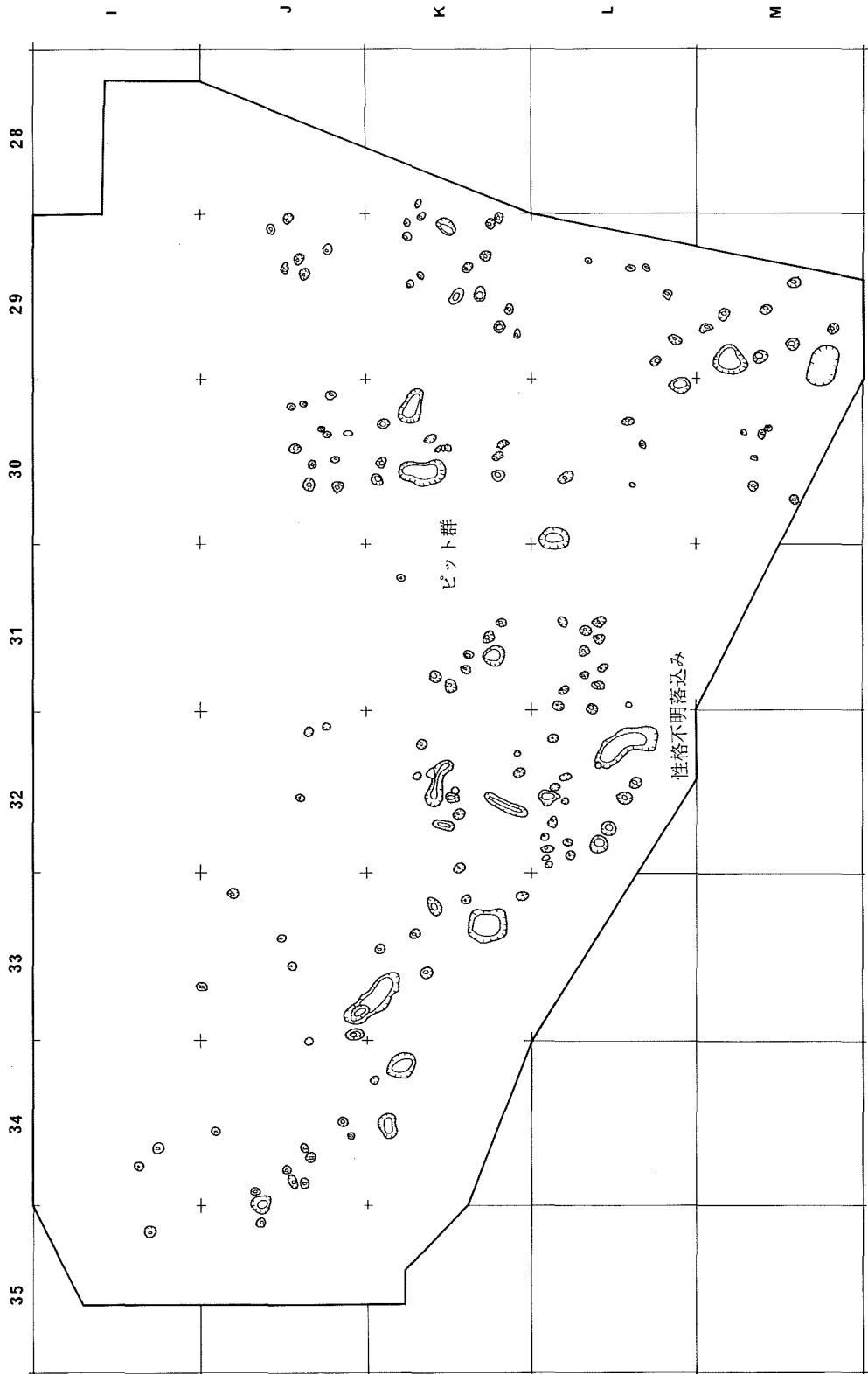


Fig. 4 遺構配置図 (1/200)

の性格であるが、K・L-31・32一帯やJ-30・K-29・M-29付近は多少まとまって検出されており、しかも、丸く並ぶような感じもある。積極的に住居跡とは言えないが、その可能性も十分考えられよう。

## 2. 性格不明の落ち込み (Fig. 5)

L-32区で第2 a層面において遺物を多く含んだ落ち込みを検出した。黒曜石片がほとんどを占めるものの縄文土器の破片も数点認められる。縄文土器はかなり小さな破片で、しかも風化が著しく時期は判別できなかった。落し穴等の遺構なども想定されたが、明確な結論を得るには至らなかった。

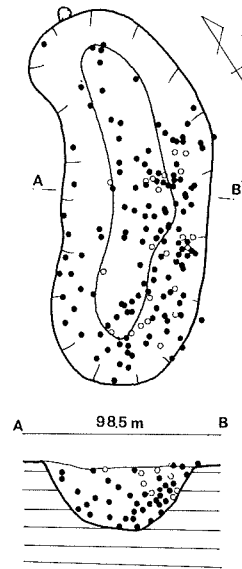


Fig. 5 性格不明の落ち込み (1/40)

## Ⅲ 出土遺物

およそ、石器8,000点、土器4,000点の出土があった。石器8,000点の内、その大半を黒曜石の小片が占めるが、中に縄文時代の石鏃・石匙・スクレイパー・使用痕ある剥片・磨石・石斧・十字形石器剥片・碎片などで石核の製品も見られる。土器は近世にまでおよぶ陶磁器片がかなりの量をなすが縄文土器・弥生土器・須恵器の出土も多少認められる。ただし縄文土器・弥生土器は小片がほとんどで、しかも風化を著しく受けていた。

これらの遺物は、表土からのものが大半を占めるが、B地区においては、第2 a層上部に集中して分布をなしていた。

### 1. 旧石器時代の遺物 (Fig. 6-1・2)

1は、H-15区、第3層より出土したナイフ形石器である。長さ4.5cm、幅1.3cmを測る。多少ローリングを受けた跡があるものの側縁には丁寧なブランディング加工が施されている。灰青色の黒曜石製で全体にパティナが認められる。2は、E-15区、第3層より出土した細石刃である。長さ1.5cm、幅0.5cm程を測る。漆黒色の黒曜石製で、若干パティナが認められる。

### 2. 縄文時代の遺物 (Fig. 6~11-3~82)

#### ① 石器

##### 石鏃

3~37は石鏃である。3は脚部および抉り部を持たないもので、小型の石槍状の形態をなす。安山岩製で全体にパティナが著しい。4~9は漆黒色の黒曜石製である。4は基部の一部を欠

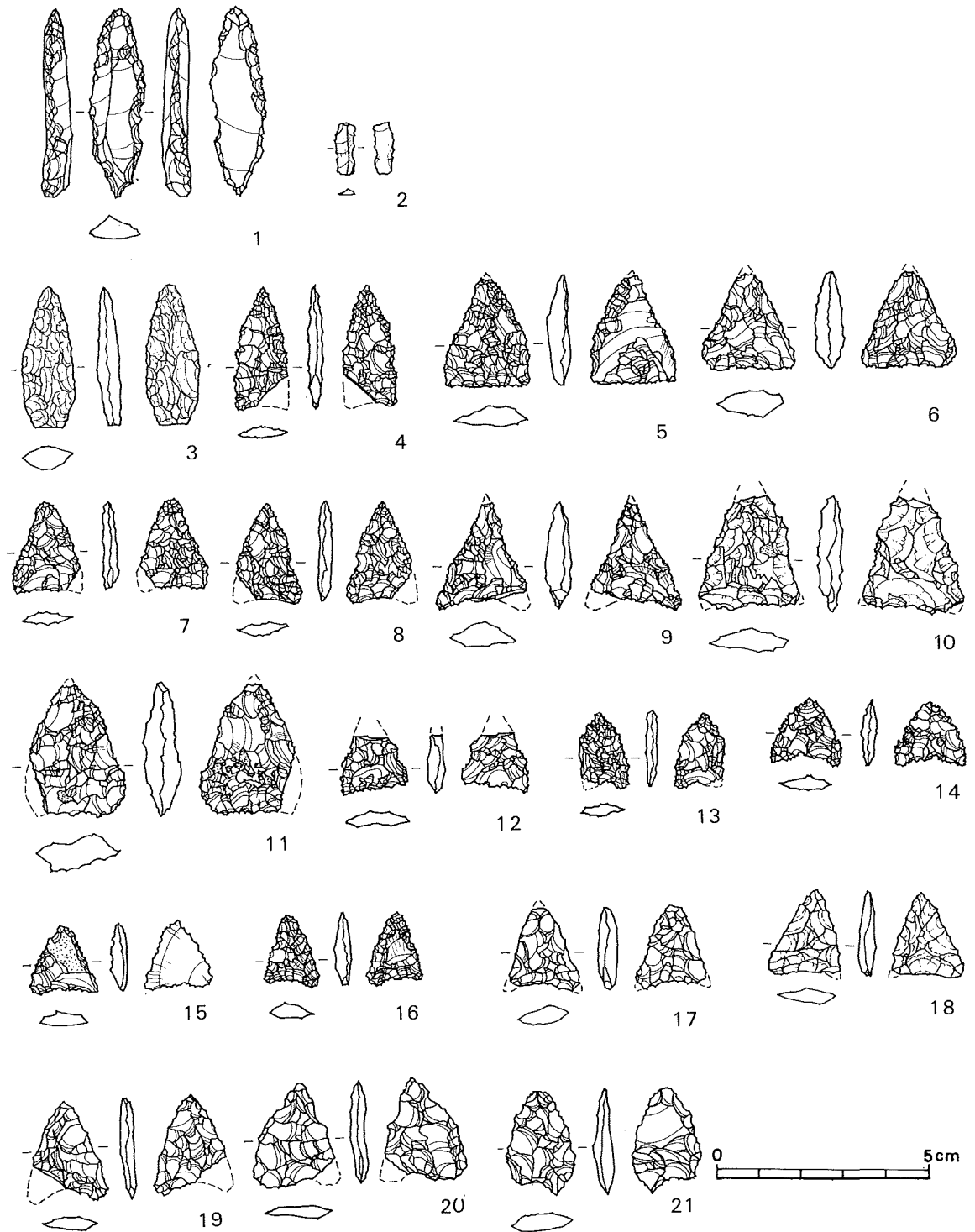


Fig. 6 先土器時代・縄文時代の石器① (2/3)

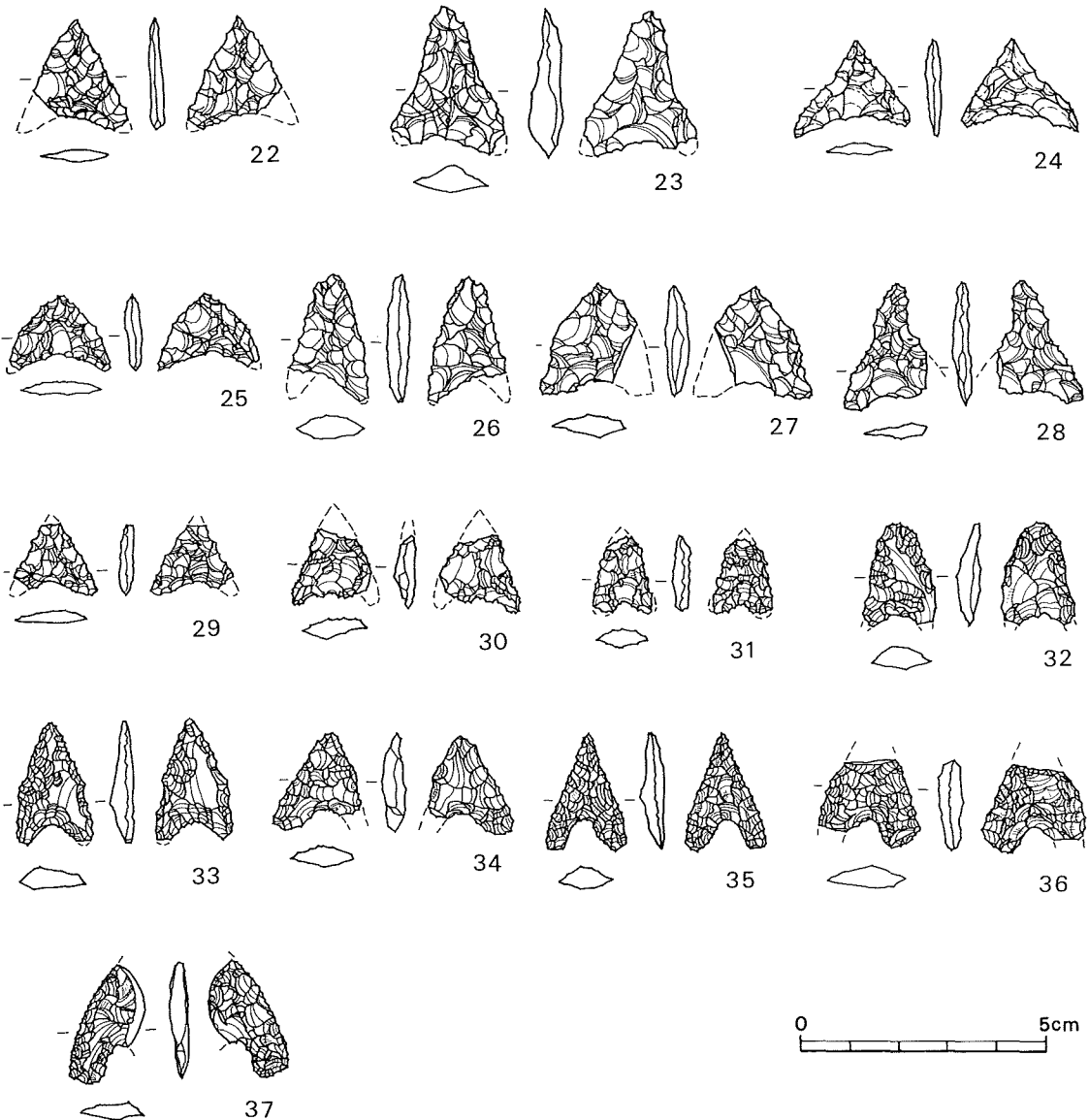


Fig. 7 縄文時代の石器② (2/3)

損。均整のとれた細身の形態をなす。基部は極わずかに内湾するか平基になるものと考えられる。5は一直線状の基部をなす。裏面には大きく主要剥離面を残す。6は先端の一部をわずかに欠損する。基部は平基で正三角形に近い形態をなす。若干、二次加工に粗雑さを感じる。7・8は両方とも片脚を欠損し、基部がわずかに内湾する。やや薄く、二等辺三角形形状をなす。9は片脚と先端部の一部を欠損。基部は多少内湾する。やや肉厚な感じである。10は安山岩製で先端部を欠損する。全体に二次加工は粗雑で、パティナが多少認められる。11は漆黒色の黒

曜石製ではあるが、中に乳白色の不純物が混入するものである。片脚と先端の一部を欠損する。二次加工は全体に粗雑である。12・13・14は漆黒色の黒曜石製である。12は先端部を大きく欠損。13は方脚を欠損。14は幅広のもので、基部は多少内湾する。15は灰青色の黒曜石製で、表面に一部自然面を残し、裏面は主要剝離面のままである。表面のみ側縁にわずかな二次加工を施す。16は漆黒色の黒曜石製で完形品である。脚部が左右対象になっておらず、若干いびつな感じを与える。17は両脚および先端をそれぞれわずかに欠損する。18は安山岩製、片脚をわずかに欠損する。パティナが認められる。19・20は漆黒色の黒曜石製で両方とも、片脚を大きく、もう片脚をわずかに欠損する。比較的丁寧な二次加工で薄く仕上げる。21は灰白色の黒曜石で、片脚を欠損する。粗雑な二次加工で全体のバランスに欠ける。22は漆黒色の黒曜石で片脚を欠損する。23は漆黒色の黒曜石製で両脚を欠損。基部およびそれぞれの側縁は内湾する。24は灰青色の黒曜石製で全体にパティナが著しい。図面でも解るように、幅広で脚のつくりが不均等で全体にいびつな形態をなす。25は漆黒色の黒曜石製で幅広の形態をなす。基部はゆるく大きく内湾する。26は片脚を部分的に欠損する。基部は多少内湾する。27は片脚を大きく欠損する幅広のもので、薄い仕上りとなっている。28は片脚を欠損、全体に不均整な形態をなす。29は片脚と先端の一部を欠損する。やや幅広で、基部はゆるく内湾する。薄いレンズ状の断面形をなす。27～29は漆黒色の黒曜石製。30は灰青色の黒曜石製で、片脚と先端部を欠損する。31・32は漆黒色の黒曜石製。31は小型のもので両脚および先端の一部をわずかに欠損する。32は全体に大まかな二次加工で裏面には主要剝離面を一部分残す。33は灰青色の黒曜石製で主要剝離面を部分的に残す。先端部は鋭角に尖り、両側縁にはそれぞれ角ばった部分が認められる。基部はゆるく内湾する。34は灰白色の黒曜石製で、片脚と先端部を欠損する。二次加工は全体に丁寧である。35～37は漆黒色の黒曜石製。35・36・37は鋏形鏃として捉えられるものである。3点とも二次加工はかなり緻密に施されている。35は完形品で先端部はかなり鋭く、脚は大きく内湾する。36は両脚と先端の一部を欠損する。37は片半分欠損する。

#### スクレイパー

38～46はスクレイパーである。38～43は漆黒色の黒曜石製で、44は灰青色の黒曜石製、45・46は安山岩製である。38は薄い剥片の一側縁に表裏からの刃部加工を施す。39は多少粗雑ではあるが、刃部加工が認められる。40は一側縁に丁寧な二次加工が表裏より施される。41は一側縁に表面からのみ刃部加工を施す。42は一側縁に表面からのみの刃部加工を施す。刃部分の角度はやや鈍い。43は小型のやや厚い剥片で表面の一部に自然面を残す。一側縁に表面からのみ刃部加工を施す。44は多少粗雑ではあるが刃部加工を部分的に施す。45は一側縁に表面からのみ大まかな刃部加工を施し、背部は自然面が大きく残る。断面は扁平な三角形状となる。46は大型の剥片で一長側縁に表裏から比較的細かな刃部加工を施す。刃部は鋭角で刃部と反対側の長側縁は自然面となる。

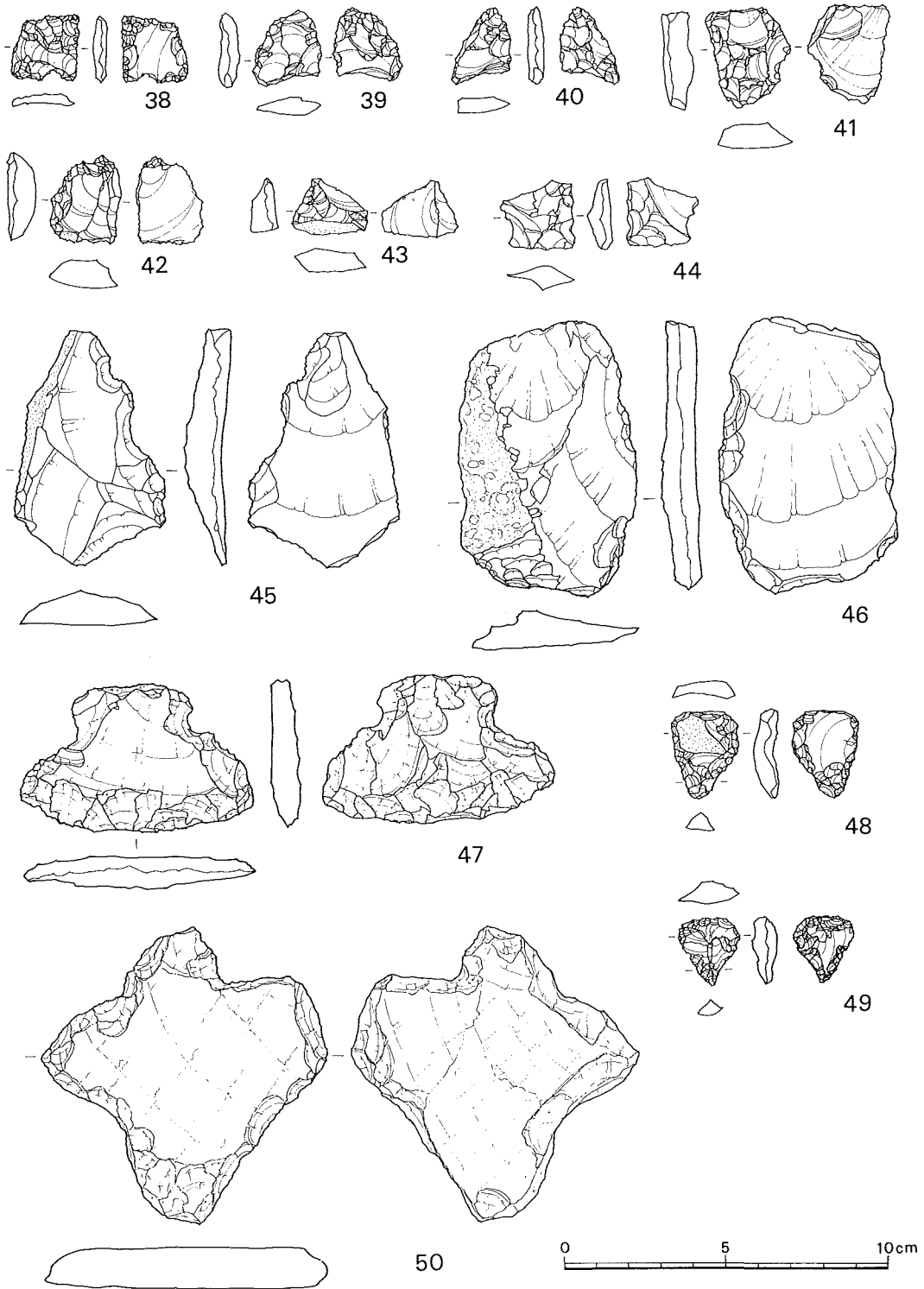


Fig. 8 縄文時代の石器③ (1/2)

### 石 匙

47は安山岩製の石匙である。つまみ部が大きくつくり出されており、その上面には自然面が残る。刃部は表裏より丁寧に二次加工される。ローリングを受けた跡がうかがえ、全体にパティナが著しい。

### 石 錐

48・49は石錐である。48は灰白色の黒曜石製で表面の一部に自然面、裏面に主要剝離面を残す。先端部はやや鈍角となる。49は漆黒色の黒曜石製で逆三角形状をなす。先端部は部分的にかなり細かな二次加工が施され鋭角に尖る。

### 十字石器

50は十字形石器として扱った。安山岩製で風化やローリングの痕が著しく、部分的にかなり欠損がみられる。

### 使用痕ある剝片

51～62は使用痕ある剝片としてあつかった。51は灰青色の黒曜石製、52～56と58～62は漆黒色の黒曜石製、57は灰白色の黒曜石製である。51は縦長剝片の両側縁に使用痕が認められる。全体にパティナが著しく、表面に自然面を大きく残す。52は三角形状の剝片で、その二側縁表裏に使用痕が認められる。53は自然打面から剝離されたやや幅広い剝片で、表裏それぞれに使用痕が認められる。54は一側縁表面のみに内湾して、使用痕が認められる。55は小形の剝片で表面の一部に使用痕が認められる。56は逆三角形状の剝片でそれぞれの三側縁に使用痕が認められる。57はやや厚めの剝片で、両側縁に部分的に使用痕が認められる。58は薄い剝片で、表面の一部に使用痕が認められる。59は下半が折れた剝片で、一側縁の表面に使用痕が認められる。60は小型の幅広い剝片で、表裏それぞれに使用痕が認められる。61は小型の剝片で、一側縁の表裏に多少の使用痕が認められる。62は調整された打面より剝離された厚めの剝片で、表面の一部に自然面を残す。両側縁の表裏に若干の使用痕が認められる。

機能的にはスクレイパー的要素のものであろう。

### 磨 石

63・64・65の3点は磨石としてあつかった。63は硬質の砂岩で、全体に薄く緑がかかった色をなす。表裏および周縁とも滑らかに研磨の痕が認められる。64はやや軟質な砂岩で、ローリングの痕やキズが多少認められる。65は直径4 cm程のほぼ円形に近い形状をなす。安山岩で部分的に研磨痕が認められる。



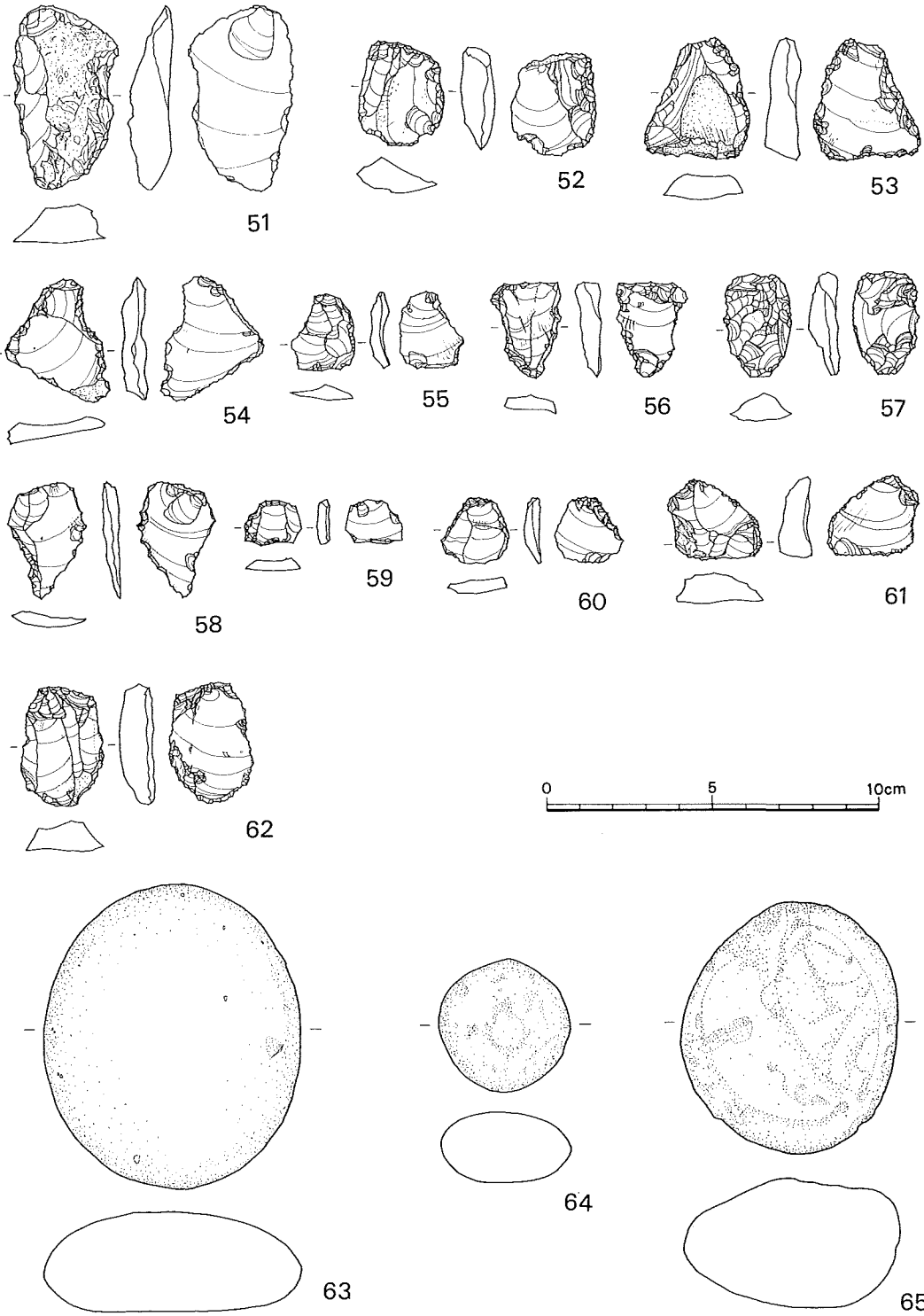


Fig. 9 縄文時代の石器④ (1/2)

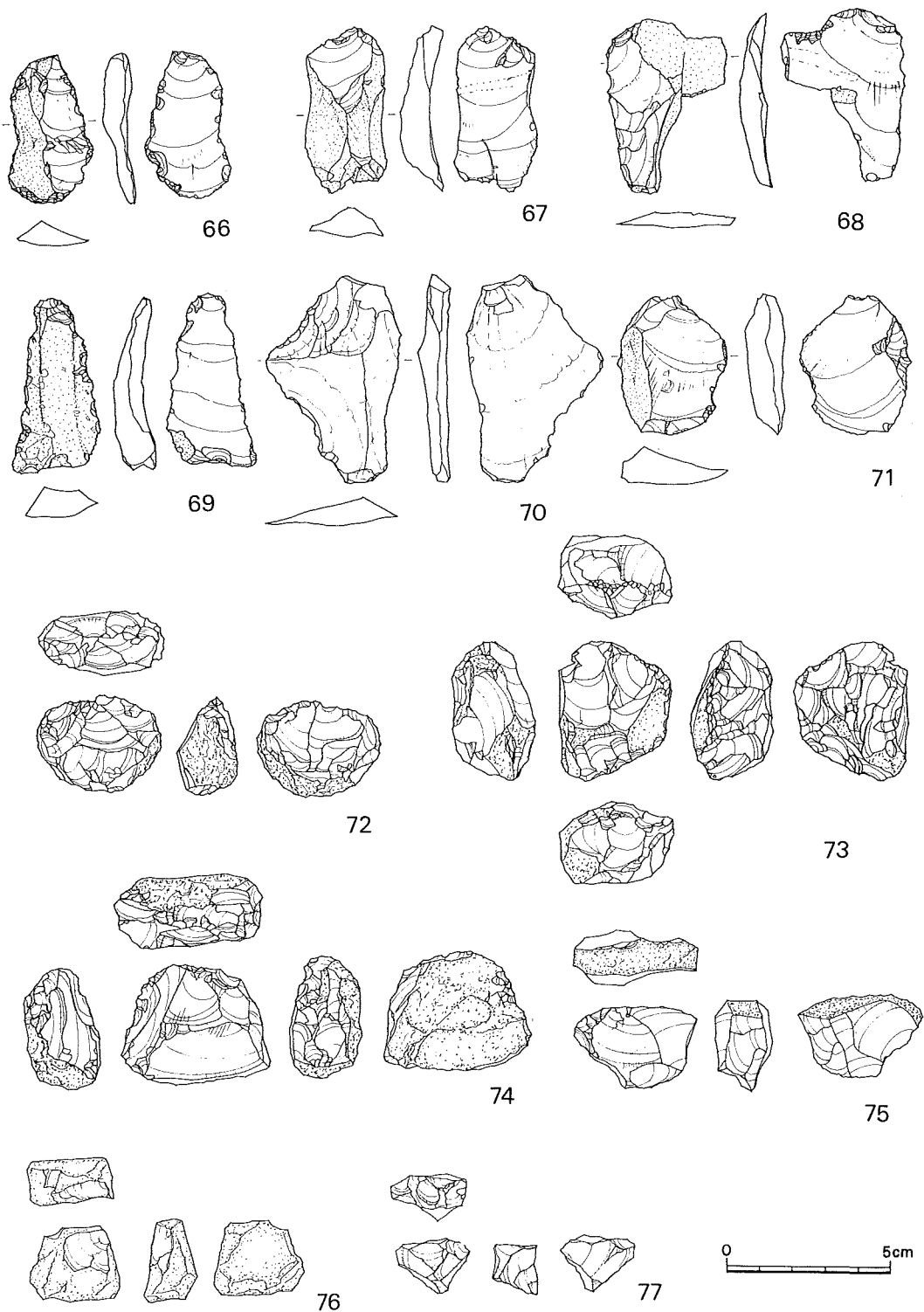


Fig. 10 縄文時代の石器⑤ (1/2)

## 剥片

66～71は剥片である。本遺跡出土石器の内剥片と碎片がその大半をなす。その中より比較的大型のものを数点抜粋し記載した。66～70は漆黒色の黒曜石製，71は安山岩製である。66・67・70・71は平坦打面から，69は自然打面から，68は調整打面から，それぞれ剥片剥離がなされている。

## 石核

72～77は石核である。62～74・77は漆黒色の黒曜石製，75・76は灰白色の黒曜石製である。72・73は表裏両面とも作業面として利用され，小型の縦長剥片を剥離しており，結果的に亀甲状に仕上がっている。部分的に自然面が残る。なおこの2点は旧石器時代の石核である可能性が強いものと考えられる。74は表面のみに小型の剥片剥離を行っている。裏面は殆ど自然面のままである。75はやや幅広の剥片を多方向より剥離している。下部にわずかな自然面が残る。76は原石自体が小型のもので表面に1回のみ剥片剥離を行っている。77は所謂，残核である。

## ② 土器

5点の縄文時代の土器を記載した。いずれも縄文時代晩期に相当するものである。78は口縁部片で，風化をかなり受けるものの不正方向の条痕文が認められる。79・80・81は胴部の小片で横位に突帯が回る。特に2は突帯の上に指突などによる刻目が施される。82は底部片で結晶片岩の砂粒を混入する。5点とも胎土中に砂粒が混入し，茶褐色ないし黒褐色をなす。

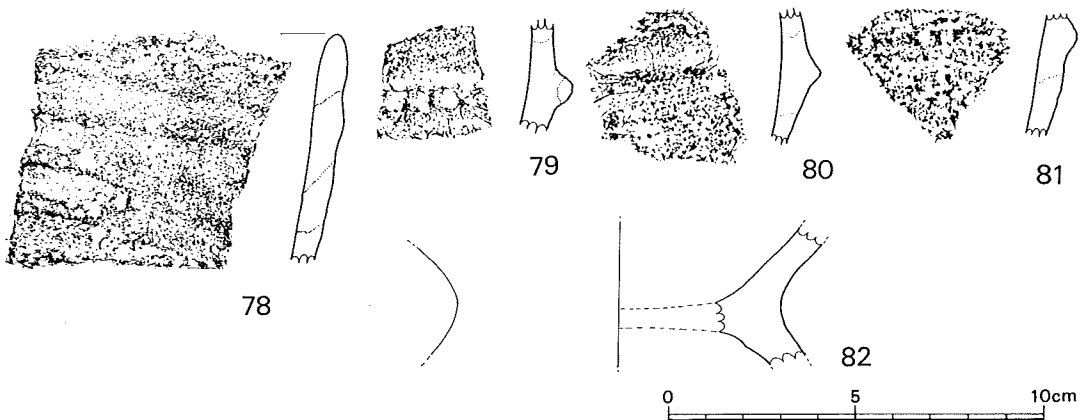


Fig. 11 縄文時代の土器 (1/2)

### 3. 弥生時代の遺物 (Fig. 12-83~87)

#### ① 石器

83は頁岩製の方柱状抉入石斧が一点出土した。刃部を欠損するが、おそらく片刃で長さ18cm前後の長さが推定されよう。取付け部分には浅くではあるが凹状の抉り部が施されている。断面をみると、一辺が3cm程の正方形状をなす。これは、原石からの擦り切技術により取出されたものと考えられる。なお、擦り切の痕跡が浅く斜めに回るように認められる。

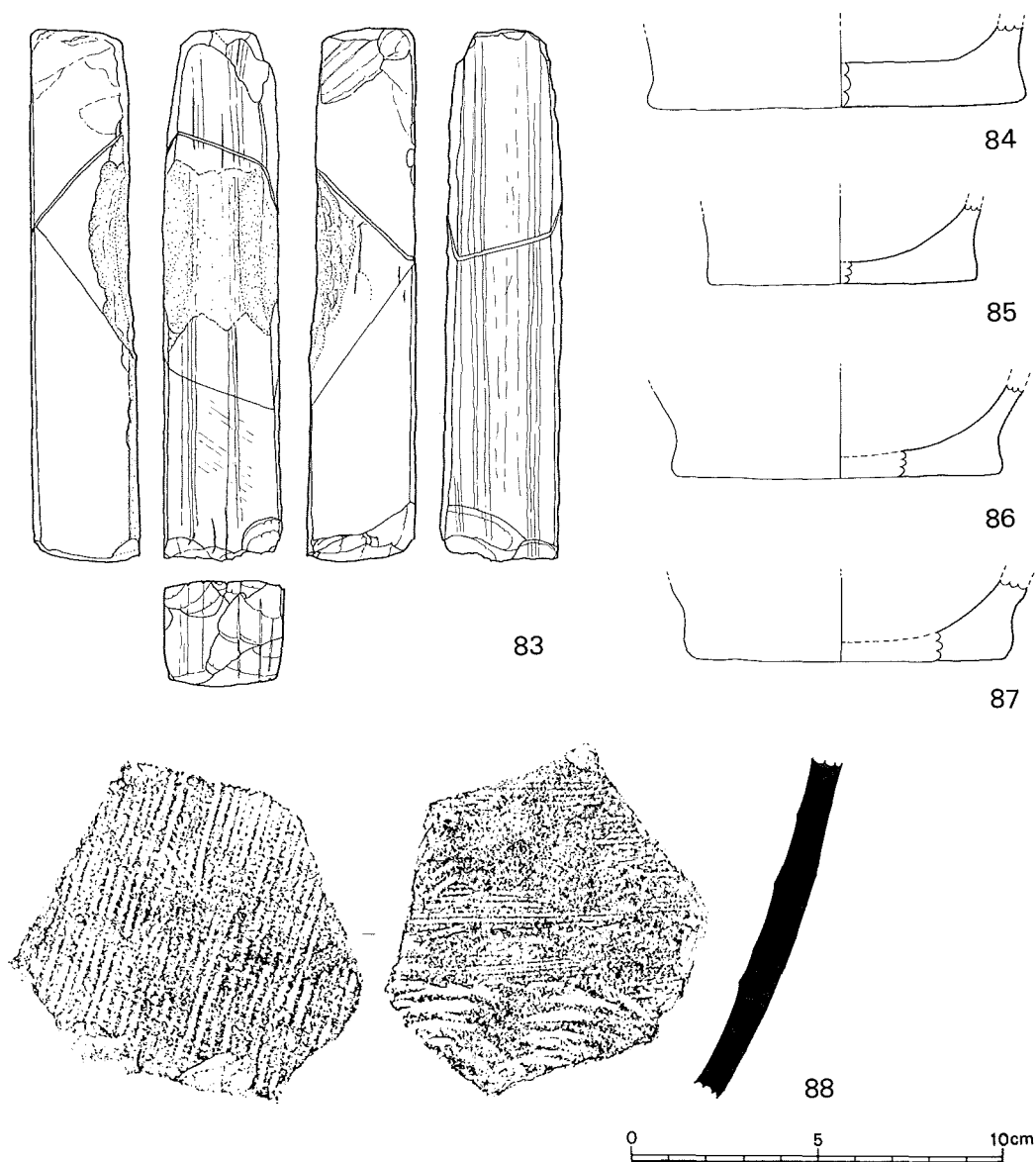


Fig. 12 弥生時代・古墳時代の遺物 (1/2)

## ② 土器

胎土や焼成などにより弥生土器として判別できたものは多少認められたが、器形および文様の明確に判別できるものはなかった。底部片の4点(84~87)を図化記載した。

## 4. 古墳時代の遺物 (Fig. 12-88)

須恵器の破片がI-33区より1点出土した。88は大型の甕の胴部片と考えられる。表面にタキが、内面には同心円の当具痕とナデの痕が施される。厚さ0.8cmを測り、全体に灰色をなす。

## 5. 輸入陶磁器

龍泉窯系の青磁片が12点出土した。いずれも椀で小片のため写真記載のみとした。外体部に蓮弁が削り出され、黄緑色のガラス質釉がかかる。13世紀中頃~14世紀中頃にかけてのものと考えられるが、4点程は15世紀に入る明代の青磁であろう。

## 6. その他の遺物

以上の遺物のほかに現代に至るまでの陶磁器等の遺物が出土している。

## 7. 線刻仏 (Fig. 13)

本遺跡B地区上段の畑側壁に、板状石に施された線刻仏があった。板石は幅3mあまり、高さ1.8m程であった。石の表面は剝落や欠損が多く認められ、風化をかなり受けているようである。聞くところによると、鎌倉時代頃のものであろうということで、当地、弥勒寺との関連性が強いものと考えられるが、詳細は不明である。



Fig. 13 線刻仏実測図 (1/30)

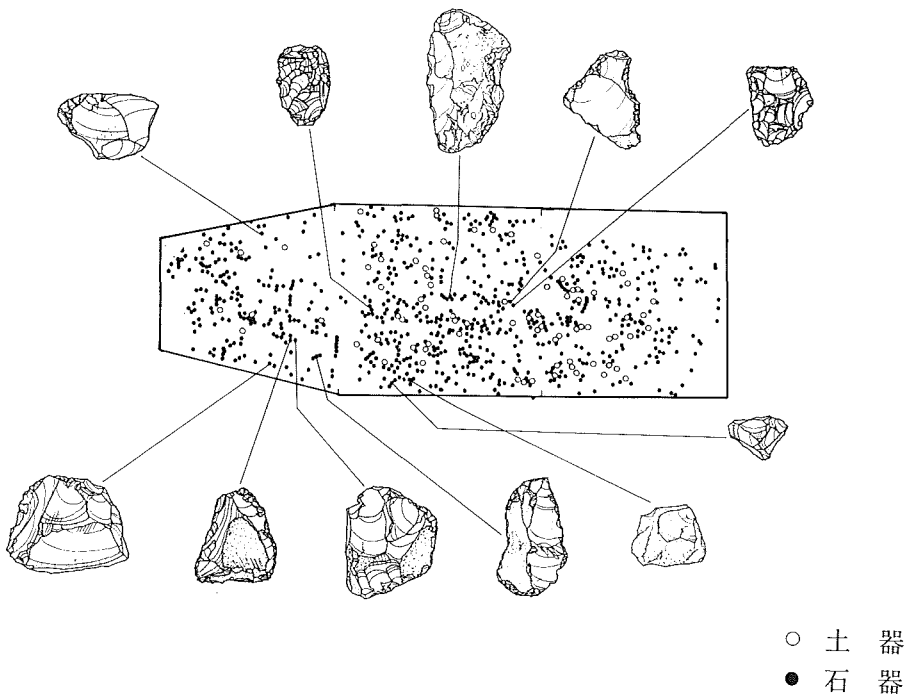
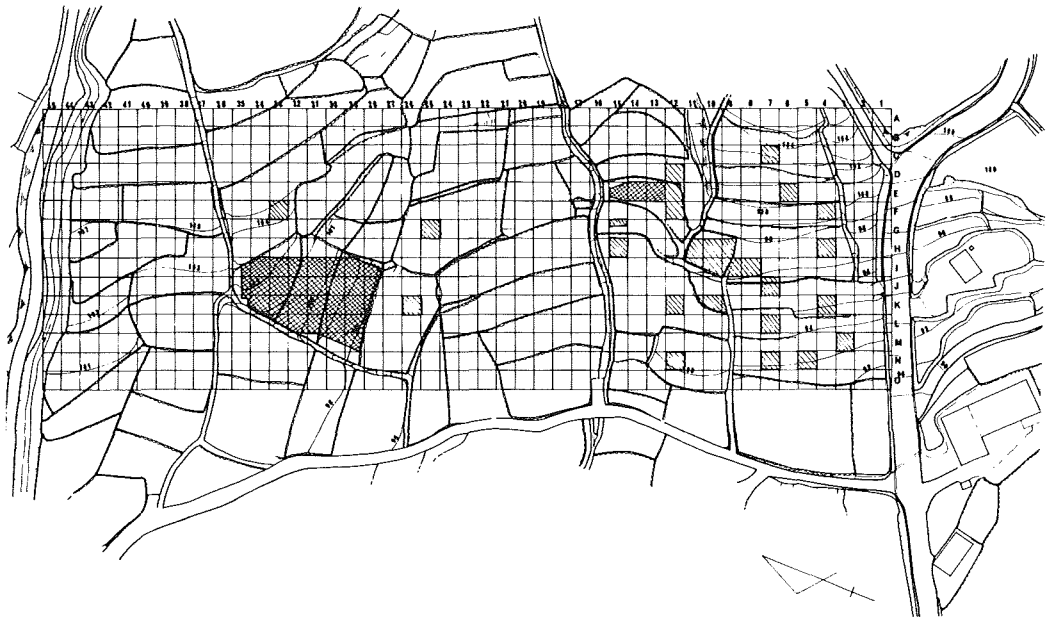


Fig. 14 遺物出土状況①

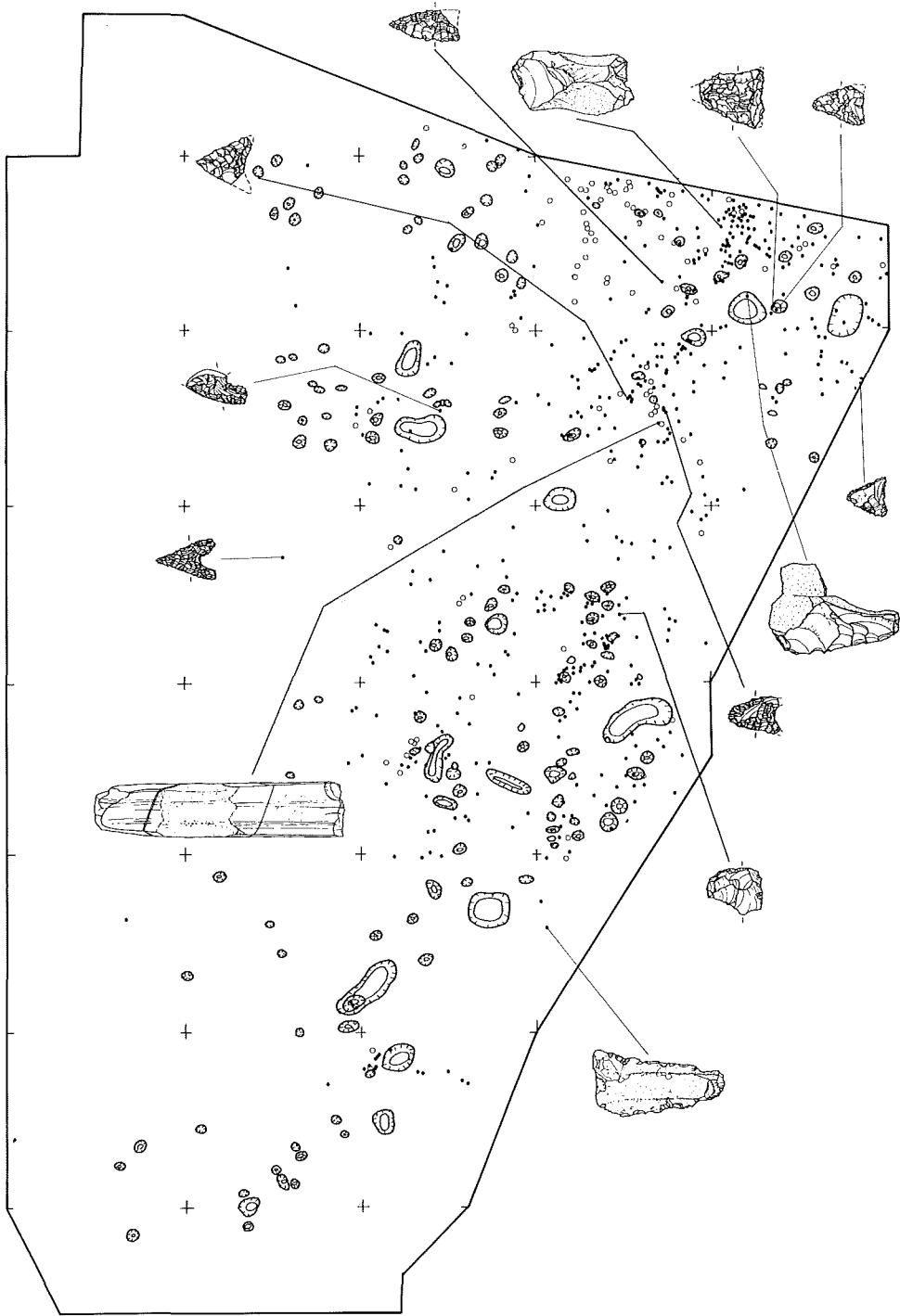


Fig. 15 遺物出土状況②

Tab. 1 石器計測表

( ) は原寸値

No.	器種	出土区	層位	石材	重さ(g)	長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	補足・備考
1	ナイフ形石器	H-15	3層	灰青ob	3.5	4.4	1.3	0.6	全体にパティナがある
2	細石刃	E-15	3層	漆黒ob	0.1	1.2	0.4	0.2	中間部にあたる
3	石鏃	L-32	2層	安山岩	2.2	3.3	1.3	0.6	小型の石槍状の形態をなす
4	〃	L-29	2層	漆黒ob	(1.0)	(2.9)	1.2	0.3	基部の一部欠、薄く細み
5	〃	J-24	表土	漆黒ob	2.2	2.5	2.0	0.6	裏面に主要剥離面残す
6	〃	J-29	表土	漆黒ob	2.9	2.3	2.2	0.7	平基で正三角形状をなす
7	〃	M-29	2層	漆黒ob	(1.0)	2.1	(1.6)	0.4	片脚欠、基部わずかに内湾
8	〃	K-32	表土	漆黒ob	(0.9)	2.4	(1.5)	0.3	片脚欠、基部わずかに内湾
9	〃	K-29	表土	漆黒ob	(2.1)	2.5	(2.1)	0.6	片脚と先端欠
10	〃	M-29	2層	安山岩	(2.9)	(2.7)	(2.4)	0.6	全体に二次加工は粗雑
11	〃	I-29	表土	漆黒ob	(4.1)	3.1	(2.3)	0.8	片脚と先端欠、二次加工粗雑
12	〃	L-30	表土	漆黒ob	(0.8)	(1.4)	1.6	0.4	先端を大きく欠損
13	〃	M-29	表土	漆黒ob	(0.6)	1.8	1.2	0.3	片脚を欠損
14	〃	M-29	表土	漆黒ob	0.7	1.5	1.8	0.4	やや幅広、基部は多少内湾
15	〃	M-30	2層	灰青ob	0.8	1.6	1.6	0.4	表面に自然面残る
16	〃	K-29	表土	漆黒ob	0.6	1.7	1.3	0.4	若干不均等になる
17	〃	K-30	表土	漆黒ob	(1.1)	(1.9)	(1.7)	0.4	両脚と先端をわずかに欠損
18	〃	K-29	表土	安山岩	(1.0)	(2.0)	1.7	0.4	片脚をわずかに欠損
19	〃	L-30	2層	漆黒ob	(0.9)	2.3	(1.8)	0.3	片脚を大きく欠損
20	〃	L-30	表土	漆黒ob	(1.3)	2.4	(2.0)	0.3	片脚を大きく欠損
21	〃	L-32	2層	灰白ob	1.3	2.5	1.6	0.5	粗雑な二次加工
22	〃	K-29	表土	漆黒ob	(1.0)	(2.4)	(2.1)	0.3	片脚を大きく欠損
23	〃	M-29	表土	漆黒ob	(2.4)	(3.0)	(2.3)	0.7	基部と側縁が多少内湾
24	〃	L-29	表土	灰青ob	0.7	2.0	2.4	0.3	幅広、脚は左右不均等
25	〃	K-29	表土	漆黒ob	0.6	1.5	2.1	0.3	幅広、基部ゆるく大きく内湾
26	〃	F-33	表土	灰白ob	(1.4)	2.6	(1.7)	0.5	片脚欠損
27	〃	M-29	表土	漆黒ob	(1.2)	2.3	(1.9)	0.5	片脚欠損
28	〃	L-30	表土	漆黒ob	(0.8)	2.6	(1.8)	0.4	片脚欠、全体に不均等
29	〃	K-29	表土	漆黒ob	(0.4)	(1.4)	(1.7)	0.3	片脚と先端の一部欠損
30	〃	K-29	表土	灰青ob	(0.7)	(1.5)	(1.6)	0.4	片脚と先端を欠損
31	〃	E-15	3層	漆黒ob	(0.6)	(1.5)	(1.2)	0.3	小形、両脚と先端を若干欠
32	〃	L-30	2層	漆黒ob	(0.9)	(2.1)	(1.5)	0.5	全体に大まかな二次加工
33	〃	N-7	表土	灰青ob	(1.2)	(2.5)	1.5	0.5	両側縁はやや角張る
34	〃	—	表採	灰白ob	(1.0)	(2.0)	(1.8)	0.5	片脚先端欠、丁寧な二次加工
35	〃	J-31	2層	漆黒ob	0.8	2.4	1.6	0.5	先端は鋭角、基部の抉り深い
36	〃	F-2	2層	漆黒ob	(1.6)	(1.8)	(2.1)	0.5	両脚と先端の一部欠損
37	〃	K-30	2層	漆黒ob	(0.9)	(2.4)	(1.6)	(0.4)	半分欠損
38	スクレイパー	J-31	表土	漆黒ob	1.4	2.0	2.0	0.4	薄い剥片の一侧縁表裏に刃部
39	〃	L-30	表土	漆黒ob	2.7	2.3	2.1	0.6	やや粗雑な刃部加工
40	〃	I-30	表土	漆黒ob	1.9	2.4	1.8	0.5	表裏から丁寧な刃部加工

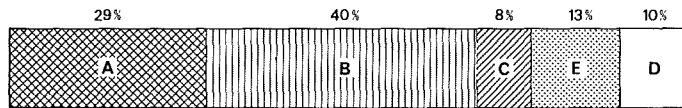


No.	器種	出土区	層位	石材	重さ(g)	長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	補足・備考
41	スクレイパー	E-14	3層	漆黒ob	6.3	3.0	2.4	0.9	表面からのみ刃部加工
42	〃	J-29	表土	漆黒ob	4.8	2.7	2.2	0.8	表面からのみ刃部加工
43	〃	J-29	表土	漆黒ob	(2.6)	(1.7)	2.4	0.9	表面の一部に自然面を残す
44	〃	L-30	表土	灰青ob	2.2	2.1	2.2	0.7	部分的に粗雑な刃部加工
45	〃	L-29	表土	安山岩	31.7	7.3	4.7	1.2	一側縁に刃部, 背面は自然面
46	〃	K-34	表土	安山岩	62.0	8.5	5.4	1.2	刃部は鋭角, 背面は自然面
47	石 匙	K-4	表土	安山岩	31.5	4.6	7.1	0.9	つまみ部が大きく造出される
48	石 錐	E-13	3層	灰青ob	3.6	2.7	2.0	0.6	表面に自然面を一部残す
49	〃	I-30	表土	漆黒ob	2.0	2.1	1.9	0.8	先端部鋭角二次加工は丁寧
50	十字石器	E-14	2層	安山岩	(120)	(9.2)	(8.8)	1.2	風化やローリングを受ける
51	使用痕ある剥片	E-14	3層	灰青ob	18.1	5.5	3.1	1.2	両側縁に使用痕
52	〃	M-30	表土	漆黒ob	6.2	2.7	2.9	0.7	表裏に使用痕
53	〃	E-15	3層	漆黒ob	9.1	3.6	3.1	0.9	二側縁表裏に使用痕
54	〃	E-14	4層	漆黒ob	6.2	2.7	2.9	0.7	内湾する側縁に使用痕顕著
55	〃	L-31	2層	漆黒ob	1.9	2.3	2.0	0.5	小形の剥片, 一側縁に使用痕
56	〃	I-30	表土	漆黒ob	3.0	2.8	2.1	0.7	三側縁にそれぞれ使用痕
57	〃	E-14	4層	灰白ob	5.3	3.1	2.1	0.9	表面の一部に使用痕
58	〃	M-29	表土	漆黒ob	3.0	3.5	2.3	0.5	表裏の一部に使用痕
59	〃	I-33	表土	漆黒ob	1.1	1.3	1.7	0.4	一側縁表面に使用痕
60	〃	M-29	表土	漆黒ob	1.5	2.0	2.0	0.5	小形幅広剥片, 表裏に使用痕
61	〃	E-13	3層	漆黒ob	5.0	2.4	2.6	1.0	一側縁表裏に使用痕
62	〃	K-31	表土	漆黒ob	15.1	3.6	2.5	1.0	二側縁表裏に使用痕
63	磨 石	-	表採	硬砂岩	330	9.2	7.7	3.0	表裏や周縁に滑らかな研磨痕
64	〃	J-3	表土	安山岩	43	4.0	4.0	2.1	部分的に研磨痕
65	〃	L-32	表土	軟砂岩	270	7.6	6.5	3.9	ローリング痕やキズが目だつ
66	剥 片	E-15	3層	漆黒ob	7.4	4.6	2.3	0.8	平坦打面, 表面に自然面残る
67	〃	M-29	2層	漆黒ob	10.3	5.1	2.4	1.0	平坦打面, 表面に自然面残る
68	〃	M-29	2層	漆黒ob	9.7	5.3	3.1	0.8	調整打面
69	〃	L-33	2層	漆黒ob	11.3	5.3	2.4	1.1	自然打面
70	〃	M-29	表土	漆黒ob	13.8	4.3	3.3	1.2	平坦打面
71	〃	H-15	表土	安山岩	16.1	6.3	4.0	0.9	平坦打面
72	石 核	M-29	表土	漆黒ob	19.5	3.0	3.8	1.8	表裏に作業面
73	〃	E-15	3層	漆黒ob	35.1	4.3	3.3	1.2	表裏に作業面
74	〃	E-15	3層	漆黒ob	37.5	3.7	4.5	2.2	表面のみに剥片剥離
75	〃	E-15	3層	灰白ob	12.8	2.5	3.6	2.1	幅広剥片を多方向から剥離
76	〃	E-14	4層	灰白ob	10.9	2.2	2.2	1.9	小形の原石
77	〃	E-14	2層	漆黒ob	4.0	1.7	2.3	1.3	残核
83	方柱状挟入石斧	L-30	2層	頁岩	(295)	(14.3)	3.1	2.8	刃部は欠損する

※ ob=obsidian 黒曜石

### 8. 上八竜遺跡出土の黒曜石について (Fig. 16)

剥片・碎片を中心に多くの黒曜石が出土している。大まかには黒色のもの、灰青色のもの、灰白色のものに大別され、黒色のものはやや透ける感じのもの、漆黒色のものがある。さらに漆黒色のものは、乳白色の不純物が混入するものとそうでないものに分けられる。従って、6種類程に区別できる。漆黒色で不純物の混入しないものは、佐賀県伊万里の腰岳産である(A)。漆黒色で不純物の混入するものは、現在その原産地は判然としない(B) (隣接した東彼杵町所在の白井川遺跡からも同じ黒曜石が多量に見られる)。黒色でやや透明感があるもの(C)や灰白色のもの(D)は、本県針尾島産であろうと考えられる。灰青色のもの(E)は、佐世保市の淀姫神社近辺を産地とするものであろう。



※出土黒曜石総重量17.2kgを100%とする。

Fig. 16 黒曜石分類グラフ

## IV 総括

上八竜遺跡は、標高100m前後の丘陵上に位置する。小谷を挟んで、A地区・B地区の両地点に分かれる。

A地区は、当初の予察に反して、土層状況が悪く、全体的に岩盤(基盤)まで極めて希薄な土層堆積状況であった。よって、遺物等も若干の出土は認められたものの、状況は必ずしも良好ではなかった。

B地区においては、表土中より多くの黒曜石片がみられ、かなりの耕作の跡をうかがわせるものであったが、第2層上部において多量の遺物の出土が認められた。

本遺跡からは、旧石器時代に始まり縄文時代・弥生時代・古墳時代および中世・近世・現代にまで至る遺物が少ないながらも連続として出土する。旧石器時代においては、ナイフ形石器と細石刃および石核などが数点出土した。近くには、野岳遺跡があり何らかの関連も考えられよう。縄文時代は、土器により晩期は明確で、そのほかを石器にみると鋤形鏃等から早期も示唆しているといえる。また、B地区のピット群もこの時代のものである可能性が大である。弥生時代に入ると、唯一の石器である方柱状抉入石斧がある。1点のみ出土した須恵器は近接する八竜古墳との関係のものであろう。また、中世の青磁片の出土は、大陸との交流のあったことをわずかながらもかいま見ることができる。

この地は生活条件の適地であったことがうかがえる。これまでの九州横断自動車道関係の調査の中で、遺跡の規模・出土遺物の種別や量など様々であるが、本遺跡は旧石器時代から現代まで生活の場として、継承されてきた遺跡の占地性に、一つの特長をうかがうことができよう。

(伴)

PLATES  
(上八竜遺跡)



遺跡遠景



遺跡近景（B地区よりA地区方向を見る）



調査風景 ①



調査風景 ②



調査風景 ③



調査風景 ④



N-7区 東壁土層状況



H-4区 北壁土層状況

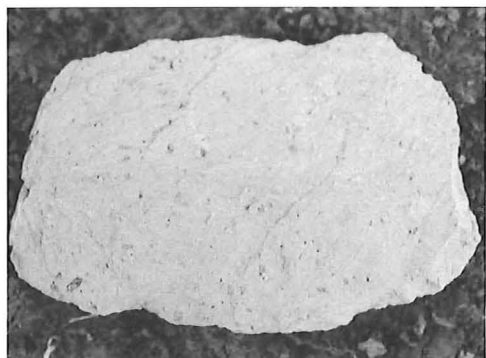
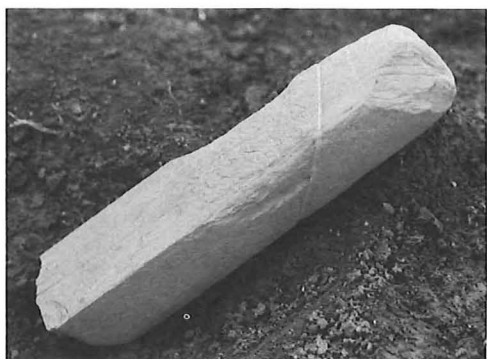


遺構検出状況

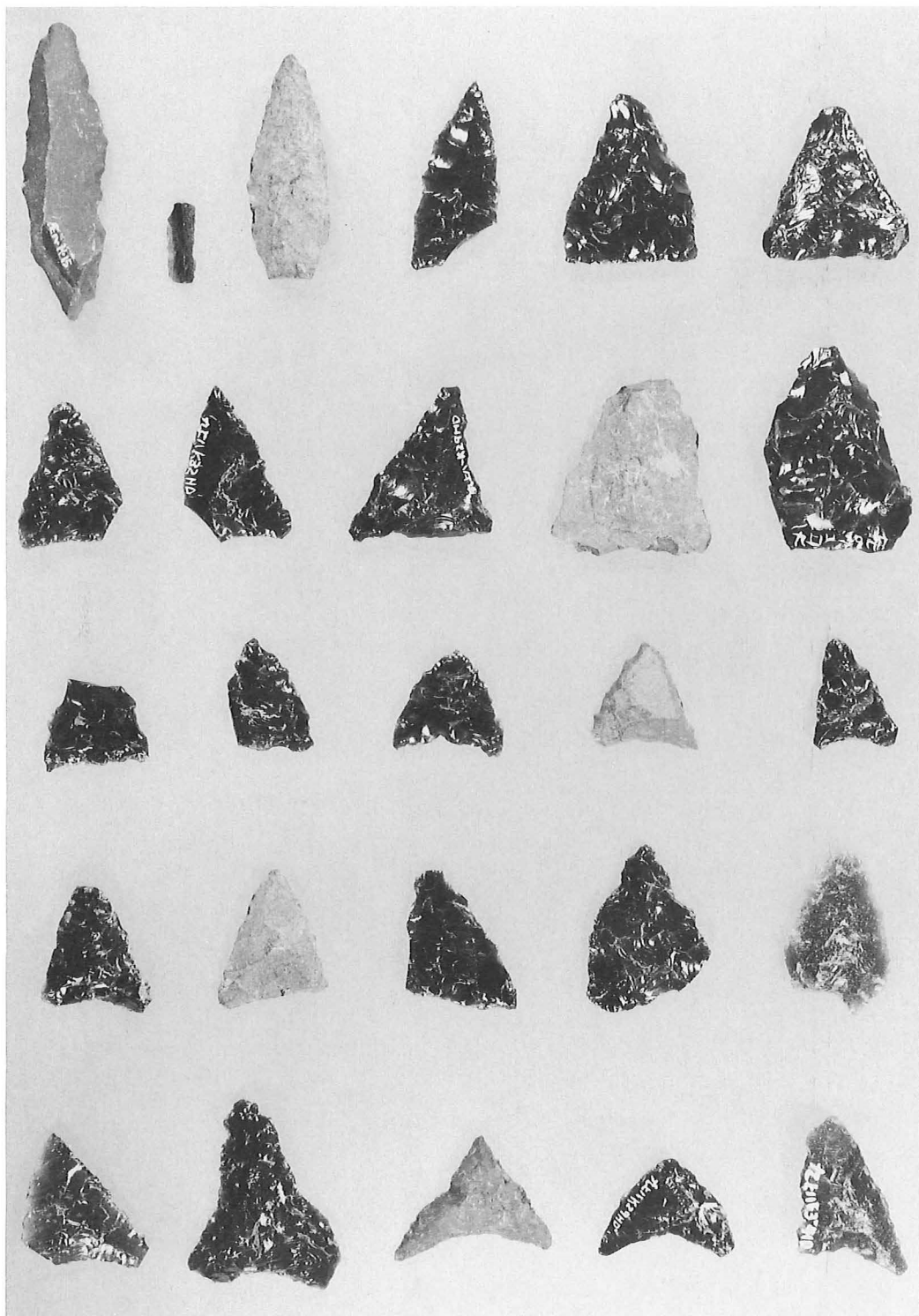


線刻仏

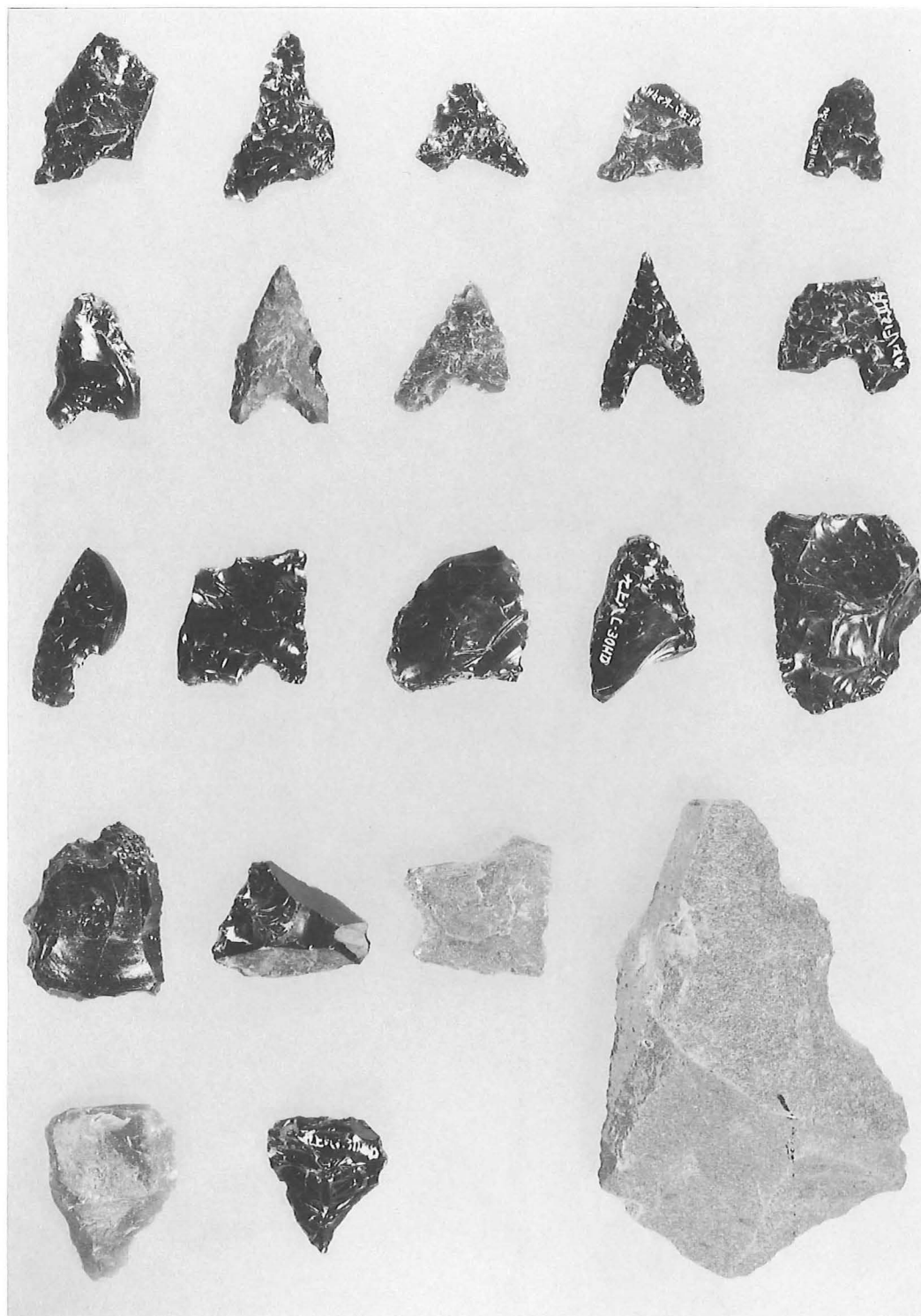




遺物出土状況



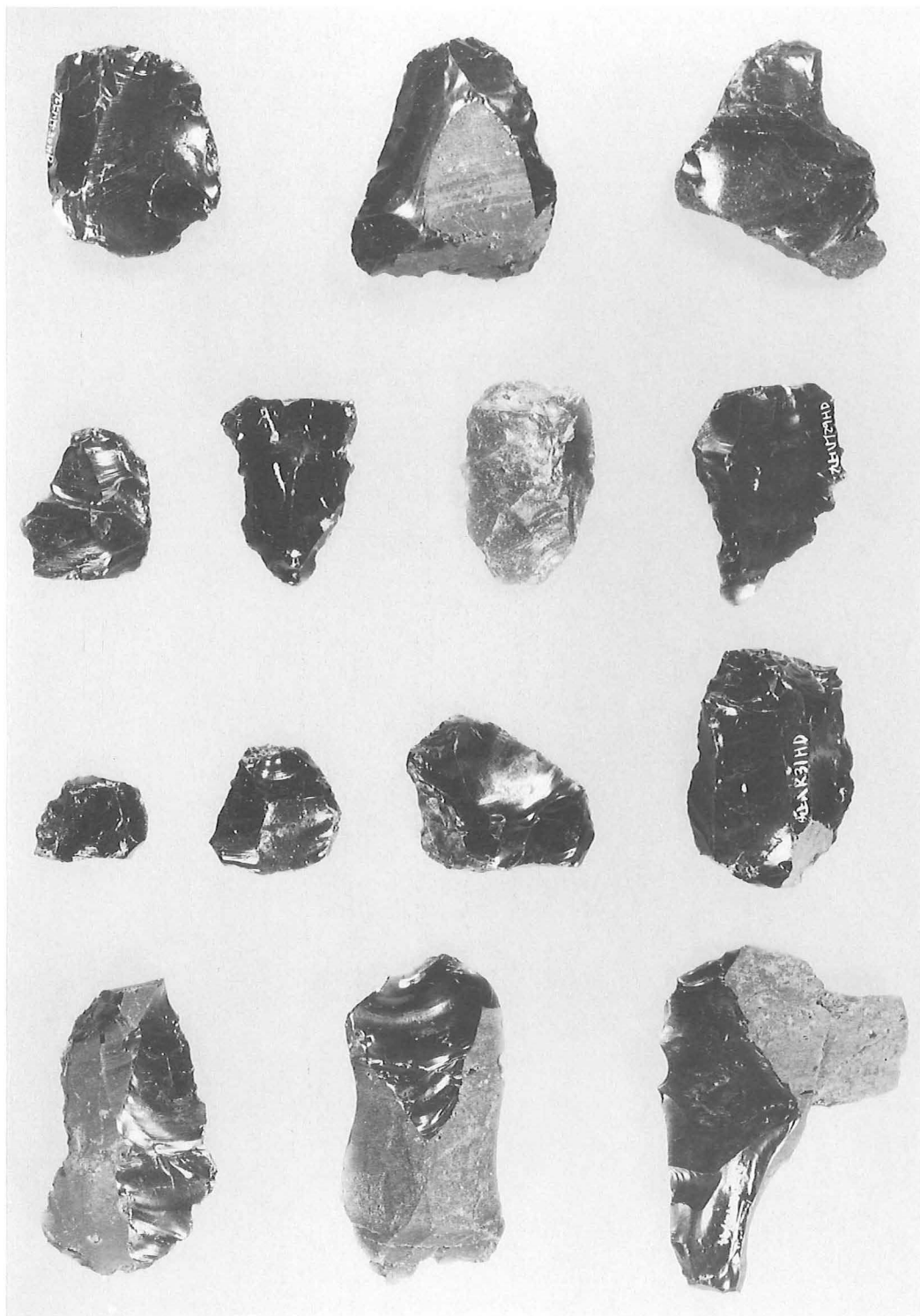
先土器時代・縄文時代の石器 ①



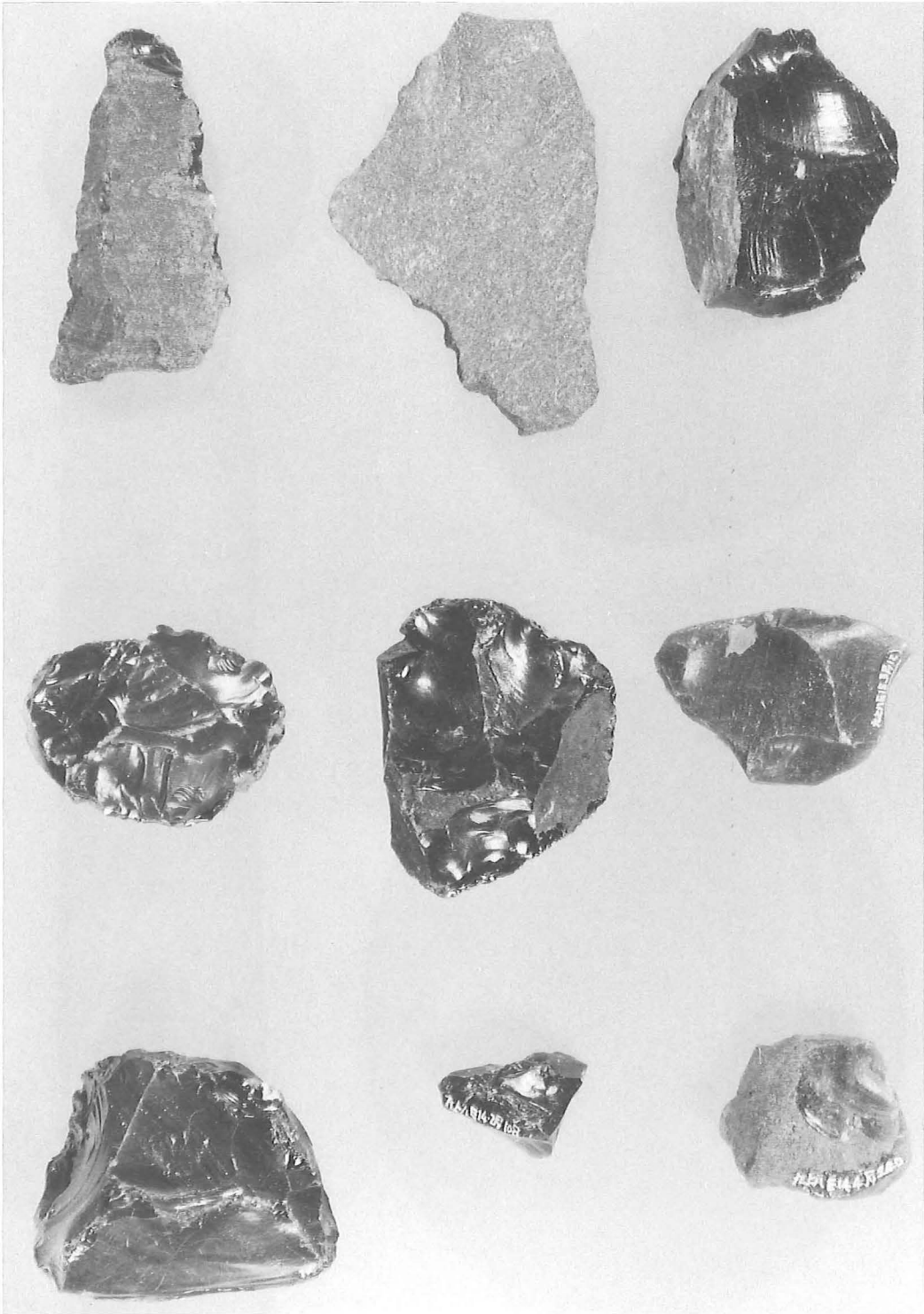
縄文時代の石器 ②



縄文時代の石器 ③



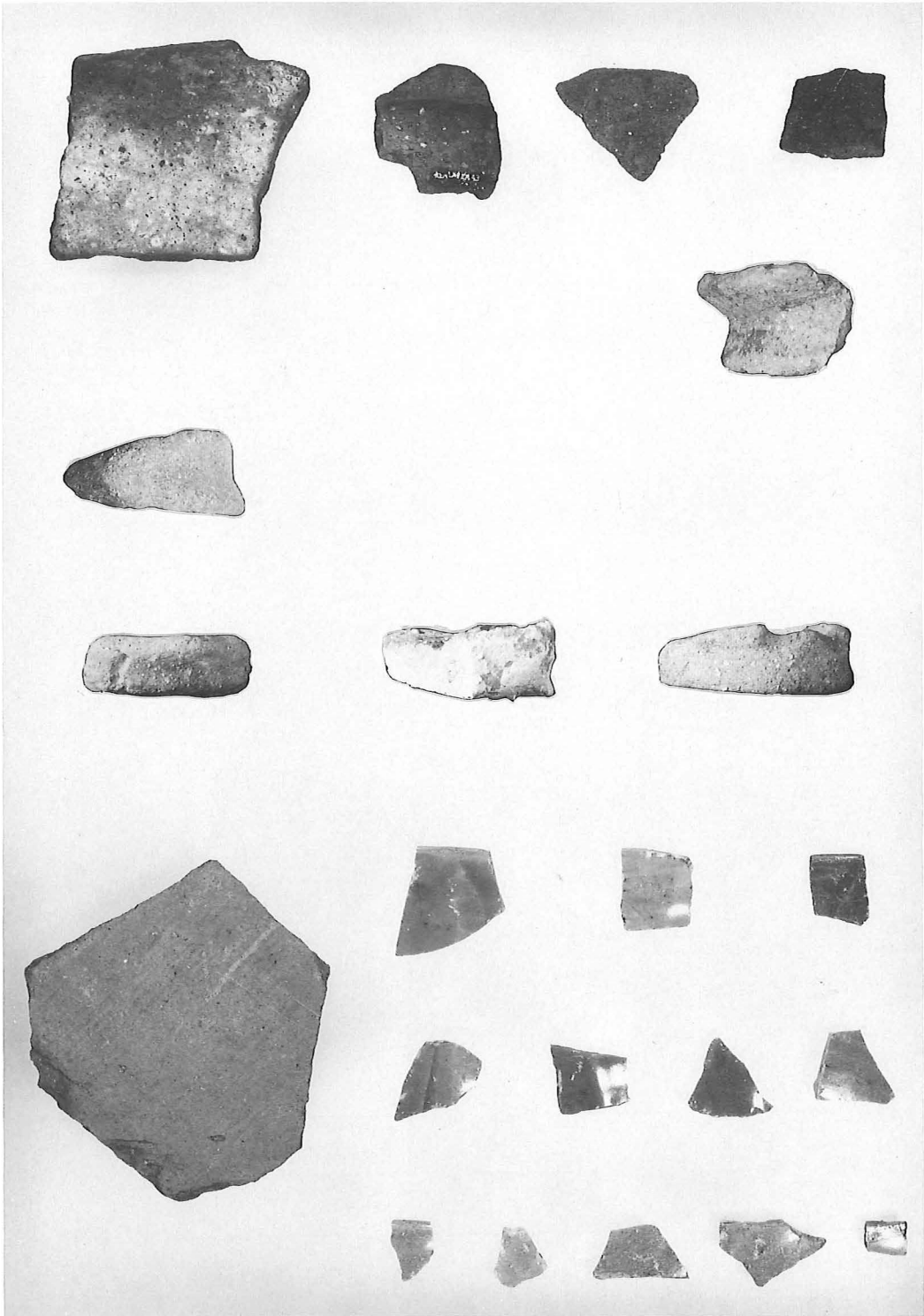
縄文時代の石器 ④



縄文時代の石器 ⑤



縄文時代の石器 ⑥・弥生時代の石器



縄文時代・古墳時代・中世の土器類



## IV. 東彼杵地区の調査

里 郷 遺 跡

大 久 保 遺 跡

小 園 城 跡

## IV 東彼杵地区の調査

### 1. 周辺の歴史的環境

東彼杵町は、北西に川棚町、東南は大村市、南東は大村湾に面し、北東は佐賀県嬉野町と接する。また、東部は多良山系、北部は虚空蔵山の裾野にあたり、それらの丘陵部に、彼杵川、千線川等が流れる。これらの河川流域に形成された扇状地は余り発達を見ない。

ここでは、本書掲載の周辺地域について記することにする。

東彼杵町内には、先土器時代～中世に至る周知の遺跡が75箇所程知られている。

先土器時代の遺跡は、25箇所を数える。主な遺跡は、本地寺住職の井手寿謙氏によって大野原一帯の堤周辺から発見された。線打堤遺跡、燕遺跡、足形遺跡、中池遺跡等で、ナイフ形石器、細石器文化期のナイフ形石器、台形石器、細石刃の遺物が採集されたが、昭和35年、36年に日本考古学協会西北九州総合調査特別委員会の福井洞穴遺跡、直谷岩陰、遠目遺跡、百花台遺跡等の発掘調査が実施された。これらの調査が実施される契機の一つでもあった。

九州横断自動車道建設工事関係で発掘調査され、先土器～縄文時代の複合遺跡である松山A遺跡で、ナイフ形石器、台形石器、剥片尖頭器、舟底形細石核、細石刃を出土した。同様に石器類が野中遺跡でも出土を見る。

縄文時代の遺物は、46箇所を数える。縄文早期の松山A遺跡で、調理用に利用された炉跡である集石遺構3基と無文土器、トロトロ石器、打製および磨製の石鏃、石槍、異形石器、錐、石匙、凹石、石皿等を出土し、小集落を形成していたことが窺われる。また、石鏃は約2000点を数える程多量に出土したことは、石器の工房跡と狩猟場としての性格を合せてもつものであろう。

縄文晩期の遺跡は、宮田A遺跡、野中遺跡が知られ、縄文晩期後半頃の遺物が出土している。特に、宮田A遺跡では、組織痕文土器等と縄文農耕に関係する扁平打製石斧が約300点出土し、この地域での縄文晩期農耕を考える上で、重要な資料が出土している。

弥生時代の遺跡は、2箇所を数える。昭和62年、63年のほ場整備事業関係の白井川遺跡緊急発掘調査で、箱式石棺墓、石蓋土壙墓、壺棺墓の墳墓が22基程検出された墓域群や住居跡が発見されている。

また、宮田A遺跡で、弥生中期～後期の遺物が出土している。

古墳時代の遺跡は、14箇所を数える。彼杵川流域に形成された扇状地に、平成2年に範囲確認調査が実施された「ひさご塚古墳」や終末期の群集墳（円墳）である彼杵の古墳群4基、上杉古墳群2基がある。ひさご塚古墳は、全長58m程の前方後円墳で、葺石等が確認されている。また、明治年間に内部主体が盗掘され、鉄刀、玉類が出土しているが詳細は不明である。

大村湾に突出した丘陵先端部には、弥生～古墳時代の石棺群が多く知られ、その中に才貫田古墳群の石棺群がある。これらの墳墓地域に隣接して、住居跡等の遺構群が白井川遺跡で検出

されている。

中世の遺跡は、昭和62年には場整備事業関係で発掘調査が実施された川井川内遺跡、岡遺跡があり、柱穴群などの遺構や輸入陶磁器類の遺物が出土し、11世紀後半から12世紀前半を中心に14世紀までの生活の跡が明らかになった。

また、中世の山城跡が、串ノ島城跡、松岳城跡、小藪城跡（本書掲載）等の5箇所が知られ、寺院跡も大村藩「郷村記」に11箇所の寺が記録されている。

彼杵は、江戸時代の長崎街道（小倉⇄長崎）の宿場町として、海上、陸上交通の要所として、利用された所でもある。 (副島)

註1 長崎県教育会「九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書Ⅵ」長崎県文化財調査報告書 第93集 1989

註2 長崎県東彼杵町教育委員会「白井川遺跡」東彼杵町文化財調査報告書 第3集 1989

註3 長崎県教育委員会「長崎県埋蔵文化財調査集報Ⅲ」長崎県文化財調査報告書 第50集 1980

註4 長崎県東彼杵町教育委員会「川井川内遺跡」東彼杵町文化財調査報告書 第1集 1986

註5 長崎県教育委員会「長崎県遺跡地図」長崎県文化財調査報告書 第87集 1987

註6 長崎県東彼杵町教育委員会「岡遺跡」東彼杵町文化財調査報告書 第2集 1988

註7 新人物往来社「日本城郭体系17」 1980

註8 「大村郷村記」・「深江記」

註9 長崎県教育委員会「九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書Ⅶ」長崎県文化財調査報告書 第93集 1990

註10 本書

Tab. 6 東彼杵町遺跡地名表

番号	遺跡名	遺跡所在地	立地	出土遺物	時代	文献
1	鳥田五輪塔群	東彼杵町蔵本郷鳥田	平野 標高 5m	五輪塔	中世	
2	松岳城跡	〃 三根郷	山 標高200m		〃	
3	川井川内遺跡	〃 法音寺郷字川井川内	台地 標高 60m	黒曜石剥片, 青磁	縄文, 中世	4
4	管無田B遺跡	〃 管無田郷管無田	〃 〃 90m	〃	〃	
5	管無田A遺跡	〃 〃 〃	〃 〃 〃	〃	〃	
6	高吉遺跡	〃 坂本郷	丘陵 〃 150m	黒曜石片	先土器・縄文	
7	重(かさね)の城	〃 〃	山 標高250m		中世	
8	平山池遺跡	〃 管無田郷平山	池・平地 標高150m		縄文	
9	牛の頭(うしのと)	〃 赤木牛の頭	丘陵 標高150m	黒曜石片, 石斧, 石鏃	〃	
10	赤木遺跡	〃 三根郷赤木	〃 〃 100m 120m	〃	〃	
11	彼杵川古墳群第4号墳	〃 〃 字上杉	平野 〃 15m		古墳	
12	彼杵川古墳群第3号墳	〃 〃 〃	〃 〃 〃		〃	
13	彼杵川古墳群第2号墳	〃 〃 〃	〃 〃 〃		〃	
14	彼杵川古墳群第1号墳	〃 〃 〃	〃 〃 〃		〃	
15	上杉古墳群1号	〃 〃 〃	〃		〃	
16	上杉古墳群2号	〃 〃 〃	〃 標高 5m		〃	
17	ワレ観現塚古墳	〃 宿郷古金谷	〃 〃 10m		〃	
18	彼杵の古墳	〃 〃 古金屋道上	〃	鉄刀(2), 鉄鏃(多量)	〃	
19	松山A遺跡	〃 彼杵宿郷松山	丘陵 標高 50m~73m		先土器・縄文	5
20	松山B遺跡	〃 〃 〃	〃 〃 80m~90m		〃 〃	
21	名切E遺跡	〃 〃 名切	〃 〃 90m~100m	黒曜石片	縄文	
22	名切C遺跡	〃 〃 〃	〃 〃 80m~90m		先土器・縄文	
23	名切A遺跡	〃 〃 〃	〃 〃 50m		〃 〃	5
24	名切B遺跡	〃 〃 〃	台地先端部附近 標高30m~40m	石核, 石鏃, スクレイパー, 黒曜石剥片	〃 〃	1
25	名切D遺跡	〃 〃 〃	台地 標高 70m~80m	黒曜石片	〃 〃	
26	外園遺跡	〃 千綿宿郷	丘陵 〃 〃	〃	縄文	
27	平(ダイラ)A遺跡	〃 〃 <small>附属千綿女子 高等農学園</small>	〃 〃 110m		先土器・縄文	
28	平B遺跡	〃 〃 〃	〃 〃 130m~140m		〃 〃	
29	赤木池遺跡	〃 〃 赤木池	〃 〃 180m	黒曜石片, 縄文晩期, 弥生, 古墳	縄文	
30	宮田A遺跡	〃 〃 宮田	平野 〃 10m	〃	〃	5
31	宮田B遺跡	〃 〃 〃	〃 〃 〃		〃	
32	小園城跡	〃 宿郷	丘陵 〃 30m		中世	10
33	瀬戸古墳	〃 瀬戸郷瀬戸	台地 〃 30m		古墳	
34	東彼杵町のキリシタン墓碑	〃 〃 1413	丘陵 〃 50m		近世	
35	小峰城跡	〃 〃	山 〃 60m~70m		中世	
36	広間平遺跡	〃 中岳郷広間平	丘陵 〃 250m		縄文	
37	三井木遺跡	〃 〃 三井木場	〃 〃 300m		〃	
38	太ノ原遺跡	〃 太ノ浦郷太ノ原	台地 〃 330m	黒曜石剥片	先土器・縄文	
39	足形遺跡	〃 遠目郷足形	〃 〃 430m	黒曜石片, 石鏃	〃 〃	
40	かのまる池遺跡	〃 中岳郷かのまる池	丘陵 〃 360m		〃 〃	

Tab. 7 東彼杵町遺跡地名表

番号	遺跡名	遺跡所在地	立地	出土遺物	時代	文献
41	幸十遺跡	東彼杵町中岳郷幸十山	台地 標高410m	黒曜石片	縄文	
42	燕堤遺跡	〃 燕郷燕堤	丘陵 〃 370m	黒曜石剥片	先土器・縄文	
43	燕郷遺跡	〃 〃	台地 〃 380m	黒曜石	〃 〃	
44	倉谷遺跡	〃 〃 倉谷	〃 〃 390m		縄文	
45	中池遺跡	〃 中岳郷中池	〃 〃 380m		先土器・縄文	
46	四ツ池遺跡	〃 燕郷大久保,中岳郷四ツ池	〃 〃 370m		縄文	
47	三井木場池遺跡	〃 中岳郷三井木場	丘陵 〃 350m		先土器・縄文	
48	八幡遺跡	〃 駄地郷駄地	〃 〃 150m~160m	黒曜石片	〃 〃	
49	野田遺跡	〃 〃	〃		〃 〃	
50	大久保遺跡	〃 〃	〃 標高 60m	黒曜石片	〃 〃	10
51	串島古墳	〃 里郷串の島	岬 〃 15m		古墳	
52	串島遺跡	〃 〃 〃	台地 〃 20m	黒曜石片	先土器・縄文・中世	
53	黒郷積石塚	全 全平	平野 〃 10m		平安	
54	里遺跡	〃 〃	台地 〃 110m	黒曜石片	先土器・縄文	10
55	千綿才貫田古墳群	〃 〃 才貫田	丘陵 〃 50m		古墳	
56	鋒ノ久保	〃 一ツ石郷鋒ノ久保	〃 〃 90m	黒曜石片	縄文	
57	平見高野	〃 〃 平見高野	〃 〃 150m	黒曜石剥片	先土器・縄文	
58	一ツ石台地遺跡	〃 〃 白地	台地 〃 150m	〃	縄文	
59	太田代池遺跡	〃 〃 太田代池	丘陵 〃 200m	〃	先土器・縄文	
60	綿打池遺跡	〃 〃 綿打池	〃 〃 280m	マイクロコア	〃 〃	
61	久保遺跡	〃 遠目郷字下遠目久保	山麓 〃 560m	黒曜石片	縄文	
62	百貫遺跡	〃 〃 大野原	台地 〃 510m		先土器	
63	武留路山城	〃 武留路郷	山頂 〃 300m~341m		中世	2
64	野中遺跡	〃 瀬戸郷瀬戸	丘陵 〃 50m~70m	磨製石斧, 黒曜石片	縄文	5
65	島田遺跡	〃 蔵本郷字島田	〃 〃 5m~10m	青・白磁, 須恵器, 弥生式土器	弥生~中世	
66	岡遺跡	〃 〃 字岡	〃 〃 〃 〃	弥生式土器, 須恵器, 土師器, 青・白磁, 他	中世	3
67	白井川遺跡	〃 〃 字白井川	平野・微高地 標高 5 m~10m	縄文式土器, 扁平打製石斧, 石皿, 石鏃, 他	縄文~中世	4
68	法音寺五輪塔	〃 法音寺郷川井川内	丘陵 標高100m	石塔	中世	
69	ちよいのどう五輪塔	〃 〃 〃	〃 〃 50m	〃	〃	
70	安全寺五輪塔	〃 蔵本郷大安	〃 〃 6m	〃	〃	
71	中ノ頭五輪塔	〃 千綿宿郷西宿	海岸 〃 3m	〃	〃	
72	清心寺五輪塔	〃 宿郷清心	平野 〃 10m	〃	〃	
73	江の串五輪塔	〃 里郷串の島	岬 〃 10m	〃	〃	
74	尼寺五輪塔	〃 〃 喜場	丘陵 〃 30m	〃	〃	
75	辻墓五輪塔	〃 〃 大迫	〃 〃 110m	〃	〃	

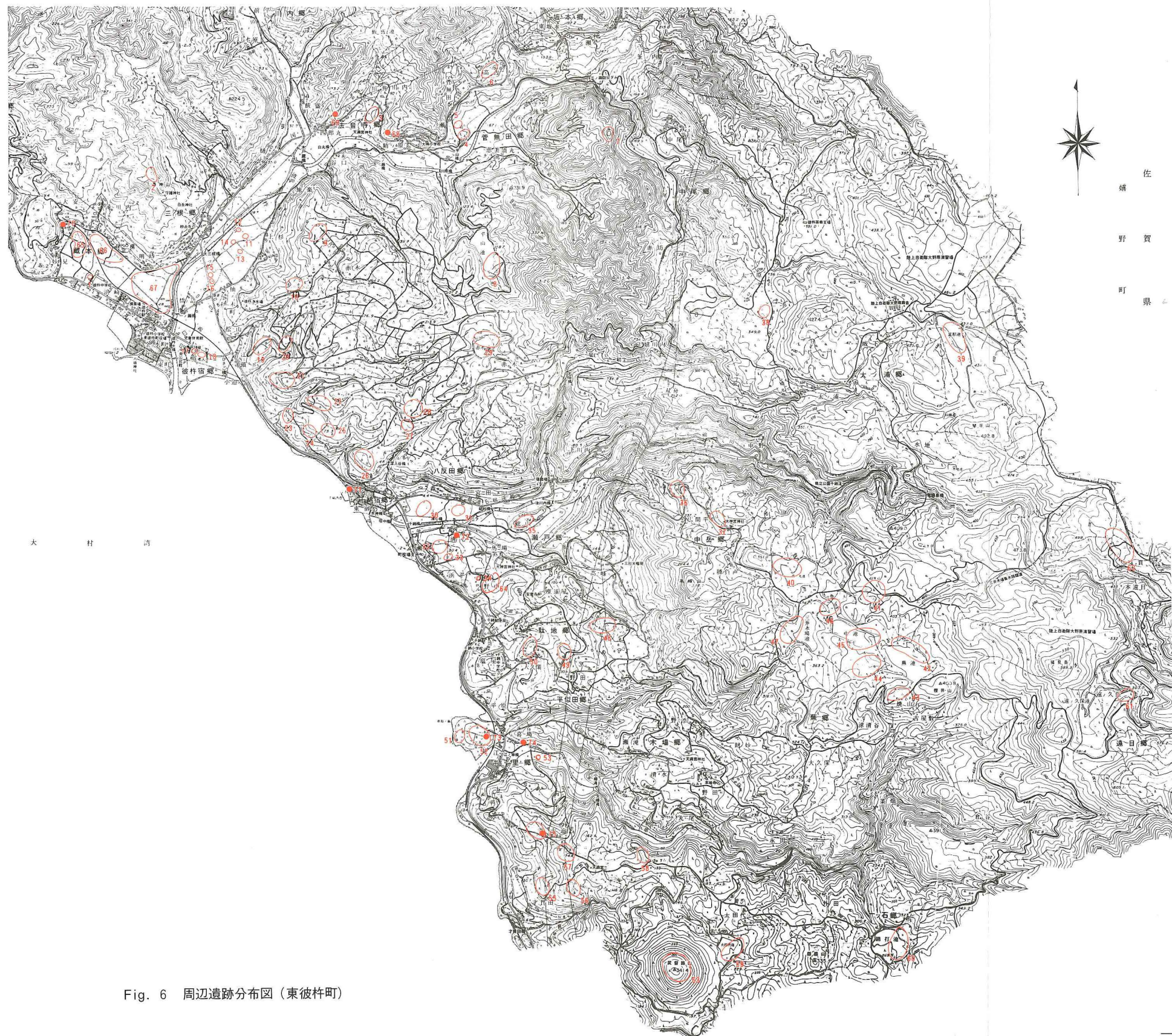


Fig. 6 周辺遺跡分布図（東彼杵町）

## 2. 里鄉遺跡



## 本文目次

I 調査	243
1. 遺跡の地理的位置	243
2. 調査の概要	243
3. 土層	246
II 遺構	249
1. A地区溝状遺構	249
2. B地区遺構	249
3. C地区柱穴状遺構	249
III 出土遺物	255
1. 土器	255
2. 石器	258
① 旧石器時代の石器	258
② 縄文時代の石器	262
IV 総括	304

## 挿図目次

Fig. 1 周辺地形図 (1/2000)	244
Fig. 2 調査区配置図	245
Fig. 3 土層図 (1/80)	247・248
Fig. 4 遺構配置図	249
Fig. 5 A地区溝状遺構	250
Fig. 6 B地区遺構実測図	251・252
Fig. 7 C地区柱穴状遺構実測図	253・254
Fig. 8 地区別縄文土器出土状況図	255
Fig. 9 出土土器実測図	256
Fig. 10 地区別石器出土状況図	258
Fig. 11 ナイフ形石器出土分布図	258
Fig. 12 ナイフ形石器実測図	259
Fig. 13 台形石器・細石刃出土分布図	260
Fig. 14 台形石器・細石刃実測図	261
Fig. 15 石核出土分布図	262



Fig. 16	尖頭器出土分布図	262
Fig. 17	石核実測図	263
Fig. 18	尖頭器実測図①	264
Fig. 19	尖頭器実測図②	265
Fig. 20	スクレイパー出土分布図	266
Fig. 21	スクレイパー実測図	267
Fig. 22	その他の石器実測図①	268
Fig. 23	その他の石器実測図②	269
Fig. 24	使用痕のある剥片実測図①	271
Fig. 25	使用痕のある剥片実測図②	272
Fig. 26	使用痕のある剥片実測図③	273
Fig. 27	使用痕のある剥片実測図④	274
Fig. 28	石鏃全体分布図	275
Fig. 29	石鏃分類図	275
Fig. 30	石鏃残存部位図	276
Fig. 31	石鏃Ⅰ a類実測図	277
Fig. 32	石鏃Ⅰ b類実測図	278
Fig. 33	石鏃Ⅱ a類実測図	279
Fig. 34	石鏃Ⅱ b類実測図	280
Fig. 35	石鏃Ⅱ c類実測図①	281
Fig. 36	石鏃Ⅱ c類実測図②	282
Fig. 37	石鏃Ⅱ c類実測図③	283
Fig. 38	石鏃Ⅱ c類実測図④	284
Fig. 39	石鏃Ⅱ c類実測図⑤	285
Fig. 40	石鏃Ⅱ c類実測図⑥	286
Fig. 41	石鏃Ⅱ c類実測図⑦	287
Fig. 42	石鏃Ⅱ d類実測図	289
Fig. 43	石鏃Ⅱ d・Ⅲ類実測図	290
Fig. 44	石鏃Ⅳ類実測図	291
Fig. 45	石鏃Ⅴ類出土分布図	292
Fig. 46	石鏃Ⅴ類実測図①	293
Fig. 47	石鏃Ⅴ類実測図②	294
Fig. 48	形式不明石鏃実測図①	295
Fig. 49	形式不明石鏃実測図②	296

## 表 目 次

Tab. 1	石鏃計測表①	297
Tab. 2	石鏃計測表②	298
Tab. 3	石鏃計測表③	299
Tab. 4	石鏃計測表④	300
Tab. 5	石鏃計測表⑤	301
Tab. 6	石鏃計測表⑥	302
Tab. 7	石鏃計測表⑦	303

## 図 版 目 次

PL. 1	遺跡遠景（上）・遺跡近景（下）	307
PL. 2	調査風景	308
PL. 3	遺構実測風景（上）・土器出土状況（下）	309
PL. 4	ナイフ形石器出土状況（上）・尖頭器出土状況（下）	310
PL. 5	J-8区東壁（上）・F-17区東壁（下）	311
PL. 6	I-9区西壁（上）・L-20区東壁（下）	312
PL. 7	N-19区東壁（上）・C-5区北壁（下）	313
PL. 8	A地区溝状遺構	314
PL. 9	B地区遺構	315
PL. 10	C地区柱穴状遺構	316
PL. 11	出土土器	317
PL. 12	出土土器	318
PL. 13	ナイフ形石器・台形石器	319
PL. 14	細石刃・石錐・彫器・楔型石器	320
PL. 15	石核	321
PL. 16	石核	322
PL. 17	尖頭器	323
PL. 18	スクレイパー	324
PL. 19	その他の石器	325
PL. 20	使用痕のある剥片	326
PL. 21	使用痕のある剥片	327
PL. 22	使用痕のある剥片	328

里鄉遺跡

PL. 23	石鏃 I a · I b類	329
PL. 24	石鏃 II a · II b類	330
PL. 25	石鏃 II c類	331
PL. 26	石鏃 II c類	332
PL. 27	石鏃 II c類	333
PL. 28	石鏃 II c類	334
PL. 29	石鏃 II c類	335
PL. 30	石鏃 II d類	336
PL. 31	石鏃 III · IV類	337
PL. 32	石鏃 V類	338
PL. 33	型式不明石鏃	339

# I 調査

## 1. 遺跡の地理的位置 (Fig. 1)

東彼杵町は、その大部分が山地である。東側に多良山系、北側は虚空蔵山塊に接する。これらの山から延びる大部分の丘陵は、西に位置する大村湾に急傾斜をもって没する。このため、町の西北部を流れる彼杵川と中央部を流れる千綿川の両河川によって形成された小さな谷底平野以外には見るべき平地は無い。ただ、標高300mから400m位の高地にはなだらかな高原性の溶岩台地が占拠しており、現在それらの地域は陸上自衛隊大野原演習場として利用されている。これらの台地上には至るところ溜池が見られ、その周辺からは旧石器時代から縄文時代にかけての石器がよく採集されている。

町内の遺跡の分布状況を概観すると、遺跡の立地が旧石器時代と縄文時代はよく似た傾向を示す。すなわち、合わせて67の遺跡中標高300mから400mにかけてが17遺跡、そして50mから150mにかけてが35箇所を占めるなど、標高によって二つのピークが認められる。平坦地か緩やかな傾斜地を生活空間として好むのが普通であれば、遺跡の少ないこの間の標高が急傾斜地ということになろう。

里郷遺跡は西南方向に緩やかに延びてきた丘陵の先端部にあたり、遺跡の標高は112mから117mを計る。この地点から先は急角度をもって海岸部にいたる。

## 2. 調査の概要 (Fig. 2, 3)

調査に先立つ当該地の分布調査の結果では、遺跡は標高150mの平坦地を中心として東西約130m、南北約100m程度の範囲に旧石器時代と縄文時代の石器が多数採集されていた。

九州横断自動車道はほぼこの遺跡の中心区域を横断することになったわけである。このため、調査区設定にあたっては、既設の道路中心杭を利用することとし、合わせて以下の基準を定めた。

- ① 中心杭 STN.76+60と STN.76+80を見通したラインを調査基軸線とする。
- ② 中心杭 STN.76+60を基軸として直角に各5mの方眼を組む。
- ③ 調査区の呼称は、東西方向を数字、南北方向をアルファベットで表わすこととする。
- ④ 調査に必要な数値（レベル、座標等）は道路公団が計測した数値を利用する。

調査区は、遺跡と推定される面積約13,000m<sup>2</sup>の内、道路建設にかかる区域にのみ限定して設定した。調査は昭和60年（1985）12月から開始し、翌昭和61年5月で終了した。調査面積は6,065m<sup>2</sup>である。

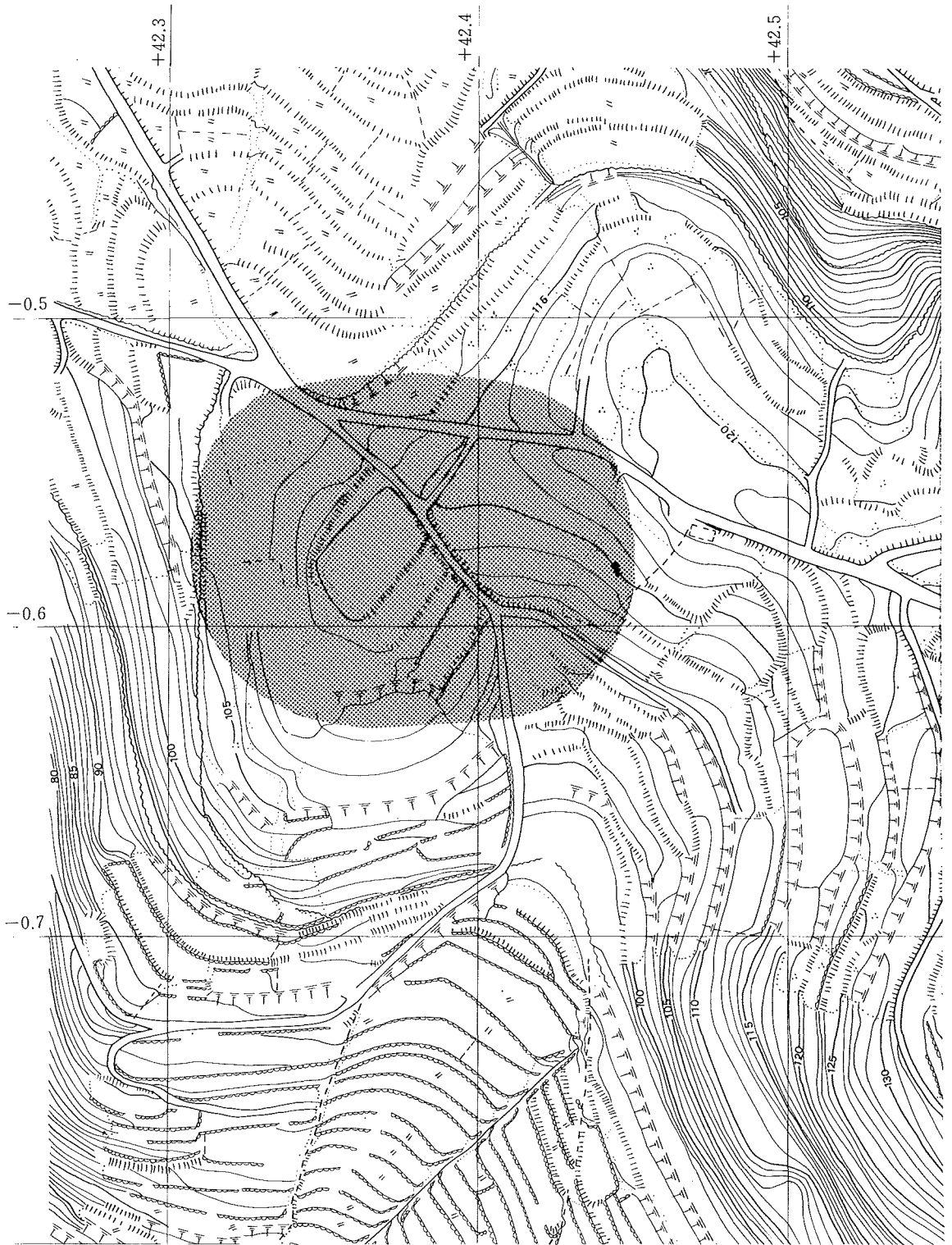


Fig. 1 遺跡周边地形图 (1/2000) 座標系第1系

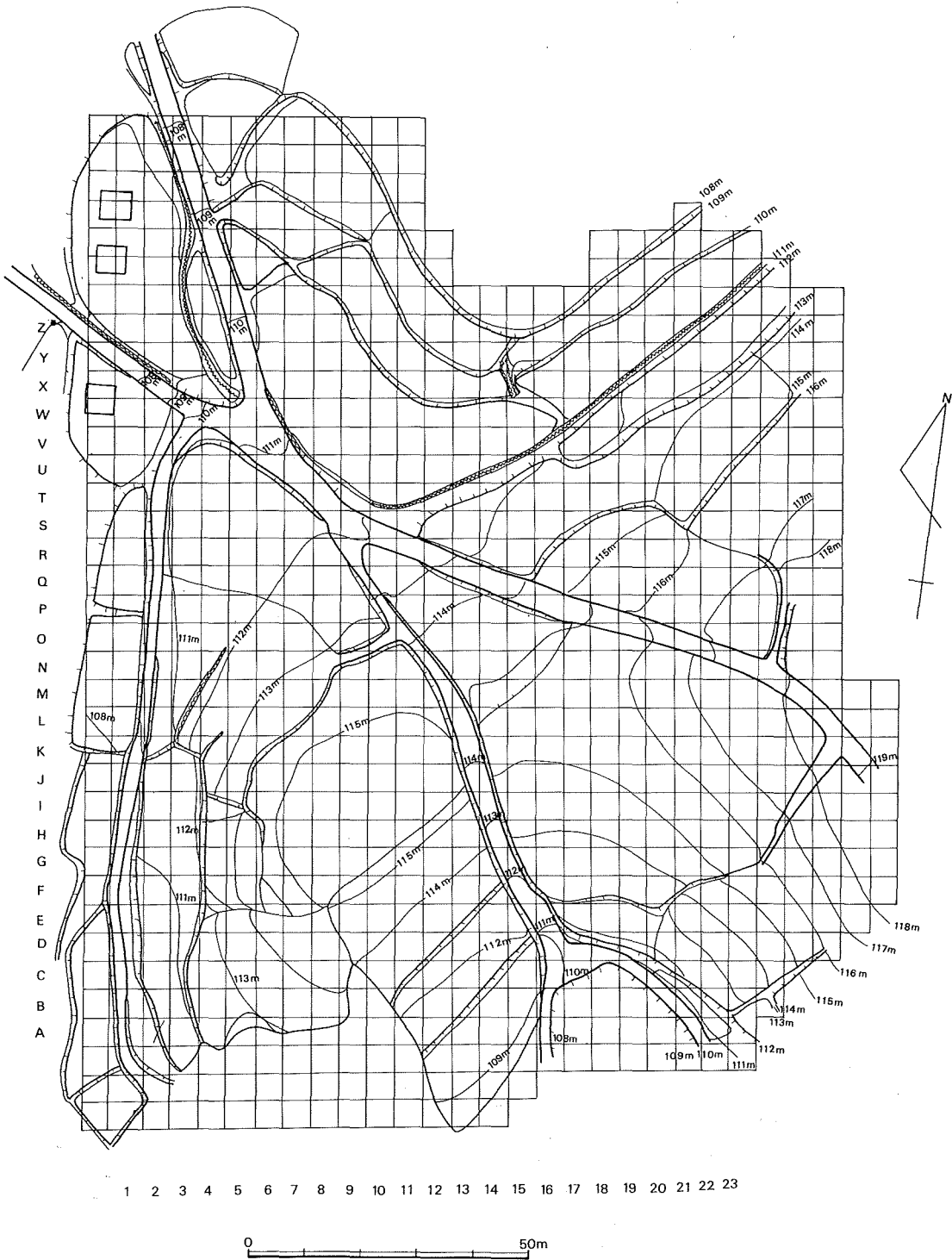


Fig. 2 調査区配置図

### 3. 土層 (Fig. 3)

当核地の自然地形は、北東方面から南西方面に向かって緩やかに延びる丘陵である。標高115m付近で一旦平坦となり、以下やや角度を増しながら北、西、南側へ傾斜する。

調査時の現況は、遺跡中央を南北に走る細い道を境とし、東側は一面茶畑であり、西側は蜜柑畑、そして北側はイモ畑として利用されていた。

従って、畑地耕作の際の攪乱がどの程度まで及んでいるのかが最大の心配事であった。

ここで掲載する土層図は、東西方向については各J列の北壁、南北方向はF区からR区にいたる東壁に限定する。

基本的に堆積土層は単純である。1層は耕作土の表土である。厚さは平坦部分で20cm程でJ—2, 3区あるいはG—17, F—17区などの下部は40cmないし50cm程堆積する。

2層は包含層で色調は褐色を呈する。厚さは30cmないし50cm程であるが、耕作時の攪乱によって既に消失している区域もあった。遺物はこの層から出土する訳であるが、旧石器時代の資料から縄文時代の資料まで含んでいる。この層を更に細分することは出来ない。

3層は玄武岩の風化礫からなる。すでに遺物は含まない。所謂地山である。

以上、概して土層の堆積は薄く、整層中での遺物の出土状況を正確に捉えることは困難であった。標高が低い地点などは堆積層が厚く数層が観察されるが、上部からの流れ込みの結果であり、出土遺物も近世の資料が下層にまで及ぶなど、プライマリーな状況とは認められない。



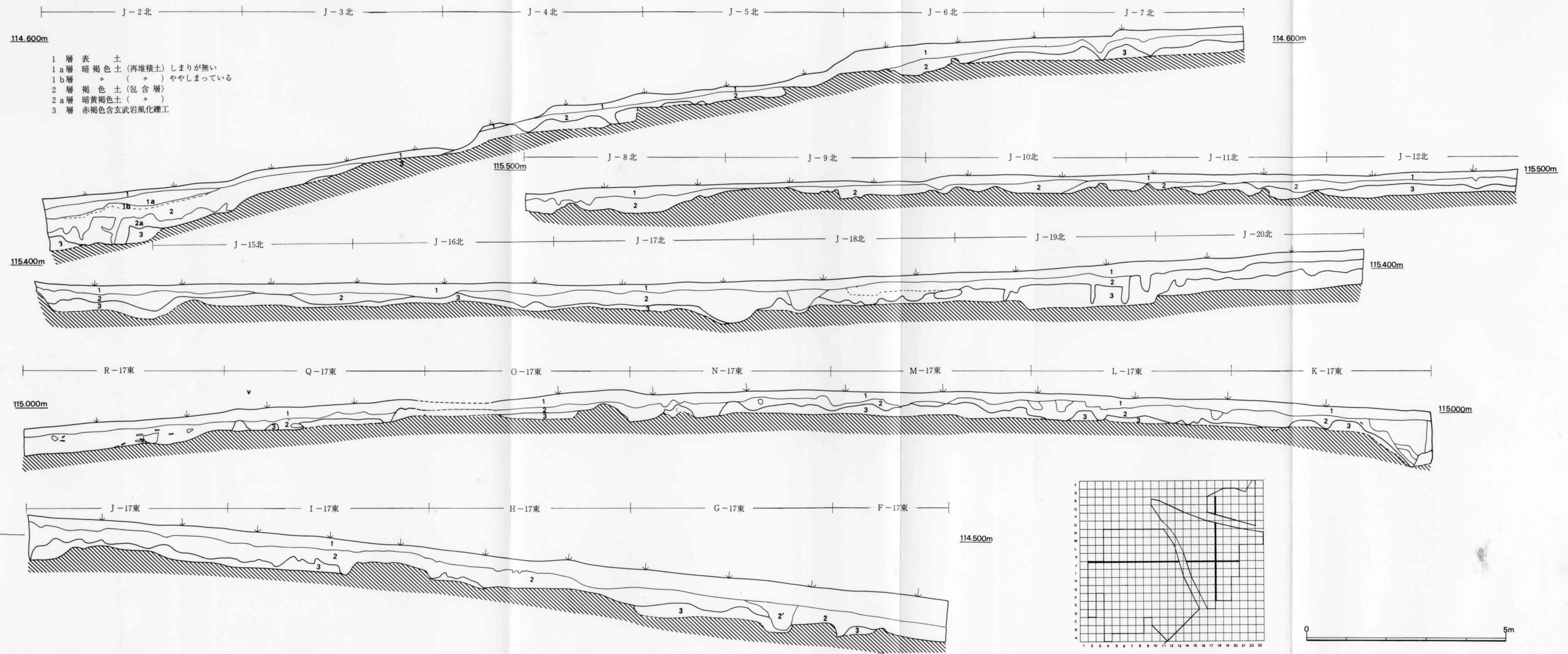


Fig. 3 土 層 図 (1/80)



## II 遺構 (Fig. 4～7)

土層の堆積が薄いことと、耕作時の攪乱のため各種遺構の残存状況は良好とは言えない。ここでは比較的保存状態の良い遺構について説明を加えておきたい。

調査区全体において不定形のピットは見られたが、遺構として捉えられたのは、以下の3遺構にすぎない。

A, B, C地区の遺構と仮称して、順次簡単な説明を加えておきたい。

(Fig. 4)

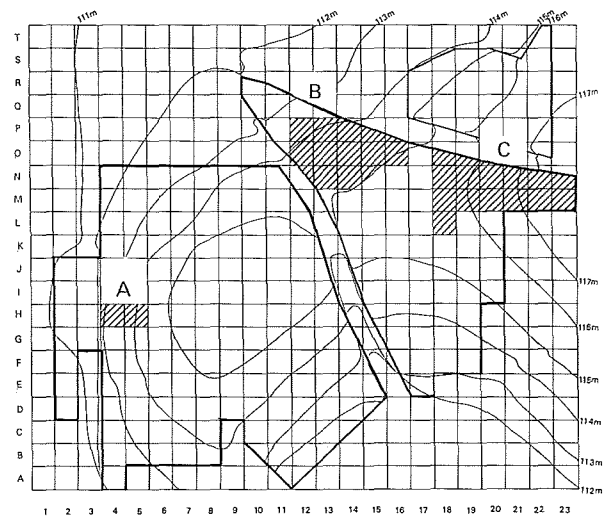


Fig. 4 遺構配置図

### 1. A地区溝状遺構 (Fig. 5)

H—4区と5区にまたがる半月状の溝状遺構である。東側は地山面から深さ15cm～25cm、西側は35cm～45cmで、部分的に70cm程に掘り込んでいる。

土壌内の覆土は特に細分できず1層のみである。石器16点、土器8点が出土したが、完全に土壌内に含まれる遺物は少なく、浮いた状態の資料が多い。出土遺物の内特徴的な資料は Fig. 9—6の土器のみであるが、但し、この資料も地山面より若干浮いた状態で出土しているため、これのみで遺構の時期を決定することは難しいものと思われる。

### 2. B地区遺構 (Fig. 6)

N, O, P—13～16区を中心に確認された遺構で、不定形の土壌群と集石、そして若干の柱穴状ピットからなる。この地区は土層の堆積が特に薄く、厚さ20cmほどの表土を除くとすぐ遺構面にあたるため時期の特定が困難である。土器、石器は不定形の土壌内からも出土するが、土壌内には人為的なものかどうか不明な自然礫も多く含まれている。柱穴と思われるピットも見られるが、規則的な配置は認められないため建物址かどうかの断定は出来ない。

### 3. C地区柱穴状遺構 (Fig. 7)

M, N—18～21区を中心とするピット群である。A地区と異なり、礫をほとんど含まない。但し、この区域は茶の根による攪乱が多く認められ、本来の柱穴と紛らわしい面がある。ピットは略円形を呈するものも認められるが、明瞭な住居址としての輪郭は描けない。しかし、出土土器が程度集中している区域だけに、あるいは既に竪穴住居の壁が消失している可能性は残る。

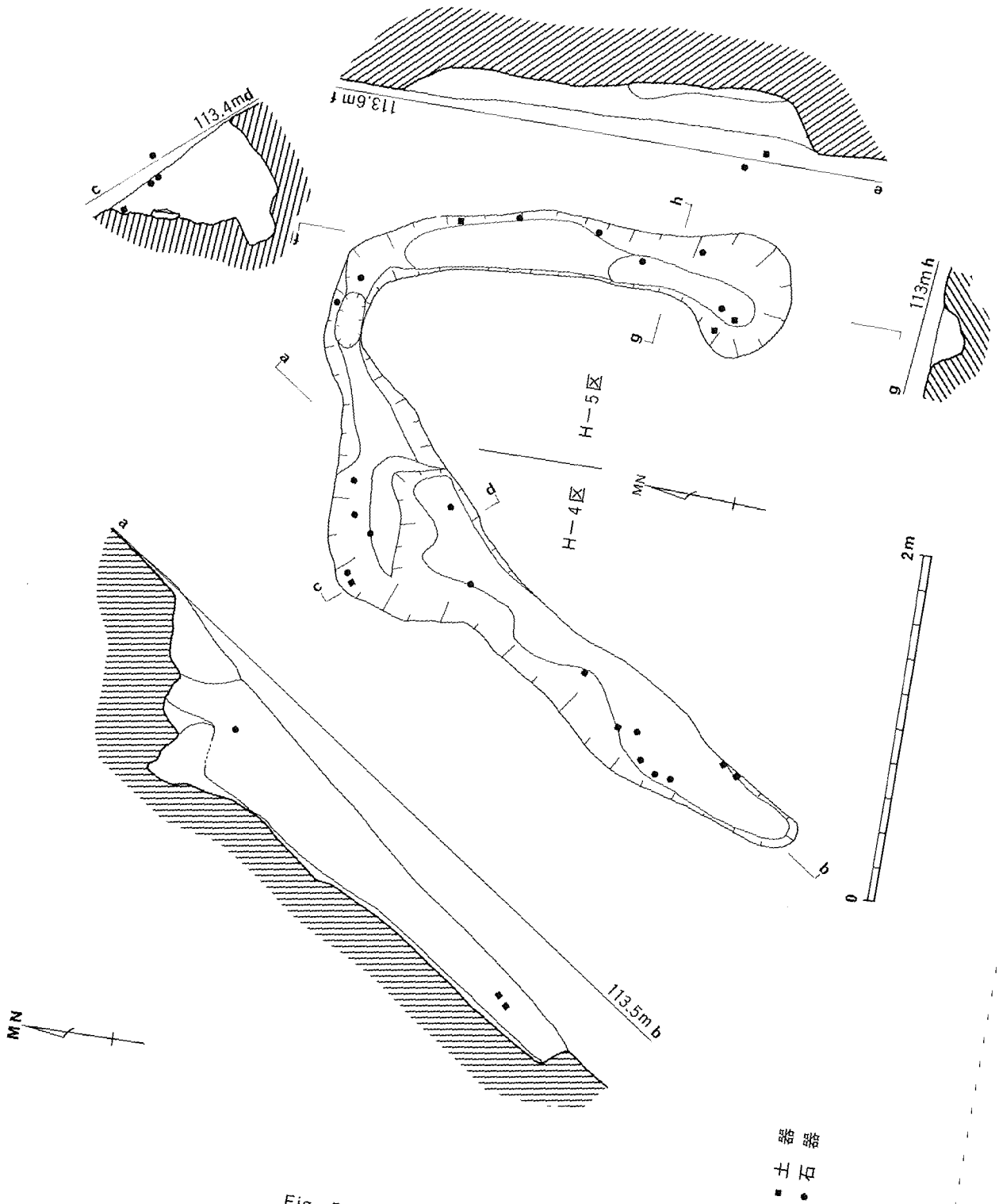


Fig. 5 A地区 溝状遺構実測図

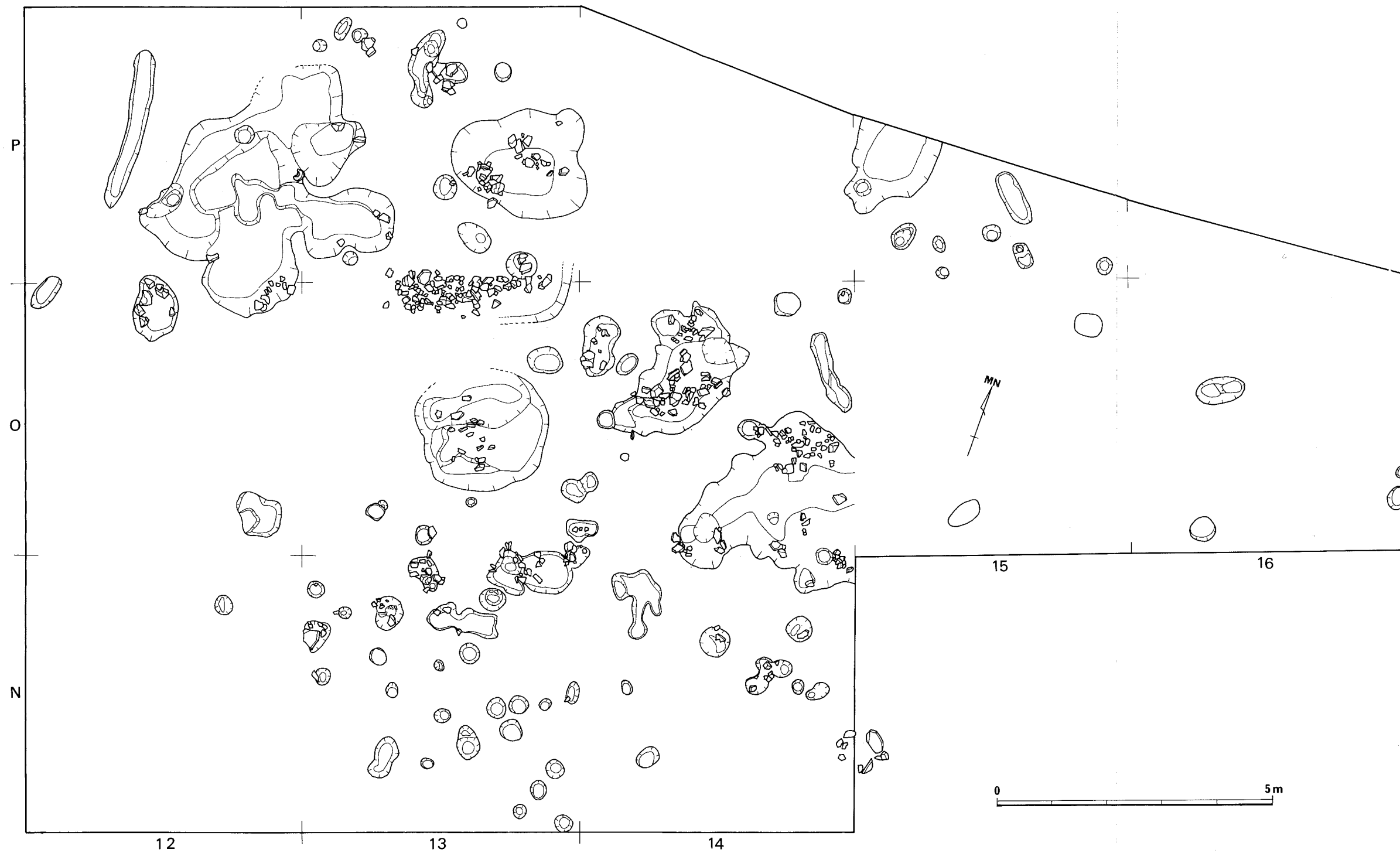


Fig. 6 B地区遺構実測図

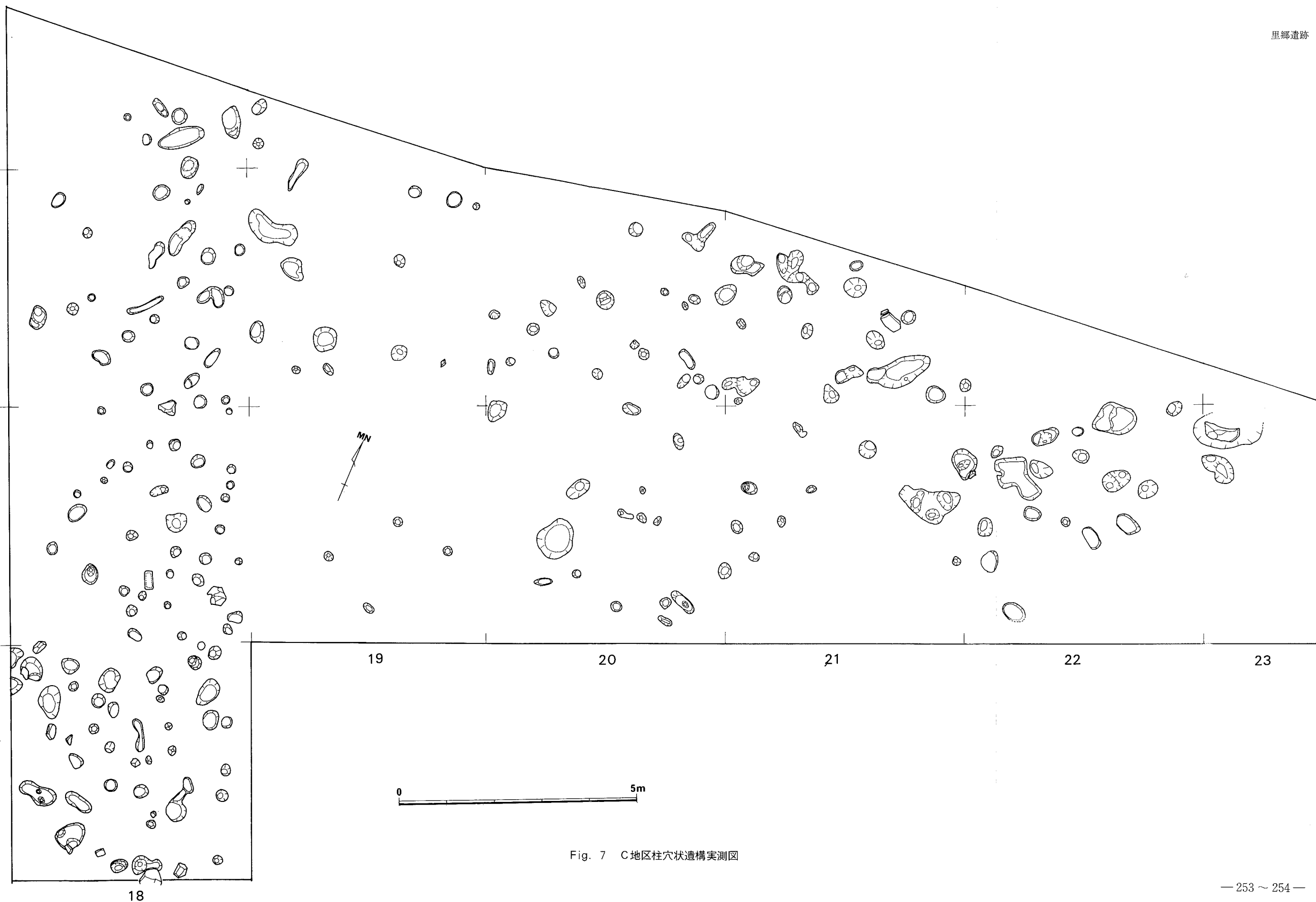


Fig. 7 C地区柱穴状遺構実測図

### Ⅲ 出土遺物

主な出土遺物は、ナイフ形石器、台形石器などの旧石器時代遺物、縄文時代の土器、石器、須恵器、そして近世陶磁器まで多種にわたるが、資料として多いのは縄文時代の石器である。

以下、器種別にその概略を述べておく。

#### 1. 土器 (Fig. 8, 9)

出土土器としては、縄文土器が最も多く、その出土状況は Fig. 8 のとおりである。総数は581点であるが、その殆どは細片であり図化出来ない。

土器の集中度を見ると、標高115m～116mにかけてが最も多く、地域的にはJ—8区を中心とする区域とM—20区を中心とする区域に集中する傾向をもっている。後者の地点は柱穴状ピットが多く見られる区域である。

ここではかろうじて実測できる7点についてのみ掲載しておく。

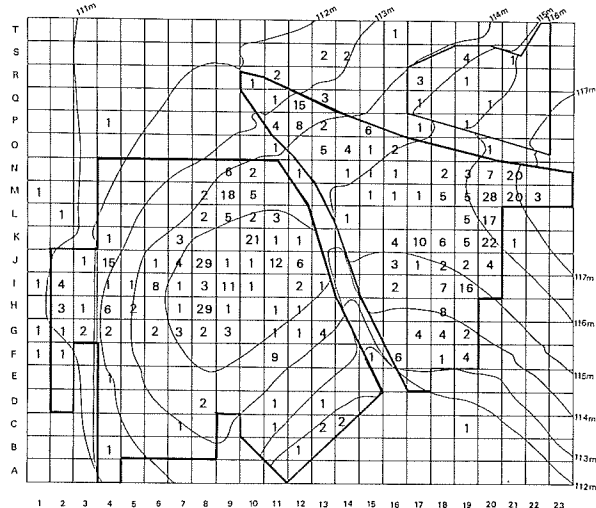


Fig. 8 地区別縄文土器出土状況図

1は復元底径11cm、厚さ15mmの分厚い深鉢の底部である。胎土に角閃石と石英粒を含み表面がザラついている。色調は黄褐色で焼成は普通である。縄文時代早期に属する無文の深鉢の資料であろう。

2も深鉢の底部である。やや上げ底気味で復元底径は約10.6cm。色調は明赤褐色で焼成は良好である。胎土に滑石を含む。器表面に指頭による圧痕が見られる。

3は薄手の深鉢底部である。復元底径は11cm、色調は茶褐色で焼成は良好である。胎土に僅かに滑石を含む。底に原体不明の櫛歯状の圧痕が観察される。

4も薄手の深鉢底部である。復元底径が11cmで色調、焼成、胎土共に3に似ている。

5は赤褐色を呈する深鉢底部である。胎土に多量の滑石を含む。焼成は普通。復元底径は8cm程度で比較的小型の資料と思われる。

6は鉢口縁部である。ゆるやかに外反する頸部から逆「く」の字状に反転して口縁部を形成する。外側口唇部には一条の浅い沈線が走る。器壁は薄く焼成は普通である。茶褐色を呈し胎土には大粒の砂粒を含む。器表面が若干風化しているため調整痕は不明瞭である。

7は精製の鉢口縁部である。復元径は22cmで口唇部には粘度紐を貼りつけて肥大させる。口唇部に穿孔のための穴が見られるが貫通していない。胴部は「く」の字状に屈曲し、その下半

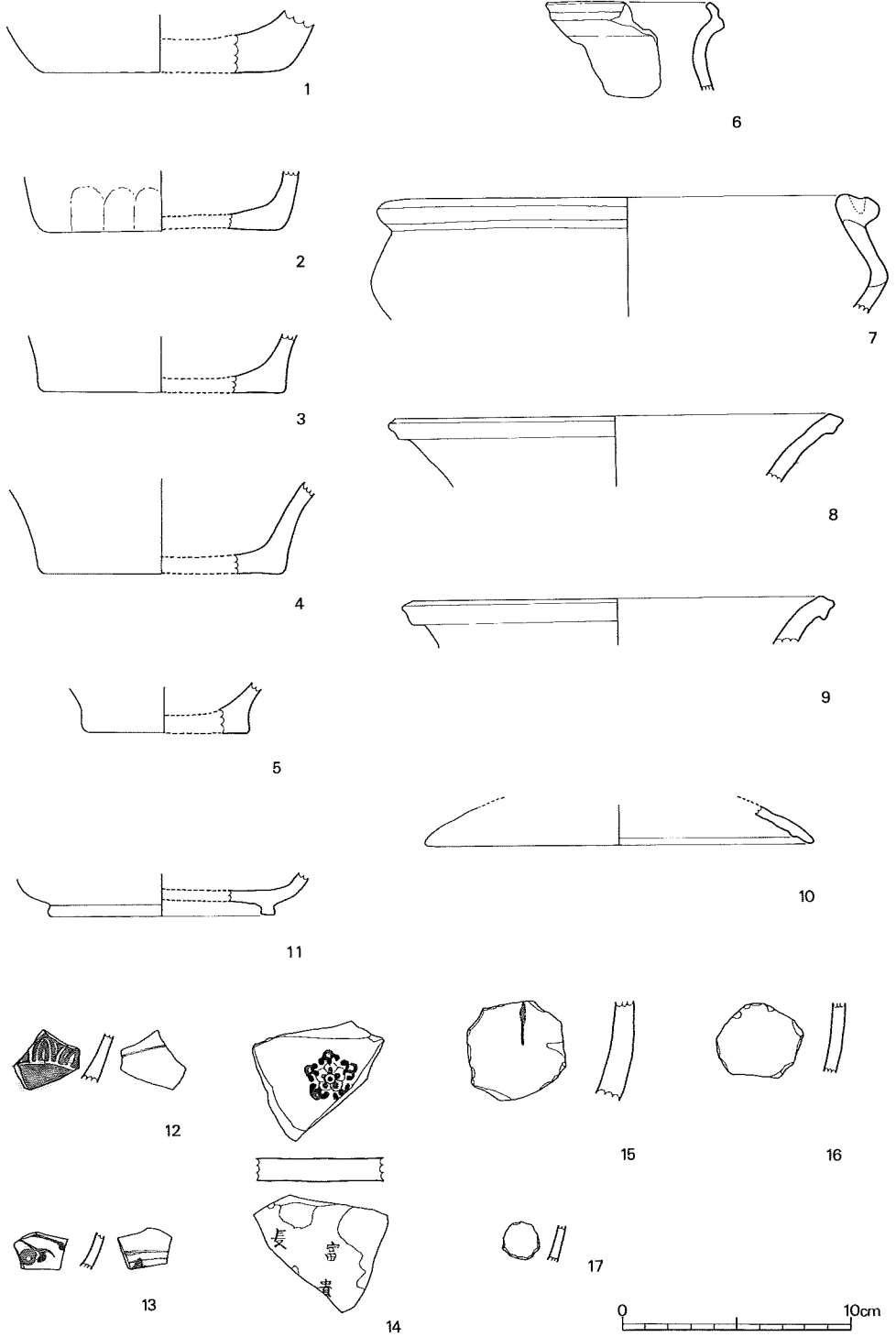


Fig. 9 出土土器実測図 (1/3)

部には研磨を施す。色調は赤褐色で胎土に石英粒と微量の雲母を含む。焼成は普通である。

以上の資料は縄文後期に属する。

8, 9は須恵器の甕口縁部である。復元径は8は20cm, 9は19cmである。共に器高は不明であるが、焼成は堅緻、胎土は密である。口唇部がやや凹む。回転ナデ調整を行う。

10は須恵器坏蓋である。口径17.1cmで器高は不明。回転ナデ調整を行う。端部は丸くおさめ、内面に痕跡的なかえりが見られる。他に同種の資料が4片程見られる。

11は須恵器の杯身である。口縁部を欠損しているため器高は不明である。高台は貼りつけで、ほぼ垂直に下がり、外側で接する。底部外面は回転ヘラ切りで、底部内部は一定方向のナデ調整を行う。胎土は粗で、焼成は甘い。底径は10cmである。

以上の資料は8, 9は第Ⅱ型式第4段階<sup>註1</sup>, 10, 11は第Ⅲ型式第3段階の資料であろう。

12は粉青沙器片である。碗か皿になるものと思われる。黄緑色を呈し、外面には連弁、内面には一条の沈線を描く。高麗末期から李朝初期の資料と思われる。<sup>註2</sup>

13は明の染付け碗である。内外面に花文を描く。

14は肥前系の白磁皿である。見込には五弁のコンニャク版、底には富貴長□の銘が入る。<sup>註3</sup>  
18世紀前半に流行したタイプであるらしい。

15, 16, 17は円盤である。15は直径約4cm, 全周を打ち欠いて整形している。絵唐津系の陶器を利用する。16は肥前系の青白磁を、17は同じく肥前系の白磁を転用する。

註1 大阪府教育委員会「陶邑Ⅰ」大阪府文化財調査報告書 第28輯 1976 外

註2 西谷 正「九州・沖縄出土の朝鮮陶磁器に関する予察」九州文化史研究所紀要 第28号 1983

註3 大橋康二「国内出土の肥前陶器」佐賀県立九州陶磁文化館 1984

## 2. 石器

表土以外から出土した石器ならびに石器片は6,538点であり、その地区別出土状況は Fig.10 のとおりである。①G—2, 3区を中心とした地点。②J—10区を中心とした地点。③P—12区を中心とした地点、そして④K—18区を中心とした計4箇所の地点に遺物の集中が見られる。この内、①の地点は明らかに上部からの流れ込みである。②の地点は標高115mのコンターが回る最も平坦な区域であるが、土の流失が多く、包含層は薄い。また何らかの遺構も確認出来なかった。③の地点は土壙や柱穴状のピットが多く見られた区域であり、当該期の遺物と遺構が一致している。④は柱穴状のピットが多く検出された地点の若干南側にあたる。この地点には明瞭な遺構は見られなかったが、土層は厚く堆積していたことから数量の多さに結び付いたものであろう。

以下、出土石器を器種毎に説明しておきたい。

### ① 旧石器時代の石器

#### ナイフ形石器 (Fig.11, 12)

12点出土した。その地区別出土状況は Fig.11のとおりである。

主に調査区の東側に分布の中心が見られる。

1は剥片尖頭器とか、有茎石器とも呼ばれる石器である。縦長の剥片を素材とし、裏面からのみの細調整によって形状を整えている。基部両側面から急斜度細部調整をおこなって基部を作り出す。左側縁部全面と右側縁の一部にも細調整を行う。刃部は右側片上部であるが、その作りだしは明確ではない。風化が著しい。

2も縦長剥片を素材とする。裏面基部に平坦細調整を施してバルブを除去しているほか、二側縁に裏面から急傾斜細調整を施して明瞭な刃部を作り出している。刃部には刃こぼれが観察される。

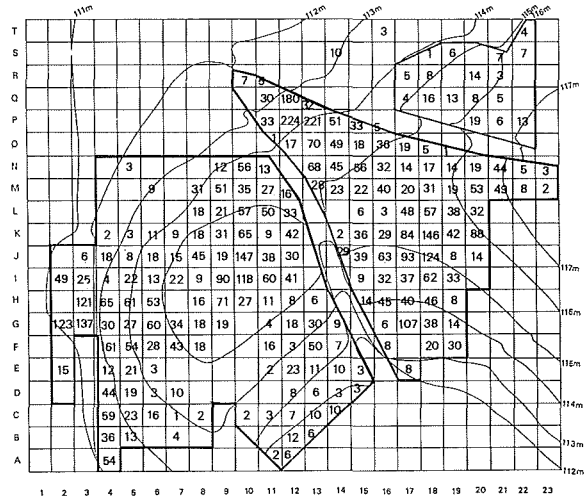


Fig. 10 地区別石器出土状況図

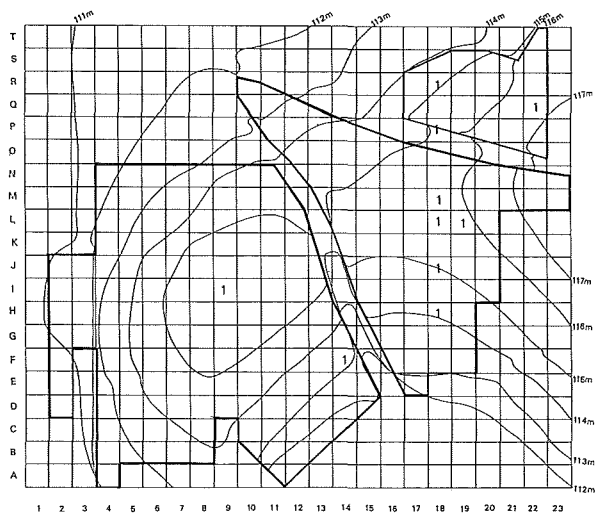


Fig. 11 ナイフ形石器の分布図



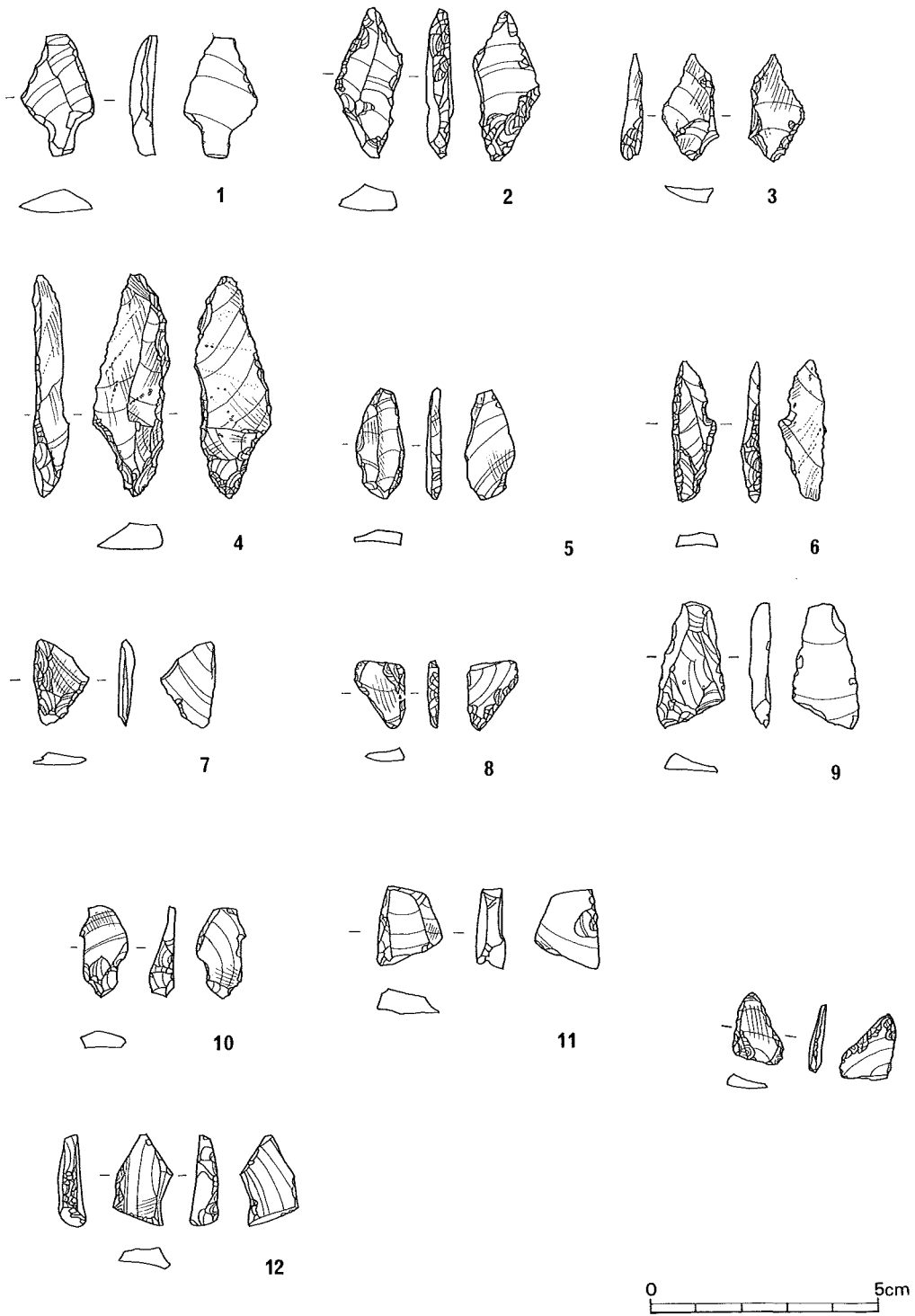


Fig. 12 ナイフ形石器実測図

3も縦長剥片の素材の両側縁部に急斜度調整を施して刃部を作り出す。基部の裏面にはバルブが残る。4は厚手の縦長の黒曜石を素材とする。裏面の基部は平坦調整を施してバルブを除去するほか、表面にも同じ平坦剥離を行って形状を整える。側縁部には入念な裏面からの急斜度調整を行って刃部を作り出している。刃部には使用痕が認められる。5は薄手の縦長の黒曜石の素材に両側縁から細調整を施す。基部はバルブを切断している。先端部を僅かに欠損する。6も比較的薄手の黒曜石の素材を利用する。両側縁の裏面から急斜度調整を施して刃部を作り出す。刃部には刃こぼれが見られる。7は基部だけの資料であるので全容が不明であるが、薄手の不定形剥片の黒曜石の素材に両側縁から細調整を施す。8良質で薄手の黒曜石を素材とする。右側縁は裏面からのみ細調整をおこなうが、左側縁は両面から細調整を施す。9は安山岩の縦長剥片を素材とする。左側縁にのみ急斜度調整を行う。先端部および基部を欠損する。10は基部のみ残る資料である。透明度が高く、良質で縦長の黒曜石を素材とする。基部の両側縁に急斜度調整を行って明瞭な刃部を作り出す資料と思われるが、バルブの除去は十分ではない。11は先端部と基部が欠損する資料である。漆黒色で良質の黒曜石剥片を素材とする。左側縁には裏面から急斜度調整を施しており、右側縁は鋭利な刃部となる。12も先端部と基部を欠損する。両側縁に裏面からの急斜度調整が見られる。素材は良質の横長の黒曜石剥片である。

以上の資料は9を除いて何れも漆黒色や透明度の高い良質の黒曜石を素材としている。

### 台形石器 (Fig.13, 14)

2点出土しているが出土地点に集中性はない。

1は薄い黒曜石の幅広の剥片を素材としている。両側縁に裏面から急斜度調整を施す。基部を僅かに欠損する。

2は百花台型に属する台形石器である。薄い良質の黒曜石の剥片を横位置において両側縁に細調整を行っている。

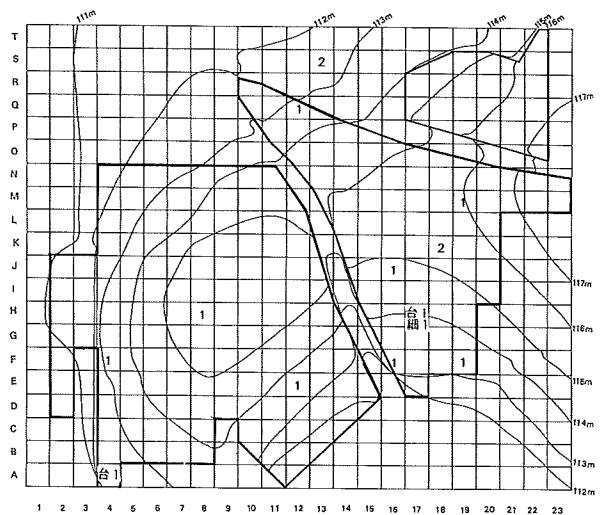


Fig. 13 台形石器, 細石刃出土分布図

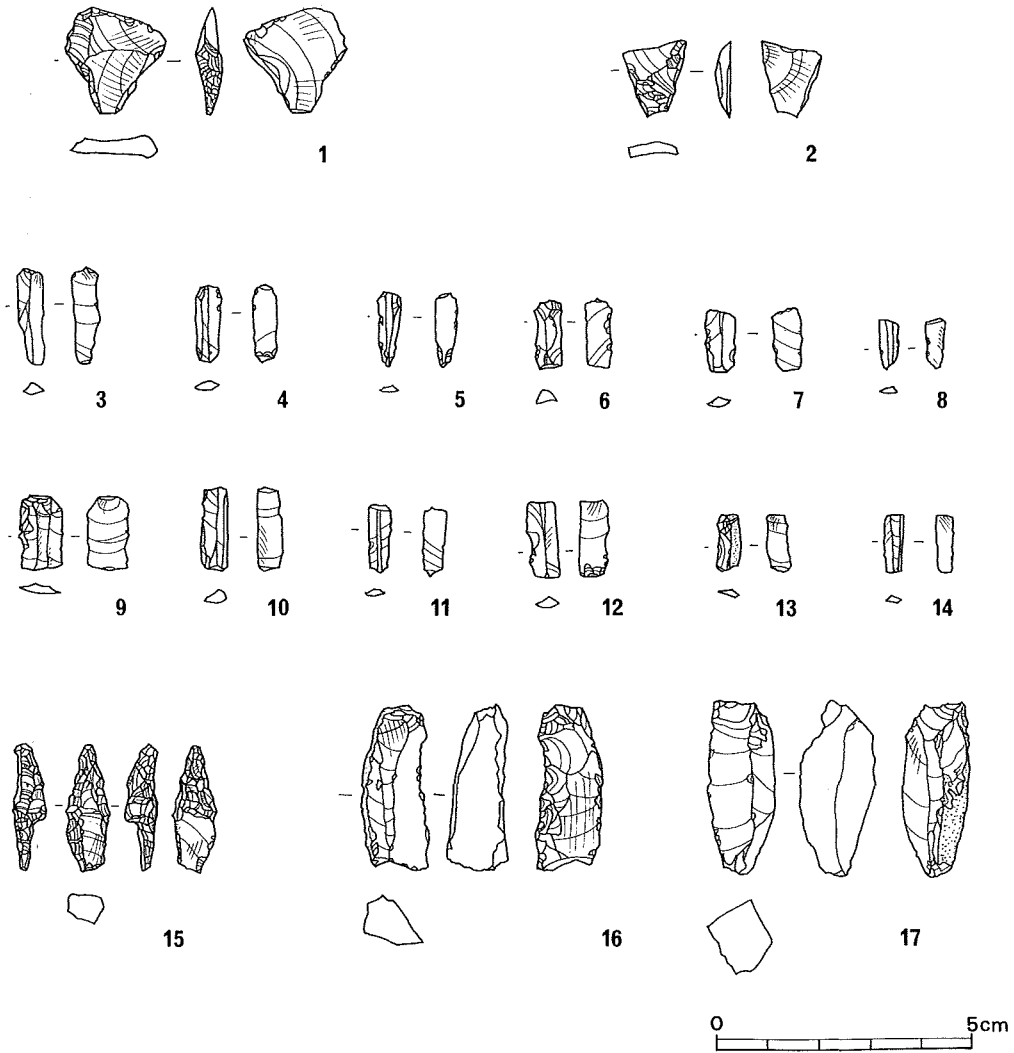


Fig. 14 台形，細石刃実測図

3～14は細石刃である。この器種の分布にもまた統一性は見られない。長さは1cm程度のもの、1.3cm程度のもの、そして1.5cm程度のもの3種に分かれる。

15はドリルである。透明度の高い厚めの黒曜石の素材を用いる。急斜度調整を行って形状を整えた後、裏面に平坦剝離を施して先端部を形成している。下部を一部欠損する。

16グレイバーである。縦長の分厚い黒曜石剝片を素材とする。左側辺に一条の槌状剝離を施す。スクレイパーとしても利用されている資料である。

17は楔型石器である。良質の部厚い黒曜石剝片を素材とする。裁断面を持ち、両極剝離痕を持つ。

以上の資料も何れも漆黒色か透明度の高い良質の黒曜石を資材としている。

② 縄文時代の石器

石核 (Fig.15, 17)

石核として6点掲載する。

1は白濁した黒曜石を素材とした縦長不整剥片石核である。打面調整を施しながら4分の1周ほど剥片剥離を行った後、下半部を切断している。両側面に自然面が残っている。

2は漆黒色の良質の黒曜石を素材とする不整剥片石核である。全周にわたって剥片剥離を行っているが、打面調整は見られない。

3は中に縞模様が入った角礫の黒曜石を素材とする、幅広の縦長不整剥片石核である。一部に自然面を残す。剥離にあたっては、まず丁寧な打面調整を施したc面下端から作業を始め、次に90°方向を変えたe面左側を剥ぎ取っている。その後打面を90°づつ回転させ、正面の剥離作業を行い、最終的にd面に移っている。結果的に6箇所の打面を有することになる。

4は灰緑色を有する黒曜石を素材としている。不定形剥片の剥離がほとんど終了した結果の残核と思われる。表面の風化が著しい資料である。

5も灰緑色を有する黒曜石を素材としている。全面にわたって不定形剥片の剥離を行ったものと思われる。やはり表面に風化が進んでいる。

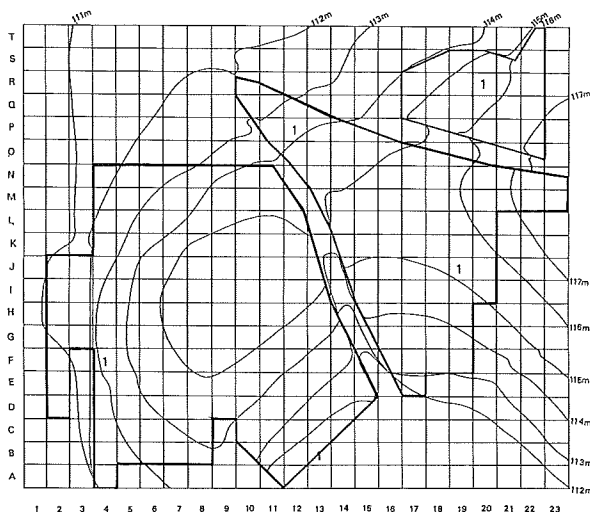


Fig. 15 石核出土分布図

尖頭器 (Fig.16, 18, 19)

11個出土した。その分布状況は西側と東側に分かれるが、西側地点は流れ込みの可能性が高い。

1～5は安山岩、6～11は黒曜石を素材としている。

1は先端部をやや欠損しているが、ほぼ完形の資料である。長さ9.5cm、最大幅2.8cm、重量は23gである。両面調整によって木の葉形の形状に整える。裏面と基部には平坦剥離を施している。

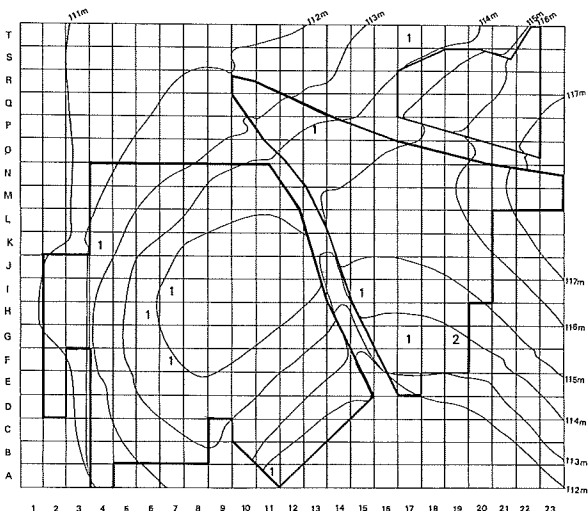


Fig. 16 尖頭器出土分布図

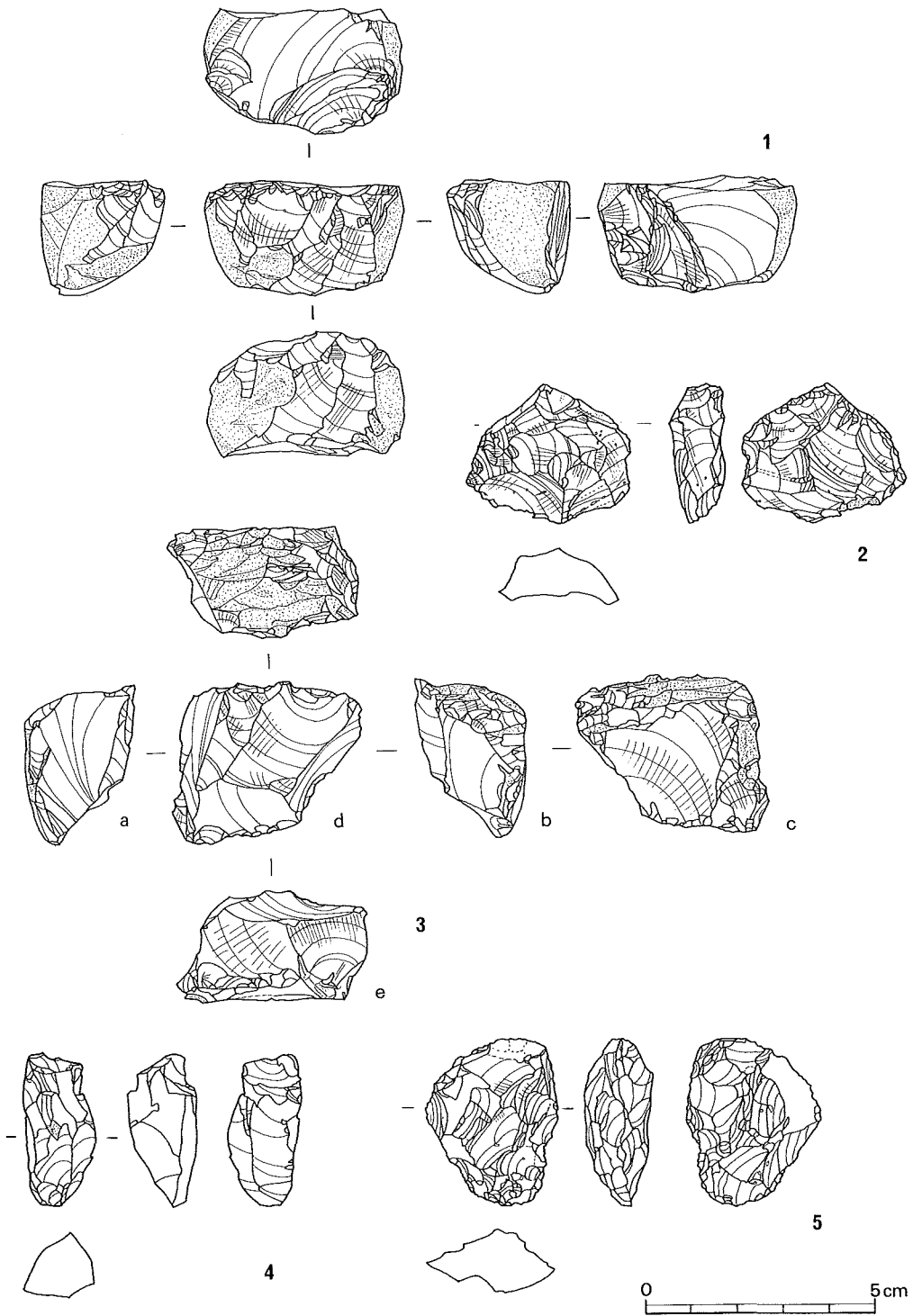


Fig. 17 石核實測圖

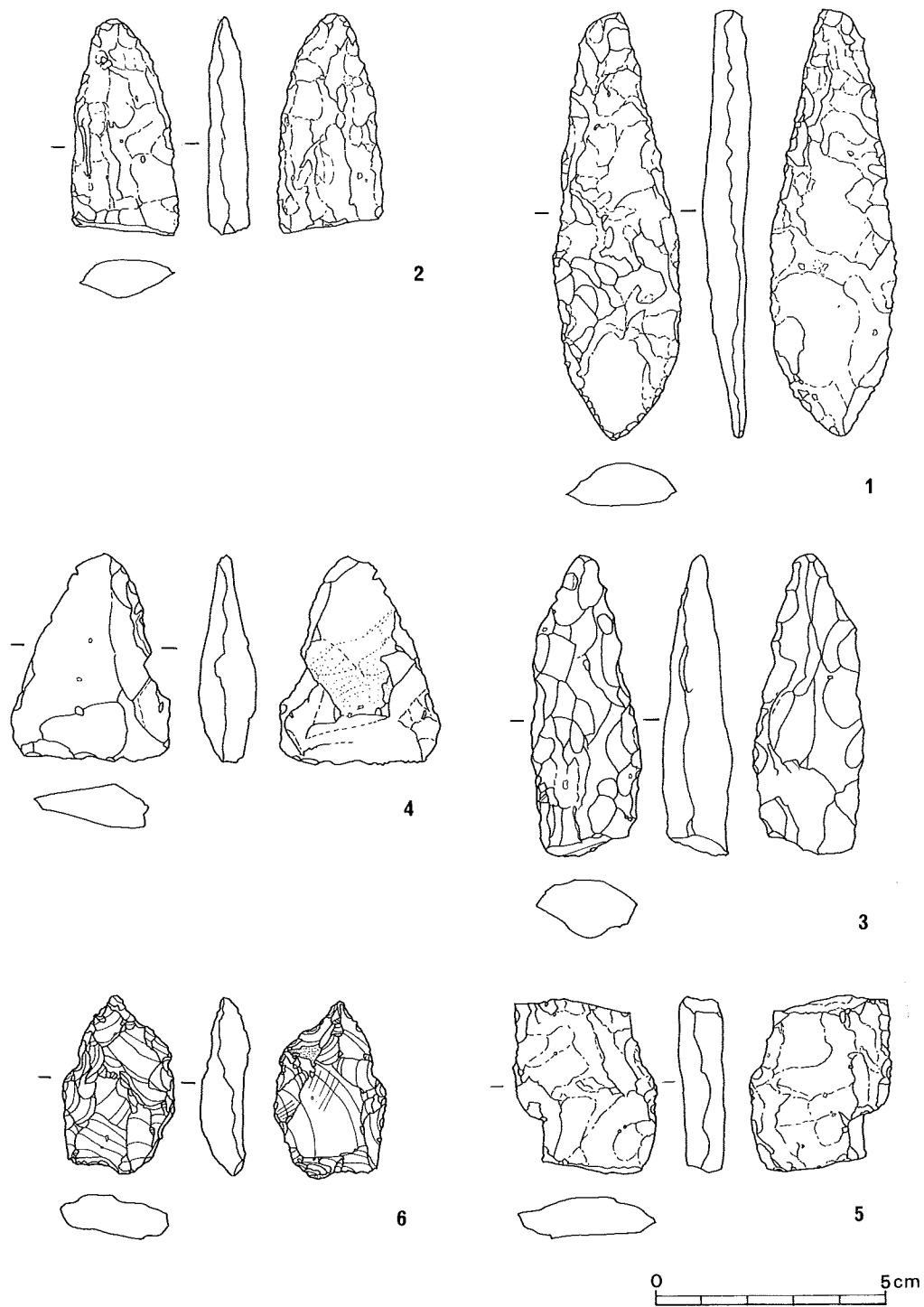


Fig. 18 尖頭器實測圖 ①

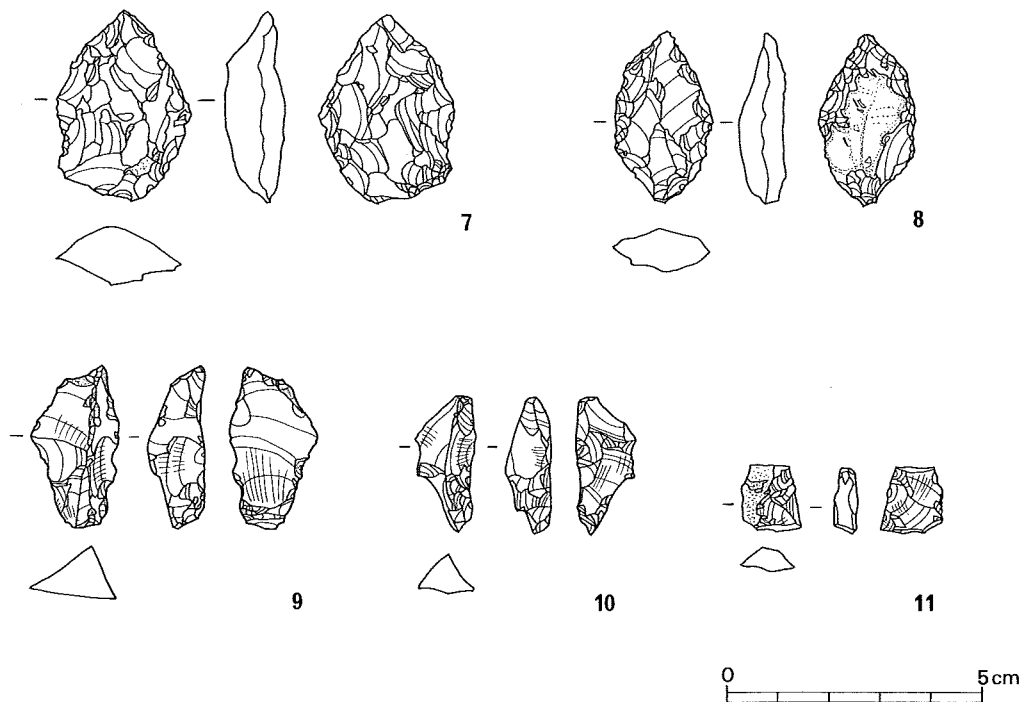


Fig. 19 尖頭器実測図 ②

2は下半部を欠損しているが、両面調整によって形状は木の葉形になる資料と思われる。断面はレンズ形をしている。風化はかなり進んでいる。現存長は4.5cm、幅は2.2cmである。

3は分厚い素材に両面調整を施して柳葉形に形状を整えている。下端部を欠損しているが、現存長は6.5cm、最大幅は2.4cmである。表面が摩耗しており、剝離痕が明瞭さを欠く。

4は不定形の剝片を素材とする。基本的に両面調整を行うが、裏面は途中で調整を放棄している。なお、右側縁と基部には細調整を施すが、左側縁は鋭いエッジをそのまま利用する。

5は上端部と下端部を欠損する。両面調整を行う。木の葉形を呈する資料と思われる。

6は不定形の黒曜石剝片を素材とする。両面調整を行っているが、調整は全周に及ばず、いびつな形となる。裏面に一部自然面が残る。

7も6とほぼ同じような形状を持つ。中に粒子の混じる白濁色の黒曜石を素材としている。両面調整によって変形五角形様に仕上げる。

8は漆黒色の黒曜石を素材とする。主に両側縁に調整を集中し木の葉に形状を整える。主要剝離面には平坦剝離を行ってバルブを除去している。自然面を残す。

9、10、11とも大部分が欠損している資料である。共に良質の黒曜石を素材とする。

スクレイパー (Fig.20, 21)

1～8はスクレイパーである。

1は幅広で薄手の安山岩剥片を素材とする。左側縁部に両面からの調整を行って刃部を形成する。

2は厚手の黒曜石剥片を利用する。片側に急斜度調整を行う。片面は全て自然面である。

3は角礫で縦長の黒曜石剥片を素材とする。片側に急斜度調整を行い、もう一方の側縁に微細な調整を施している。

4は幅広の黒曜石を素材とする。左側縁とその上部に急斜度調整を行って刃部を形成している。裏面は平坦剥離によってバルブを除去している。

5はやや分厚い漆黒色の黒曜石を利用する。片面に急斜度調整を施している。

6は白濁した不定形の黒曜石剥片を素材とする。上部に急斜度調整を行う。

7も黒曜石の不定形剥片のほぼ全周にわたって調整剥離を行う。

8は薄手の安山岩剥片を素材にしている。両面からの簡単な剥離によって形状を丸く仕上げている。

その他の石器 (Fig.22)

1はサイドブレードである。薄手の黒曜石剥片に両面調整を行い、丸い刃部を形成している。上端部と片側側縁部を欠損している。

2は切断剥片の例である。幅広の黒曜石剥片を素材としている。鋭利な側縁の一部に刃毀れが見られる。

3は両側縁部に調整痕が見られる資料である。黒曜石の不定形剥片を素材としている。

4は不定形剥片の剥離を行ったあとの残核か。黒曜石製。

5は灰青色をした黒曜石の剥片を素材としている。表面には一部自然面を残すが、よく調整痕を残す資料である。

6は主要剥離面に数回の剥離を行っている資料である。形状が定かでなく、未製品と思われる。黒曜石で風化が進んでいる。

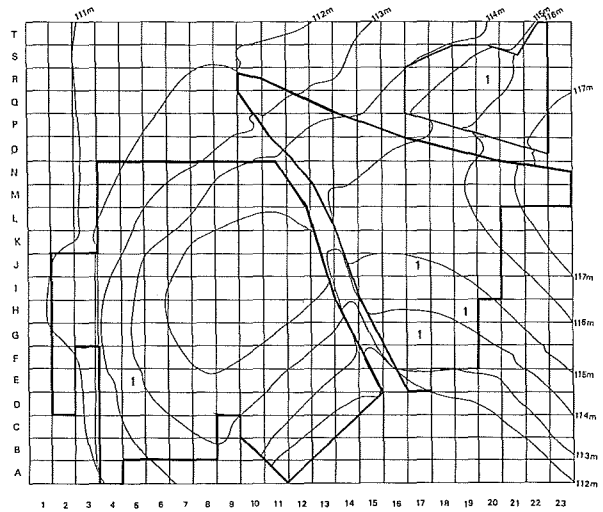


Fig. 20 スクレイパー出土分布図



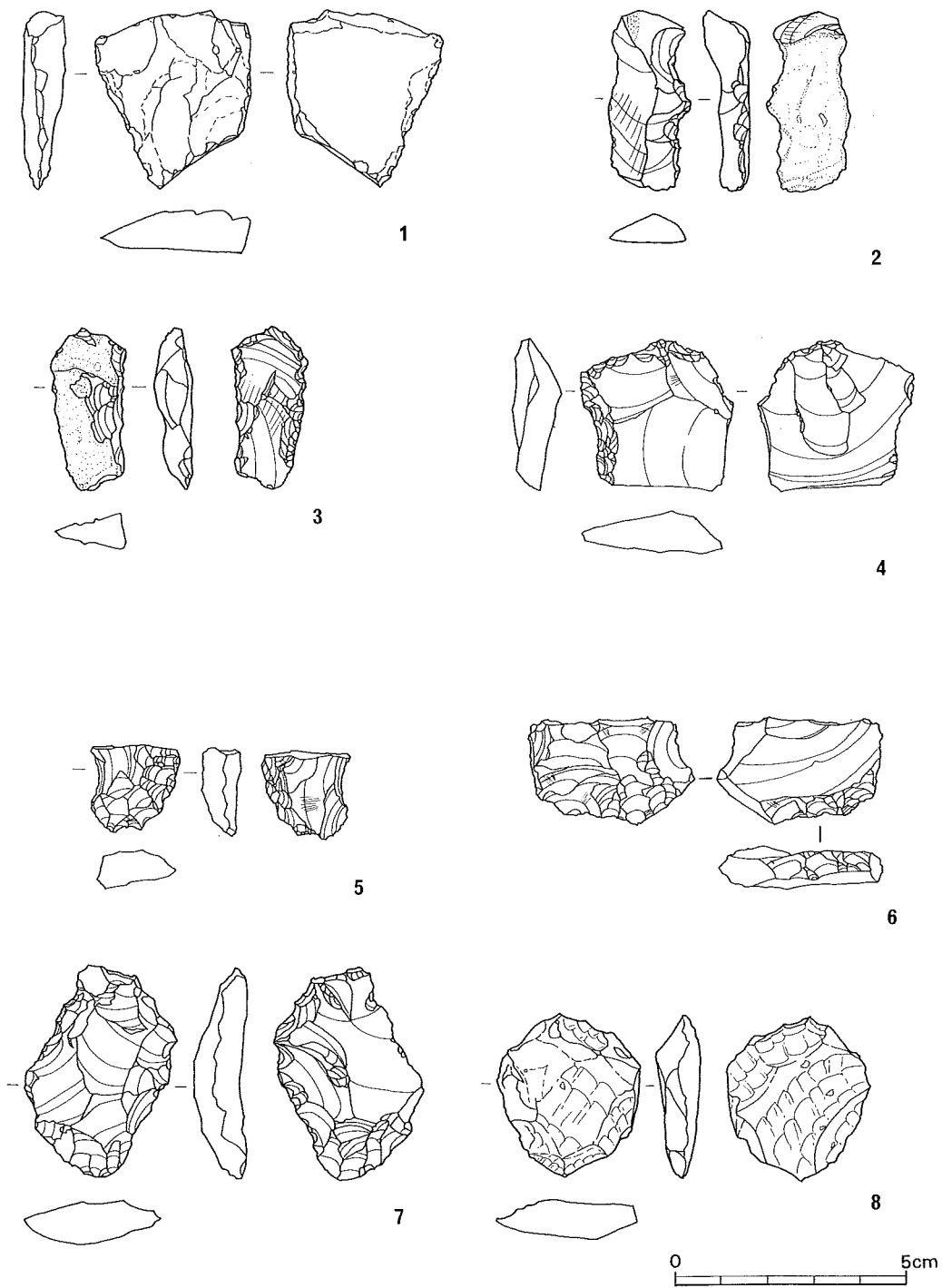


Fig. 21 スクレイパー実測図

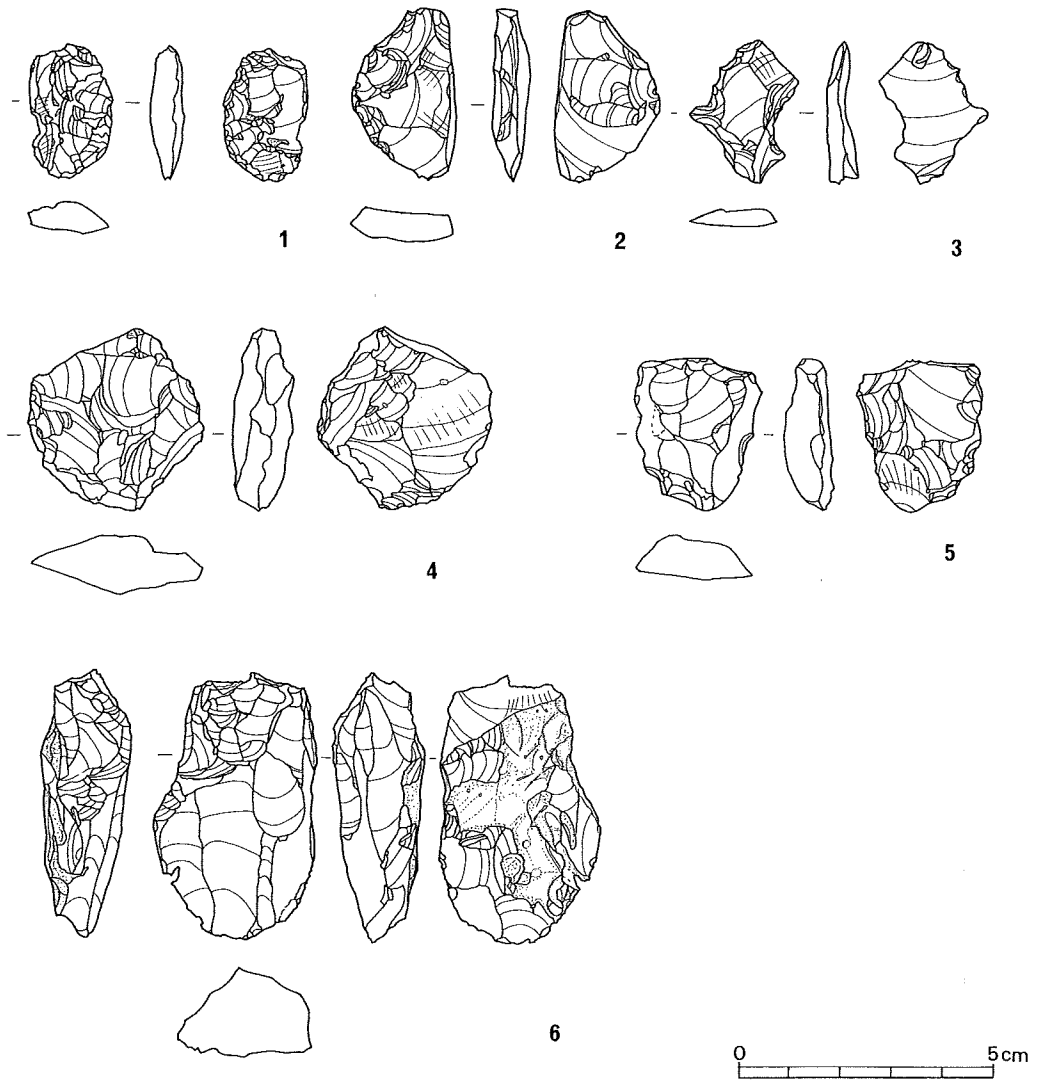


Fig. 22 その他の石器実測図 ①

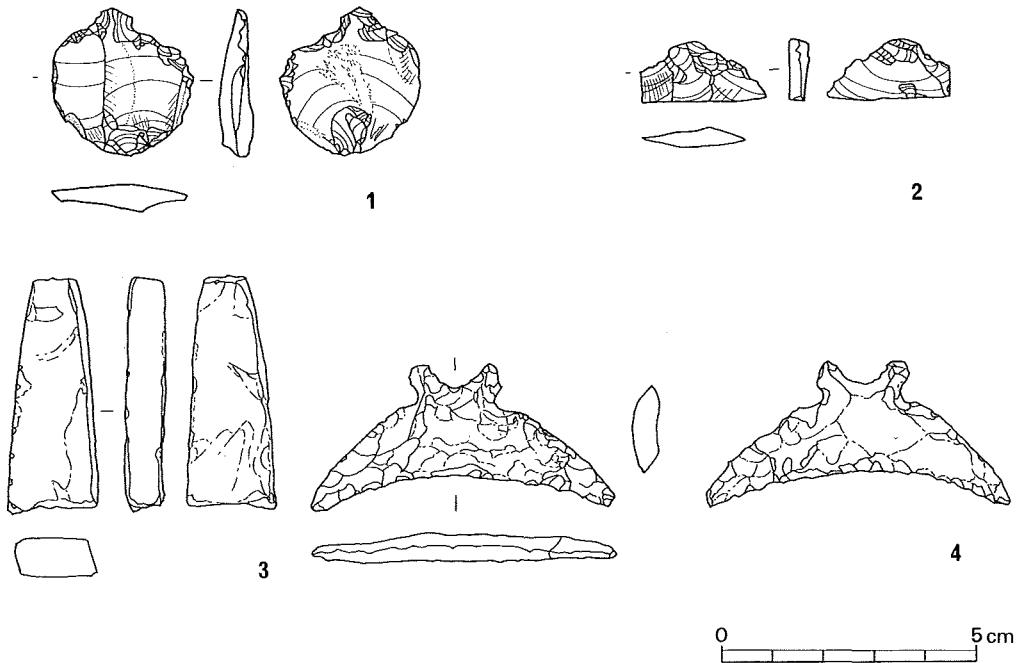


Fig. 23 その他の石器実測図 ②

1, 2はつまみ形石器である。共に透明度の高い、薄手の黒曜石剥片を素材とする。

1は略円形の形状を持つ。石刃状の剥片の両側縁から細かな剥離調整を行って抉りを作り出している。2は一部分のみ飲み打瘤部に平坦剥離を施してつまみを形成している。

2も同様な製作工程で作られた資料であろうが、残存部位が一部であるので不明である。この種の石器は、縄文後期に属する殆どの遺跡で出土するもので、剥片<sup>註1</sup>鋸の製作工程のなかで不要になった残滓物であることが論証されている。

3は小型の砥石である。きめの細かい砂岩で、欠損した半部を除いて、全面に研磨痕が認められる。

4は石筥である。安山岩製で、2個の突起を有する珍しいタイプである。両面調整によって形状を整えている。

註1 片岡 肇 『いわゆる「つまみ形石器」について』 古代文化第22巻第10号所収 昭和45年（1970）  
下川達彌 「剥片鋸考」 長崎県立美術博物館報 昭和46年度所収 1971 ほか

使用痕のある剥片 (Fig. 24~27)

34点を図示する。

1 漆黒色の縦長黒曜石剥片である。断面台形で、両側縁部に微細な使用痕が見られる。剥片下部は切断されている。

2 やはり漆黒色で不定形の黒曜石剥片である。側縁部は全て鋭いエッジであり、その部分にはほぼ全周にわたって使用痕が観察される。

3 断面三角形の黒曜石の縦長剥片である。両側縁部に刃こぼれが見られる。

4 縦長の安山岩剥片である。片側は厚く自然面が残る。その対角のエッジの鋭い部分に使用痕が見られる。表面はかなり風化している。

5 幅広の不定形安山岩剥片である。片側側縁部に使用痕が見られるが、使用部位が一か所であったかは側縁の半分が新しい剥離であるために不明である。

6 黒曜石の縦長剥片である。片側側縁部に微細な使用痕が観察される。

7 断面三角形の細長い黒曜石剥片である。片側側縁に顕著な刃こぼれが見られる。

8 縦長の黒曜石剥片である。両側縁に使用痕が観察される。

9 黒曜石の不定形剥片である。両側縁に使用痕が見られる。

12 黒曜石の縦長剥片を利用するが、途中で切断している。バルブは急斜度調整によって除去している。片側側縁部に微細な使用痕が見られる。

13 白濁して薄手の黒曜石剥片である。片側側縁に使用痕が観察される。

14 左側辺に打面調整が見られる資料である。良質の黒曜石を素材とし、片側側縁を刃部として利用している。

15 縦長の黒曜石剥片を切断している。両側縁部に微細な使用痕が見られる。

17 側縁部が平行する刃器状の黒曜石剥片である。断面が低い三角形を呈し、両側縁部に使用痕が見られる。

18 白濁した縦長の黒曜石剥片である。両側縁部に使用痕を持つ。

19 漆黒色で不定形の黒曜石剥片である。右側の大きく湾曲した部分を刃部として使用している。自然面が残る。

20 角礫で漆黒色の黒曜石である。3回の加撃によって作られた不定形剥片の二側縁部に微細な使用痕が認められる。素材の3分の1は自然面である。

21 部厚い漆黒色の黒曜石剥片である。片側側辺に刃部を作り出す。

24 薄手の不定形剥片の側縁部に顕著な使用痕を持つ。

25 やはり薄手でいびつな黒曜石剥片である。自然の鋭いエッジの部分を刃部として利用している。表面には幾筋もの剥離痕が見られる。

26 調整によって形を丸くおさめた黒曜石剥片である。欠損しているため全体の形状が不明であるが、下部を除く両側縁に使用痕が見られる。

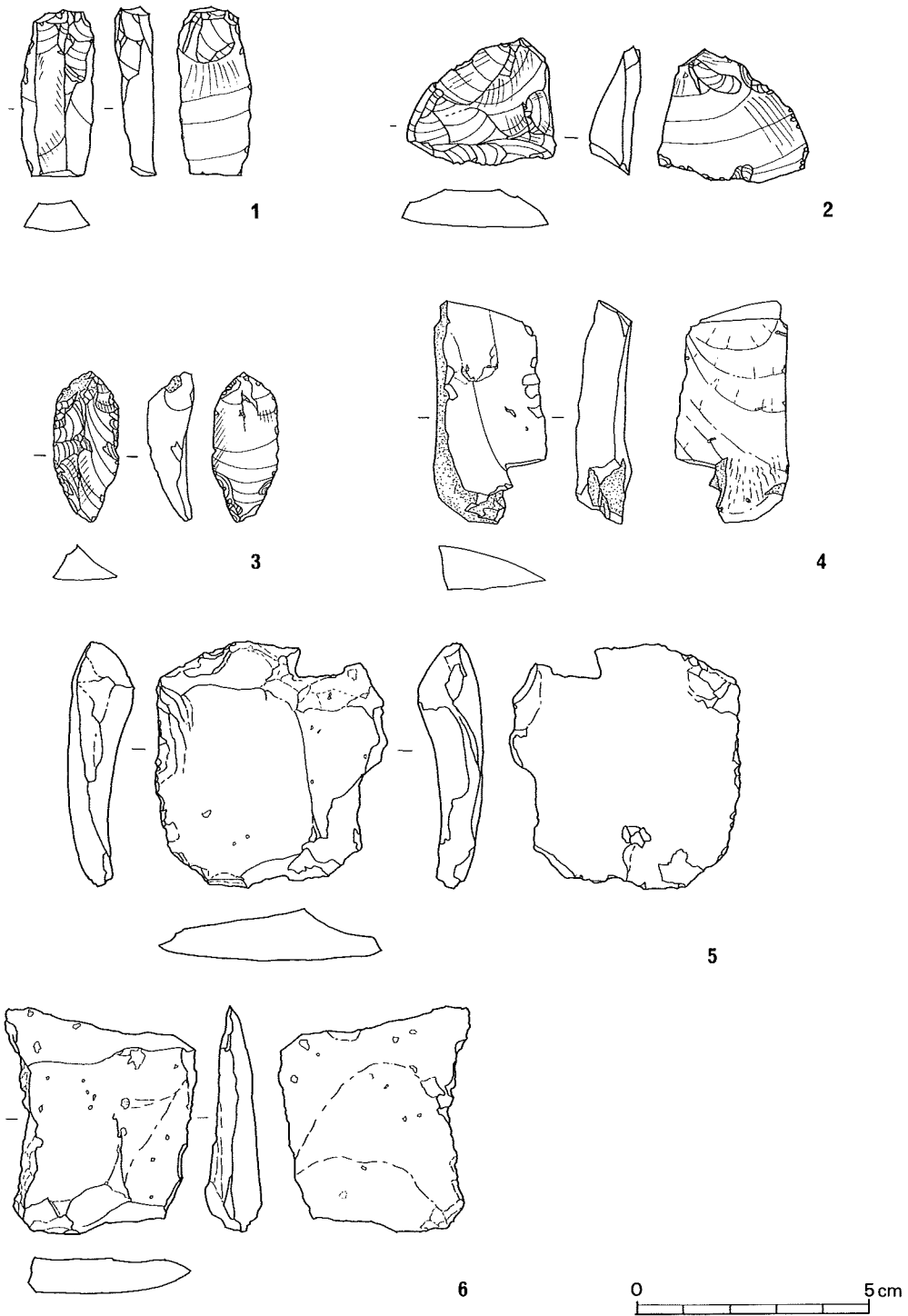


Fig. 24 使用痕のある剥片実測図 ①

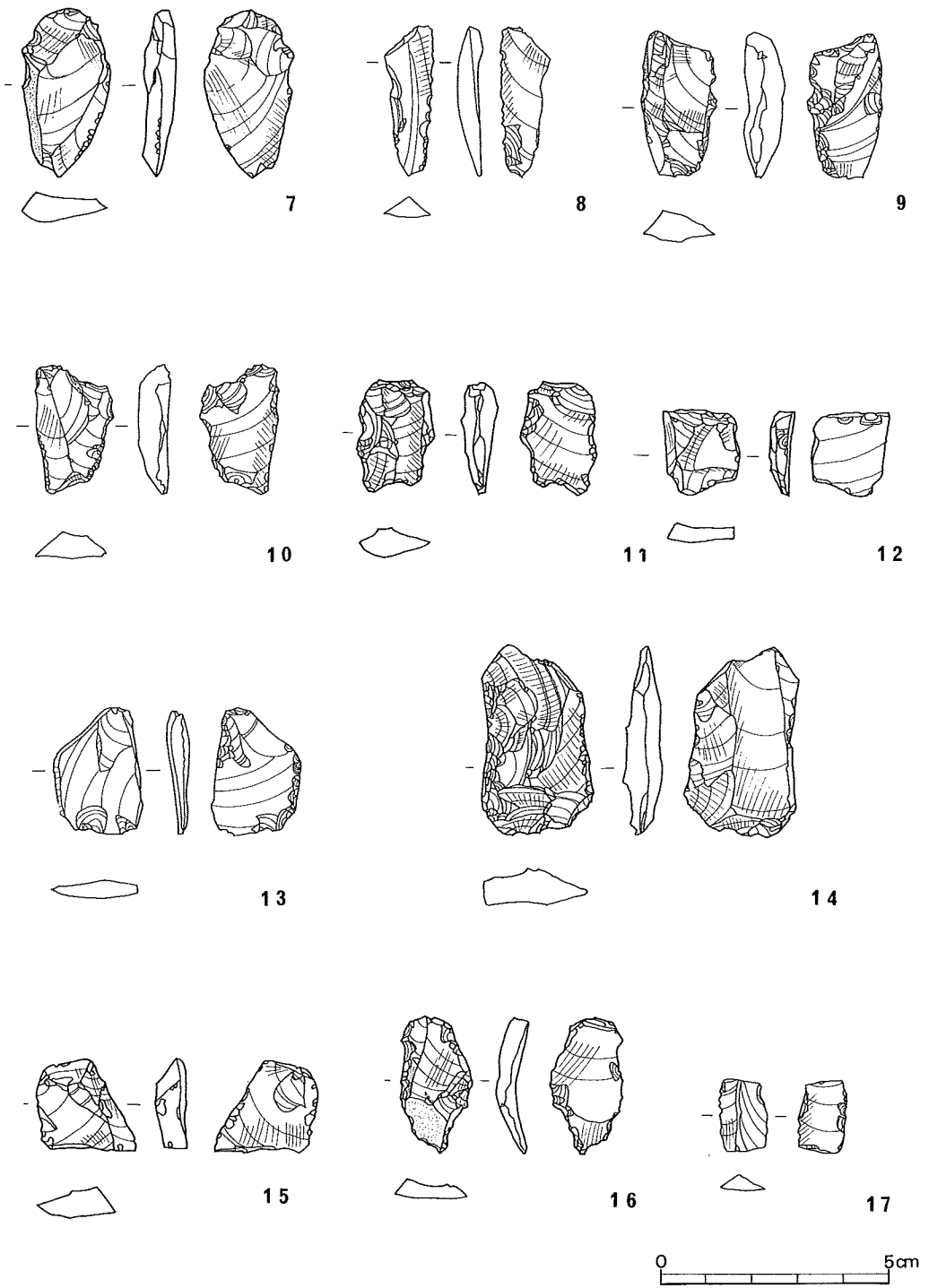


Fig. 25 使用痕のある剥片実測図 ②

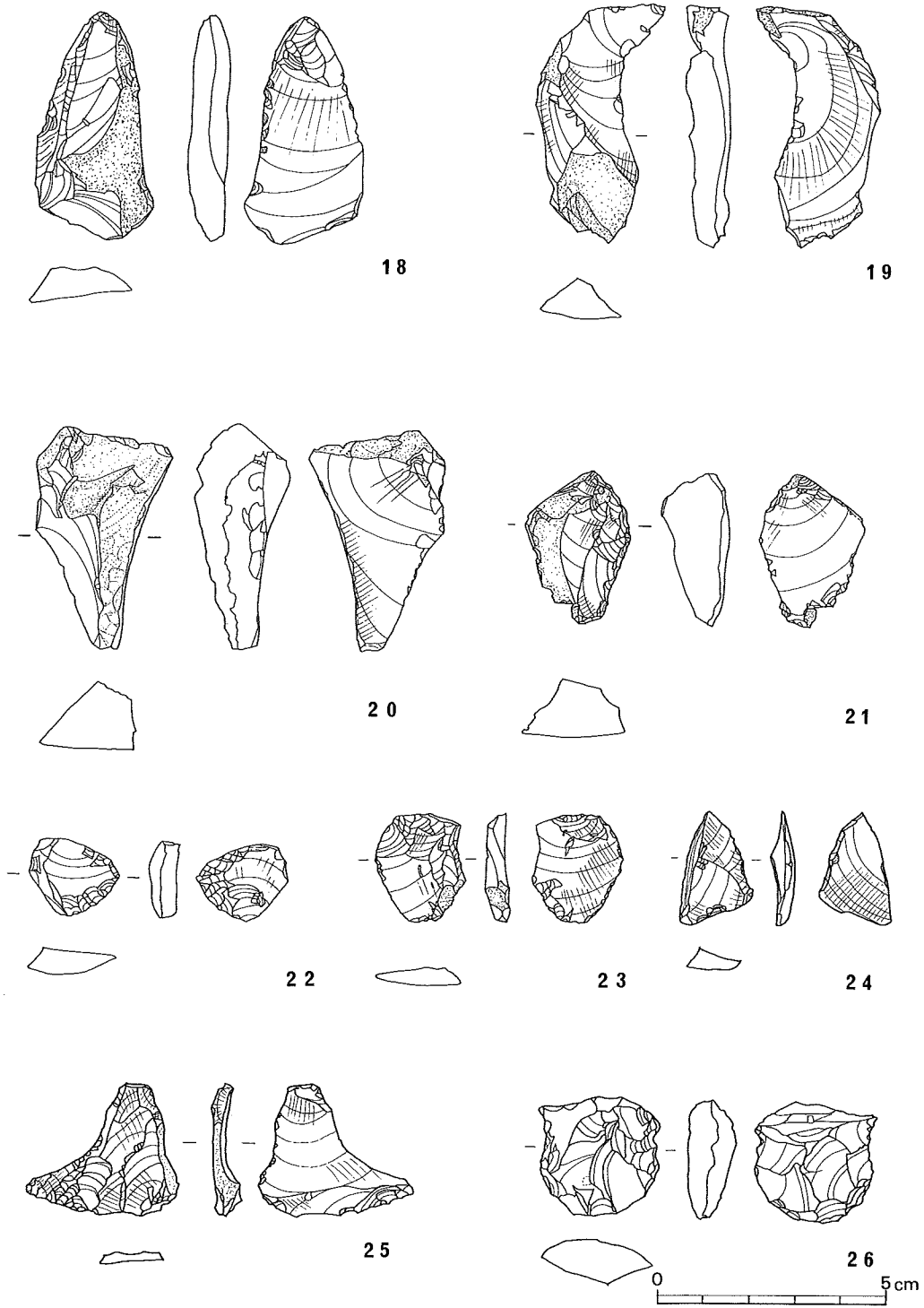


Fig. 26 使用痕のある剥片実測図 ③

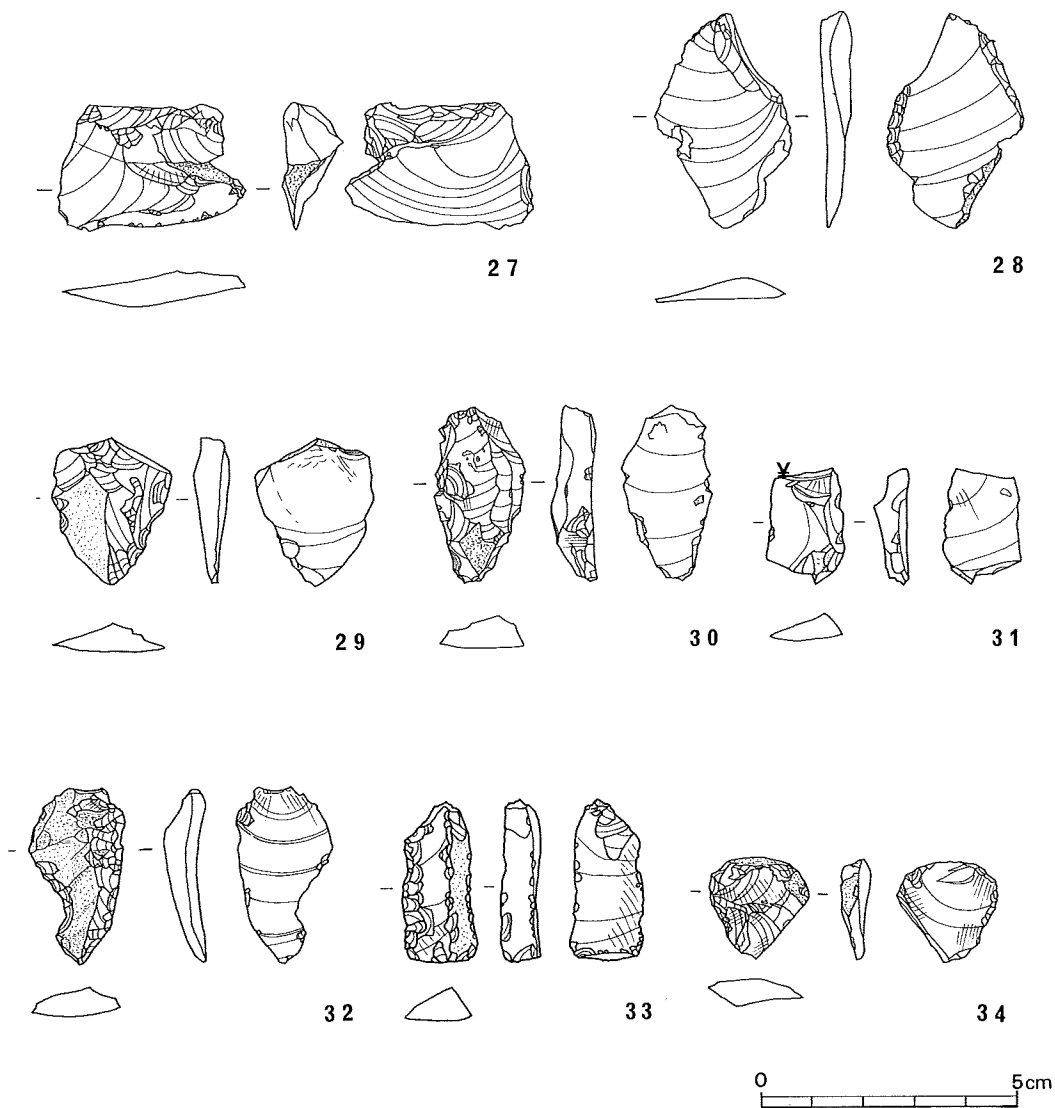


Fig. 27 使用痕のある剥片実測図 ④

27不定形の黒曜石剥片である。左側縁部と下部に微細な使用痕が観察される。

28薄い不定形の黒曜石剥片である。右側側縁部にのみ微細な刃こぼれが見られる。風化が進行している。

29白濁した不定形の黒曜石剥片である。両側縁部に微細な使用痕が見られる。

30厚めの黒曜石縦長剥片である。右側縁下部に急斜度調整を施す。使用痕はその上方と、反対側縁部に見られる。



石 鏃

石鏃は全部で226点出土した。その出土状況は Fig.28のとおりである。各調査区から万遍なく出土するが、特に集中する箇所は図内A, B, Cを中心とする区域である。

ここに掲載する石鏃は、主にその形状から Fig.29に示した基準によって分類した。なお資料の中には有茎のものは含まれないため、全て無茎鏃として取り扱う。

I類 平基式で、側縁が直線をなすものをa、側縁がカーブを描くものをbとする。

II類 凹基式で、以下の4タイプに細分される。

a : 側縁が直線をなし、基部の抉りが石鏃の全長の大旨3分の1以上あるもの。

b : 側縁がカーブを描き、基部の抉りが石鏃の全長の大旨3分の1以上あるもの。

所謂鋏型鏃とか長脚鏃というタイプはこの範疇に入る。

c : 側縁が直線をなし、基部の抉りがa以下のもの。

d : 側縁がカーブを描き、基部の抉りがb以下のもの。

III類 凸基式で基部が丸みを持つもの。

IV類 上記3種類と形状が異なるもの。

V類 形状的には数種認められるが、研磨という属性を生かした局部磨製石鏃をあてる。

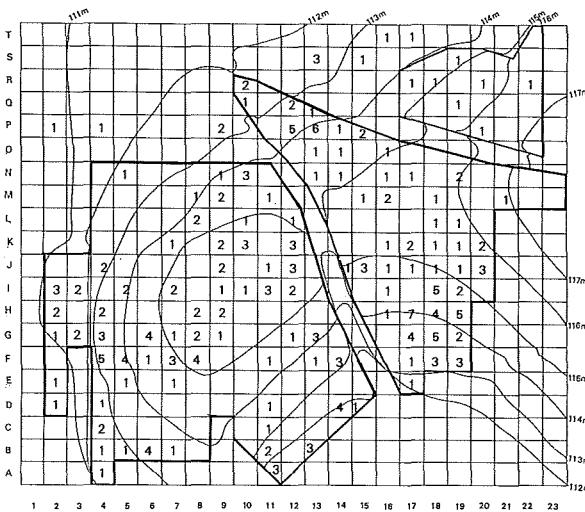


Fig. 28 石鏃全体分布図

I 類 (平基式)	a	
	b	
II 類 (凹基式)	a	
	b	
	c	
	d	
III 類 (凸基式)		
IV 類 (異形)		
V 類 (局部磨製)		

Fig. 29 石鏃分類図

掲載資料の詳細については計測表を参照されたいが、表中黒曜石の種類については次の肉眼観察による。

- 黒曜石A：漆黒色
- 黒曜石B：黒色
- 黒曜石C：黒色で中に粒状の不純物を含むもの
- 黒曜石D：灰緑色または灰青色
- 黒曜石E：乳白色
- 黒曜石F：透明
- 黒曜石G：白濁色

また、表中残存部位については、Fig.30の基準による。

掲載資料は表土中の資料も含まれるが、一括して説明を加えておく。

I a類 (Fig. 31)

基部に挟りが無く、側縁が直線をなすタイプである。

1, 5はほぼ正三角形に近い形状を持つ。共に良質の黒曜石を素材とし、表裏から丁寧な剝離を行って薄く仕上げている。

9は断面が山形になるもので、片面からのみ急角度調整を施して形状を整えている。

I b類 (Fig. 32)

やはり基部に挟りが無く、側縁がカーブを描くタイプである。

いずれの資料も概して雑な調整を行っている。3は打瘤を側縁部に持つ資料で、片面からのみ雑な剝離を行っており、石鏃特有の細かい調整痕は見られない。5も分厚い素材に簡単な調整を施してかろうじて石鏃の形を保っている。先端部をやや欠損する。9は安山岩の分厚い素材に調整剝離を施しているが、薄くする工程で途中で放棄したらしく形状がいびつである。重量も他の資料の2倍以上もあり、未製品であろう。11は小型の資料で側縁部を僅かに欠損する。もともと薄い剝片を利用したもので、調整剝離も最小限であり丁寧では無い。

II a類 (Fig. 33)

側縁が直線的であり、基部の挟りが丸く、かつその長さが全長の大旨1/3以上の深さを持つのを特長とする。何れも黒曜石を用い概して作りは丁寧である。9点出土した内完形品は2点のみである。

4は長脚鏃と呼ばれるタイプである。片脚を欠損しているが、全周に表裏から丁寧な調整剝離を施して形状を整えている。7と同じく、腰岳産と思われる良質の黒曜石を用いる。








記号	破 損 部 位
完	 完形品
A	 先端部破損
B	 両脚破損
C	 片脚破損
D	 先端部片脚破損
E	 先端部両脚破損
F	 脚部のみ

Fig. 30 石鏃残存部位図

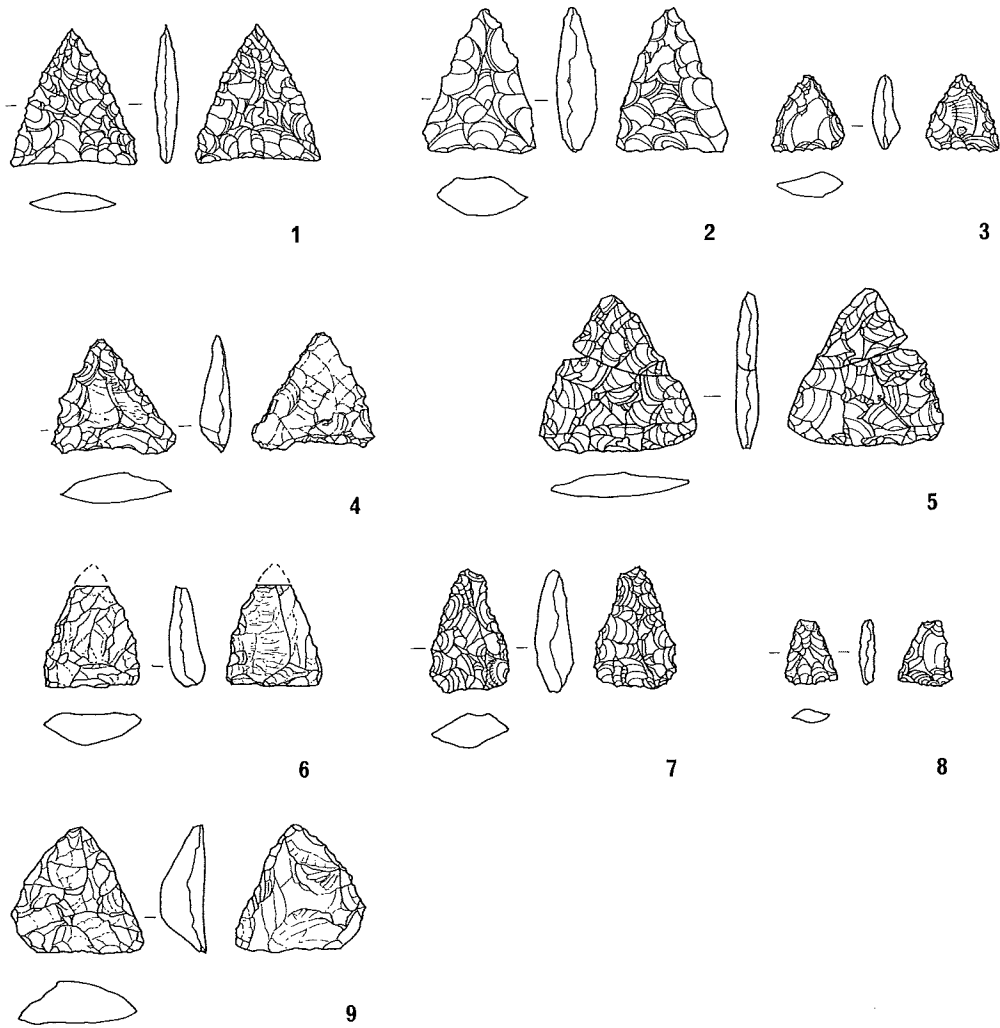


Fig. 31 石鏃I a類の実測図

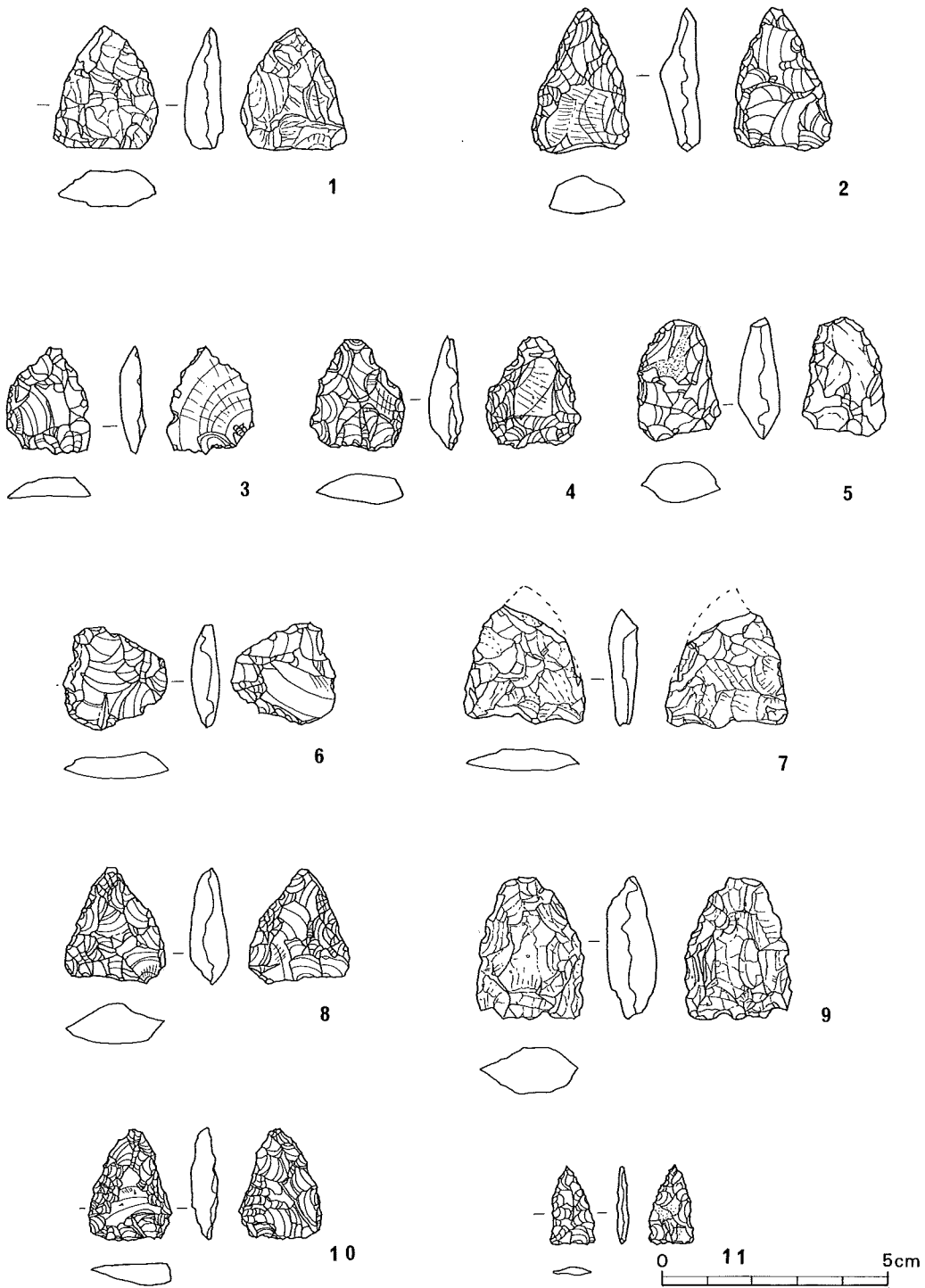


Fig. 32 石鏃 I b 類實測圖

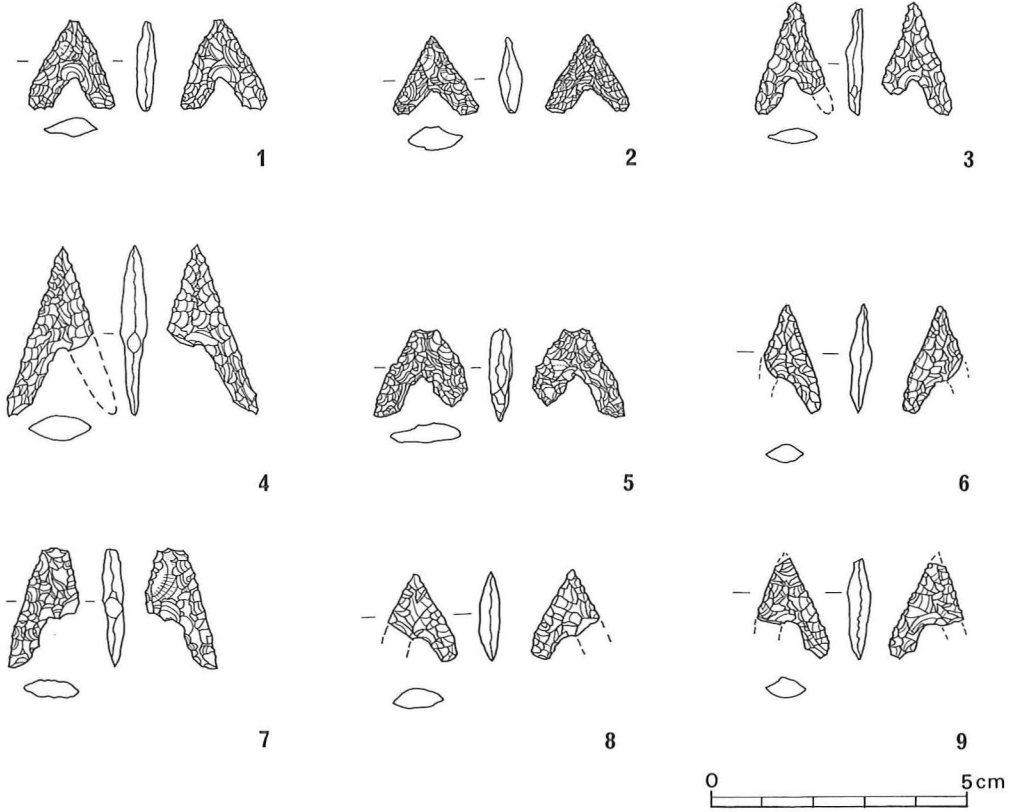


Fig. 33 石鏃Ⅱa類実測図



石鏃出土状況

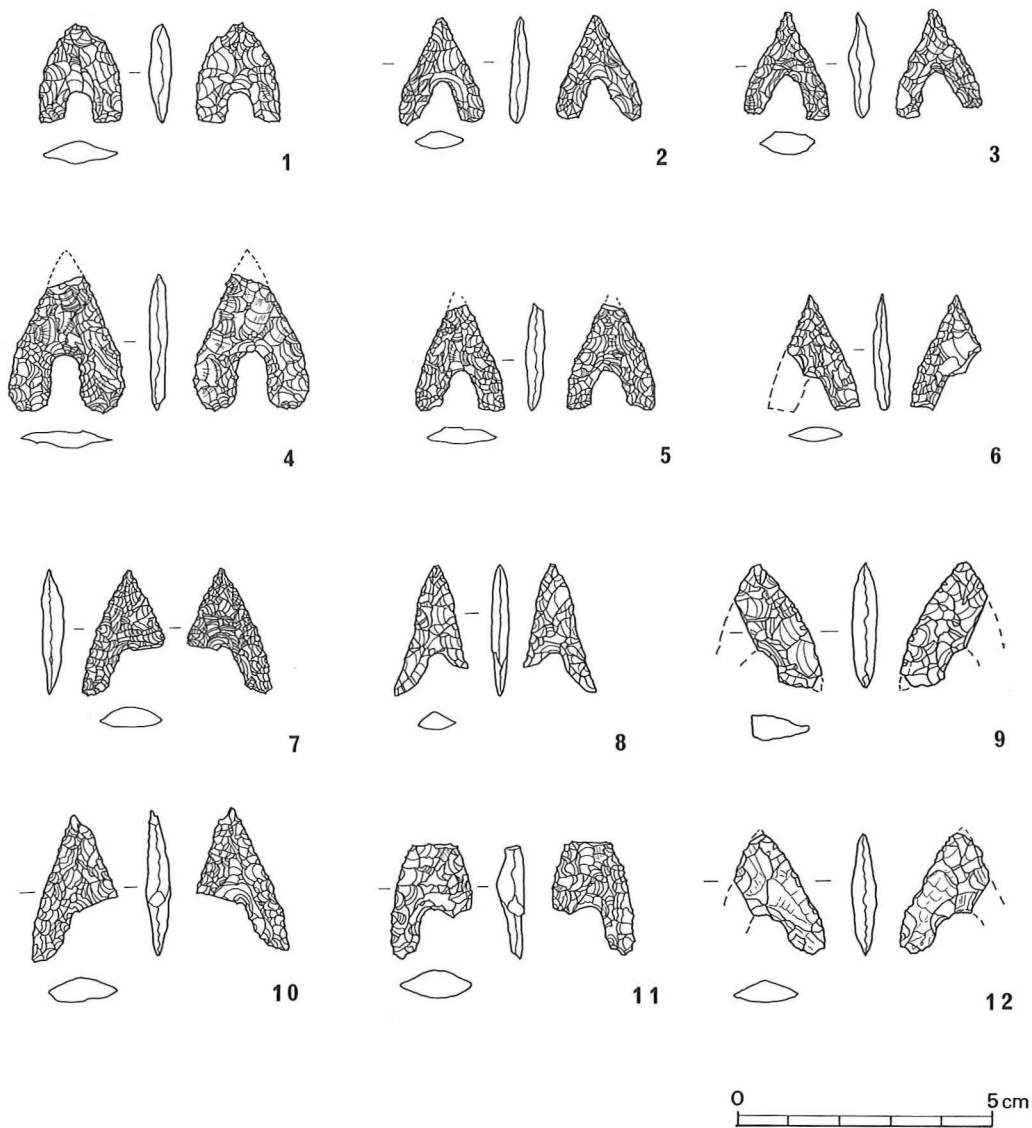


Fig. 34 石鏃Ⅱb類実測図

Ⅱb類 (Fig. 34)

側縁がカーブを描き、基部の挟りが丸く、またその深さが全長の大旨1/3以上を有するタイプの資料である。所謂鋏型鏃と呼ばれるタイプを含む。何れも黒曜石を用い、調整剝離も丁寧である。12点出土した内、完形品は3点にとどまる。

8は側縁のカーブが内湾し、脚部先端部が他の資料と異なり尖る。透明度の強い良質の黒曜石を用いる。

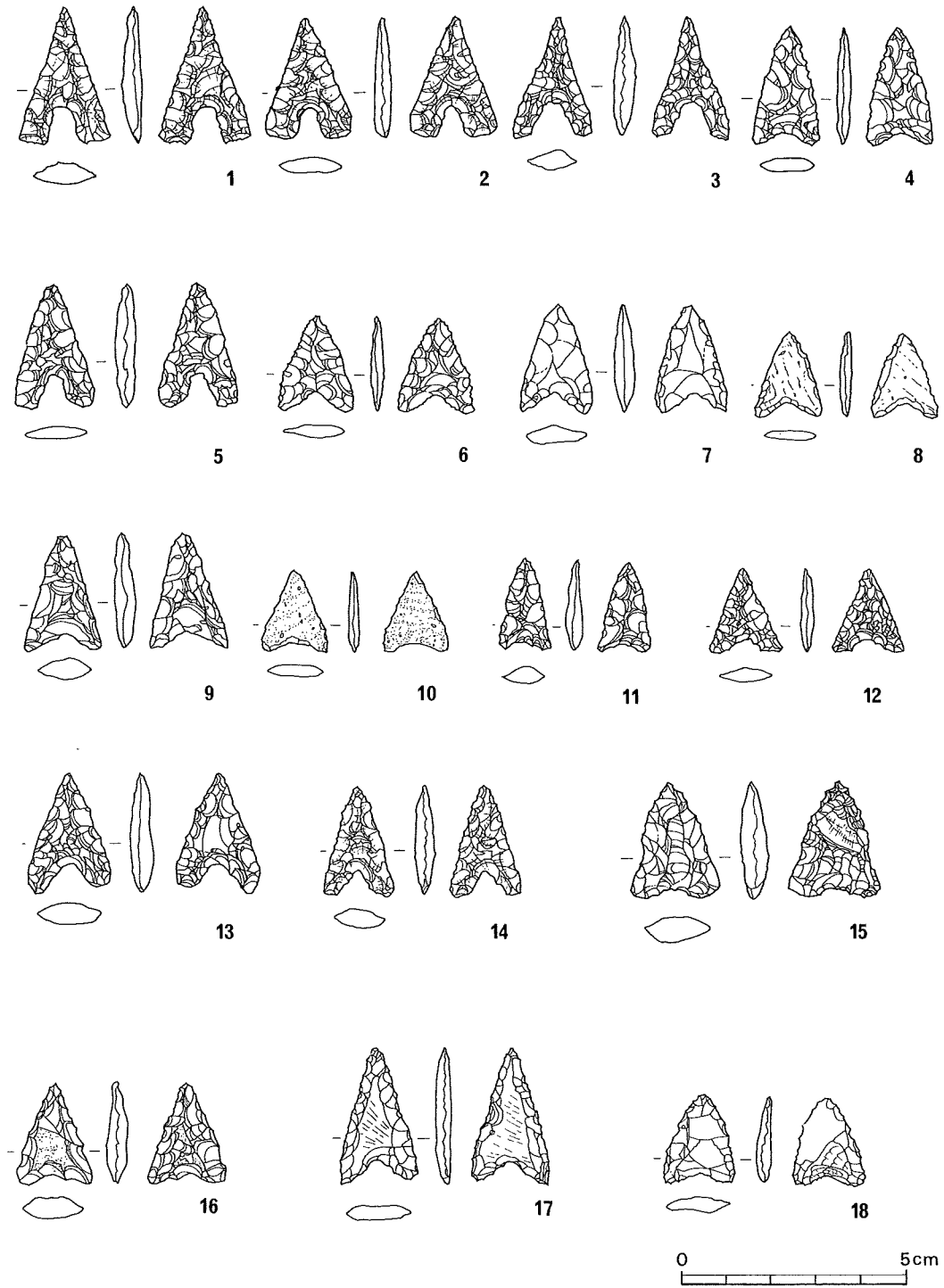


Fig. 35 石鏃 II c 類實測圖 ①

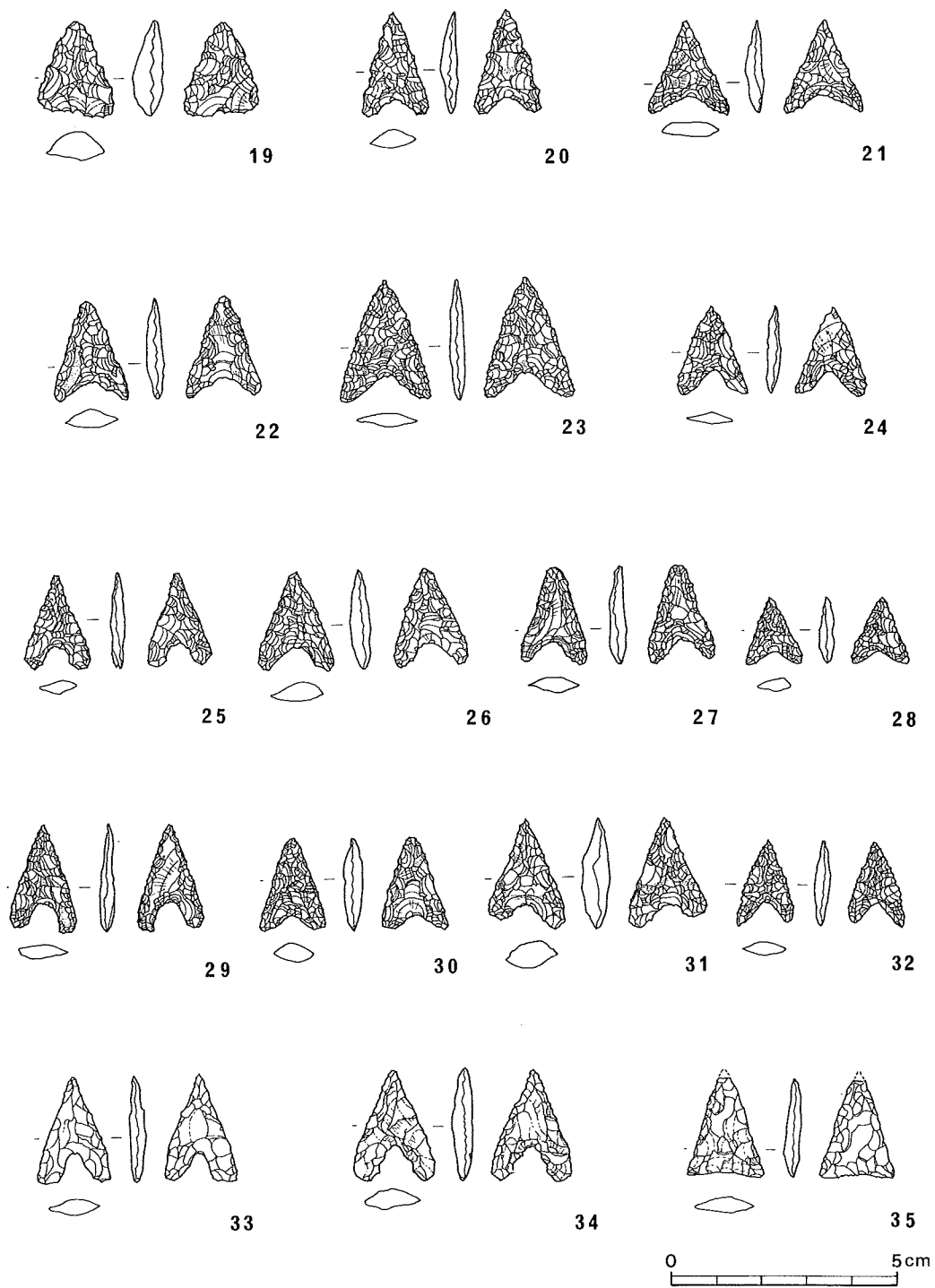


Fig. 36 石鏃Ⅱc類実測図 ②



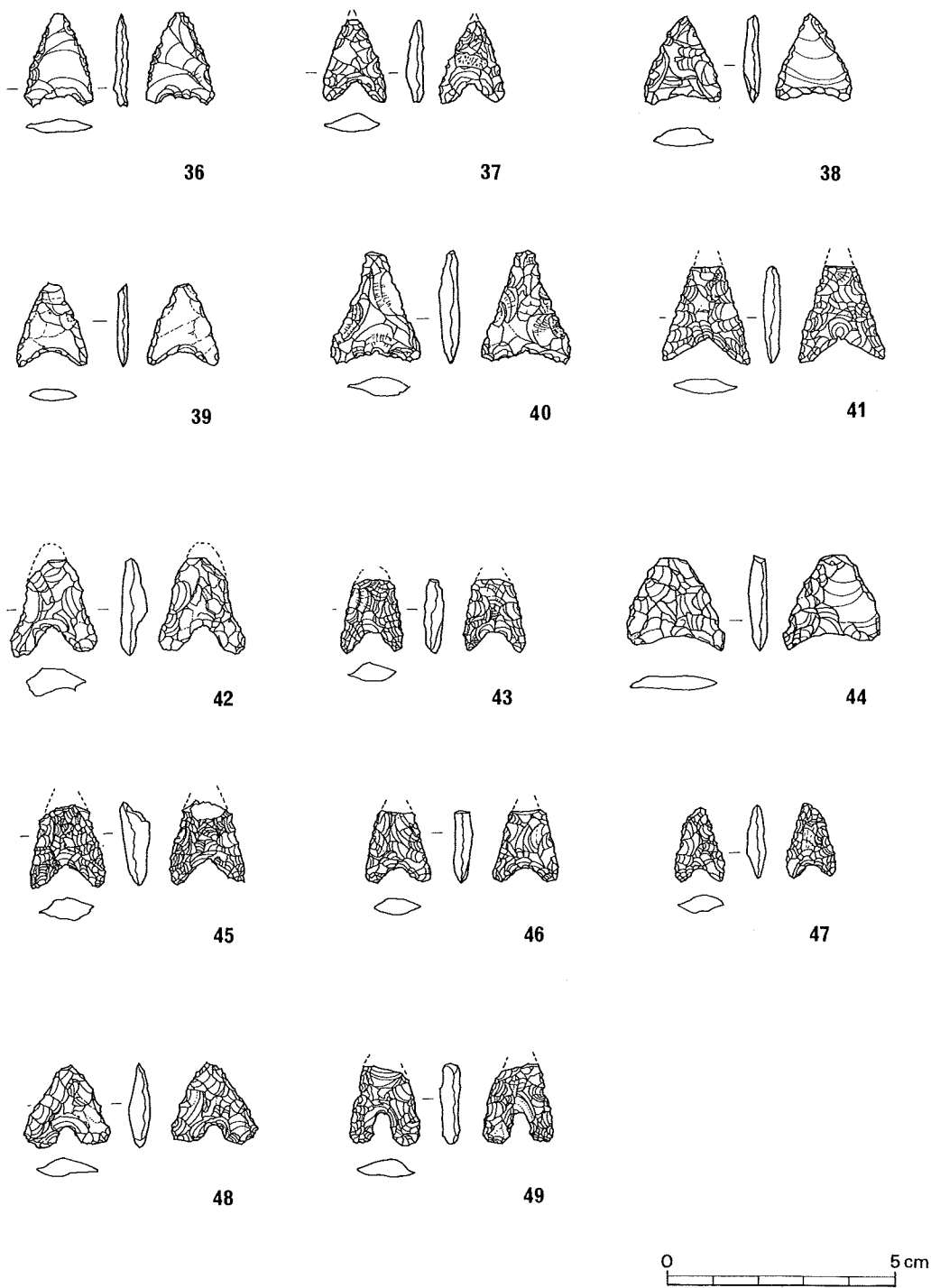


Fig. 37 石鏃Ⅱc類実測図 ③

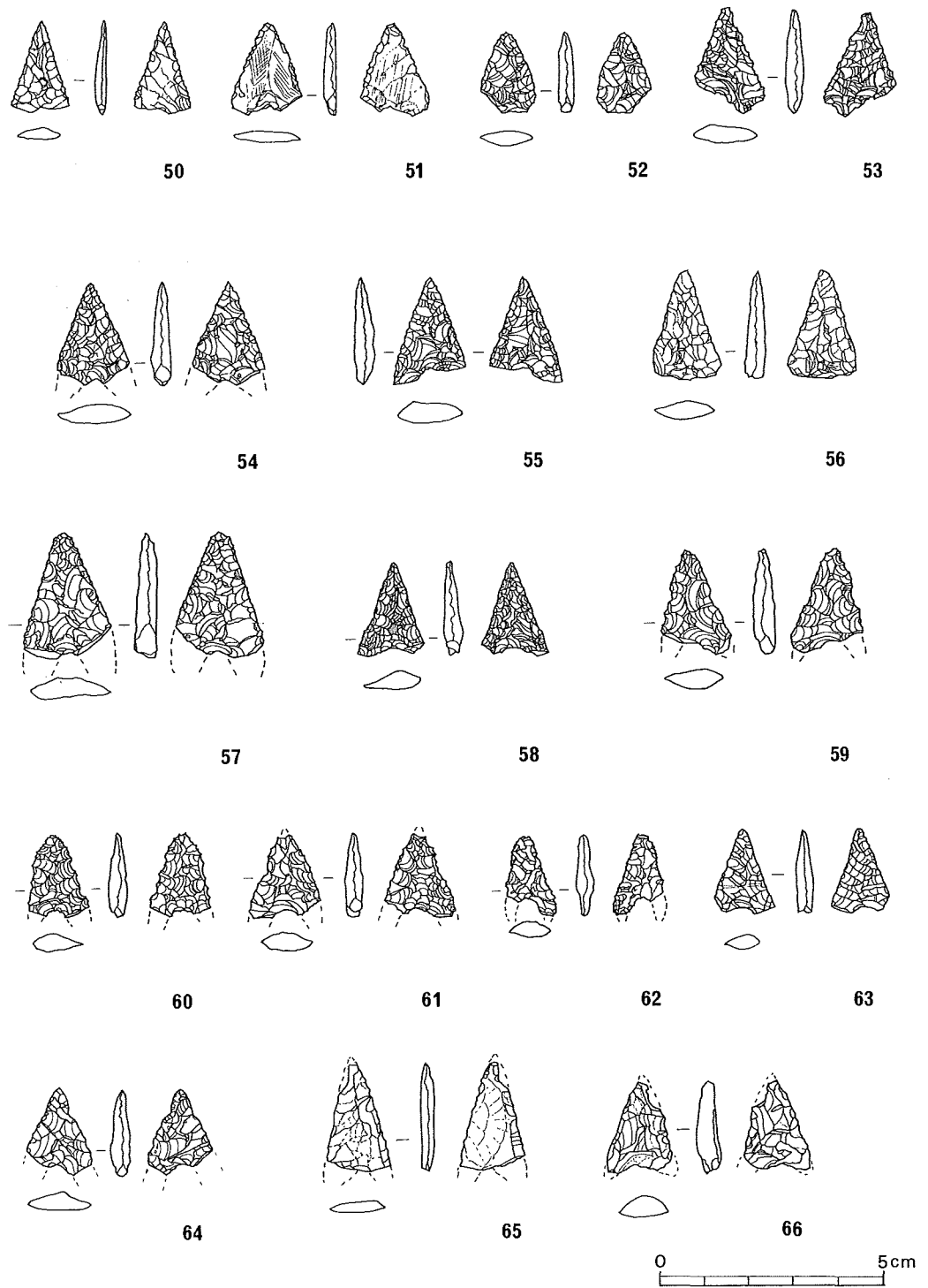


Fig. 38 石鏃Ⅱc類実測図 ④

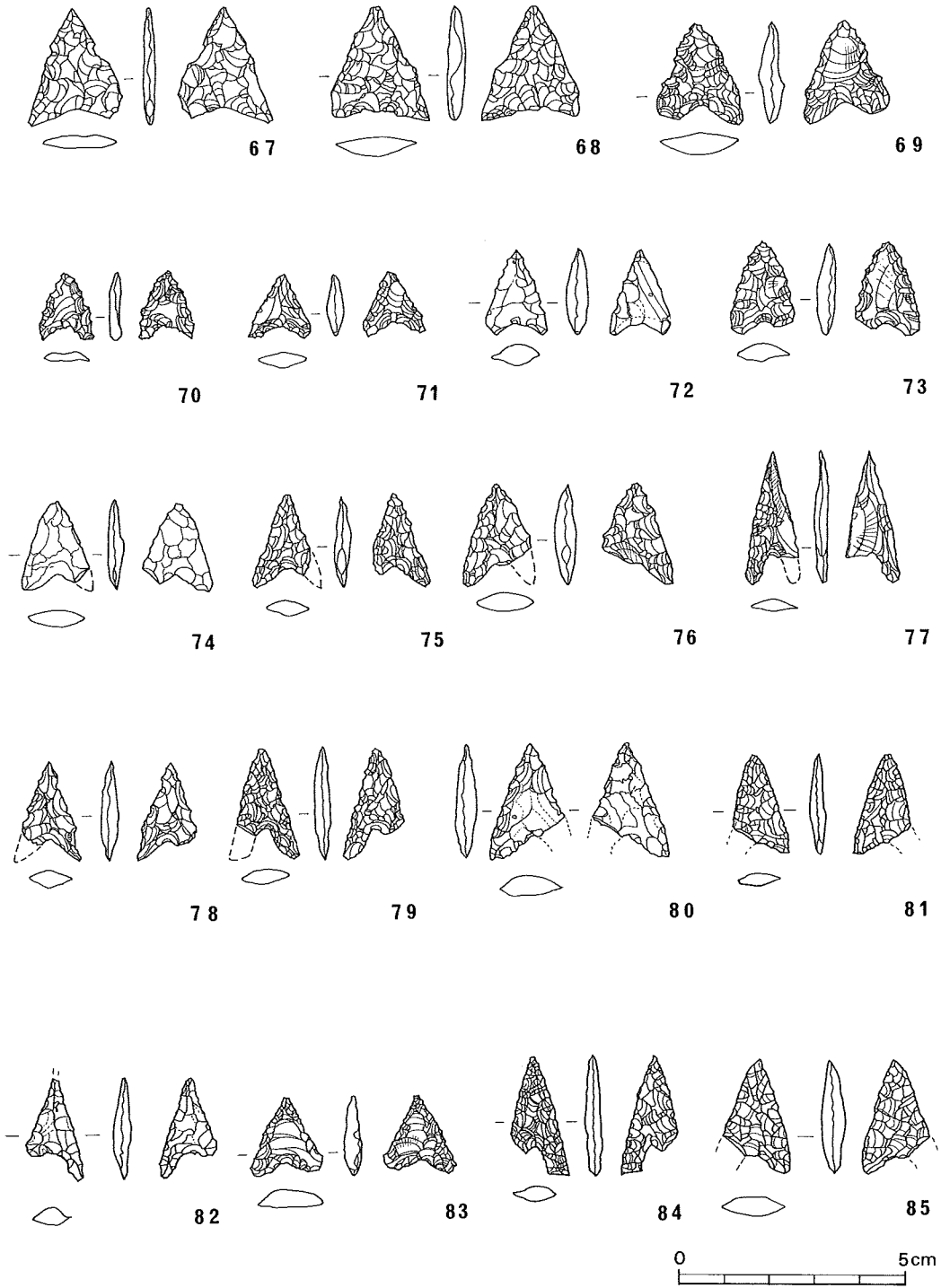


Fig. 39 石鏃Ⅱc類実測図 ⑤

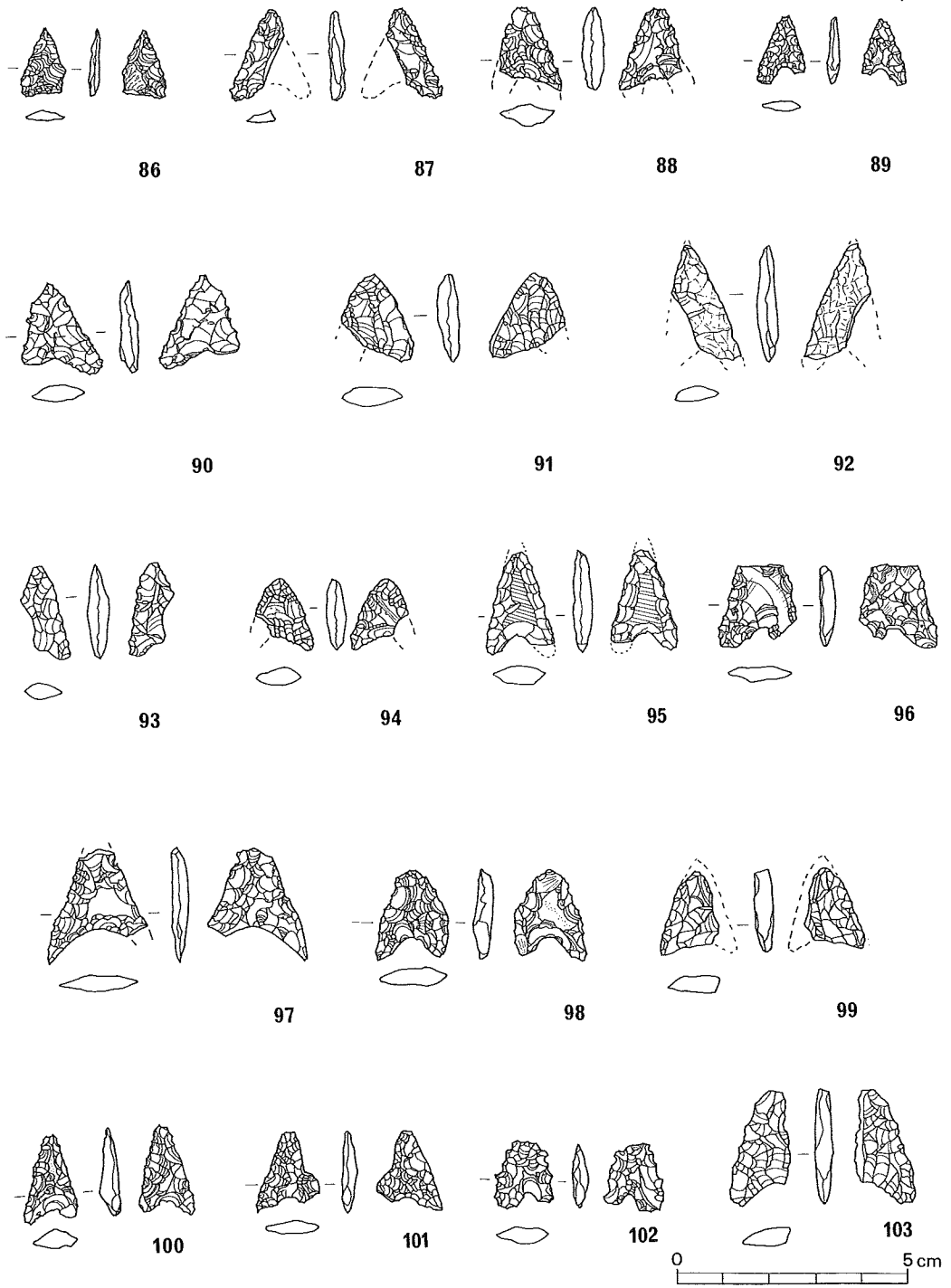


Fig. 40 石鏃 II c 類実測図 ⑥

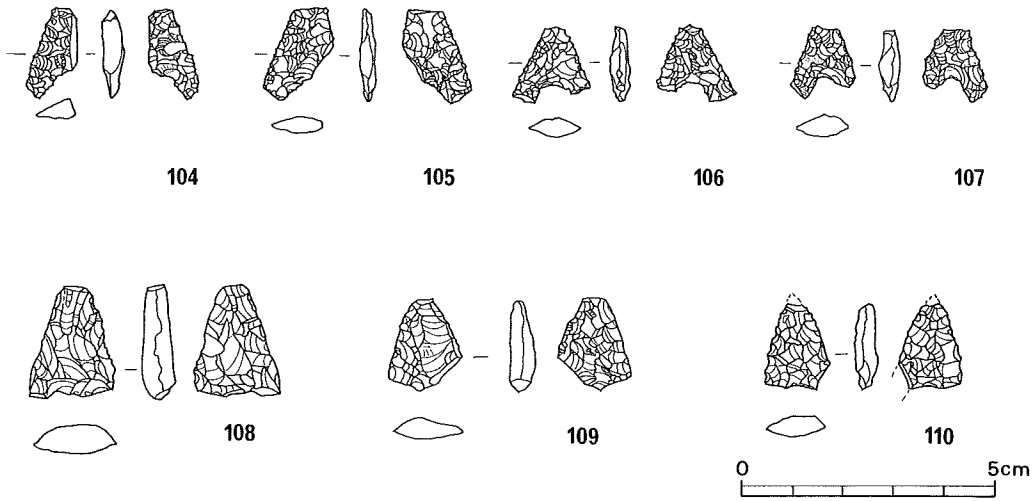


Fig. 41 石鏃Ⅱc類実測図 ⑦

Ⅱc類 (Fig. 35~Fig. 41)

側縁が直線的で、基部の抉りが全長の1/3以下の特長を持つもの。

110個がこのタイプとして捉えられるが、この内完形品またはほぼ完形に近い資料は40点である。

石材は黒曜石と安山岩を用いる。形状的には上記の特長の他に、抉りの角度が丸いものや鋭いものまで多種多様である。また調整も究めて丁寧なものから雑なものまで含む。

1, 2, 3はⅡa類ほどではないが、このタイプの資料の中では比較的抉りが深く、且つ丸味をもつものである。共に完形品で作りは丁寧である。8, 10は扁平な安山岩の剥片に簡単な調整を施して形状を整えている。15は分厚い黒曜石の素材に両面から調整剥離を施すが、結果的にいびつな形になっている。32は良質の黒曜石の素材に、全周にわたって微細な調整剥離を行い鋸歯状の側縁を作り出している。28, 70, 71, 89の全長が1.5cmに満たない小型の石鏃は長崎県内では、平戸市田崎遺跡、諫早市柿崎遺跡、同市鷹野遺跡で出土しているが、この内鷹野遺跡ではまとまった資料が無文の尖底土器と共伴しており、その時期の一端が窺い知れる。47, 77は薄い黒曜石の剥片を利用した所謂剥片鏃と呼ばれる資料である。長崎県内では、縄文後期の遺跡から最も多く出土する。

Ⅱd類 (Fig. 42~Fig. 43)

基部の特長は上記と同じであるが、側縁部がカーブを描くタイプである。

4, 6, 12, 14, 24, 25, 26は良質の薄い黒曜石剥片を利用した剥片鏃である。調整剥離は縁辺部にのみ集中するが、一応全周にわたって形状を整えている。

Ⅲ類 (Fig. 43)

凸基式で基部が丸みを持つタイプである。5点出土した。

28は側縁部を一部欠損するため全体が今一つあきらかでないが、あるいは石槍の毀損品を再加工した資料の可能性がある。32は良質の黒曜石の剥片を利用した資料である。調整剥離は専ら裏面からのみ行っている。

Ⅳ類 (Fig. 44)

上記3タイプと形状が異なる資料である。

1は長さ4 cm以上、重量7.3 gを越す大型の資料である。里郷遺跡のやや南東部の地点から出土した。中に荒い粒子の混じる黒曜石を用いる。先端部を僅かに欠損する。不定形の剥片に全周にわたって調整剥離を行うが、一部に自然面が残る。側縁部は鋭く鋸歯状を呈する。2は片側の側縁部が内湾するタイプである。基部の挟りは片面からのみ行う。3, 4, 6, 7, 9, 11, 12, 13, 14, 17は黒曜石剥片を利用した資料である。もともと素材が不定形であるため調整後も定型的になりえないのであろう。3は片面からのみ急角度調整を行う。4, 5は側縁部の形状から見るとⅡdタイプであるが、両側縁の基部が直線的で逆ハの字の形になるのを特長とする。7と9は典型的な剥片鏃である。基部にだけ僅かな調整剥離を施すのみで、あとは鋭利な縁辺部をそのままエッジとして利用する。共に一部自然面を残す。11は断面が三角形の不定形な剥片を利用した資料である。片側から急角度調整を施して形状を整えているが、側縁部は両側とも内湾する。12, 13は良質の扁平な剥片を利用する。表裏共やはり縁片部にのみ僅かな調整剥離を施す。14も比較的薄い剥片を利用するが、ほぼ全面にわたって丁寧な調整を行う。15は安山岩の不定形剥片に調整を加えているが、形状を整えるまでには至らず、いびつな形となる。16はもともと槍先状の形状を持つ安山岩の剥片を利用し、片側の裏面のみに簡単な調整剥離を施す。17は薄い黒曜石の剥片の片面のみに簡単な調整を行っている。一部欠損しているために全体の形状が定かで無い。

註1 長崎県教育委員会 『田崎遺跡』 「長崎県埋蔵文化財調査集報 Ⅳ」 長崎県文化財調査報告書 第55集 1981

註2 長崎県教育委員会 『柿崎遺跡』 「九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書 Ⅰ」 長崎県文化財調査報告書 第54集 1981

註3 長崎県教育委員会 「諫早中核工業団地造成に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書 Ⅲ」 長崎県文化財調査報告書 第85集 1986

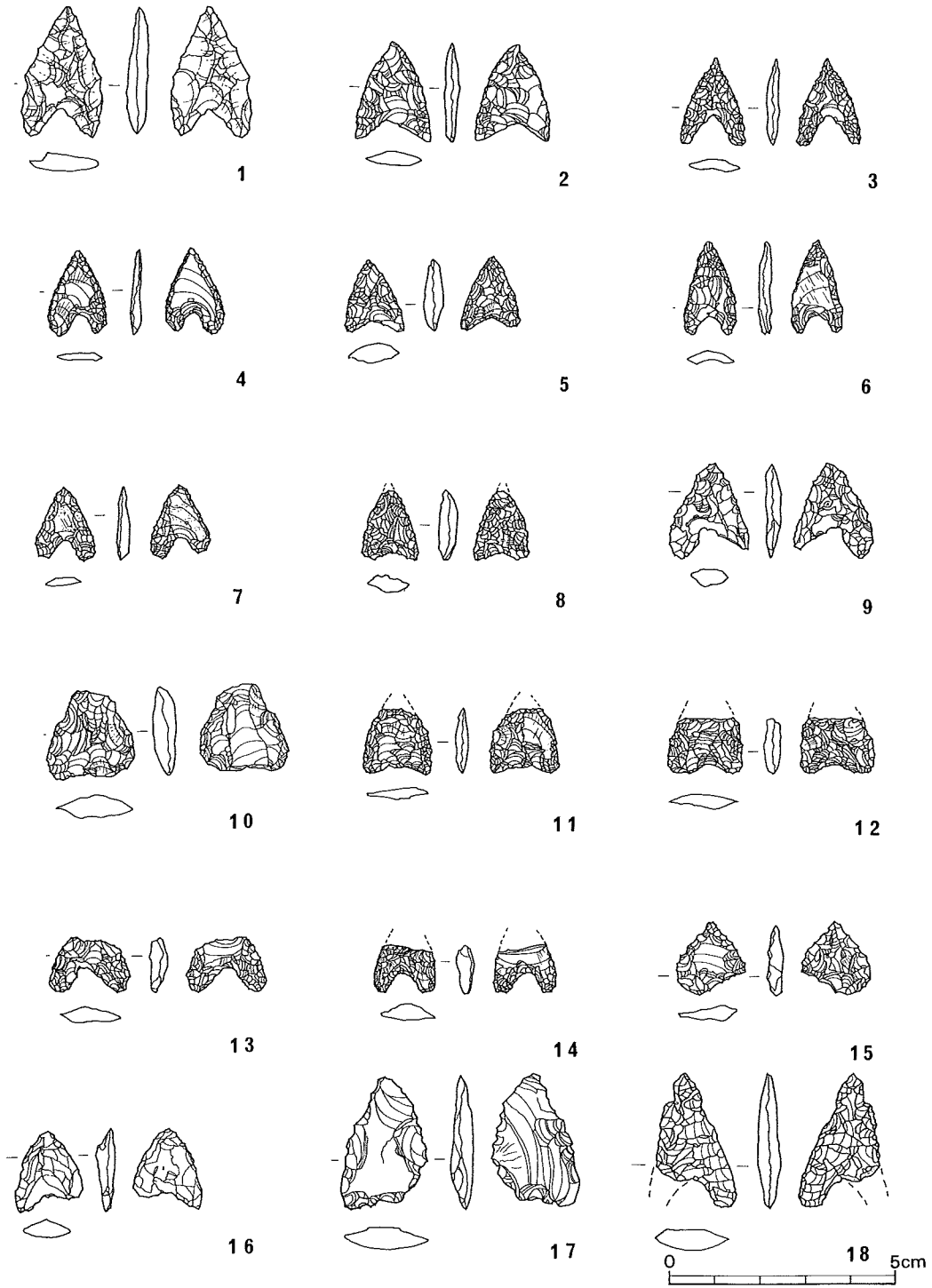


Fig. 42 石鏃Ⅱ d類實測圖

里鄉遺跡

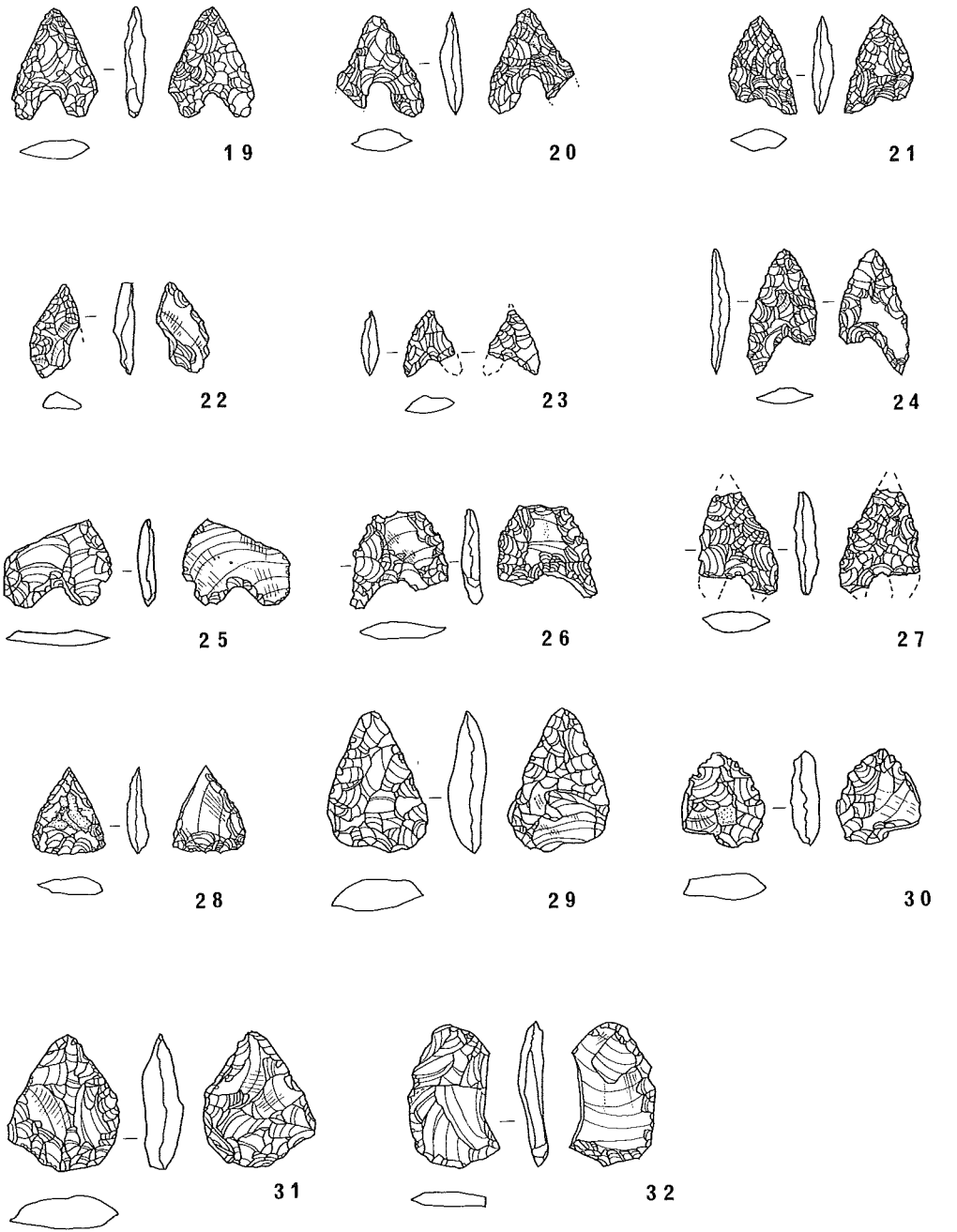


Fig. 43 石鏃Ⅱd, Ⅲ類實測圖



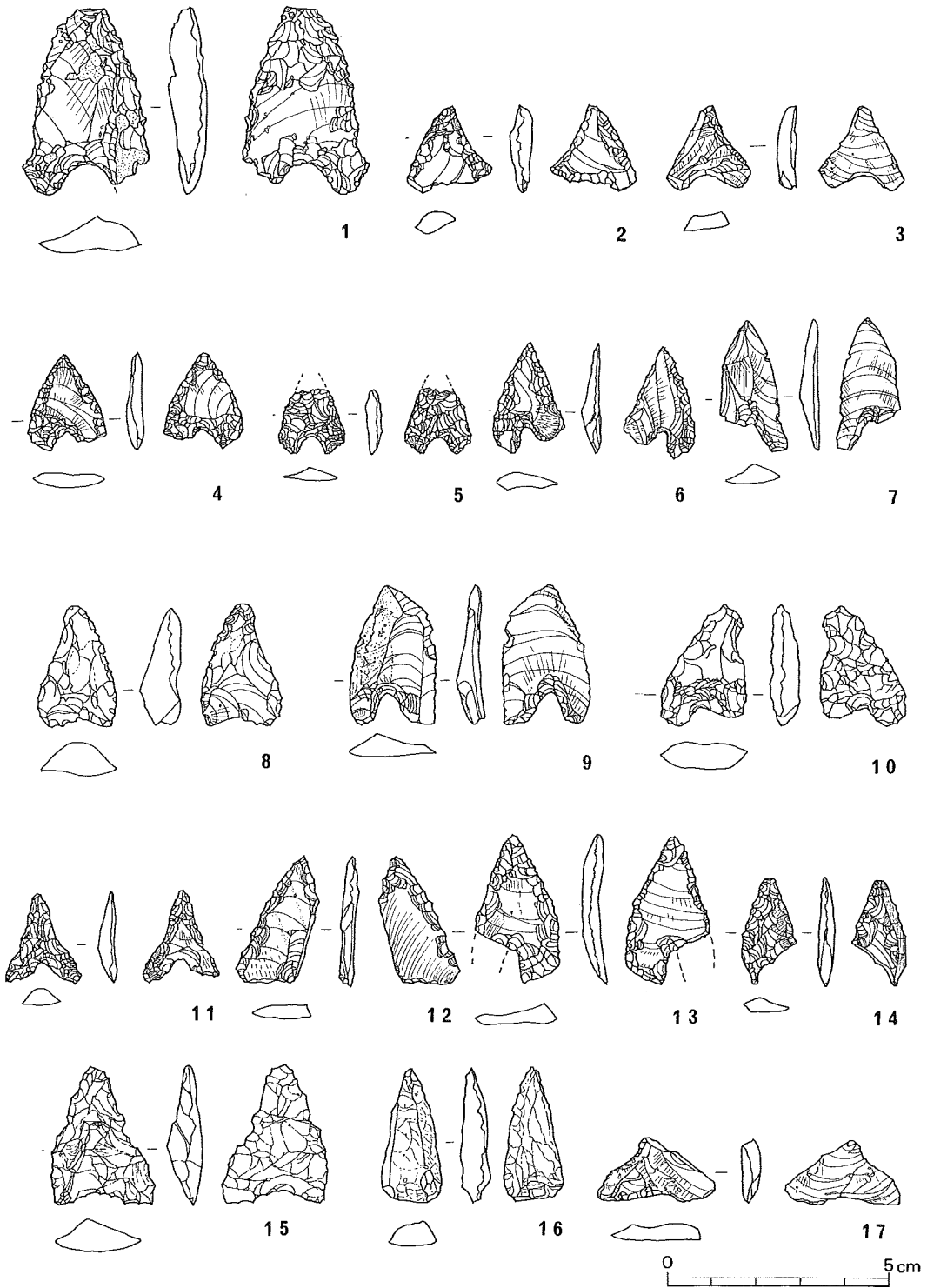


Fig. 44 石鏃Ⅳ類實測圖

V類 (Fig. 46)

所謂局部磨製石鏃である。形状的には、各種認められるが、研磨という属性を生かして一類設けておく。

全部で29点出土した。その分布状況は Fig.45のとおりである。調査区の中心部を除くような感じで万遍なく分布している。

この種の石鏃<sup>註1</sup>については、下川達彌氏の論功があり、氏の分類に従うと次の3種に分類できる。

①研磨が全面に及ぶもの

(Fig. 46—1～12)

②研磨はほぼ全面にわたるが、刃部のみ剝離調整痕が残るもの

(Fig. 46—13～21)

③打製面の方が研磨面より卓越するもの (Fig. 46—22～29)

石材は大部分が黒曜石で若干安山岩が用いられる。23と25を除くと、何れも極めて薄く仕上げられており、重量も0.2～0.4g程にほぼ統一される。

このタイプの石鏃は、縄文時代早期の押型文土器に共伴し、従来佐世保市を中心とする県北地区から多く出土する傾向が強かったが、近年本県東彼杵町松山A遺跡<sup>註2</sup>において393点が一括して出土するなど、その分布が県央地区まで及ぶことが分かってきた。ただし、島原半島からはその出土の事実が無く、この点分布に片寄りが認められる。

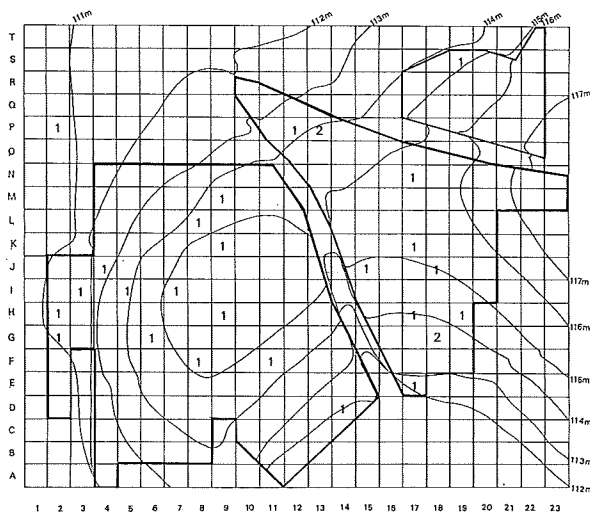


Fig. 45 石鏃V類出土分布図

註1 下川達彌 「局部磨製石鏃について—長崎県佐世保市岩下洞穴出土資料をとりあげて—」 長崎県立美術博物館研究紀要 第1集 1972 (昭和47年)

註2 長崎県教育委員会 「九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書 VI」 長崎県文化財調査報告書 第93集 1989

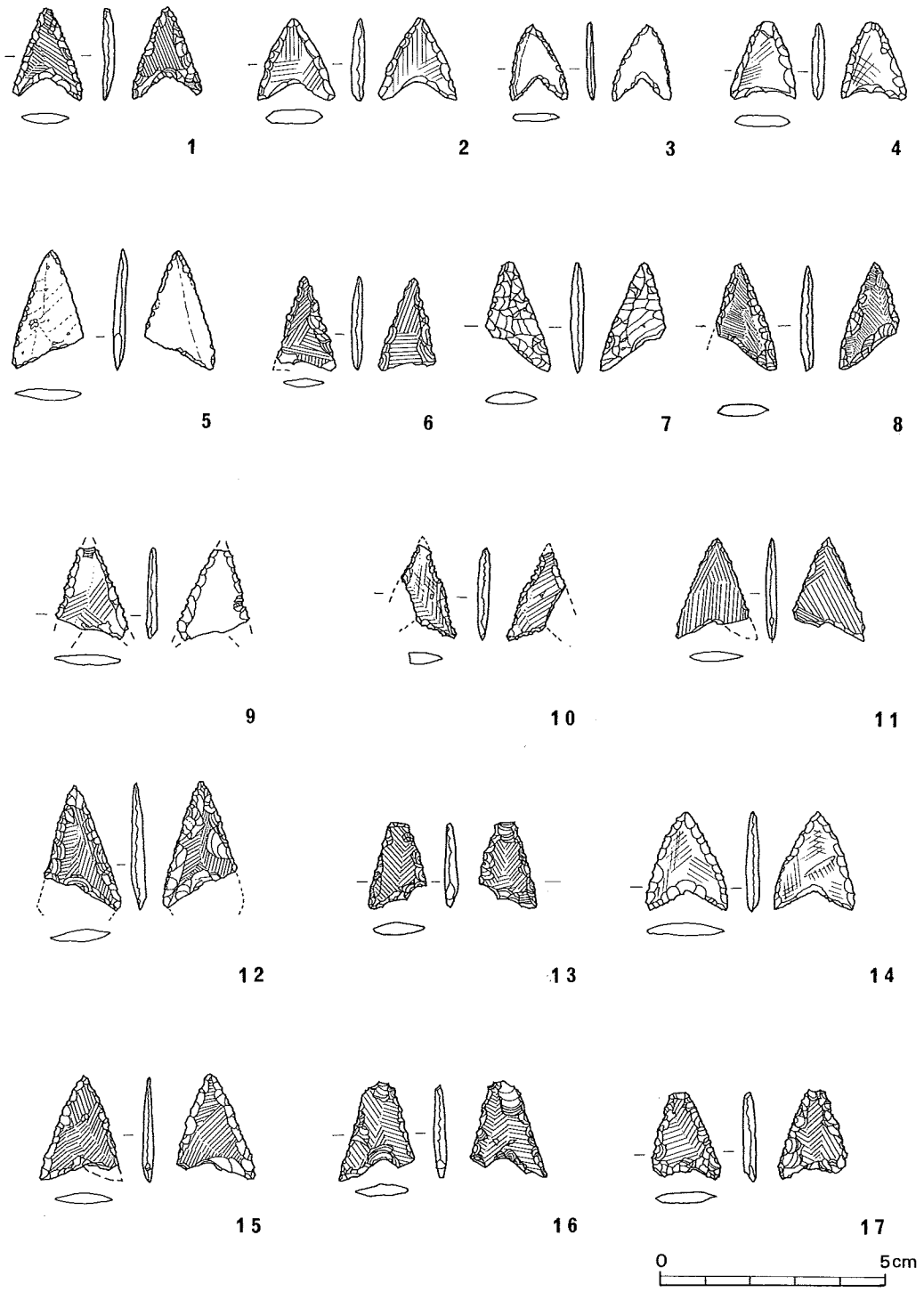


Fig. 46 石鏃V類實測圖 ①

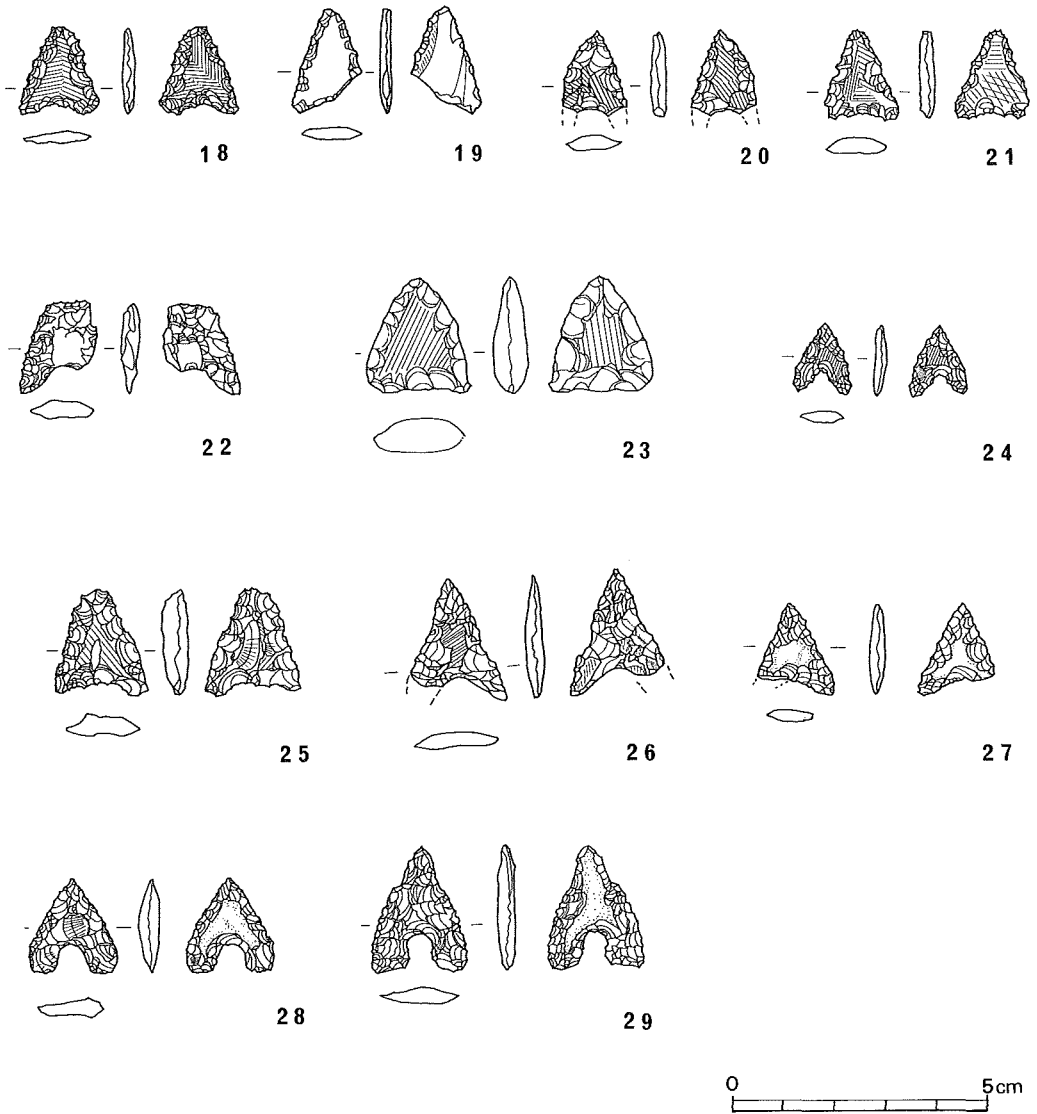


Fig. 47 石鏃V類実測図 ②

形式不明の石鏃 (Fig. 48~Fig. 49)

以下欠損等によって形式が不明な資料を最後に掲載しておく。

1は良質の黒曜石に全面にわたって調整剥離を施している資料である。推定長が4cmを越す大型の鏃である。先端部と脚部を欠損する。2も先端部と脚部を欠損する。表面の風化が著しい。6は先端部のみが残存しているため下半部が不明であるが、石の可能性もある。黒曜石でやはり風化が著しい。8は剥片鏃と思われる。19は基部の挟りが特徴的で、側縁部が鋸歯状をなす特異な形をしているが、上半部が欠損しているため全容が不明である。

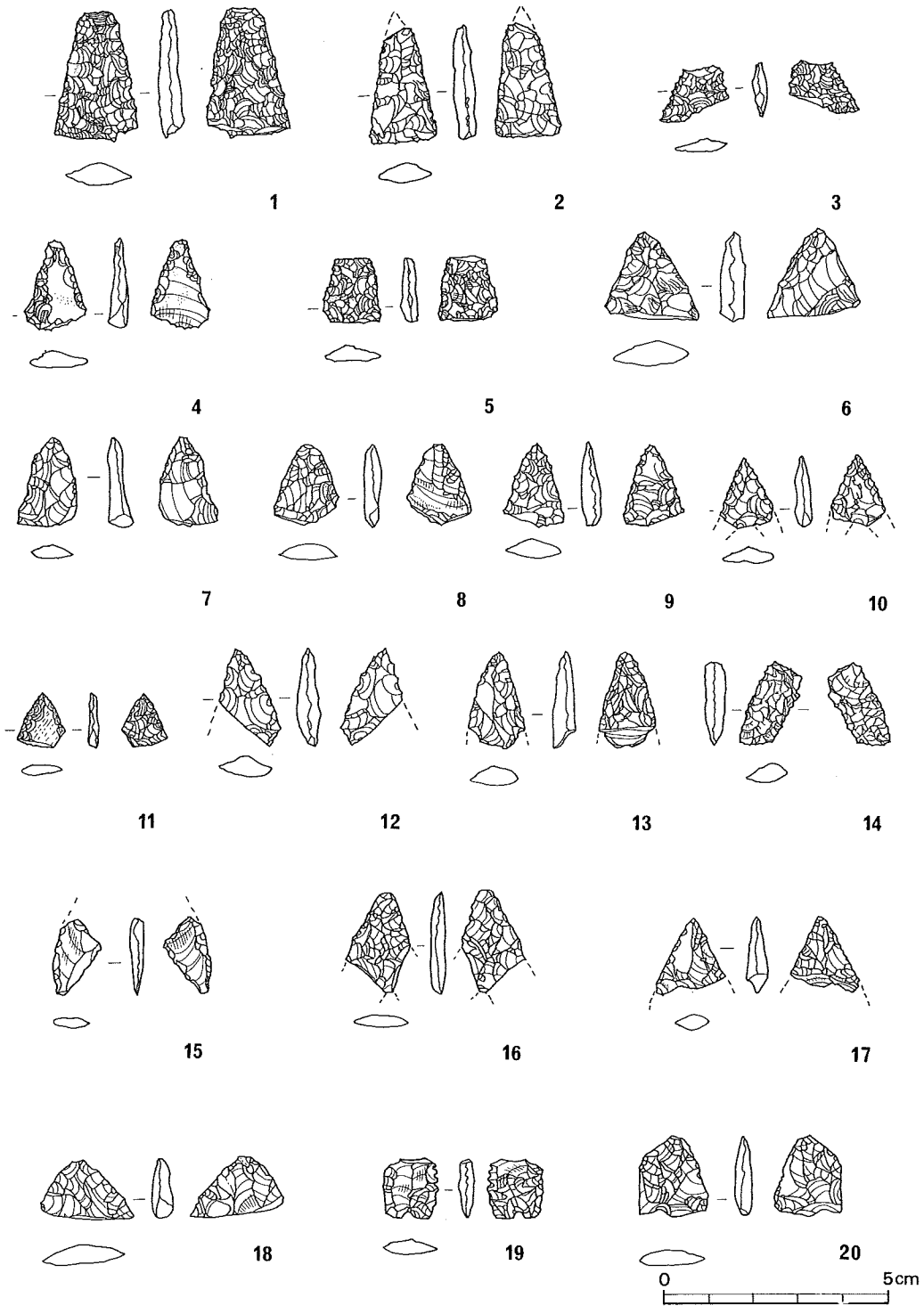


Fig. 48 型式不明石鏃實測圖 ①

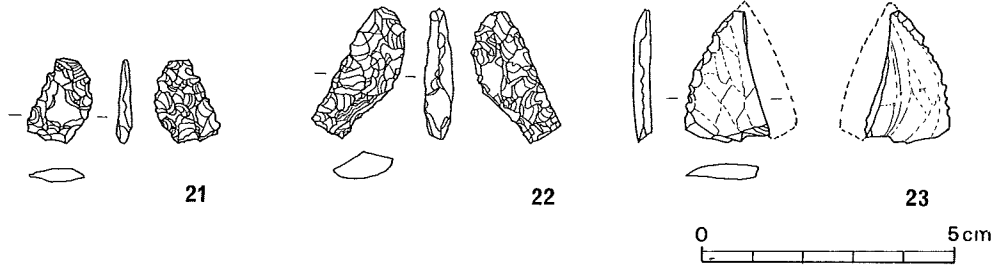


Fig. 49 型式不明石鏃実測図 ②

Tab. 1 石鏃計測表 ①

図番号	出土区	石質	重量(g)	大きさ (cm)			残存部位	先端角度	分類
				長さ	幅	厚			
Fig.31-1	K20-81	A	2.0	2.8	2.5	0.4	完	70°	I a
2	P 9-Ⅱ	C	3.5	2.8	2.2	0.8	完	65	I a
3	F 5-10	D	0.9	1.5	1.4	0.5	C	70	I a
4	P13-59	安山岩	2.2	2.3	2.4	0.6	完	70	I a
5	K17-64	A	3.3	3.1	3.1	0.4	完	65	I a
6	D14-Ⅲ	安山岩	1.9	—	—	0.6	A	—	I a
7	S13-H	G	2.0	2.4	1.6	0.7	A	—	I a
8	I 2-H	G	0.3	—	—	—	A	—	I a
9	N19-1	D	4.0	2.5	2.6	0.9	完	85	I a
Fig.32-1	I 18-H	D	4.2	2.7	2.3	0.8	完	90	I b
2	H17-H	G	4.1	3.2	2.2	0.9	完	60	I b
3	H19-2	G	1.7	2.4	1.9	0.4	完	72	I b
4	F 4-H	G	2.7	2.5	2.1	0.7	完	60	I b
5	M11-H	D	3.8	2.7	0.9	1.8	完	70	I b
6	G13-H	G	2.8	2.3	2.3	0.6	完	60	I b
7	K 7-H	E	3.1	—	2.7	0.5	A	—	I b
8	H18-H	F	3.6	2.8	2.2	0.9	完	75	I b
9	G13-H	安山岩	6.5	3.2	2.4	1.1	完	70	I b
10	H 2-Ⅱ	D	1.8	2.5	1.8	0.5	完	63	I b
11	V12-H	D	0.2	1.7	1.0	0.2	完	62	I b
Fig.33-1	N10-53	E	0.6	1.8	1.7	0.4	完	57	Ⅱ a
2	B 6-H	B	0.6	1.5	1.7	0.5	完	60	Ⅱ a
3	Q12-127	安山岩	0.4	2.2	—	0.3	C	40	Ⅱ a
4	G 3-82	F	1.1	3.3	—	0.5	C	45	Ⅱ a
5	M15-14	B	0.8	—	—	0.4	D	—	Ⅱ a
6	G17-H	G	0.5	2.1	—	0.4	C	50	Ⅱ a
7	G13-H	F	0.8	—	—	0.3	D	—	Ⅱ a
8	H17-H	G	0.5	—	—	0.4	C	60	Ⅱ a
9	N 5-H	B	0.5	—	—	0.4	C	—	Ⅱ a
Fig.34-1	I 11-25	D	1.0	2.0	1.6	0.4	完	90	Ⅱ b
2	K19-4	E	0.7	2.1	1.7	0.4	完	50	Ⅱ b
3	O13-22	F	0.8	2.1	1.7	0.5	完	40	Ⅱ b
4	I 18-19	B	1.5	—	2.3	0.3	A	—	Ⅱ b
5	B 6-H	B	0.9	—	1.8	0.3	A	—	Ⅱ b
6	O14-13	G	0.6	2.3	—	0.3	C	50	Ⅱ b
7	K10-29	B	0.9	2.4	—	0.3	C	60	Ⅱ b
8	G 3-115	F	0.5	2.6	—	0.3	C	50	Ⅱ b
9	N16-13	C	1.2	2.5	—	0.5	C	70	Ⅱ b

Tab. 2 石鏃計測表 ②

図番号	出土区	石質	重量(g)	大きさ (cm)			残存部位	先端角度	分類
				長さ	幅	厚			
10	P 14-13	B	1.2	2.9	—	0.5	C	50°	II b
11	H 17-H	B	1.2	—	—	0.5	C	—	II b
12	G 7-24	安山岩	0.9	—	—	0.4	C	60	II b
Fig.35-1	H 18-4	—	1.4	3.5	2.1	0.5	完	40	II c
2	J K-16	—	1.3	2.6	1.9	0.4	完	40	II c
3	513-Ⅱ	D	1.0	2.7	1.7	0.5	完	35	II c
4	D 4-31	D	0.8	2.6	1.5	0.3	完	65	II c
5	D 2-Ⅱ	B	1.3	2.8	1.7	0.3	完	45	II c
6	F 14-H	D	0.8	2.1	1.7	0.3	完	60	II c
7	I 9-74	D	1.3	2.4	1.6	0.4	完	73	II c
8	F 5-44	安山岩	0.5	1.9	1.5	0.2	完	60	II c
9	K 18-47	安山岩	1.3	2.5	1.7	0.5	完	40	II c
10	L 8-7	安山岩	0.5	1.8	1.5	0.3	完	50	II c
11	M 8-25	E	0.7	2.0	1.1	0.4	完	45	II c
12	K 12-44	—	0.6	2.7	1.8	0.5	完	50	II c
13	T 17-H	F	1.6	2.7	1.8	0.5	完	50	II c
14	F 4-56	D	1.0	2.4	1.6	0.5	完	35	II c
15	D 11-H	G	2.1	2.6	2.0	0.6	完	75	II c
16	L 10-32	E	1.1	2.3	1.7	0.5	完	45	II c
17	E 7-H	D	1.5	3.0	1.8	0.3	完	45	II c
18	F 6-7	C	1.0	1.9	1.6	0.3	完	75	II c
19	I 3-4	G	1.7	2.1	1.2	0.7	完	80	II c
20	F 7-30	F	0.8	2.3	1.5	0.4	完	53	II c
21	F 7-43	B	0.7	2.1	1.4	0.4	完	50	II c
22	H 8-5	B	1.0	2.2	1.6	0.4	完	55	II c
23	J 4-4	B	1.2	2.7	2.0	0.3	完	60	II c
24	C 4-28	G	0.6	2.0	1.6	0.3	完	60	II c
25	H 17-10	D	0.6	2.1	1.5	0.3	完	42	II c
26	J 14-5	C	1.0	2.2	1.7	0.4	完	55	II c
27	H	B	0.8	2.2	1.5	0.4	完	45	II c
28	E 5-6	D	0.4	2.4	1.5	0.3	完	52	II c
29	I 12-12	F	0.7	2.1	1.5	0.4	完	45	II c
30	L 12-H	B	1.0	2.5	1.7	0.4	完	50	II c
31	J 15-31	B	1.7	2.4	1.7	0.6	完	52	II c
32	Q 13-1	F	0.4	1.9	1.3	0.3	完	50	II c
33	G 17-65	安山岩	0.9	2.4	1.6	0.4	完	45	II c
34	M 18-8	安山岩	1.1	2.5	1.8	0.5	完	51	II c
35	N 19-14	安山岩	0.9	2.3	1.7	0.3	完	45	II c



Tab. 3 石鏃計測表 ③

図番号	出土区	石質	重量(g)	大きさ (cm)			残存部位	先端角度	分類
				長さ	幅	厚			
36	F 4-103	安山岩	0.7	2	1.6	0.3	完	52°	Ⅱ c
37		安山岩	0.6	1.8	1.9	0.4	完	55	Ⅱ c
38	F 17-H	G	0.8	1.9	1.7	0.4	完	65	Ⅱ c
39	I 2-7Ⅱ	安山岩	0.5	1.8	1.6	0.3	完	60	Ⅱ c
40	A 4-8	D	1.4	—	2.0	0.4	A	—	Ⅱ c
41	F 13-45	D	1.0	—	1.9	0.4	A	—	Ⅱ c
42	H 19-H	安山岩	1.3	—	1.9	0.6	A	—	Ⅱ c
43	I 10-H	G	0.8	—	1.4	0.4	A	—	Ⅱ c
44	J 12-2	—	1.3	—	2.1	0.3	A	—	Ⅱ c
45	A 11-11	C	1.3	—	1.7	0.5	A	—	Ⅱ c
46	Q 10-2	D	0.8	—	1.4	0.4	A	50	Ⅱ c
47	I 16-17	E	0.5	—	1.1	0.4	A	—	Ⅱ c
48	G 8-H	G	1.0	—	2.0	0.4	A	70	Ⅱ c
49	H 19-H	D	0.9	—	1.6	0.4	A	—	Ⅱ c
50	K 20-7	D	0.4	—	—	0.3	B	40	Ⅱ c
51	N 13-62	D	0.7	—	—	0.3	B	55	Ⅱ c
52	G 18-H	安山岩	0.6	—	—	0.4	B	60	Ⅱ c
53	B 5-1	G	0.9	—	—	0.4	B	45	Ⅱ c
54	J-20	B	1.1	—	—	0.4	B	50	Ⅱ c
55	M 16-24	F	1.0	—	—	0.5	B	50	Ⅱ c
56	M 16-15	F	1.1	—	—	0.4	B	40	Ⅱ c
57	I 19-9	D	2.2	—	—	0.5	B	60	Ⅱ c
58	F 8-11	D	0.8	—	—	0.5	B	45	Ⅱ c
59	H 18-H	F	1.1	—	—	0.5	B	42	Ⅱ c
60	F 8-H	G	0.7	—	—	0.4	B	70	Ⅱ c
61	514-H	F	1.0	—	—	0.4	B	55	Ⅱ c
62	H-9	E	0.5	—	—	0.4	B	50	Ⅱ c
63	G 9-9-H	B	0.6	—	—	0.3	B	45	Ⅱ c
64	F 14-H	B	0.6	—	—	0.4	B	50	Ⅱ c
65	N 10-23	G	0.8	—	—	0.3	B	40	Ⅱ c
66	F 19-H	安山岩	1.1	—	—	0.5	B	50	Ⅱ c
67	I 18-20	D	0.9	2.6	—	0.3	C	65	Ⅱ c
68	H 19-H	D	1.7	2.5	—	0.4	C	60	Ⅱ c
69	Q 19-11	D	1.2	2.3	—	0.5	C	70	Ⅱ c
70	F 7-H	F	0.3	1.5	—	0.2	C	60	Ⅱ c
71	I 18-2	B	0.4	1.4	—	0.4	C	60	Ⅱ c
72	I 2-33	G	0.8	1.9	—	0.5	C	50	Ⅱ c
73	F 8-9	安山岩	0.8	2.0	—	0.4	C	60	Ⅱ c

Tab. 4 石鏃計測表 ④

図番号	出土区	石質	重量(g)	大きさ (cm)			残存部位	先端角度	分類
				長さ	幅	厚			
74	D15-H	安山岩	0.8	2.0	—	0.4	C	75°	II c
75	H 8-12	安山岩	0.6	2.1	—	0.4	C	40	II c
76	A11-H	C	1.1	2.3	—	0.5	C	70	II c
77	R22-1	F	0.7	2.9	—	0.3	C	30	II c
78	H 4-58	安山岩	0.6	2.2	—	0.4	C	45	II c
79	F 4-54	E	0.7	2.4	—	0.4	C	40	II c
80	G 8-H	安山岩	1.2	2.5	—	0.5	C	50	II c
81	J 9-H	G	0.6	2.2	—	0.3	C	50	II c
82	J 17-91	安山岩	0.6	2.3	—	0.4	C	40	II c
83	F 5-31	A	0.6	1.7	—	0.4	C	55	II c
84	J 11-H	C	0.6	2.7	—	0.3	C	40	II c
85	J 12-2	B	1.2	2.5	—	0.5	C	55	II c
86	S 15-H	E	0.2	1.5	—	0.2	C	50	II c
87	G 17-H	D	0.4	2.0	—	0.3	C	55	II c
88	I 12-37	G	0.8	1.8	—	0.5	C	65	II c
89	F 19-H	F	0.2	1.5	—	0.2	C	45	II c
90		D	0.8	2.0	—	0.4	C	70	II c
91	J 12-H	B	0.9	2.0	—	0.4	C	75	II c
92	H 4-59	安山岩	0.8	2.5	—	0.4	C	50	II c
93	I 7-3	G	0.5	2.0	—	0.4	C	50	II c
94	K 9-H	F	0.5	1.6	—	0.4	C	75	II c
95	I 11-35	安山岩	1.1	—	—	0.4	D	—	II c
96	G 18-H	A	1.0	—	—	0.4	D	—	II c
97	P 12-134	F	1.1	—	—	0.4	D	—	II c
98	B 11-H	A	1.1	—	—	0.4	D	—	II c
99	K 16-16	D	0.7	—	—	0.4	D	—	II c
100	G 12-II	B	0.6	—	—	0.4	D	—	II c
101	G 4-H	G	0.4	—	—	0.3	D	—	II c
102	N 9-5	F	0.5	—	—	0.4	D	—	II c
103	I 5-H	G	0.8	—	—	0.4	D	—	II c
104	I 18-I	F	0.5	—	—	0.4	E	—	II c
105	I 11-2	G	0.7	—	—	0.3	E	—	II c
106	F 5-48	B	0.5	—	—	0.4	E	—	II c
107	A 11-H	A	0.5	—	—	0.5	E	—	II c
108	F 14-H	B	2.0	—	—	0.6	E	—	II c
109	G 17-14	A	0.9	—	—	0.4	E	—	II c
110	K 12-20	G	0.7	—	—	0.4	E	—	II c

Tab. 5 石鏃計測表 ⑤

図番号	出土区	石質	重量(g)	大きさ (cm)			残存部位	先端角度	分類
				長さ	幅	厚			
Fig.42-1	C10-2	D	1.4	2.9	1.8	0.4	完	55°	II d
2	G6-29	G	0.8	2.0	1.7	0.3	完	60	II d
3	P13-127	F	0.5	1.9	1.4	0.3	完	55	II d
4	P4-II	F	0.4	1.9	1.3	0.2	完	55	II d
5	F4-H	F	0.6	1.6	1.3	0.4	完	75	II d
6	N14-21	F	0.5	2.1	1.1	0.3	完	50	II d
7	H18-24	F	0.4	1.6	1.3	0.2	完	70	II d
8	B6-H	B	0.6	1.5	1.3	0.4	A	50	II d
9	P15-21	G	0.9	2.1	1.8	0.4	A	52	II d
10	K10-H	G	1.8	—	2.0	0.5	A	61	II d
11	D14-H	A	0.6	—	1.5	0.3	A	64	II d
12	G4-H	B	0.8	—	1.7	0.3	A	—	II d
13	H16-H	E	0.6	—	1.8	0.4	A	—	II d
14	G19-H	F	0.4	—	1.3	0.4	A	—	II d
15	P12	A	0.6	1.6	—	0.4	B	65	II d
16	H17-H	安山岩	0.7	1.8	1.5	0.4	C	80	II d
17	H17-H	G	2.1	3.0	2.0	0.5	C	70	II d
18	F18-H	C	1.4	3.0	—	0.5	C	75	II d
19	K12-H	F	1.2	2.3	—	0.4	C	60	II d
20	Q12-H	G	0.8	2.2	—	0.5	C	60	II d
21	F18-H	G	0.8	2.1	—	0.5	C	90	II d
22	F18-7	G	0.6	1.9	—	0.4	C	60	II d
23		C	0.5	1.5	—	0.3	C	42	II d
24	J15-3	G	0.6	2.7	—	0.4	C	72	II d
25	P20-H	A	1.0	—	—	0.3	D	—	II d
26		A	1.2	—	—	0.4	E	—	II d
27		C	1.1	—	—	0.4	E	55	II d
Fig.44-1	G6-21	安山岩	0.8	1.9	1.5	0.4	完	65	III
2	G19-H	C	3.5	3.0	2.1	0.7	完	68	III
3	B4-38	G	1.6	2.0	1.7	0.5	完? C	90	III
4	J20-H	A	3.8	2.9	2.3	0.7	完?	70	III
5	F19-H	A	2.0	3.1	1.9	0.4	完	90	III

Tab. 6 石鏃計測表 ⑥

図番号	出土区	石質	重量(g)	大きさ (cm)			残存部位	先端角度	分類
				長さ	幅	厚			
Fig.44-1	辻墓-H	C	7.3	—	2.9	0.8	A	—	IV
2	B7-H	E	1.1	2.0	2.0	0.5	完	70°	IV
3	M21-H	A	0.9	1.9	2.0	0.5	完	55	IV
4	P12-220	A	0.8	2.2	0.8	0.4	完	70	IV
5	J9-H	A	0.6	—	—	—	A	—	IV
6	P13-74	A	0.9	2.5	—	0.4	C	55	IV
7	O16-32	A	0.8	3.0	—	0.5	C	65	IV
8	R10-H	安山岩	2.8	2.7	1.8	0.8	完	70	IV
9	R17-H	A	2.0	—	2.0	0.6	A	—	IV
10	S13-H	D	2.7	2.7	—	0.6	C	90	IV
11	B11-H	B	0.7	2.1	1.8	0.4	完	50	IV
12	E2-I	B	1.4	2.9	—	0.3	C	60	IV
13	P13-80	F	1.8	3.4	—	0.5	C	55	IV
14	S13-II	F	0.7	2.4	—	0.3	C	50	IV
15	M9-6	安山岩	3.4	3.2	2.3	0.8	完	42	IV
16	C4-H	安山岩	2.1	3.1	1.4	0.6	完	40	IV
17	T16-II	A	1.0	—	—	0.4	?	—	IV
Fig.46-1	I5-8	D	0.5	2.1	1.6	0.2	完	50	V
2	F8-8	安山岩	0.8	1.8	1.7	0.3	完	65	V
3	V9-II	安山岩	0.3	1.7	1.3	0.2	完	60	V
4	D14-H	安山岩	0.6	1.7	1.5	0.3	完	55	V
5	K9-42	安山岩	0.7	2.7	—	0.3	C	48	V
6	J18-95	安山岩	0.5	2.1	—	0.2	C	40	V
7	S19-H	D	0.4	2.5	—	0.3	C	45	V
8	P13-1	安山岩	0.6	2.4	—	0.3	C	50	V
9	G2-68	G	0.6	—	—	0.2	E	—	V
10	H19-4	安山岩	0.4	2.0	—	0.3	C	50	V
11	P2-II	安山岩	0.6	2.2	—	0.2	C	50	V
12	F11-2	安山岩	0.9	2.8	—	0.3	C	45	V
13	G18-H	安山岩	0.6	—	—	0.3	D	—	V
14	P12-60	E	0.7	2.2	1.8	0.3	完	60	V
15	K17-41	E	0.8	2.3	—	0.2	C	60	V
16	J15-2	E	0.8	2.2	—	0.3	C	80	V
17	P13-131	B	0.6	—	—	0.2	D	—	V
18	I7-4	D	0.6	—	1.6	0.2	A	—	V
19	G6-4	D	0.4	—	—	0.2	D	—	V
20	H-9	G	0.5	—	—	0.3	E	—	V
21	I3-H	A	0.6	1.7	—	0.3	C	50	V

Tab. 7 石鏃計測表 ⑦

図番号	出土区	石質	重量(g)	大きさ (cm)			残存部位	先端角度	分類
				長さ	幅	厚			
22	N17-5	F	0.7	—	—	0.4	D	—	V
23	H17-H	D	2.3	2.3	2.0	0.7	完	75°	V
24	E17-H	F	0.2	1.4	1.2	0.2	完	63	V
25	J4-18	F	1.4	2.1	1.8	0.4	完	75	V
26	L8-9	F	0.8	2.5	—	0.3	C	52	V
27	H2-II	F	0.4	1.8	—	0.2	C	60	V
28	G18-29	F	0.8	1.9	1.7	0.4	完	65	V
29	M9-49	E	1.1	2.5	1.9	0.4	完	55	V
Fig.48-1	R20-H	B	2.1	—	—	0.5	E	—	型式不明
2	B6-H	G	1.3	—	—	0.5	E	50	
3	B13-H	B	0.3	—	—	0.3	D	—	
4	B13-H	B	0.8	—	—	0.4	E	40	
5	V13-H	B	0.6	—	—	0.4	E	—	
6	K10-48	安山岩	1.3	—	—	0.5	G	70	
7	H	D	0.7	—	—	0.3	B	70	
8	L18-H	F	0.6	—	—	0.3	B	55	
9	J19-45	B	0.6	—	—	0.4	B	60	
10	G4-H	安山岩	0.4	—	—	0.4	G	60	
11	B13-11	G	0.2	—	—	0.2	G	70	
12	D14-II	G	0.8	—	—	0.4	G	55	
13	R10-H	G	0.7	—	—	0.5	G	45	
14	G18-H	D	0.7	—	—	0.4	F	—	
15	P12-208	G	0.3	—	—	0.2	不明	—	
16	I19-24	B	0.7	—	—	0.3	◇	55	
17	P15-3	F	0.5	—	—	0.3	◇	60	
18	G6-55	G	0.7	—	—	0.5	◇	75	
19	N10-1	G	0.4	—	—	0.3	◇	—	
20	R18-21	B	0.8	—	—	0.4	◇	—	
21	P9-II	B	0.4	—	—	0.3	E	—	
22	J20	D	1.5	—	—	0.5	E	—	
23	L19-5	安山岩	1.0	—	—	0.3	E	—	

## IV 総括

里郷遺跡から出土した遺物の総点数は、約35,000点にものぼる。無論この点数は旧石器時代のチップから近代陶磁器片まで含めた点数である。

土層や遺構の項で述べたように、土層の堆積状況は良好とはいえず、掲載した資料の中には表土層や分布調査の折り採集した資料も少なからず含まれている。

遺物の出土状態の内、旧石器時代の資料は比較的遺跡の東側に多く見られる傾向にあった。標高115mから116mのやや平坦地がその中心である。遺物はナイフ形石器、台形石器、細石刃がその主なものであったが、特に集中する地点は無かった。

土器は主体を占める縄文土器の他、少量の須恵器と輸入陶磁器、そして近世陶磁片である。

縄文土器は数量的には多かったがそのほとんどは細片であり、時期を特定出来る資料は極めて少なかった。その中で、早期に属するものと思われる無文の底部の存在は、当該期にも生活の舞台があったことを示している。あとの土器は何れも後期に属しており、この時期を最後に縄文時代の資料は無くなる。僅かながら須恵器も出土した。遺跡から半径5 km以内にはこれまで明確な古墳時代の遺跡は認められない。今後周辺遺跡にも注意すべき資料である。

輸入陶磁器は殆どの遺跡から数点程度は出土するが、高麗から李朝の資料はまだ少ない。

縄文時代の石器は各調査区からほぼ万遍なく出土したが、調査区西側の流れ込みが強い地域を除くとおおまかに3地点に分けられた。すなわち、J—10区を中心とした地点、P—12区を中心とした地点、そしてK—18区を中心とした地点であり、これは、縄文土器の出土傾向とも一致する。主な出土石器としては、尖頭器、石核、スクレイパー、つまみ形石器、そして225点の石鏃<sup>註1</sup>があげられる。尖頭器は近辺の遺跡では、松山A遺跡<sup>註1</sup>で50本、野田の久保遺跡<sup>註2</sup>で14本が出土している。この里郷遺跡は、その丁度中間点にあり、各遺跡間の距離は約5 kmを計る。石鏃は各種含まれているが、特徴的な資料は局部磨製石鏃と剥片鏃と呼ばれる資料である。言うまでも無く、局部磨製石鏃は長崎県北部を中心とした縄文時代早期遺跡に通有な遺物であり、剥片鏃は縄文後期の遺跡にもっとも多い資料である。

土器との対比で言うと、尖頭器、局部磨製石鏃などは厚手無文の早期土器の時期の所産であり、剥片鏃やつまみ形石器などは後期の資料に伴う資料であろう。

柱穴状のピットや不定形の土壙などは多くみられたが、住居址や埋葬に伴う明確な遺構は検出できなかった。もともと土層の堆積が薄いのと攪乱が下部まで及んでいたのが原因だろう。

(高野)

註1 長崎県教育委員会 「九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書 VI」所収 長崎県文化財調査報告書 第93集 1989

註2 長崎県教育委員会 「九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書 VII」所収 長崎県文化財調査報告書 第98集 1990

PLATES

(里鄉遺跡)



遺跡遠景



遺跡近景





調査風景



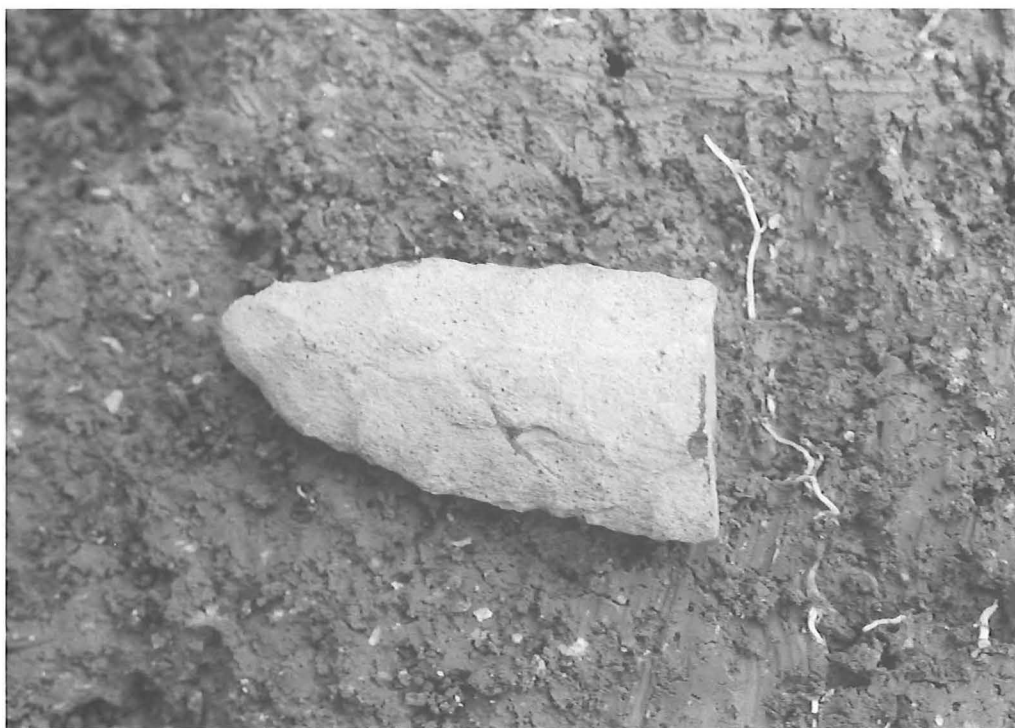
遺構実測風景



土器出土状況



ナイフ形石器出土状況



尖頭器出土状況



J-8区 東壁



F-17区 東壁



I-9区 西壁



L-20区 東壁



N-19区 東壁



C-5区 北壁



A地区溝状遺構

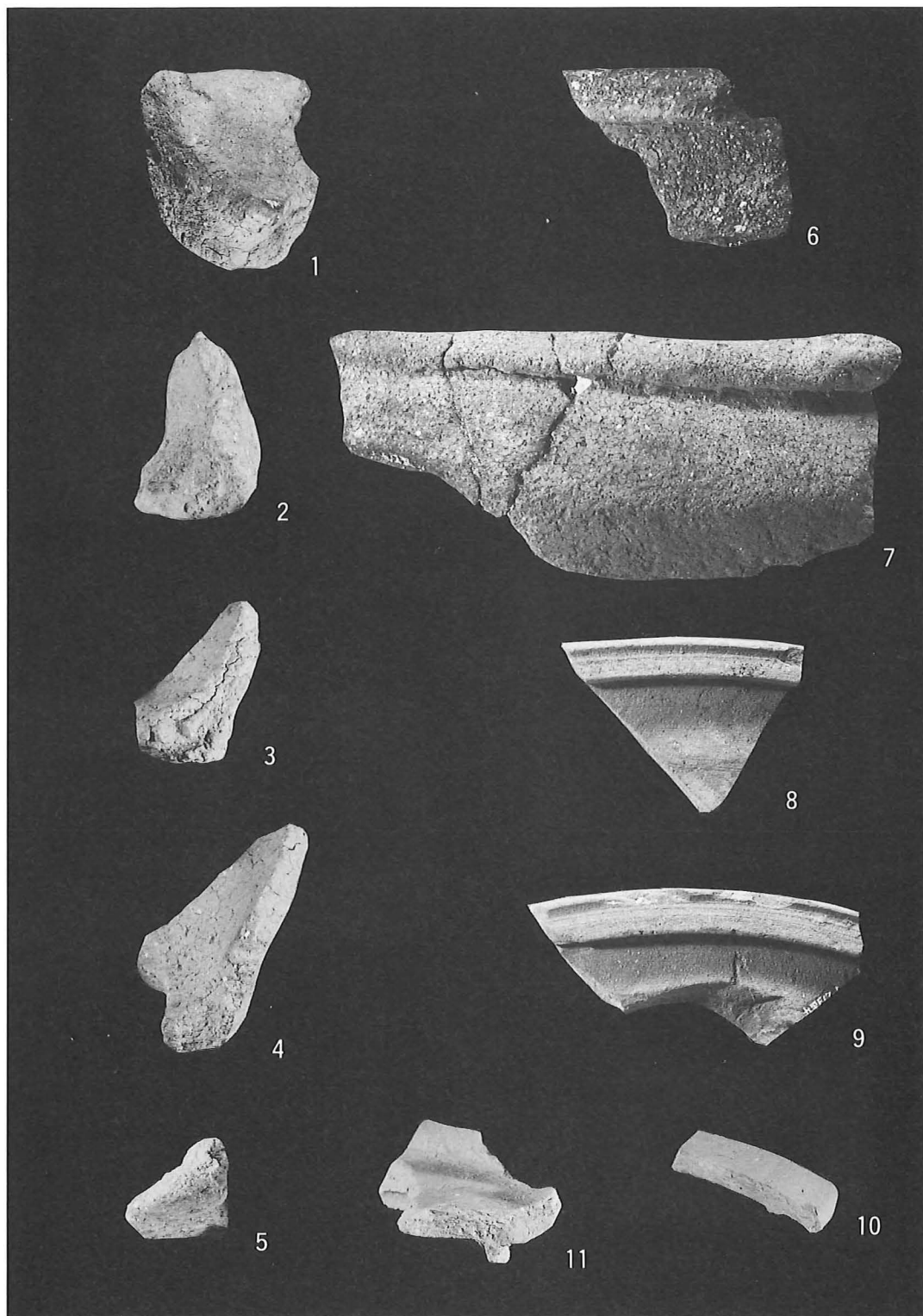


B地区遺構





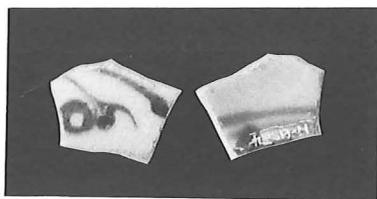
C地区柱穴状遺構



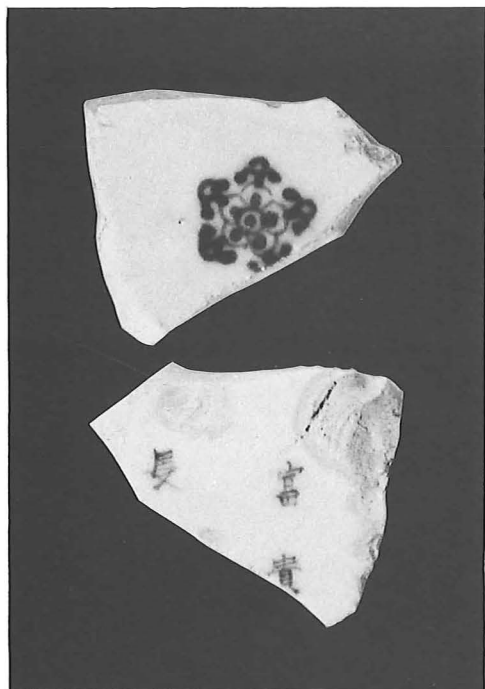
出土土器



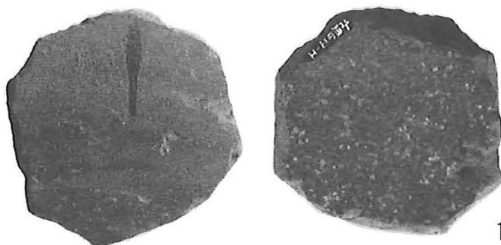
12



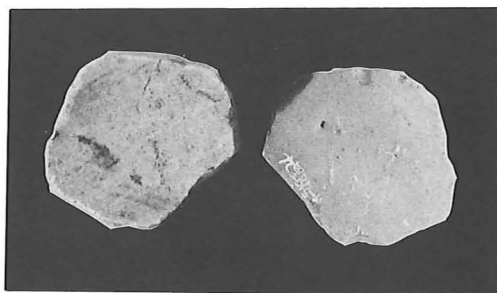
13



14



15

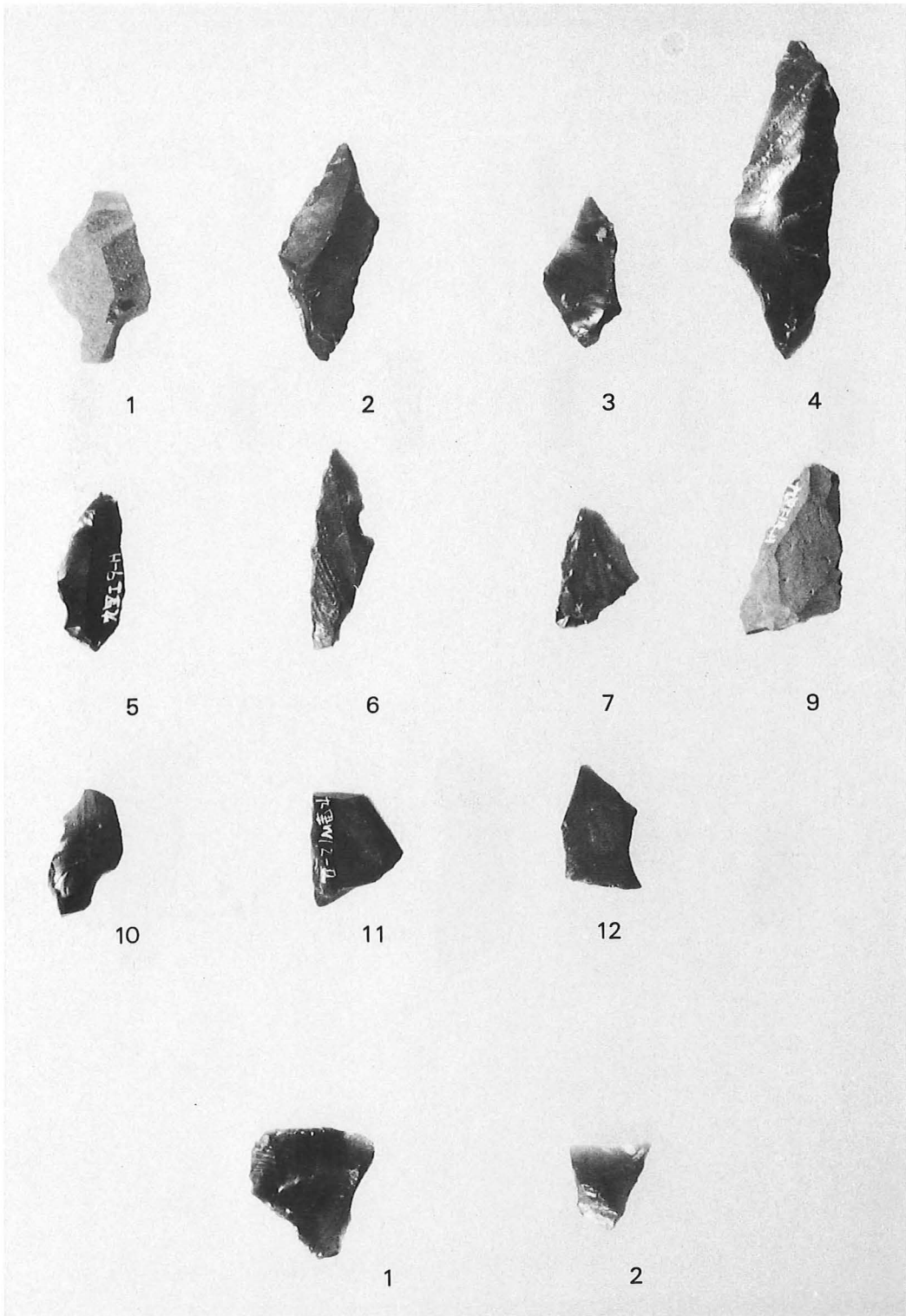


16

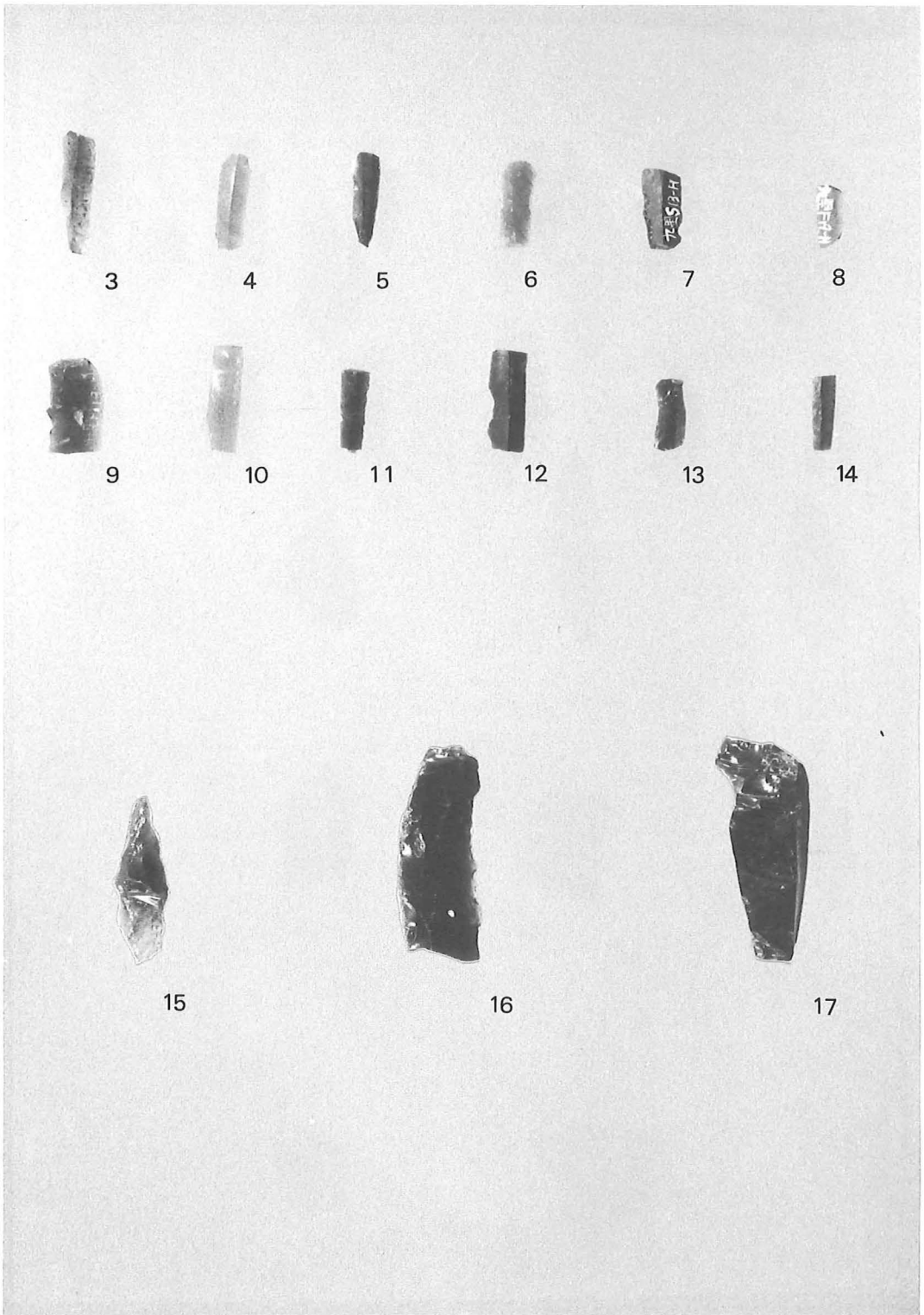


17

出土土器



ナイフ形石器, 台形石器



細石刃・石錐・彫器・楔形石器

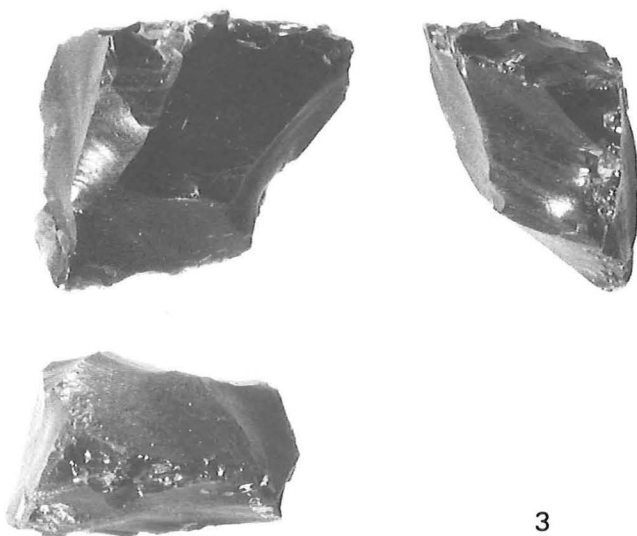


1



2

石 核



3

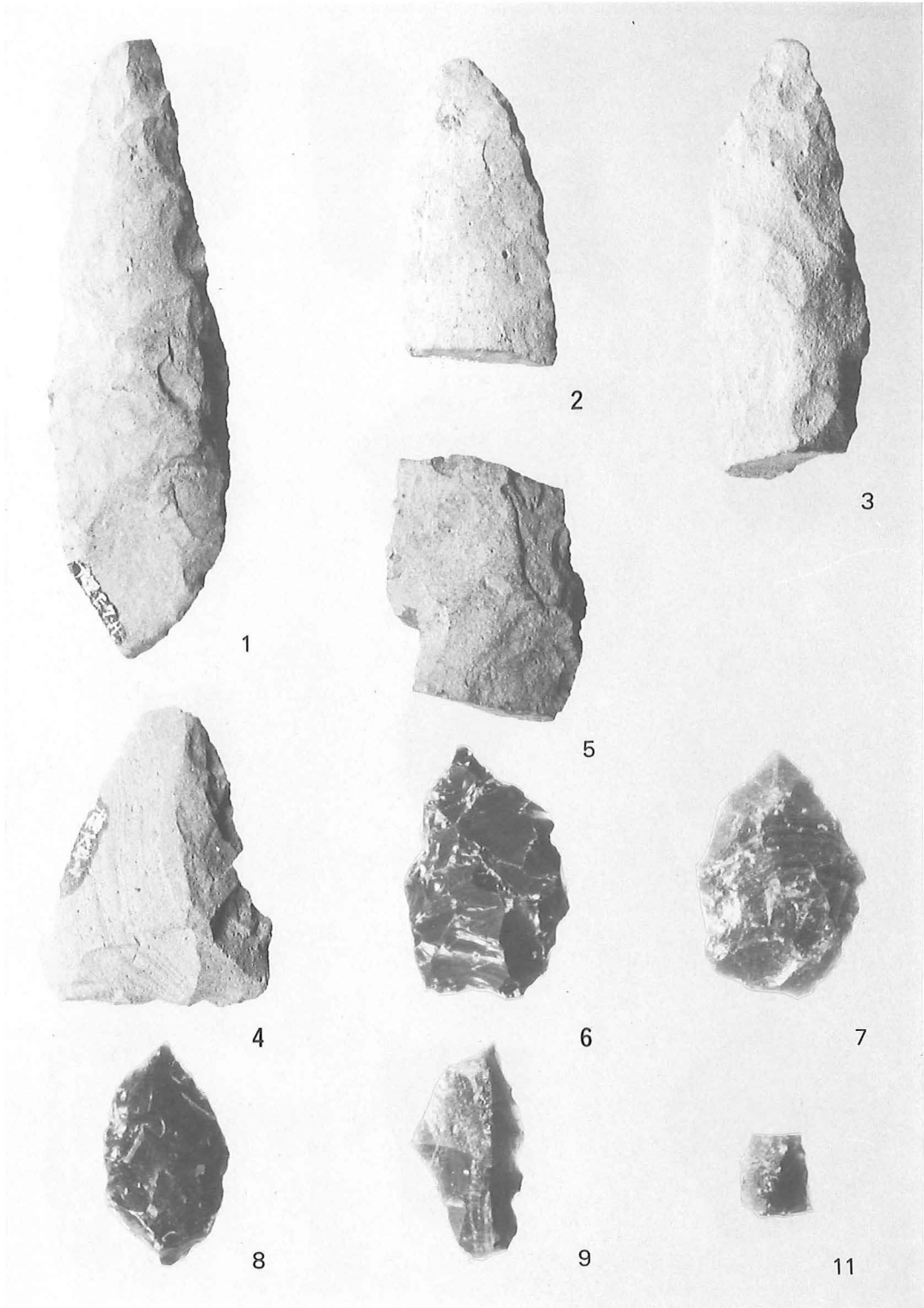


5



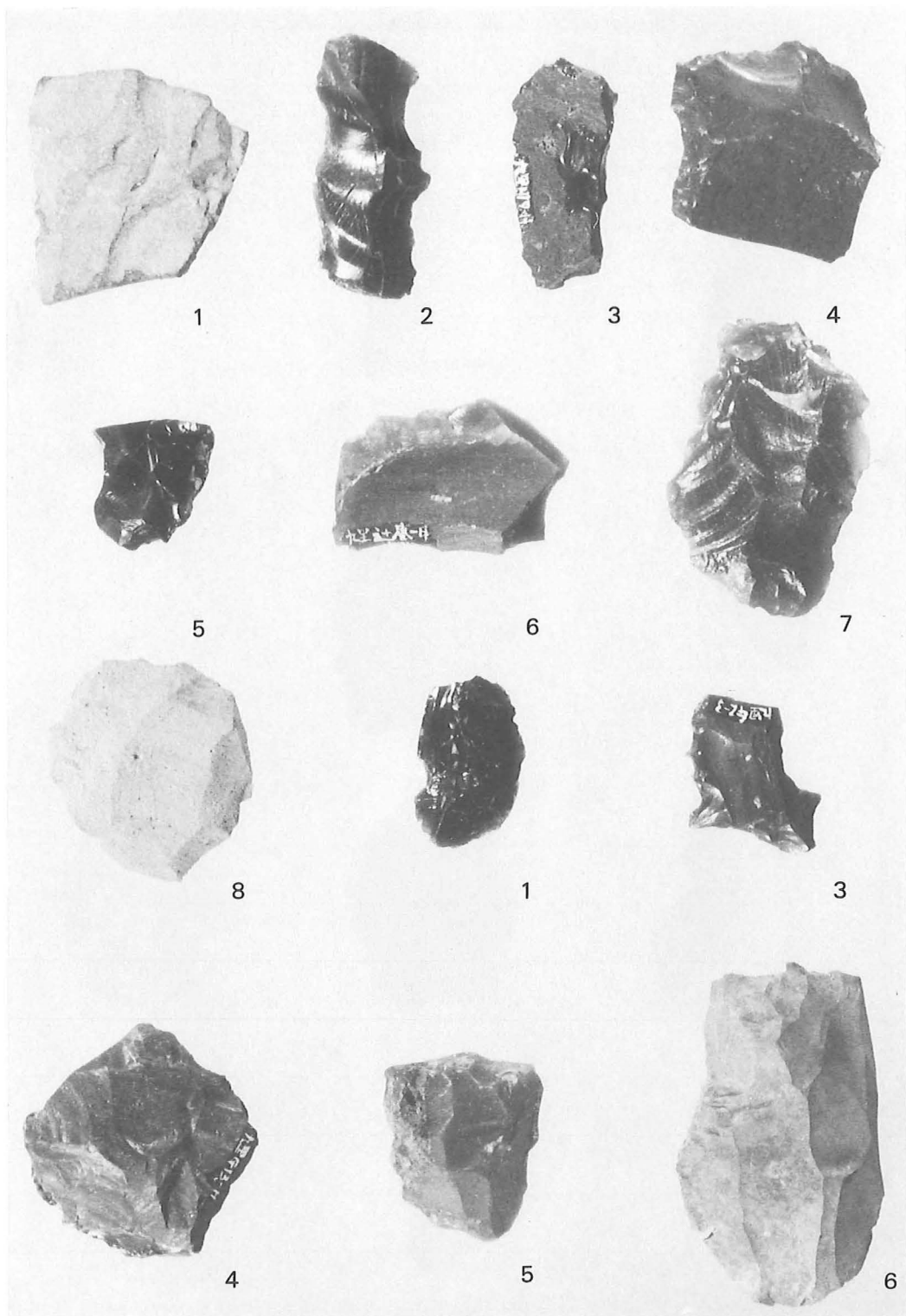
4

石 核

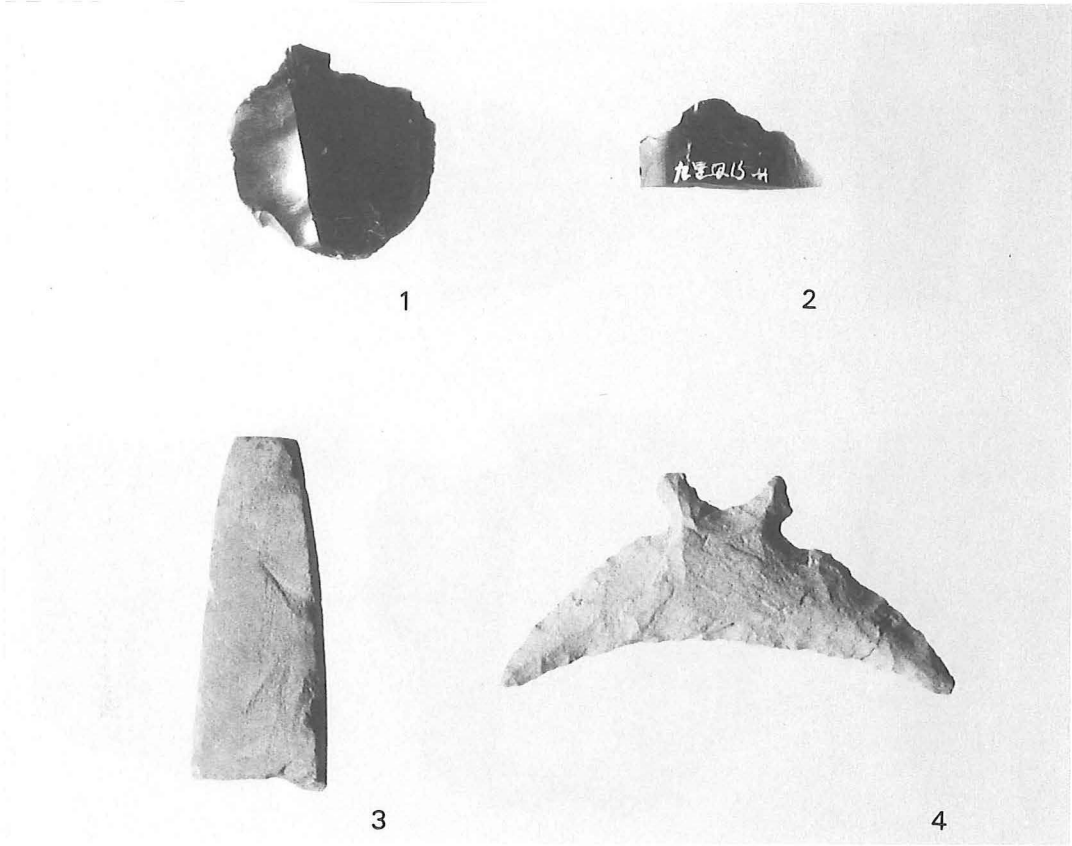


尖 頭 器

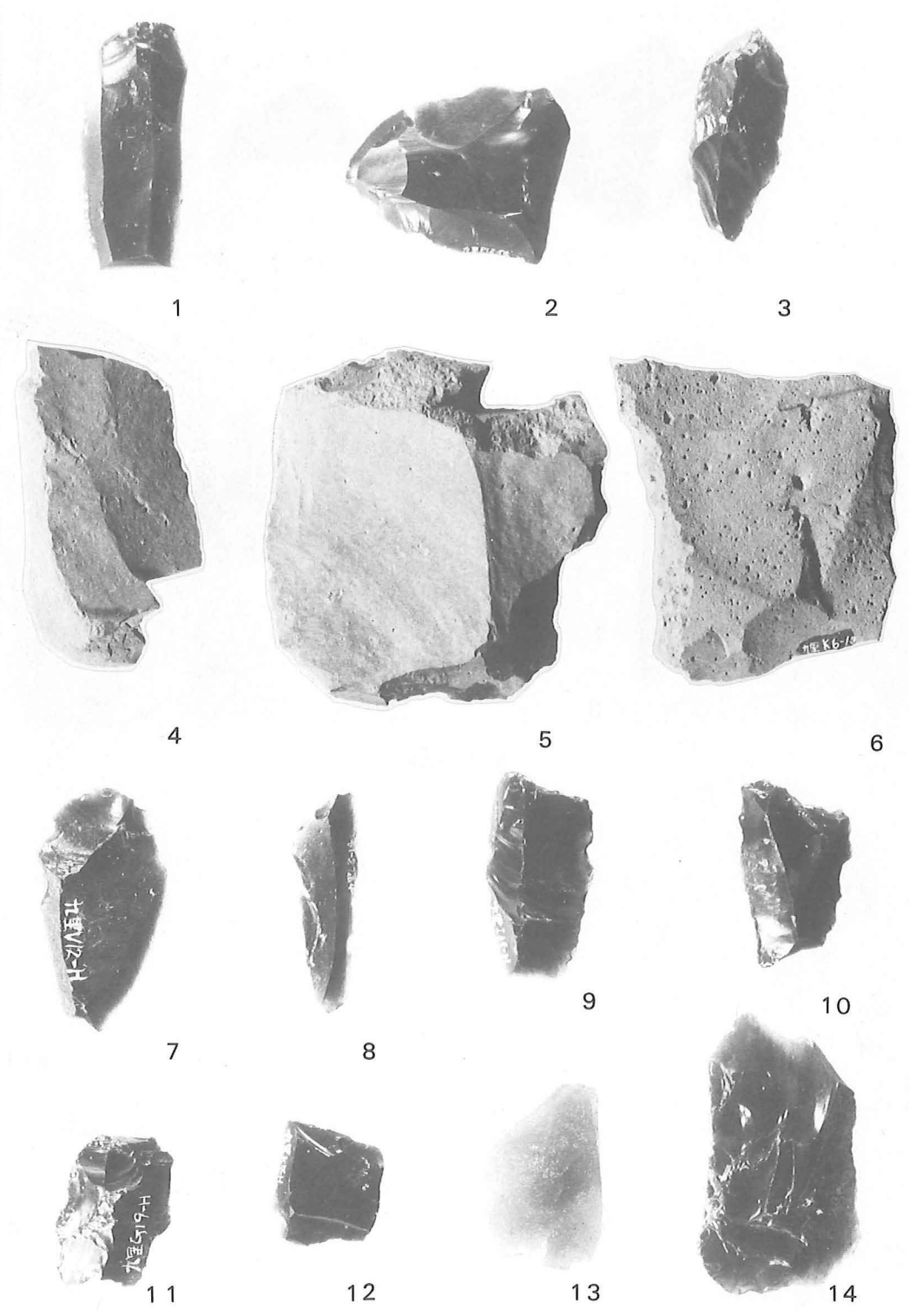




スクレイパー



その他の石器



使用痕のある剥片



15



16



17



18



19



20



21



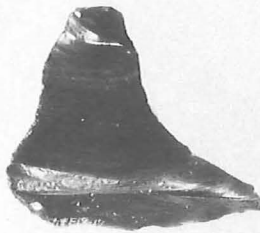
22



23



24

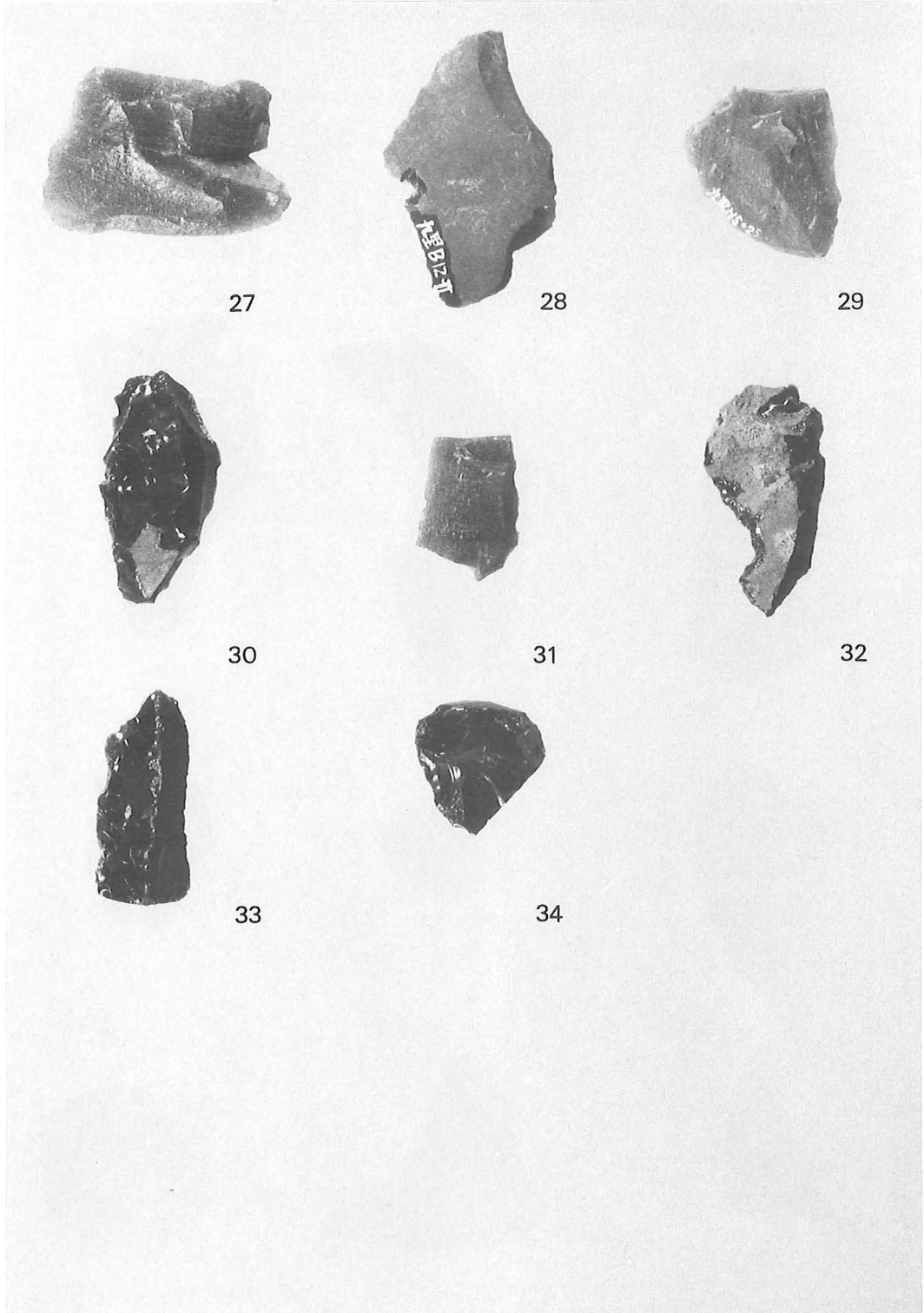


25

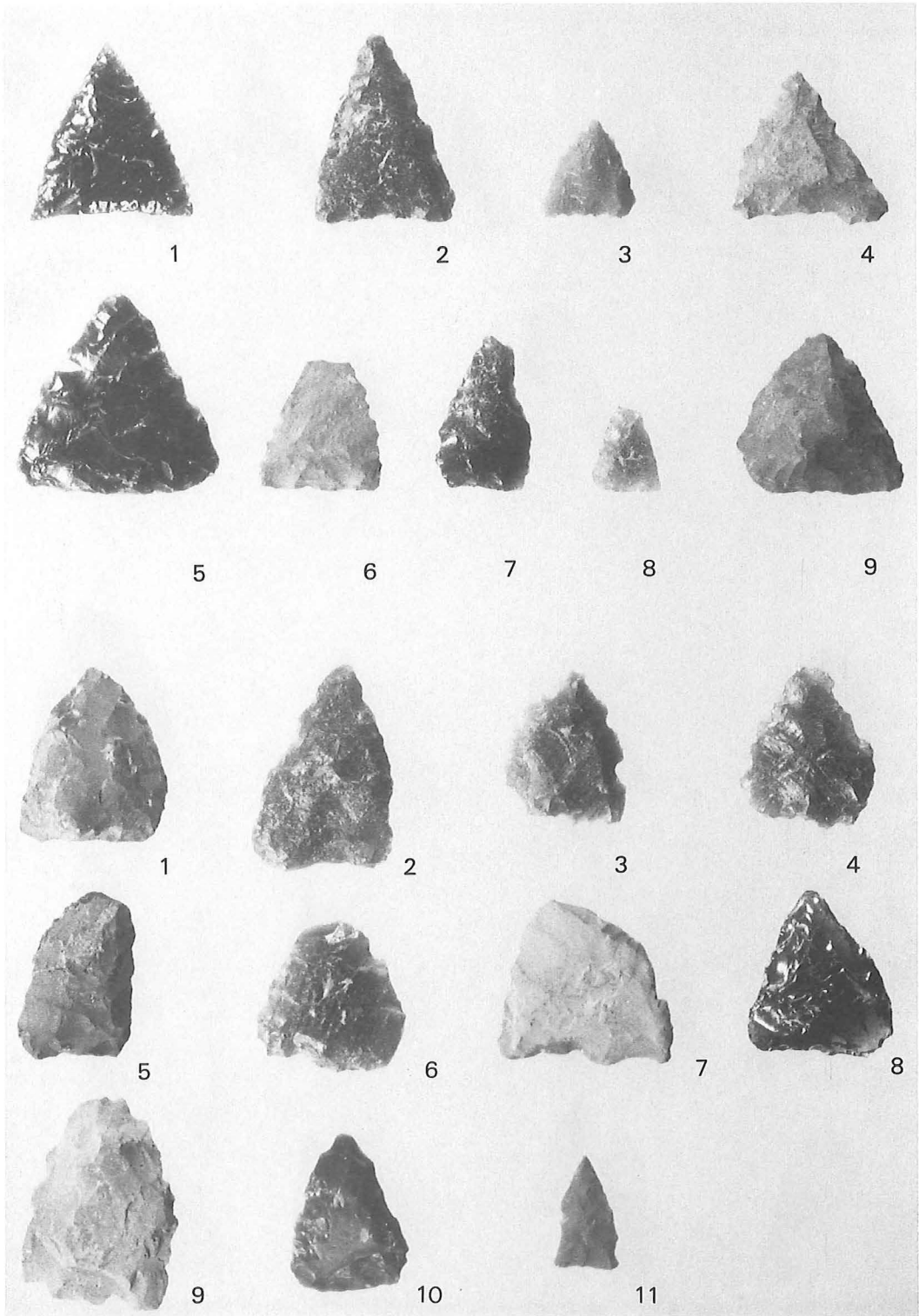


26

使用痕のある剥片



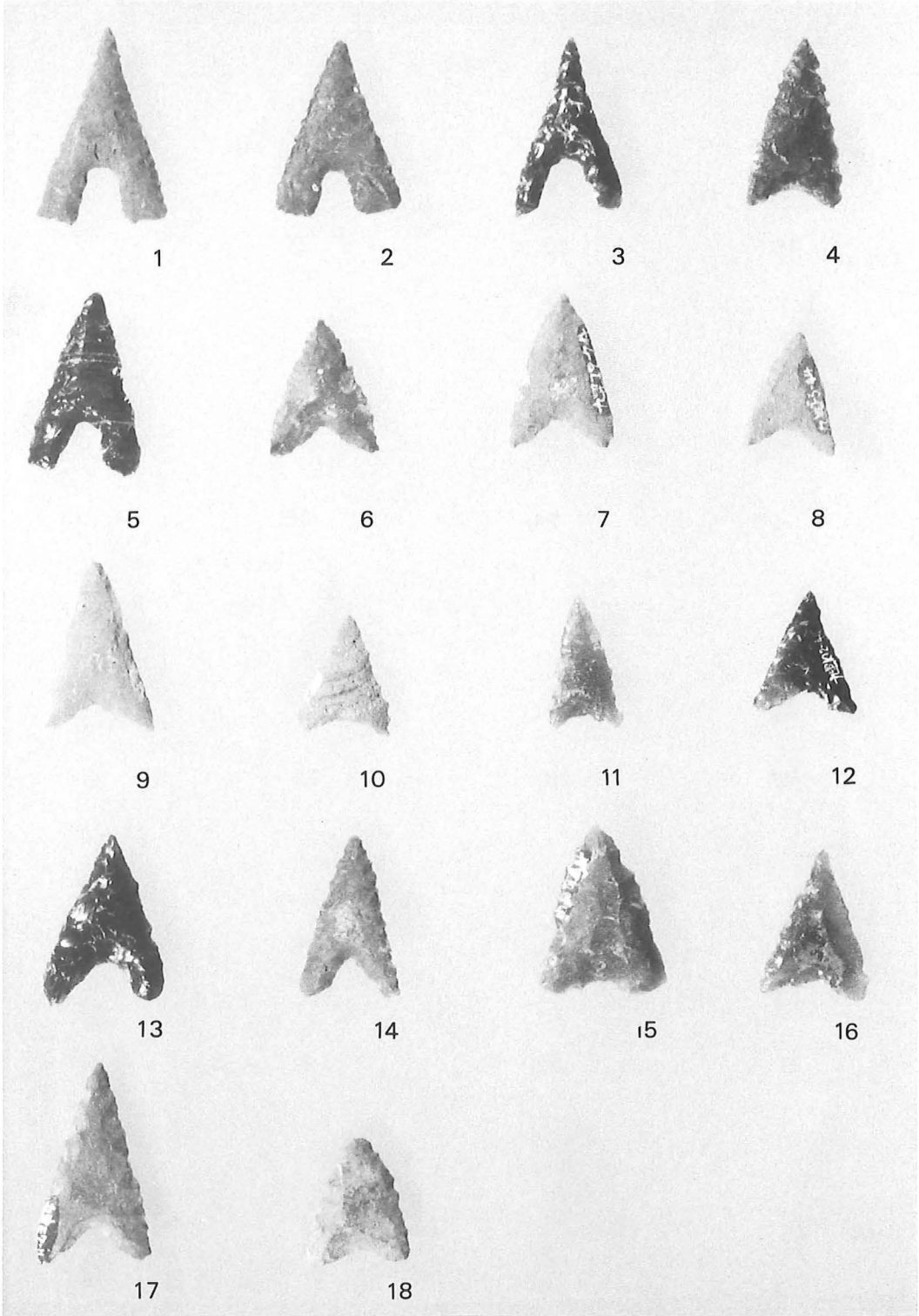
使用痕のある剥片



石鏃 I a, I b 類

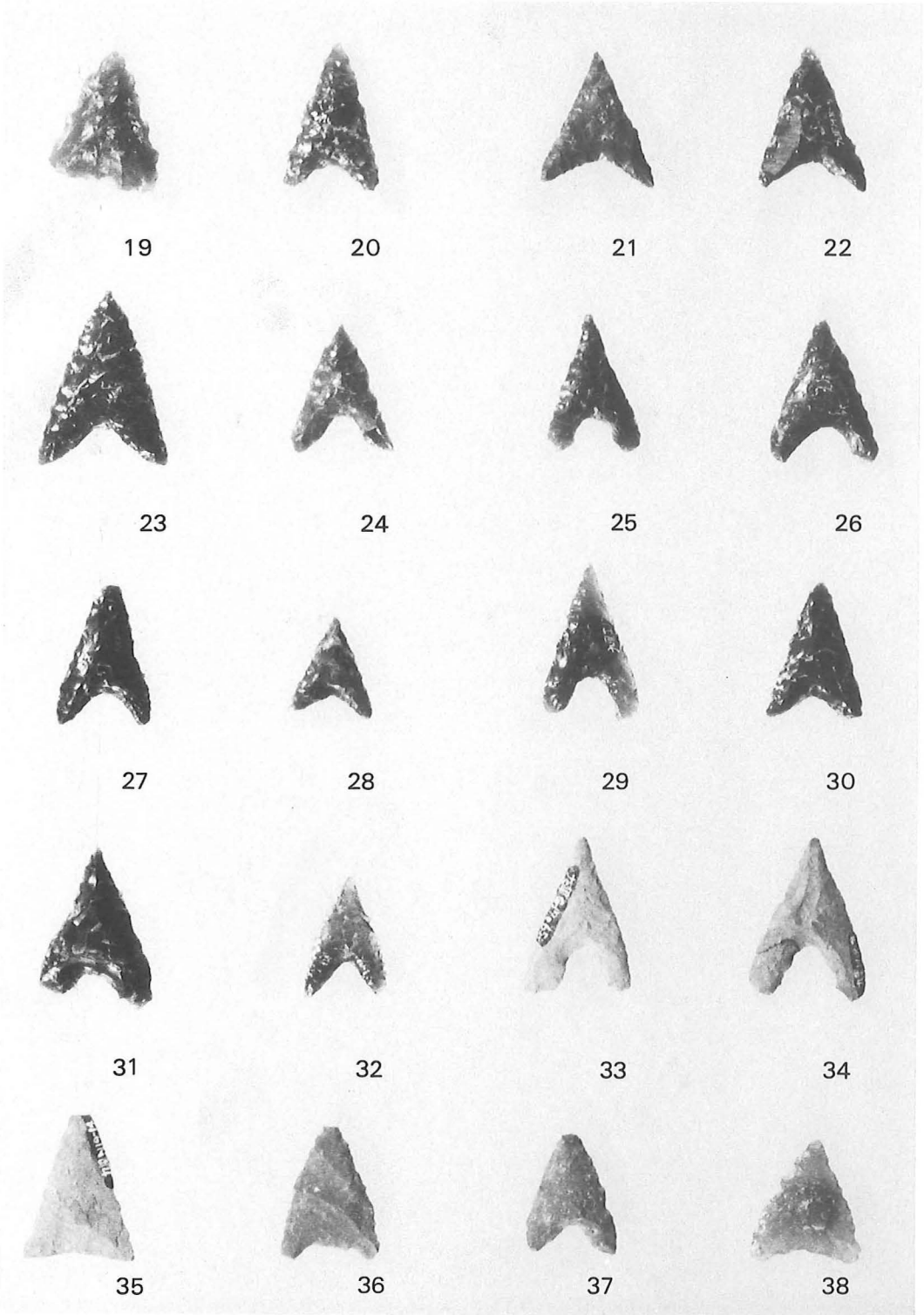


石鏃Ⅱ a、Ⅱ b類

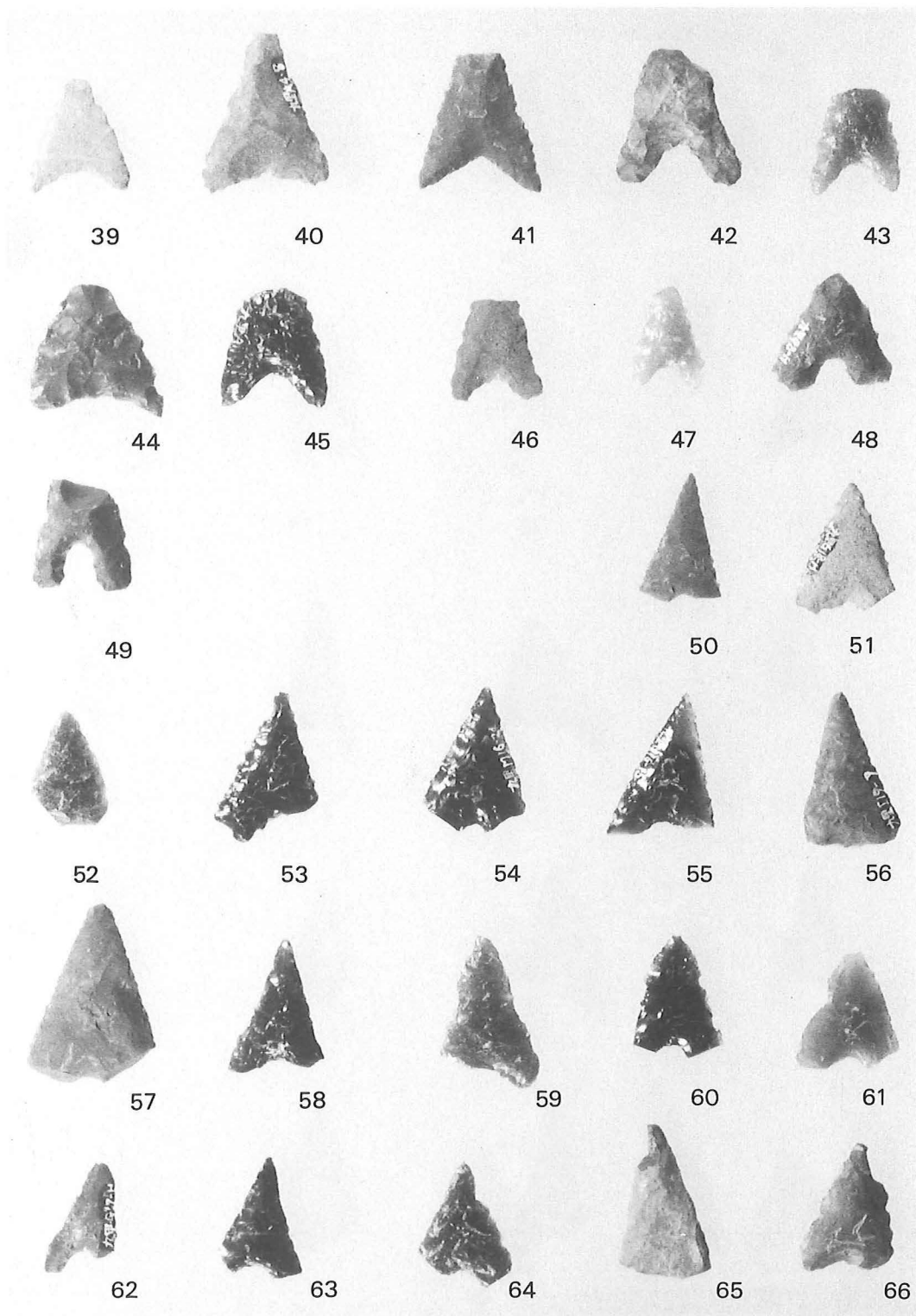


石鏃 II c 類

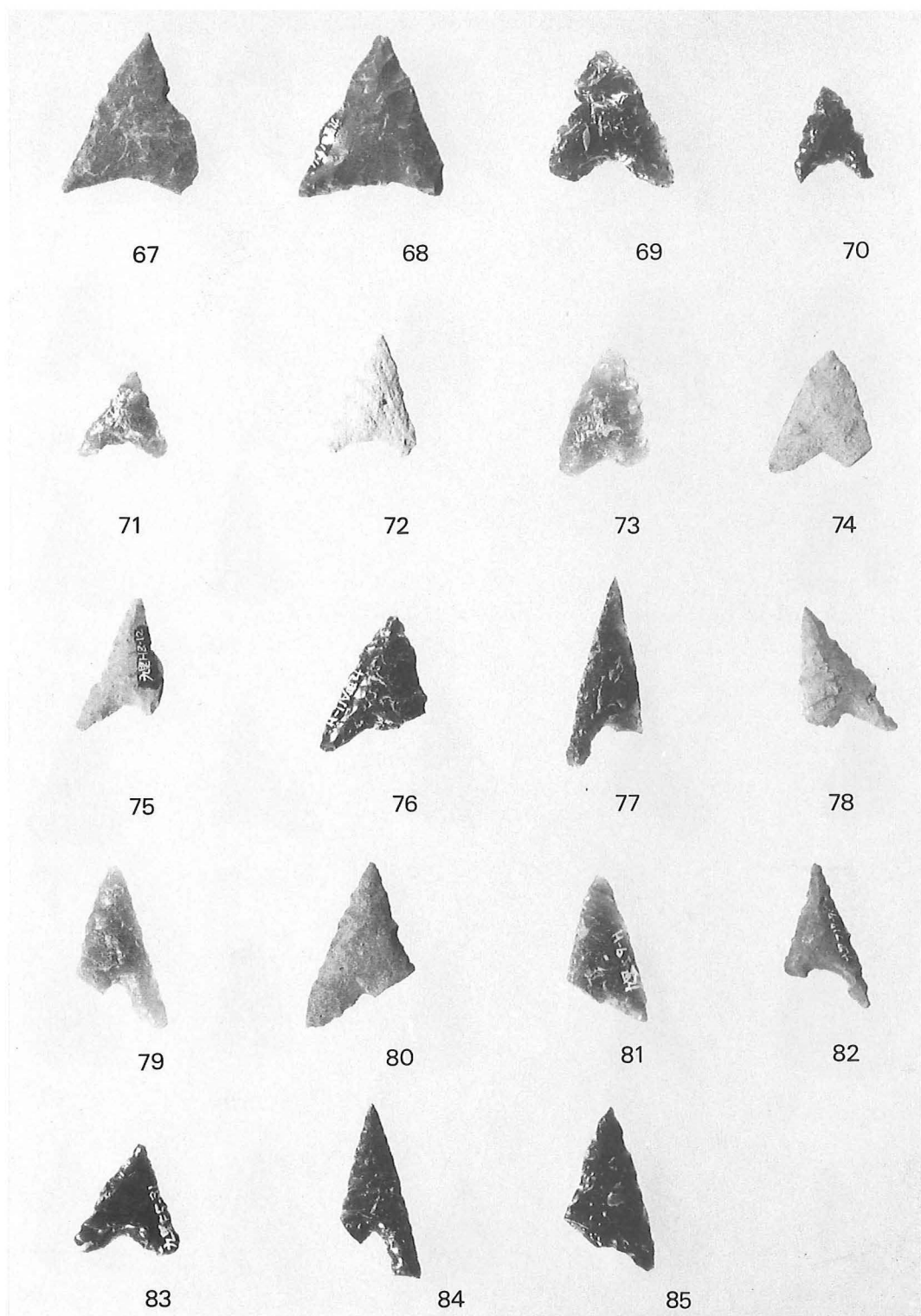




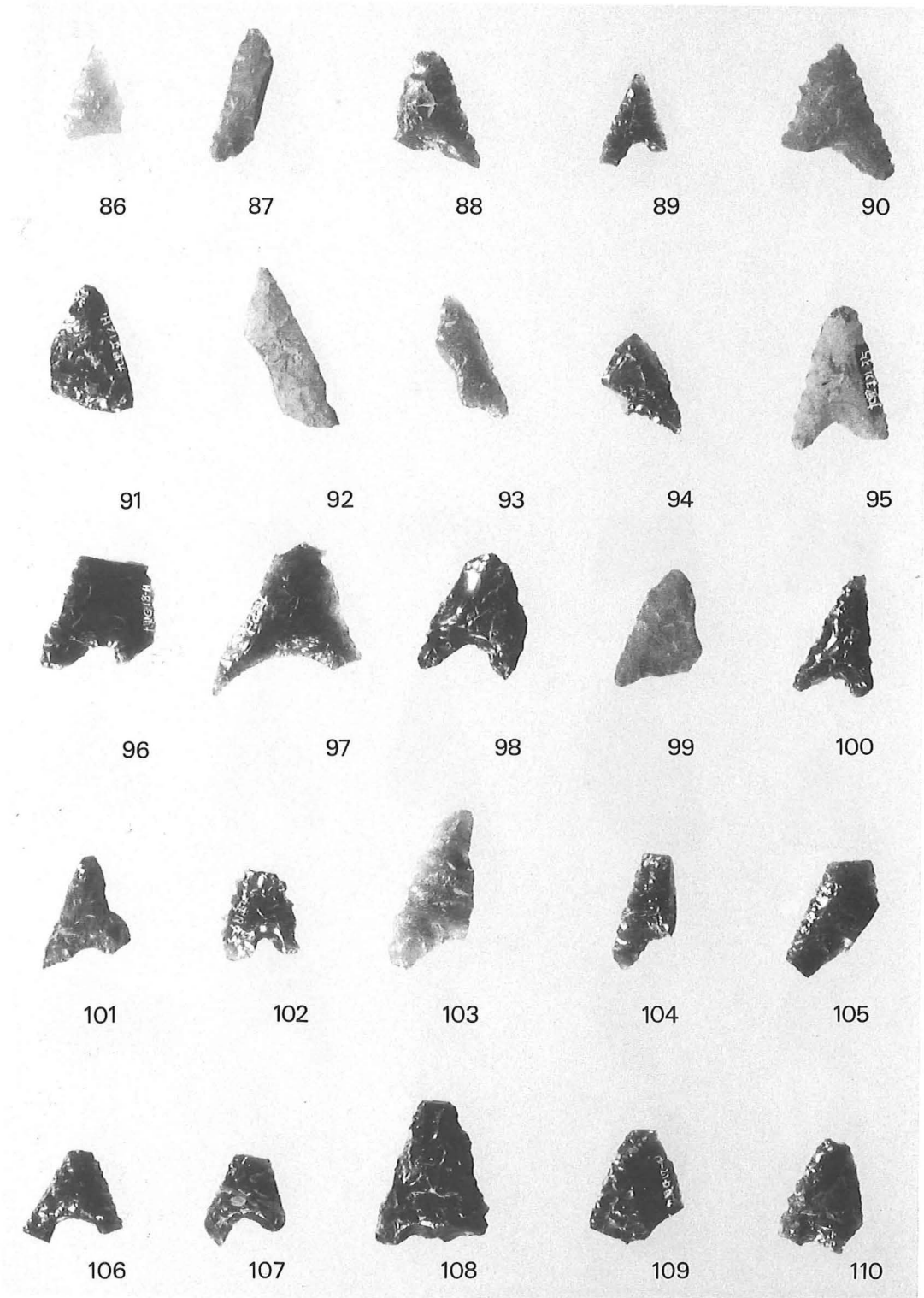
石鏃Ⅱc類



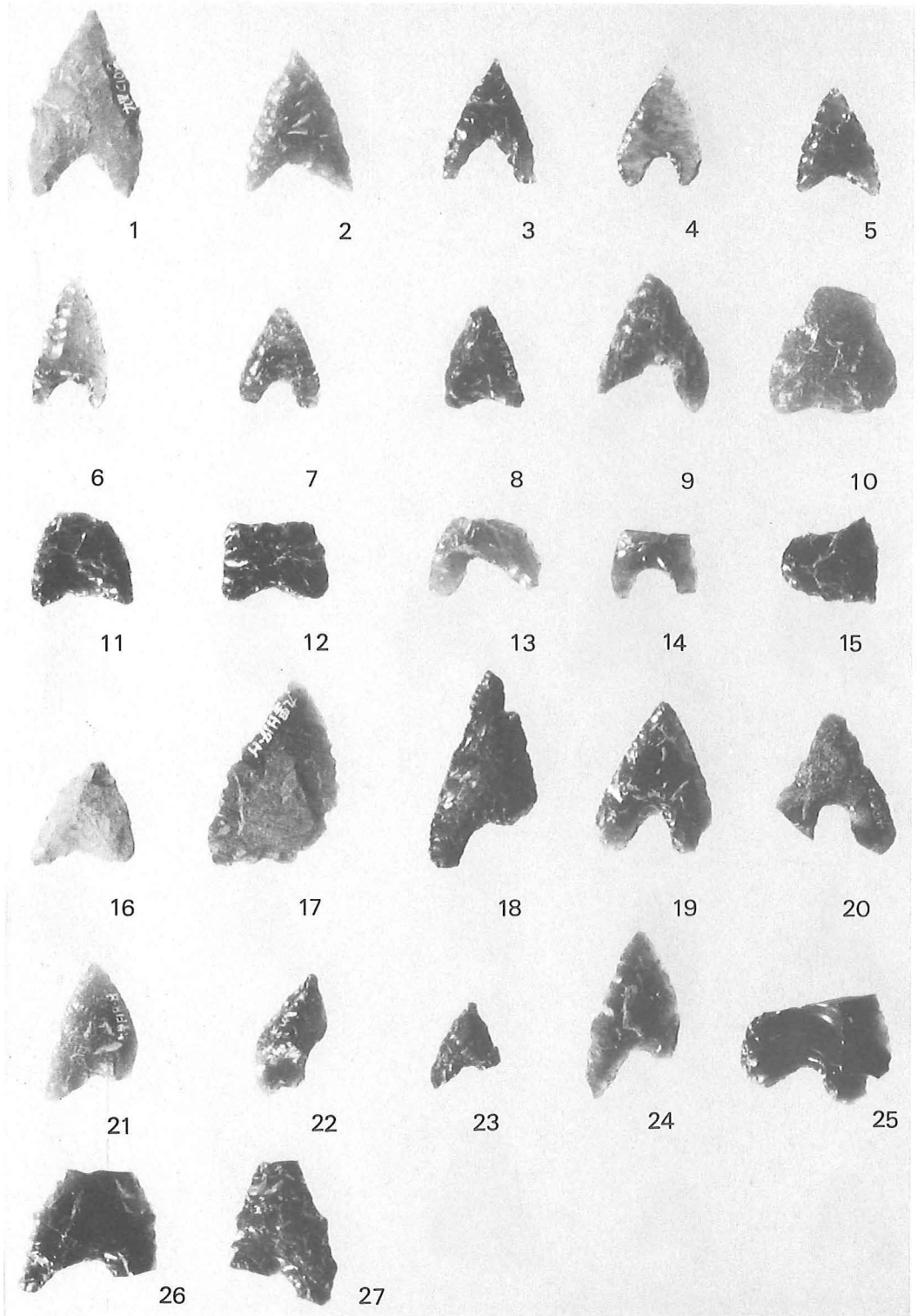
石鏃Ⅱc類



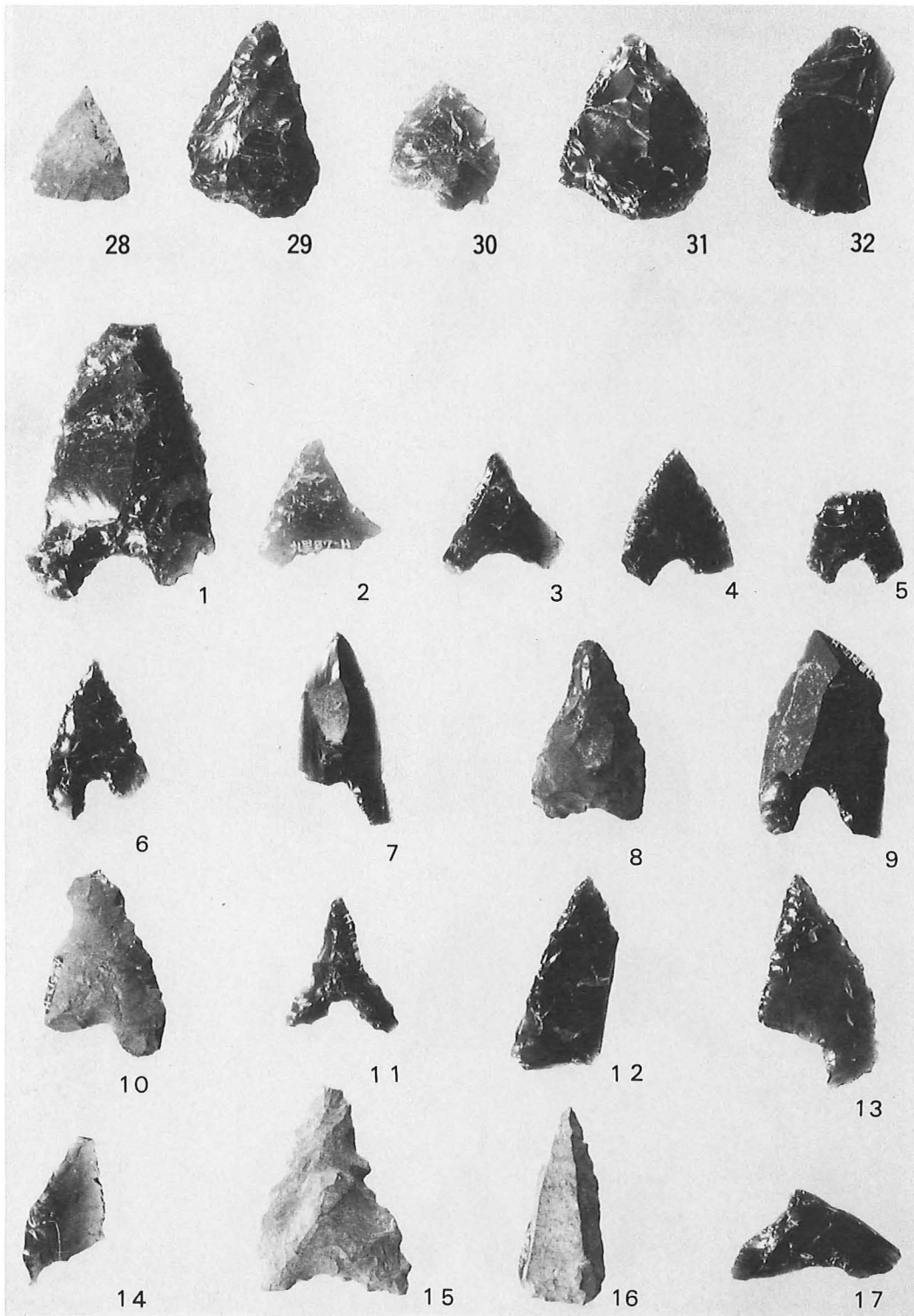
石鏃Ⅱc類



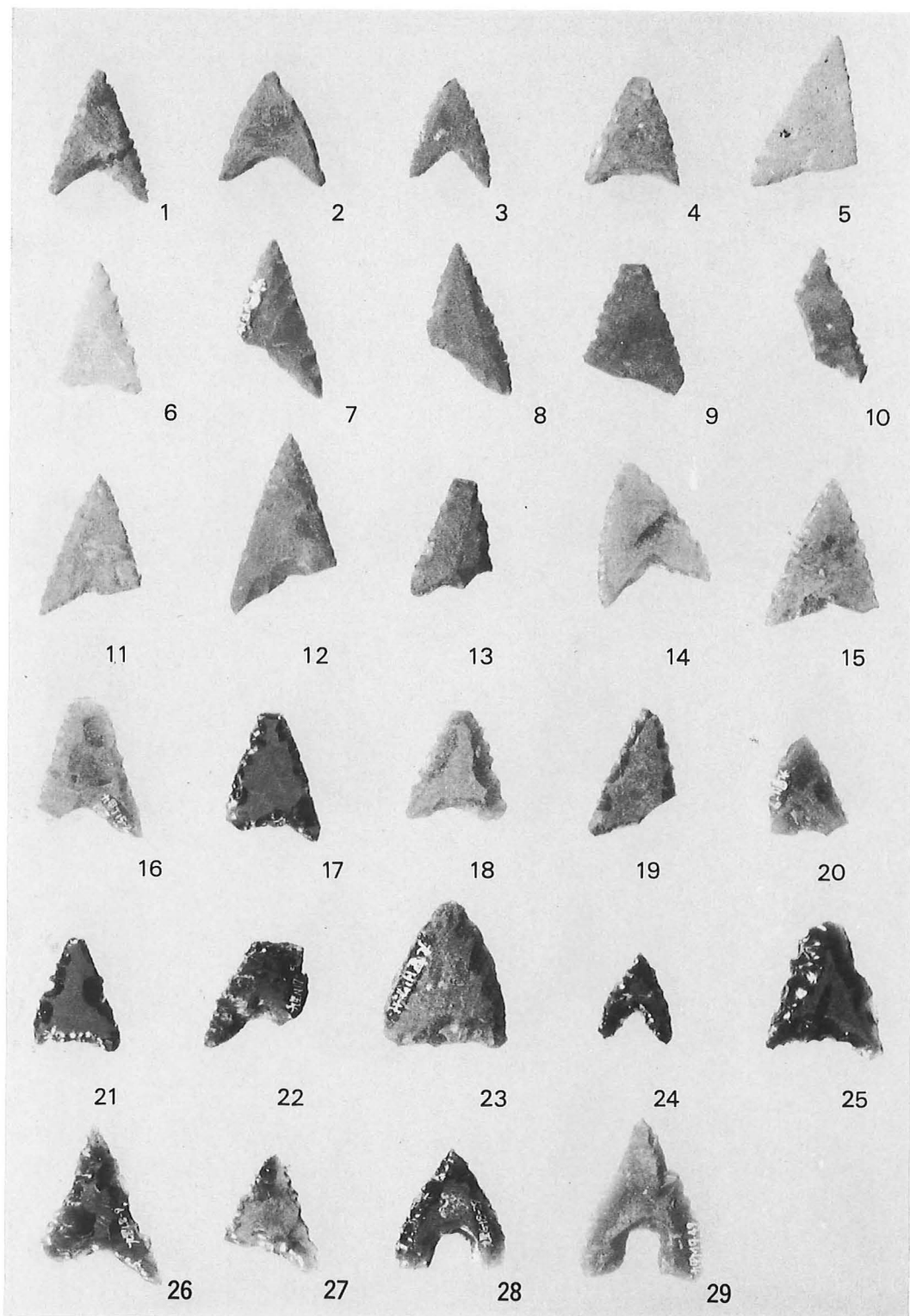
石鏃Ⅱc類



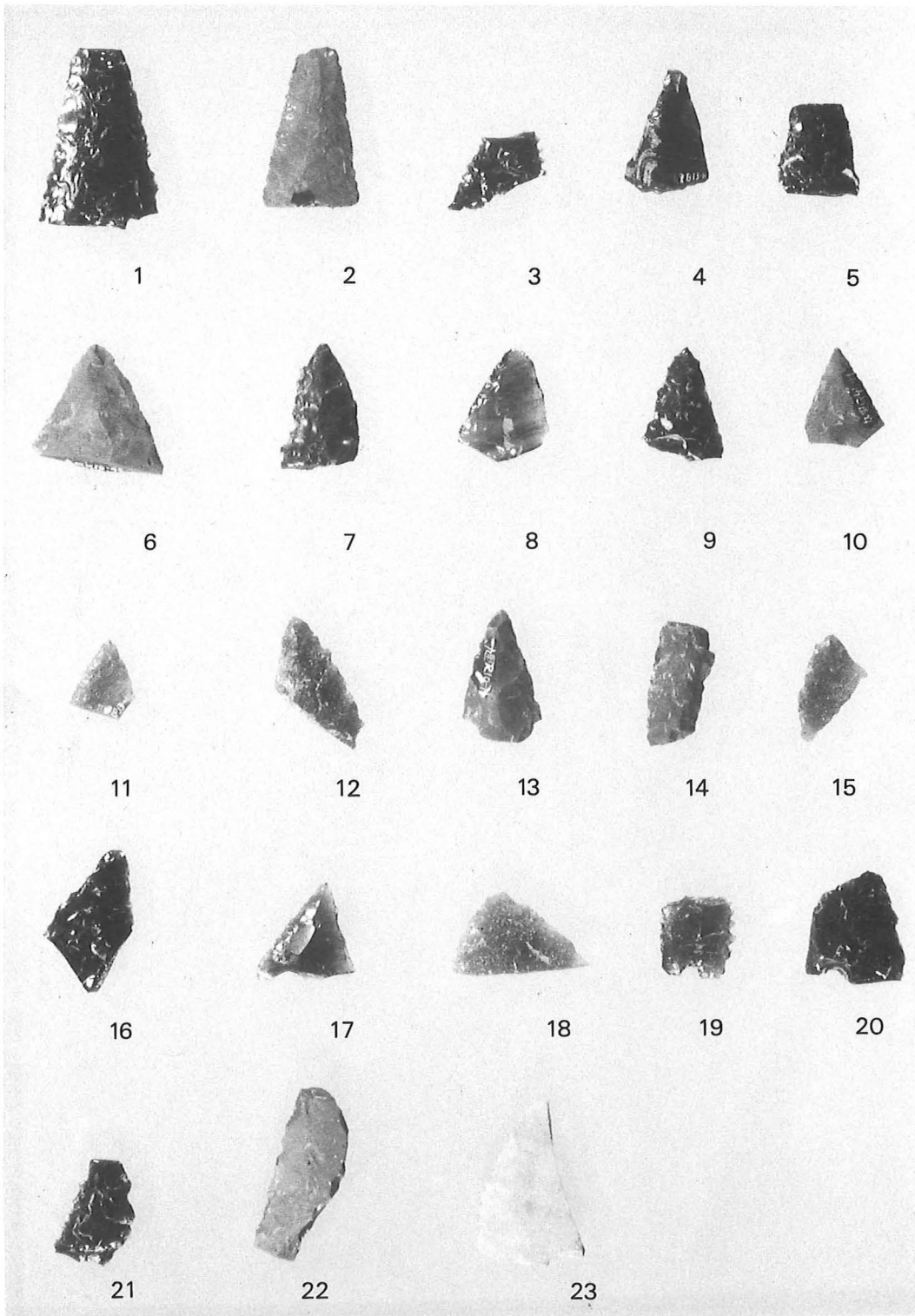
石鏃 II d類



石鏃Ⅲ、Ⅳ類



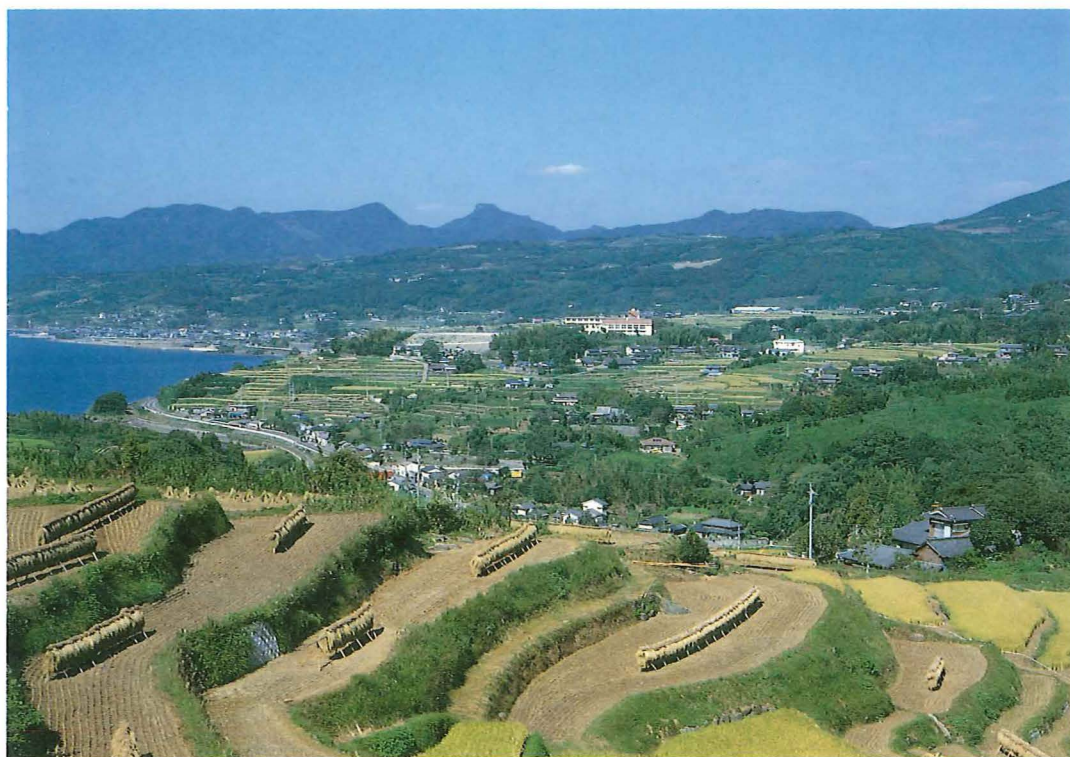
石鏃V類



型式不明石鏃



### 3. 大久保遺跡



## 本文目次

I 立地と環境 .....	347
1. 地理的位置と周辺の地形 .....	347
2. 歴史的環境 .....	347
II 調査 .....	350
1. 調査の概要 .....	350
2. 土層 .....	352
3. 遺構 .....	355
4. 遺物出土状況 .....	355
5. 遺物 .....	360
① 遺物の概要 .....	360
② 石器 .....	360
③ 土器 .....	379
III まとめ .....	386

## 表目次

Tab. 1 大久保遺跡出土石器計測表 (1) .....	380
Tab. 2 大久保遺跡出土石器計測表 (2) .....	381
Tab. 3 大久保遺跡出土石器計測表 (3) .....	382
Tab. 4 大久保遺跡出土石器計測表 (4) .....	383
Tab. 5 大久保遺跡出土石器計測表 (5) .....	384
Tab. 6 大久保遺跡出土石器計測表 (6) .....	385

## 挿 図 目 次

Fig. 1	大久保遺跡周辺の地形と遺跡地図 (1/25,000)	348
Fig. 2	周辺の地形と調査区域図	351
Fig. 3	土層図の位置	352
Fig. 4	土層実測図	353・354
Fig. 5	遺物出土状況図 (ナイフ形石器)	356
Fig. 6	遺物出土状況図 (ポイント)	356
Fig. 7	遺物出土状況図 (剥片)	357
Fig. 8	遺物出土状況図 (スクレーパー)	357
Fig. 9	遺物出土状況図 (通有の石鏃)	358
Fig. 10	遺物出土状況図 (特異な形の石鏃)	358
Fig. 11	遺物出土状況図 (全部の石鏃)	359
Fig. 12	遺物出土状況図 (各種の石器)	359
Fig. 13	石器実測図 (1)	361
Fig. 14	石器実測図 (2)	363
Fig. 15	石器実測図 (3)	364
Fig. 16	石器実測図 (4)	365
Fig. 17	石器実測図 (5)	366
Fig. 18	石器実測図 (6)	367
Fig. 19	石器実測図 (7)	369
Fig. 20	石器実測図 (8)	371
Fig. 21	石器実測図 (9)	372
Fig. 22	石器実測図 (10)	373
Fig. 23	石器実測図 (11)	375
Fig. 24	石器実測図 (12)	376
Fig. 25	石器実測図 (13)	377
Fig. 26	石器実測図 (14)	378
Fig. 27	土器実測図	379
Fig. 28	石器参考図	387

## 図 版 目 次

PL. 1	大久保遺跡遠景	393
PL. 2	大久保遺跡近景	394
PL. 3	大久保遺跡近景	395
PL. 4	調査風景	396
PL. 5	土層の状況 (1)	397
PL. 6	土層の状況 (2)	398
PL. 7	土層の状況 (3)	399
PL. 8	土層の状況 (4)	400
PL. 9	遺物出土状況	401
PL. 10	石器 (番号はFig. 13の番号に一致する)	402
PL. 11	石器 (番号はFig. 13の番号に一致する)	403
PL. 12	石器 (番号はFig. 14の番号に一致する)	404
PL. 13	石器 (番号はFig. 14の番号に一致する)	405
PL. 14	石器 (番号はFig. 15の番号に一致する)	406
PL. 15	石器 (番号はFig. 16の番号に一致する)	407
PL. 16	石器 (番号はFig. 17の番号に一致する)	408
PL. 17	石器 (番号はFig. 18の番号に一致する)	409
PL. 18	石器 (番号はFig. 18の番号に一致する)	410
PL. 19	石器 (番号はFig. 19の番号に一致する)	411
PL. 20	石器 (番号はFig. 20の番号に一致する)	412
PL. 21	石器 (番号はFig. 21の番号に一致する)	413
PL. 22	石器 (番号はFig. 22の番号に一致する)	414
PL. 23	石器 (番号はFig. 23の番号に一致する)	415
PL. 24	石器 (番号はFig. 24の番号に一致する)	416
PL. 25	石器 (番号はFig. 25の番号に一致する)	417
PL. 26	石器 (番号はFig. 26の番号に一致する)	418
PL. 27	土器 (番号はFig. 27の番号に一致する)	419

## I 立地と環境

### 1. 地理的位置と周辺の地形

大久保遺跡は東彼杵郡東彼杵町駄地郷にある。県教育委員会では高速道路の中心杭が打たれたあと、昭和58年に大村インター・チェンジと佐賀県境までの間の、遺跡の詳細な分布調査を実施した。その際、現地の畑等に黒曜石の剥片等が散布しているのが発見され、調査の必要が指摘されていた遺跡である。

本遺跡は長崎県本土部のほぼ中央、大村湾の東岸で多良山系から四方に広がる丘陵の西北西側に位置し、海を見おろす標高55m～65mの場所にある。現在の海岸からは500mほどの距離である。遺跡から眺めると、南方には整った形の武留路山が間近に見え、南西から北西にかけては大村湾とそれを抱き込むように西彼杵半島の山々が続いている。また北方には千綿や彼杵の宿、さらに川棚の町が望まれ、大崎半島とその向こうの佐世保方面の山も見えている。遺跡の乗る丘陵は、小さな河川によっての開析が進み複雑な谷が形作られている。千綿川流域には竜頭泉と呼ばれる溪谷が発達し、涼を求める人々によって夏場は賑わっている。また江ノ串川にも弘法溪谷や大樽滝・小樽滝などがあり、沖積平地は彼杵川流域と千綿川河口付近の大層限られた存在となっている。

調査前の遺跡の状況は、植林された山林と畑地で、竹や雑木の茂った場所もあった。南西に向けて伸びた丘陵の尾根上と、小さい谷に面して緩く傾いた斜面であるが、植林された部分は段々に石垣を築いて整地されていた。また、調査予定地の最高所付近には巨石が散在している状況であった。

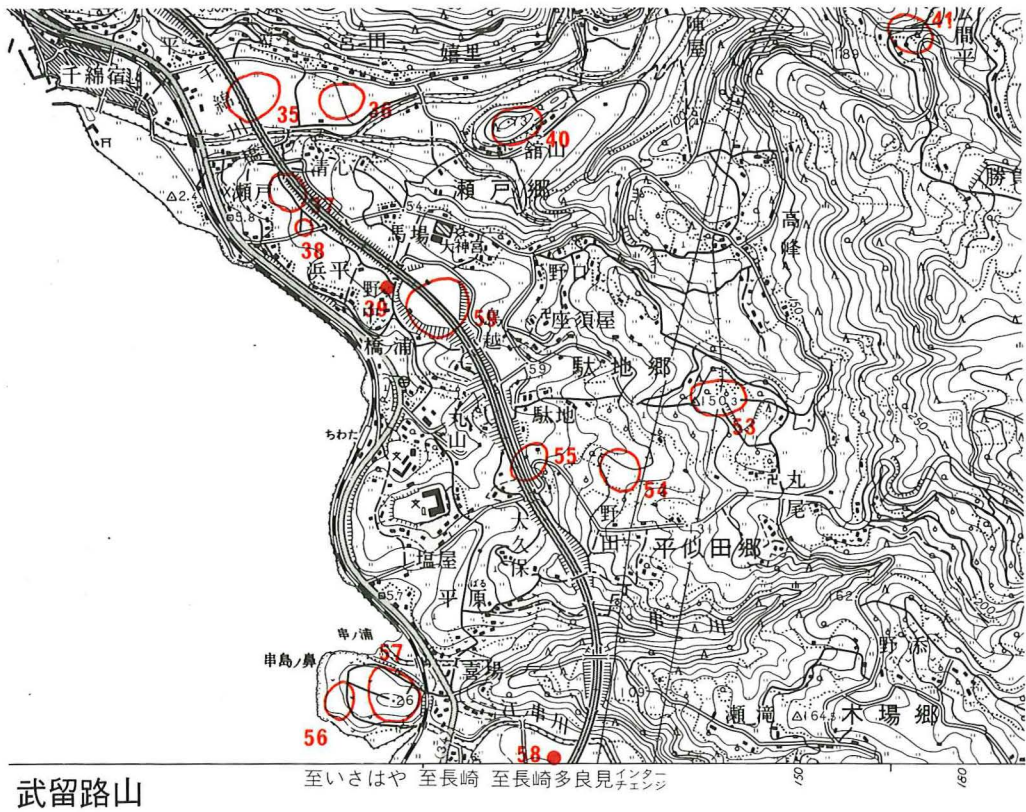
### 2. 歴史的環境

東彼杵町では、昭和58年の秋に県の遺跡試周知事業の一環としての分布調査が実施された。その結果をまとめ、昭和59年の時点で59箇所遺跡が知られていた。町内での遺跡の在り方については前の『周辺の遺跡』の項に記されているので、ここではおおまかな傾向と近辺の遺跡について述べておきたい。なお、ここで使用する遺跡の番号は『長崎県遺跡地図』（長崎県文化財調査報告書第87集）によっている。

町内での遺跡の在り方について見てみると、彼杵川以北では町全体での遺跡の一割ほどが知られているにすぎなかったが、近年彼杵川北岸の微高地で生活址や墓地在り発見され、近辺の古墳や古墳群との関係など興味のある問題を提起している。

また一つの集まりとして、蕪郷・中岳郷の標高300m～400mの高さに10遺跡が知られている。これは、その付近に集中している溜め池での観察が可能であることによるものであろう。他の多くの遺跡は大村湾に面した丘陵先端に近い部分や、彼杵川の南側の沖積平地などに立地している。

東彼杵町の遺跡は、黒曜石割片等の散布によって先土器時代・縄文時代のものと確認されているものが全体の7割を超える多さである。そして弥生時代の遺跡は全く知られていない状況であった。しかし、近年の九州横断自動車道建設に伴う発掘調査で宮田遺跡、圃場整備事業に伴う発掘調査で白井川遺跡や岡遺跡などが知られるに至った。これらの遺跡で良好な弥生時代の遺構・遺物が出土し、この地方の弥生時代の遺跡の在り方について、新しい知見を加えることとなった。さらに古墳時代になると、彼杵川南岸の沖積平地に高塚式古墳の築造が始まり、「ひさご塚」古墳などの前方後円墳が残っている。やや上流には彼杵川古墳群があり、現在4基が残っている。この古墳群は、長崎県の本土部では数少ない高塚式古墳群で、大村湾沿岸ではここと大村市の玖島崎古墳群・西彼杵郡時津町の前島古墳群に限られる。中世の遺跡としては、城跡のほか寺院跡が知られている。また14世紀や15世紀の年号が刻まれた五輪塔など



武留路山

- |                 |          |               |
|-----------------|----------|---------------|
| 35 宮田A遺跡        | 40 小峯城跡  | 56 串島古墳       |
| 36 宮田B遺跡        | 41 広間平遺跡 | 57 串島遺跡・串ノ島城跡 |
| 37 小蘭城跡         | 53 八幡遺跡  | 58 里郷積石塚      |
| 38 瀬戸古墳         | 54 野田遺跡  | 59 野中遺跡       |
| 39 東彼杵町のキリシタン墓碑 | 55 大久保遺跡 |               |

Fig. 1 大久保遺跡周辺の地形と遺跡地図 (1/25,000)

どの石碑の部分も見つかっている。12世紀から16世紀にかけての遺物が大量に出土した岡遺跡の存在も、近年の発掘調査で知られたものである。

大久保遺跡の近辺にある遺跡について、簡単に紹介しておきたい。

35は宮田A遺跡で、ここも九州横断自動車道の建設に先立って調査された。<sup>註1</sup> 標高3.5mから4.5mの場所で、千綿川の氾濫を幾度となく受けたことも考えられたが、調査の結果、縄文時代晩期・弥生時代・中世の遺物が出土している。柱穴状のものや集石土壙、不定形の土壙などもあって、異なった時期の生活面が認められている。ここでは縄文時代晩期の扁平打製石斧が300本以上出土し、注目を引いた。36は宮田B遺跡で、宮田A遺跡の上流にある散布地であるが、その内容については詳細にはわかっていない。37の小藺城は大村藩の『郷村記』の千綿村の項に記述がある。ここも九州横断自動車道の建設に伴って調査が実施され、その結果については、本報告書中の「小藺城跡」の項に詳しい報告がある。38の瀬戸古墳については、正確なことは不明である。高塚式の古墳ではなく、かつて農道の切り通しの部分に石棺が出土したとのことである。39はキリシタン墓碑で花十字と元和七年の年号が刻まれている。長崎県指定の文化財で「東彼杵町のキリシタン墓碑」と呼ばれている。40は小峯城跡で、これも『郷村記』に、場所や規模についての記述がある。53は八幡遺跡、54は野田遺跡でともに散布地である。黒曜石の剥片等が散在していて、先土器時代から縄文時代にかけての遺跡と考えられる。

55は今回報告の大久保遺跡である。56の串島古墳は、大村湾に伸びた小さな岬の先端近くにある。高塚式の古墳ではなく、石棺が出土していてその棺材が残っている。まだ周辺に石棺が残っている可能性が強い。57は散布地であるが、串ノ島城という城跡でもある。黒曜石などが散布している。南北朝時代の在地領主、江串三郎入道の居城であるとされている。58は里郷積石塚で、江ノ串川の沖積地にある。直径数mの円に近い形をしている。詳細については知られていない。59は遺物包含地の野中遺跡で、黒曜石の剥片や磨製石斧などが出土している。

註1 長崎県教育委員会 『九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書 VI』  
長崎県文化財調査報告書 第93集 1989

## Ⅱ 調 査

### 1. 調査の概要

大久保遺跡は、九州横断自動車道建設に伴う21箇所の調査予定地での、最初の調査地となった。本遺跡の発掘調査は、昭和60年9月2日から開始した。文化課立山分室の器材等を積み込み、午後現場に着いた。当地区の地権者代表の方に挨拶のあと、今回の調査に参加していただく作業員の方々との顔合わせをした。その後器材を下ろし、伐採されていた樹木や竹の片付けや焼却作業を行った。9月3・4日も枯れ枝や竹等の焼却作業を続け、調査区の一部にグリッド用の基準杭を打った。ここでの基準杭は、道路公団によって設けられた道路中心杭STA.94+00とSTA.94+40を結ぶ線を使用して設定した。調査区は5m×5mの大きさのグリッドとすることにして、南から北に1, 2, 3……の番号を、東から西にはA. B. C. ……の記号を付けた。この基準線は磁北から18°西に振れている。

4日の午後、C列の3・5・7の各グリッドの表土剥ぎから作業を始めた。ここでは黒曜石の剥片が若干出始めた状況であった。9月5日には作業員も増え、A—1・E—1グリッドの調査を始めたが、A—1グリッドから大型のナイフ形石器などが出土し始めた。

9月9日の週になり、作業員をさらに増やし、人員を再編成し6班とし、H—3グリッドの調査も始め、7列以北とC列以西のグリッドも設定した。出土遺物として、ポイントやスクレーパーなどがあった。またこの頃、大久保遺跡から南西1kmほどの江ノ串川沿いに里地区の発掘調査事務所を建設中で、水道、電気、電話の取り付け、諸器材の搬入等の作業も並行して行われていたため、その立ち会いも多かった。

調査地区内のF列の5・6列の部分に、塚として伝えられている古墳状の高まりがあり、大きな石も残されていた。さらに高まりの部分が一部窪み、石室の陥没したもののようにも見えていた。このため古墳の可能性を考えつつ調査を進めたが、盛り土状のものは人工のものではなく、回りが畑にされる際の削り残しの場所であろうと推測された。陥没したもののように見えた窪みは、大きな石が割り取られた跡と考えられた。

現地での調査は、遺物のかなり出土するC列の4・5・6列付近を主として進めた。C—6グリッドからはナイフ形石器が石鏃とともに出土し、層的にかなりの攪乱を受けている状況が明らかになり始めた。北側にC—9グリッドを設定したが、北西側への傾斜が始まった場所で、遺物の出土も少なく遺構のないことも確認した。また、南側の状況の確認のため、E—0グリッドを設けて掘り下げたがここもかなり攪乱されていた。

調査対象とした区域のなかでは、遺物包含層の第2層がかなり攪乱されている状況が明らかになり、そのため明確な遺構が残されている可能性はほとんどないと判断して、10月末に現地での調査を終了した。



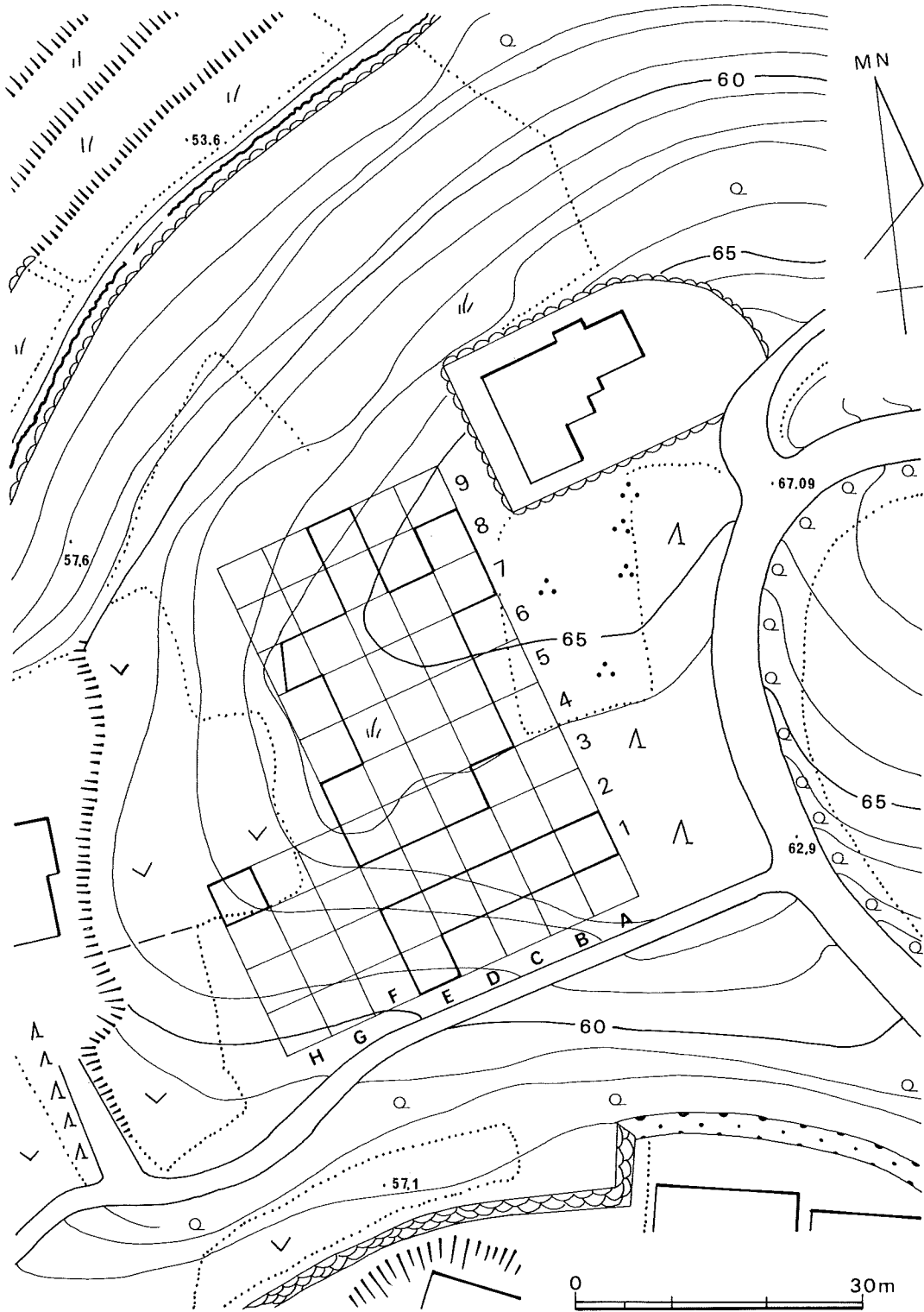


Fig. 2 周辺の地形と調査区域図

## 2. 土層 (Fig. 3 ~ 4, PL. 5 ~ 8)

本遺跡は標高61m~66mほどの丘陵上にあり、北西側から南側に低くなる斜面に位置している。各グリッドの北壁と東壁の土層を1/20で実測したが、全体の状況を示すために土層図として掲載した部分を、第3図に太線で表した。すなわち、C列の1と3~9列までの東壁と、7列での北壁とである。

まず、C列の状況を見ると、西に伸びる尾根の北側から南に高くなって頂部に至り、ついで南側に低くなっている。C-9グリッドの北側での地表面の標高は63.9mほどで、C-7グリッドの南側は65.4mあり、15mの間に1.5mつまり約10%の傾斜を持っている。C-5グリッドとC-6グリッドの間の10mはほぼ平坦であるが、C-4グリッドの北端からC-1グリッド南端の20mでは2mの差がある。ここも約10%の傾斜面であるが、C-2グリッドの部分には石垣があり、C-1グリッドのある場所がかつて畑とされていたものと思われ、平らになっている。

7列では、東西方向への大まかな地形の状況を示す。最も低いE-7グリッド西端での標高は64m、東端のA-7グリッドでは65.5mあり、25mで1.5mの差、約6%の傾斜である。しかし、A-7グリッドは尾根上にあり、ほぼ平らになっている。

土層のあり方は単純で、大まかには表土を1層とし、遺物を含む層が2層としてとらえられる。3層は地山である。1層は耕作土で、黒褐色や暗茶褐色を呈し、やや粘質のある土層である。2層は黄褐色や赤褐色を呈し、拳大から1m以上にも達する玄武岩を含んでいる。玄武岩は、小さなものほど風化が進み、表面は黄褐色になっている。これら玄武岩の大形のものを取り除くため、あるいは深く落とし込むために穴が掘られている部分も少なくない。3層の地山は、玄武岩の風化礫や風化土となっている。

C-6グリッドの1a層は、黒褐色の粘質土層である。C-5グリッドの2層は明るい赤褐色土層で、遺物の出土が多い。石取りのためか攪乱を受け、ナイフ形石器・石鏃・ポイントなどが同一層から出土し、単一の文化層としては捉えられない。C-1グリッドでは、旧地表面と考えられる層が南側で認められた。B-7グリッドでの1a層は暗茶褐色をしており、拳大から人頭大の礫を含んでいる。1b層には大きめの石とそのまわりに拳大の扁平な礫があり、それらの石の間に土が詰まる状況であった。

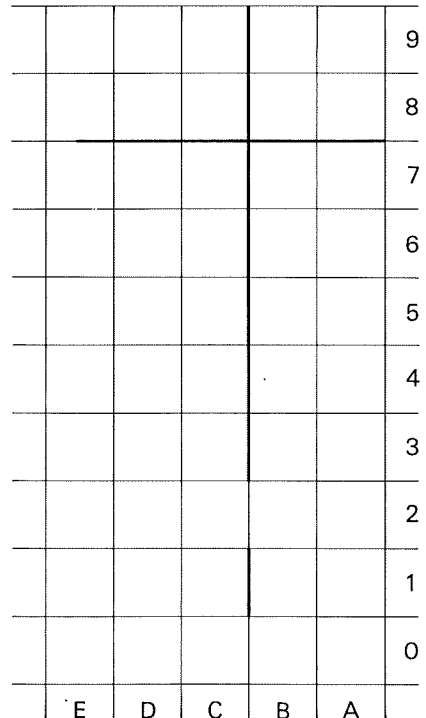


Fig. 3 土層図の位置

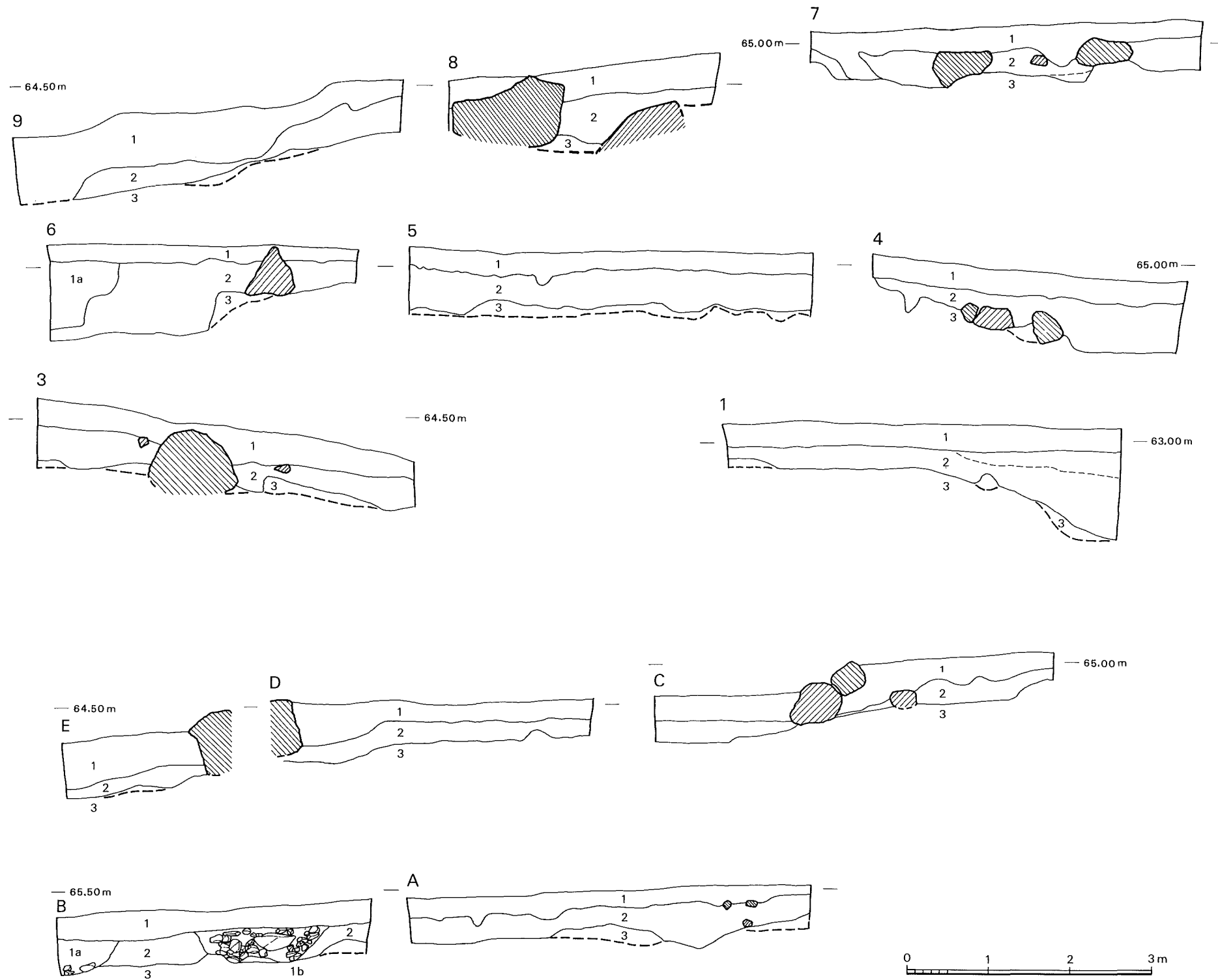


Fig. 4 土層実測図

### 3. 遺 構

本遺跡は、分布調査の段階では遺物散布地としていたが、伐採が終わったところ古墳の盛り土らしい高まりが残っているのがわかった。F列の5と6にあたる部分である。石室の一部と考えられる巨大な石材も見えていたので、古墳としての調査の仕方をしたが、自然の状態のものであることが判明した。周辺を畑に開く際に、この部分のみを削り残したため、高まりとして残されていたものと思われる。

A-7グリッドからは、柱穴状のものが見つかったが、数が1個のため建物とは考えられず性格については不明とせざるをえなかった。

E-7グリッドからは、わりと扁平な割り石が集められた状態で検出されたが、石と石の隙き間の状況などから、近年のものだと判断された。耕作に支障となるような大きな石を打ち欠き掘った穴に埋めたものであろうか。

今回の調査の結果では、本遺跡には明確な遺構は残っていなかったものと思われた。

### 4. 遺物出土状況 (Fig. 5～12)

今回の大久保遺跡の調査では、調査対象区域のほとんど全面が攪乱を受けており、層としての文化層をとらえることはできなかった。しかし、遺物の多く出土する場所、出土の数が限られる場所があるため、器種別に出土地点を図に示してみた。これによって各種遺物の出土状況が視覚的に明確になれば、と考えたからであり、またそうなった原因などについても何らかの意味があると推測したからである。種別の分かる製品について図化した。以下で使用する数はそれによっている。

ナイフ形石器の出土状況はFig. 5のようになる。21点のうち、各グリッドから単独で出土したのは12グリッドで、1グリッドから3点と6点まとまって出土したのが各1箇所ずつある。調査地域の約半分に当たる、合計14箇所である。C-4グリッドからの6点は特に多いが、その周辺には少ない。C-1グリッドからも3点出土しており、C列の1～4列付近に集まる傾向が認められる。

次にポイントの出土状況であるが、Fig. 6のように1列の、それもC列を中心にした形で出土している。尾根の高所から南東側の斜面に散布した形で、北西側の斜面からはほとんど出土していない。ただ、図にした25点の半数以上が先端部分とか胴の一部とかであり、そういう状況での出土であることは明らかにしておきたい。

剥片について見てみると、2箇所に出土の多い場所がある。すなわち、C・D列の4～6列に至る尾根の高所と、1列とである。2列は石垣が築いてあった場所で、調査は実施していないが、3列での出土点数が1点に留まることから、2箇所になるものと推測した。

スクレーパーとしたものは11点と数が少なく、出土状況を図にする意味への疑問も持つが、C・D列と3・4列に集まる傾向を指摘しておく。調査地区の1/7の範囲に、出土遺物の7割

りがあることに、何らかの意味があるかについてである。

最後に石鏃の出土状況について述べてみたい。ここでは、遺物の項で分けたように、通有の形の石鏃と、細身の形で決りの少ないものとの出土状況の図にしてみた。

まず通有の形のものは27個を図に示したが、全29グリッド中17グリッドから出土している。また、単独で出土するのは17グリッドのうち11グリッドからである。その範囲もB列からE列まで、1列から9列までと、西側の斜面までの調査区のほぼ全域に及び、緩やかな散布の状況であることが窺われる。さらに、これらの石鏃の形態から見ると、縄文時代をとおしてこれだけの出土であることがわかる。このことを考えると、各時期において非常に希薄な分布の仕方であったことが指摘できる。

これに対して、特異な形の石鏃の出土状況については、いくつかの指摘できる点、興味のある点がある。それは

1. 0～6列までの14グリッドからと、通有の形の石鏃の出土範囲より狭い場所に出土している。それも47点と、通有の形のものの7割方多い数が出土していること。
2. 14グリッドのうち、単独で出土しているのは3グリッドのみで、他の11グリッドからは

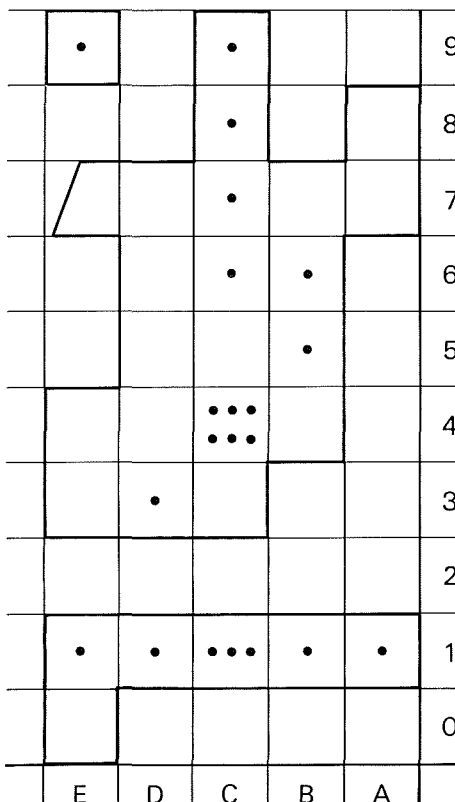


Fig. 5 遺物出土状況図 (ナイフ形石器)

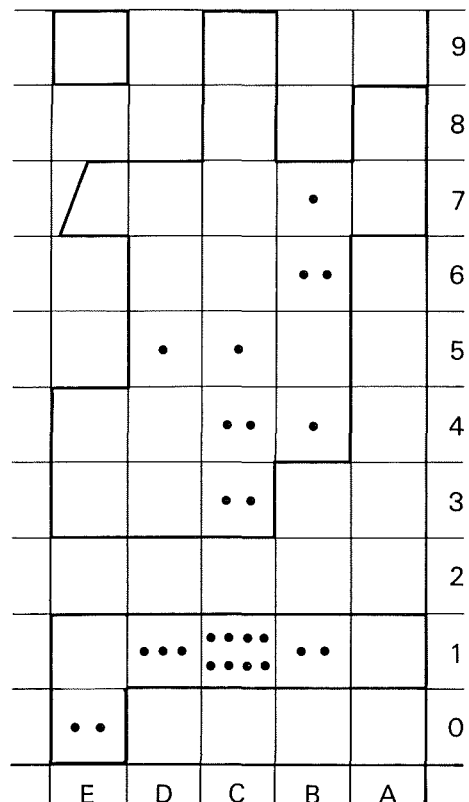


Fig. 6 遺物出土状況図 (ポイント)

複数で、しかも8個・7個・6個などとまとまって出土する状況であること。

3. 尾根の高所から南東側に集中していて、北西側の斜面には出土していないこと。

4. 形からして、ある限られた短期間のもと思われるものが出土していること。

先に述べた通有の石鏃の出土の仕方は、広く薄い出土状況で、これが普通の出土のあり方と思われる。石鏃の場合は、言うまでもなく長期間にわたり狩猟等で通常に使用された場合は、消耗品として消耗された場合には、このような出土状況になるのが当然と考えられる。とすれば、特異な形の石鏃についての、少なくとも上に述べた4点の出土状況については、どのように考えればいいのであろうか。

石鏃の形が極めて限定でき、薄い作り方にも特徴があるうえ、素材に安山岩を多く使っていることなどから、短期間にごく限られた人々が、ここで集中的に狩りをしたか、これらの石鏃を打ち込まれた獣がここで解体され、石鏃がそのまま放置されたものかなどが考えられる。あるいは狩りに来て、そのための仮の住まいを作っていたものか、などを上に述べたことからの理由として考えておきたい。

大村市の野田A遺跡や東彼杵町から、若干この石鏃に類似するものが出土しているが、数が

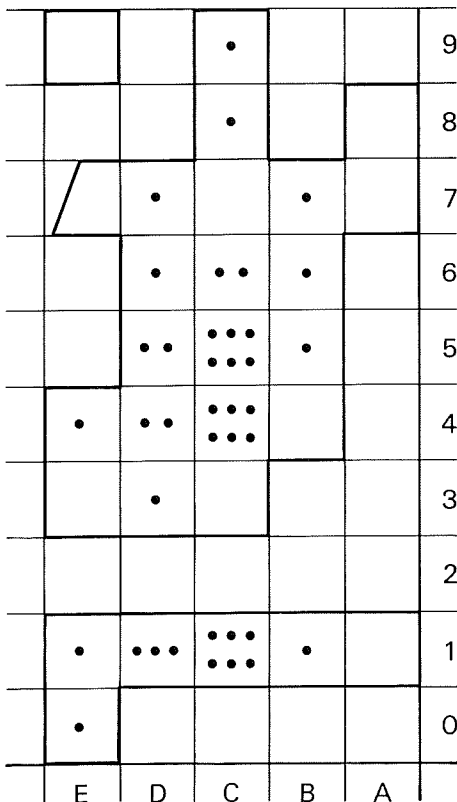


Fig. 7 遺物出土状況図 (剃片)

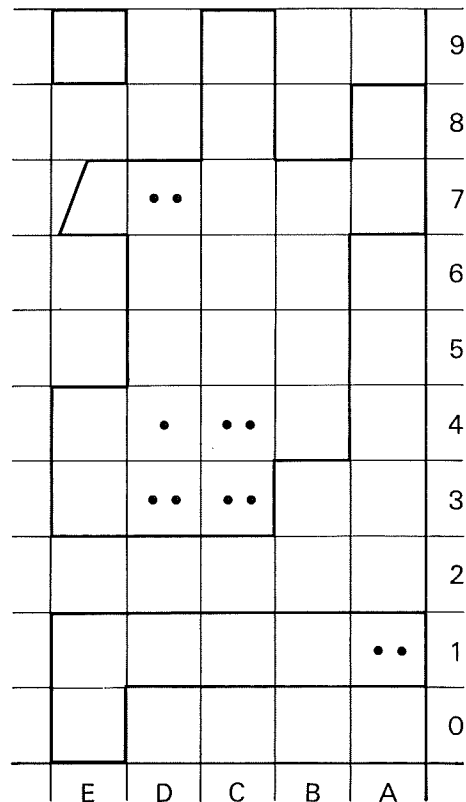


Fig. 8 遺物出土状況図 (スクレーパー)

非常に少ない。この遺跡の周辺に、この種類の石鏃があまり出土していないという事実は、非常に限られた人々であったこととか、使用された期間がごく短かったことを示しているものと考えられる。

Fig.11として、石鏃全体の出土状況の図を示しておいた。Fig. 9とFig.10を重ねたものである。B・C・D列の3～6列の、尾根の高所に集中しているようであるが、南側の斜面であった1列にもかなり出土している。石垣があって、今回の調査は行わなかった2列もこのような状況であったと推測される。このことから、尾根の高所から南側の斜面にかけては、一帯に散布していたのであろう。7列から北側やE列から西側における散布は希薄である。

数が少なく、全体の分布状況の図とするには至らなかった各種の石器について、Fig.12として揚げておいた。種類によって特別の散布の偏りとか、集中などは認められず、全体にまばらに散布している。

それと、最後になったがこの遺跡からの出土品として、黒曜石や安山岩の小破片や碎片の多いことも注目される。このことは、特異な形の石鏃を作った人々とは限定できないが、ここで各種の石器の製作があったであろうことを推測させる。そして、その期間については、出土し

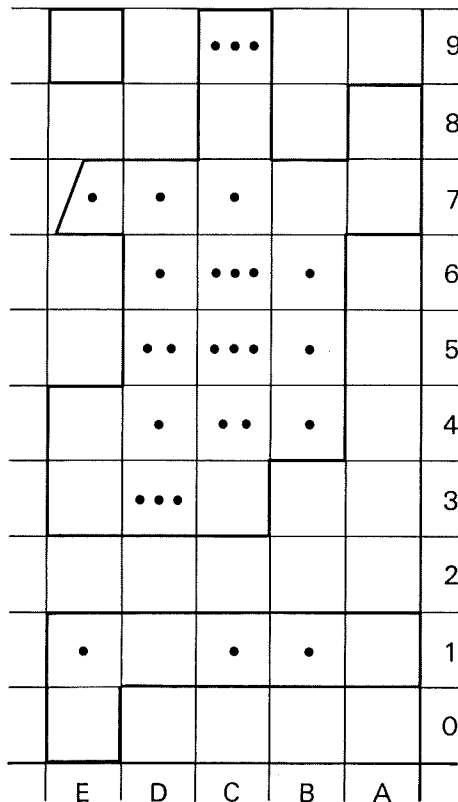


Fig. 9 遺物出土状況図 (通有の石鏃)

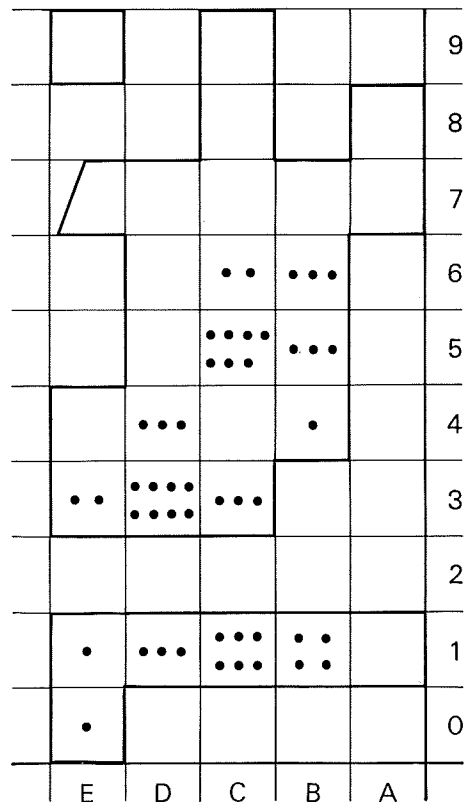


Fig. 10 遺物出土状況図 (特異な形の石鏃)

ている遺物から見て、先土器時代から縄文時代の終わりまでの、永い期間であったことが知られる。さらに、尾根の高所から南東斜面にかけて、遺物の出土が多いことから、各時期の来訪者にとっても、そこがキャンプなり生活の場なりに適していると考えられた結果ではないかと推測される。

以上のことは、あくまでも遺物の平面的な出土状況のみからの推測であり、それらが原位置を保っていたかの検証はしていない。

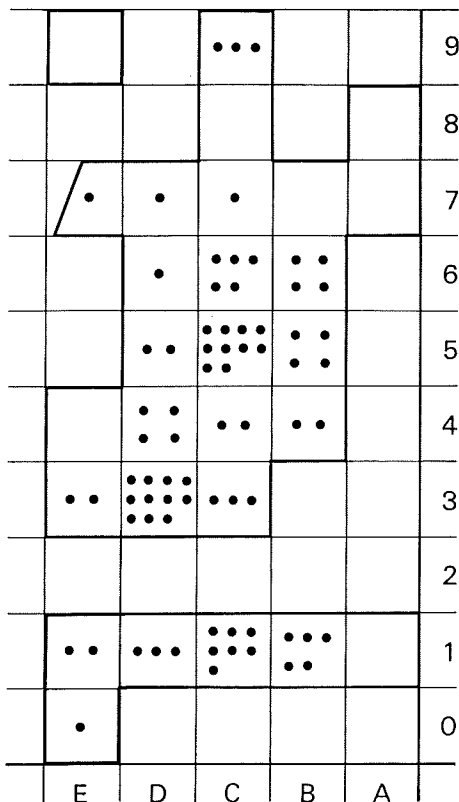


Fig. 11 遺物出土状況図 (全部の石鏃)

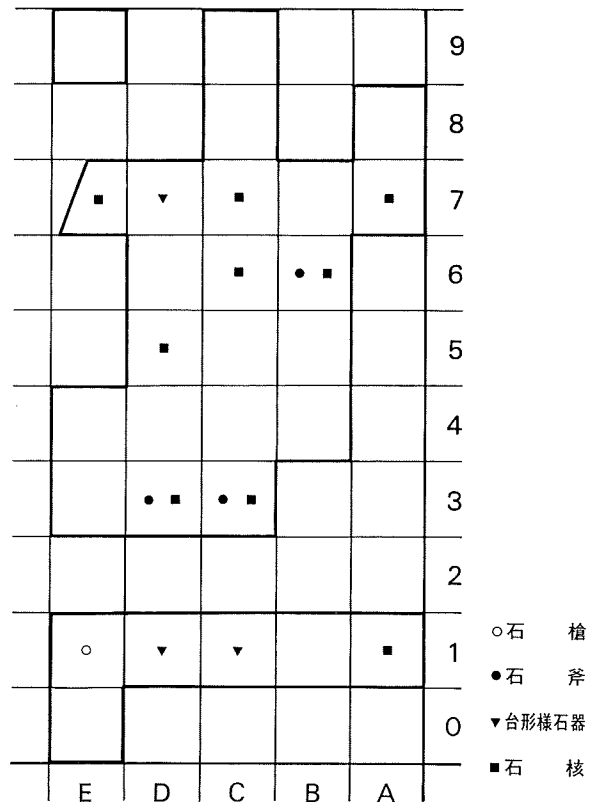


Fig. 12 遺物出土状況図 (各種の石器)

- 石 槍
- 石 斧
- ▼合形様石器
- 石 核



## 5. 遺物

### ① 遺物の概要

大久保遺跡から出土した遺物は、当初から予想されていたことであるが、先土器時代と縄文時代のものが多かった。弥生時代・古墳時代のものはほとんど認められなかった。近世から現代に至る陶磁器片も出土しているが、ほとんどが耕作等によって小破片となっている。このため図に示されないようなものが多く、今回の報告からは割愛している。

ここでの遺物の出土状況について見ると、土層の項で述べているように遺物を含んだ層がかなり乱されていて、層的に把握したものではない。また、出土遺物のうち、黒曜石の細かな剥片や小さな屑片の数が多いのが目に付く。ある時期この場所か、近くで石器を作ったことがあるのかも知れないが、その確証はない。

### ② 石器 (Fig.13~26・PL.10~26)

先土器時代から縄文時代にかけての各種の石器が出土している。この遺跡での特徴として、Fig. 23に示したような特異な形をした石鏃を挙げることができよう。

#### ナイフ形石器 (Fig.13 PL.10~11)

21点を確認し図にして示しているが、大きさや形がさまざまである。材質は全て黒曜石。

1は完形品のやや大形のもので、側縁部には丁寧な調整が施されている。長さは38mm、幅は13mm、厚いところで5mmある。全面に古いパテナが残っている。2から9までは細い形のもので、2・3・5・6・7・9は幅に対して厚さが比較的厚い。2にも古いパテナが残る。

3は先端部を欠いている。4は小形で、基部を若干欠いている。現存長21mm、幅9mm、厚さは3mmに満たない。不透明な黒曜石製で、パテナが残っている。5は完形をしており、縞のある半透明の黒色の黒曜石で作っている。6は先端部を欠失している。漆黒の黒曜石製であるが、一部に自然面を残している。7も先端部を欠いた黒色のものである。8は基部を欠いている。9は完形。不透明で濃い灰色をした黒曜石製である。淀姫系の黒曜石と考えられる。自然面がごく一部にあり、これにもパテナが残っている。10・11はほぼ完全な形で残っているが、ともに刃部を破損している。11は変形で部分的に自然面が残っている。8・10・11ともに半透明で淡い灰色の黒曜石製である。12は小形で、長さ20mm、幅11mm、厚さ4mmである。13は大形のものであるが、刃部が折れている。一部に自然面を残している。14はほぼ完形で、12・13と同じく不透明で漆黒色の黒曜石である。12~14ともにパテナを残している。15は刃部が欠けている。16と同じく不透明で濃い灰色の黒曜石製である。17は基部を欠き、全体の半分ほどが残っている。パテナは古い。18は小形のものである。17と同じような、一部透明な黒色の黒曜石製である。19は基部を欠き、古いパテナが残っている。20はやや変形のもので、先端部分を欠いている。21は先端部が折れているが、やや大形のものである。縞の入った不透明な黒曜石で、古いパテナが残っている。

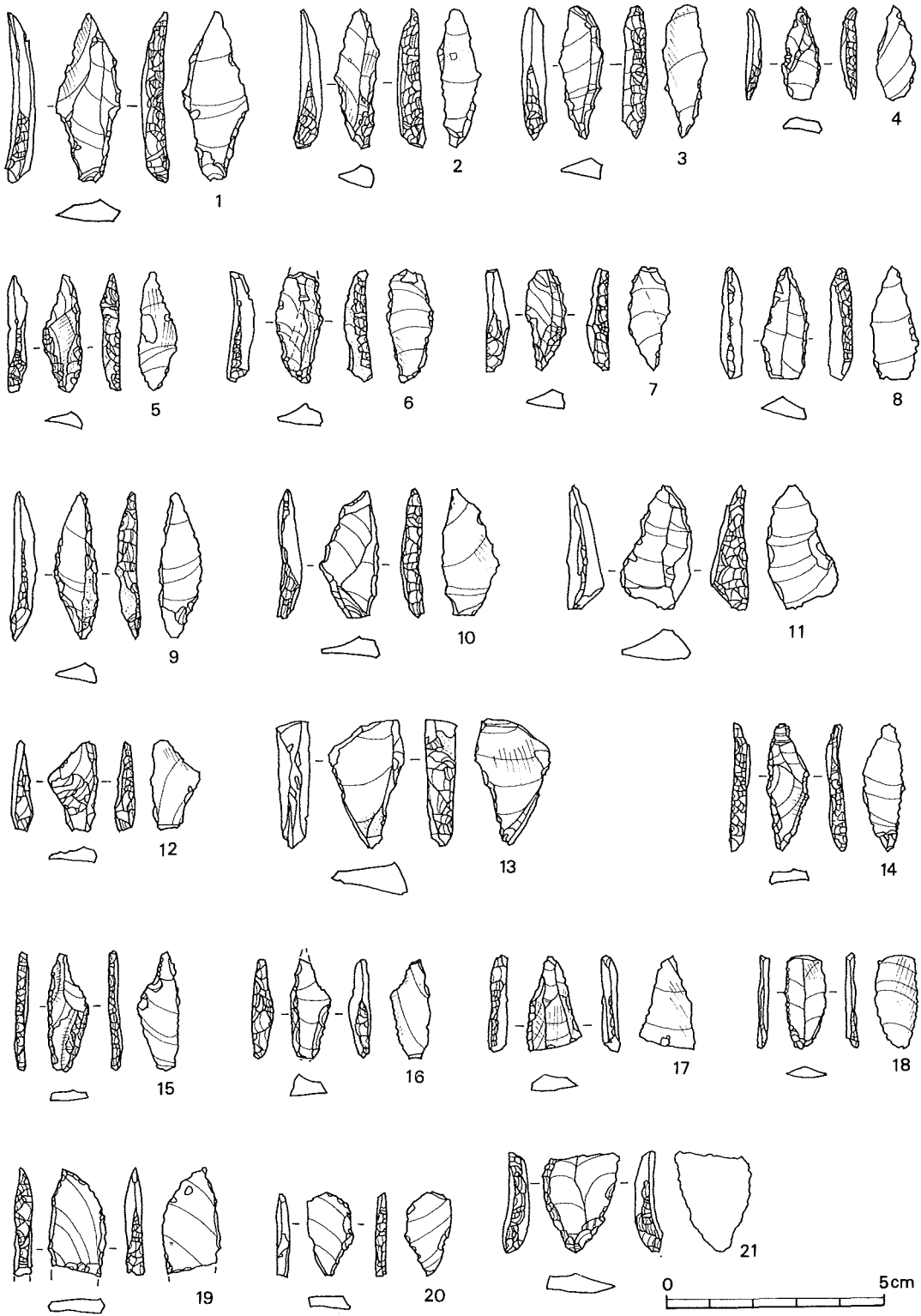


Fig. 13 石器実測図 (1)

台形様石器 (Fig.14・1～3 PL.12)

3点が出土している。いずれも大きさや形が異なる。1は半透明の、灰黒色の黒曜石製である。側縁部の調整はごくわずかしか認められない。C-1グリッドの表土からの出土である。2は縞の入った黒曜石製で、剥片を折っただけの形をしている。全面が古いパテナによって覆われている。D-7グリッドから出土した。3は一部に自然面を残していて、全体に厚い作りである。漆黒色の黒曜石製で、これにも古いパテナが残っている。D-1グリッドの表土からの出土である。以上の3点とも、作りが荒いという印象を受ける。

石核 (Fig.14・4～9 PL.12～13)

4は、不透明で濃い灰色の黒曜石である。一面のみに連続した打撃の痕跡が残っていて、他の面の剝離の方向は一定ではない。5は一面のみに自然面を残すが、他の面は縦方向への連続した剝離面が残っている。半透明の灰黒色の黒曜石で、全面に古いパテナが残っている。6は縦方向の打撃を主として受けており、古いパテナに覆われている。縞模様のある濃い灰黒色の黒曜石である。7は漆黒色の黒曜石であるが、部分的に不純物が混じっている。縦方向への剝離面が多いが、自然面を一部に残している。8は、主として縦方向への打撃面を残している。側縁部に調整痕らしいものも認められ、スクレーパー的な使い方をされたことも考えられる。縞のはいった灰黒色の黒曜石である。9には規則的な打撃の痕跡は残されていない。大きく打ち割った状況である。石材は小豆色をしたチャートである。

4はC-7グリッドの2層、5はD-3グリッドの表土、6はA-4グリッドの表土、7はC-3グリッドの2層、8はC-6グリッドの2層、9はA-7グリッドの表土から、それぞれ出土した。

ポイント (Fig.15・PL.14)

1～5は細身の作りである。1は、両側縁と基部に調整を施して薄手に仕上げている。2はやや厚く、基部は折れている。両側縁部から調整を加えて成形している。1・2ともに緻密な質の安山岩製である。3は片側が割れているが、元来は両側から調整を加えていたものと思われる。不透明な灰黒色の黒曜石製である。丁寧な作りで、石鏃である可能性もある。4はやや歪な形であるが、側縁部からの調整は丁寧である。5は厚い作りのもので、6は幅が広く、作りが少々荒い。4と6はともに安山岩製、5は不透明で濃い灰色の黒曜石製である。7・8ともに側縁部からと基部から調整を加えて成形している。8は剥片から作っていて、片面に大きな剝離の痕が残っている。7・8とも半透明の灰黒色の黒曜石製である。9は広い形のものであるが、形が乱れている。安山岩製で、剥片から作っていることを示す痕跡が、片面に残っている。10～15は幅が広がるもので、いずれも基部を欠いている。10も剝離痕を片面に残している。緻密な質の安山岩製である。11は、両側縁部から割と丁寧な調整を施されている。黒色で緻密な安山岩製。12はかなり広い形になるものと思われる。13・14ともに両側縁部から調整されている。15・16ともに黒色の緻密な質の安山岩製である。16は丁寧な調整で作り上げて

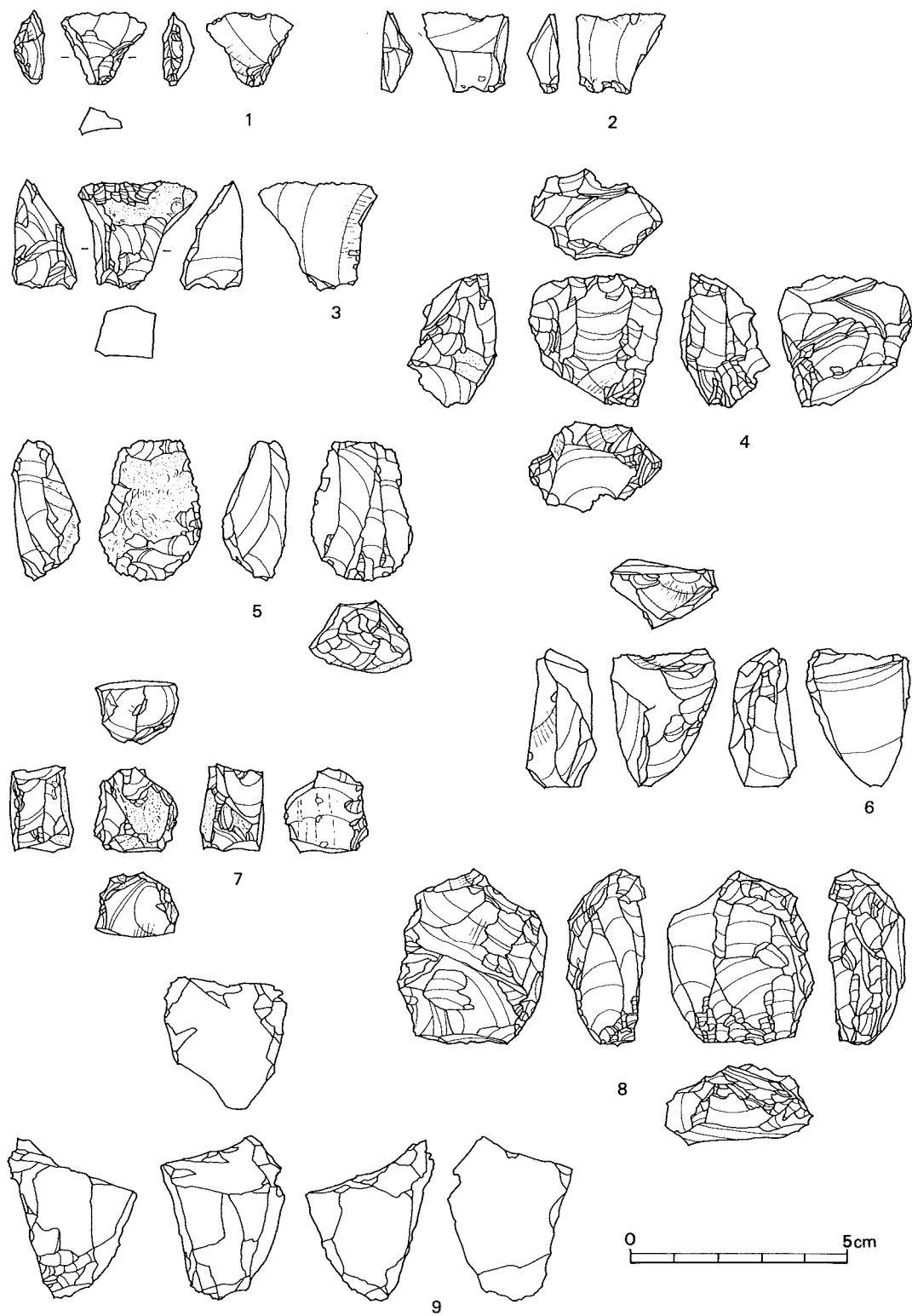


Fig. 14 石器実測図 (2)

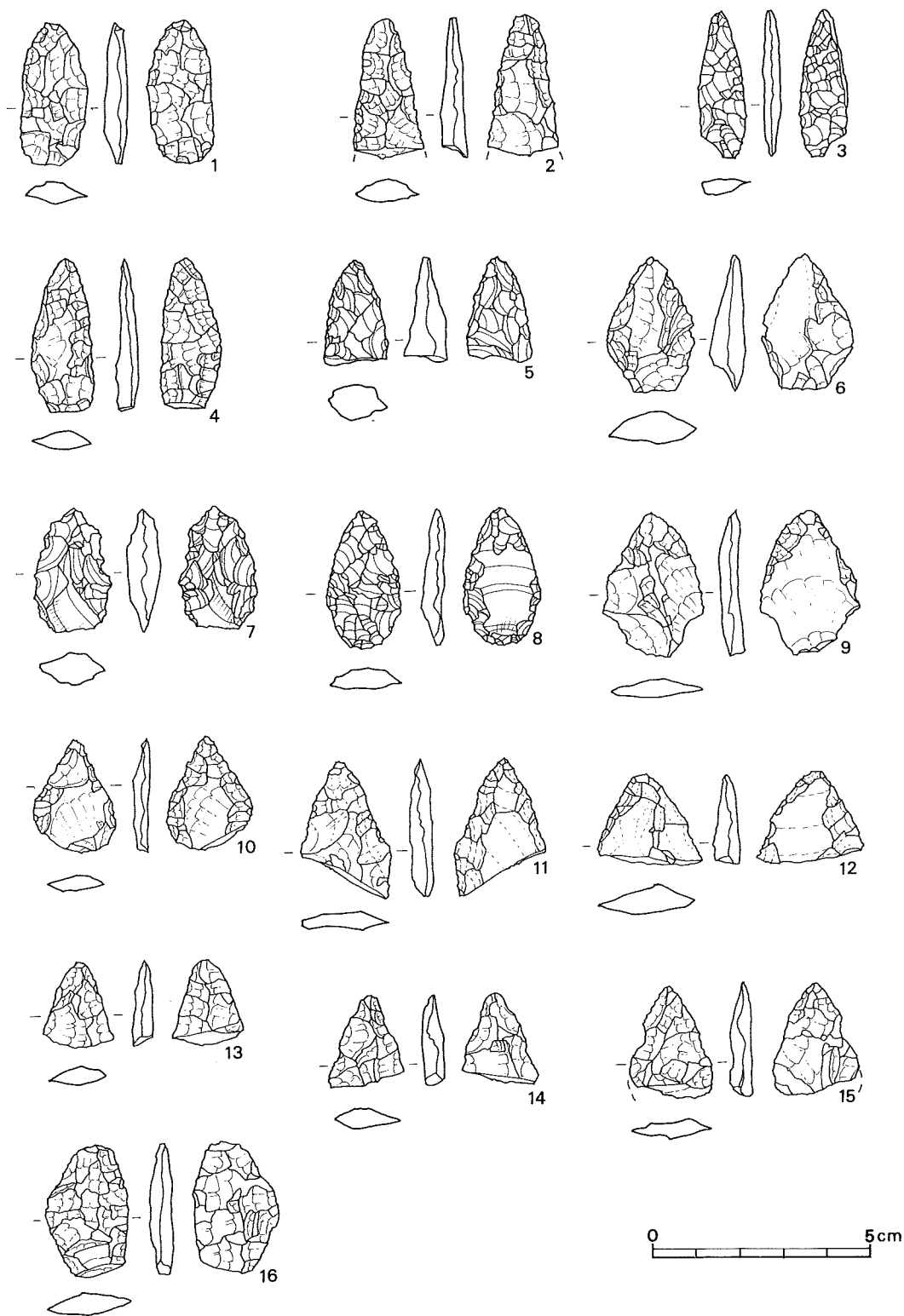


Fig. 15 石器実測図 (3)

いるが、形はやや歪である。

ポイント (Fig.16・PL.15)

1～7ともに断面が柳葉形になるように、両側縁部から丁寧に調整を施している。1・3・4・5はやや厚手の作りである。いずれも先端部と基部を欠失している。1・2は黒色で緻密な質の安山岩製。3も安山岩製であるが、1・2とは石質が違うようである。4は濃い灰黒色の黒曜石製。5は安山岩製で3に似た石材である。6・7は濃い灰黒色の黒曜石製で、古いパテナに覆われている。6・7ともに、両側縁部から丁寧に調整を施されている。8は剥片から作られたもので、一面のみに剝離の痕が残っている。幅の広い形のもので、これも先端部と基部を欠いている。黒色で緻密な安山岩製である。

9は、これまでのものに比べ、形や大きさが異なる。長さ4.9cm、幅3.0cm、厚さ1.2cm、重さは13.8gある。周辺から、やや荒い調整を加えて仕上げている。材質は緻密な質の安山岩である。C-1グリッドの2層から出土した。

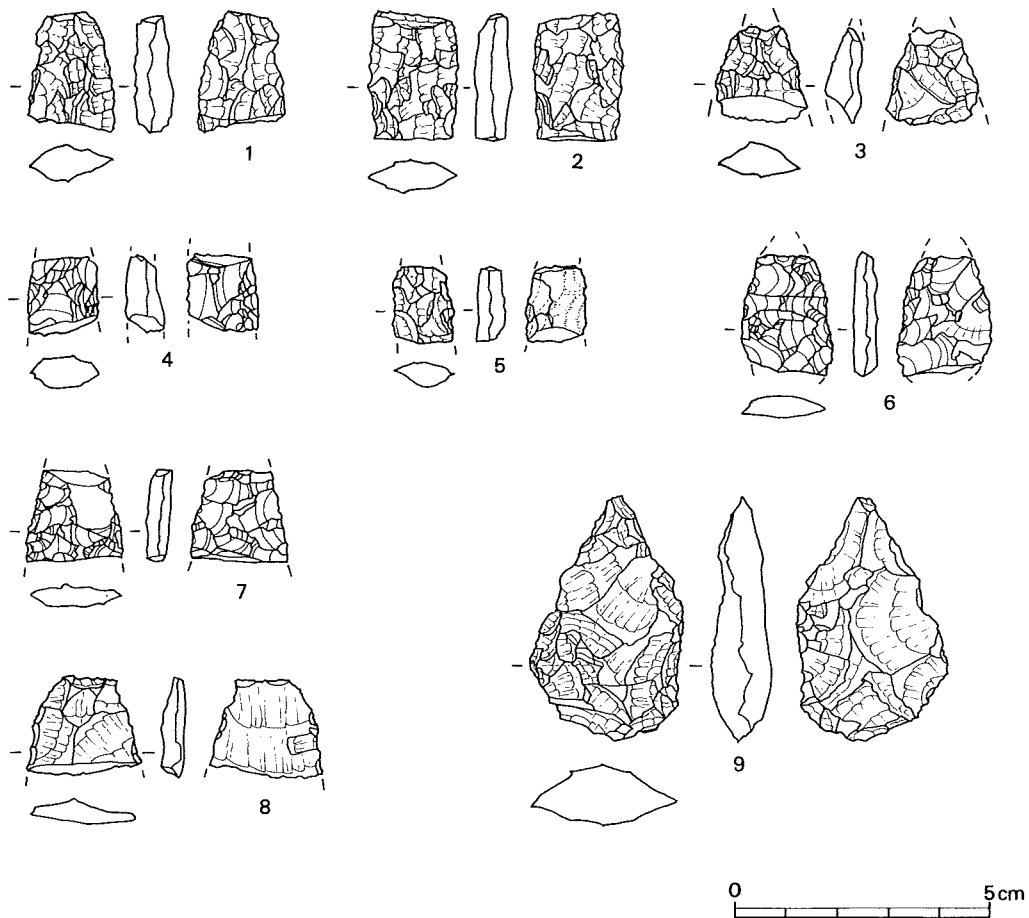


Fig. 16 石器実測図 (4)

剥片 (Fig.17・PL.16)

各種のものが出土しているが、大きさからは大形のもの(1), 平均的なもの(2~20), 細くて厚いもの(21~25)に分けられる。全てが黒曜石製であるが、黒色で半透明なもの(1~8・10・11・13・14・16・22・23)と、灰黒色で縞のあるもの(9・20), 灰色で不透明なもの(12・15・18・19・21), 灰色で半透明なもの(17), 漆黒色を呈するもの(24・25)などに分けられる。石材は、おおむね上質である。

1~5は整った形をした剥片で、5の一侧縁部にはごく小さな瑕が残っている。13~15は小形で、13・14は形が整っている。9には自然面が残った部分がある。11にはパテナが残っている。17~20は形がやや乱れている。21~25は細身で厚く、断面が三角形を呈している。

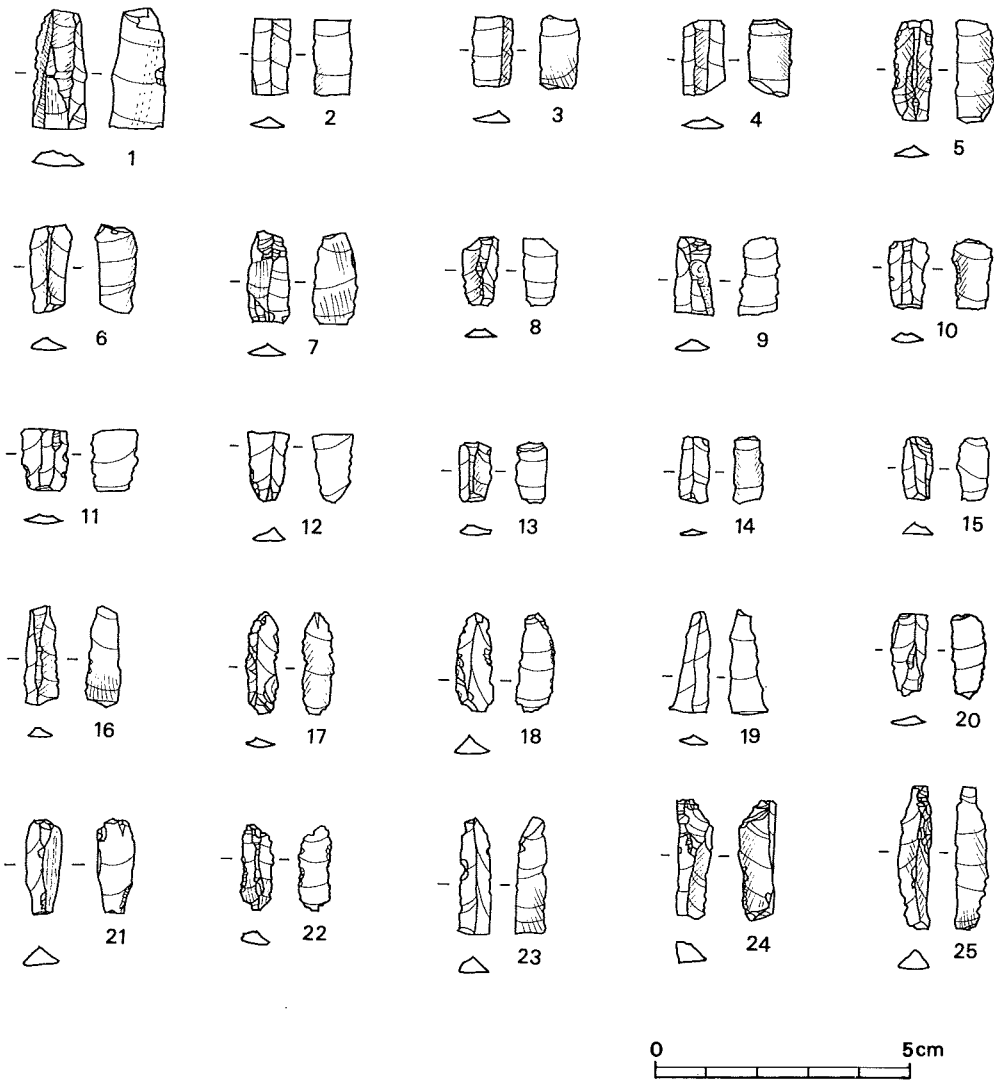


Fig. 17 石器実測図(5)

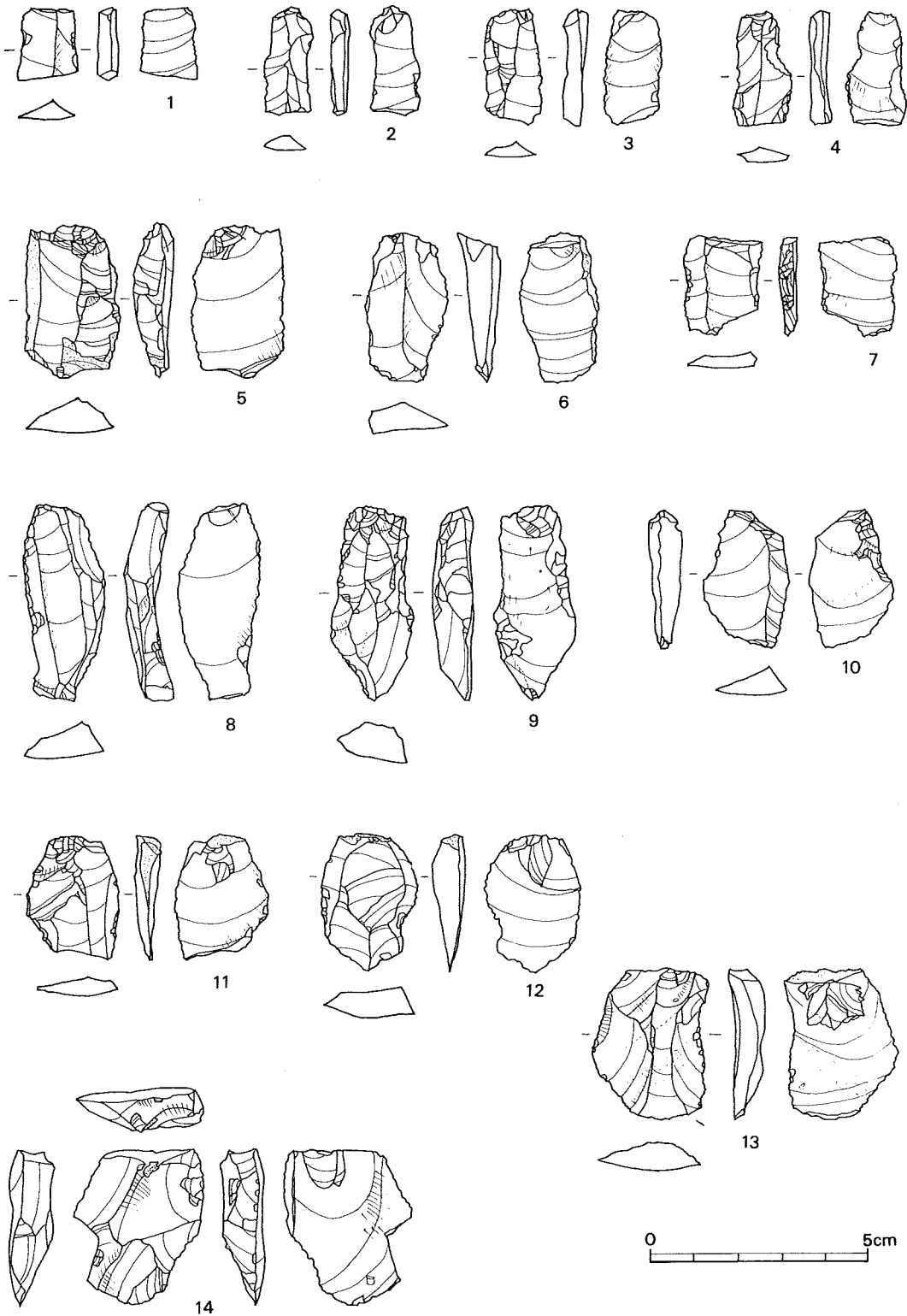


Fig. 18 石器実測図(6)



剥片 (Fig.18・PL.17・18)

1～4は縦長の剥片で、連続して剝離した痕跡を残している。いずれも黒曜石で、1は半透明の灰黒色、2・4は不透明の濃い灰黒色を呈している。3は縞のあるものである。1はきれいに剝がれた剥片で、途中を折断されている。2から4はパテナによって覆われている。5は幅の広いもので、半透明の灰黒色を呈している。一部に自然面を残している。6も一部に自然面を残し、縞模様のある黒曜石である。これにもパテナが残っている。7は一方の側縁に、刃潰しの加工と思われる痕跡が残っている。8は古いパテナに覆われていて断言できないが、不透明な濃い灰黒色の黒曜石製と思われる。一方の側縁部に使用痕と思われる痕跡が認められる。9は厚くて長い剥片であるが、一面には1回の剝離痕が残り、他の面は数回の剝離を加えて調整している。あまり良質の黒曜石ではなく、不純物が混じっている。10は古いパテナの残るもので、半透明の灰黒色を呈している。11・12ともに縞模様のある黒曜石で、古いパテナに覆われているが、一部に自然面が残されている。11は薄い剥片である。13は半透明の灰黒色の剥片で、幅が広い。上端部に自然面を残し、両側縁部には使用痕とおもわれるものがある。14は古いパテナのある、縞模様の入った黒曜石である。新しい、欠けた部分がある。側縁部に一部であるが、使用痕とおもわれるものが認められる。

スクレーパー (Fig.19・PL.19)

ほぼ全周にわたる調整痕を持ったラウンドスクレーパー(1～6)と、その他のスクレーパーとに分けることができる。

1は卵形の細い方の先端を欠いたような形で、その直線部分が自然面として残されている。他の部分には、丁寧に調整を施し、断面は柳葉形を呈している。緻密な質の黒色の安山岩製である。2も一部に自然面を残している。大きく剝離させて整形したあと、側縁部を調整している。これも安山岩製である。3は自然面の残る小さな剥片に加工を加えたもので、半透明の灰黒色の黒曜石。4は半透明の灰色の黒曜石で、周縁部に調整を加えている。5は丸みのある三角形で、各辺の側縁部を調整している。一面には大きな剝離痕が残っている。6はやや長い形のもので、一部に自然面が残っている。5・6ともに半透明の灰黒色の黒曜石である。7は二辺に調整の痕跡が認められる。古いパテナに覆われているが、不透明な濃い灰色の黒曜石製である。8は自然面を残した剥片の周辺に、調整を加えて作っている。半透明の灰黒色の黒曜石製である。9は自然面を残した剥片の側縁部に調整の痕跡が認められる。漆黒色の良質の黒曜石である。10は変形の三角形状をしており、その二辺に調整を施している。不透明の灰黒色の黒曜石を使用している。11は折れた部分があるが、その他の側縁部に調整が加えられている。半透明の灰黒色を呈する黒曜石である。12は薄い剥片の二側縁部を調整している。緻密な質の安山岩を使っている。

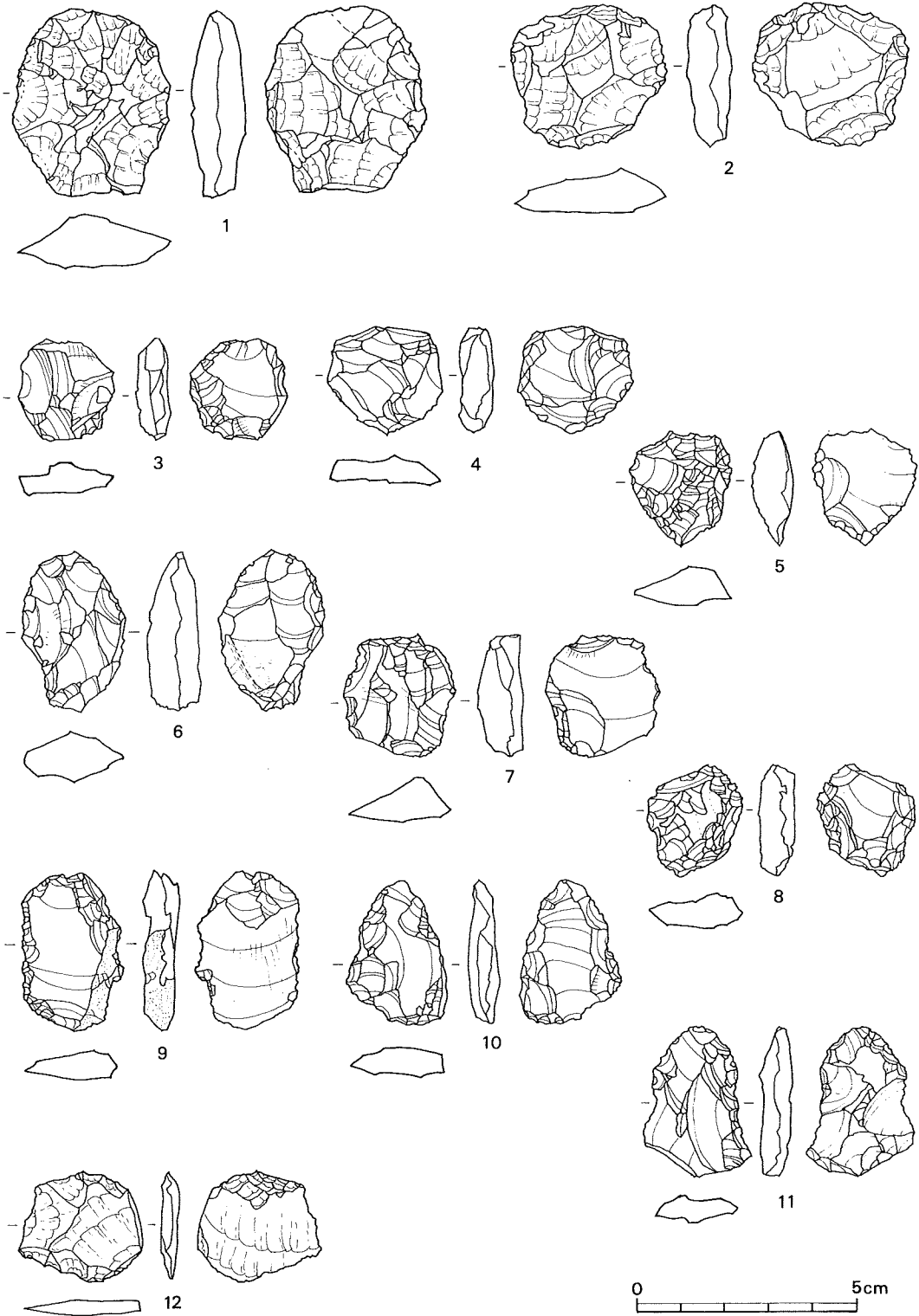


Fig. 19 石器実測図 (7)

石 鏃 (Fig.20~21・PL.20~21)

大きくは、通有のものの特異な形のものの二つに分けた。ここではまず通有のものについて述べるが、形や大きさ、材質で各種のものが認められる。ここでは形状と作り方によって分けておいた。形状による分け方では、小さな部分まで見るとどちらにもとれるものが出てくるので、あくまでも便宜的なものであると断っておく。

I類 Fig.20・1~4までの、抉りが深く長い脚部を持っているもの

II類 Fig.20・5~11までの、抉りは持つが三角形を呈する脚部を持つもの

III類 Fig.20・12~16までの、全体的に三角形を呈し、基部に僅かな抉りを持つもの

IV類 Fig.20・17~21までの、基部の抉りがほとんど無く、平らな形になるもの

以上は形によって分けたもので、以下Fig.21のものは作り方の違いによって分けている。

V類 Fig.21・1~4までは三角形を呈した石鏃で、いずれも基部の抉りがないもの

VI類 Fig.21・5~8までは局部磨製石鏃で、いずれも基部に抉りを持つもの、とである。

I類 (Fig.20・1~4)

1は整った作りであるが、先端部をわずかに欠失している。2は完形で、3・4は片脚の一部を欠いている。4点とも丁寧な調整が施され、形も整っているが、1・2・4は厚い作りである。いずれも漆黒色の黒曜石製である。

II類 (Fig.20・5~11)

5・10・11は黒色の黒曜石で、6・8・9は不透明の濃い灰黒色の黒曜石、7は半透明の灰黒色の黒曜石製である。5・7・8はほぼ完形であるが、6は先端部分と片脚を欠いている。9も先端部分と片脚を欠く。10はやや小形の製品である。11は薄手の作りで、全体的に丸く逆ハート形を呈している。調整は丁寧に施している。5~10までのものと同一類とするのは、全体の形からすればおかしいが、一応抉りのある点から、あえて入れておいた。

III類 (Fig.20・12~16)

12はかなり小さいが完形品で、長さ11mm、幅12mm、厚さ2mm弱である。黒色の黒曜石製で、一面に剝離の痕跡が残っている。5を小さくした形に近い。13~15は灰色の黒曜石で、16は緻密な質の安山岩製である。13は先端部分を欠いている。14は小形の完形品である。15・16も完形に近い。

IV類 (Fig.20・17~21)

17・18は半透明の黒曜石で、やや小形の部類に入る。19は安山岩製の細身の作りで、別系統のものであろう。20・21は古いパテナを持つ、濃い灰黒色の黒曜石製である。17~21はともに完形か完形に近い。

V類 (Fig.21・1~4)

三角形の石鏃で、いずれも片面に大きな剝離の痕跡を残している。1は半透明の灰黒色の黒曜石製で、やや小形のものであるが、先端部分をわずかに欠いている。2・4は黒色の黒曜石で、3

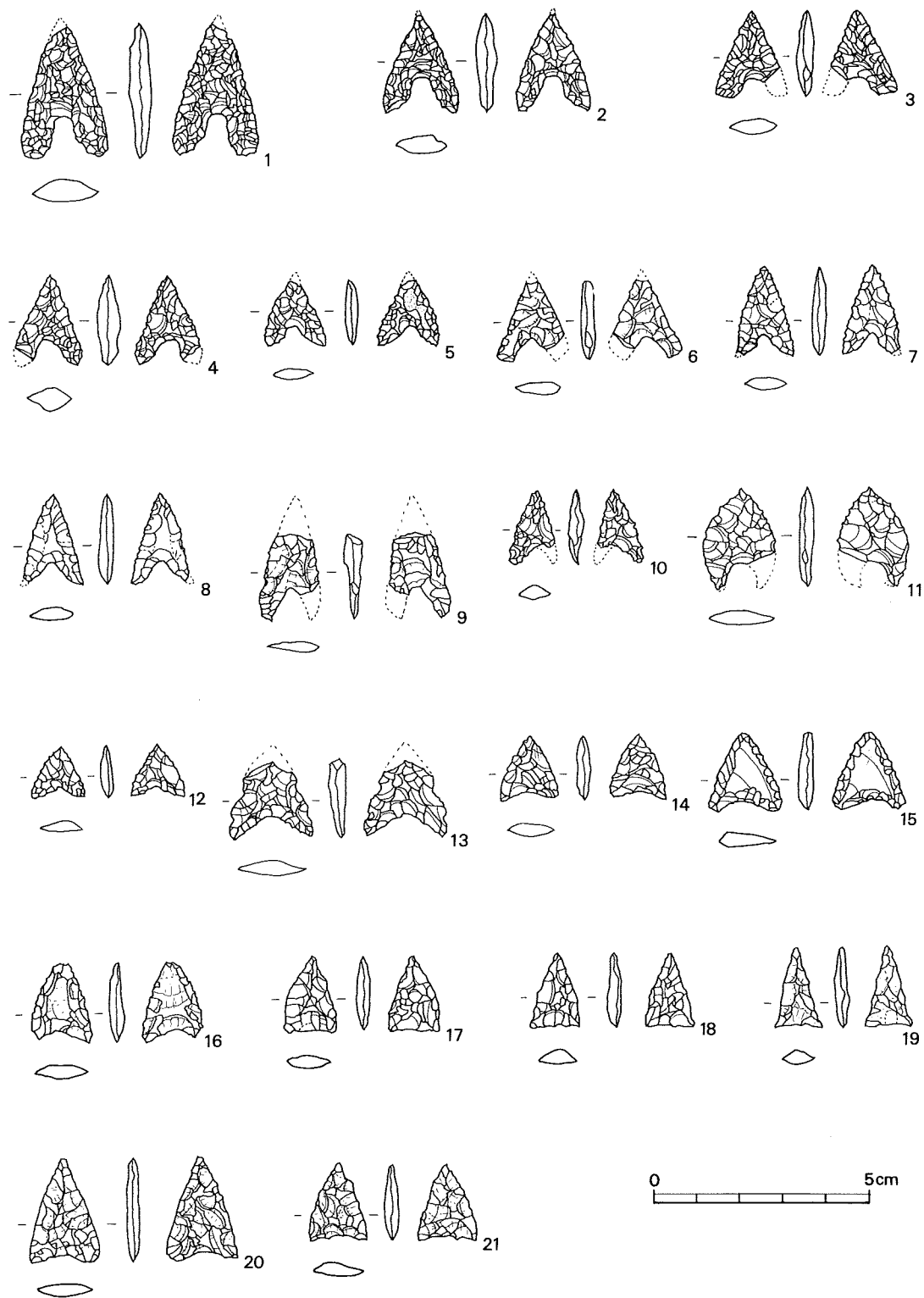


Fig. 20 石器実測図 (8)

は不透明の濃い灰黒色の黒曜石製である。全面に古いパテナが残っている。ごく一部であるが研磨の痕跡らしいものが認められる。4は厚手の作りで、剝離面の反対側が盛り上がっている。

VI類 (Fig.21・5～8)

5は濃い灰黒色、8は黒色の、いずれも黒曜石製で、6・7は緻密な安山岩を使用して作っている。5は一方の脚端部分を欠いているが、ほぼ完形である。ほとんど全面を、方向を変えて研磨している。脚は大きさが不揃いである。6は先端部分を欠いている。5と同様、全面を磨いているが、かなり薄く仕上げている。7は脚部を両方とも欠いている。全体を磨いて仕上げているが、先端部には小さな剝離の痕跡が残っている。8は完形品であるが、かなり小さい。長さ11mm、幅10mm、厚さは2mmをわずかに超える。5～7の3点とも、磨いてかなり薄く仕上げているのに比べ、8は大きさに比べ厚さが厚い。

石 鏃 (Fig.22・PL.22)

この遺跡から出土する石鏃については、特異な形態のものが多いことで、調査中から注目していた。これらの石鏃は細身で、幅に対して長さが長く、また若干薄い作りのものである。さらに、使用している石材として安山岩が多いのも、特徴の一つである。平面的には、柳の葉の付け根を切り取ったような形をしている。基部の作り方で、抉りの有るものと無いものに分けた。Fig.22は全て基部に抉りを持つものである。

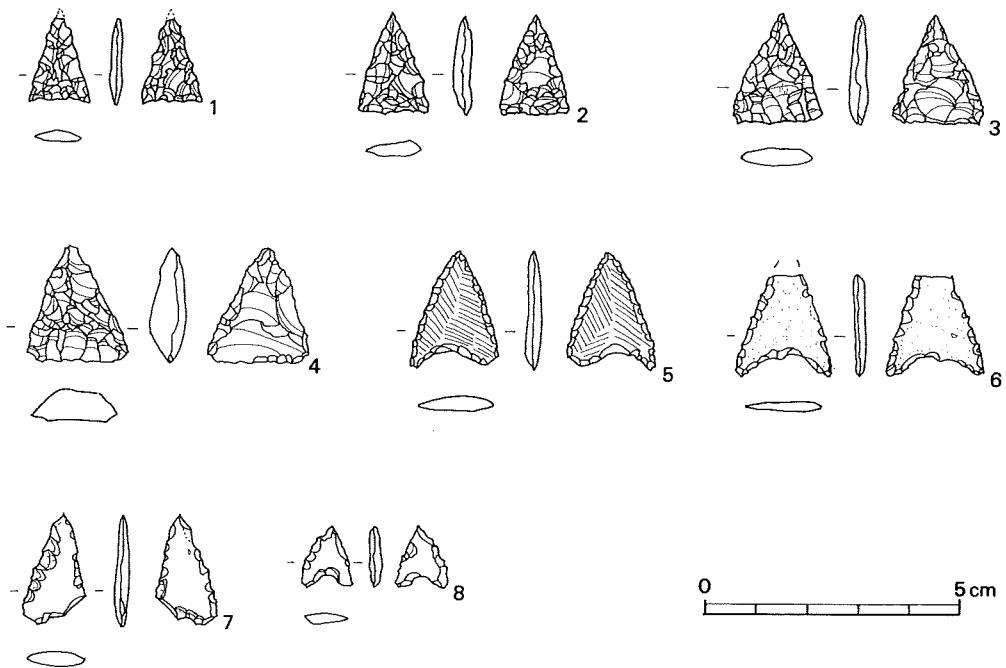


Fig. 21 石器実測図 (9)

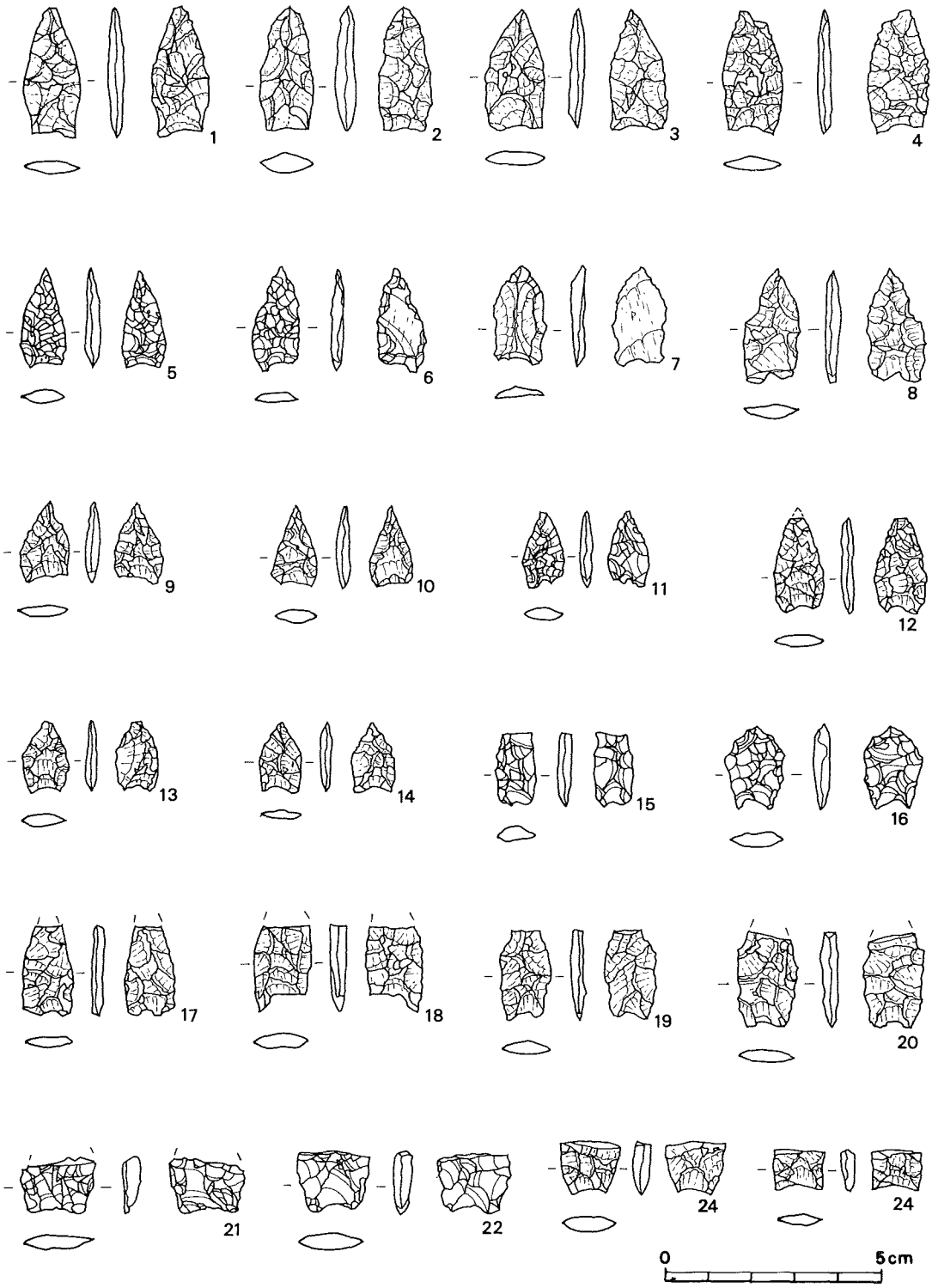


Fig. 22 石器実測図 (10)

1～4はほぼ同じ形で、4は先端部分を欠いている。いずれも安山岩製と思われるが、表面の風化が進んで質までは断言できない。5・6は黒曜石製で5は不透明の灰色、6は黒色を呈している。5は丁寧な作りで、形も整っている。6は片面に剝離の痕跡を残したままである。この面は丁寧に調整を加えている。7・8は安山岩製で、7は剝片であった痕跡を多く残している。9・10ともに安山岩製である。小形であるが作りは割に丁寧である。11は片脚を欠いている。これも丁寧に作られ、細かな調整痕が残っている。長さ17mm、幅9mm、厚さ2.6mmと小形であるが、形は整っている。不透明で灰色の黒曜石製。12～14は安山岩製で、13・14はやや小さく、長さに較べ幅が広い。15は灰黒色の黒曜石製で先端部分を欠いている。細身で、残存部の両側縁がほぼ平行した状態で伸びていることから、幅に較べ長さがかなり長くなるものと思われる。丁寧に調整を施している。16は灰黒色の黒曜石製である。先端部を一部欠いているが、脚端部より肩の幅が広い形のもので、厚さも肩の部分が厚い。17～20はいずれも安山岩製である。4点とも薄い作りで、先端部分を欠いている。17・18に較べて19・20は作り方が雑な感じを受ける。21～24は脚部付近のみである。21・22は半透明の灰黒色の黒曜石製である。大きな形のものであろう。23・24は安山岩製で、24はやや小さくて薄い作りである。

石 鏟 (Fig.23・PL.23～24)

1～4は基部に抉りを持つ形のものである。1は将棋の駒の形のように、長さに較べ幅が広い。薄手の作りで、大きな剝離痕を残している。2は先端部分を欠いている。肩の部分からの剝離痕が認められ、作り方はやや雑な印象を受ける。3は肩の部分を張り出させ、角を付けている。かなり薄い剝片から作り上げている。3・4ともに先端部分を欠いている。1～4はいずれも安山岩製で、3は緻密な質で黒色を呈している。

5～24は基部が直線的なもの、基部の折れているものである。5～13は全て安山岩製。5は完形品で、6・7とともに平面的な形が似ている。8はわずかであるが、先端部分を欠いている。脚の部分が狭い。5～8はともに丁寧な作りで、断面が柳葉形を呈するように両側縁部から調整を加え、さらに全面に調整を施して仕上げている。9は全長の中央部付近で最も幅が大きい。大きな剝離痕が残っている。10は先端部分と脚端部分を欠いているが、作りは良い。11は長さ19mm、幅8.6mm、厚さ2.5mmと小形である。12は先端部分を欠いているが、11と同様に作りは丁寧である。13はわずかに抉りの痕かと思われる部分が残っている。長さに較べ幅が広く、大きな剝離の痕がある。

14・15・17～24は全て黒曜石製である。14は不透明な灰色を呈するもので、脚部をわずかに欠いている。全体として細身の作りである。15は丁寧な作りであるが、先端部分を欠く。16は黒色で緻密な安山岩製で、これも先端部分を欠いている。17・18は基部が折れている。ともに縞のある灰黒色を呈している。19・20は不透明な濃い灰色をしており、これらも基部を欠失している。17から19にかけては、丁寧に調整が全面に施されている。17・18は形や大きさもよく似ている。20は不透明の濃い灰色を呈している。21～23は半透明の灰黒色を呈している。形が

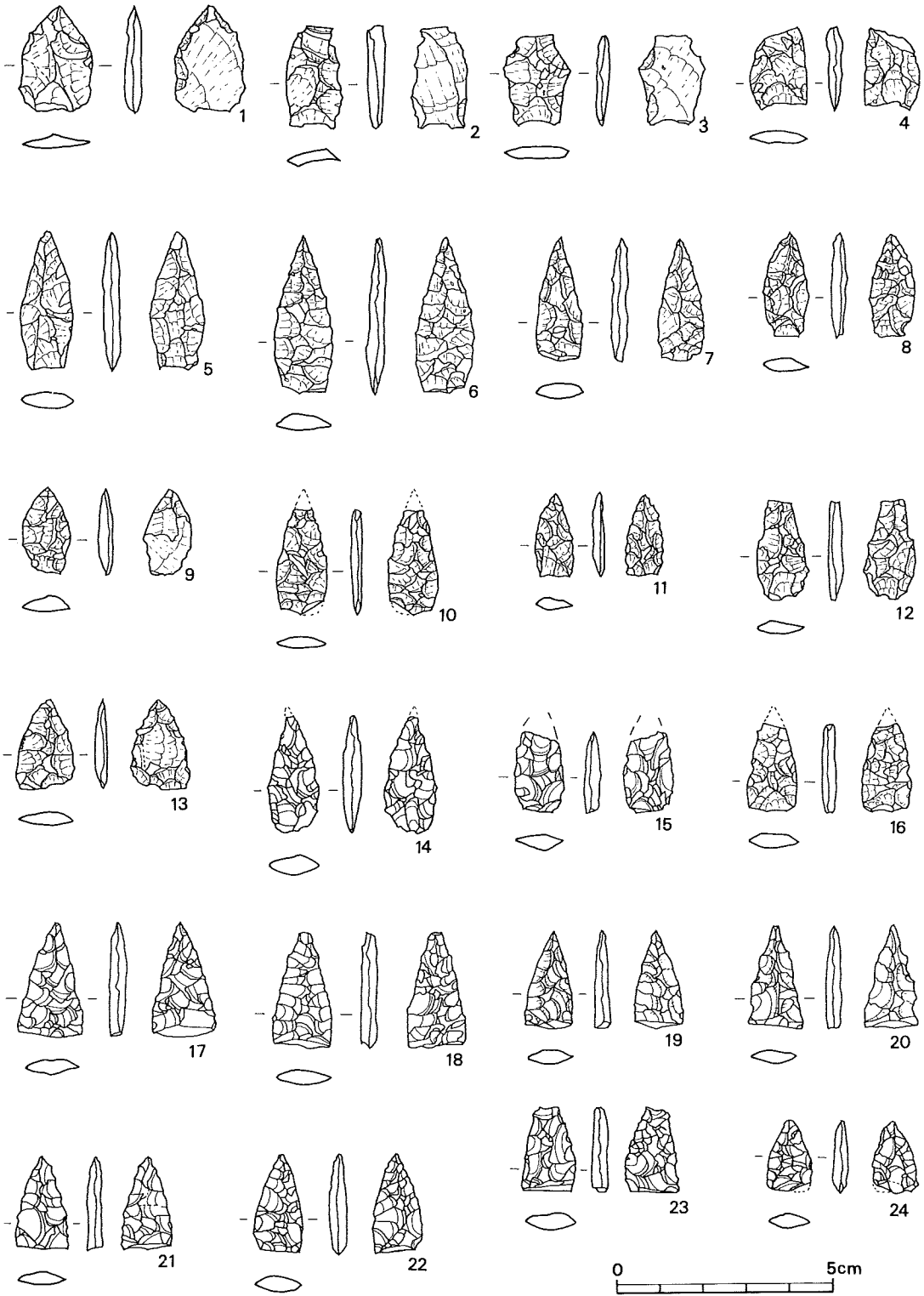


Fig. 23 石器実測図 (1)



似ていて、調整も丁寧である。23は先端部分が欠けている。24は小形であるが、原形を知り得ない。作りは割と丁寧である。

石 鏃 (Fig.24・PL.24)

1から3は基部にわずかに抉りの入る形で、ともに黒曜石製である。1・2は小形で灰色を呈し、2は先端部分を欠いている。3は完形で、濃い灰色を呈している。丁寧な調整を加え、整った形に仕上げている。4は黒色の緻密な安山岩製で、中央からやや基部寄りの部分を張り出させている。形はややいびつで、大きな剝離の痕が残っている。5は直整的な基部に作られている。剝片であったときの剝離痕が残っているが、全体としては丁寧な作りである。漆黒色を呈する黒曜石製である。6は縞模様のある黒曜石製で、一部に不純物が混じっている。全体にパテナを残している。7～9は安山岩製で、8・9は黒色の緻密な石材を使っている。作り方はやや雑な感じを受ける。10は不透明な灰色の黒曜石製で、剝片から作り出している。

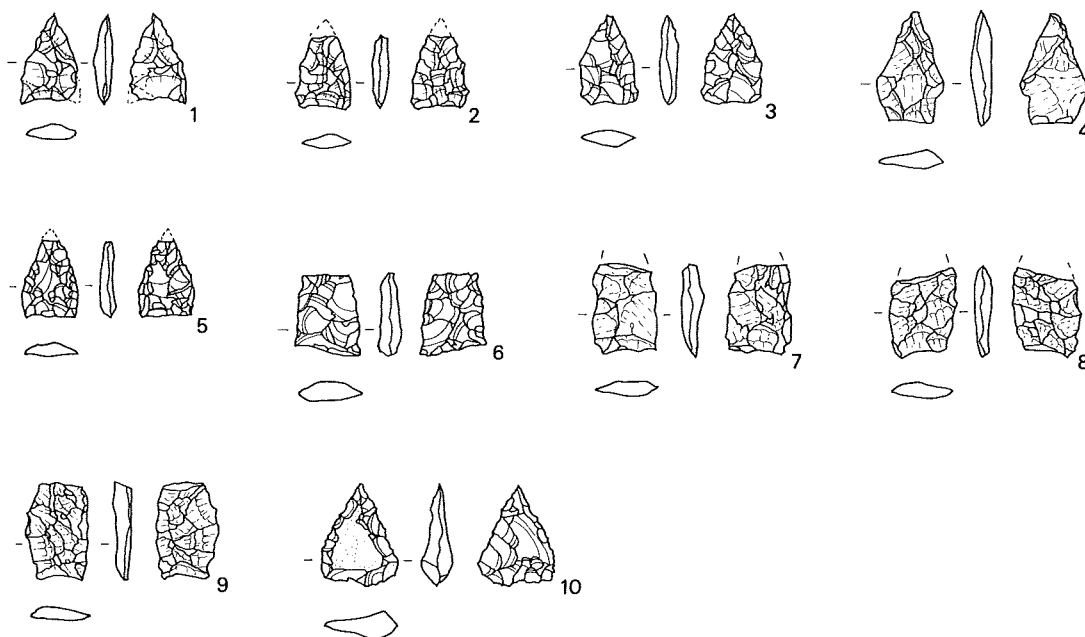


Fig. 24 石器実測図 (12)

石 斧 (Fig.25・PL.25)

1はわずかに半月形をした石斧で、若干反りがある。荒い剥離で素材を作り、側縁部から調整を加えて仕上げている。さらに先端部分を磨いているように認められるが、表面の風化のため断言はできない。長さ14.4cm, 幅5.6cm, 厚さ2.4cmで重さは202gである。安山岩と思われるが、風化のため石材の状況が判然としない。C-3グリッドの2層から出土している。

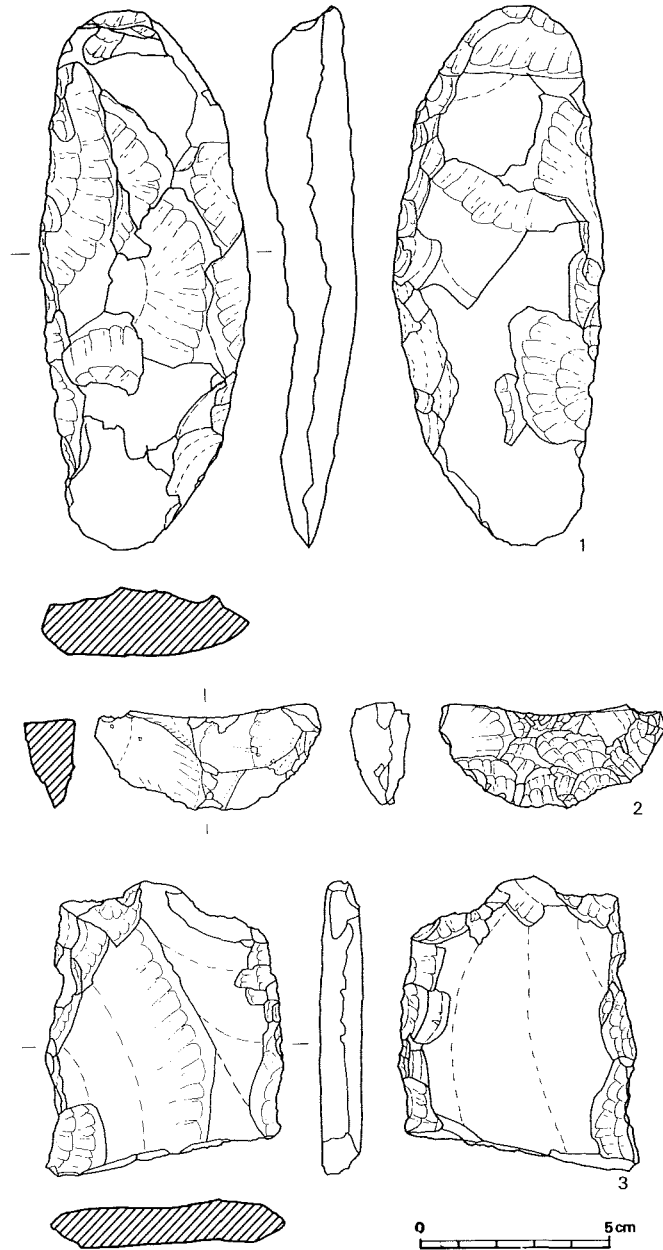


Fig. 25 石器実測図 (13)

2は打製石斧の刃部と思われるが、他の部分を欠いている。緻密な質の安山岩製で、割に丁寧な調整を加えて仕上げている。D-3グリッドからの出土である。3は扁平打製石斧の胴体部分と思われるが、刃部がなく断定はできない。側縁部に調整の痕が残っている。安山岩製で、幅は6.1cm、厚さは1.04cmある。F-4グリッドの表土中であつたものである。

石 槍 (Fig.26・PL.26)

先端部分を欠いているが、石槍と思われる。黒色で緻密な質の安山岩製である。現在残っている長さは6.2cmで、幅は3.1cm、厚さ0.9cm、重さは21.7gである。両側縁部から割と丁寧な調整を施し、断面は柳葉形になっている。基部には自然面が残っている。E-1グリッドの表土からの出土である。

石 核 (Fig.26・PL.26)

2・3は不定形の石核で、いずれも緻密な質の安山岩製である。2は一部に自然面を残している。D-5グリッドの2層からの出土である。3も一部に自然面を残している。大きく荒い剝離の痕が残っている。E-7グリッドの表土からの出土である。

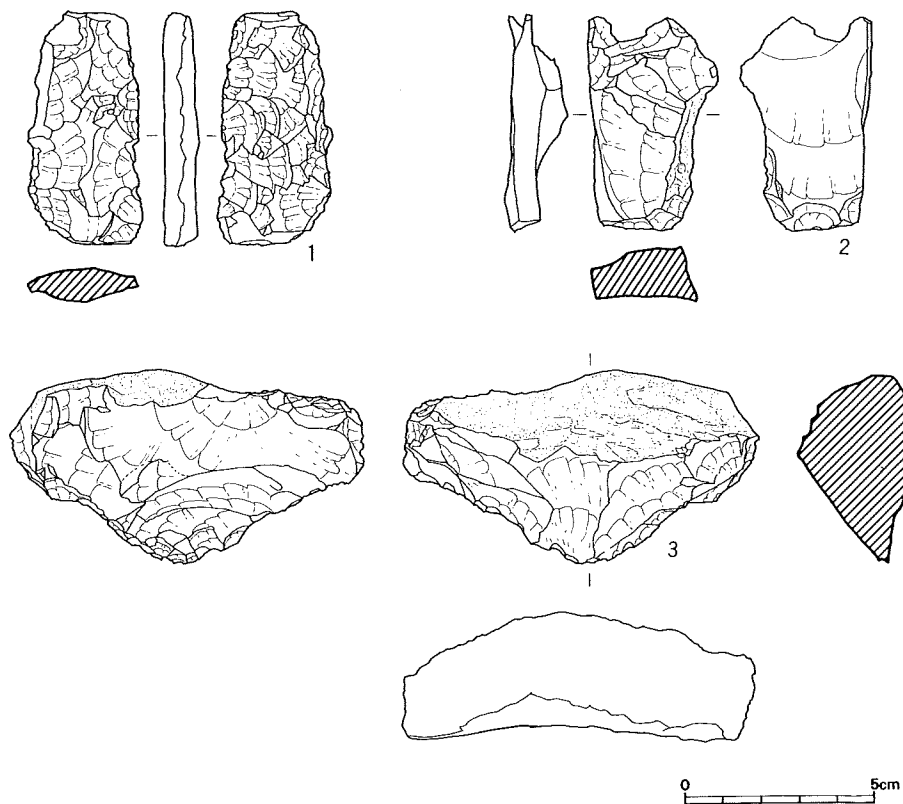


Fig. 26 石器実測図 (14)

## ③ 土器 (Fig.27・PL.27)

いずれも小さな破片となっていて、原形や法量については不明である。また、土器のどの部分に相当するかについても明確ではない。

1は灰褐色で、胎土に小砂粒を含んでいる。焼成は良い。2は内面は濃い灰褐色、外面は明るい茶褐色を呈している。胎土にわずかに小砂粒を含んでいるが、焼成は良い。3は灰褐色で胎土・焼成ともに良い。口縁部に近いもののように見受けられる。1と同一個体である可能性も考えられる。4 これも小破片で、茶褐色を呈する。胎土・焼成ともに良い。5は内面は黒褐色、外面は赤褐色を呈している。胎土に小砂粒を含む。焼成は普通であるが、器表がやや荒れている。1・3はB-4グリッドから、2はC-5グリッドから、また4・5はC-4グリッドからの出土である。

以上5点とも器形や法量を知り得ず、時代について断言はしがたいが、胎土の状況や色調などから見ると、縄文時代晩期に属する可能性が強いものと考えられる。

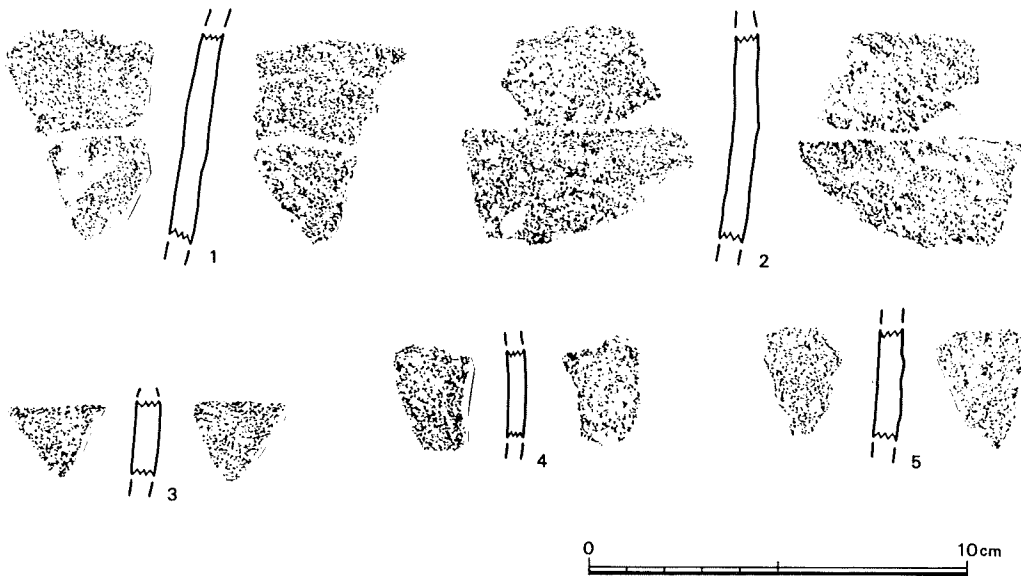


Fig. 27 土器実測図

Tab. 1 大久保遺跡出土石器計測表(1)

図番号	遺物番号	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	出土地区	石材	器種	備考
13	1	38	13	5	2.6	D-4	黒曜石	ナイフ形石器	
	2	32	10	5	1.4	E-9	〃	〃	
	3	30	10	5	1.4	C-1	〃	〃	
	4	21	9	4	0.5	C-4	〃	〃	
	5	27	9	4	0.8	C-4	〃	〃	
	6		11	5	1.3	C-4	〃	〃	先端部を欠く
	7	24	10	5	1.0	B-5	〃	〃	〃
	8	25	11	5	1.1	C-1	〃	〃	
	9	34	10	4	1.3	C-6	〃	〃	
	10	29	13	5	1.5	B-1	〃	〃	
	11	29	17	7	2.55	C-9	〃	〃	
	12	20	11	4	0.75	E-1	〃	〃	
	13		17	7	2.95	C-8	〃	〃	先端部を欠く
	14	29	10	3	0.9	C-1	〃	〃	
	15	27	10	2	0.65	C-4	〃	〃	
	16		9	5	0.75	B-6	〃	〃	先端部を欠く
	17			4	0.9	A-1	〃	〃	〃
	18		9	3	0.5	C-7	〃	〃	〃
	19		13	4	1.3	C-4	〃	〃	基部を欠く
	20		11	3	0.6	D-1	〃	〃	先端部を欠く
	21		18	4	1.75	D-3	〃	〃	〃
15	1	33	16	5	2.5	B-6	安山岩	ポイント	
	2			5	2.45	D-1	〃	〃	基部を欠く
	3	34	11	4	1.5	E-0	黒曜石	〃	
	4	35	14	5	2.1	C-1	安山岩	〃	
	5		15	8	2.5	B-6	黒曜石	〃	基部を欠く
	6	31	20	7	3.95	C-4	安山岩	〃	
	7	29	18	8	2.95	C-3	黒曜石	〃	
	8	32	17	5	2.25	C-4	〃	〃	
	9	34	24	4	2.95	B-7	安山岩	〃	
	10	26	19	3	1.75	C-1	〃	〃	
	11			5	2.5	D-1	〃	〃	基部を欠く
	12			7	2.3	B-1	〃	〃	〃
	13			4	1.2	C-1	〃	〃	〃
	14			5	1.4	C-1	〃	〃	〃

Tab. 2 大久保遺跡出土石器計測表(2)

図番号	遺物番号	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	出土地区	石材	器種	備考
15	15		19	5	2.0	D-5	安山岩	ポイント	基部を欠く
	16		19	5	3.15	B-4	〃	〃	先端・基部を欠く
16	1			7	3.1	C-5	〃	〃	〃
	2		18	6	3.8	C-3	〃	〃	〃
	3			7	2.15	C-1	〃	〃	〃
	4			6	1.7	C-1	黒曜石	〃	〃
	5			5	1.1	D-3	安山岩	〃	〃
	6		19	4	2.1	C-1	黒曜石	〃	〃
	7			5	1.85	B-1	〃	〃	〃
	8			5	2.0	E-0	安山岩	〃	〃
17	1	23	11	3	0.9	E-0	黒曜石	細石刃	
	2	15	8	2	0.25	B-6	〃	〃	
	3	14	8	2	0.25	C-5	〃	〃	
	4	15	8	2	0.3	D-1	〃	〃	
	5	20	7	2	0.4	D-1	〃	〃	
	6	17	8	3	0.35	C-1	〃	〃	
	7	18	8	2	0.3	E-4	〃	〃	
	8	14	7	2	0.15	B-1	〃	〃	
	9	16	8	2	0.35	C-5	〃	〃	
	10	14	8	2	0.2	C-4	〃	〃	
	11	12	9	2	0.2	C-5	〃	〃	
	12	14	8	3	0.3	C-4	〃	〃	
	13	12	6	2	0.15	E-1	〃	〃	
	14	13	6	1	0.1	C-4	〃	〃	
	15	12	6	2	0.15	C-5	〃	〃	
	16	20	7	2	0.25	D-1	〃	〃	
	17	20	6	2	0.2	C-8	〃	〃	
	18	19	7	4	0.4	D-4	〃	〃	
	19	20	8	2	0.2	C-1	〃	〃	
	20	16	7	2	0.15	C-5	〃	〃	
	21	18	7	4	0.4	C-1	〃	〃	
	22	16	7	3	0.25	C-9	〃	〃	
	23	23	6	3	0.4	D-7	〃	〃	
	24	23	7	4	0.75	B-5	〃	〃	
	25	28	6	4	0.55	B-7	〃	〃	

Tab. 3 大久保遺跡出土石器計測表(3)

図番号	遺物番号	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	出土地区	石材	器種	備考
18	1	16	14	4	0.9	C-4	黒曜石	剝片	
	2	25	12	4	0.95	D-6	〃	〃	
	3	26	14	4	1.4	C-5	〃	〃	
	4	26	14	4	1.4	C-6	〃	〃	
	5	35	22	8	5.55	D-4	〃	〃	
	6	34	19	7	3.85	C-4	〃	〃	
	7	23	18	4	1.6	D-3	〃	〃	
	8	45	19	8	6.5	D-5	〃	〃	
	9	45	19	10	6.75	C-1	〃	〃	
	10	32	20	6	3.1	C-1	〃	〃	
	11	29	21	4	2.6	C-1	〃	〃	
	12	32	22	7	4.3	C-1	〃	〃	
	13	35	27	7	5.6	D-5	〃	〃	
	14	36	30	10	9.45	C-4	〃	〃	
19	1	43	36	12	19.15	D-3	安山岩	スクレーパー	
	2	33	36	10	11.8	C-3	〃	〃	
	3	23	22	7	3.9	B-1	黒曜石	〃	
	4	24	26	7	4.85	B-1	〃	〃	
	5	27	24	8	4.45	D-7	〃	〃	
	6	36	24	12	9.5	D-4	〃	〃	
	7	27	26	10	6.8	C-4	〃	〃	
	8	25	22	8	4.5	D-7	〃	〃	
	9	36	23	7	6.3	B-8	〃	〃	
	10	33	23	7	4.6	C-4	〃	〃	
	11	34	25	7	4.8	D-3	〃	〃	
	12	25	28	4	2.7	C-3	安山岩	〃	

Tab. 4 大久保遺跡出土石器計測表(4)

図番号	遺物番号	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	出土地区	石材	器種	備考
20	1	(33)	20	5	2.0	H	黒曜石	石 鏃	
	2	(24)	18	5	1.0	C-1	〃	〃	
	3	20		4	0.6	B-8	〃	〃	片脚を欠く
	4	21		6	0.8	C-5	〃	〃	片脚を欠く
	5	(17)	14	3	0.4	C-4	〃	〃	
	6	(21)		3	0.6	C-9	〃	〃	片脚を欠く
	7	21	(13)	3	0.5	C-5	〃	〃	
	8	21	14	3	0.55	C-6	〃	〃	
	9			2	0.7	B-5	〃	〃	片脚・先端部を欠く
	10	17		3	0.3	D-5	〃	〃	片脚を欠く
	11	23	17	3	0.8	D-4	〃	〃	片脚を欠く
	12	13	13	3	0.2	C-4	〃	〃	
	13		19	4	0.8	C-6	〃	〃	先端部を欠く
	14	15	13	3	0.5	C-9	〃	〃	
	15	18	17	3	0.8	C-9	〃	〃	
	16	18	14	3	0.7	D-7	安山岩	〃	
	17	17	12	3	0.5	C-7	黒曜石	〃	
	18	17	12	4	0.4	B-6	〃	〃	
	19	19	12	3	0.4	B-1	安山岩	〃	
	20	24	16	3	0.8	D-3	黒曜石	〃	
	21	(19)	14	3	0.5	E-1	〃	〃	
21	1	(18)	12	2	0.3	D-5	〃	〃	
	2	20	14	3	0.55	C-6	〃	〃	
	3	22	18	3	0.9	E-7	〃	〃	
	4	23	20	7	2.0	D-3	〃	〃	
	5	24	18	3	0.8	D-3	〃	〃	
	6		19	2	0.75	D-6	安山岩	〃	先端部を欠く
	7	22	12	3	0.5	C-5	〃	〃	脚部を欠く
	8	12	10	2	0.2	B-4	黒曜石	〃	



Tab. 5 大久保遺跡出土石器計測表 (5)

図番号	遺物番号	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	出土地区	石材	器種	備考
22	1	30	13	3	1.2	D-4	安山岩	石 鏃	
	2	28	18	5	1.45	C-1	〃	〃	
	3	28	19	3	1.15	D-3	〃	〃	
	4	29	14	3	1.25	B-5	〃	〃	
	5	23	10	3	0.65	C-5	黒曜石	〃	
	6	(24)	11	2	0.6	B-1	〃	〃	
	7	23	12	3	0.7	D-3	安山岩	〃	
	8	26	13	3	1.0	B-6	〃	〃	
	9	19	12	3	0.5	C-1	〃	〃	
	10	19	11	3	0.55	D-4	〃	〃	
	11	17	10	3	0.4	C-5	黒曜石	〃	
	12	(24)	12	3	0.7	C-5	安山岩	〃	
	13	16	11	3	0.4	C-5	〃	〃	
	14	16	10	2	0.35	D-3	〃	〃	
	15		9	3	0.5	D-1	黒曜石	〃	先端部を欠く
	16		14	4	0.95	C-3	〃	〃	〃
	17		12	2	0.8	C-5	安山岩	〃	〃
	18		13	3	1.05	C-6	〃	〃	〃
	19		12	3	0.7	B-6	〃	〃	〃
	20		14	3	1.05	D-3	〃	〃	〃
	21		16	3	0.75	H	黒曜石	〃	〃
	22		16	4	0.9	E-1	〃	〃	〃
	23		14	4	0.65	D-3	安山岩	〃	〃
	24		12	3	0.3	C-1	〃	〃	〃
23	1	25	17	3	1.25	D-3	〃	〃	
	2		13	4	1.1	B-1	〃	〃	先端部を欠く
	3		16	3	0.7	D-1	〃	〃	〃
	4		13	3	0.8	C-6	〃	〃	〃
	5	32	12	4	1.5	C-3	〃	〃	
	6	36	14	4	1.7	B-5	〃	〃	
	7	28	11	4	0.85	D-3	〃	〃	
	8	24	11	3	0.8	C-5	〃	〃	
	9	20	11	4	0.65	E-3	〃	〃	
	10		12	3	0.85	C-1	〃	〃	先端部を欠く
	11	19	9	3	0.4	C-3	〃	〃	

Tab. 6 大久保遺跡出土石器計測表 (6)

図番号	遺物番号	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	出土地区	石材	器種	備考
23	12		12	3	0.9	C-5	安山岩	石 鏃	先端部を欠く
	13	21	14	3	0.75	D-1	〃	〃	
	14	(29)	12	5	1.1	B-5	黒曜石	〃	
	15		12	4	0.85	B-6	〃	〃	先端部を欠く
	16		11	4	0.75	B-1	安山岩	〃	〃
	17	26	15	4	1.2	C-1	黒曜石	〃	
	18		14	4	1.35	D-3	〃	〃	先端部を欠く
	19		11	3	0.7	E-3	〃	〃	脚部を欠く
	20		13	3	0.85	E-0	〃	〃	〃
	21		12	3	0.75	B-1	〃	〃	〃
	22	23	12	4	0.8	C-1	〃	〃	
	23		13	4	0.95	D-4	〃	〃	先端部・脚部を欠く
	24	17	11	3	0.5	B-4	〃	〃	
24	1	18		3	0.4	B-6	〃	〃	片脚を欠く
	2		11	3	0.4	B-6	〃	〃	先端部を欠く
	3	17	12	3	0.55	C-3	〃	〃	
	4	22	13	4	0.95	C-4	安山岩	〃	
	5		11	3	0.45	C-3	黒曜石	〃	先端部を欠く
	6	16	13	4	0.85	B-4	〃	〃	
	7		14	3	0.8	B-6	安山岩	〃	先端部を欠く
	8		14	3	0.85	B-6	〃	〃	〃
	9	19	13	3	0.8	C-5	〃	〃	
	10	20	15	6	1.05	B-4	〃	〃	

### Ⅲ まとめ

今回調査を実施した大久保遺跡は、大村湾を見おろす標高65mほどの場所にあたる。さほど大きくもない尾根上の傾斜地であり、広い範囲から遺物が出土するということでもなく、近年まで遺跡として周知されていなかった。

昭和58年4月18日から22日にかけて、建設予定の九州横断自動車道中心杭に沿った事前調査を実施した。大村市池田の、大村インターチェンジから佐賀県境の俵坂トンネル入り口までの間である。この分布調査で、今回調査した場所にあたる畑の表面に黒曜石の散布が認められ、散布地として調査を実施した。そして、その内容については先に述べたとおりである。

今回の調査では

- 1) 尾根上の高所から南側の斜面にかけて遺物が散布するが、遺構は検出されていない。
- 2) これらの遺物は、明確な文化層からの出土ではないが、縄文時代を中心としている。
- 3) 長さが幅の倍ほどの特異な形の石鏃が、通有の石鏃より多く出土する。

という事実が確認された。さらに

- 4) 凶化した石器の4割が石鏃で、ポイントと合わせると6割ほどが狩猟用品となる。

このことは、凶化した遺物の選択の問題もあろうが、他の石器類に比べ石鏃やポイントの占める比率がかなり高いという点から見ると、常時あるいは長期にわたっての生活址ではないことを示していると思われる。すなわち、狩猟活動に伴う野営地とも考えられる。

3) の、長さが幅の倍ほどかそれ以上の形の石鏃は、県内の遺跡から出土する例もあるが、数が少なく、遺跡の数も大層限られたものとなっている。(Fig.28)

①大村市の野田A遺跡から2点出土している。<sup>註1</sup>(1・2) 1は黒曜石製、2は安山岩製で、ともに基部に抉りを持つ。確実な文化層からの出土ではなく、時期の決定はできない。

②北松浦郡田平町の前目遺跡から1点出土している。<sup>註2</sup>(3) 黒曜石製で先端部分をわずかに欠いている。長さが幅の倍以上になり、基部に浅い抉りがある形である。

明確な文化層として時期の把握はあっていないが、出土する遺物から、遺跡は縄文式土器系統の縄文時代早期末から前期を主体とし、縄文中期までが考えられている。

③東彼杵郡東彼杵町の松山A遺跡からは、安山岩製のものが1点出土している。<sup>註3</sup>(4) 基部があまり狭くならない形のものである。

④本報告書中に報告されている、上八竜遺跡にも2点認められる。<sup>註4</sup>(5・6) 5は細身のものです。やや厚い。安山岩製で丁寧に作られている。石鏃より、ポイント的なものとも考えられる。6は黒曜石製で、これも丁寧に作りである。

⑤大村市の稗田遺跡からの出土品である。<sup>註5</sup>(7) 黒曜石製で細長く、長さが幅の2倍を超える。Ⅳ区の遺物包含層からの出土であるが、ここからは多数の弥生式土器が出土し、縄文晩期

の土器や土師器、さらに中世に至るまでの遺物が出土している。このためこの石鏃の時代については明確とはなっていない。

以上で見たように、本遺跡から出土した特異な形の石鏃は、長崎県内の遺跡から出土する例もあるが、その遺跡数は少ない。さらに、その遺跡から出土した全石鏃中に占める割合は非常に少ない。出土した石鏃中の半数に達する遺跡は、管見では知るところがない。

本遺跡の周辺においてもほとんど知られていない。このような形の石鏃がかなりまとまって出土することについては、先にいろいろと推測を述べた。その理由の最も大きなものは、この形の石鏃が、ごく短期間のうちに使用された、ということであろう。そして、使用した人々もかなり限定されていた、ということも考えられる。

この種の石鏃の系統として考えられるのは、ポイントからの流れである。その理由のひとつは、ポイントより小形であるが形が似ていることがあげられる。次に細くて長いという点も共通している。さらに、ポイントを作るのに多く使われる安山岩を材料としたものが多いこともその理由である。

しかし、これらの石鏃は薄手の作りで、ポイントに較べて厚みを減じている。ポイントがある程度の重さを持って殺傷力を得ているのに較べると、その点で劣ることになる。

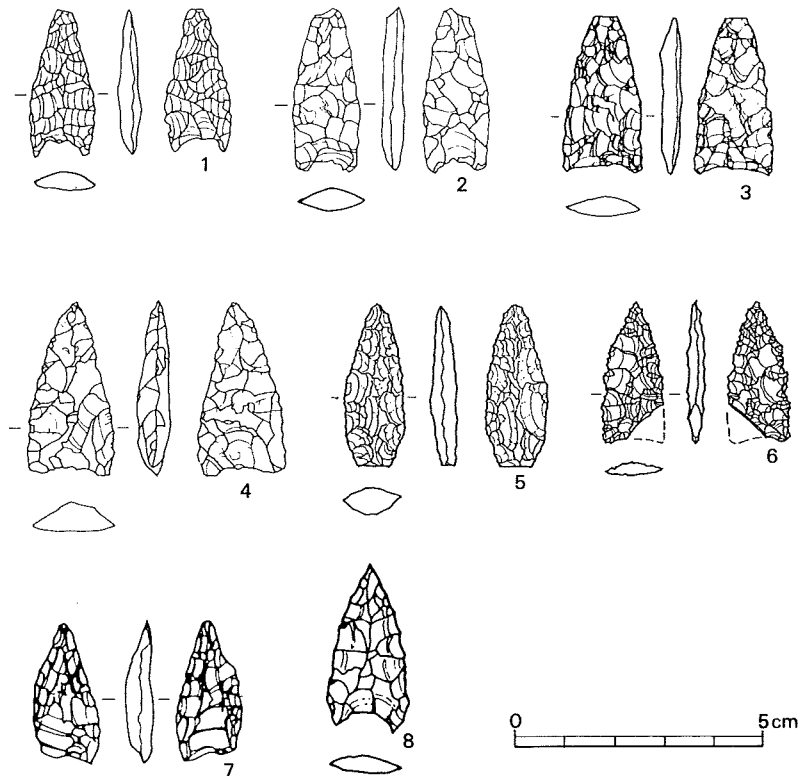


Fig. 28 石器参考図

以上に述べてきたような理由で、この石鏃の系統や、使用された地域あるいは時期などについて、明確なことを知るができない。

最後に疑問として残るのは、この種の石鏃を使用した人々が、どこから来たかということ、また、どこに行ったかということである。大久保遺跡を狩りの場としていた集団の、生活の多くの時間を過ごす居住地の有無についての疑問でもある。現時点では、このことについては明らかではない。今後の調査例が待たれる。

時代についてであるが、前目例は、縄文早期末から前期にかけてを主体とする遺跡での出土である。Fig.28・8は、鹿児島県始良郡溝辺町に所在する石峰遺跡からの出土品である<sup>註6</sup>。

長さが幅のほぼ2倍ある形のものである。ここでの4b層とされる層から出土していて、撚糸文や押型文土器と同じ層とされている。さらにこの4b層はアカホヤ層の下部にあり、桜島パミスの上に位置していることから、縄文時代早期から前期にかけてのものと考えられる。

指宿市の小牧3A遺跡からも吉田式土器のころの石鏃として、幅に較べて長さが長い形のもので出土したとされるが、詳細については知り得ない。

佐賀県佐賀市久保泉町川久保所在の久保泉丸山遺跡からも似たものが出土しているが<sup>註7</sup>、ここでの石鏃は表土や、古墳の盛り土から出土したもので、時期については確定できない。

以上の数例のみからの断定はできないが、形の似たものが、縄文時代早期から前期にかけての遺跡から出土しているという事実と、それらは通常の石鏃に、わずかの数が混って出土しているという事のみを、述べておくに留める。

高速道路の開通によって、町内には内陸型の工業団地の建設も計画されつつある、と伝えられている。今後の開発が続けば、それに伴う遺跡の調査が実施されることも考えられる。ここ数年の圃場整備事業に伴う発掘調査によって、東彼杵町内の弥生時代から中世にかけての遺跡の在り方、出土遺物についての実態が、明らかになりつつある。九州横断自動車道建設に伴う一連の調査でも、かなりの実態が明らかになっているが、今後は遺跡詳細分布調査などの地道な調査を進められ、遙かな昔からの人々の生活が明らかになる日を望んで止まない。

最後になったが、大久保遺跡の調査では多くの方々に大層お世話になった。地区の地権者代表をしておられた森山さん一家をはじめ、残暑の厳しい9月初めから現地の調査に従事された地元の方々、その他九州横断自動車道建設に関係しておられた方々に、この紙面を借りて心からお礼を申し上げ、本報告の最後としたい。

(藤田)

註1 長崎県教育委員会 『九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書Ⅶ』 1990

註2 長崎県教育委員会 『長崎県埋蔵文化財調査集報Ⅹ』 1987

註3 長崎県教育委員会 『九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書Ⅵ』 1989

- 註4 本報告書中の上八竜遺跡に詳しい
- 註5 長崎県大村市稗田遺跡調査会 『稗田遺跡』 1988
- 註6 鹿児島県教育委員会 『石峰遺跡』 「九州縦貫自動車道埋蔵文化財緊急発掘調査報告Ⅳ」鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(12)」 1980
- 註7 佐賀県教育委員会 『久保泉丸山遺跡』 「九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書(5)」 1986

#### 参考文献

- 国土地理協会 『全国遺跡地図 42 長崎県』 1976
- 東彼杵町教育委員会 『川井川内遺跡』 東彼杵町文化財調査報告書第1集 1986
- 東彼杵町教育委員会 『岡遺跡』 東彼杵町文化財調査報告書第2集 1988
- 東彼杵町教育委員会 『白井川遺跡』 東彼杵町文化財調査報告書第3集 1989
- 東彼杵町教育委員会 『白井川遺跡(2)』 東彼杵町文化財調査報告書第4集 1990
- 長崎県教育委員会 『長崎県遺跡地図』 長崎県文化財調査報告書第87集 1987

PLATES  
(大久保遺跡)



写真中央の丘陵部分



大久保遺跡遠景





調査前の状況



調査風景

大久保遺跡近景

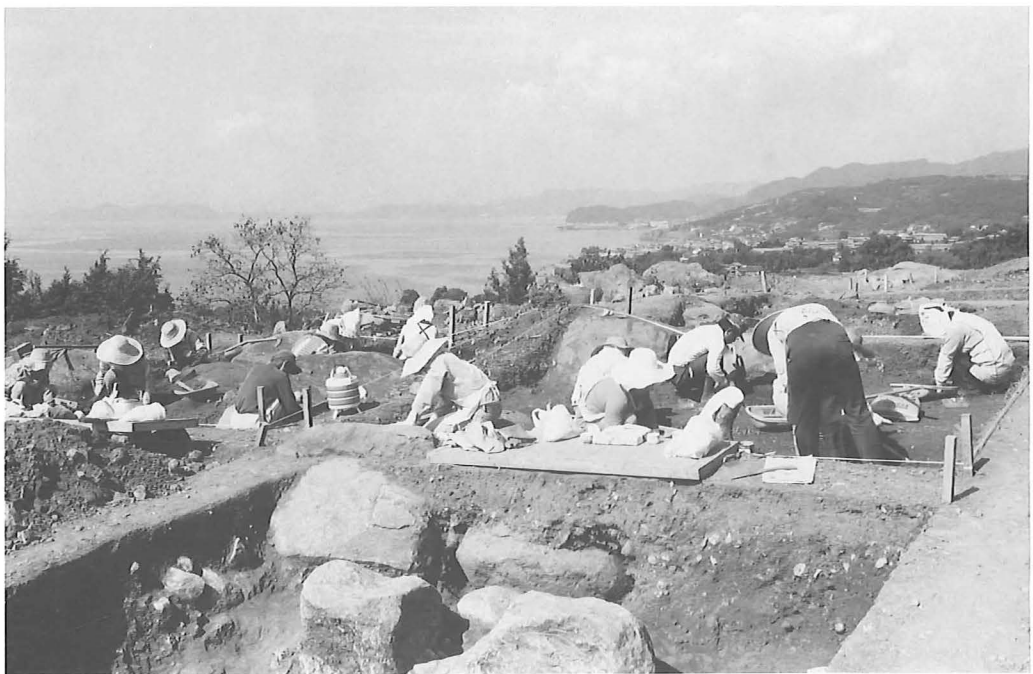


塚状のものの高まり



調査風景

大久保遺跡近景





遺跡から彼杵方向を望む



土層の状況 (1)



土層の状況 (2)

C列の東壁



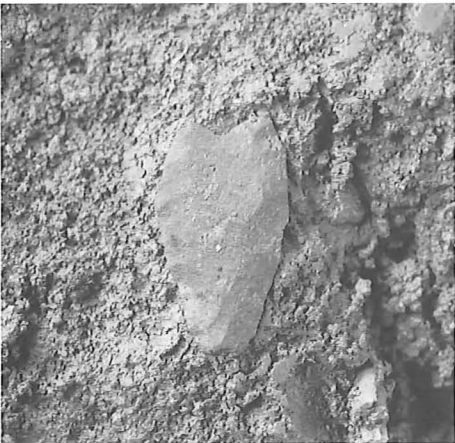
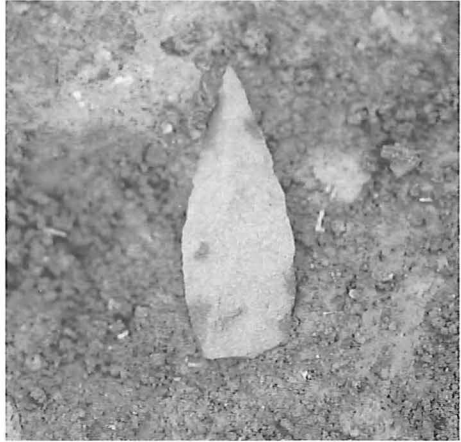
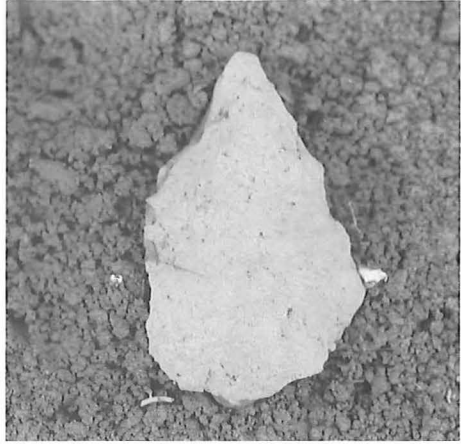
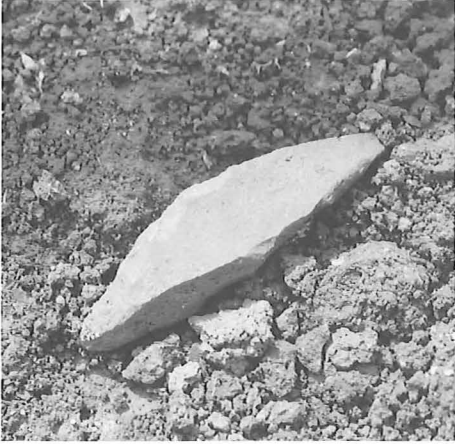
土層の状況 (3)

C列の東壁



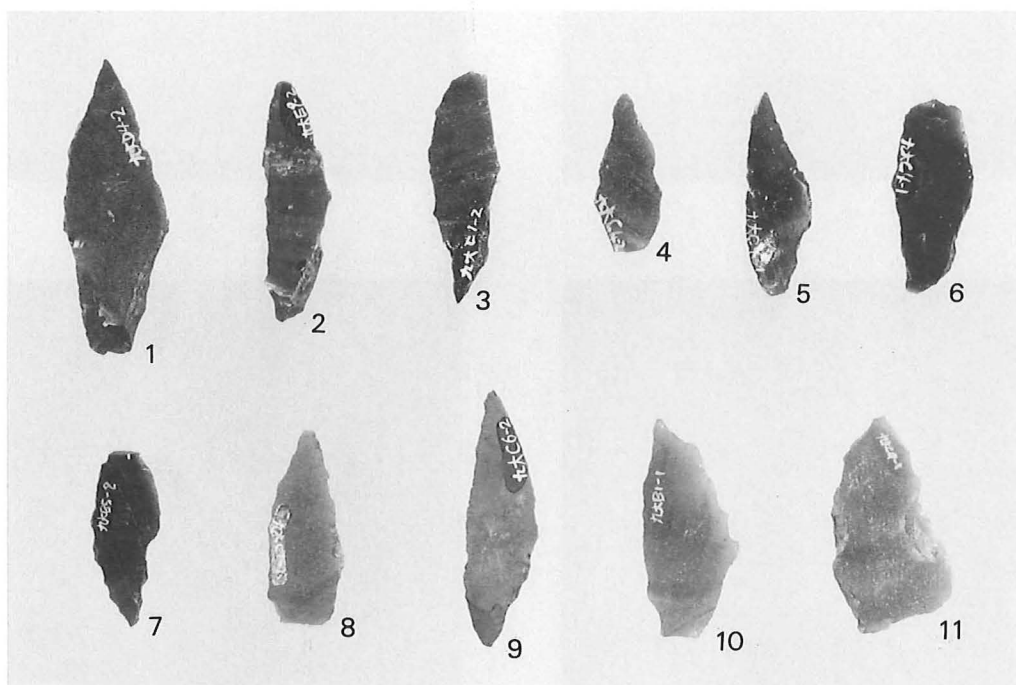
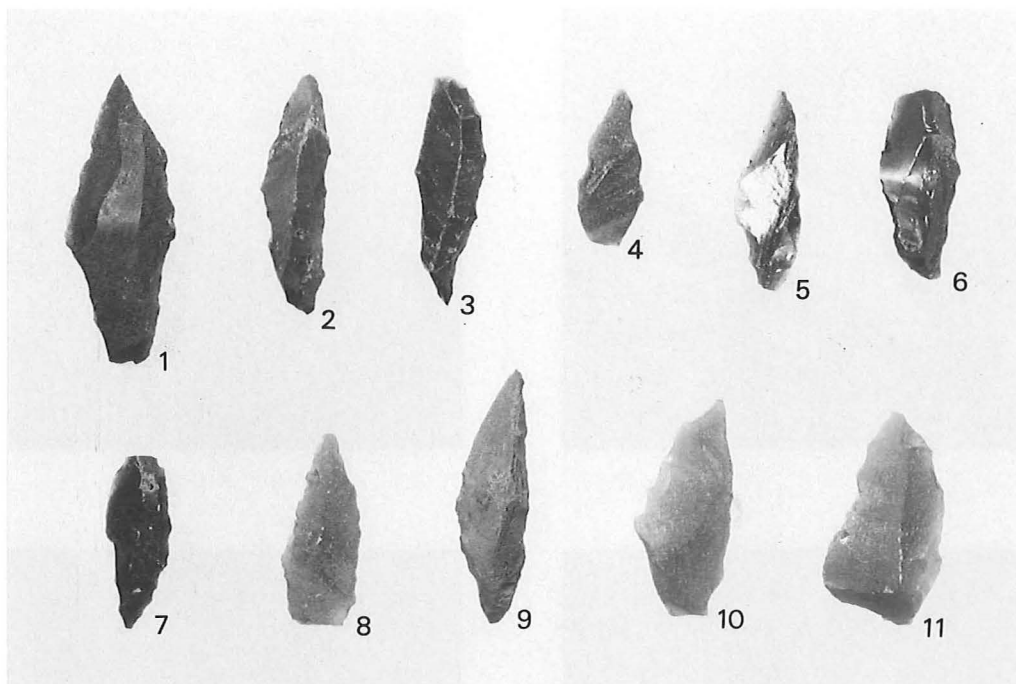
土層の状況 (4)

7列の北壁

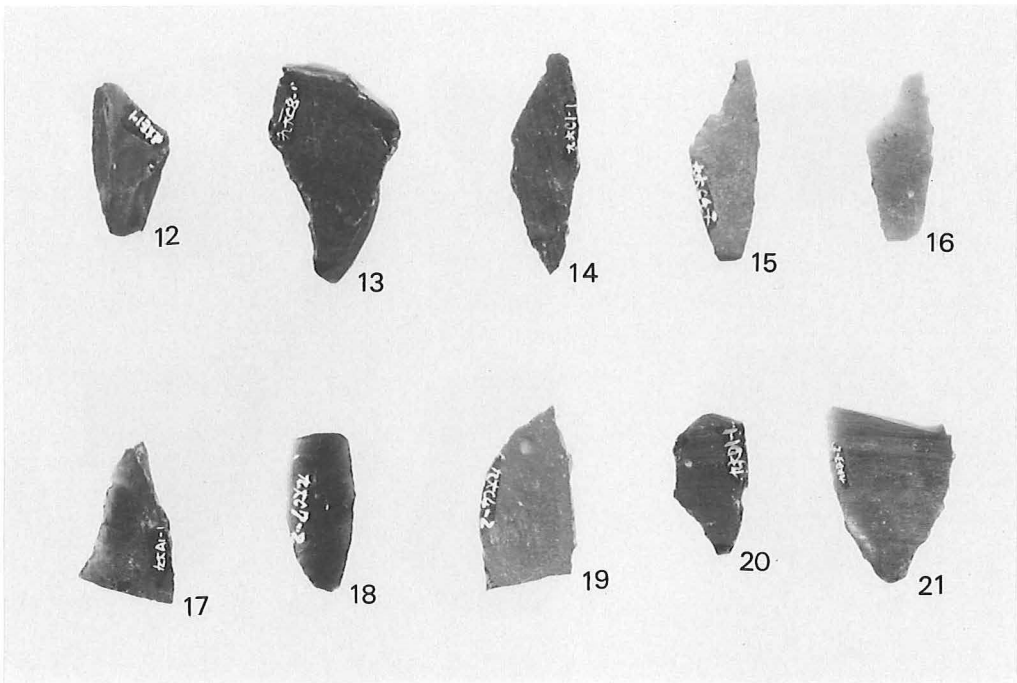
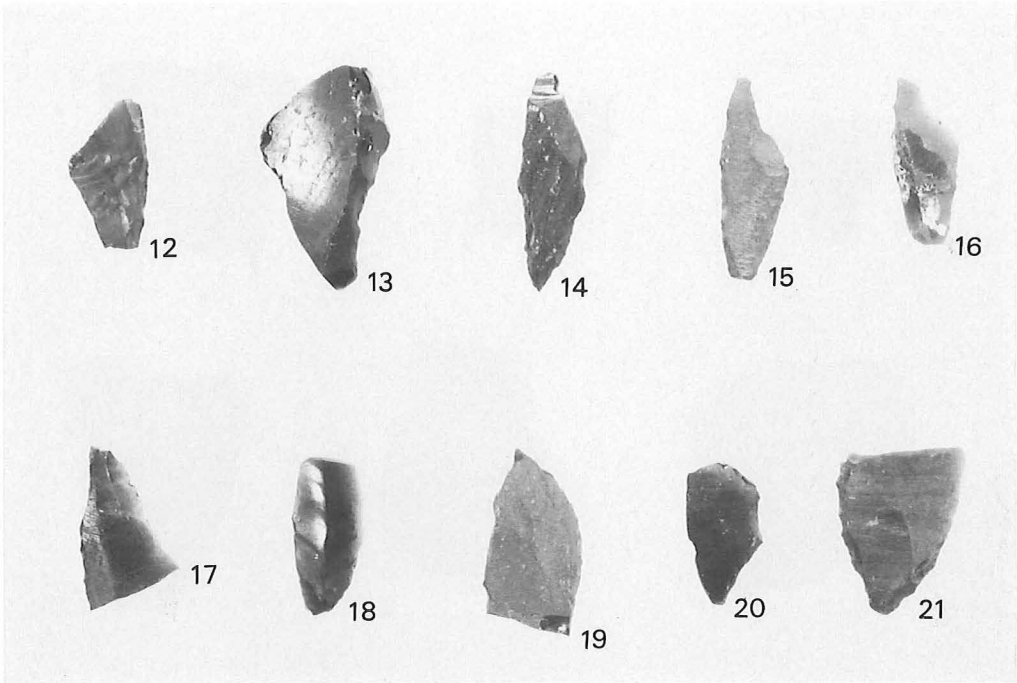


遺物出土状況

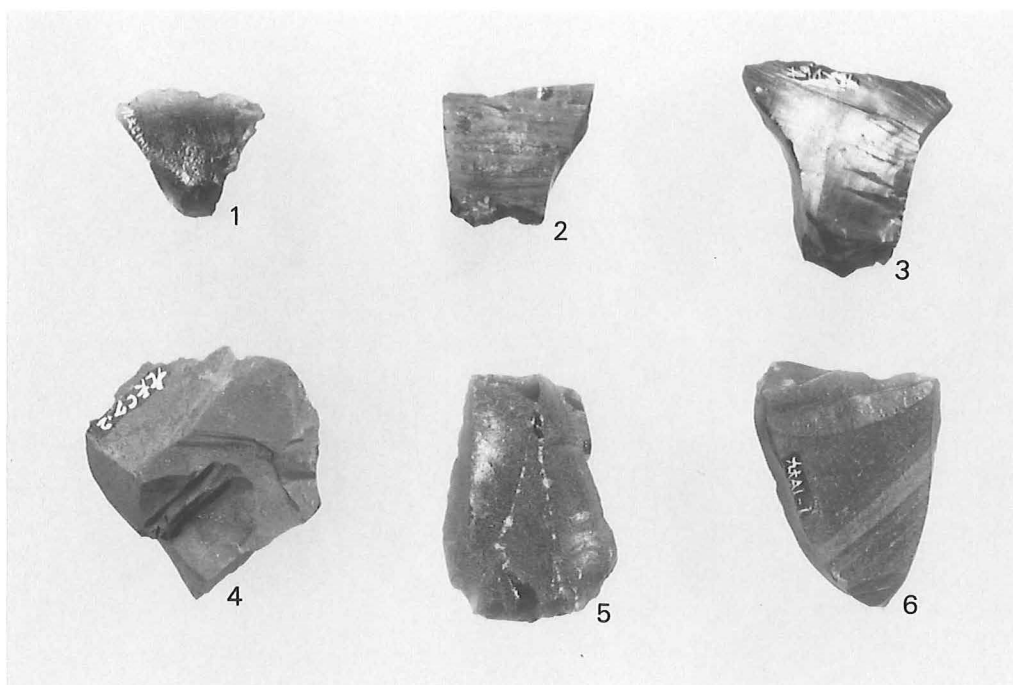
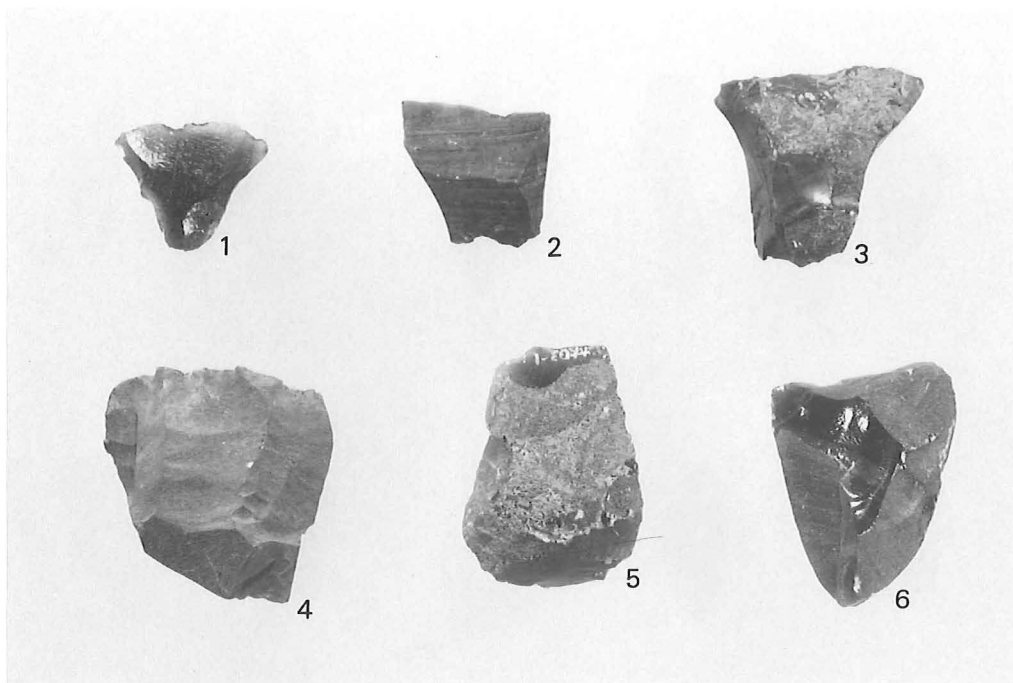




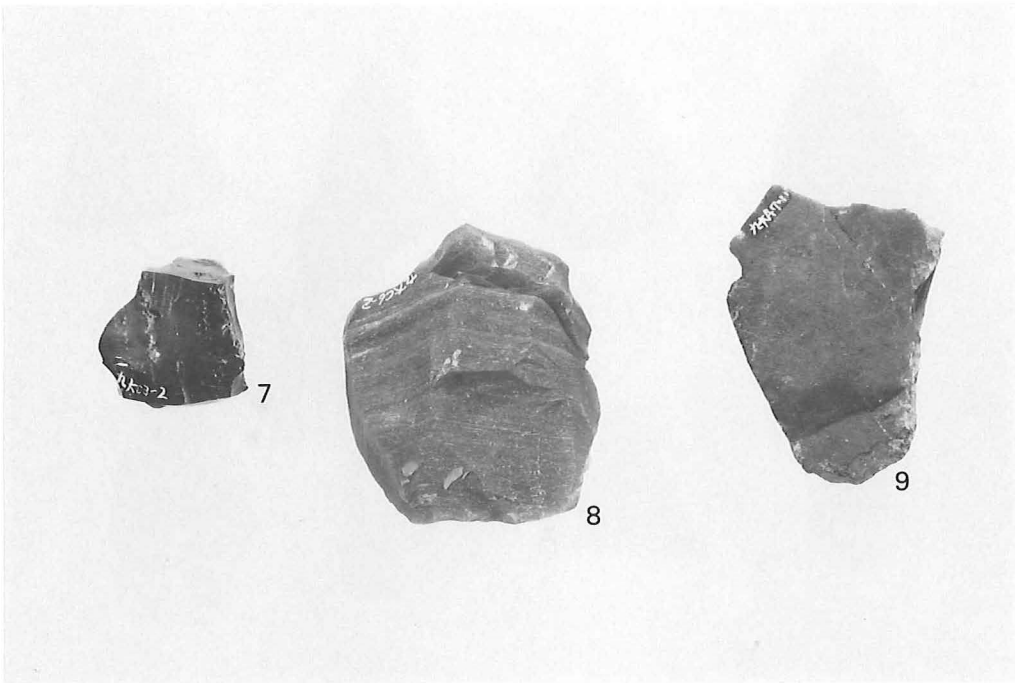
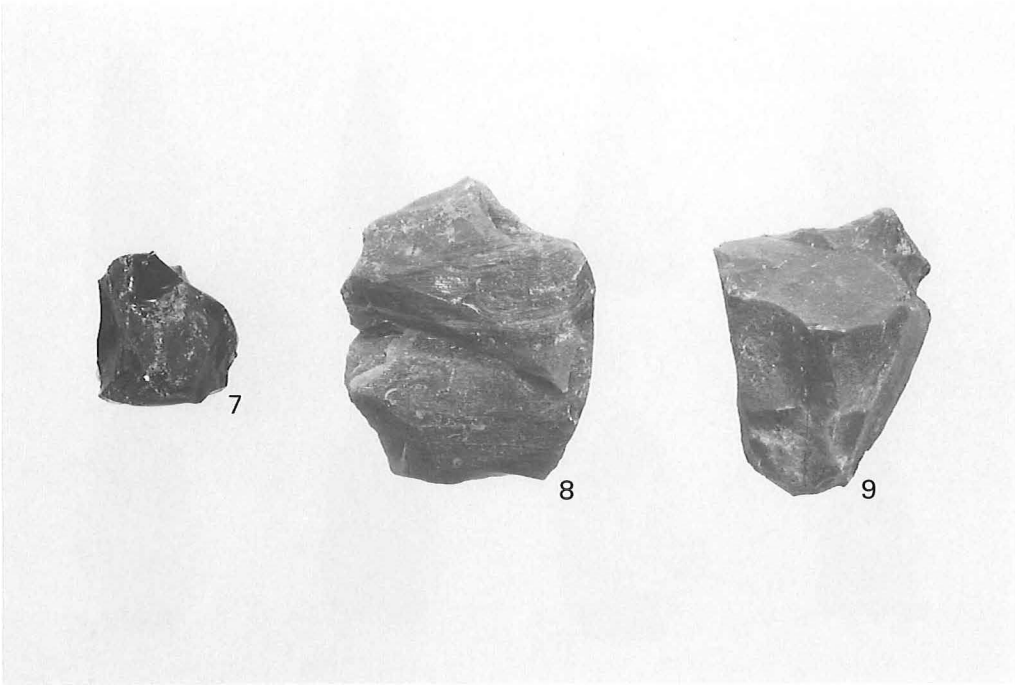
石器（番号はFig. 13の番号に一致する）



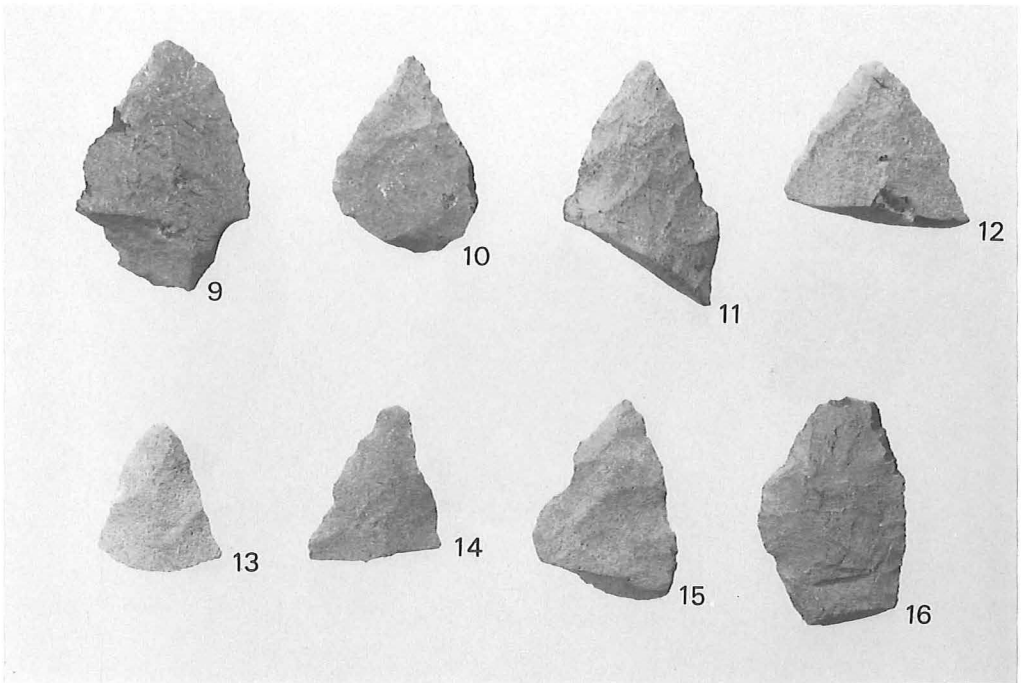
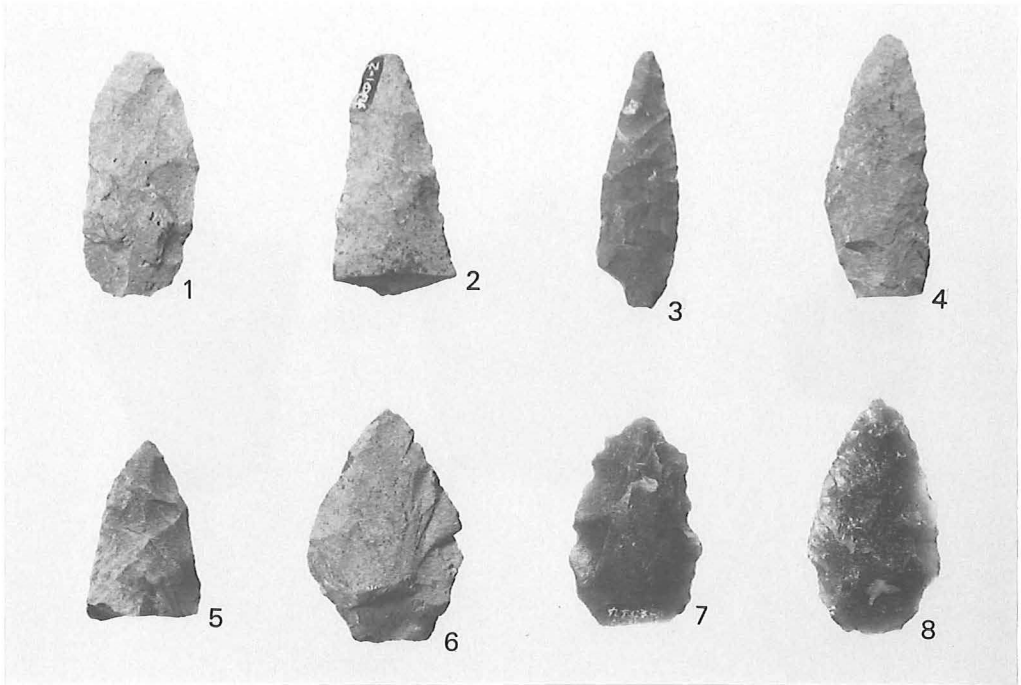
石器 (番号はFig. 13の番号に一致する)



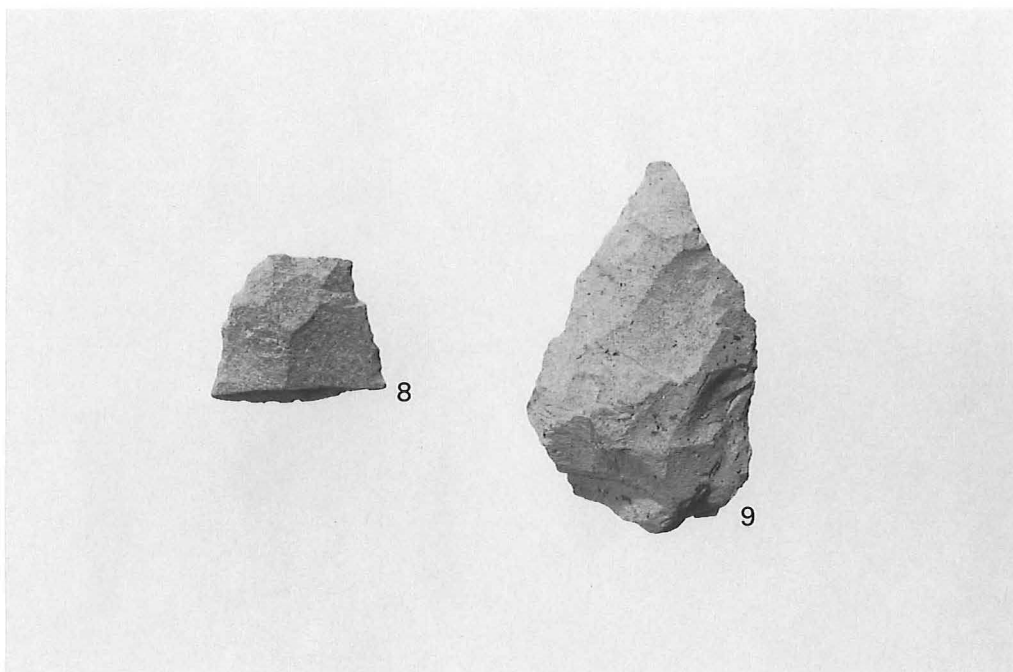
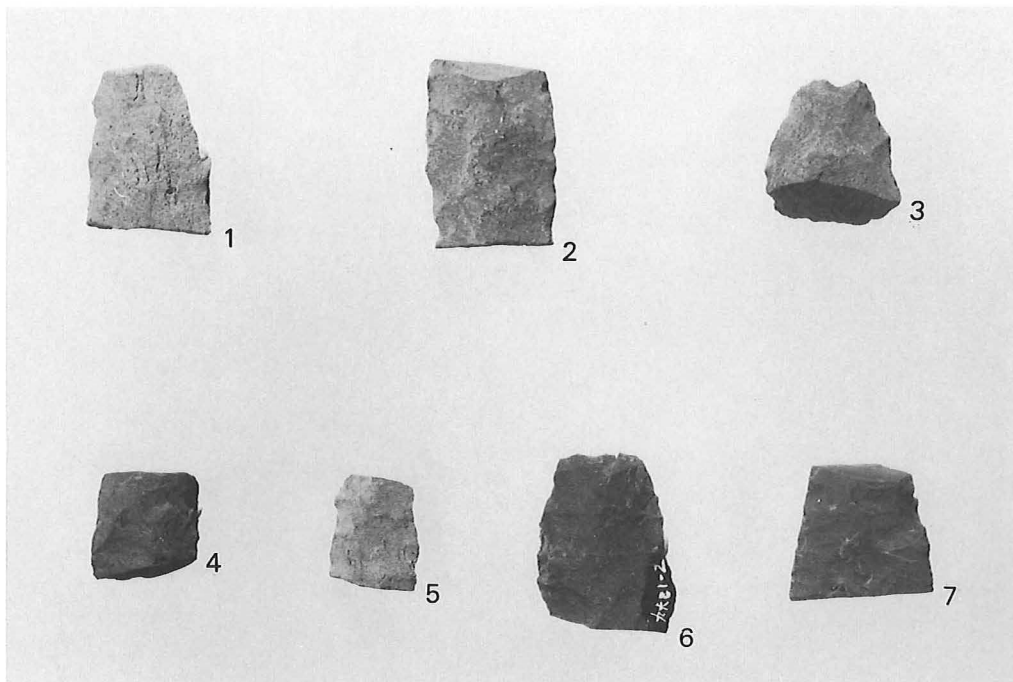
石器（番号はFig. 14の番号に一致する）



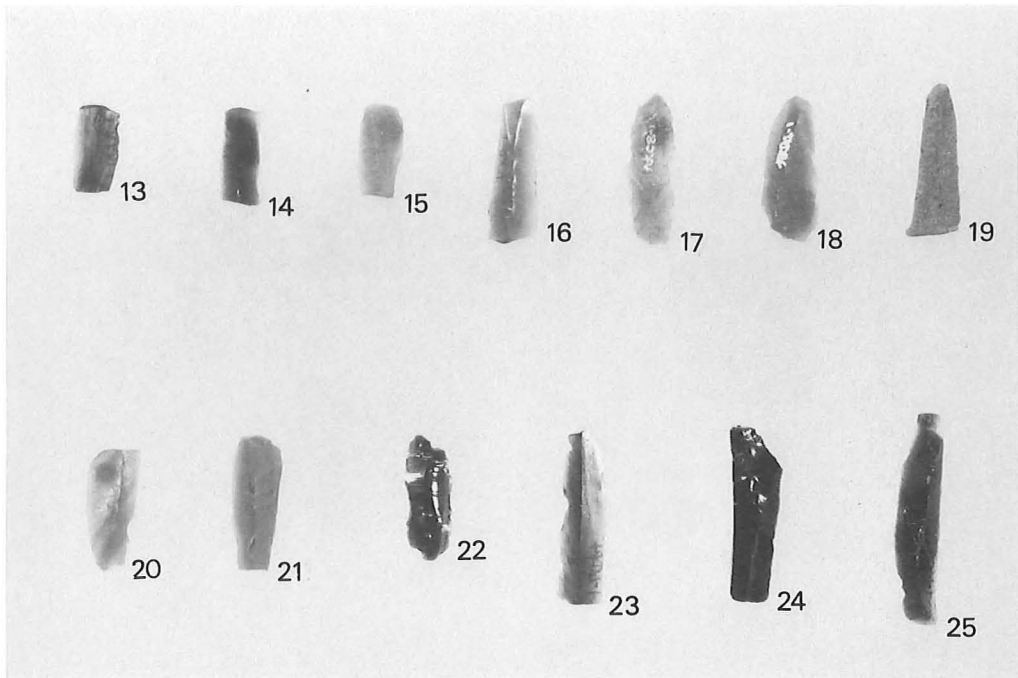
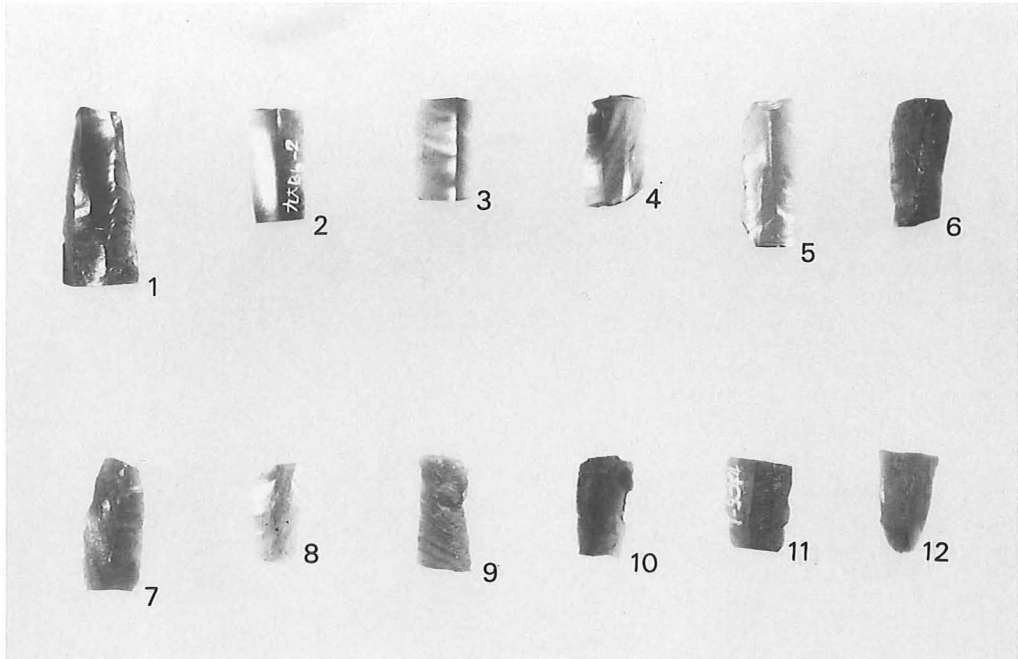
石器 (番号はFig. 14の番号に一致する)



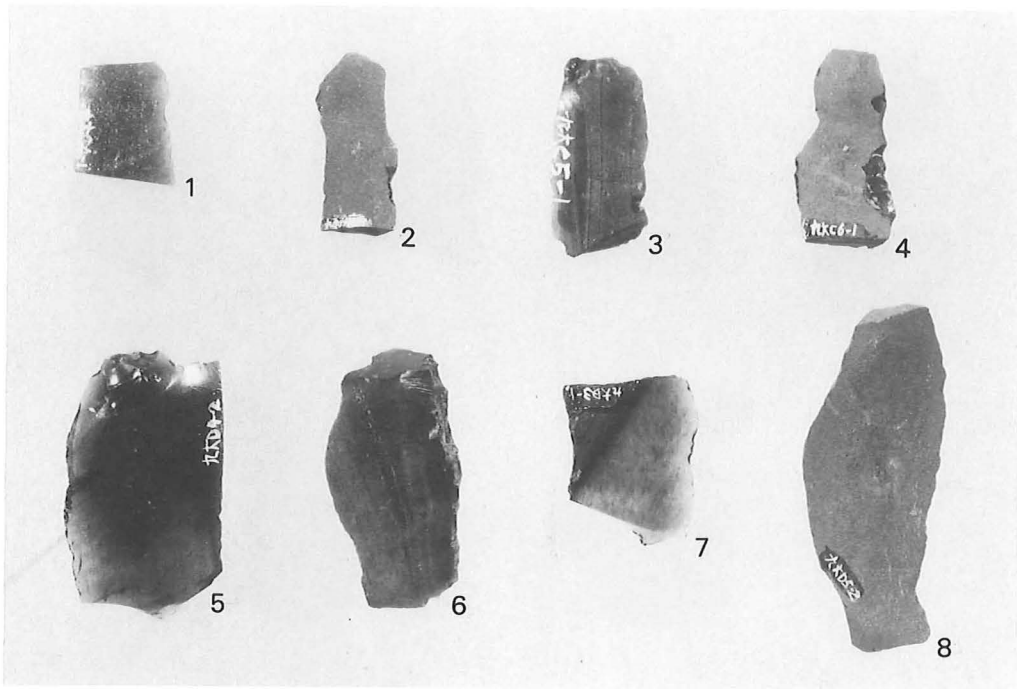
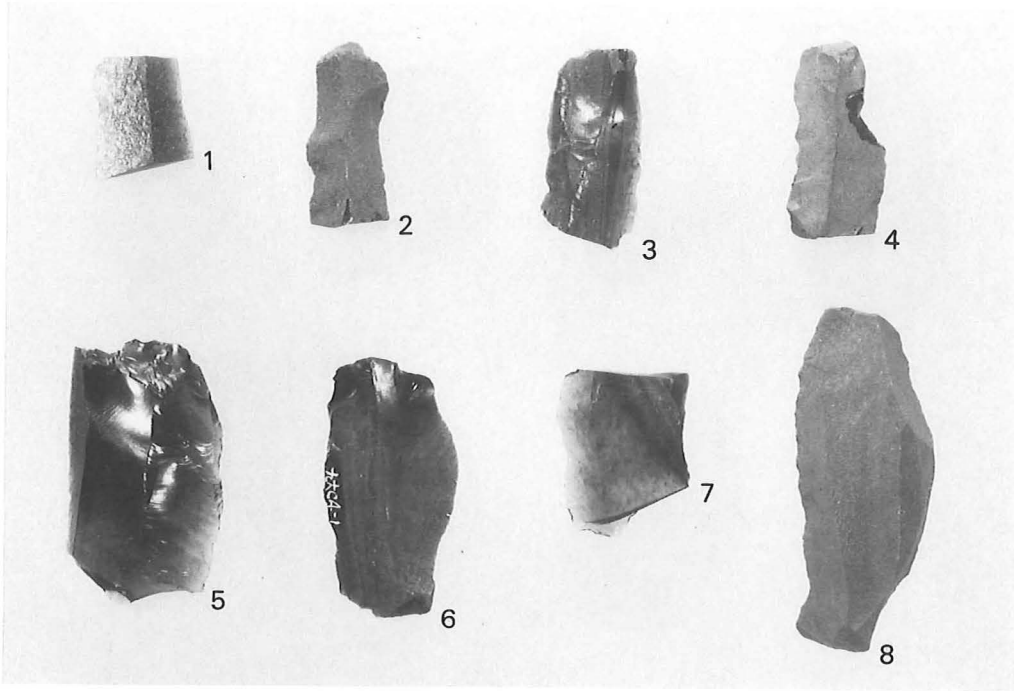
石器（番号はFig. 15の番号に一致する）



石器 (番号はFig. 16の番号に一致する)

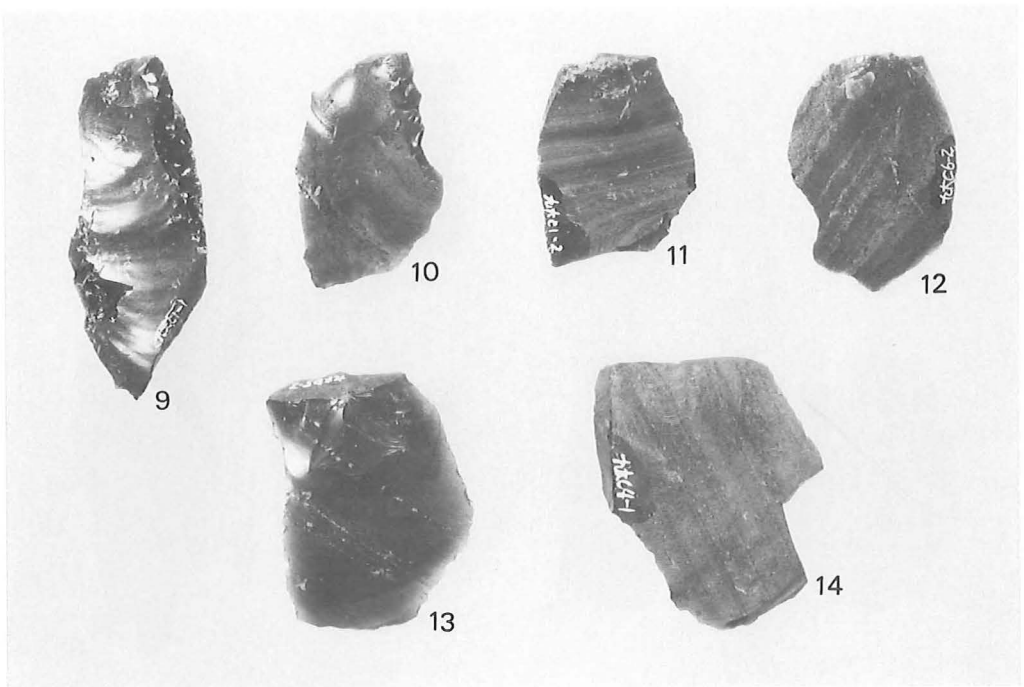
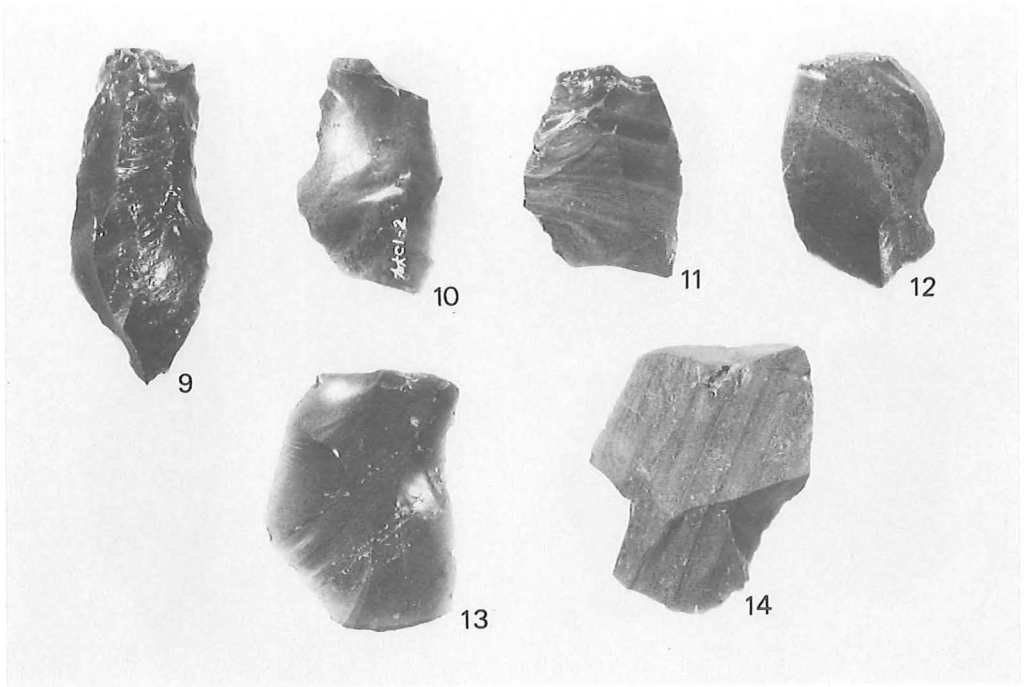


石器 (番号はFig. 17の番号に一致する)

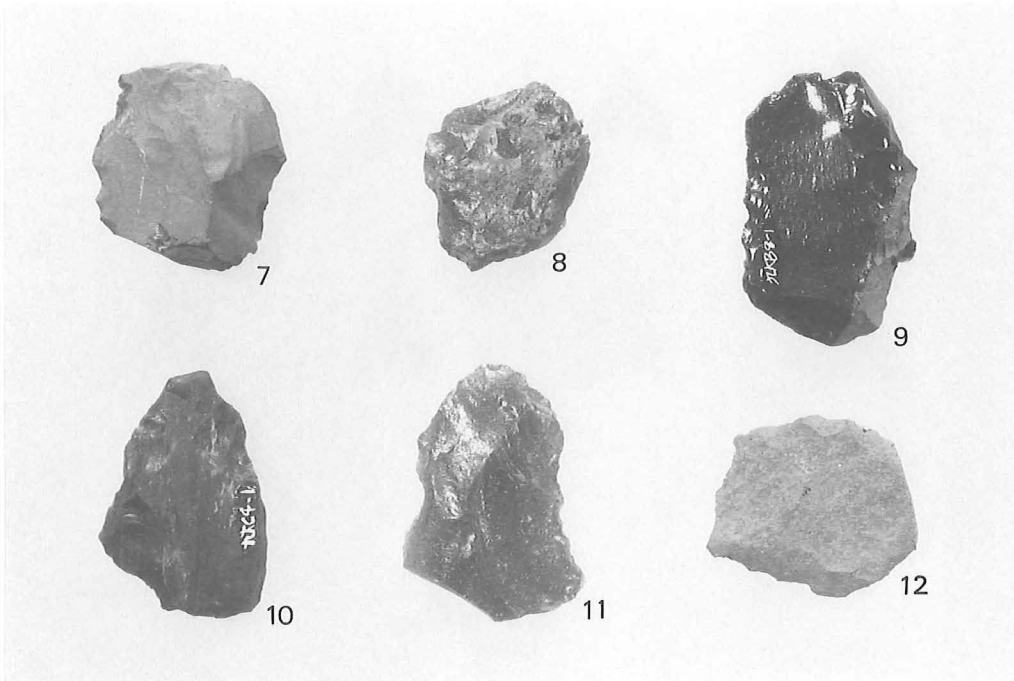
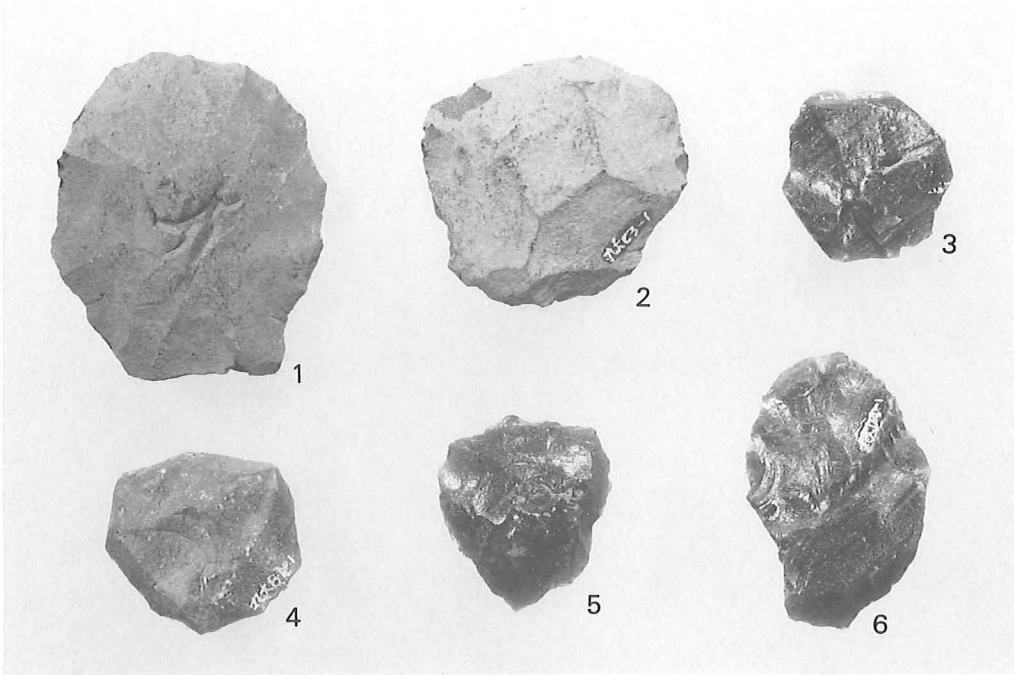


石器（番号はFig. 18の番号に一致する）

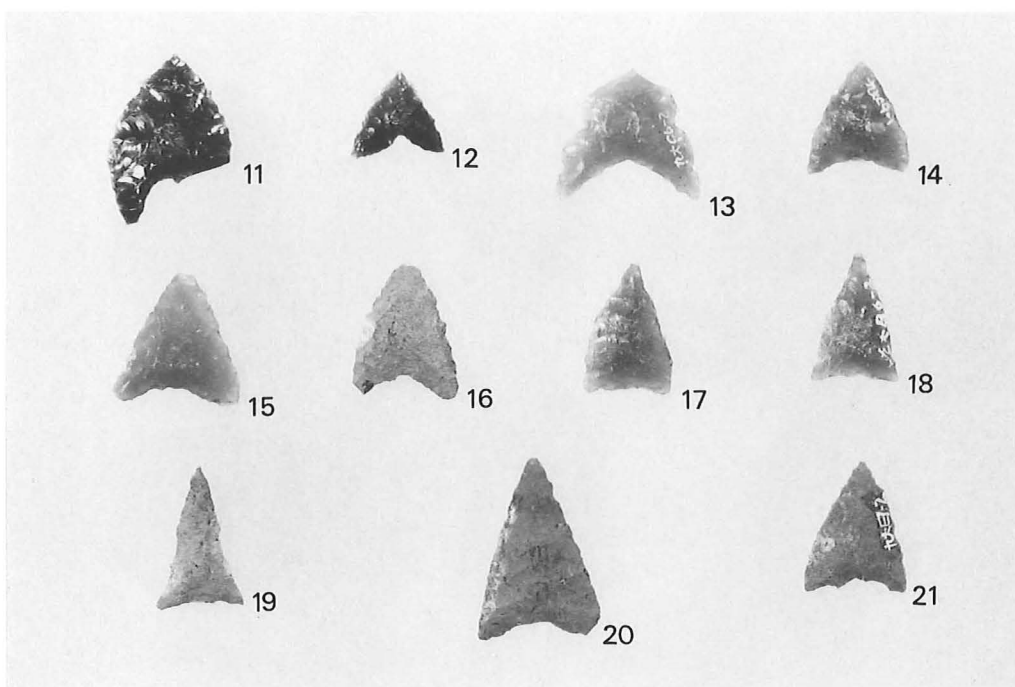
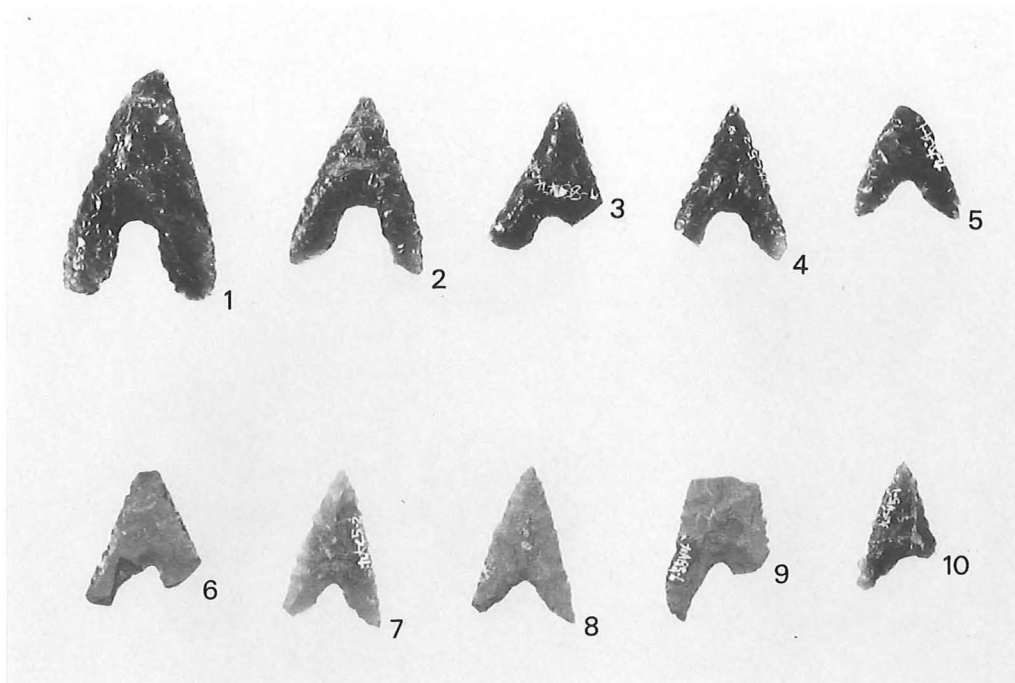




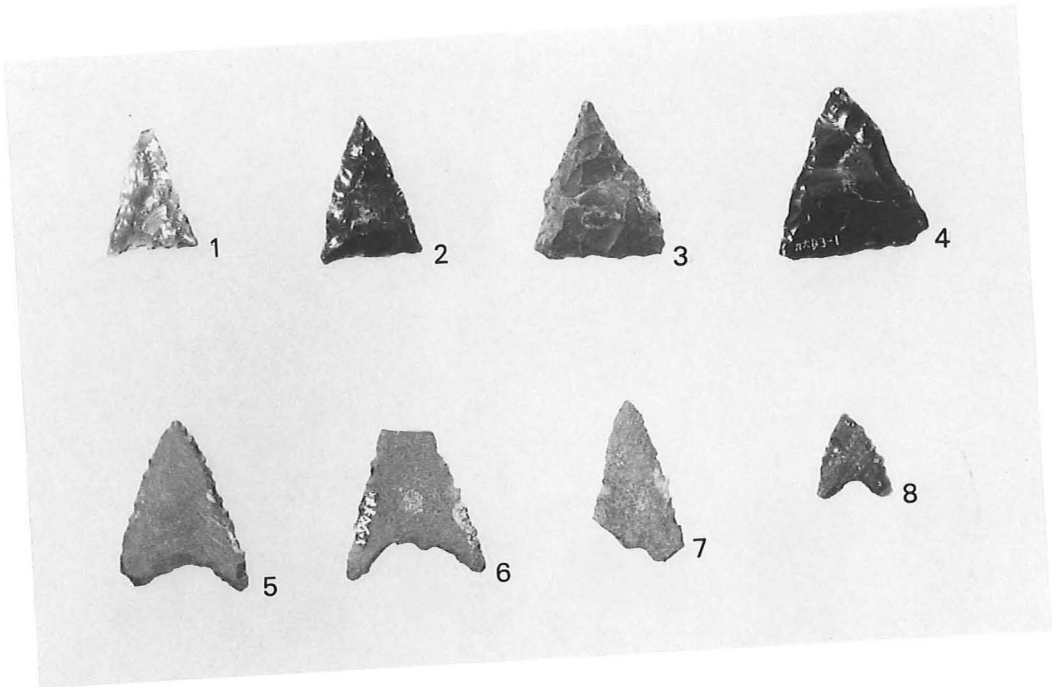
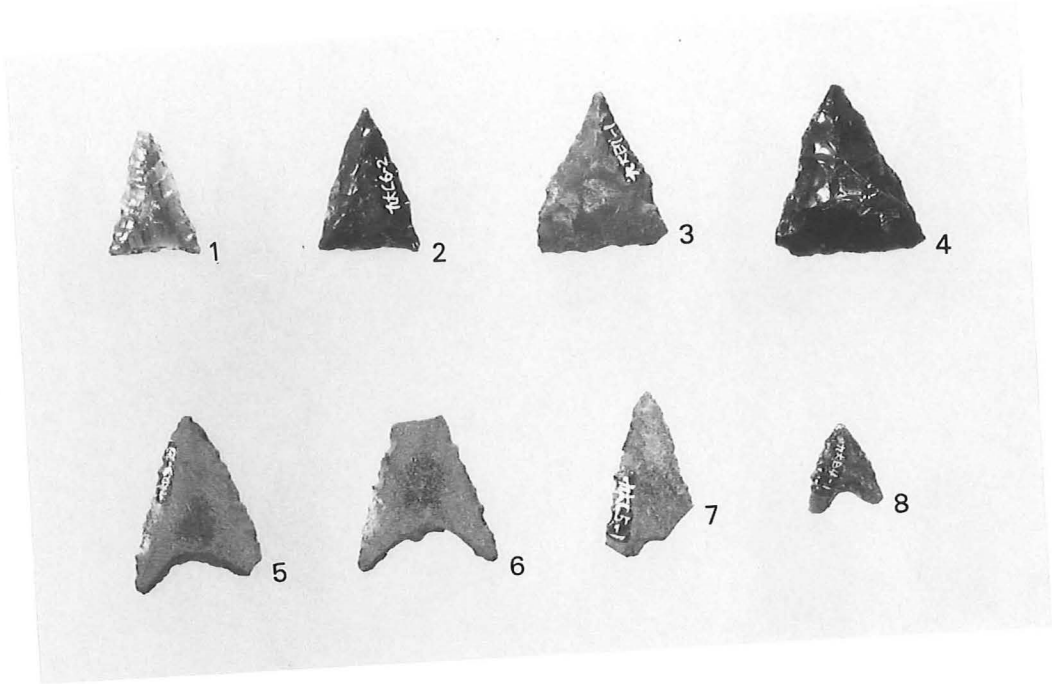
石器 (番号はFig. 18の番号に一致する)



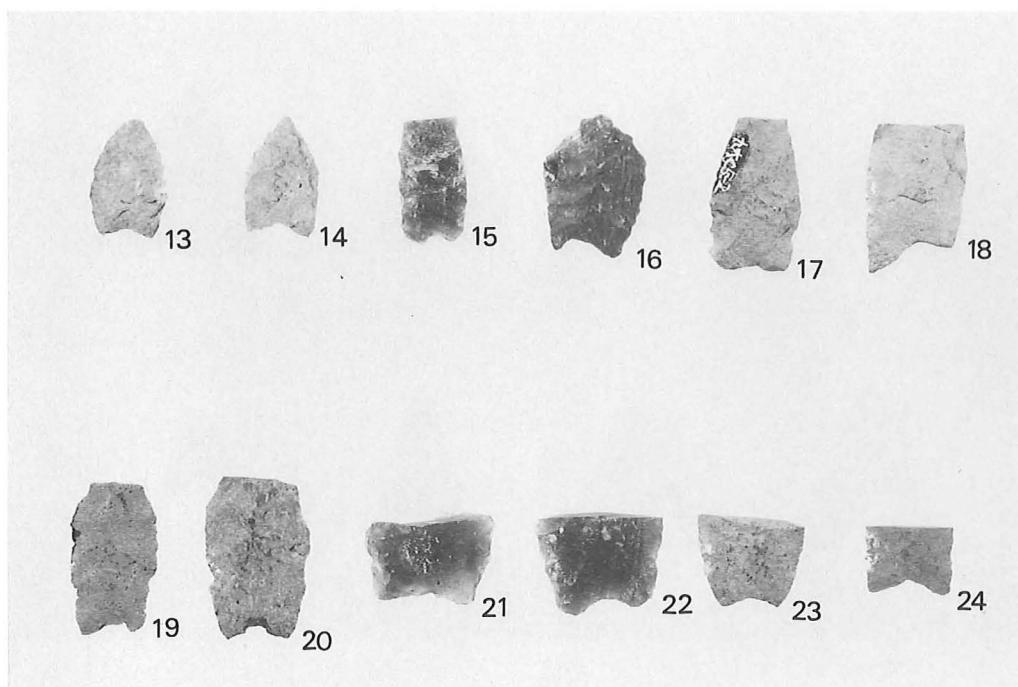
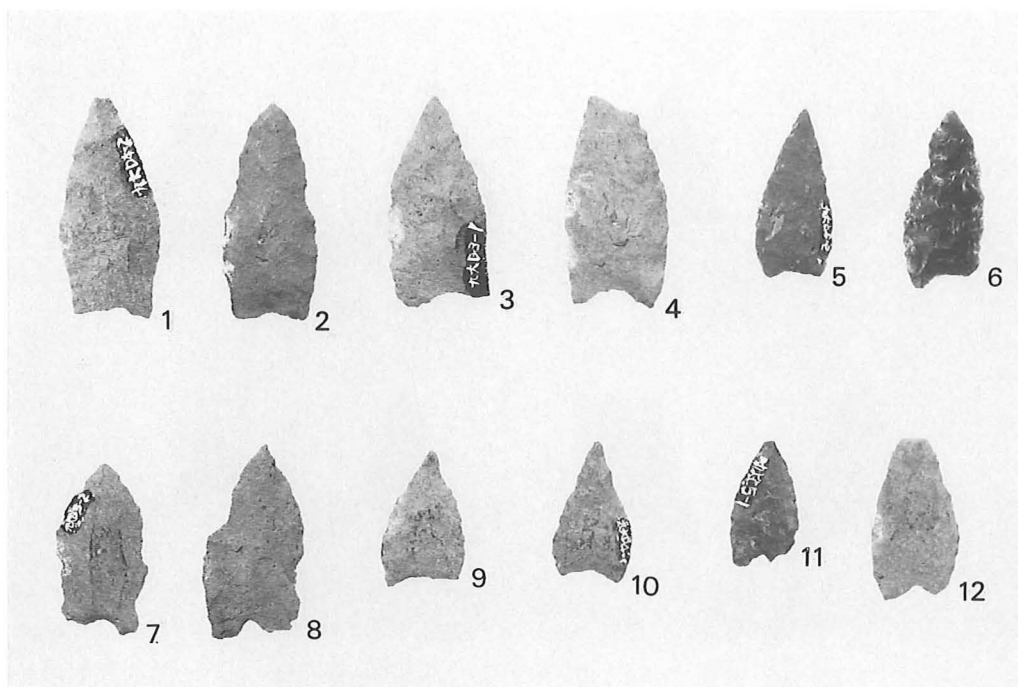
石器（番号はFig. 19の番号に一致する）



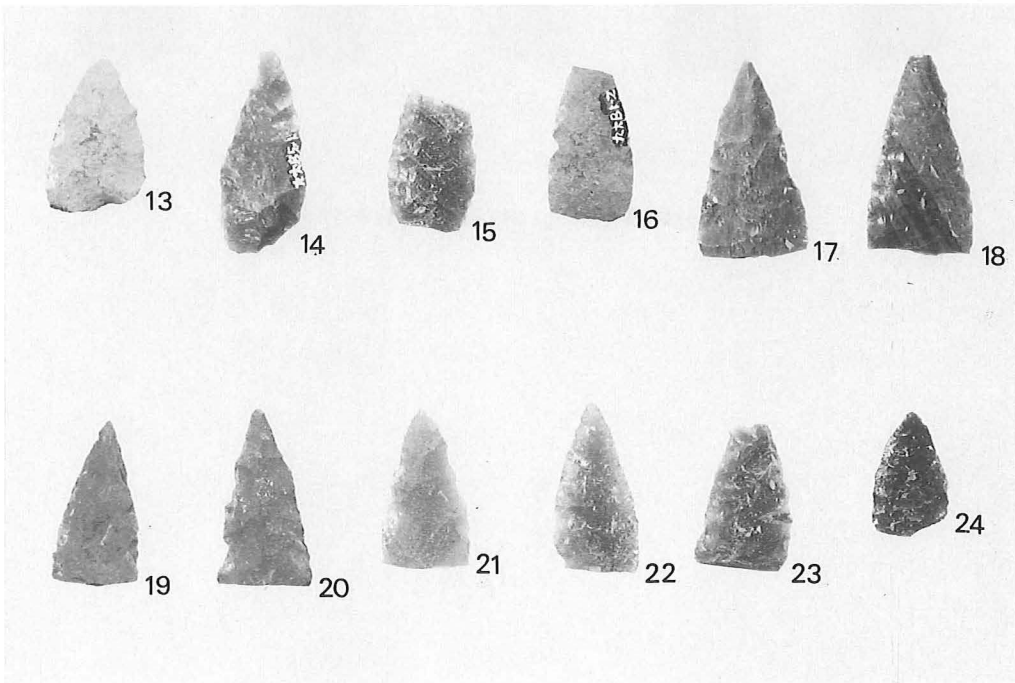
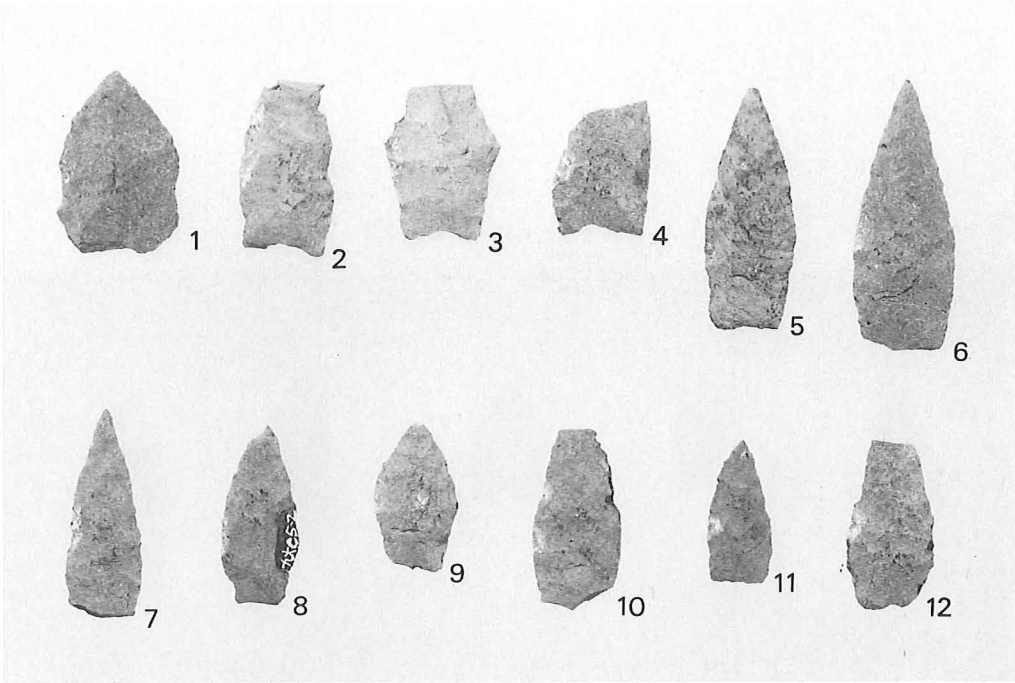
石器 (番号はFig. 20の番号に一致する)



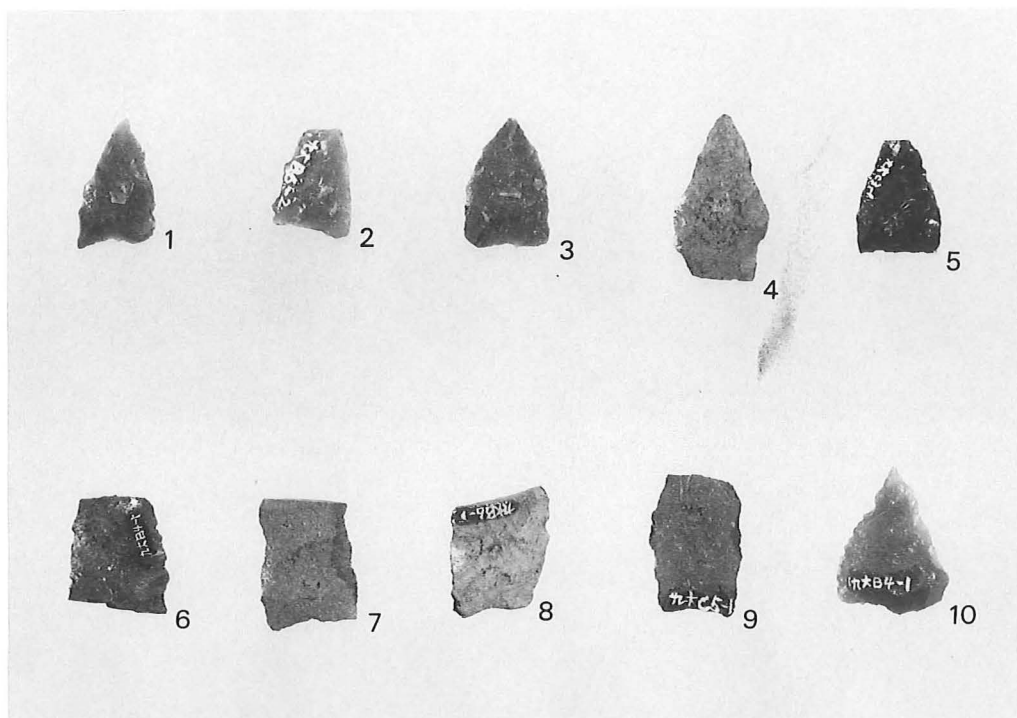
石器 (番号はFig. 21の番号に一致する)



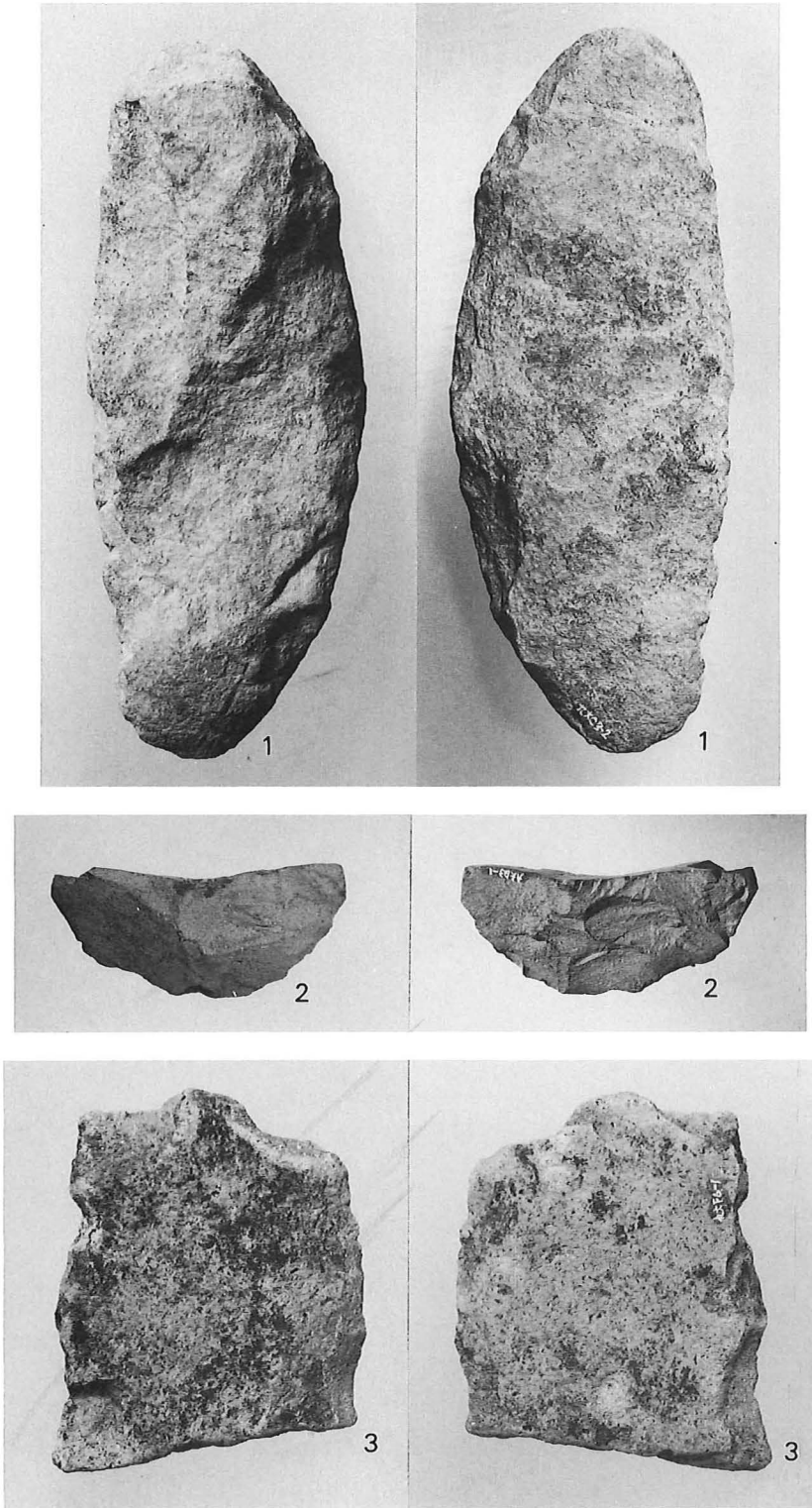
石器（番号はFig. 22の番号に一致する）



石器（番号はFig. 23の番号に一致する）

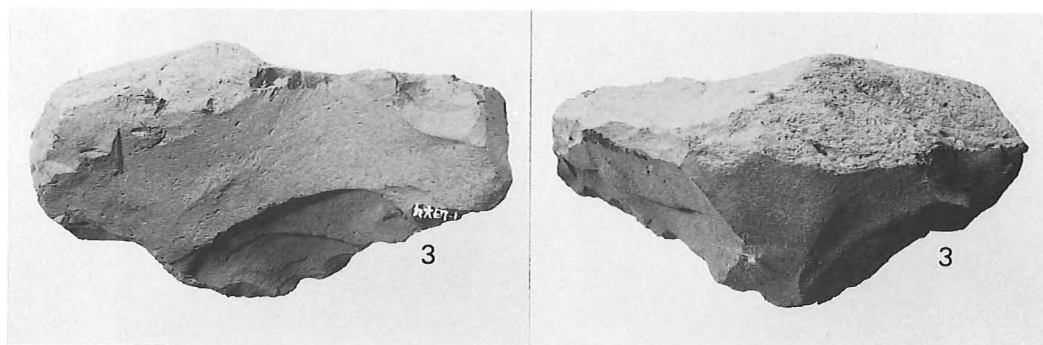
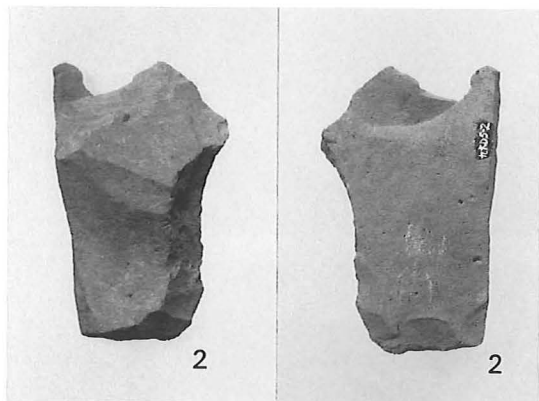
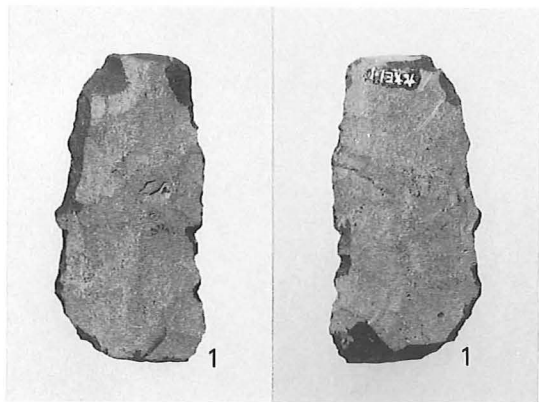


石器 (番号はFig. 24の番号に一致する)

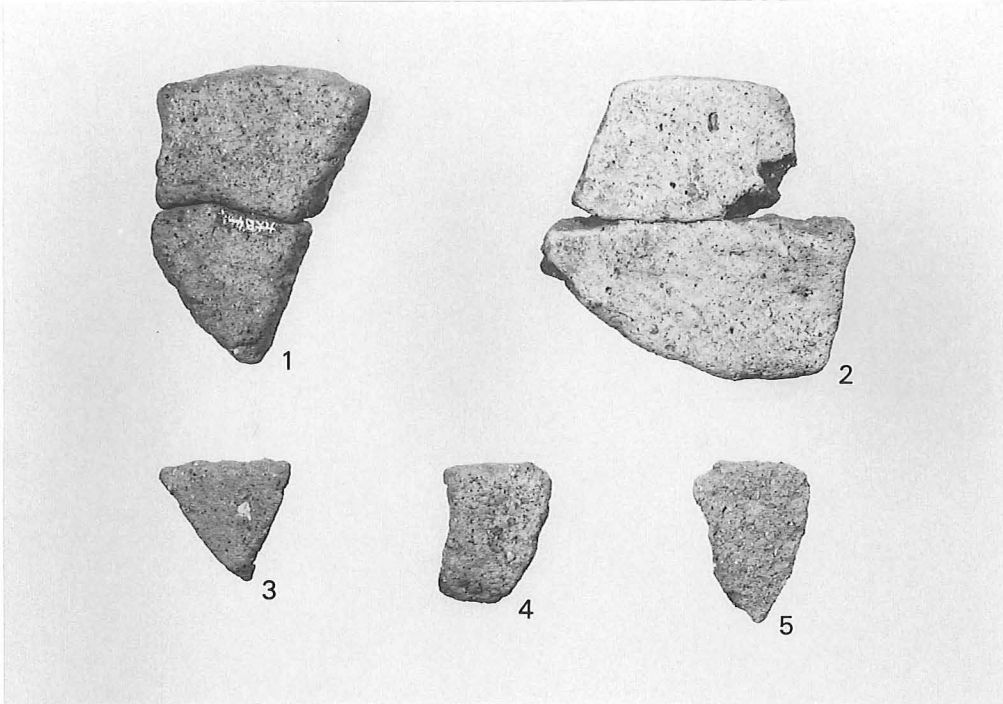


石器（番号はFig. 25の番号に一致する）





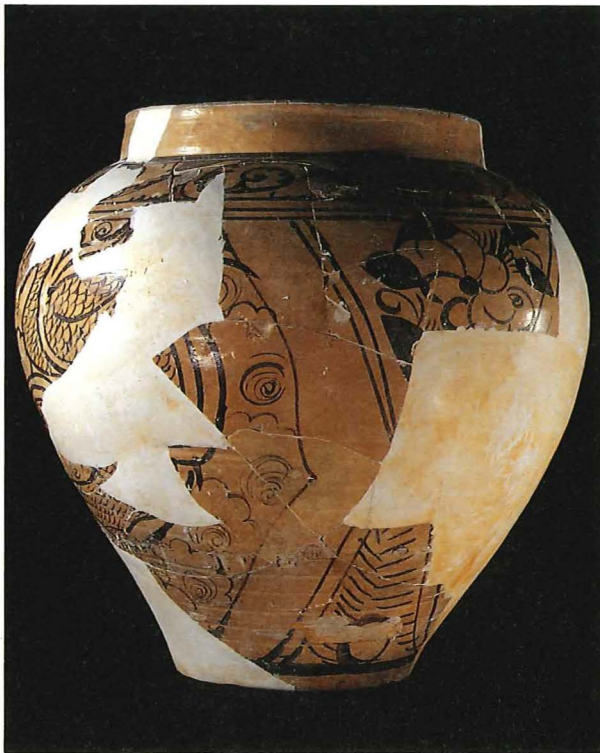
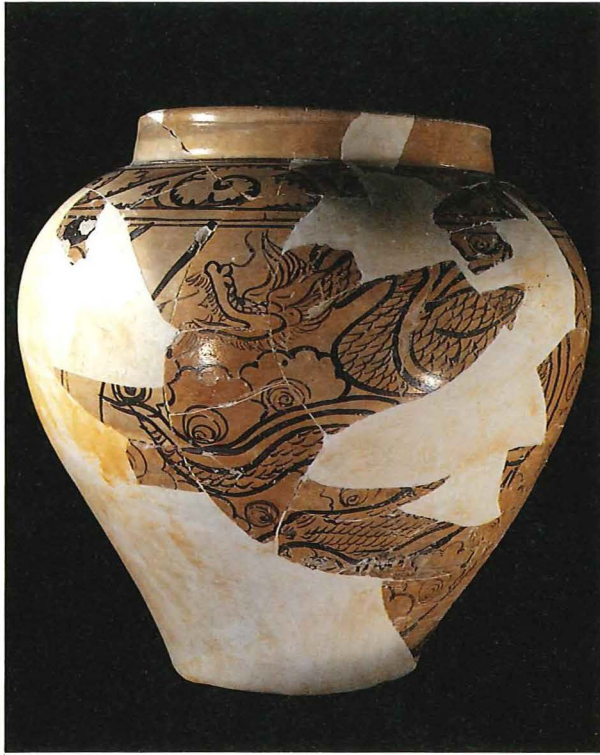
石器（番号はFig. 26の番号に一致する）



土器（番号はFig. 27の番号に一致する）

## 4. 小菌城跡





## 本文目次

I 調査	439
1. 地理的位置	439
2. 調査の概要	439
3. 土層	442
II 遺構	450
1 E (陶磁器・集石混在)	450
2 D (陶磁器・集石混在)	450
3 D (陶磁器・集石混在)	450
5 C (陶磁器・集石混在)	450
6 C (带状の集石及び陶磁器混在)	457
7 C (土壌)	457
8 B (土壌)	457
9 B (土壌)	457
10 B (空堀)	457
11 A (土壌)	457
4 D・12 A (带状の集石及び陶磁器混在)	450・464
13 F (陶磁器・集石混在)	464
14 E (陶磁器・集石混在)	464
14 K (集石)	464
15 E (柱穴)・16 D (陶磁器・集石混在)	464
17 E (土壌)	464
18 C' (空堀)	464
19 C (埋甕)	471
20 C・21 C (柱穴)	471
22 S (土壌)	474
23 S (柱穴)	474
24 C (陶磁器・集石混在)	474
25 B (柱穴)	474
26 E (土壌)	474
27 B (土壌)	474
28 A (柱穴)	482
29 A (柱穴)	482

30 B · 31 B (柱穴)	482
32 A (埋甕)	485
33 G (土壙)	485
34 G (土壙)	485
35 O (土壙)	488
36 O (土壙)	488
37 N (土壙)	488
38 N (土壙)	488
39 O (土壙)	488
40 O (土壙) · 41 N (土壙)	488
42 N (土壙)	488
43 N · 44 N (柱穴)	490
45 N (土壙)	490
46 I (土壙墓)	491
47 I (土壙墓)	491
48 I (土壙墓)	495
49 I (土壙)	495
51 I (埋甕)	500
52 M (柱穴)	501
53 M (土壙)	501
50 R · 54 T (集石)	500 · 503
54 I (石列)	503
55 I (土壙墓)	506
56 H (土壙)	506
57 N (土壙)	506
57 P (建物跡)	509
58 P (建物跡)	509
59 P (建物跡)	509
60 P (建物跡)	509
61 P · 62 P (建物跡)	509 · 511
63 P (建物跡)	511
64 P · 65 P (建物跡)	515
66 P (建物跡)	515

Ⅲ 出土遺物	525
1. 土器	525
① 縄文時代の土器	525
② 弥生時代の土器	527
③ 古墳時代の土器	529
④ 古代・中世の陶磁器類他	532
⑤ 朝鮮系瓦	565
⑥ 近世陶磁器, 他	574
2. 石器	622
① 旧石器時代の石器	622
② 縄文時代の石器	622
Ⅳ 総括	682

## 挿 図 目 次

Fig. 1	小菌城跡調査区位置図 (1/2000)	440
Fig. 2	調査区及び遺構配置図 (1/1000)	441
Fig. 3	1区の土層図 (1/60)	443・444
Fig. 4	2区・3区の土層図 (1/60)	445・446
Fig. 5	4区・5区の土層図	447・448
Fig. 6	近世遺構配置図 (57Pと6Cの先後関係図)	451・452
Fig. 7	1E (陶磁器・集石混在) 1/20	453
Fig. 8	2D (陶磁器・集石混在) 1/20	454
Fig. 9	3D (陶磁器・集石混在) 1/20	455
Fig. 10	5C (陶磁器・集石混在) 1/20	456
Fig. 11	6C (帯状の集石及び陶磁器混在)	458
Fig. 12	7C (土壌)	459
Fig. 13	9B (土壌)	460
Fig. 14	10B・18C' (空堀)	461・462
Fig. 15	11A (土壌)	463
Fig. 16	4D・6C・12A (帯状の集石及び陶磁器混在) 1/80	465・466
Fig. 17	13F (陶磁器・集石混在) 1/20	467・468
Fig. 18	14E (陶磁器・集石混在) 1/20	469
Fig. 19	15E (柱穴)・16D (陶磁器・集石混在)	470

Fig. 20	17 E (土壙)	471
Fig. 21	19 C (埋甕)	472
Fig. 22	20 C · 21 C (柱穴)	473
Fig. 23	22 S (土壙)	475 · 476
Fig. 24	23 S (柱穴) 1/20	477
Fig. 25	24 C (陶磁器 · 集石混在) 1/20	478
Fig. 26	25 B (柱穴) 1/20	479
Fig. 27	26 E (土壙) 1/20	480
Fig. 28	27 B (土壙)	481
Fig. 29	28 A (柱穴) 1/20	482
Fig. 30	29 A (柱穴) 1/20	483
Fig. 31	30 B · 31 B (柱穴) 1/20	484
Fig. 32	32 A (埋甕)	485
Fig. 33	33 G (土壙) 1/20	486
Fig. 34	34 G (土壙) 1/20	487
Fig. 35	35 O (土壙) 1/20	489
Fig. 36	36 O (土壙)	490
Fig. 37	37 N (土壙)	491
Fig. 38	38 N (土壙) 1/20	492
Fig. 39	39 O (土壙) 1/20	493
Fig. 40	40 O (土壙) · 41 N (土壙) 1/20	494
Fig. 41	42 N (土壙)	495
Fig. 42	43 N · 44 N (柱穴) 1/20	496
Fig. 43	45 N (土壙) 1/20	497
Fig. 44	46 I (土壙墓) 1/20	498
Fig. 45	47 I (土壙墓) 1/20	499
Fig. 46	48 I (土壙墓) 1/20	500
Fig. 47	49 I (土壙)	501
Fig. 48	51 I (埋甕) 1/20	502
Fig. 49	52 M (柱穴) 1/20	503
Fig. 50	53 M (土壙) 1/20	504
Fig. 51	22 S (土壙) · 50 R · 54 T (集石) · 66 P (柱穴群)	505
Fig. 52	55 I (土壙墓) 1/20	506
Fig. 53	56 H (土壙) 1/20	507



Fig. 54	57N (土壙) 1/20	508
Fig. 55	57P (建物跡) 1/80	510
Fig. 56	58P (建物跡) 1/80	511
Fig. 57	59P (建物跡) 1/80	512
Fig. 58	60P (建物跡) 1/80	513
Fig. 59	61P・62P (建物跡) 1/80	514
Fig. 60	63P (建物跡) 1/80	515
Fig. 61	64P・65P (建物跡) 1/80	516
Fig. 62	66P (建物跡) 1/80	517
Fig. 63	中世の柱穴群	518
Fig. 64	中世・近世遺構配置図①	519・520
Fig. 65	中世・近世遺構配置図②	521・522
Fig. 66	中世・近世の柱穴群	523・524
Fig. 67	縄文時代の土器 (1/2)	526
Fig. 68	弥生時代の土器① (1/2)	527
Fig. 69	弥生時代の土器② (1/2)	528
Fig. 70	古墳時代の土器 (1/2)	529
Fig. 71	白磁碗類①	533
Fig. 72	白磁碗類②	535
Fig. 73	白磁・青磁碗類	537
Fig. 74	青磁碗類	538
Fig. 75	白磁碗類の底部	539
Fig. 76	白磁・青磁碗類底部	541
Fig. 77	青磁碗類底部	542
Fig. 78	白磁皿類	544
Fig. 79	青磁皿類・その他	545
Fig. 80	磁州窯系陶器	546
Fig. 81	土師器の杯と皿	548
Fig. 82	土師器の皿・東播系の鉢・瓦質土器	550
Fig. 83	瓦質土器・須恵器系土器・輸入陶器	551
Fig. 84	片口・火鉢・瓦・ふいごの羽口	552
Fig. 85	石鍋	554
Fig. 86	石鍋	555
Fig. 87	滑石製品	556

Fig. 88	滑石製品・異形石器	557
Fig. 89	滑石製石錘・土錘	559
Fig. 90	土錘	560
Fig. 91	土錘	561
Fig. 92	大型石製品	562
Fig. 93	土師器糸切底拓影	563
Fig. 94	土師器糸切底拓影	564
Fig. 95	金石城出土の軒平瓦・軒丸瓦	566
Fig. 96	金石城出土朝鮮系瓦の叩き文様	567
Fig. 97	平戸和蘭商館跡出土丸瓦	569
Fig. 98	富田城跡出土の朝鮮系瓦	571
Fig. 99	対馬各地の朝鮮系瓦の叩き文様	572
Fig. 100	近世陶磁器①	580
Fig. 101	近世陶磁器②	581
Fig. 102	近世陶磁器③	582
Fig. 103	近世陶磁器④	583
Fig. 104	近世陶磁器⑤	584
Fig. 105	近世陶磁器⑥	585
Fig. 106	近世陶磁器⑦	586
Fig. 107	近世陶磁器⑧	587
Fig. 108	近世陶磁器⑨	588
Fig. 109	近世陶磁器⑩	589
Fig. 110	近世陶磁器⑪	590
Fig. 111	近世陶磁器⑫	591
Fig. 112	近世陶磁器⑬	592
Fig. 113	近世陶磁器⑭	593
Fig. 114	近世陶磁器⑮	594
Fig. 115	近世陶磁器⑯	595
Fig. 116	近世陶磁器⑰	596
Fig. 117	近世陶磁器⑱	597
Fig. 118	近世陶磁器⑲	598
Fig. 119	近世陶磁器⑳	599
Fig. 120	近世陶磁器㉑	600
Fig. 121	近世陶磁器㉒	601

Fig. 122	近世陶磁器㉓	602
Fig. 123	近世陶磁器㉔	603
Fig. 124	近世陶磁器㉕	604
Fig. 125	近世陶磁器㉖	605
Fig. 126	近世の石臼	606
Fig. 127	旧石器時代の石器① (2/3)	623
Fig. 128	旧石器時代の石器② (2/3)	624
Fig. 129	縄文時代の石器① (2/3)	627
Fig. 130	縄文時代の石器② (2/3)	628
Fig. 131	縄文時代の石器③ (2/3)	629
Fig. 132	縄文時代の石器④ (2/3)	630
Fig. 133	縄文時代の石器⑤ (2/3)	631
Fig. 134	縄文時代の石器⑥ (2/3)	632
Fig. 135	縄文時代の石器⑦ (2/3)	634
Fig. 136	縄文時代の石器⑧ (2/3)	635
Fig. 137	縄文時代の石器⑨ (2/3)	636
Fig. 138	縄文時代の石器⑩ (2/3)	637
Fig. 139	縄文時代の石器⑪ (2/3)	638
Fig. 140	縄文時代の石器⑫ (2/3)	639
Fig. 141	石鏃① (2/3)	646
Fig. 142	石鏃② (2/3)	647
Fig. 143	石鏃③ (2/3)	648
Fig. 144	石鏃④ (2/3)	649
Fig. 145	石鏃⑤ (2/3)	650
Fig. 146	石鏃⑥ (2/3)	651
Fig. 147	石鏃⑦ (2/3)	652
Fig. 148	石鏃⑧ (2/3)	653
Fig. 149	石鏃⑨ (2/3)	654
Fig. 150	石鏃⑩ (2/3)	655
Fig. 151	石斧① (1/3)	665
Fig. 152	石斧② (1/3)	666
Fig. 153	石斧③ (1/3)	667
Fig. 154	石斧④ (1/3)	668
Fig. 155	石斧⑤ (1/3)	669

Fig. 156	石斧⑥ (1/3)	670
Fig. 157	石斧⑦ (1/3)	671
Fig. 158	石斧⑧ (1/3)	672
Fig. 159	石斧⑨ (1/3)	673
Fig. 160	石斧⑩ (1/3)	674
Fig. 161	石斧⑪ (1/3)	675
Fig. 162	礫器① (1/3)	680
Fig. 163	礫器② (1/3)	681

## 表 目 次

Tab. 1	土器觀察表①	530
Tab. 2	土器觀察表②	531
Tab. 3	陶磁器觀察表①	607
Tab. 4	陶磁器觀察表②	608
Tab. 5	陶磁器觀察表③	609
Tab. 6	陶磁器觀察表④	610
Tab. 7	陶磁器觀察表⑤	611
Tab. 8	陶磁器觀察表⑥	612
Tab. 9	陶磁器觀察表⑦	613
Tab. 10	陶磁器觀察表⑧	614
Tab. 11	陶磁器觀察表⑨	615
Tab. 12	陶磁器觀察表⑩	616
Tab. 13	陶磁器觀察表⑪	617
Tab. 14	陶磁器觀察表⑫	618
Tab. 15	陶磁器觀察表⑬	619
Tab. 16	陶磁器觀察表⑭	620
Tab. 17	陶磁器觀察表⑮	621
Tab. 18	剝片石器計測表 (旧石器)	624
Tab. 19	剝片石器計測表 (縄文) ①	640
Tab. 20	剝片石器計測表 (縄文) ②	641
Tab. 21	剝片石器計測表 (縄文) ③	642
Tab. 22	石鏃計測表①	656
Tab. 23	石鏃計測表②	657

Tab. 24	石鏃計測表③	658
Tab. 25	石鏃計測表④	659
Tab. 26	石鏃計測表⑤	660
Tab. 27	石鏃計測表⑥	661
Tab. 28	石斧計測表①	676
Tab. 29	石斧計測表②	677
Tab. 30	石斧計測表③	678
Tab. 31	礫器計測表	681

## 図 版 目 次

PL. 1	遺跡遠景①	689
PL. 2	10B東壁②	690
PL. 3	10B北壁③	691
PL. 4	18C空堀の土層④	692
PL. 5	3・2・5区の土層⑤	693
PL. 6	4区の土層⑥	694
PL. 7	1区の集石・陶磁器混在状況全景⑦	695
PL. 8	1区の集石・陶磁器混在状況⑧	696
PL. 9	1区の遺物出土状況⑨	697
PL. 10	1区の集石・陶磁器混在⑩	698
PL. 11	1区の遺物出土状況⑪	699
PL. 12	1区の遺物出土状況⑫	700
PL. 13	1区集石・陶磁器混在⑬	701
PL. 14	1区の集石・陶磁器検出状況⑭	702
PL. 15	1区の遺構⑮	703
PL. 16	1区集石状況⑯	704
PL. 17	1区の遺構検出状況⑰	705
PL. 18	1区の集石検出状況⑱	706
PL. 19	1区空堀検出状況⑲	707
PL. 20	1区出土の遺物⑳	708
PL. 21	18C'空堀㉑	709
PL. 22	調査状況㉒	710
PL. 23	1区と2区の遺構検出状況㉓	711

PL. 24	1区の遺構全景・柱穴 <sup>24</sup> .....	712
PL. 25	1区の遺構検出状況 <sup>25</sup> .....	713
PL. 26	1区の遺構検出状況 <sup>26</sup> .....	714
PL. 27	1・4区の遺構検出状況 <sup>27</sup> .....	715
PL. 28	埋甕検出状況 <sup>28</sup> .....	716
PL. 29	埋甕の状況 <sup>29</sup> .....	717
PL. 30	1区の遺構検出状況 <sup>30</sup> .....	718
PL. 31	2区の土壌 <sup>31</sup> .....	719
PL. 32	2区の遺構 <sup>32</sup> .....	720
PL. 33	1区と2区の遺構検出状況 <sup>33</sup> .....	721
PL. 34	2区の遺構検出状況 <sup>34</sup> .....	722
PL. 35	2区近世建物跡 <sup>35</sup> .....	723
PL. 36	3区の柱穴群 <sup>36</sup> .....	724
PL. 37	1区の遺構検出状況 <sup>37</sup> .....	725
PL. 38	1区の遺構検出状況 <sup>38</sup> .....	726
PL. 39	2区の土壌墓・柱穴群 <sup>39</sup> .....	727
PL. 40	遺物出土状況 <sup>40</sup> .....	728
PL. 41	5区柱穴群 <sup>41</sup> .....	729
PL. 42	2区の柱穴群・調査状況 <sup>42</sup> .....	730
PL. 43	2区柱穴群 <sup>43</sup> .....	731
PL. 44	2区の検出遺構 <sup>44</sup> .....	732
PL. 45	46 I 人骨・遺物検出状況 <sup>45</sup> .....	733
PL. 46	2区の土壌墓 <sup>46</sup> .....	734
PL. 47	2区の土壌墓 <sup>47</sup> .....	735
PL. 48	48 I の人骨・遺物検出状況 <sup>48</sup> .....	736
PL. 49	4区調査状況と柱穴 <sup>49</sup> .....	737
PL. 50	4区出土の遺物 <sup>50</sup> .....	738
PL. 51	4区出土の遺物 <sup>51</sup> .....	739
PL. 52	縄文時代の土器 (1/2) .....	740
PL. 53	弥生時代の土器 (1/2) .....	741
PL. 54	弥生・古墳時代の土器 (1/2) .....	742
PL. 55	白磁碗類 <sup>1</sup> .....	743
PL. 56	白磁碗類 <sup>2</sup> .....	744
PL. 57	青磁碗類 <sup>3</sup> .....	745

PL. 58	白磁碗類底部④	746
PL. 59	白磁・青磁碗類底部⑤	747
PL. 60	青磁碗類底部⑥	748
PL. 61	白磁・青磁皿・天目・合子・染付⑦	749
PL. 62	青磁・高麗青磁・緑釉陶器・染付⑧	750
PL. 63	磁州窯系陶器⑨	751
PL. 64	磁州窯系陶器⑩	752
PL. 65	土師器杯⑪	753
PL. 66	土師器皿⑫	754
PL. 67	東播系の鉢・瓦質土器・須恵器系土器⑬	755
PL. 68	須恵器系土器・瓦器・輸入陶器・片口・瓦・火鉢等⑭	756
PL. 69	石鍋⑮	757
PL. 70	石鍋・再加工製品⑯	758
PL. 71	滑石製品・異形石器等⑰	759
PL. 72	滑石製石錘・土錘⑱	760
PL. 73	土錘・鉄かす⑲	761
PL. 74	大型石製品⑳	762
PL. 75	48 I 出土貨幣 X 線撮影㉑	763
PL. 76	48 I 出土貨幣上部横 1 列・寛永通宝中部横 2 列・キセル・ハバキ	764
PL. 77	近世陶磁器①	765
PL. 78	近世陶磁器②	766
PL. 79	近世陶磁器③	767
PL. 80	近世陶磁器④	768
PL. 81	近世陶磁器⑤	769
PL. 82	近世陶磁器⑥	770
PL. 83	近世陶磁器⑦	771
PL. 84	近世陶磁器⑧	772
PL. 85	近世陶磁器⑨	773
PL. 86	近世陶磁器⑩	774
PL. 87	近世陶磁器⑪	775
PL. 88	近世陶磁器⑫	776
PL. 89	近世陶磁器⑬	777
PL. 90	近世陶磁器⑭	778
PL. 91	近世陶磁器⑮	779

PL. 92	近世陶磁器⑯	780
PL. 93	近世陶磁器⑰	781
PL. 94	近世陶磁器⑱	782
PL. 95	近世陶磁器⑲	783
PL. 96	近世陶磁器⑳	784
PL. 97	近世陶磁器㉑	785
PL. 98	近世陶磁器㉒	786
PL. 99	近世陶磁器㉓	787
PL. 100	近世陶磁器㉔	788
PL. 101	近世陶磁器㉕	789
PL. 102	近世陶磁器㉖	790
PL. 103	近世の石臼	791
PL. 104	近世の民家	792
PL. 105	旧石器時代の石器① (1/1)	793
PL. 106	旧石器時代の石器② (1/1)	794
PL. 107	縄文時代の石器① (1/1)	795
PL. 108	縄文時代の石器② (1/1)	796
PL. 109	縄文時代の石器③ (1/1)	797
PL. 110	縄文時代の石器④ (1/1)	798
PL. 111	縄文時代の石器⑤ (1/1)	799
PL. 112	縄文時代の石器⑥ (1/1)	800
PL. 113	縄文時代の石器⑦ (1/1)	801
PL. 114	縄文時代の石器⑧ (1/1)	802
PL. 115	縄文時代の石器⑨ (1/1)	803
PL. 116	縄文時代の石器⑩ (1/1)	804
PL. 117	縄文時代の石器⑪ (1/1)	805
PL. 118	縄文時代の石器⑫ (1/1)	806
PL. 119	石鏃① (1/1)	807
PL. 120	石鏃② (1/1)	808
PL. 121	石鏃③ (1/1)	809
PL. 122	石鏃④ (1/1)	810
PL. 123	石鏃⑤ (1/1)	811
PL. 124	石鏃⑥ (1/1)	812
PL. 125	石鏃⑦ (1/1)	813



PL. 126	石鏃⑧ (1/1)	.....	814
PL. 127	石斧① (1/2)	.....	815
PL. 128	石斧② (1/2)	.....	816
PL. 129	石斧③ (1/2)	.....	817
PL. 130	石斧④ (1/2)	.....	818
PL. 131	石斧⑤ (1/2)	.....	819
PL. 132	石斧⑥ (1/2)	.....	820
PL. 133	石斧⑦ (1/2)	.....	821
PL. 134	石斧⑧ (1/2)	.....	822
PL. 135	石斧⑨ (1/2)	.....	823
PL. 136	石斧⑩ (1/2)	.....	824
PL. 137	石斧⑪ (1/2)	.....	825
PL. 138	石斧⑫ (1/2)	.....	826
PL. 139	石斧⑬ (1/2)	.....	827
PL. 140	礫器① (1/2)	.....	828
PL. 141	礫器② (1/2)	.....	829

# I 調 査

## 1. 地理的位置

小園城跡は、東彼杵郡東彼杵町瀬戸郷字小園に所在する。地理的には、大村湾中央の東岸に面し、多良岳山系から海岸線へ向かって延びる標高28m～32mの舌状台地端部にあたる。

地域一帯は、この豊かな自然の山系より水の恩恵をうけて、水田耕作が主としておこなわれている。遺跡の眼下には、千綿宿の集落が海岸線に寄り添うように500m程連なり、静かな漁村と農村が融合した町を形成している。また、周辺には歴史的な文化財も多く知られており、県指定の野中キリシタン墓碑や鎌倉から室町時代にかけての五輪の塔及び瀬戸古墳等々数えれば枚挙に暇がない。このような環境のなかに本遺跡が立地する。

## 2. 調査の概要 (Fig. 1～Fig. 2)

遺跡は、大村郷村記<sup>註1</sup>に記された小園城と推定されている位置にあり、その一説に『莊屋より丑寅の方貳町程瀬戸と云所にあり、本丸東西拾四間、南北拾貳間、田の中少し小高き処なり、四方とも田地にして堀無し、由緒不知』とある。

調査は、昭和61年11月25日～昭和62年3月27日にかけて実施し、5,300㎡を対象に4,800㎡を記録保存の措置をおこなった。調査区の設定は、5×5mのグリッドに分割し、東西軸を1・2・3……南北軸にA・B・C……と記号番号を付した。

遺跡の分布面積は当初2,800㎡と考えられていたが、これは現状が水田のため遺物の堆積状況を正確にとらえることに限界があったためである。しかし、調査の進行につれて旧石器・縄文・弥生・古墳・中世・近世と夥しい量の遺物が出土し、調査面積の変更をよぎなくされることとなった。

特に中世では、小園城跡の存在を明らかにする空堀を南北軸(10B)に幅9m×深さ1.8mと東西軸(18C)に3.2m×深さ1.5mを確認した。

また、遺構内からは中国製輸入陶器(磁州窯系)土師器・石鍋等の出土があった。

土壙からは、4基の内1基から朝鮮通宝(7枚)が出土した。この他包含層からは1,000点を越える白磁や青磁、朝鮮半島系瓦、磁器が出土している。

近世に至っては、中世の遺構のうえに江戸時代中期から後期にかけて生活の場があったことを示す柱穴群や土地の整地のための埋土とともに、夥しい数の陶磁器片や礫を投棄した集石土壙等多くの遺物を出土し遺構を検出した。(町田)

註1 大村郷村記第3巻編者藤野保株式会社図書刊行会 1982年

この郷村記は大村藩主大村純長の命により天和元年に編さんを始めて、文久二年に完成している。

小蘭城跡

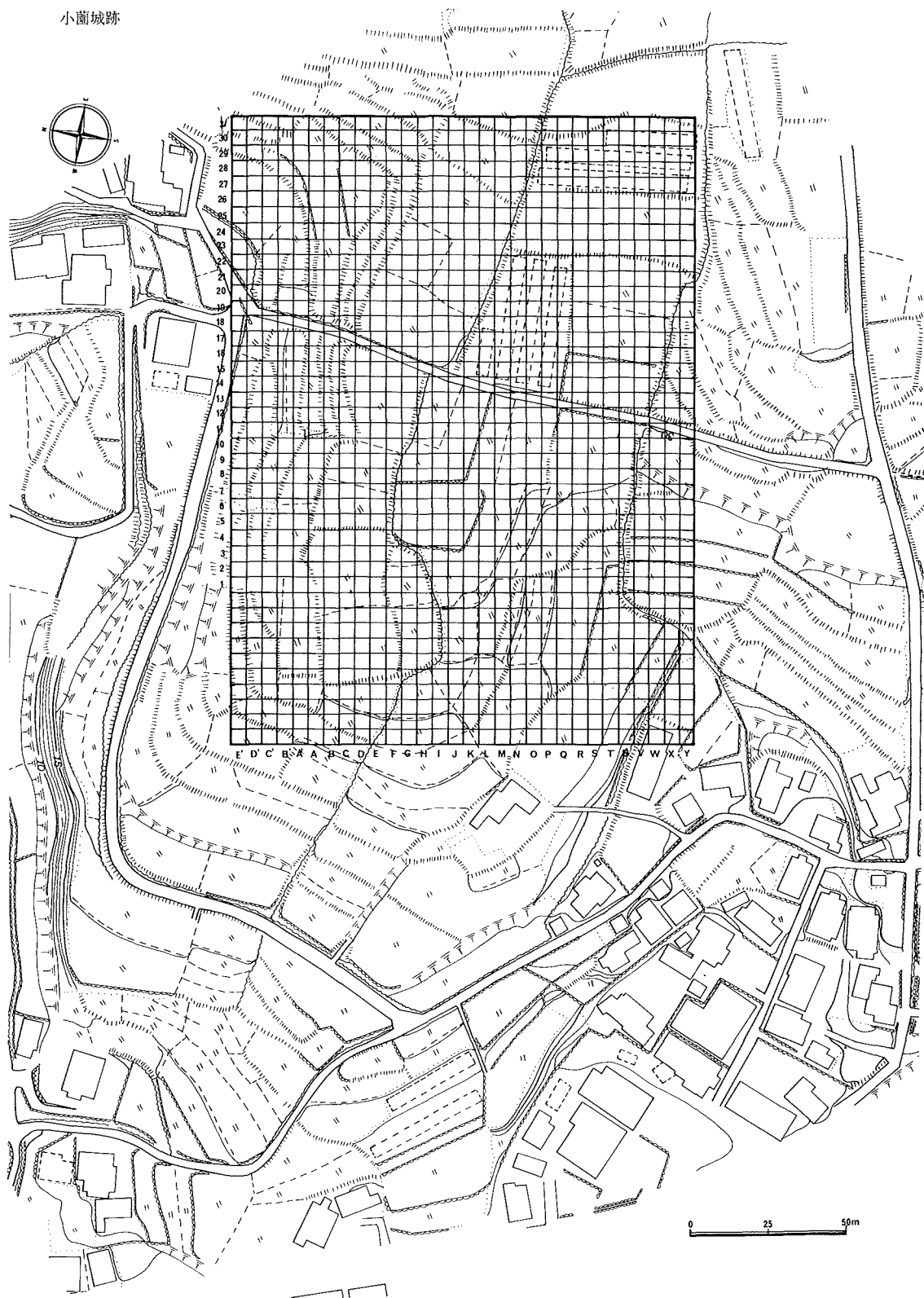


Fig. 1 小蘭城跡調査区位置図 (1/2000)

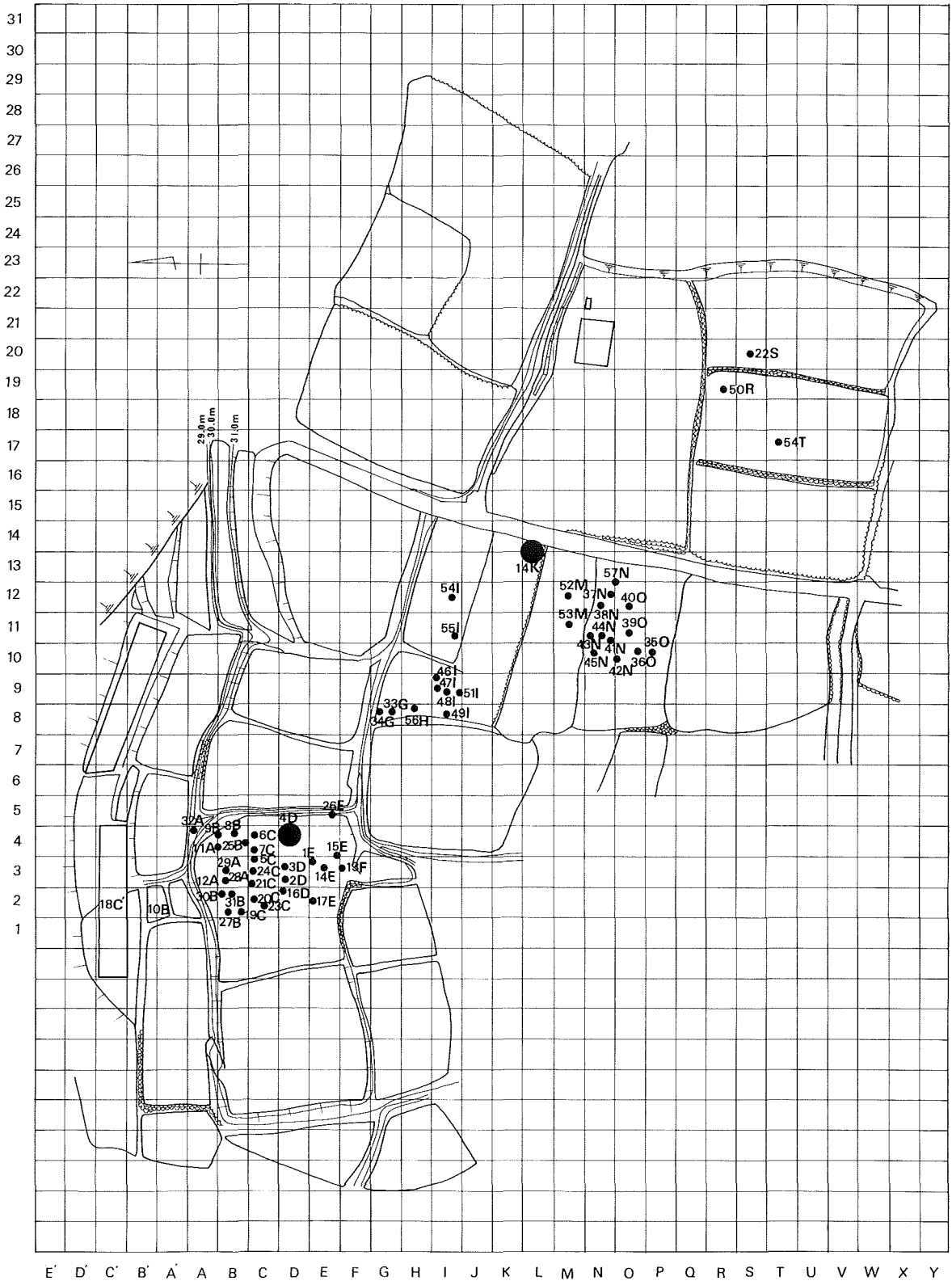
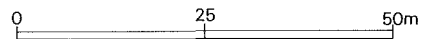


Fig. 2 調査区及び遺構配置図 (1/1000)



### 3. 土層 (Fig. 3～Fig. 5)

遺跡での遺物の主体は、中世・近世にある。これを包蔵する土層は調査全区において確認している。

旧石器・縄文・弥生・古墳時代の包含層については、Q～W-13～22区にかけて遺物の出土の集中があったが明確な文化層として線引きをおこなうまでには至らなかった。しかし、主に縄文時代晩期にともなう扁平打製石斧が数多く出土していることから中世の文化層以下に晩期の文化層が残存していたものと思われる。(町田)

以下各地区ごとに記録した土層図によって説明をおこなう。

調査範囲が広範に渡るため、便宜上1区(C'～F-0～5)・2区(G～Q-8～14)・3区(D'～A'-6～11)・4区(Q～X-13～22)・5区(D～M-16～24)としておく。

#### 1区(C～F-0～5)

遺構・遺物のもっとも集中する地区で、中世の文化層が3d～6層にあり、近世の文化層が2～3c層に堆積していた。

1層；耕作土

1a層；石垣部分の攪乱土

2層；茶褐色土(地山の茶褐色粘質土を持ち込んでいる。締まりのない土である。)

3層；暗黄褐色土(乾燥ぎみの土で、締まりにかける。)

3a層；黒茶色土(各所に炭化した木片が混在していた。)

3b層；暗茶褐色土(やや締まりがあり、湿りけをもつ)

3c層；茶黒色土(やや締まりがあり、湿りけをもつ)

3d層；暗赤茶色土(18Cに堆積する土で、小豆色をしている。)

4層；茶褐色土(土が緻密で、湿りけがあり粘質ぎみの黄褐色のバイラン土である。)

5層；赤褐色土(粘質土)

6層；暗赤茶褐色土(安山岩風化礫混入)

7層；暗赤褐色土(安山岩風化礫混入)

8層；赤褐色土(地山)

以上が堆積層序であった。この外遺構の集中区にあたるため、各所に土壌・柱穴跡があり、\*1～\*7を図に付している。

\*1；2層からの攪乱。黄色の風化礫混入

\*2；集石掘り込み(暗赤褐色の土を充填している。)

\*3；黄褐色のバイラン土を充填。

\*4；集石の掘り込み。

\*5；集石の掘り込み。締まりのない、暗赤褐色の土を充填し一部安山岩風化礫混入。

\*6；3層からの掘り込みの柱穴。

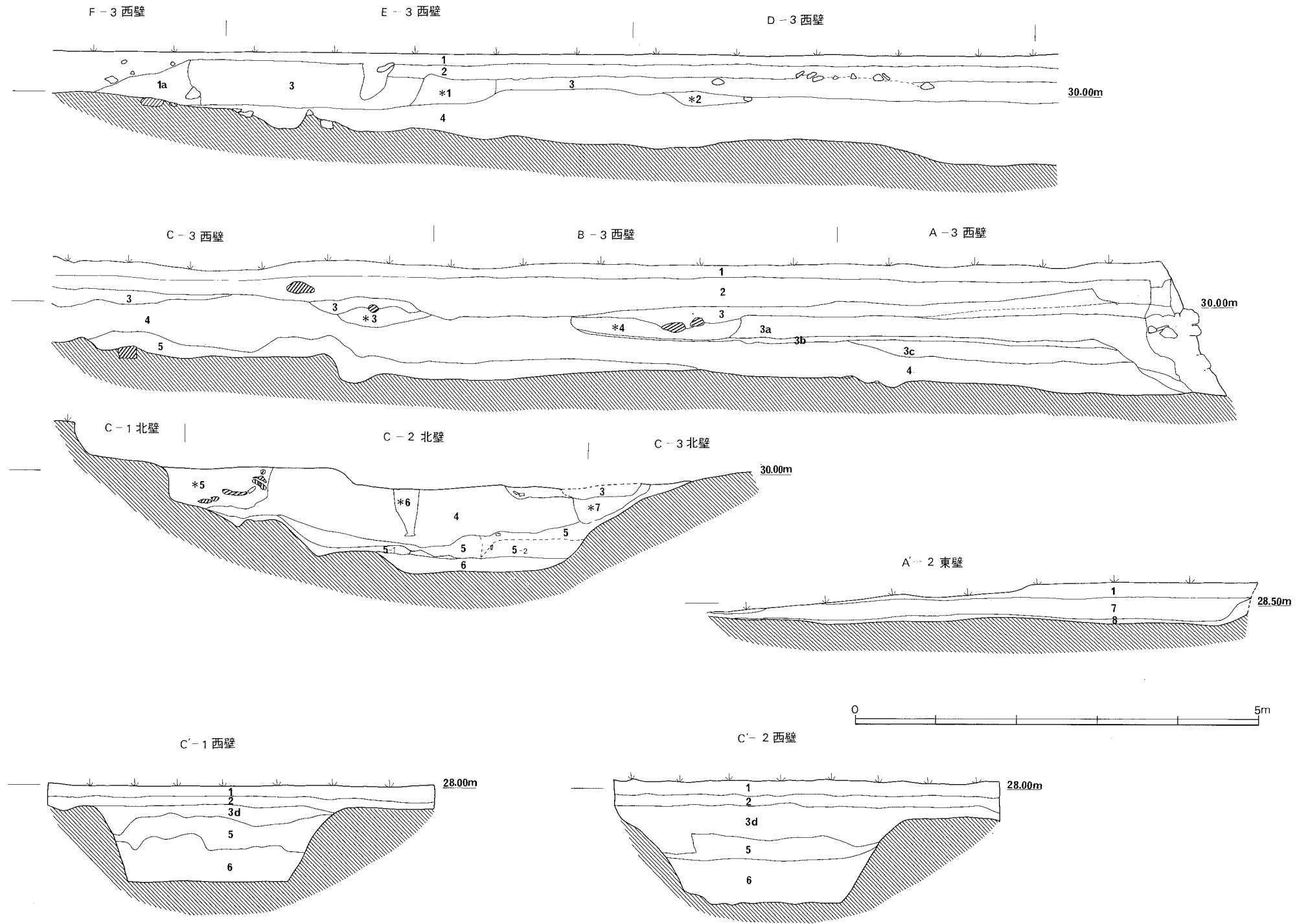


Fig. 3 1区の土層図 (1/60)

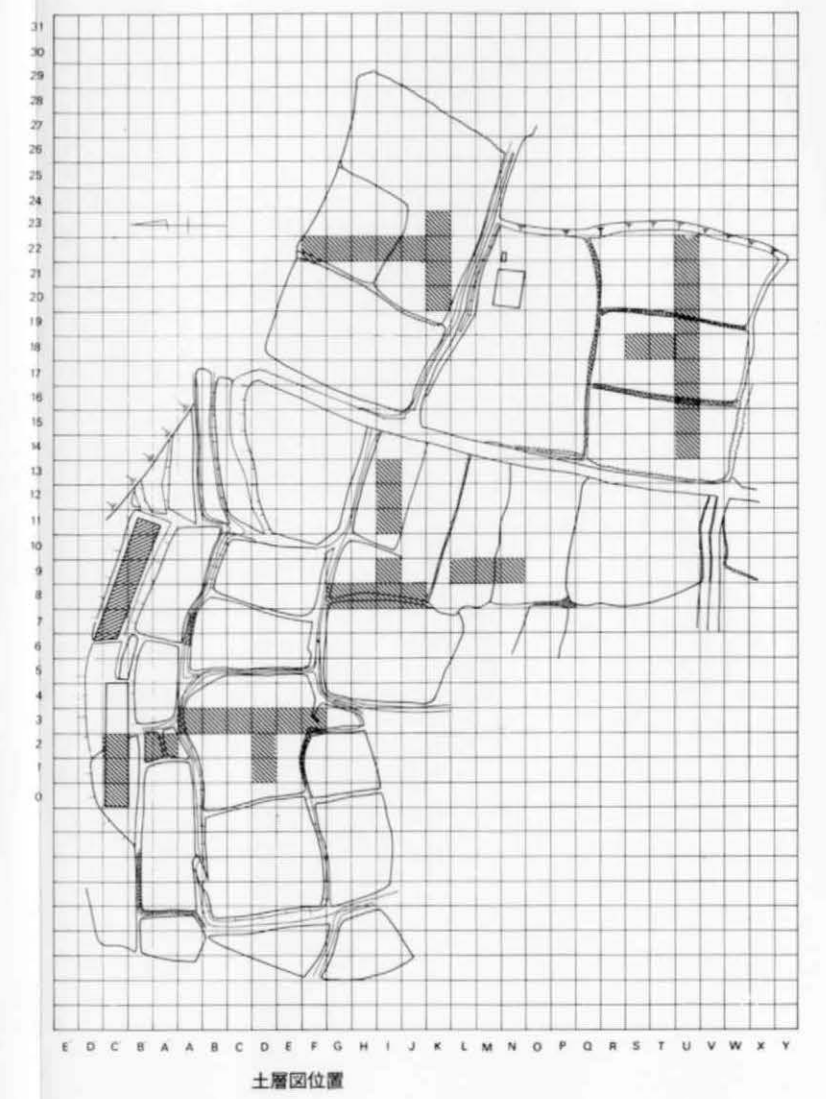
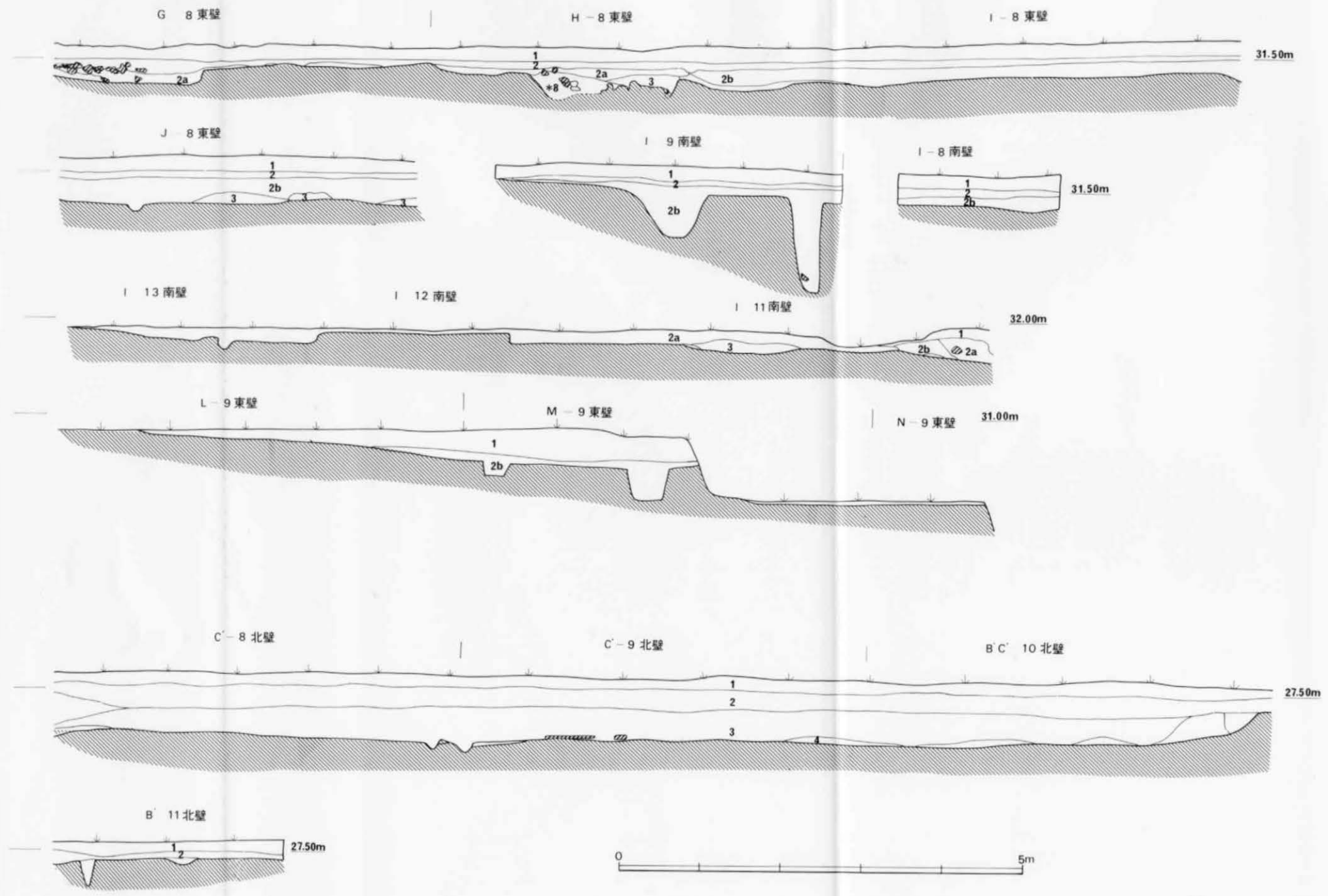


Fig. 4 2区・3区の土層図 (1/60)

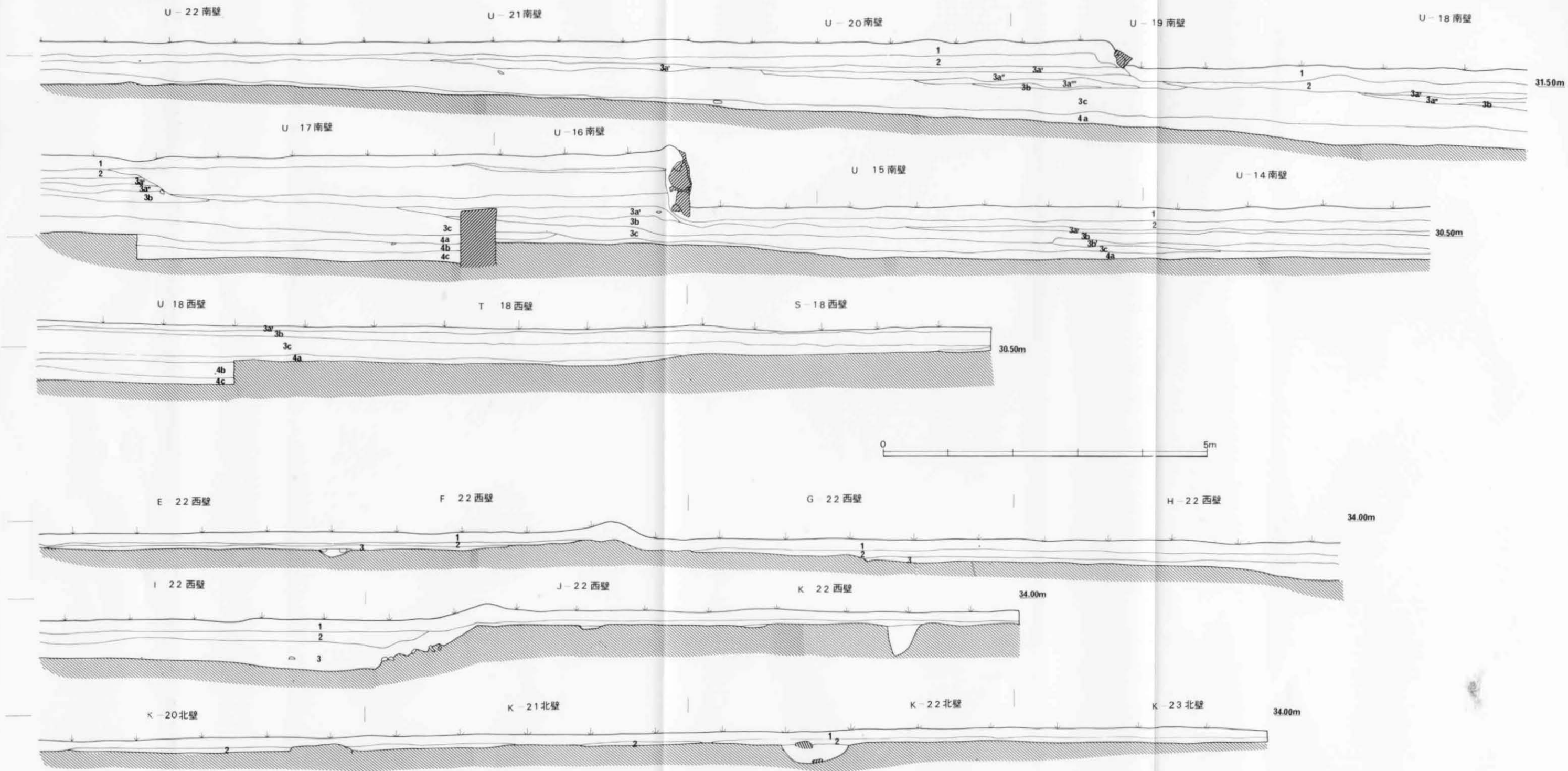


Fig. 5 4区・5区の土層図



\* 7 ; 24C 遺構の掘り込みである。

2 区 (G~Q-8~14)

この地区は、近世に削平を受けており、中世の包含層がわずかに残る程度であった。しかし、遺構については、土壌墓や柱穴等を検出している。

- 1 層 ; 耕作土
  - 2 層 ; 暗黄褐色土 (水田の床土)
  - 2 a 層 ; 暗灰褐色土 (近世の遺物が主に出土)
  - 2 b 層 ; 暗茶褐色土 (近世の遺物が主に出土)
  - 3 層 ; 暗赤褐色土 (中世の遺物出土)
- 3 区 (D'~A'-6~11)

調査区北側にあり、中世の遺物を主体とした柱穴群を検出した。

- 1 層 ; 耕作土
  - 2 層 ; 暗黄褐色土 (水田の床土)
  - 3 層 ; 暗赤褐色土 (小豆色を呈する)
  - 4 層 ; 赤褐色土 (地山)
- 4 区 (Q~X-13~22)

この地区は、中世 (3 a~3 c 層) と縄文時代晩期 (4 a~4 b 層) の遺物を主体とする。

- 1 層 ; 耕作土
- 2 層 ; 暗黄褐色土 (水田の床土)
- 3 a' 層 ; 淡黄茶褐色土
- 3 a'' 層 ; 淡黄黒色土
- 3 a''' 層 ; 暗黄黒色土
- 3 b 層 ; 暗茶褐色土
- 3 b' 層 ; 暗黄茶褐色土
- 3 c 層 ; 暗赤褐色土 (小豆色を呈し、この層がもっとも厚く堆積する。)
- 4 a 層 ; 黄褐色粘質土 (弥生・縄文時代の遺物出土)
- 4 b 層 ; 明黄褐色粘質土 (縄文時代の遺物出土)
- 4 c 層 ; 淡赤褐色粘質土 (遺物出土なし。)

5 区 (D~M-16~24)

4 区と比較し、中世の包含層の堆積がわずかに残り、縄文時代の包含層は確認できなかった。

- 1 層 ; 耕作土
- 2 層 ; 暗黄褐色土 (水田の床土)
- 3 層 ; 暗赤褐色土

## II 遺構

調査区内より検出した遺構は57か所を数え建物跡として外に8か所をあげている。時期的には、近世の資料が54、中世が11となっている。

主な遺構としては、12A・6C・4Dの石敷き、26Eの陶磁器と礫の混在土壌、32Aの埋甕、59Pの建物跡が江戸時代中期から後期の遺構としてある。

中世では、10B・18Cの空堀が14世紀後半頃にあたり、46I・47I・48I・55Iが15世紀後半～16世紀にかけての土壙墓、11世紀中葉～12世紀初頭の白磁碗が出土した66Pの建物跡がある。(Fig. 6～66) (町田)

以下これらの遺構について、説明をおこなっていききたい。

### 1 E (陶磁器・集石混在) (Fig. 7)

E-3区北西隅に位置する。南北80cm、東西130cmの楕円形の範囲に近世陶磁器と集石が混在している。近世陶磁器の器種としては、皿、碗、鉢、仏飯碗等の日用雑器類である。本遺構から出土した皿が、1Eと25Bで接合するが、他にも同一の碗が出土しているところから、時期的には25Bと同一時期と思われる。周辺から滑石製品も出土している。床面は平な面で、掘り込み等はない。(村川)

### 2 D (陶磁器・集石混在) (Fig. 8)

D-3区の中央に位置する。南北190cm、東西100cmの長楕円形の範囲に1Eと同様に近世陶磁器と集石が混在している。器種は、皿、碗、大皿、紅皿、湯呑等。Fig. 100-1に湯呑を図示している。これも床面は平である。(村川)

### 3 D (陶磁器・集石混在) (Fig. 9)

D-3区、2Dの北方に位置する。南北100cm、東西120cmの楕円形の範囲に集石があり、その中に近世陶磁器が混在している。Fig. 100-3・4に図示したように碗類や、仏飯碗等が出土している。Fig. 100-4は、17世紀後半にもっとも一般的に焼かれた雲龍見込荒磯碗である。床面は平らである。(村川)

### 4 D (陶磁器・集石混在) (Fig. 6)

D-4区から、一部C-4区にかけて、南北400cm、東西400cmの変形楕円形の範囲に集石と近世陶磁器が混在する。ある程度集中していることから6Cとは別個に分けて説明を加えるが、もしかすると、6Cと一連の集石かもしれない。本遺構の中からは、Fig. 100～102に図示したような盃、碗、大皿、徳利、鉢等が出土している。本遺構の床面も平である。(村川)

### 5 C (陶磁器・集石混在) (Fig. 10)

C-3区の中央から西寄りの位置にある。南北150cm、東西150cmの西洋梨形に15cm程、平らに掘り下げていて、その中に近世陶磁器、及び石が入っていた。また、炭が赤褐色土(地山面)

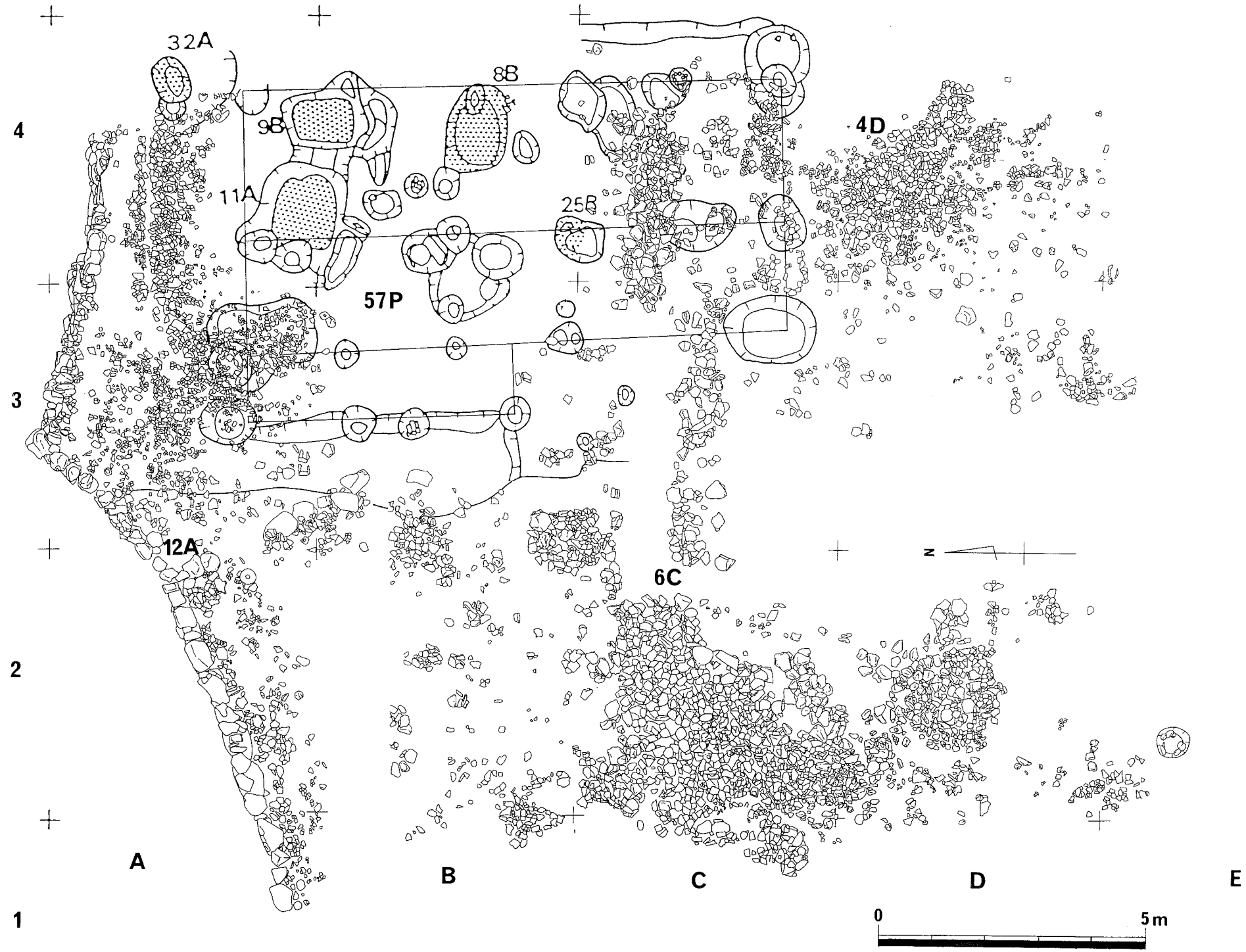


Fig. 6 近世遺構配置図 (57Pと6Cの先後関係図)

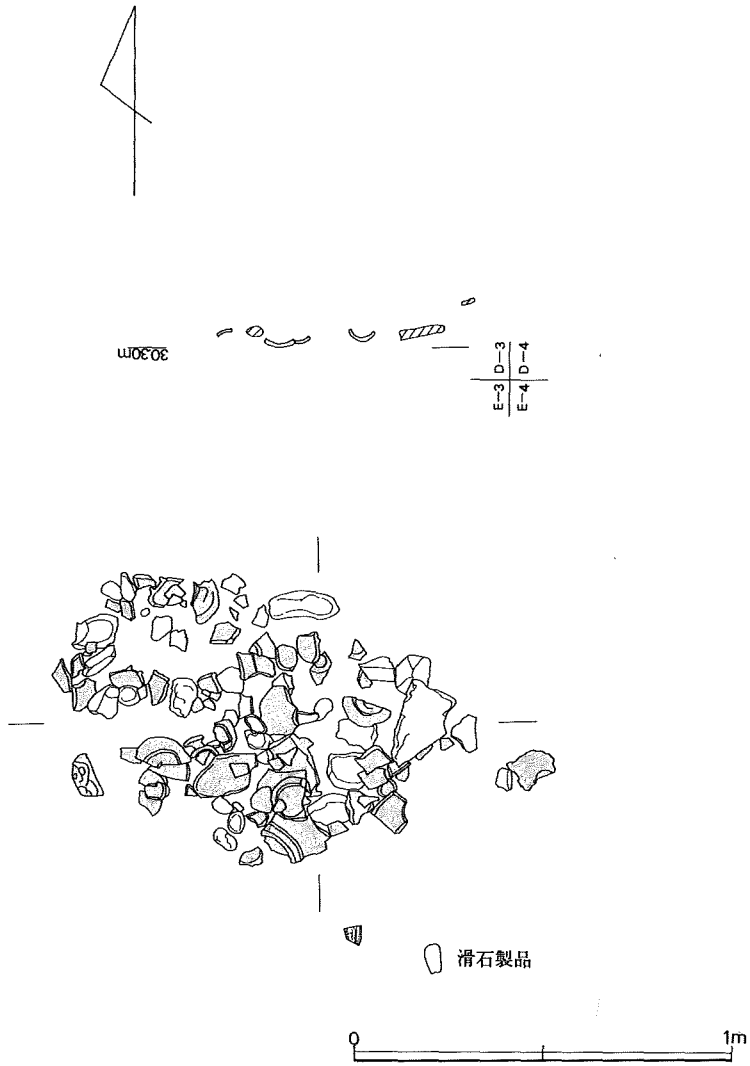


Fig. 7 1 E (陶磁器・集石混在) 1/20

小蘭城跡



Fig. 8 2 D (陶磁器・集石混在) 1/20



Fig. 9 3D (陶磁器・集石混在) 1/20

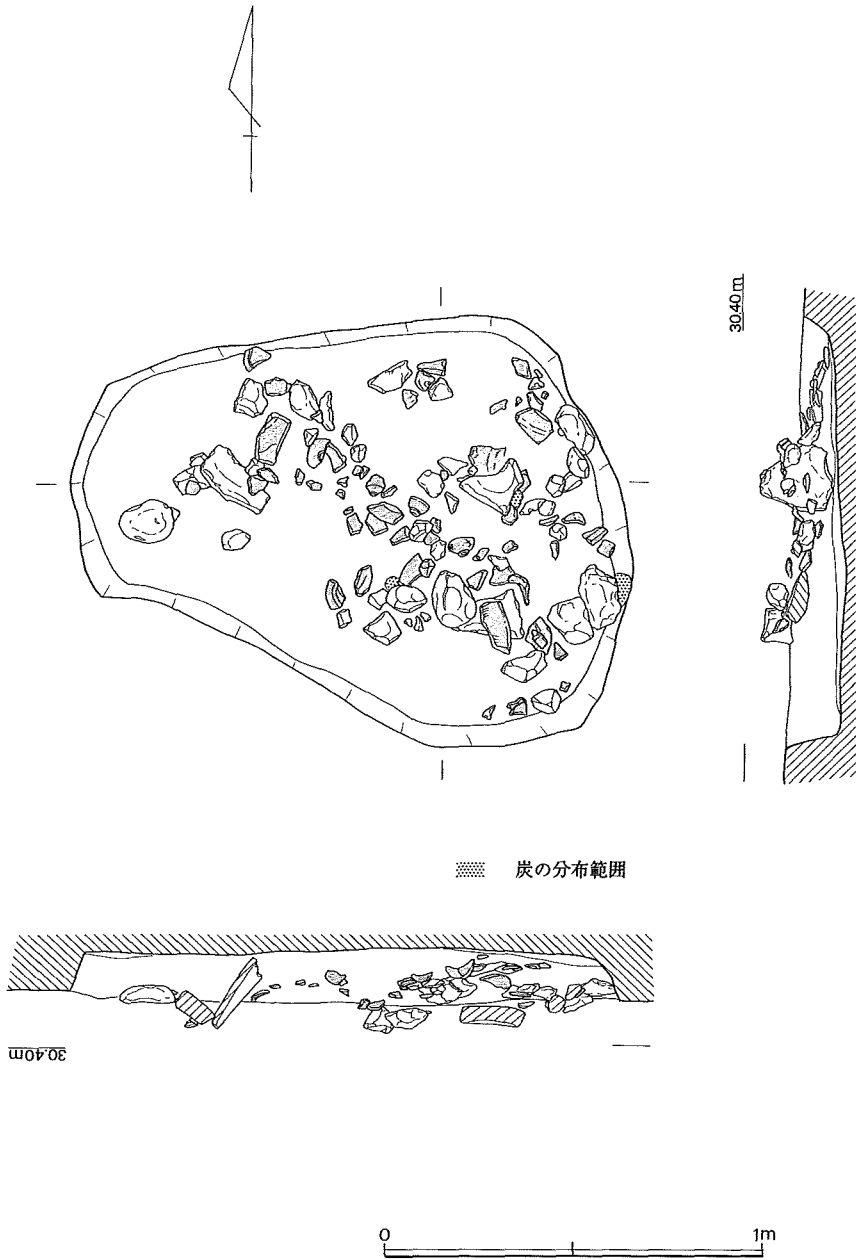


Fig. 10 5 C (陶磁器・集石混在) 1/20

の直上に薄く堆積している。炭化物もその中に混在する。(村川)

#### 6 C (帯状の集石及び陶磁器混在) (Fig. 11, 16)

C-4区、南東部の集石を起点に、同じくC-4区北側、C-3区中央部を東西に走る列、そして、C-2区からD-2区にかけて、ほぼ直角に曲がる集石を一連のものとしてとらえた。範囲としては、先に説明した4Dも一連のものとしてとらえると、東西13m、南北7m程の長方形の形が考えられる。但し、南側には集石はない。この集石の中には、Fig. 102-27からFig. 103-37に示したような皿、碗、小碗、紅皿、甕、摺鉢等の近世陶磁器が入っていた。

(村川)

#### 7 C (土壌) (Fig. 12)

C-3区の南東部に位置する。プランは、長楕円形を呈し、長軸の中心線は磁北をさす。土壌上面で長軸は165cm、短軸は107cm。土壌底面で長軸118cm、短軸85cm深さは掘り込み面より73cmを測る。黄色の安山岩の基盤をくり抜いて掘り下げている。内部は埋土が充填していて、集石と陶磁器が底から浮いた形で入っていて、土壌の下部に堆積している粘質暗茶褐色土の上面にあることを考えれば、この土壌が、自然に埋まったか、人が埋めた後にこれらの集石と陶磁器が混在したものと思われる。掘り込み面より30cm下に炭化物層がみられる。また、赤褐色粘質土が充填する柱穴状の掘り込みもある。甕や近世陶磁器、碗の底部片等が出土している。

(村川)

#### 8 B (土壌) (Fig. 64)

B-4区中央部東寄りに位置する。プランは、隅丸長方形を呈し、長軸の中心線はほぼ東西を示す。土壌上面で長軸は156cm、短軸は122cm、土壌底面で長軸が114cm、短軸が96cm掘り込み面からの深さは20cmを測る。この土壌を切り込んで、最大径52cm、掘り込み面からの深さ30cmの柱穴が掘られている。

#### 9 B (土壌) (Fig. 13)

A-4区とB-4区にまたがって位置する。プランは隅丸長方形を呈し、長軸の中心線は磁北をさす。土壌上面で長軸は150cm、短軸は120cm、土壌底面で長軸が130cm、短軸が85cm、掘り込み面からの深さは50cmを測る。土壌内の集石の中から多数の陶磁器類の出土があった。少量の炭の出土もみた。Fig. 103-38~42に図示したように皿、碗、小ぶりの甕等があった。この土壌を切り込んで最大径50cm、掘り込み面からの深さ40cmの柱穴が掘られている。(村川)

#### 10 B (空堀) (Fig. 14)

B~D-1~3区にかけて検出した遺構で最大幅9m、最深部で表土下1.8mを測る。磁北に添って南北が長く、台地端部より東へ30mの部分の地山を掘り込んでいる。遺物には、青磁、陶器(磁州窯系)、土師器、石鍋等が4~5層より出土している。(町田)

#### 11 A (土壌) (Fig. 15)

9Bの西側に隣接して、A-4区とB-4区にまたがって位置する。プランは、隅丸長方形



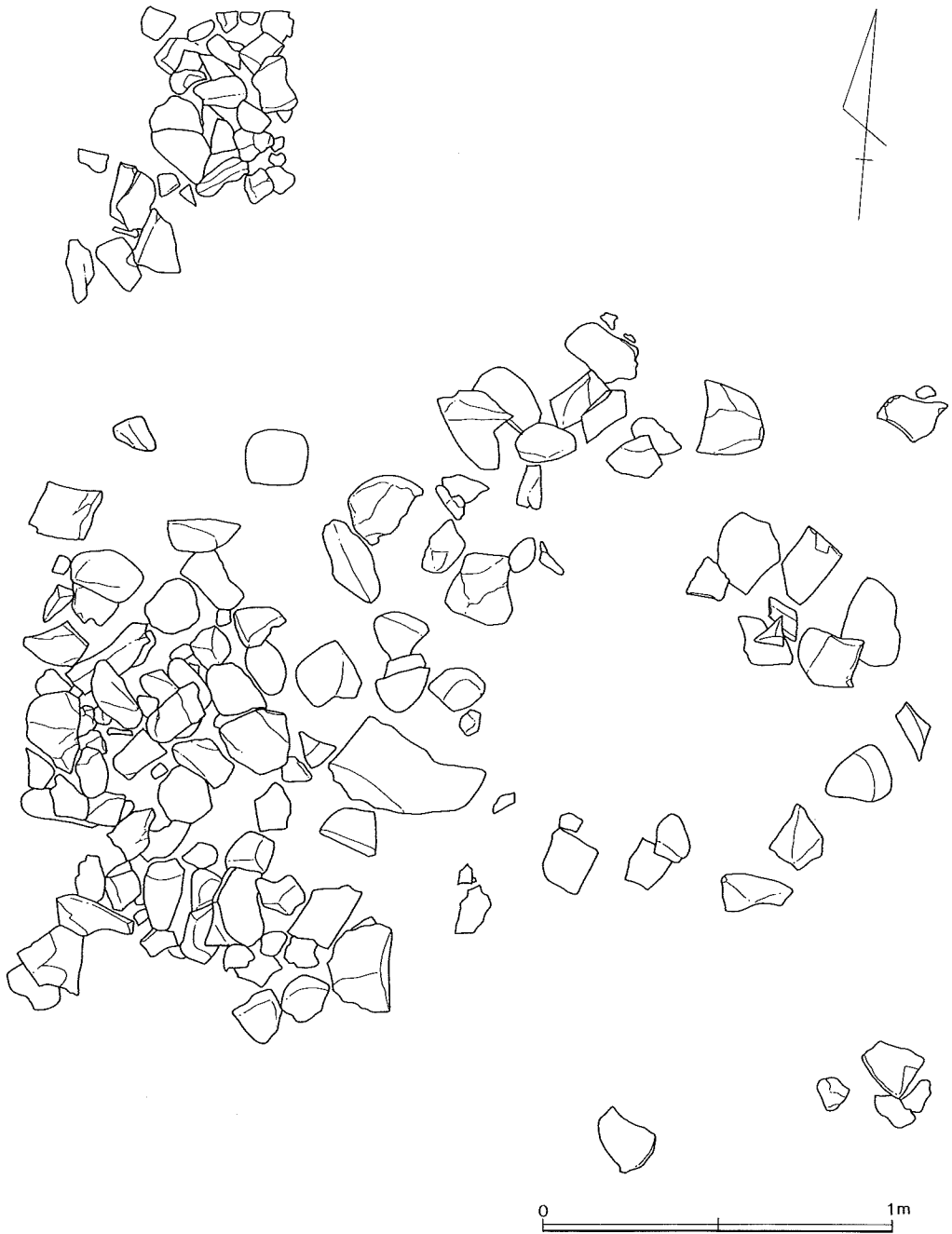


Fig. 11 6 C (带状の集石及び陶磁器混在)

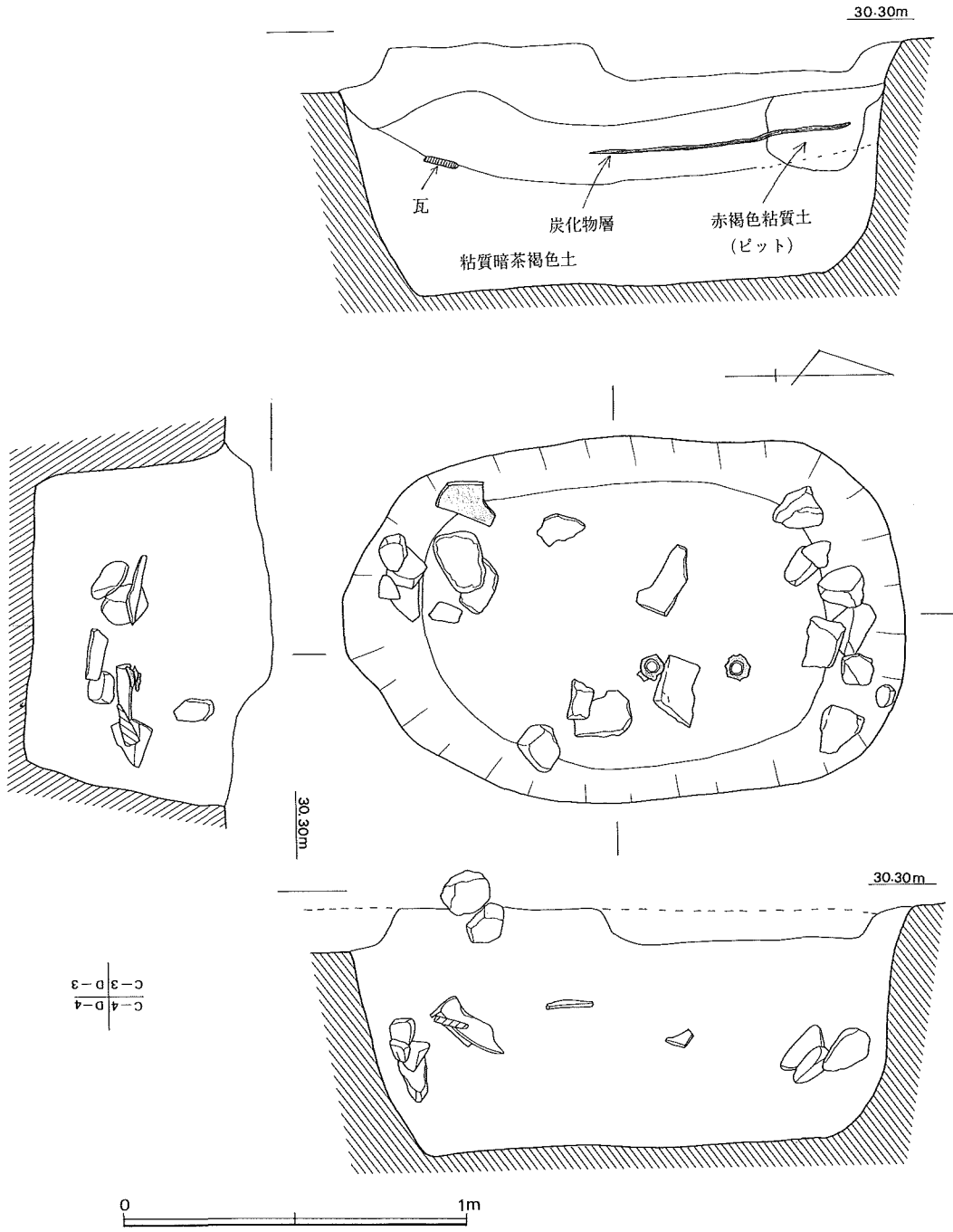


Fig. 12 7C (土坑)

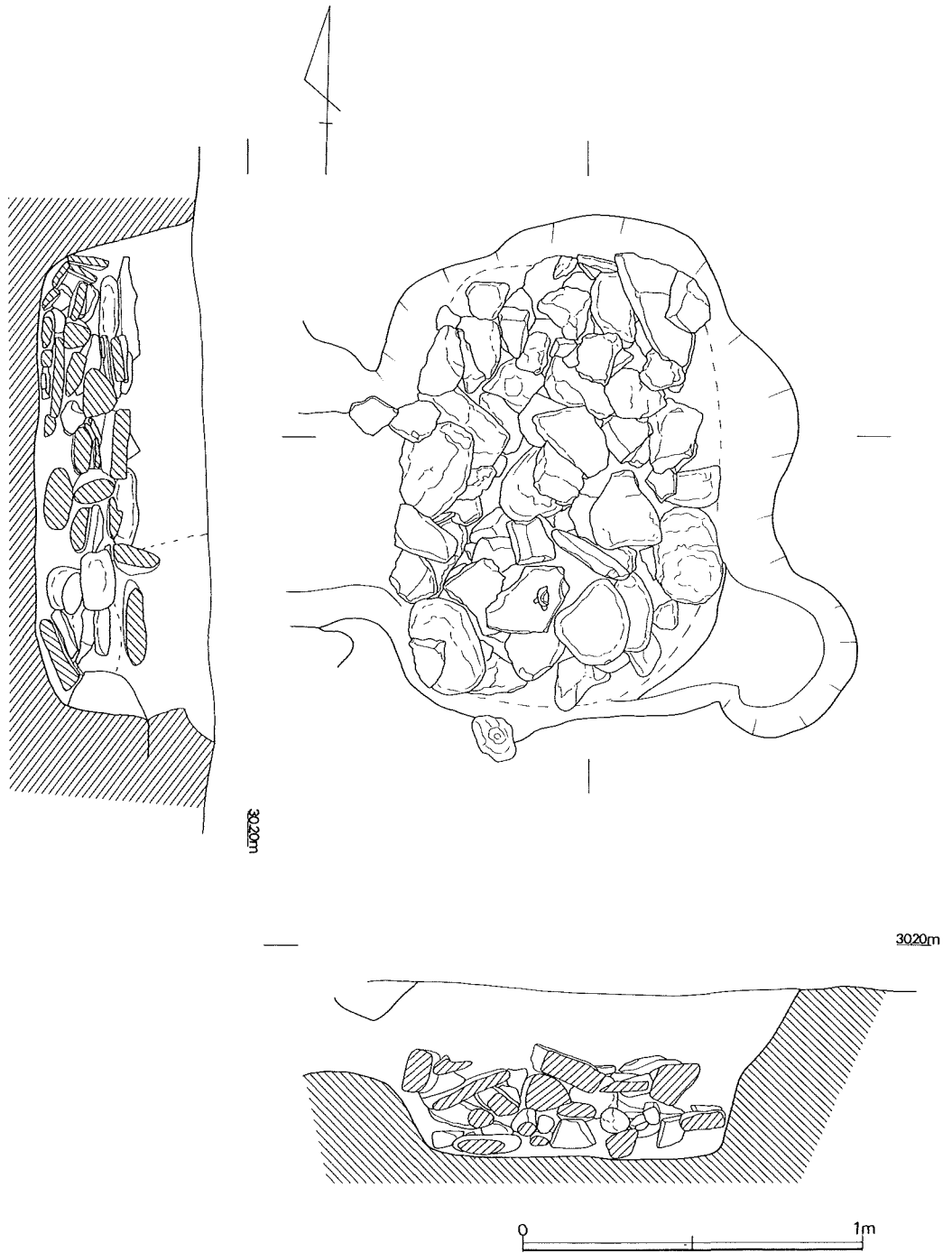


Fig. 13 9 B (土壇)

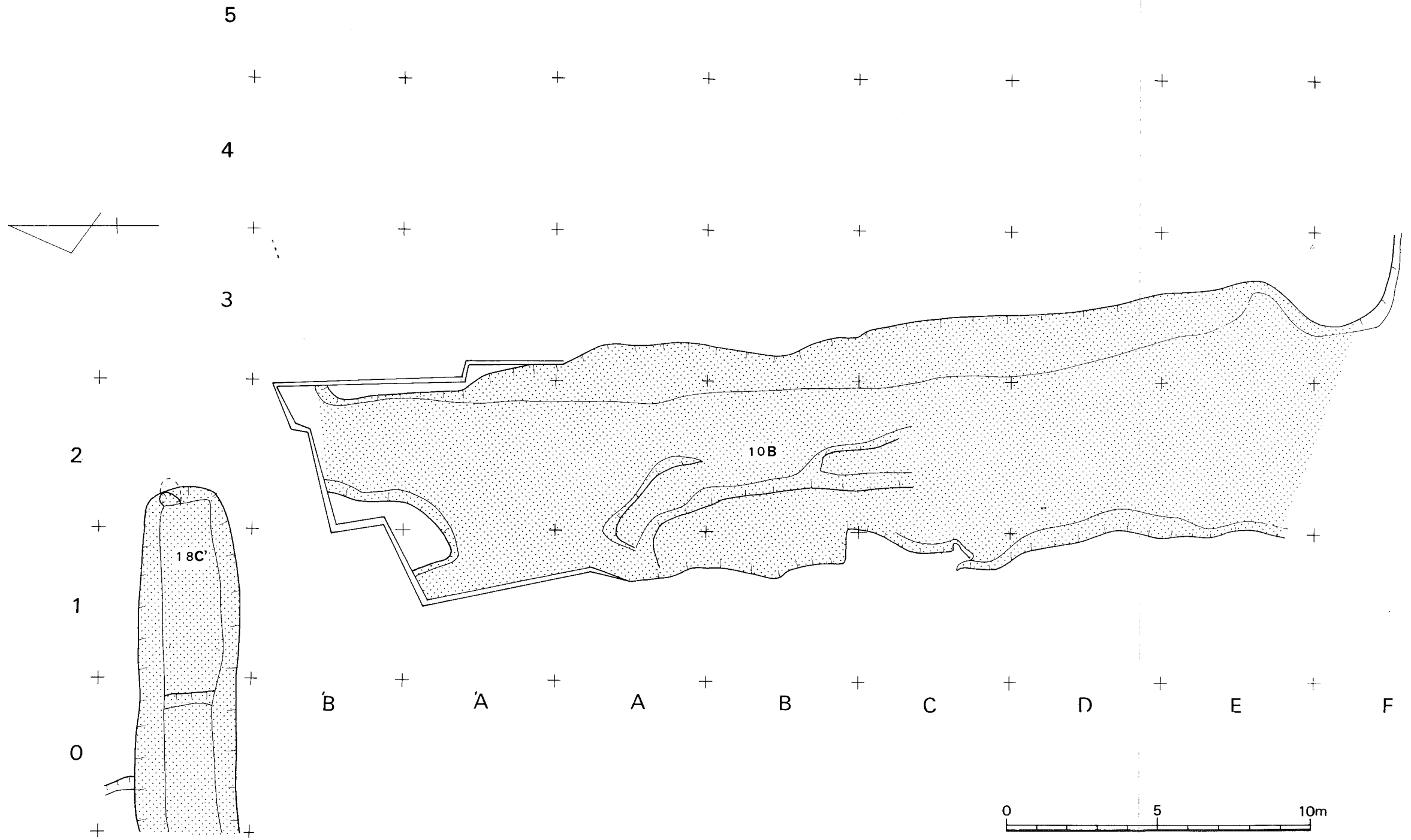


Fig. 14 10B・18C' (空堀)



Fig. 15 11A (土壘)

を呈し、長軸の中心線は東西の中心線より若干北寄りにふれる。土壌上面で長軸が200cm、短軸は160cm、土壌底面で長軸が144cm、短軸が148cm、掘り込み面からの深さは47cmを測る。集石中からFig. 103-44, 45の小碗が出土している。この土壌も8B、9Bと同様に土壌を切り込んで柱穴が2個掘られている。柱穴の最大径は76cmと80cm、深さは掘り込み面から65cmと56cmを測る。 (村川)

12A (帯状の集石及び陶磁器混在) (Fig. 6, 16, 64)

A-4区からA-1区まで、総延長16m、最大幅5m、最小幅1.5mの帯状の集石が北側の石垣に沿うような形で検出された。この集石の中にはA-4区からA-3区まで、長さ7m、幅0.15m程の石列で囲った溝が、東西に走る形に構築されている。この集石中からは、本遺跡の遺構中、最も多数の陶磁器が出土した。この集石から出土した陶磁器はFig. 103~106に示した通りであるが、器種では皿、碗、小碗、片口、鉢等、多種にわたり、時期的にも草花文を描いた“くらわんか茶碗”から高高台の広東碗まであり幅がありそうである。 (村川)

13F (陶磁器・集石混在) (Fig. 17)

F-3区に位置する。深さ10cm程の浅い土壌の中に人の拳大程の小礫が、逆L字状に集積していた。東西400cm、南北280cmの範囲、集石中に若干の陶磁器混在。 (村川)

14E (陶磁器・集石混在) (Fig. 18)

E-3区中央部に位置する。長軸は北東から南西をさし、長軸長240cm、短軸長60cm程の楕円形に近世陶磁器、及び礫が集積している。床面は掘り込み等なく平らな面である。この遺構内の陶磁器は、Fig. 106に示したように、皿、碗、小碗、高高台の広東碗等である。 (村川)

14K (集石) (Fig. 65)

L・K-13・14区に長軸を300cmと短軸を290cmとする円形に近いプランの中に近世陶磁器や礫が投げ込まれていた。 (町田)

15E (柱穴) (Fig. 19)

E-4区南西隅に位置する。最大口径45cmの二段底の柱穴である。浅い方で掘り込み面から16cm、深い方で18cmを測る。板状の石が中に入っていた。 (村川)

16D (陶磁器・集石混在) (Fig. 19)

D-3区南西隅に位置する。東西長200cm、南北長120cmの三角形状に礫が集積しており、その中に陶磁器が入っている。床面は平らである。 (村川)

17E (土壌) (Fig. 20)

E-2区北東部に位置する。最大径120cmの円形の土壌で、深さは15cm程の浅い平らな底である。その中に礫がつまっていた。若干の近世陶磁器の破片が混入している。 (村川)

18C' (空堀) (Fig. 14)

C'-0~2区に検出し、C'-2区から始まり西に延びる遺構である。最大幅3.2m、最深部で表土下1.5mを測る。断面の形状は箱形をなし、床面は平坦である。床面での最大幅は、2



Fig. 16 4D・6C・12A (帯状の集石及び陶磁器混在) 1/80

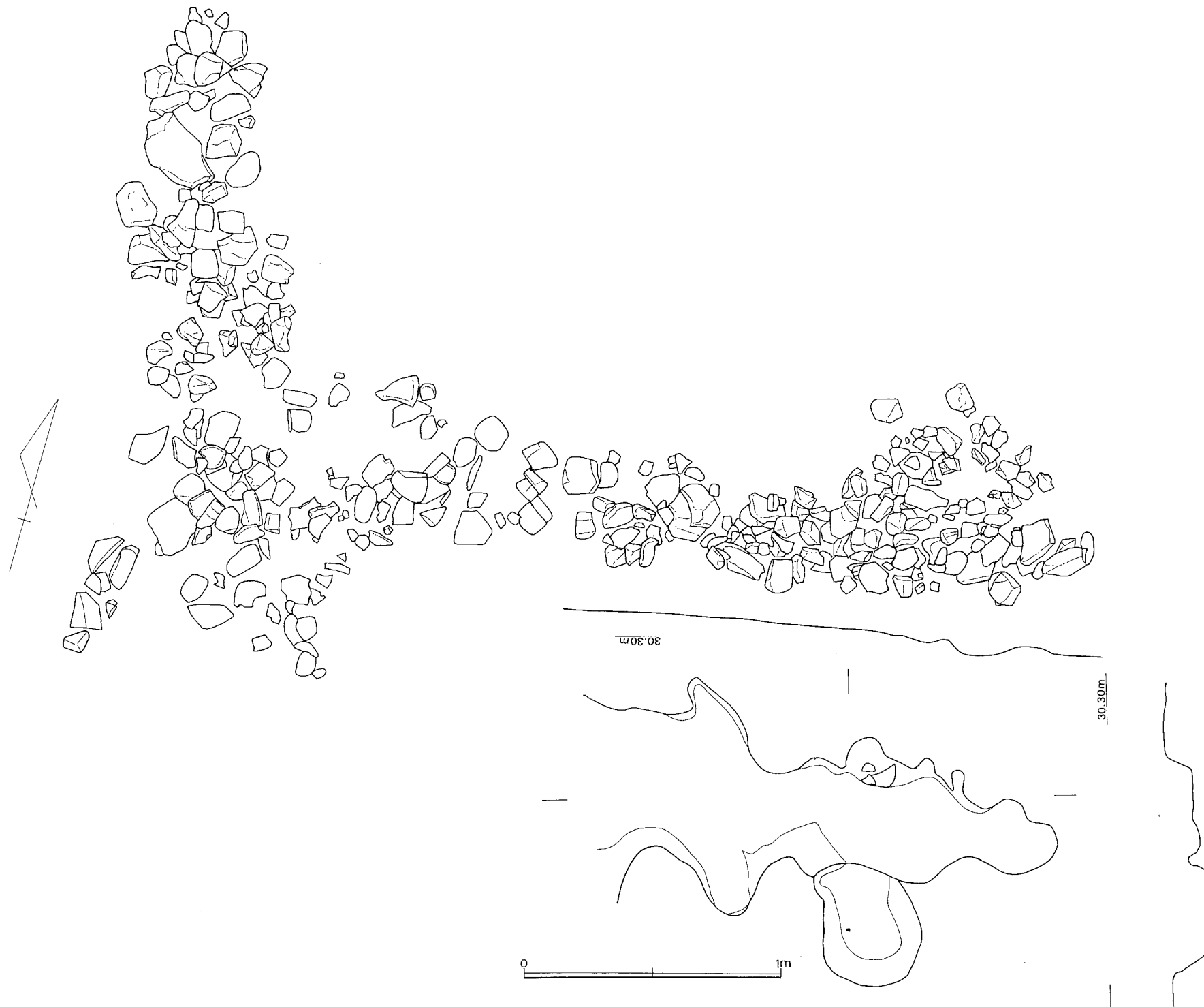


Fig. 17 13F (陶磁器・集石混在) 1/20





Fig. 18 14E (陶磁器・集石混在) 1/20

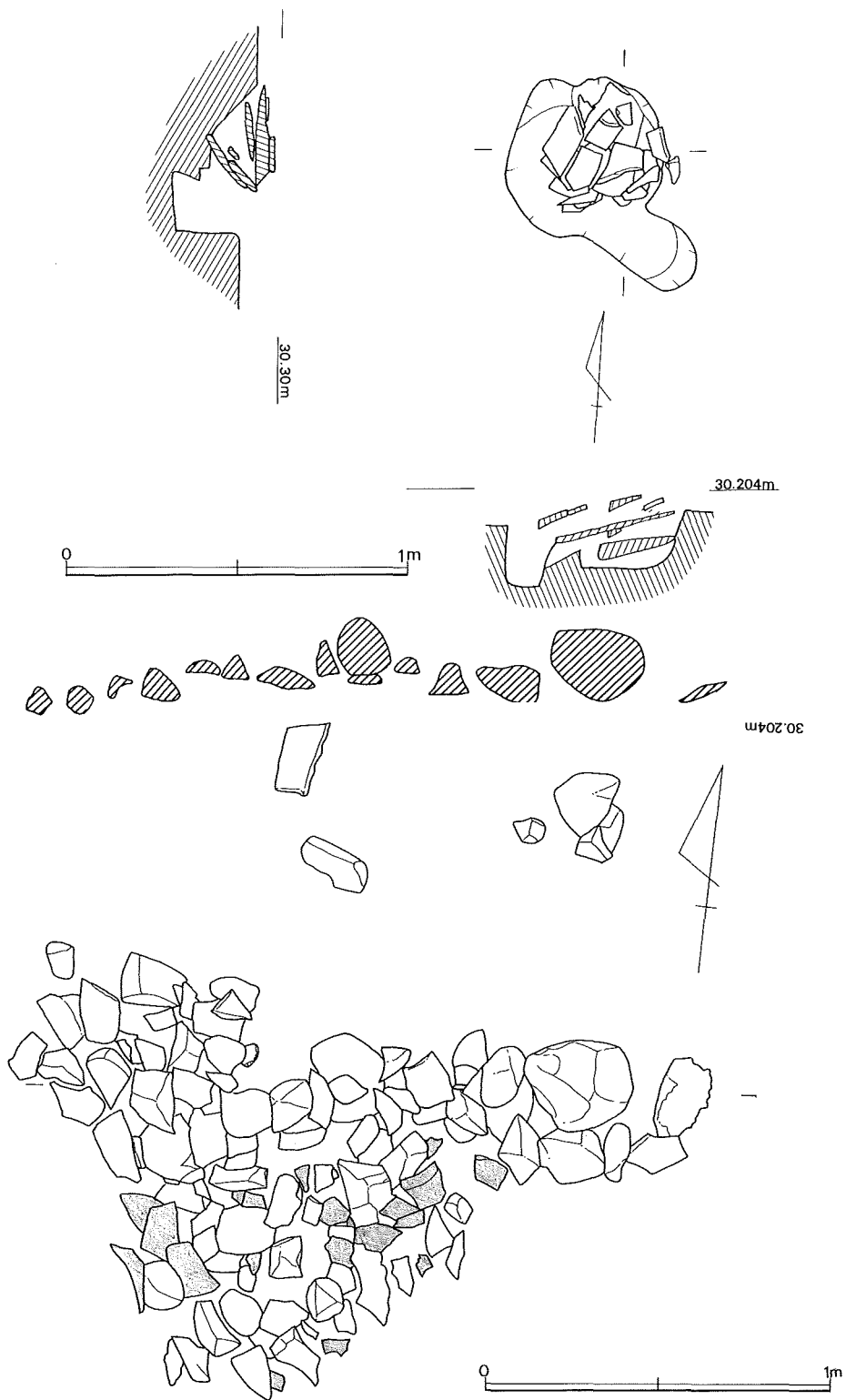


Fig. 19 15E (柱穴)・16D (陶磁器・集石混在)

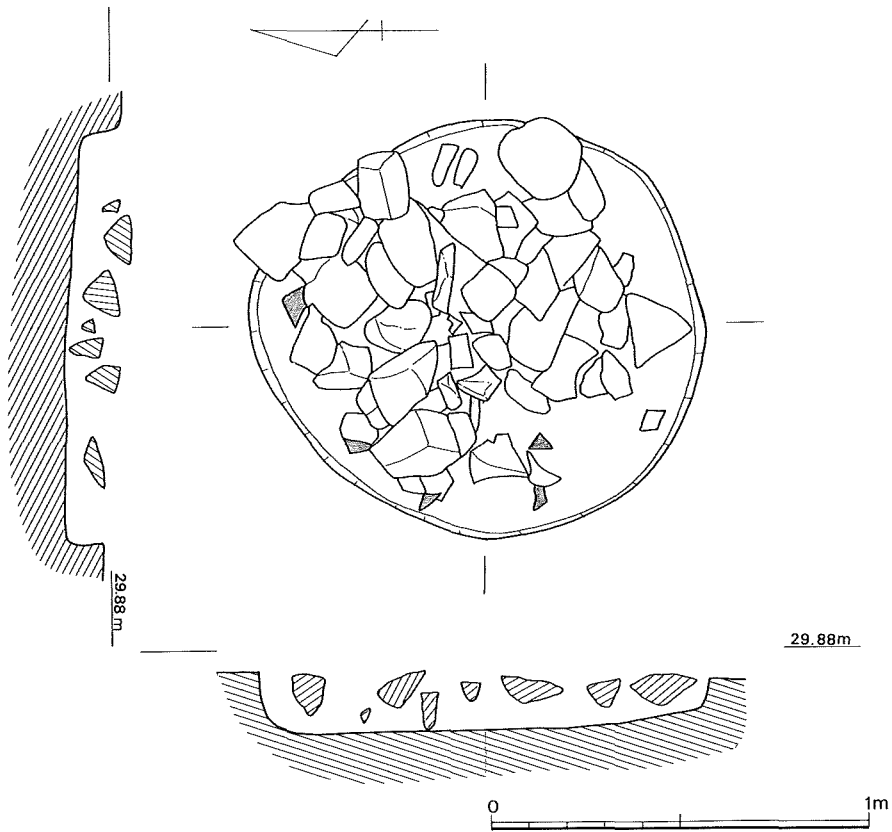


Fig. 20 17E (土坑)

mをはかる。この堀は、西側へ延びるものであるが調査区外のため現状のまま保存されている。  
(町田)

19C (埋甕) (Fig. 21)

C-2区北西隅に位置する。60cm程の大きさの石が集中し、6Cの集石にも一部覆い隠されるような形で、甕が埋置してあった。甕の上半は失われ、下半部から底部しか残存していない。その底部にも石が落ち込んでいた。表面の集石の間等より、Fig. 106~107に示したような、深皿、碗、杯等が出土している。  
(村川)

20C・21C (柱穴) (Fig. 22)

C-2区に東西に並んで隣接する。20Cの柱穴上面の最大径は100cm、底部径35cm、深さは遺構検出面から67cmを測る。21Cは、20Cより若干小ぶりで、柱穴上面の最大径は67cm、底部径44cm、深さは60cmを測る。20C、21Cいずれも、石が浮いた形、もしくは表面を覆う形で集中している。  
(村川)

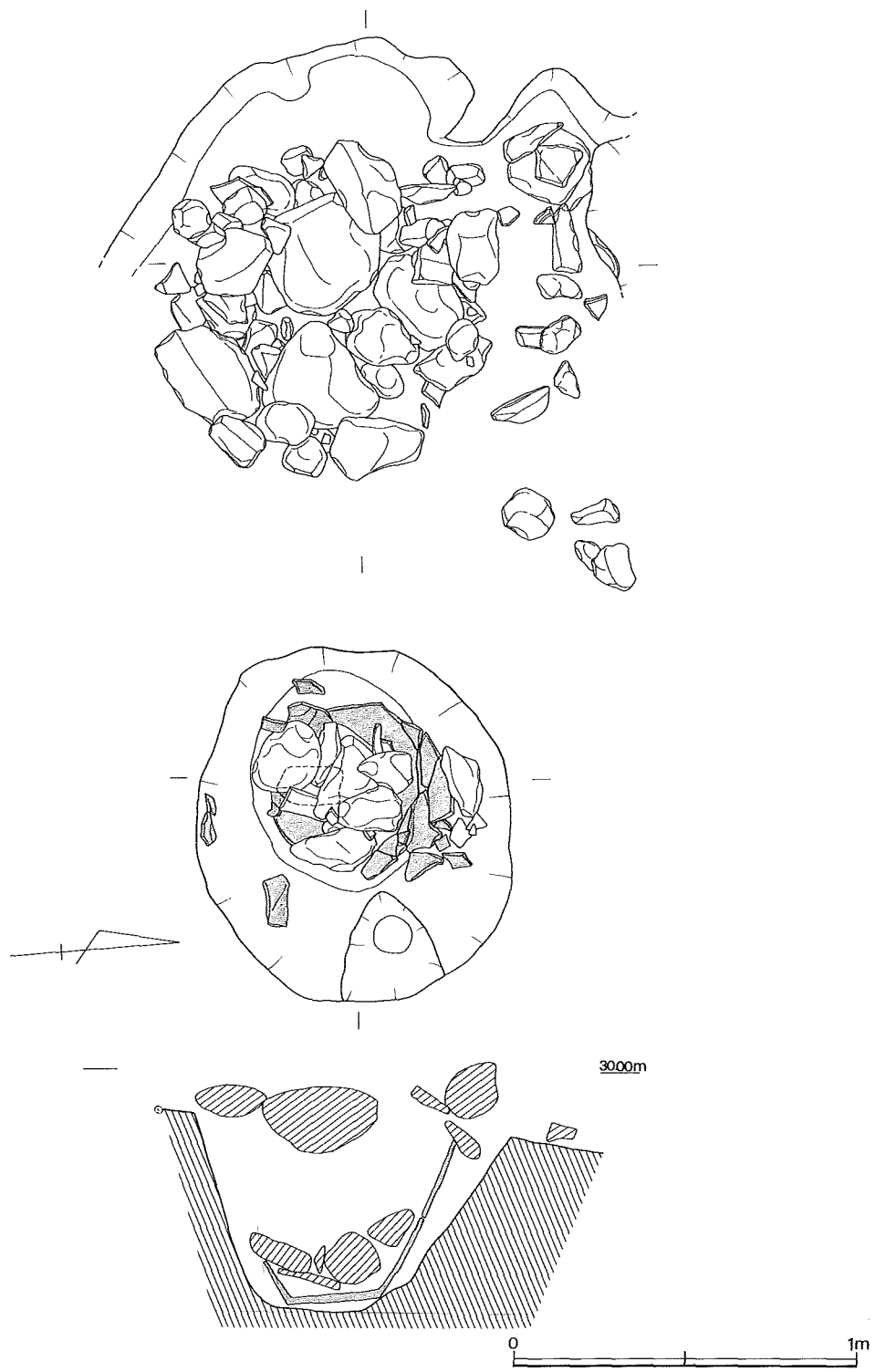


Fig. 21 19C (埋壙) 1/20

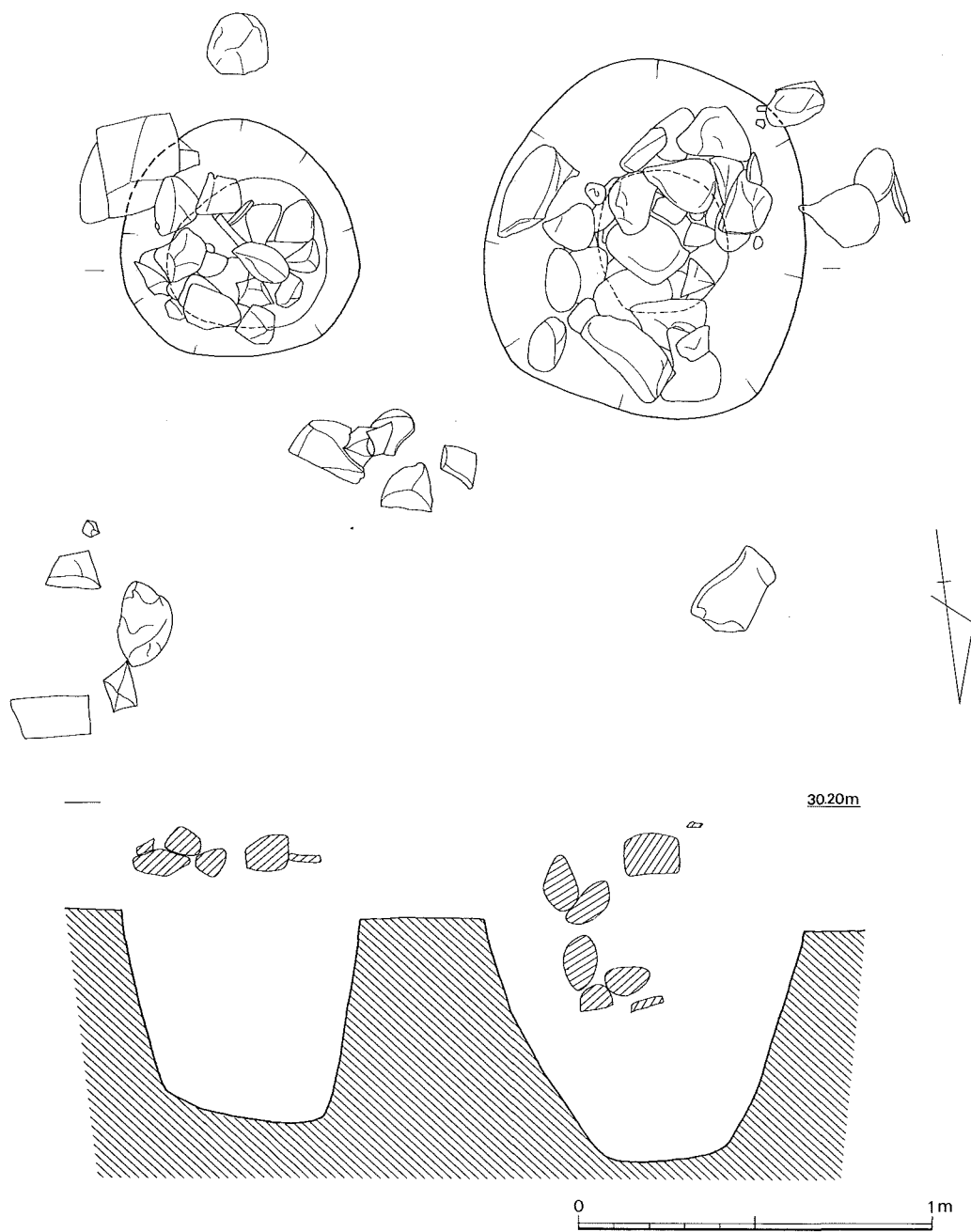


Fig. 22 20C・21C (柱穴)

22 S (土壙) (Fig. 23, 51)

S-20区に検出した遺構である。周辺に青磁片、土師器等が61点出土している土壙中央上部に小礫をあて、北側に100cm×60cmの大礫をあてがっている。土壙の形状は、楕円形を呈し長軸80cm短軸で50cmある。土壙内部からは5~10cm程の小礫13点以外に遺物の出土はなかった。地山面よりの掘り込み40cmを測る。主軸方位N-13°-Wを示す。(町田)

23 S (柱穴) (Fig. 24)

C-2区の北西から南東へ向かう、対角線上に並んで位置している。比較的大きい方の柱穴が、上面の最大径90cm、底部最大径35cm、深さは46cmを測る。比較的小さい方の柱穴が、上面の最大径53cm、底部径40cm、深さは40cmを測る。いずれのピットも礫が混入している。

(村川)

24 C (陶磁器・集石混在) (Fig. 25)

C-2区とC-3区にまたがって位置する。プランは楕円形の集石である。Fig. 25で示した図では、南北40cm、東西30cmの範囲にしか集石は残っていないが、Fig. 16の図でわかるように、もともとは南北150cm、東西130cmの範囲に楕円形状に集中していた。この集石中からはFig. 107に示したように大皿、碗等が出土した。

(村川)

25 B (柱穴) (Fig. 26)

B-4区とC-4区の境目に位置している。長軸が80cm、短軸が70cmの平面形が楕円形の柱穴と判断した。深さは67cm。陶磁器がまとまって出土したが、底部から若干浮いているところから、陶磁器を捨てる為に穴を掘ったのではなく、たまたま、この柱穴に陶磁器をすてたものであろう。皿、小碗、碗、筒形碗、広東碗、杯、大皿、紅皿、徳利、片口、仏飯碗、等多種にわたっている。小碗が7個程度まとまって出土しているのが注目される。

(村川)

26 E (土壙) (Fig. 27)

F-4区の南東隅、F-4区とE-5区にも若干入る形で位置している。長軸長252cm、短軸長165cmの平面形は楕円形を呈している。深さは最大で50cmを測る。底面は基盤の岩盤の為、凹凸がある。陶磁器がかなり出土した。陶磁器捨場であろうか50cm程の大きい岩が混入している。出土した陶磁器は、Fig. 109に示すように皿、碗、青磁の火入れ、杯、小鉢等である。

(村川)

27 B (土壙) (Fig. 28)

B-1区とB-2区の境目と、B-2区の北西隅に位置する。大きい方が長軸長156cm、短軸長96cm、深さは32cmを測る。礫、及び陶磁器が混入している。礫の下には2個の柱穴が検出された。小さい方は最大径82cm、底が平らで深さが15cm程の浅い小土壙である。礫が混入している。

(村川)

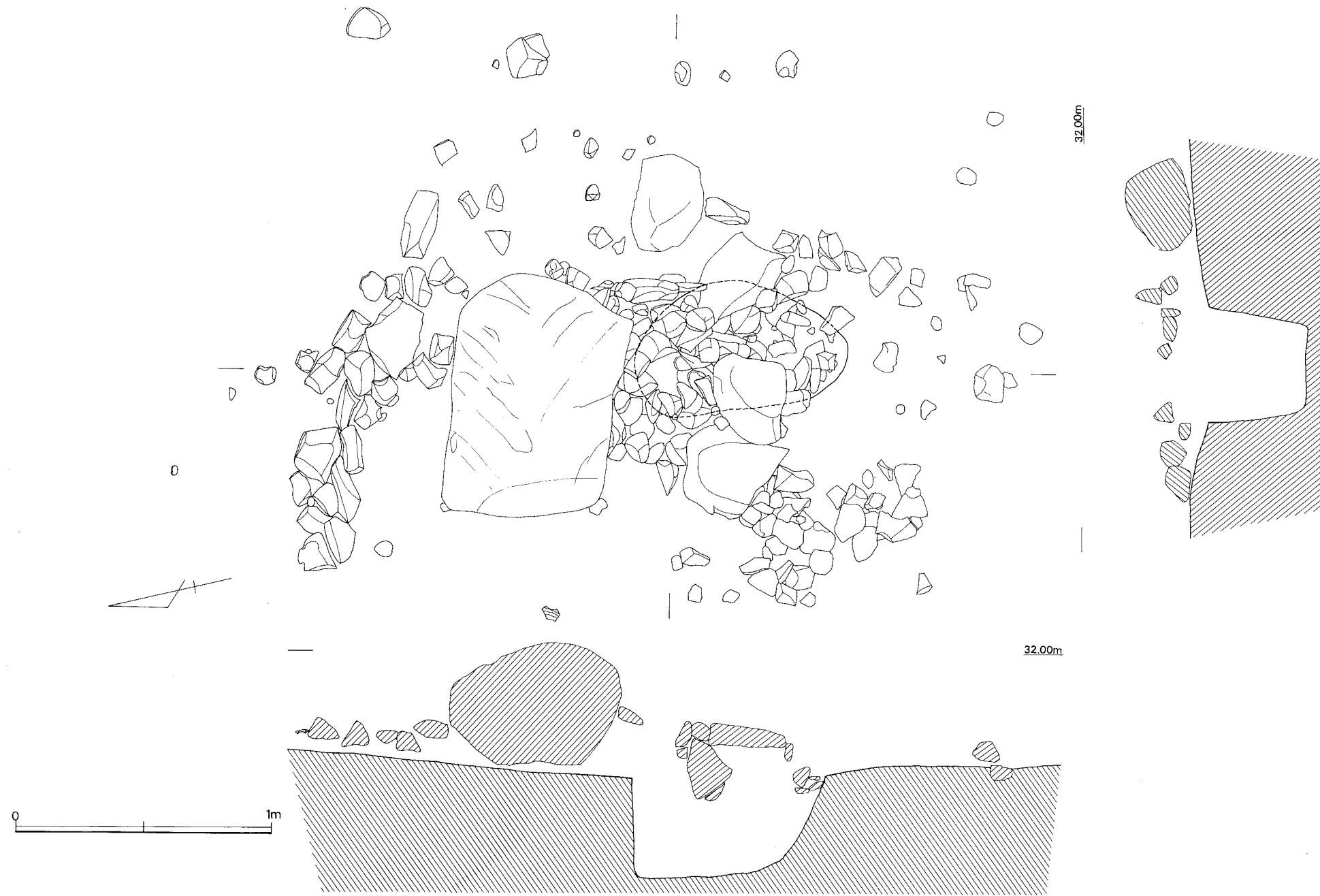


Fig. 23 22S (土壇)

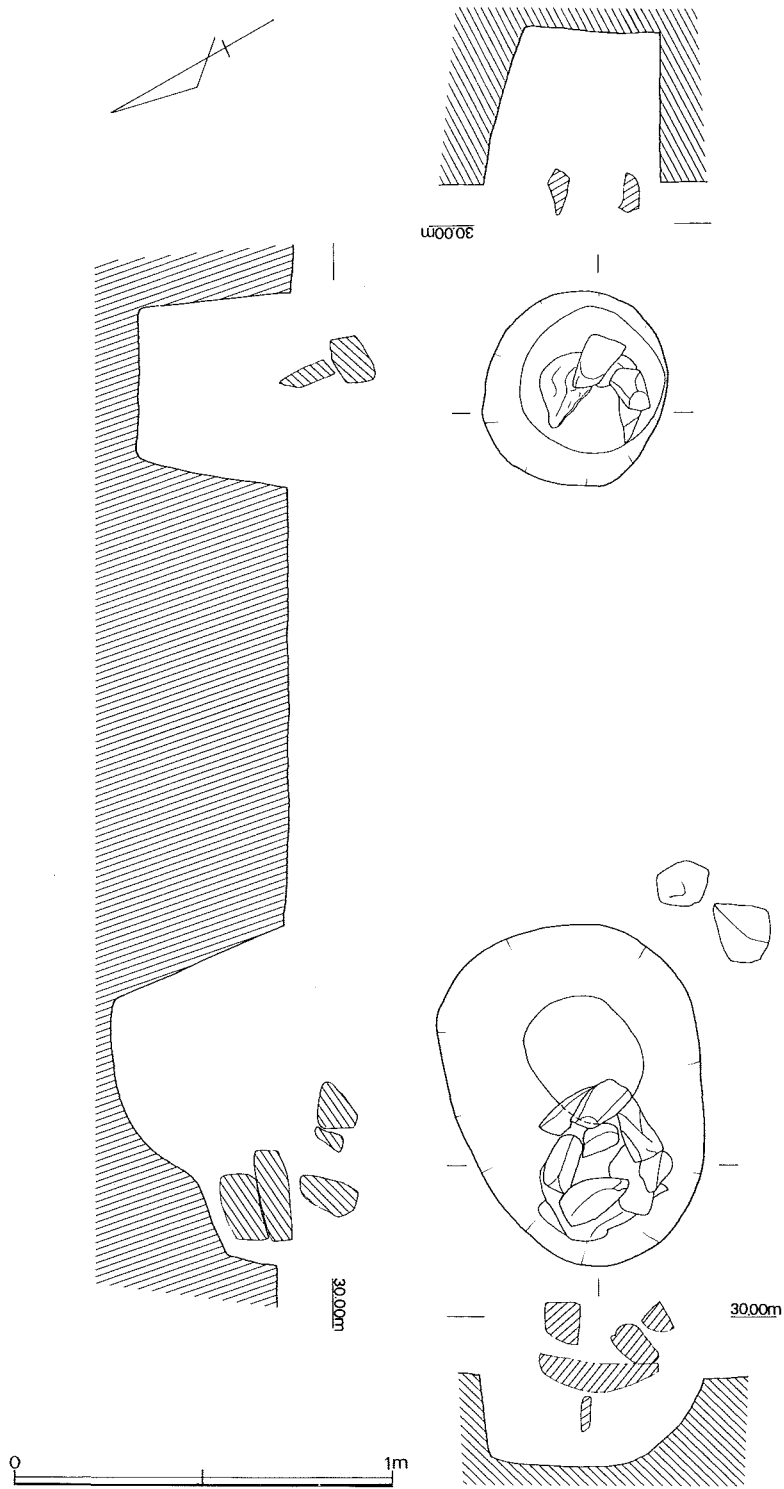


Fig. 24. 23S (柱穴) 1/20





Fig. 25 24C (陶磁器・集石混在)

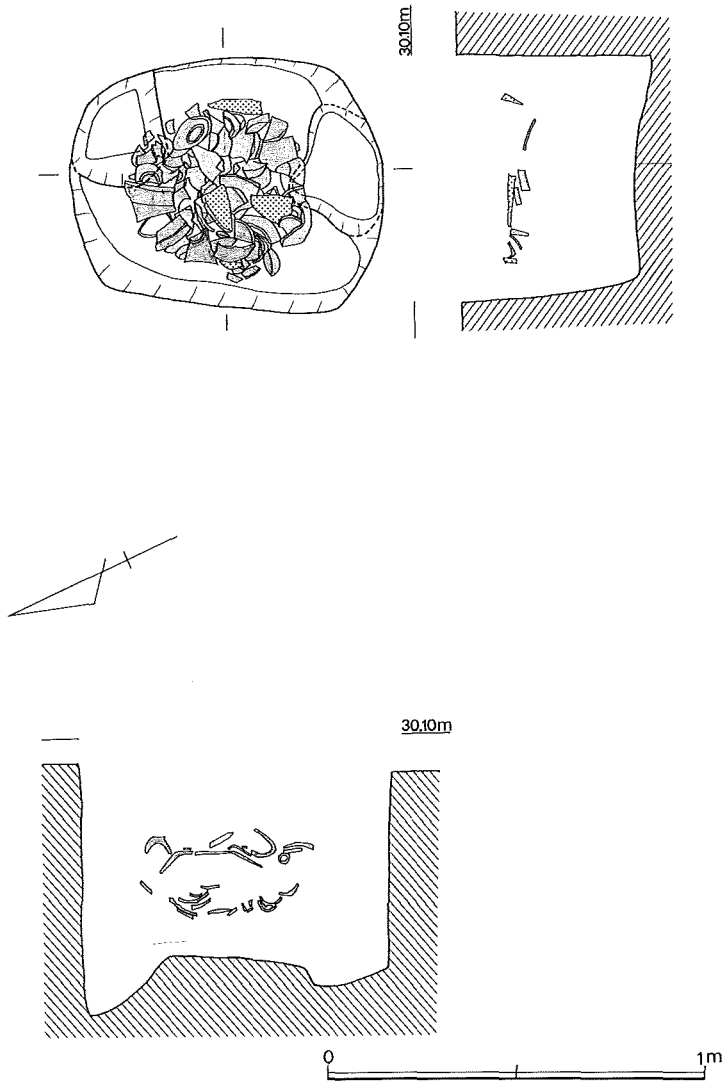


Fig. 26 25B (柱穴) 1/20



Fig. 27 26 E (土壇) 1/20

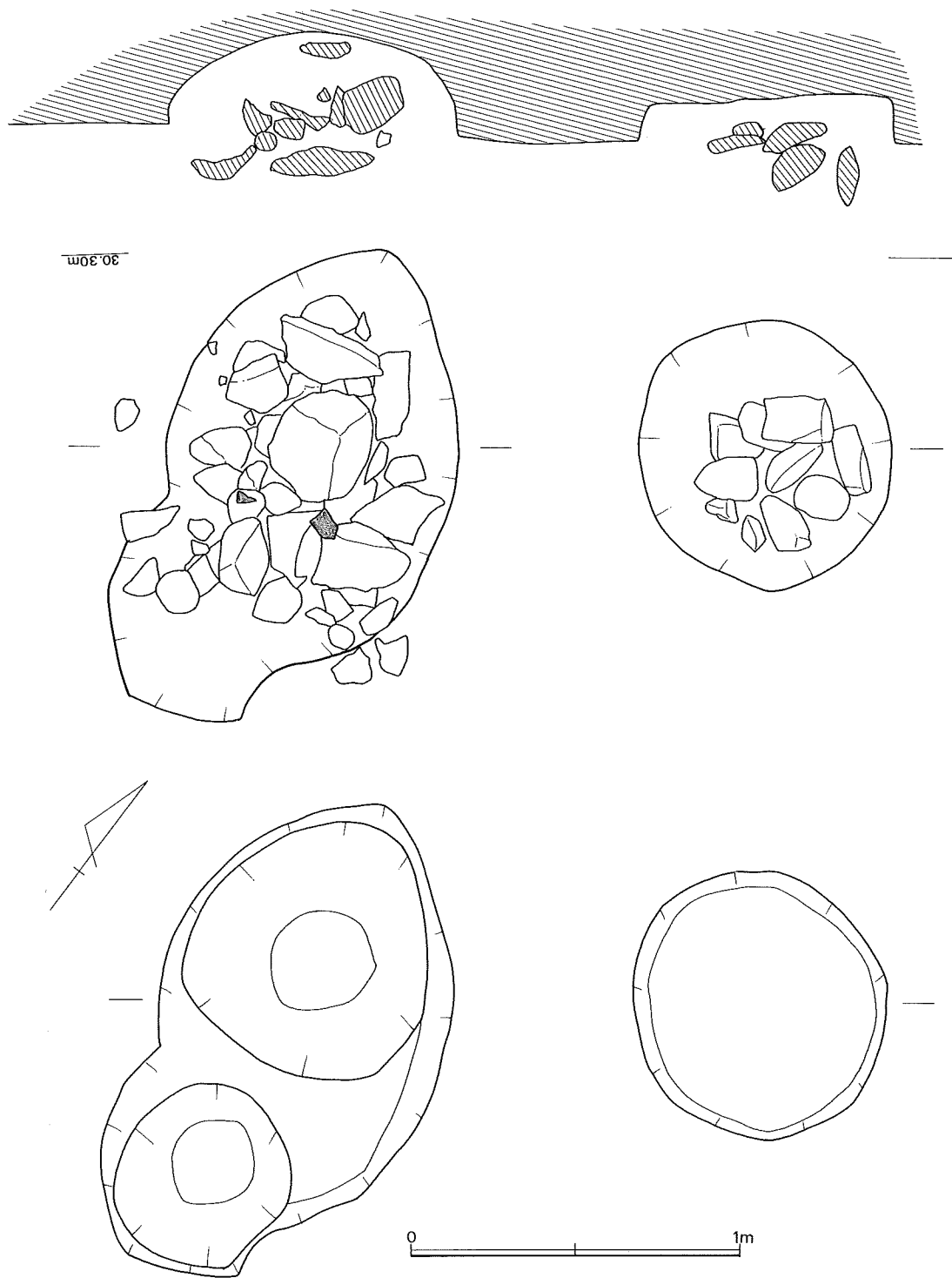


Fig. 28 27B (土壇)

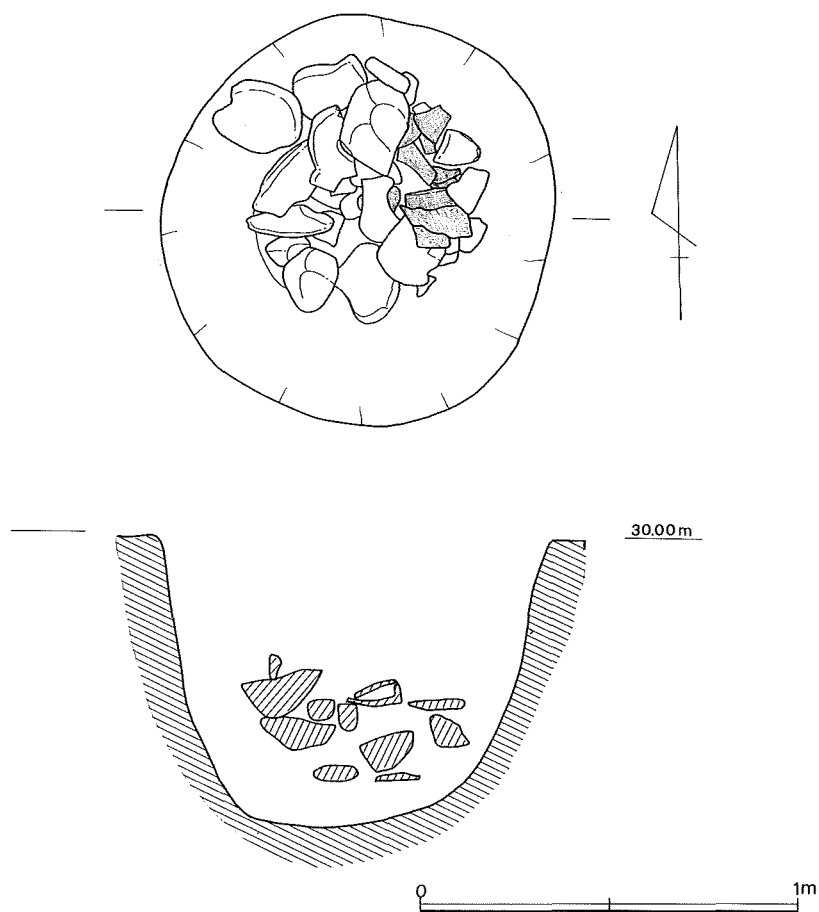


Fig. 29 28A (柱穴) 1/20

28A (柱穴) (Fig. 29)

A-3区中央に位置している。最大径110cmの円形の柱穴である。最大底径60cm、深さが68cm。礫、及び陶磁器が混入している。(村川)

29A (柱穴) (Fig. 30)

28Aの東側に位置している。最大径80cm、底径66cmの円形の柱穴で、深さは58cm。礫、及び陶磁器が混入している。(村川)

30B・31B (柱穴) (Fig. 31)

B-2区の東側、北寄りに位置する。30Bは、最大径56cm、底径34cmの円形の柱穴である。上面に礫が集中している。31Bは、東西140cm、南北90cm程の範囲の楕円形の集石の下は柱穴

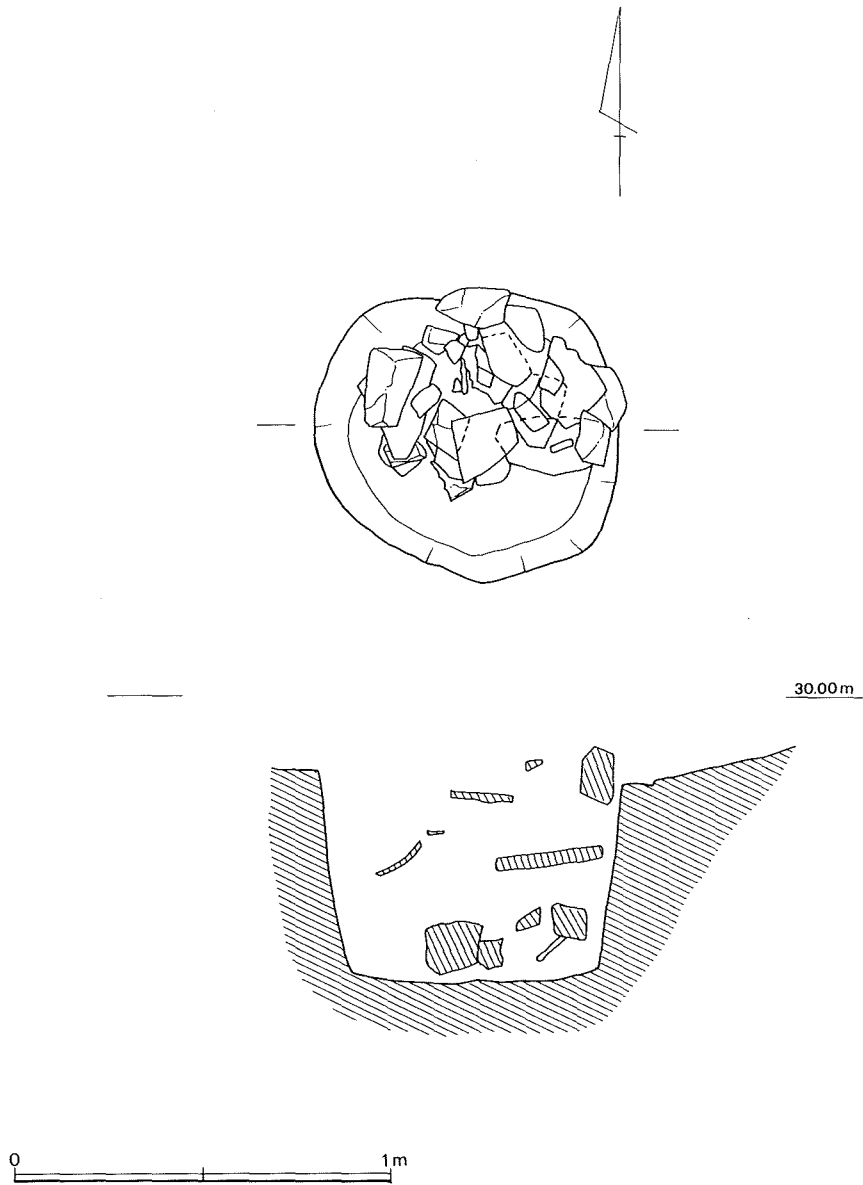


Fig. 30 29A (柱穴) 1/20

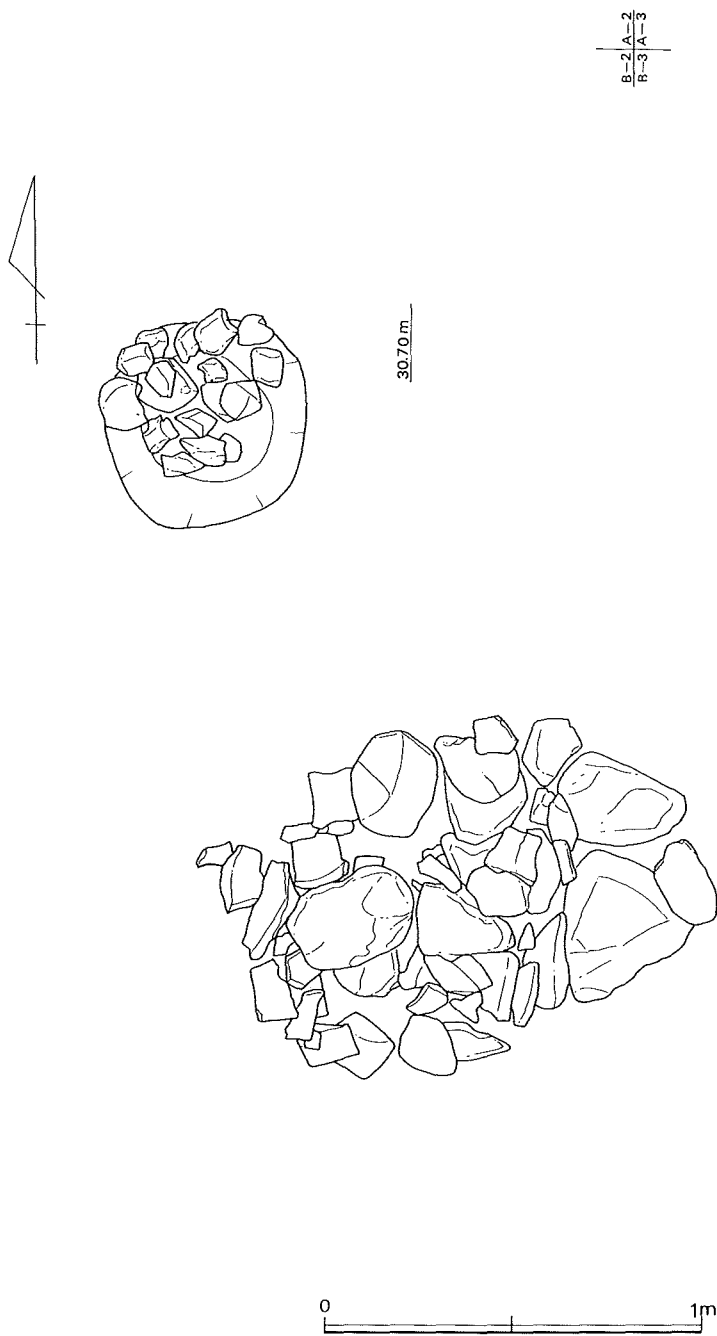


Fig. 31 30B・31B (柱穴) 1/20

(村川)

であった。

32A (埋甕) (Fig. 32)

A-4区東側中央に位置している。南北長83cm, 東南長84cm, 掘り込み上面よりの深さ83cmの土壌の中に, 大甕が壊れて, ひしゃげた形で検出された。この大甕は復原してFig. 109-145に図示しているが, 高さ108cm, 口径77cm, 高台径33cmであった。

(村川)

33G (土壙) (Fig. 33)

G-8区で検出し, 近世陶磁器と10cm前後の礫を投げ込む。陶磁器には, 長与系の茶碗, 皿類と武雄北部・南部系の甕類が56点出土している。平面プランは, 地山面を20cm程掘り下げ, 長楕円形を呈している。長軸を170cmに短軸を90cm測り, 主軸方位はN-21°-Wを示す。

(町田)

34G (土壙) (Fig. 34)

G-8区に33Gと接している。33Gを切りとっていることから新しい遺構である。遺物には, 甕, 碗, 皿類が91点出土し, 礫の大きさは10~20cm程が混入している。プランは, 隅丸長方形をなし長軸210cmで短軸150cmを測る。主軸方位N-114°-Eを示している。

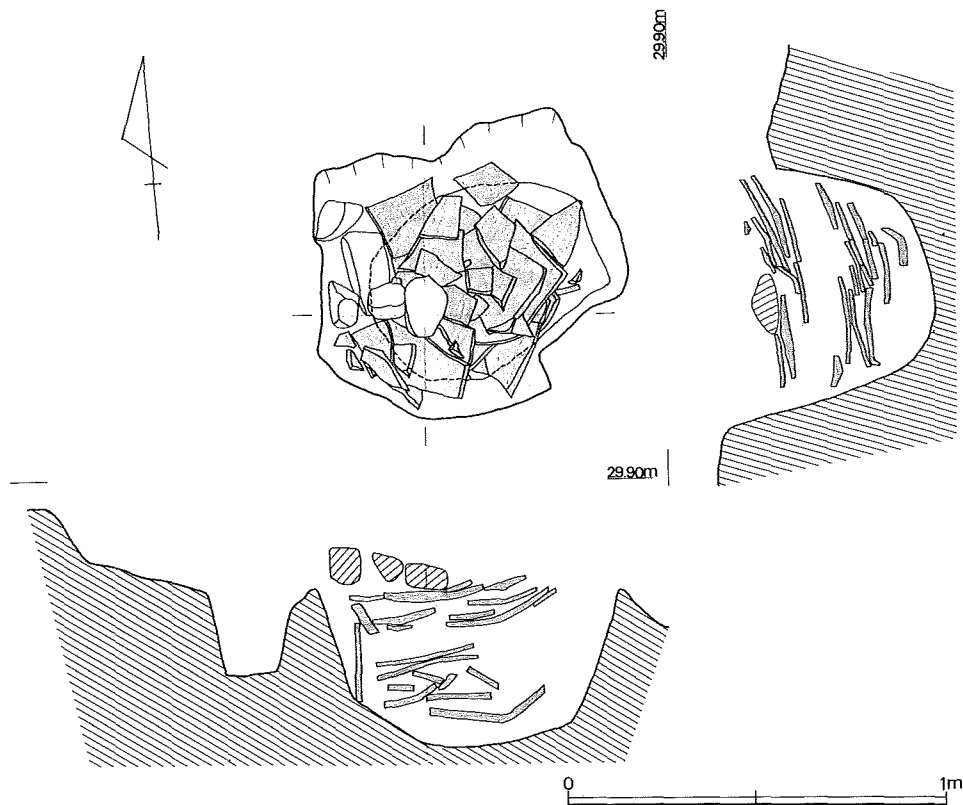


Fig. 32 32A (埋甕)



小菌城跡



Fig. 33 33G (土壌) 1/20



Fig. 34 34G (土壙) 1/20

35 O (土壇) (Fig. 35)

検出区は、O・P-10・11区にある。プランは、円形状を呈し、主軸方位 $N-27^{\circ}-E$ を示す。長軸を140cmに短軸を110cmとする。地山面を約50cm掘り下げさらに中央部にロート状の掘り込みを30cm程行っている。礫の堆積が約30cm程ある。この礫の大きさは、10cm前後が多く入り、陶磁器の混入が比較的すくない。(町田)

36 O (土壇) (Fig. 36)

O-11区に位置する。プランは楕円形を呈し、長軸を80cmと短軸を50cmに深さが80cmある。中央部が柱穴状に深くなる。上部に礫が20cm程に詰まれているが陶磁器の出土はない。主軸方位 $N-104^{\circ}-E$ を示す。(町田)

37 N (土壇) (Fig. 37)

N-12区に位置する。プランは、隅丸正方形を呈し、長軸を100cmに短軸を96cm測る。地山面からの深さが、66cmある。遺物の出土はなく10cm程の黒灰色の土を充填している。礫は、壁面周辺にまんべんなく置かれている。(町田)

38 N (土壇) (Fig. 38)

N-12区にあり、楕円形のプランをなす。中央部に30cm大の礫を2枚重ね周りに安山岩の風化礫があり、遺構内より近世陶磁器1点出土。長軸を86cmに短軸を74cm測り、地山掘り込み面の深さ25cmある。主軸方位 $N-99^{\circ}-E$ を示す。(町田)

39 O (土壇) (Fig. 39)

O-11区にあり、プランは隅丸長方形を呈している。長軸を160cmに短軸を106cmとしている。地山面より34cm掘り下げている。陶磁器の出土はなく、東側の壁面に沿って15cm程の礫を積み重ねこの隙間には安山岩風化礫が入る。主軸方位 $N-103^{\circ}-E$ を示す。(町田)

40 O (土壇) (Fig. 40)

O-12区にあたる。プランは楕円形を呈し、長軸を100cmに短軸を85cm測る。風化礫を投入し、地山面よりの深さ80cmの二段掘りとなっている。遺物の出土なし。主軸方位 $N-99^{\circ}-E$ を示す。(町田)

41 N (土壇) (Fig. 40)

N-11区に位置し、楕円形のプランをなす。長軸は84cmに短軸64cmあり、地山より36cm掘り下げを行う。礫は、比較的大きく25cm前後のものを投入し、下部に10cm程の黒灰色土を充填している。主軸方位 $N-100^{\circ}-E$ を示す。(町田)

42 N (土壇) (Fig. 41)

N・O-10区にあり、長軸を65cmに短軸を54cm測る。地山面を26cm掘り下げている。浅い掘り込みであるが、礫はプラン壁面に沿って丁寧に下部から重ねられている。近世陶磁器の杯が1点出土している。主軸方位 $N-95^{\circ}-E$ を示す。(町田)

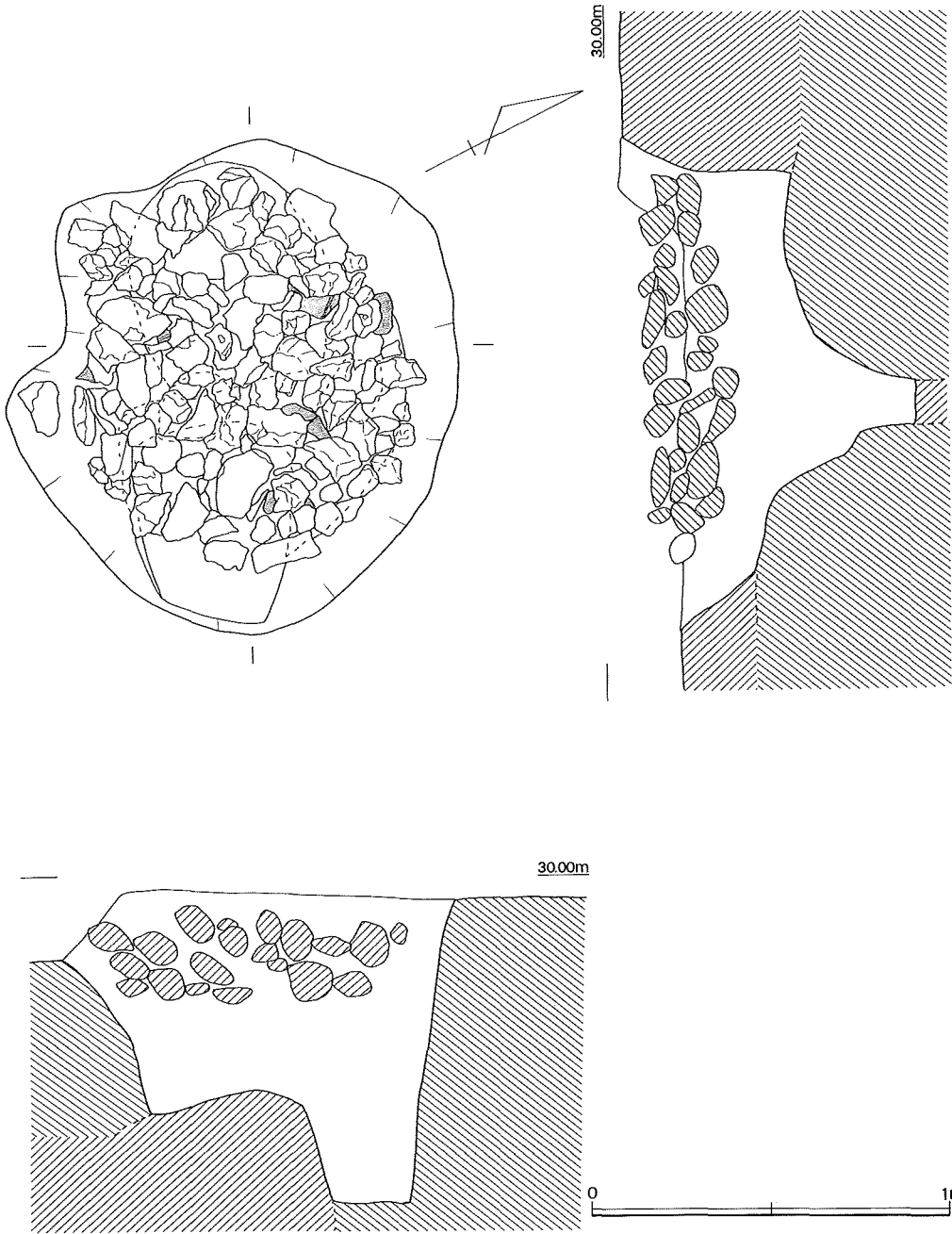


Fig. 35 35O (土境) 1/20

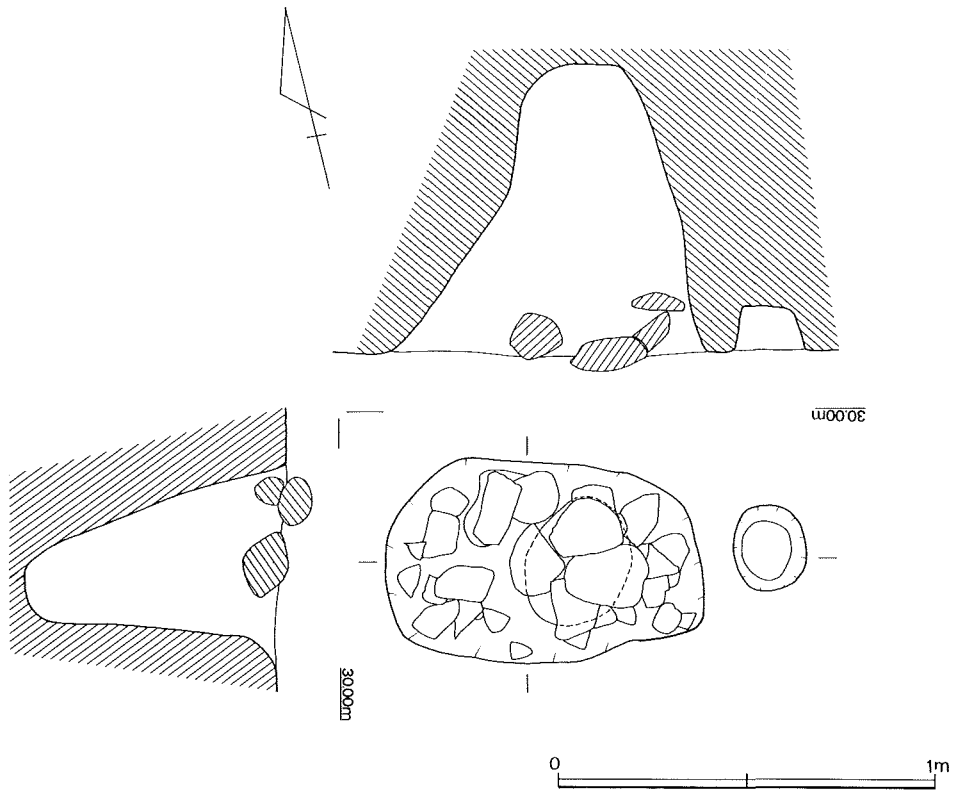


Fig. 36 36O (土壇)

43N・44N (柱穴) (Fig. 42)

43Nは、N-11区に位置し長軸を74cmに短軸を65cm測る。52cm地山を掘り下げ、20cm程の礫を1点と比較的扁平な礫を2点の計3点を上部に残す。主軸方位N-98°-Eを示す。44Nは43Nとほぼ平行に並び、長軸を74cmに短軸を71cm測る。断面U字形をなし、地山掘り込み48cmを測る。内部より礫8点出土あり、この中には安山岩風化礫も含まれる。主軸方位N-98°-Eを示す。

(町田)

45N (土壇) (Fig. 43)

長楕円形のプランをなし、近世陶磁器が入る。床面から14cm程黒灰色土を充填し、この上部を壁面に沿い15cm程の礫を投入している。長軸を180cmに短軸を106cm測る。地山面よりの掘り

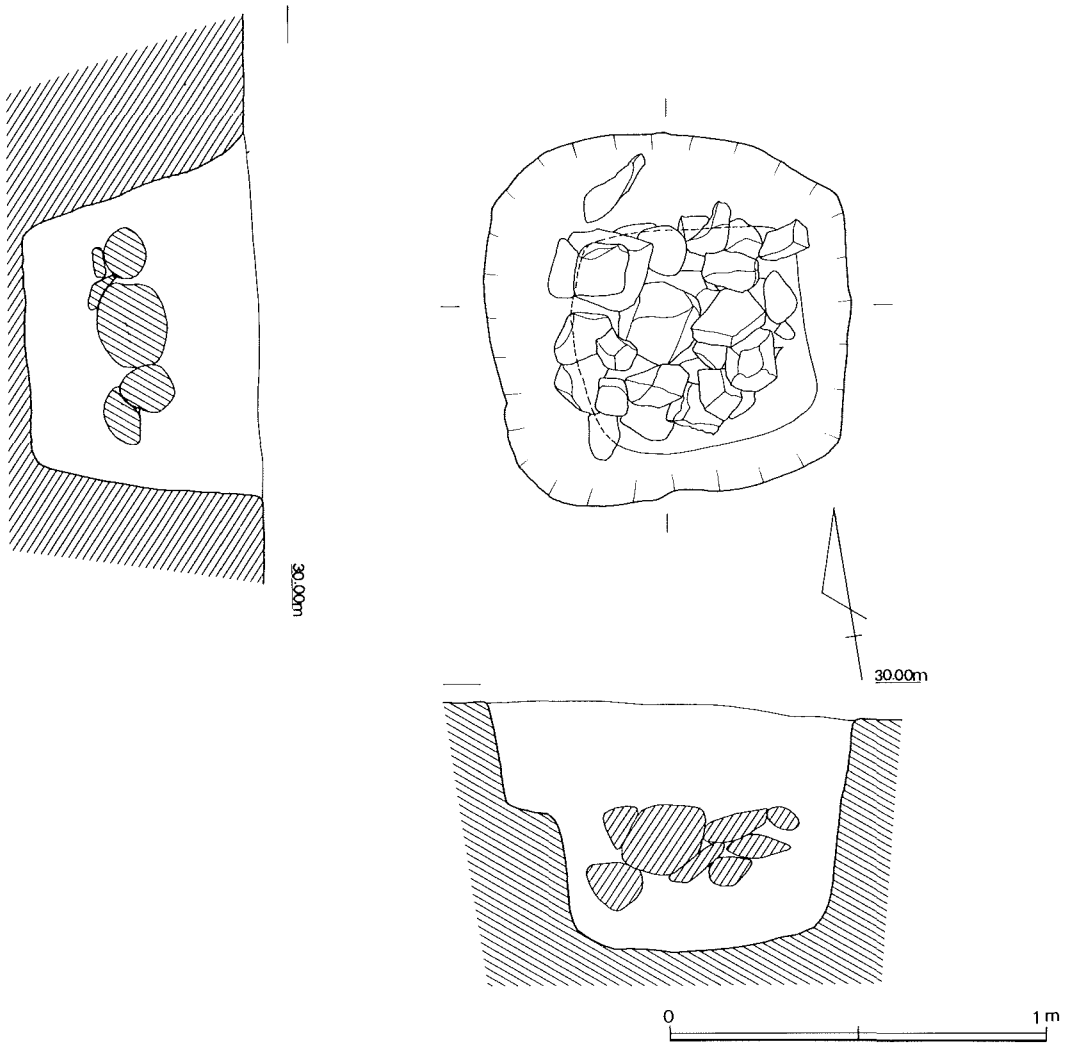


Fig. 37 37N (土壙)

込み64cmある。

(町田)

46 I (土壙墓) (Fig. 44)

I-9区に検出している。楕円形のプランをなし105cmを長軸に短軸を66cm測る。地上面よりの掘り込みは、44cmある。土壙内より人骨と土師器の杯が出土している。人骨の所見では、性別女性と得ている。主軸方位Nを示す。

(町田)

47 I (土壙墓) (Fig. 45)

I-9区に位置する。楕円形のプランをなしていたものと考えられるが、上部の削平及び東側の柱穴などによる近世の遺構によって攪乱を受けいびつな形状となっている。北側に土師器の皿、杯等が埋置されているところから北側に頭部があったと推定される。また、人骨の存在

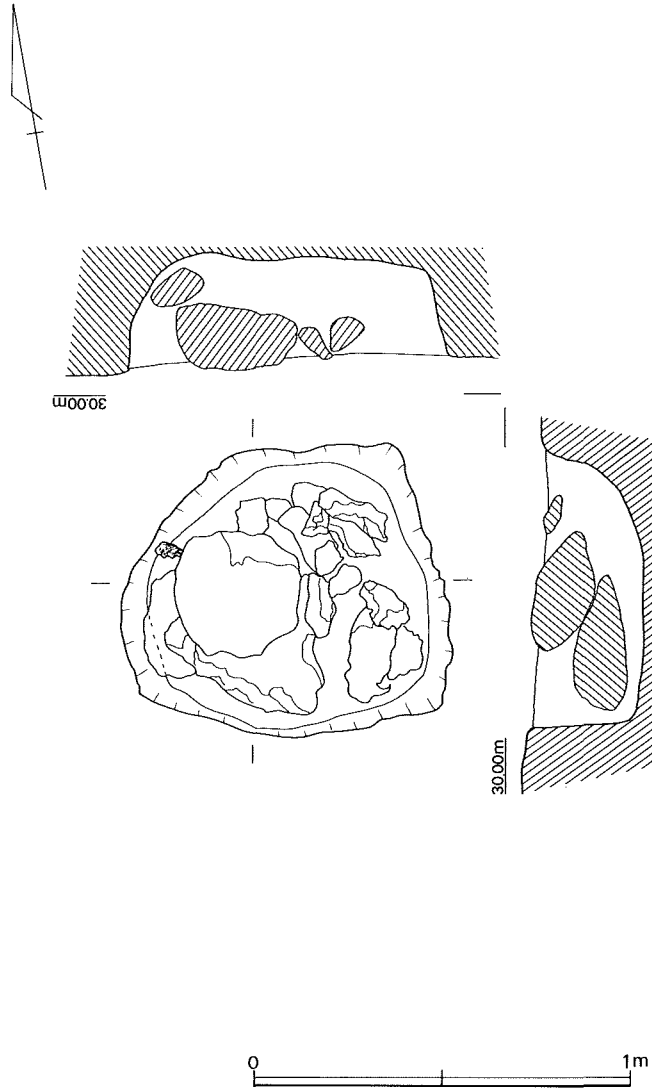


Fig. 38 38N (土壌) 1/20

は確認されているが、性別等は不明との所見である。長軸は150cmに短軸の推定80cmあり、地山面より66cmの掘り込みであった。主軸方位N-7°-Wを示す。出土遺物点数杯2点と皿が

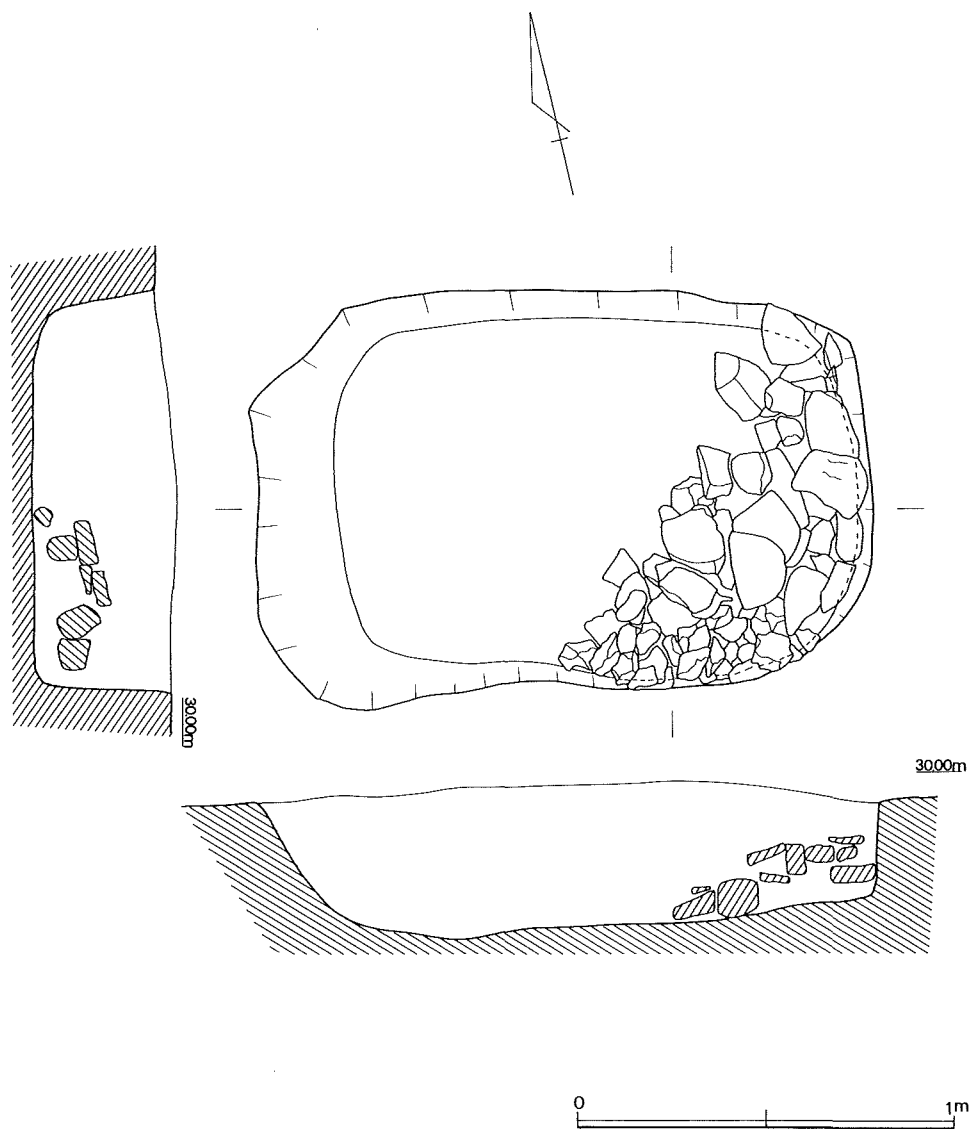


Fig. 39 390 (土壇) 1/20



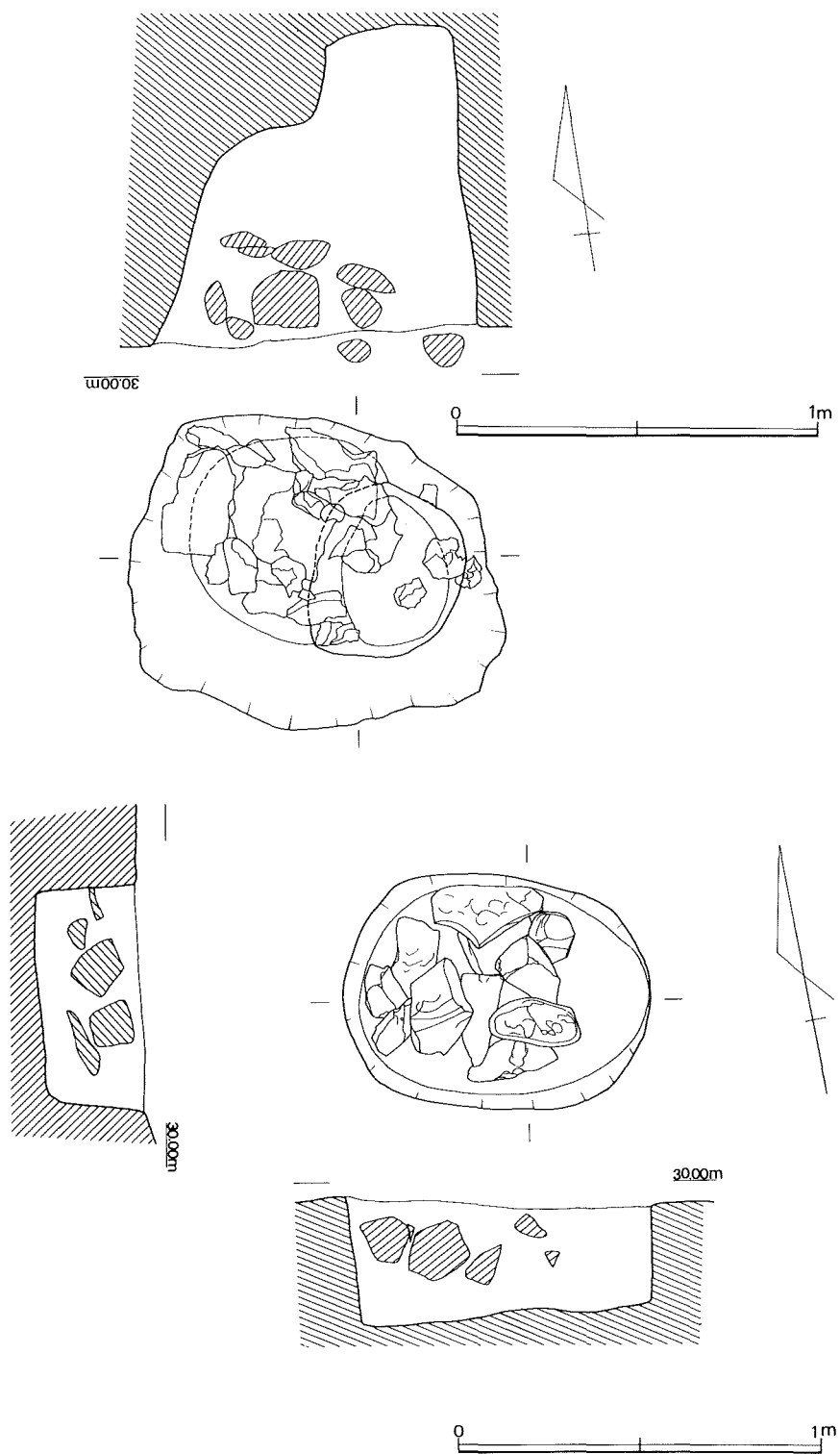


Fig.40 40O (土壇)・41N (土壇) 1/20

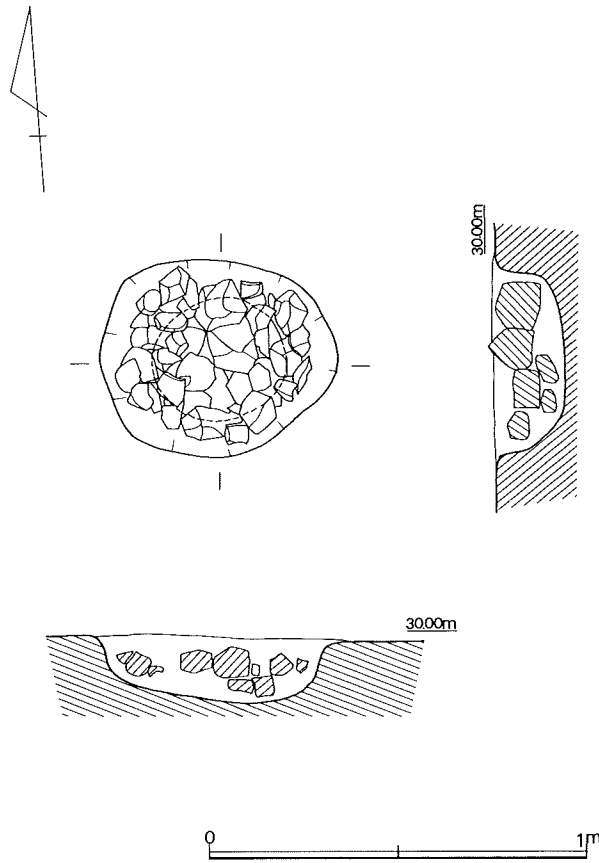


Fig. 41 42N (土壙)

4点あった。

(町田)

48 I (土壙墓) (Fig. 46)

I-9区にある。楕円形のプランを呈し、副葬品に杯(3点)、貨幣(朝鮮通宝7枚)が出土。北側隅一部を近世の柱穴によって切られているが、形状をよく残していた。

長軸を150cmに短軸を86cm測る。地山面より24cmの掘り下げが残っている。主軸方位N-21°-Wを示す。

(町田)

49 I (土壙) (Fig. 47)

I-8区にあり、ほぼ円形のプランを呈している。長軸を71cmに短軸を64cmとし、地山面よりの掘り込み58cm。下部に10cm程の黒灰色土を充填し、10~20cm前後の礫を投げ入れている。遺物には近世陶磁器2点が出土している。

(町田)

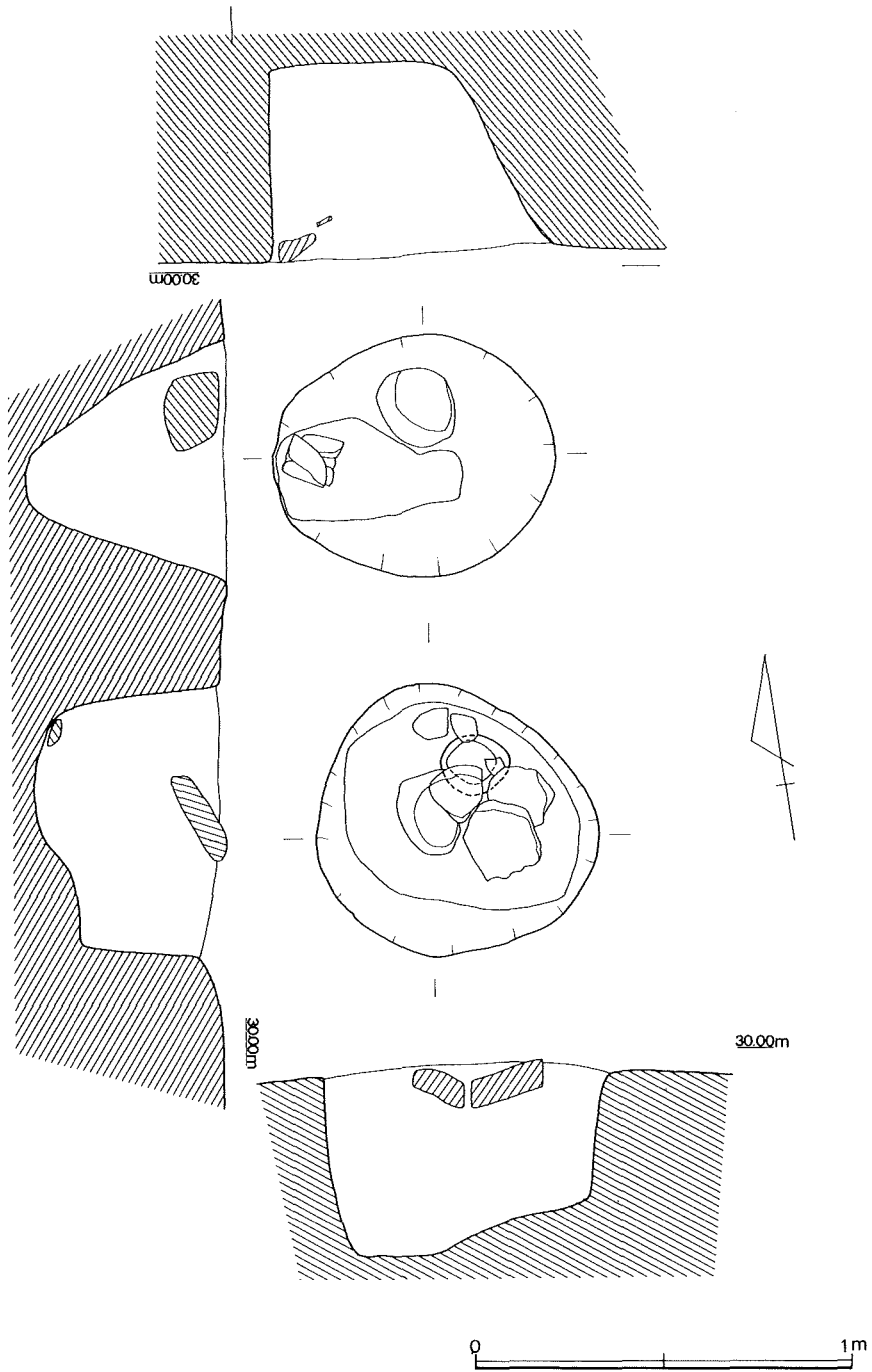


Fig. 42 43N・44N (柱穴) 1/20

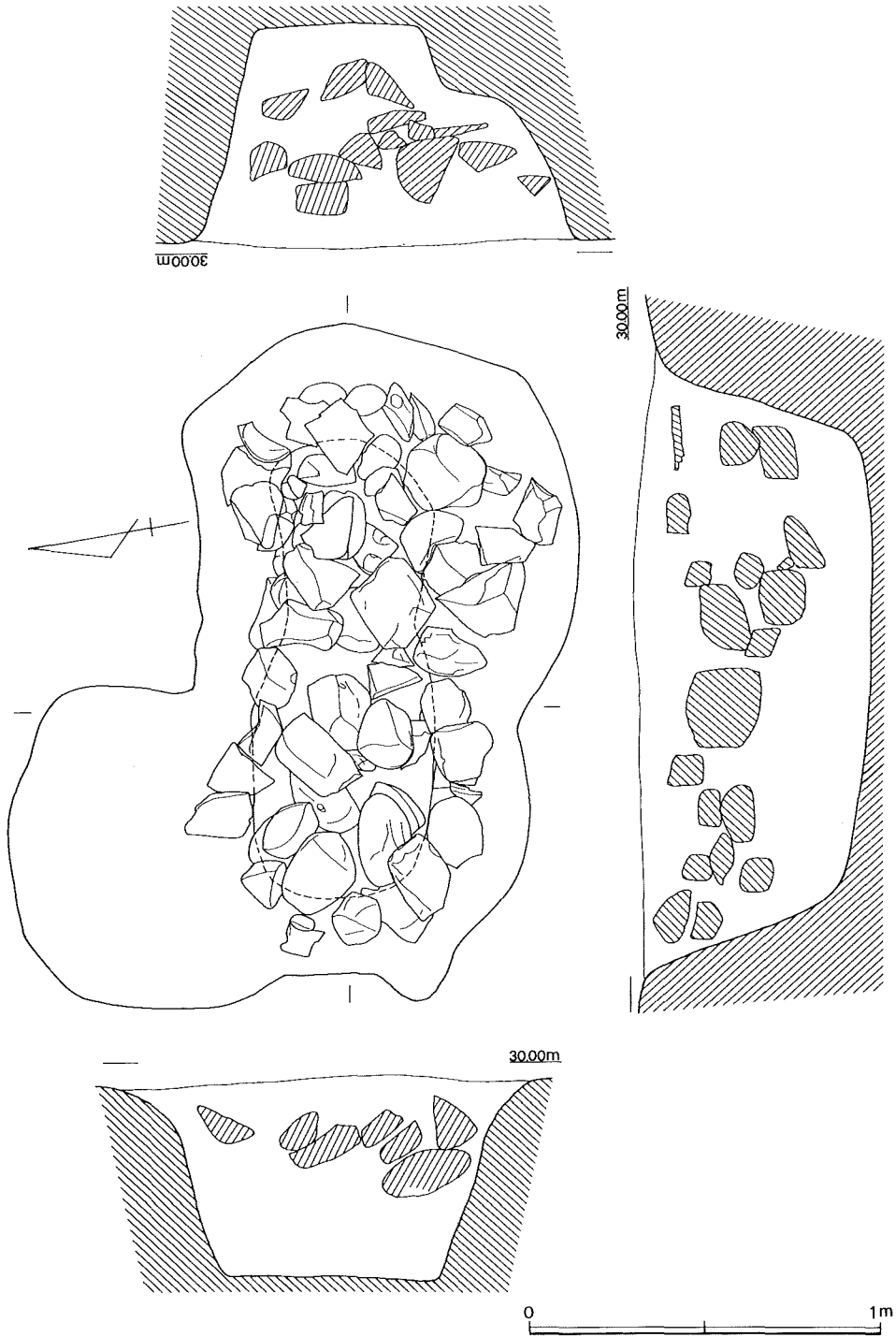


Fig. 43 45N (土壇) 1/20

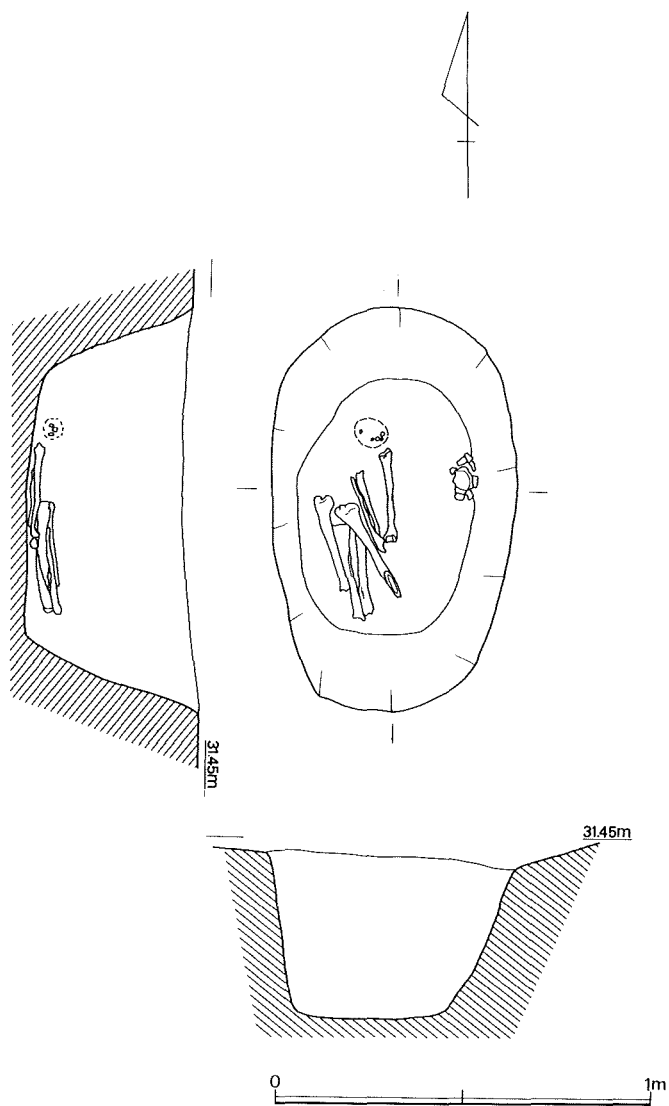


Fig. 44 46 I (土墳墓) 1/20

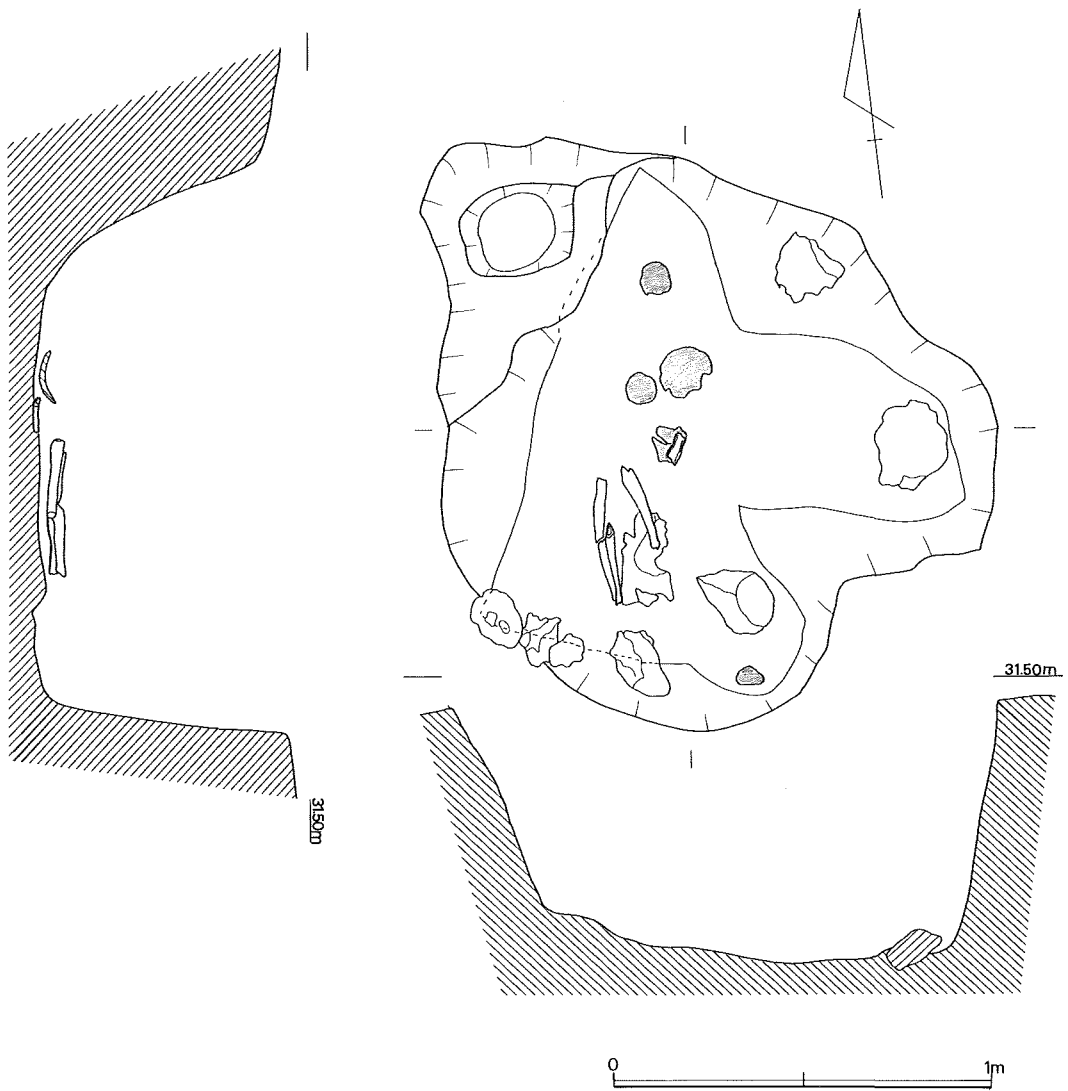


Fig. 45 471 (土墳墓) 1/20

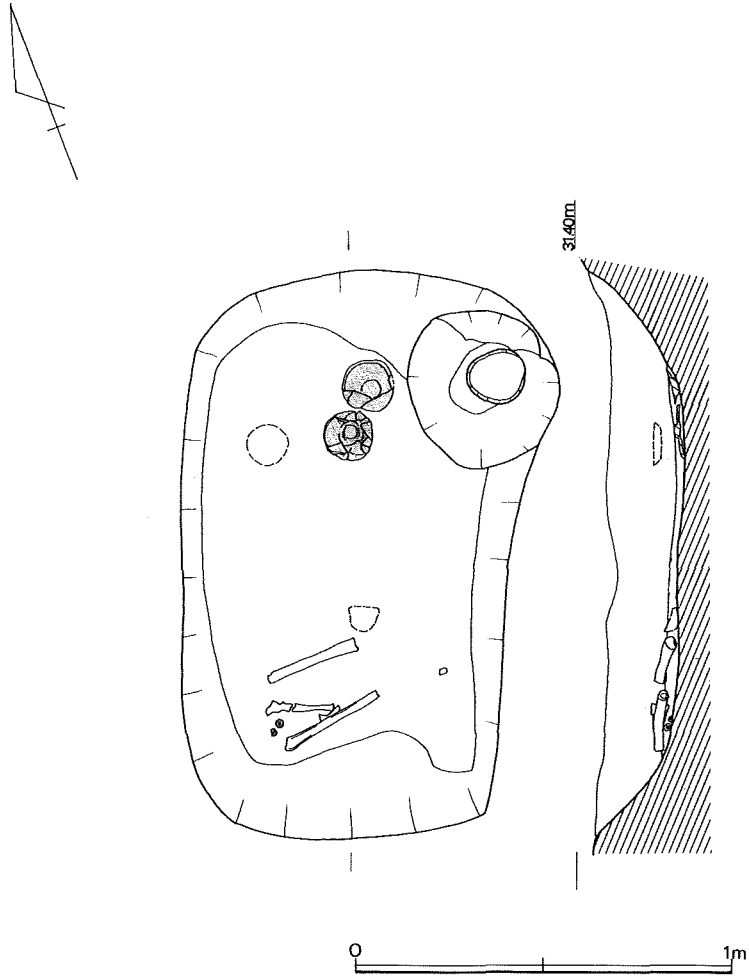


Fig. 46 48 I (土墳墓) 1/20

50 R (集石) (Fig. 51)

R-19区の2層に検出し、地山面の掘り込み等はなく礫の集合が認められた。遺物には、近世陶磁器が含まれている。(町田)

51 I (埋甕) (Fig. 48)

I-9区に位置する。ほぼ円形のプランを呈する。長軸を107cmに短軸を100cmとし、地山面よりの掘り込みは64cmである。土壙内部に、近世の大型の甕が埋設されていた。甕の底部は、円形に穿たれていた。主軸方位N-12°-Eを示す。(町田)

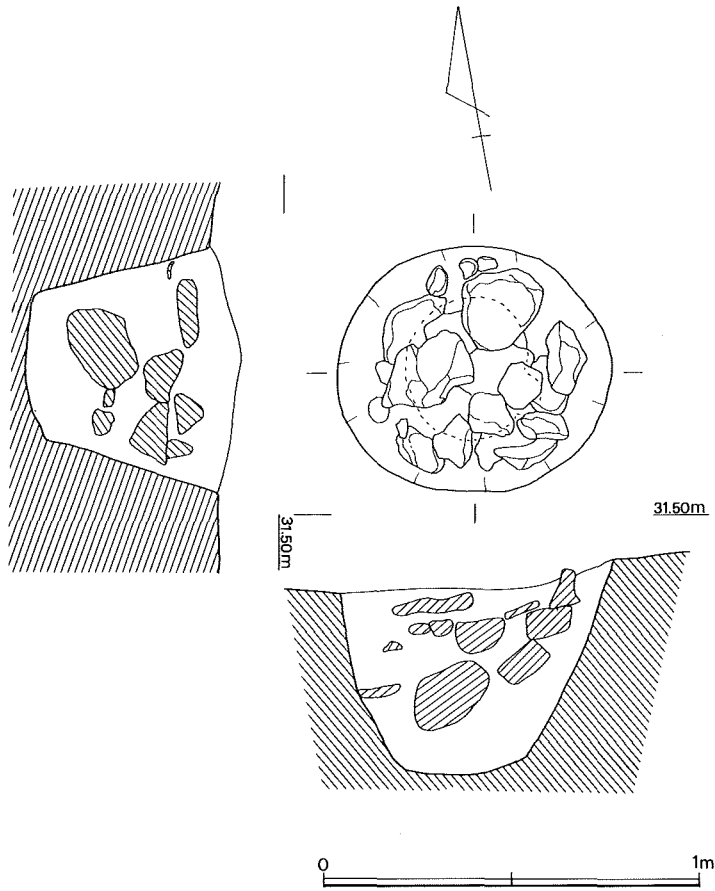


Fig. 47 49I (土壇)

52M (柱穴) (Fig. 49)

M-12区にあり、柱穴が3か所で切り合っている。南西側が古く、次に中央がきて、北東側と掘り下げを行っている。陶磁器等の出土はなく、20cm前後の礫が投入されている。長軸を120cmに短軸を62cmとし、地山面よりの掘り込み60cmを測る。主軸方位N-60°-Eを示す。(町田)

53M (土壇) (Fig. 50)

M-11に位置し、長軸を137cmに短軸を60cmはかり、地山面よりの掘り込みが67cmある。壁面に沿って礫を並べているが、土壇全面に礫の投入は行ってなく、陶磁器の出土はなかった。主軸方位N-43°30'-Eを示す。(町田)



小蘭城跡

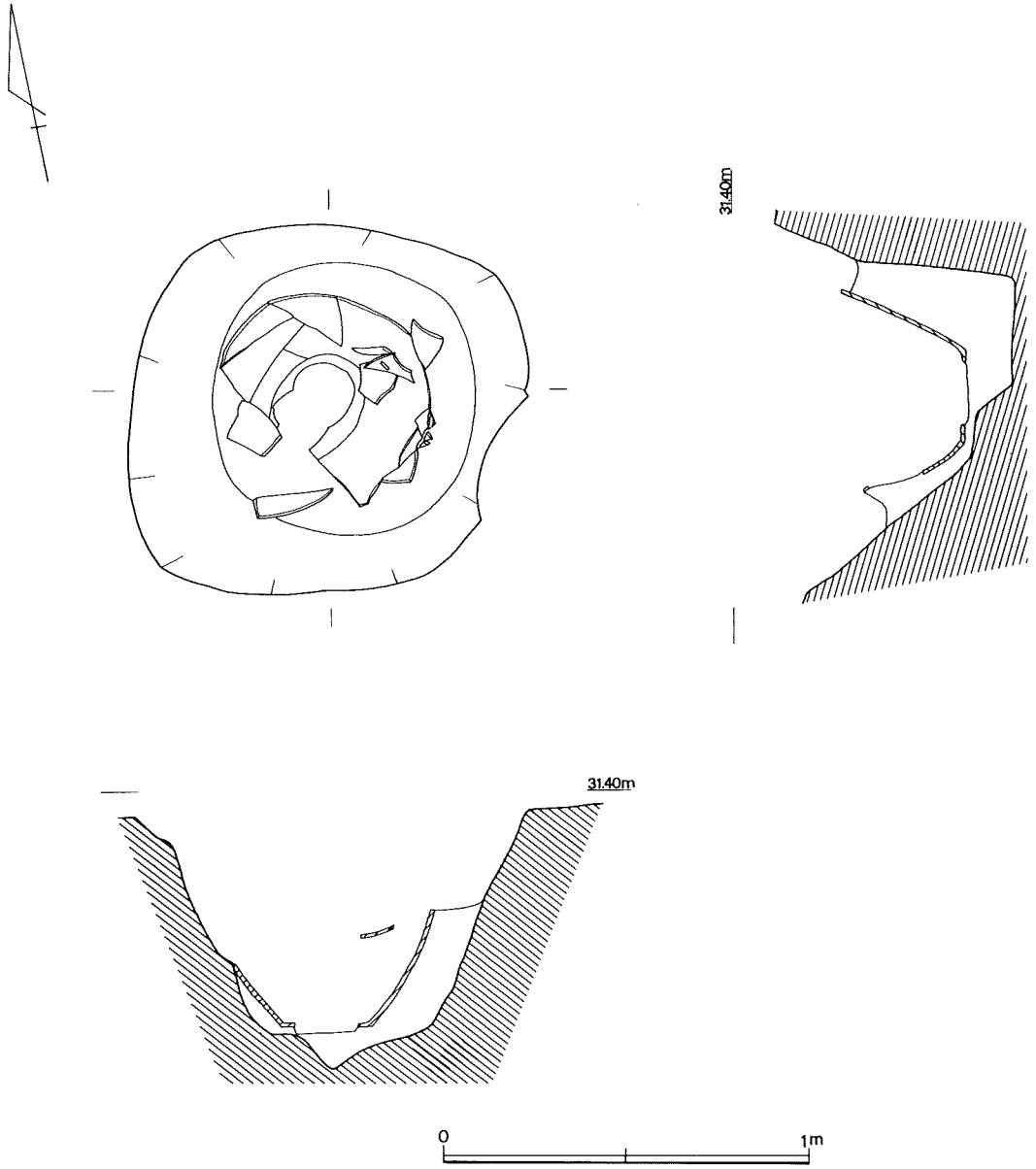


Fig. 48 51 I (埋藏) 1/20

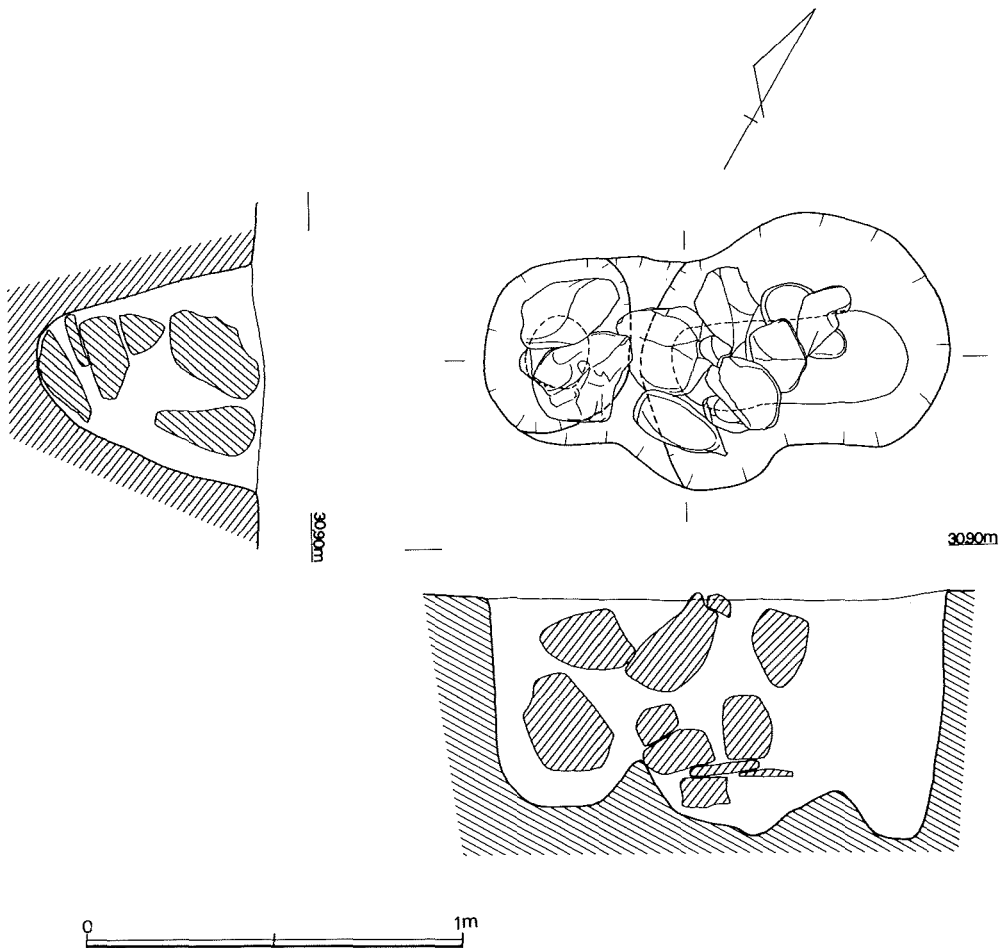


Fig. 49 52M (柱穴) 1/20

54T (集石) (Fig. 51)

T-19区に位置する集石群である。検出層位は、4c～4b層にあたり縄文時代に所属する遺構と考えられる。集石内部から土器・石器等の遺物や土壌等の掘り込みもなかった。

(町田)

54I (石列) (Fig. 65)

I-12区に位置する。10～15cm程の礫を南北に並べている。長軸300cmに幅最大で60cmある。下部には、柱穴3か所を検出し、ピット内より土師器の出土が1点あった。

(町田)

小菌城跡

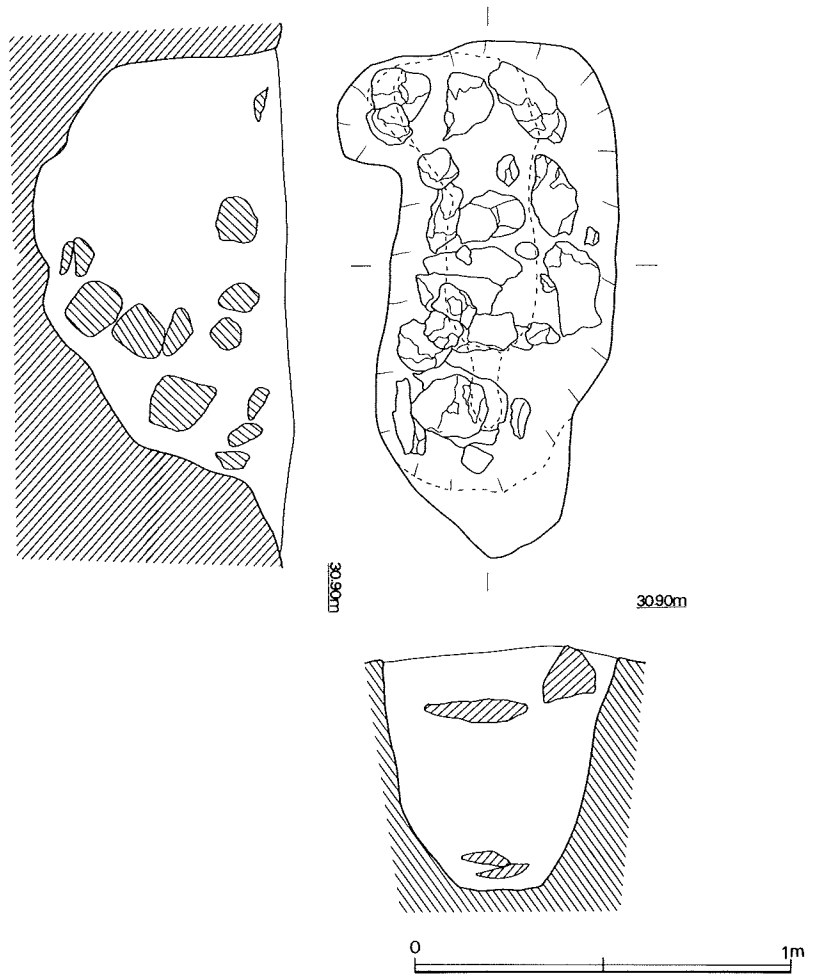
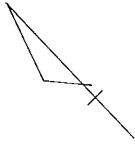


Fig. 50 53M (土壇) 1/20

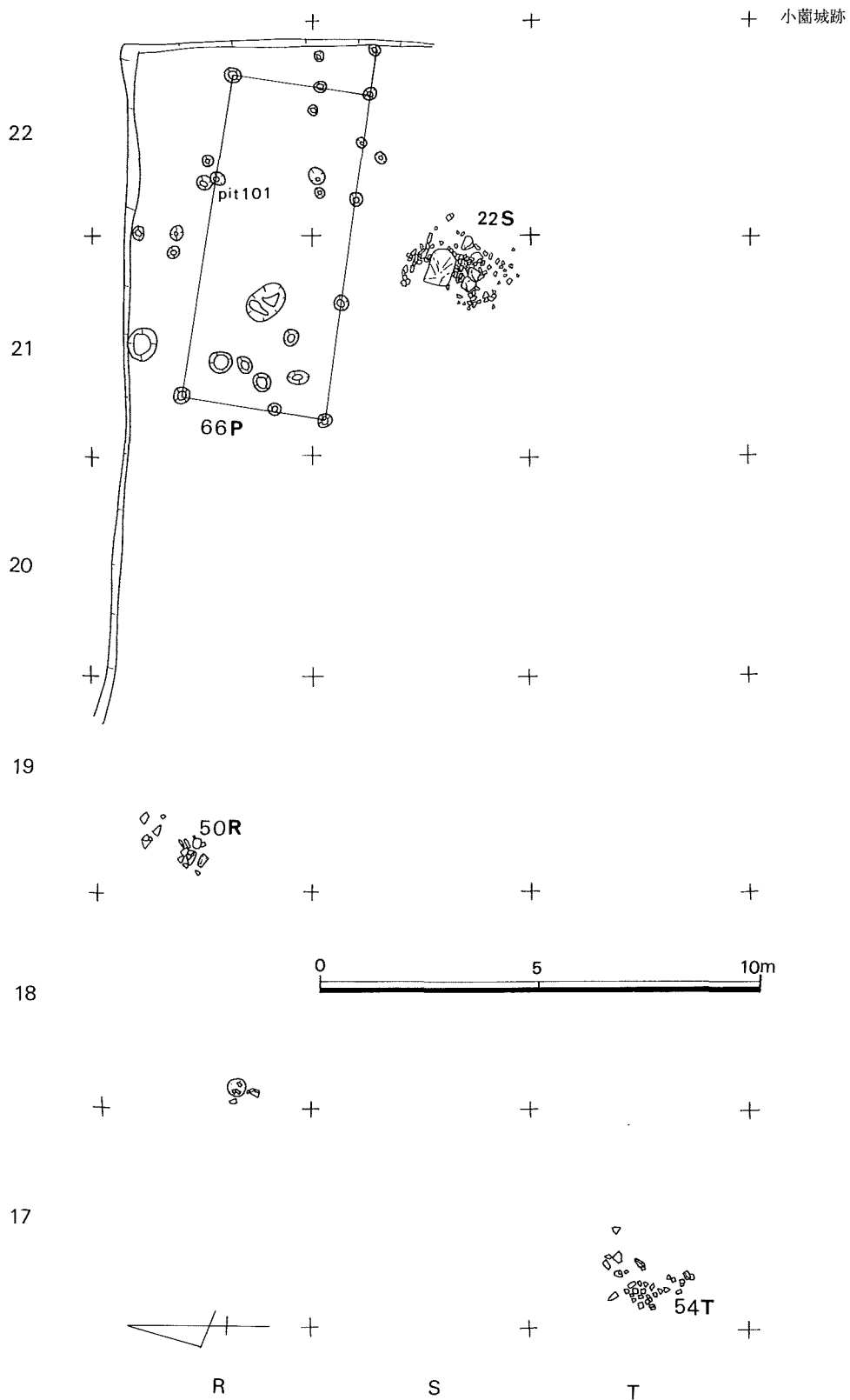


Fig. 51 22S (土境)・50R・54T (集石) 66P (柱穴群)

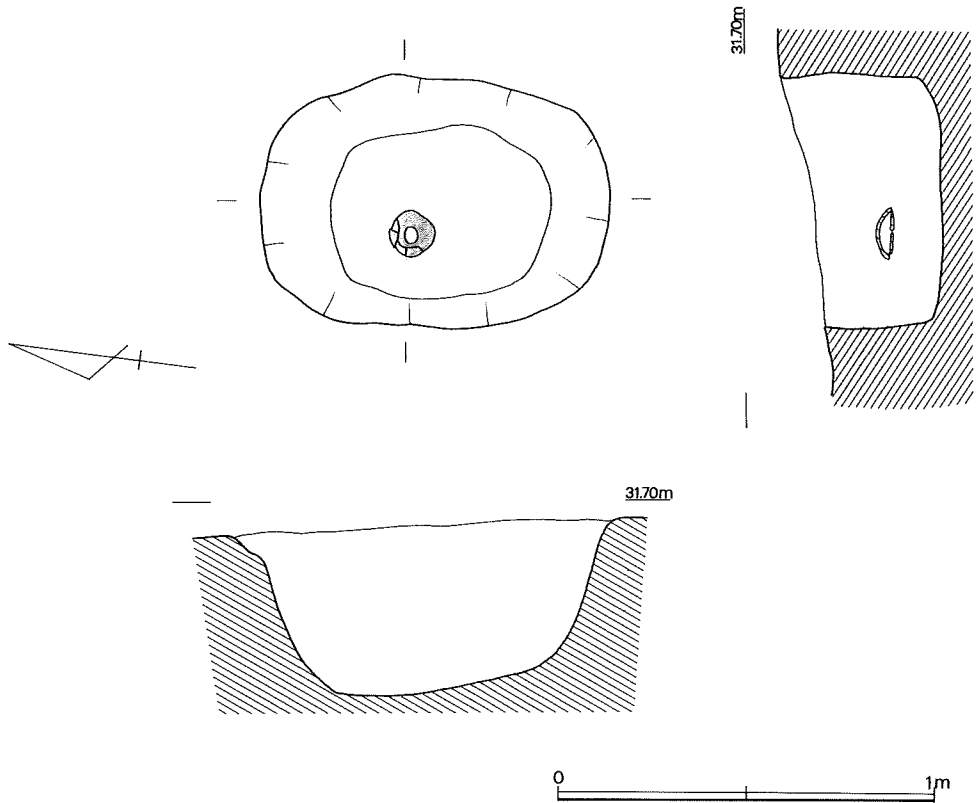


Fig. 52 55 I (土墳墓) 1/20

55 I (土墳墓) (Fig. 52)

I-11区にあたる。プランは、長楕円形を呈し、断面の東西間はコ字形をなしている。長軸を93cmに短軸を65cmとし、地山面よりの掘り込み44cmを測る。人骨の出土はなかったものの土師器の杯が出土している。主軸方位 $N-7^{\circ}30'-E$ を示す。(町田)

56 H (土壙) (Fig. 53)

H-8区にあり、近世陶磁器片等が18点出土している。長軸を240cmに短軸を140cmとし、地山面よりの掘り下げ24cmを行っている。床面の上部に黒灰色土を充填し、この上部に大小の礫を投げ入れている。また、南西側は新たに地山面より40cm掘り下げが行われており、この部分のみの礫が円形に取り去られている。主軸方位 $N-105^{\circ}-E$ を示す。(町田)

57 N (土壙) (Fig. 54)

N・O-12区にあり、いびつな長楕円形を大している。これは、北側と南側に新たな柱穴が掘られているため現状のようになっている。したがって本来は、中央部のように集石が作られ

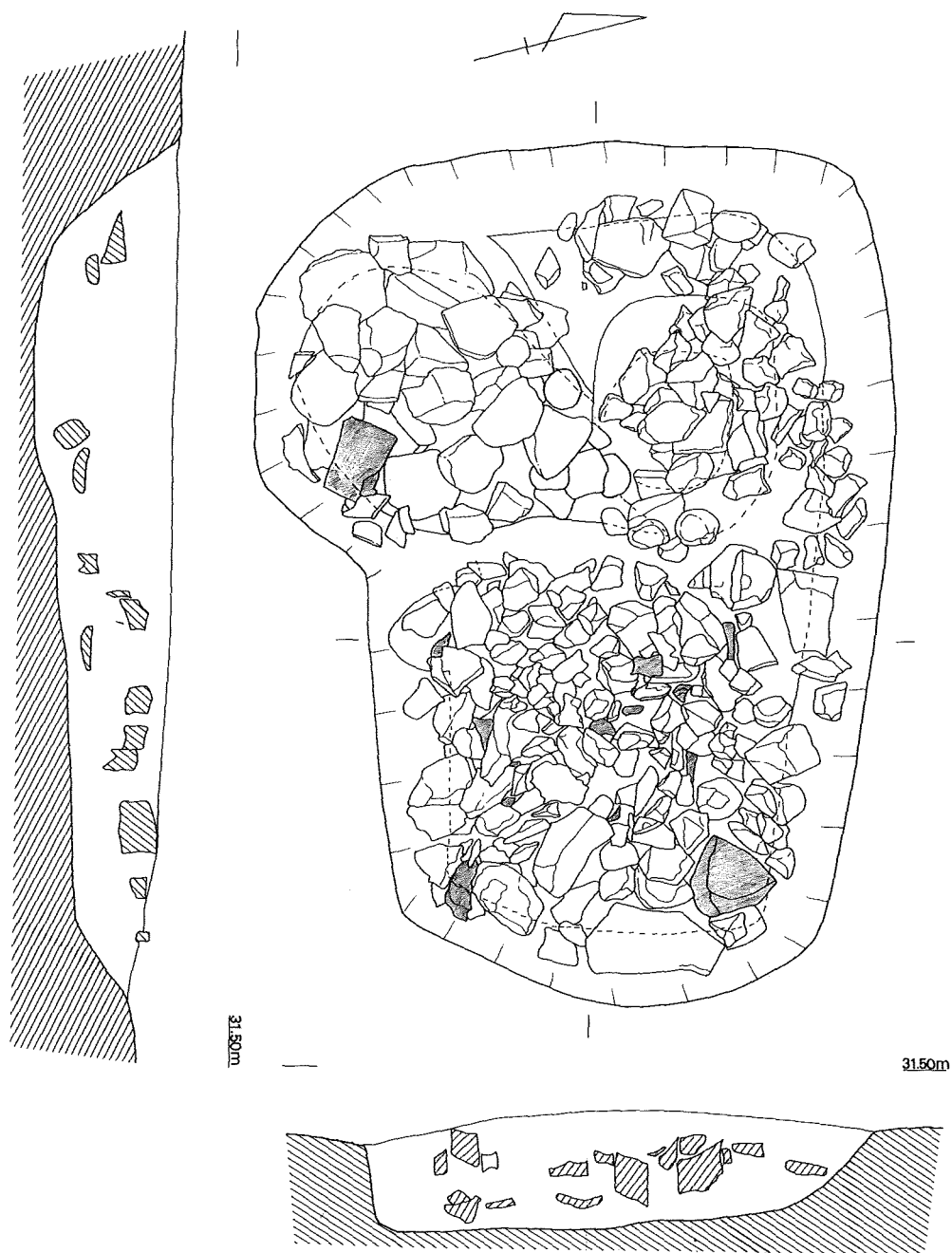


Fig. 53 56H (土壇) 1/20

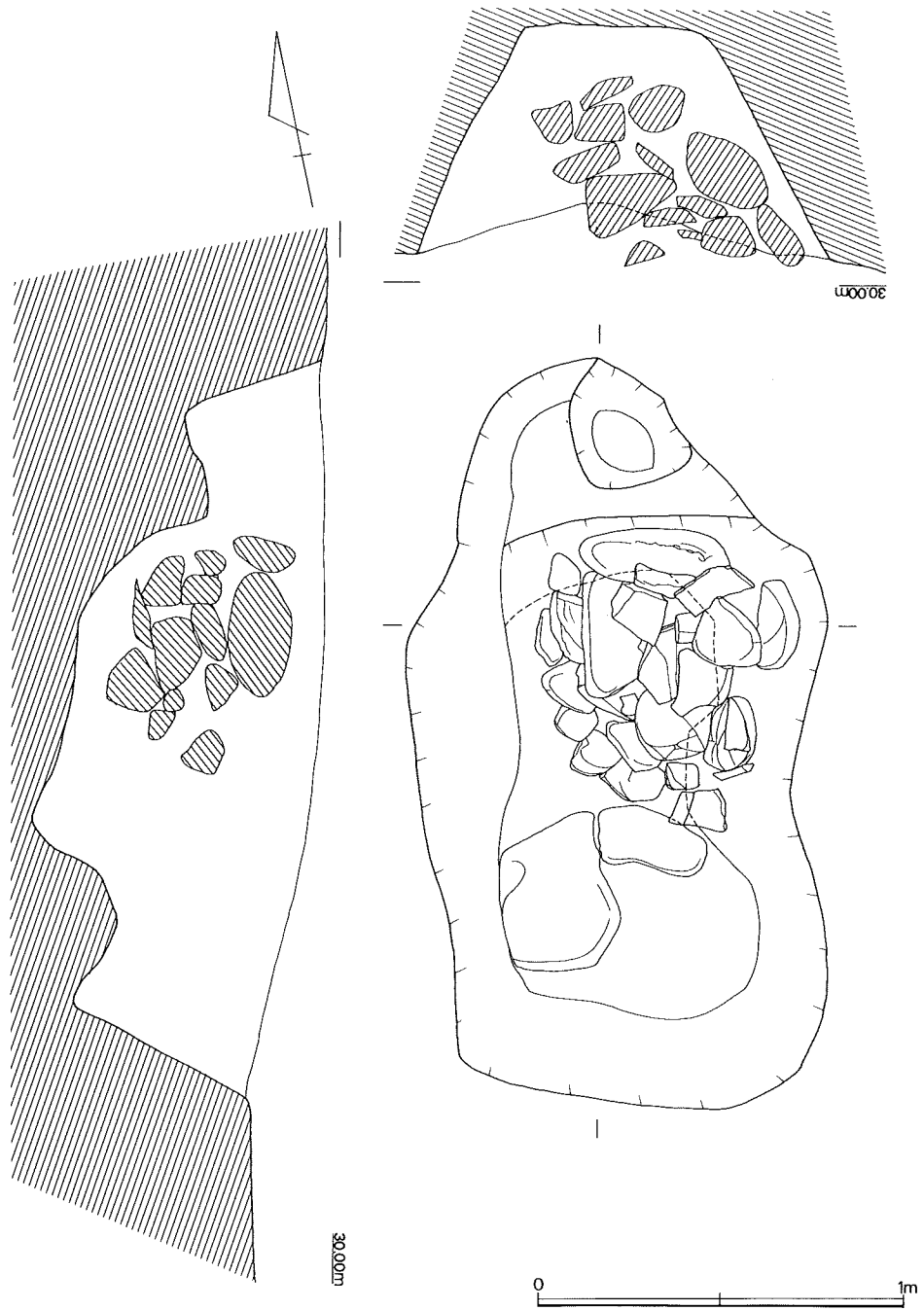


Fig. 54 57N (土壌) 1/20

ていたものと推測される。現状での長軸は、200cmを短軸に112cmを測り地山面掘り下げ80cm行っている。主軸方位N-13°-Eを示す。

以上が主な遺構関係である。この外にK-9~13区にかけて、長さ19mに幅2.5mの溝状遺構が設定されており、この中にはおびただしい礫と陶磁器片が混在していた。(町田)

#### 柱穴群

建物跡と思われる遺構を10か所上げている。内6か所(57P~62P)については、柱穴の形状及び出土遺物から判断して近世とし、4か所(63P~66P)については中世に関する建物跡として取り上げた。(町田)

#### 57P (建物跡) (Fig. 55)

A-3・4区, B-3・4区, C-3・4区内に位置する。7C・8B・9B・11Aの各土壌を切って柱穴が掘られていたが、周りの柱穴を含めて検討してみると、柱穴が並んでおり、建物跡とした。長さ10.5m、幅が5mの長方形をしている。この建物跡の西側には平行して4個の柱穴があり下屋がはりだしていた可能性がある。長軸は磁北にそろえてある。2間×5間の下屋の張りだしがある建物跡と思われる。

なお、この建物跡の柱穴は、7C・8C・9B・11A等の土壌をそれぞれ切り込んでいるので、まず、最初にそれぞれの土壌が設定され、それらの上に建物が建てられたものであろう。そして、もう一段階後に、この建物跡の南側を覆うように6Cの集石があることから、この57Pの建物跡と重複する様に石を集積して6Cの遺構が設定されたものと判断される。この場所(A~F-2~5)に於ては近世の時期だけでも、① 土壌が設営された時期、② 57Pの建物が建設された時、③ 6Cの集石が敷設された時の三段階の時期が考えられる。(村川)

#### 58P (建物跡) (Fig. 56)

H・I-8・9に位置し、長軸を5.6mに短軸を2.3mとする。柱穴の地山面よりの掘り込みは、長軸が90cm程で短軸を70cm程としている。柱穴内には、10cm前後の礫を入れ込んでいる。主軸方位N-93°-Eを示す。(町田)

#### 59P (建物跡) (Fig. 57)

H・I-9~11区に位置し、長軸を8mに短軸を4m測る。柱穴でもっとも深いものが、地山面より108cmと浅いもので64cmある。構造は、上部は楕円形を呈し、下部は幅が狭く円形を呈する。礫を柱穴下部に配するものが3か所認められる。主軸方位N-109°-Eを示す。

(町田)

#### 60P (建物跡) (Fig. 58)

長軸を5.46mに短軸を2.0mを測る。柱穴は、地山面よりの掘り込み平均60cmを測る。柱穴の1か所に礫の投入が認められた。主軸方位N-97°-Eを示す。(町田)

#### 61P (建物跡) (Fig. 59)

長軸を4.8mに短軸を4.2mとする。柱穴の地山面よりの掘り込み70cmと深いものもあるが、



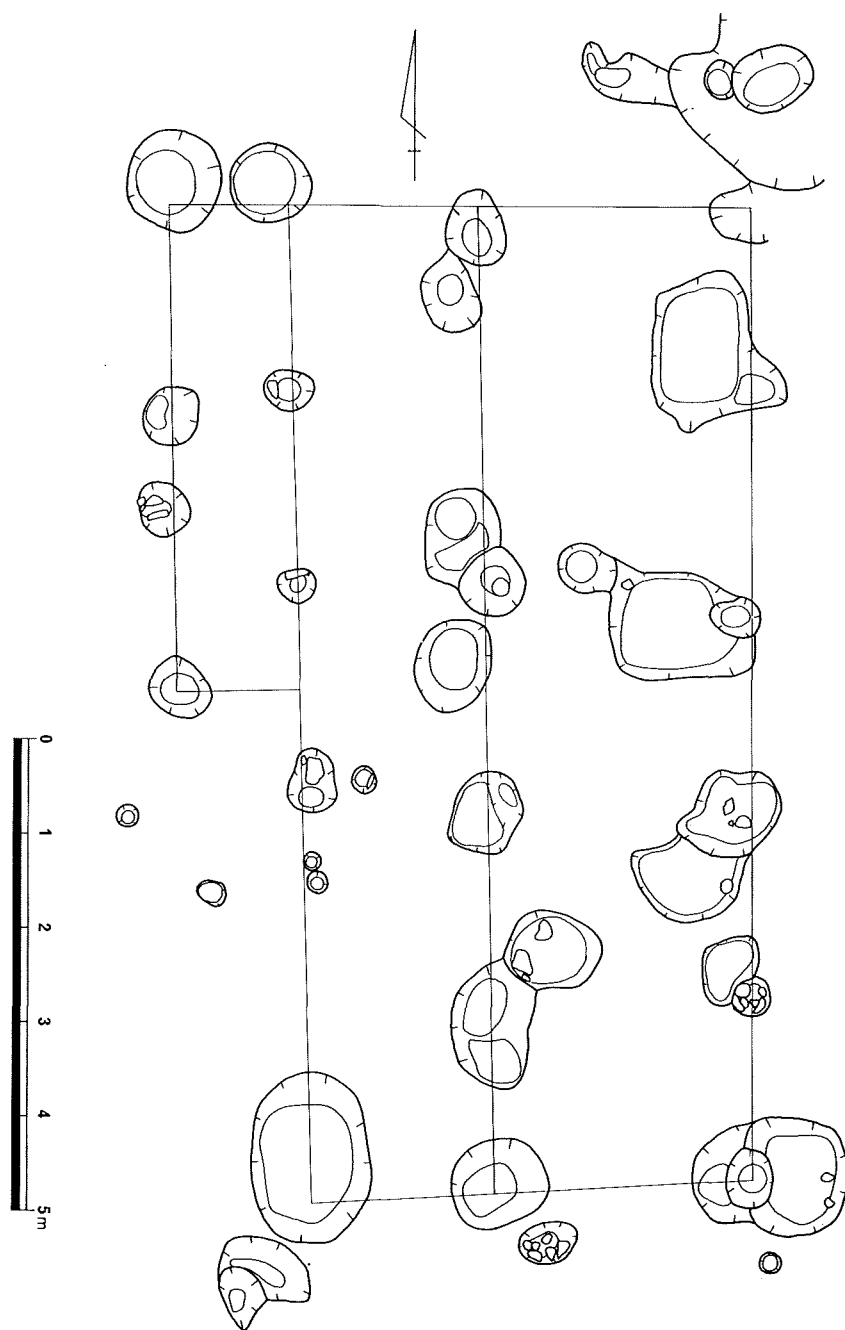


Fig. 55 57P (建物跡) 1/80

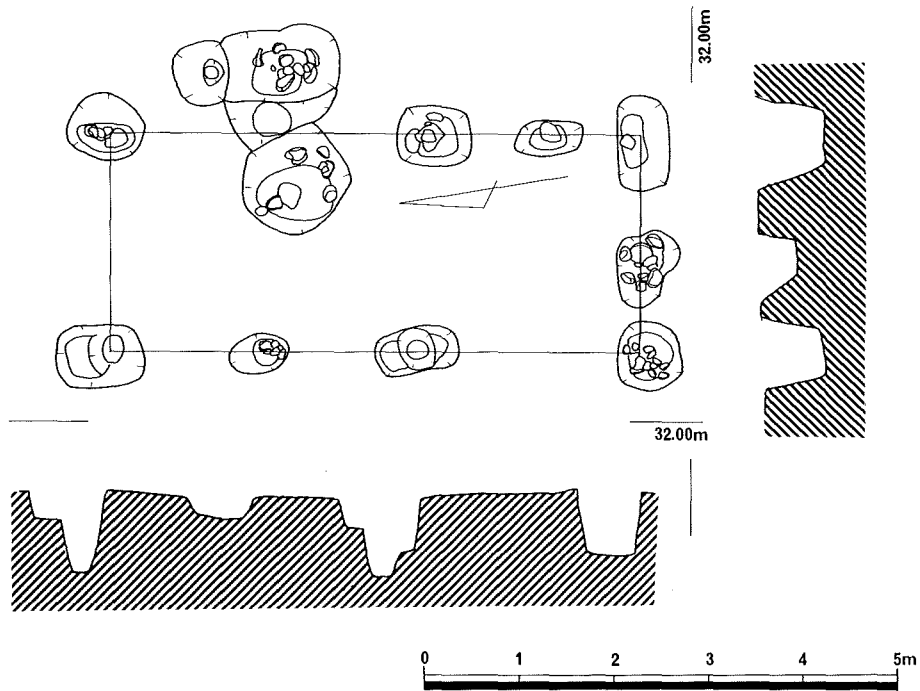


Fig. 56 58 P (建物跡) 1/80

平均で40cmである。この地区は、表土より地山面まで30cm程の堆積しかなく2層を削平されているため浅い柱穴となっている。主軸方位 $N-11^{\circ}-E$ を示す。(町田)

62 P (建物跡) (Fig. 59)

N・O-11・12区にあり、37N・38N・44N・40Oの集石土壙を柱穴としてとらえている。4×4mの正方形のプランをもつ。地山面よりの掘り込みは、60cmを測る。主軸方位 $N-103^{\circ}-E$ を示す。(町田)

中世の建物群

比較的柱穴の径が小さく、柱穴間の間隔がやや長いものとなる。遺物に土師器・白磁の出土があった。ただし、2層以下を近世遺構により柱穴群の削平をしており建物跡として線引きを行っているものの建物として不合理な部分があることを断わっておく。(町田)

63 P (建物跡) (Fig. 60)

L・M-10・11区にあり、長軸を5.2m×短軸2.6mを測る。地山面よりの掘り込み深いもので40cm平均25cmを測る。柱穴内の覆土は茶褐色土を呈する。主軸方位 $N-100^{\circ}30'-E$ を示す。(町田)

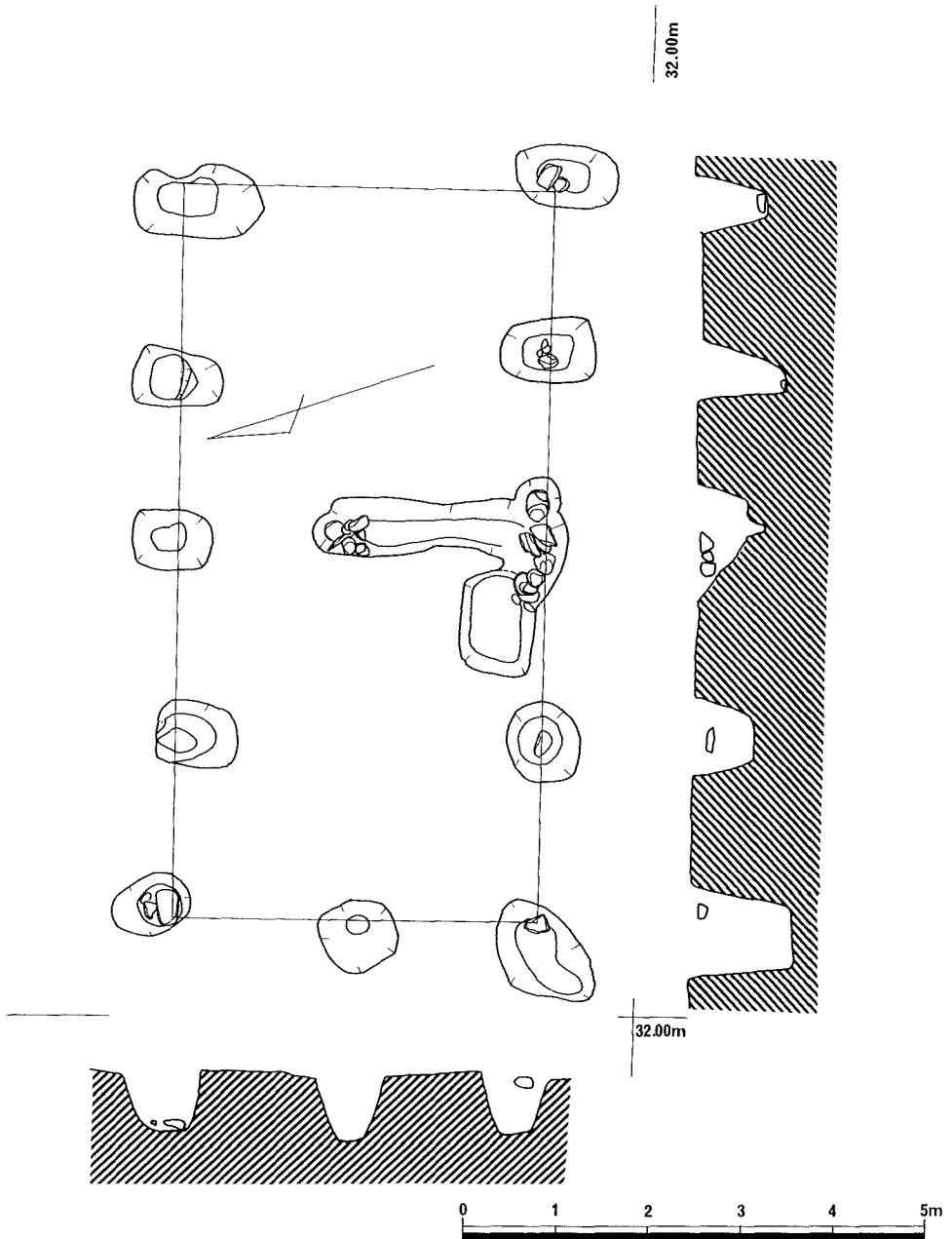


Fig. 57 59P (建物跡) 1/80

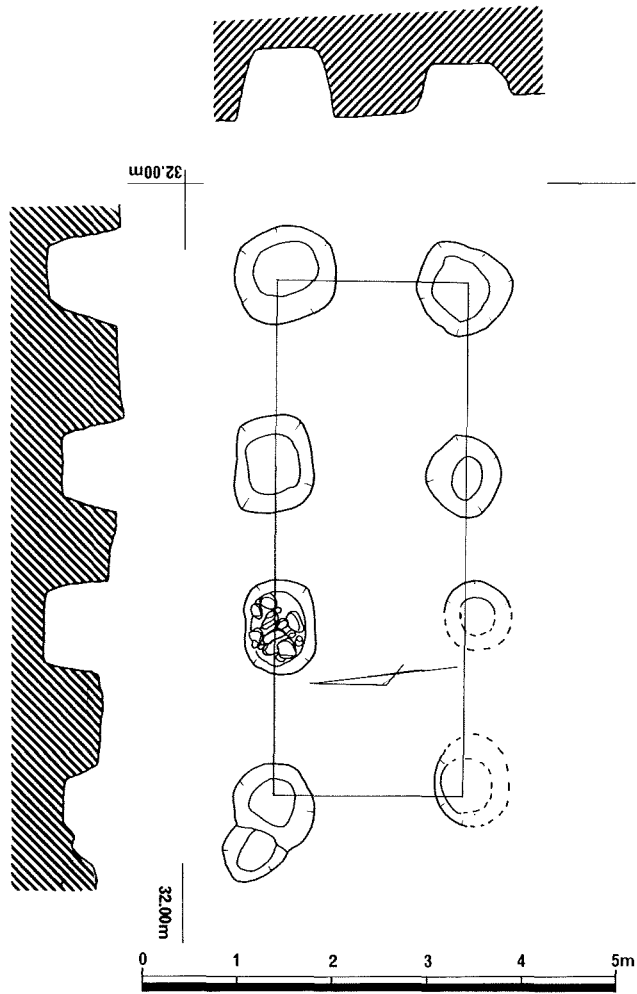


Fig. 58 60P (建物跡) 1/80

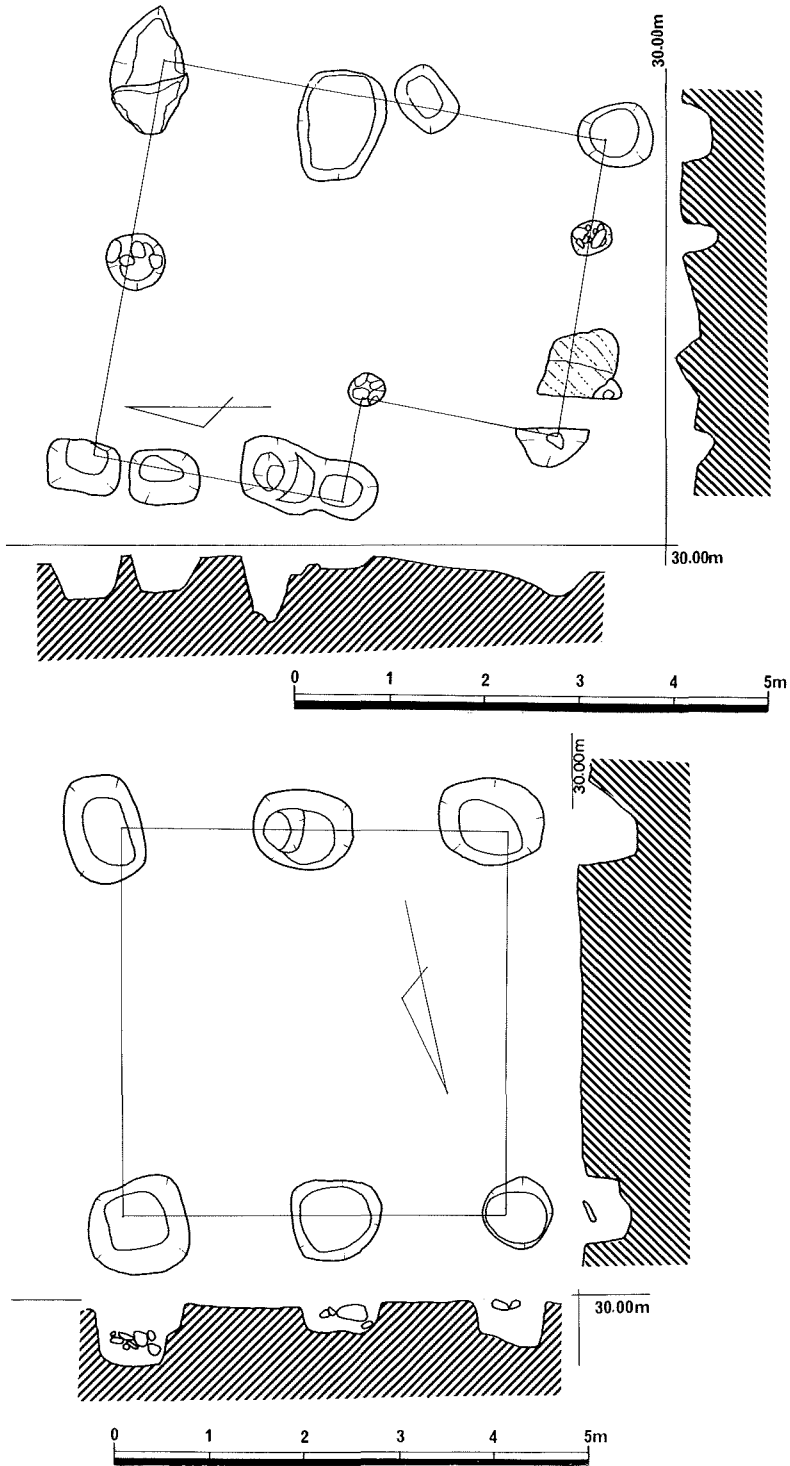


Fig. 59 61P・62P (建物跡) 1/80

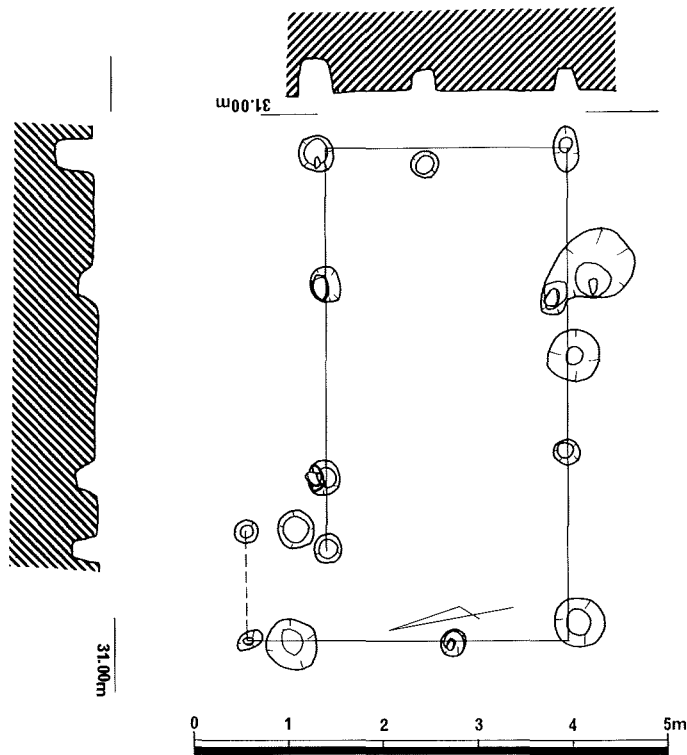


Fig. 60 63P (建物跡) 1/80

64P (建物跡) (Fig. 61)

M・N-12・13区に位置する。長軸は、4.0mに短軸を3.14mとなす。柱穴の地山面よりの掘り込みは、60cmと30cmの深さがある。柱穴内の覆土は、茶褐色である。主軸方位N-98°-Eを示す。  
(町田)

65P (建物跡) (Fig. 61)

J-10・11区にあたり、長軸を3.3mに短軸を1.8mにとる。柱穴内より土師器片が出土している。地山面よりの掘り込み30cmと50cmとがある。主軸方位N-28°-Wを示す。

(町田)

66P (建物跡) (Fig. 62)

R・S-21・25区に位置する。長軸を7.5mに短軸を3.26mとし、柱穴の地山面よりの掘り

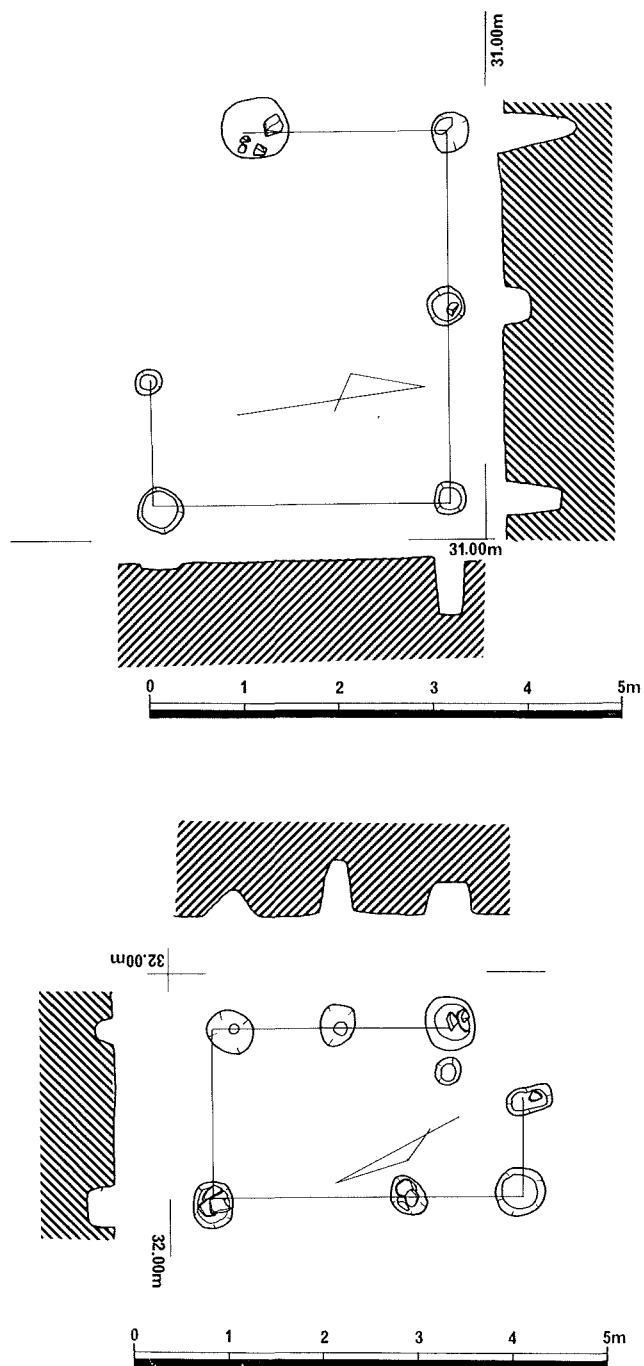


Fig. 61 64P・65P (建物跡) 1/80

込みは現状で20cm前後と浅くなっている。このうちPit 101から白磁碗が出土している。主軸方位N-98°-Eを示す。(町田)

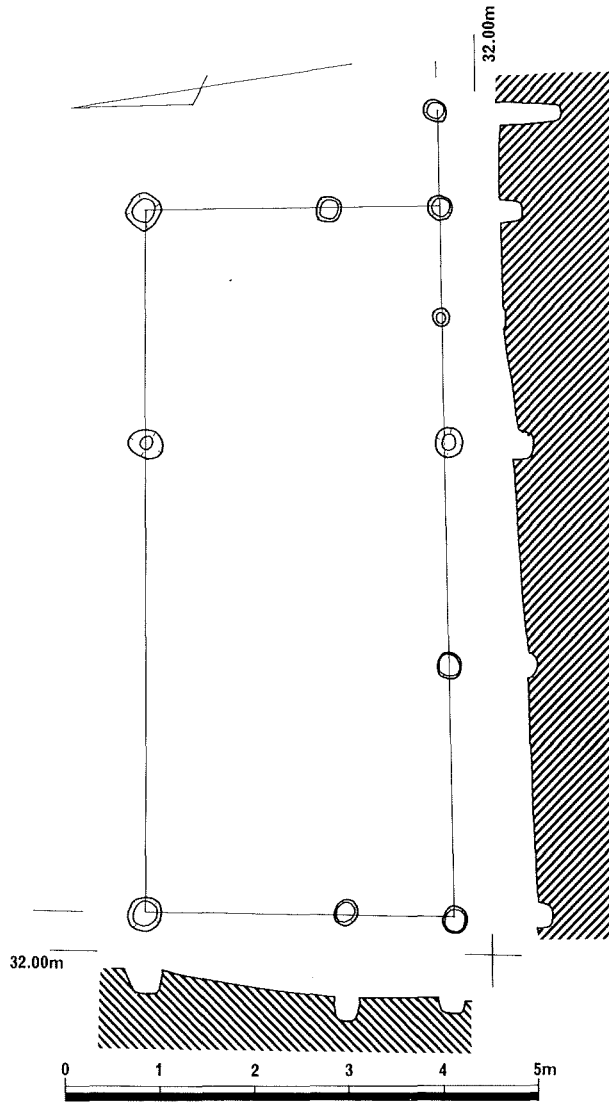


Fig. 62 66P (建物跡) 1/80



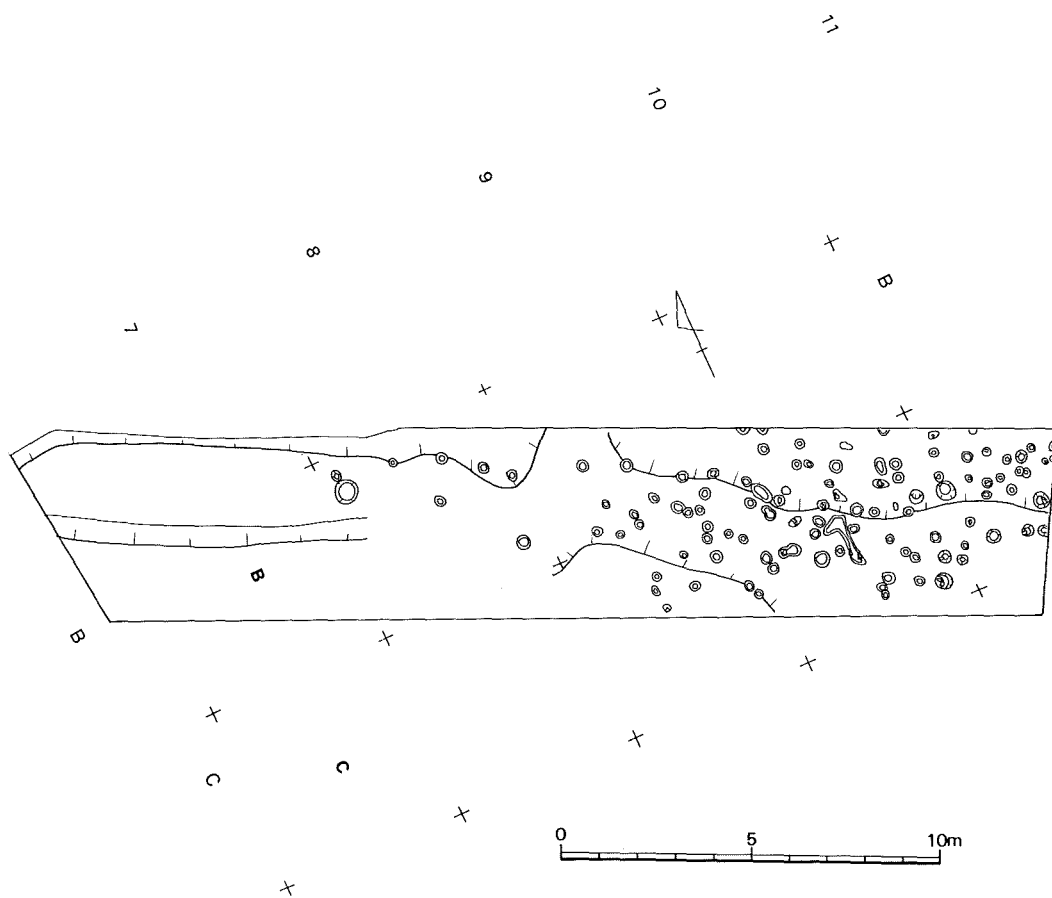


Fig. 63 中世の柱穴群



Fig. 64 中世・近世遺構配置図①

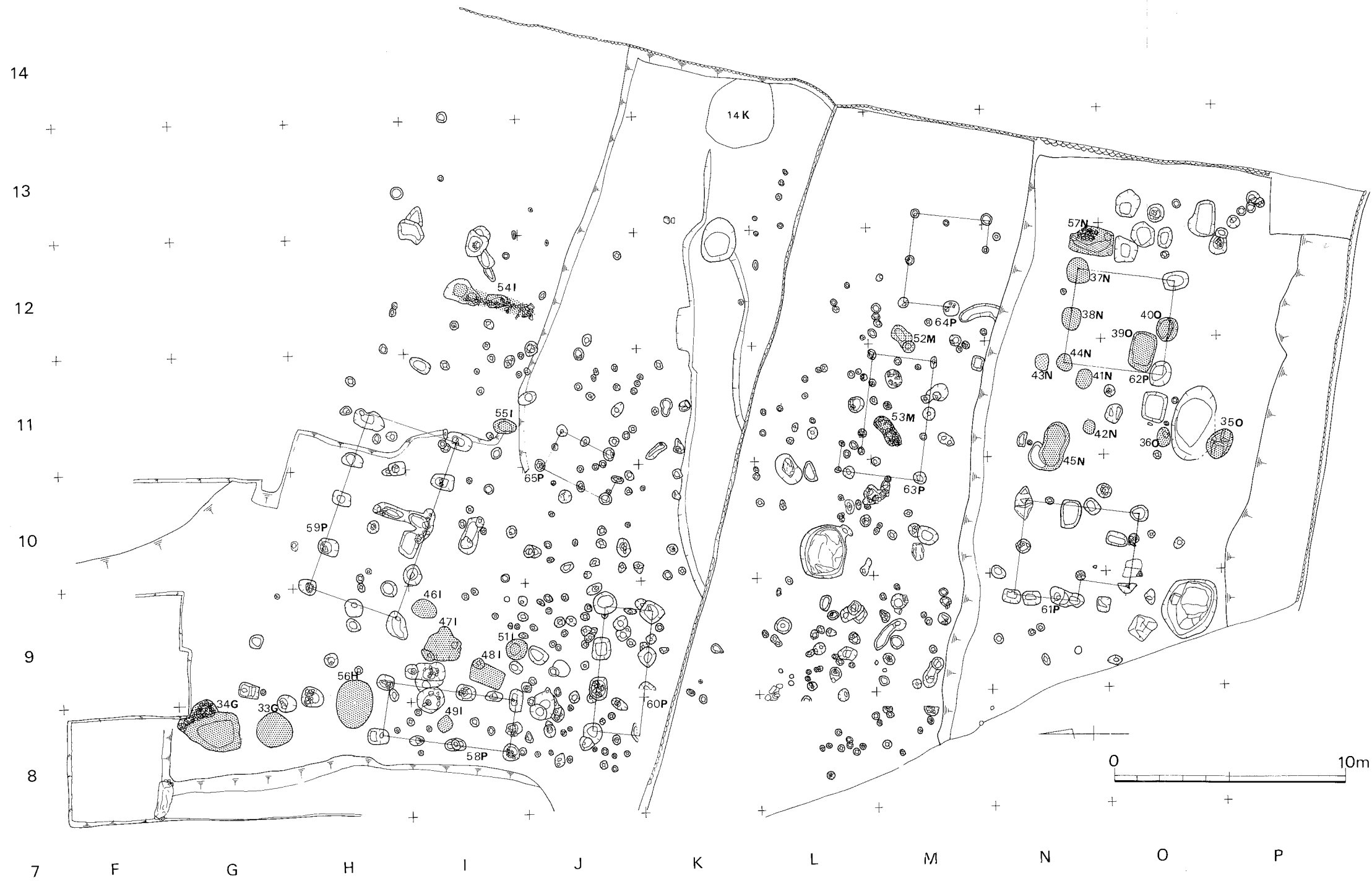


Fig. 65 中世・近世遺構配置図②

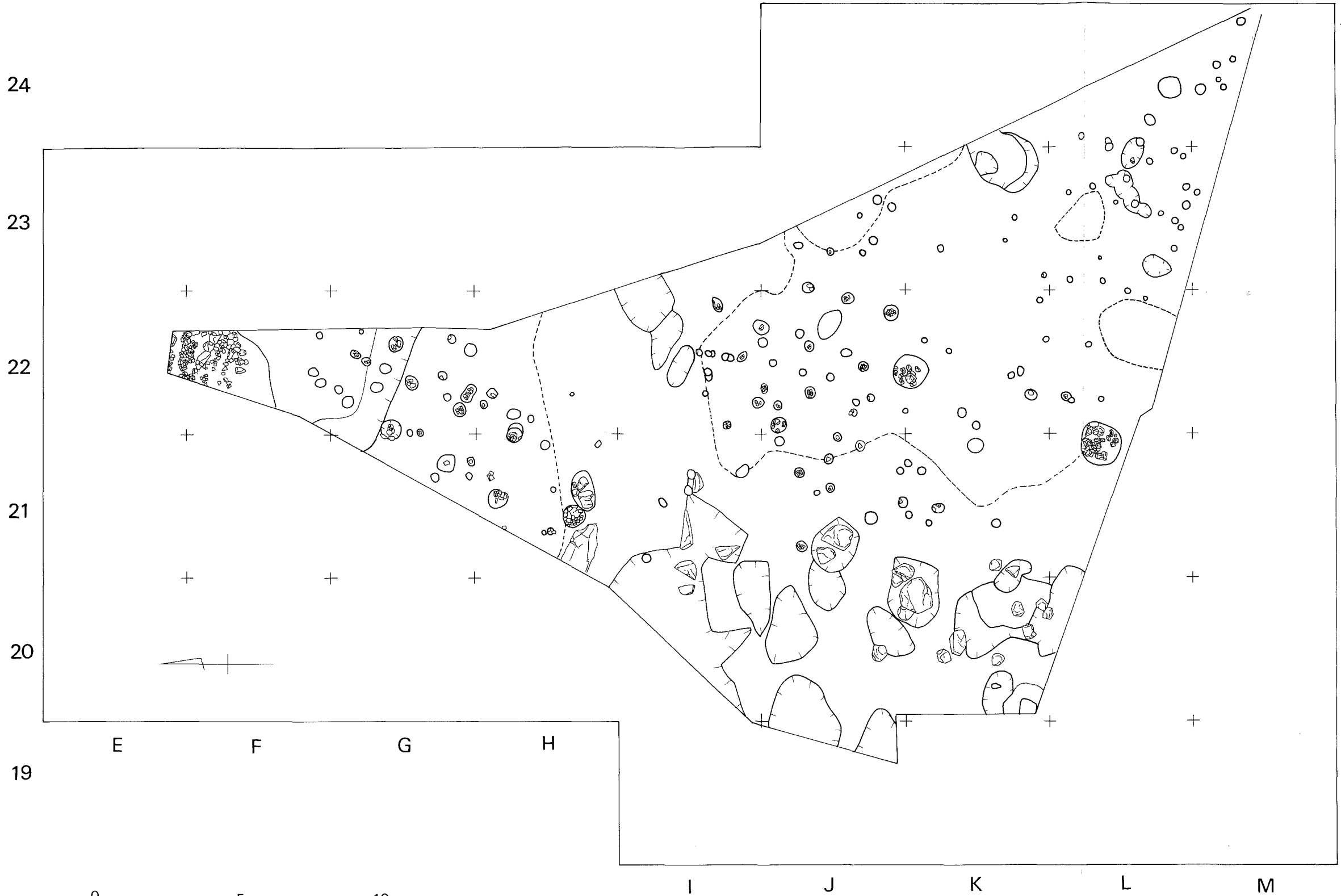


Fig. 66 中世・近世の柱穴群

# V. 附 篇

長崎県東彼杵町小藺城跡出土の中世人骨

# 長崎県東彼杵町小園城跡出土の中世人骨

松下 孝幸<sup>\*</sup>・佐伯 和信<sup>\*</sup>・小山田常一<sup>\*\*</sup>

キーワード：長崎県，中世人骨，保存不良，扁平尺骨

## はじめに

小園城（こぞのじょう）跡は長崎自動車道建設に伴って発見された遺跡で、長崎県東彼杵郡東彼杵町瀬戸郷字小園に所在する。発掘調査は1987年（昭和62年）に行われ、3基の土壙墓から人骨が検出された。人骨の残存量は比較的多い方であったが、骨質の残存状態は著しく悪く、取り上げて、計測することがかなり困難な状態であったため、現場でできる限り詳細な観察を行なった。人骨の残存部位やその観察の結果などを報告しておきたい。

## 資 料

今回検出された人骨は3基の土壙墓からそれぞれ1体分ずつで、合計3体分の人骨である。これらの人骨の性別・年齢は表8のとおりである。また、48 I 土壙墓には朝鮮通宝が副葬され

Tab. 8 資料 (Table 8. List of skeletons)

人 骨 番 号	性別	年 令
46 I 土壙墓人骨	女 性	不 明
47 I 土壙墓人骨	不 明	不 明
48 I 土壙墓人骨	男 性	壮 年

ていたことなどの考古学的所見から、これらの人骨は中世（15、16世紀）に属する人骨と考えられている。

\* Takayuki MATSUSHITA, Kazunobu SAIKI,

Department of Anatomy, Nagasaki University School of Medicine

[長崎大学医学部解剖学第二教室（主任：内藤芳篤教授）]

\*\* Jouichi OYAMADA

Department of Oral Anatomy, Nagasaki University School of Dentistry

[長崎大学歯学部口腔解剖学第二講座（主任：六反田篤教授）]

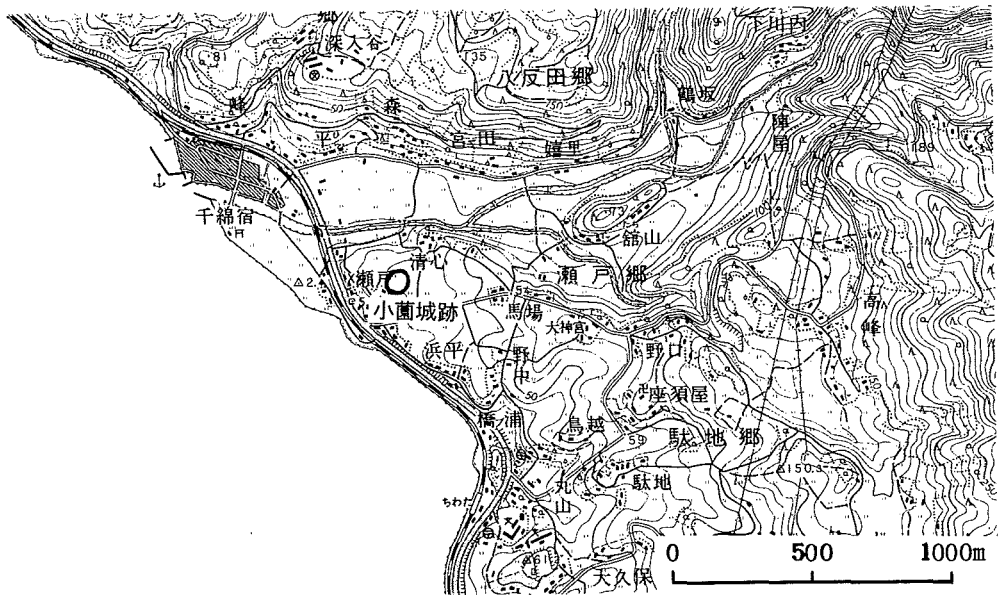
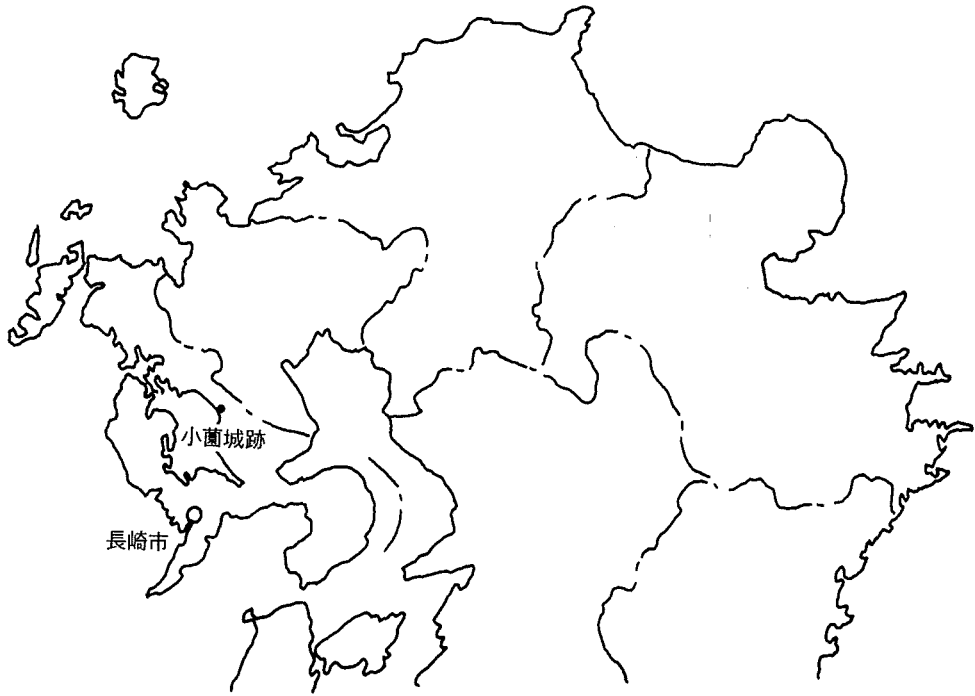


Fig. 7 遺跡の位置 (Fig. 7. Location of the Kozonojo site, Higasonogi-cho, Nagasaki Prefecture)

なお、歯の計測と齶歯の観察は小山田が行なった。

## 所 見

人骨の残存部は図8に示すとおりである。また、歯の計測値は文末に一括して掲げた。

### 46 I 土壌墓人骨（女性、年齢不明）

現場では歯、右側上腕骨、右側尺骨、右側橈骨が残存しており、特に右側上腕骨の保存状態は比較的良好であった。また、下肢骨は左右の大腿骨と脛骨とが残存していた。埋葬姿勢は肘関節および膝関節ともに屈曲状態で、仰臥屈葬であった。

歯は遊離歯で、現場では5本確認したが、いずれも保存状態が悪く、歯種を同定することができなかった。骨のうち最も保存状態が良かったのは右側上腕骨であったが、それでも計測はできなかった。観察したところでは、骨体や骨頭は細くて、小さいが、その割には三角筋祖面の発達をきわめて良好である。また、小さな滑車上孔が認められる。尺骨は右側の近位半が観察できたが、近位部はきわめて扁平である。その他、右側大腿骨の骨体近位部、左側大腿骨遠位端、右側腓骨体が観察できたが、いずれも小さく、細い。

頭蓋はほとんど残存していなかった。わずかに左側上顎骨の歯槽突起の一部を認めたにすぎない。

性別は四肢骨の径が著しく小さいことから、女性と推定したが、年齢は不明である。

### 47 I 土壌墓人骨（性別、年齢不明）

残存量も少なく、保存状態も著しく悪い。上顎骨のごく一部、遊離歯冠および下肢骨のみが残存していたようである。埋葬姿勢は不明である。

上顎骨は右側の歯槽突起の一部で、歯冠もほとんどが細片になっており、歯種を同定できたのはわずか1本のみで、これは下顎の右側第二小臼歯である。

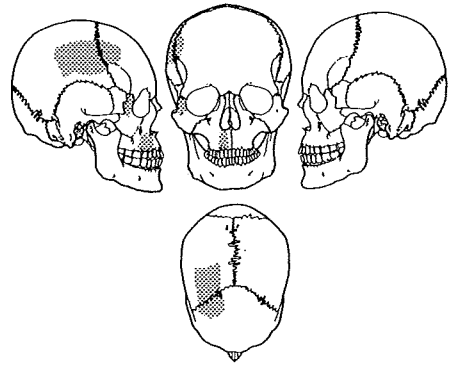
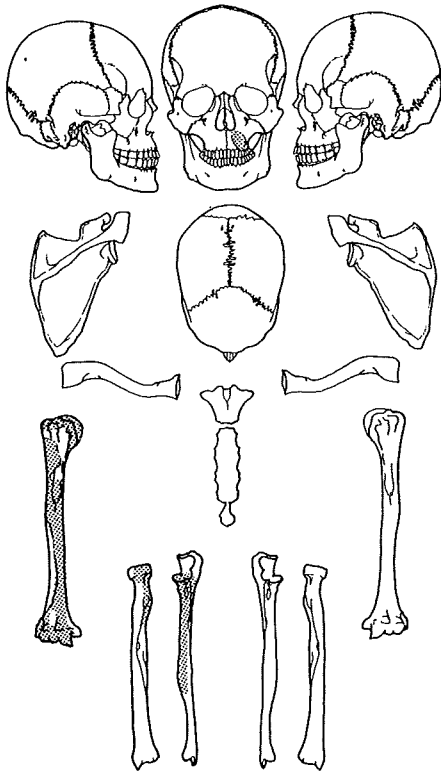
歯槽の状態と残存歯を歯式で示すと、次のとおりである。

/// / * P <sub>2</sub> * P <sub>1</sub> C ///		/// / / / / / / / / /	{ /: 不明 (破損) *: 歯根のみ }
/// / P <sub>2</sub> / / / / /		/// / / / / / / / / /	

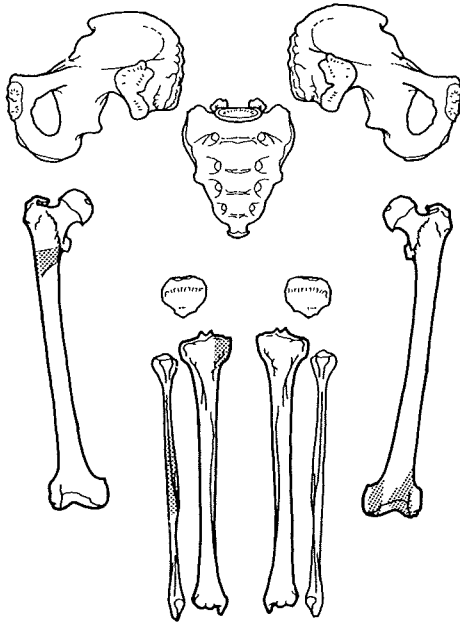
四肢骨は脛骨と大腿骨とが残存していたが、取上げは不可能であった。従って、その様態は不明である。

性別、年齢はともに不明である。





48 I 土壙墓人骨 (男性・壮年)  
(Skeleton 48 I, young adult male)



46 I 土壙墓人骨 (女性)  
(Skeleton 46 I, female)

Fig. 8 人骨の残存部, アミかけ部分

(Fig. 8 Regions of preservation of the skeleton, shaded areas are preserved.)

48 I 土墳墓人骨（男性，壮年）

本例も残存状態は悪い。残存していたのは頭蓋，歯および下肢骨のみである。膝関節は屈曲状態で検出されたので，下肢は屈曲していたものと考えられる。

頭蓋は右側頭頂骨と右側頬骨の一部が残存しており，冠状縫合の一部の観察が可能であったが，この縫合は内外両板ともまだ開離している。また，右側上顎骨の歯槽突起の一部が残っており，遊離歯も残存していた。歯槽の状態と残存していた遊離歯を歯式で示すと，次のとおりである。

$\begin{array}{c} M_3 M_2 / / \quad * P_1 C I_2 / / \\ \hline / / / / / / I_2 I_1 \quad   \quad I_1 / / / / / / / / \end{array}$	$\left[ \begin{array}{l} / : \text{不明 (破損)} \\ * : \text{歯根のみ} \end{array} \right]$
--	---

咬耗度は Broca の 1～2 度である。歯の径は大きい。

四肢骨は下肢骨のみが残存しており，現場では寛骨，大腿骨および脛骨を確認することができたが，その様態は観察することもできなかった。

性別は，歯の径が大きいことから，男性と推定した。年齢は縫合がまだ開離していることや歯の咬耗が弱いことから，壮年と考えられる。

## 考 察

中世人は日本人の形質変化のなかでもきわめて特異な特徴を持つことを鈴木（1956）は材木座出土の中世人骨の研究の中で明らかにした。その特徴とは，「極端な長頭性」，「低顔」，「鼻根部の扁平性」，「歯槽性の突顎」で，いずれもその極限状態に達している。九州では内藤によって熊本県の尾窪遺跡（内藤，1973），大分県の立石遺跡（内藤，1974 b）から出土した中世人骨にも同様な特徴が認められることが指摘されている。その後，熊本県の塚原遺跡（内藤，1975），杉谷遺跡（内藤・他，1978），興善寺馬場遺跡（松下，1980）などから中世人骨が出土しているが，これらはいずれも保存状態が悪い。長崎県の例は諫早市の林ノ辻遺跡（松下・他，1983），長崎市の深堀遺跡（松下・他，1987）および対馬の仁兵島遺跡（内藤，1974 a）から出土しているぐらいで，例数はきわめて少ない。

本例は保存状態が著しく悪く，女性の上腕骨と尺骨の観察ができたぐらいで，他の骨の特徴などを知ることはできなかった。また，上腕骨も尺骨も計測はできなかったが，上腕骨は三角筋粗面の発達がよく，尺骨は骨体近位部が著しく扁平であった。仁兵島の女性も大柄で体格がよく，深堀中世人は男性であるが，これまた，四肢骨が大きく頑丈で，屈強な中世人であった。小園城中世人女性は決して大柄とは思えないが，筋付着部の発達が良いことや尺骨体に扁平性

が認められるなど上肢骨の発達の良いことが注目される。この被葬者がどのような社会的地位に属していたかは考古学的にはまだ明らかにされていないが、形質人類学的には少なくとも労働を免除されていたというようなことは考えにくいようである。

## 要 約

長崎県東彼杵郡東彼杵町瀬戸郷字小藪に所在する小藪城跡の発掘調査が1987年（昭和62年）に行われ、3基の土壙墓から人骨が検出された。保存状態は著しく悪いものであったが、人類学的観察の結果、性別や年齢などを推定することができた。その結果を要約すれば、次のとおりである。

1. 出土人骨は3体で、遺構はすべて土壙墓であった。
2. 埋葬姿勢は、仰臥で膝を屈曲した状態であった。
3. この3体の人骨は中世（15、16世紀）に属する人骨である。
4. 3体のうち性別を判別できたのは2体で、このうち1体（48 I 土壙墓人骨）は男性骨、残りの1体（46 I 土壙墓人骨）は女性骨であった。
5. 女性骨の四肢骨は細くて小さいが、三角筋粗面の発達は良好で、尺骨体近位部には著しい扁平性が認められた。また、女性上腕骨には滑車上孔が存在する。
6. 長崎県では中世人骨の出土例が少なく、本例は貴重な資料と考えられたが、保存状態が悪く、本中世人の特徴を細部にわたって明らかにすることはできなかった。しかし、女性は三角筋粗面の発達が良好で、尺骨体には著しい扁平性が観察された。

## 謝 辞

摺筆するにあたり、本研究と発表の機会を与えていただいた長崎県教育庁文化課の諸先生方に感謝致します。

Tab. 9 齒の計測値 (mm) (Table 9. Tooth, mm)

		小 齒 城		
		48-I		
		男 性		
		右	左	
上 顎	I <sub>1</sub>	—	—	
	I <sub>2</sub>	7.80	—	
	C	—	—	
	P <sub>1</sub>	—	—	
	P <sub>2</sub>	—	—	
	M <sub>1</sub>	—	—	
	M <sub>2</sub>	12.75	—	
頰 (唇)	M <sub>3</sub>	12.05	—	
	下 顎	I <sub>1</sub>	△	6.44
		I <sub>2</sub>	△	—
		C	—	—
		P <sub>1</sub>	—	—
		P <sub>2</sub>	—	—
		M <sub>1</sub>	—	—
M <sub>2</sub>		—	—	
舌 徑	M <sub>3</sub>	—	—	
	上 顎	I <sub>1</sub>	—	—
		I <sub>2</sub>	7.88	—
		C	—	—
		P <sub>1</sub>	—	—
		P <sub>2</sub>	—	—
		M <sub>1</sub>	—	—
M <sub>2</sub>		10.27	—	
近 遠 心	M <sub>3</sub>	10.22	—	
	下 顎	I <sub>1</sub>	△	5.88
		I <sub>2</sub>	6.79	—
		C	—	—
		P <sub>1</sub>	—	—
		P <sub>2</sub>	—	—
		M <sub>1</sub>	—	—
M <sub>2</sub>		—	—	
M <sub>3</sub>	—	—		

計測不能 ; △

Tab. 10 齧 蝕 (Table 10. Caries of the teeth)

		小 齒 城	
		48-I	
		男 性	
		右	左
上 顎	I <sub>1</sub>	/	/
	I <sub>2</sub>	2	/
	C	/	/
	P <sub>1</sub>	/	/
	P <sub>2</sub>	/	/
	M <sub>1</sub>	/	/
	M <sub>2</sub>	2	/
下 顎	M <sub>3</sub>	2	/
	I <sub>1</sub>	/	○
	I <sub>2</sub>	/	/
	C	/	/
	P <sub>1</sub>	/	/
	P <sub>2</sub>	/	/
	M <sub>1</sub>	/	/
M <sub>2</sub>	/	/	
M <sub>3</sub>	/	/	

[ 1 ~ 4 : present, ○ : absent, / : unobservable ]

#### 参考文献

1. 松下孝幸, 他, 1983: 林ノ辻遺跡出土の中世人骨。林ノ辻遺跡(諫早市文化財調査報告書4): 34-37.
2. 松下孝幸, 他, 1987: 長崎市深堀遺跡出土の人骨。深堀貝塚発掘調査報告書: 45-56.
3. 松下孝幸, 他, 1980: 熊本県興善寺馬場遺跡出土の中世人骨。興善寺(熊本県文化財調査報告書第45集): 145-159.
4. 故松野 茂, 他, 1970: 熊本県宇土市緑川の中世時代早期の遺跡出土の頭骨について。熊本医学会雑誌, 44: 999-1016.
5. 永井昌文, 1965: 荒尾市浄業寺中世人骨について。浄業寺と小代氏(荒尾市文化財報告第1集): 51-53.
6. 内藤芳篤, 1973: 人骨。尾窪一熊本県下益城郡城南町尾窪中世墳墓群の調査一(熊本県文化財調査報告12): 62-78.
7. 内藤芳篤, 1974 a: 仁兵衛島出土の人骨。対馬(浅茅湾とその周辺の考古学調査)(長崎県文化財調査報告書17): 106-112.
8. 内藤芳篤, 1974 b: 人骨。立石貝塚(大分県文化財調査報告31): 39-45.
9. 内藤芳篤, 1975: 塚原中世墳墓・丸尾5号墳出土の人骨について。塚原(熊本県文化財調査報告第16集): 317-322.
10. 内藤芳篤, 他, 1978: 杉谷遺跡出土の中世人骨。大園山・杉谷遺跡(熊本県荒尾市文化財調査報告第3集): 116-122.
11. 佐熊正史, 1986: 中世九州人頭蓋の人類学的研究。長崎医学会雑誌, 61: 4-21.
12. 鈴木 尚, 他, 1956: 頭骨の形質。鎌倉材木座発見の中世遺跡とその人骨: 75-148. 岩波書店, 東京.

長崎県文化財調査報告書第99集

九州横断自動車道建設に伴う  
埋蔵文化財緊急発掘調査報告書

VIII

1 9 9 1

発行 長崎県教育委員会 ©  
長崎市江戸町 2-13

印刷 日本紙工印刷株式会社  
長崎市興善町 2-6

### Ⅲ 出土遺物

#### 1. 土器 (Fig. 67～Fig. 70)

##### ① 縄文時代の土器 (Fig. 67)

縄文時代の土器は、主なものだけでも晩期のもを中心に、約60点ほど出土している。組織痕土器片や粗製深鉢の底部などがみられる。晩期の土器以外には、中期の阿高式土器の土器片や、風化が著しく詳細な観察はできなかったが、早期の押型文土器と思われる破片も数点出土しており、小菌城跡の歴史時代以前を知るうえで良い資料である。

1～3は土器の口縁部である。1は阿高式土器の口縁部で、波状口縁となっている。文様は、明確さを欠く凹点文で、交互に三列ほど並んでいる。口縁部周辺のみ文様を持つ、中期でも比較的新しい時期の土器だと思われる。滑石を混入している。阿高式土器はこの他にも底部等が出土している。2は精製浅鉢の口縁部である。薄手で、口縁部の立ち上がった部分には、幅が2mmほどの凹線を2条巡らせている。全体に、研磨の痕跡がみられる。また、凹線の入る口縁部は、整形された部分に貼りつけている。口唇部は平らに磨かれている。3は夜臼式系土器の粗製深鉢の口縁部である。刻目突帯文が付き、口唇部は丸くおさめられている。

4～6はいずれも網目圧痕の組織痕土器の一部である。組織痕土器は、縄文晩期後半に多くみられるもので、前述の夜臼式土器とともに時期の範囲を限定する資料となるであろう。4は鉢形土器の胴部である。口縁部へは「く」字形にくびれた部分から、ほぼ垂直に立ちあがっている。内面はナデ仕上げである。屈曲している部分は少し外反し、断面よりつなぎの部分が見られる。5も4と同様であるが、器壁は薄く、網目圧痕とナデ面との境は平坦で、一条のスジの様なものが観察される。6は、3点の中で最も器壁が薄く、しかも網目圧痕は、目が大きく、深く明瞭である。3点とも内面及び外面の圧痕部分以上はナデ仕上げである。色調は、黒褐色か茶褐色を呈す。

7～13は甕の底部である。10点の出土をみたが、実測に耐える7点を図化した。7は平底の円盤部分である。薄手の底部である。8も平坦であるが、ぶ厚い底部の成形は断面観察より、底部から体下端の屈曲部まで作り、内底面に粘土を貼りつけている。9は脚端部が長く伸び、くびれが著しい。また、他のものに比べれば非常に薄手である。10はかなり大形のもので、底径は約9.2cmを測る。成形は8と同様のつくりである。11は胴部へ立ち上がるくびれ部へ、突帯状の出張りを施している。底部の脚部分は、平らに仕上げられている。12・13はくびれ部分に刻目突帯を有しており、高坏や高台になる可能性もある。刻目の特徴により時期もある程度限定できるかもしれない。12は刻目が大きく明瞭で、刻目突帯が付くものの中では古い時期のものと思われる。時期的には、山の寺ぐらいに位置するかもしれない。13はかなり風化しており、脚部も破損しているが、刻目部分は12に比べ小さく浅くなっている。時期的には、夜臼式土器の段階と考えられる。

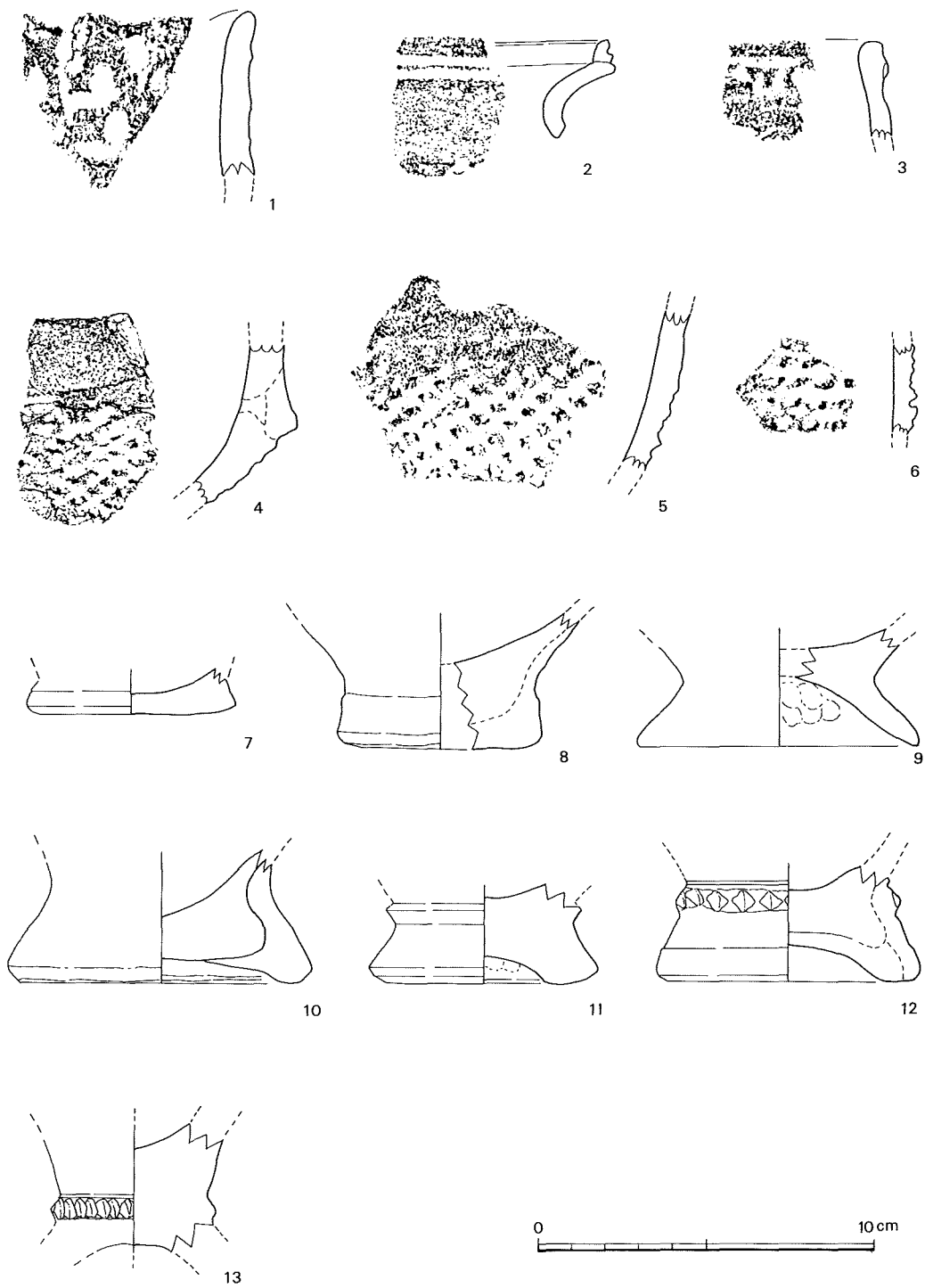


Fig. 67 縄文時代の土器 (1/2)



## ② 弥生時代の土器 (Fig. 68~Fig. 69)

弥生時代の土器は、甕、壺、高坏、器台等の土器片が出土している。縄文土器と同じか、少し上回る数量の出土をみている。特に高坏の土器片は他のものに比べ多く、明確に分類できる土器片は22点を数える。

14は大形の甕の口縁部である。「く」字形をしており、口縁と胴部の境界付近に突帯を貼り付けている。15・16は複合口縁壺の口縁部である。2点とも袋状口縁と呼ばれるもので、口縁部は丸く屈曲し内湾する。

17は大形の壺の胴部で、突帯が付いている。

18~22は壺底部である。18は、やや丸底気味であるが、底径2.7cmを測る平底で、僅かに刷毛目が認められる。19は底径3.0cmを測り、内外面に刷毛目がみられる。18・19の2点とも底部は厚い。20は底径5.0cmを測り、やや大きめである。底部と器壁は薄く、厚さにはほとんど差がない。

21~26は、器台の各部分である。21~23は文様部分である。21は櫛描直線文で、条数は4本である。22は篋描直線文を施し、さらに斜めに篋描短線文を入れ、格子目風になっている。条数は破損のため明確でなく、確認できるもので8条を数える。23は櫛描直線文であるが、これも破損のため条数は明確でなく、6条以上と思われる。

27は器台の口縁部である。大きく朝顔形に開く口縁で、端部の内面と口唇部はナデ整形されており、外方はやや凹んでいる。

25・26は整形の器台脚部である。「ハ」字形に大きく拡がり、脚部はつまみ上げている。底径は、25で20.3cm、26では18.2cmを測る。

27は、高坏の頸部から裾部にかけての接合資料である。直径2mmの小穴が3箇所あったと思われる、頸部の上端には丹塗りの痕跡がある。

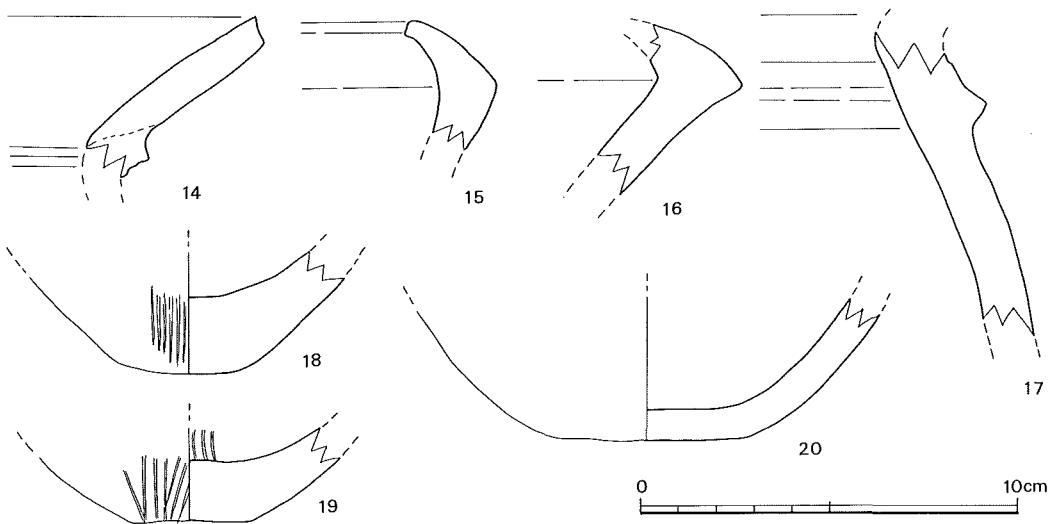


Fig. 68 弥生時代の土器 ① (1/2)

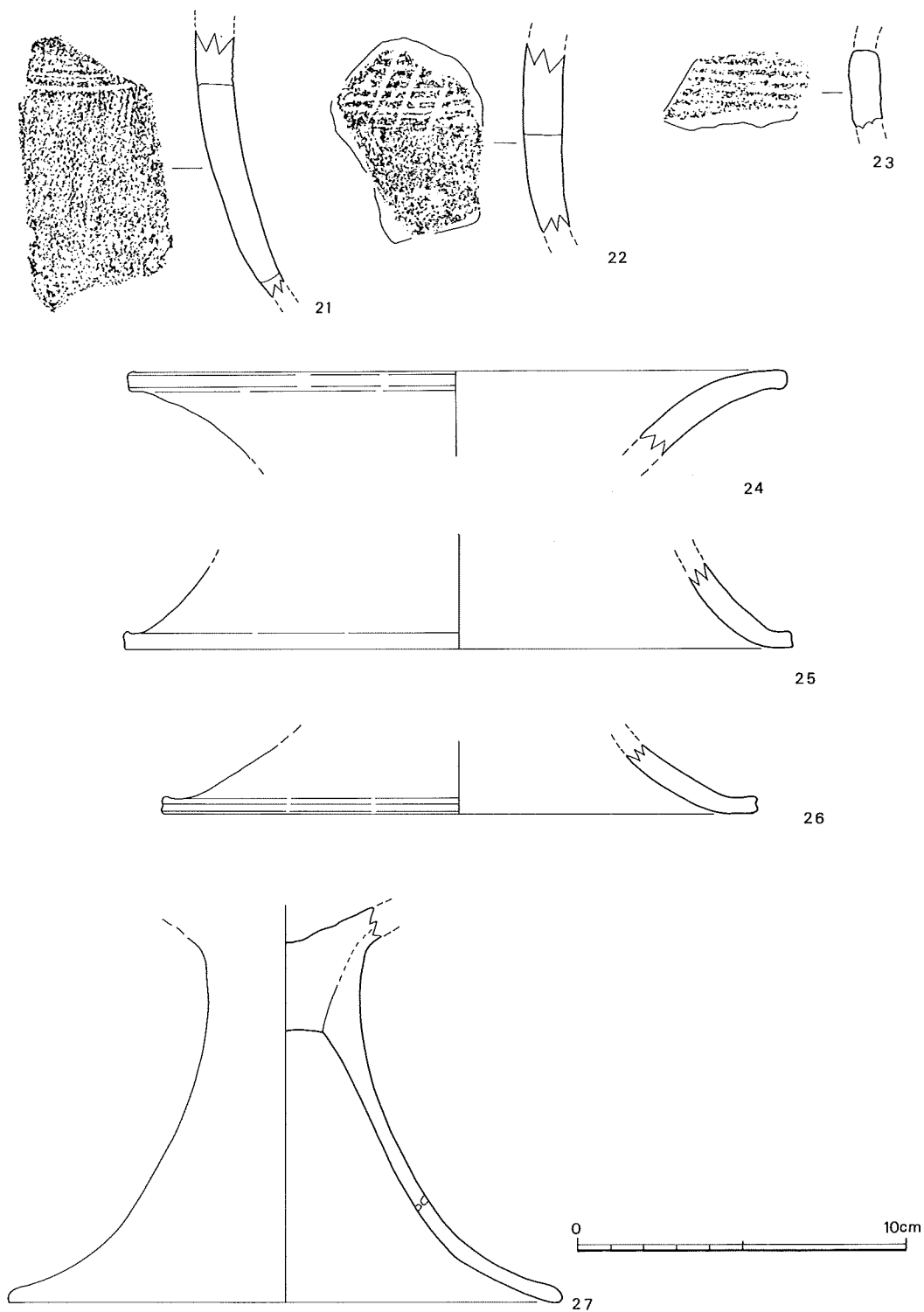


Fig. 69 弥生時代の土器 ② (1/2)

③ 古墳時代の土器 (Fig. 70)

古墳時代の土器は、高坏、壺、鉢形、甕等の土器片が出土している。弥生時代終末から古墳時代初頭にかけての古式土師が多い。

28・29は高坏の坏部である。28は坏部中位付近で屈曲し、口縁が外湾気味に延びている。やや肉厚で、内面には屈曲がみあたらず、滑らかなカーブを描いている。29は反転部の屈曲が間延びし、坏部中位の段もやや不明瞭である。28に比べ器壁は薄く、内面にも屈曲がみられる。

30・31は高坏の脚部である。坏部つけ根から脚部までの高さは5.2cm、坏部が付いたとしても10cm前後だと思われる。円筒形の頸部からゆるやかに開くものである。31は古式土師器である。坏部と脚部は破損しているが、裾部で稜を有し、稜上に直径6mmほどの小穴が、等間隔に3箇所ある。小穴は貫通させない様に途中で止めている。30よりやや新しい時期のものと思われる。

32は、直口壺の口縁部である。口縁端部は僅かに外反気味にまっすぐ直立する。

33は、鉢形土器の口縁部である。体部は半球形の様子をみせ、口縁端部は僅かに外反する。

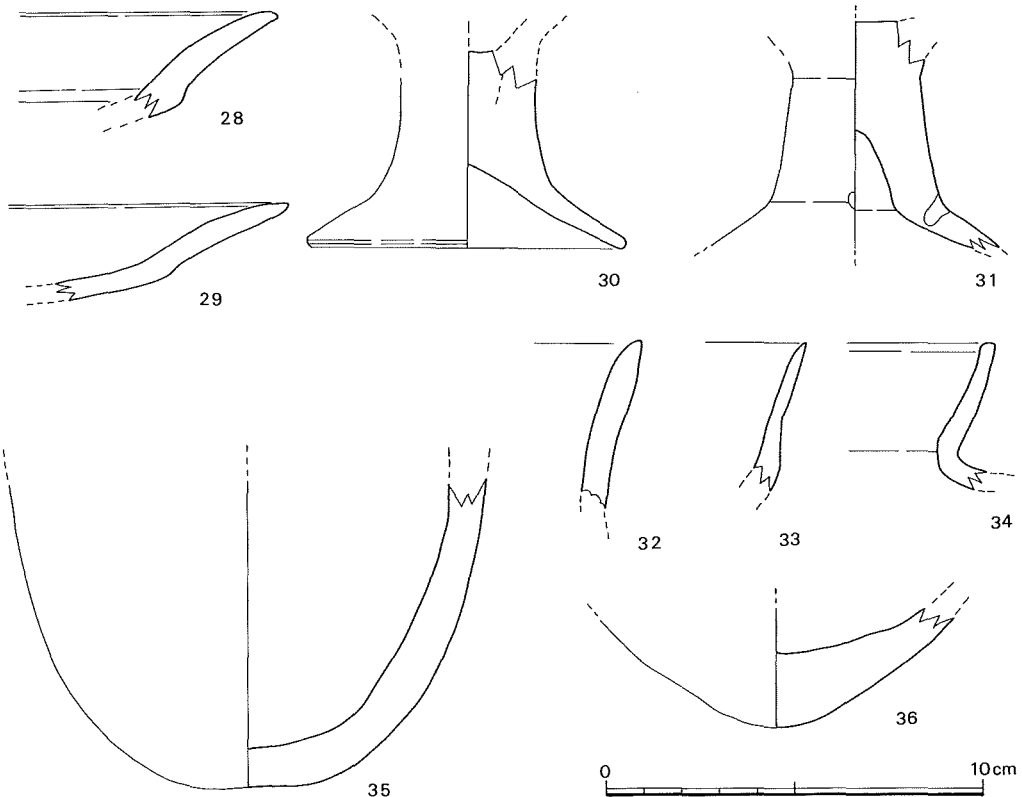


Fig. 70 古墳時代の土器 (1/2)

34は甕の口縁部である。口縁部はやや内湾しており。口唇部はつまみ気味である。布留式の古式土師器に入る。

35・36は甕の底部である。35は丸底化しており古式土師器に近い。36は丸底の底部である。35よりやや新しい時期のものである。(小野)

参考文献

小浜町教育委員会「朝日山遺跡」小浜町文化財調査報告書 第1集 1981  
 千葉県文化財センター「房総考古学ライブラリー2 縄文時代 (1)」1985  
 千葉県文化財センター「房総考古学ライブラリー3 縄文時代 (2)」1987  
 雄山閣「縄文文化の研究4 縄文土器 II」1981  
 長崎県教育委員会「今福遺跡 I」長崎県文化財調査報告書 第68集 1984  
 長崎県教育委員会「今福遺跡 II」長崎県文化財調査報告書 第77集 1985  
 長崎県教育委員会「今福遺跡 III」長崎県文化財調査報告書 第84集 1986  
 武末純一「土器からみた日韓交渉」學生社 1991  
 雄山閣「新版 考古学講座 3」1979

Tab. 1 土器観察表 ①

単位cm < >は推定値

Fig.	番号	調査区 層位	器種 部位	口径 器高	文様・手法・特徴	色調	胎土	焼成
67	1	R-16 3	深鉢 口縁部		阿高式土器 簡単な凹点文 波状口縁	明赤褐色	1.0mm以下の滑石混入	普通
	2	T-23 3	浅鉢 口縁部		精製 内外面は研磨されている 口縁部に幅2.0mm位の凹線が2条入る	外: にぶい褐色 内: 灰褐色	石英・角閃石を含	良好
	3	R-15 3	深鉢 口縁部		粗製 夜白式系土器 刻目突帯文 内外面 ナデ仕上げ	外: 灰褐色 内: 褐色	石英・角閃石細粒を含	普通
	4	T-20 3	鉢形 胴部		網目圧痕の組織痕土器 内面はナデ仕上げ「く」字形に屈曲している	外: 橙色 内: 黒褐色	石英・角閃石粒を含	〃
	5	U-21 3	鉢形 胴部		網目圧痕の組織痕土器 ナデ仕上げ	外: 黒褐色 内: 褐色	胎土は荒い 石英・角閃石・白色 砂粒を含	〃
	6	U-17 4	鉢形 胴部		組目圧痕の組織痕土器 圧痕は深く、器壁は非常に薄い	黒色	石英・角閃石を含	〃
	7	S-22 3	甕 底部	底径 6.0	平底の円盤部分 内外面はナデ仕上げ	外: 橙色 内: にぶい橙色	1.0mm以下の石英・ 角閃石 1.5~1.0mm の白色砂含	〃
	8	S-19 3	甕 底部	底径 (6.1)	平底 内底面には粘土を貼り付けている 内外面はナデ仕上げ	外: 明赤褐色 内: にぶい橙色	石英・角閃石・金雲母 白砂を含	〃
	9	S-20 3	甕 底部	底径 (8.4)	薄く長い脚部 二次的な赤い焼けむら有り ナデ仕上げで、外底面には指頭痕有り	外: 淡橙色 内: 灰褐色	白色・赤色砂粒・草な どを含	良好
	10	Q-5 4	甕 底部	底径 (9.1)	大きめの底部 一部に赤い焼けむら有り 脚端部は平らに整えられている	淡橙色	石英・角閃石・金雲母 白砂を含	普通
	11	T-20 3	甕 底部	底径 6.8	くびれ部には突帯状の出張り有り 脚端部は平らに整形、外底面に指頭痕有り	外: 橙色 内: にぶい橙色	石英・角閃石・金雲母 白砂を含	〃
	12	S-19 3	甕 底部	底径 (7.8)	くびれ部には明瞭な刻目突帯を有す 脚端部は平らに整形、内外面ナデ仕上げ	外: 明赤褐色 内: にぶい褐色	石英・角閃石・金雲母 白砂を含	良好

Tab. 2 土器観察表 ②

単位cm 〈 〉は推定値

Fig.	番号	調査区 層 位	器 種 部 位	口径 器高	文 様 ・ 手 法 ・ 特 徴	色 調	胎 土	焼成
67	13	R-15 3	甕 底 部		小さな刻目突帯有り 風化が著しい。	橙 色	石英・角閃石・白砂粒 を含	普通
68	14	U-19 3	甕 口縁部		「く」字形に屈曲する 内外面ナデ仕上げ 口唇部は平らに整えられている	外：にぶい褐色 内：にぶい橙色	1.0mm以下の石英・角閃石 1.0~2.0mmの白砂を含	〃
	15	S-17 3	壺 口縁部		複合口縁, 袋状口縁と呼ばれる 肉厚で口唇部は丸くおさまられている	にぶい橙色	石英・角閃石の細粒が 少し砂の粗粒を含	やや 悪い
	16	S-22 3	壺 口縁部		複合口縁, 袋状口縁と呼ばれる 内面ナデ, 外面条痕有り	にぶい橙色	石英・角閃石細粒 1.0~3.0mmの白・赤色砂	〃
	17	T-22 3	壺 胴 部		大形壺 突帯有り 外面に条痕有り 内面はナデ仕上げ	にぶい橙色	砂粒が多く混入	〃
	18	S-23 3	壺 底 部	底径 2.7	丸底気味の平底 外面に条痕有り	にぶい橙色	1.0mm前後の白・赤色 砂粒が多く混入	普通
	19	S-17 3	壺 底 部	底径 3.0	あがり底気味の平底 内外面に条痕有り	外：にぶい褐色 内：明褐色	石英・角閃石粒 1.0~1.2mmの白砂を含	やや 悪い
	20	S-21 3, 4	壺 底 部	底径 5.0	平底 底部から胴部への立ち上がりは 緩やかで, さかいがない	外：にぶい褐色 内：浅黄褐色	石英・角閃石の細粒 0.5~1.2mmの白・赤砂	普通
	69	21	S-17 3	器 台 胴 部		文様部分 櫛描直線文が4条観察される	浅黄褐色	石英・白砂が混入
22		R-17 3	器 台 胴 部		文様部分 篋描直線文と短線文で格子目状の文様	浅黄褐色	白砂細粒を含	やや 悪い
23		V-21 3	器 台 胴 部		文様部分 櫛描直線文が6条観察される	橙 色	石英細粒を含	良好
24		S-17 3	器 台 口縁部	口径 (20.1)	朝顔状に開く口縁部 口唇部は平らにおさまられている ヨコナデ	浅黄褐色	白・赤砂細粒を含	〃
25		T-22 3	器 台 脚 部	底径 (20.3)	「ハ」字形に広がる脚 脚端部は屈曲して平らになっている	浅黄褐色	1.0~2.0mm位のやや 大粒の白・赤砂粒を含	普通
26		R-16 3	器 台 脚 部	底径 (18.2)	「ハ」字形にゆるやかに広がる脚部 脚端部はややつまみ気味の調整 ヨコナデ	外：浅黄褐色 内：明黄褐色	石英・白砂細粒を含	良好
27		V-19 3	器 台 体下半部	底径 (16.8)	「ハ」字形にゆるやかに広がる脚部を持ち, 丹塗りの 痕跡がある。小穴が3つあるが4つあった可能性大	浅草褐色	石英・白砂細粒を含	〃
70	28	T-22 3	高 坏 坏 部		外湾気味に開く口縁部をもつ 坏部体下半に屈曲をもつ	橙 色	1.0~1.5mmの石英粒を 多く含	普通
	29	U-22 3	高 坏 坏 部		大きく開く口縁部を持ち, 浅い坏部 ゆるい屈曲部をもつ	外：橙 色 内：浅黄褐色	0.5~1.0mmの石英粒を 多く含	やや 悪い
	30	R-17 3	高 坏 脚 部	底径 (8.5)	坏部があったとしても10cm前後の小形の高坏 ゆるく開く脚部	橙 色	石英・白砂の細粒を含	〃
	31	T-21 3	高 坏 脚 部		裾部のつけ根に直径0.6cmの小穴が3箇所 小穴は貫通していない 外面はナデ 内面はヘラケズリ	外：にぶい褐色 内：橙 色	石英・角閃石・白砂な どの微粒子を含	良好
	32	U-23 3	壺 口縁部		直口壺の口縁部 内外面はナデ調整 口縁部は, つまみ気味	橙 色	白・赤砂の粗粒を含	普通
	33	S-17 4上	鉢 形 口縁部		鉢形土器の口縁部 つまみ気味の口唇部 半球形の体部	橙 色	微細な赤色の粒子を含	〃
	34	Q-23 3	甕 口縁部		内湾する口縁部 口唇部は, つまみ気味	外：にぶい黄褐色 内：浅黄褐色	0.5~1.0mmの石英・白 砂粒を含	良好
	35	S-17 3	甕 底 部		丸底化した底部 古式土師器に近い	橙 色	石英・角閃石・白砂の 細粒を含	普通
	36	R-16 3	甕 底 部		丸底の底部 古式土師器 外面に条痕有り	外：橙 色 内：灰白色	1.0mm以上の石英・角 閃石・砂粒を含	〃

#### ④ 古代・中世の陶磁器類他

主な遺物をあげると輸入陶磁器類と国産の土師器及び須恵器系それに滑石製石鍋がある。以下に順をおって記述する。

##### 輸入陶磁器

これには、白磁・青磁に大別され白磁が848点に青磁が510点出土している。白磁・青磁の型式分類については、太宰府出土の輸入陶磁器分類<sup>註1</sup>にならう。

##### 白磁碗類 (Fig. 71~Fig. 73)

1は、乳白色を呈したもので、口縁部から釉が垂下し玉縁の断面をなし器肉が薄い。2は、黄色味を帯びた灰白色を呈し、玉縁に丸味を持っている。外面の体部中位まで釉が垂下する。下半部には施釉されていない。また、玉縁の下端部と体部の境に鋭角的なくいこみがある。口縁部は、内湾ぎみとなる。3は、青味を帯びた灰白色を呈する。玉縁の中央部にやや凹みがある。外面の体部中位以下には施釉されない。4は、黄色味を帯びた青灰色を呈する。玉縁に丸味を持ち胎土灰白色を呈する。内外面に貫入が入る。口縁部は内湾ぎみに立ち上がる。5は、玉縁部分に削り出しによる調整痕を残した上から施釉されている。灰白色を内外面に呈している。体部の中位以下には釉がかかっていない。6は、3点接合資料で、2点については近接したグリッドより出土するが、1点については、20m離れた地点よりの出土である。口縁部へ直線的に立ち上がり、玉縁に厚みがある。内外面は黄色味を帯びた灰白色を呈する。体部の下端に施釉のかからない部分が残る。7は、玉縁に丸味を持ち調整痕のうえから施釉されている。青味を帯びた灰白色を呈する。8は、3と同様に玉縁の中央部がやや凹み、口縁端部が細味となる。青味を帯びた灰白色を呈する。内面は、若干凹みがある。9は、玉縁の下に浅い段を有し、内外面に貫入が入る。青味がかかった灰白色を呈する。10は玉縁が比較的短い。中位以下に施釉されていない、器面に焼成時の不純物によるツブツブが残る。内面口縁部の付近に貫入が入る。11はやや緑色を帯びた灰白色を呈する。外面に釉が体部の中位以下にかからない。内外面に貫入がみられる。断面三角形状を呈する。12は、黄灰色を内外面に呈し、貫入が入る。玉縁に厚みはないが長めである。玉縁と体部との間の外面に稜を持つ。13は、玉縁が丸味を持って長めである。外面に体部から玉縁に稜を持つ灰白色。14は、玉縁が厚く丸味を持ち、直線的に口縁部へ延びる。黄色味がかかった灰白色である。15は、玉縁に厚みがある。黄色味がかかった灰白色を呈している。16は、玉縁が長めで、口唇部はやや細めである。釉にむらがあり、玉縁の下まで釉がかかっていない。17は、玉縁の段差が丸くなるまで厚く釉がかかる。灰白色を呈し、直線的に口縁部へ延びる。18は、黄色味を帯びた灰白色を呈する。内外面に貫入が入る。体部の中位以下には施釉されていない。直線的に口縁部へ延びる。19は、口唇部に丸味を持ち、長い玉縁である。釉が厚くかかり、玉縁との段差が浅い。20は、青味がかかった灰白色を呈する。外面に整形の稜が残る。口縁部は丸味を持っている。21は、黄灰色を呈し、一見陶器風の磁器である。玉縁に釉ダレがある。22は、長めの玉縁に厚く釉がかかり、玉縁との段差が丸味を帯

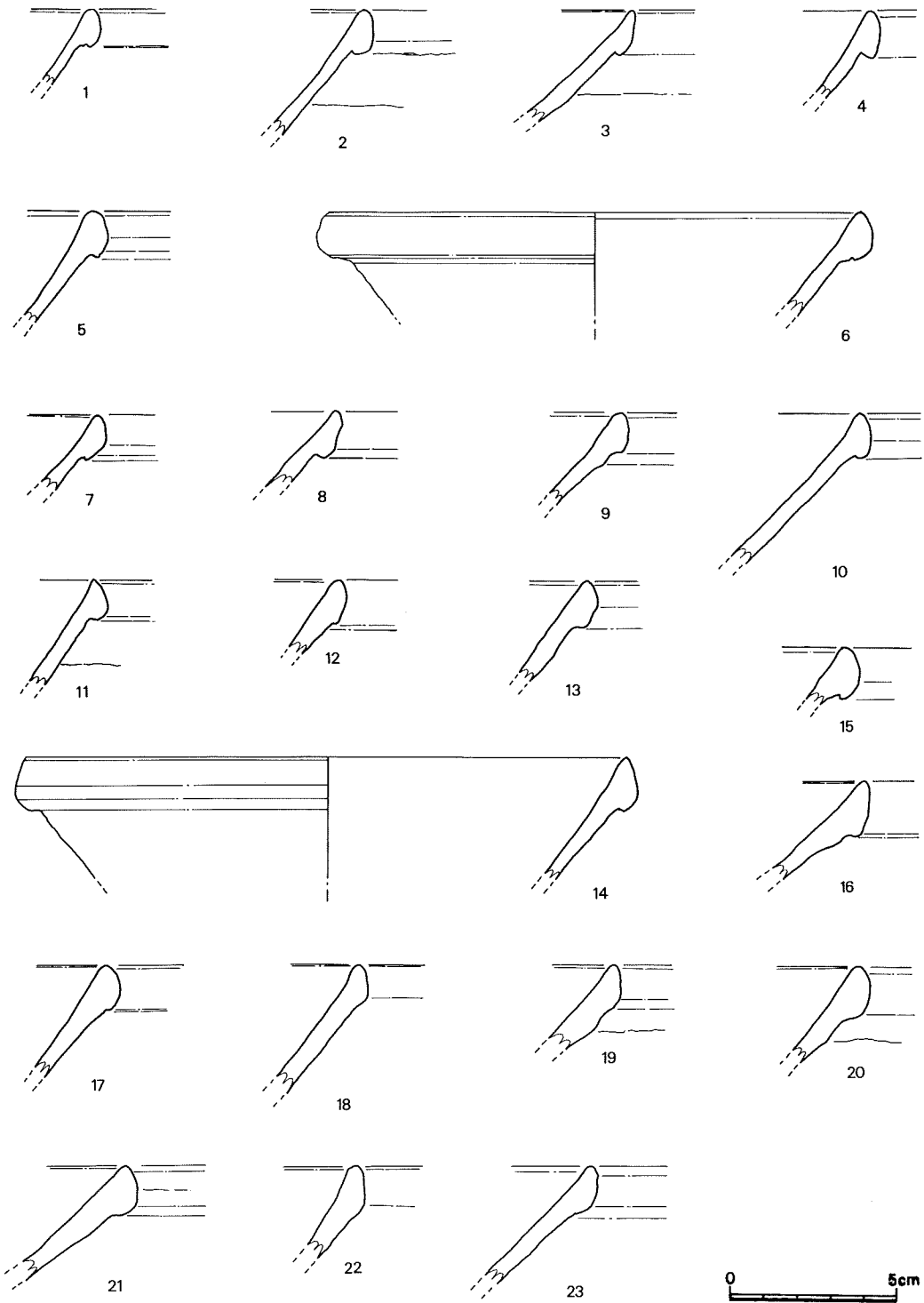


Fig. 71 白磁碗類 ①

びる。青味がかかった灰白色を呈する。23は、内外面に貫入が入る。玉縁を長めに作出しているためか、外面の玉縁との段差が丸味を持つ。直線的に口縁部へ延びる。色調は緑色を帯びた灰白色を呈する。

次に、口縁部を外反させ、端部を水平にするもの、内面見込に櫛目の文様を付すもの等やその他の白磁碗と青磁碗類を以下に記述する。(Fig. 72~Fig. 74)

1は、灰白色を呈し、口縁部を外反させて端部を水平に近い形状となす。2は、灰白色を呈し、1と同様に口縁部を外反させて、端部を水平にする。外面の口縁部下に浅い稜がつく。3は、口縁部を平坦にする。外面の口縁部下に浅い稜がつく。灰白色を呈する。4は、やや厚めに釉がかかり、平坦な口縁端部に丸味を持つ。青味がかかった灰白色を呈する。5は、灰白色を呈する。口縁端部水平となる。6は、灰白色を呈する。口縁端部は水平となる。7は、S-22区Pit 101より出土する。暗灰白色を呈し貫入が入る。体部下半から高台にかけては、施釉されていない。細めの高台から丸味をもって口縁部へ延びる。口縁部で外反し口縁部が水平となる。内面見込に浅い段がつく。8は、灰白色を呈し、口縁端部を水平となす。内面見込に浅い段がつく。9は、青味がかかった白色を呈する。口縁部で外反し、口縁端部を水平となす。10は、やや黄色味を帯びた灰白色を呈する。外面の口縁部下に釉がたれる。口縁端部を水平となす。11は、灰白色を呈し、口縁端部を水平となす。12は、内面見込に櫛目の文様が入り、細い沈線を付す。明灰白色を呈する。口縁端部をやはり水平になす。13は、内面見込に櫛目の文様が入り、上部に細い沈線を付す。口縁端部には釉が厚くかかり丸味を持つが、断面の口縁端部は水平としている。青味を帯びた白色を呈する。14は、平坦な口縁端部をなし、黄色味を帯びた灰白色を呈する。口縁部の外反があまりなく、口唇部に向かってやや膨らみかげんである。15は、黄色味がかかった灰色を呈する。口縁端部が、やや平坦さから丸味がつく。16は、口縁部外面に稜がつく。口縁端部の平坦さにやや丸味がつく。青味を帯びた白色を呈する。17は、口縁部に膨らみをもって端部尖りぎみである。色調は、黄色味を帯びた灰色を呈する。18は、17と同質の資料である。19は、口縁部が内湾する資料で口縁端部が尖りぎみである。内外面に貫入が入る。黄色味を帯びた灰色を呈する。20は、内面見込に花文を配するⅦ類。口縁部がゆるやかに外反する。黄色味がかかった灰色を呈する。21は、内面見込に花文を描く。口縁端部ゆるく外反する。黄色味がかかった灰色を呈する。22は、口縁端部に丸味を持ち、外面体部の中位下に釉がかからない。黄色味を帯びた灰色を呈する。23は、黄色味を呈した白磁で口縁端部を水平にする。内外面に釉がかかり貫入が入る。24は、23と同様の資料である。25は、青磁の碗類にあたる資料で外面に花文を配する。口縁端部に丸味を持ち貫入が入る。青味を帯びた緑色を呈する。26は、龍泉窯系青磁Ⅰ類-2に該当し、内面に蓮華文を有し、口縁部を丸くおさめる。やや黄色味を帯びた緑色を呈する。27も、26と同様の文様を付す。やや青味がかかった緑色を呈する。28は、Ⅰ-5類にあたり、外面体部に蓮弁の文様を有し、鎬のないものである。口縁端部に丸味を持つ。空色がかかった緑色を呈している。29も、28と同様に鎬のない蓮弁である。口縁端部



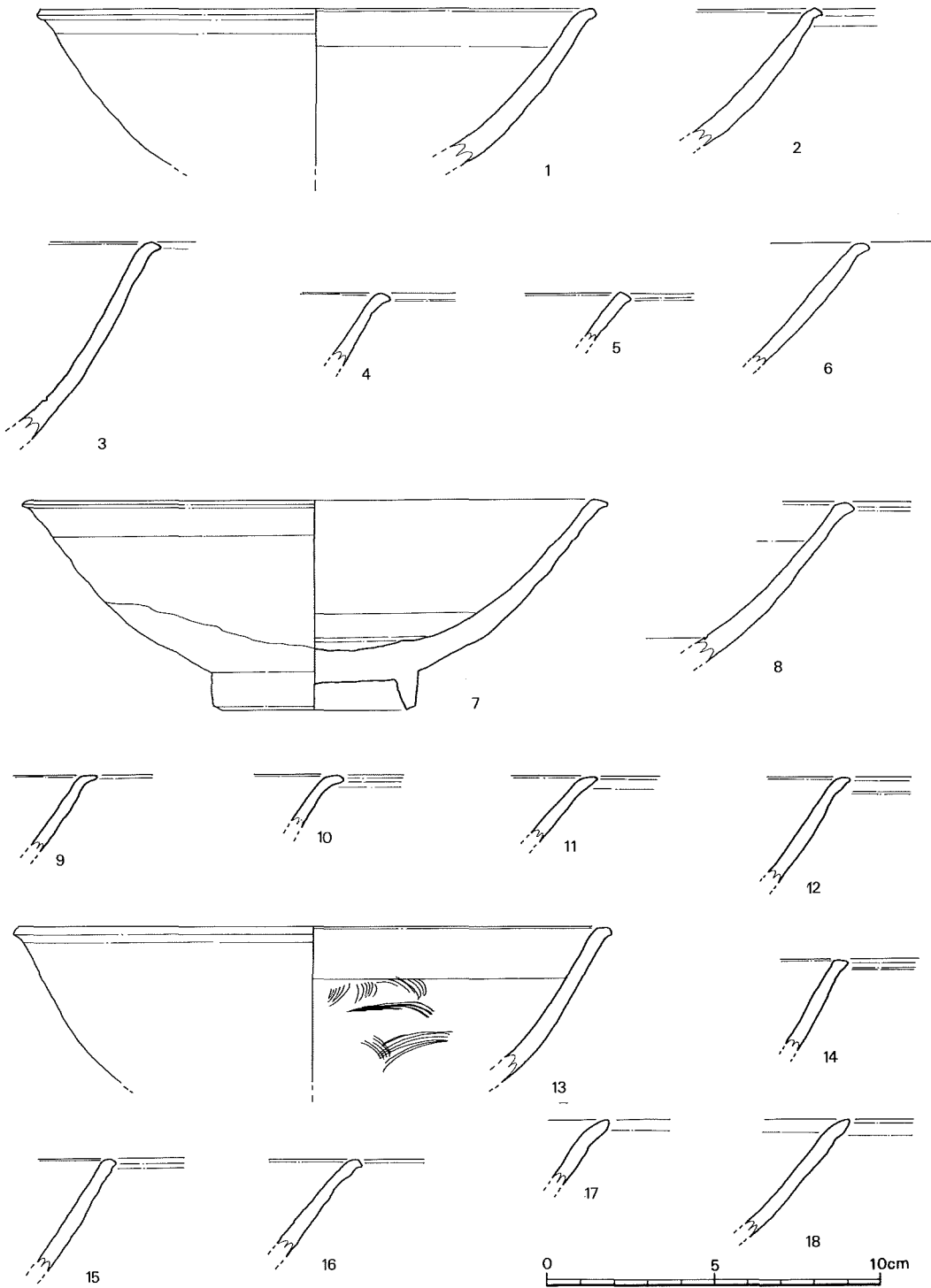


Fig. 72 白磁碗類 ②

を丸くおさめる。貫入が内外面に入る。茶色味がかつた緑色を呈する。30は、鑄のない蓮弁である。口縁端部を丸くおさめる。灰色味を帯びている。31は、鑄蓮弁を有し、口縁部でやや外反ぎみである。口縁端部を丸くおさめる。茶色味を帯びた緑色を呈する。32は、鑄蓮弁を有し、直線的に口縁部へ延び端部に丸味を持つ。黄色味を帯びた緑色を呈する。33は、青味を帯びた緑色を呈する。口縁部やや外反ぎみで端部に丸味を持つ。鑄蓮弁を配する。34は、茶色味を帯びた緑色を呈し、器肉やや厚い。鑄蓮弁を配し、内湾ぎみに口縁部やや外反する。35は、茶色味を帯びた緑色を呈し、体部下半より内湾ぎみに立ち上がる。端部丸味を持ち、鑄蓮弁を体部に配する。36は、体部に鑄蓮弁を配した茶色を呈し、口縁端部が尖りぎみである。

同安窯系の青磁として碗をあげている。この器種の特徴は台形状の厚い高台を有し、体部は高台部から内湾ぎみに外上方へ立ち上がり、体部の上位で若干内側に屈曲する。内底見込と体部との境に段を有し、また内面上位には沈線を入れている。釉は、全体に薄くかけられている。

37は、内外面に櫛目を有する。体部上位で若干内側に屈曲する。茶色味を帯びた緑色を呈する。口縁端部は、丸くおさめる。38は、外面に櫛目を有する。内面上位に細い沈線を入れている。青味をおびた緑色である。39は、同安窯系Ⅲ類で、口縁部をわずかに外反させ、口縁端部を丸くおさめる。体部外面にヘラ状の施文具により片彫り風の沈線を入れる。器面全体に貫入が入る。40は、同安窯系Ⅳ-1類にあたり、口縁部で外反し、口縁部外面に稜をもつ。口縁端部が平坦ぎみである。体部の中位に片彫り風の沈線が入る。41は、同安窯系Ⅲ-1b類にあたり、内面に櫛状の施文具により花文を描く。外面に片彫り風の沈線を付す。口縁部を外反させ端部を丸くおさめる。色調は、黄茶色を呈する。42は、口縁部を外反させて、内面の口縁部に黄色味の強い釉がかかる。全体に淡黄茶色を呈する。43は、玉縁状の口縁部をなす。色調は、黄色味がかつた緑色を呈する。釉は、内外面にかかる。44は、釉が厚くかかり、口縁部で外反し端部丸くおさめる。青味をもつた緑色を呈する。45は、口縁部で外反し、端部を丸くおさめる。体部上位に稜をもつ。46は、直線的に延びる口縁部で色調は、30と同様である。47は、口縁部やや外反ぎみとなり、端部丸くおさめる。器肉厚い。48は、青味の強い青磁で、外面に貫入が入る。口縁部に厚みがあり、端部を丸くおさめる。

#### 白磁碗類底部 (Fig. 75~Fig. 76)

高台が浅いもの深いものの外に内面見込を輪状にカキとった(8・9・10・11・13)もの等がある。

1は、高台が幅広で器肉も厚い明灰白色を呈する。2は、高台が幅広で削りだしが浅いため器肉も厚い。内面見込に浅い段があり、貫入が入る。黄色味を帯びた灰色である。3は、高台が幅広で器肉も厚い。内面見込に浅い段がつき内外面に貫入が入る。4は、やや高台の削りだしが高いが幅広である。青味を帯びた灰白色を呈する。5は、高台の幅がやや狭くなり、削りだしも高い。内面見込に浅い段がつく。青味を帯びた灰白色を呈する。6は、高台の削りだし

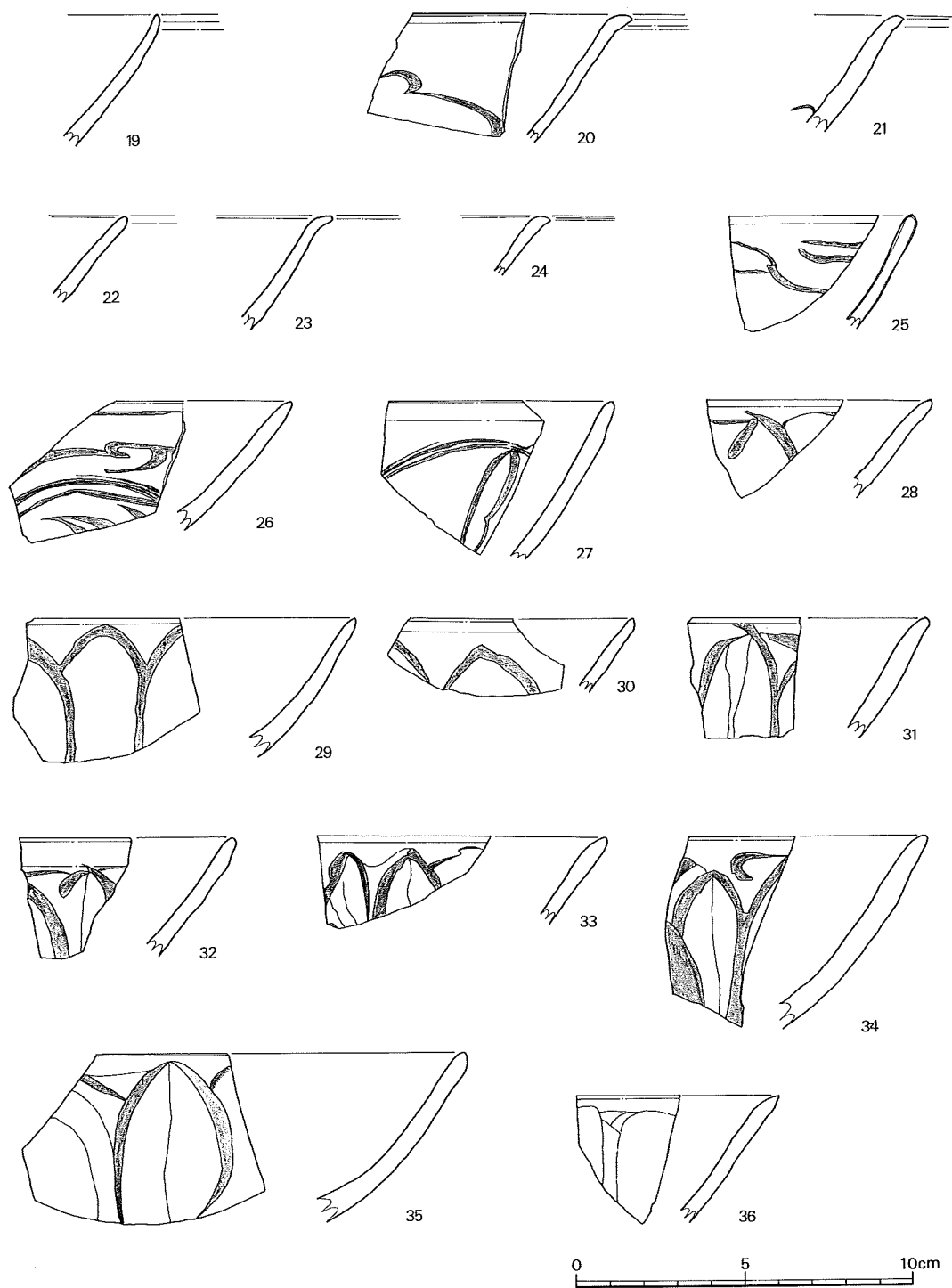


Fig. 73 白磁・青磁碗類

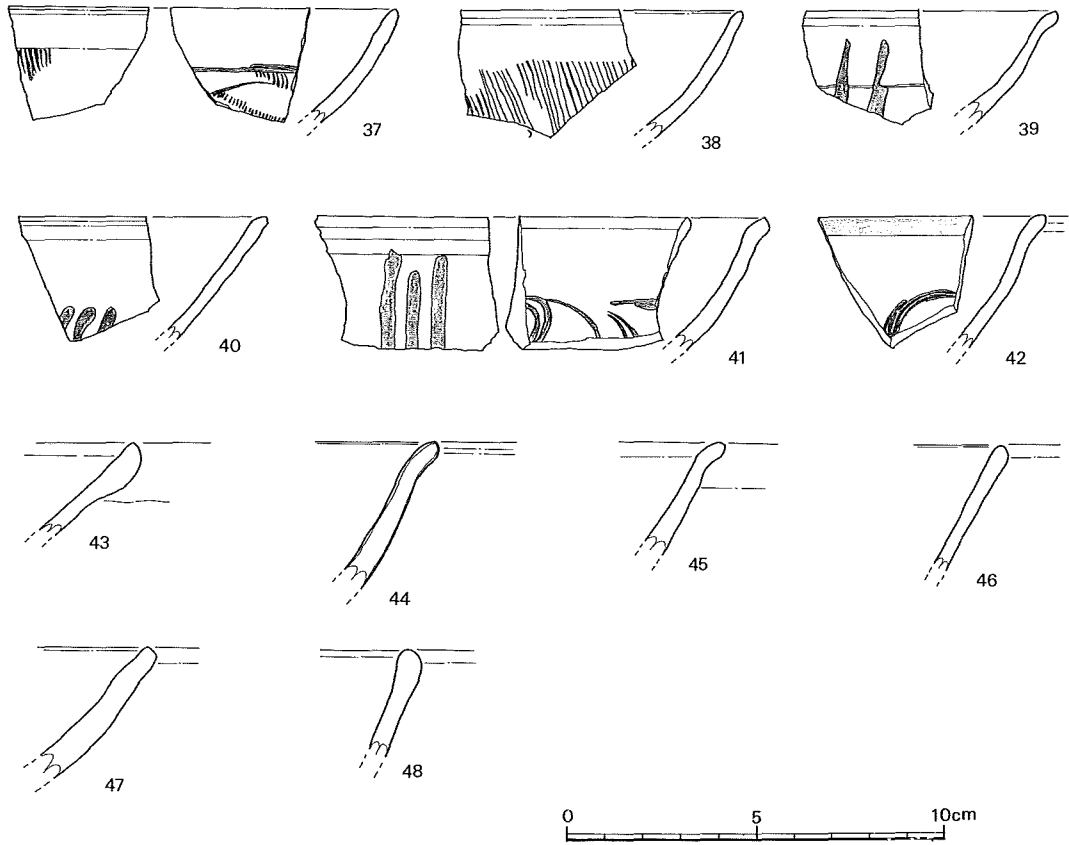


Fig. 74 青磁碗類

がやや高く、内面見込に段がつく。釉は体部下半までかかり、灰白色を呈する。7は、高台の削りだしやや高く内面見込に段がつく。高温により、内面の釉がただれている。8は、龍泉窯系Ⅷ類にあたり、内底に見込の釉を輪状にカキとったものである。高台は比較的高く削りだされている。9は、内底に見込の釉を輪状にカキとったものである。高台は比較的高く削りだされている。青味を帯びた白色を呈する。10は、内底見込の釉を輪状にカキとり、内面見込に段を有し、灰白色を呈する。11は、内底見込の釉を輪状にカキとり、見込に段を有する。12は、内底見込の釉を輪状にカキとり、見込に段を有し、釉は体部下半までかかる。高台は、比較的高く削りだす。13は、内底見込の釉を輪状にカキとる。高台は、比較的高く削りだす。黄色味を帯びた灰色を呈する。14は、V類で細く高い直立した高台を有するものである。釉は、灰白色を呈する。15も、V類にあたり、同様の器形を有する。胎土は灰白色である。高台近くまで、施釉する。内面見込に細い沈線を付す。16は、細く高い直立した高台を有する。内面見込に細

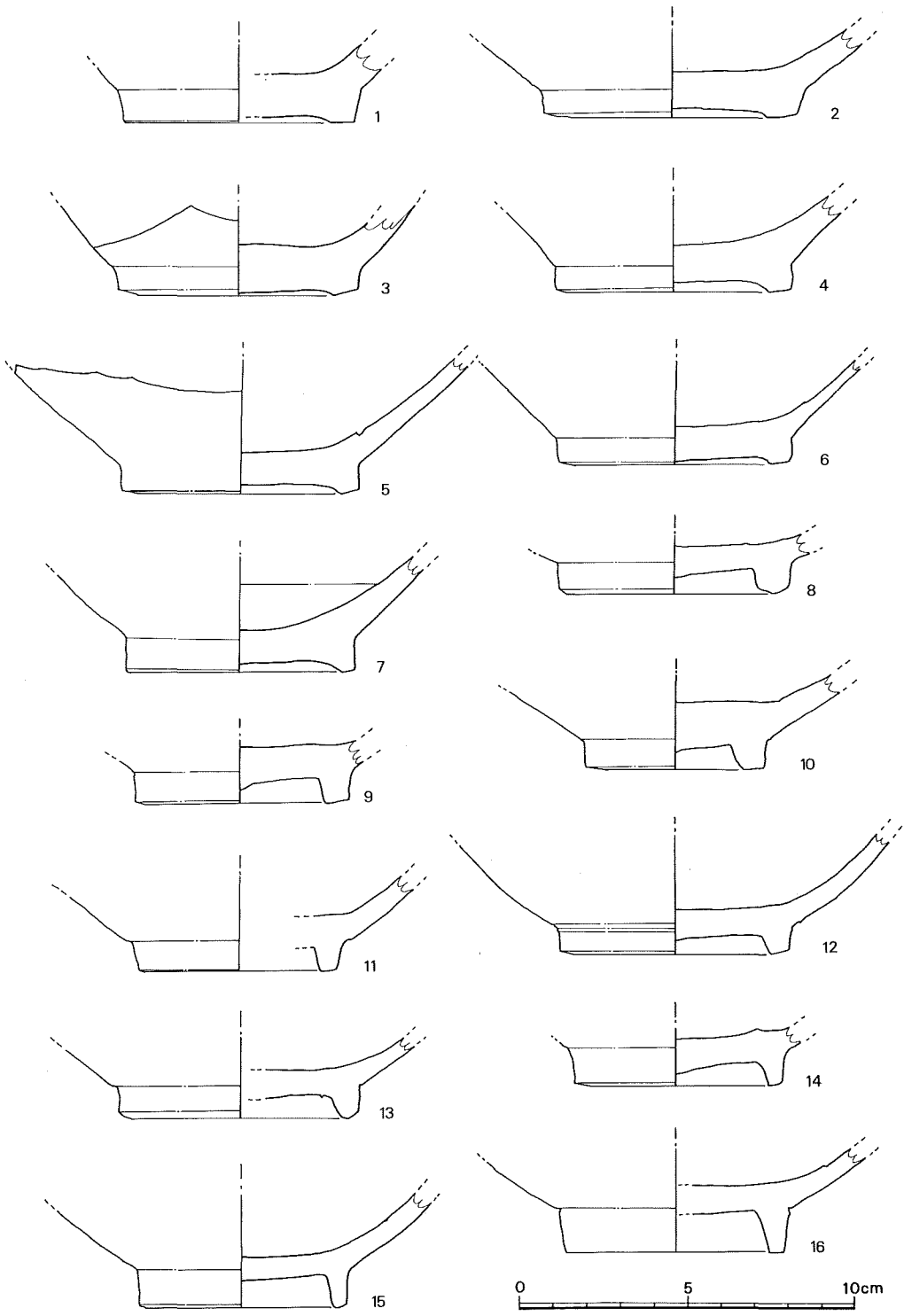


Fig. 75 白磁碗類の底部

い沈線を付す。高台の近くまで施釉する。17は、細く高い直立した高台を有する。灰色を呈する。18は、細く高い高台を有する。内外面に貫入が入る。外面高台と体部の間に深い削りだしがみられる。黄色味を帯びた灰色を呈する。19は、細く高い高台を有し、内底見込に浅い段がつく。釉は、底部近くまでつく。20は、細く高い高台を有する。外面の高台と体部の間に深い削りだしがある。灰白色を呈する。21は、細く高い高台を有する。内面に貫入が入り、見込に浅い段がつく。黄色味の強い灰色を呈する。22は、細く高い高台を作り出す。灰色を呈している。23は、細く高い高台を有し、灰色を呈する。24は、T-19区とT-18区の3層より出土し2点が接合する。細い高台を有する。黄色味の強い灰色を呈する。25は、細い高台を有し、底部の中心部が削りだしによって突き出す。釉は青味がかった灰色を呈する。26は、内底見込に浅い段がつき、細く低い高台をなす。内面見込に草花文を有する。

#### 青磁碗類底部 (Fig. 76~Fig. 77)

27は、龍泉窯系Ⅰ類にあたり、高台の断面四角で、高台部の畳付及びその内部は露胎である。黄色を帯びた緑色を呈する。内外面に貫入が入る。28は、これも27と同質同形の高台を有する。29は、内底見込に「金玉」の文字が有る。黄色味を帯びた緑色を呈する。30は、内面見込に草花文が付き高台の断面四角である。色調は、灰色がかかった緑色を呈する。31は、内底見込に草花文が付き高台やや幅広の断面四角形を有する。黄灰色を呈する。32は、外面に鎬蓮弁の文様が有り、内底に浅い段がつく。外面の高台及び内部は露胎である。33は、外面に鎬蓮弁の文様が有り、明るい青色を呈する。34は、同安窯系統の底部で、外面に櫛目の文様が有り、高台中心部が削りだしにより突き出している。青味を帯びた緑色を呈する。35は、内面見込に草花文様を有し、外面には、櫛目の文様がある。高台の中心部の削りだしにより突き出している。36は、同安窯系Ⅰ類にあたり、内面見込に草花文を有し、内底に段を有する。外面は櫛目の文様が有る。外面の高台中心部の削りだしにより突き出している。37は、外面に櫛目の文様を付す。内底見込にも浅い段が付く。高台の作りだしやや高い。38は、内外面に、櫛目の文様を付す。高台の作り出しやや高い。39は、内底見込に段が付き灰色味を帯びた緑色を呈する。釉は高台近くまでかかる。40は、黄色味を帯びた緑色を呈する。内面見込に浅い段を有する。高台は深い削りだしを行っている。外面に櫛目文が付く。41は、灰色がかかった緑色を呈し、底部からの立ち上がりに丸味を持つ。

#### 皿類 (Fig. 78~Fig. 79)

1は、口縁部で外反する。外面体部中位まで釉がかかり、内面見込輪状にカキとっている。青味がかった白色を呈する。2は、1と同様で色調が灰色である。3は、これも1と同様に色調及び整形も類似する。4は、白磁皿のⅧ類の体部上位で内湾する。灰色を呈する。5は、口縁端部が尖りぎみで、口縁部玉縁状に厚みを持つ。青味がかった灰色を呈する。6は、体部上位で屈曲する。青味がかった灰色を呈する。内外面に貫入が入る。7は、体部上位で屈曲する。内面には、釉が全面にかかるが、外面口縁部上位までで終えている。黄色味を帯びる。8は、

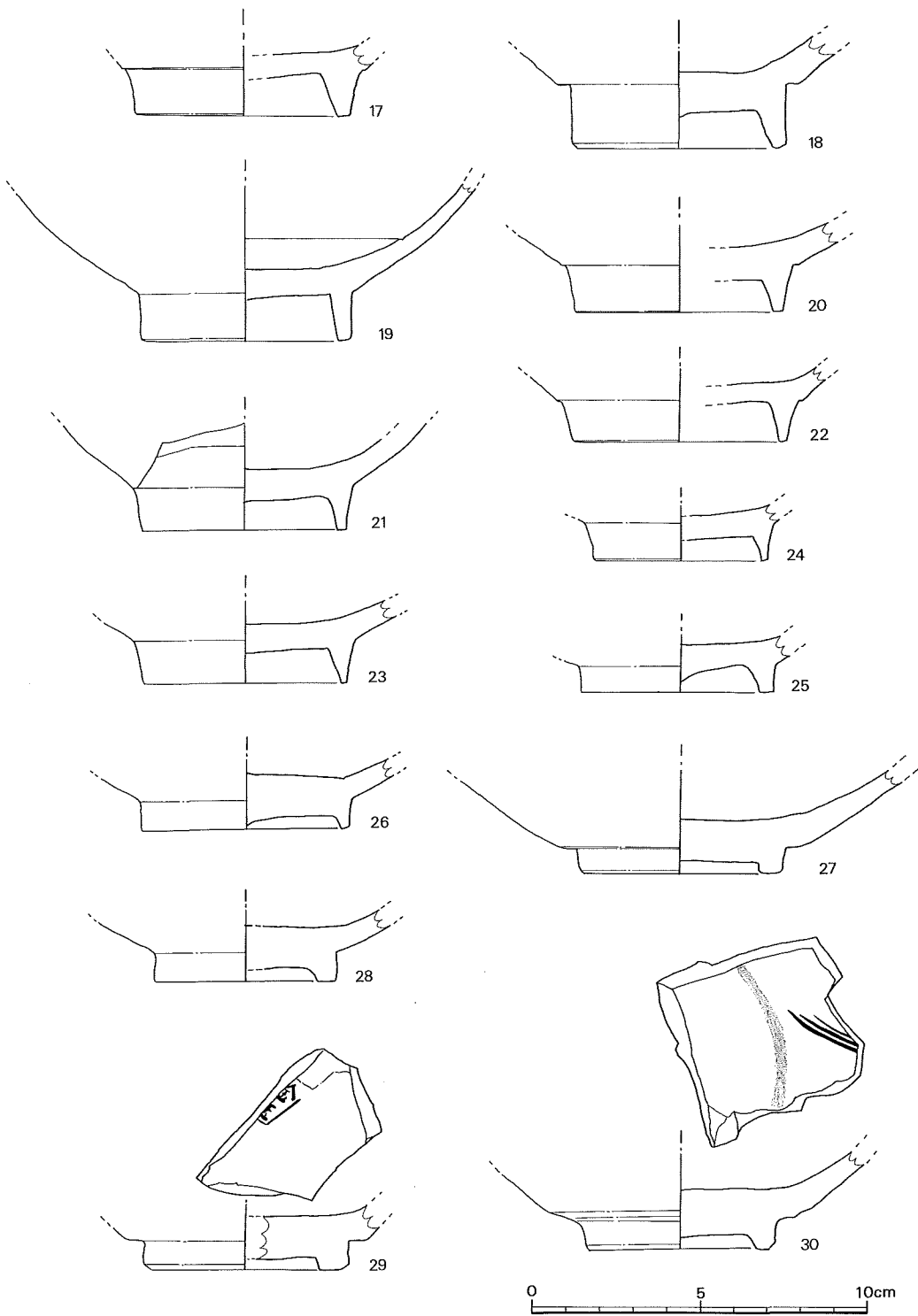


Fig. 76 白磁・青磁碗類底部

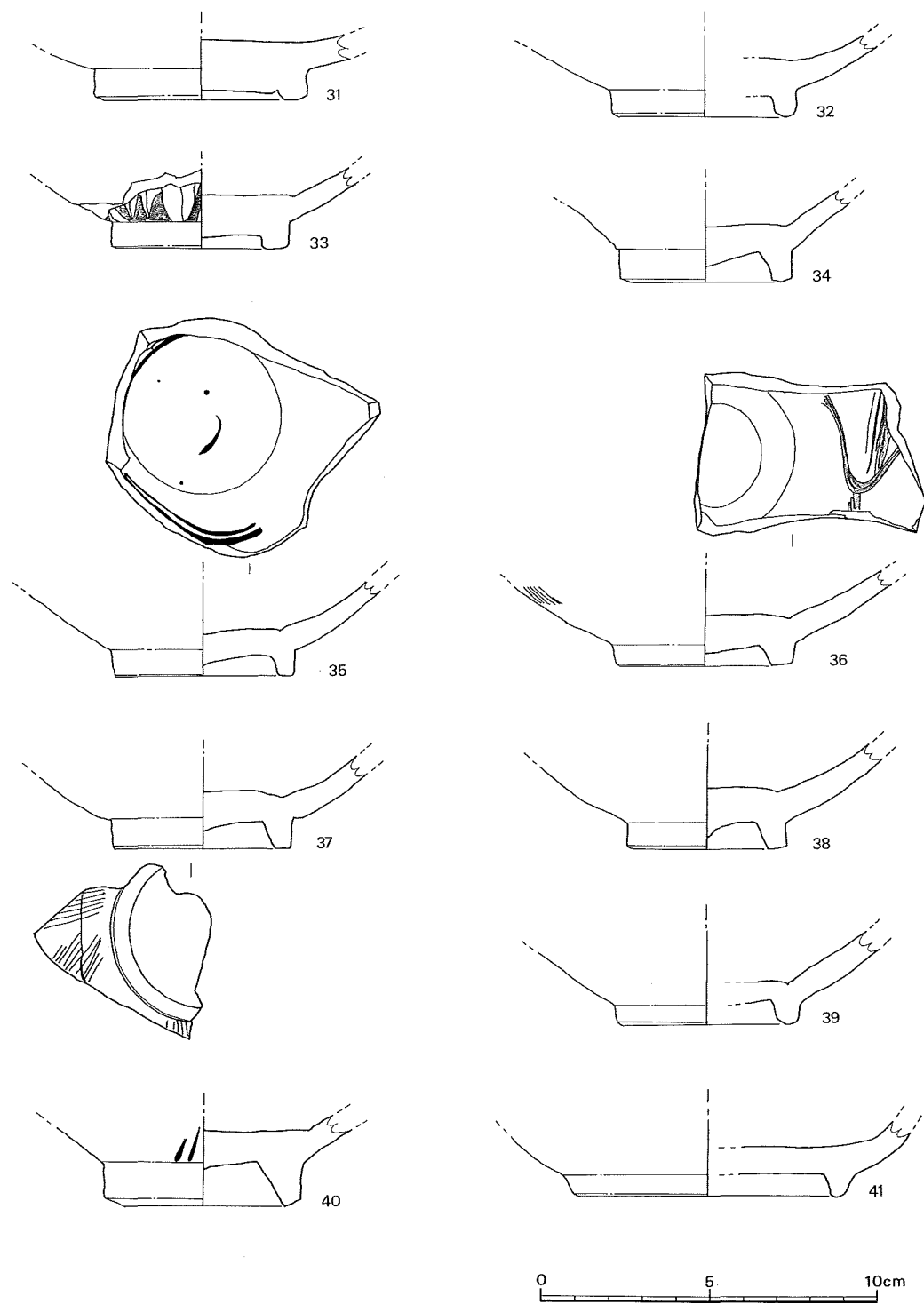


Fig. 77 青磁碗類底部



底部から湾曲し、口縁部で外反する。内面見込釉を輪状にカキとっている。高台は外面に明瞭な段が付き釉は体部中位まで付す。明るい青味を帯びた白色である。9は、内面見込輪状にカキとっている。色調は、黄色味を持った白色を呈する。10は、内面見込輪状にカキとる。外面は高台近くまで一部釉がかかり、比較的高い高台を有する。11は、外面底部の一部に釉がかかる。内面見込を輪状にカキとる。貫入が入り、灰色に近い白色を呈する。12は、外面の底部に一部釉がかかり、内面見込を輪状にカキとる。高めの高台を付す。13は、器肉の薄い皿で、内面見込を輪状にカキとる。外面の体部中位までは釉がかかる。灰白色を呈する。14は、内面見込を輪状にカキとり、高い高台を持つ。青味がかかった白色を呈する。15は、内面見込を輪状にカキとる。内底は黄茶色を呈し、内面は青味を帯びた灰色を呈する。外面の下半部まで施釉する。体部下半で屈曲する。16は、白磁皿のⅧ類で、体部中位で内湾する。胎土は灰白色を呈する。釉は、厚めにかかり、底部の釉は施釉後に削りとっている。内底見込に草花文様が彫られている。17は、平な底部をなし、底部にも釉がかかる。底部と体部の境に浅い段を持つ。内面全体に釉を施す。にぶい灰白色を呈する。18は、平な底部をなし、内面見込に浅い段がある。青味がかかった白色を呈する。19は、平な底部をなし、立ち上がりやや内湾みである。青味を帯びた白色を呈し、底部の釉は施釉後にカキとっている。20は、平な底部をなし、立ち上がり内湾みである。底部の釉は施釉後カキとっている。内底面に浅い段がある。青味を帯びた白色を呈する。21は、龍泉窯系Ⅰ-2にあたり、内底見込に櫛状のもので花文を描く。緑色の発色が強い。体部中位で屈曲し、外面の底部は焼成前に釉をカキとっている。22は、同安窯系Ⅰ-2にあたり、全面に施釉後底部の釉をカキとっている。体部中位で屈曲する。内面にヘラによる片彫りと櫛によるジグザグ文様を有する。23は、同安窯系Ⅰ-1で、体部中位で屈曲する。体部半部から底部には施釉されない。内底見込に片彫りとジグザグ文様を有す。24は、外面の残存部には施釉されず、内底に黄色味がかかった緑色を呈した釉がかかる。貫入が入る。25は、これも24と同様の色調を呈する。<sup>註2</sup>26は、天目碗の底部で、内面の釉は黒茶色をしている。外面の底部の色調は、須恵器の灰色に類似する。27は、合子の蓋にあたり、外面に蓮弁を配する。内面天井部に、青味がかかった白色の釉がかかる。外面には全面に内面と同様の釉がかかる。28は、<sup>註3</sup>合子の身にあたり、体部から下位には、施釉されない。内底から体部中位までは青味がかかった白色の釉がかかる。<sup>註4</sup>29は、28と同様の資料で、外面の釉が底部近くまでかかっている。30は、明の染付碗で、B群-1類にあたる。口縁端部に反りのある碗である。外面に文様を有す。この外にも染付皿C群の「基底」資料等13点出土している。31は、染付碗のC群-Ⅰ類にあたり、15世紀後半の「蓮子碗」の系統に属する。見込が高台内に凹む器形となる。高台内にも施釉される。外面の胴部に芭蕉葉文を描く。

以上に陶磁器類をあげたが、この外に朝鮮産陶磁器<sup>註5</sup>の9点の出土があっている。時期的には高麗中期から出現する象嵌青磁（第Ⅲ期・1147～1170年）で、緑青色の釉がかかり、黒土と白土によって文様が描かれている。また、国産品では、緑釉の陶器片が2点出土している。

小箇城跡

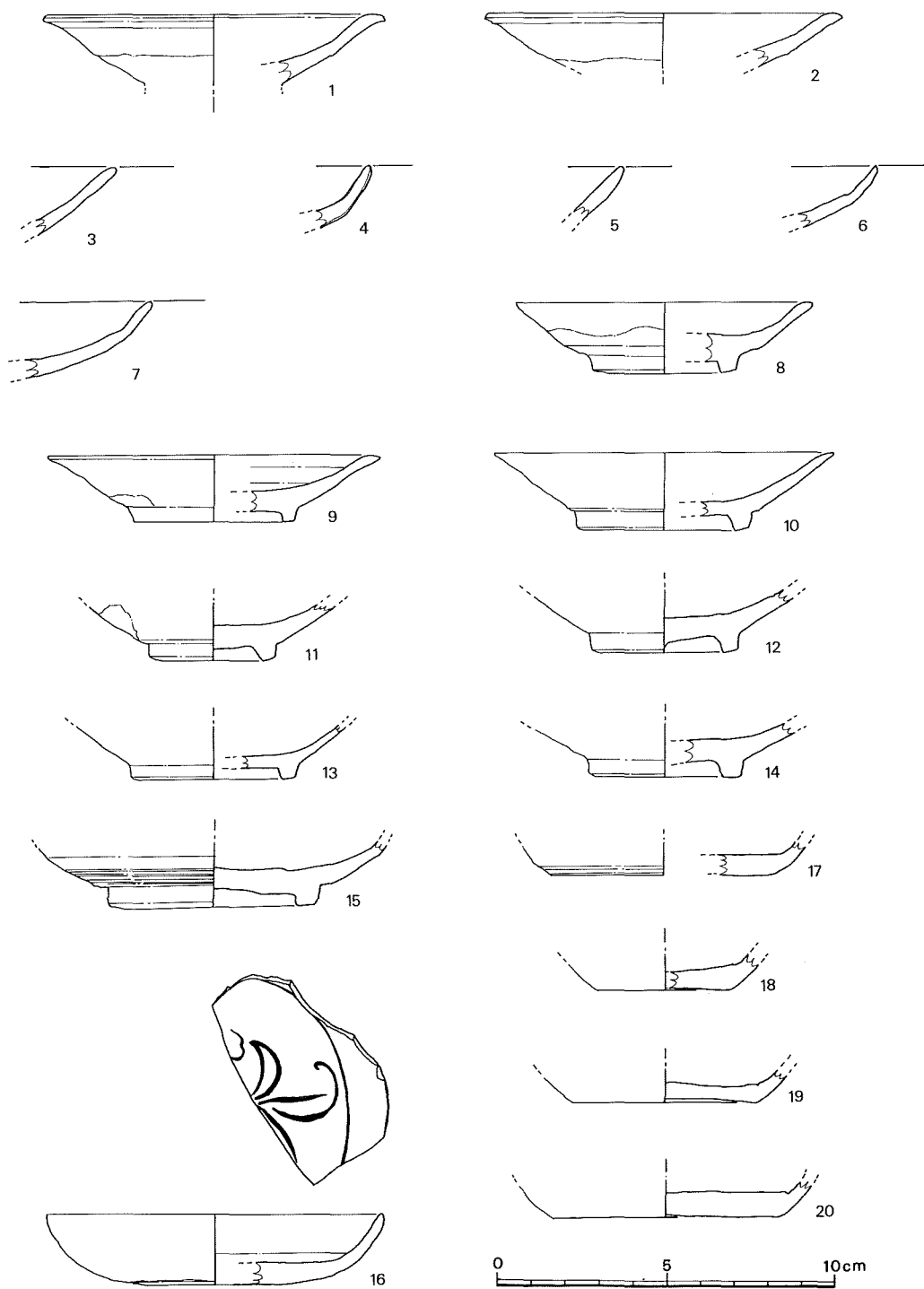


Fig. 78 白磁皿類

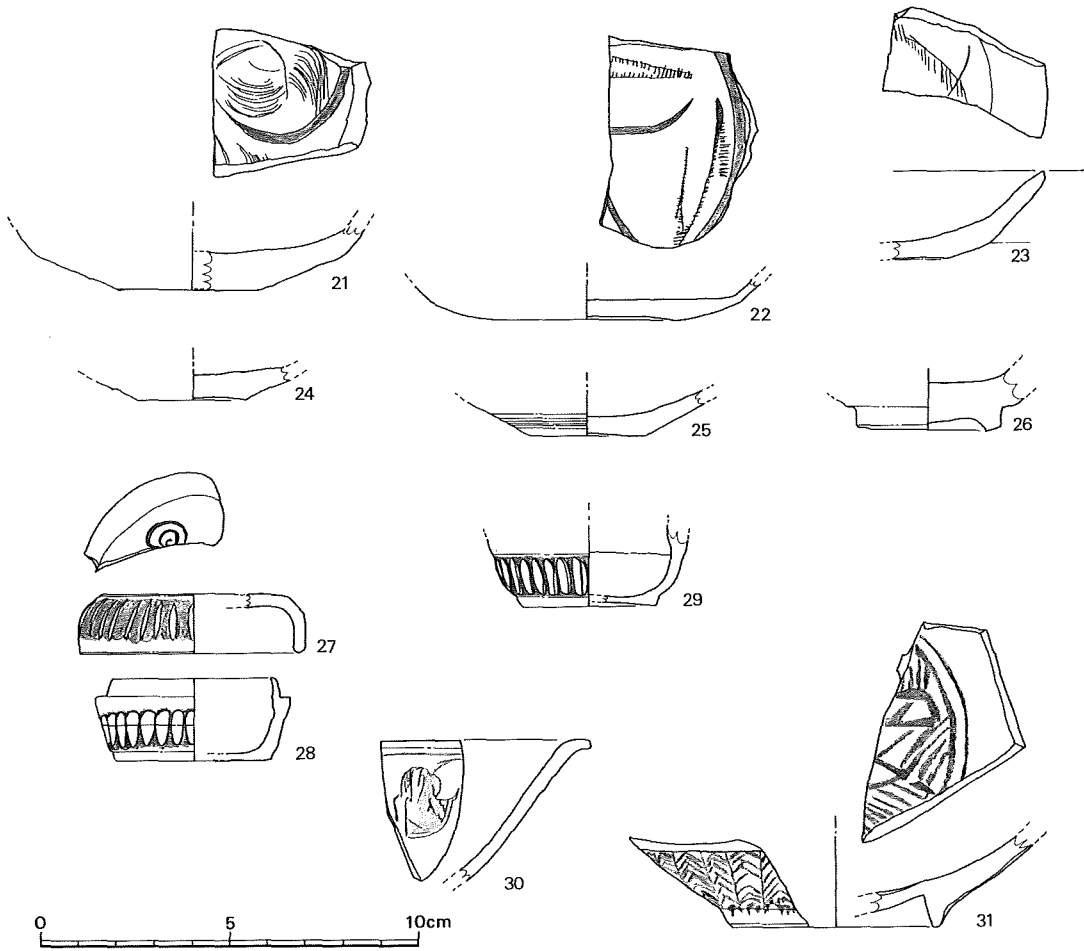


Fig. 79 青磁皿類・その他

32は、磁州窯系で元様式の花弁と龍の文様を配した壺である。淡黄灰色の粗い胎土に白化粧したあと頸部に黒色の鉄釉で5条の線を描き、底部近くには太い1条の圏線を引き2本と3本目の間に唐草文を配している。胴部には、龍の文様と対面して花卉文を大きく描く。釉は薄く黄色味がかった淡乳灰色で全面に施釉され、貫入が若干入る。畳付には、釉が流れて付着したままになっている。同様の資料が博多遺跡<sup>註6</sup>で出土している。(Fig. 80)



Fig. 80 磁州窯系陶器

## 土師器 (Fig. 81~Fig. 82)

遺構及び包含層より出土した、杯と皿を記載した。

1は、糸切底の平坦な底部で、底部から膨らみをもって立ち上がる。端部丸くおさめる。2は、厚みのある底部片である。糸切の跡が残る。3は、底部に糸切の跡が残る、内底部には、口口による整形痕がある。底部からの立ち上がり、内湾しながら口縁部へ延びる。4は、糸切の跡が残る、外面にヘラ状工具による整形痕が付く。底部からゆるやかに湾曲した立ち上がりをなす。5は、糸切底で底部から体部に移行しその境目に浅い段がつく。6は、55 Iの土壙墓より出土する。外面の風化が著しく、糸切の部分が不明である。底部の立ち上がりで内湾し、中位から外湾しながら口縁部へ移行する。口縁部やや膨らみをもち端部丸くおさめる。色調は、淡黄灰色を呈する。7は、47 Iの土壙墓より出土。底部より内湾し中位で外反する。口縁部に厚みをもち、端部尖りぎみである。8は、47 Iより出土。これも7と同様の器形をなす。平坦な底部と体部との境に段をもち、内湾しながら中位で外反する。淡赤褐色を呈する糸切底である。9は、48 Iの土壙墓より出土。平坦な底部と体部との境に段をもち、ゆるやかに外反しながら中位で内湾ぎみに口縁部へ移行する。器壁は、薄く、口縁部にやや膨らみをもち、口縁端部が尖りぎみとなる。10は、48 Iの土壙墓より出土。平坦な底部と体部との境に段をもち、外反しながら立ち上がり、口縁部でやや内湾ぎみとなる。淡黄赤褐色を呈している。11は、48 Iの土壙墓より出土。平坦な底部と体部との境に段をもち、ゆるやかに外反し、体部中位よりやや内湾ぎみとなる。口縁端部が尖りぎみで器壁が薄い。12は、46 Iの土壙墓より出土。平坦な底部と体部との境に段をもち、底部への移行部位に厚みが増し、直線的に口縁部へ移行する。端部は、丸くおさめる。淡黄赤褐色を呈する。

## 皿 類 (Fig. 81・13~33)

13は、糸切底から立ち上がりやや内湾し、口縁端部丸くおさめる。淡黄灰色を呈する。14は、底部より内湾し、口縁端部を丸くおさめる。赤褐色を呈する。15は、底部と体部の境に段を持ち、体部より内湾して、口縁部へ移行する。赤褐色を呈する。16は、淡黄灰色を呈し、底部よりやや膨らみを持って立ち上がる。口縁端部やや尖りぎみとなる。17は、底部と体部の境に段を持ち、厚みをもって内湾しながら、口縁部へ移行する。口縁部つまみ上げたように尖る。赤褐色を呈する。18は、底部より体部へ、内湾しながら移行し口縁端部が尖る。暗黄黒色の色調をなす。19は、底部より体部へ厚みをもって、内湾しながら移行する。口縁端部が尖る。色調は、黄灰色を呈する。20は、赤褐色の色調を呈し、底部より内湾しながら口縁部へ移行する。やはり端部が尖る。21は、20と同様である。22は、18と同様の器形色調を呈する。23は、比較的保存状態は良好である。底部からやや膨らみをもって、口縁部へ移行する。端部が尖る。24は、23と同様に保存状態は良好である。底部から口縁部へやや直線的な丸味をもって移行する。口縁端部がかなり鋭角になる。25は、淡黄赤褐色を呈する。底部と体部の境に段をもち内湾ぎみに立ち上がる。26は、底部と体部に段を持ち内湾ぎみに立ち上がる。暗赤褐色を呈する。

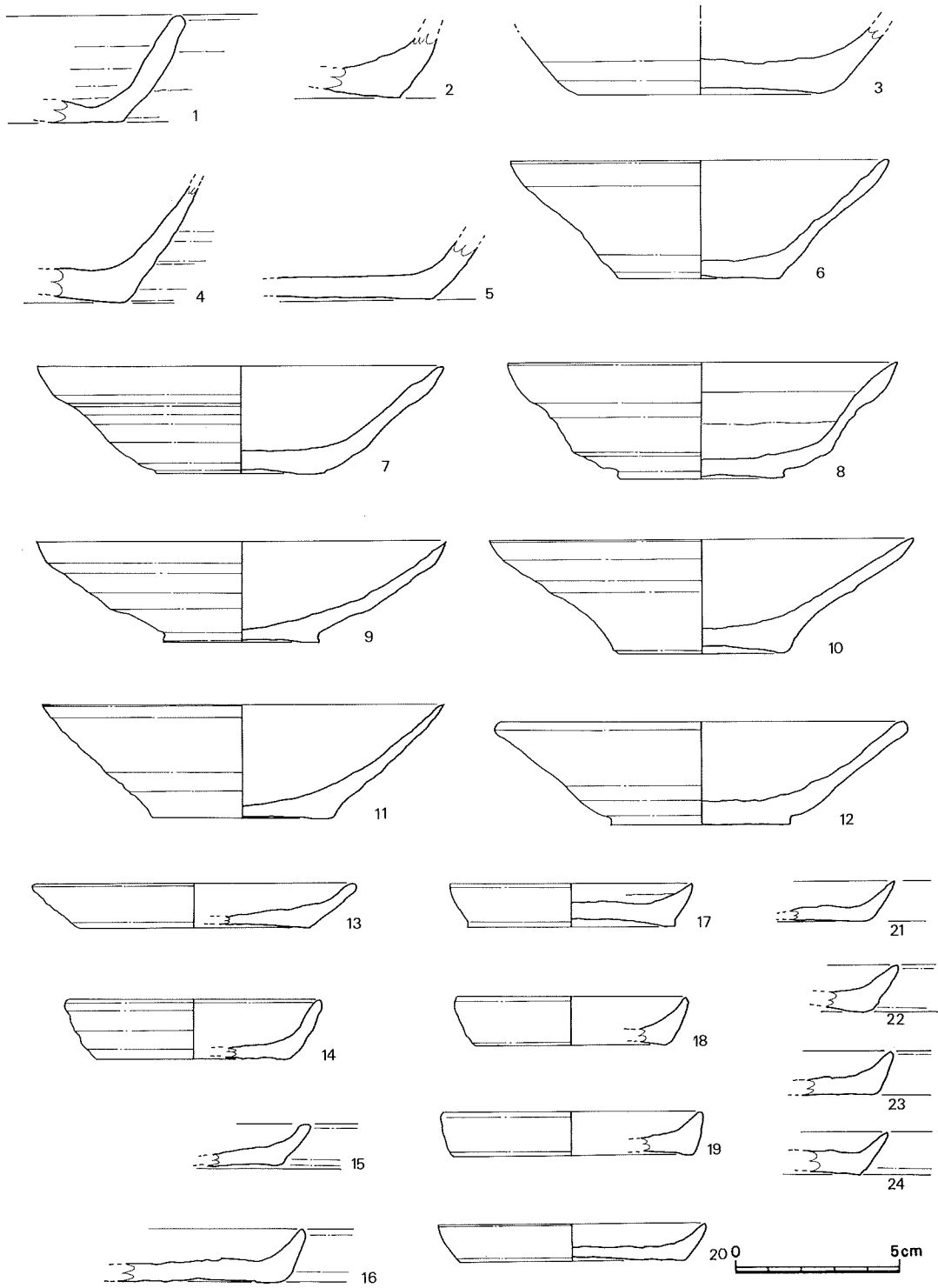


Fig. 81 土師器の杯と皿

27は、底部と体部に段を有し、内湾ぎみに立ち上がる。口縁端部を丸くおさめる。28は、底部と体部に段をもち、湾曲しながら口縁部へ移行する。器壁薄く、端部を丸くおさめる。29は、55Iの土壙墓より出土。杯と同様の色調を呈する。底部と体部の境に段を有し、湾曲しながら口縁部へ移行する。端部は丸味を持つ。30は、底部と体部の境に段を有し、体部中位で内湾しながら口縁部へ移行する。赤褐色を呈する。31は、底部と体部に段を有し体部の中位で内湾する。32は、糸切底の底部をナデている。体部中位で湾曲する。33は、底部と体部に段を有し、体部中位で湾曲する。淡赤褐色を呈した色調をなす。

#### 東播系の鉢 (Fig. 82・34~44)

34は、口縁端部をつまみ出したような、形状を呈する。色調は暗灰色を呈する。35は、口縁部が玉縁状に厚みをもち、端をさらに一段つまみ出している。内面に細い沈線が一条入る。黒灰色を呈する。36は、35と同様の玉縁状の口縁部を有し、外面に浅い沈線を施す。暗灰色を呈する。37は、口縁部の両端をつまみ出した形状を呈する。灰色の色調をなす。38は、やや口縁部が縦長に両端をつまみ出す形状を呈する。色調は、明灰色を呈している。39は、口縁端部を側面より押し潰したような厚みをもっている。40は、39と同様の口縁部を呈する。41は、口縁端部が尖りぎみのもので、色調は暗灰色を呈する。42は、口縁端部が厚めで、尖りぎみのものである。色調は、灰色を呈する。43は、東播系土器の底部である。底部より丸味を持って立ち上がり、灰色の色調を呈する。44は、43と同じく鉢の底部である。胎土が粗く5mm前後の石粒が混入している。底部と体部の境に段が付く。灰色を呈した色調をなす。54は、壺形土器の口縁部である。暗灰色を呈する。55も、54と同様の資料で、灰色を呈する。

#### 瓦質土器 (Fig. 82~Fig. 84)

45は、瓦質の鉢で口縁端部が肥厚する。内面にハケ目が残る。暗黄灰色を呈する。46は、口縁端部に厚みもちながら丸くおさめる。内面ハケ目が残る。暗黄灰色の色調を呈する。47は、口縁端部が平坦で、口縁部に厚みを持つ。中位でやや外反する。外面は、黄灰色で、内面は黒灰色を呈する。摺目をもつ。49は、鉢の底部で、内面にハケ目が残り、外面に一条の浅い沈線を付す。淡黄灰色の色調をなす。51は、瓦器の碗で、体部上位で内湾し、口縁部丸くおさめる。内外面灰黒色を呈する。53は、茶釜で、ほぼ直立した口縁部を有し、口唇部内側から傾斜する。色調は、内面が灰黄色を外面が黒黄色を呈する。58は、片口鉢で内外面の風化が激しい。口縁端部を平坦になす。内外面は淡黄黒色を呈する。59は、口縁部が内側に張り出す火鉢である。菊花文を頸部と体部の上位及び下位にスタンプしている。また、体部上位には円孔を穿っている。60も、火鉢の口縁部で、端部が内湾し菊花文を付している。61は、口縁部を欠く火鉢で、菱形文を描く。

#### 須恵器系の土器 (Fig. 83)

48は、須恵器系の底部である。外面に格子目のタタキが入る。底部から直線的に立ち上がる。底部は平底となる。50は、杯で、焼成甘く、口縁端部を丸くおさめる。57は、口縁部を「く」

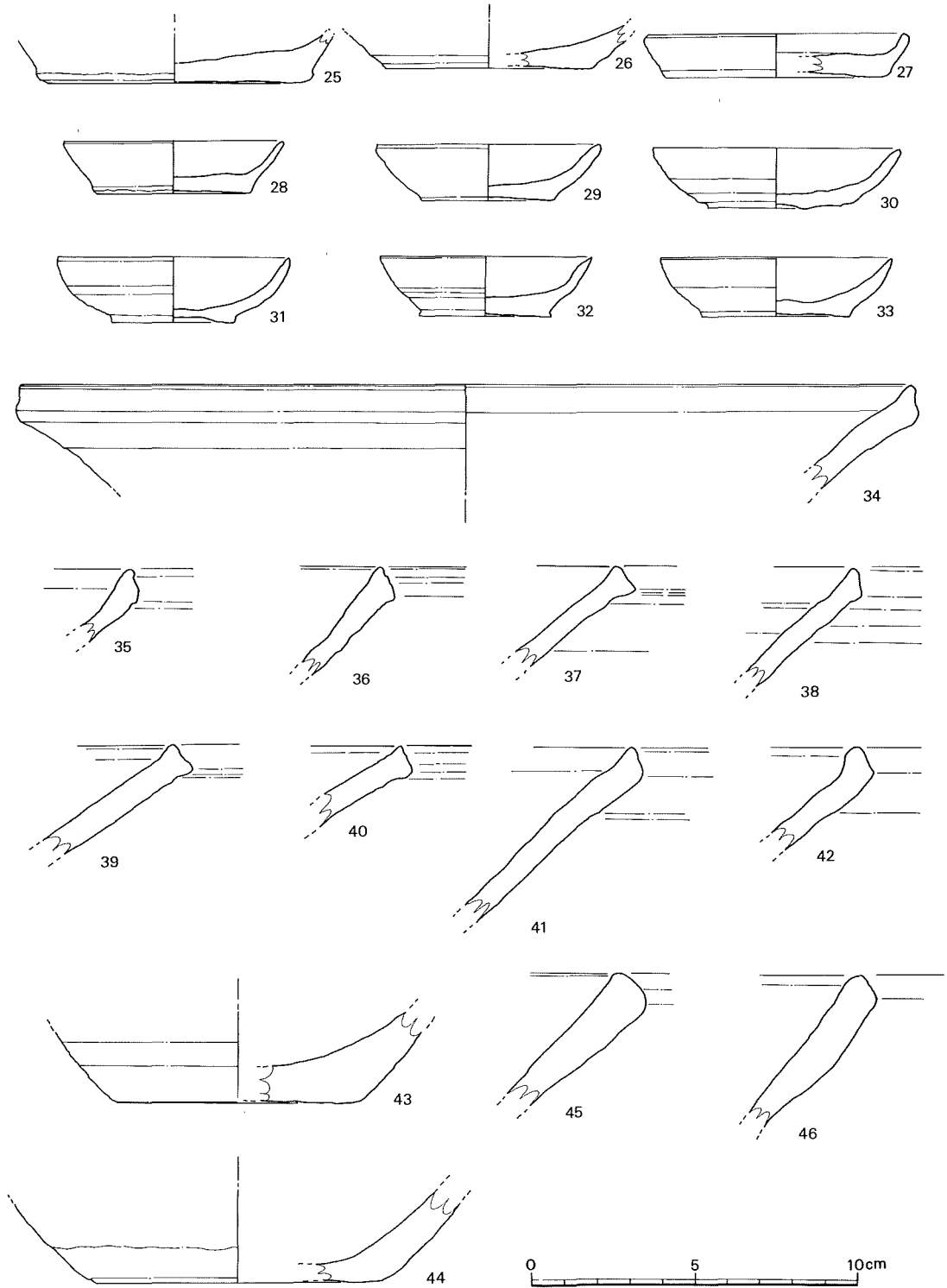


Fig. 82 土師器の皿・東播系の鉢・瓦質土器



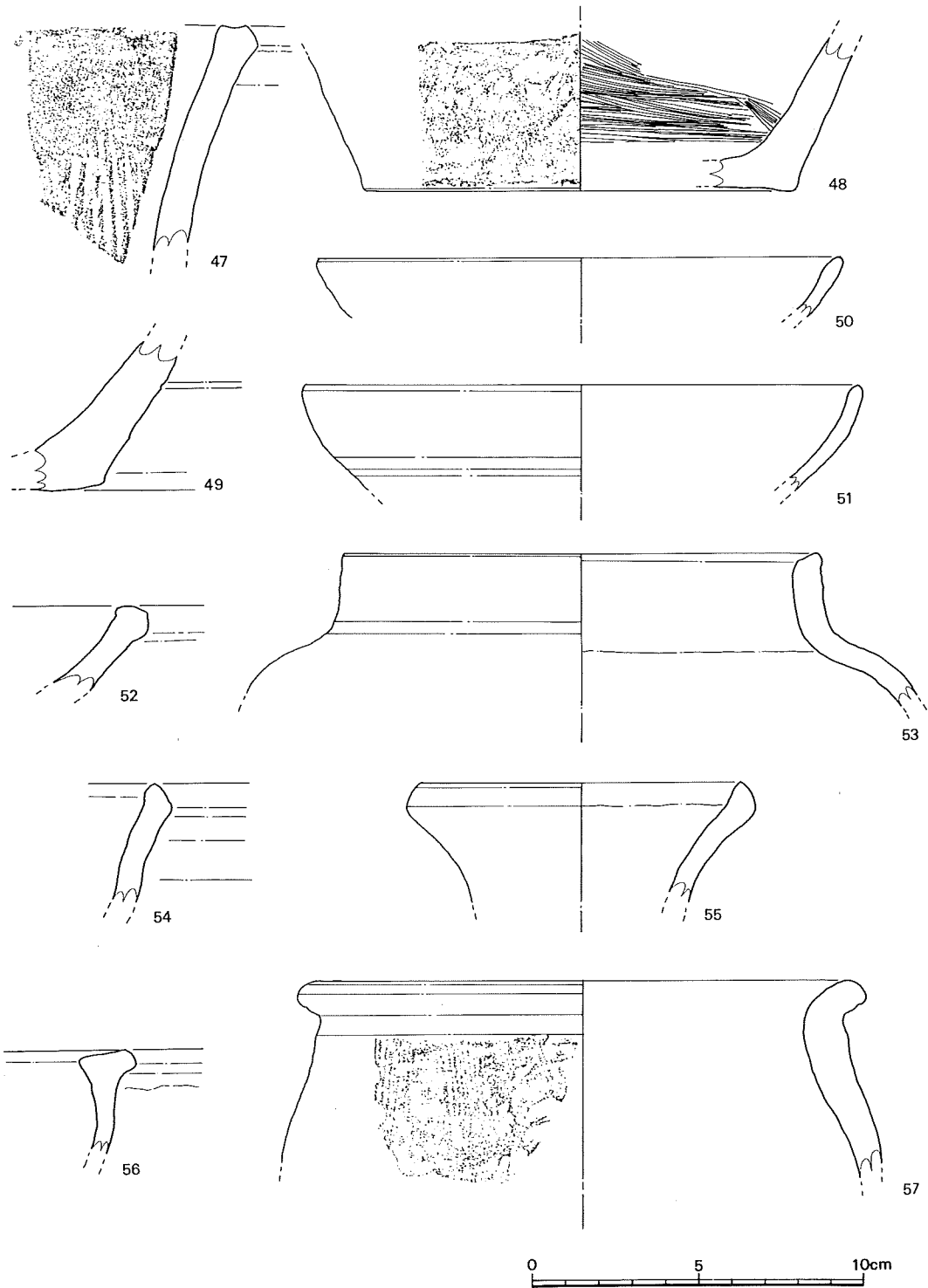


Fig. 83 瓦質土器・須恵器系土器・輸入陶器

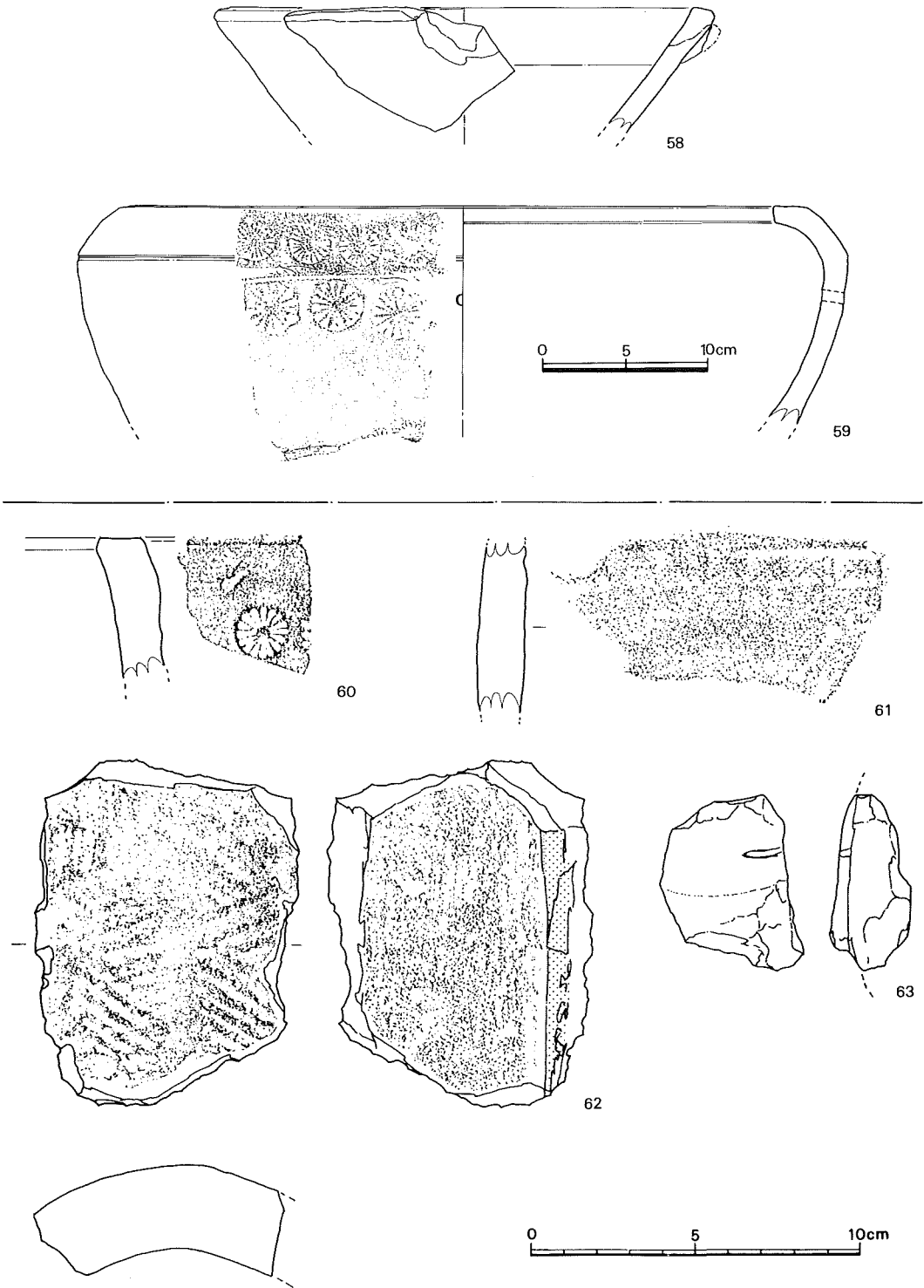


Fig. 84 片口・火鉢・瓦・ふいごの羽口

の字形に外反させる。外面に格子目のタタキを有すした甕類である。

#### 輸入陶器 (Fig. 83)

52は、赤味を帯びた灰色を呈する陶器である。口縁部に厚みをもつ。鉢あるいは蓋になるものであろう。56は、T字口縁の甕で茶褐色の釉がわずかに残る。

#### 朝鮮系瓦 (Fig. 84)

62で、これは129頁に正林 護 氏よりの最近の出土例の報告と併せてして記載している。

#### ふいごの羽口 (Fig. 84)

63は、鉄かすと同地区から出土している。

#### 滑石製品 (Fig. 85~Fig. 89)

これには、石鍋・バレン状製品・不明穿孔製品・錘等が出土している。

#### 石鍋<sup>註7</sup> (Fig. 85~Fig. 86)

1は、鏝を有しない製品で口縁部を内湾させている。外面に三段の稜があり、これの間にノミ削り痕がある。口唇部は水平をなしている。2は、幅1.7cm程の鏝を有するもので、口縁部が内湾する。鏝の部分にはノミの調整痕が残る。3は、鏝を持たないもので、口縁部下に円孔を穿つ。4は、口縁部が内傾ぎみの資料で、口縁端部は水平面をなす。5は、鏝が口縁部と同じ位置にある。6は、やや内傾ぎみの口縁部をなす。青味を帯びた滑石を使用。7は、内傾ぎみの口縁部をなす。端部は水平になる。8は、石鍋の鏝を再加工したもので、そのノミ痕を残す。9は、口縁部の断面が薄く削り出され尖りぎみとなっている。10は、9と同様に口縁部を尖りぎみに削り出されている。これをさらに再度加工して、左側縁にエッジを付けている。11は、丸味をもった浅い鏝を有する。12は、鏝の幅が厚いもので、口縁部やや内傾ぎみである。13は、鏝の部分を削りとって、転用している。14は、口縁部と鏝との間にちいさな円孔を穿っている。15は、内湾する口縁部をなし、細みの鏝を付す。16は、石鍋底部片で、底部から直線的に立ち上がる。17は、口縁部が直線的に延びるもので、鏝の幅が狭くなり、鏝と口縁部との間に浅い沈線が入る。18は、口縁部やや外反ぎみである。鏝が細くなる。19は、鏝が細くなり、口縁端部が丸味をもつ。20は、直線的な口縁部となり、鏝の厚みがなくなる。

#### 石鍋再利用品 (Fig. 87~Fig. 88)

21は、中央に0.8cmの深さの穿孔と、上部に切り込みの溝が付く。また、両側面には、金属器による切口がある。22は、結晶片岩の上部に抉りがはいる。23は、バレン状製品で中央部につまみ状の凸起を作出する。24は、右側縁に鋭角な抉りが入る。表面は、丸味をもった整形を施している。25は、バレン状製品で、中央部につまみ状の凸起に円孔を穿っている。26は、25と同じく、バレン状製品。中央部につまみ状の凸起に円孔を穿っている。27は、同じく、バレン状製品。中央部につまみ状の凸起部を円形に作り出す。28は、27と同様の形態をなす。凸起部が前出より大きくなる。29は、上部と側面部から円孔を穿っている。30は、石鍋の鏝の部分に内面より円孔途中で終えているものである。上端は、金属器によって切断され、下端は、欠損

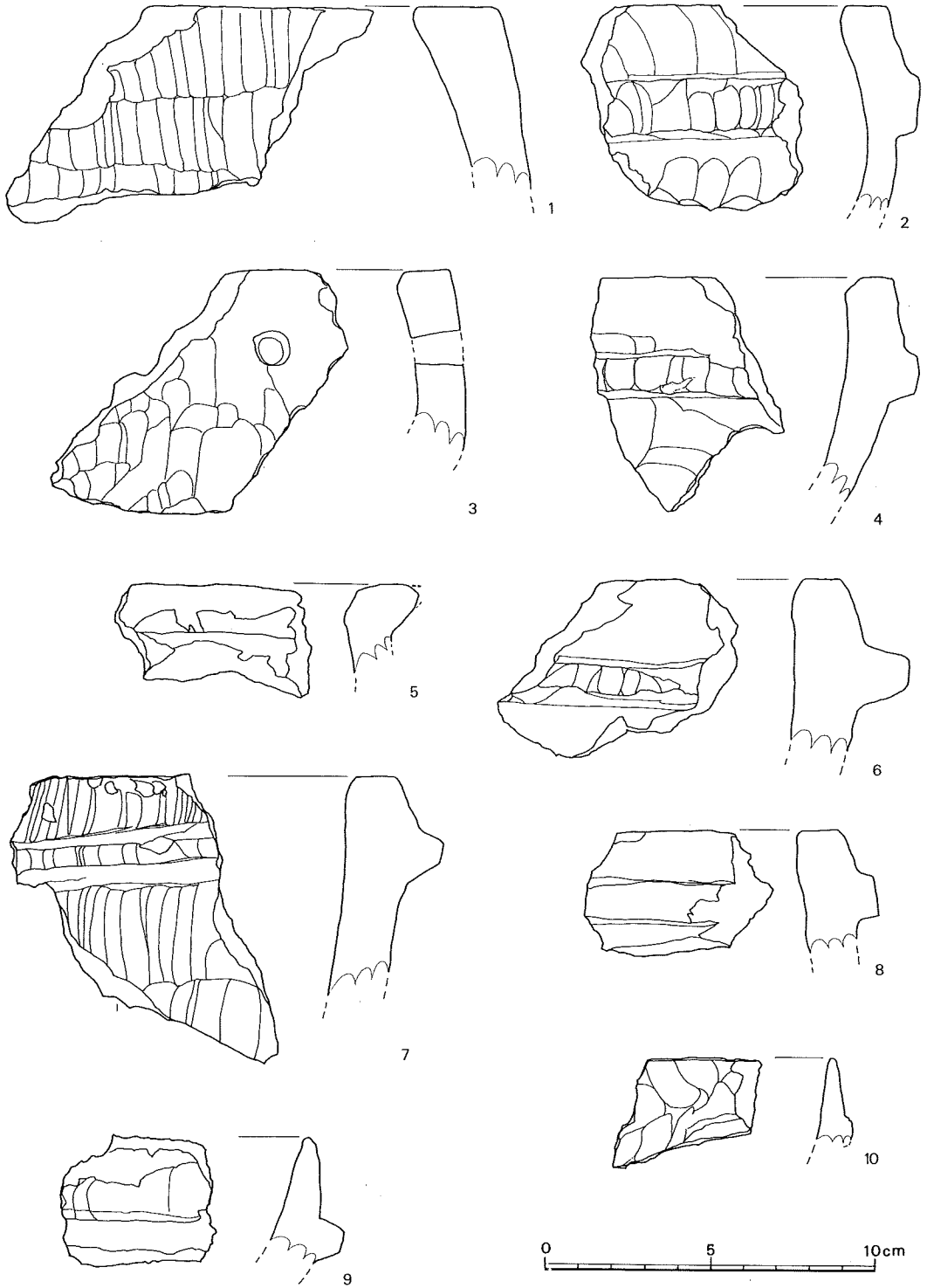


Fig. 85 石鍋

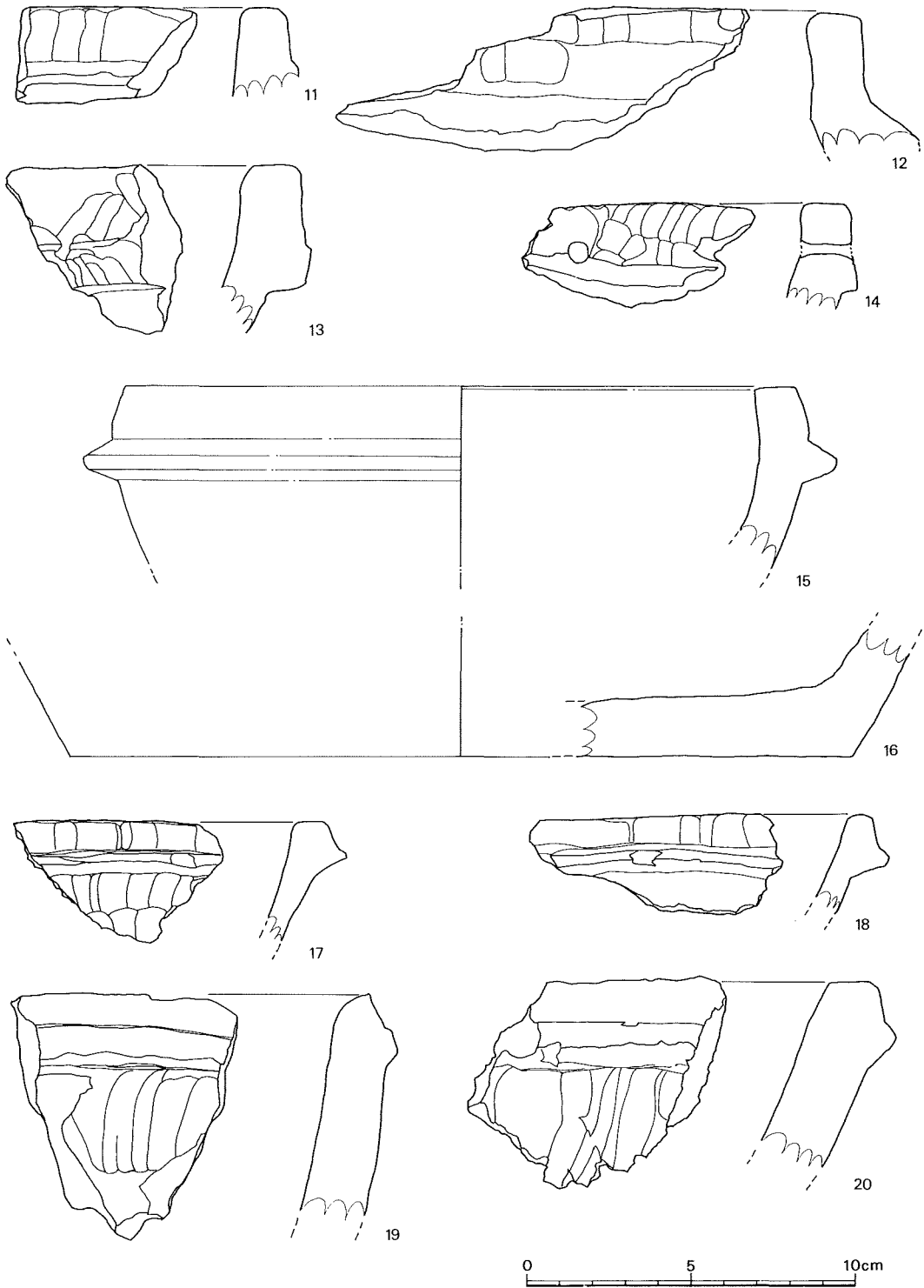


Fig. 86 石鍋

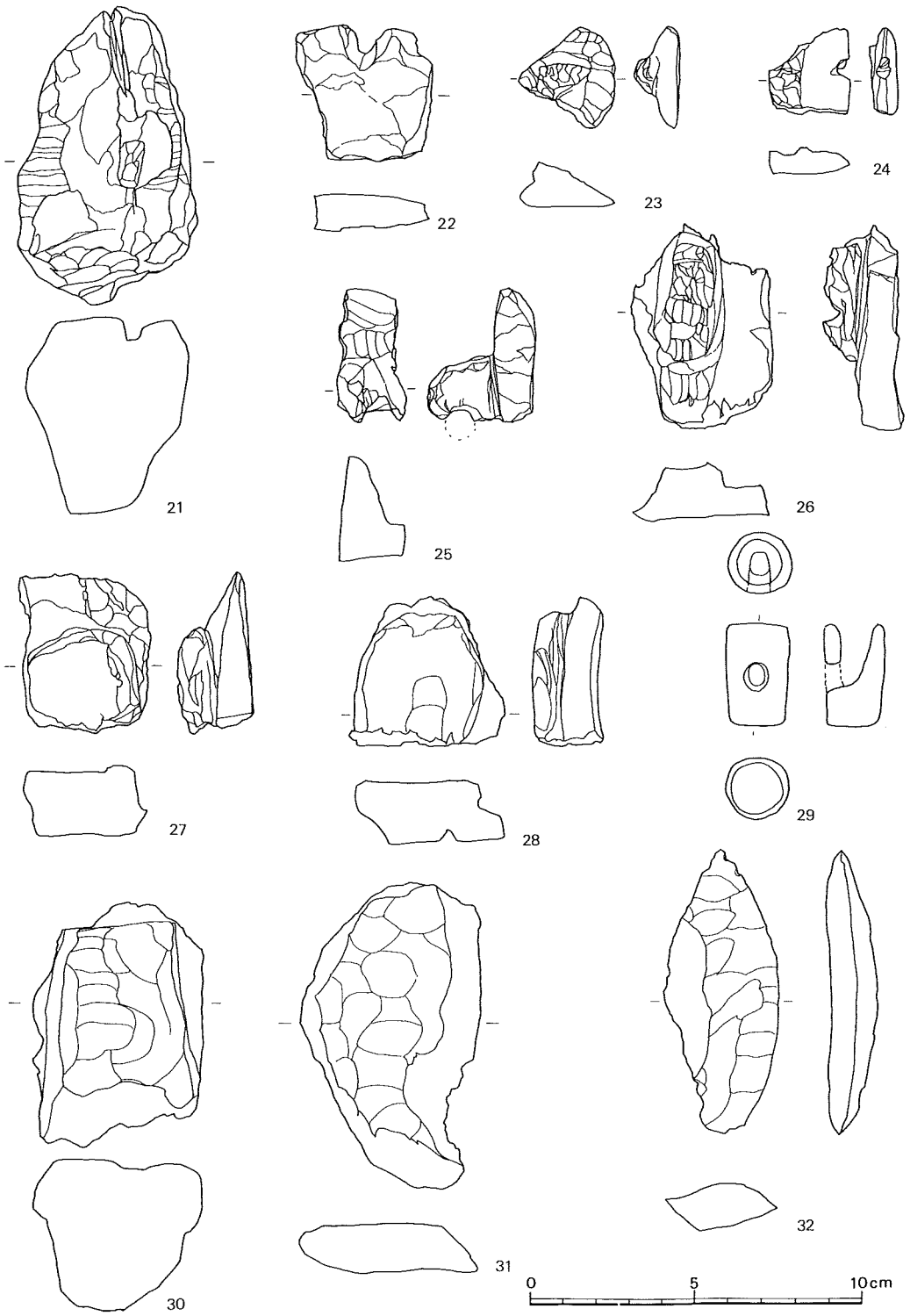


Fig. 87 滑石製品

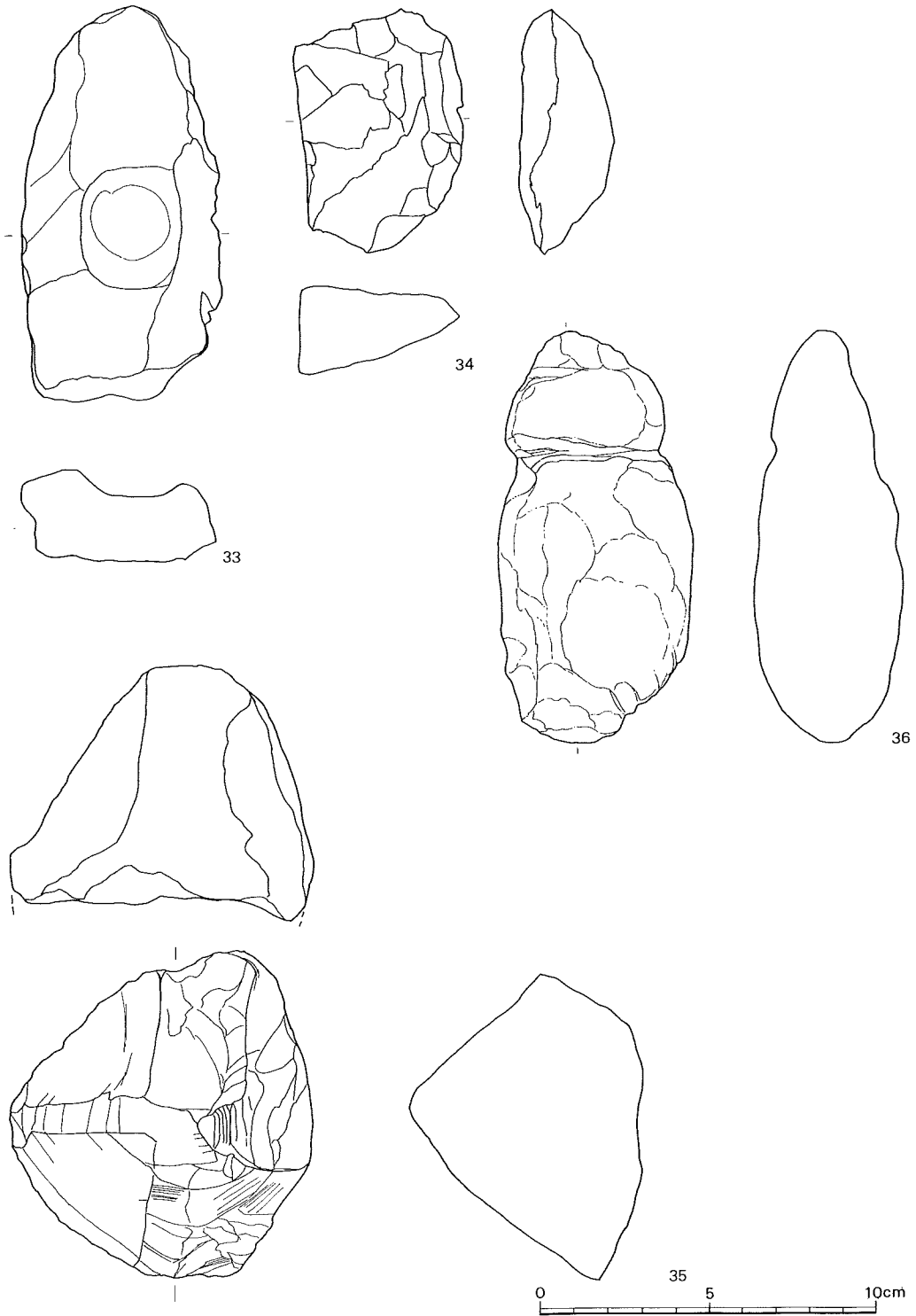


Fig. 88 滑石製品・異形石器

する。31は、石鍋の底部を再度加工したもので、側辺にノミ痕調整がある。32は、これも、31と同様の資料で、細かくノミ整形を側辺に施している。33は、中央に円孔をもつ。周辺は、欠損する。34は、両側面にノミ整形を施す。35は、滑石を面取りして円錐形となし、この面を金属器で切り込みを入れている。

#### 異形石器

36は、安山岩にくびれを入れた資料で上部の近くに切り込み状の溝が一周し、下部の近くにも切り込みが一部付されている。

#### 滑石製の石錘 (Fig. 89)

楼楷田遺跡<sup>註8</sup>で分類を行っているので、これに従って記述すると、1～13が長軸に溝を一周巡らすもの。14のみが、長軸に一か所と短軸に三か所の溝を一周巡らしている。

#### 縦長の調整加工ある製品

15は、体部中央より上位に抉りが入り、上部端を十文字に切り込みを入れている。16は、上部端から下位へ浅い切り込みが入るが、途中でとぎれる。17は、上部端に切断の痕跡が残る。

#### 須恵質系の把手 (Fig. 89)

18は、周辺にヘラ状の工具で、整形した後に指によって押えとなを施す。色調は、灰色を呈する。

#### 土 錘 (Fig. 89～Fig. 91)

83点の出土がある、赤褐色ないしは黄褐色・黒色を呈する。いずれも欠損品のため内径で形態を推測すると、内径が4mm以上あるものが、19・23・27・36・39・41・47・54・59・65・73・76・77・84・85・86・94・95・98にあり、比較的の内径の大きくなるものが長軸・短軸とも比例して大型化していく傾向にある。

#### 大型石製品 (Fig. 92)

1は、安山岩を石材にし、上面を正方形にくり凹めている。側面には、幅2cmの溝を巡らしている。2は、板上の緑色滑石に、両側面より削り込みを行う。左側縁部は、火を受けたためか、煤の付着がある。3～5は、緑色滑石の石材を利用した五輪塔の部分品である。3が空輪・風輪、4が水輪、5が地輪にあたる。

(町田)



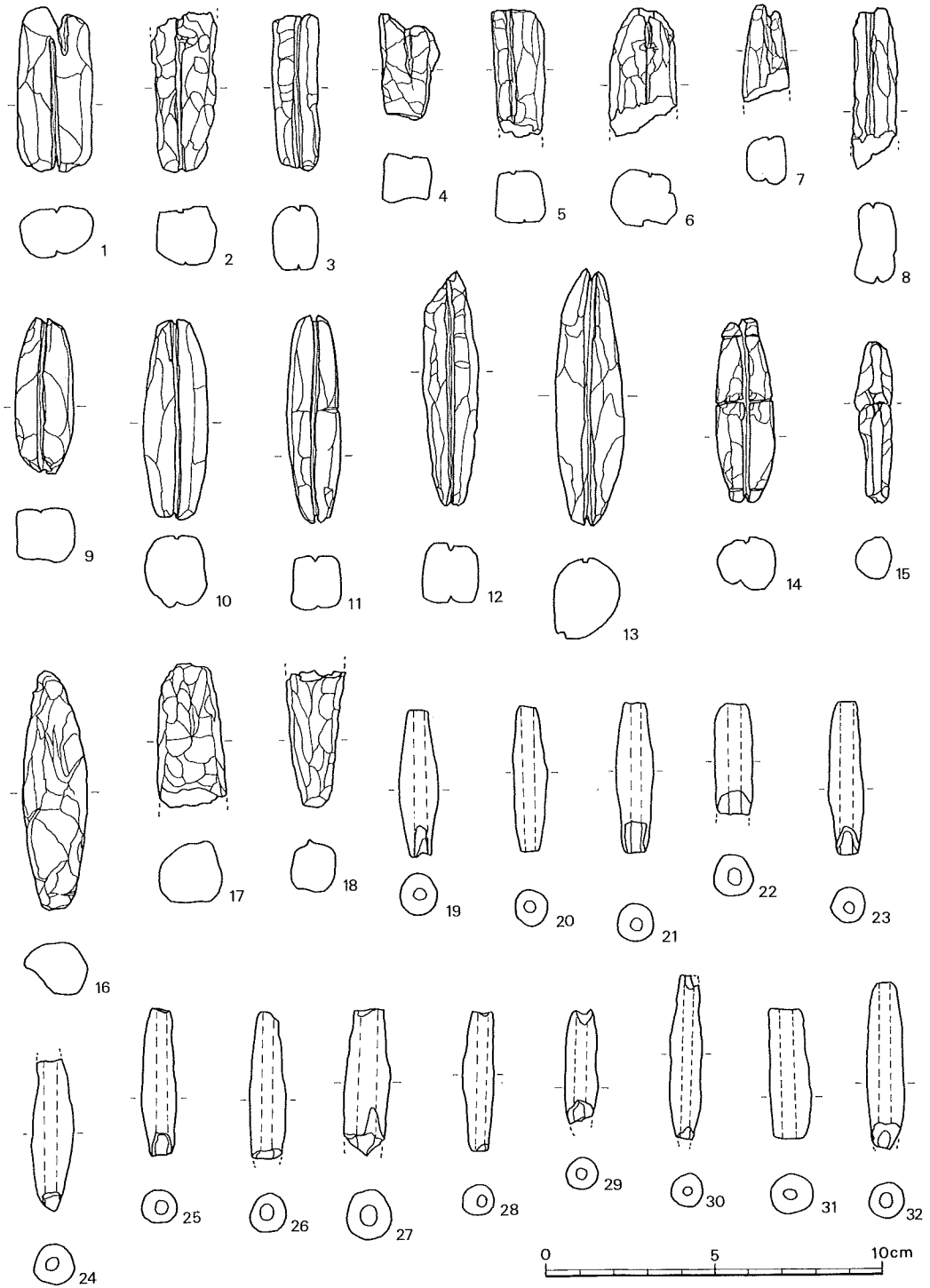


Fig. 89 滑石製石錘・土錘

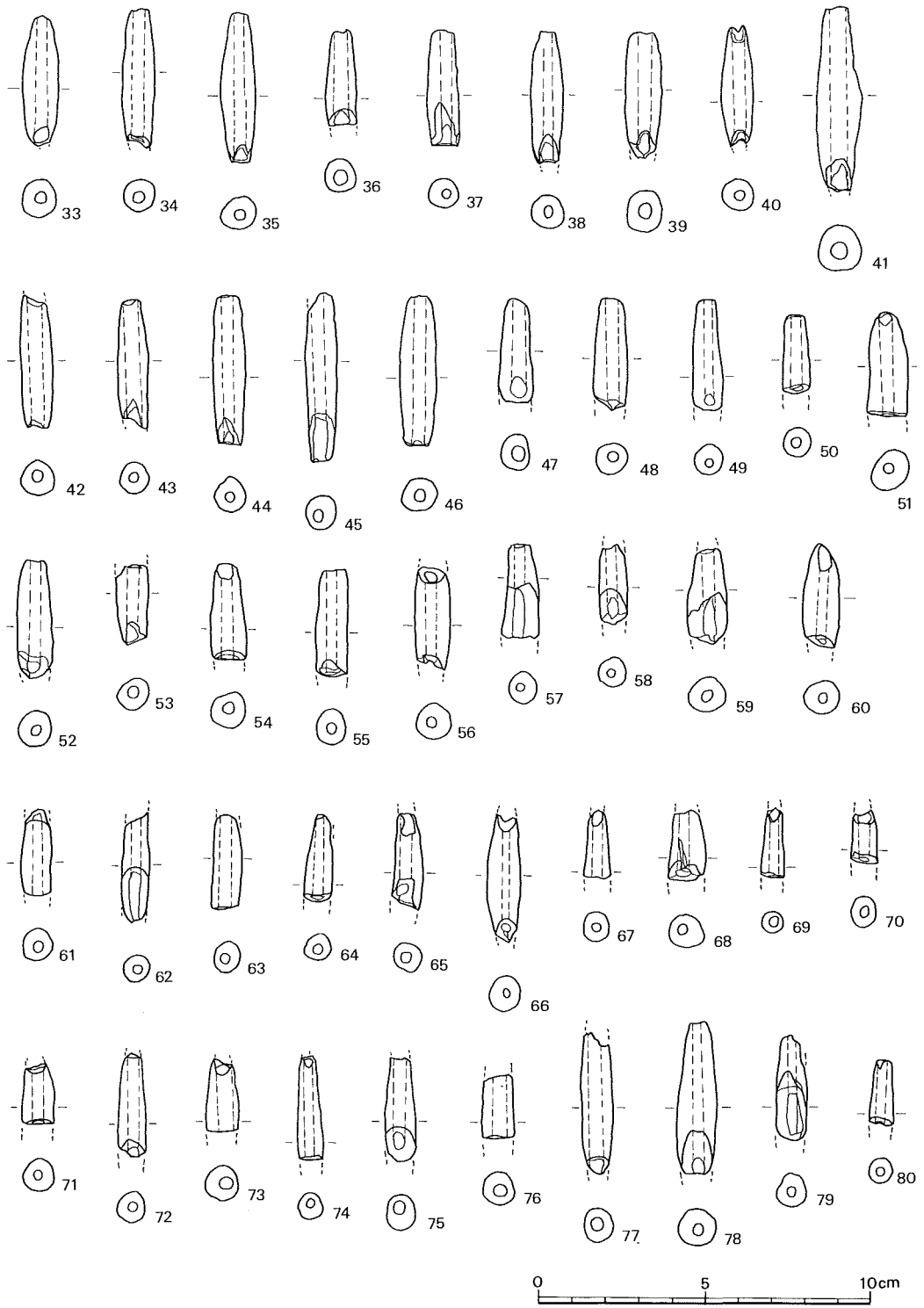


Fig. 90 土錘

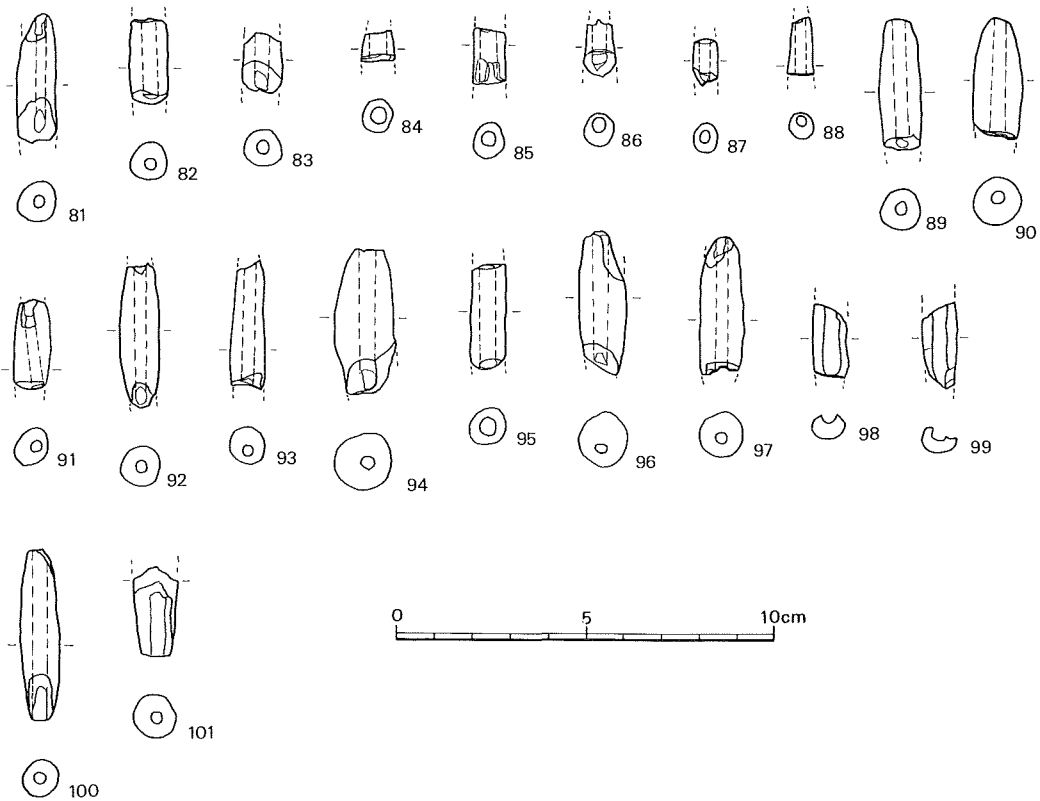


Fig. 91 土 錘

- 註1 横田賢次郎・森田 勉「太宰府出土の輸入中国陶磁器について」一型式分類と編年を中心として—  
『研究論集 4』九州歴史資料館 1978
- 註2 県文化課 宮崎貴夫氏より教示
- 註3 註2に同じ
- 註4 小野正敏「15, 16世紀の染付碗, 皿の分類とその年代」『貿易陶磁研究 No. 2』  
日本貿易陶磁研究会 1982
- 註5 西谷 正「九州・沖縄出土の朝鮮産陶磁器に関する予察」『九州文化史研究所紀要』第28号  
九州大学九州文化史研究施設 1983
- 註6 『博多 VIII』—博多遺跡群第29次調査の概要—福岡市埋蔵文化財調査報告書 第148集  
福岡市教育委員会 1983
- 註7 森田 勉「滑石製容器—特に石鍋を中心として」『佛教藝術』148号 毎日新聞社 1983
- 註8 町田利幸「(4)滑石製品」『楼厩田遺跡』—松浦火力発電所建設に伴う埋蔵文化財調査—  
長崎県文化財調査報告書 第76集 長崎県教育委員会・松浦市教育委員会 1985

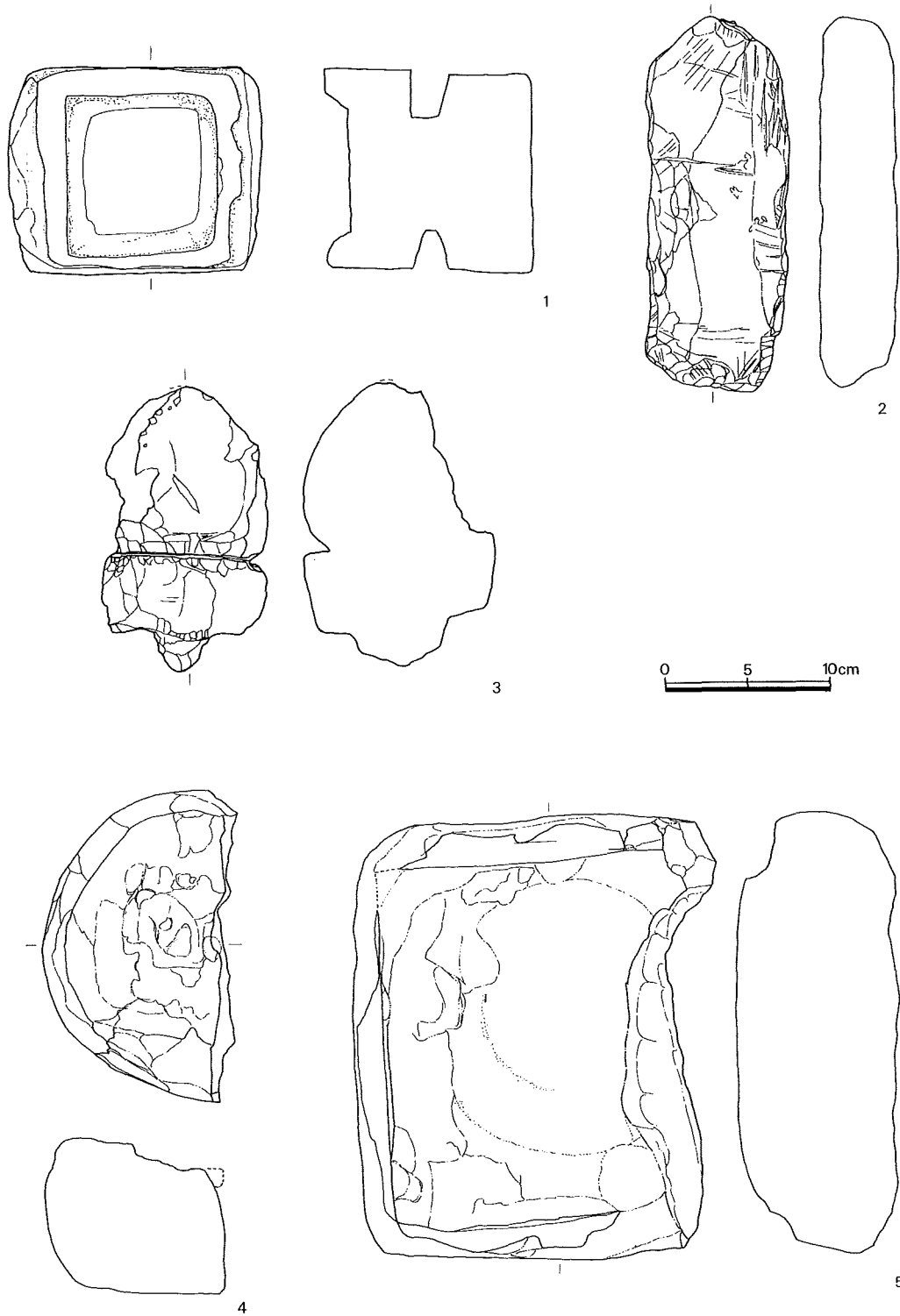
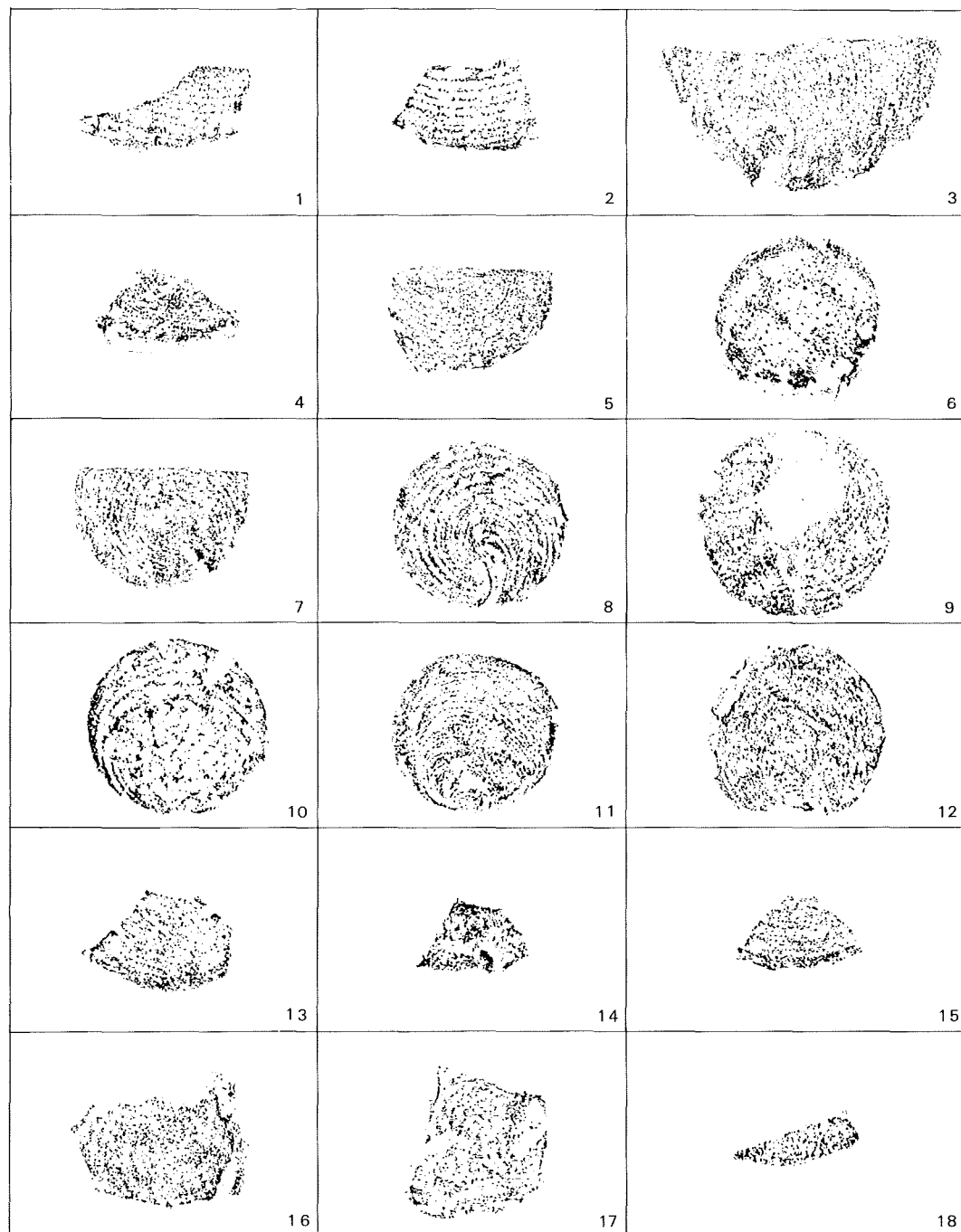


Fig. 92 大型石製品



0 5 10cm

Fig. 93 土師器糸切底拓影

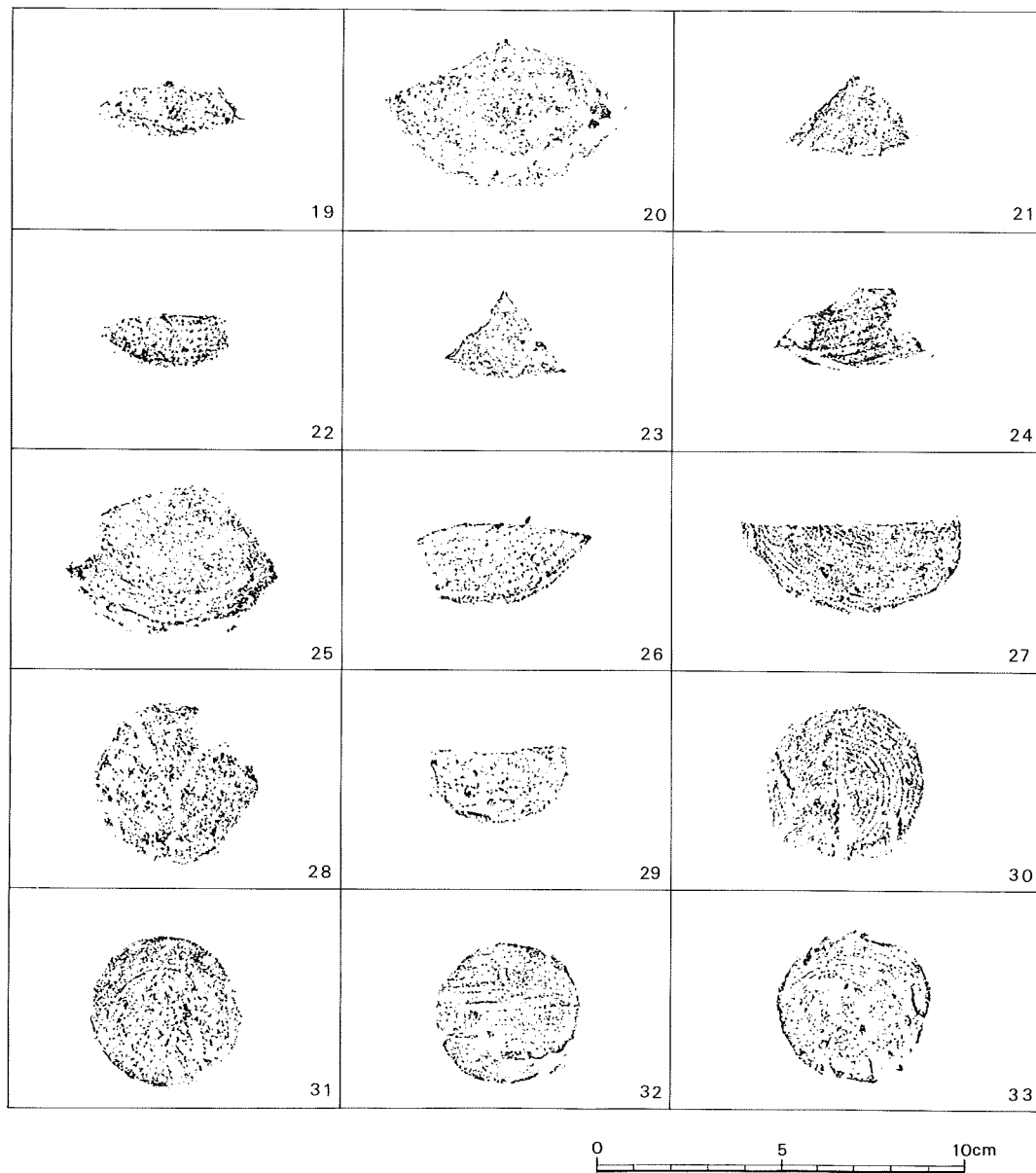


Fig. 94 土師器糸切底拓影

## ⑤ 朝鮮系瓦 (Fig. 84・95-99, PL. 68)

## 資料の概況

小蘭城跡において、朝鮮系瓦<sup>註1</sup>の小片が1点出土した。発掘担当者によれば土壌（性格不明）から江戸時代後期の磁器片とともに出土している。長さ約10cm、幅約8cm、厚み2.5cmの小片で細部の形状と規模を窺うことは困難であるが、断面からして丸瓦であることは確実である。また、表の叩き文様の上半分が幅5cmほど消えている状況からして、玉縁に近い部位あるいは下端ないし瓦当面に近い部位であろう。また、左図の左側面（右図の右側面）に、焼成後2分割するための模骨の鱗の跡（幅8mm）が残っているので、本資料が桶巻きによって製作されたことも確実である。胎土は精良でごく少量の石英を混入している。全体に固く焼きしまり青灰色の表面は須恵器を思わせる。凹面は布目の圧痕があり、凸面は綾杉状の文様の叩板で縦に連続して叩きしめた文様がある。

## 形状等の推定

小蘭城出土資料自体から旧状全体を確定することは困難であるが、対馬等で出土した類例資料の完存例から小蘭城出土資料の旧状を推定復元してみよう。

(1) Fig. 95-2は長崎県下県郡厳原町（対馬の南部）にある金石城出土の軒丸瓦で、1528年（享禄元）以前とされる資料である。本体の長さ39.5cm、幅20.5cm、厚み2.8cm、重さ4,770gを計り、瓦当面の重量を勘案すれば、4kg程度の重さであろう。凸面に青海波様の叩き文様をもち、凹面は布目圧痕のある玉縁瓦で固く焼きしまり、自然釉がかかっている。側面に高さ8mmの分割模骨の跡が残っており、桶巻きで作られ2分割されたことが分かる。

(2) Fig. 97の丸瓦は、同じ対馬の北部上県郡上県町伊那久比神社発見の丸瓦で、長さ42.5cm、幅15.3cm、重さ4,160gの資料である。桶巻き2分割の跡を側面に残している。凸面に青海波叩き文様、凹面に布目圧痕が残っている。

(3) 沖縄県浦添市浦添城出土の綾杉状叩き文様の「大天」銘の玉縁瓦も類似の資料と考えられ、「14～15世紀初頭」、<sup>註3</sup>「長さ42.6cm、横幅16.5cm、重量3.28kg」<sup>註4</sup>とされている。

ほぼ完存したこれらの資料と比較してみると、小蘭城の瓦小片は、凸面と叩き文様と凹面の布目圧痕の状態からして朝鮮系の玉縁丸瓦であることが確実である。

## 叩き文様

この種の瓦については今のところ出土地も限られ出土数量も多くないが、叩き文様の種類は多い。今のところ対馬に種類が多く、その一部をFig. 99に示したが、この他にも丸瓦で10種、平瓦で7種の叩き文様が上県郡鰐浦の場合認められる。叩き板の文様は現在でも韓国で作られ続けているので、種類を集成するのは容易でなく、文様の変遷研究にいたっては今のところ

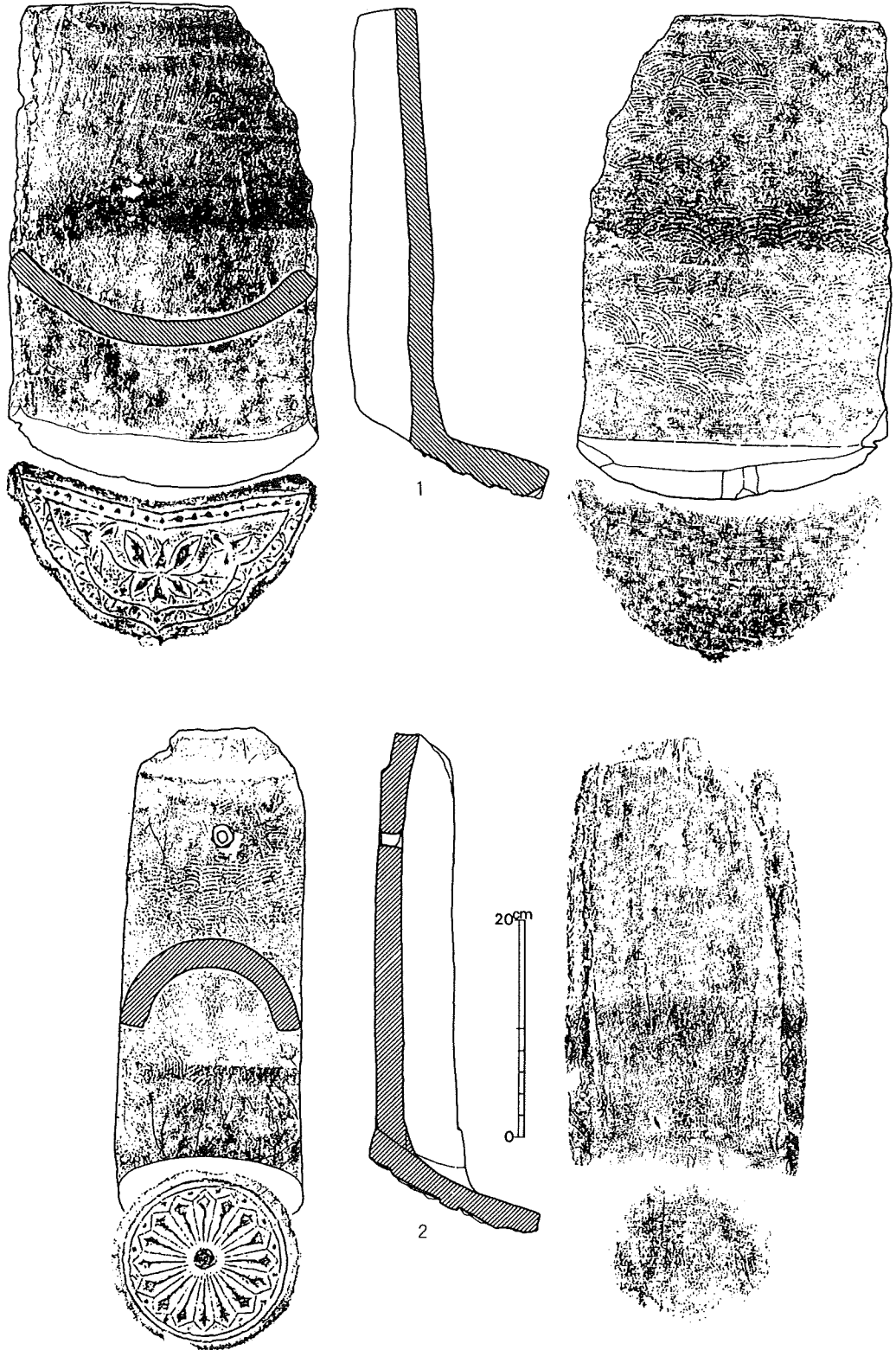


Fig. 95 金石城出土の軒平瓦・軒丸瓦（『金石城』1985より転載）



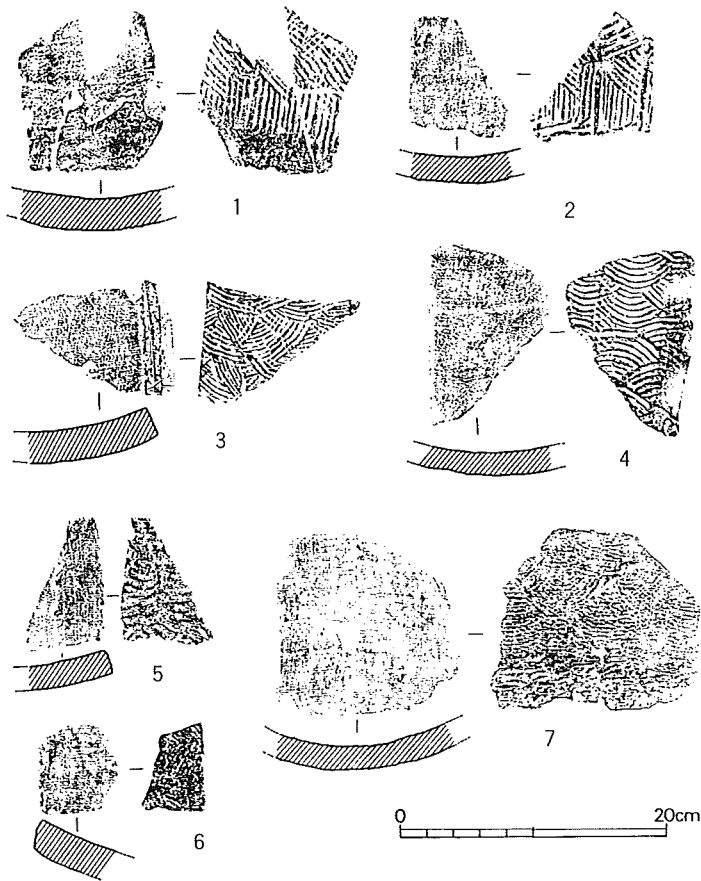


Fig. 96 金石城出土朝鮮系瓦の叩き文様（『金石城』1985より転載）

至難のことであるが、小菌城の例は、Fig. 99-3（長崎県上県郡上対馬町シゲノ神）、Fig. 96-3～5・7（長崎県下県郡巖原町金石城）、Fig. 97（長崎県平戸市平戸和蘭商館跡）、Fig. 95（長崎県下県郡巖原町金石城跡）に認められる青海波文様である。（青海波文様は上向き、下向きに叩き板を使い分けているが特に区別していない）。

### 瓦当面の特長

朝鮮系隅瓦等を除いて、現在出土している軒平瓦と軒丸瓦をみてみよう。Fig. 95は長崎県下県郡巖原町金石城の軒平瓦と軒丸瓦であるが、瓦当面は瓦本体に直角ではなく、110～120度の角度で付けられている。軒平瓦の場合110度、軒丸瓦は115度の角度をもついわゆる滴水瓦である。軒平瓦は全体的には半月形であるが、下端が乳房状に尖り、両側縁が、2回波型を描いている。外形に添う二重の圏線を描き、外区は蓮子と蔓草を、内区は葉文と蔓草を飾っている。

この軒平瓦の瓦当面の特長は島根県富田城跡出土の資料とよく似ている。軒丸瓦は円形で二重の圏線の内側を16本の剣先状弁と珠文で飾っている。(正林)

### 朝鮮系瓦の出土地

この種の瓦の出土地はまだ限られているが、目に触れた範囲で列挙してみる。

- (1) 長崎県上県郡上対馬町鰐浦；小島十七生氏宅の屋根に大量に使用されている。方々から集めたものを利用したといわれるが、具体的な点については不明。庭先にあった丸瓦139点、平瓦約160点は上県町教育委員会で保管。<sup>註5</sup>
- (2) 長崎県上<sup>かみあがた</sup>県郡上<sup>いなくい</sup>県町伊那久比神社；境内と参道に平瓦と丸瓦が散布。昭和10年代に発見された長さ60cmの平瓦が同町教育委員会に保管されている。
- (3) 長崎県上県郡上<sup>かみあがた</sup>県町伊那シゲノ神；丸瓦2点。上県町教育委員会保管。
- (4) 長崎県上<sup>かみあがた</sup>県郡上<sup>いなくい</sup>県町網代妙見神社；凹面布目玉縁瓦片一点。長崎県文化課立山分室保管。<sup>註6</sup>
- (5) 長崎県上<sup>かみあがた</sup>県郡峰町大字志<sup>したか</sup>多<sup>た</sup>賀<sup>か</sup>アサヒナダン遺跡；凹面布目凸面青海波の玉縁瓦片1点他。長崎県文化課立山分室保管。
- (6) 長崎県上<sup>かみあがた</sup>県郡峰町大字佐<sup>さ</sup>賀<sup>か</sup>（佐賀貝塚）；凹面布目凸面青海波平瓦片1点（攪乱層）。峰町立歴史民俗資料館保管。<sup>註7</sup>
- (7) 長崎県下<sup>いずはら</sup>県郡巖<sup>いずはら</sup>原町金石城；滴水軒平瓦・軒丸瓦他多数。長崎県立対馬歴史民俗資料館保管。<sup>註8</sup>
- (8) 長崎県平戸市平戸和蘭商館跡；凹面布目凸面青海波平瓦片1点。平戸市教育委員会保管。<sup>註9</sup>
- (9) 長崎県東彼杵郡東彼杵町瀬戸郷小蘭城跡；凹面布目凸面青海波丸瓦片1点。本報。
- (10) 長崎県大村市<sup>さんじょう</sup>三<sup>さん</sup>城<sup>じょう</sup>町三城城跡；平瓦・丸瓦片。橋本幸男氏教示，同氏保管。
- (11) 長崎県諫早市沖城跡；平瓦・丸瓦。秀島貞康氏教示。諫早市郷土館保管。
- (12) 長崎県諫早市<sup>たかしろ</sup>高城跡；平瓦・丸瓦。秀島貞康氏教示。諫早市郷土館保管。
- (13) 沖縄県那覇市首里城；「癸酉年高麗瓦匠造」年銘。<sup>註10</sup>
- (14) 沖縄県浦添市浦添城；「癸酉年高麗瓦匠造」<sup>註11</sup>「大天」銘他。
- (15) 島根県能義郡<sup>註12</sup>広瀬町大字富田富田城跡；

### 朝鮮系瓦の時期

これらの朝鮮系瓦の製作年代と使用年代について確実の資料は今のところ確認されたものはない。滴水瓦について渡辺 誠氏は、「①中国では北魏後期（6世紀）に出現するが、朝鮮半島へは李氏朝鮮時代（1392～1910），日本へは文禄・慶長の役（1592，1597～1598），琉球へは16世紀に伝わるらしい。」と述べている。「李氏朝鮮時代の朝鮮半島に伝わるらしい」理由として、「①全羅南珍島の龍蔵山城で大量の瓦が出土しているが滴水瓦が全く見られない」こと。②全羅北道南原城市満福寺跡出土瓦で最も古いものが嘉靖45年（1566）であること。「瓦

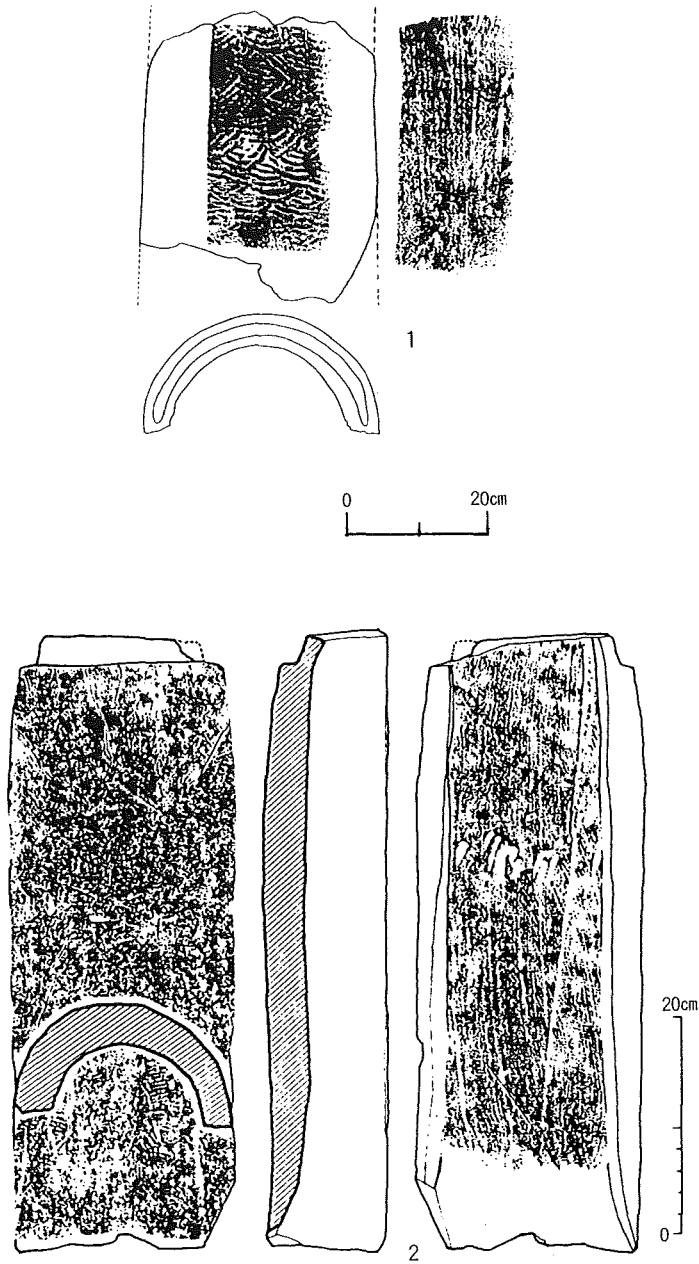


Fig. 97 平戸和蘭商館跡出土丸瓦（『平戸和蘭商館跡』  
1988より転載）と長崎県上県郡上県町伊那久比神社の丸瓦

当面は従来どおりでありながら本体は120度の角度をもっているタイプもみられ、それらはさらに古く天順6年（1462年）を上限としている。しかしなお、龍藏山城との間には190年の空白がみられ、今後の重要な検討課題である。」としている。

さらに、日本への伝来を文禄・慶長の役とする理由として、渡辺 誠氏は分布状態が加藤清正の熊本城、小西行長の宇土城、伊達正宗の瑞巖寺等、文禄・慶長の役に従った侵略武将の城に集中することを挙げている。

ここで前掲の朝鮮系瓦について、一応の歴史的背景を考えてみよう。

- (1) 沖縄県浦添城の「癸酉年高麗瓦匠造」銘の資料は瓦当面と瓦本体との角度、瓦当面の形状等からして滴水瓦である。「高麗」の「癸酉」について、1153年から1393年（1392～李朝）まで諸説あるが、同城の発掘調査の結果から「14世紀から15世紀初頭と推察する<sup>註14</sup>」考えもある。
- (2) 対馬各地の場合朝鮮半島との直接的な関係を考慮する必要がある。対馬と朝鮮半島の関係は14～15世紀初頭はかならずしも良好でなく、倭寇、文永・弘安の役、応永外寇などに代表される加害・被害に対する彼我の反発の中で対馬・杵岐は揺れ動いたが、島主、宗 貞盛による嘉吉（癸亥）条約（1443）締結は対馬・朝鮮間の歳遣船交易を促し、文禄・慶長の役にいたるまで朝鮮貿易は盛期を迎える。この間、対馬の島府所在地は、①6代頼茂が応永5年（1398年）、上県郡峰町志多賀（対馬東岸）を島府とする。②7代貞茂～9代成職の応永～享徳年間、同町佐賀を島府とする。③10代貞国は、下県郡巖原町に島府を移し、文明年間（1470頃）国分寺を復興、享禄元年（1528）金石城を構築し、延宝6年（1679）まで、国主の館として存続する。このように対馬の島府は14世紀末から16世紀までの間に北から南に移っており、それぞれ朝鮮半島との関係を密にしながら推移している。①～③の地は、朝鮮系瓦の出土地(5)・(6)・(7)に対応しており、出土地(1)・(4)は対馬の北端の要津、(2)・(3)は対馬西北岸の要津で室町時代に郡守がおかれ、伊那久比神社（出土地(2)）は延喜式内社であった。
- (3) 平戸和蘭商館跡は慶長14年（1609）に築造されたが、発掘調査の報告書によれば、平戸和蘭商館跡築造以前の土層から朝鮮瓦が出土している。『世祖恵莊大王実録』丁丑世祖2年（長禄元年 1467）6月己酉年に「日本国肥州太守源義」が貢物を献じて朝貢したことが見える。また、『海東諸国記』にも「丙午年（康正元 1455）始遣使来朝 書称肥前州平戸寓鎮肥州太守源義 受国書 約歳派遣一船…」とあって平戸松浦氏が朝鮮交易を行っており、「平戸和蘭商館跡以前の土層から」朝鮮系瓦が出土したことの背景が考えられる。
- (4) 長崎県諫早市にある、高城は文明年間（1469～1487）西郷尚善による構築とされる山城であるが、朝鮮系瓦が出土した歴史的な背景は今のところ不明である。同区仲沖町にある沖城は天正15年（1587）、西郷氏から領地を受け継いだ龍造寺家晴の隠居所（陣屋）といわれるが、ここで朝鮮系瓦が出土した背景として考えられるのは、文禄・慶長の役に佐嘉（佐賀）藩の一武将として家晴が参陣した<sup>註15</sup>ことであろう。『朝鮮役諫早私記』は、文禄元年（1592）

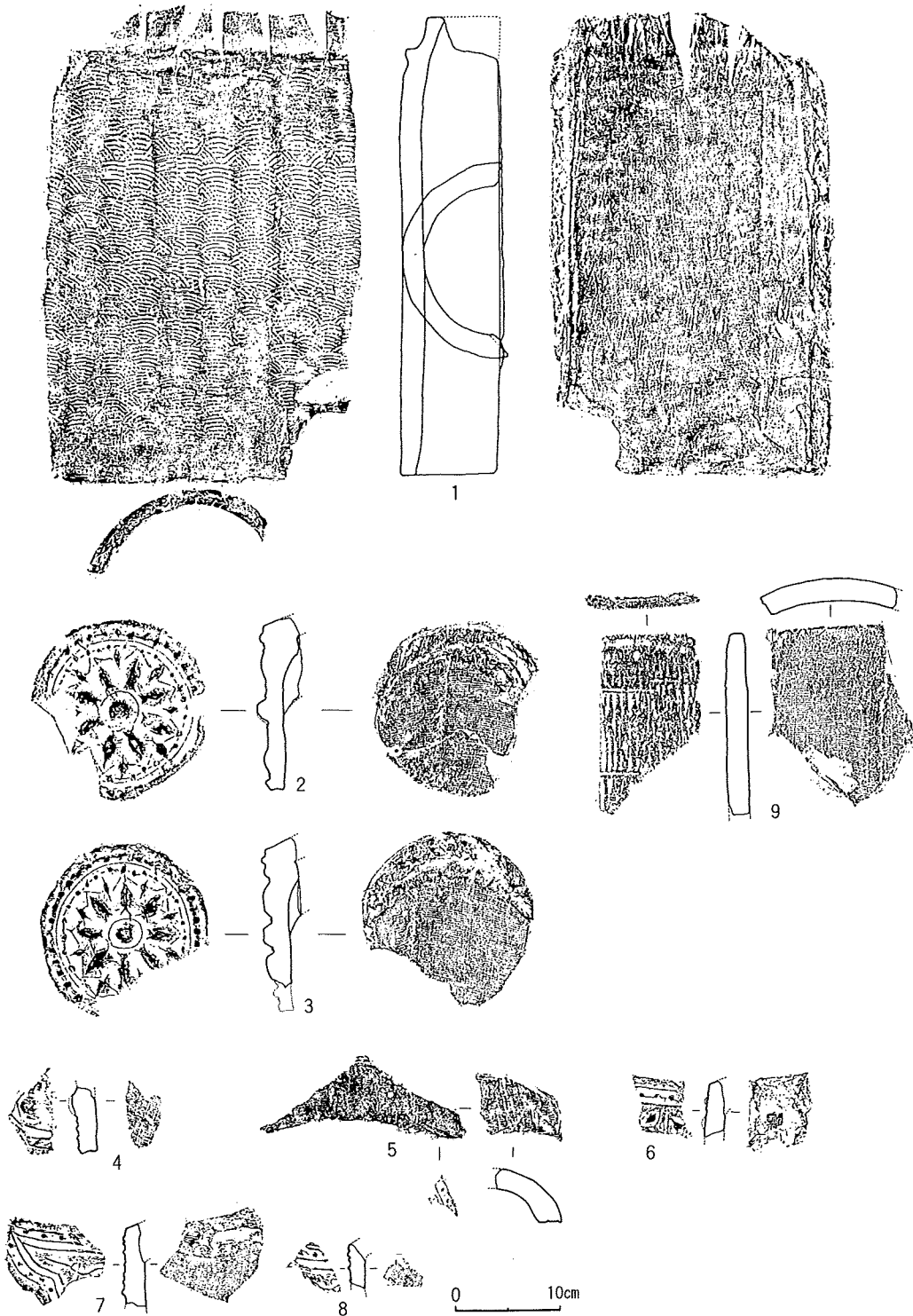
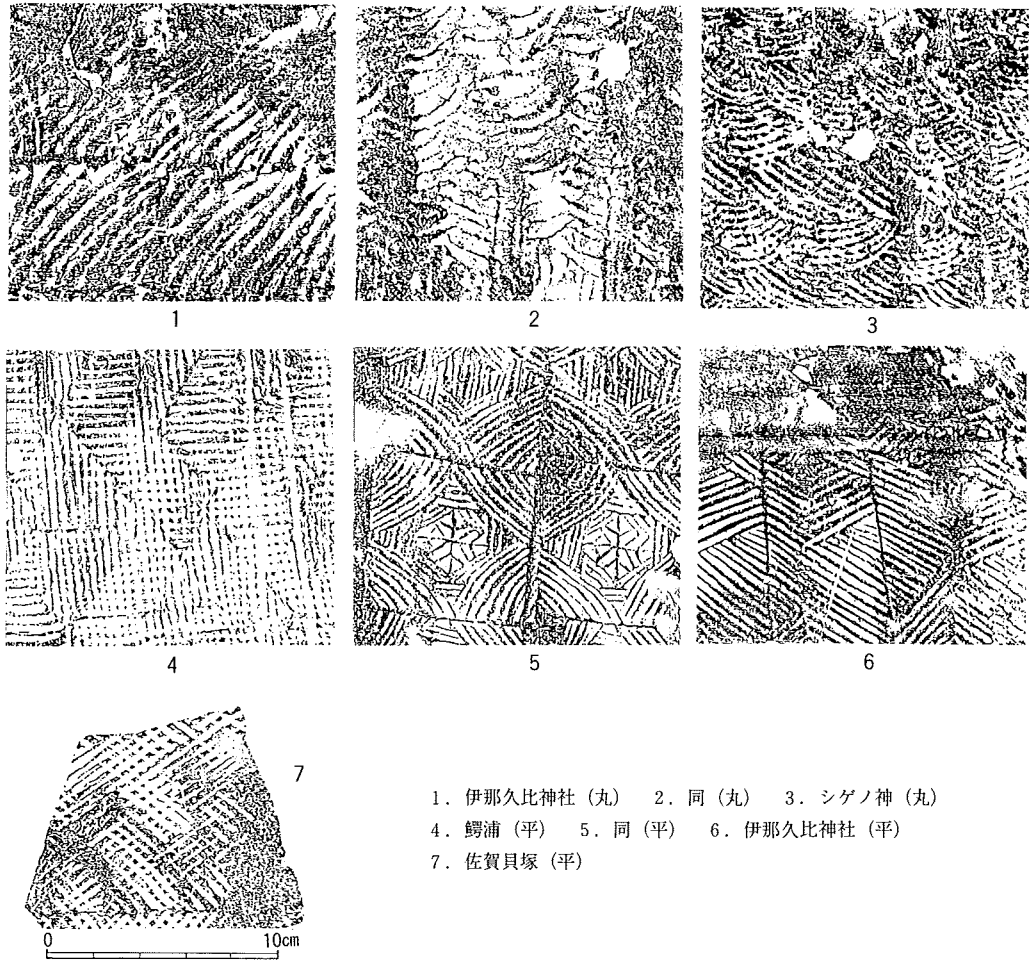


Fig. 98 富田城跡出土の朝鮮系瓦（『史跡富田城跡菅谷地区 第一次発掘調査概報』1985より転載）



1. 伊那久比神社 (丸)
2. 同 (丸)
3. シゲノ神 (丸)
4. 鱒浦 (平)
5. 同 (平)
6. 伊那久比神社 (平)
7. 佐賀貝塚 (平)

Fig. 99 対馬各地の朝鮮系瓦の叩き文様 (1～6 大石一久拓影, 7『佐賀貝塚(略報)』1986より転載)

家晴が参陣した約140年後の享保19年(1734)に佐嘉(佐賀)に提出した記録であるが、「朝鮮人二人召連れ帰り…」とあり、瓦匠であったことも考えられる。

- (5) 島根県能義郡広瀬町の富田城(菅谷地区)は、江戸時代に描かれた「月山城図」に富田城への上り口の一つとして描かれ、「侍屋敷」の記述があるという地区である。朝鮮系瓦は、建物遺構の「雨落溝」に丸瓦が利用された状態で出土し、16世紀代の遺物に伴っていると報告されている。<sup>註16</sup>
- (6) 長崎県大村市三城城は大村純忠が永禄7年(1565)が築いた城であるが、朝鮮系瓦が出土した歴史的背景としては、大村喜前の文禄・慶長の役出兵が考えられる。
- (7) 本報の長崎県東彼杵郡東彼杵町小藺城跡については、記録類が乏しく朝鮮系瓦が出土する歴史的背景については不明に近い。

以上の「歴史的背景」は状況証拠であって確証とはいいがたいが、一応14世紀～16世紀が大枠として考えられてよいと考えられる。朝鮮系瓦の時期については、製作年代・使用年代ともに考慮する必要があるが、舶載品か日本で作られたものか、これからの問題が多い。

(正林)

- 註1 時代の呼称について、「李氏朝鮮時代」よりも「朝鮮時代」とする傾向があり、本稿では後者を用いた。
- 註2 正林 護他『金石城』1985 巖原町教育委員会
- 註3 下地安弘『高麗系古瓦について』『考古学ジャーナル』No. 320 1990 ニューサイエンス社
- 註4 同 上
- 註5 大石一久氏教示による
- 註6 同 上
- 註7 正林 護他『佐賀貝塚(略報)』1986 峰町教育委員会
- 註8 註2に同じ
- 註9 萩原博文『平戸和蘭商館睡一現状変更(家屋改築)に伴う発掘調査の報告一』1988 平戸市教育委員会
- 註10 西谷 正「高麗・朝鮮両王朝と琉球の交流」『九州文化史研究紀要』第26号 1981
- 註11 註3に同じ
- 註12 内田律雄「菅谷地区出土の李朝系古瓦について」『史跡富田城跡菅谷地区一第一次発掘調査概報』1985 広瀬町教育委員会
- 註13 渡辺 誠「滴水瓦の伝播とその背景」『考古学ジャーナル』No. 326 1990 ニューサイエンス社
- 註14 註2に同じ
- 註15 『諫早市史』2 1974 諫早市史編纂委員会
- 註16 註12に同じ

## ⑥ 近世陶磁器、他

近世陶磁器は、主に『波佐見古陶磁文様集』<sup>註1</sup>等を参考に分類した。先ず大分類として碗類・皿類・鉢類・その他に概括し、さらにそれぞれの項目を細分化し小分類を行っている。その他の項目の中の大鉢・深鉢・甕等の陶器類は、波佐見では生産されなかったとみえ『波佐見古陶磁文様集』にはないが、地質的に良質の陶土を産出し、窯を築くのに適した地域である。古唐津系統の武雄北部・南部系の緒窯<sup>註2</sup>や、松浦古唐津の伊万里市域の諸窯<sup>註3</sup>等で生産された可能性があり、各地の生産地で焼造されたものが集められている。

なお、今回の報告分の資料は長崎県美術館学芸専門員下川達彌氏に実見してもらい御指導御教示いただいた。

### 碗類

皿類と並んで資料数が多い。器形、及び大きさもバラエティがあるが、口径等の大きさにより小分類している。

#### 小碗A

口径9cm内外・高さ4.5～5cm・高台径3.5cm内外で半球状の器形をなすものである。菊や草花文を描くが、いずれも簡略化されている。64, 71, 116, 120, 167, 180, 219, 320, 327等である。

#### 小碗B

口径10cm内外・高さ5～6cm・高台径4cm内外で器形は小碗Aとほぼ同じである。この器種には二重網目文や草花文の文様が多く見られる。3, 13, 31, 57, 60～62, 65～69, 72, 73, 91, 94, 102, 119, 121, 123, 138, 155, 164, 169, 170, 176, 191～193, 220, 230, 253, 260, 261, 267, 277, 280, 290, 294, 304～306, 322等の資料があり数量は一番多い。

#### 中碗A

口径11cm内外・高さ5～6.5cm・高台径4.5cm内外のものであるが、小碗A・Bと同じ半球状のもの、及び口縁部が幾分反った器形のものがある。4, 12, 42, 70, 93, 124, 125, 13, 189, 202, 203, 225, 236, 246, 248, 259, 275, 323, 324, 326等である。

#### 中碗B

口径12cm内外・高さ6cm内外・高台径4.5cm内外で半球状の器形である。この器種には丸丸や竹笹の文様があり、青磁釉をかけたものがある。136, 235, 281, 284, 321等の資料がある。

#### 中碗蓋

口径10cm内外・高さ2.5cm内外・高台径4cm内外のもので、主に口径11cm程度の碗の蓋である。40, 296等の資料がある。



### 高高台碗

口径11cm内外、高さ6cm内外・高台径5.5cm内外・高台の高さ1.5cm程度のものが主であるが、ほかに口径10cm内外・高さ5.5cm内外・高台径5cm内外の比較的小ぶりの碗もある。この器形は一般の碗に比し高台が大きく高いので高高台（たかこうだい）茶碗の名称がついている。また、広東碗（かんとんわん）とも呼ばれる。90, 115, 126, 127, 178, 221, 249, 250, 303等の資料がある。

### 高高台碗蓋

口径10cm内外・高さ3cm内外・高台径5.2cm内外で高高台碗の内蓋として作られたものである。高台径が大きく碗とのバランスがよくとれている。188の資料がある。

### 大碗

この器種は1点のみである。口径16.2cm、高さ8.7cm、高台径5.7cmの井茶碗の器形である。暗緑色の釉を全体にかけ（畳付部のみ無釉）、その上に白泥で簡単な文様を描いているが、それがかえって力強いすっきりした印象を与えている。本資料は波佐見産ではなく、木原系の江永古窯のもの。35

### 丸碗

口径9cm内外・高さ5.5cm内外・高台径3.5cm内外で口径が胴部の径より小さい丸型の碗である。竹笹文の文様を描いている。96

### 反り碗

口径11.5cm内外・高さ5.5cm内外で外反りの蓋茶碗である。資料は印判染付文で、18は、淡黄灰色の米色磁様のものである。

### 湯呑

（突立型）口径5.6cm内外・高さ6.3cm・高台径が5.0cmで、底部径は口径より大きく6.0cmある。1の資料がある。

（丸型）口径7.5cm内外・高さ7.5cm内外・高台径4cm内外のものを中心とすよ。腰部が丸くなった器形のもの。

（朝顔型）口径8cm内外・高さ4cm内外・高台径3.5cm内外のもので口縁部が開いた器形のものである。2, 32, 247等の資料がある。

### 皿類

皿類の中では径12cm内外～13cm内外で、高さ3cm程度の皿が数量的に一番多い。他は口径1cm～15cmの程のものが大半を占める。

### 小皿A

径7cm内外・高さ2cm内外で、319等の資料がある。

### 小皿B

径10cm内外～11cm内外・高さ2.5cm内外の皿で器形は小皿Aとほぼ同じである。6, 11, 38,

小齒城跡

39, 114, 173, 238, 252, 279, 317等の資料がある。

#### 中皿A

径12cm内外～13cm内外・高さ3cm内外で蛇の目に草花文様等を描く。7～10, 28, 46～51, 55, 58, 103, 104, 146, 151, 172, 186, 187, 196～199, 215～217, 231, 232, 258, 269, 274, 276, 310, 315, 316等があり、皿の中では一番数が多い。

#### 中皿B

径14cm内外～15cm内外・高さ3.2cm内外で蛇の目に草花文様を描く。27, 52～54, 59, 88, 105, 195, 218, 233, 242, 244等の資料がある。

#### 大皿

径18cm～23cm程の皿である。15, 84, 100, 131, 200, 240, 262, 270等の資料がある。

#### 深皿

径13cm内外～14cm内外・高さ4cm内外で高台部から口縁部にかけては丸っこい形であるのが特徴である。95, 162, 171の資料がある。

#### 鉢類

高台径が広く口径が12cm～14cm程度のもの。口径が14cm以上のものでも見込部分が広く高台径が大きめのものとした。口径21cm～22cmの大ぶりのものもある。81, 82, 142, 144, 213, 223, 251, 266, 288等の資料がある。

#### その他の器種

花器・油壺・火入れ、猪口・仏飯碗・徳利・盃・紅皿・摺鉢・片口・大鉢・甕・土瓶・及び土瓶の蓋等の資料がある。

#### 花器

241の資料のように黒褐色の釉をかけたもの等がある。

#### 油壺

髪油を入れる壺で、口部が小さく胴部が張って量感のある器形である。25, 160等の資料がある。

#### 火入れ

出土した2点とも青磁釉をかけている。19, 139の資料がある。

#### 猪口

胴部が高台まで直線状のものを猪口としたが、いくぶん丸味をもちながら立ちあがるもの等も分類している。16, 75～78, 85～87, 98, 122, 129, 143, 181, 182, 190, 204～206, 237, 256, 263, 271, 289, 328, 330等の資料がある。

#### 仏飯碗

仏飯碗は口径7cm内外・高さ5.5cm内外で、菊の文様を描いている。135, 135の資料がある。他に口径4.3cm・高さ4.5cmのものもある。5の資料。燈明皿239の資料もある。

### 徳利

陶磁製のもの、20, 21, 166や白磁のもの26, 132, 163, 224, 300等があり、22は、白磁に『宮崎』という文字を書いている。26は、白磁に色絵を上絵付している。

### 盃

口径6cm～8cm内外・高さ3cm～6cm内外の範囲で、器形としては半球状のものが主である。文様は山水文様や、168のように、口縁部の外側に簡素な文様を描くのが特徴である。33, 4, 56, 63, 83, 89, 97, 106～113, 147, 161, 165, 168, 177, 194, 201, 227, 301～309等がある。

### 紅皿

口径4.5cm～5.7cm・高さ1.4cm～1.6cm・高台径は1.4cm～1.7cmで、たて縞のしのぎが入るものである。34, 130, 257, 264, 272, 273の資料がある。

### 摺鉢

舟切り底のもの287と、高台をもつもの14, 36, 212の資料がある。

### 片口

口径が22cm程度のもの80, 133, 278と、口径37cmのもの255がある。

### 大鉢

皿状に口縁部が広がるものを大鉢とした。24, 79, 148～150, 154, 159, 183, 210, 268等があり、口径30cm程度・高さが30cm程度の深さがあり、容量が大きいものを深鉢とした。23, 85, 153, 207, 208, 229等の資料がある。

### 甕

甕としては、37, 43, 184, 209, 254, 331, 332等の資料がある。高さが1mを越すもの等は特に大甕とした。145, 152, 314等の資料がある。

### 土瓶

土瓶214, 265, 311と、土瓶の蓋99, 211がある。

### 石 臼

1は、半欠品であるが残存部で長さ29.9cm, 幅15.7cm, 厚さ7.0cm, 重さ4kgである。2は、完形品で、上面はまっ平で、細い溝が刻んである。最大径26.7cm, 最大厚11.8cm, 重さは17kgである。12A集石からの出土である。

### 小結

出土した近世陶磁器を、出土遺構、及び地区等を勘案しながらその所属時期をみていきたい。まず、3D出土の4は、雲龍見込荒磯文碗で、17世紀後半に海外輸出向けに焼成されたといわ<sup>註4</sup>れている。3は、18世紀に国内向けに量産された“くらわんか手”の茶碗で、時期的な幅があ

りそうである。4 Dからは、同じく“くらわんか手”の茶碗が出土している。6 Cからは、寛文7年(1667)から正徳2年(1712)まで窯が焼かれた木場山窯<sup>註5</sup>の染付白抜文に類似する28等が出土している。35は、寛文年間頃(1660)から寛政年間頃(1800)に廃窯になったという江永古窯<sup>註6</sup>の製品である。12Aからは、18世紀に入ってから二重になったといわれる二重網手文様の61等がある。他に28と同じ資料もある。14Eでは、同じく二重網手文様の茶碗、1780年代～1860年代を代表する高高台の広東碗が出土している。陶磁器がまとまって出土した25Bからは青磁の中皿や大皿、盃が8個体、そして、広東碗“くらわんか手”の茶碗等があり、これも時間的な幅がありそうである。33Gからは、28と同じ資料、二彩唐津風の大鉢等が出土している。34Gからも二彩唐津風の大鉢、P-9からは内底の段があり、見込に砂粒の付着があり比較的古そうな資料302等がある。このG～P-8～13までの遺構の集中部分では、比較的古い資料が多いが、A～F-1～5の遺構の集中部分では、高高台の広東碗がA-2の石垣などから出土している等、比較的新しい資料が多い。(9点の高高台の広東碗のうちG～P-8～3の遺構の集中部分から出土したのはP-9から出土した303の1点のみである。)

結論としては、A～F-1～5の遺構部分では、雲龍見込荒磯文碗等があるように、17世紀後半から、広東碗の19世紀の初めまであり、100年以上の時間的な幅がある。G～P-8～12の遺構の集中部分に比べても、その存続期間が長いといえる。

(村川)

註1 波佐見古陶磁文様集 長崎県窯業試験場 p.p. 262～p.p. 270 殆んどのものは波佐見産と思われるが、一部西彼杵郡長与町の長与窯の製品もある。

註2 甕屋窯跡A地区、B地区の窯跡から甕等の類似資料が出土している。

『九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査概報 第10集』1988 佐賀県教育委員会

『九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査概報 第11集』1989 佐賀県教育委員会

『甕屋遺跡』武雄市文化財調査報告書 第20集 1989 佐賀県武雄市教育委員会

註3 瓶屋下窯跡の表採品の中に、小園城遺跡出土の資料に類似した二彩唐津の大皿や、白色化粧土の上に鉄釉と銅釉による松文が描かれた深鉢の資料が見受けられるが、窯跡は未調査の為、この窯跡で焼造されたかは不確定。

『古窯跡分布調査報告書』——佐賀県伊万里市内所在の近世古窯跡の調査——伊万里市文化財調査報告書 第16集 1984 佐賀県伊万里市教育委員会

註4 大橋康二「肥前陶磁の変遷と出土分布」——発掘資料を中心として—— p.p. 152～169 『国内出土の肥前陶磁』——北海道から沖縄まで——佐賀県立九州陶磁文化館

註5 大田新三郎『波佐見地方陶祖の探究』 p.p. 19, 20

註6 『江永古窯』——江永古窯跡発掘調査報告書—— 1975 佐世保市教育委員会

参考文献

『専修考古学』 菊田 徹「東九州における中世土師質土器の様相」—杯・皿形土器を中心として—専修大学考古学会 1986

『浦城跡』 前川威洋「5 出土遺物」筑紫郡太宰府町所在中世城跡の朗 福岡県文化財調査報告書 第45集 福岡県教育委員会 1970

『陶器講座 3』 雄山閣

『金石原窯辻窯跡・焼山上窯跡・焼山中窯跡・市の瀬高麗神上窯跡』—伊万里市松浦町・大川町・大川内町所在近世古窯跡調査の概要—伊万里市文化財調査報告書 第24集 伊万里市内古窯跡調査報告書 第5集 1988 佐賀県伊万里市教育委員会

『南川原窯ノ辻窯・広瀬向窯』—肥前地方区古窯跡調査報告書 第3集— 1986 佐賀県立九州陶磁文化館

大橋康二著『肥前陶磁』考古学ライブラリー55 ニューサイエンス社

大橋康二「波佐見焼の変遷」『長崎の陶磁』昭和63年 佐賀県立九州陶磁文化館

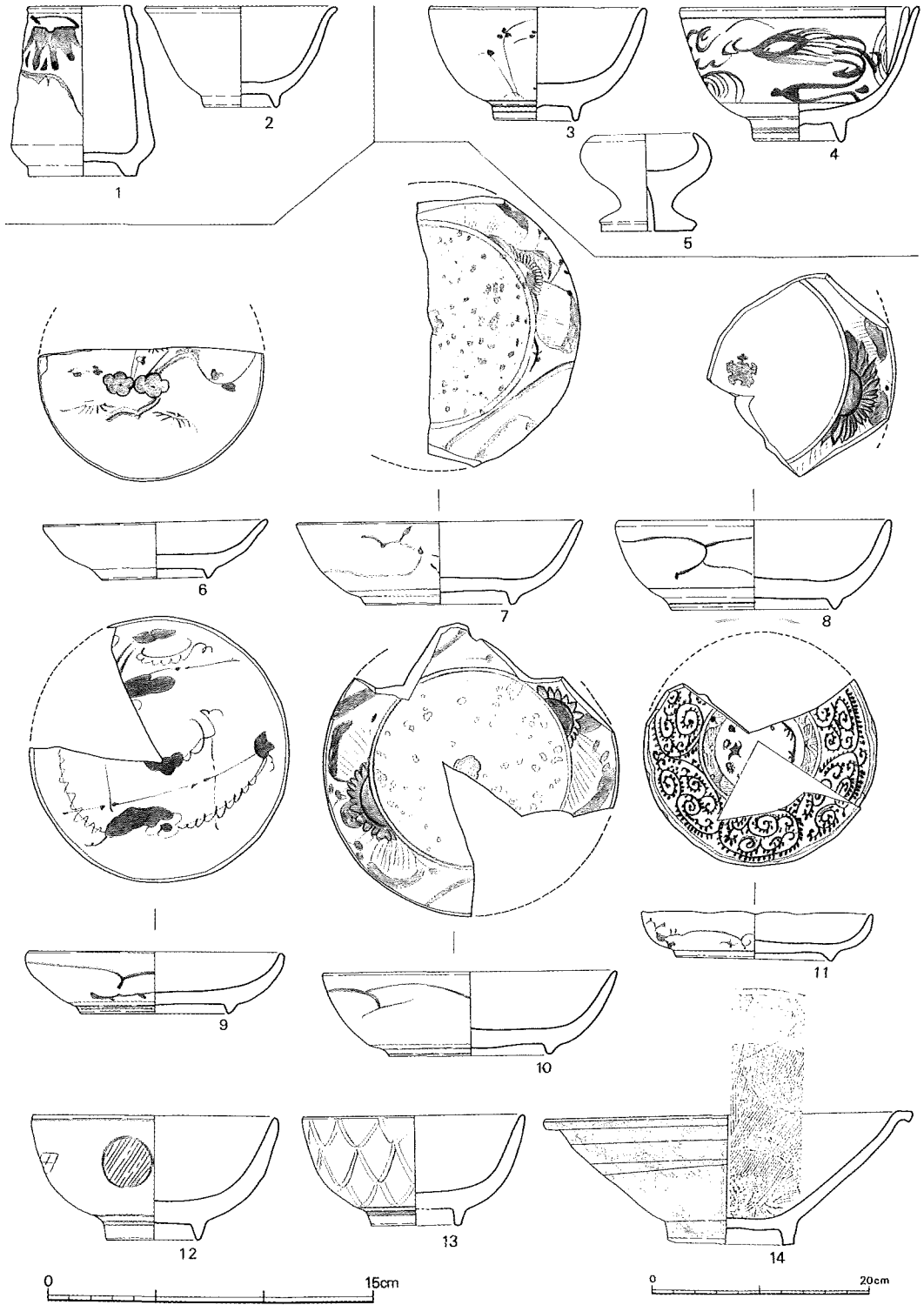


Fig. 100 近世陶磁器①

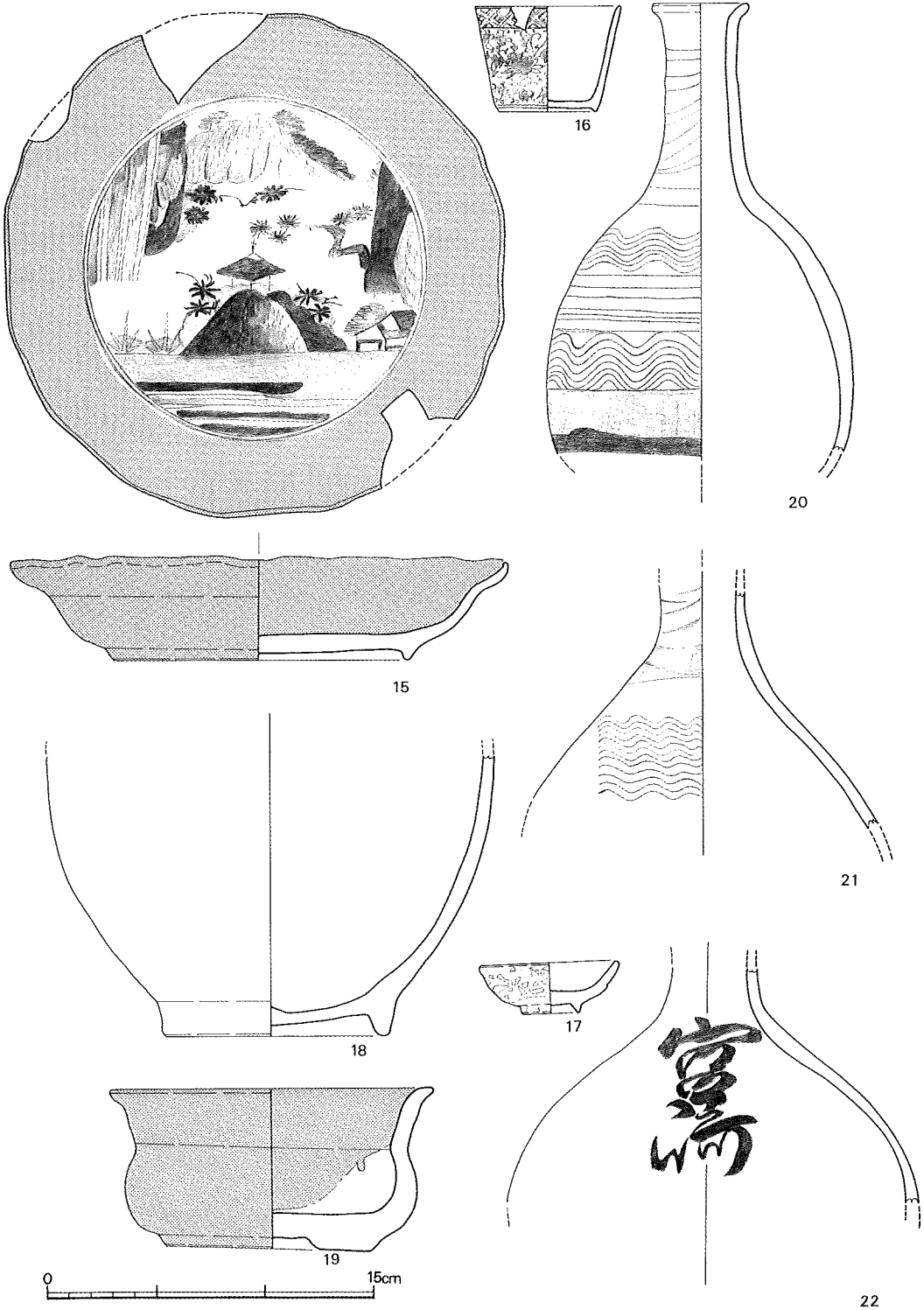


Fig. 101 近世陶磁器②

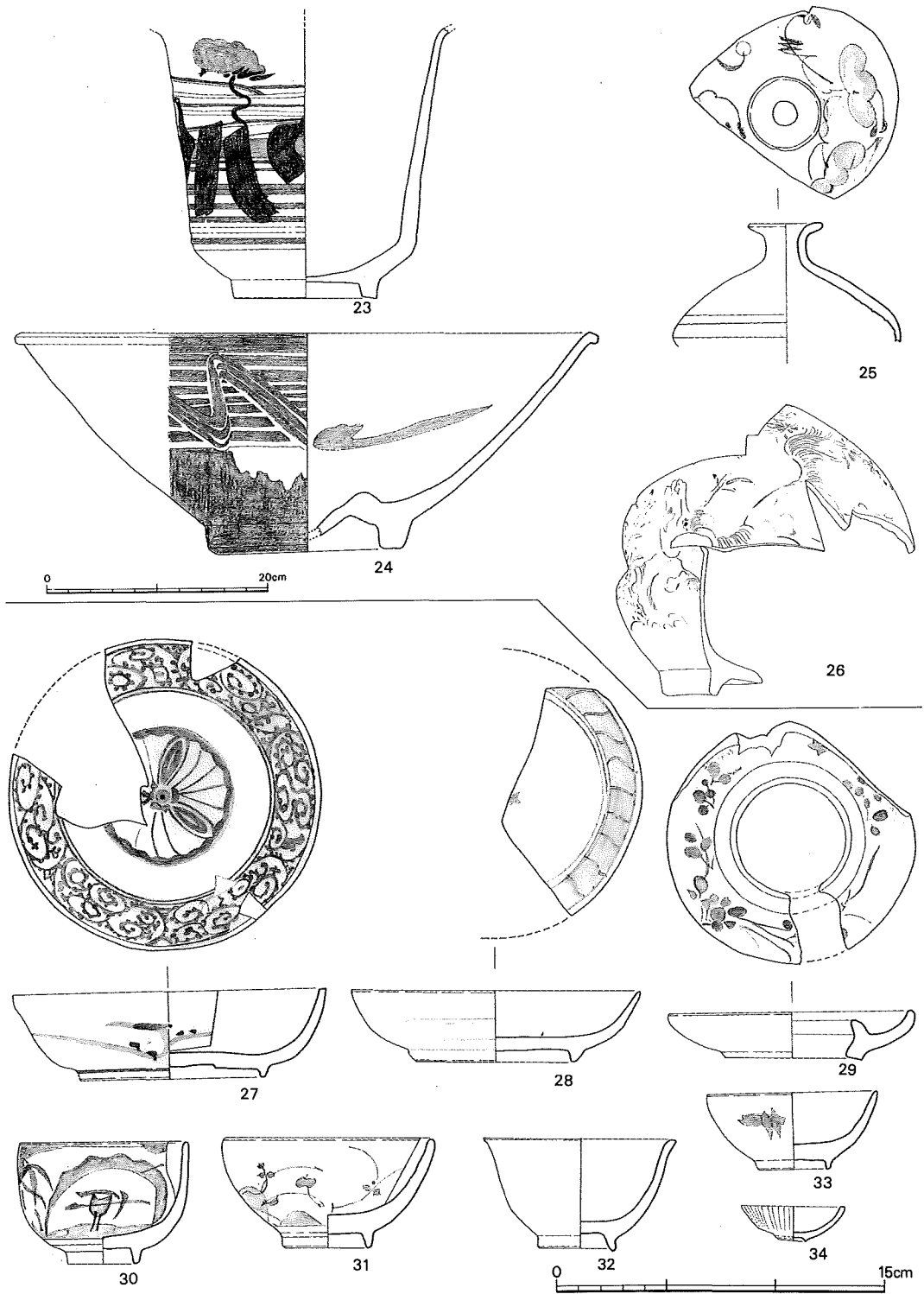


Fig. 102 近世陶磁器③



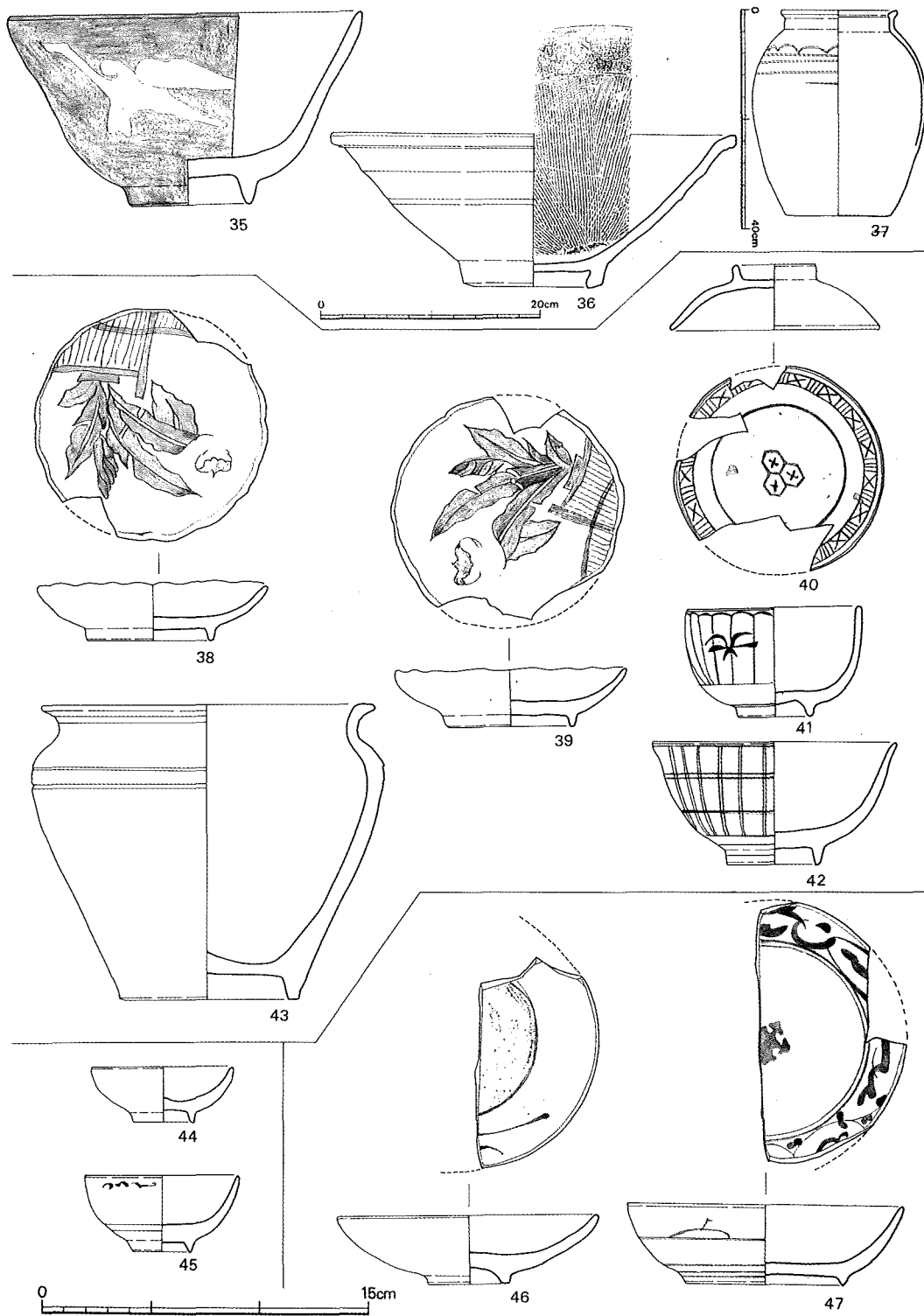


Fig. 103 近世陶磁器④

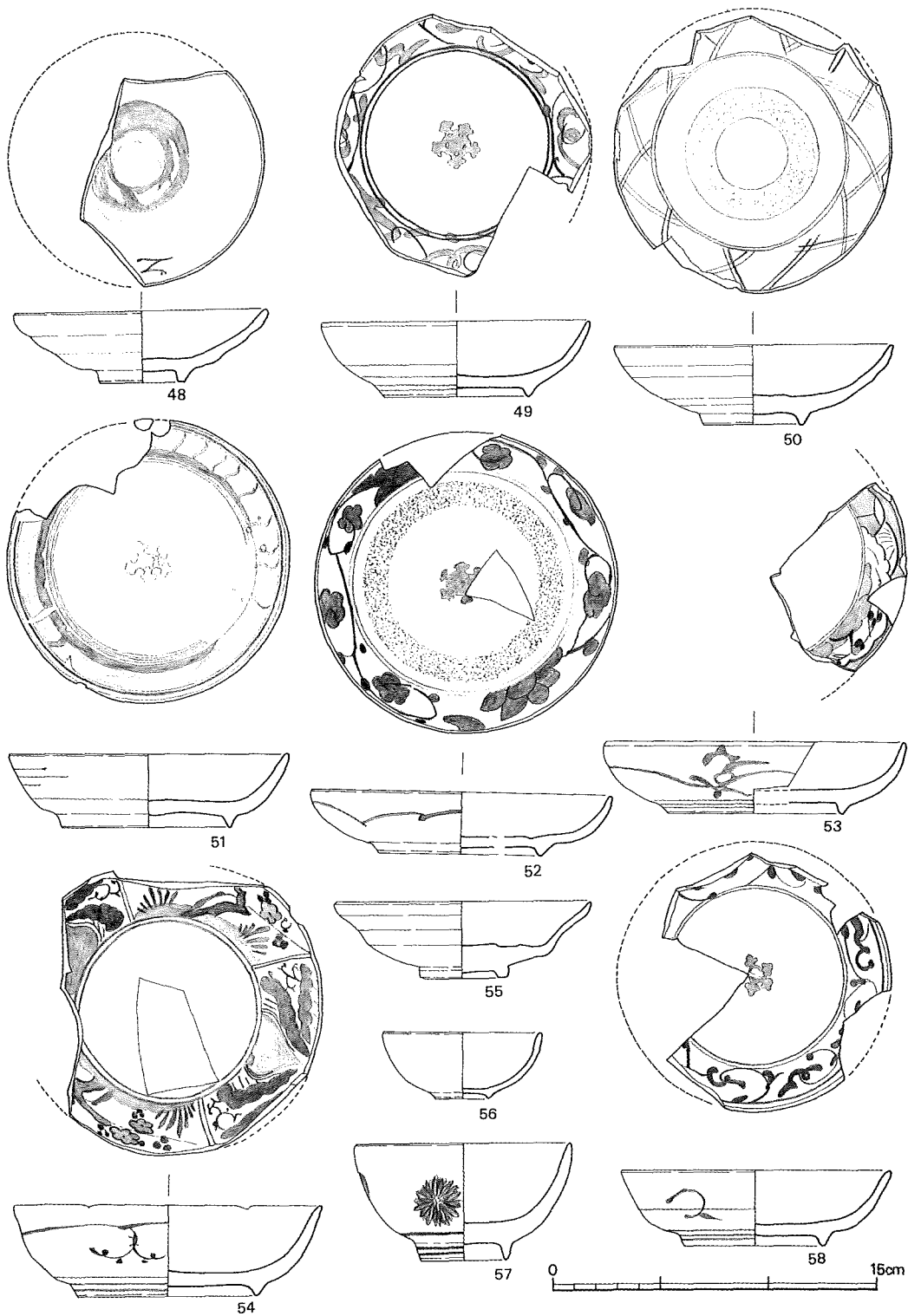


Fig. 104 近世陶磁器⑤

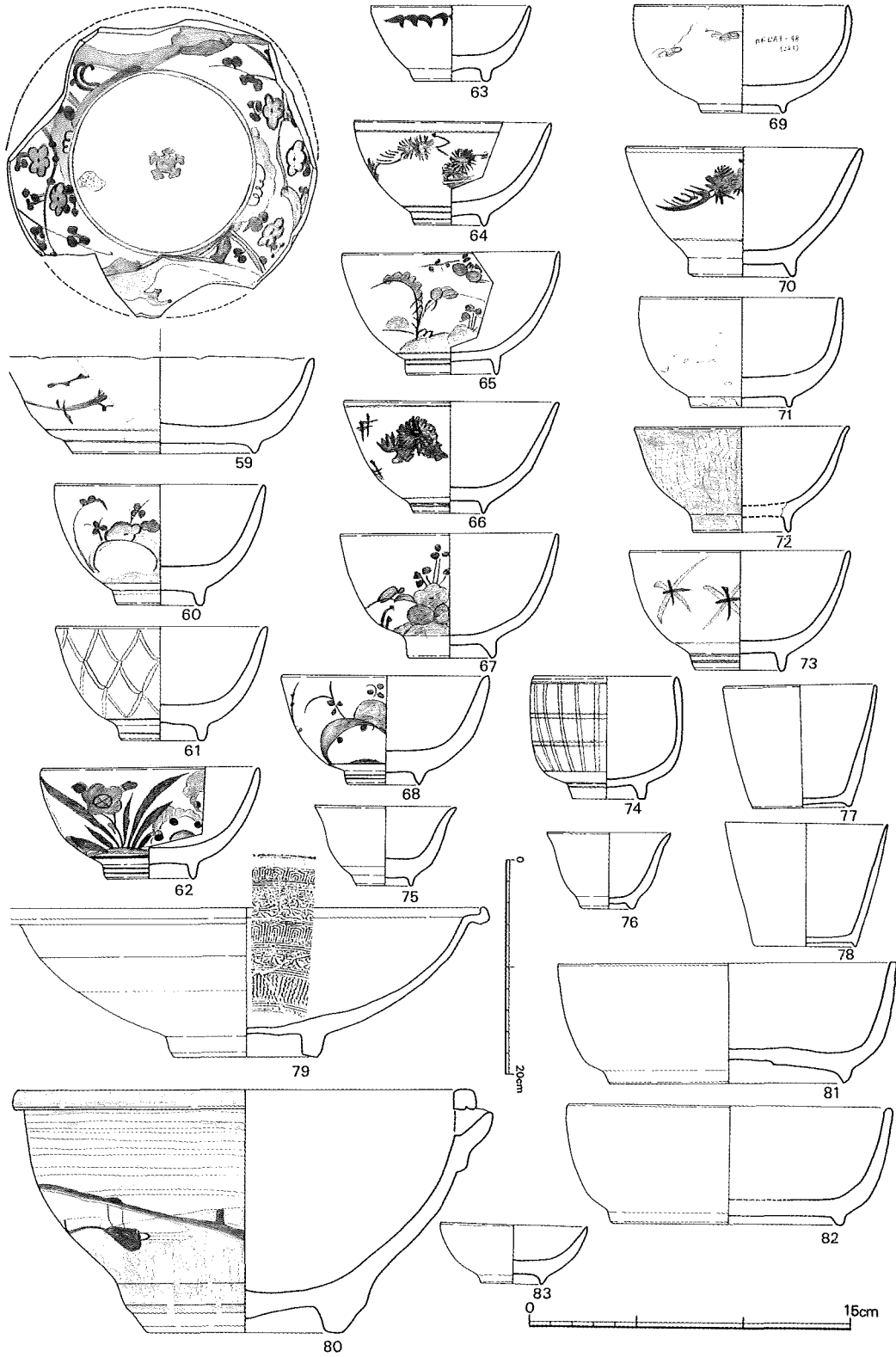


Fig. 105 近世陶磁器⑥

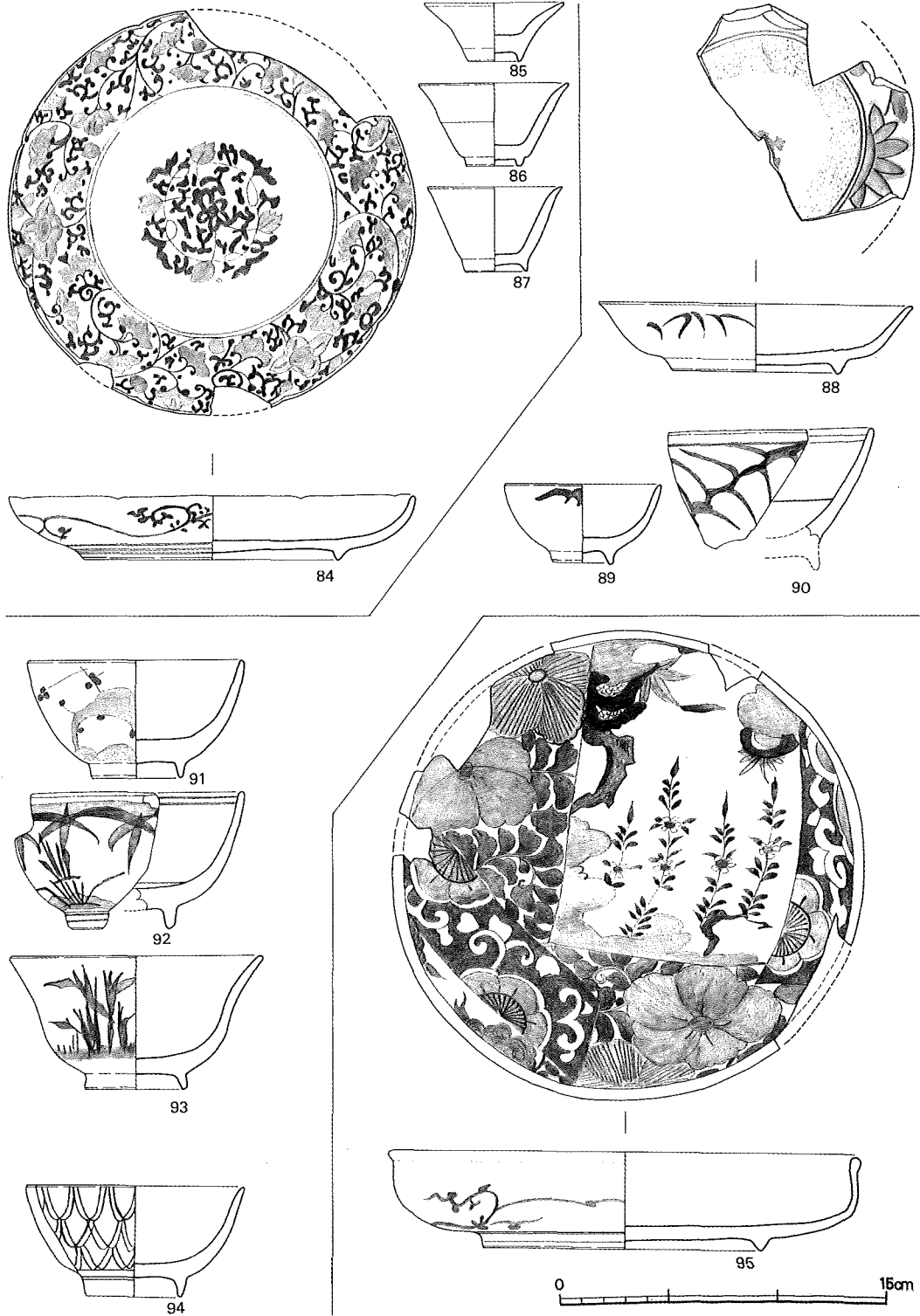


Fig. 106 近世陶磁器⑦

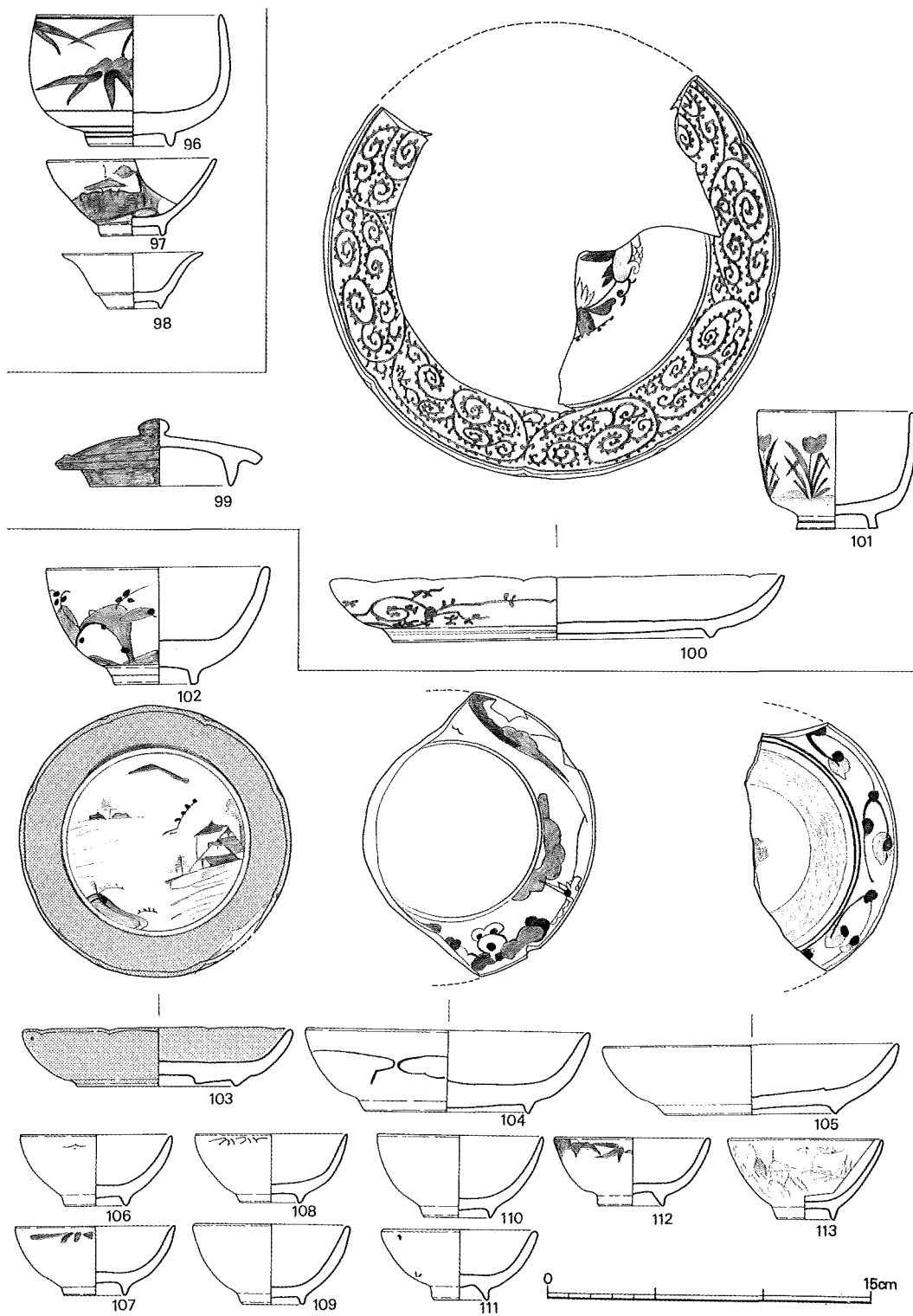


Fig. 107 近世陶磁器⑧

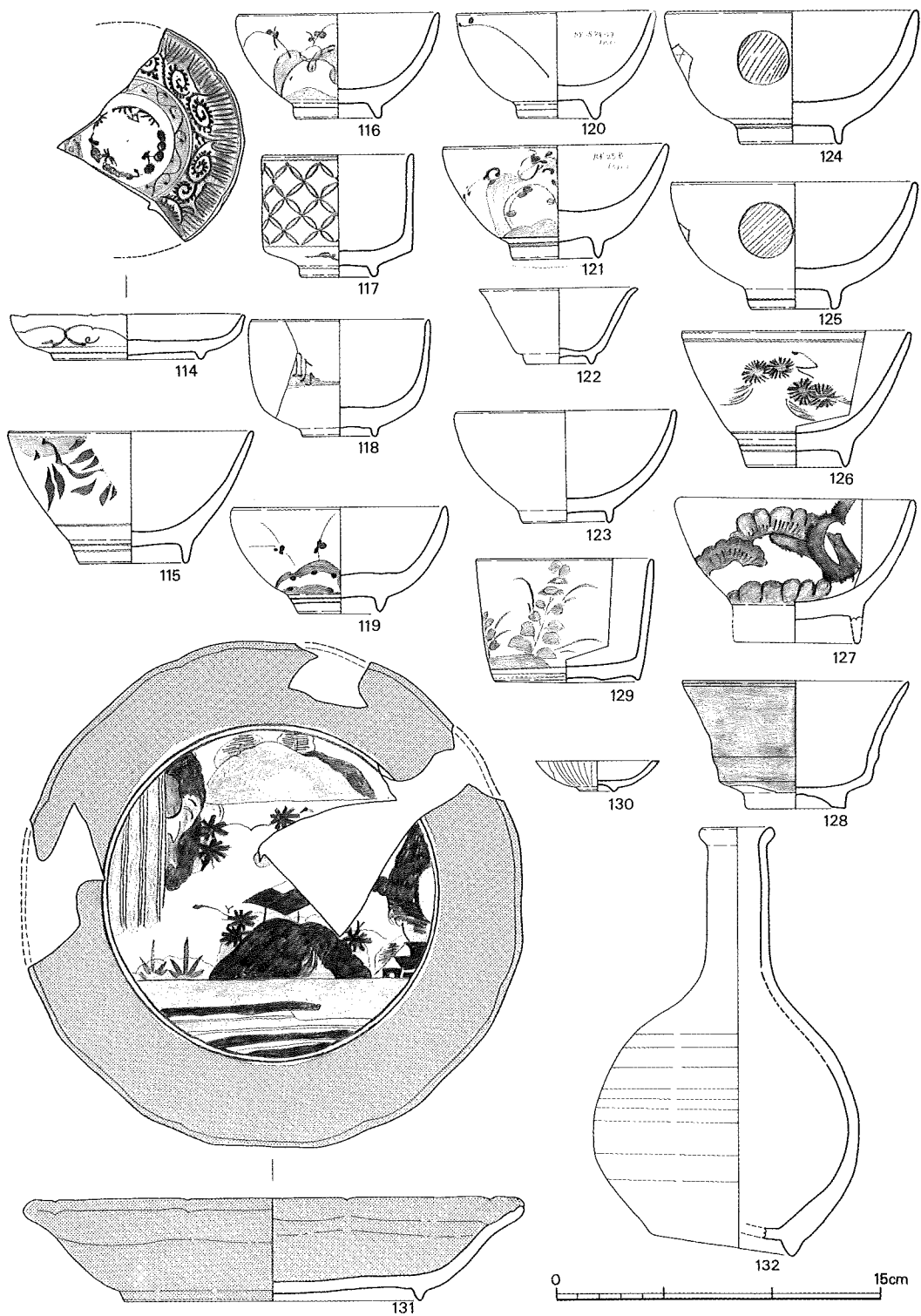


Fig. 108 近世陶磁器⑨

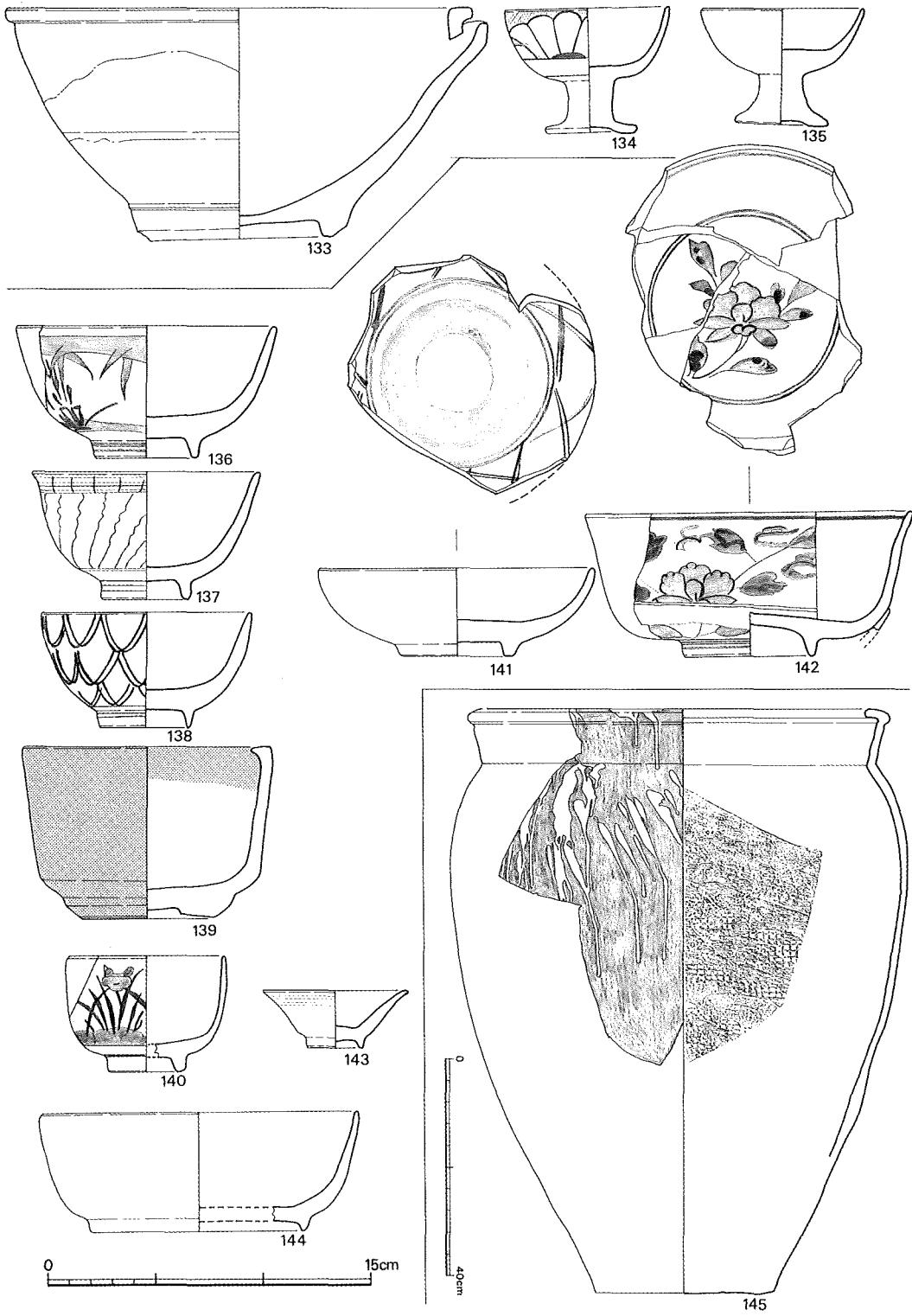


Fig. 109 近世陶磁器⑩

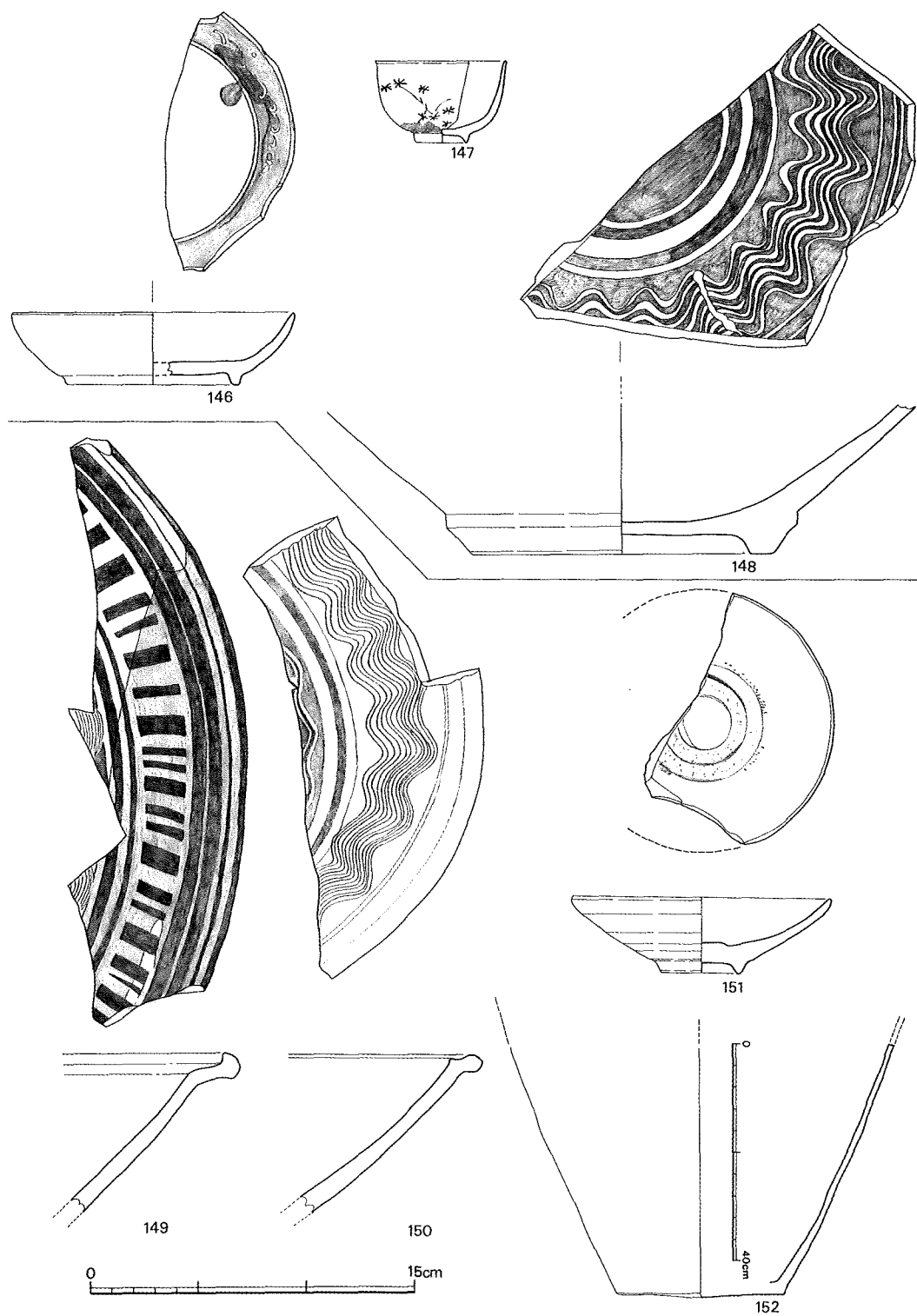


Fig. 110 近世陶磁器①



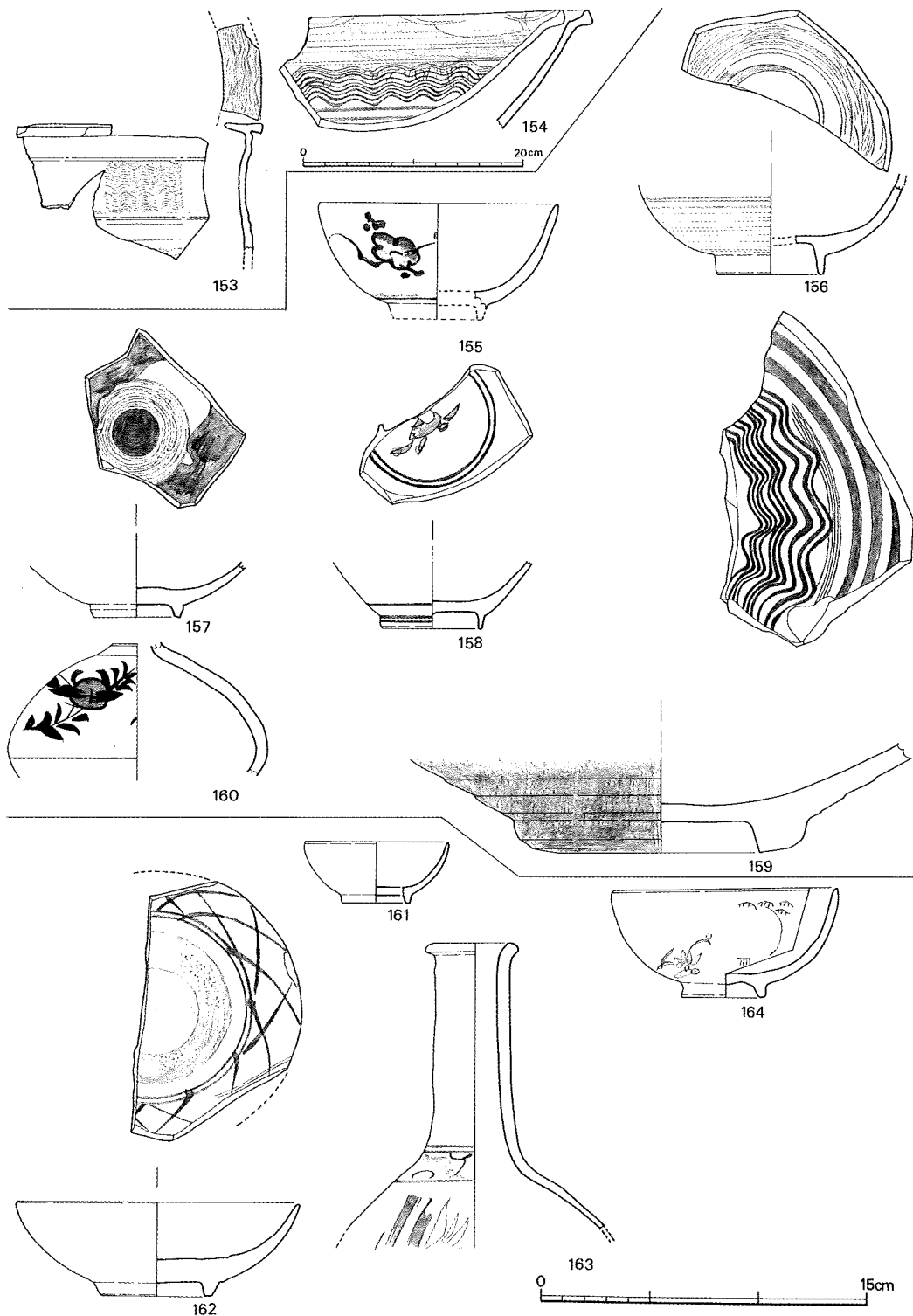


Fig. 111 近世陶磁器⑫

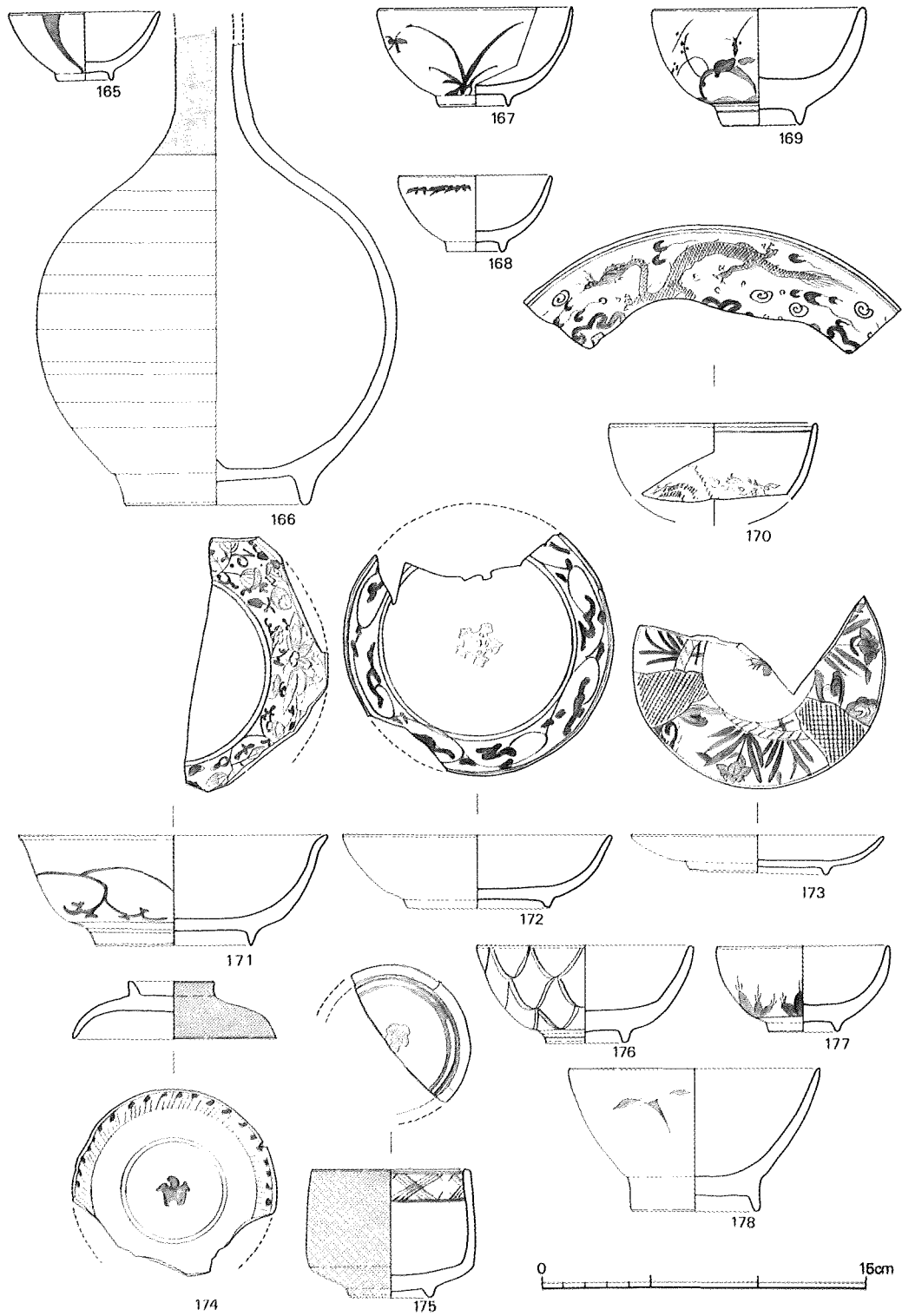


Fig. 112 近世陶磁器⑬

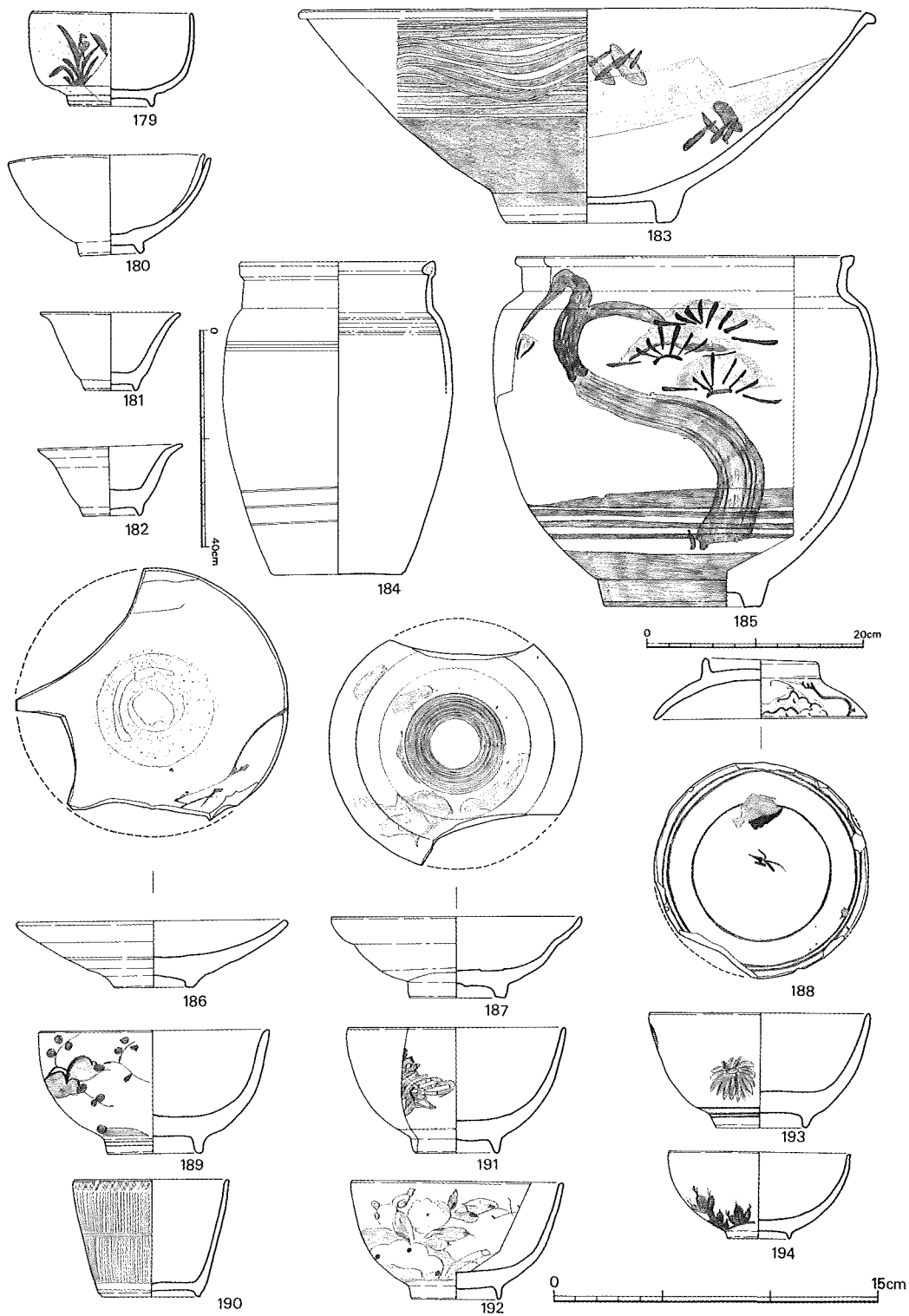


Fig. 113 近世陶磁器⑩

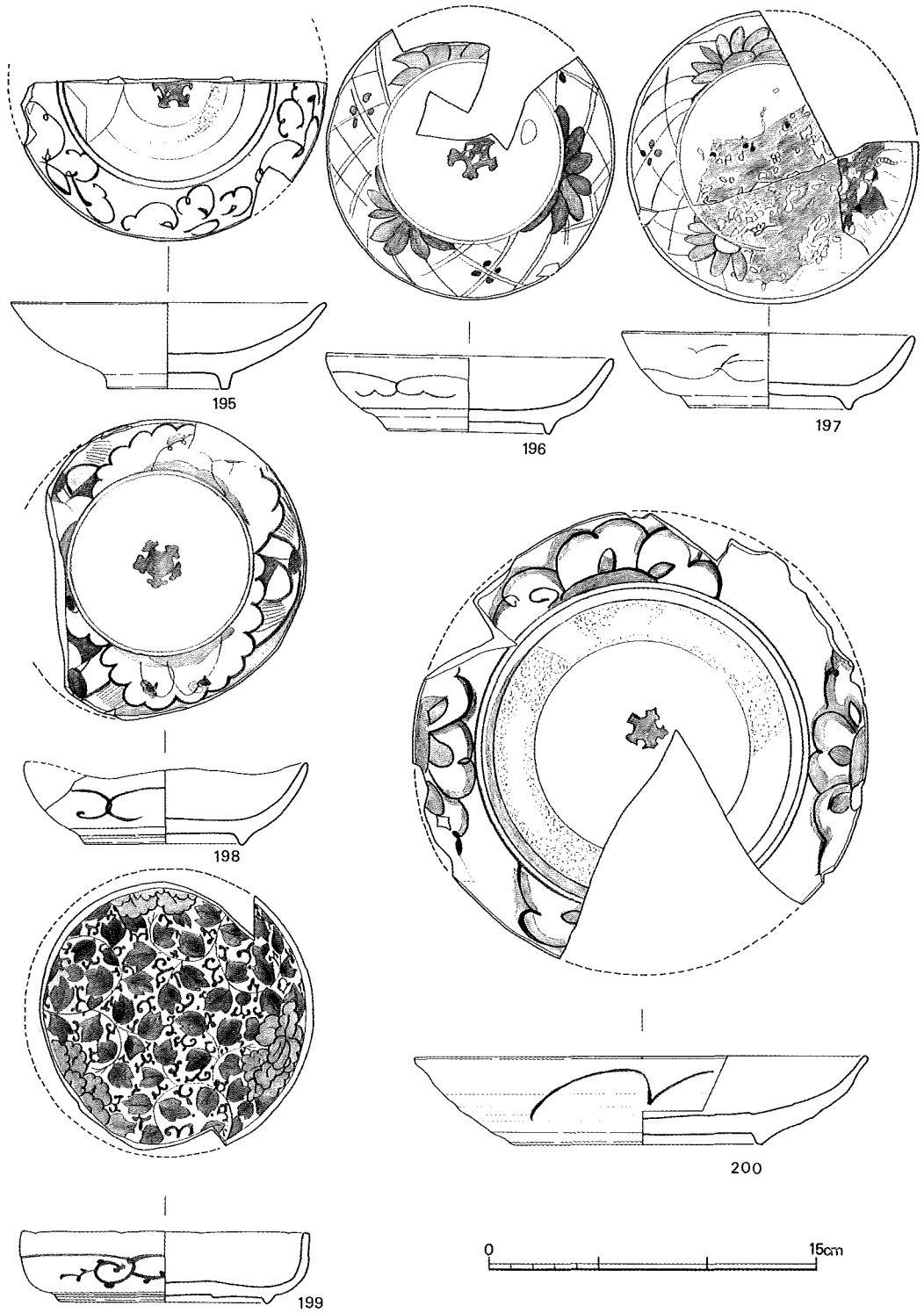


Fig. 114 近世陶磁器⑬

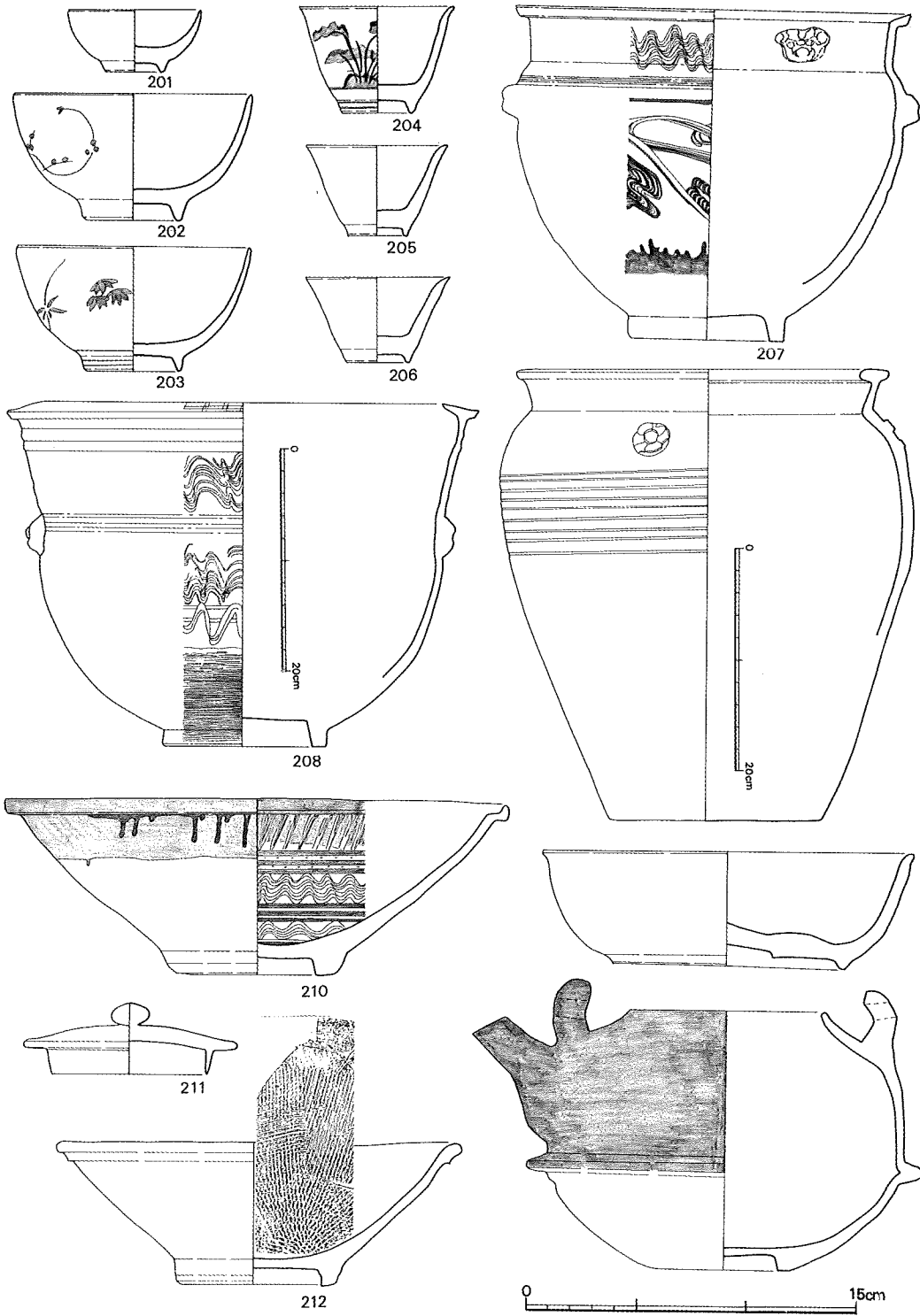


Fig. 115 近世陶磁器⑩

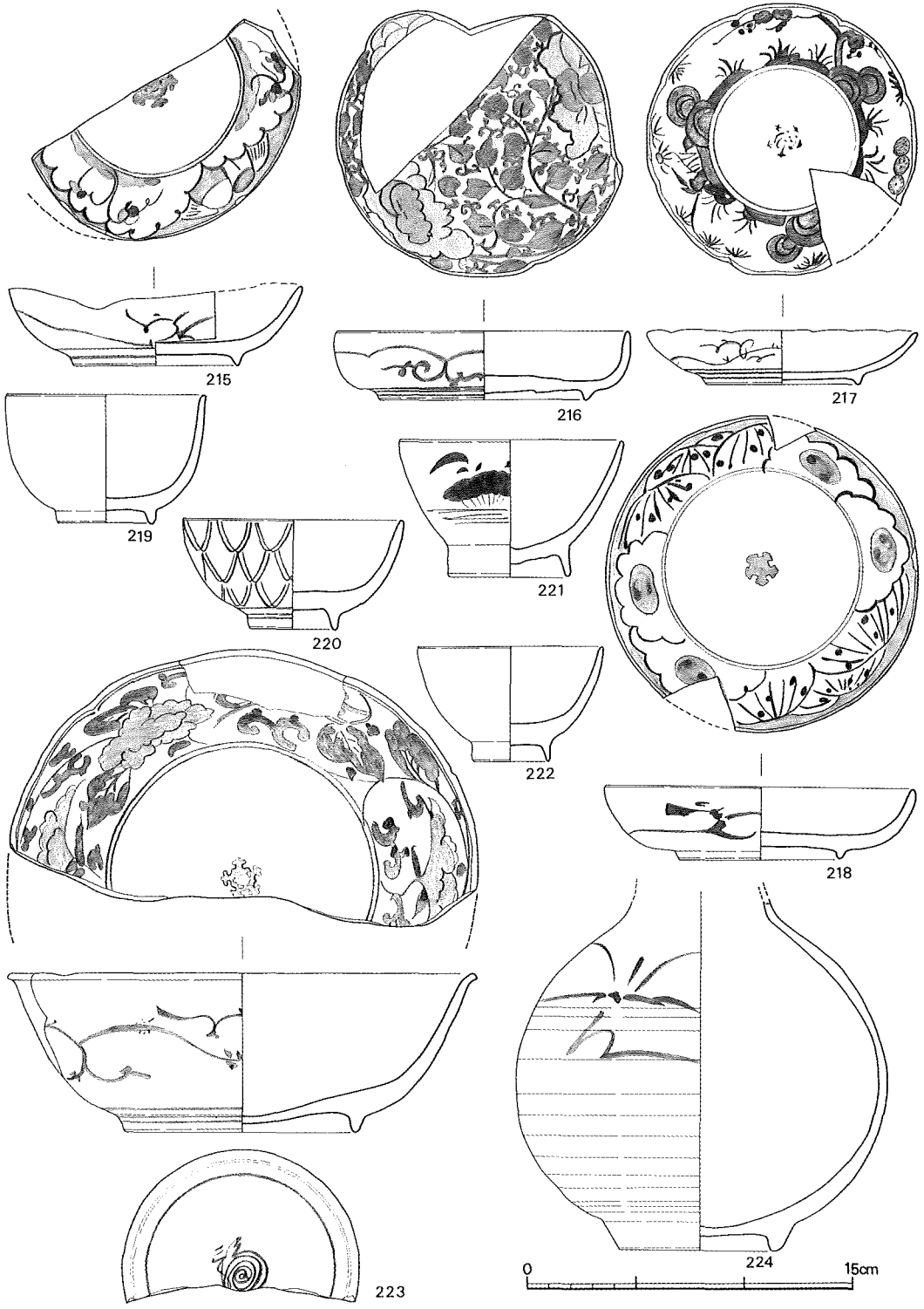


Fig. 116 近世陶磁器①

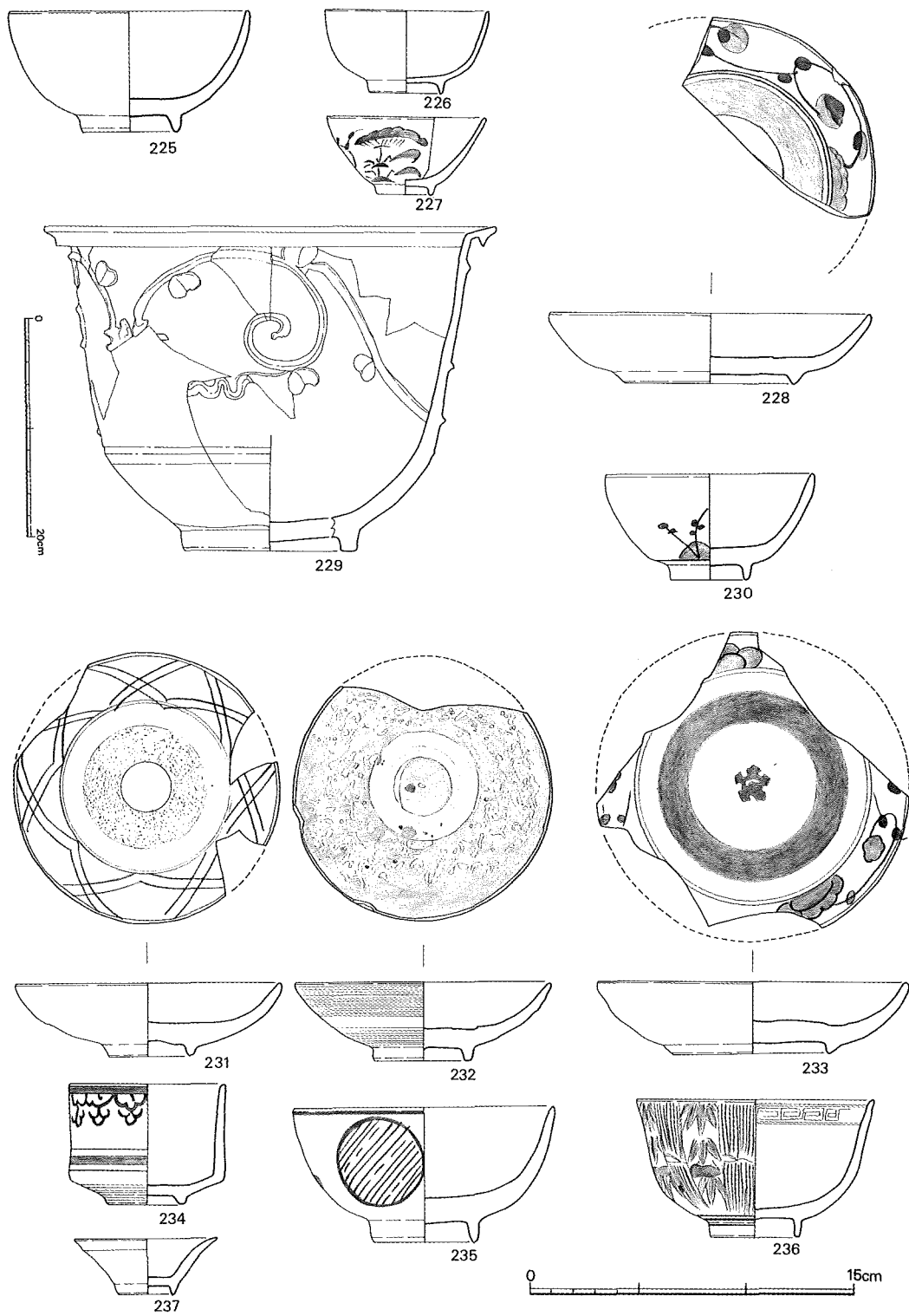


Fig. 117 近世陶磁器⑩

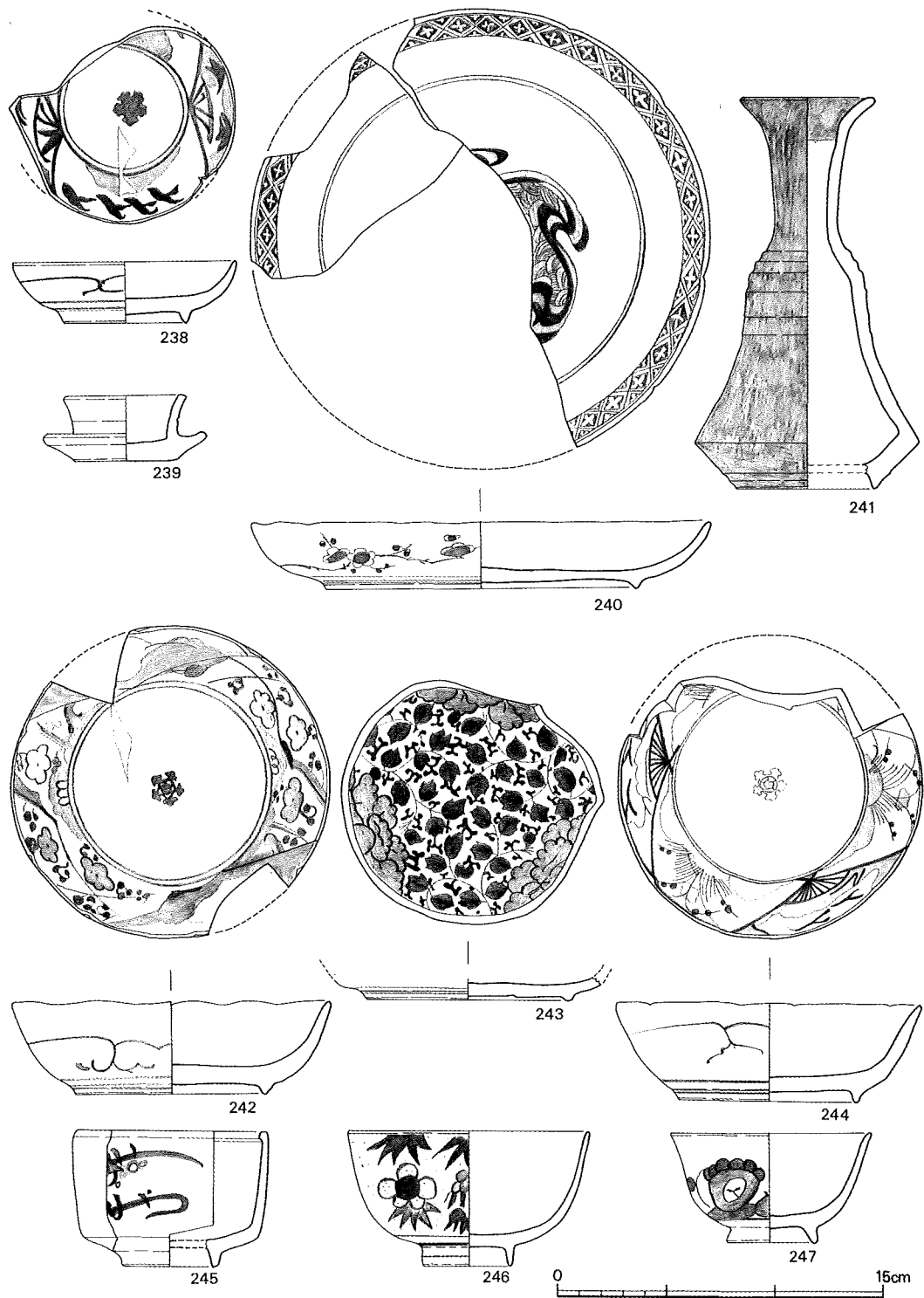


Fig. 118 近世陶磁器⑩



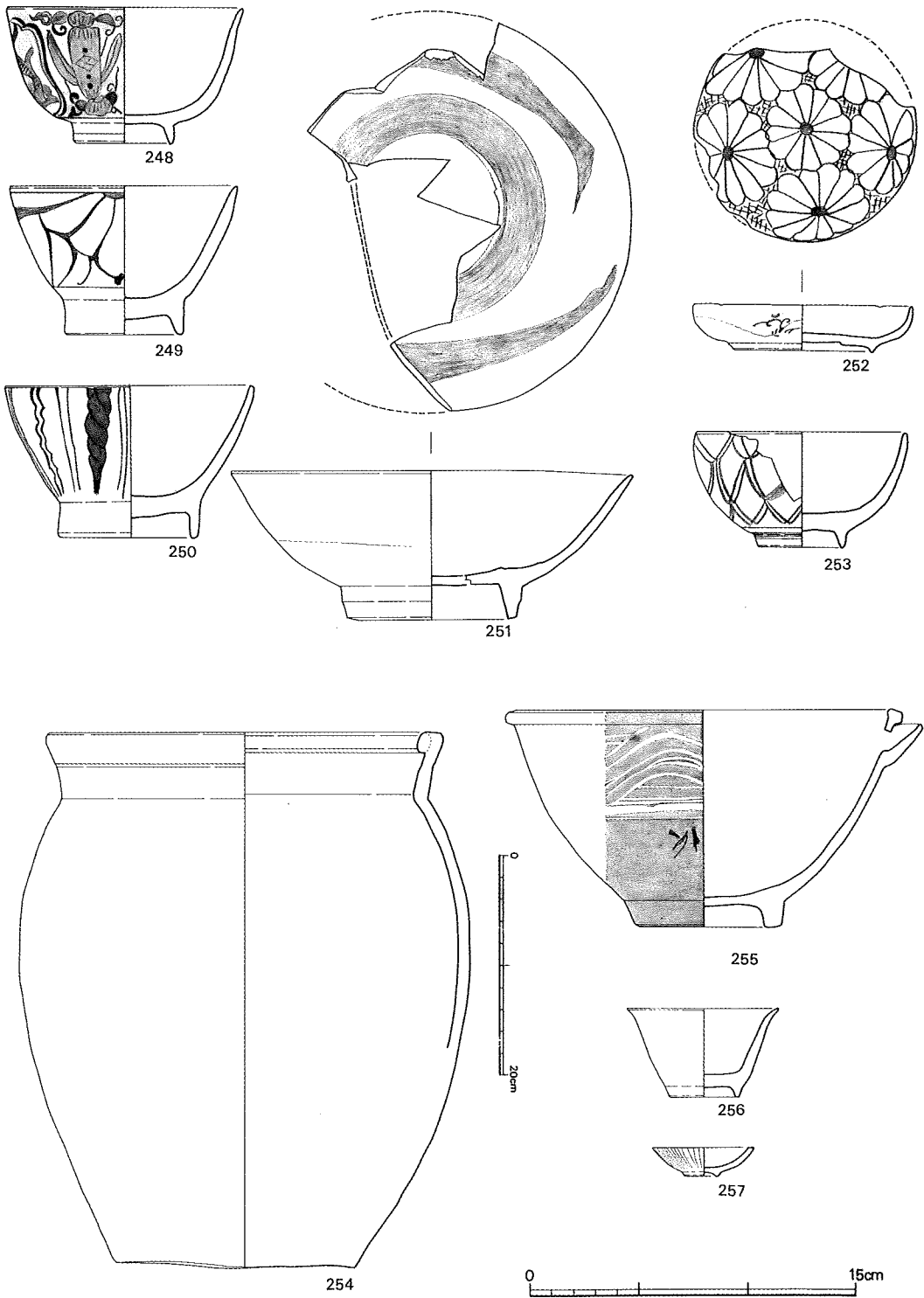


Fig. 119 近世陶磁器②

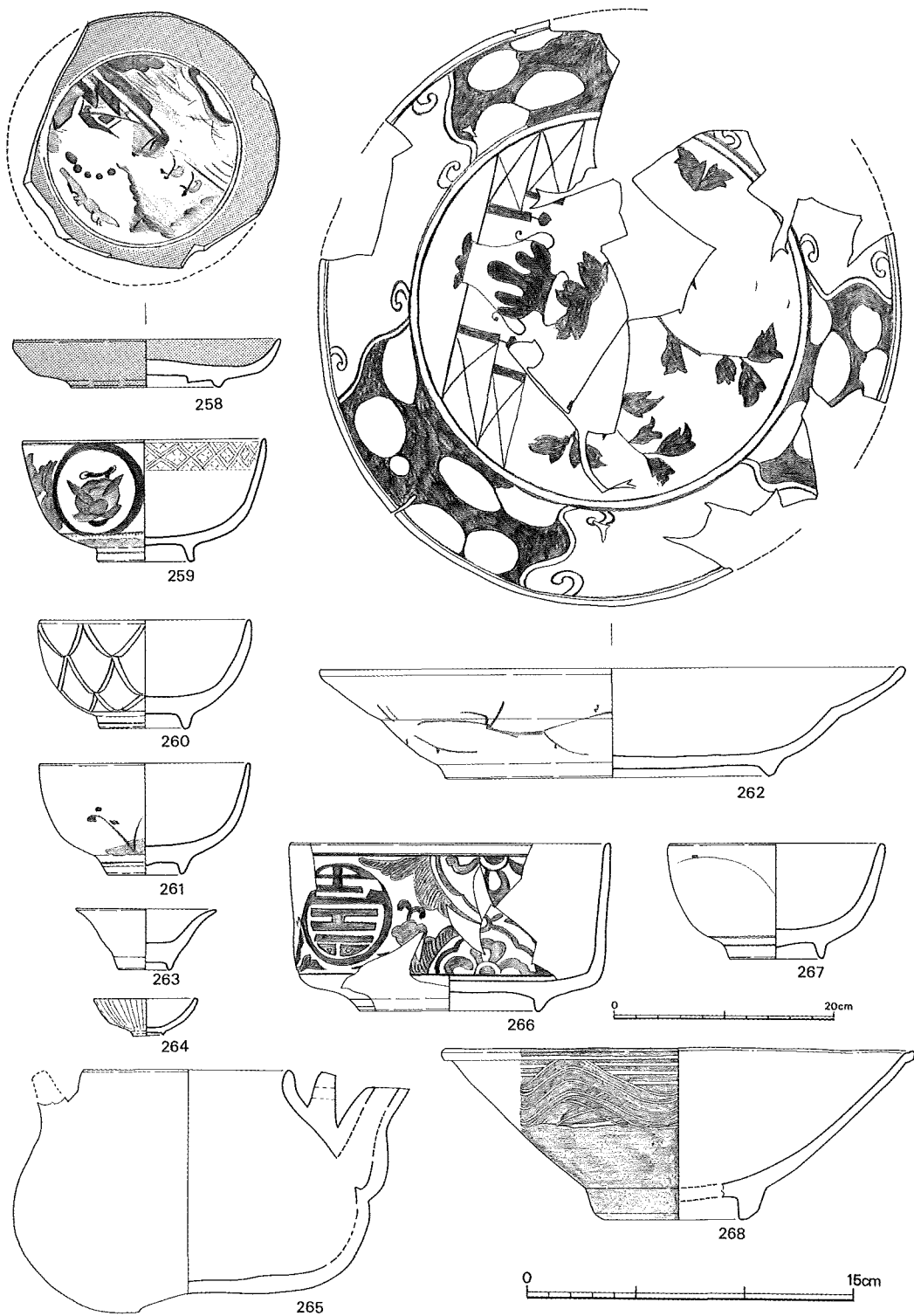


Fig. 120 近世陶磁器②

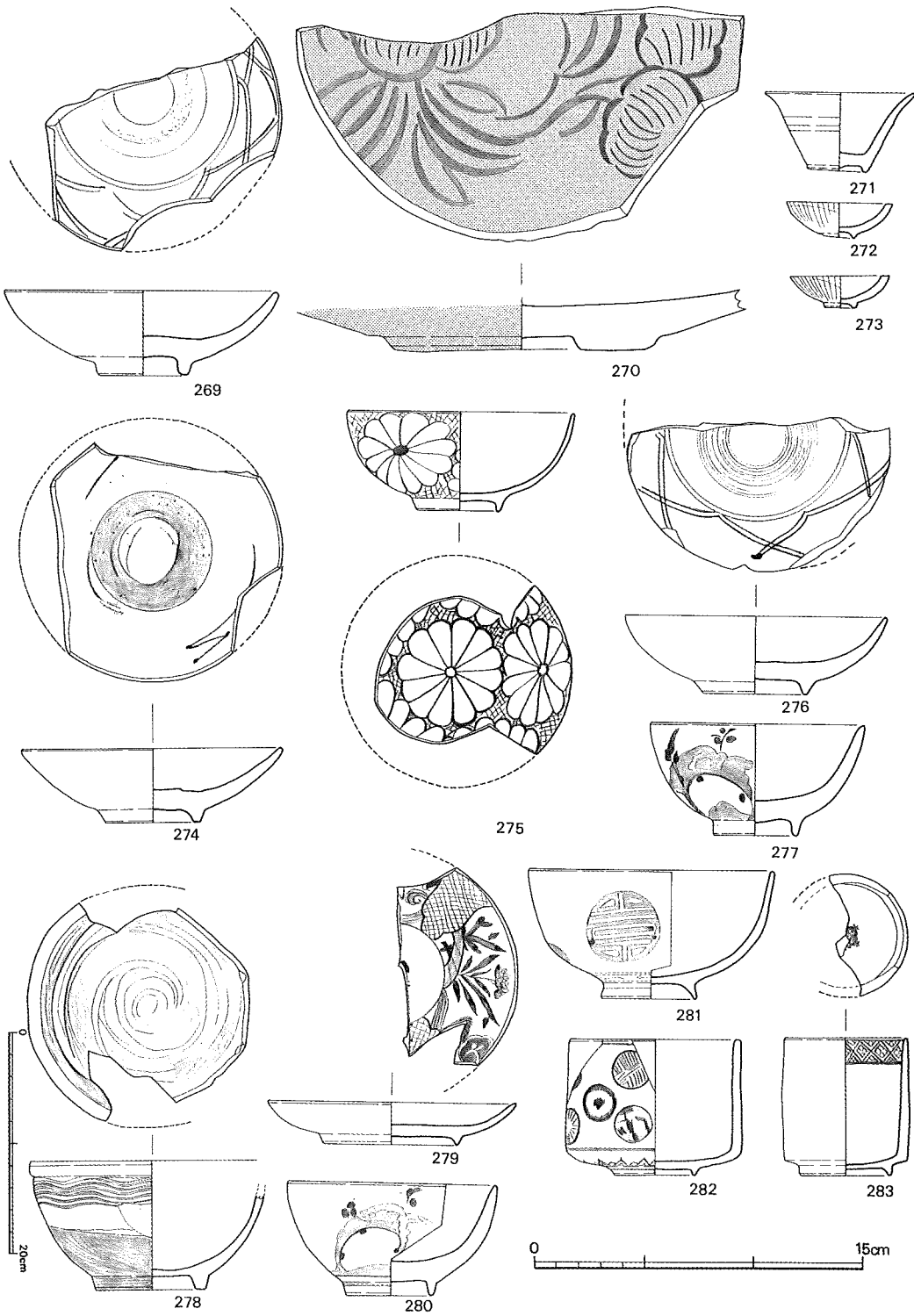


Fig. 121 近世陶磁器②

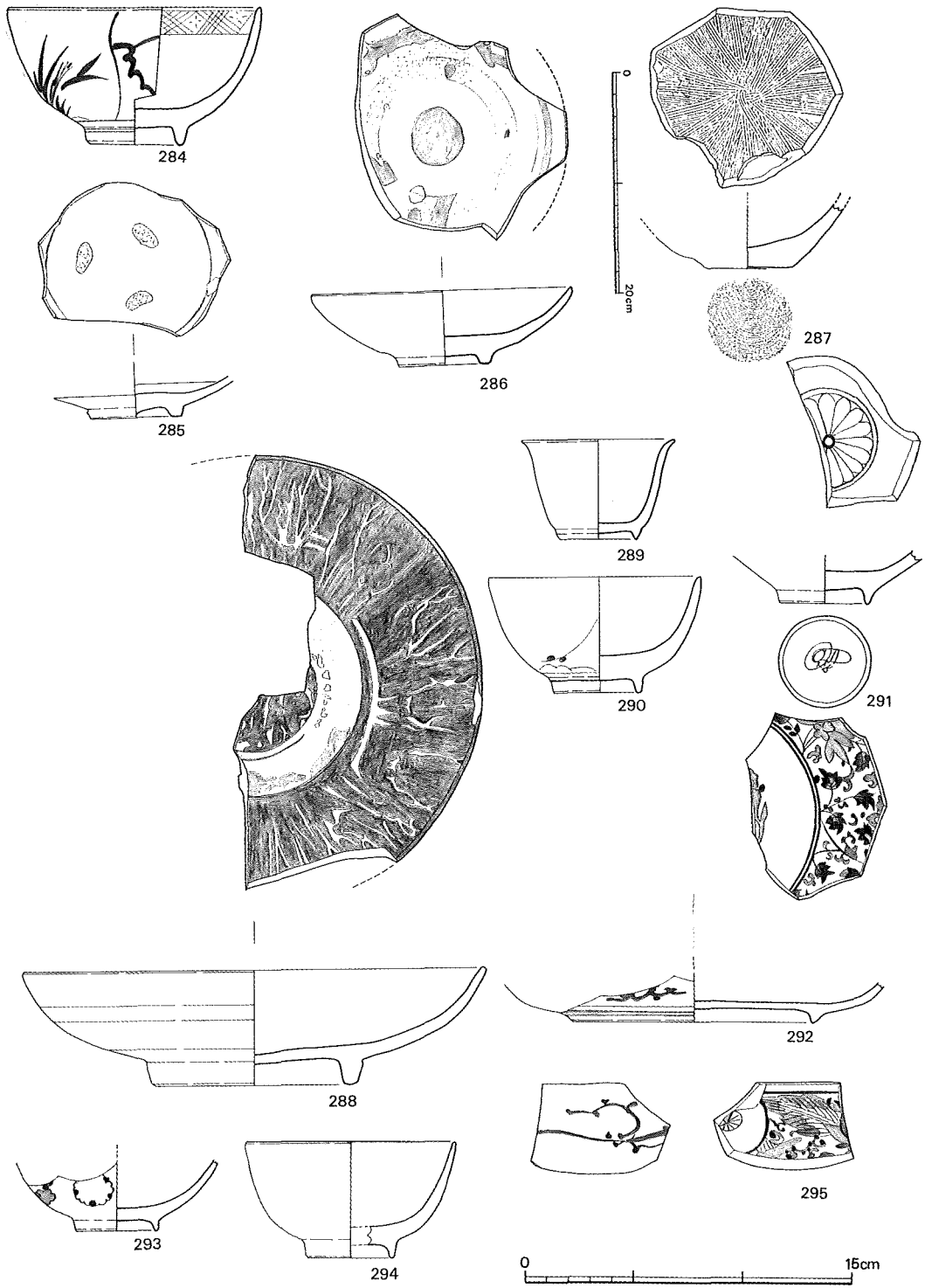


Fig. 122 近世陶磁器③

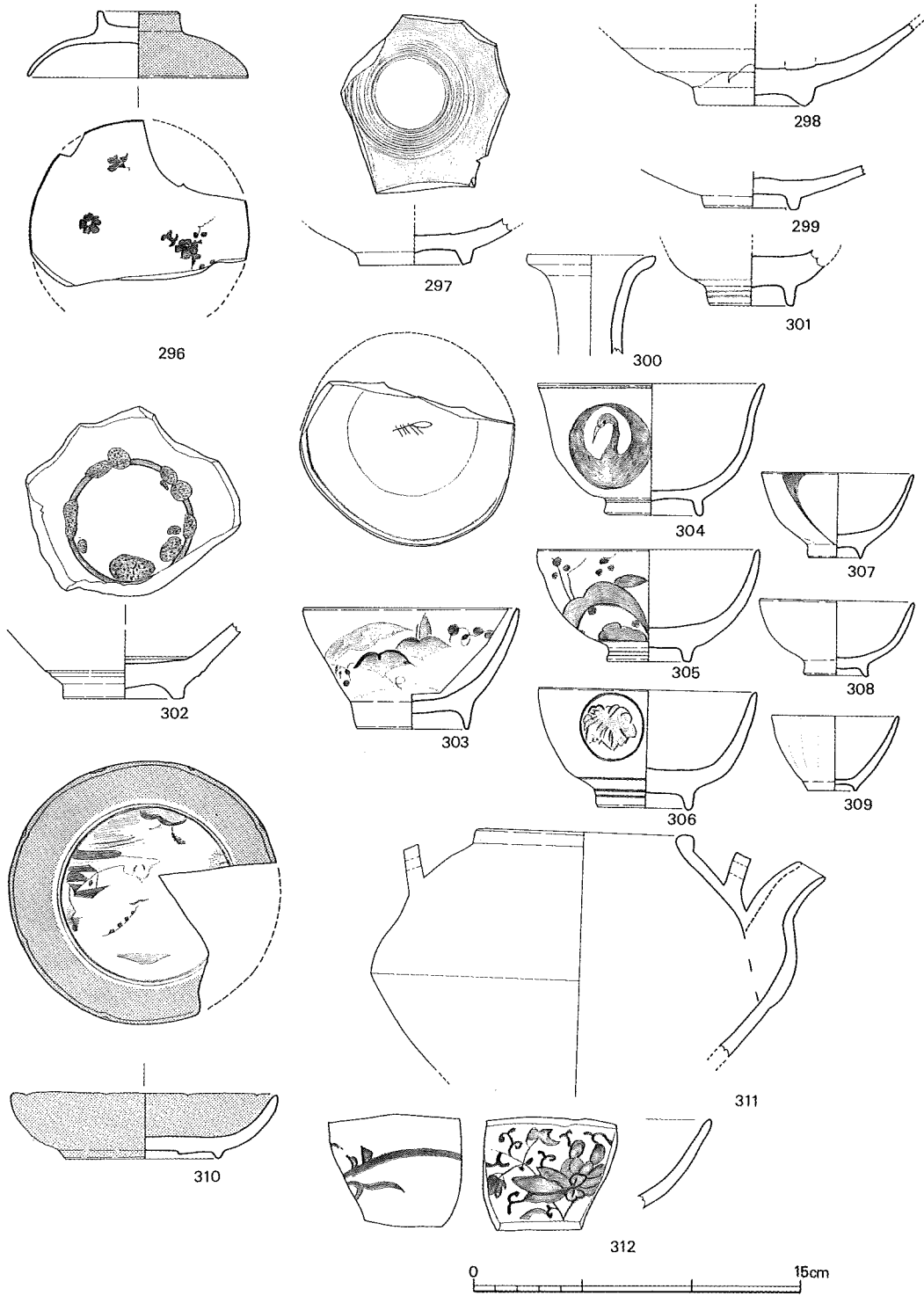


Fig. 123 近世陶磁器②

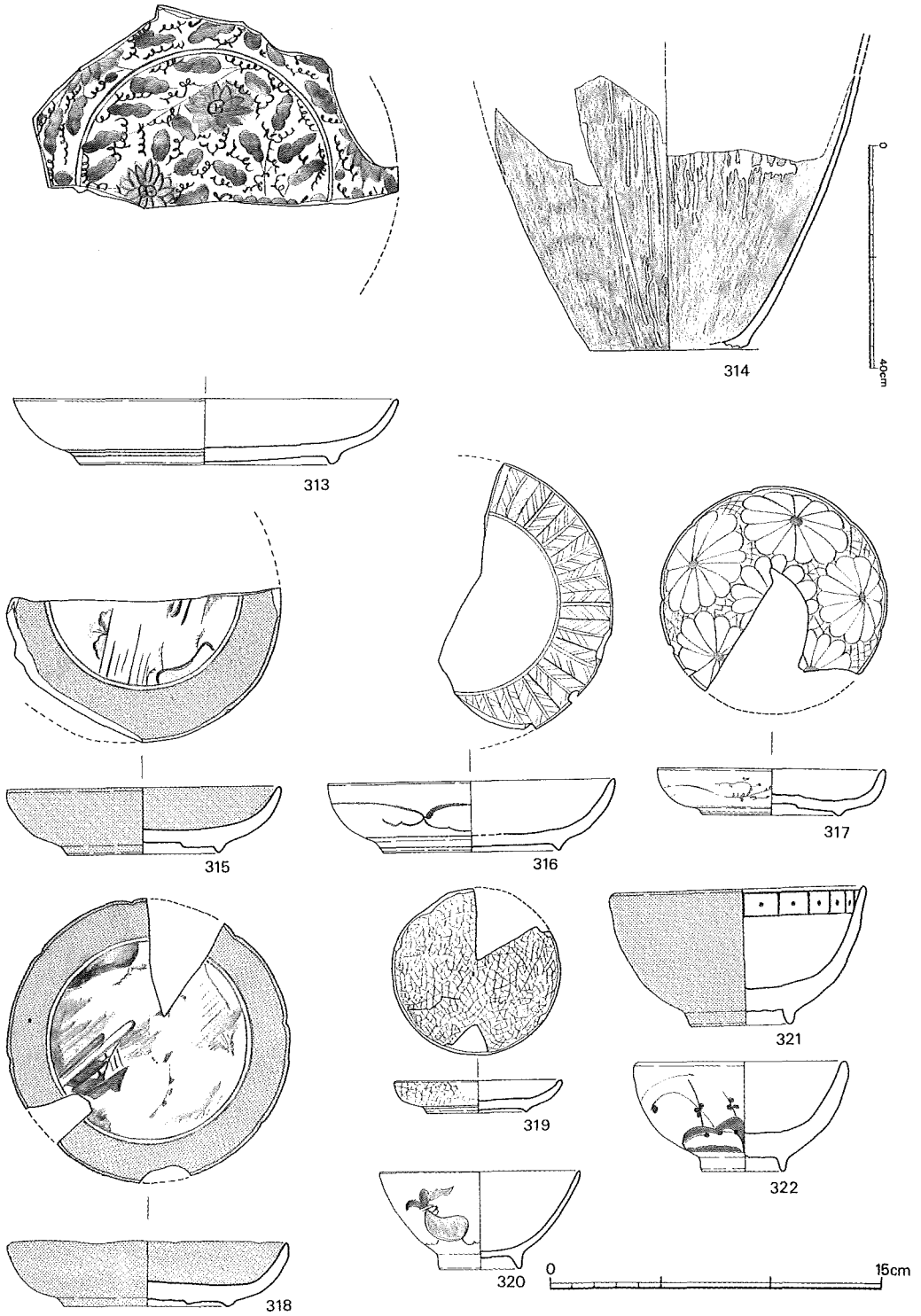


Fig. 124 近世陶磁器②

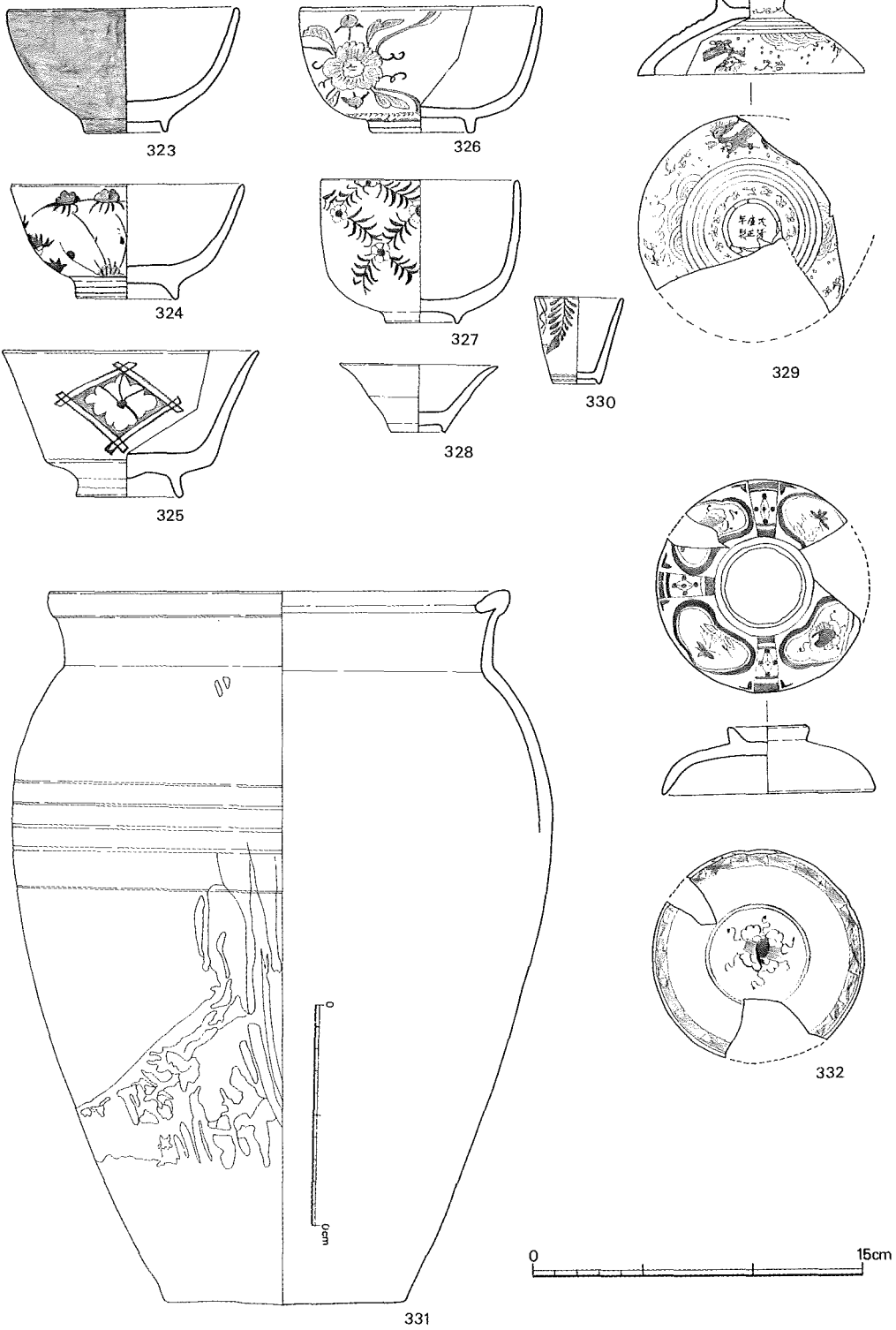


Fig. 125 近世陶磁器②

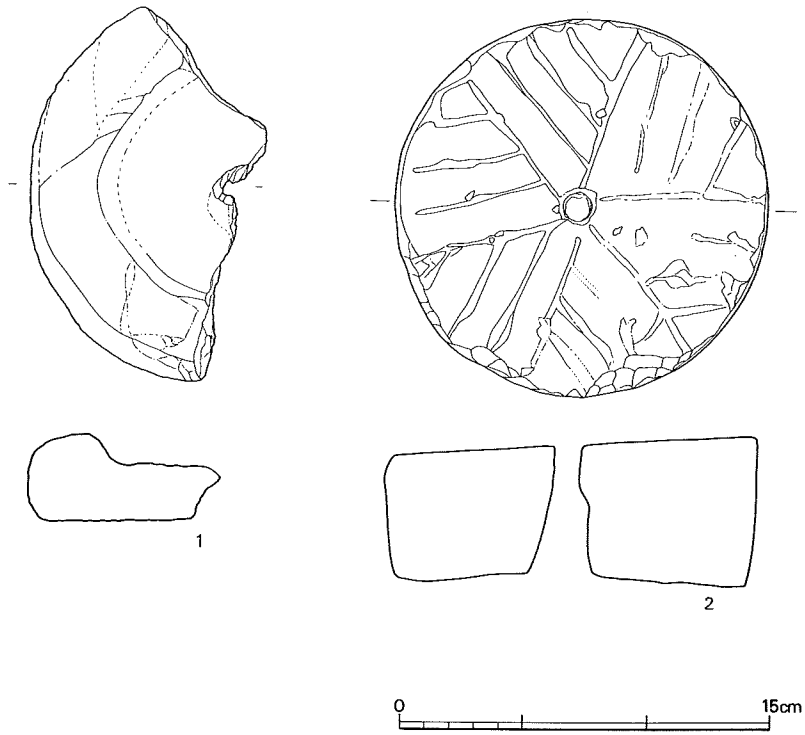


Fig. 126 近世の石臼



Tab. 3 陶磁器観察表①

単位はmm, ( ) は推定復原値

挿図 番号	器 種	口径	器高	特 徴	生 地 釉 調	出 土 遺 構 地区
		高台径	高台高			
1	湯 呑	48	79	口径より底部径の方が大きい。高台無釉。鉄釉と 緑釉で描いた文様がある。陶器。	灰 色	2 D
		50	5		淡灰黄色	
2	〃	(88)	46	(朝顔型) 半欠品であるので2条の青緑色の釉が 流し込んであるが、完形品なら3条であろう。	黄 灰 色	2 D 3
		35	6		〃	
3	小 碗 B	100	52	草花文の文様の厚手“くらわんか茶碗”	灰 色	3 D
		38	7		〃	
4	中 碗 A	110	61	雲竜見込荒磯文碗。上から見た形が正円でなく精 円形に湾曲している。見込にも文様あり。	灰 色	3 D
		42	10		〃	
5	仏 飯 碗	43	45	表面に光沢がなく、ザラツとした感じである。底 部無釉。	黄 灰 色	3 D
		41	12		黒 色	
6	小 皿 B	103	26	見込一杯に梅の花を描く。高台裏底に銘あり。外 側に青磁釉をかける。	灰 色	4 D 4
		51	5		〃	
7	中 皿 A	(132)	33.5	菊の文様。見込中央に“こんにやく印判”による 五弁花。見込に砂粒等の付着がある。	灰 色	4 D 1
		70	4.5		〃	
8	〃	(127)	41	菊の文様を描いている。見込中央に“こんにやく 印判”による五弁花。「憲」の銘が高台裏底にある。	灰 色	4 D
		77	6		〃	
9	〃	119	29	見込一杯に蔓草文様を描く。のびのびとした筆勢 である。	灰 色	4 D
		7	5		灰 乳 色	
10	〃	135	38	菊の文様を描いている。中央の五弁花がつぶれて 丸くなっている。砂粒の付着した跡が残っている。	灰 色	4 D, 25 B K-11石垣
		74	4		〃	
11	小 皿 B	106	22	蛸唐草文様の小皿である。	灰 色	4 D
		72	3.5		〃	
12	中 碗 A	114	57	丸文を描いている。厚手の“くらわんか手”	灰 色	4 D 4
		44	8		〃	
13	小 碗 B	102	51	二重網手文様。	灰 色	4 D 4
		42	7		〃	
※ 14	すり 鉢	336	124	しっかりと高台がついている。内底に焼成の 時に出来たものか、輪状に跡がついている。	暗 灰 色	4 D
		118	24		暗 褐 色	
15	大 皿	228	48	青磁釉をかけた大皿である。見込内に山水文様を 描く。高台裏底に「太明成化年製」の銘あり。	白 灰 色	4 D 4
		135	5		淡 青 緑 色	
16	猪 口	66	48	外側に流麗な“牡丹唐草文様”を描いている。口 縁端には“袈裟だすき文様”がある。	精 白 色	4 D, 4 DF 26 E
		44	2		白 色	
17	小 皿	64	23	小ぶりの小皿である。もしかすると盃かもしれな い。釉薬が斑状にかけてある。	灰 白 色	4 - DF 4 D 4
		27.5	4		白 緑 色	
18	花 器			下半部のみが残存。内底の中央が突起している。	灰 色	4 D 4
		99	16		〃	
19	火 入 れ	148	74	青磁製の火入れ、内側にも青磁釉を流し込んでい る。蛇の目高台、どっしりとしたつくりとなっている。	灰 色	4 D, 4 集石
		93	5		淡 緑 色	
※ 20	徳 利	43		陶器製の徳利。底部が欠損。刷毛目文様。	レンガ色 灰 褐 色	4 D 4
※ 21	〃			陶器製の徳利。口縁部及び下半部が欠損。	レンガ色 灰 褐 色	4 D 4
22	〃			大きく「宮崎」という文字が書かれている。	灰 色 灰 黄 色	4 D
※ 23	深 鉢			白泥と鉄釉で文様をつけている。この器表面は荒 れている。底部の器壁が薄い。口縁のふちが欠損。	レンガ色	4 D 4 12 A
		131	17		灰 色	

※印は陶器

Tab. 4 陶磁器観察表②

単位はmm, ( ) は推定復原値

挿図 番号	器 種	口径		特 徴	生 地 釉 調	出 土 遺構 地区
		高台径	器高 高台高			
※ 24	大 鉢	532	202	白泥で外側に文様を描いている。内側には鉄釉で、 簡略な文様をつけている。	レンガ色	4 D 4 24C
		180	27		黒 褐色	
25	油 壺			描いているのは蔓草文様か。	淡黄灰色 灰 色	A-3 S 4 D
26	徳 利			色絵磁器。桜の木のそばに馬を描いている。	白 色 〃	4 D
27	中 皿 B	144	45	蜻唐草文様を描いている。見込は振文の一種であ ろうか。凹型高台。	灰 色	6 C
		84	5		〃	
28	中 皿 A	(132)	33	染手白抜文。別称“ろうはじき”とも呼ぶ。波佐 見町木場山古窯に類似資料あり。焼成悪い。	灰 色	6 C
		72	6		灰 黄色	
29	不 明 器	113	22	もう一つの何かの器とセットになっているものと 思われる。上面に草花文様あり。	白 黄色	C-4-II 6 C
		64	3		灰 色	
30	湯 呑	78	56	雪輪の中の図柄は、農夫をデフォルメしたものだ ろう。見込にも文様あり。	灰 色	6 C
		34	5		〃	
31	小 碗 B	98	50	簡略化された草花文を描く。	灰 色	6 C
		41	7		〃	
32	湯 呑	88	51	(朝顔型)内面に3条の青緑色の釉を流し込んで いる。米色磁を意識したものか。	淡黄灰色 黄 灰色	6 C
		34	5		〃	
33	盃	(78)	35	簡素で単純な井桁文であろうか。畳付は露胎。	灰 色	6 C 4 D
		32	3		〃	
34	紅 皿	47	16	縦縞のヒダが入れてある。白磁釉は内側のみ。外 側は露胎。	灰 白色	6 C
		14	2		白 青色	
※ 35	大 碗	162	87	白泥で簡略な文様を描く。木原系江永古窯産。	灰 黒 色	6 C
		57	10		黒 褐色	
※ 36	摺 鉢	371	139	しっかりとした高台がつく。	レンガ色	6 C
		128	23		黒 褐色	
※ 37	甕	210	374	肩部に沈線をめぐらしアクセントをつけている。	レンガ色	暗茶褐色
		190			〃	
38	小 皿 B	105	27	桓根、芭蕉に蝙蝠文を描く。めでたい文様とされ た。	白 色	9 B
		58	6		〃	
39	〃	106	27	桓根、芭蕉に蝙蝠文を描く。めでたい文様とされ た。	白 色	9 B
		58	6		〃	
40	中 碗 蓋	96	30	内側に亀甲文を描く。		9 B
		38	7			
41	湯 呑	81	5	縞文様の中に蝶を描いている。見込にも文様あり。 半焼けであろうか、表面がザラザラしている。	一 灰 黄色	9 B
		34.5	5		〃	
42	中 碗 A	112	56	器形は口縁部が外反する。格子文様を描く。見込 を蛇の目剥ぎする。その中に「 <u>XXX</u> 」の文様がある。	灰 色	9 B
		44	7		〃	
※ 43	甕	153	134.5	小ぶりの甕である。釉もしっかりかけてある。梅 干入れにでもしたのであろうか。	暗 灰 色 暗黄褐色	9 B
		82	11		〃	
44	盃	66	25	尙程の残存部では内・外面とも無文様である。器 高が低く、内面中央に突起がある。	精 白 色	11A土拡
		27	4		白 色	
45	盃	71	35	簡略化された文様を描く。畳付は露胎。	精 白 色	11A土拡 A-4
		27	5		白 色	
46	中 皿 A	(120)	31	簡素な文様である。蛇の目剥ぎ。高台部は露胎。	灰 色	12A 1
		38	4.5		〃	

※印は陶器

Tab. 5 陶磁器観察表③

単位はmm, ( ) は推定復原値

挿図 番号	器種	口径		特 徴	生 地 釉 調	出 土 遺 構 地区
		高台径	高台高			
47	中 皿 A	(126)	36	草花文様を描く。見込中央に“こんにやく印判”による五弁花。	灰 色 〃	12A, A-5
		72	5			
48	〃	(118)	33	蛇の目剥ぎ。砂が付着している。内側に簡素な文様。外側は無文様。高台は露胎。	灰 色 〃	12A 1
		42.5	5			
49	〃	(124)	35	草花文様。“こんにやく印判”による五弁花あり。	灰 色 〃	(A-3) 12A 6
		66	5			
50	〃	(128)	37	蛇の目剥ぎ。斜交線文様。外側は無文様。畳付のみ露胎。	灰 色 〃	12A, A-3
		47	5			
51	〃	130	34	染付白抜文。見込中央に“こんにやく印判”による五弁花。波佐見・木場山古窯に類似資料あり。焼成不良品か?	灰 色 黄 灰 色	12A 1
		78	6			
52	中 皿 B	139	29	蛇の目剥ぎ。菊の文様を描く。見込は“こんにやく印判”による五弁花。	灰 色 〃	12A 3
		75	6			
53	〃	(140)	33.5	草花文様。外側にも文様がある。	灰 色 〃	12A 3
		81	5			
54	〃	142	42	梅の文様等を描く。やや写実的である。中央部の変形四角は欠損部。	灰 色 〃	12A
		83	6			
55	中 皿 A	118	35.5	蛇の目剥ぎした皿。途中で一度屈曲して立ち上がる。唐津系の皿。		12A B区
		40	5.5			
56	盃	73	30.5	上からみだが、若干楕円形に変形している。高台部のつくりが小さい。全面に白磁釉をかける。	精 白 色 白 色	12A, A-3 12A 3
		24	2.5			
57	小 碗 B	99.5	54	菊の文様を“こんにやく印判”により押ししている。高台裏底に「㊦」の銘あり。	灰 色 〃	12A, A-3
		41	8			
58	中 皿 A	(124)	35	蔓草文様を描いている。見込中央に“こんにやく印判”による五弁花あり。	灰 色 〃	12A, A-3
		65	6			
59	中 皿 B	143	45	梅の花を描く。中央に“こんにやく印判”による五弁花。高台裏底に「㊦」の銘あり。呉須の発色が良い。	灰 色 〃	12A
		84	6			
60	小 碗 B	98	56	やや簡略化された草花文様を描く。厚手。畳付は露胎, 高台裏底は「㊦」の銘あり。	灰 色 〃	12A 3
		40	7			
61	〃	99.5	53	二重網手文様。比較的厚手。網手の線が細い。	灰 色 〃	12A 3
		39	7			
62	〃	102	52	雪輪花と、水仙の花を描いている。	灰 色 〃	12A 3
		43	7			
63	盃	74	35	簡素な文様を描いている。畳付は露胎。	灰 色 〃	12A 4
		34	5			
64	小 碗 A	92	48	菊の文様を描く。		12A 4
		34	5			
65	小 碗 B	101	57	簡略化された草花文様を描く。全体的に薄手。高台裏底に大明年製の略字あり。	白 黄 色 白 色	12A 1
		43	8			
66	〃	100	52	“こんにやく印判”による菊の花の文様と井桁を描く。高台が小さい。見込に「遠」の文様あり。	灰 色 〃	12A 1
		33	5			
67	〃	102	58	簡素な梅の文様を描く。比較的薄手のつくり。高台裏底に大明年製の略字がある。	白 色 〃	12A 1
		41	9			
68	〃	98	51	簡略化された草花文様を描く。厚手。	灰 色 黄 灰 色	12A 3
		35	7			
69	〃	101	50	蝶を描いている。器形は丸く内湾する。高台が小さい。	灰 色 〃	12A 3
		39	4			

Tab. 6 陶磁器観察表④

単位はmm, ( ) は推定復原値

挿図 番号	器 種	器高		特 徴	生 地 釉 調	出 土 遺 構 地区
		口径 高台径	器高 高台高			
70	中 碗 A	110	60	菊の文様を描く。器形は少し内湾しながら開きぎみに立ち上がる。文様は126の高高台碗の文様に似ている。	灰 色	12A 6
		50	9		〃	12A 4
71	小 碗 A	94	51.5	器形は丸く内湾しながら立ち上がる。高台が小さい。	灰 色	12A
		47	4.5		白 乳 色	
※72	小 碗 B	100	49	口縁部が若干外反する。畳付に鉄釉を塗っている。全体的に暗灰色で貫入が入っている。	暗 灰 色	12A 4
		45	8		灰 色	
73	〃	103	56	簡素な文様を描く。	灰 色	12A
		43	7		〃	
74	湯 呑	70	57	(丸型) 器形は口縁部がややすぼまる。格子文様を描く。	白 黄 色	12A 4
		35	7		白 黄 灰 色	
75	猪 口	66	37	口縁部がやや開く。畳付は露胎。	灰 色	12A H
		27	5		〃	
76	〃	57	36	口縁部がやや開く。畳付は露胎。	灰 色	12A 1
		26	6		〃	
77	〃	72	57	器形はやや開きぎみに直立する。全面に白磁釉をかける。	灰 白 色	12A 3
		47	2		白 色	
78	〃	76	57	器形としては直線的にやや開きぎみに立ち上がる。	灰 色	12A 3
		48	2		白 色	
※79	大 鉢	454	138	三島手象眼の大鉢である。見込に8個の砂の目跡がついている。	暗レンガ色	12A・A-3
		138	20		暗 褐 色	12A 3・12A 4
※80	片 口	216	113	白泥の文様をめぐらした片口。外側に上半にも施す。小ぶり。	レンガ色	12A 3
		90	23		黒 褐 色	12A 4
81	鉢	158	56	高台裏以外は全面に白磁釉をかける。凹型高台。	白 黄 色	12A 1
		110	6		白 青 色	
82	〃	112	55	高台裏以外は全面に白磁釉をかける。	白 黄 色	12A 1
		89	9		白 青 色	
83	盃	68.5	27.5	畳付は露胎。	灰 黄 色	12A 3
		29	4		〃	
84	大 皿	186	29	見込と皿の内側に“牡丹唐草”文を描いている。高台裏底に「園」の銘あり。	灰 色	12A 4
		128	4.5		〃	
85	猪 口	64	27	朝顔状に口縁部が開く。畳付露胎。	灰 色	12A 3
		24	6		白 乳 色	
86	〃	69	38	口縁部が朝顔状に開く。高台の削り出しがシャープ。	灰 色	12A 4
		25	4		〃	
87	〃	63	39	口縁部がやや開きぎみの器形をしている。畳付に砂の付着あり。	灰 色	12A 4
		28	6		〃	
88	中 皿 B	143	31.5	蛇の目剥ぎ。見込に“こんにやく印判”による五弁花。内面に菊の花を描く。外面にも文様あり。	黄 灰 色	14E
		77	6		白 乳 色	
89	盃	(72)	36	口縁部近くの外側に簡略化した文様を描く。	灰 色	14E
		28	5		〃	
90	高高台碗			外側に大きく大胆なフォルムで菊の花を描いている。	灰 色	14E 3
91	小 碗 B	99	54	簡略化した草花文様を描く。畳付部露胎。焼成不良品。	黄 灰 色	14E
		42	7		灰 黄 色	
92	碗			外側に竹笹の文様を描く。	灰 色	14E 3

※印は陶器

Tab. 7 陶磁器観察表⑤

単位はmm, ( ) は推定復原値

挿図 番号	器種	器高		特 徴	生 地 釉 調	出 土 遺 構 地区
		口径 高台径	器高 高台高			
93	中 碗 A	116	61	口縁部が外反する。見込に「V」の文様あり。	灰 白 色 白 色	14E 25B C
		47	7			
94	小 碗 B	100	51	二重網手文様。畳付は露胎。	灰 色 〃	15E
		43	8			
95	深 皿	216	44	広い見込一杯に大きく牡丹や梅等を描き、更に四角く窓をとって藤を描いている。高台裏底に「奇玉宝鼎之珍」の銘あり。	灰 色 〃	19C
		128	6			
96	丸 碗	87	60	竹笹文を描く。畳付に細砂の跡。見込に「寿」の銘あり。「寿」の略字であろうか。	灰 色 〃	19C
		38	6			
97	盃	78	35	半欠品であるが、文様は恐らく海浜風景を描いているのだろう。	灰 色 〃	19C
		30	4			
98	猪 口	65	26	口縁部が朝顔のように開く器形をしている。	灰 色 〃	19C
		25	6			
※99	土瓶の蓋	67	31	完形品。丸ボタン状の取手がある。	暗レンガ色 暗 灰 色	24C 1
100	大 皿	210	29	“蛸唐草文”を描いている。見込には菊の花等が描かれている。高台裏底の銘は「大」だけわかる。	灰 白 色 〃	24C 1
		147.5	4			
101	湯 呑	73	54	外側に菖蒲を描いている。撥形高台。畳付は露胎。	灰 色 〃	24C 1
		38	6			
102	小 碗 B	103	54	厚手。雪輪花に草花文様を描く。高台裏底に「ん」の簡素な銘あり。	灰 色 〃	25B D-2 P
		38	7			
103	中 皿 A	125	27			25B
		75	4			
104	〃	(132)	48	見込中央に“こんにやく印判”による五弁花。内側に葡萄・蔓草を描いている。	灰 色 〃	25B
		77	5			
105	中 皿 B	(137)	32	蛇の目割ぎ。内側に蔓草文様を描く。中央に“こんにやく印判”による五弁花。外側無文様。	灰 色 〃	25B 4
		79	5			
106	盃	(70)	33	口縁部近くの外面に簡素な文様を描く。外側はほのかに黒づんでいる。	灰 色 〃	25B
		28	5			
107	〃	74	32			25B
		29	4			
108	〃	70	32	口縁部近くの外側に簡略化された文様を描く。	灰 色 〃	25B
		29	5			
109	〃	73	38	1/2程欠損している。残存部には文様はない。半焼けの製品か？泥でよごれている。	灰 色 〃	25B
		29.5	4.5			
110	〃	77	38	器形としては丸味を帯びながら立ち上がる。無文様である。	灰 色 白 色	25B
		32	5			
111	〃	73	32	107の資料のような文様が入るものと思われる。文様の一部残存。	灰 色 〃	25B
		26.5	3.5			
112	〃	72	31.5	口縁部近くの外側に簡略化した文様を描く。焼成悪くひび割れている。畳付に砂の付着あり。	灰 色 〃	25B
		31	4.5			
113	〃	72	38	外側に海浜風景を描く。	精 白 色 白 色	25B
		27	5.5			
114	小 皿 B	108	21	見込に様式化された松竹梅、その回りに“蛸唐草文”を描く。高台裏底に「囀」の銘あり。	精 白 色 灰 色	25B
		69	4			
115	高高台碗	103	61	外側の文様は草花文様であろうか。見込のは簡略化された「寿」の文字であろう。	灰 色 〃	25B 4
		51.5	11			

※印は陶器

Tab. 8 陶磁器観察表⑥

単位はmm, ( ) は推定復原値

挿図 番号	器 種	口径	器高	特 徴	生 地 釉 調	出 土 遺 構 地区
		高台径	高台高			
116	小 碗 A	94	48	外側に簡素な草花文様を描く。畳付は露胎。	灰 色 〃	25 B
		40	6			
117	湯 呑	70	56	底部径より口径の方が小さい。文様は幾何的な“七宝”の文様であろうか。	灰 色 〃	25 B
		36	5			
118	〃	(84)	53.5	残存部が小さいため文様特定できず。高台のつくりが小さい。	灰 色 〃	25 B
		34	3.5			
119	小 碗 B	101	49	簡略化された草花文様を描く。畳付に細砂の付着あり。	灰 色 〃	25 B 12 A
		39	7.5			
120	小 碗 A	(92)	49	半欠品。簡素な草花文様を描く。	灰 色 〃	25 B 4
		38	6			
121	小 碗 B	103	52	簡略化された草花文様を描く。厚手のつくり。	灰 色 〃	25 B
		40.5	7			
122	猪 口	74	35	口縁部がやや開く。畳付に砂の付着あり。	灰 色 〃	25 B
		31	5			
123	小 碗 B	102	51.5	外側無文様。見行に「圭」の字が書いてある。	灰 白 色 白 灰 色	25 B 4
		42	5.5			
124	中 碗 A	106	61	厚手のつくりで比較的重い。外側に丸文を描く。見込に“こんにやく印判”による五弁花あり。	灰 色 〃	25 B
		47	9			
125	〃	114	58	厚手のつくりで比較的重い。外側に丸文を描く。畳付は無釉。	灰 色 〃	25 B
		41	9			
126	高高台碗	105	62.5	外側の文様は“こんにやく印判”による菊と、筆による葉の部分とに使い分けているようである。見込にも文様あり。	灰 色 〃	25 B
		47	12.5			
127	〃	117	55	高台部が半欠。外側の文様は比較的写実的な松の樹と枝を描いている。見込に文様あり。	灰 色 〃	25 B
		111				
※ 128	反り碗	104	58	米色磁を意識したものだろうか。高台部露胎。	淡黄灰色 黄 灰 色	25 B
129	猪 口	82	57	器形としては、若干口縁部が広がりながら立ち上がる。外側の文様は草花文様に蝶を描いている。見込に「彦」の文様あり。	淡黄灰色 〃	25 B
		67.5	1.5			
130	紅 皿	57	14	外側に縦縞のヒダがたくさん入っている。内側は白磁釉を丁寧にかける。外側は大半が露胎。	灰 色 〃	25 B
		17	2			
131	大 皿	230	47	見込一杯に山水風景を描き、その円圏の外から高台裏底を除く全てに青磁釉をかける。	白 灰 色 淡青緑色	25 B
		136	5			
132	徳 利	34	197	胴部はほぼ球形をなしている。首部は少し傾く。小さな高台が作り出され、外底はやや中へ入り込む。	灰 色 白 色	25 B
		65	7			
※ 133	片 口	216	107	小ぶりの片口。外側の上半と内面の全面に黒褐色の釉をかけている。	レンガ色 黒 褐 色	25 B
		96.5	15			
134	仏 飯 碗	76	58	外側に菊の花の文様を描いている。畳付部は無釉。	灰 色 〃	25 B
		42	24			
135	〃	74.5	54	焼成不良品である為、表面が素焼きのようにザラザラしている。	灰 黄 色 〃	25 B 4
		43	23.5			
136	中 碗 B	(121)	61	外側に竹笹文を描く。見込には“こんにやく印判”による五弁花の一部がみえる。	灰 色 〃	26 E
		48	8			
137	中 碗 A	107	59	外側に斜行する“よろけ文”を描く。見込内にも帆柱のような文様あり。	灰 色 〃	26 E
		41	9			
138	小 碗 B	98	53.5	二重網手文様。畳付は露胎。	灰 色 〃	26 E
		43	7			

※印は陶器

Tab. 9 陶磁器観察表⑦

単位はmm, ( ) は推定復原値

挿図 番号	器種	口径		特 徴	生地 釉 調	出土 遺構 地区
		高台径	高台高			
139	火入れ	116	79.5	青磁製。蛇の目高台である。落ち着いた色調の青磁である。	灰 色	26 E
		62	10			
140	湯呑	74	54	外側に菖蒲を描く。畳付は露胎。	灰 色	26 E
		36	7			
141	中皿 A	128	41	蛇の目割ぎ, 斜交線文様。外側は無文様。畳付は露胎。	灰 黄色	26 E
		52	6			
142	鉢	151	67	外側と見込に牡丹を描いている。胴下部に重ね焼きした時の別個体の破片が付着している。	灰 色	26 E
		61				
143	猪口	67	27	朝顔状に口縁部が開く器形。	灰 色	26 E 4
		26	5			
144	鉢	148	55	81, 82の鉢とほぼ同じ。高台裏底以外は全面に白磁釉をかける。	白 黄色 白 青色	26 E
		101	6			
※145	大甕	774	080	口縁部が逆「く」の字状に内側に屈曲する。内面に格子目の押え具の跡。表面には水滴状の白泥の跡が, 内面にもかけている。	レンガ色 暗 褐色	32 A
		310				
146	中皿 A	(132)	33.5	染付白抜文様を施している。焼成不良。外側に土が付着している。	灰 色 灰 黄色	33 G
		80	5.5			
147	盃	60	37.5	外側に写実的で可愛らしく梅の花を描いている。	黄 灰色	33 G
		24	3.5			
※148	大鉢			底部の破片。櫛状のもので波形の文様をいれる。うすい白化粧で波形及び円圏をあらわす。	暗レンガ色 黒 褐色	33 G
		142	19			
※149	〃			口縁部のみの残存。内側に白泥で波形等の文様をつけた後, 褐色の釉をかける。外側は口縁部以下は露胎。	暗あぶき色 褐 色	34 G
※150	〃			口縁部の破片。波形の白化粧を施している。外側は口縁部以外は露胎。	レンガ色 茶 褐色	34 G G-4
151	中皿 A	(120)	35	蛇の目割ぎ。半欠品であるが, 内・外面とも無文様。高台部は露胎。	灰 色	34 G
		37	6			
※152	大甕			内面に格子目の押え具の跡。内面にかかるく白泥の釉をかける。底部のみ。	暗レンガ色 茶 褐色	34 G
※153	深鉢			一部分のみの残存。残存部を2分する形で深緑色と茶褐色の釉をかけている。また, 白泥で波形の文様をつける。	暗 灰色 暗うぐいす色	35-O
※154	大鉢			口縁部破片。波形等の白化粧を施した後, 黄褐色の釉を口縁部からかける。外側は口縁部以外露胎。二彩唐津。	レンガ色 黄 褐色	35-O P11埋
155	小碗 B	(100)		見込は蛇の目割ぎを施す。外側の文様は梅花。	黄 灰色 白 乳色	56 H 集石
※156	大碗			高台部のみの残存。見込は蛇の目割ぎを施す。高台裏底は深く割り込んでいる。内面はうず巻状に白化粧を施す。	暗あぶき色 白 乳色	56 H
		56	10			
157	碗			蛇の目割ぎ。青緑色の釉をかける。高台を含む底部露胎。	灰 色 青 緑色	56 H 集石
		39	6			
158	〃			底部のみの残存である。見込に文様が描かれている。部分的に焼成の状況でそうなるのか, うすいサーモンピンクになっている。	薄サーモンピンク 淡灰黄色	56 H 集石
		47	6			
※159	大鉢			底部のみの残存。白化粧で波形等の文様をつける。二彩唐津。	レンガ色 褐 色	56 H
160	油壺			肩部のみの残存。文様は草花文様が描かれている。	灰 色	56 H 集石
161	盃	66	28			2 B
		31	4			

※印は陶器

Tab. 10 陶磁器観察表⑧

単位はmm, ( ) は推定復原値



挿図 番号	器種	口径	器高	特 徴	生地 釉 調	出土 遺構 地区
		高台径	高台高			
162	深 皿	130	43			B 3 - II
		51	6			
163	徳 利	42.5		上部のみの残存。“竹笹文”を描いている。	灰 色 〃	4 C
164	小 碗 B	104	49	全体に丸味を帯びた器形をしている。文様は松竹梅とも一つ草花文様を描く。	灰 色	5 H
		39	5			
165	盃	70	31	外側に振り文を描いている。	灰 色 〃	D 3 - H
		27	3			
※ 166	徳 利			胴部最大径166mmほぼ球形をなす。口縁部欠。内底はうず巻状に削った為、突起が残っている。灰色と黒褐色釉。	暗 灰 色 灰 色	D 3 - II
		85	16			
167	小 碗 A	90	45	器形は半球状。全体的に薄手のつくり。草の上を蝶が舞っているところを描いている。	精 白 色 白 色	K - 9 S
		33	5			
168	盃	710	35	口縁部近くの外側に簡略された文様を描く。	灰 白 色 灰 色	14 E
		27	5			
169	小 碗 B	99	53	簡素な草花文様を描く。厚手。重い。畳付は露胎。	灰 色 〃	25 B
		38	8			
170	〃	96		薄手のつくり、外側に龍の文様がある。中国製の清染かもしれない。	精 白 色 灰 色	A - 2 - 石垣
171	深 皿	142	51	内側に“牡丹唐草文様”を描いている。	灰 色 〃	A - 1
		73	8			
172	中 皿 A	124	34	内側に“蔓草文様”を描く。見込中央に“こんやく印判”による五弁花。外側にも簡素な文様あり。	灰 色 〃	A - 2 - III, R P 12A
		65	5			
173	小 皿 B	116	18	菖蒲の絵が可愛らしく描いてある。	精 白 色 白 色	A - 2 石垣
		64	4			
174	碗 蓋	94	26.5	高台裏底をのぞいた外側に青磁釉をかける。内面中央に“こんやく印判”による五弁花あり。	精 白 色 灰 色	A - 2 石垣
		40	6.5			
175	湯 呑	74	59.5	(突立型) 外面には高台裏底を含めて青磁釉をかける。口縁部下の内面に袈裟だすき文様を描く。見込に印判による五弁花。	灰 色 〃	A - 2 石垣
		37	4.5			
176	小 碗 B	99	45	二重網手文様。網目はきれずにつながっている。高台裏に「多」の銘あり。	灰 色 〃	A - 2 石垣
		38	5			
177	盃	80	40	外側に松の文様を描く。内・外面に白磁釉をかける。焼成良。	灰 色 〃	A - 2 石垣
		32.5	5			
178	高高台碗	116	66	㍁程の残存。文様は草花文様であろうか。	灰 色 〃	A - 2 - 石垣
		60	16			
179	湯 呑	76	43	菖蒲・水仙を描く。内、外面に墨の吹き付けあり。	黄 灰 色 白 青色	A - 2 - 石垣 12A 3
		40	5			
180	小 碗 A	94	46	半球状の器形をなす。高台の径が小さい。全面に白磁釉をかける。	精 白 色 白 色	A - 2 - 石垣 12A
		30	6			
181	猪 口	65	36	口縁部がやや開く器形。畳付に砂の付着がある。	精 白 色 灰 色	A - 2 - 石垣
		25	4			
182	〃	68	32	口縁部が朝顔状に開く。高台部は露胎。	灰 色 〃	A - 2 - III
		27	4			
※ 183	大 鉢	530	196	内面全部に白化粧を施し、外面の上半に波形の白化粧を施す。内面に鉄釉で井桁風の文様を描く。	淡 レンガ色 黒 褐色	A - 2 石垣 A - 25, C - 2, A - 2
		162	28			
※ 184	甕	360	575	口縁部は引き伸ばし折り曲げて車のハンドル状になっている。内・外面に押え具及び叩き具の跡があるが、ナデ消している。肩に3条の沈線。	淡 レンガ色 黒 褐色	A - 2S, A - 4, 12A A - 35, C - 2, D - 2
		245				

※印は陶器



Tab. 11 陶磁器観察表⑨

単位はmm, ( ) は推定復原値

挿図 番号	器 種	口径	器高	特 徴	生 地 釉 調	出 土 遺構 地区
		高台径	高台高			
※185	深 鉢	311	323	大胆なフォルムで松の文様を描く。下地に口縁部の内側と高台部以外の外側に白化粧をしている。	レンガ色 黒褐色	A-2石垣, A-2B A-3 S, 12A
186	中皿 A	124	31	蛇の目剥ぎ, 砂が付着している。内側に簡素な文様, 外側は無文様。畳付は露胎。	灰 色	A-3
		37	4		〃	
※187	〃	117	37	蛇の目剥ぎ。胴上半部の度中で一度屈曲して開く。	灰 色	A-3
		44	7	唐津系統の皿。底部無釉。	灰 緑色	
188	高高台碗蓋	98	28	外側に草花文様らしきもの。内側中央に蝶を描いている。取手の内側中央にも蝶を描く。	灰 色	A-3
		54	9		〃	
189	中碗 A	107	57	外側に草花文様を描く。くらわんか手, 呉須を黒と青と二種類使っている。高台裏底に「  」の銘あり。	灰 色	A-3
		44	8		〃	
190	猪 口	72	54	やや開きぎみに直立する器形。外側は縦縞で埋めつくす。高台裏底に「  」の銘あり。	精白色	A-3
		44	3		白青色	12A 4
191	小碗 B	102	58	“こんにやく印判手”の文様, 高台がやや小さい。	灰 色	A-3
		39	7		〃	
192	〃	98	54	簡略化された草花文様。高台が小さい。		A-3
		43	6			
193	〃	102.5	53	“こんにやく印判手”により菊の花をおしている。	灰 色	A-3
		43	7	高台が小さい。	〃	
194	盃	84	40	松を描いている。高台が非常に小さい。	灰 色	A-3
		30	3		〃	
195	中皿 B	144	39	蛇の目剥ぎ。見込中央に“こんにやく印判手”による五弁化あり。内側の文様は草花文様か?外側無文様。	灰 色 灰 白色	A-3
		55	6.5			
196	中皿 A	130	35	見込中央に“こんにやく印判手”による五弁花。文様は菊の花と斜交線を描く。	灰 色	A-3
		73	7		〃	
197	〃	133	34	196の資料とほぼ同じ。見込が黒く焼けて煤が着いている。高台裏底に銘あり。菊花と斜交線文様を描く。	白灰色 灰 色	A-3
		73	4			
198	〃	129	38	見込中央に五弁花。口縁部が湾曲している。高台裏底に銘あり。	灰 色	A-3
		74	5		〃	
199	〃	132	32	内側一杯に濃い目の呉須で“牡丹唐草文”を描いている。凹型高台。	精白色 灰 色	6 C A-3
		96	3.5			
200	大 皿	206	40	蛇の目剥ぎ。“こんにやく印判手”による五弁花。	灰 色	34 G
		114	5	簡素な草花文様。畳付露胎。	〃	A-3
201	盃	61	28	小ぶりの盃である。	灰 色 灰 黄色	A-3
		27	5			
202	中碗 A	108	57.5	簡素な草花文様。	灰 色	A-3
		44.5	9.5		〃	
203	〃	106	56.5	“こんにやく印判手”による竹笹の文様。202の資料とともに比較的薄手。	灰 黄色 灰 色	A-3
		44	7.5			
204	猪 口	70	48	草花文様を描く。	灰 色	A-3
		33	6		〃	
205	〃	64	41	口縁部の開きが小さい。畳付は露胎。土の付着あり。	灰 色	A-3
		27	5		〃	
206	〃	66	39	口縁部がやや開く。畳付は露胎。	灰 色	A-3
		28	6		〃	
※207	深 鉢	351	297	櫛状のもので波形の文様等をつけている。左右両方に2個の獅子頭がある。	暗レンガ色 〃	12A, 56H, A-3 26E, 9 B, 11A 土拡
		139				

※印は陶器

Tab. 12 陶磁器観察表⑩

単位はmm, ( ) は推定復原値

挿図 番号	器 種	口径	器高	特 徴	生 地 釉 調	出 土 遺 構 地区
		高台径	高台高			
※ 208	深 鉢	424	309	櫛状のもので波形の文様等を付けている。左右両方に2個の獅子頭がある。黄褐色と青緑色の釉をかける。	レンガ色	A-3, 26E 12A, 9B
		149			黒褐色	
※ 209	甕	336	410	肩の上部に3個の花びらの突起物がある。9本の沈線あり。内面に格子目の狩え具の跡あり。	暗灰色	A-2, 石垣
		190			黒褐色	
※ 210	大 鉢	455	159	二彩唐津風の大鉢である。波形等の白化粧の上に黄褐色と緑の釉をかける。	レンガ色	12A, A-3 A-4
		143	21		黒褐色	
※ 211	土 瓶 蓋	70	32	緑が部分的に欠損している。丸ボタン状の取手がある。	レンガ色 暗灰色	A-3 S
※ 212	摺 鉢	366	128	高台つきのすり鉢であるが、内面の縦に走る条線に直交する形で横に走る条線が特徴的。	オレンジ色	A-3
		145	23		暗褐色	
213	鉢	168	53	焼成不良品とみえ底がヒビ割れて穴が開いている。底部は凹型高台。高台裏底のみ無釉。	灰 色	A-3
		105	4		〃	
※ 214	土 瓶	89	130	茶釜風に碗を上下から合わせて作り出したような凸帯がある。	淡レンガ色	A-3 S 12A 3
		54	7		暗灰褐色	
215	中 皿 A	135	36	見込内に“こんにやく印判手”による五弁花。内側の文様は草花文様。形が変形している。	灰 色	A-4
		76	5		〃	
216	〃	134	32	内側一杯に濃い目の呉須で“牡丹唐草文様”を描いている。凹型高台。	灰白色 灰 色	A-2 S
217	〃	123	25	見込中央のは五弁花。内側の文様は梅の花等を描いている。		A-2 S
		72	5			
218	中 皿 B	144	34	見込中央に“こんにやく印判手”による五弁花。内側の文様は草花文様であろうか。高台裏底に「ㇿ」の銘あり。	灰 色	A-2 S
		74	4		〃	
219	小 碗 A	92	59	半欠品であるが残存部には文様なし。	灰 色	A-2 S
		45	5		〃	
220	小 碗 B	102	51	二重の網手文様。畳付部に砂の付着あり。	灰 色	A-2 S
		41	8		〃	
221	高高台碗	102.5	63	松の文様を描いている。見込に銘あり。	灰 色	A-2 S
		56	15		〃	
222	湯 呑	85	53	(朝顔型) 残存部には文様は認められない。畳付は露胎。	白 色	A-2 S
		34	9		〃	
223	鉢	216	73	見込中央に五弁花。内面には牡丹唐草文様を描いている。高台中央に“福”の「字銘」	灰 色	A-2 S 12A
		108	8		〃	
※ 224	徳 利			最大胴部径170mm。陶器。ほぼ球形の胴部。しっかり作り出された高台。文様は草花文様であろうか。	暗灰色	12A 1 A-2 S
		73	13.5		灰 色	
225	中 碗 A	(112)	55.5	ㇿ程の残存品であるが、外側は無文様。見込に「小」の文字がある。	灰 色	A~2 S
		45	7.5		〃	
226	湯 呑	76	38	(朝顔型) 非常に薄手のつくり。半欠品であるが、残存部には無文様。	白 色	A-3 S
		34	6		〃	
227	盃	74	36	松の文様であろうか? 黒と青と呉須を二種類使っている。焼成が良い。	灰白色 灰 色	A-3 S
		28	5		〃	
228	—	(149)	33	蛇の目剥ぎ。簡素な草花文様を描く。	灰 色	A-85
		80	6		〃	
※ 229	深 鉢	466	297	焼物の生地を粘土状のひもにし、蔓草状に深鉢の胴部をめぐらしている。葉には緑釉がかけてある。	暗灰色 暗灰褐色	12A, A-4
		160			〃	
230	小 碗 B	97	49	外側に草花文様を描く。高台裏底に「ㇿ」の銘あり。	暗灰色	B-2
		36	7		〃	

※印は陶器

Tab. 13 陶磁器観察表①

単位はmm, ( ) は推定復原値

挿図 番号	器種	口径 高台径	器高 高台高	特 徴	生 地 調	出 土 遺 構 地区
231	中皿 A	123 39	34 6	蛇の目割ぎ。斜交線文様を描く。外側は無文様。畳付は露胎。	灰 色 〃	B-2
232	〃	119 45	36 6	陶器製。蛇の目割ぎ。	灰 黄色 灰 緑色	B-2
233	中皿 B	144 73.5	34 5	蛇の目割ぎ。見込中央に五弁花。内側には、簡素な草花文様あり。外側は無文様。畳付に砂の付着あり。	灰 色 〃	C
234	湯 呑	73 37	56 4	(突立型) 外側には環珞文様を描いている。	白 色 〃	C
235	中碗 B	121 50	62.5 9	丸文様を描いている。比較的厚手。畳付部露胎で、砂の付着あり。高台裏底に「罽」の銘あり。	灰 色 〃	C-1
236	中碗 A	110 41.5	63.5 9	竹笹文様を描く。口縁部はやや外反する。	精 白 色 白 色	C-1
237	猪 口	66 26	26 5	口縁部がよく開いた猪口である。見込にも竹笹の文様を描く。	灰 色 〃	C
238	小皿 B	(102) 57	28 5.5	見込中央に“こんにやく印判手”による五弁花。内側は扇の文様を描く。高台裏底にも銘あり。	灰 色 〃	C-1
※ 239	燈明皿	56 49	30	糸切り底である。底部無釉。	赤 褐 色 あづき色	C-1
240	大 皿	211 144	30 4	緑文様は“袈裟だすき”文様。見込文様の大半は欠損。外側の文様は梅の花を描く。	白 色 灰 色	C-1
※ 241	花 器	62 63	179 4	外側と口縁部内側に黒色釉をかける。	暗あづき色 黒 色	C-1
242	中皿 B	146 87	43 5	見込中央に“こんにやく印判手”による五弁花。内側の文様は梅の花を描く。		C-2
243		93	4	内側一杯に濃い目の呉須で“牡丹唐草文様”を描いている。		C-2
244	中皿 B	140.5 83	45 5	見込中央に“こんにやく印判手”による五弁花。内側の文様は扇を描いている。呉須の発色が良い。高台裏底に「罽」の銘あり。	灰 色 〃	24C C-2 C
※ 245	碗	90 44	62 5	鉄釉により簡素な文様を描く。文様の描き方は1の資料と同じ器形は〔突立型〕陶器。	暗 灰 色 黄 灰 色	C-2
246	中碗 A	111 42	62 9	花の文様と竹笹の文様を描く。見込にも竹笹の文様あり。	白 色 〃	C-2
247	湯 呑	93 42	50 7	(朝顔型) 雪輪花に松の文様を描く。	灰 色 〃	C-2-II
248	中碗 A	108 45	62 9	文様は宝文様を描いている。見込に蝙蝠を2匹描いている。中国の清染ではないかと思われる。	精 白 色 灰 白色	C-2
249	高高台碗	104 54	68 16	菊の花の文様を大胆に大きく描いている。見込には寿の略字「㊦」がある。	灰 色 〃	C-2 C-3
250	〃	114 64	70 16	“よろけ縞”の文様を描いている。見込に「掛」の文様あり。	灰 色 〃	C-2 C-1
※ 251	鉢	183 77	68.5 15	蛇の目状に割り、その部分は無釉。白泥によるひと筆書きの文様あり。精良薄手のつくり。江永古窯の製品に似ている。	暗レンガ色 暗黄灰色	C-2 集石
252	小皿 B	100 64	21 3	内面に菊の花を6個描いている。口縁部は丸く立ち上がる。凹型高台。高台裏底無釉。	精 白 色 灰 色	C-3
253	小碗 B	98 39	53 8	二重網手文様。	灰 色 〃	C-3

※印は陶器

Tab. 14 陶磁器観察表⑫

単位はmm, ( ) は推定復原値

挿図 番号	器 種	口径	器高	特 徴	生 地	出 土	遺構 地区
		高台径	高台高		釉 調		
※ 254	甕	(363)	492	表面はなめらかで押え具, 叩き具の跡などがわからない。器壁はやや厚い。	淡 灰 色		
		218			黒 褐 色		
※ 255	片 口	373	197	白泥で波形の文様をつけている(外側上半)。内面は全面に。大ぶりの片口。	淡レンガ色		
		135	24		黒 褐 色		
256	猪 口	70	41	口縁部が外反している。高台部露胎。	灰 色	C-3 Pit	
		32	5		〃		
257	紅 皿	47	13	外側に縦縞のヒダがたくさん入っている。内側に白磁釉をかけ, 外側は大半が露胎。	灰 色	C-3 Pit	
		14.5	2		白 色		
258	中 皿 A	(122)	22	見込一杯に山水を描き, その円圏の外から器の外側にかけて青磁釉をかける。凹型高台。「  」の銘あり。	灰 色	C-A	
		68	3				
259	中 碗 A	112	56	牡丹等を描いている。口縁部内面に“袈裟だすき文”を描く。	精 白 色	4 D	
		45	7		白 色		
260	小 碗 B	99	50	二重の網手文様。畳付は露胎。	灰 色	D-2	
		42	6		〃		
261	〃	96	51	簡略化された草花文様を描いている。	灰 色	D-2, Pitt 25	
		36	7		〃		
262	大 皿	268	51	恐らく上絵付前の段階のものだろう。呉須の下絵以外の白地の部分が多く残っている。	灰 色	D-2	
		151	8		〃		
263	猪 口	65	28	口縁部が朝顔状に開いている。畳付露胎。砂の付着あり。	精 白 色	D-2, Pitt 19	
		25	6		灰 色		
264	紅 皿	48	17	外側に縦縞のヒダが切られた紅皿である。内面はきれいに白磁釉をかけ, 外側は大半が露胎。	精 白 色	D-2, Pitt 6	
		15	2		白 色		
※ 265	土 瓶	960	111	口縁部と底部が平行ではない。底部が傾いている。	暗 灰 色	D-2-P	
266	鉢	148	77	様式化された「寿」の字と花の文様を描いている。	灰 白 色	4D, D-3 II, AD4	
		82	6		灰 色		
267	小 碗 B	100	53	簡素な草花文様を描いている。高台裏底に「  」の銘あり。	灰 色	O-10	
		43	6		〃		
※ 268	大 鉢	432	157	外側に白泥で波形の文様をつけている。内面にも全面に白化粧を施す。底が欠損。	レンガ色	D-4下	
		150	29		黒 褐 色		
269	中 皿 A	(126)	39	蛇の目割ぎ。斜交線文様。畳付に砂の付着あり。外側は無文様。	灰 色	E-1 H	
		42	5		〃		
270	大 皿			青磁。蛇の目高台。見込に彫り込まれた文様は牡丹であろう。蛇の目高台。畳付露胎。	灰 色	E-1 H	
		120	6		淡深緑色		
271	猪 口	68	36	口縁部が朝顔状に開く猪口である。	灰 色	E-1 H	
		28	2		〃		
272	紅 皿	48	16	外側には縦縞をひだ状に作出してある。内側は釉をきれいにかけ, 外側は高台を含め半分程が無釉。	黄 灰 色	E-1	
		14.5	2		白 青 色		
273	〃	45	14.5	外側には縦縞をひだ状に作出してある。内側は釉をきれいにかけ, 外側は高台を含め半分程が無釉。		E-1 集石	
		15	2				
274	中 皿 A	(120)	34	蛇の目割ぎ。内面は簡素な文様を描く。高台部は露胎。外側に重ね焼きの時の一部が付着している。	灰 色	E-2	
		43	6		〃		
275	中 碗 A	104	45	内面に恐らく6個の菊の花の文様。外側にも同じ菊の花の文様を描く。全体的に薄手のつくり。	白 色	E-2	
		38	6		灰 色		
276	中 皿 A	(120)	36	蛇の目割ぎ。斜交線文様。	灰 色	E-2	
		48	6		〃		

※印は陶器

Tab. 15 陶磁器観察表⑬

単位はmm, ( ) は推定復原値

挿図 番号	器 種	口径	器高	特 徴	生 地 釉 調	出 土 遺 構 地区
		高口径	高台高			
277	小 碗 B	98	51	外側にやや簡素な草花文様。厚手。高台裏底に「い」がある。	灰 色 〃	E-2
		39	6.5			
※ 278	片 口	220	118	内側に白泥でうず巻文様。外側に波形の文様をつける。	レンガ色 黒 褐 色	E-3-II 14E
		98	14			
279	小 皿 B	(114)	19	内側に菖蒲の花の文様あり。可愛らしい絵を描いている。	精 白 色 白 色	E-3-II 14E
		64	4			
280	小 碗 B	96	52	外側に簡略化された草花文様。	灰 色 〃	E-3, E-1
		41	6			
281	中 碗 B	112	59	外側に丸文を描いている。	灰 色 〃	E-3 石垣
		43.5	8			
282	湯 呑	78	62	外側に丸文を描いている。		E-3, E-1
		38	4			
283	〃	56	63	口縁部内面に“袈裟だすき”の縁文様。見込に五弁花を描いている。	黄 灰 色 〃	E-3-II
		42	5			
284	中 碗 B	116	63	口縁部内面に“袈裟だすき”の縁文様。外側に竹笹の文様を描いている。高台裏底に「甲」の銘あり。	灰 色 〃	E-5-II
		45	8			
※ 285	皿			砂の目跡あり。内底の段も認められるところからやや古そう。高台部は削り出す。高台部露胎。	灰 黄 色 暗 灰 色	H-11 P2
		48	5			
286		(119)	34	蛇の目割ぎ。底部は露胎。黒茶色の鉄釉?をかける。	淡灰黄色 黒 茶 色	H-8
		42.5	4.5			
※ 287	摺 鉢			糸切り底の摺鉢。底部片。	暗 灰 色	H-11 P9
※ 288	鉢	212	53	蛇の目割ぎ。白化粧法による刷毛目の文様。	レンガ色 暗黄灰色	I-8
		94	11			
289	猪 口	(70)	45.5	器形としてはやや開きぎみに直立するが、口縁部は外反する。	白 色 〃	I-8, P1
		38	4.5			
290	小 碗 B	98	53	簡略化された草花文様。高台が小さい。	灰 色 〃	I-11 埋
		41	7			
291	碗			青磁釉を外側にかけている。見込には菊の花を描いている。高台裏底に銘あり。	灰 色 〃	I-11 埋
		41	6			
292	皿			非常に薄手のつくり。内側の文様は“牡丹唐草文様”	灰 色 灰 黄色	I-11 埋
		113	4			
293	碗			外側に花の文様あり。もう一つは雪輪花であろうか。高台のつくりが小さい。	灰 白 色 白 色	I-9 P2
		38	5			
294	小 碗 B	96	53	口縁端部に鉄釉の所謂“口紅”を施している。	灰 白 色 白 色	K-14 集石
		40	8			
295	皿			一部分のみの残存。残存部には内側に草花文様、外側にも文様を施している。	灰 白 色 灰 色	K-14 集石
296	中 碗 蓋	100	30	内面に梅の花の文様を描いている。取手の内側に大明年製の銘あり。それ以外の外側に青磁釉をかける。口縁部に鉄釉を施す。	灰 白 色 〃	K-14 集石
		38	9			
297	皿			蛇の目割ぎ。青緑色釉。高台を含む底部露胎。	灰 色 青 緑 色	不明
		50	6			
※ 298	〃			蛇の目割ぎ。高台を含め底部は露胎。	黄 白 色 白 黄 色	K-14 集石
		54	8			
299	〃			蛇の目割ぎ。高台部露胎。高台裏底は削り込んでいる。	灰 白 色 白 色	K-19 集石
		43	5.5			

※印は陶器

Tab. 16 陶磁器観察表⑭

単位はmm, ( ) は推定復原値

挿図 番号	器種	口径	器高	特 徴	生地 釉 調	出土 遺構 地区
		高台径	高台高			
300	徳 利	59		口縁部のみ残存。口縁部が横にやや広がる。	灰 色 〃	K-14 集石
301	碗	41.6	9	厚手の“くらわんか茶碗”資料の高台は比較的しつかりしている。高台裏底に「罇」の銘あり。	灰 色 〃	L-193 石
※ 302	〃	55	7	内底の段あり。見込内に砂の目跡あり。高台のつくりは小さいが撥形になる。	暗灰黄色 暗 灰色	P-9
303	高高台碗	98 51	56 12.5	見込内に簡略化された「寿」の文字。「身」を書いている。他の碗の一部が付着している。外側の文様は草花文様か。	灰 色 〃	P-9
304	小 碗 B	104 45	60 7.5	器形としては口縁部が外反する。外側には丸く鶴を描いている。他に松も描く。見込にも文様あり。	白 黄色 灰 色	P-8, 2
305	〃	102 38	51 7	外側に簡素な草花文様を描く。厚手。全体的に暗灰色。	暗 灰色 〃	P-8, 4
306	〃	100 43	54 8	丸文。厚手。“こんにやく印判手”による桐を描く。畳付部露胎。	黄 灰色 灰 色	P-11 埋土 35-0
307	盃	70 24.5	39 4.5	外側には振文を描いている。	精 白色 灰 色	25B
308	〃	71 30	34 5.0	無文様。畳付部は露胎。同部に砂の付着あり。	精 白色 灰 色	25B
309	〃	58 22	34 4	口唇には“口紅”を施す。器形はりんか型。	精 白色 白 色	4 II
310	中 皿 A	122 4	70 30	見込一杯に山水を描き、その円圏の外から器の外側にかけて青磁釉をかける。凹型高台。	灰 色 〃	2A-2
※ 311	土 瓶	100		底部が欠損している。	淡レンガ色 黄 褐色	A-0
312	皿			“牡丹唐草文様”を描いている。外にも文様を施している。	灰 白色 灰 色	1-I-II 埋
313	〃	174 113	30 5	内側一杯に濃い目の呉須で“牡丹唐草文様”を描いている。		I-II
※ 314	大 甕			内面に格子目の押え具の跡。外側にはかすかな叩き具の跡がある。	暗 灰色 茶 褐色	51 I
315	中 皿 A	(124) 69	30 4	見込一杯に山水を描き、その円圏の外から器の外側にかけて青磁釉をかける。凹型高台。	灰 色 〃	S-H
316	〃	(130) 80	32 5	内側に矢羽根の文様を描いている。口縁部に鉄釉を塗っている。	灰 色 〃	26F
317	小 皿 B	103 63	21 3	残存部には5個しか確認できないが、恐らく同一資料からみて6個の菊の花を描いている。凹型高台。高台裏底無釉。	精 白色 灰 色	F-7, 8
318	中 皿 A	127 75	29 4	見込一杯に山水を描き、その円圏の外から器の外側にかけて青磁釉をかける。凹型高台。高台裏底に「罇」の銘あり。	灰 色 〃	なし (C-A?)
319	小 皿 A	76 46	14.5 2	高台部以外の外と内側に幾何文様を描きつくしている。	灰 色 〃	不明
320	小 碗 A	91 37	44.5 7	薄手のつくり。外側に宝文を描く。見込の文様は宝珠か?	灰 色 〃	不明
321	中 碗 B	116 47	61.5 6.5	外側に青磁釉をかけている。高台部が小さい。見込に“こんにやく印判手”による五弁花あり。	灰 色 〃	C-5 H
322	小 碗 B	97 38	49 6	外側に簡略化された草花文様を描く。厚手。高台部が小さい。	灰 色 〃	なし

※印は陶器

Tab. 17 陶磁器観察表⑮

単位はmm, ( ) は推定復原値

挿図 番号	器 種	口径	器高	特 徴	生 地 釉 調	出 土 遺構 地区
		高台径	高台高			
323	中 碗 A	105	56	見込に菊の花, 外側は青磁の黒っぽい色(墨の吹きつけによるものか)である。	灰 色	不明
		38	7		〃	
324	〃	106	52	外側に“こんにやく印判手”による菊と, 筆による草花文様を描く。	灰 色	26E
		46	8		〃	
325	反り 碗	115	66	“こんにやく印判手”による井桁の中に花の文様を押している。	灰 色	無し
		48	10		〃	
326	中 碗 A	110	57	器形は丸くふくらみながら立ち上る。外側の文様は牡丹の花であろうか。	白 色	無し
		47	6.5		灰 色	
327	小 碗 A	91	65	花と葉っぱの文様を様式化して描いている。高台が小さい。	灰 色	不明
		34	4		〃	
328	猪 口	73	31	朝顔状に開く器形をしている。豊付に砂の付着がある。	灰 色	4 D
		25	4.5		灰 黄色	
329	碗 蓋	102	35	外側に波濤文と龍とを描いている。蓋の取手の内側に「大清雍正年製」の銘あり(1723~1735)。中国製の清染付?	灰 白 色	E 3, E 1
		31	6		白 色	
330	猪 口	40	39	外側に藤の花を描いている。	灰 色	不明
		22	2		〃	
※ 331	甕	418	644	内面に格子目の押え具の跡。外側にはかすかな叩き具の跡がある。胴部に5本の沈線あり。白泥の釉もかかっている。	暗 灰 色	26E
		216	—		暗 灰 褐色	
332	碗 蓋	96	30	外と内の両面に宝文を描いている。	白 色	12A 3
		36	7.5		灰 色	

※印は陶器

## 2. 石器 (Fig. 127～Fig. 163)

### ① 旧石器時代の石器 (Fig. 127～Fig. 128)

旧石器時代の遺物として、ナイフ形石器13点、三稜尖頭器2点、細石刃4点、細石核ブランク1点、細石核1点、合計21点があげられる。出土層位は1～3層が中心であるが、各時代の遺物が混在しており層位で判断することは難しい。また、出土地区はR～U-18～22区からのものが中心で、便宜上で分けた区の4区にあたる。以下、図化したもので説明する。

#### ナイフ形石器 (1～13)

縦長剥片を素材として斜行する刃部を残し、他方に刃潰し加工を施したものは、1～4・7・8・11～13である。そのうち11・13を除くものは、刃部が曲線を呈し柳葉形状をなす。また、基部の裏面加工を施したものは2である。11は途中で折れているが、長くて斜行する刃部を残して刃潰し加工を施したものである。

5・9・10は、剥片の一側縁に刃潰し加工を施し、他方を刃部として利用した一側縁加工のナイフ形石器で、特に9・10は縦長剥片を利用し、素材剥片の打痕を残す。

6は縦長剥片の一端を折断し、折断面に刃潰し加工を施したものである。

これらは、ナイフ形石器の終末期位のものではないと思われる。

#### 三稜尖頭器 (14・15)

14は安山岩製で、基部が破損している。縦長剥片を素材としており、裏面に主要剥離面が残る。表面の一側縁には片面から、他方の側縁には両面から刃部加工が施されている。15は黒曜石製で横剥ぎの剥片を素材としている。二側縁には片面からのみの刃部加工がみられ、自然面も一部に残る。基部の加工は破損により観察が困難である。

#### 細石刃 (16～19)

長さが1.6～1.8cm、幅0.5～0.6cm、厚さ0.1～0.2cmのものが3点を占める。16・19は中間部、17は頭部、18は先端部である。この4点中、16は使用された可能性がある。

#### 細石核ブランク (20)

舟底形の細石核のブランク

#### 細石核 (21)

半円錐形の細石核で、一般に「野岳型」と呼ばれるものである。

### ② 縄文時代の石器 (Fig. 129～Fig. 163)

縄文時代の遺物は主なものだけでも、剥片石器328点、礫石器133点、合計461点にのぼる。剥片石器の内訳は、石槍2点、楔形石器2点、石錐1点、スクレイパー43点、石匙1点、使用痕のある剥片18点、加工痕ある石器1点、サイドブレード2点、つまみ形石器1点、剥片26点、石核3点、不明石器3点、石鏃225点である。

礫石器の内訳は、石斧108点、凹石3点、磨石4点、敲石2点、砥石15点、円盤状石製品1点である。



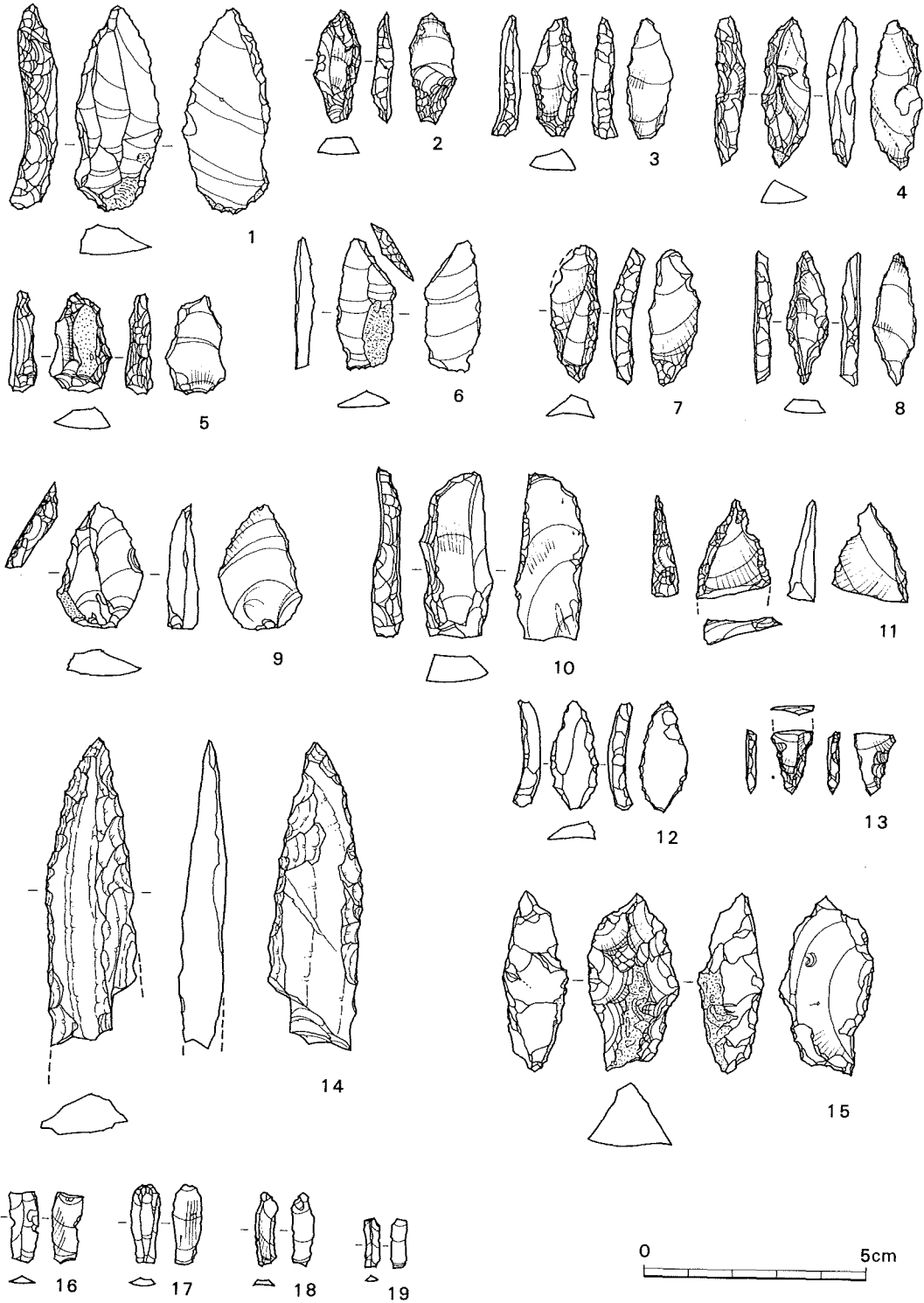


Fig. 127 旧石器時代の石器 ① (2/3)

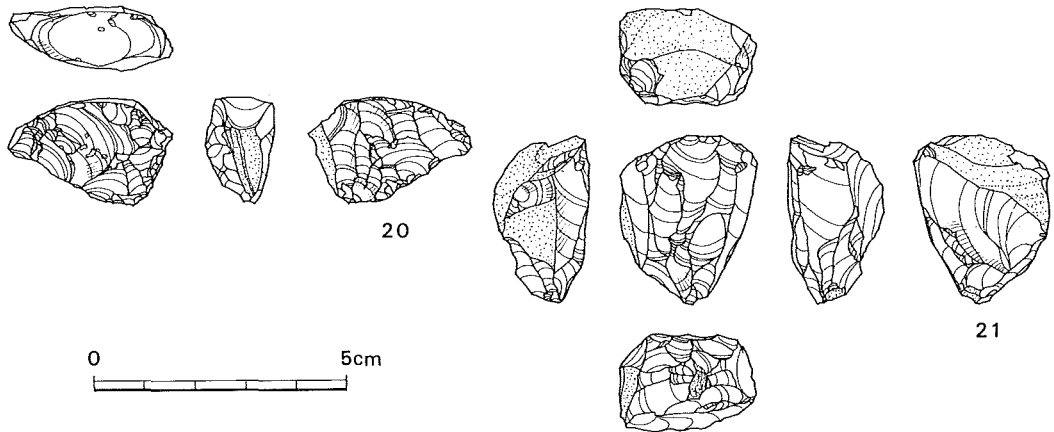


Fig. 128 旧石器時代の石器 ② (2/3)

Tab. 18 剥片石器計測表 (旧石器)

〈 〉 は破損品の計測実数値を示す

Fig.	番号	出土区	層	器種	石材	重さ (g)	大きさ (cm)			備考
							長	幅	厚	
127	1	T-18	3	ナイフ形石器	灰色 ob	6.5	4.7	2.0	0.7	二側縁加工
	2	S-18	〃	〃	黒色 ob	1.0	2.5	1.0	0.4	〃
	3	T-18	〃	〃	〃	1.4	2.7	1.0	0.5	〃
	4	T-21	〃	〃	〃	2.1	3.4	1.1	0.6	〃 パテナ有り
	5	HJ-II-14	1	〃	半透明黒色 ob	1.6	2.2	1.4	0.5	一側縁加工
	6	S-19	3	〃	灰色 ob	1.1	3.0	1.3	0.4	折断面に刃潰し加工 パテナ有り
	7	R-16	〃	〃	黒色 ob	1.8	3.1	1.1	0.5	二側縁加工 〃
	8	A-3	2	〃	〃	1.1	3.0	0.9	0.4	〃 〃
	9	S-21	3	〃	〃	3.0	2.8	2.0	0.8	一側縁加工 〃
	10	表採	—	〃	灰色 ob	4.3	3.8	1.7	0.8	〃
	11	S-22	3	〃	黒色 ob	〈1.5〉	〈2.3〉	〈1.7〉	〈0.6〉	基部破損 二側縁加工
	12	S-15	〃	〃	〃	1.2	2.4	1.1	0.4	火を受けている 〃
	13	QRS-10-11-12	1	〃	半透明黒色 ob	〈0.3〉	〈1.4〉	〈0.9〉	〈0.2〉	先端物破損 〃
	14	Q-5	4上	三稜尖頭器	安山岩	〈12.8〉	〈5.0〉	〈2.0〉	〈1.0〉	基部破損
	15	U-22	3	〃	黒色 ob	7.9	4.0	2.0	1.5	パテナ有り 短い
	16	G-22	2	細石刃	半透明黒色 ob	0.2	1.6	0.6	0.2	〃
	17	Q-F-11-12	3	〃	〃	0.2	1.8	0.5	0.1	〃
	18	A-3	2	〃	〃	0.1	1.6	0.5	0.2	〃
	19	R-17	3	〃	〃	0.1	1.1	0.3	0.1	〃
128	20	B-2	1	細石核ブランク	黒色 ob	8.3	3.3	2.0	1.2	〃
	21	D-6	2	細石核	〃	16.6	3.3	2.7	1.9	〃 火を受けている

本遺跡出土の石器の特徴は、打製石斧が461点中108点と、石製品の24%を占めることである。周辺に存在する宮田A遺跡からは259点の打製石斧が報告されており、遺跡の関連が考えられる。また、石鏃は49%と半分近くを占める。

#### 石槍（1・2）

1は安山岩製で完形である。非常に丁寧に製作されており、全面に剝離調整を施している。形態は基部がふくらみ、下ぶくれ状を呈し、先端にいくにつれて細くなる。縄文時代早期の初め頃のものと思われる。佐世保市の岩下洞穴や諫早市の鷹野遺跡などに類例がみられる。

2は先端部・基部が欠損しているが、やはり縄文時代早期の石槍と考えられるが、残存部より1に比べて多少時期が新しいと思われる。

#### 楔形石器（3・4）

3・4ともに2.5cm前後である。四角形及び紡錐形を呈し、縁辺部には階段状の剝離痕が対になってみられる。

#### 石錐（5）

つまみ状の頭部は、表裏の全面に剝離加工が施されている。錐部には回転穿孔の使用痕はみられず、突き錐として使用されたと思われる。

#### スクレイパー（6～48）

小形から大形まで、形態、石材、刃部調整等、様々である。図示した43点のうち、黒曜石製のものは6～24までの19点である。残りの25～48の24点は、安山岩及び玄武岩製である。前者は小形で薄いものが多く、後者は大形で厚手のものが揃っている。

6は縦長剝片を素材としており、一面には加工を施さず、もう一方の面にのみ二側辺に二次加工を施している。7は縦長の剝片の一側辺に並列した剝離面がみられる。これも片面のみの加工である。8は両面の縁辺に二次加工を施している。途中で折れているため不明であるが、小形の石匙の可能性もある。9は小さく厚みのある剝片を使用し、自然面と折れ面を除く縁辺に、両面から刃部加工を行なっている。特に表面には細かい調整が施されている。10は大形の石鏃を思わせるが破損しているため不明である。全体に薄く大きな剝離加工がみられ、特に縁辺には細かい調整がある。11は自然面の残る小形の剝片に、簡単な二次加工を施しただけである。12も自然面の残る小形の剝片であるが、全面を剝離調整しており、自然面を除く周縁には細かい調整が施されている。13は自然面と主要剝離面の残る小形の剝片の下辺に、両面から刃部加工を施している。エンドスクレイパー。14は小形の四角形の剝片を使用し、二側辺の片面に細かい調整がみられる。パテナあり。15は石鏃の未製品の可能性もある。16は薄手の小形剝片を使用している。一面のみに二次調整が行なわれており、もう一方は、主要剝離面である。背面は、全体を剝離加工し、その周縁には細かい調整が万遍なく施されている。ラウンドスクレイパー。17は、厚みのある黒曜石片を素材とし、片面には主要剝離面が残る。つまみ形をしており、下部は折れたと思われる。調整はかなり細かく丁寧で、つまみ部を作り出しているようにもみえる。18は、細長い小形の剝片の二側辺に二次加工を行なってい

る。加工のタイプとしては6や19と同様である。19は主要剝離面を残す。一部に細かい剝落痕がみられ使用痕とも考えられる。20の刃部は刃潰し加工の様でもある。二次調整は一側辺の片面のみに行なわれている。21は一部にパテナ、また表面には自然面も僅かに残る。腹面に主要剝離面が認められる他は、全体に二次調整が丁寧に行なわれている。鋭角の三角形をしており石鏃か槍先とも思える形をしている。刃部は両面から加工されている。22は破損品の様に見えるが、打点によりこの剝片に二次加工されたものである。刃部は21と同様の加工である。23は自然面の残る小剝片を利用し、一側辺に両面から刃部を作りだしている。24も同様である。25は横剝ぎの安山岩の剝片を素材とし、一側辺の片面に刃部を形成している。横剝ぎの剝片はこの他にも30・31・47などがある。26は縦長の剝片を素材とし、一側辺と下縁に刃部がある。27は途中で折れているが、一側辺に刃潰し加工と思われる調整が行なわれている。非常に丁寧な作りである。28も途中で折れている。一側辺の片面に刃部加工を施している。29は尖頭器状の形をしている。下部欠損品。三角形の二側辺に刃部加工。30は先端部を欠損している。石槍の基部に類似しているが、素材がバルブを中心に湾曲しているため可能性はうすい。31は厚手の横剝ぎ剝片に一側辺から下縁にかけて刃部加工をしている。刃部は両面から作りだしている。32は台形をした安山岩の剝片を利用し、一側辺に両面から刃部加工を施している。33は片面に全面剝離調整を施している。34は打点の残る剝片を、ほぼ全体的に剝離調整している。剝離は大きく、簡単である。35は楕円形の剝片のほぼ全縁に剝離加工を施している。36は二側辺に自然面を残し、抉り状に刃部をつくっている。37の打点は自然面で、主要剝離面には加工がほとんどなされていない。側辺から下縁にかけて片面のみの調整。38は安山岩製の中では薄手のスクレイパーである。四角形の剝片の下辺と一側辺の一部に、細かい剝離がみられる。39は三日月形の厚手の剝片を使用しており、弧の部分には大きめの刃部調整が両面から施されている。40は主要剝離面の下辺に剝離加工がみられる。打点は自然面である。41は大きめのザラツとした安山岩製である。打点は自然面であり、主要剝離面の下縁に刃部加工。もう一方の面は、荒く大きい剝離調整である。42～45は、ほぼ同種の器形で、主要剝離面の残る半円状の剝片の円辺に刃部を作っている。46～48は大形の剝片を使用している。

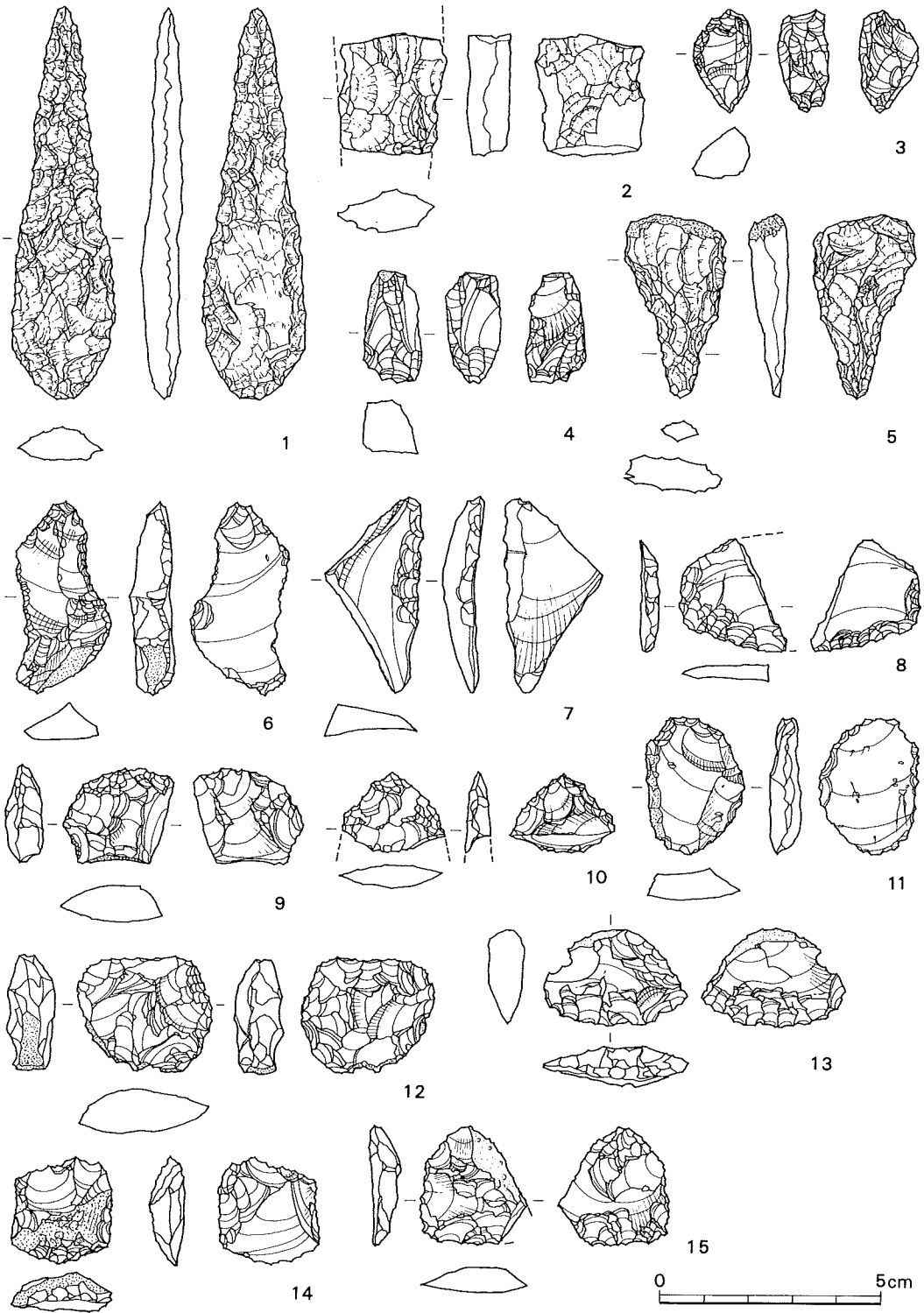


Fig. 129 縄文時代の石器 ① (2/3)

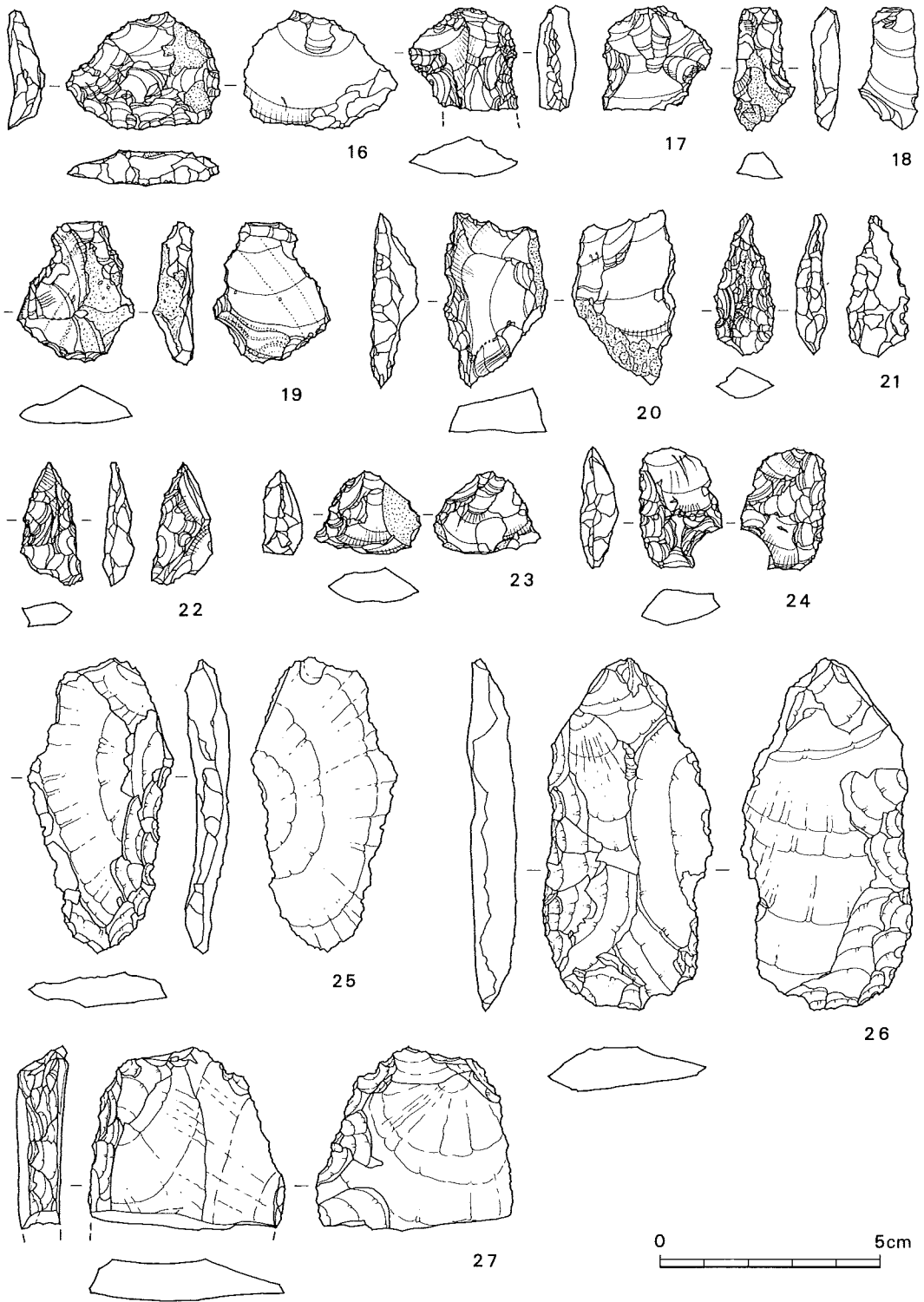


Fig. 130 縄文時代の石器 ② (2/3)

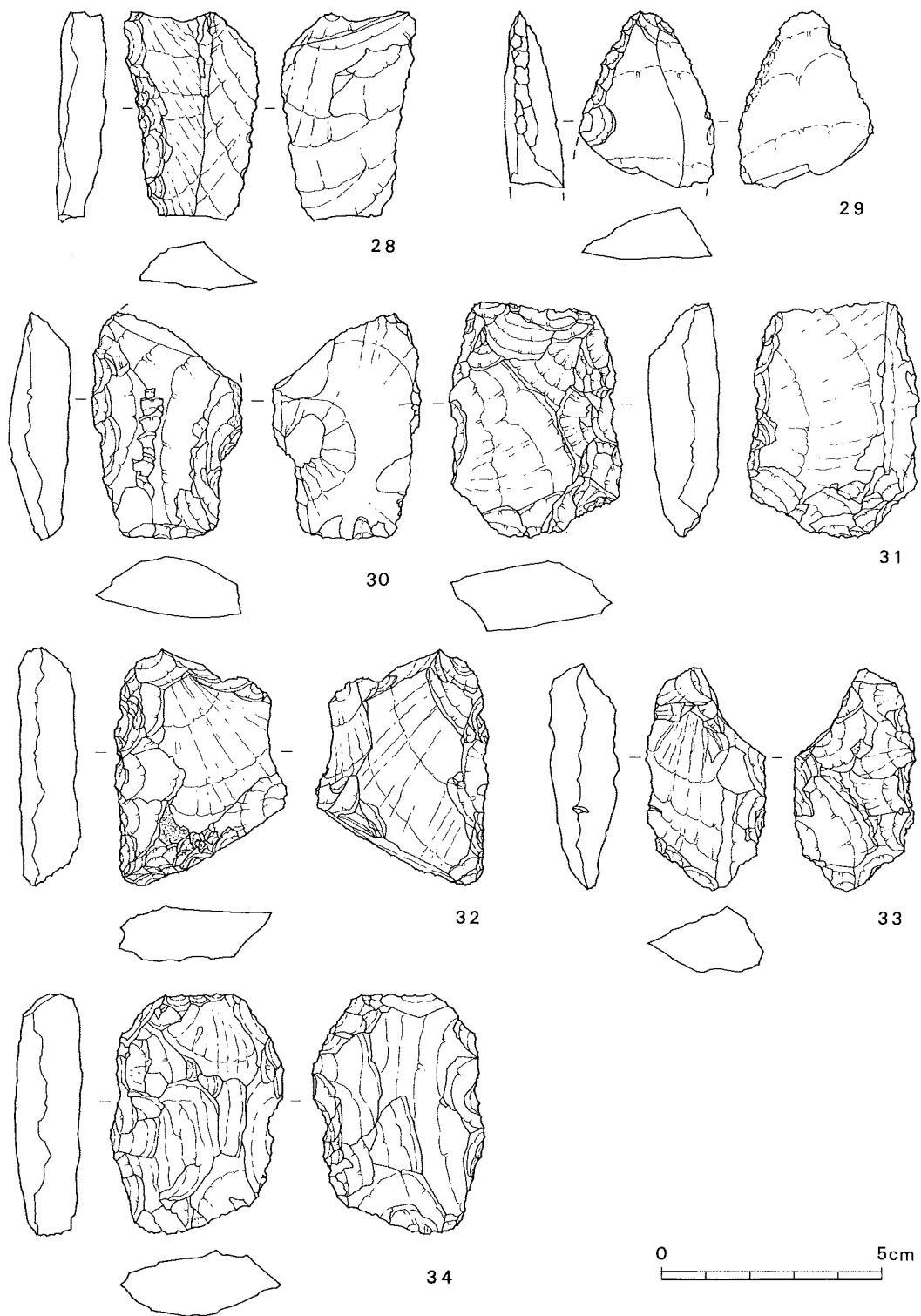


Fig. 131 縄文時代の石器 ③ (2/3)

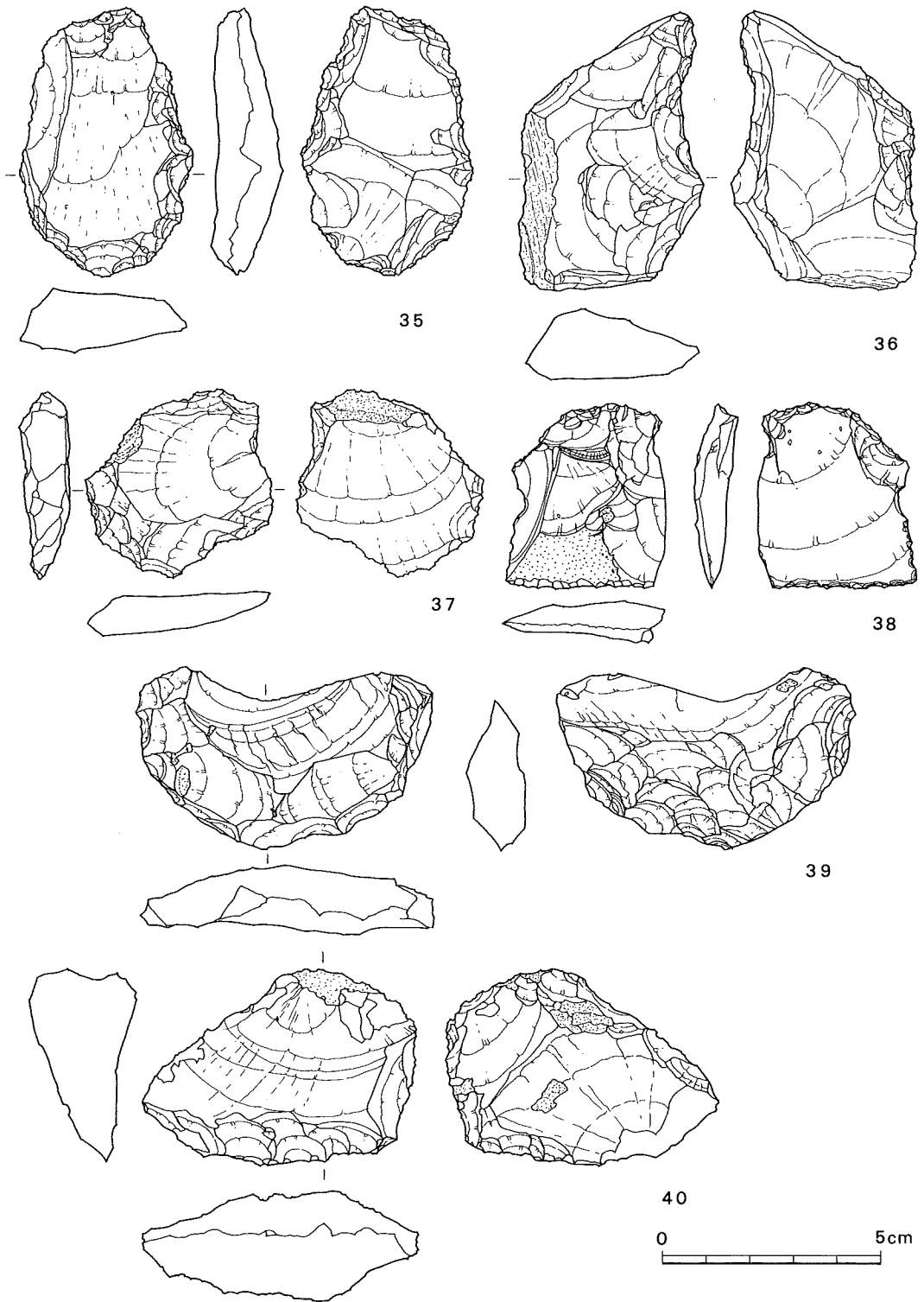


Fig. 132 縄文時代の石器 ④ (2/3)



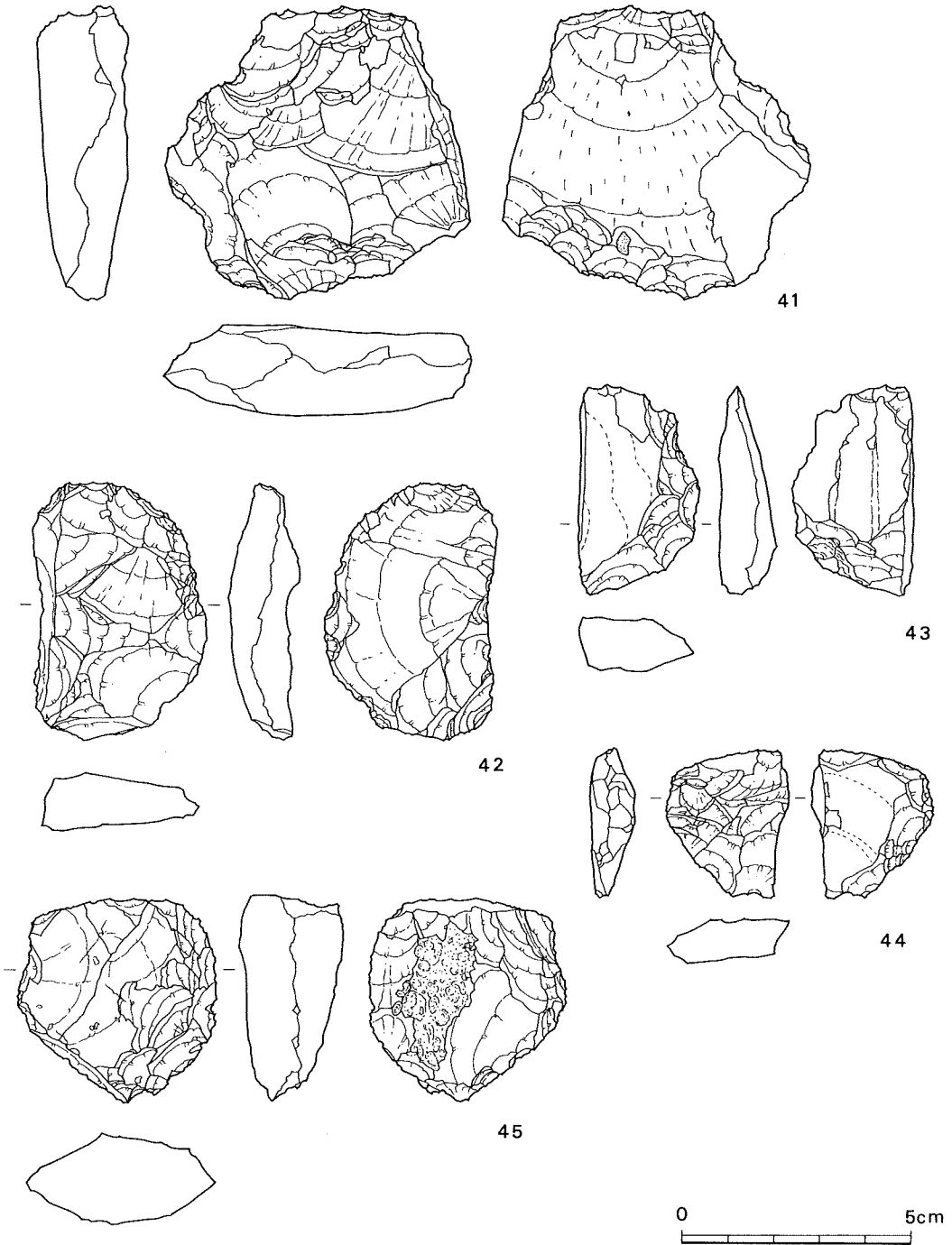


Fig. 133 縄文時代の石器 ⑤ (2/3)

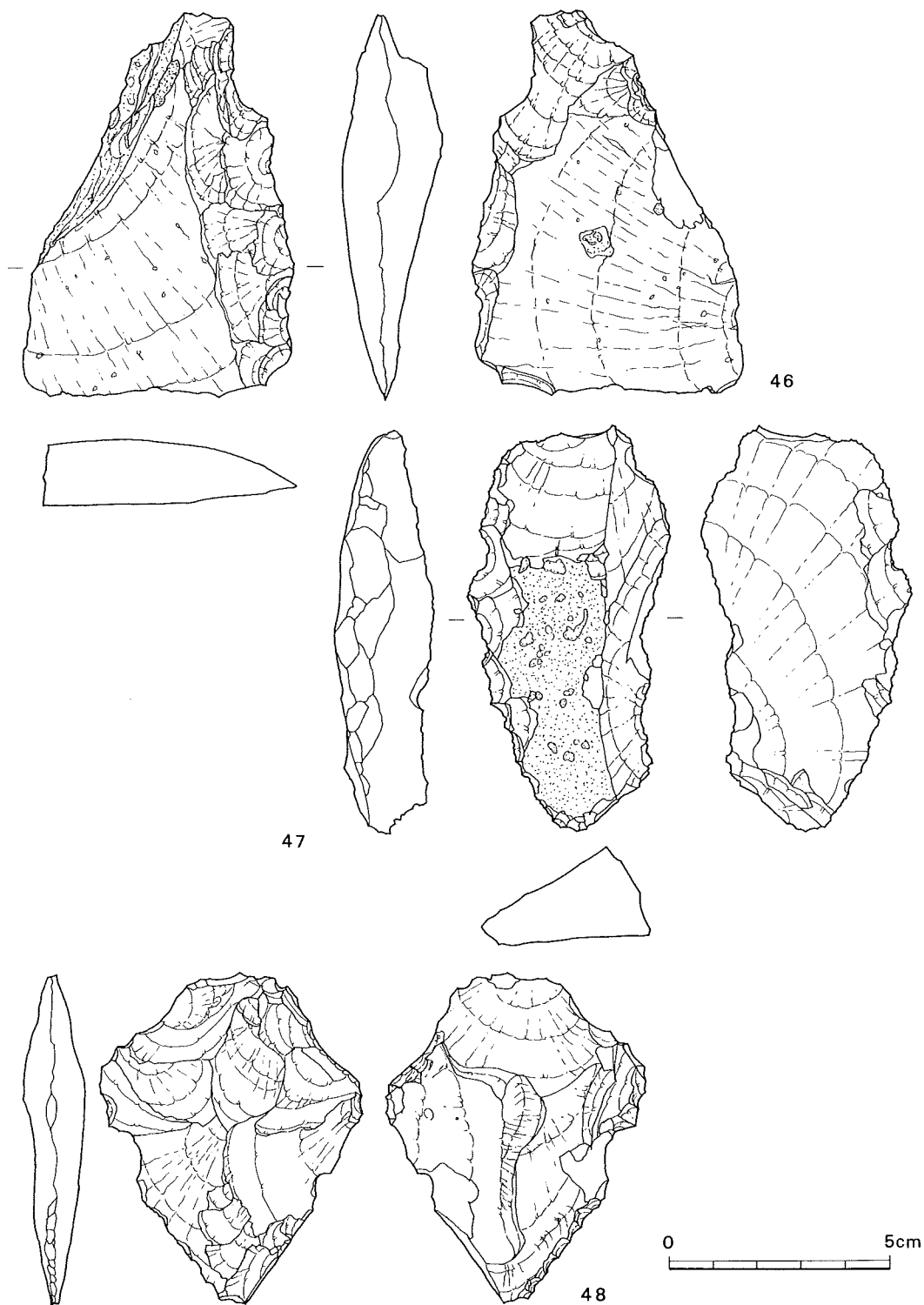


Fig. 134 縄文時代の石器 ⑥ (2/3)

## 石匙 (49)

石匙は縄文時代の代表的な石器であるが、今回の調査では出土は1点だけであった。49は、縦長剥片を素材とした縦長石匙である。つまみの一部は欠損しているが、外湾する刃部をもち、先端は尖る。つまみと先端部は、直線上にある。一般に鈍形の薙刀形と呼ばれる種類の石匙と思われる。

## 使用痕ある剥片 (50~67)

合計18点のうち、黒曜石製は15点、安山岩製は3点である。大きさは2.0~4.0cm、重さも2.0~9.0gと平均している。使用痕の特徴を、大まかに次の様に分ける。(I) 一側辺の片面のみにある。(II) 一側辺の両面にある。(III) 二側辺にある。

(I) は50~55・67にあたる。使用痕は主要剥離面の反対面に存在する。(II) にあたるのが56・62・65である。65は側部ではなく、下辺に使用痕がみられる。残りの57~61・63・64・66は、(III) にあたるが、同じ面のほぼ平行する二側辺に使用痕があるものは、58~61・63である。57はそれぞれの面に、64・66は同面であるが直交する辺に使用痕が存在する。使用痕といっても、ほとんどが剥落痕であるが、55・58・59などは線状痕らしきものも観察できる。

## 加工痕ある石器 (68)

打点が自然面である小剥片を用いている。側辺に僅かに加工痕が認められる。

## サイド・ブレード (69・70)

69は少し大きめで厚手の安山岩製である。両面に全面剥離調整が施されている。70は小形の剥片の周りに調整剥離を施している。

## つまみ形石器 (71)

黒曜石を素材とし、つまみ部分は全面剥離調整でつくりだしている。また頭部は一部欠損しており、片面は全面を剥離調整し、もう一方の面は主要剥離面を残す。

## 剥片 (72~97)

総点数の正確な数字は不明だが、一番多量に出土したのは剥片である。黒曜石片・安山岩片が主であり、その中から実測に耐えるものを26点選び、図示した。

72~82は黒曜石の剥片、86~98は安山岩の剥片である。原石の大きさや石質、または作製する石器等の使用目的のためか黒曜石の場合、小形のものが多く、安山岩片は厚手で大形のものが多い。特に94~98の様な大形のもの、図示した以外にも数多くあった。また、88・92・93の様な半円形の剥片も多く見られた。

## 石核 (98~100)

98・100は自然面が残る。3点とも拳より小さめの原石であったと思われる。

## 不明石器 (101~103)

101は立方体である。細石核とも思われるが打点部分が破損しているので不明である。102・103は一部に磨きのある石片で、砥石の可能性もある。

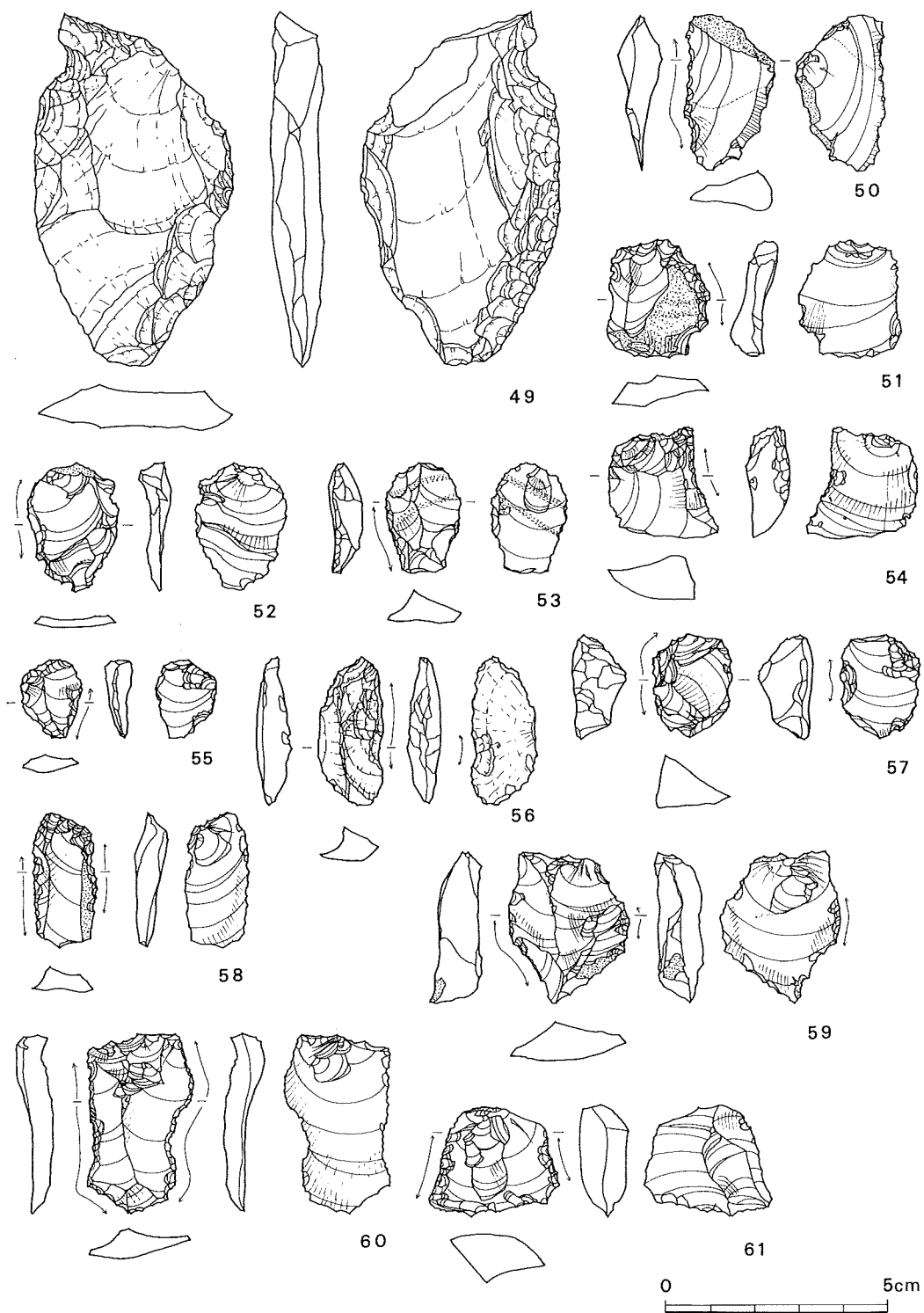


Fig. 135 縄文時代の石器 ⑦ (2/3)

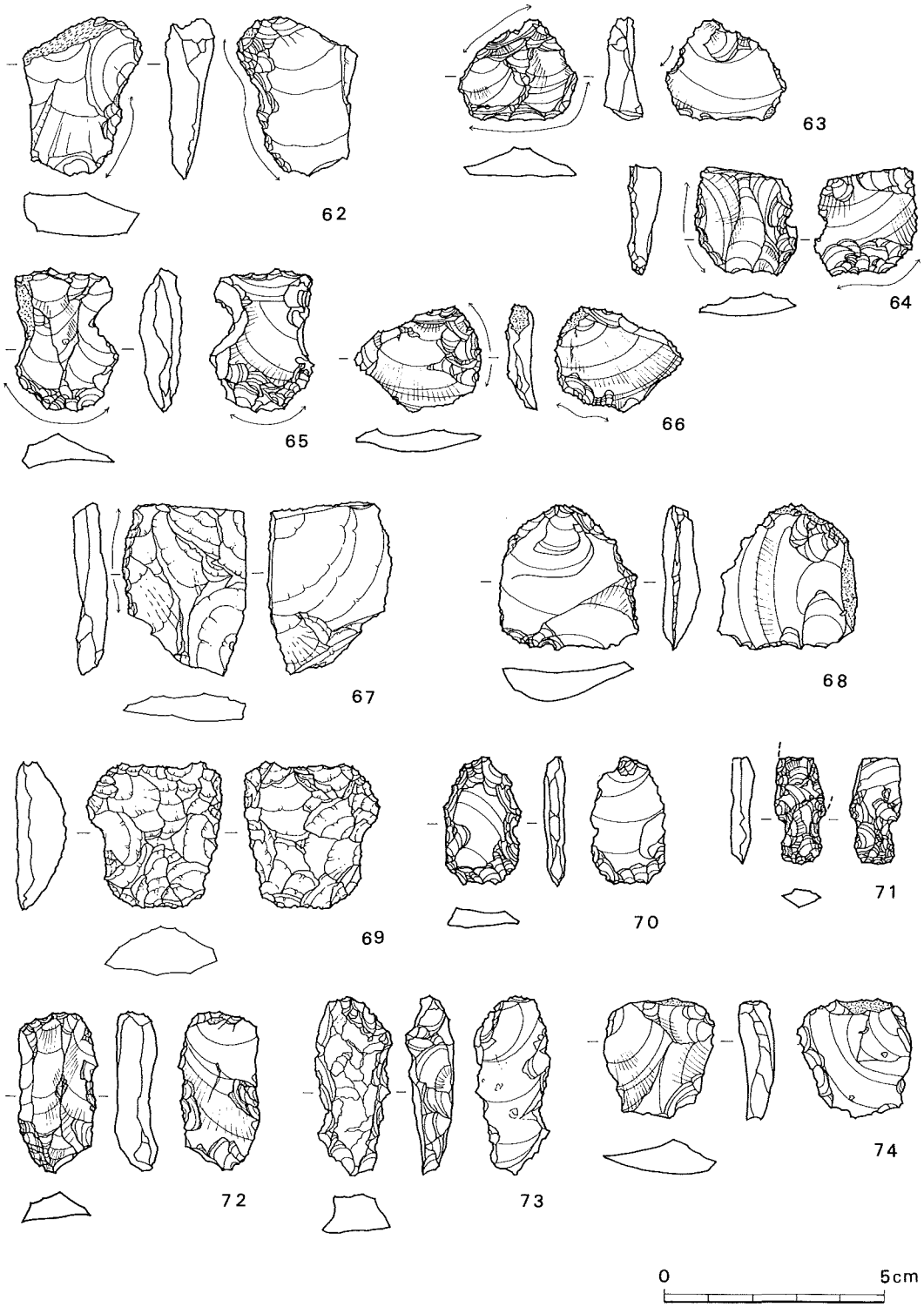


Fig. 136 縄文時代の石器 ⑧ (2/3)

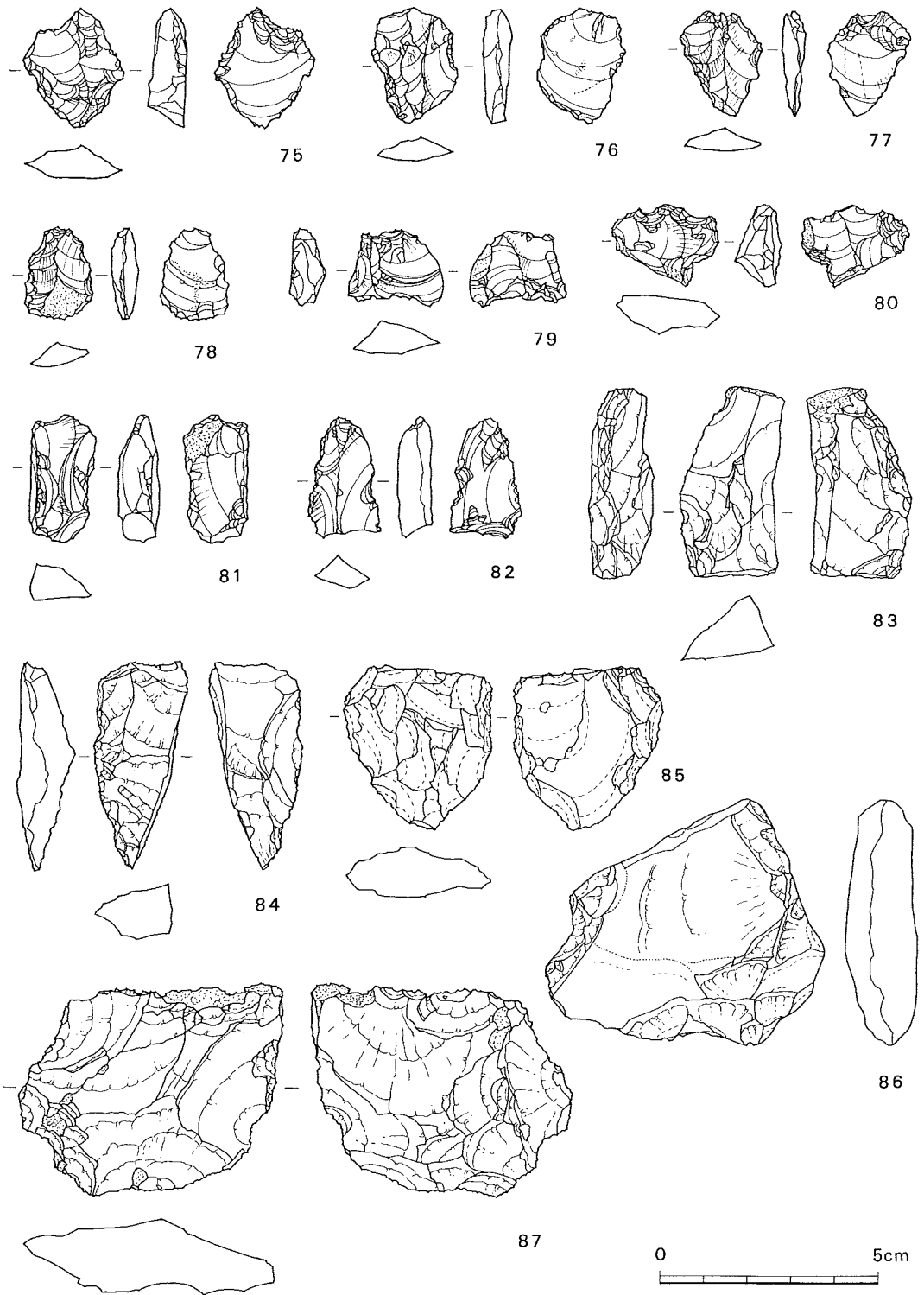


Fig. 137 縄文時代の石器 ⑨ (2/3)

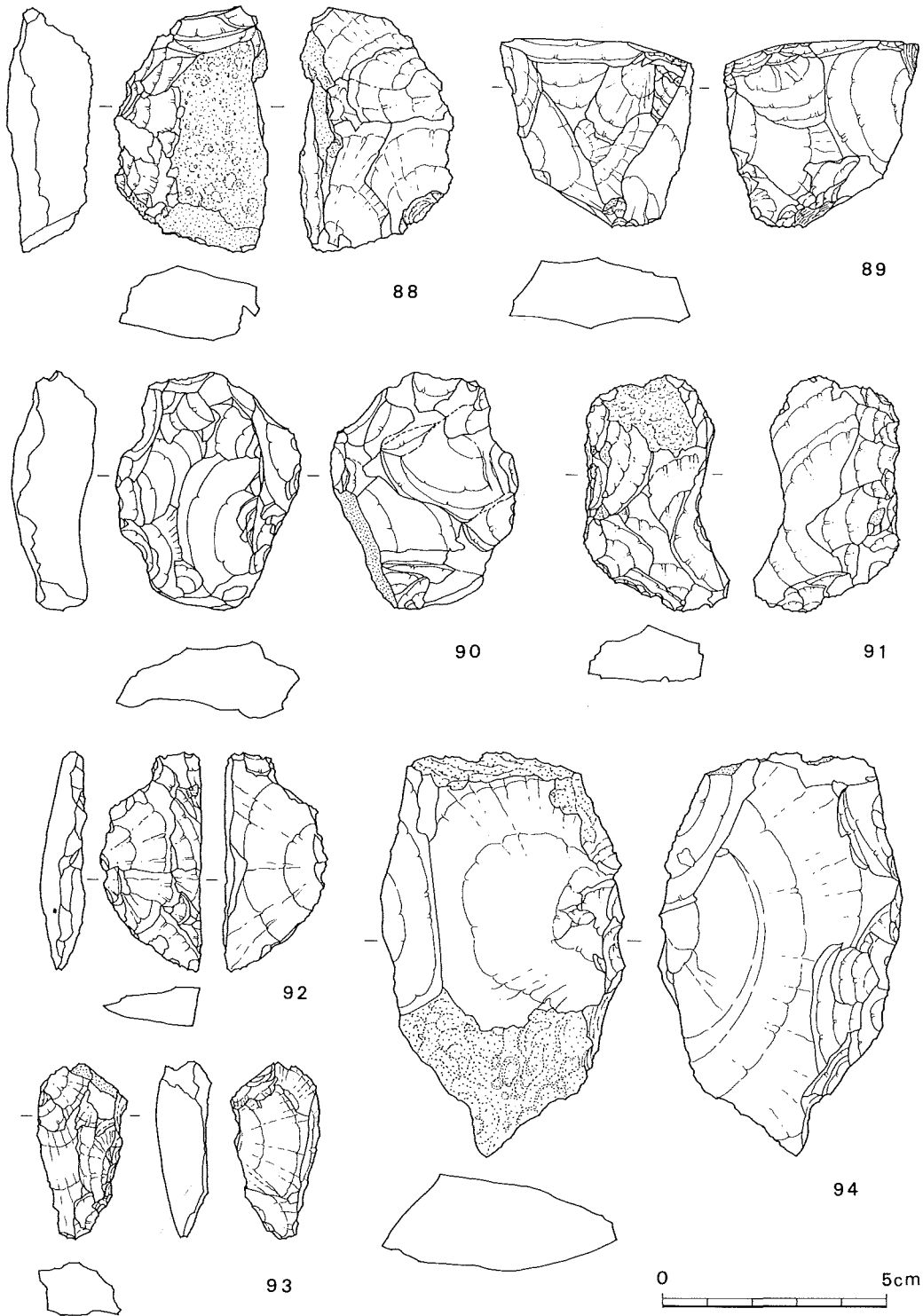


Fig. 138 縄文時代の石器 ⑩ (2/3)

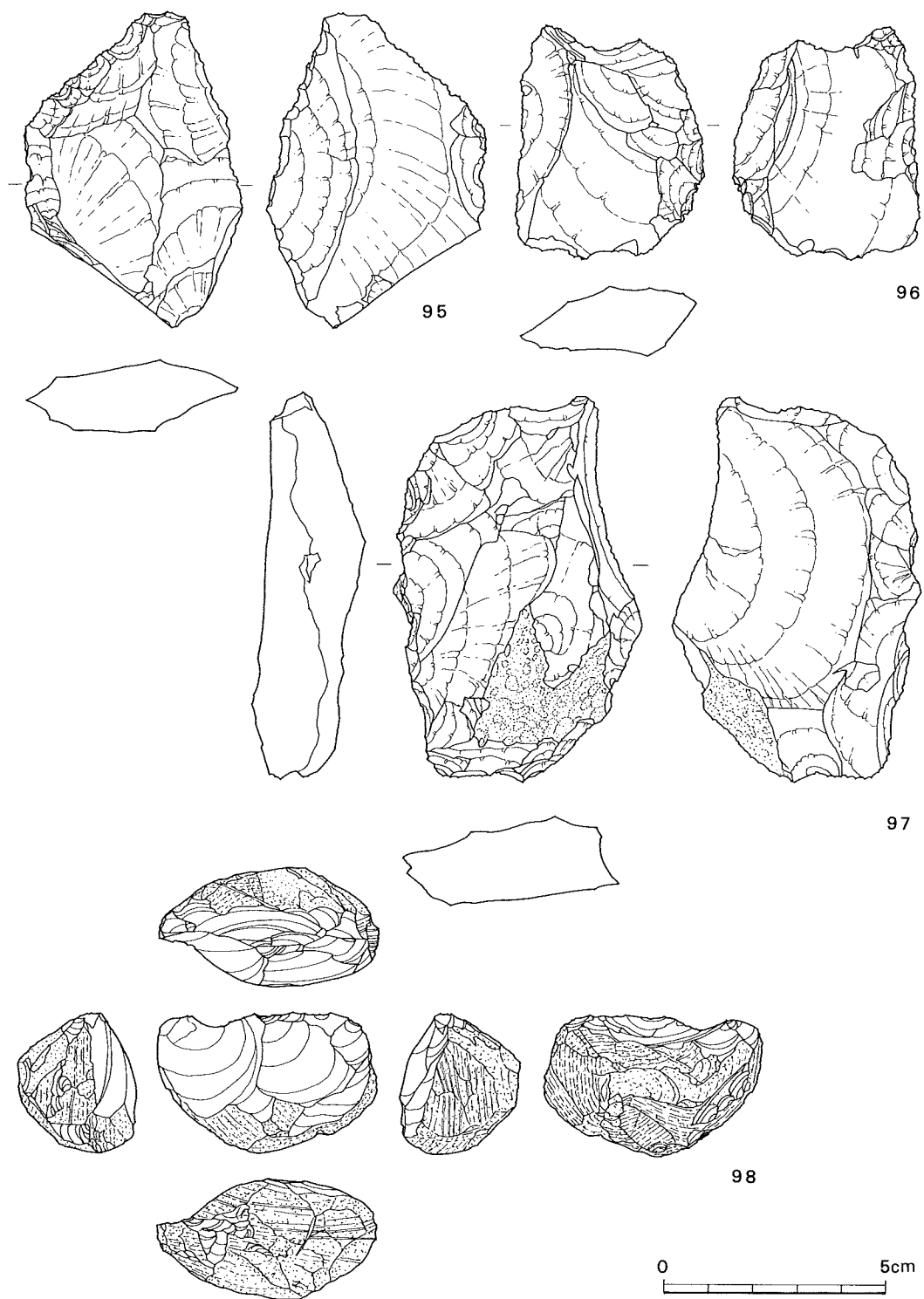


Fig. 139 縄文時代の石器 ① (2/3)



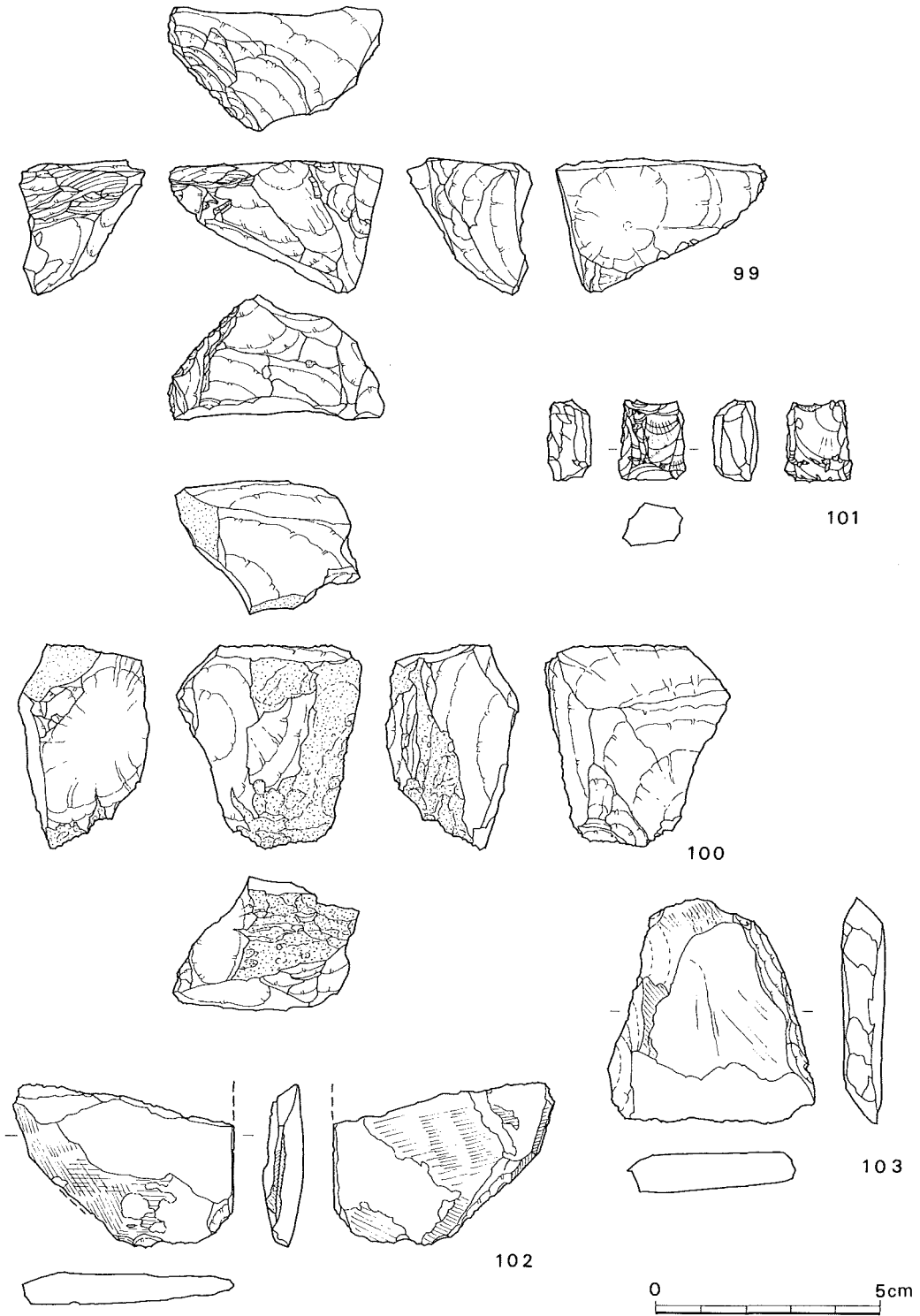


Fig. 140 縄文時代の石器 ⑫ (2/3)

Tab. 19 剥片石器計測表（縄文）①

< >は破損品の計測実数値を示す

Fig.	番号	出土区	層	器種	石材	重さ (g)	大きさ (cm)			備考
							長	幅	厚	
129	1	V-19	4	石 槍	安山岩	14.9	8.8	2.4	0.9	
	2	S-17	3	〃	〃	<8.7>	<2.7>	<2.3>	<1.0>	
	3	Q~S-10~12	1	楔形石器	黒色黒曜石	3.2	2.3	1.3	1.1	
	4	〃	〃	〃	灰白色黒曜石	4.5	2.5	1.3	1.2	
	5	T-17	3	石 錐	安山岩	7.1	4.1	2.3	0.8	
	6	S-15	〃	スクレイパー	黒色黒曜石	<5.6>	<4.4>	<2.0>	<0.9>	
	7	T・P・4	〃	〃	灰白色黒曜石	<5.0>	<4.4>	<2.2>	<0.8>	
	8	S-20	〃	〃	〃	<2.5>	<2.5>	<2.6>	<0.4>	
	9	S-18	〃	〃	黒色黒曜石	4.6	2.1	2.3	0.8	
	10	O-12	2	〃	〃	1.8	1.8	2.3	0.5	
	11	J-8	1	〃	灰色黒曜石	5.2	3.1	2.2	0.7	
	12	U-15	3	〃	黒色黒曜石	8.2	2.6	3.0	1.1	
	13	T-16	2	〃	灰色黒曜石	5.3	2.2	3.3	0.8	
	14	T-21	3	〃	黒色黒曜石	4.1	2.4	2.2	0.8	
	15	R-16	〃	〃	〃	3.5	2.6	2.4	0.6	
130	16	V-15	〃	〃	〃	5.7	2.7	3.4	0.8	
	17	V-22	〃	〃	〃	<4.9>	<2.4>	2.4	0.9	
	18	S-19	〃	〃	〃	<2.2>	<2.8>	<1.4>	<0.6>	
	19	U-16	〃	〃	〃	<6.3>	3.2	2.7	0.9	
	20	B-3	2	〃	〃	7.5	4.0	2.3	1.0	
	21	S22・23	3	〃	〃	2.4	3.2	1.3	0.6	
	22	U-19	〃	〃	灰色黒曜石	2.0	2.8	1.2	0.6	
	23	B-2	2	〃	黒色黒曜石	3.8	1.9	2.4	0.9	
	24	U-19	3	〃	〃	3.7	2.7	1.8	0.8	
	25	S-21	〃	〃	安山岩	16.9	6.8	3.2	0.9	
	26	T-17	〃	〃	〃	32.1	8.0	3.8	1.0	
	27	—	—	〃	〃	24.9	4.2	4.5	1.1	
131	28	S-22	3	〃	〃	15.4	4.7	3.0	1.0	
	29	T-17	〃	〃	〃	13.1	4.0	3.0	1.2	
	30	—	〃	〃	〃	<23.6>	<5.1>	<3.3>	<1.3>	
	31	S-16	〃	〃	〃	39.4	5.3	3.9	1.5	
	32	S-18	〃	〃	〃	31.0	5.3	3.8	1.3	
	33	Q-5	4	〃	〃	<16.3>	5.0	2.7	<1.5>	
	34	T-17	3	〃	〃	<34.7>	5.4	3.7	1.5	
132	35	—	〃	〃	〃	32.9	6.1	3.9	1.5	
	36	S-17	〃	〃	〃	53.0	6.3	4.1	1.7	
	37	R-11	〃	〃	〃	19.1	4.3	4.3	1.1	
	38	Q-S	4	〃	〃	12.8	4.2	3.5	0.8	

Tab. 20 剥片石器計測表(縄文)②

Fig.	番号	出土区	層	器種	石材	重さ (g)	大きさ (cm)			備考
							長	幅	厚	
132	39	QRS-10・11・12	1	スクレイパー	安山岩	38.5	3.5	6.8	1.4	
	40	—	—	〃	〃	<56.1>	<4.5>	6.3	2.4	
133	41	V-21	3	〃	〃	<91.5>	6.4	6.6	1.9	
	42	S-20	〃	〃	〃	30.7	5.6	3.6	1.5	
	43	〃	〃	〃	〃	<15.8>	4.5	2.6	1.2	
	44	S-16	〃	〃	〃	<8.3>	3.2	2.7	0.9	
	45	S-19	〃	〃	〃	42.3	4.5	4.3	2.2	
	134	46	V-17	〃	〃	〃	<90.7>	8.7	6.1	2.3
47		T-15	〃	〃	〃	<72.7>	<9.2>	<4.4>	<2.2>	
48		S-17	〃	〃	玄武岩	38.0	7.5	5.9	1.4	
135	49	S-20	〃	石 匙	安山岩	<37.7>	8.0	4.4	<1.1>	
	50	6TP	1	使用痕ある剥片	黒色黒曜石	3.9	3.5	1.9	0.8	
	51	R-15	3	〃	〃	<4.1>	<2.6>	2.2	<0.7>	
	52	V-15	〃	〃	〃	2.4	2.9	2.0	0.7	
	53	T-18	〃	〃	〃	<2.8>	<2.4>	1.7	0.7	
	54	S-16	〃	〃	〃	4.8	2.5	2.1	1.0	
	55	RV-19・20	2	〃	〃	1.0	1.8	1.3	0.6	
	56	R-15	3	〃	灰色黒曜石	3.3	3.3	1.4	0.7	
	57	S-17	〃	〃	黒色黒曜石	4.0	2.3	1.7	1.2	
	58	S-21	〃	〃	〃	<2.2>	<3.0>	1.4	0.6	
	59	U-20	〃	〃	〃	6.6	3.4	2.7	1.0	
	60	V-22	〃	〃	〃	<5.0>	<4.0>	2.3	0.7	
	61	U-22	〃	〃	〃	6.7	2.5	2.6	1.0	
	136	62	T-31	〃	〃	安山岩	8.9	3.6	2.7	1.1
63		T-18	〃	〃	黒色黒曜石	4.0	2.3	2.7	0.8	
64		A-4	1	〃	〃	<3.9>	2.4	2.2	0.7	
65		U-22	3	〃	〃	<6.1>	3.2	2.2	0.9	
66		—	—	〃	〃	3.4	2.4	2.9	0.6	
67		QS-11・12	—	〃	安山岩	7.2	3.9	2.7	0.7	
68		—	—	加工痕ある石器	玄武岩	7.2	3.3	3.1	0.7	
69		R-11	3	サイドブレード	安山岩	11.0	3.3	3.0	1.1	
70		R-17	〃	〃	灰色黒曜石	2.7	2.9	1.7	0.5	
71		—	〃	つまみ形石器	黒色黒曜石	1.3	2.4	1.1	0.4	
72		—	1	剥片	〃	<6.2>	3.5	1.8	0.8	
73		QW16-19	〃	〃	〃	<7.1>	<4.1>	<1.7>	<1.0>	
74		R-15	3	〃	〃	<5.0>	2.7	2.5	0.8	
137		75	—	4	〃	〃	3.8	2.7	2.2	0.8
	76	QW16-19	—	〃	〃	3.0	2.5	1.8	0.6	

Tab. 21 剥片石器計測表 (縄文) ③

Fig.	番号	出土区	層	器種	石材	重さ (g)	大きさ (cm)			備考
							長	幅	厚	
137	77	QRS・ 10・11・12	1	剥片	黒色黒曜石	1.7	2.4	1.8	1.5	
	78	E-3	2	〃	〃	1.7	2.1	1.5	0.6	
	79	T-22	1	〃	〃	2.9	1.7	2.1	0.8	
	80	W-21	3	〃	〃	3.3	1.8	2.4	1.1	
	81	G-10	1	〃	〃	4.5	2.9	1.4	0.9	
	82	T-15	3	〃	〃	3.0	2.7	1.6	0.8	
	83	S-21	〃	〃	安山岩	13.8	4.3	2.2	1.4	
	84	S-17	〃	〃	〃	10.2	4.8	2.1	1.2	
	85	S-21	4-3	〃	〃	15.1	3.7	3.4	1.1	
	86	U-22	3	〃	〃	58.2	5.6	6.2	1.6	
138	87	S-17	〃	〃	〃	51.6	4.8	5.8	1.8	
	88	T-19	〃	〃	〃	34.7	5.4	3.3	1.8	
	89	TP4	〃	〃	〃	29.6	4.1	4.3	1.6	
	90	S-17	〃	〃	〃	37.8	5.3	4.1	1.7	
	91	U-22	〃	〃	〃	<20.7>	5.2	<2.8>	<1.2>	
	92	T-15	〃	〃	玄武岩	<9.3>	<4.9>	<2.2>	<0.9>	
	93	—	2	〃	安山岩	9.1	3.9	1.9	1.1	
	94	S-21	4-3	〃	〃	<109.8>	9.0	5.2	2.2	
139	95	S-20	3	〃	〃	54.7	7.1	4.9	1.6	
	96	R-16	〃	〃	〃	33.3	5.3	4.3	1.7	
	97	T-22	〃	〃	〃	109.3	8.8	5.4	2.2	
	98	—	—	石核	灰色黒曜石	38.6	3.2	4.8	2.7	
140	99	Q-S	4	〃	安山岩	<32.7>	3.0	4.7	2.8	
	100	S-19	3	〃	〃	53.9	4.5	4.0	2.9	
	101	A-4	1	不明石器	黒色黒曜石	<3.5>	1.8	1.5	0.9	
	102	V-22	3	〃	玄武岩	<13.1>	<3.6>	<4.8>	<0.9>	
	103	A-2	5	〃	〃	<24.8>	<5.0>	<4.6>	<0.9>	

## 石鏃 (Fig.141～Fig.150)

本調査において、石鏃の破片と思われるものを含めると、総数243点の石鏃が出土した。図示したものは194点、Tab. のみに掲載したものの31点、その他18点である。

石鏃は、縄文時代の様々な種類の石器の中で最も代表的なものであろう。狩猟の道具である矢じりとして使用されたこの石器は、大きさ・形態・製作技術等は、バリエーションに富み分類が難しい。ここでは、層に乱れがみられるため層位による説明は困難なので、基部の形態により大まかに4つに分類した。各々をⅠ～Ⅳとし、(3)は適応範囲が広いので、便宜上、脚部の形により、さらに細かく分類した。

Ⅰ類 基部が丸みを帯びるもの

Ⅱ類 基部が直線的なもの

Ⅲ類 基部に抉入のあるもの

- ◇ a類 抉りが浅く、抉り深度が0.3未満
- ◇ b類 脚部が側辺の直線上にあるもの
- ◇ c類 Ⅲb類と同種であるが、より精密な製品
- ◇ d類 脚部が内湾するもの
- ◇ e類 独立したタイプの石鏃
- ◇ f類 小形の石鏃
- ◇ g類 鍬形鏃
- ◇ h類 剝片鏃
- ◇ i類 局部磨製石鏃

Ⅳ類 その他（基部破損品、石鏃未製品）

## Ⅰ類（1～13）

これは、基部が抉入とは逆に外に張り出したものであるが、有茎鏃ではなく、丸みを帯びている。

1・2は円基鏃である。7～10は、基部の両端が張り、刃部は急に細くなっている。11～13は3点とも灰色黒曜石製で、大形の二等辺三角形をしている。断面は、ふくらみの大きい凸レンズ状である。矢じりとしてよりも、槍や銛の様に使用したのかもしれない。また、9は石鏃の可能性が高いが、使用痕は観察できなかった。

## Ⅱ類（14～33）

これは、基部が直線的なもので、平基無茎鏃と分類されるものである。

14～22は、小形ではほぼ正三角形をしている。このタイプは、二面が非常に丁寧な全面剝離調整が施されており、薄いのが特徴として挙げられる。23～26は基部が直線的で大形のものである。27～32は剝離調整が乱れている石鏃で、他に比べて厚ぼったくなっている。33は、小形の二等辺三角形を呈し、両面を剝離調整している。

### Ⅲ a 類 (34~82)

Ⅲ類は基部に抉りの入る凹基無茎鏃といわれる石鏃であるが、抉りによって作り出される脚部の形は様々である。Ⅲ a 類は、抉りが浅く、抉り深度が0.3未満のものである。このタイプは直線に近い抉入のため脚部の先端は鋭く尖っていることが多い。

34~61・65~67・78~81は、正三角形か鈍角の二等辺三角形をしており、断面は薄い。62~64は、断面が凸レンズ状を成し、鋭角の二等辺三角形をしている。とても丁寧に調整されている。68~77は厚みのある大形のもので、77を除いては、剝離調整は荒い。82は、他の石鏃とタイプを異にする形状をしている。基部は、ほとんど直線に近い程の僅かな抉りである。調整は非常に丁寧に全面的剝離調整である。非常に薄い。類例では、大久保遺跡がこのタイプを多出している。

### Ⅲ b 類 (83~97)

深い抉りを持ち、両脚が、先端角を作る二辺の延長部にあるか、それに近い石鏃で、円脚鏃と区別したものである。

83~88は、抉りが深く、脚部が太い石鏃である。脚部の先端は直線に近い。また、85~87は鋏形鏃に近い。89~97は、長い脚部が先端にいくにつれて次第に細くなっている。89・95は側辺の一部が鋸歯状になっている。

### Ⅲ c 類 (98~115)

これは、Ⅲ b 類と同類であるが、非常に丁寧に剝離調整が施されていること、脚部の長さ・形が似ていること、鋭角の二等辺三角形をしていること等の共通点を持つので、敢て別個に分類した。

98~100は、先端部の角度がやや広く、Ⅲ c 類の中では小さめの石鏃である。100~115は、ほとんど同種のものである。101は二側辺に鋸歯状加工の施された精密なものである。

### Ⅲ d 類 (116~119)

この4点は、脚部が内湾するものである。116は円脚鏃と思われる。118・119は、側辺が大きく張り出して、脚部に於て内湾していく、特徴のある形をしている。

### Ⅲ e 類 (120)

鏃矢の矢ハズに似た形をしている。両面は全面的剝離調整が施され、薄手である。今回出土分布には類例がなく、Ⅲ e 類として設けた。

### Ⅲ f 類 (121~127)

全体の石鏃の中で非常に小形のものである。ただし、破損品が多いので適当でないものも含まれているかもしれない。121はⅢ c 類に近いものである。

### Ⅲ g 類 (128~157)

U字形の大きな抉りと角形の脚部をもつ凹基無茎鏃である。縄文時代早期の指標的な石鏃とされている。本調査では著しく風化しているが、押型文土器片らしきものも出土している。

128~136は、先端部の角度が直角に近い。基部が広い。角状の脚部が明確。という共通の特徴をもつものである。また、133~136は、U字形よりΩ形に近い抉りである。137・138・152などは大形

の部類である。140～151はU字形の深い抉りはあるが、角状の脚部がやや細くなっている。155～157は、同じ鋏形鏃でも極端に脚部が長く、最長の $\frac{1}{2}$ 以上を占める。

### Ⅲ h 類 (58～163)

剝片鏃と呼ばれるもので、剝片の縁辺のみに調整を施したものである。この石鏃は、縄文時代後期を代表するものである。

### Ⅲ i 類 (165～168)

一部に磨きのある局部磨製石鏃である。Ⅲ g 類と同様、縄文時代早期を代表する石鏃である。164～166は片面に、167・168には両面に磨きがある。

### Ⅳ類 (169～194)

I～Ⅲ類は、主に基部による分類であるため、基部破損品をⅣ類とした。また石鏃未製品もこの中に入る。しかし、残存部分から類推できるものもある。

178～182は、大形で鋭角の二等辺三角形をしており、非常に丁寧な全面剝離調整の状態からみて、Ⅲ c 類であると思われる。188は特徴のある石鏃で、パテナのある灰色黒曜石を素材としている。表面は、二側辺から押圧剝離で剥いだと思われる調整が全面に施されている。裏面は、主要剝離面が残り、縁辺に僅かな調整痕がみられ、先端部に残っていたであろうバルブ部分に非常に丁寧な調整を施している。鋭角の二等辺三角形であるが、Ⅲ a 類の82と同種である可能性がある。190～194は未製品である。

脚部のみの破損品は図示していないが、Tab. 27に記入してあるので参考にされたい。

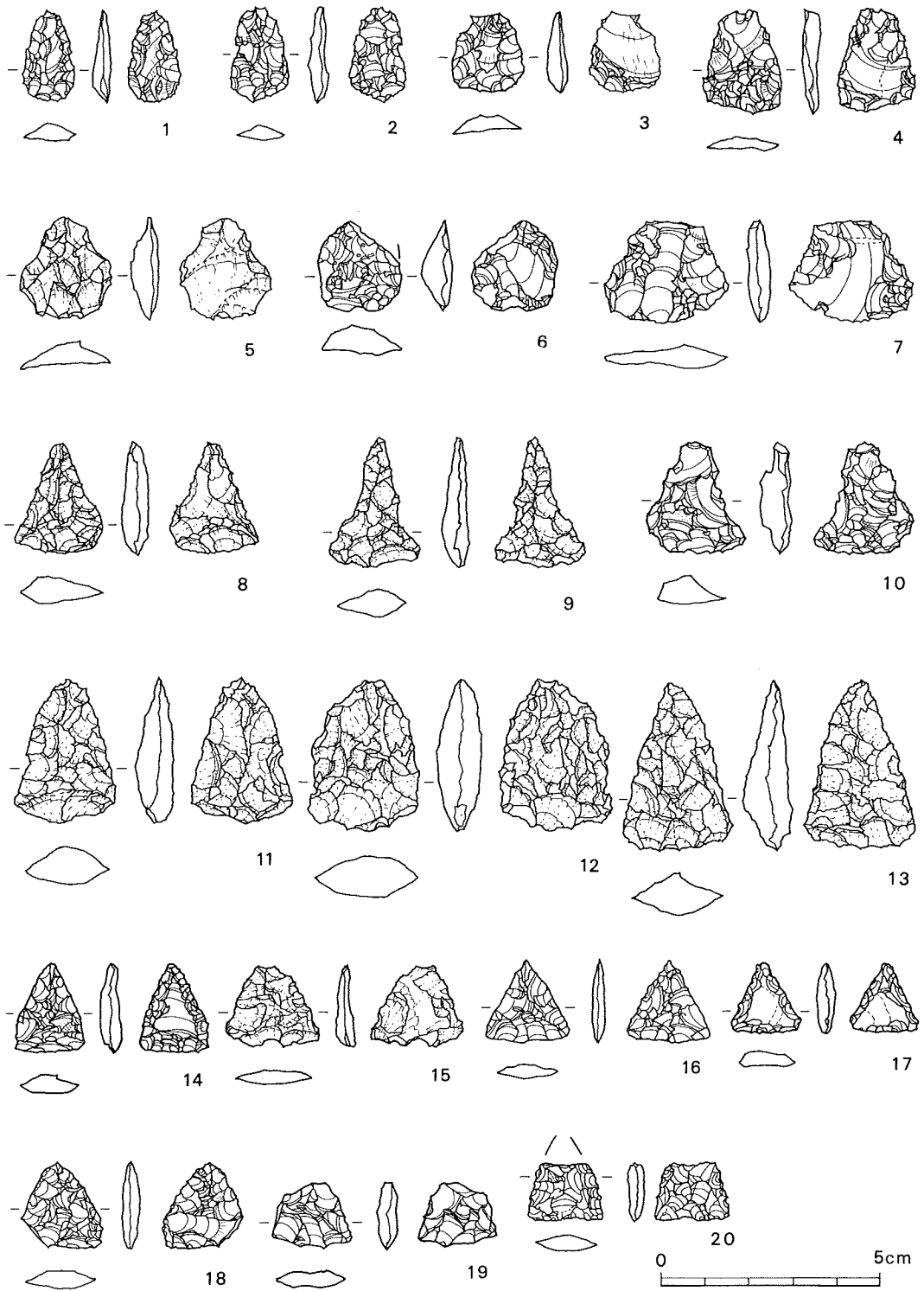


Fig. 141 石 鍬 ① (2/3)



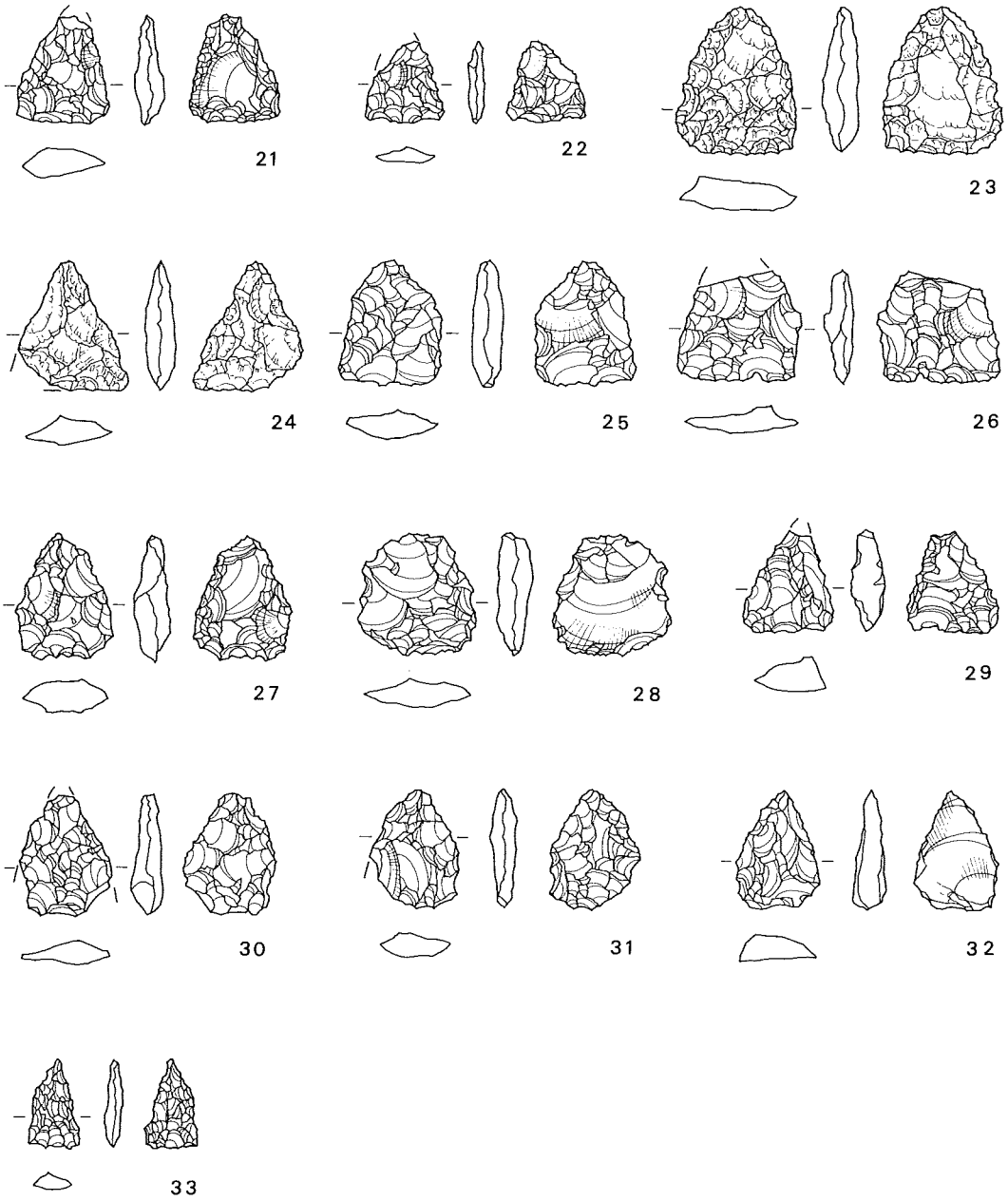


Fig. 142 石 鏃 ② (2/3)

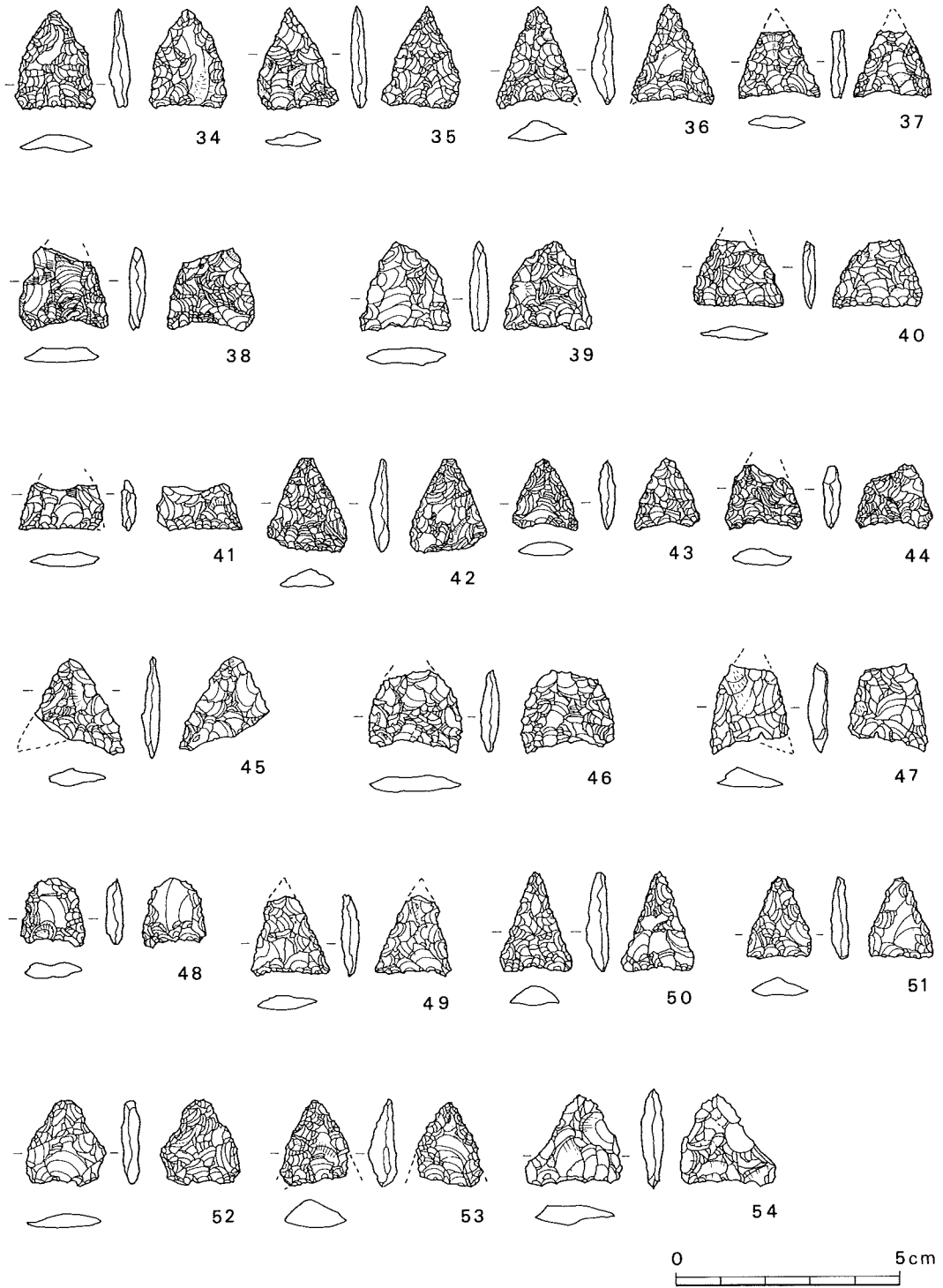


Fig. 143 石 鏃 ③ (2/3)

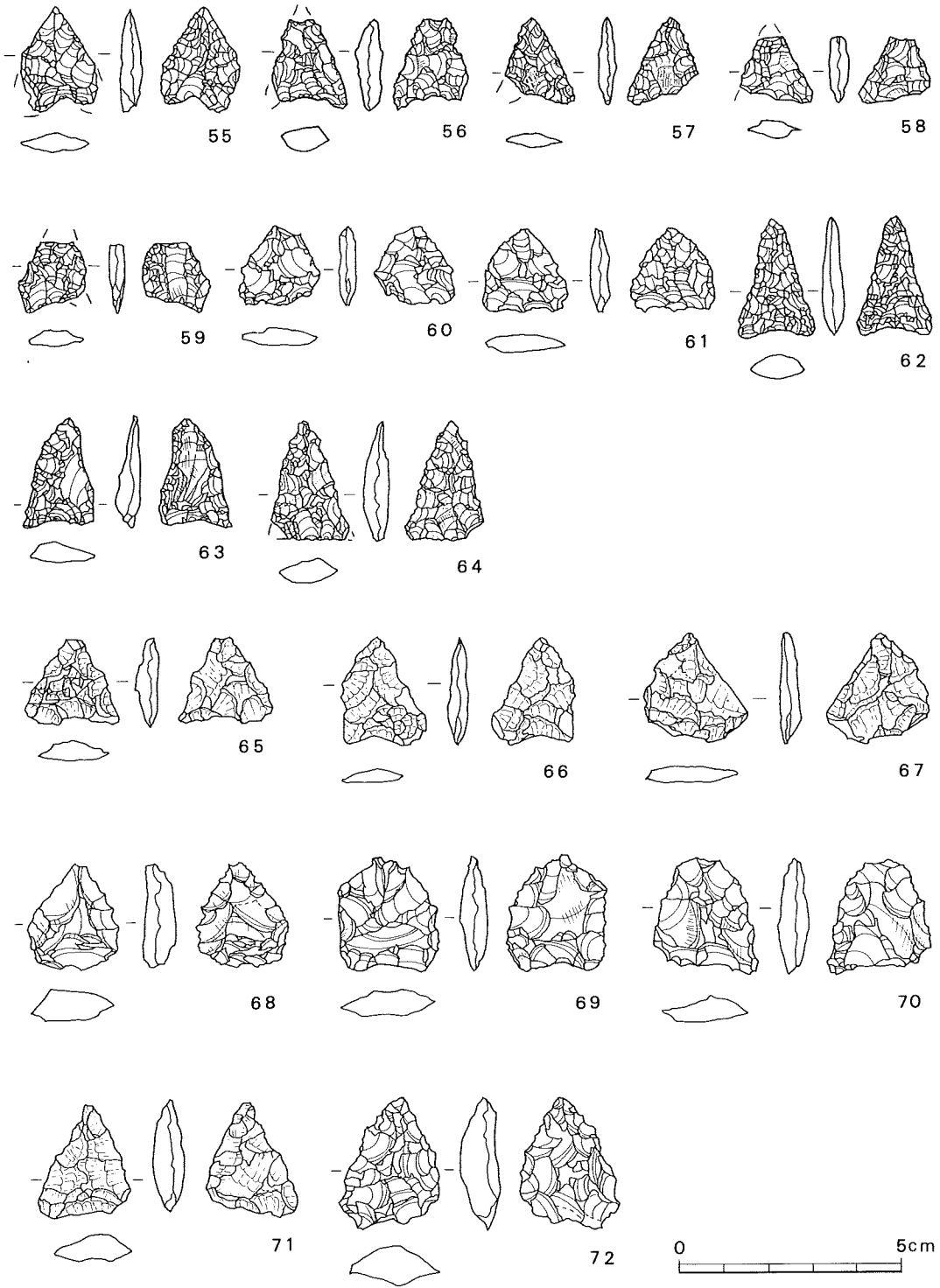


Fig. 144 石 鏃 ④ (2/3)

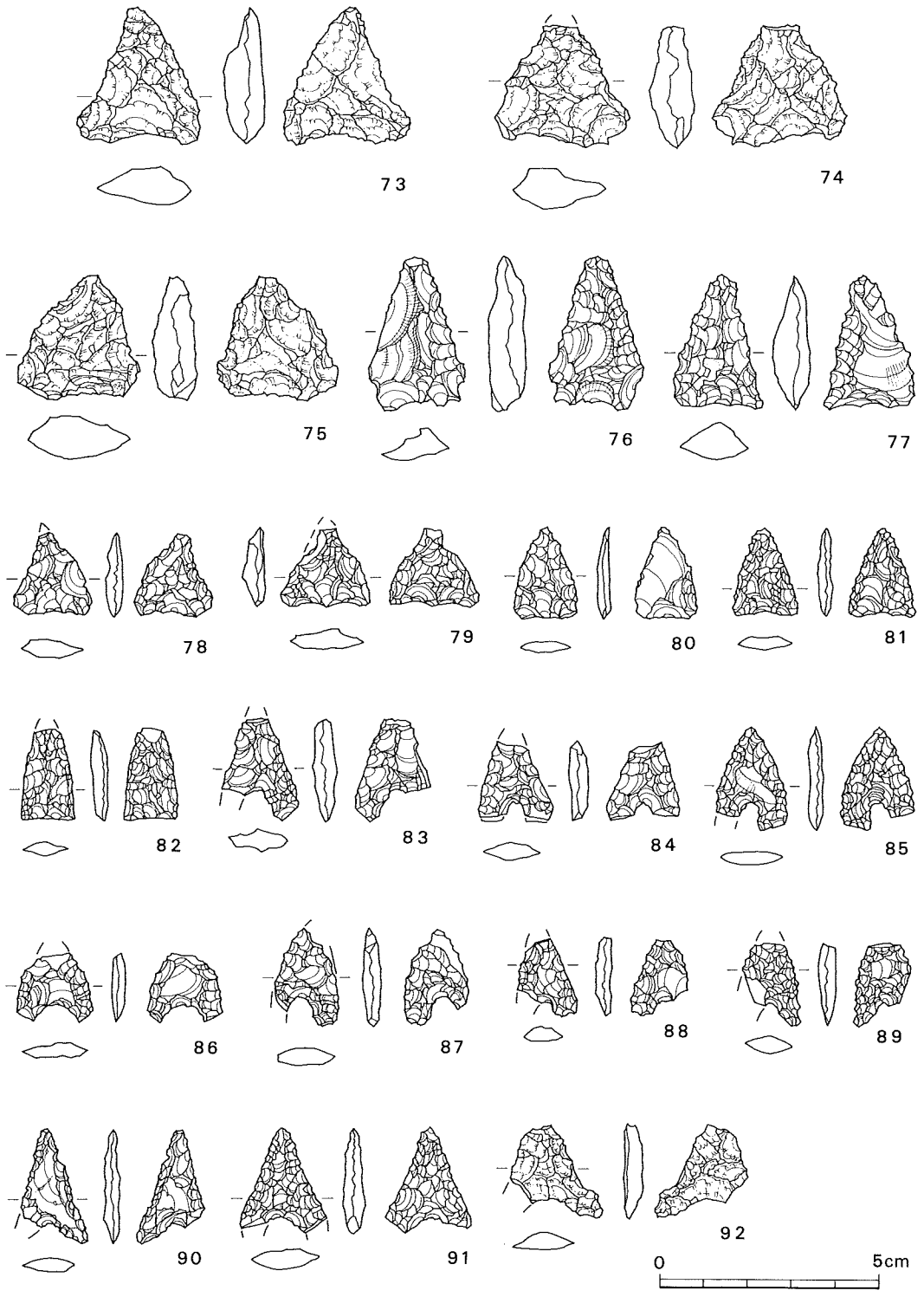


Fig. 145 石 鋏 ⑤ (2/3)

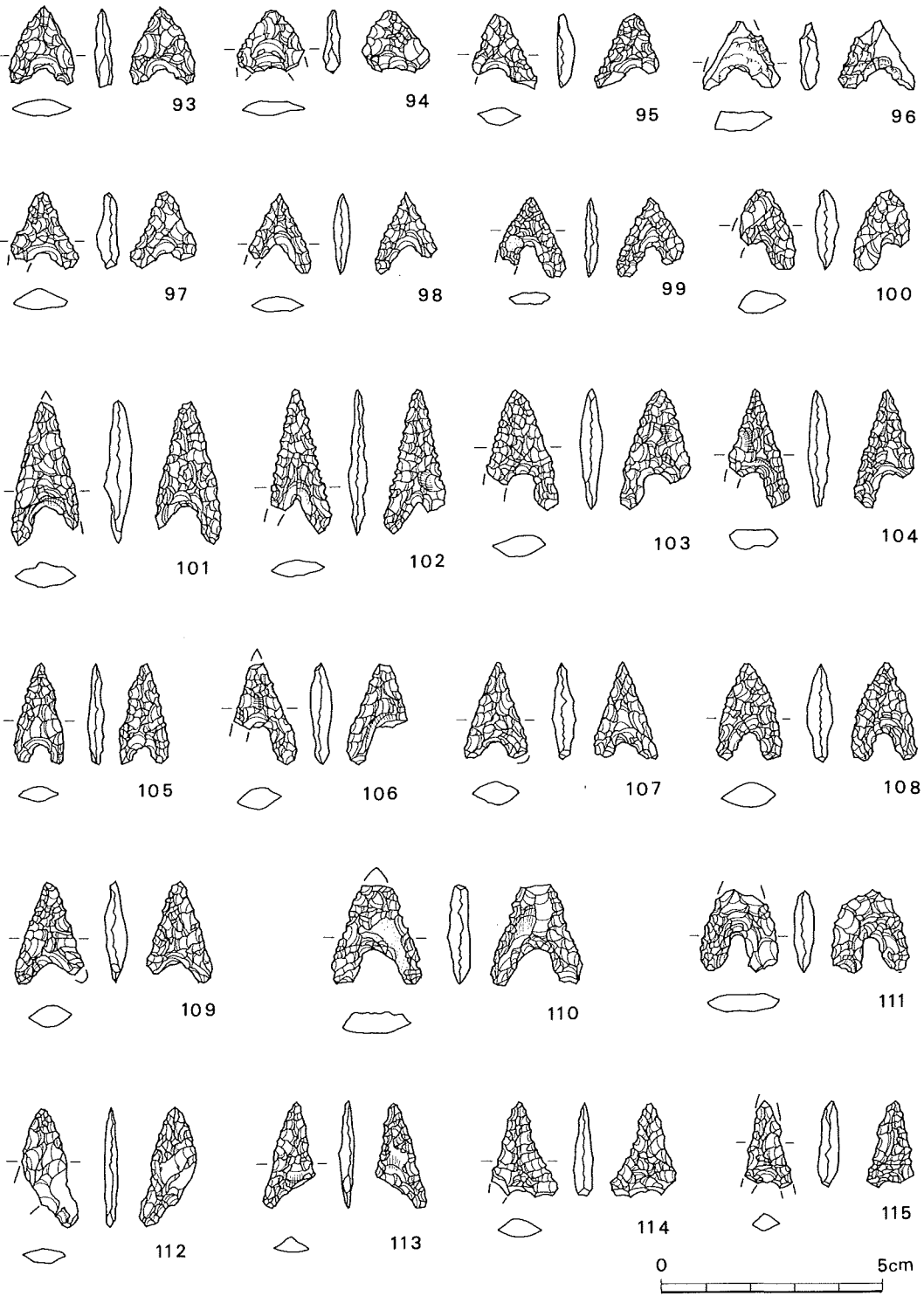


Fig. 146 石 鏃 ⑥ (2/3)

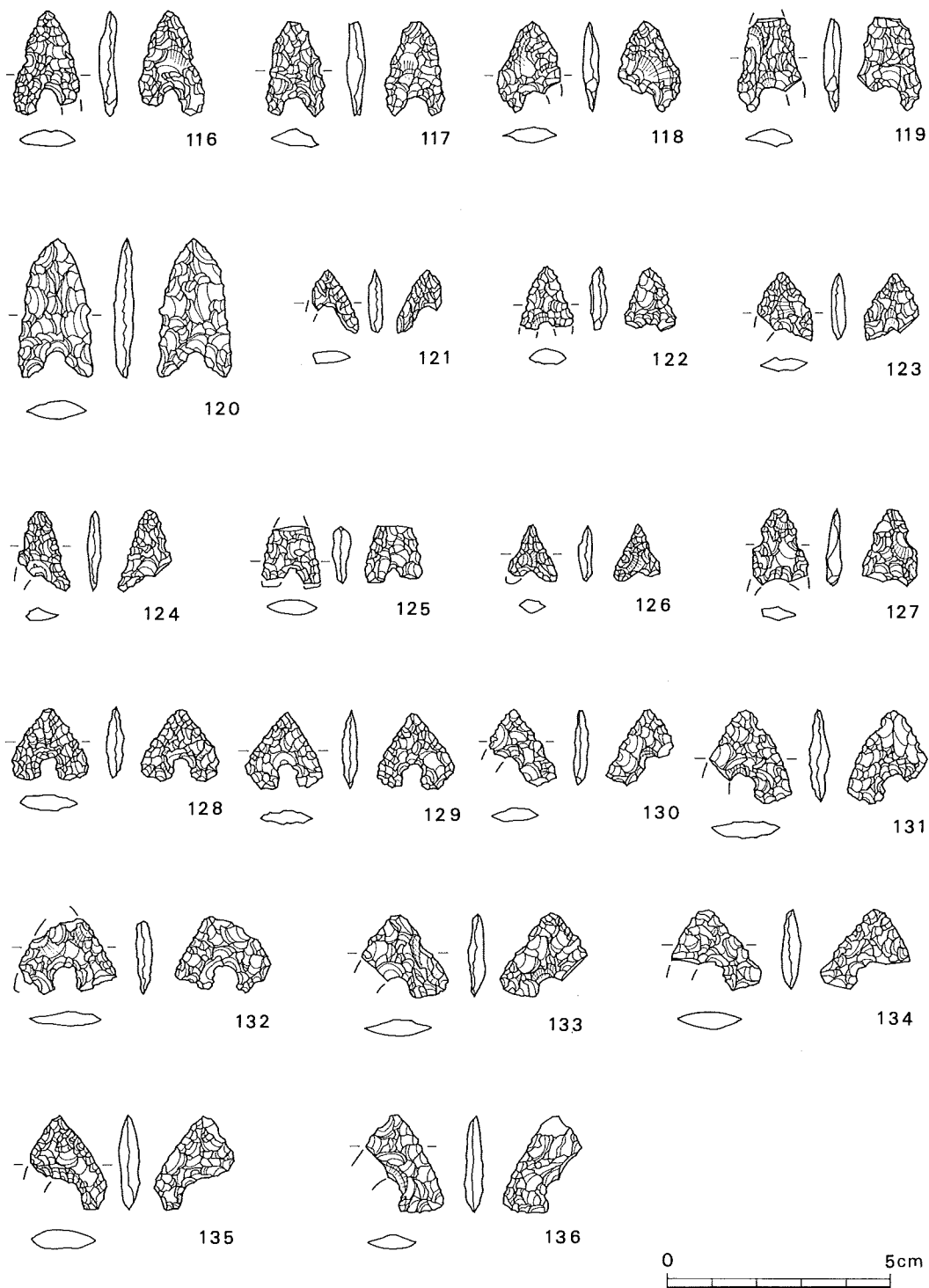


Fig. 147 石 鏃 ⑦ (2/3)

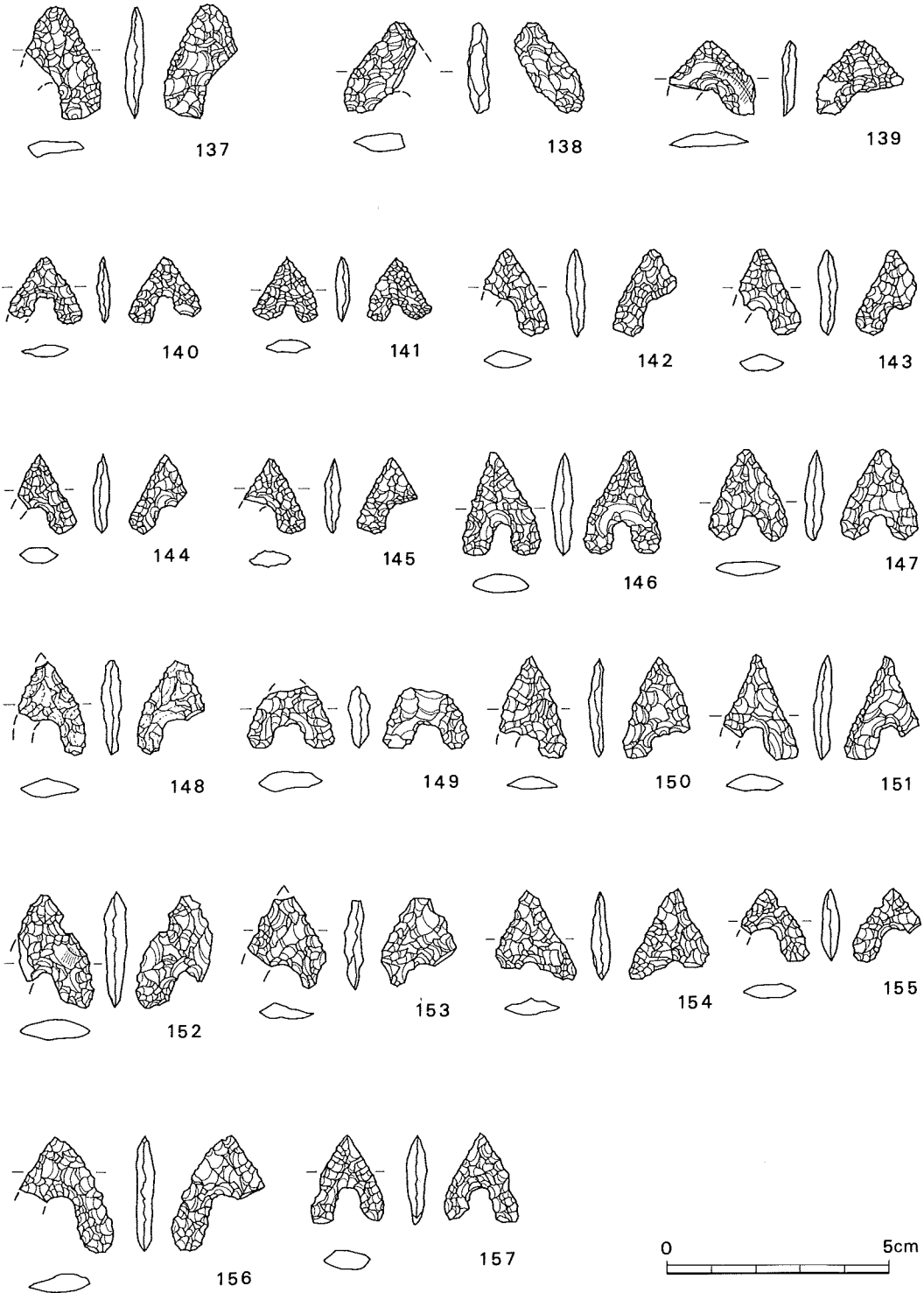


Fig. 148 石 鍬 ② (2/3)

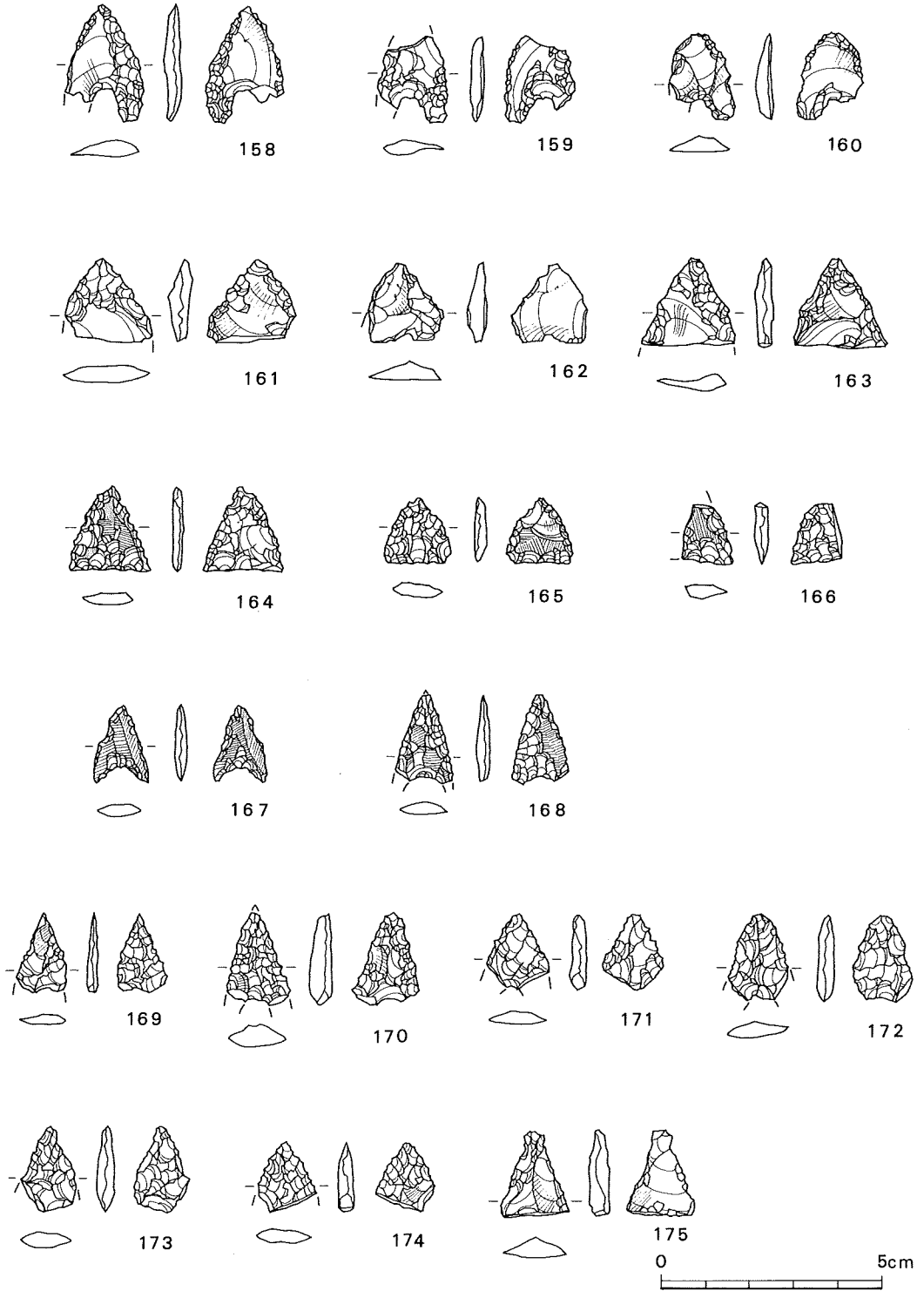


Fig. 149 石鏃 ⑨ (2/3)



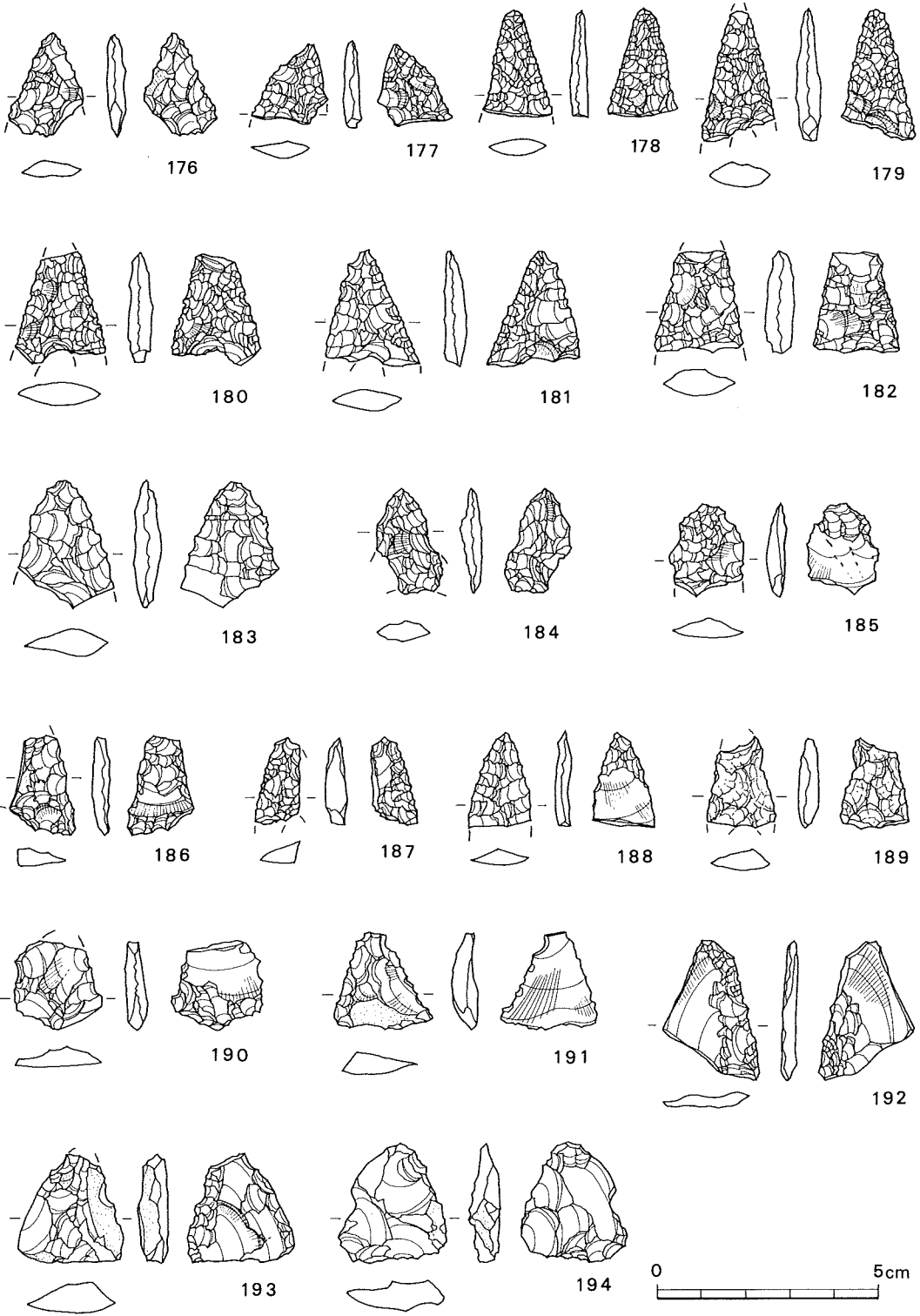


Fig. 150 石 鏃 ⑩ (2/3)

Tab. 22 石鏃計測表 ①

〈 〉 は破損品の計測実数, また備考欄の角度は角端角度を表す

Fig.	番号	出土区	層	石 材	破損部位	重さ (g)	大きさ (cm)			挟り (cm)		備 考
							長	幅	厚	深度	幅	
141	1	U-21	3	半透明黒色ob	完 形	0.8	2.1	1.2	0.4	—	—	円基鏃
	2	R・U-19・22	〃	〃	〃	0.9	2.2	1.3	0.4	—	—	〃
	3	C-不明	〃	黒 色 ob	先端部破損	〈0.9〉	〈1.9〉	1.6	0.45	—	—	主要剥離面を残す
	4	T-15	〃	半透明黒色ob	完 形	1.4	2.4	1.8	0.4	—	—	〃
	5	V-16	〃	灰 色 ob	〃	1.9	2.3	2.1	0.6	—	—	〃 115°
	6	表採	—	〃	基部の一部破損	〈2.2〉	〈2.1〉	〈1.9〉	0.7	—	—	〃
	7	S-19	3	半透明黒色ob	先端部破損	〈1.9〉	〈2.4〉	2.9	0.5	—	—	やや大きめ
	8	S-21	〃	灰 色 ob	完 形	2.4	2.6	1.9	0.7	—	—	先端角 58°
	9	U-20	〃	〃	〃	1.8	3.0	2.1	0.6	—	—	石鏃の可能性大
	10	S-16	〃	黒 色 ob	先端部・片脚破損	〈2.6〉	〈2.6〉	〈2.1〉	0.7	—	—	
	11	R-19	〃	灰 色 ob	完 形	5.3	3.5	2.3	0.9	—	—	大形 69°
	12	A-4	1	〃	〃	8.3	3.5	2.6	1.05	—	—	〃 87°
	13	R-19	3	〃	〃	6.5	3.9	2.5	1.05	—	—	〃 61°
	14	T-21	〃	黒 色 ob	〃	1.4	2.05	1.6	0.5	—	—	正三角形 48°
	15	R-11	2	灰 色 ob	基部の一部を破損	〈1.1〉	1.9	2.2	〈0.4〉	—	—	薄い剥片使用 61°
	16	不明	—	〃	完 形	0.8	1.9	1.9	0.3	—	—	小形 70°
	17	〃	〃	〃	〃	0.8	1.6	1.6	0.5	—	—	61°
	18	U-23	3	半透明黒色ob	片脚破損	〈1.2〉	〈2.0〉	〈1.9〉	0.4			薄く丁寧 70°
	19	不明	2	黒 色 ob	先端部破損	〈1.3〉	〈1.5〉	1.8	0.5	—	—	
	20	R-15	3	灰白色ob	〃	〈0.8〉	〈1.3〉	1.7	0.3	—	—	
142	21	S-16	〃	黒 色 ob	〃	〈1.9〉	〈2.3〉	1.9	0.6	—	—	主要剥離面を残す
	22	T-16	〃	灰 色 ob	〃	〈0.8〉	〈1.7〉	1.7	0.4	—	—	
	23	不明	2	〃	〃	〈5.0〉	〈3.0〉	2.5	0.7	—	—	大形
	24	S-17	3	〃	片脚破損	〈2.7〉	2.7	〈2.1〉	0.7	—	—	65°
	25	U-17	〃	黒 色 ob	完 形	3.4	2.6	2.1	0.6	—	—	90°
	26	T-20	〃	半透明黒色ob	先端部・片脚破損	〈2.8〉	〈2.3〉	2.4	0.6	—	—	薄くて大形
	27	〃	〃	黒 色 ob	先端部破損	〈3.0〉	〈2.6〉	2.0	0.8	—	—	
	28	表採	—	〃	〃	〈4.2〉	〈2.6〉	2.5	0.8	—	—	裏面は主要剥離面
	29	S-15	2	〃	〃	〈2.3〉	〈2.1〉	1.9	0.7	—	—	
	30	V-15	3	〃	先端部・両脚破損	〈2.4〉	〈2.5〉	〈1.9〉	0.7	—	—	
	31	T-18	〃	〃	両脚破損	〈1.8〉	〈2.5〉	〈1.8〉	0.5	—	—	82°
	32	不明	—	灰白色ob	基部破損	〈2.2〉	2.5	1.7	〈0.7〉	—	—	78°
	33	T-21	3	黒 色 ob	完 形	0.5	1.9	1.1	0.4	—	—	小形, 丁寧 60°
143	34	S-17	〃	〃	〃	1.1	2.1	1.8	0.5	0.1	1.1	薄手で丁寧 85°
	35	T-16	〃	〃	片脚の一部破損	〈0.9〉	2.4	〈0.8〉	0.3	0.1	〈0.6〉	〃 60°
	36	K-20	1	〃	完 形	1.0	2.1	1.8	0.5	0.15	1.5	〃 55°
	37	S-18	3	〃	先端部破損	〈0.7〉	〈1.5〉	1.8	0.4	0.15	1.1	〃
	38	T-22	〃	半透明黒色ob	〃	〈1.2〉	〈1.9〉	2.0	0.4	0.25	1.6	〃

Tab. 23 石鏃計測表 ②

Fig.	番号	出土区	層	石 材	破損部位	重さ (g)	大きさ (cm)			挟り (cm)		備 考
							長	幅	厚	深度	幅	
143	39	S-21	3	乳白色ob	先端部破損	<1.3>	<2.0>	2.0	0.4	0.1	1.05	薄手, 丁寧
	40	T-20	〃	灰色ob	〃	<0.7>	<1.6>	2.0	0.3	0.1以下	1.1	〃 〃
	41	T-16	〃	〃	〃	<0.6>	<1.1>	1.9	0.3	0.1	0.95	〃 〃
	42	S-17	〃	半透明黒色ob	先端部・両脚一部破損	<1.1>	<1.1>	<1.8>	0.4	<0.1>	<0.95>	丁寧 58°
	43	T-23	1	灰色ob	片脚の一部破損	<0.5>	<1.6>	<1.5>	0.4	<0.2>	<1.2>	〃 72°
	44	R-19	3上	黒色ob	先端部破損	<0.7>	<1.5>	1.8	0.4	0.2	1.45	〃
	45	V-21	3	〃	片脚破損	<1.0>	<2.3>	1.5	0.4	0.2	—	薄手で丁寧 87°
	46	QW-16・19	1	〃	先端部破損	<1.4>	<1.9>	2.1	0.4	0.3	1.5	
	47	S-21	3	灰色ob	先端部・片脚破損	<1.2>	<2.0>	<1.8>	0.4	<0.3>	<1.2>	
	48	Q~S-10~12	1	半透明灰色ob	〃	<0.8>	<1.5>	<1.4>	0.4	0.15	<0.95>	小形, パテナ有り
	49	T-20	3	安山岩	先端部破損	<0.8>	<1.8>	1.3	0.4	0.1	1.5	薄手
	50	〃	4上	半透明灰色ob	片脚の一部破損	<1.1>	<2.2>	<1.7>	0.5	0.1	0.9	50°
	51	不明	1	〃	完 形	0.7	1.9	1.5	0.4	0.1	0.8	64°
	52	Q~S-10~12	一	灰色ob	〃	1.2	1.9	1.8	0.4	0.1	1.0	105°
144	53	W-21	3	黒色ob	片脚破損	<1.3>	<1.9>	<1.6>	0.7	0.2	<0.9>	バルブ残存 65°
	54	S-22	〃	灰色ob	先端部・片脚破損	<1.6>	<1.0>	<2.1>	0.5	0.15	<1.55>	
	55	不明	〃	半透明灰色ob	両脚破損	<1.5>	<2.3>	<1.8>	0.45	<0.35>	<0.95>	72°
	56	T-17	〃	黒色ob	先端部・片脚破損	<1.3>	<2.0>	<1.7>	<0.6>	<0.25>	<1.6>	
	57	U-16	〃	〃	片脚破損	<0.7>	<1.9>	<1.6>	0.4	<0.2>	<0.9>	59°
	58	Q~S-10~12	1	灰色ob	先端部・片脚破損	<0.6>	<1.5>	<1.6>	0.45	0.2	<1.1>	
	59	T-19	2	黒色ob	〃	<0.7>	<1.6>	<1.6>	0.4	<0.25>	—	円脚鏃 ?
	60	R~U-17~19	3	半透明黒色ob	〃	<0.8>	<1.8>	<.9>	0.35	—	—	
	61	T-21	〃	半透明灰色ob	完 形	1.4	1.9	1.9	0.4	—	—	88°
	62	不明	一	黒色ob	〃	1.4	2.7	1.7	0.5	0.2	1.1	非常に丁寧 41°
	63	T-16	2	〃	〃	1.3	2.5	1.6	0.55	0.2	1.1	縁辺を加工 78°
	64	〃	〃	〃	片脚破損	<1.6>	<2.7>	<1.8>	0.6	—	—	非常に丁寧 48°
	65	M-8	1	灰色ob	先端部・片脚破損	<1.4>	<2.0>	<2.1>	0.5	0.2	<0.7>	
	145	66	T-20	3	安山岩	片脚破損	<1.5>	<2.5>	<1.9>	0.45	<0.25>	<1.1>
67		S-20	〃	灰色ob	両脚破損	<2.2>	<2.5>	<2.3>	0.4	<0.2>	—	〃 81°
68		S-17	〃	〃	完 形	3.0	2.4	2.1	0.7	—	—	75°
69		不明	〃	黒色ob	〃	3.2	2.6	2.3	0.6	0.2	1.85	先端が丸い
70		T-22	〃	半透明灰色ob	片脚破損	<3.4>	2.7	<2.2>	0.7	0.2	<1.1>	〃
71		S-17	〃	灰色ob	両脚破損	<2.6>	<2.6>	<2.1>	0.7	—	—	60°
72		R-15	〃	黒色ob	〃	<4.5>	<3.0>	<2.2>	0.9	<0.2>	—	厚みがある 75°
73		T-18	〃	安山岩	完 形	5.3	3.2	2.8	0.9	0.25	1.2	大きく厚い 62°
74		S-16	〃	灰色ob	先端部・両脚破損	<7.0>	<2.8>	<3.1>	1.0	<0.3>	—	荒い調整
76		T-20	〃	灰色ob	先端部破損	<5.1>	<3.5>	2.3	0.85	0.2	0.9	胴部の一部破損

Tab. 24 石鏃計測表 ③

Fig.	番号	出土区	層	石 材	破損部位	重さ (g)	大きさ (cm)			挟り (cm)		備 考
							長	幅	厚	深度	幅	
145	77	S-18	3	黒 色 ob	完 形	3.3	3.1	2.1	0.9	0.1	1.2	33°
	78	T-16	〃	灰 色 ob	〃	0.9	1.9	1.8	0.4	0.1	1.3	50°
	79	T-17	〃	玄 武 岩	先端部破損	<1.1>	<1.8>	2.0	0.5	<0.1以下>	1.45	
	80	T-22・23	〃	灰 色 ob	完 形	0.9	2.1	1.5	0.3	0.1以下	0.9	45°
	81	R-U-20~22	1	〃	〃	0.7	2.0	1.5	0.3	0.1	1.1	36°
	82	S-21	3	〃	先端部破損	<0.8>	<2.1>	1.2	0.4	<0.1以下>	0.95	
	83	R-16	〃	半透明黒色ob	先端部・片脚破損	<1.2>	<2.3>	<1.8>	0.6	<0.75>	—	
	84	U-19	〃	灰白色 ob	先端部・両脚破損	<1.1>	<1.8>	1.3	0.5	<0.35>	<0.4>	
	85	V-18	〃	黒 色 ob	片脚破損	<0.9>	<2.4>	<1.7>	0.3	<0.65>	<0.45>	46°
	86	T-23	〃	灰 色 ob	先端部破損	<0.7>	<1.7>	1.8	0.3	0.4	1.0	
	87	S-19	〃	透明黒色ob	先端部・片脚破損	<1.0>	<2.2>	<1.5>	0.4	<0.65>	<0.7>	
	88	T-16	〃	灰 色 ob	〃	<0.6>	<1.8>	<1.4>	0.4	<0.35>	—	44°
	89	U-15	〃	黒 色 ob	〃	<0.8>	<1.9>	<1.8>	0.4	<0.55>	—	鋸歯状加工あり
	146	90	A-2	2	玄 武 岩	片脚破損	<0.8>	<2.6>	<1.5>	0.4	<0.5>	—
91		S-19	3	半透明黒色ob	両脚破損	<1.2>	<2.4>	<2.0>	0.5	<0.4>	<0.85>	49°
92		U-22	〃	灰 色 ob	先端部・片脚破損	<1.1>	<2.1>	<2.2>	0.5	<0.4>	<1.4>	
93		U-20	〃	半透明灰色ob	完 形	0.7	1.8	1.5	0.4	0.45	1.1	53°
94		不明	2	黒 色 ob	先端部・両脚破損	<0.5>	<1.4>	<1.5>	0.4	—	—	68°
95		S-16	3	半透明黒色ob	〃	<0.5>	<1.7>	<1.4>	0.4	<0.45>	—	鋸歯状加工あり
96		S-21	〃	灰 色 ob	〃	<0.7>	<1.6>	<1.6>	<0.4>	<0.5>	<1.2>	
97		表採	—	〃	〃	<0.7>	<1.8>	<1.5>	0.5	<0.35>	<0.85>	53°
98		V-22	3	〃	片脚破損	<0.5>	<1.9>	<1.4>	0.4	<0.7>	—	52°
99		P-12	—	黒 色 ob	〃	<0.4>	<1.8>	<1.5>	0.3	<0.7>	<0.7>	57°
100		T-22	3	灰 色 ob	〃	<0.6>	<1.8>	<1.8>	0.6	<0.65>	—	108°
101		V-18・19	—	〃	〃	<1.5>	<3.3>	<1.5>	0.6	<0.9>	<0.6>	31°
102		T-23	3	〃	〃	<0.8>	<3.3>	<1.4>	0.4	<0.8>	—	鋸歯状加工あり26°
103		T-15	〃	黒 色 ob	〃	<1.3>	<2.8>	<1.6>	0.5	<0.9>	—	39°
104		S-15	〃	〃	〃	<0.9>	<2.7>	<1.35>	0.5	<0.8>	—	38°
105		U-22	〃	灰 色 ob	完 形	0.5	2.3	1.1	0.4	0.45	0.55	32°
106		S-20	〃	安 山 岩	先端部・片脚破損	<0.8>	<2.3>	<1.4>	0.5	<0.9>	—	40°
107		S-19	〃	〃	片脚破損	<0.9>	<2.2>	<1.4>	0.5	<0.35>	<0.9>	37°
108		不明	〃	黒 色 ob	完 形	1.0	2.2	1.5	0.6	0.65	0.85	36°
109		T-15	〃	〃	先端部・片脚破損	<1.0>	<2.3>	<1.5>	0.5	<0.45>	<1.15>	37°
110	不明	〃	半透明黒色ob	先端部破損	<1.3>	<2.3>	2.1	0.5	0.8	1.6		
111	T-17	〃	黒 色 ob	〃	<0.8>	<1.8>	1.8	0.5	0.7	1.0		
112	S-19	〃	灰 色 ob	片脚破損	<0.8>	<2.7>	<1.3>	0.3	<0.5>	—	36°	
113	U-20	〃	透明黒色ob	両脚破損	<0.5>	<2.4>	<1.2>	0.4	<0.45>	—	28°	
114	不明	2	灰 色 ob	〃	<0.9>	<2.1>	<1.45>	0.4	<0.15>	<0.6>	40°	

Tab. 25 石鏃計測表 ④

Fig.	番号	出土区	層	石 材	破損部位	重さ (g)	大きさ (cm)			抉り (cm)		備 考	
							長	幅	厚	深度	幅		
146	115	T-16	3	黒 色 ob	両脚破損	<0.6>	<2.0>	<1.6>	0.45	—	—	27°	
	116	〃	〃	半透明黒色ob	片脚破損	<0.9>	<2.4>	<1.5>	0.4	<0.65>	<0.7>	38°	
	117	不明	〃	黒 色 ob	先端部破損	<0.8>	<2.1>	1.3	0.4	0.4	0.8	46°	
	118	S-14	〃	〃	片脚破損	<0.7>	<2.1>	<1.4>	0.4	<0.45>	—	円脚鏃 53°	
	119	W-20	〃	〃	先端部・片脚破損	<0.8>	<2.1>	<0.5>	0.4	<0.55>	—	〃	
	120	T-21	〃	灰白色ob	完 形	1.7	3.1	1.7	0.45	0.6	1.25	薄く丁寧 93°	
	121	V-22	〃	黒 色 ob	片脚破損	<0.3>	<1.4>	<1.0>	0.35	<0.6>	—	72°	
	122	T-19	2	〃	両脚破損	<0.4>	<1.4>	<1.2>	0.35	—	<0.4>	76°	
	123	F-10	1	〃	片脚破損	<0.4>	<1.5>	<1.3>	0.3	<0.3>	—	111°	
	124	QW-16・19	〃	灰 色 ob	先端部・片脚破損	<0.4>	<1.8>	<1.2>	0.3	<0.4>	—	40°	
	125	T-20	3	半透明灰色ob	先端部・両脚破損	<0.4>	<1.3>	<1.3>	<0.4>	<0.35>	<0.45>		
	147	126	V-20	1	透明黒色ob	片脚破損	<0.2>	<1.3>	<1.1>	0.3	<0.2>	—	52°
		127	T-17	3	黒 色 ob	先端部・両脚破損	<0.5>	<1.7>	<1.2>	0.35	—	—	
		128	T-19	〃	〃	完 形	0.6	1.6	1.7	0.35	0.5	0.7	68°
		129	S-21	〃	灰 色 ob	〃	0.5	1.8	1.8	0.3	0.55	0.5	70°
		130	S-22	〃	〃	片脚破損	<0.4>	<1.7>	<1.5>	0.35	<0.65>	—	64°
		131	T-22	〃	〃	〃	<0.9>	<2.1>	<1.7>	0.45	<0.7>	—	108°
132		T-16	〃	〃	先端部・片脚破損	<0.8>	<1.7>	<2.2>	0.35	<0.65>	<0.8>		
133		S-21	〃	半透明黒色ob	片脚破損	<0.8>	<1.9>	<2.0>	0.4	<0.5>	—	74°	
134		S-20	〃	黒 色 ob	〃	<0.9>	<1.8>	<2.1>	0.45	<0.65>	—	73°	
135		T-19	〃	〃	〃	<0.8>	<2.1>	<1.8>	0.5	<0.7>	—	79°	
136		不明	〃	灰 色 ob	〃	<0.8>	<2.2>	<1.6>	<0.45>	<0.75>	—	92°	
148	137	R-19	〃	黒 色 ob	〃	<1.2>	<2.6>	<1.7>	<0.45>	—	—		
	138	K-18	石垣	半透明黒色ob	〃	<1.1>	<2.0>	<1.6>	<0.5>	<0.4>	—	79°	
	139	S-17	3	黒 色 ob	〃	<0.6>	<1.7>	<1.9>	0.3	<0.55>	—	92°	
	140	R~U-21・22	—	灰 色 ob	完 形	0.3	1.5	1.7	0.3	0.6	0.7	70°	
	141	R-16	3	〃	〃	0.4	1.4	1.5	0.3	0.4	0.8	パテナ有り 62°	
	142	K-20	1	半透明黒色ob	片脚破損	<0.5>	<2.0>	<1.4>	0.4	<0.85>	—	62°	
	143	S-21	3	〃	〃	<0.6>	<2.0>	<1.4>	0.4	<0.65>	—	58°	
	144	S-17	〃	黒 色 ob	〃	<0.4>	<1.8>	<1.3>	0.4	<0.6>	—	60°	
	145	P-22	〃	半透明黒色ob	〃	<0.4>	<1.7>	<1.4>	0.35	<0.65>	—	63°	
	146	V-17	〃	黒 色 ob	完 形	1.0	2.3	1.8	0.5	0.7	0.9	パテナ有り 46°	
	147	R-15	〃	半透明灰色ob	〃	0.9	2.1	1.8	0.45	0.65	1.1	85°	
	148	T-22・23	〃	安山岩	片脚破損	<0.8>	<2.1>	<1.5>	0.5	<0.85>	—	93°	
	149	R-11	〃	黒 色 ob	先端部破損	<0.7>	<1.4>	2.0	<0.45>	0.6	1.2		
	150	U-22・23	〃	灰 色 ob	片脚破損	<0.8>	<2.3>	<1.5>	0.35	<0.55>	—	69°	
	151	S-19	〃	〃	〃	<0.7>	<2.4>	<1.7>	0.4	<0.75>	—	105°	
	152	不明	—	黒 色 ob	〃	<1.3>	<2.6>	<1.7>	0.5	<0.85>	—	64°	

Tab. 26 石鏃計測表 ⑤

Fig.	番号	出土区	層	石 材	破損部位	重さ (g)	大きさ (cm)			挟り (cm)		備 考
							長	幅	厚	深度	幅	
148	153	T-17	3	黒 色 ob	先端部・両脚破損	<1.0>	<2.0>	<1.8>	0.4	<0.55>	—	
	154	T-19	4	〃	片脚破損	<0.8>	<2.1>	<1.8>	0.4	<0.4>	—	75°
	155	W-17	3	透明黒色ob	〃	<0.4>	<1.6>	<1.6>	0.4	<0.7>	—	77°
	156	A-2	4	黒 色 ob	〃	<1.0>	<2.6>	<2.1>	0.4	<1.3>	—	パテナ有り 48°
	157	R-17	〃	〃	完 形	0.7	2.0	1.7	0.45	0.8	0.6	65°
149	158	T-19	3	半透明黒色ob	片脚破損	<1.2>	<2.7>	<1.7>	0.4	<0.75>	—	60°
	159	T-20	〃	〃	先端部・片脚破損	<0.8>	<2.0>	<1.6>	0.3	<0.55>	—	
	160	不明	—	黒 色 ob	片脚破損	<0.8>	<2.0>	<1.5>	0.4	<0.45>	—	93°
	161	T-18	3	〃	両脚破損	<1.5>	<2.1>	<1.9>	0.3	—	—	81°
	162	S-17	〃	〃	〃	<1.0>	<1.8>	<1.7>	0.45	<0.2>	<0.65>	75°
	163	J-11	—	〃	〃	<1.1>	<2.0>	<2.1>	0.45	—	—	73°
	164	I-22	3	〃	完 形	0.7	1.9	1.8	0.25	0.1以下	1.55	81°
	165	H-22	1	〃	〃	0.7	1.5	1.5	0.3	—	—	片面にのみ磨き 80°
	166	J-22	〃	〃	先端部・片脚破損	<0.5>	<1.4>	<1.2>	0.3	<0.1以下>	<0.6>	
	167	不明	2	〃	完 形	0.5	1.7	1.3	0.3	0.3	1.15	74°
	168	Q~S- 10~12	1	半透明黒色ob	両脚破損	<0.5>	<2.0>	<1.3>	0.3	<0.15>	<0.7>	38°
	169	G-22	〃	〃	〃	<0.3>	<1.8>	<1.2>	0.25	—	—	45°
	170	Q~S- 10~12	〃	黒 色 ob	〃	<1.2>	<2.1>	<1.4>	0.55	—	—	102°
	171	R-16	2	〃	〃	<0.6>	<1.7>	<1.4>	<0.4>	—	—	88°
	172	Q~U- 11~12	—	半透明灰色ob	〃	<0.8>	<2.0>	<1.3>	0.4	—	—	118°
	173	T-16	3	灰 色 ob	〃	<0.6>	<2.0>	<1.3>	<0.4>	—	—	80°
	174	S-17	〃	黒 色 ob	〃	<0.5>	<1.5>	<1.3>	<0.35>	—	—	73°
175	不明	—	〃	〃	<1.0>	<2.0>	<1.6>	<0.5>	—	—		
150	176	R~U- 17~19	3	〃	〃	<1.0>	<2.4>	<1.7>	<0.45>	—	—	74°
	177	P-1	2	〃	〃	<0.9>	<2.0>	<1.5>	0.4	<0.2>	—	65°
	178	V-22	3	〃	〃	<1.1>	<2.4>	<1.6>	<0.4>	—	—	98°
	179	V-21	〃	〃	先端部・両脚破損	<1.8>	<3.0>	<1.7>	<0.6>	<0.2>	—	25°
	180	T-21	〃	〃	〃	<2.1>	<2.5>	<2.0>	0.55	—	—	
	181	S-16	〃	〃	両脚破損	<2.0>	<2.6>	<2.2>	0.5	<0.2>	—	パテナ有り 96°
	182	U-23	〃	半透明黒色ob	先端部・両脚破損	<2.7>	<2.3>	<2.0>	0.6	—	—	
	183	T-18	〃	半透明灰色ob	両脚破損	<3.1>	<2.8>	<2.2>	0.6	—	—	102°
	184	S-19	〃	黒 色 ob	片脚破損	<1.0>	<2.4>	<1.5>	0.5	—	—	94°
	185	S~U- 21~22	1	〃	両脚破損	<1.1>	<2.1>	<1.6>	0.4	<0.2>	—	
	186	不明	—	半透明黒色ob	先端部・片脚破損	<1.1>	<2.3>	<1.5>	0.4	<0.15>	<0.75>	
	187	〃	〃	〃	〃	<0.8>	<2.0>	<1.0>	<0.5>	<0.1>	—	
	188	S-21	3	灰 色 ob	両脚破損	<1.0>	<2.2>	<1.4>	0.35	—	—	非常に丁寧 67°
	189	T-20	4	安 山 岩	先端部・両脚破損	<1.4>	<2.1>	<1.5>	0.5	—	—	先端は突き出る形?
	190	Q~S- 10~12	1	黒 色 ob	〃	<1.7>	<1.8>	<2.0>	<0.55>	—	—	

Tab. 27 石鏃計測表 ⑥

Fig.	番号	出土区	層	石 材	破損部位	重さ (g)	大きさ (cm)			抉り (cm)		備 考
							長	幅	厚	深度	幅	
150	191	R-17	3	黒 色 ob		1.5	<2.2>	<2.2>	0.5			未製品
	192	R-16	〃	〃		1.9	<3.1>	<2.1>	0.4			〃
	193	T-21	〃	〃		3.2	<2.5>	<2.3>	0.7			〃
	194	S-16	〃	灰 色 ob		3.6	<2.7>	<2.6>	0.8			〃
Fig. 無し		不明	〃	黒 色 ob	頭部のみ残存	< >						
		P-1	2	灰 色 ob	〃	< >						
		R-16	3	黒 色 ob	脚部のみ残存	< >						脚が長く、大形
		〃	〃	半透明灰色ob	〃	< >						鍬形鏃か？
		R-17	〃	黒 色 ob	〃	< >						非常に大形
		R-19	〃	半透明黒色ob	〃	< >						鍬形鏃
		S-15	〃	〃	〃	< >						〃
		S-17	〃	黒 色 ob	〃	< >						内湾する脚で大形
		S-18	〃	〃	〃	< >						脚が長く、厚い
		S-19	2	〃	〃	< >						脚の先端が尖る
		〃	3	〃	〃	< >						脚が長く大形
		〃	〃	半透明灰色ob	〃	< >						〃
		S-21	〃	〃	〃	< >						脚の先端が尖る
		〃	〃	灰 色 ob	〃	< >						鍬形鏃
		T-17	〃	黒 色 ob	〃	< >						脚の先端が尖る
		T-18	〃	半透明黒色ob	〃	< >						No. 101と同種
		T-19	〃	黒 色 ob	〃	< >						ほとんど抉りがない
		T-22	2	安 山 岩	〃	< >						〃
		U-16	3	黒 色 ob	〃	< >						円脚
		U-17	〃	〃	〃	< >						ほとんど抉りがない
		U-19	〃	〃	〃	< >						薄く大形
		〃	〃	灰 色 ob	〃	< >						鍬形鏃
		V-16	〃	黒 色 ob	〃	< >						全面剥離調整
	V-19	〃	半透明黒色ob	〃	< >						ほとんど抉りがない	
	V-22	〃	黒 色 ob	〃	< >						鋸歯状加工	
	H-22	1	〃	〃	< >						全面剥離調整	
	V・W- 16~18	〃	半透明黒色ob	〃	< >						〃	
	Q・W- 16・19	〃	〃	〃	< >						脚が長い	
	〃	〃	灰 色 ob	〃	< >						脚の先端が尖る	
	Q・U- 13・14	2	黒 色 ob	〃	< >							
	Q・S- 10~12	一	半透明灰色ob	〃	< >						鍬形鏃	

### 石斧 (Fig.151~Fig.161)

本遺跡では数多くの石斧が出土した。そのほとんどが打製石斧、特に扁平打製石斧といわれるものである。特徴として、扁平な礫を素材とし、刃部や基部、側辺などを簡単に調整加工したもので、平坦な礫面や主要剝離面を残すことが多い。磨製石斧も僅かにみられる。また、一部に磨きのある打製石斧・石斧の再利用品・打製石鎌と思われるものも数点の出土をみており、この稿では石斧の範疇に入れたいと思う。

数量は、打製石斧98点、局部磨製の打製石斧3点、磨製石斧4点、石斧の再利用品1点、打製石鎌2点で、総数は108点にのぼる。類似の遺跡として、南西に約350m離れた宮田A遺跡からは、総数259点にのぼる打製石斧が報告されている。

今回出土した打製石斧98点を残存部より分類すると、完形品16点、基部17点、中間点18点、刃部47点となる。使用方法によるものか、完形品・基部・中間部はほぼ同数なのに比べ、圧倒的に刃部が多い。

石材は、平坦な節理を持ったものが非常に多い。これは、扁平打製石斧がほとんどを占めるので、材料が限られてくるためと思われる。岩石の種類では、7割が玄武岩、残りの3割は安山岩である。玄武岩を石材としたものは、板状の薄い扁平打製石斧が多く、安山岩は、厚みのある打製石斧になる傾向がある様に思われる。

形態的には、二側辺がほぼ平行している短冊形と、基部から刃部にかけて広がっていく撥形、また、今回は出土をみなかったが、二側辺の中央部に抉りが入り、抉りを挟む上下辺に刃部がつく分銅形の3つに分類できる。撥部については、鈴木次郎氏の基準に従い、『刃部幅が基部幅の1.5倍以上あり、しかも、全長が最大幅の2倍に満たないもの。』とした。

ここでは、便宜上、次の様に分類した。

- I a 類 完形品・短冊形の打製石斧
- I b 類     〃   ・撥形     〃
- I c 類     〃   ・その他    〃
- II a 類 基部・短冊形     〃
- II b 類    〃   ・撥形     〃
- III a 類 中間部・短冊形    〃
- III b 類    〃   ・撥形     〃
- IV a 類 刃部・短冊形     〃
- IV b 類    〃   ・撥形     〃
- V 類 局部磨製の打製石斧
- VI 類 磨製石斧
- VII 類 その他 (打製石斧の再利用品・打製石鎌)



## I a類 (1~12)

1~6・12は、平坦な礫面が残る扁平打製石斧である。玄武岩製。長さは、11.0~15.0cmが中心である。また、1・2・5は接合資料で、中央付近で折れていることがわかる。7~11は安山岩製の打製石斧である。7~9は円礫であったことがわかる。特に7は、円礫の形をそのまま利用し、一側辺と下辺に剝離加工をただけの簡単なものである。

刃部は、1~12まで全て、弧を描く円刃である。

## I b類 (13~15)

13は、玄武岩を材料とする扁平打製石斧で、この3点の中では整った撥形をしている。刃部は二面から剝離加工、基部から側辺の一部にかけても簡単な加工が施されている。14は安山岩の円礫を使用している。小形。側辺の加工は一側辺のみ。15は、一側辺が湾曲した扁平打製石斧である。接合資料で、中央部よりやや基部に近いところで折れている。3点とも円刃。

## I c類 (16)

98点中、唯一のタイプ。他に比べて1.5~2倍近く、非常に大形である。長さから考えると幅7.9cm、厚さ2.1cmの非常にスマートな石斧である。扁平な礫面が二面にみられ、縁辺には丁寧な剝離加工が施されている。刃縁には磨耗痕がみられる。これは斧としてよりも、鋤的に使用されたのではないかと考えられる。刃部は円刃である。

## II a類 (17~32)

基部だけを見て判断するのは難しいが、もとの形を復元できるものもある。17~19は、ほぼ完形に近いもので、非常に丁寧な剝離加工が施されている。3点とも平坦な礫面を残している。この中でも18は、中間部から刃部にかけて緩やかなカーブを描くが、撥形になるには至らない。残存部分より円刃であると思われる。21は、簡単な剝離加工の多い中で丁寧に調整されている。28~32は、残存している基部の幅が9.0cm前後であることから考えても、非常に大形であろう。特に31は、厚みのある方の側辺に、両面から細かく丁寧な剝離加工が施され、基端・もう一方の側辺も整えられている。

## II b類 (33)

残存部からの推定であるが、全長は10.0cm未満と思われる。従って撥形としておく。裏面には、基部から2.0cm位の両端に、抉り状の加工を施している。

## III a類 (34~49)

34~46は、幅・厚さからみても極端なものはない。二側辺に剝離加工を施しているものもあるが、34・35・39・45・46の様に、板状の礫の薄い側辺を利用し、ほとんど手を加えていないものもある。47~49は、この部類でも、大形で厚い。

## III b類 (50・51)

50は、かなり大形の扁平打製石斧である。二側辺には、両面から丁寧な剝離加工が施されている。51は、基部と刃部の一部が欠損しているが、残存部分から撥形と考える。薄い板状の玄

武岩を素材とし、二側辺には両面からの加工が施されている。剝離された所以外は、平坦で滑らかな礫面である。基部の近くには、両端に抉りが入り、柄を装着した可能性が大きい。

#### IV a 類 (52~95)

IV a 類は数が多いので、刃部の形によって2つに分けた。まず、刃部が円刃であるものは、52~84である。大きさは様々だが、52~68は、平均的な大きさである。69~77は小形、反対に、78~84は、大形のものである。大形の方が剝離加工が多く施されているようである。

刃部が直刃となるものは、85~95である。そのうち、85~90は大形のものであるが、円刃のものに比べ薄く、加工も簡単な扁平打製石斧である。また、91~95も平坦な礫面や主要剝離面の残る扁平打製石斧である。

#### IV b 類 (96~98)

96は、基部が欠損しているが、残存部分より撥形と思われる。両面には平坦な礫面を残し、二側辺と刃部に簡単な加工を施している。97は、基部から刃部の一部にかけてを欠損している。円状は51と同様で、中央部の両端に抉りが入る。場合によると分銅形になる可能性もあるが、基部・中間部・刃部と欠損部分が多いため、IV b 類とする。また、加工を施した側辺部分を刃部と考えると、打製包丁の可能性もでてくる。98は、薄く扁平な、大形の扁平打製石斧である。これらは3点とも刃部は円刃である。

#### V 類 (99~101)

局部磨製の打製石斧である。99は刃部だけでなく全体的に磨きを施している。しかし、両側辺には剝離加工が施されている。100も同様である。101は非常に小形のものである。表面には磨きが全体にあり、基部には剝離加工を施して整えている。主要剝離面が裏面をなしている。とても薄い。全部円刃である。

#### VI 類 (102~105)

102は玄武岩質の硬い礫を素材とした蛤刃石斧である。側辺にも研磨を施している。103~105は蛇文岩製であるが、風化が著しいため研磨痕を確認するのは困難である。103・104は完形に近く、大きさも小形の部類に入らるであろう。蛤刃の刃部をもつ。105は、前の2点に比べると大きく、刃部は5.5cmの幅をもつ。蛤刃の石斧である。

#### VII 類 (106~108)

106は、打製石斧の破損品と思われるものを再加工した製品と思われる。剝離加工で抉りを作り、先端を尖らせている。穿孔具であろうか。107・108は、湾曲した刃身、刃の位置、基部の作り出し等が、打製石鎌の可能性が濃厚なため、ここでは、打製石鎌として取り扱った。107は、抉りがない内湾刃無抉入形である。108は、抉りがある内湾刃鈍角抉入形である。基部の両端・抉りの上下を結んで下方に延長した線と、刃部線がなす角度は、107が直角に近く93度、108は、100度である。

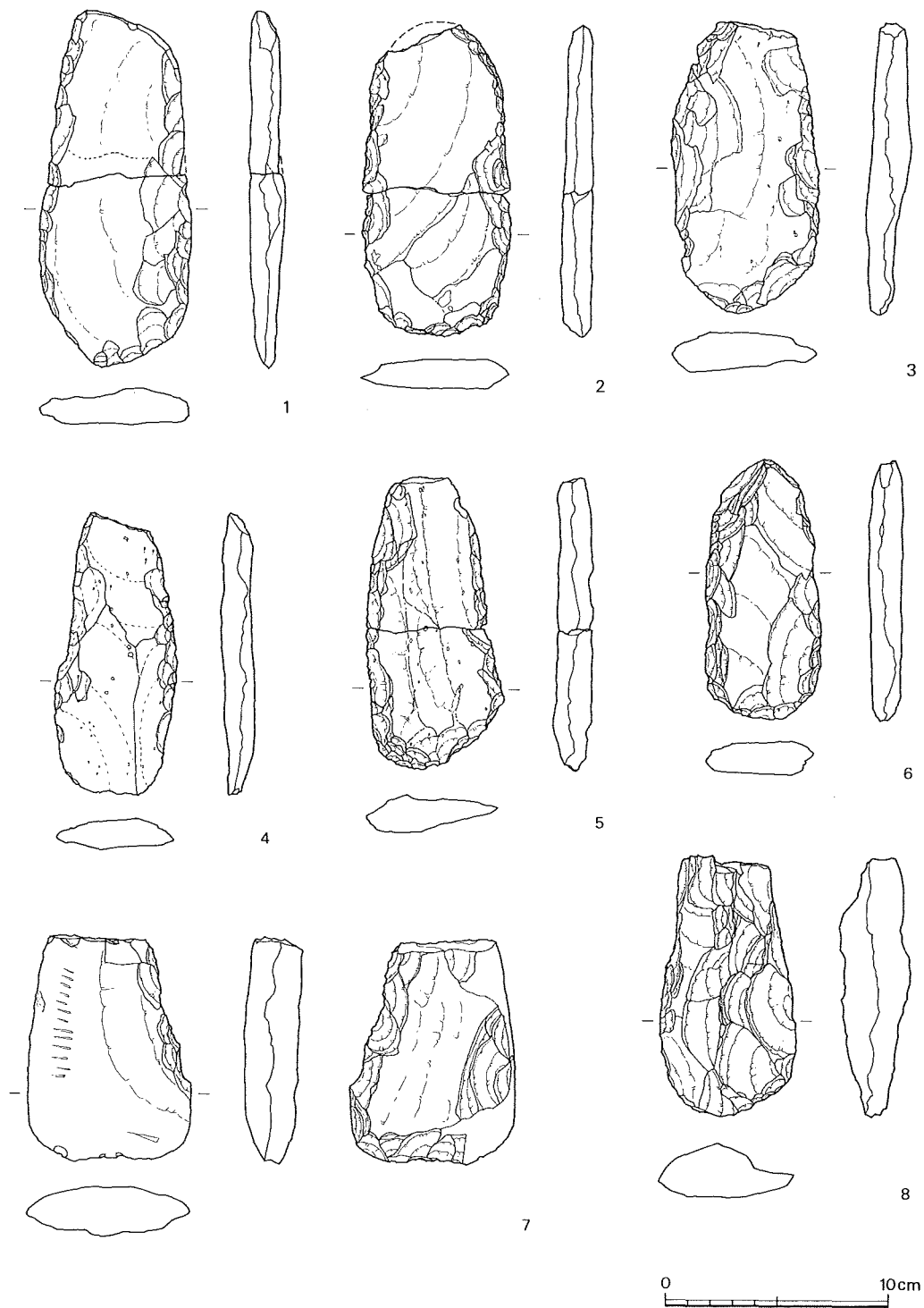


Fig. 151 石斧 ① (1/3)

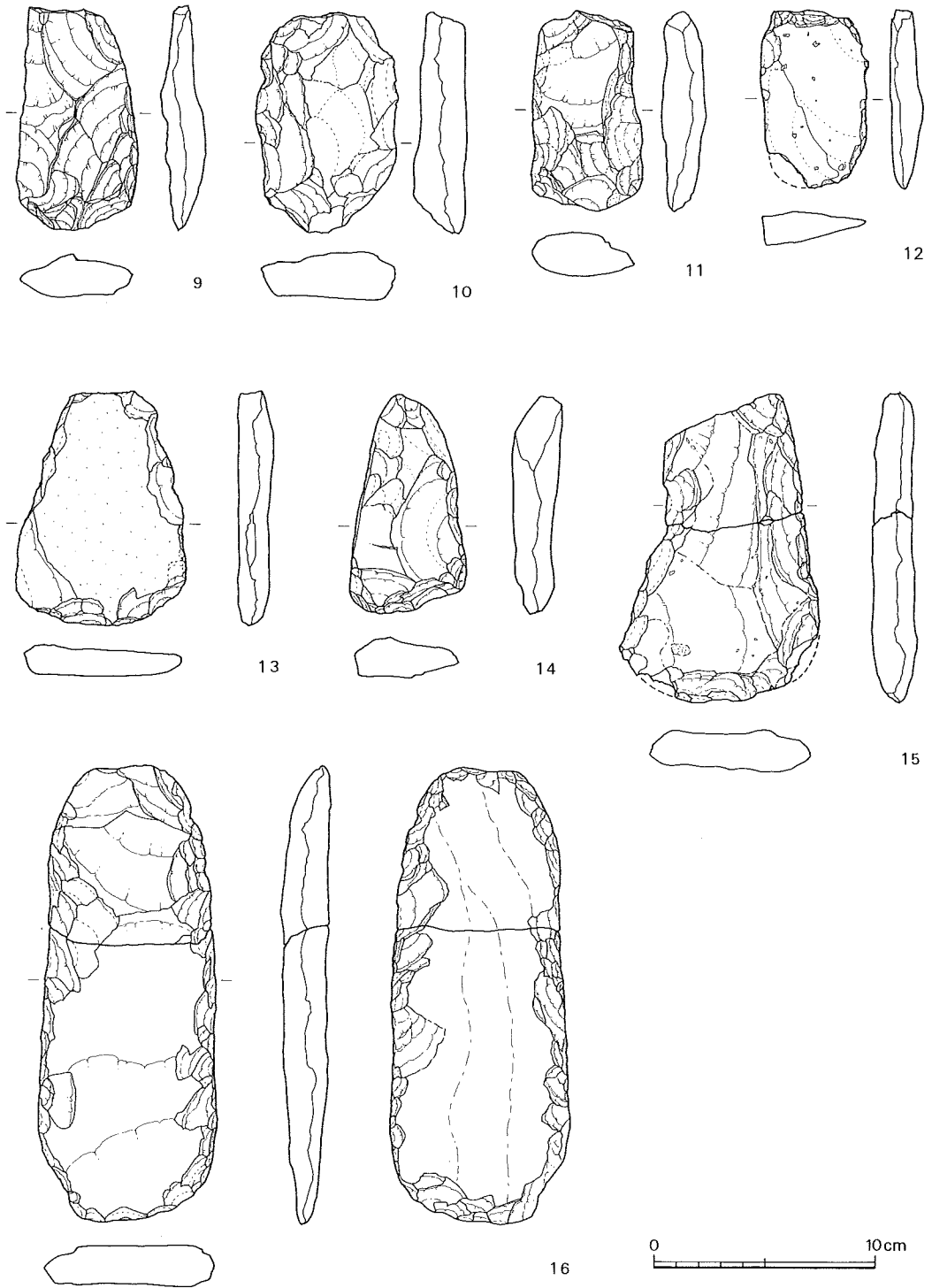


Fig. 152 石斧② (1/3)

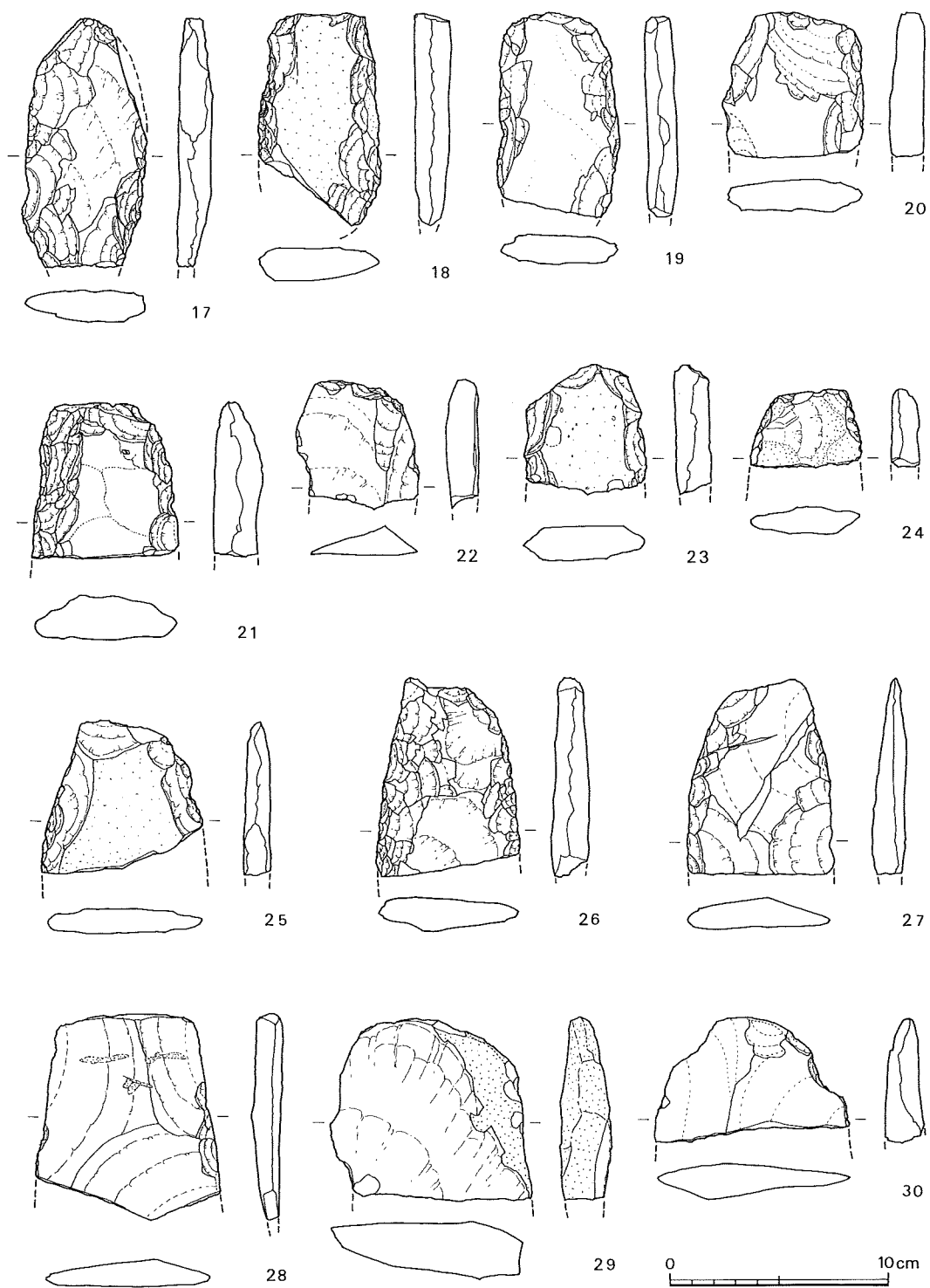


Fig. 153 石斧③ (1/3)

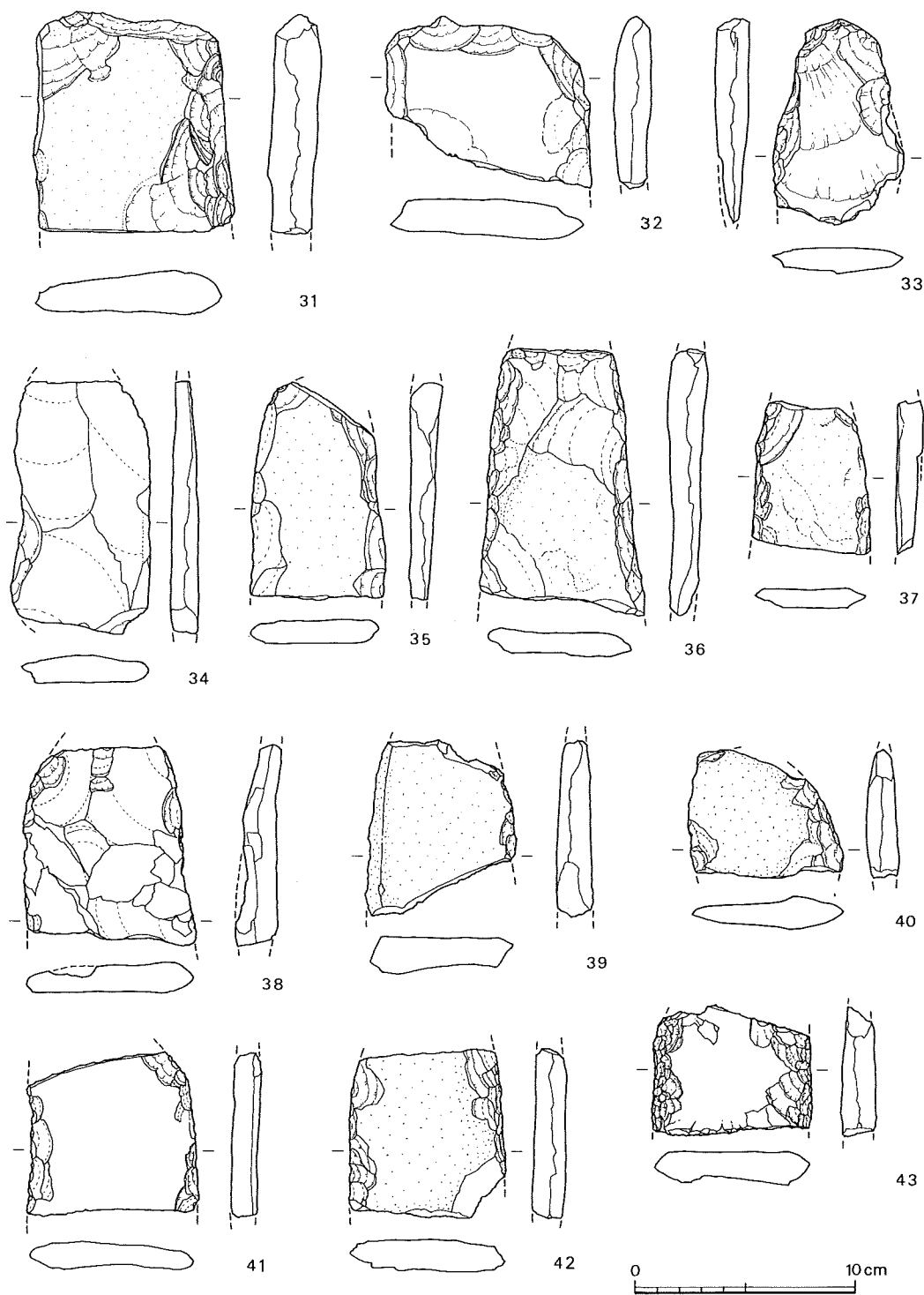


Fig. 154 石斧④ (1/3)

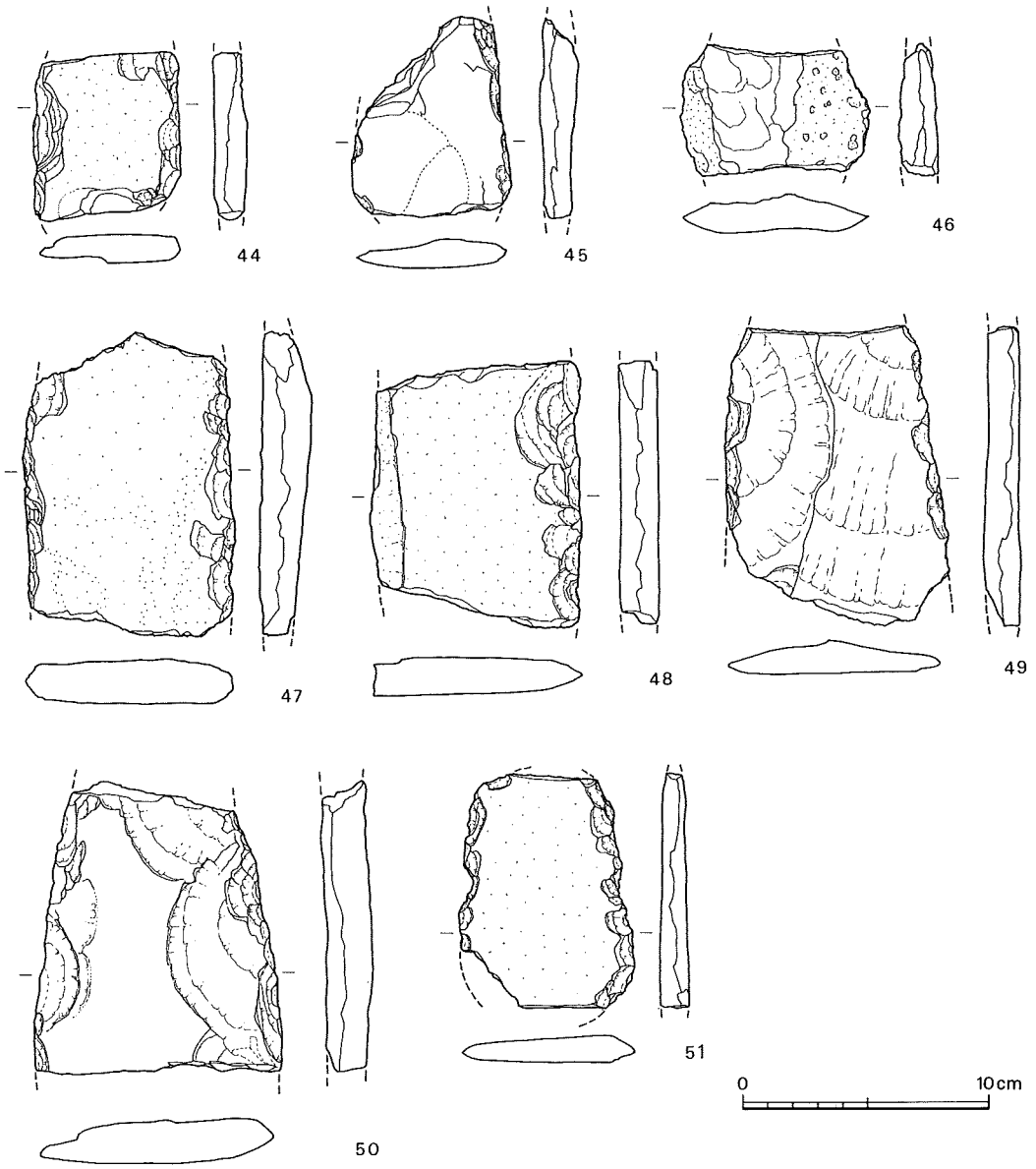


Fig. 155 石斧⑤ (1/3)

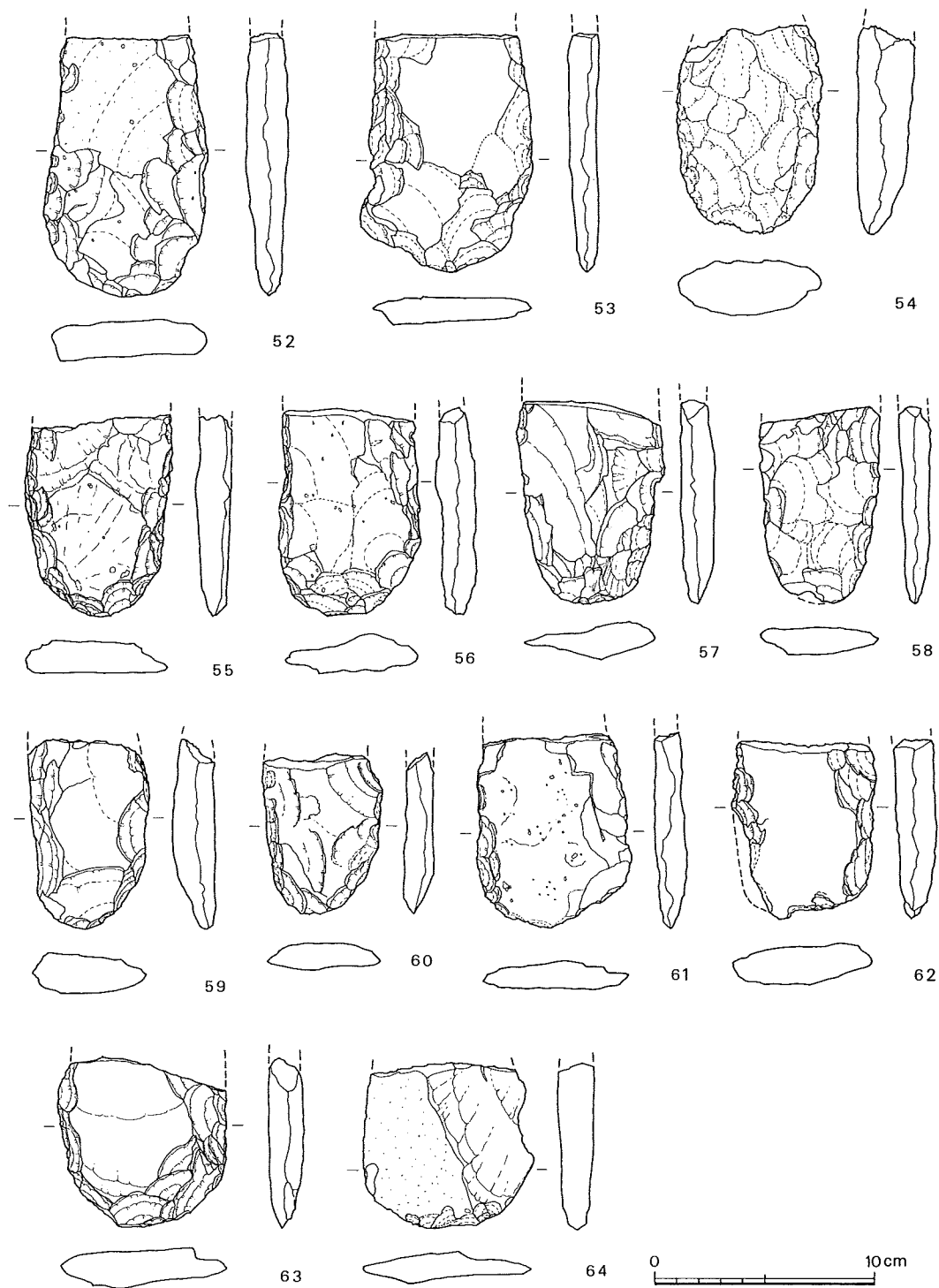


Fig. 156 石斧 ⑥ (1/3)



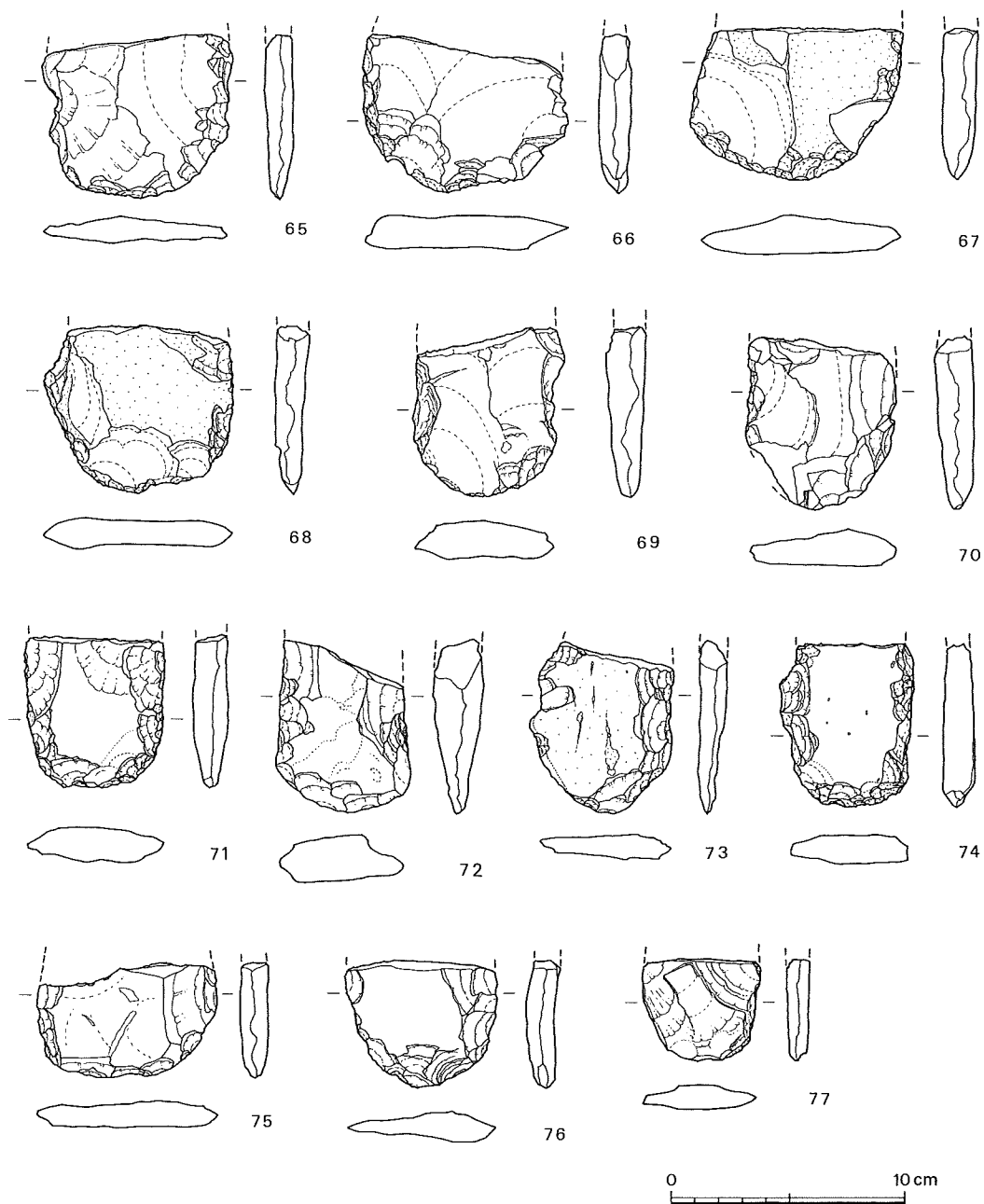


Fig. 157 石斧⑦ (1/3)

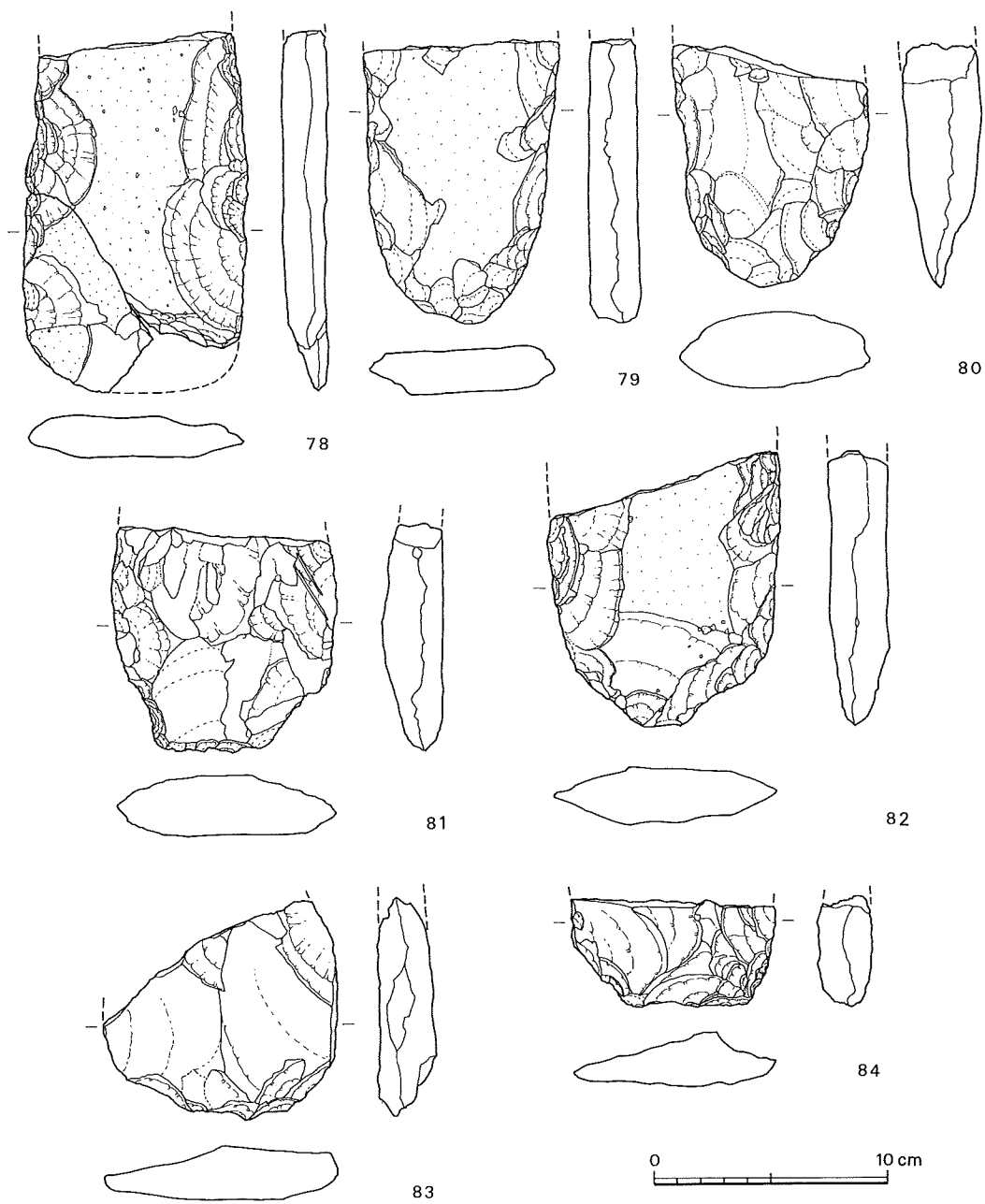


Fig. 158 石斧 ⑧ (1/3)

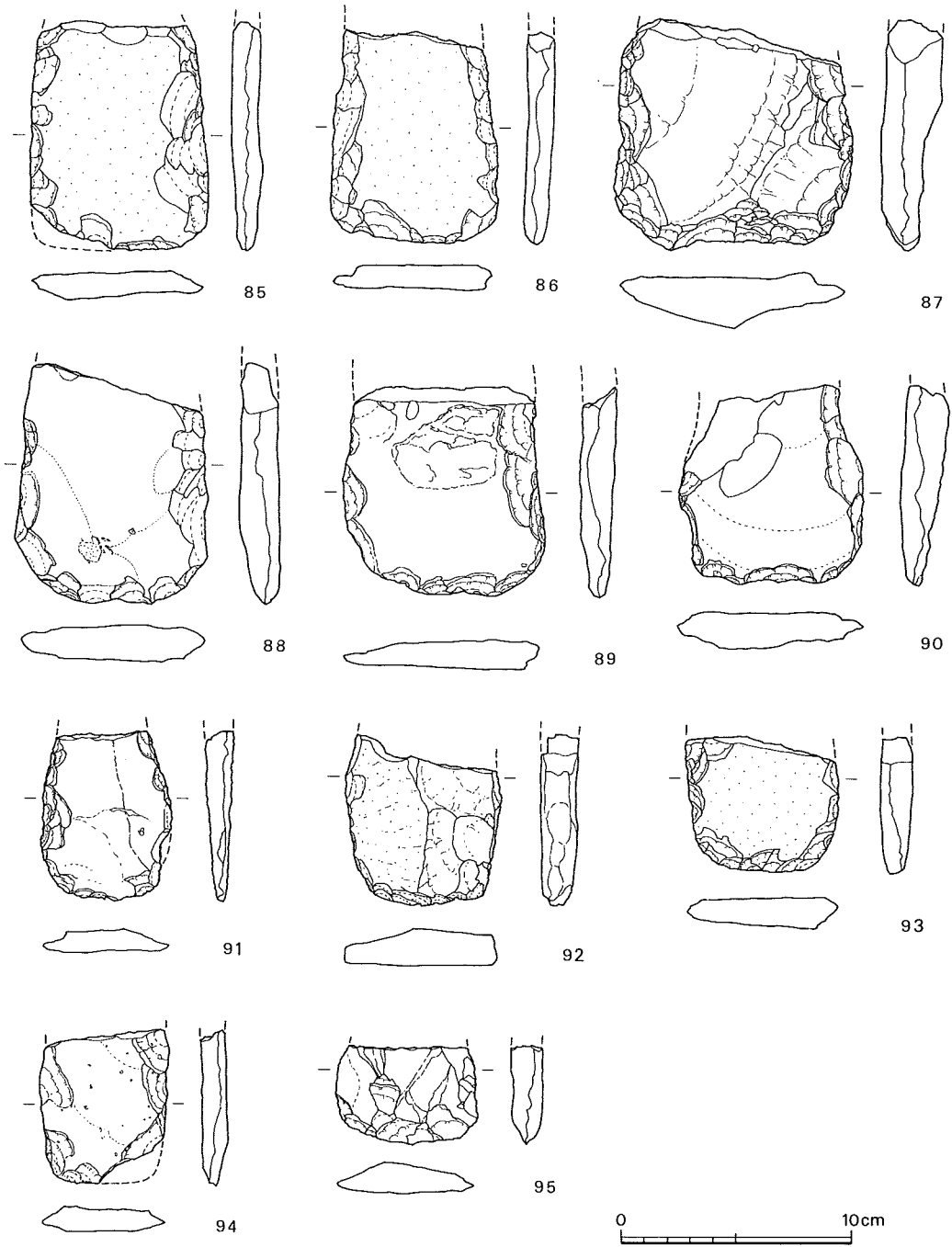


Fig. 159 石斧 ⑨ (1/3)

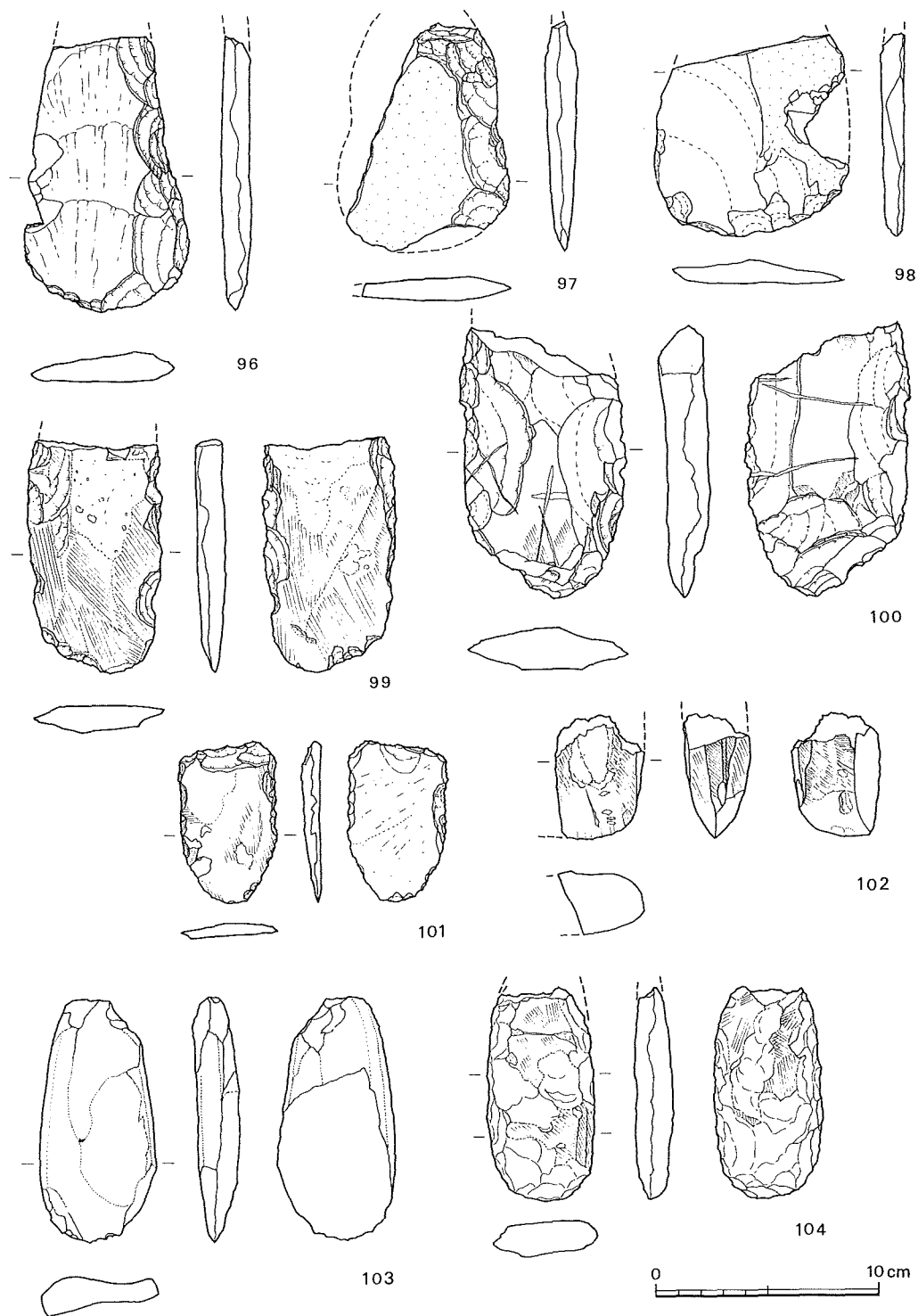


Fig. 160 石斧⑩ (1/3)

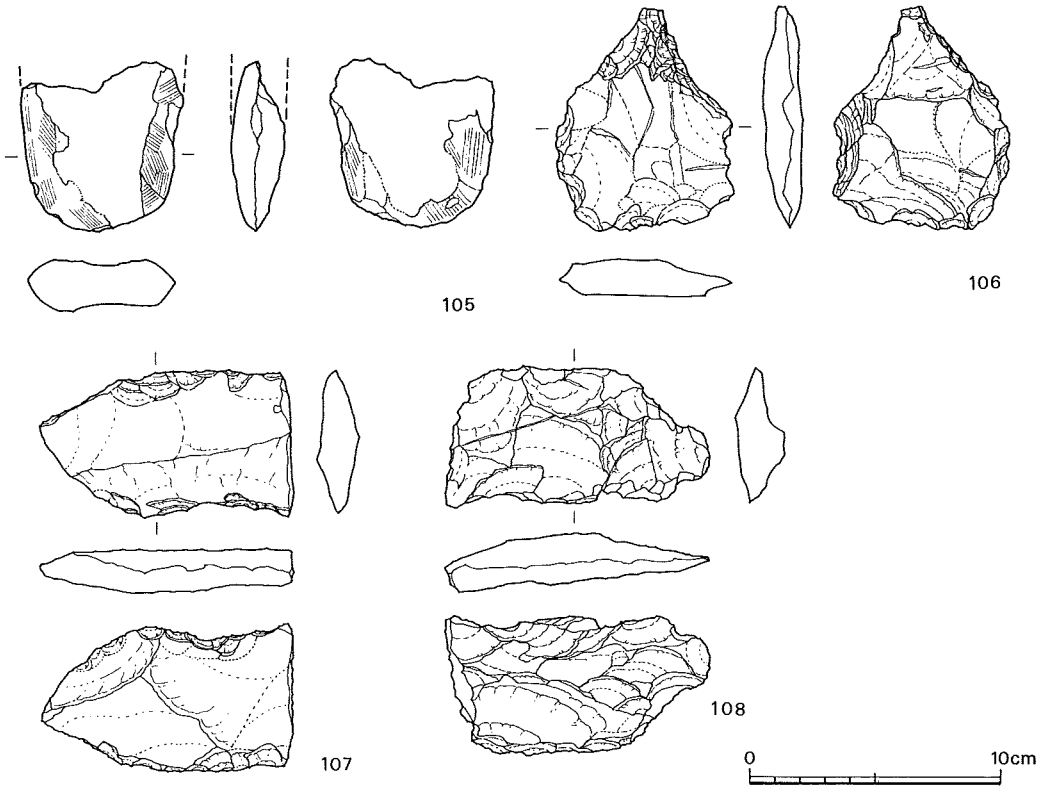


Fig. 161 石斧 ① (1/3)

Tab. 28 石斧計測表 ①

〈 〉 は破損品の計測実数値を示す

Fig.	番号	出土区	層	形態	重さ (g)	大 き さ (cm)			石 材	備 考
						長	幅	厚		
151	1	T-21 T-22	3 4	短冊形	202.0	15.7	6.5	1.5	玄武岩	接合資料
	2	S-21 T-18	4-3 4	〃	162.0	13.8	6.1	1.2	〃	接合資料
	3	T-17	3	〃	170.5	12.8	6.4	1.7	〃	
	4	T-20	〃	〃	102.5	12.4	5.3	1.3	〃	
	5	V-18 V-20	〃 〃	〃	142.0	12.9	6.0	1.7	〃	接合資料
	6	S-16	〃	〃	121.0	11.5	5.3	1.4	安山岩	
	7	〃	〃	〃	251.5	10.0	7.2	2.4	〃	
	8	V-19	〃	〃	228.0	11.5	6.0	2.9	〃	
152	9	T-21	〃	〃	112.0	9.3	5.4	1.9	〃	
	10	T-16	〃	〃	183.5	9.8	6.4	2.2	〃	
	11	S-20	22集石	〃	115.5	8.9	5.1	2.0	〃	
	12	S-22・23	3	〃	77.5	8.0	4.8	1.4	玄武岩	
	13	V-18	〃	撥形	144.0	10.4	7.6	1.5	〃	
	14	—	1	〃	126.5	9.8	5.3	2.1	安山岩	
	15	W-20 〃	4 〃	〃	272.0	13.8	8.8	1.9	玄武岩	接合資料
16	U-18 V-19	〃 〃	短冊形	454.0	20.6	7.9	2.1	安山岩	接合資料 大形	
153	17	U-18	〃	短冊形?	116.5	11.2	〈5.5〉	〈1.4〉	玄武岩	
	18	V-21	3	〃	112.5	〈9.6〉	〈5.4〉	〈1.6〉	〃	
	19	T-15	〃	〃	113.0	〈9.2〉	5.4	〈1.4〉	〃	
	20	T-21	〃	〃	95.5	〈6.5〉	〈6.5〉	〈1.5〉	安山岩	
	21	J-16	〃	〃	142.0	〈7.0〉	〈6.7〉	〈2.2〉	〃	
	22	S-15	〃	〃	57.5	〈5.9〉	〈5.2〉	〈1.5〉	〃	
	23	T-21	〃	〃	73.0	〈5.8〉	〈5.4〉	〈1.6〉	〃	
	24	R-16	〃	〃	29.0	〈3.5〉	〈5.0〉	〈1.2〉	〃	
	25	T-20	〃	〃	70.5	〈7.0〉	〈7.0〉	〈1.2〉	玄武岩	
	26	S-21	〃	〃	101.0	〈9.0〉	〈6.5〉	〈1.6〉	〃	
	27	T-20	4	〃	92.5	〈8.8〉	〈6.7〉	〈1.5〉	〃	
	28	V-19	〃	〃	110.0	〈9.3〉	〈8.3〉	〈1.3〉	〃	
29	R-15	3	〃	206.5	〈8.3〉	〈8.7〉	〈2.3〉	〃		
30	S-22・23	〃	〃	84.0	〈5.2〉	〈8.9〉	〈1.7〉	〃		
154	31	T-22	〃	〃	243.5	〈9.8〉	〈8.7〉	〈2.0〉	〃	
	32	S-21	〃	〃	157.5	〈6.5〉	〈9.2〉	〈1.8〉	〃	
	33	U-19	〃	撥形?	81.5	〈9.2〉	〈5.9〉	〈1.5〉	〃	
	34	V-19	4	短冊形	122.0	〈11.3〉	6.2	〈1.3〉	〃	
	35	T-22	〃	〃	104.5	〈9.8〉	〈6.1〉	〈1.4〉	〃	
	36	W-20	〃	〃	164.5	〈11.9〉	〈7.4〉	〈1.2〉	〃	
	37	S-18	3	〃	59.5	〈6.8〉	〈5.3〉	1.2	〃	
	38	U-16	〃	〃	118.5	〈8.9〉	〈7.5〉	〈1.4〉	〃	

Tab. 29 石斧計測表 ②

Fig.	番号	出土区	層	形態	重さ (g)	大 き さ (cm)			石 材	備 考
						長	幅	厚		
154	39	U-21	3	短冊形	100.0	<7.9>	<6.5>	<1.6>	玄武岩	
	40	—	〃	〃	56.5	<5.7>	<6.7>	<1.4>	安山岩	
	41	V-22	〃	〃	110.0	<7.4>	<7.7>	<1.1>	玄武岩	
	42	V-19	4	〃	130.5	<7.5>	<7.0>	<1.5>	〃	
	43	U-16	〃	〃	91.5	<5.9>	<7.1>	<1.5>	〃	
155	44	V-15	3	〃	72.0	<6.7>	<6.0>	<1.3>	安山岩	
	45	S-22	〃	〃	81.5	<8.0>	<6.4>	<1.5>	〃	
	46	V-21	〃	〃	64.0	<5.2>	<7.4>	<1.5>	玄武岩	
	47	S-21	〃	〃	286.5	<12.2>	<8.4>	<2.0>	〃	
	48	T-22	4	〃	278.0	<10.7>	<8.5>	<1.6>	〃	
	49	T-18	3	〃	196.5	<12.0>	8.6	<1.4>	〃	
	50	V-20	〃	撥形?	282.5	<11.6>	<10.0>	<1.8>	〃	
51	T-19	〃	〃	96.0	<9.4>	<6.9>	<1.1>	〃		
156	52	T-22	〃	短冊形	211.5	<11.7>	7.3	<1.9>	〃	
	53	V-18	4	〃	133.5	<10.6>	7.3	<1.3>	安山岩	
	54	S-18	3	〃	169.5	<9.2>	6.4	<2.4>	玄武岩	
	55	〃	〃	〃	132.5	<9.0>	6.6	<1.6>	〃	
	56	S-15	〃	〃	124.0	<9.3>	6.3	<1.7>	〃	
	57	T-20	4	〃	99.5	<9.1>	<6.4>	1.5	安山岩	
	58	—	1	〃	94.0	<8.8>	<5.4>	<1.4>	玄武岩	
	59	U-21	3	〃	106.5	<8.5>	5.3	1.9	安山岩	
	60	S-17	〃	〃	69.5	<7.2>	5.3	1.3	玄武岩	
	61	U-18	4	〃	102.5	<8.7>	7.0	<1.4>	〃	
	62	S-18	3	〃	124.0	<8.1>	<6.2>	<1.2>	〃	
	63	R-17	4	〃	122.5	<7.1>	7.6	<1.5>	〃	
	64	V-21	3	〃	96.0	<7.4>	7.6	<1.1>	〃	
157	65	S-19	〃	〃	70.5	<7.0>	<7.9>	<1.1>	〃	
	66	R-15	〃	〃	106.0	<6.7>	8.6	<1.3>	〃	
	67	Q-5	4	〃	106.0	<6.4>	8.4	<1.6>	〃	
	68	T-20	〃	〃	97.5	<7.1>	7.9	<1.3>	〃	
	69	S-17	3	〃	100.0	<7.2>	6.2	<1.7>	〃	
	70	—	2	〃	94.0	<7.3>	6.2	<1.6>	〃	
	71	U-23	3	〃	72.5	<6.4>	5.8	<1.5>	〃	
	72	U-15	〃	〃	97.5	<7.4>	5.6	<2.0>	安山岩	
	73	S-19	3-2	〃	50.5	<7.3>	5.9	<1.1>	〃	
	74	V-18	4	〃	72.5	<6.9>	5.7	<1.3>	玄武岩	
	75	—	1	〃	59.5	<4.8>	<7.4>	<1.2>	〃	
	76	S-22	3	〃	52.0	<5.4>	<6.4>	<1.2>	安山岩	

Tab. 30 石斧計測表 ③

Fig.	番号	出土区	層	形態	重さ (g)	大 き さ (cm)			石材	備 考
						長	幅	厚		
157	77	T-19	3	短冊形	30.5	<4.3>	<5.0>	<1.0>	安山岩	
	78	U-18 〃	4 〃	〃	370.0	<15.2>	9.2	<1.9>	玄武岩	
	79	V-21	3	〃	307.5	<12.0>	<8.3>	<2.1>	〃	
	80	T-17	〃	〃	284.5	<10.3>	<8.1>	<3.2>	〃	
158	81	U-15	〃	〃	308.5	<9.7>	<9.5>	<2.5>	〃	
	82	S-21	3	〃	354.5	<11.7>	<9.8>	<2.5>	〃	
	83	—	4	〃	211.5	<9.3>	<9.8>	<2.4>	〃	
	84	S-18	3	〃	106.0	<4.7>	<8.5>	<2.3>	安山岩	
	85	U-22	〃	〃	129.5	<9.9>	<7.6>	<1.3>	玄武岩	
	86	S-21	〃	〃	119.5	<9.1>	<7.1>	<1.2>	〃	
	87	R-17	〃	〃	254.5	<10.0>	<10.0>	<2.4>	〃	
	88	T-20	〃	〃	205.5	<10.4>	8.2	<1.7>	安山岩	
	89	T-18	4	〃	135.5	<9.1>	8.4	<1.5>	〃	
159	90	S-21	4-3	〃	138.0	<8.6>	7.9	<1.8>	玄武岩	
	91	V-19	3	〃	52.5	<7.3>	5.6	<1.3>	〃	
	92	T-21	〃	〃	96.0	<8.4>	<6.5>	<1.5>	〃	
	93	V-21	〃	〃	74.5	<5.8>	<6.5>	<1.4>	〃	
	94	R.S. 11.12	〃	〃	54.5	<6.7>	<5.4>	<1.1>	〃	
	95	W-20	〃	〃	45.0	<4.3>	6.0	<1.3>	〃	
	96	Q.T. 11.12	〃	撥形	134.0	<12.2>	7.3	<1.3>	安山岩	
	97	S-19	3-2	〃	93.5	<10.0>	<6.8>	<1.4>	玄武岩	分銅形?
	98	S-21	3	〃	85.5	<8.9>	8.6	<1.0>	安山岩	
	99	T-20	4	短冊形	110.5	<10.3>	6.0	<1.2>	玄武岩	局部磨製石斧
160	100	V-20	3	〃	248.5	<12.1>	<7.2>	<2.1>	安山岩	〃
	101	S-21	〃	〃	32.5	7.1	4.4	<0.8>	〃	〃
	102	—	〃	短冊形?	71.5	<5.5>	<3.8>	<2.9>	玄武岩	磨製石斧 蛤刃
	103	E.M. 20.24	—	短冊形	126.5	10.8	5.3	<1.9>	蛇文岩	〃
	104	V-20.21	1	〃	110.5	9.5	4.8	1.7	〃	〃
	105	T-17	3	〃	109.5	<6.7>	<6.6>	<2.1>	〃	〃
161	106	W-17	〃	—	99.0	8.7	6.9	1.5	安山岩	打製石斧再利用品
	107	V-19	4	—	123.5	5.6	10.0	1.7	玄武岩	打製石鎌
	108	R-16	3	—	110.0	5.4	10.5	1.9	安山岩	〃



## 礫器 (Fig.162~Fig.163)

使用痕・加工痕が残るものを選んで図示した。総数は25点と少ない。内訳は凹石3点、磨石4点、敲石2点、砥石15点、円盤状石製品1点である。特に、砥石は荒砥・中砥・仕上げ砥など、数・種類も豊富である。

## 凹石 (1~3)

1は大形で、長さ17.4cmを測る。両面の中央部に凹みがみられる。2・3は小形のもので、長さがそれぞれ7.5cm, 6.1cmを測る。2は片面に、3は両面に使用痕がみられる。

## 磨石 (4~7)

4は同じ地区から出土した接合資料である。一般に天草砥石と呼ばれるものに類似している。広く浅い凹みは、非常に滑らかである。もう一方の面は、凹みはみられないが磨いていると思われる。小形の硯とも考えられるが、墨の形跡はない。5は肌の荒い円礫を使用している。磨き痕は、僅かに認められる。6は細長い円礫を使用、平坦面に磨きがみられる。一部破損品。7は花崗岩の円礫を素材としている。二面に磨きが残る。半分近くを破損している。

## 敲石 (8・9)

8は樽形で、上下は磨きにより面を作っている。9は破損している。

## 砥石 (10~24)

10~20の10点は、主に砂岩や玄武岩から成るもので、粒子も荒いものから、仕上げ砥のような細かいものまでである。見た感じでは、12・17・20は粒子が荒く、10・11・13・15・19は中・細粒子である。14・16・18は微細な粒子で、研磨された面は滑らかである。しかし、砥石の中で特異なのは21~24である。泥岩製の仕上げ砥で、大きさは手の中に入る位である。また、使用している部分は、二面だけでなく、側面など万遍なく利用している。使用痕は、深い線状痕と浅い擦痕がみられる。金属用の砥石の可能性が強く、中世とも考えられる。

## 円盤状石製品 (25)

一部を欠損しているが扁平で円形の円礫である。直径は5.5cm、表裏はスベスベしている。また、もう一方の面に凹みがみられる。

(小野)

註1 川道 寛他「宮田A遺跡」『九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書 VI』長崎県教育委員会 1989

註2 麻生 優『岩下洞穴の発掘記録』佐世保市教育委員会 1968

註3 副島和明他『諫早中核工業団地造成に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書 III』1986

註4 鈴木道之助「石鏃」『縄文文化の研究 7』1983 雄山閣

註5 藤田和裕他「大久保遺跡」本報告書 1991 長崎県教育委員会

註6 鈴木次郎「石斧」『縄文文化の研究 7』1983 雄山閣

註7 高木正文「九州縄文時代の取獲用石器」『鏡山猛先生古稀記念古文化論攷』1980

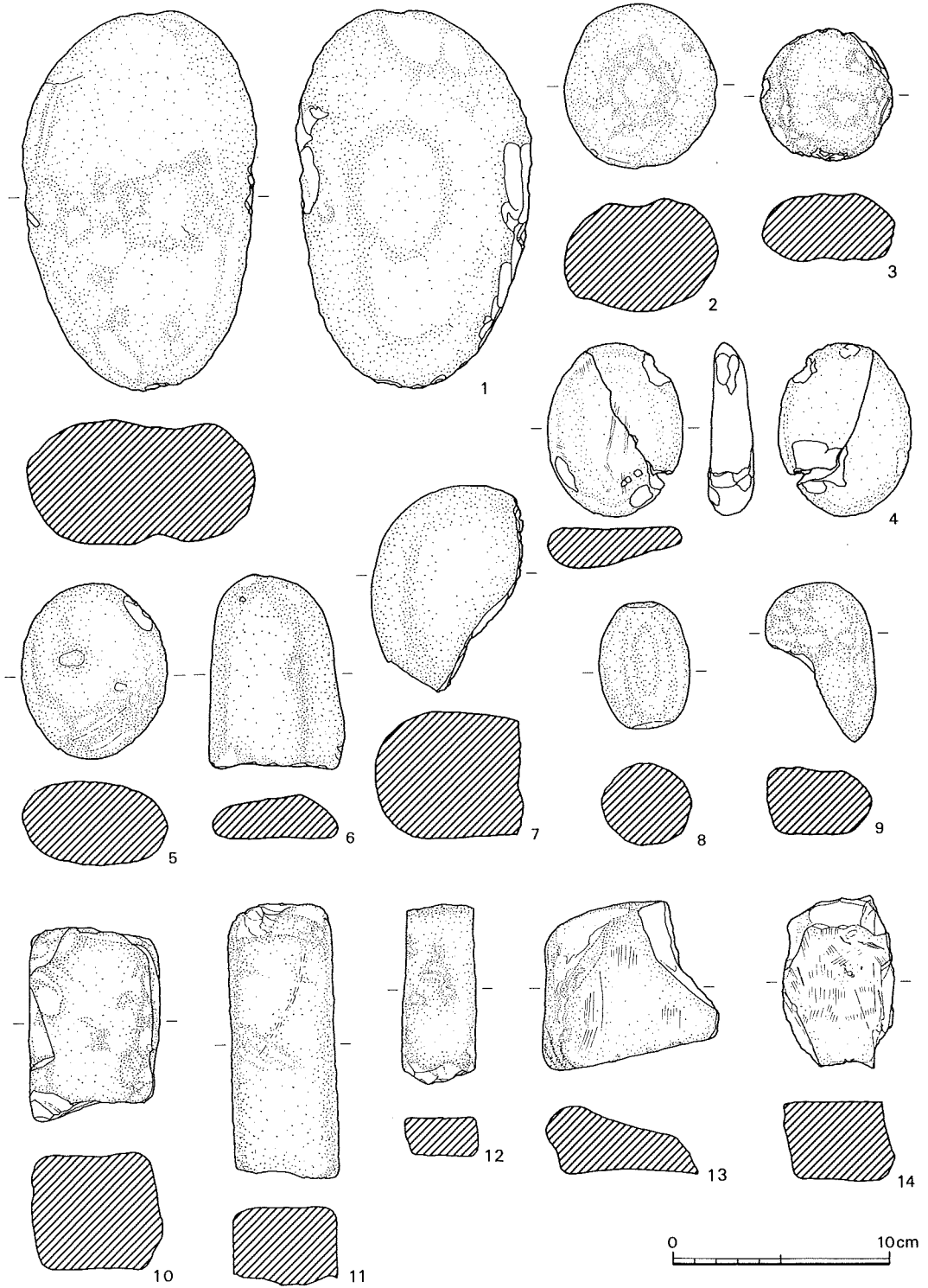


Fig. 162 礫器 ① (1/3)

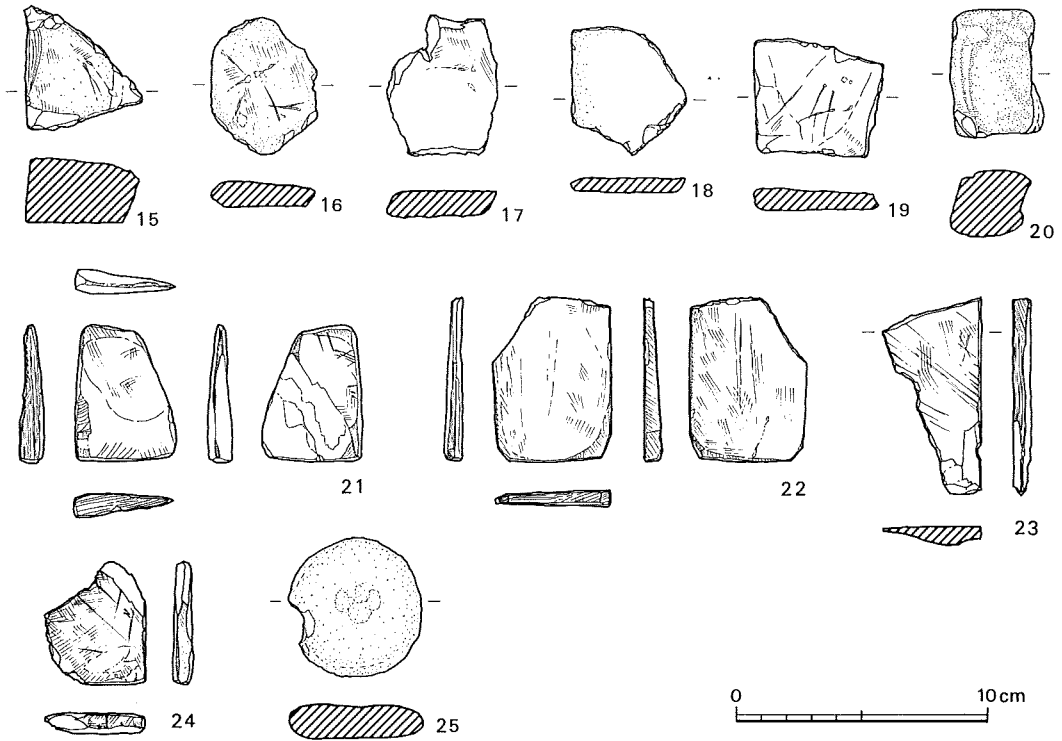


Fig. 163 礫器② (1/3)

Tab. 31 礫器計測表

< >は破損品の計測実数値を示す

Fig.	番号	出土区	層	器種	石材	重さ (g)	大きさ (cm)			備考
							長	幅	厚	
162	1	S-22	一	凹石	安山岩	549.5	17.4	10.7	5.7	大形 表裏に凹み有り
	2	R-17	3	〃	〃	349.5	7.5	7.0	5.1	球形に近く小形
	3	V-18	3	〃	〃	138.5	6.1	6.2	3.1	
	4	R-15, R-15	3	磨石	粘板岩	99.5	8.0	6.2	2.1	接合資料 スズリの可能性
	5	—	3	〃	安山岩	235.5	8.1	6.7	3.8	
	6	V-21	3	〃	〃	<179.5>	<8.9>	<6.2>	<2.0>	
	7	T-18	3	〃	〃	<504.0>	<9.4>	<7.0>	5.8	
	8	U-19	3	蔽石	〃	130.0	5.8	4.1	3.7	鼓形に整形
	9	R-17	3	〃	〃	<114.0>	<7.3>	<4.9>	<3.1>	
	10	RSFU-21-22	一	砥石	砂岩	<463.5>	<8.9>	6.1	5.3	
	11	T-23	3	〃	安山岩	<444.0>	<12.7>	4.7	3.6	
	12	K-11	石垣	〃	砂岩	<92.5>	<8.3>	<3.5>	1.7	
	13	—	1	〃	〃	<212.5>	7.7	<8.1>	3.1	
	14	—	1	〃	粘板岩	<218.5>	<7.9>	<5.2>	<3.6>	
163	15	S-17	3	〃	砂岩	<70.5>	4.9	4.7	2.5	
	16	T-15	3	〃	粘板岩	<33.5>	5.4	4.3	1.0	
	17	S-21	4-3	〃	砂岩	<34.5>	5.5	4.4	1.0	
	18	U-22	3	〃	粘板岩	<20.5>	5.1	4.6	0.6	
	19	RU-19-22	3	〃	〃	<36.0>	4.7	5.1	0.9	
	20	B-2	—	〃	砂岩	<60.5>	5.0	3.7	2.6	
	21	H-11	2	〃	粘板岩	<22.5>	5.4	4.0	<1.0>	天草砥石? 金属用砥石?
	22	B-2	—	〃	〃	<27.5>	<6.5>	<4.7>	0.7	〃 〃
	23	—	1	〃	〃	<27.0>	7.8	3.9	0.7	〃 〃
	24	—	1	〃	〃	<18.5>	<4.9>	<4.1>	<0.8>	〃 〃
	25	U-23	3	円盤状石製品	安山岩	<39.0>	5.5	5.3	1.3	扁平な円形

## IV 総括

調査は、前項でも述べたように、当初は2,800m<sup>2</sup>を対象として実施に入ったが、旧石器時代から近世まで複合した遺跡として実態が判明しだし、調査範囲を拡大せざるを得なくなったのが実情である。

時代ごとに挙げると、旧石器時代における包含層あるいは遺構は、確認できず遺物が単独で出土していることである。これは、他の各調査地点においても同様であった。したがって、個々の遺物の特長或は属性に関してよりの分類・時期判断にもとめるよりほかにないものであったが、小型のナイフ形石器・石核・スクレイパー類から柿崎D類註1に類似した資料が出土していて、旧石器時代終末期頃が考えられる。

縄文時代に関しては、遺物の中で石鏃が多数出土している。早期から前期にかけて特色のある鉤型鏃・局部磨製石鏃が出土していることから、これに伴う時期が想定される。また、中期に関しては、大型凹文を配し滑石粉を含んだ土器の出土がみられた。後・晩期に関する遺物としては、浅鉢・組織痕土器が出土しこれに伴う扁平打製石斧が4 a から4 b 層の黄褐色の粘質土にかけて大量に出土している。晩期の資料に関しては野中・宮田A遺跡註2においても大量の扁平打製石斧の出土があることから、広範囲な生活空間が指摘される。

弥生時代から古墳時代にかけては中期からの資料を散見するが、主体としては後期から古墳時代初頭ころの土器片が多く出土している。

古代から中世にかけては、しだいに遺物・遺構の資料が増加しだす。須恵器系の遺物が出土していることから、白磁類・青磁類に先行して10世紀頃に先住していた様子が、ばくぜんと予想される。その後、白磁類・青磁類を伴った生活様式が定着しだしてくる。これは、4区における出土遺物と柱穴群から伺える。時期的には、12世紀中葉から13世紀初頭にかけての玉縁を有する白磁碗Ⅳ類やⅤ類Ⅱ期—4 a あるいはⅤ類Ⅱ期—4 b があり、これに皿のⅢ類が加わってくる。また、この4区では白磁碗Ⅴ類を伴った66P建物跡の柱穴群（Pit 101）を検出している。1区の10B・18Cに検出した、南北軸と東西軸を走る空堀には、白磁皿類（Fig. 78-15）・磁州窯系陶器壺（Fig. 80-32）・土師器杯（Fig. 81-1～5）・土師器皿（Fig. 82-27）・片口の鉢（Fig. 84-58）・石鍋（Fig. 86-18・20）が出土していて、時期的には14世紀中葉から後葉にかけての遺物が主体をなしており、空堀がこの時期頃に構築されたものと思われる。

その後、2区において土壙墓が営まれており、この地区からは、4基の土壙墓を検出し、その内の3基からは人骨とともに副葬された土師器の杯・皿・貨幣があった。また、埋葬人骨がいずれも主軸方位をほぼ北側に向けて埋葬されていることは、この時期の慣習等を伺い知るうえで示唆していると言えよう。

遺構別に出土遺物を記載すると、46 I からは、土師器杯（Fig. 81-12）があり、47 I からは、

土師器の杯 (Fig. 81-7・8) と土師器の皿 (Fig. 82-30・31・32・33) を48 I からは、土師器の杯 (Fig. 81-9・10・11) と朝鮮通宝 (1423年初鑄) が出土している。55 I からは、土師器の杯 (Fig. 81-6) がそれぞれ出土している。

これ以後、近世にいたって中世の遺構を削平したうえに、柱穴群・土壇 (集石・陶磁器混在) ・石敷・埋甕といった多くの遺構群が江戸時代中期から後期にかけて遺跡を占拠した状態となる。 (町田)

以下に、村川調査員の近世建物に関する最近の調査報告及び状況を本遺跡内より検出した柱穴群と併せて付加しているので参照されたい。

— 小藪城遺跡における近世の掘立柱建物から礎石建て建物への移行について —

小藪城遺跡において、57 P から62 P まで6棟の近世の掘立柱建物跡を検出したが、県内でも今迄に確認された近世の掘立柱建物跡は、発掘された順に挙げてみると、昭和52~54年に調査した諫早市・岩下遺跡<sup>註3</sup>、昭和55年に調査した大村市・嶽ノ下A遺跡<sup>註4</sup>、昭和62年に調査した東彼杵町・野中遺跡<sup>註5</sup>、同年の調査の大村市・稗田遺跡等があり、その発掘事例を増やしてきている。共伴した近世陶磁器等より概括すると、まず、最初に17世紀前半の野中遺跡、次に17世紀の終末から18世紀にかけての嶽ノ下A遺跡、稗田遺跡、そして、18世紀前半の岩下遺跡等、時期的な変遷をもって掘立柱建物跡を確認してきている。最初は半信半疑であった近世における掘立柱建物の存在も、これだけの発掘事例が増えれば、もはや否定しようがない所まできているといえよう。

ところで、Fig. 6 に示した小藪城遺跡における近世の建物跡である57 P と6 C の集石がある所は、共伴する近世陶磁器からみて、17世紀の後半から18世紀、そして、広東碗が出土するところから19世紀初めまでの、100年以上という長い時間幅をもっている。確かに57 P の掘立柱建物跡が存在する訳であるが、なにしろ柱が掘立てであるので耐用年限は数十年程度であり、他に近くに重複する掘立柱建物跡もないので、いかにも不自然な感じは否めない。この57 P の上に集積された6 C の集石遺構の上に建物があれば説明としては納得がいくところであるが (この6 C の集石の上に礎石建ての建物があれば、その耐用年限は掘立柱建物の比ではないだろう)、発掘の結果は6 C の集石があるのみで、建物の礎石等は全く検出できていない。発掘の結果だけでは建物跡があったかどうかは全くわからないというのが実情であろう。考古学的な発掘の限界を感じるのみである。

それでは全国各地に現存する近世の民家はどうか。この近世において何時の時期に掘立柱建物から礎石建ての建物に移行していったかは、『日本列島民家史』<sup>註7</sup>のなかでも、「堅穴住居 (掘立柱建物の源初的な形)<sup>註8</sup>と近世民家はどのように関係しているのか、両者の間は連続しているのか、不連続であるのか、という問題がでてくる。それにしても差があまりにも大きいので、現在のところ両者を直接結びつけることは困難である。両者の間をどのように説明するかは、日本民家史の大きな課題の一つである。」<sup>註9</sup>としていて、『民家史』の分野でもこの

問題を注目しているのがわかる。

日本建築史では、庶民が本格的な住まい、大工職人たちの手による高い技術を用いた住いをもてるようになった時期は畿内を中心とする地域ではおそらく16世紀までに遡るであろうが他の地域では17世紀以後であった。特に江戸時代中期（寛文期から寛延期までの90年間、1661～1750年の間）であるとされている。

『民家史』の方のアプローチでは、沖縄における掘立柱建物から礎石建て建物への移行の時期が興味深い。「日本本土においては、江戸時代中期、17世紀後半に近世民家が成立したと前に述べたが、沖縄における転換は、アナヤ（掘立柱小屋）からヌキヤ（貫を用いた本格的建物）への変化であり、その時期はほぼ明治の中頃、19世紀以後半世紀の間である<sup>註10</sup>」という事で、16世紀に変化した畿内から19世紀に変化した沖縄まで、時間差があることになる。そして、全国に現存する民家の間取りや構造から、日本各地の掘立柱建物から礎石建て建物への移行を、「畿内とその周辺では（中略）早くも17世紀中頃までには成立し、中部、関東、中国、四国地方などではこれよりやや遅く17世紀後半に成立した。東北地方では17世紀末から18世紀初頭に成立した。九州地方でも同じ頃かやや遅れて成立したと思われる<sup>註11</sup>」としている、18世紀前半の岩下遺跡では掘立柱建物であるので、確かにやや遅れて礎石建てへと移行するものであろう。しかし、長崎市中里町の国指定の重要文化財である『旧本田家住宅』が、「本田家は明和年間（1764～71）にはこの地に定住しており、この建物もそれより時代が下がっても遠くはないと推定されている<sup>註12</sup>」ということから18世紀の後半には礎石建ての建物へと移行していたものだろう。

また、熊本県に残存する民家として中世的な様相をもつ境家（文政13年、1830、旧所在玉名郡玉東町、現菊水町風土記の丘）があるが、建物の基礎に集石を敷きつめていて、（PL.104）6Cの集石遺構を想起させるものがある。今回の調査では6C遺構を近世の礎石建ての建物の基礎として確認する迄には至らなかったが、今回は予察という形でその可能性を指摘しておきたい。（村川）

以上をもって本報告を終わりたい。

最後に、当初より調査作業に従事頂いた調査員また関係機関の御協力により、本報告をまとめさせていただくことができましたことを感謝いたします。また、不備な点が多々みられるものと思いますが、小蘭城遺跡編者の怠慢のためとお含みおきください。

また、遺跡に関連して46I～48Iより検出の人骨については、長崎大学医学部解剖学第二教室の松下孝幸氏・佐伯和信氏・小山田常一氏には、実測から人骨取り上げ、人骨の所見及び原稿執筆に至るまで無理なお願いと承知しながら快く承諾頂き有り難うございました。

その他に、48Iより出土貨幣（PL.75については、長崎大学附属病院放射線部・斉藤匠司氏、長崎記念病院放射線科・中村源之助氏・馬込万助氏の特別な便宜によりX線撮影を提供頂き、人骨の所属時期を明らかにさせていただいた。

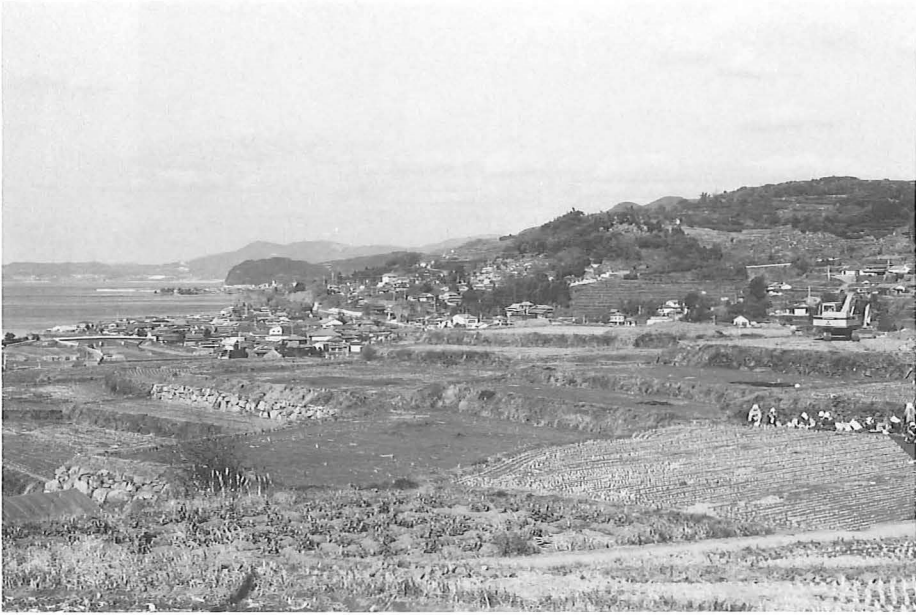
ここに、あらためて感謝の意を表わしたい。

（町田）

- 註1 九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化緊急発掘調査報告書Ⅰ 長崎県文化財調査報告書第54集 長崎県教育委員会 1981
- 註2 九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化緊急発掘調査報告書Ⅵ 長崎県文化財調査報告書第93集 長崎県教育委員会 1989
- 註3 九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化緊急発掘調査報告書Ⅳ 長崎県文化財調査報告書第93集 長崎県教育委員会 1984
- 註4 九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化緊急発掘調査報告書Ⅴ 長崎県文化財調査報告書第93集 長崎県教育委員会 1985
- 註5 註2に同じ
- 註6 『稗田遺跡』—弥勒寺地区農業構造改善事業にかかる遺跡の発掘調査報告書— 長崎県大村市稗田遺跡調査会 1988
- 註7 宮澤智士『日本列島民家史』技術の発達と地方色の成立 住まいの図書館出版局 1989
- 註8 ( )内筆者注釈
- 註9 註7に同じ
- 註10 註7に同じ
- 註11 註7に同じ
- 註12 『長崎県の文化財』 長崎県教育委員会 p.p. 49

PLATES  
(小菌城跡)





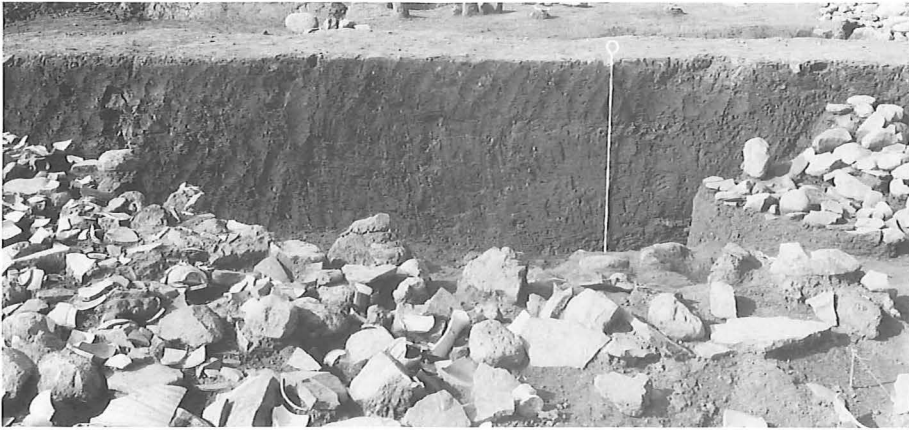
遺跡遠景①



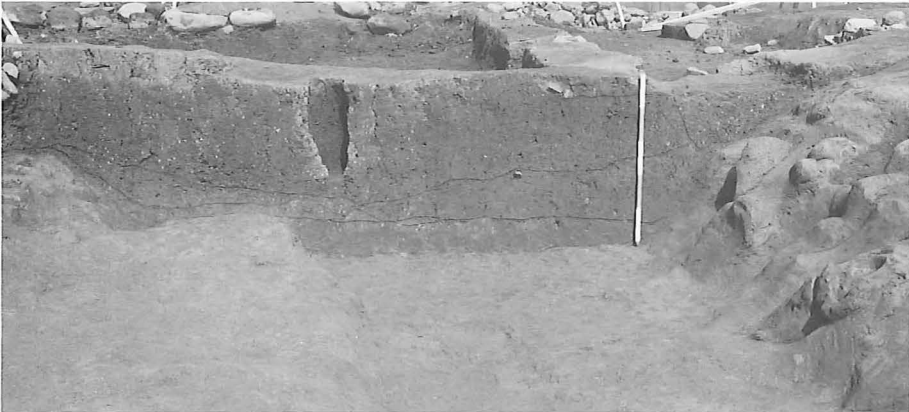
10B



10B 東壁②



西より



南より

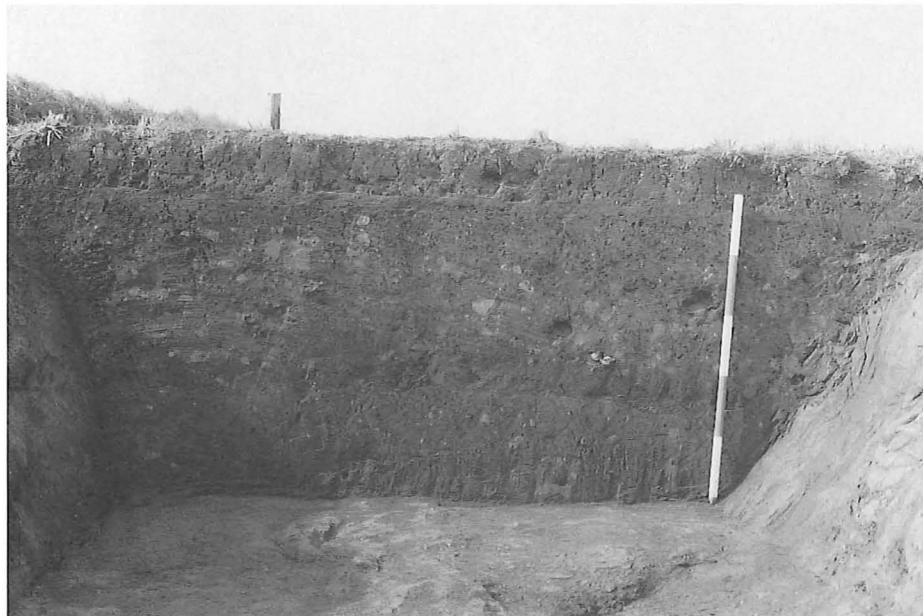


南より

10B北壁③

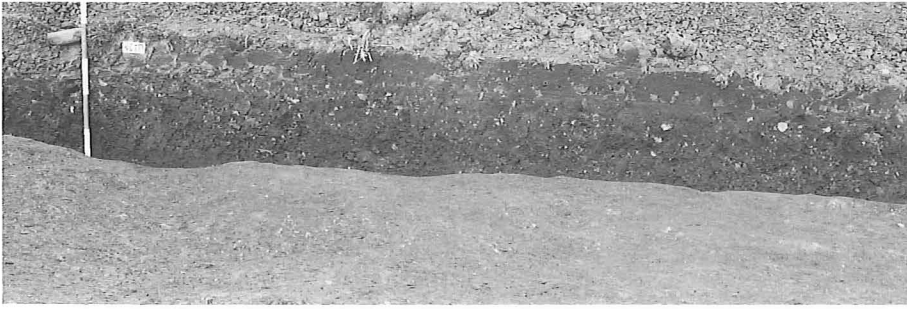


C'-0



C'-1

18C'空堀の土層④



C'-9



T-8



J-8



K-20

3・2・5区の土層⑤



U-19

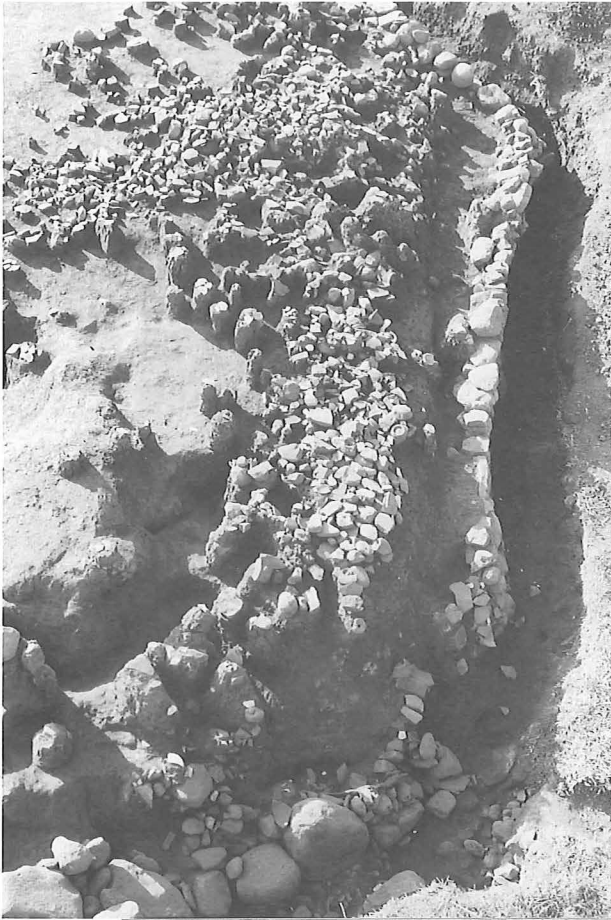


U-18



U-17

4区の土層⑥

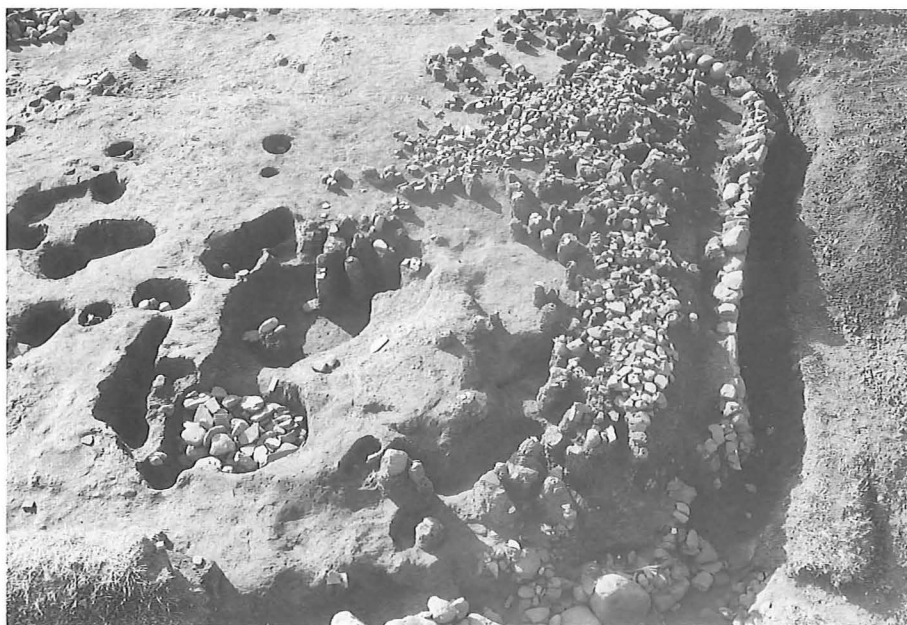


12A



1区近世  
全景

1区の集石・陶磁器混在状況全景⑦



12A



4 D

1区の集石・陶磁器混在状況⑧





A12



1区の遺物出土状況⑨



4 D



6 C

1区の集石・陶磁器混在⑩



1 区の遺物出土状況①



出土状況



1 区の遺物出土状況⑫



1区集石・陶磁器混在⑬



12A



出土状況

1区の集石・陶磁器検出状況⑭



26 E



1区の遺構⑮



13F



2 D

1区集石状況⑩





1区全景



19・23C

1区の遺構検出状況①



6 C



13 F

1区の集石検出状況⑩

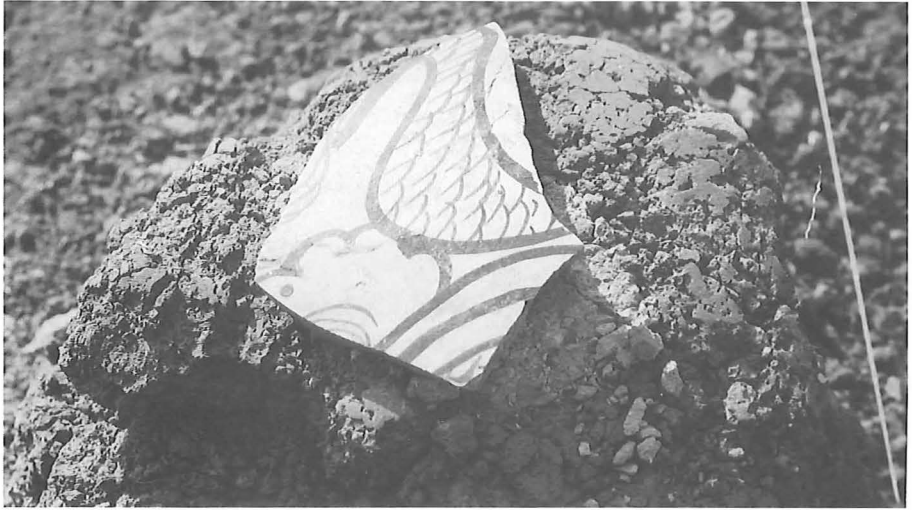


10B



10Bの遺物  
取上げ後

1区の空堀検出状況⑯



1区出土の遺物②



西より



東より

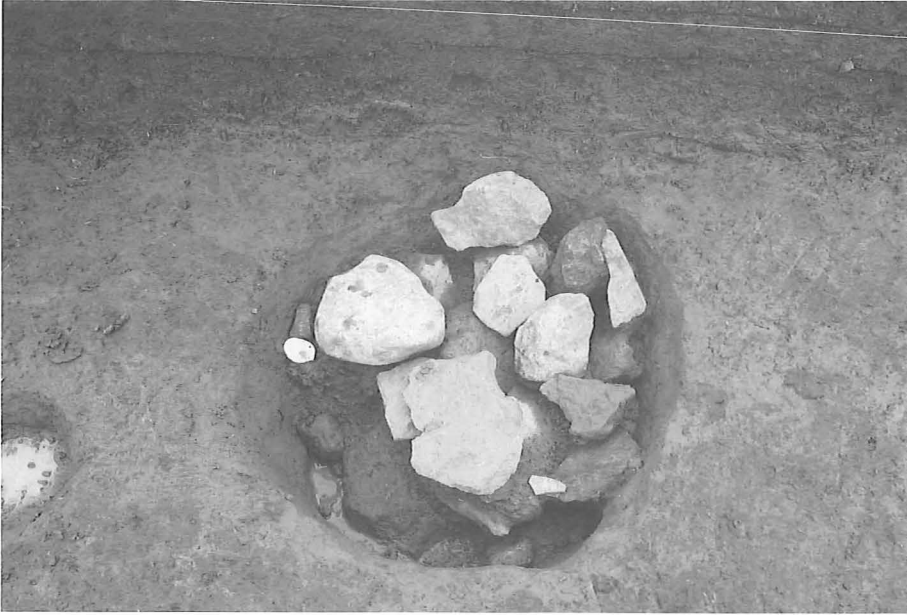
18C' 空堀②



調査



調査状況②



41N



19C

1区と2区の遺構検出状況㉓



1区全景



20・21 C

1区の遺構全景・柱穴㊦





9 B



20・21 C

1区の遺構検出状況㉔



32A

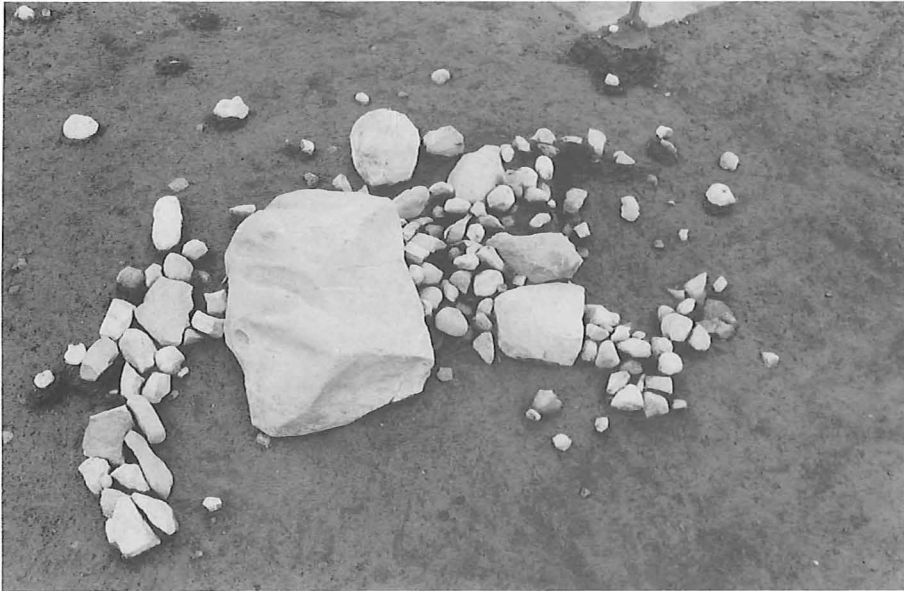


5C

1区の遺構検出状況②



29A



22S

1・4区の遺構検出状況②



32A



32A

埋藏検出状況②



19C



51 I

埋葬の状況㊟

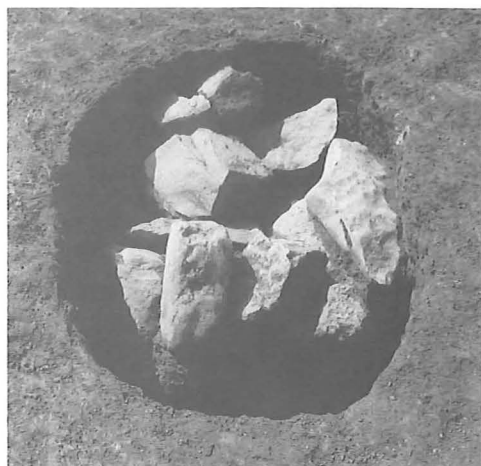
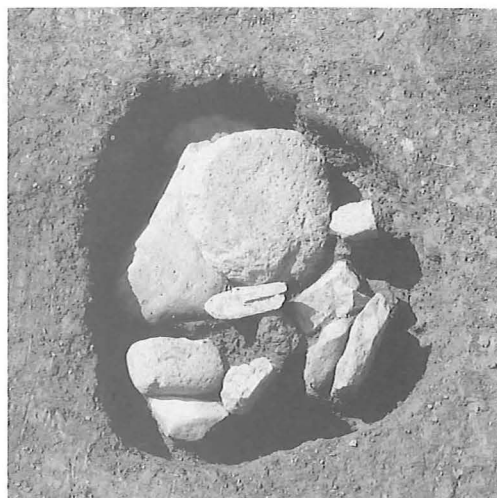
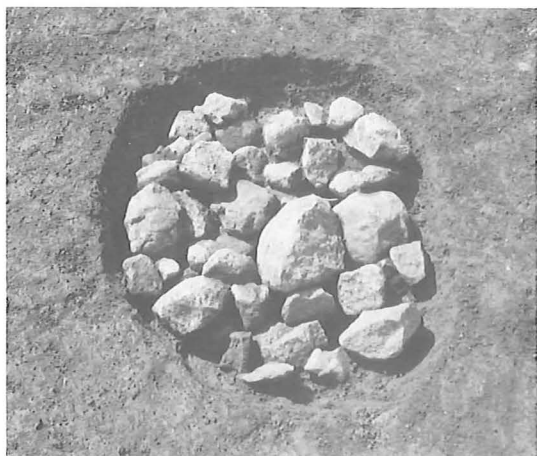


6C



14E

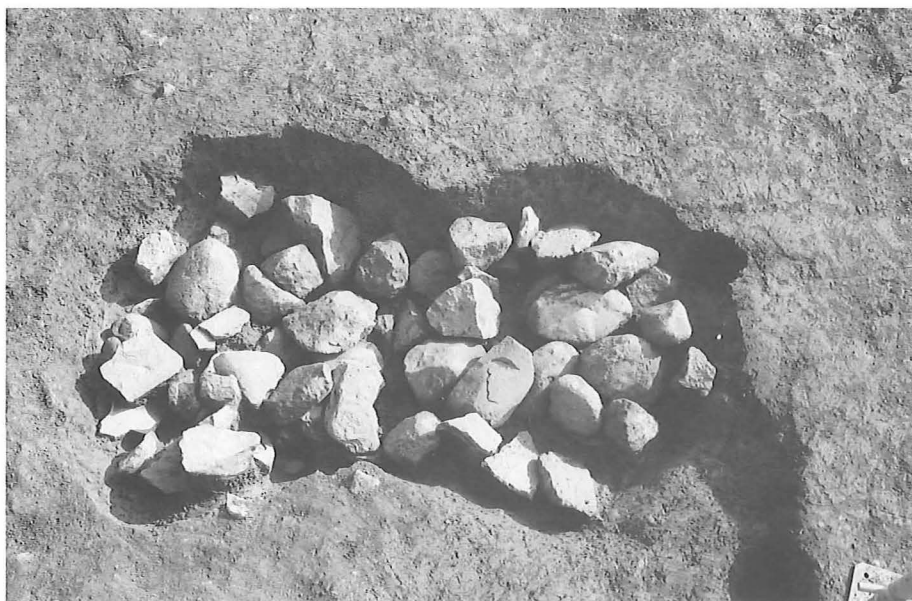
1区の遺構検出状況㊶



2区の土壇㊸



350



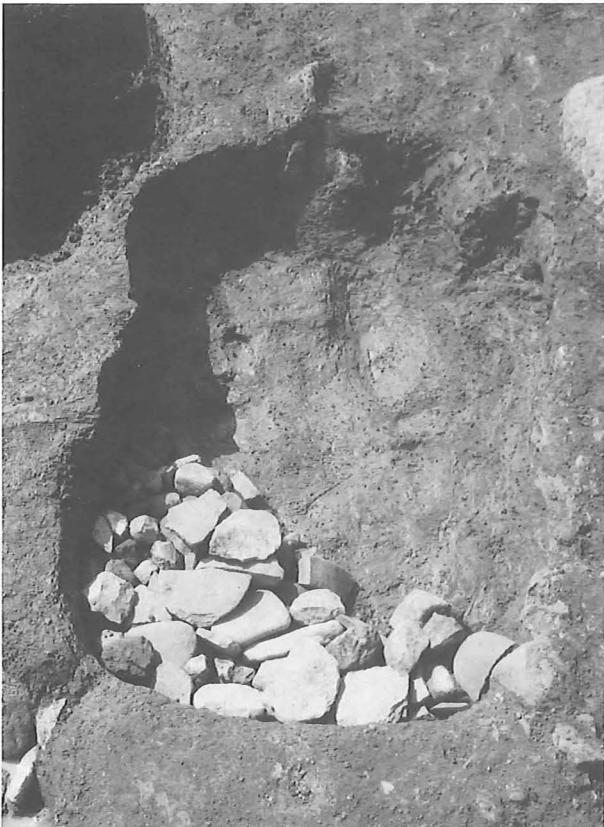
45 N

2区の遺構②





17E



39D

1区と2区の遺構検出状況㊸



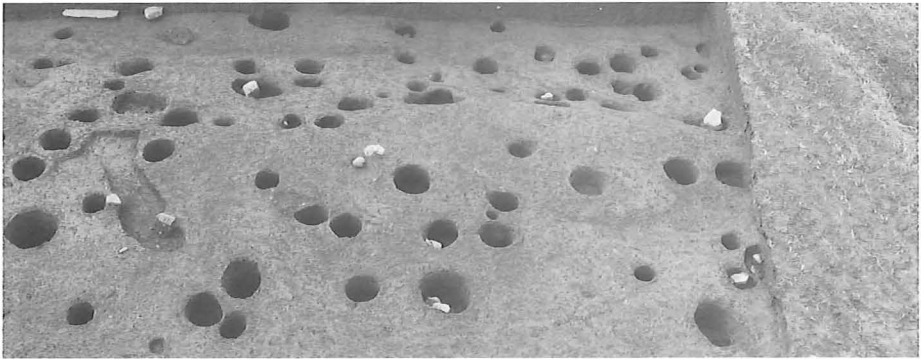
2区の遺構検出状況㊸



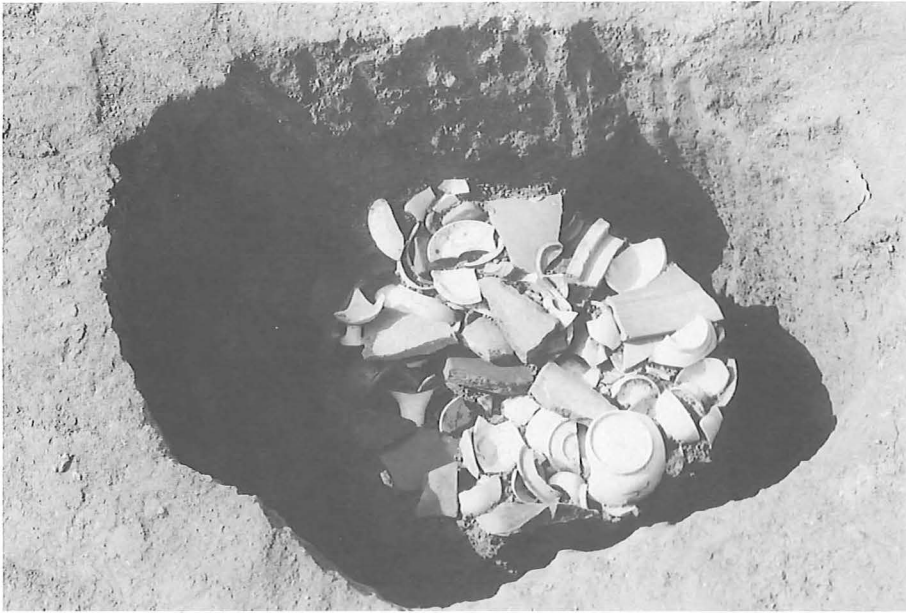
2区近世建物跡㊸



3区



3区の柱穴群㊦



25B



1 区の遺構検出状況㉔



7C



1区の遺構検出状況㊸

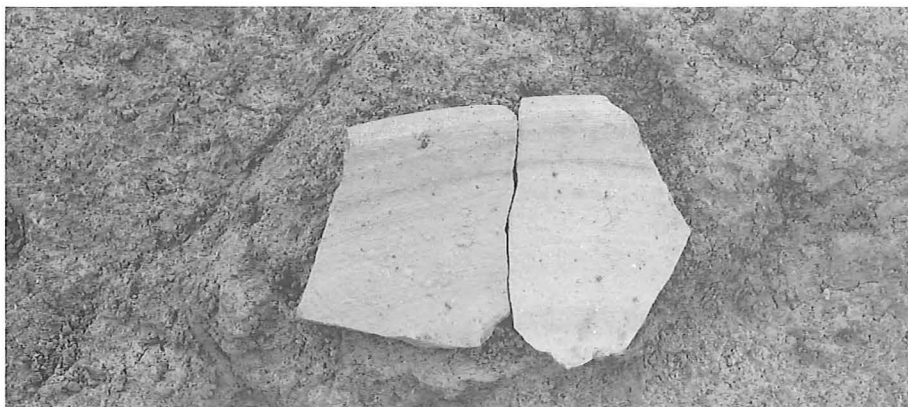


48 I 周辺



2区柱穴群

2区の土墳墓・柱穴群㊿



4区出土



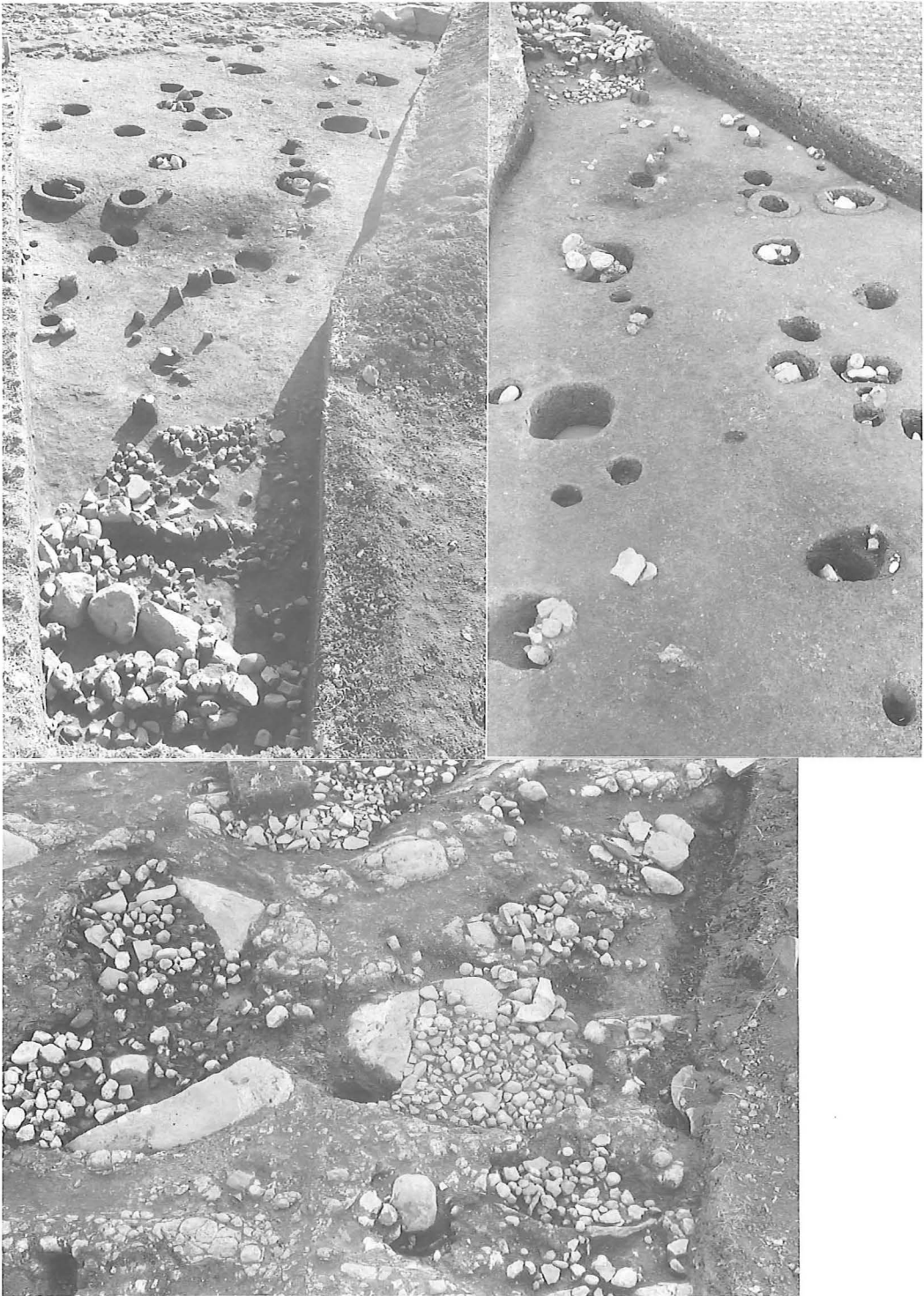
4区出土



55 I

遺物出土状況④





5区柱穴群④



2区柱穴群



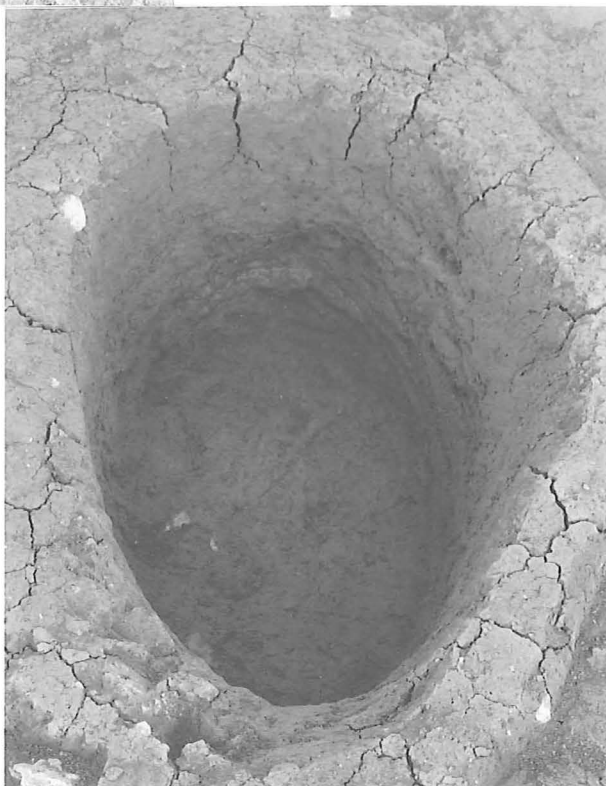
2区の柱穴群・調査状況④



2区柱穴群④



55 I



49 I

2区の検出遺構④



46 I

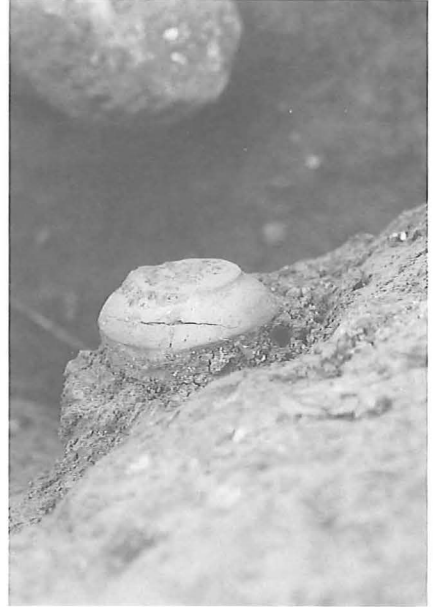


46 I 遺物

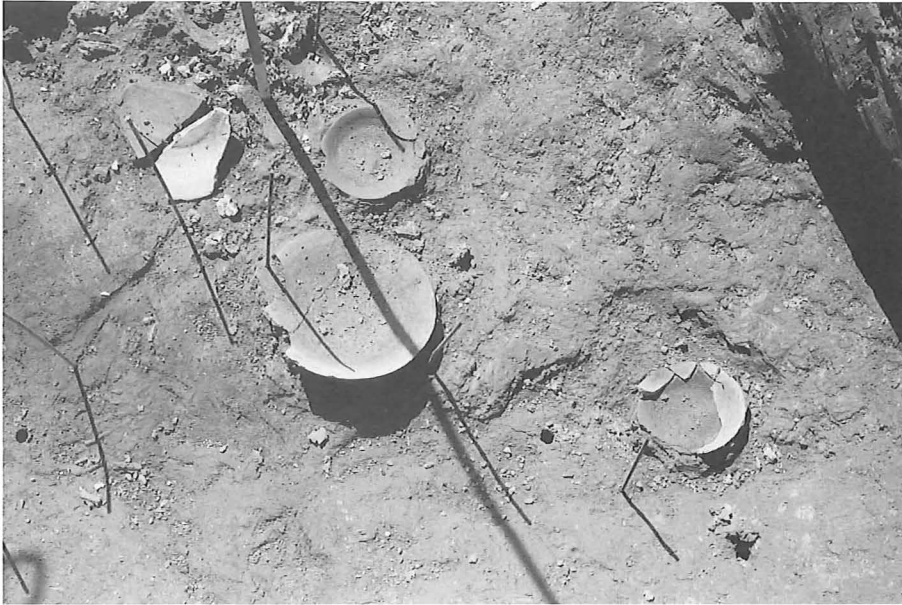
46 I 人骨・遺物検出状況㊥



47 I



2区の土墳墓㊦



47 I  
出土遺物



47 I

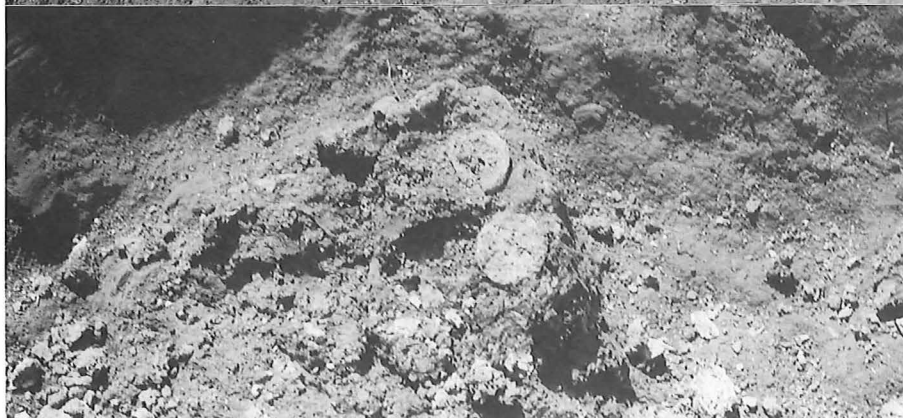
2区の土墳墓④



48 I



48 I  
出土土師器



48 I  
出土貨幣

48 I の人骨・遺物検出状況㊤





4区

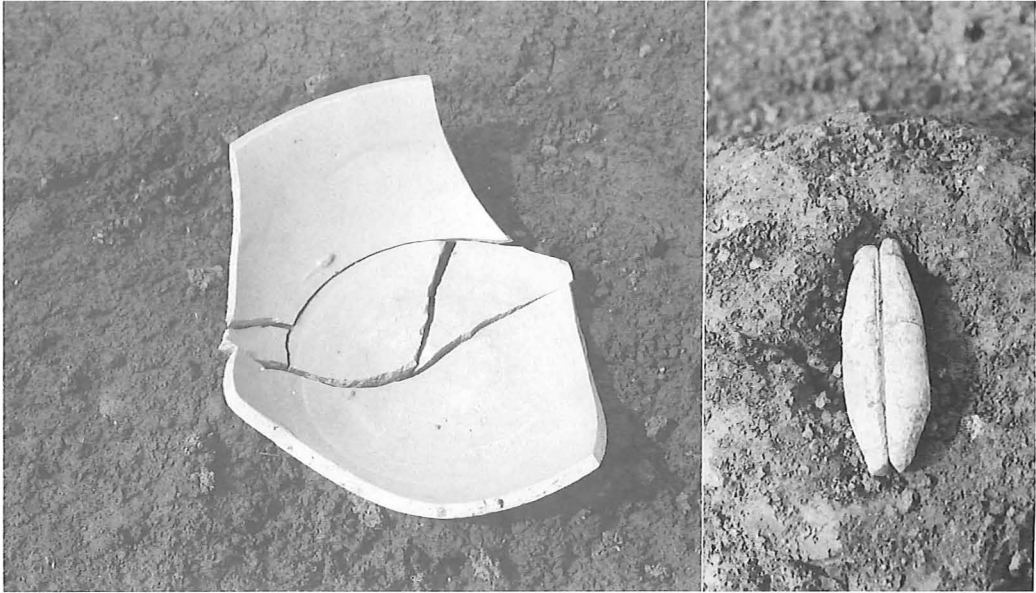


4区柱穴

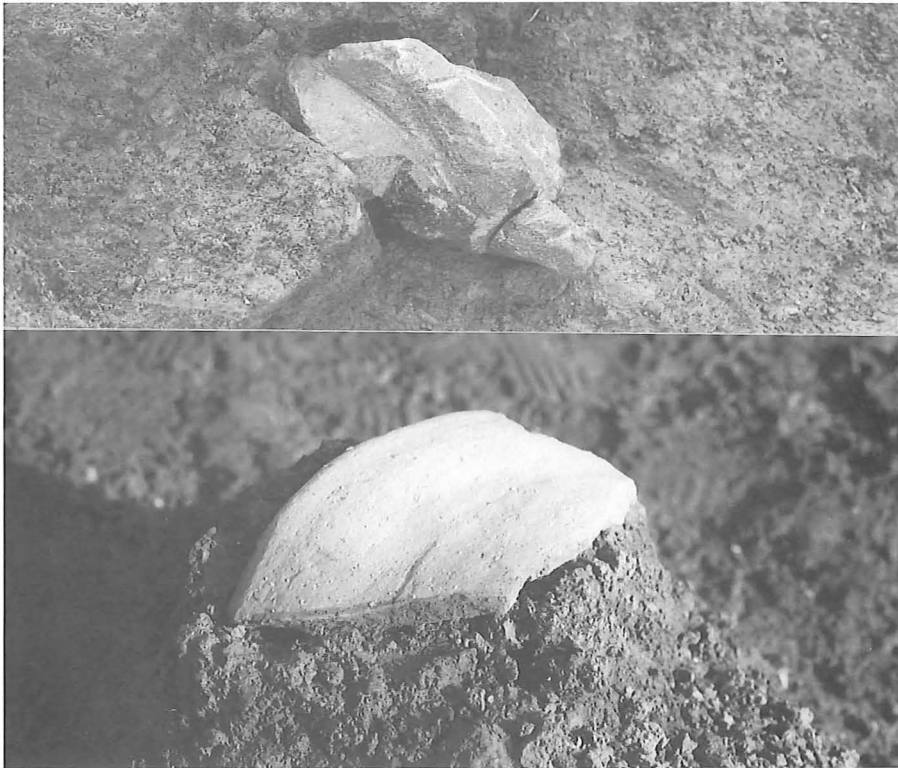
4区調査状況と柱穴④



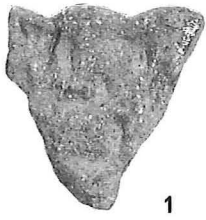
4区出土の遺物⑤



Pit 101 出土



4区出土の遺物⑤



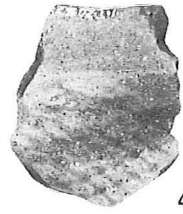
1



2



3



4



5



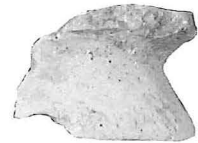
6



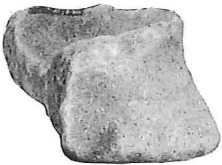
7



8



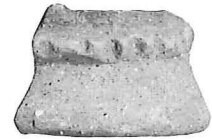
9



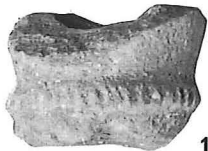
10



11

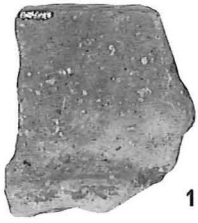


12



13

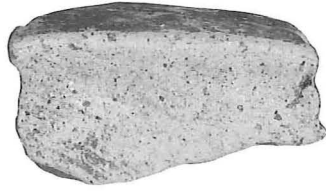
縄文時代の土器 (1/2)



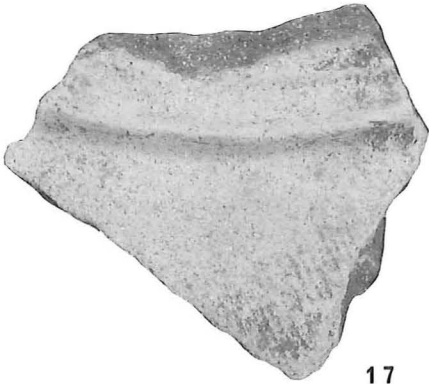
14



15



16



17



18



19



20



21



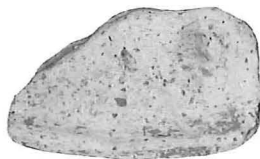
22



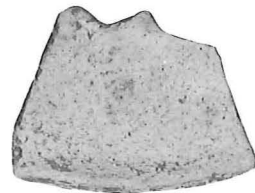
23



24

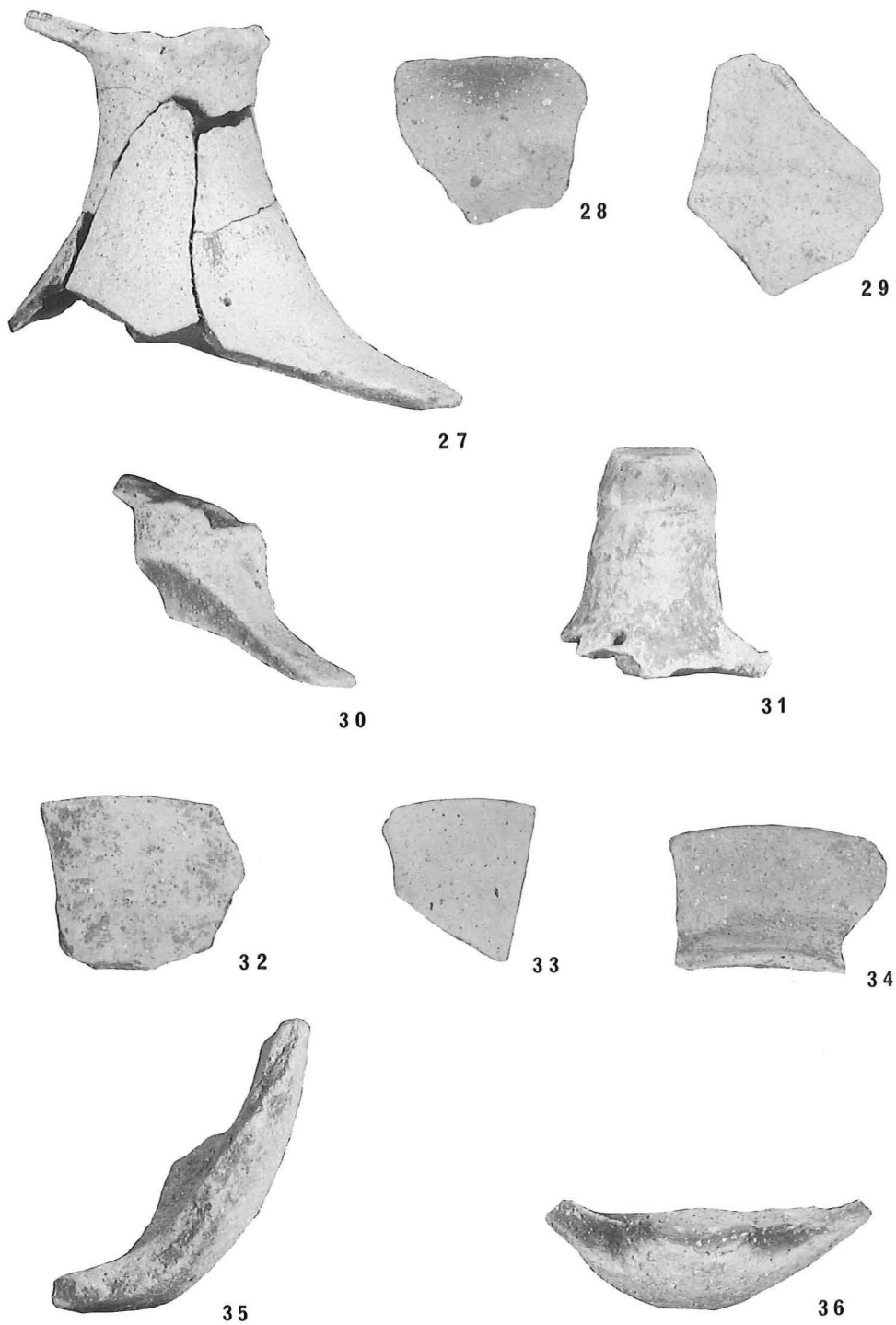


25

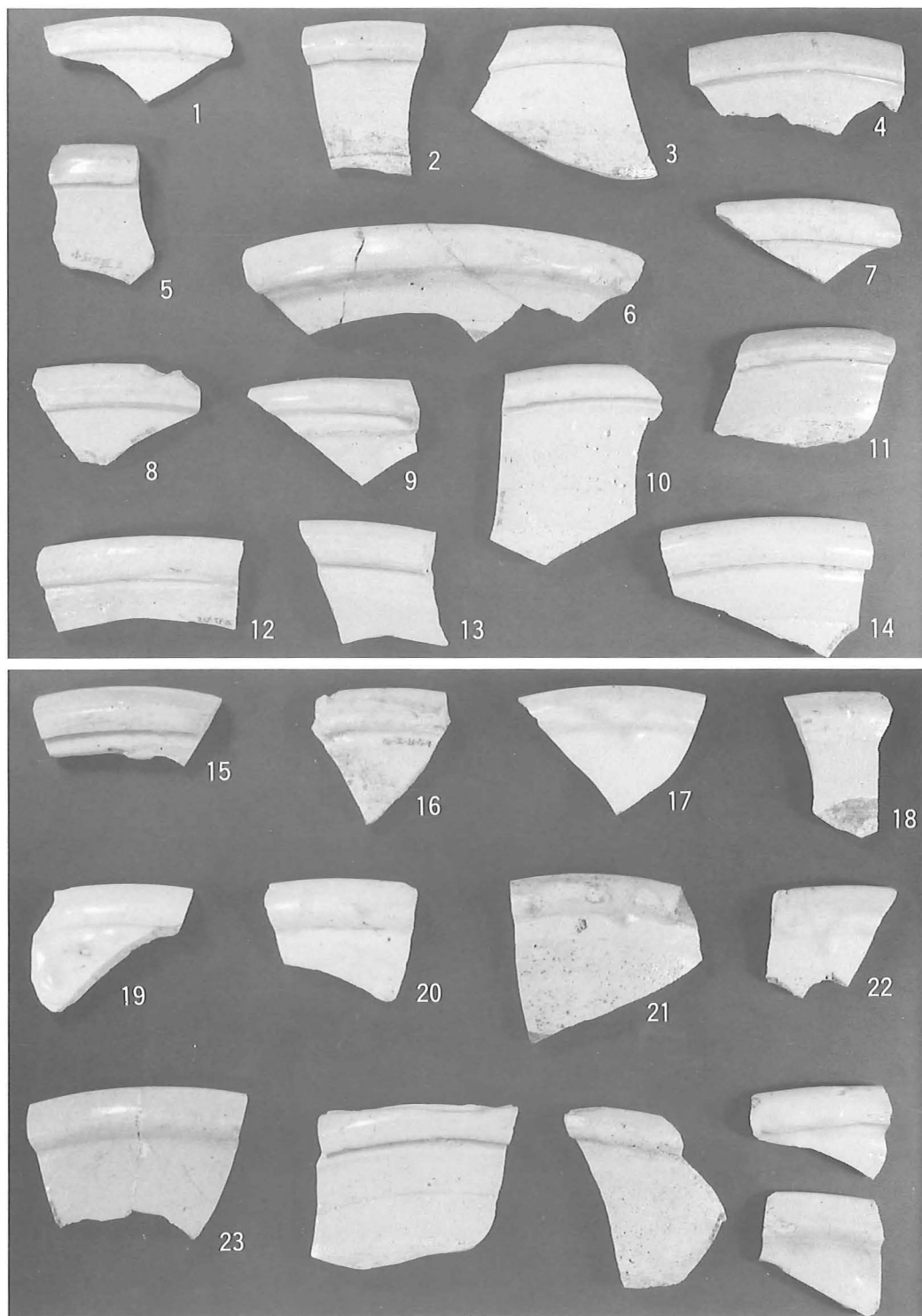


26

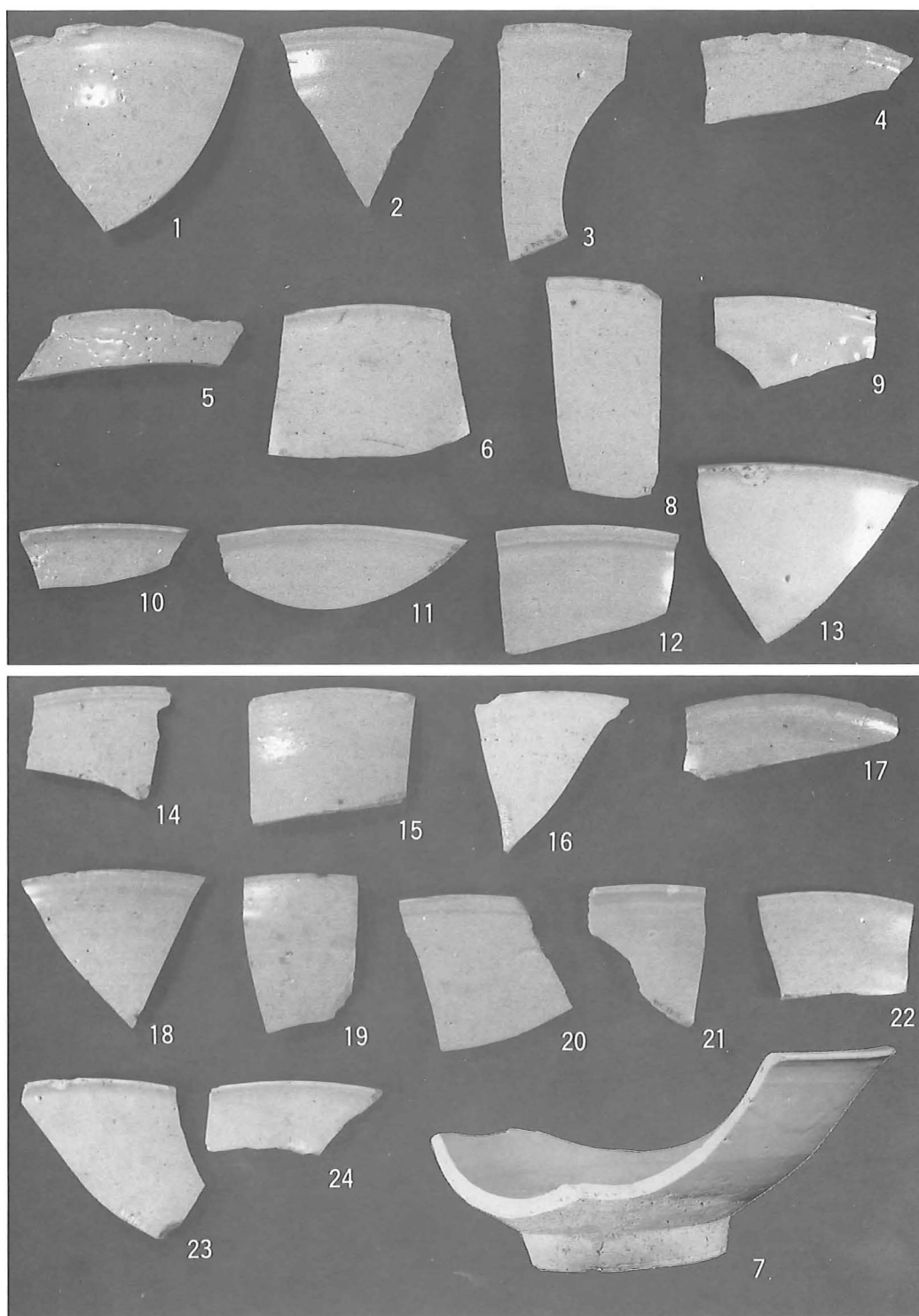
弥生時代の土器 (1/2)



弥生・古墳時代の土器 (1/2)

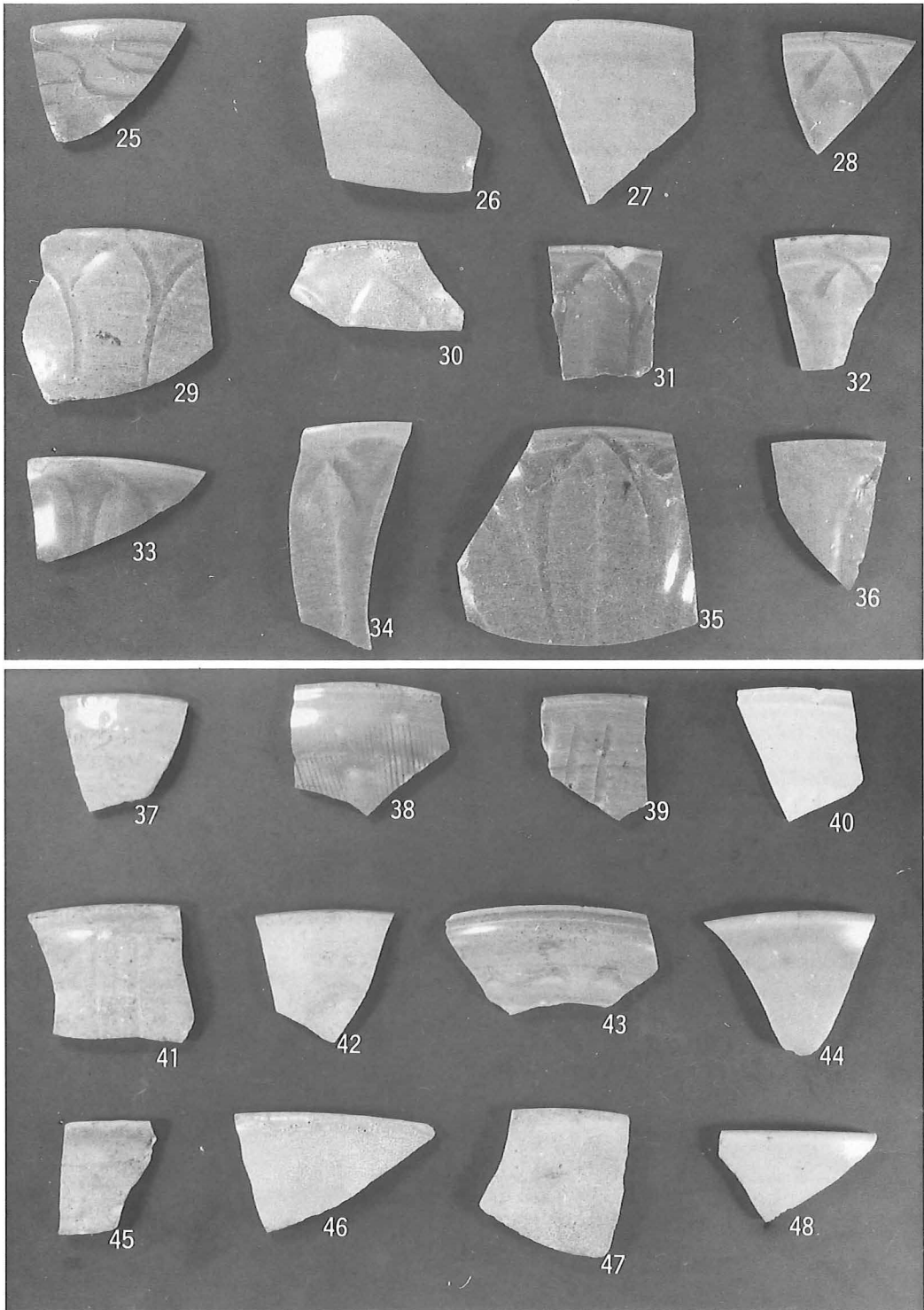


白磁碗類①

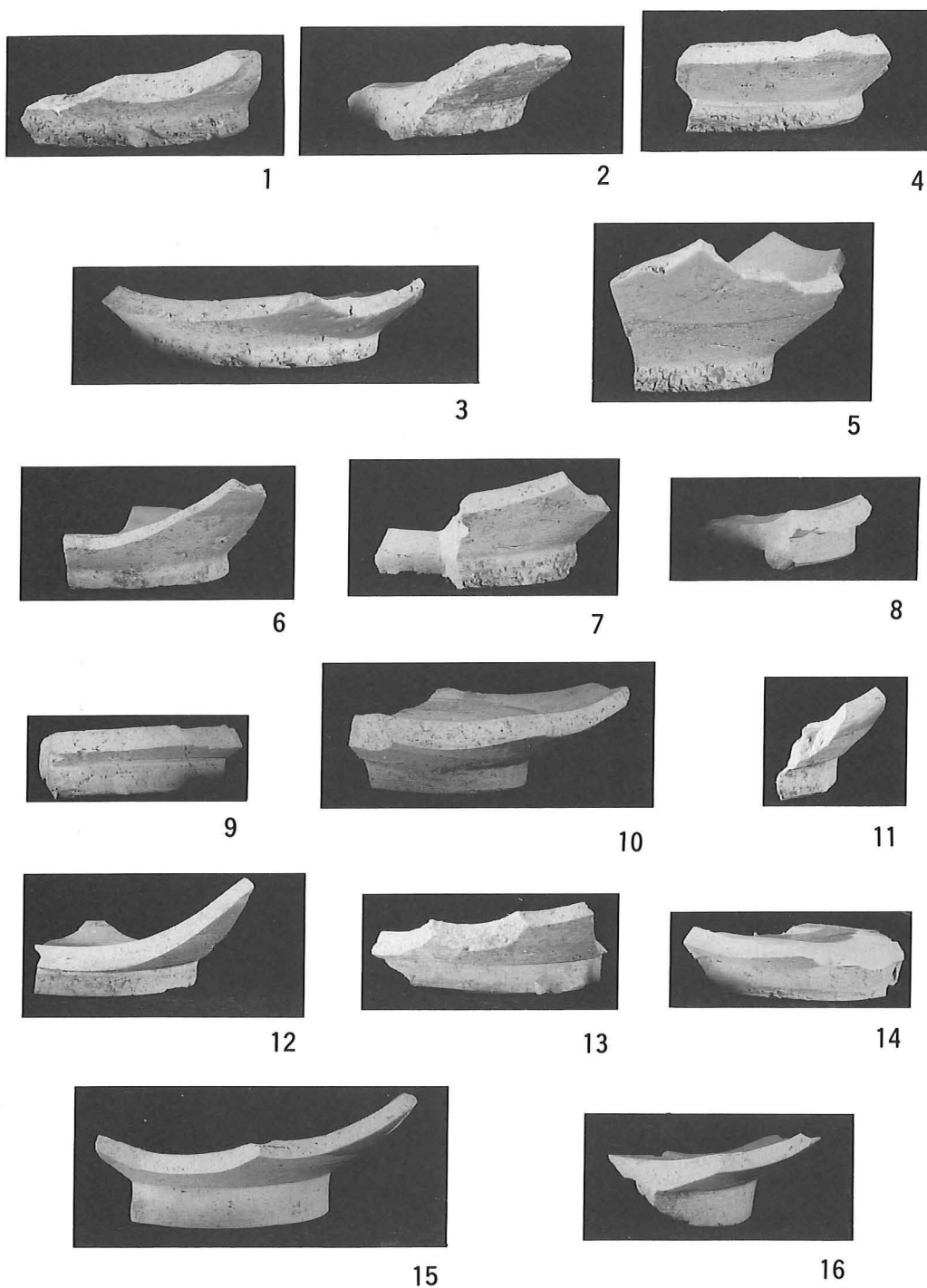


白磁碗類②





青磁碗類③



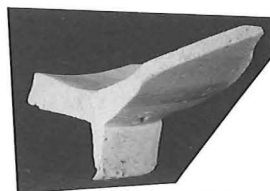
白磁碗類底部④



17



18



19



20



21



22



23



24



25



26



27



28



29



30

白磁・青磁碗類底部⑤



31



32



33



34



35



36



37



38



39

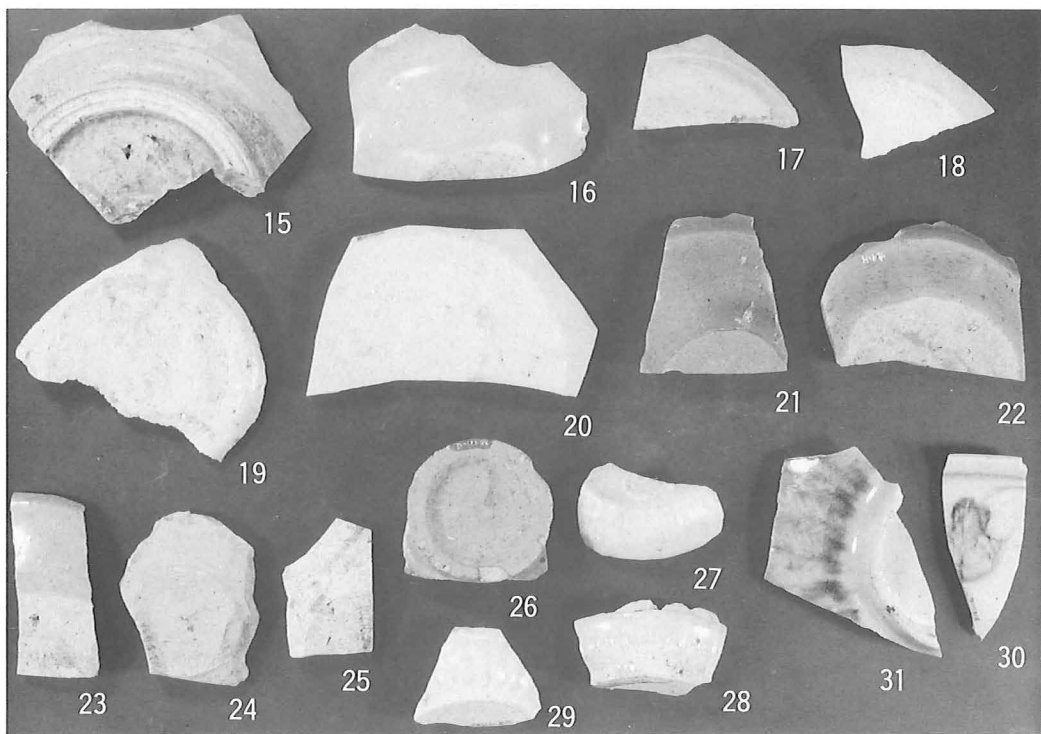
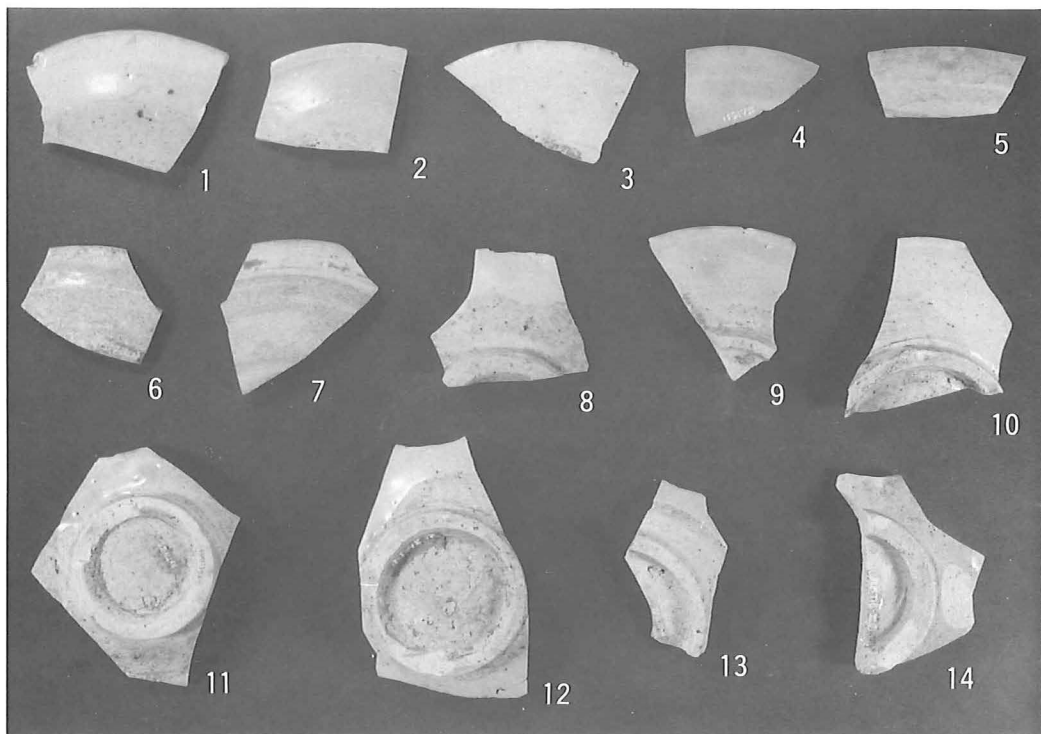


40

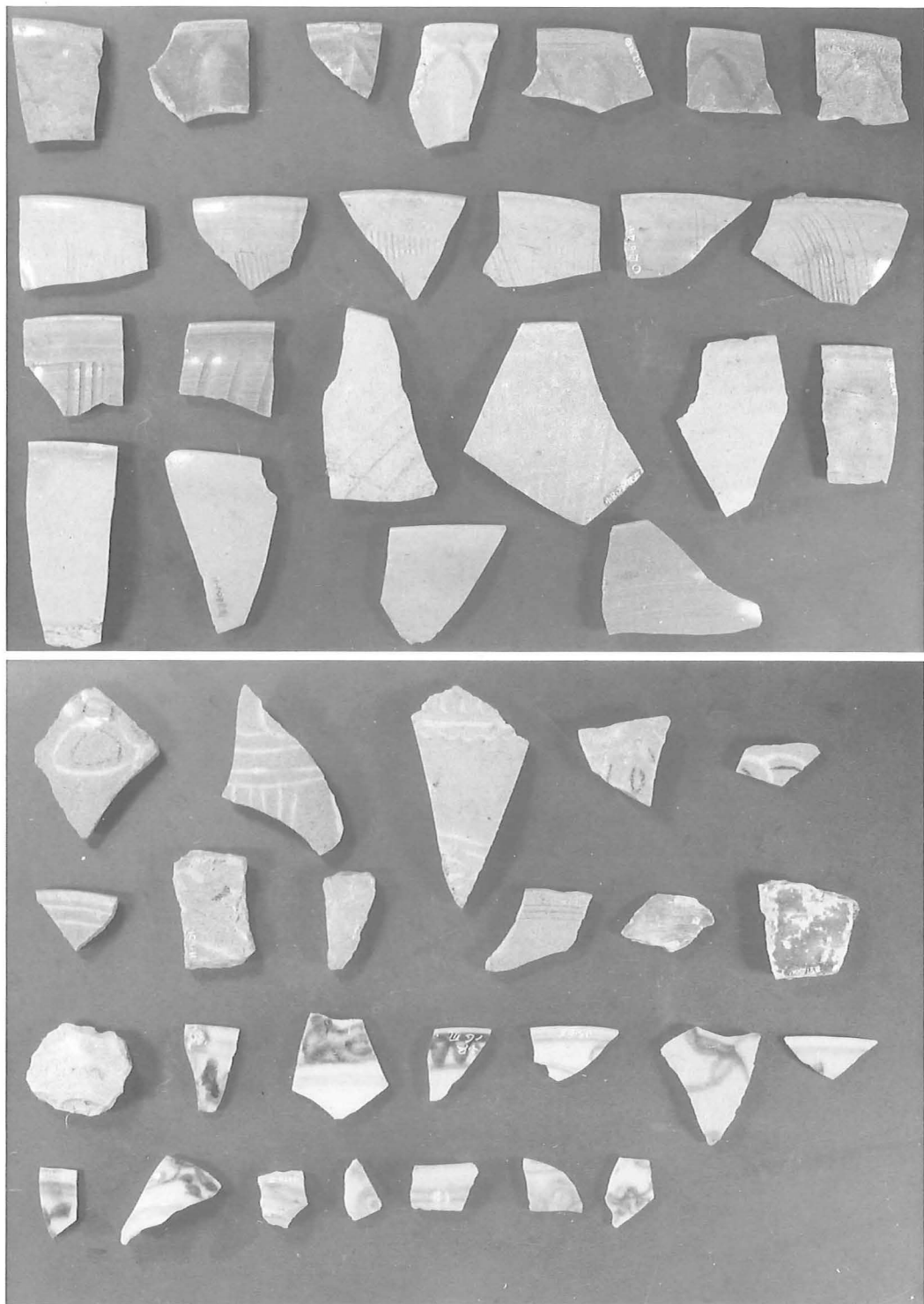


41

青磁碗類底部⑥



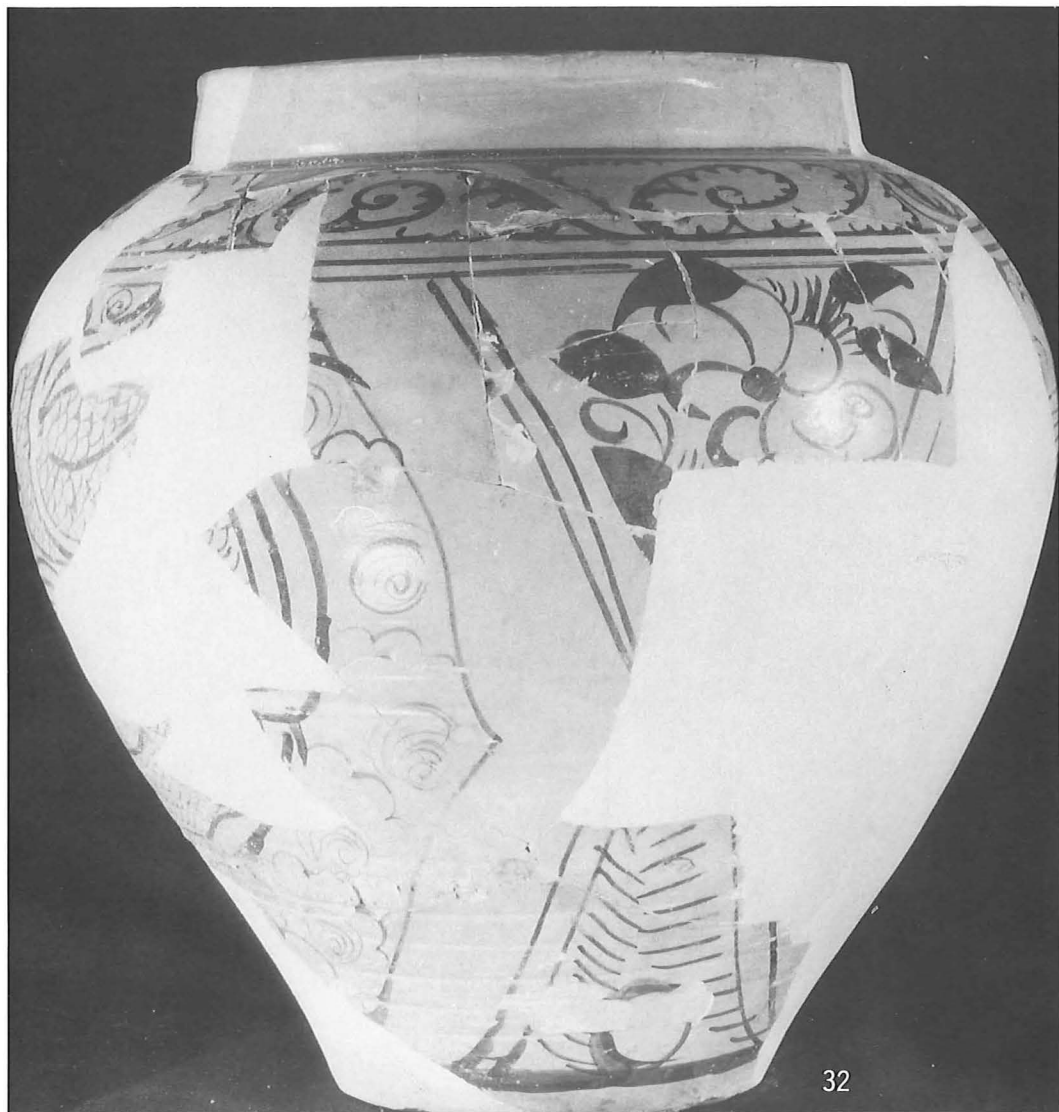
白磁・青磁皿・天目・合子・染付⑦



青磁・高麗青磁・緑釉陶器・染付⑧

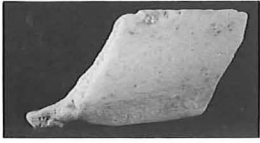


磁州窯系陶器⑨



磁州窯系陶器⑩





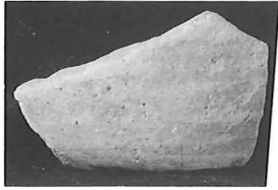
1



2



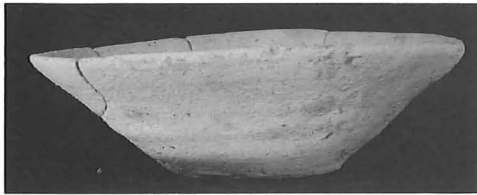
3



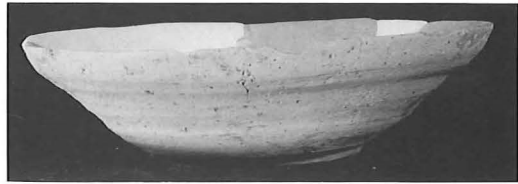
4



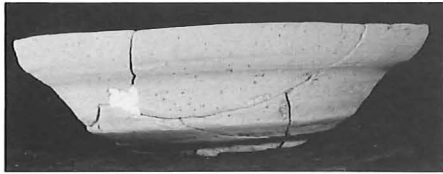
5



6



7



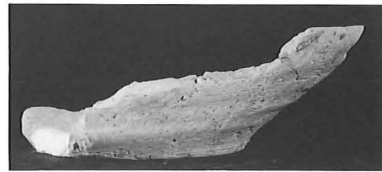
8



9



10

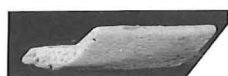


11

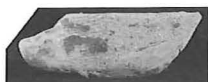


12

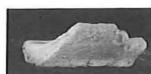
土師器杯⑩



13



14



15



16



17



18



19



20



21



22



23



24



25



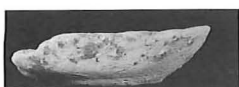
26



27



28



29



30



31

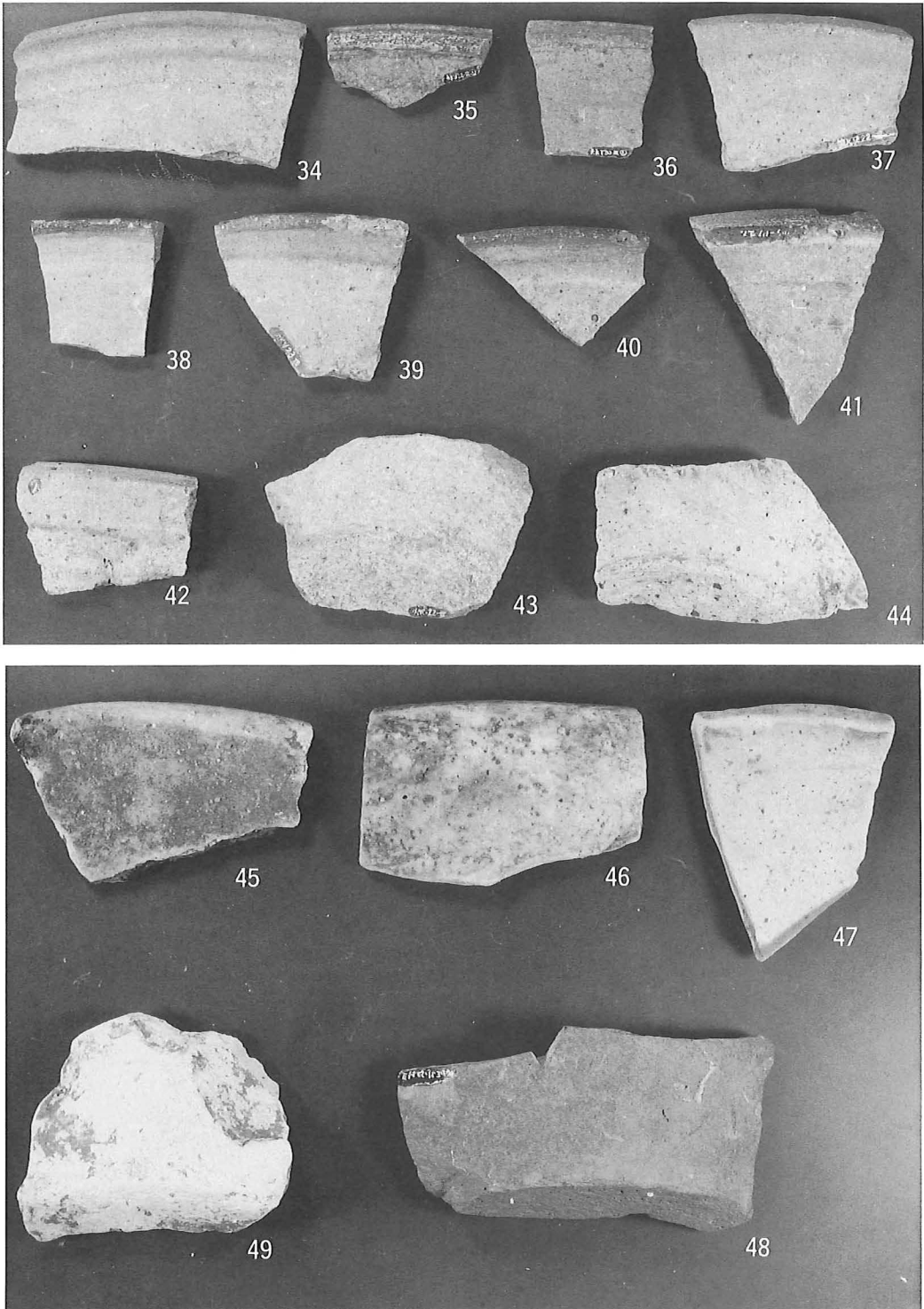


32

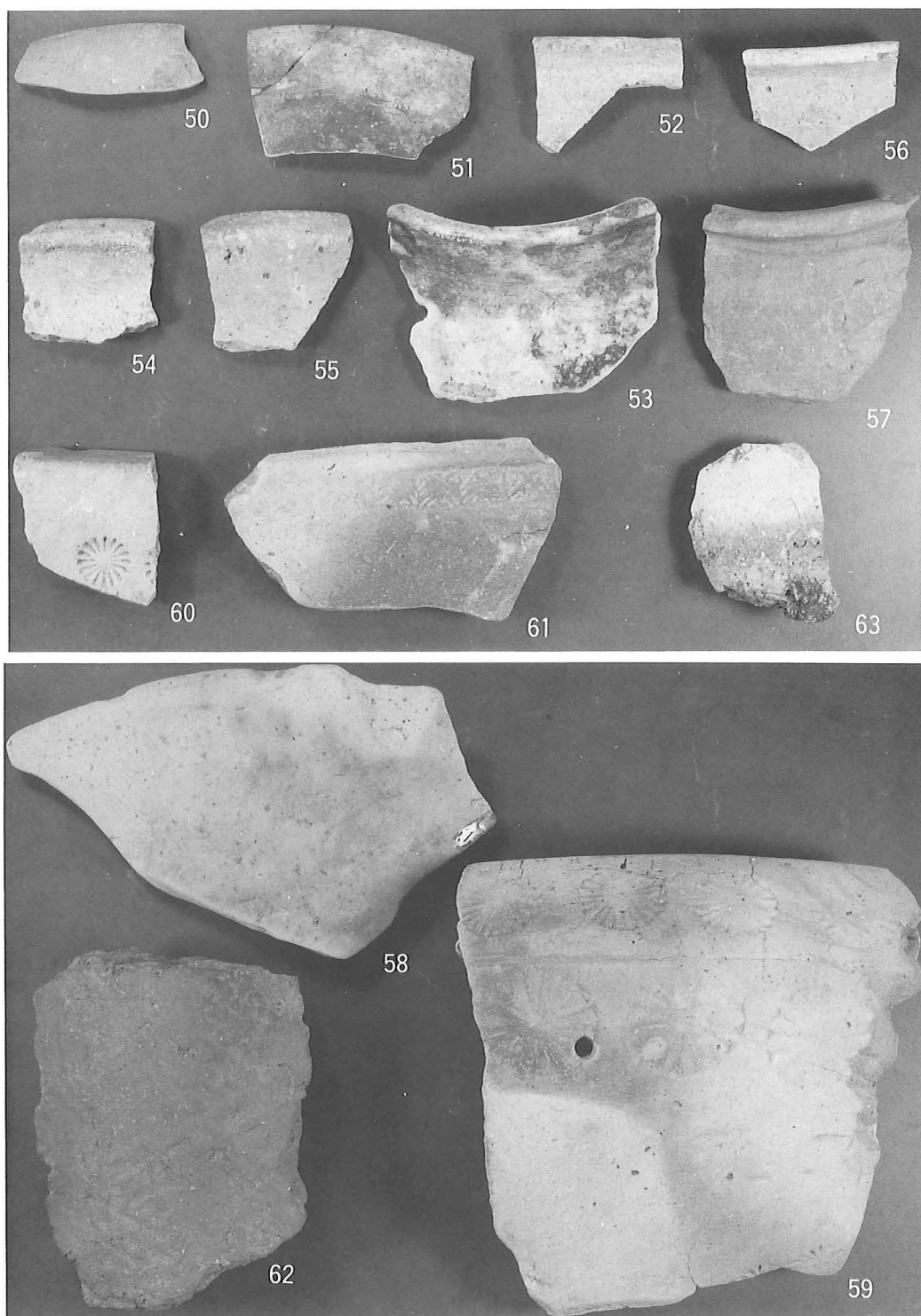


33

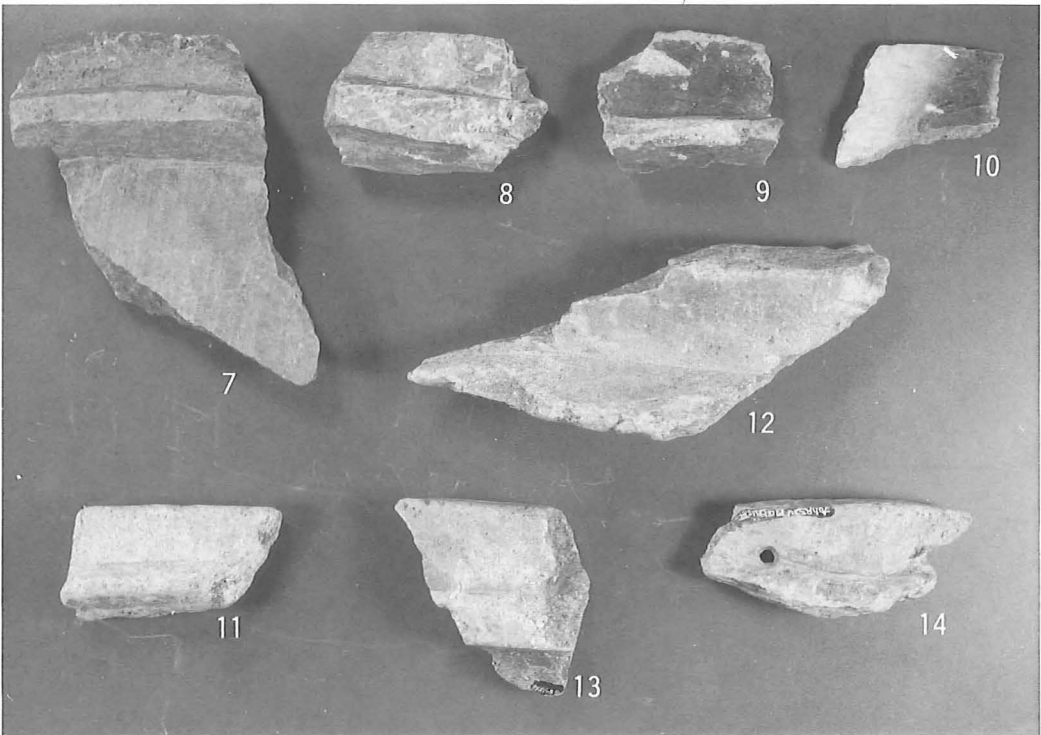
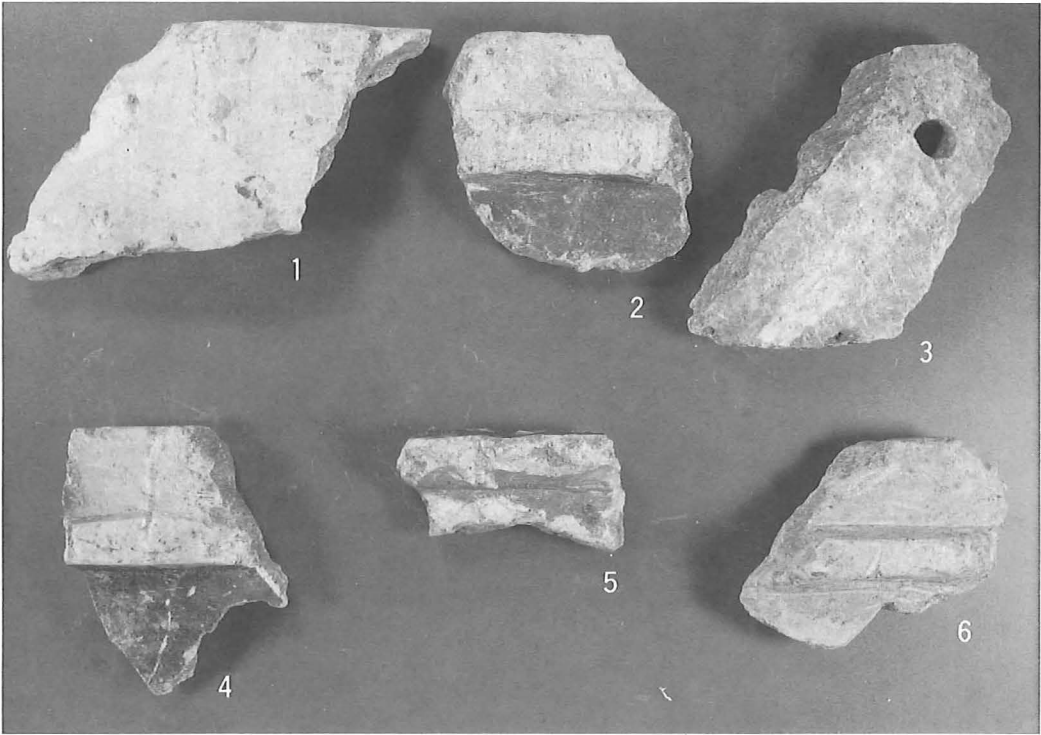
土師器皿⑫



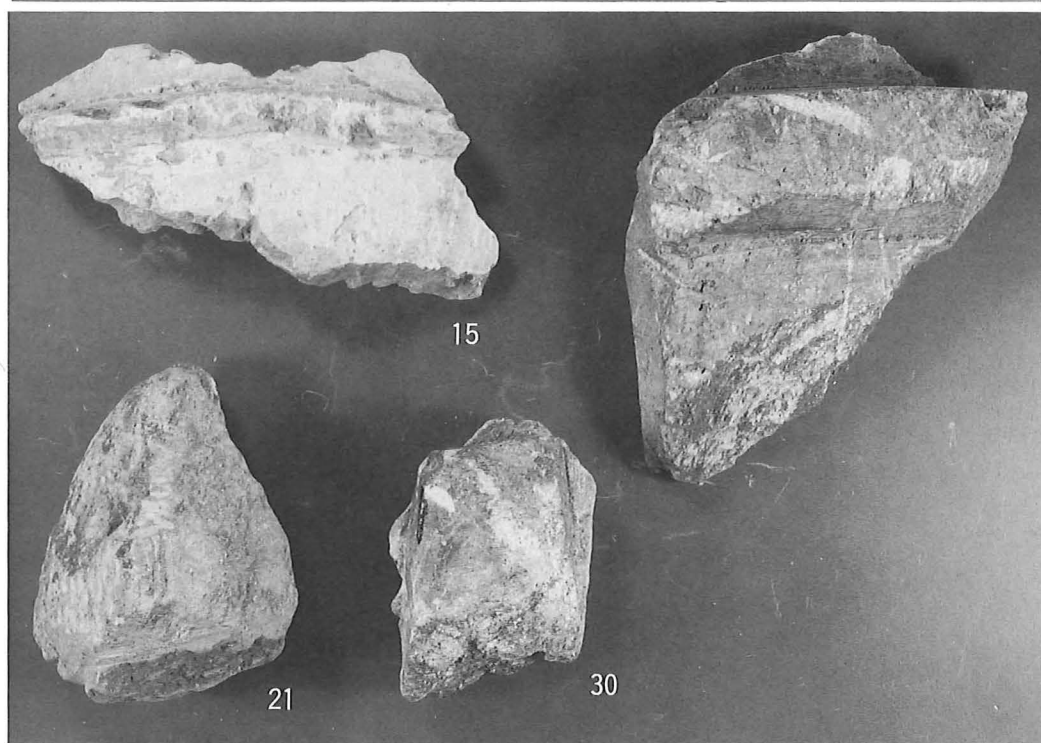
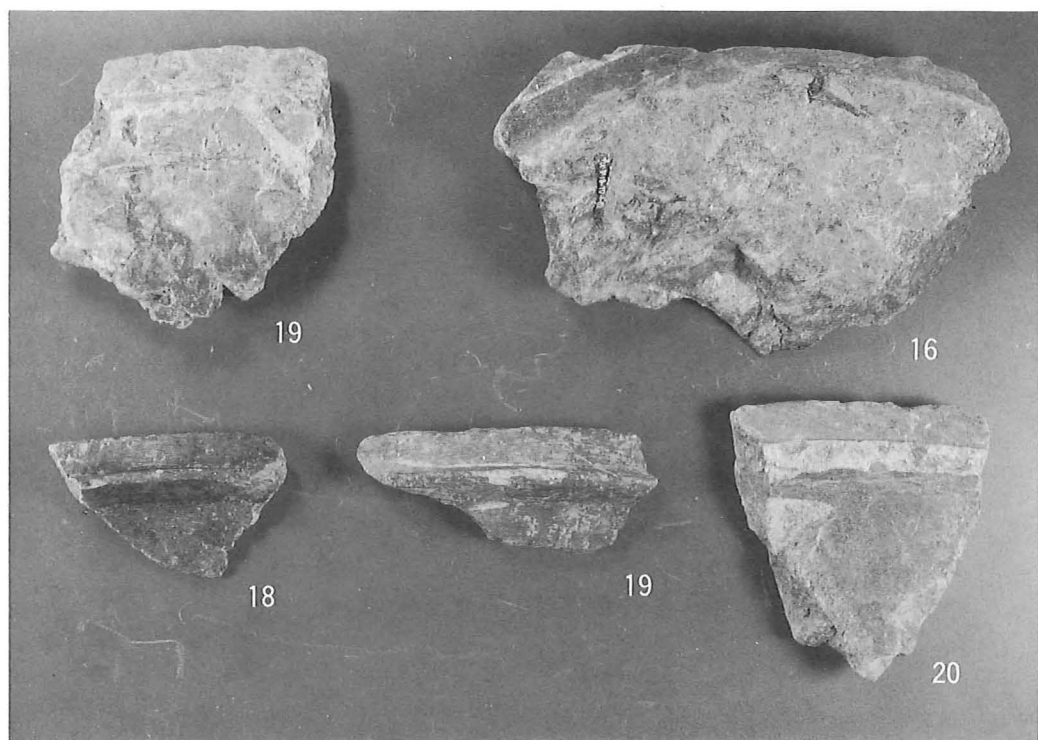
東播系の鉢・瓦質土器・須恵器系土器⑬



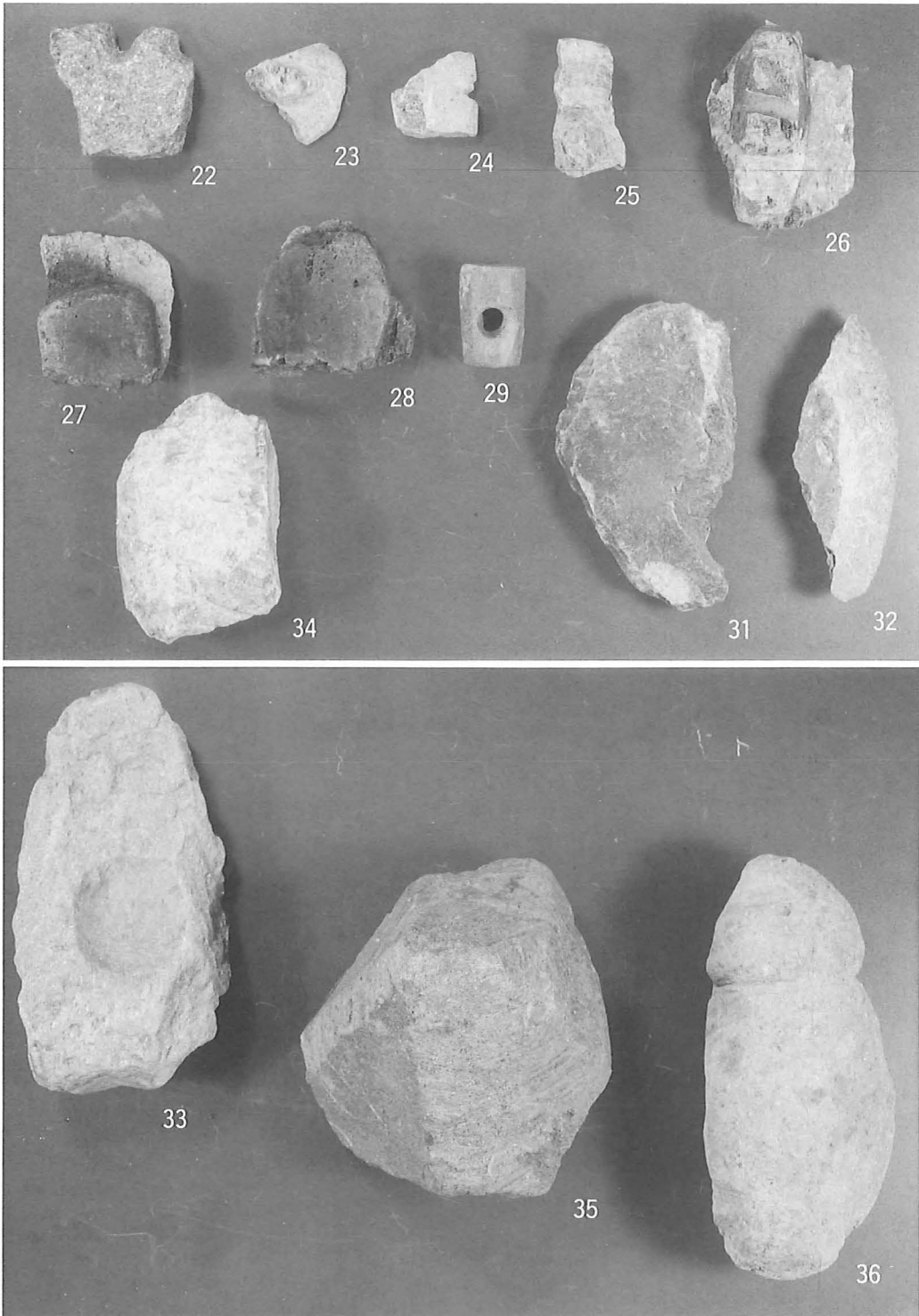
須恵器系土器、瓦器、輸入陶器、片口、瓦、火鉢等⑭



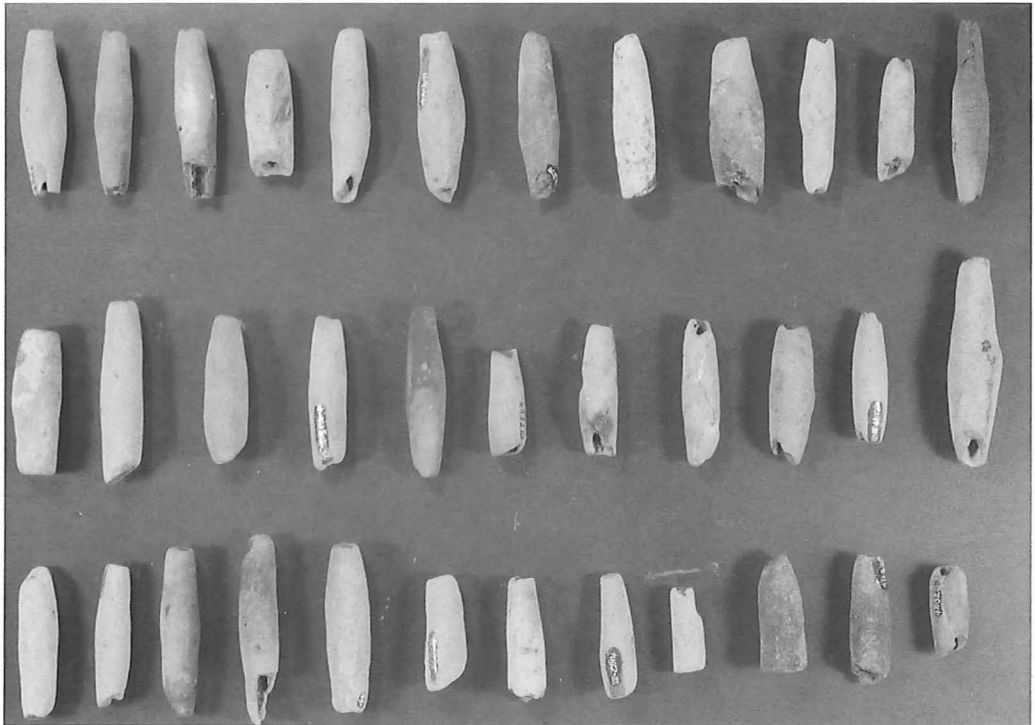
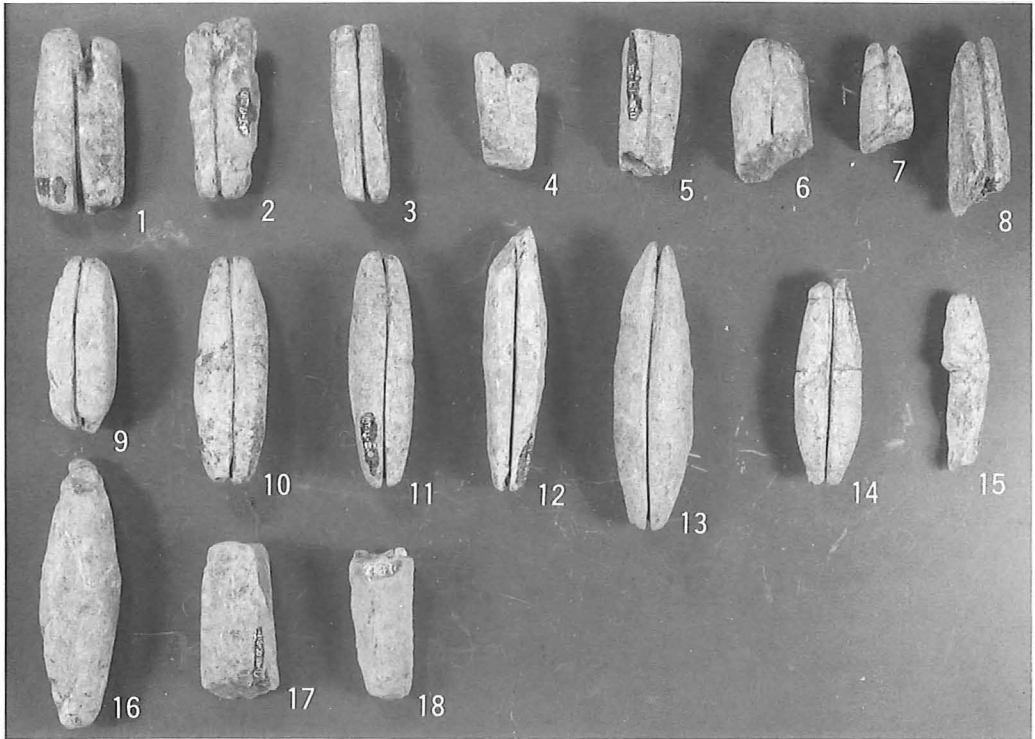
石鍋⑮



石鍋・再加工製品⑩

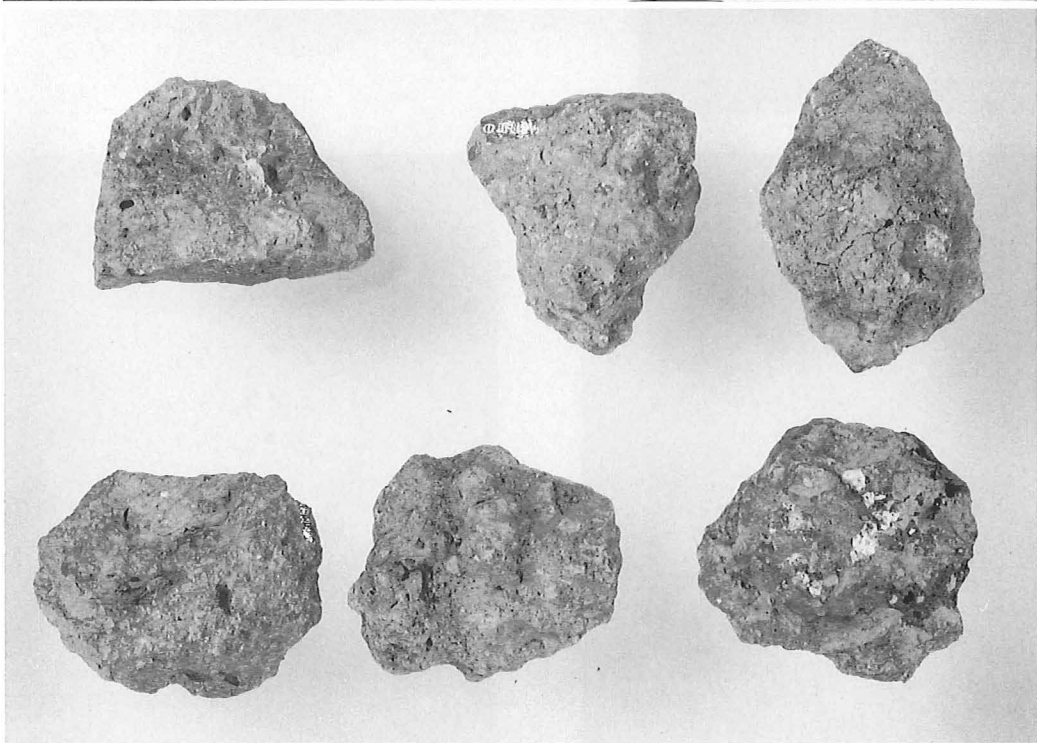


滑石製品・異形石器等⑰

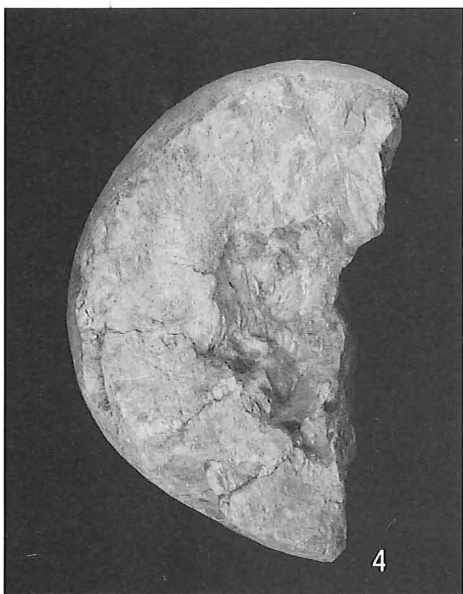
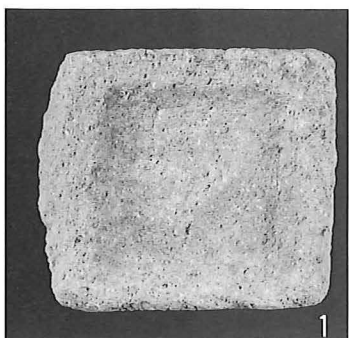


滑石製石錘・土錘⑩

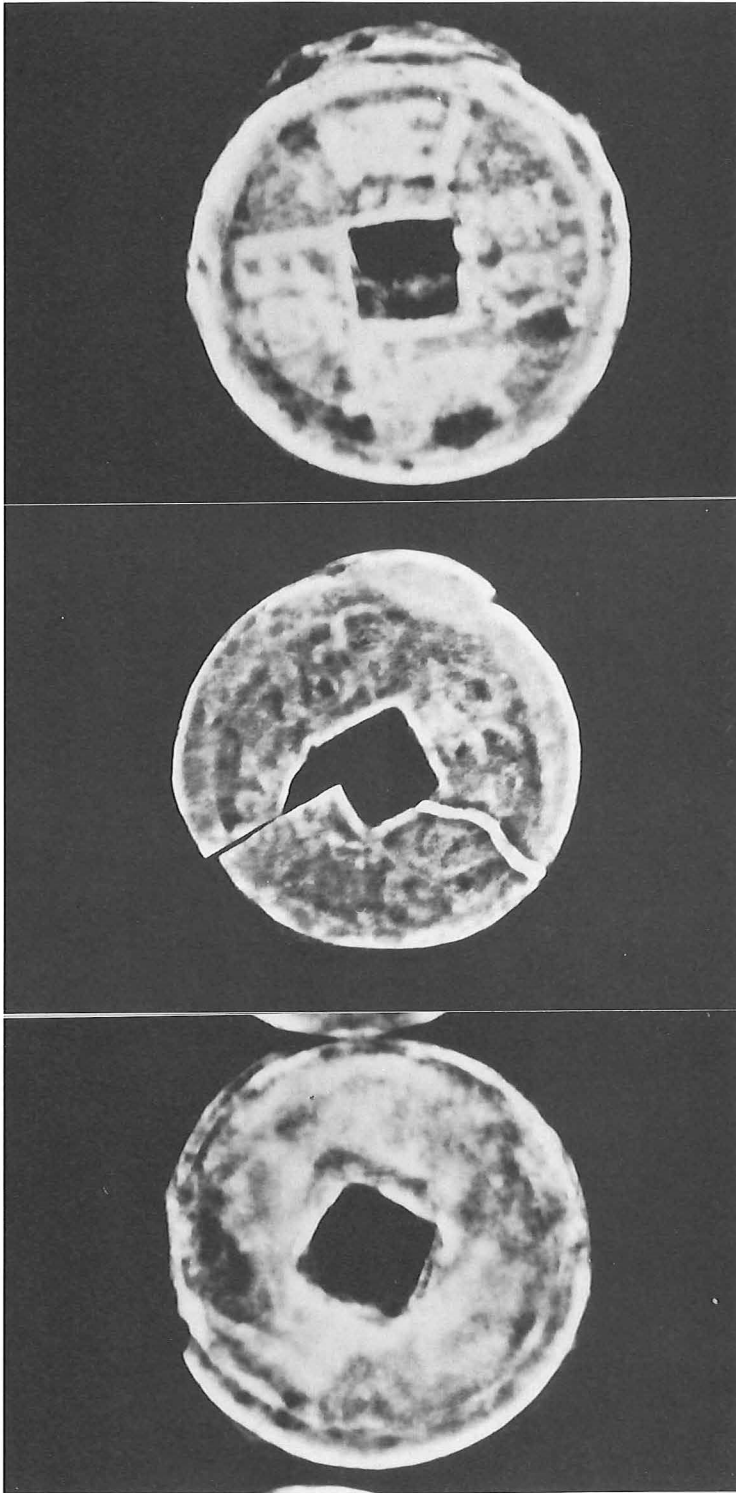




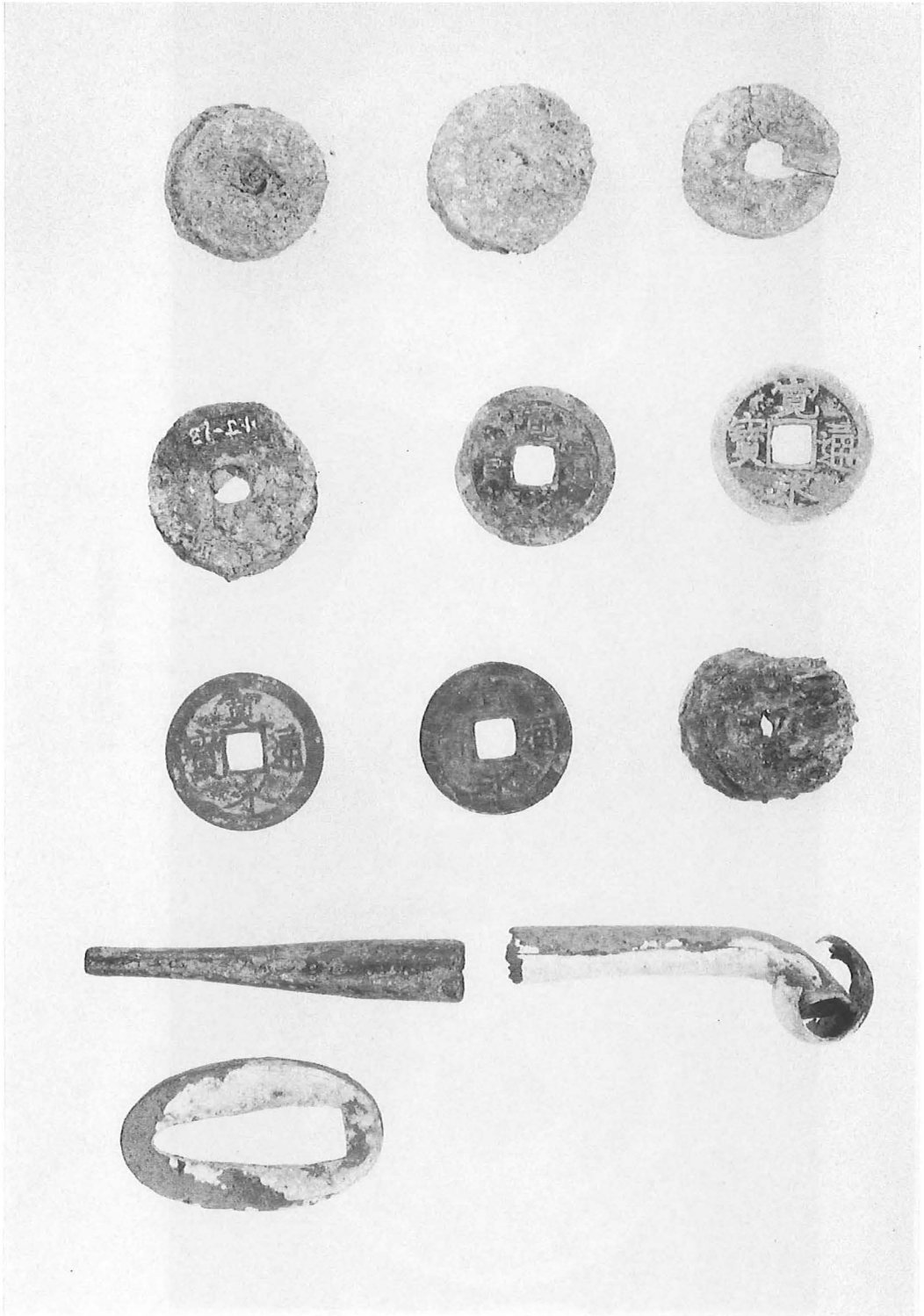
土錘・鉄かす⑬



大型石製品⑩



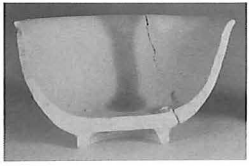
48 I 出土貨幣 X線撮影②



48 I 出土貨幣上部横 1 列、寛永通宝中部横 2 列、キセル、ハバキ



1



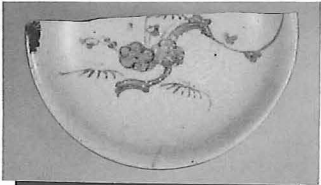
2



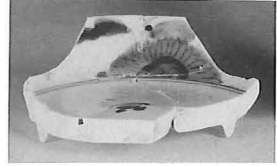
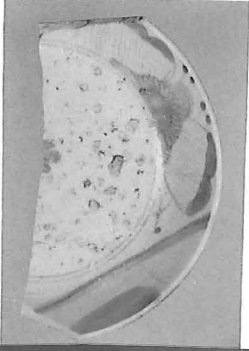
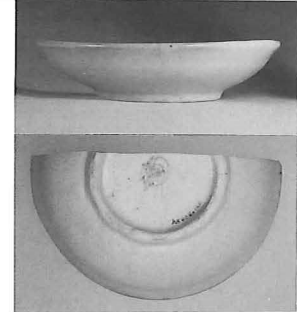
3



4



5

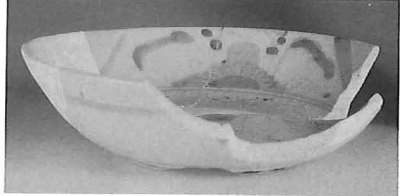


6



7

11



9

10



12

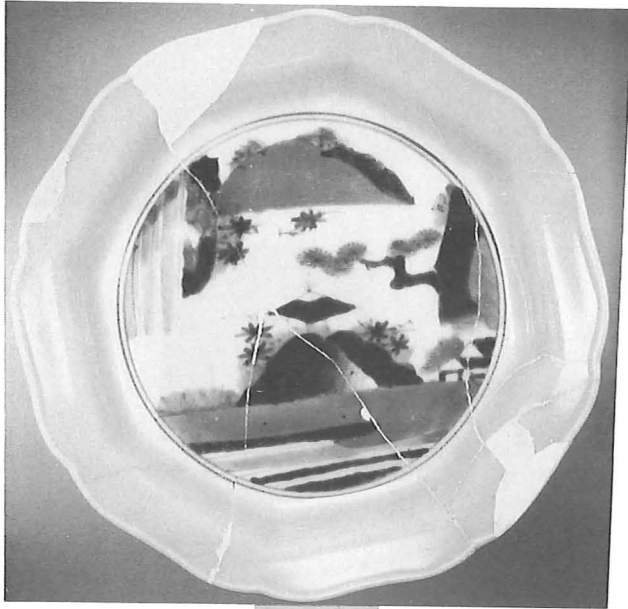


13



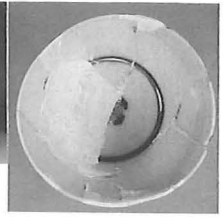
14

近世陶磁器① 1/3 14は1/6

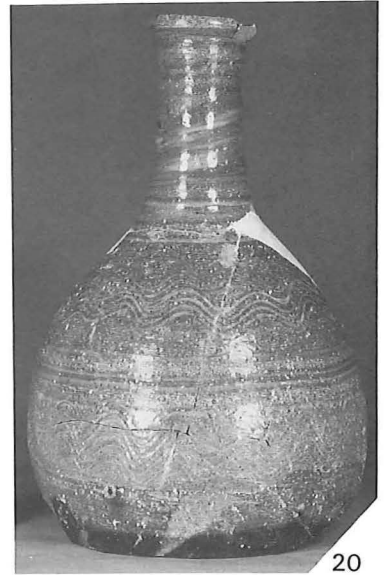


小菌城跡  
PL. 78

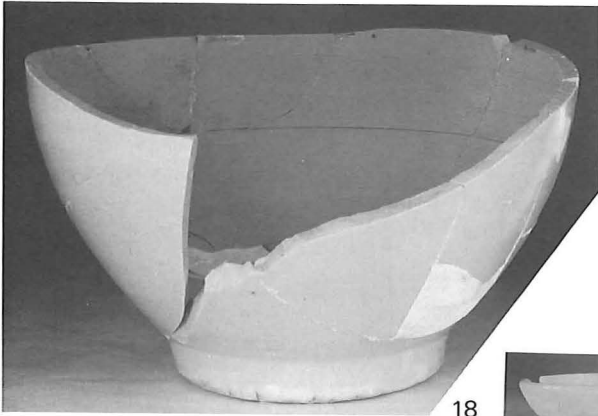
15



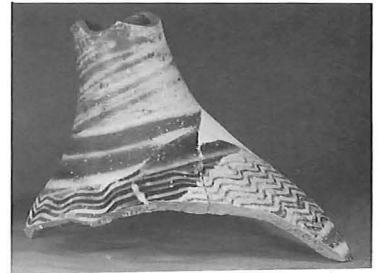
16



20



18



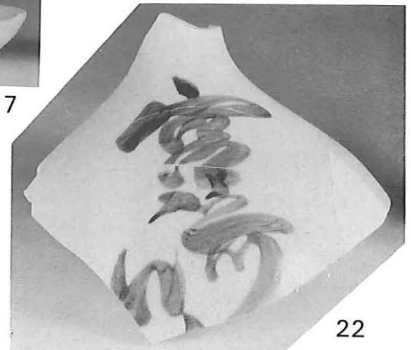
21



17



19



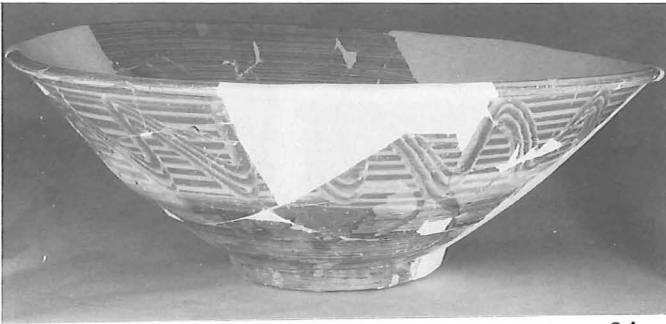
22



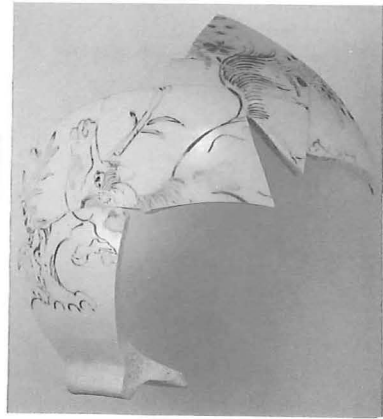
23



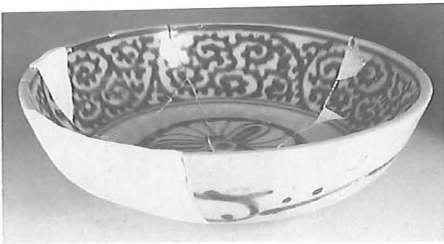
25



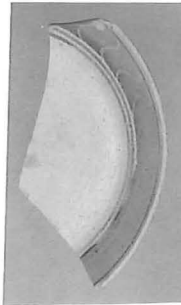
24



26



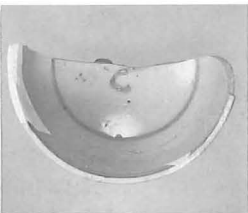
27



28



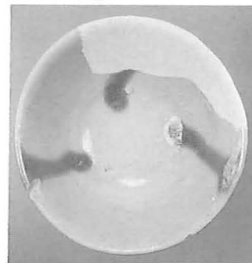
29



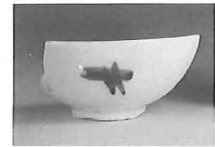
30



31



32



33



34

近世陶磁器③ 1/3 23, 24は1/6



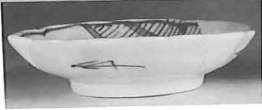
35



37



36



38



39



40



41



43



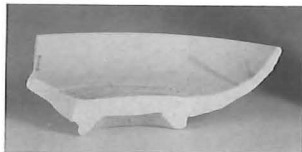
42



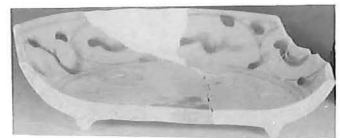
44



45



46



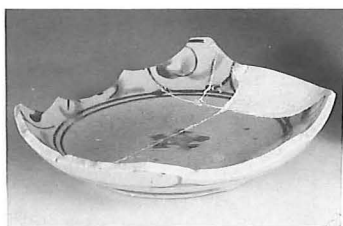
47

近世陶磁器④ 1/3 36は1/6 37は1/12





48



49



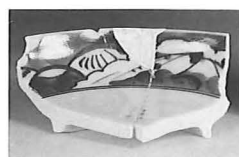
50



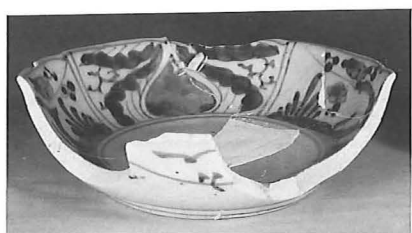
51



52



53



54



55



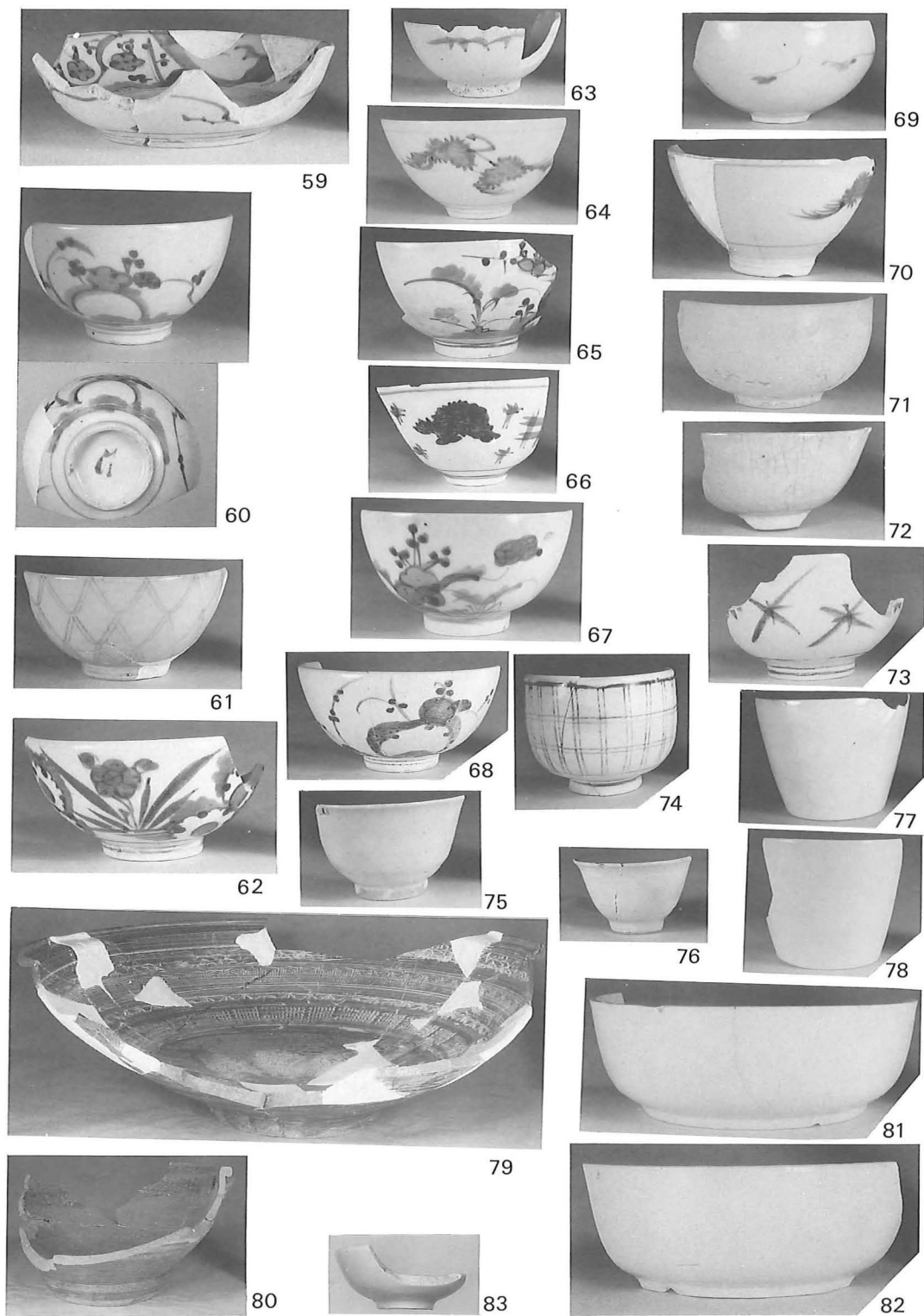
56



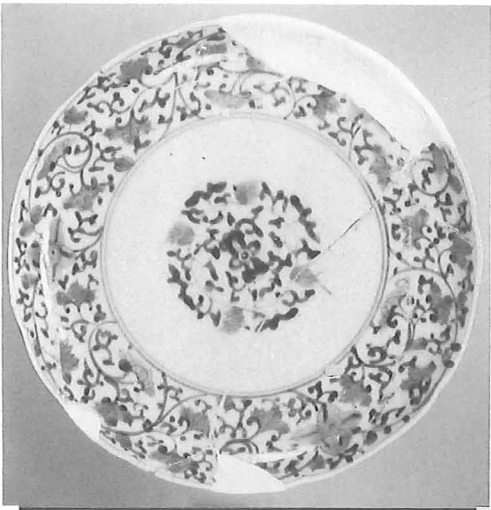
57



58



近世陶磁器⑥ 1/3 79, 80は1/6



85



86



88



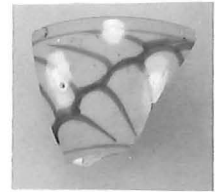
87



84



89



90



91



92



93



94



95



96



97



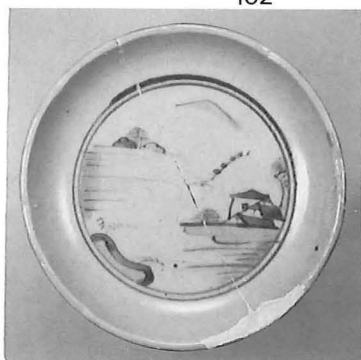
98



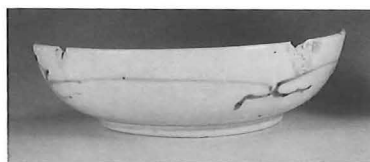
99



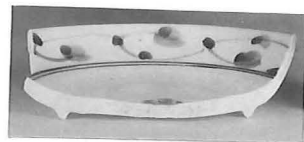
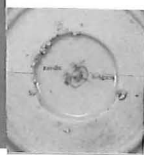
102



103



104



105



106



108



110



112



113



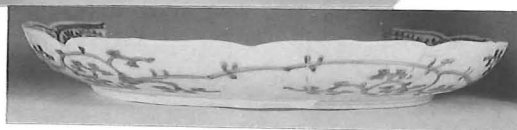
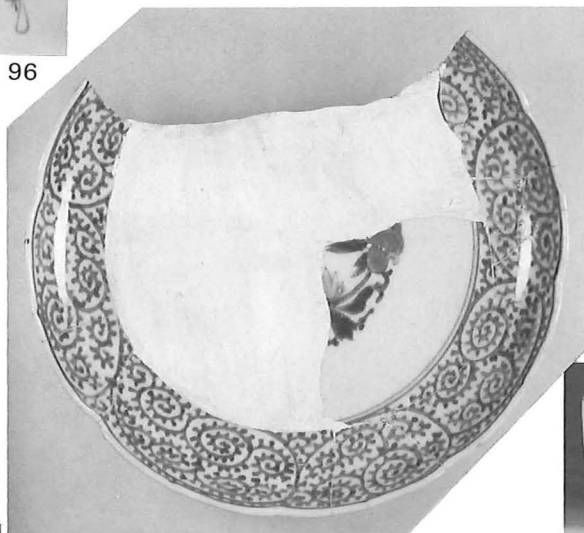
107



109



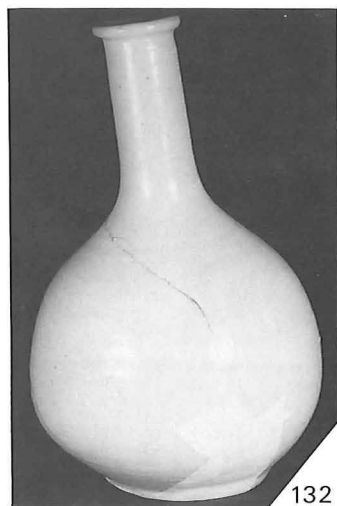
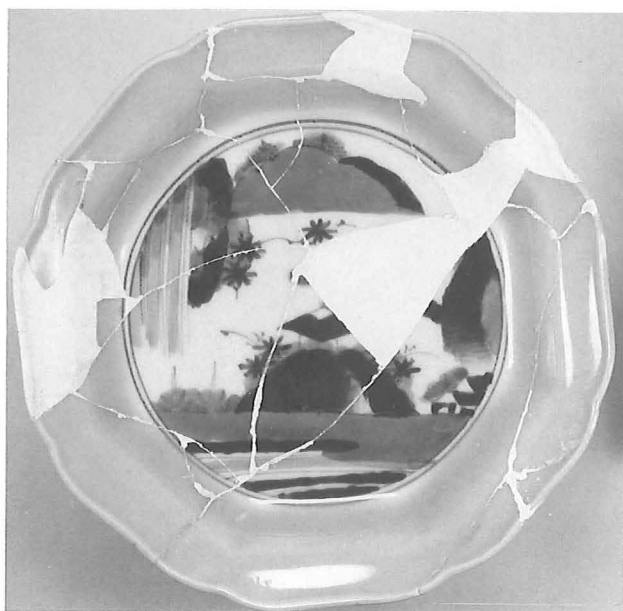
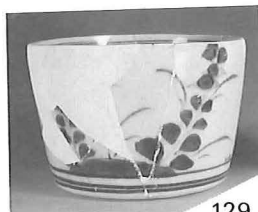
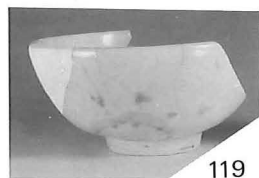
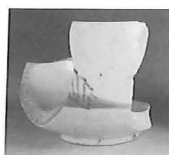
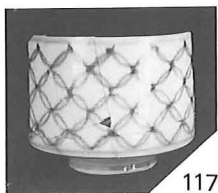
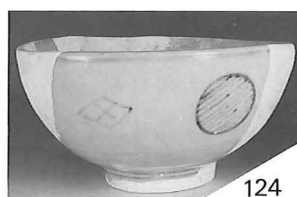
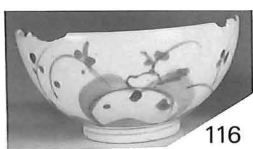
111



100



101





133



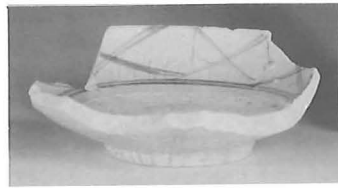
134



135



136



141



142



137



138



139



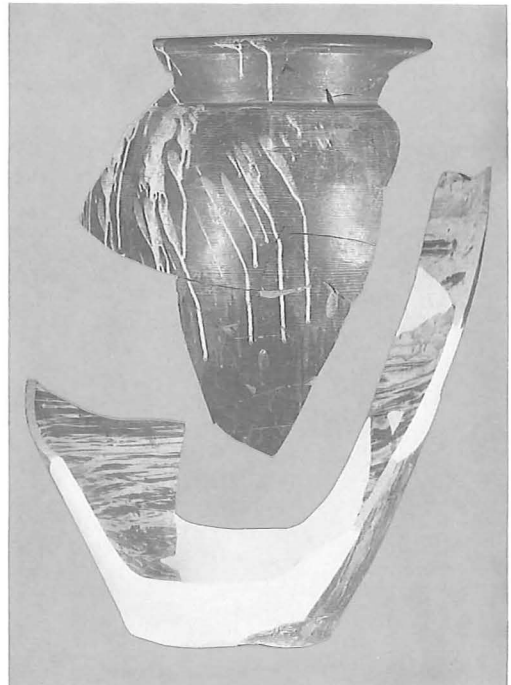
140



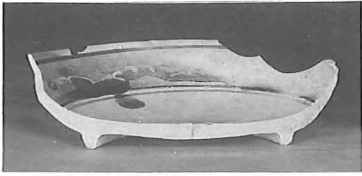
143



144



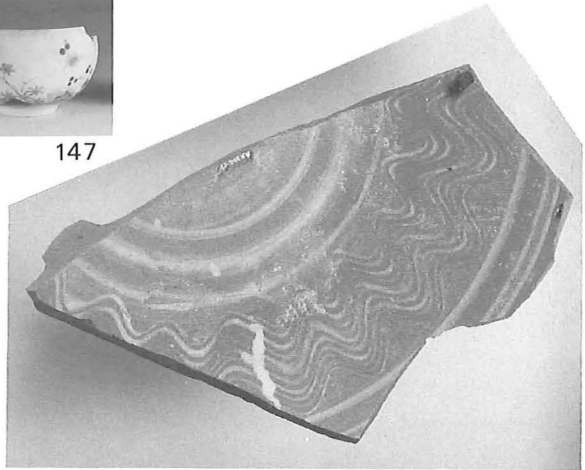
145



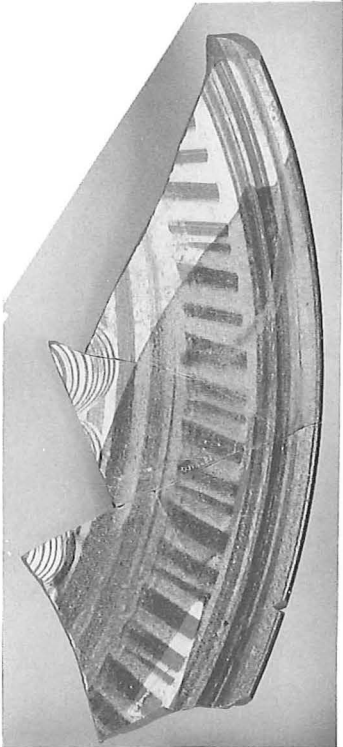
146



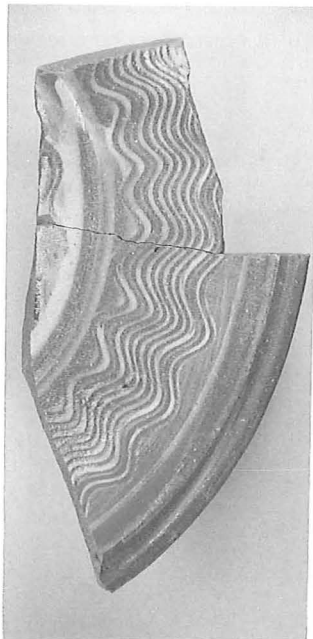
147



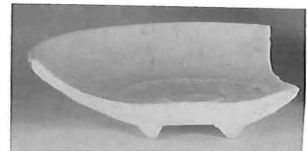
148



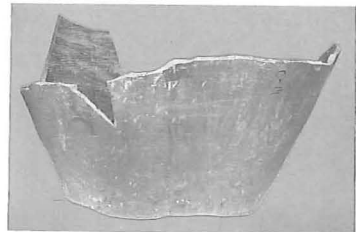
149



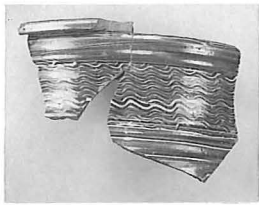
150



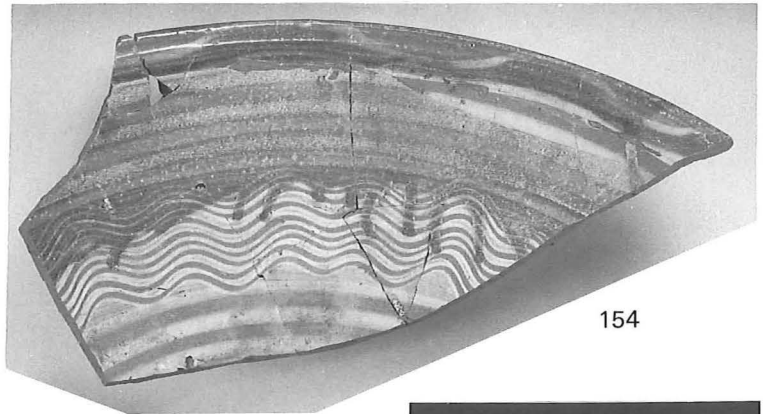
151



152



153



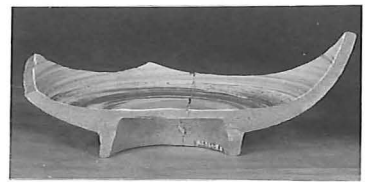
154



157



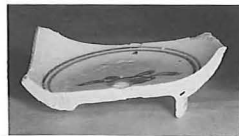
155



156



160



158



161



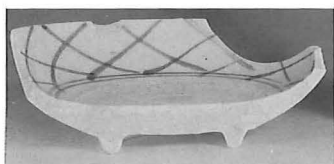
159



163



164

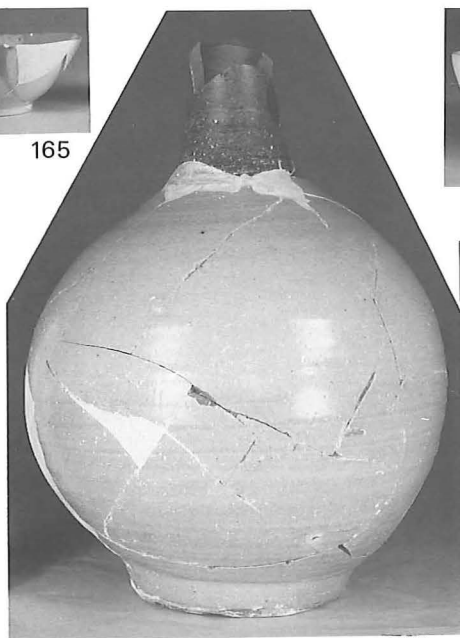


162





165



166



167



169



168



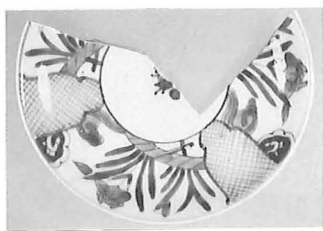
170



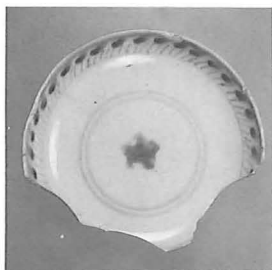
171



172



173



174



175



176



177



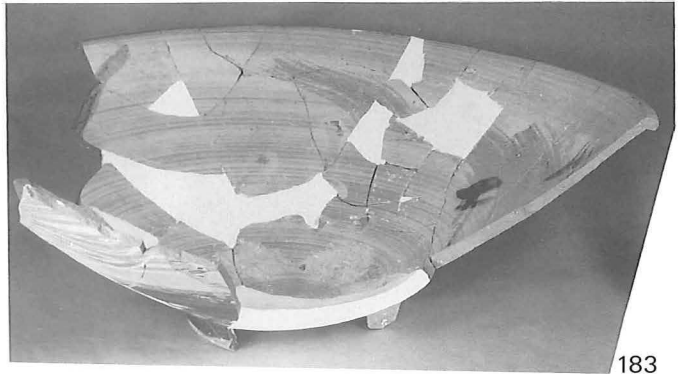
178



179



180



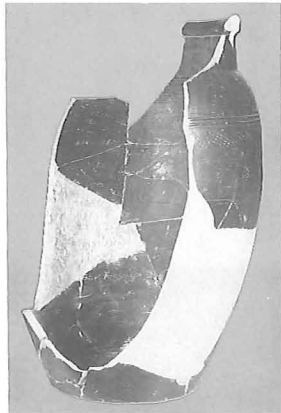
183



181



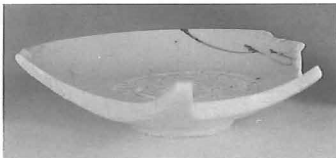
182



184



185



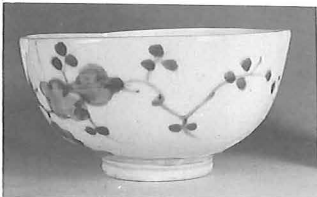
186



187



188



189



191



193



190



192

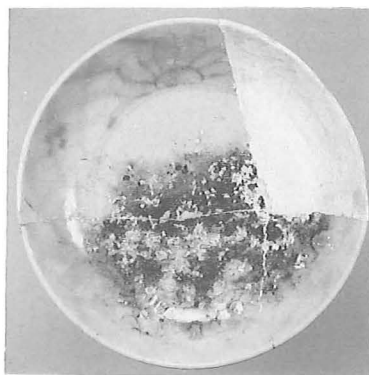


194

近世陶磁器④ 1/3 183, 185は1/6 184は1/12



195



197



196



198



199



200



201



203



205



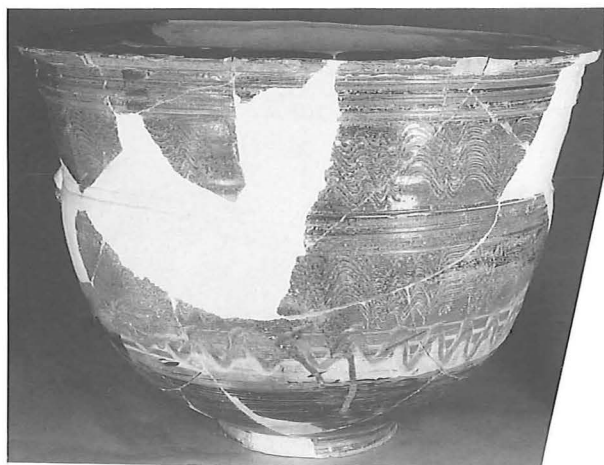
202



204



206



208



207



213



209



210



211

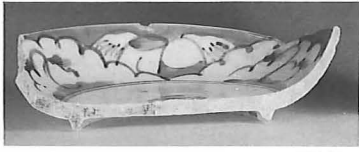


212

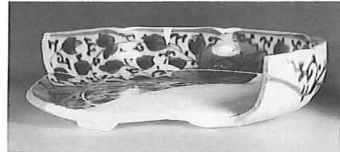


214

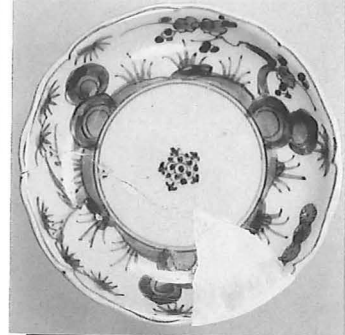
近世陶磁器⑩ 1/3 207, 208, 209, 210, 212は1/6



215



216



217



219



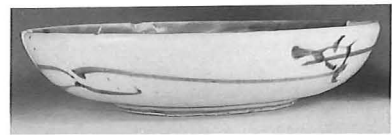
221



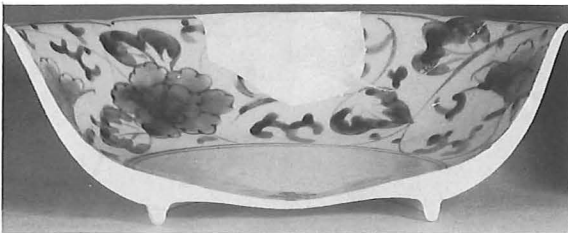
220



222



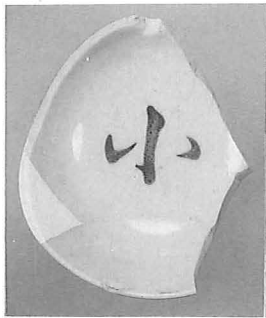
218



223



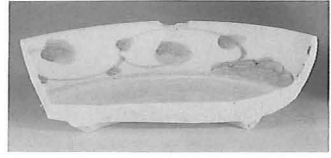
224



225



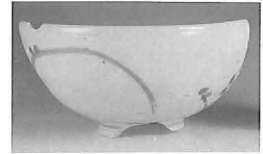
226



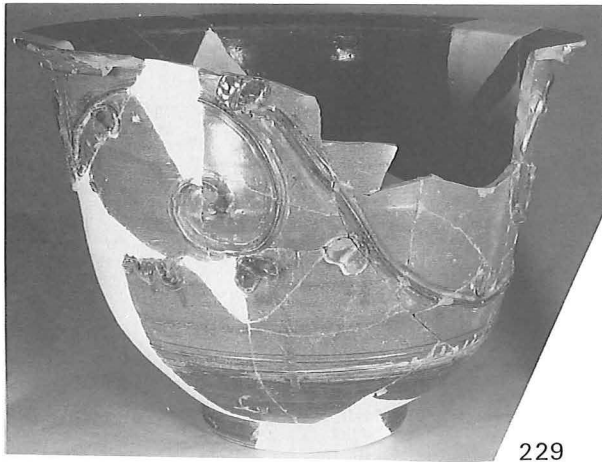
228



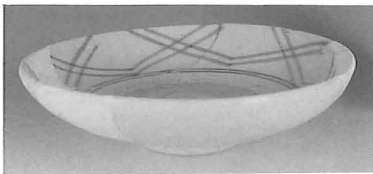
227



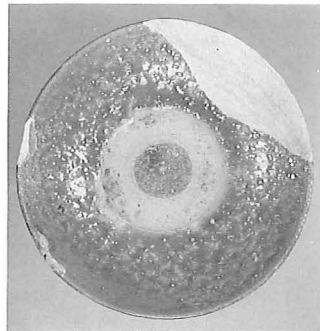
230



229



231



232



234



237



235



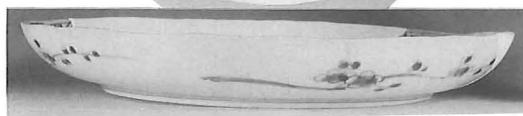
236



238



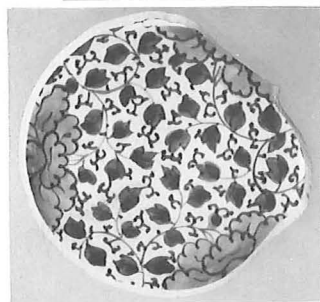
239



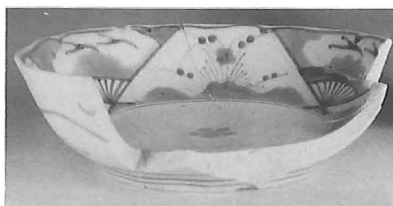
240



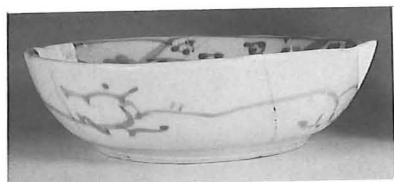
241



243



244



242



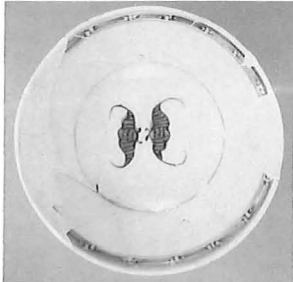
245



246



247



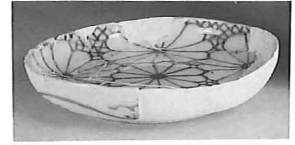
248



249



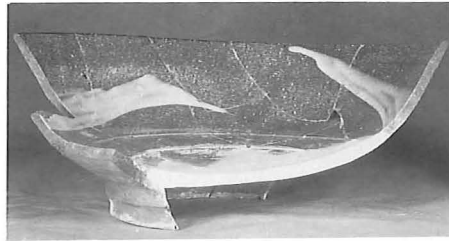
250



252



253



251



254



255



256

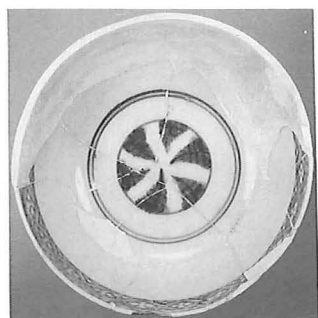


257





258



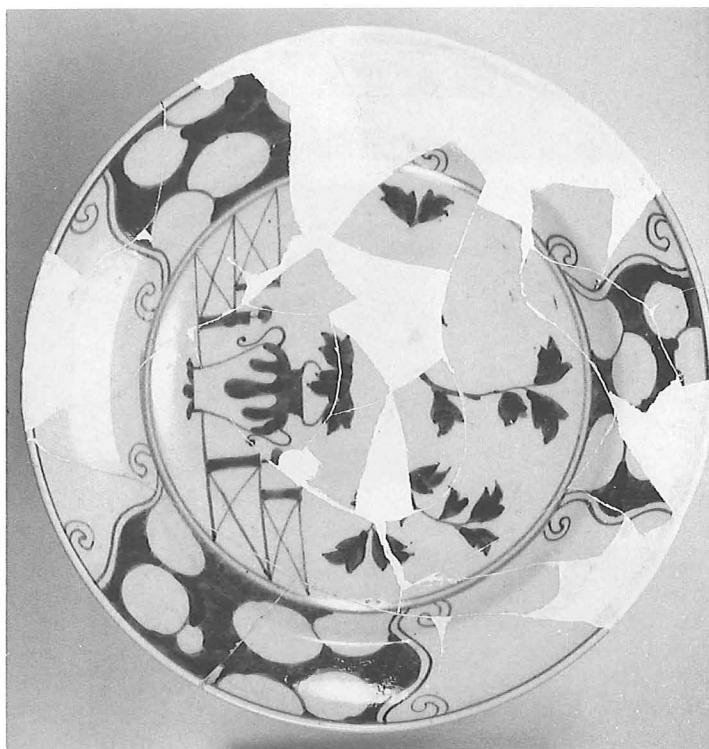
259



260



261



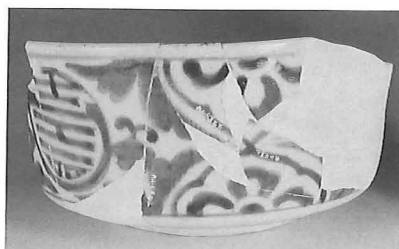
262



263



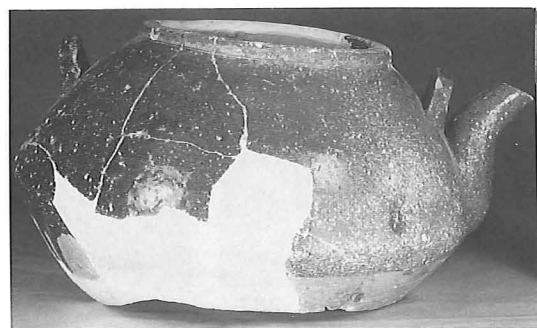
264



266



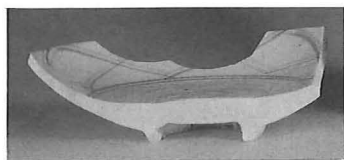
267



265



268



269



271



270



272



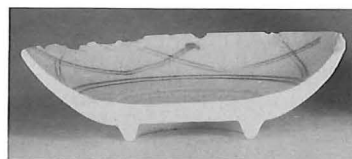
273



274



275



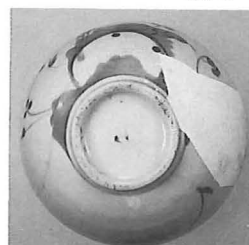
276



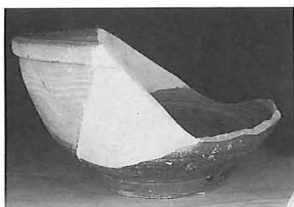
279



281



277



278



280



282



283



284



286



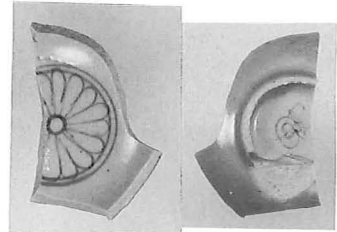
287



285



289



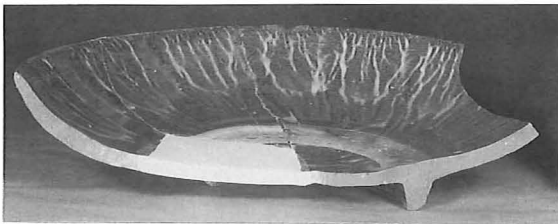
291



290



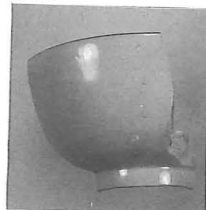
292



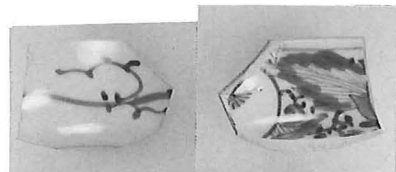
288



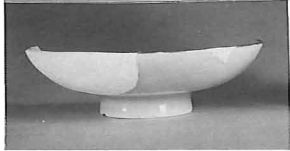
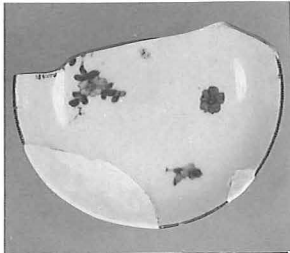
293



294



295



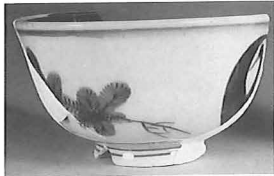
296



302



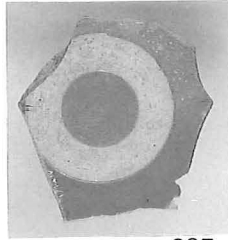
303



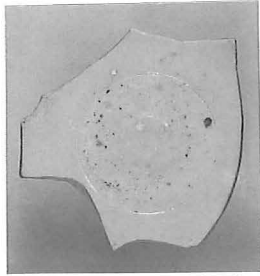
304



310



297



299



305



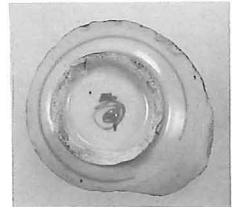
306



298



300



301



307



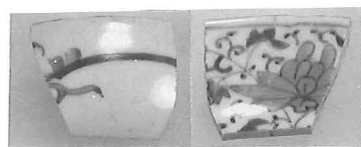
308



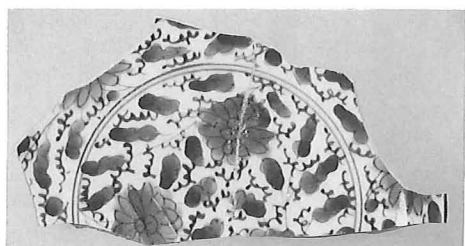
309



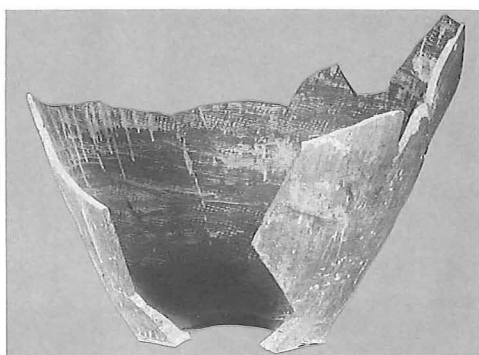
311



312



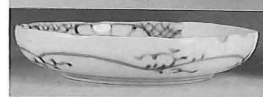
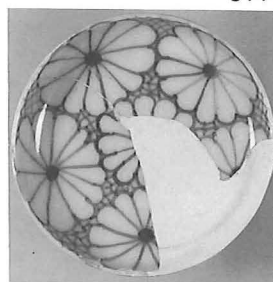
313



314



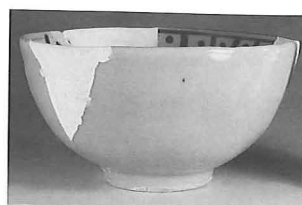
316



317



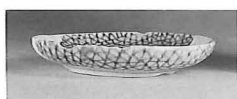
315



321



318



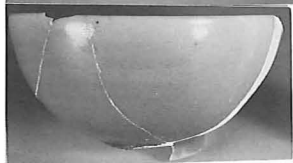
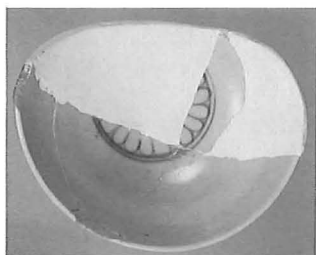
319



320



322



323



324



325



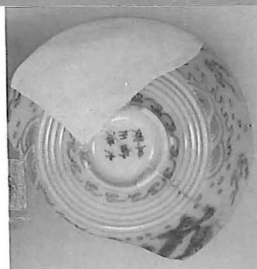
326



327



328



329



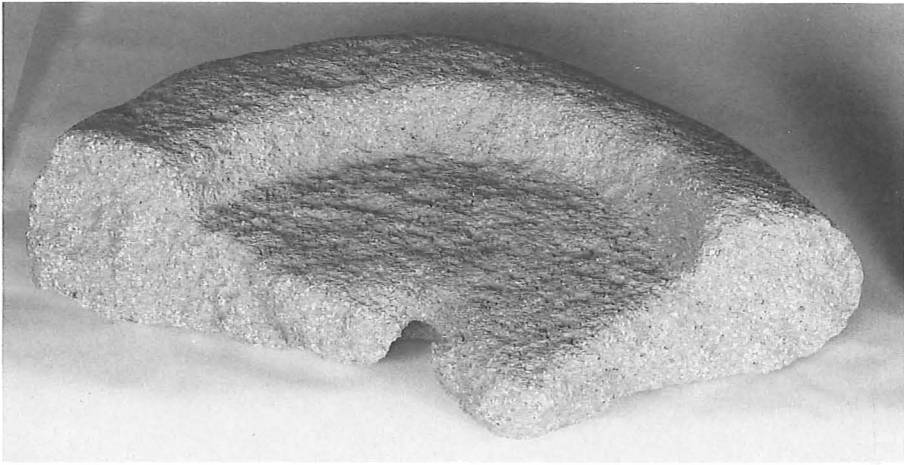
330



332



331



1



2

近世の石臼 1/3



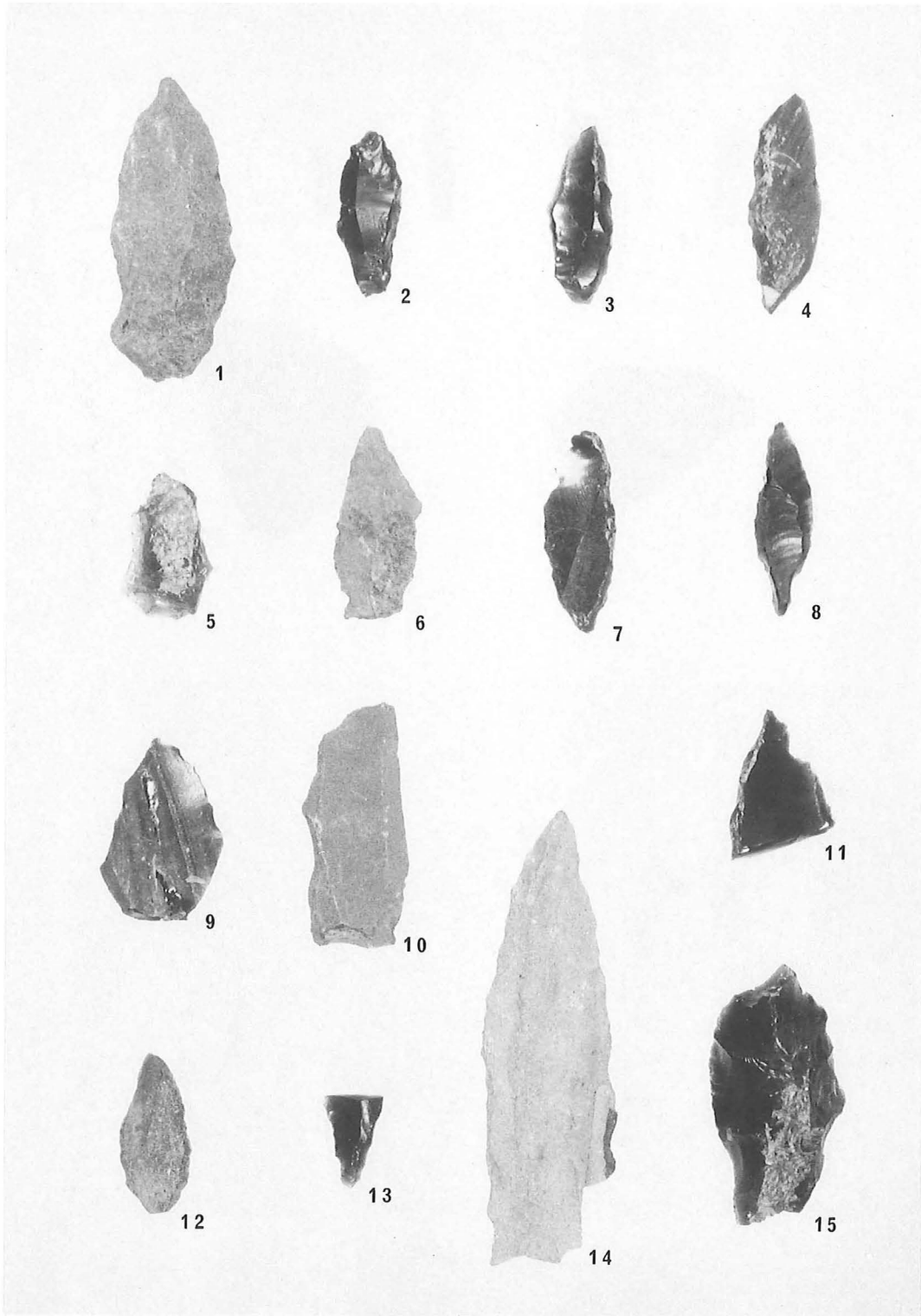
熊本県境家（文政13年／1830 旧所在玉名郡玉東町，現菊水町風土記の丘）



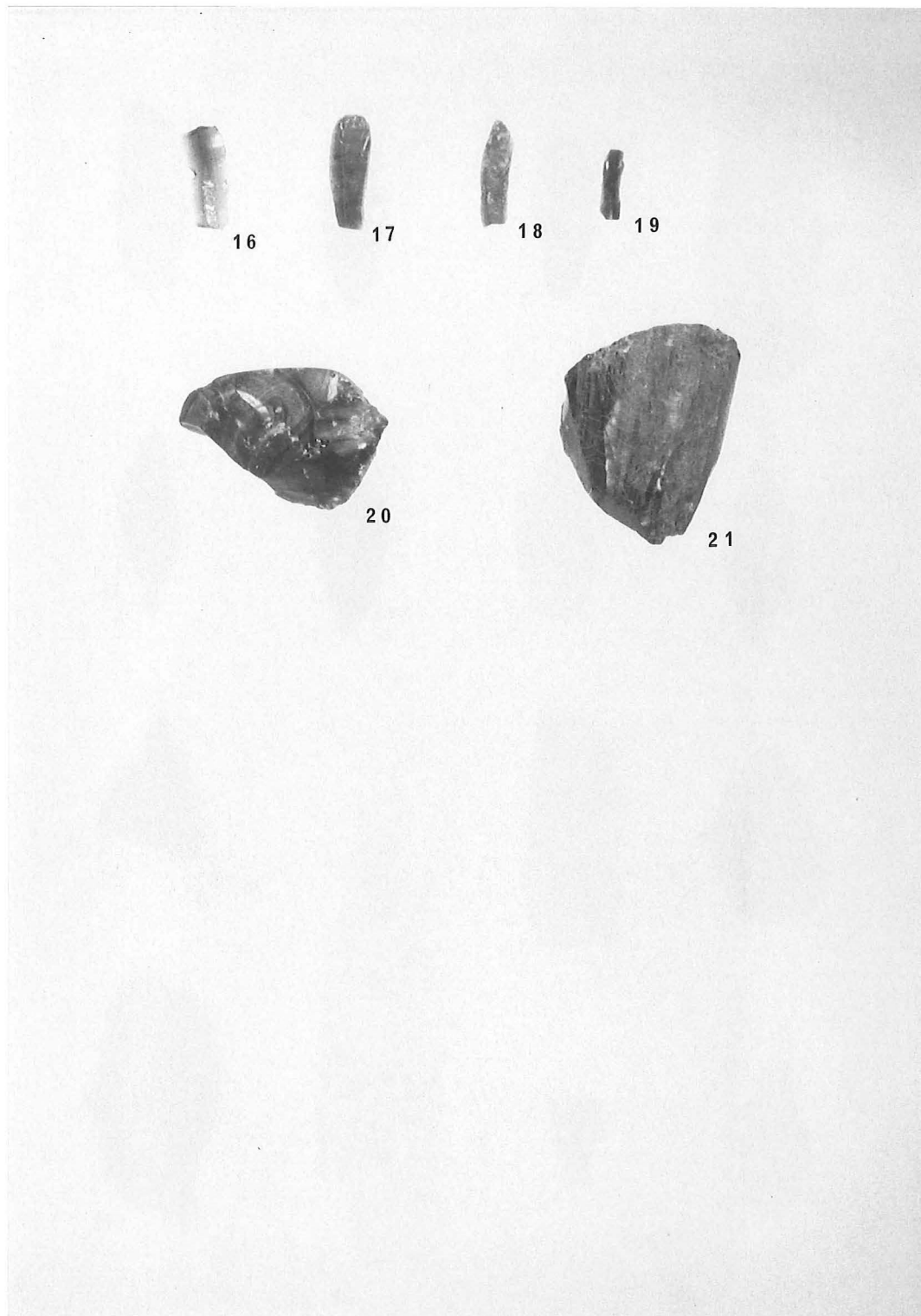
同上基礎部分近接写真

近世の民家

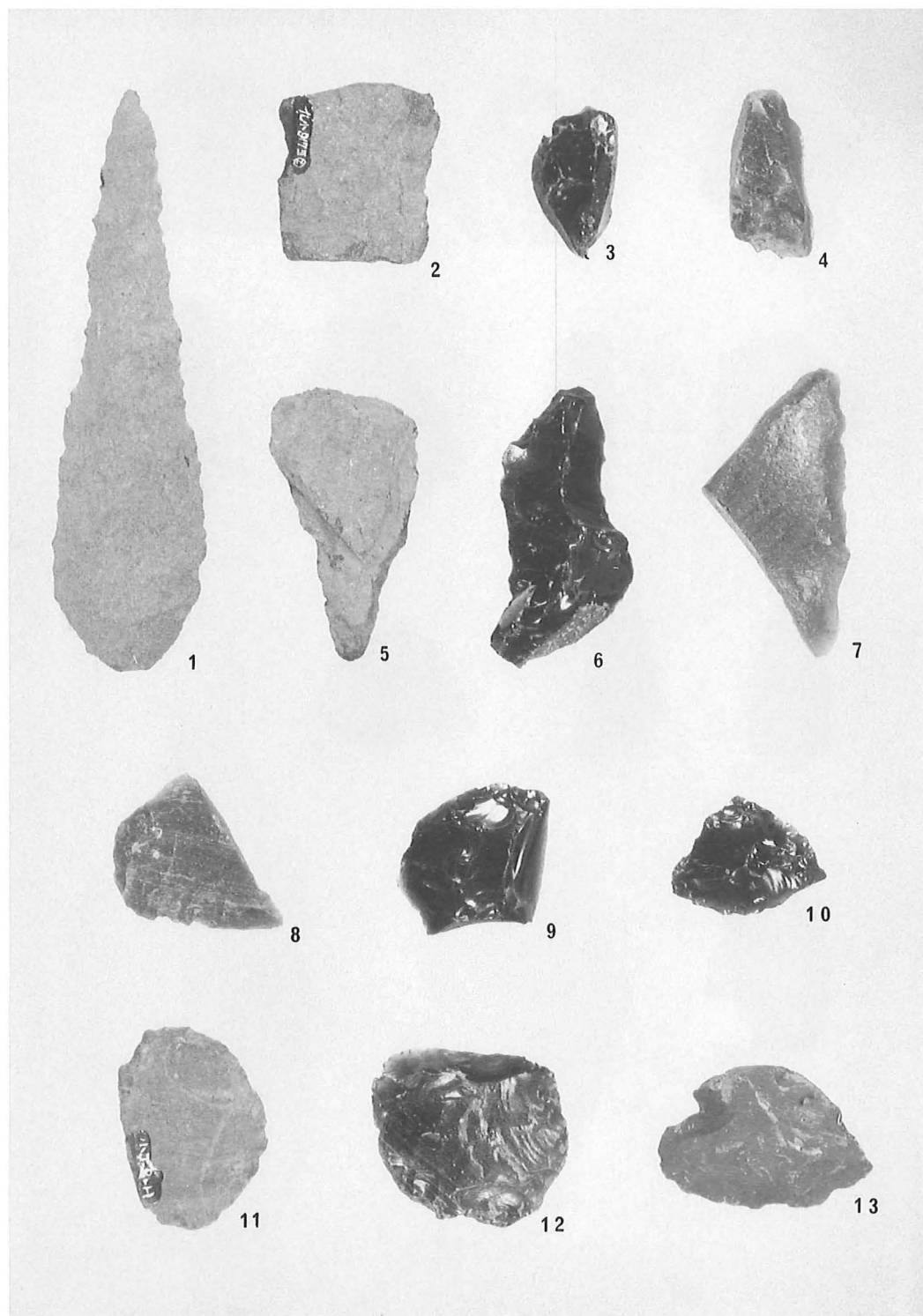




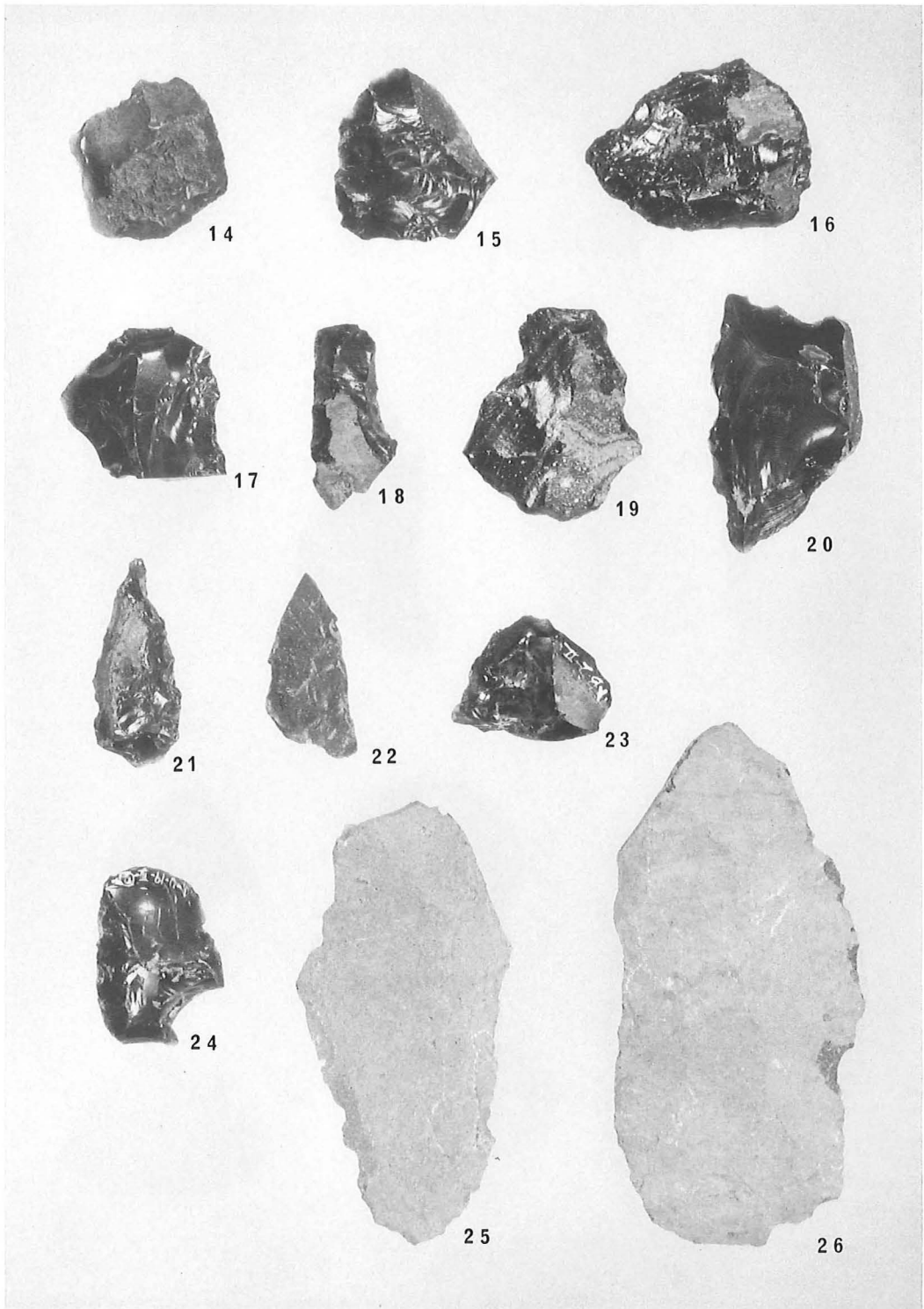
旧石器時代の石器① (1/1)



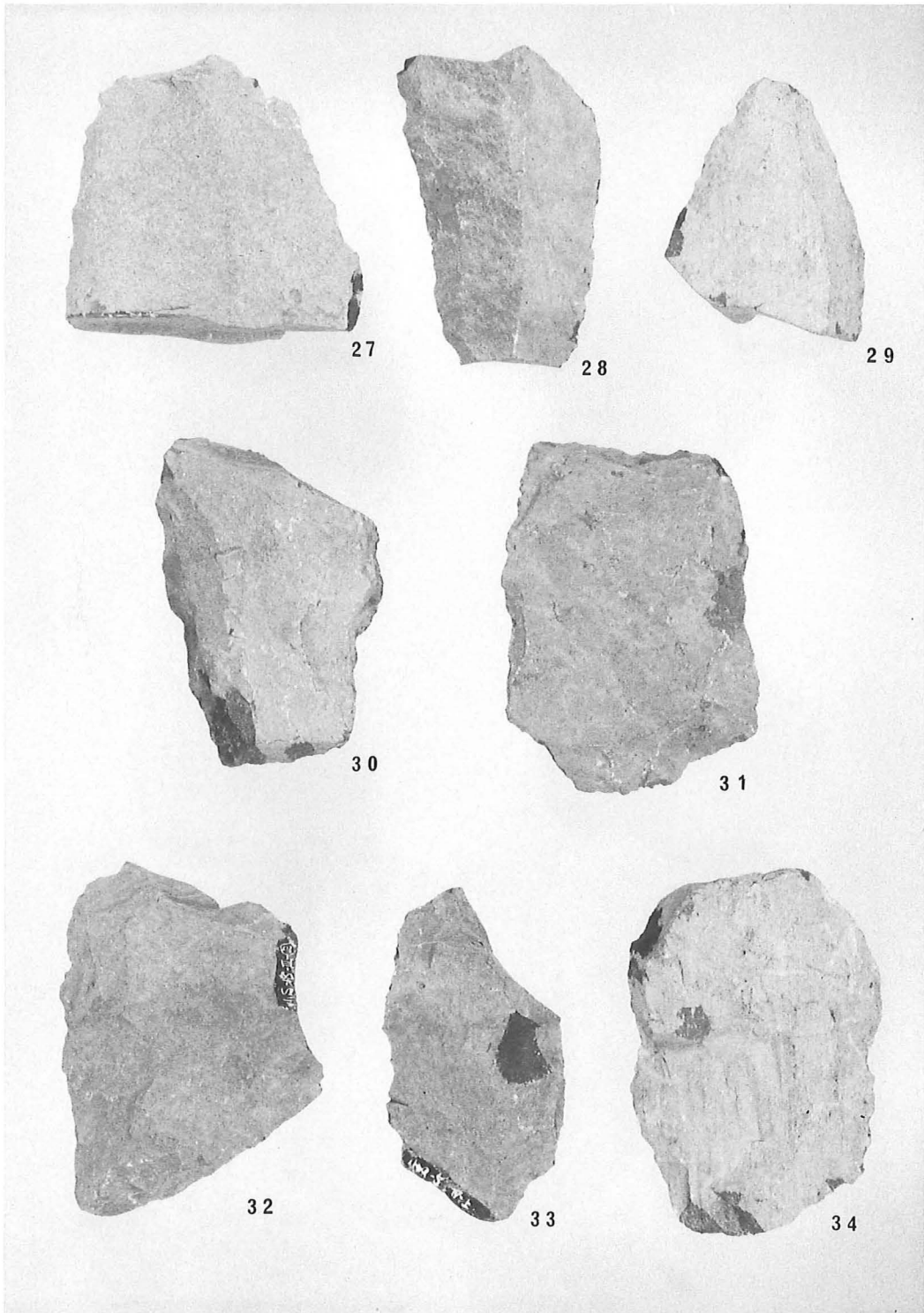
旧石器時代の石器② (1/1)



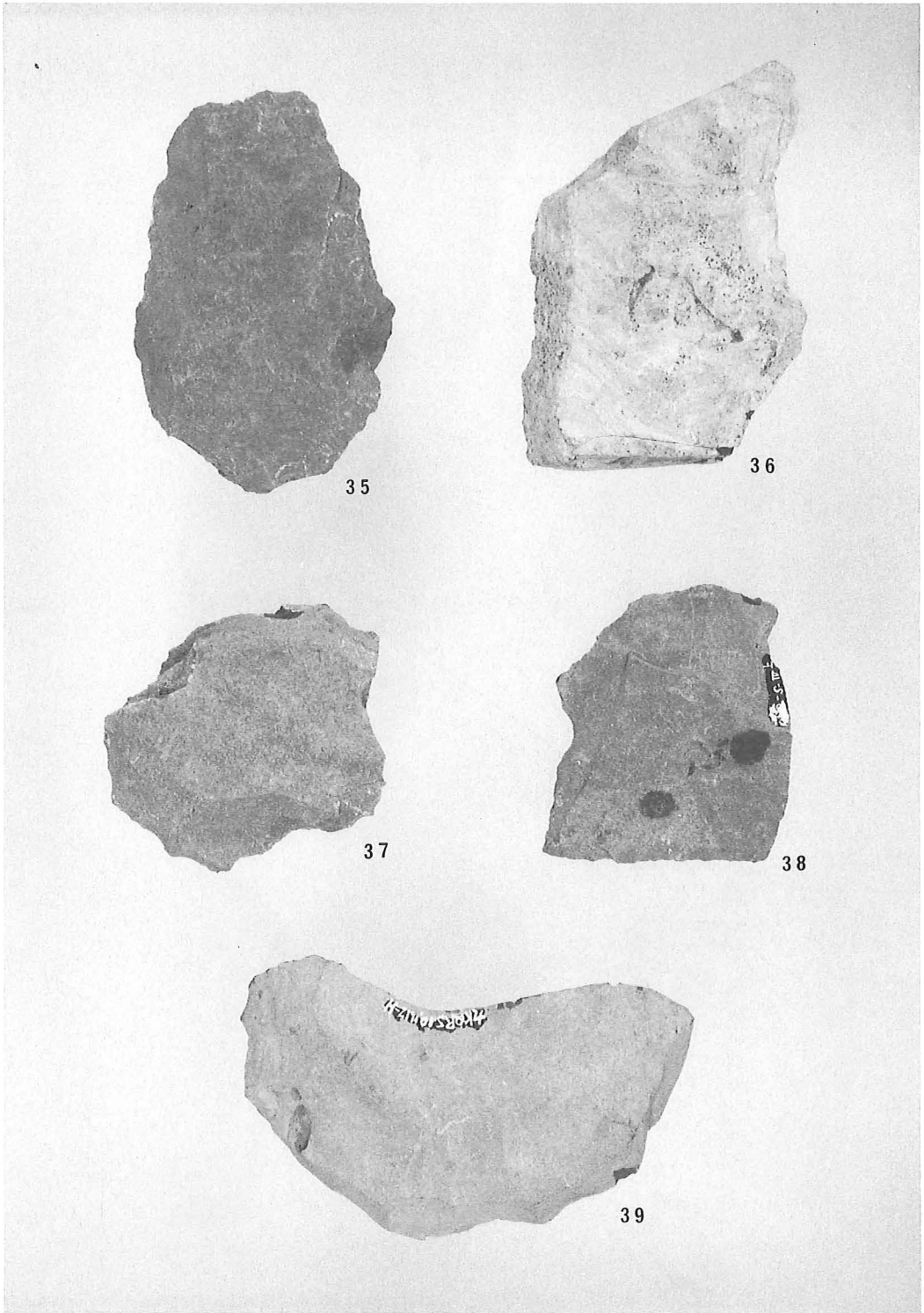
縄文時代の石器① (1/1)



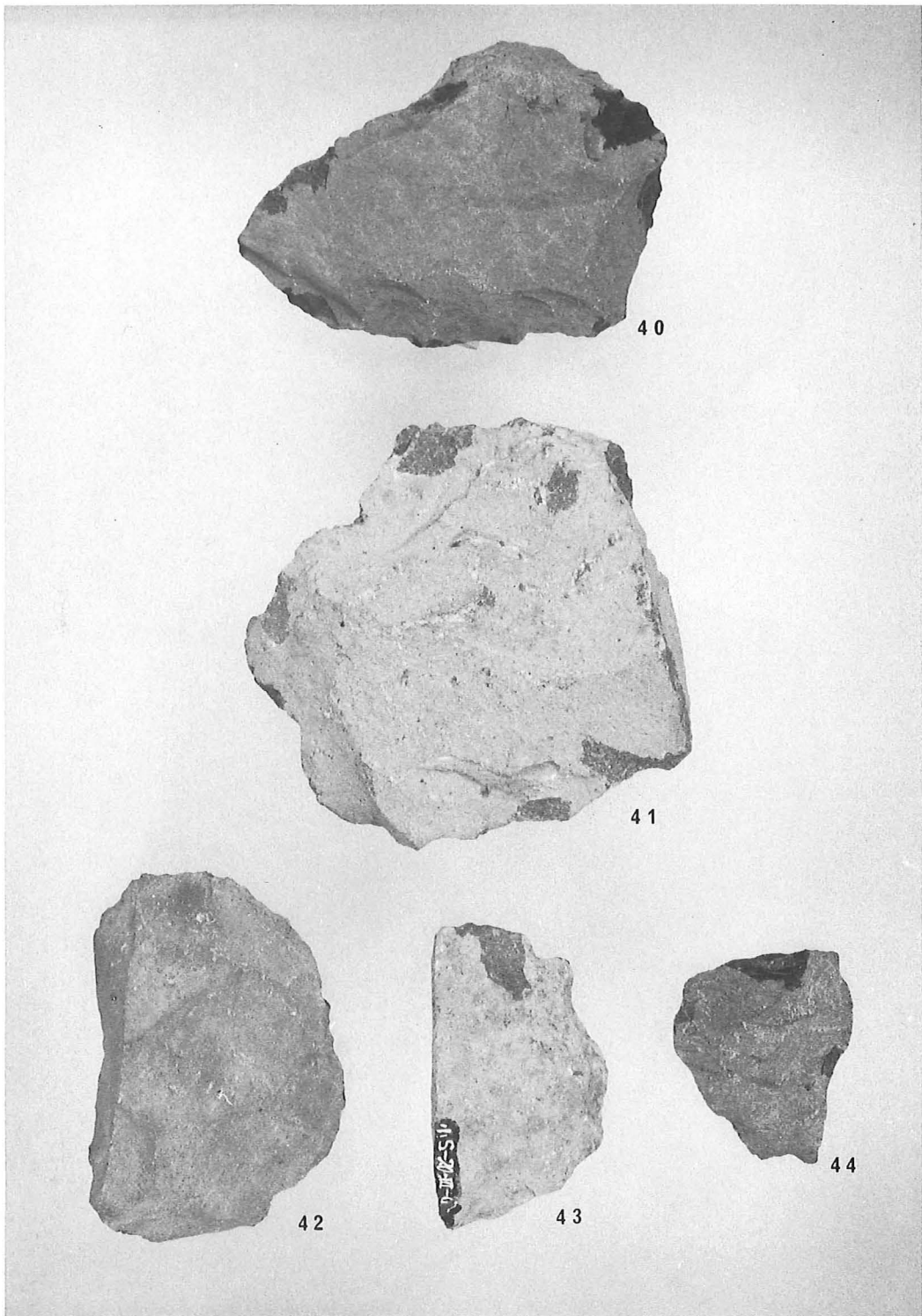
縄文時代の石器② (1/1)



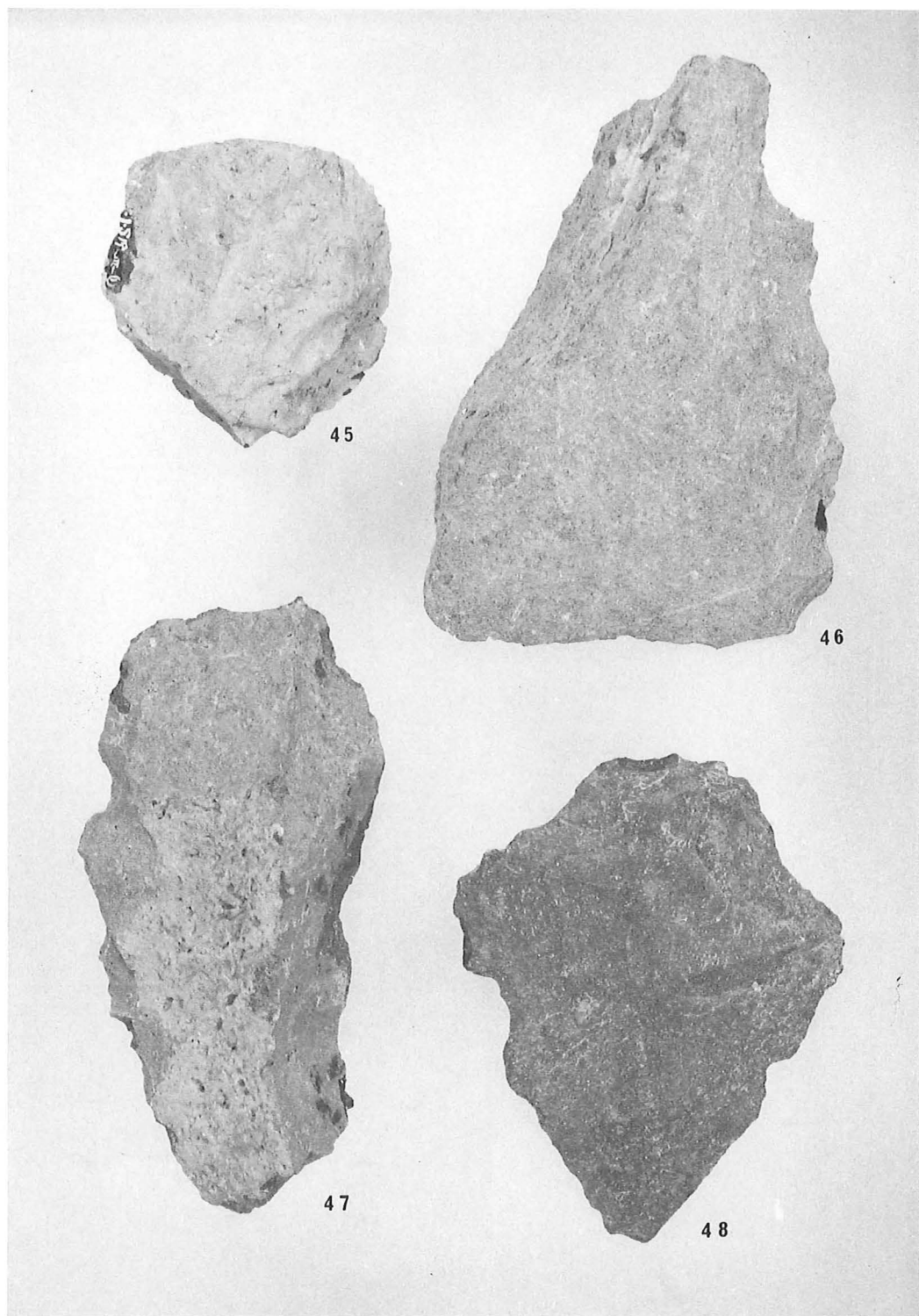
縄文時代の石器③ (1/1)



縄文時代の石器④ (1/1)

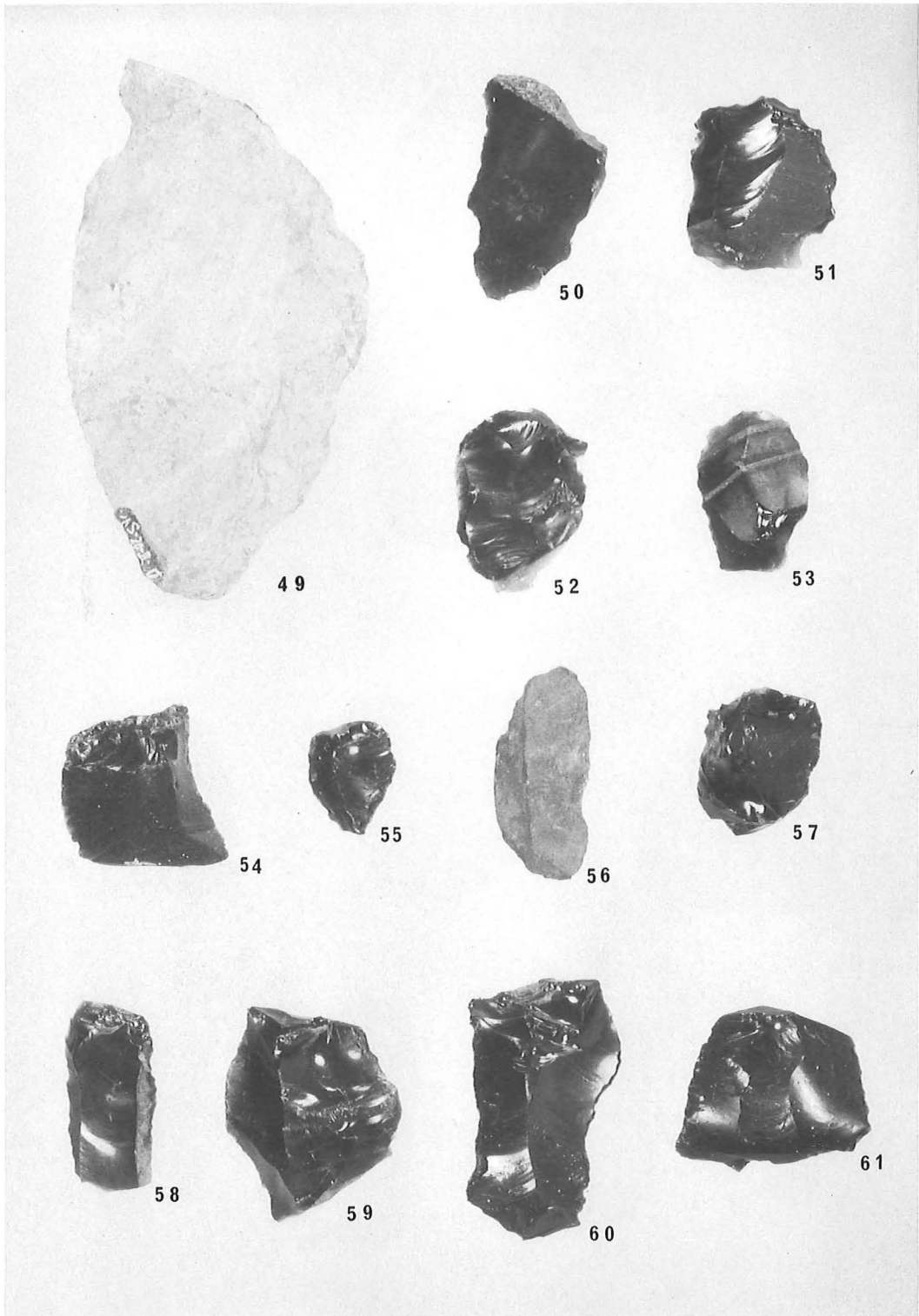


縄文時代の石器⑤ (1/1)

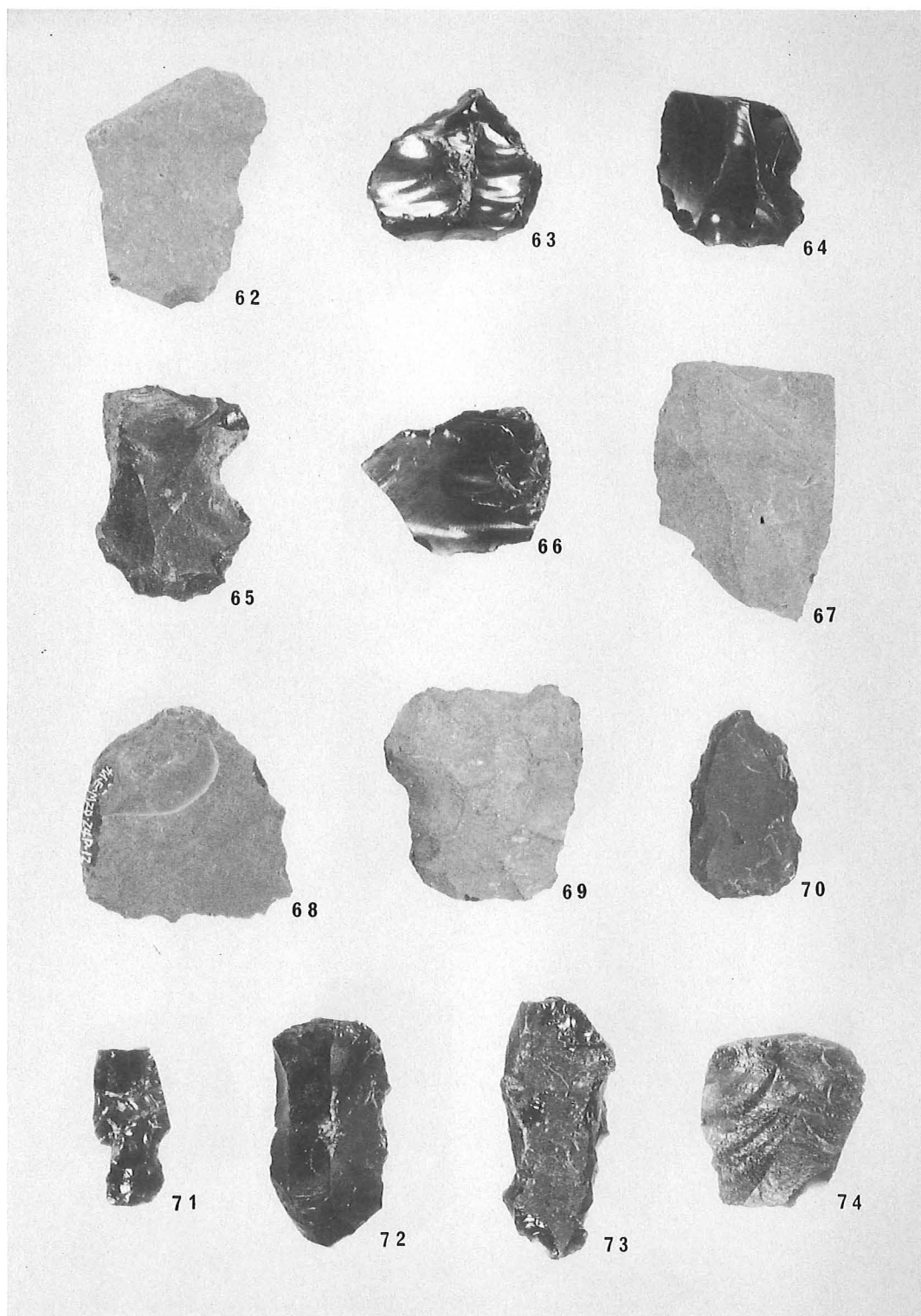


縄文時代の石器⑥ (1/1)

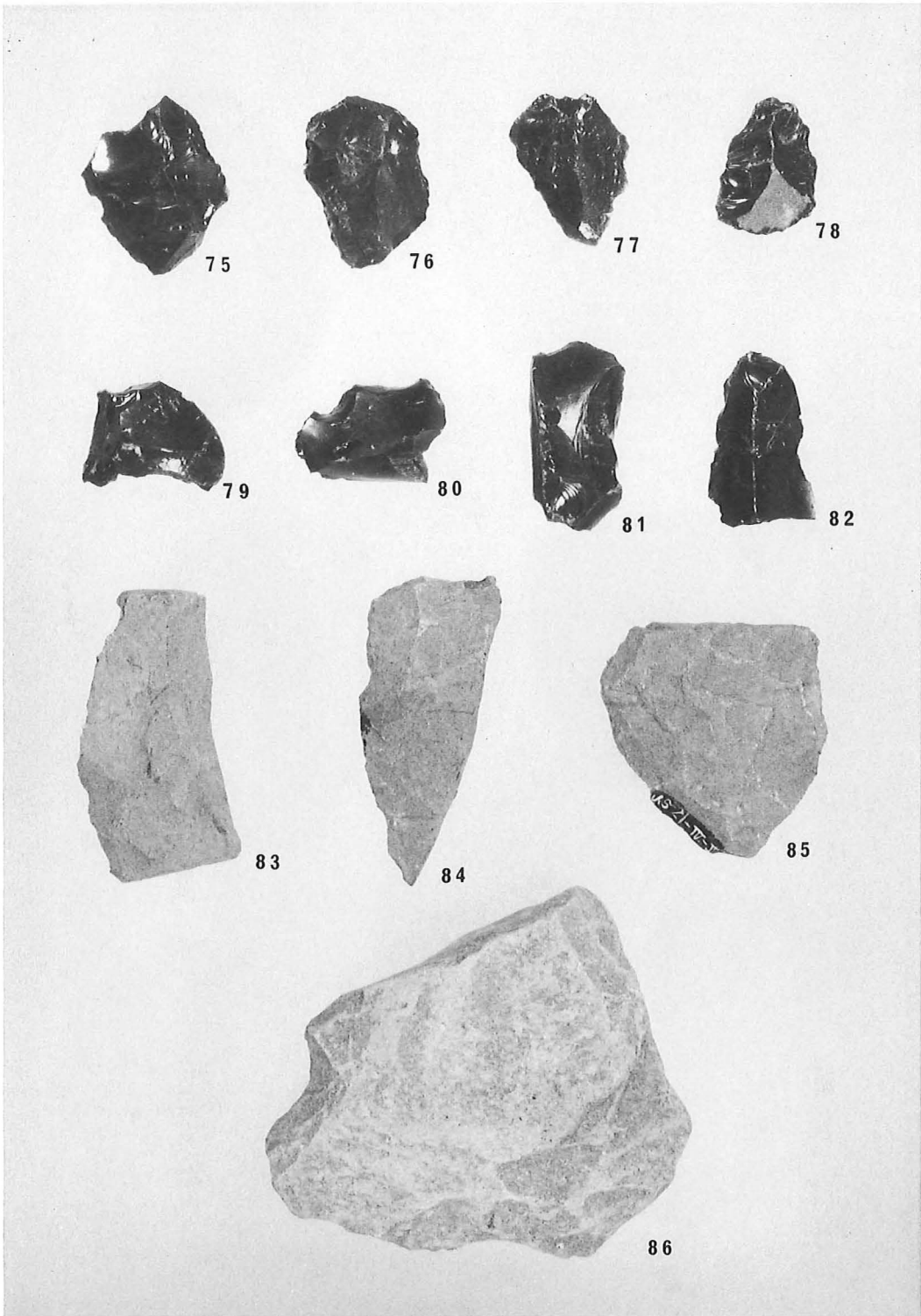




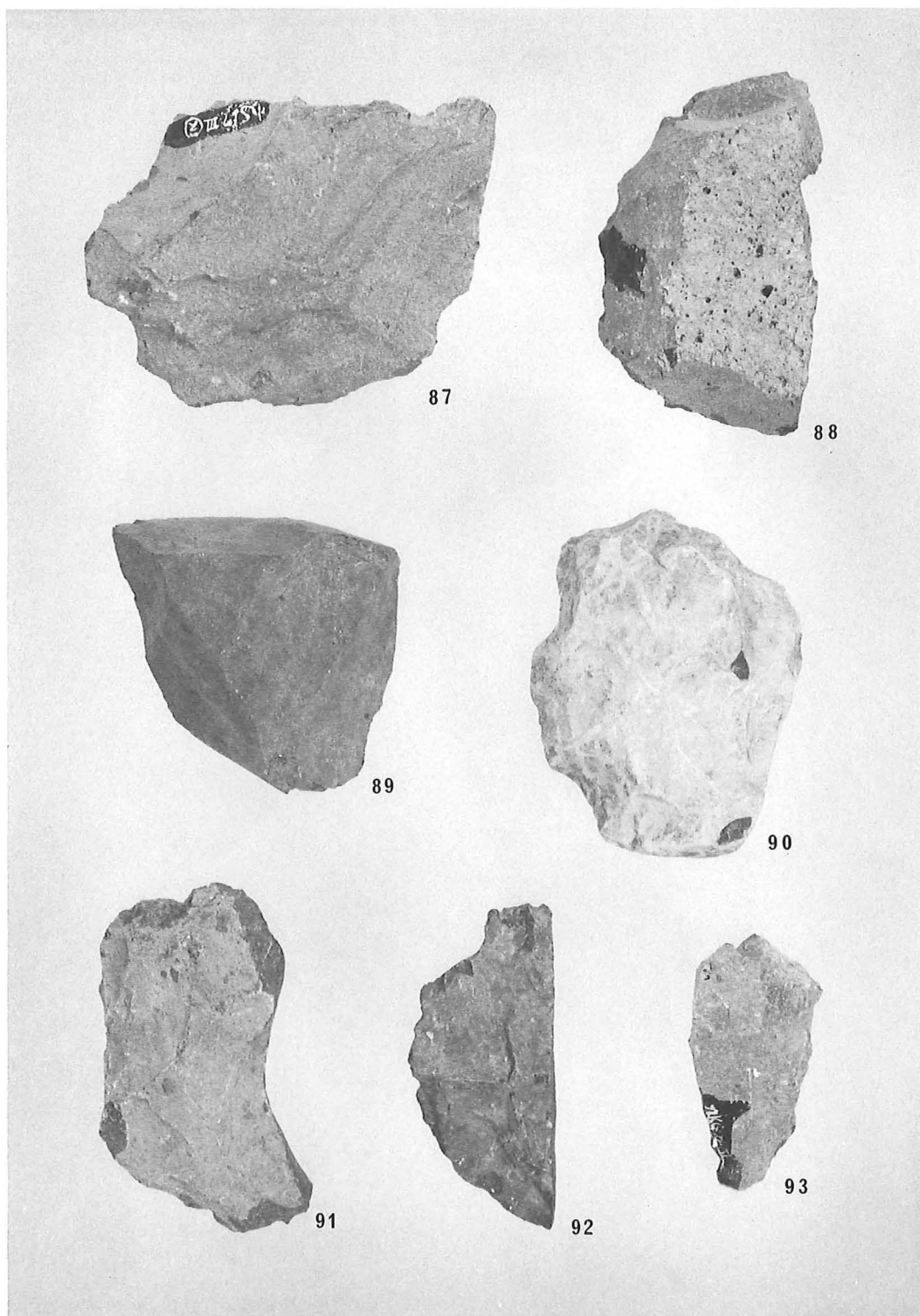
縄文時代の石器⑦ (1/1)



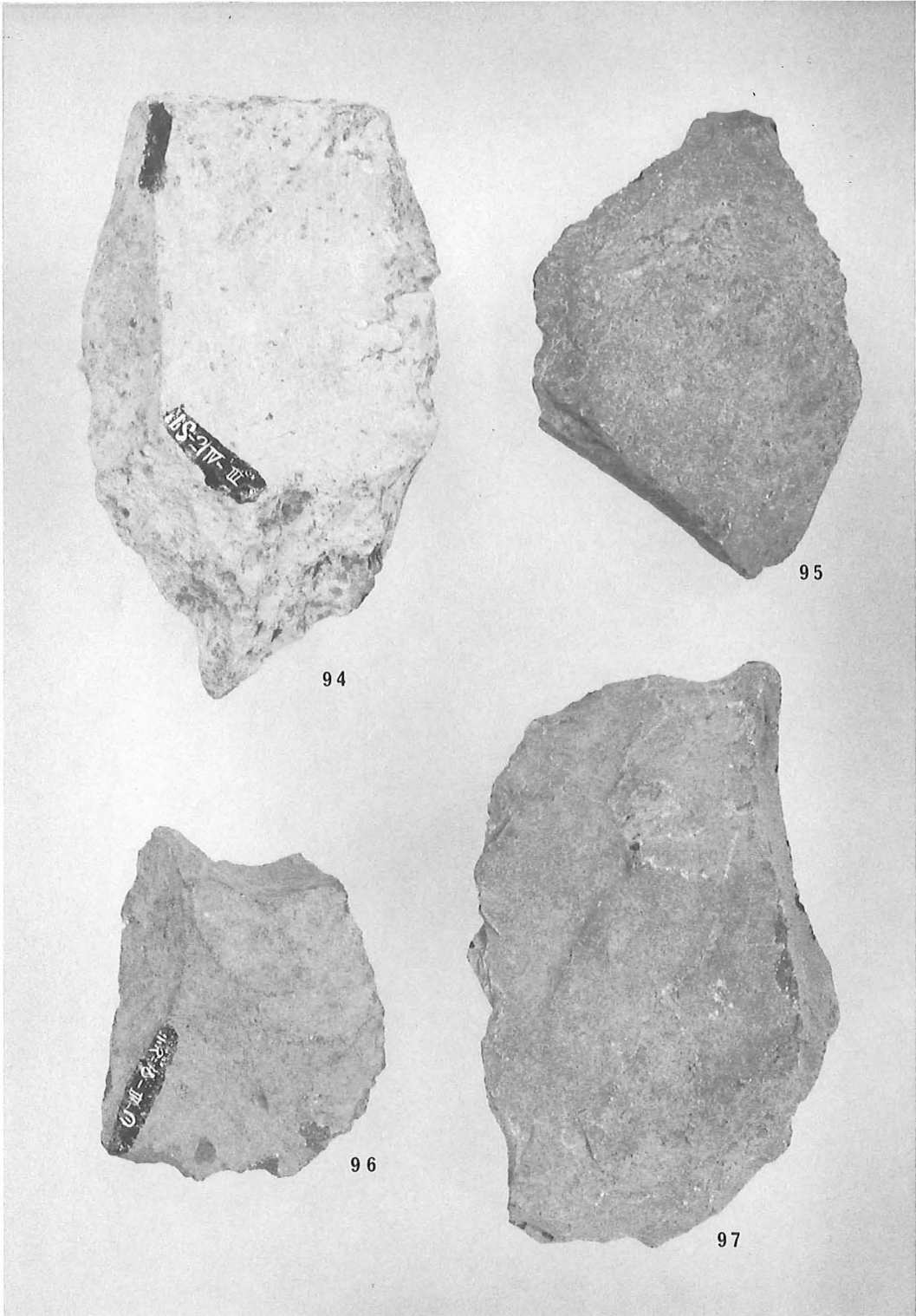
縄文時代の石器⑧ (1/1)



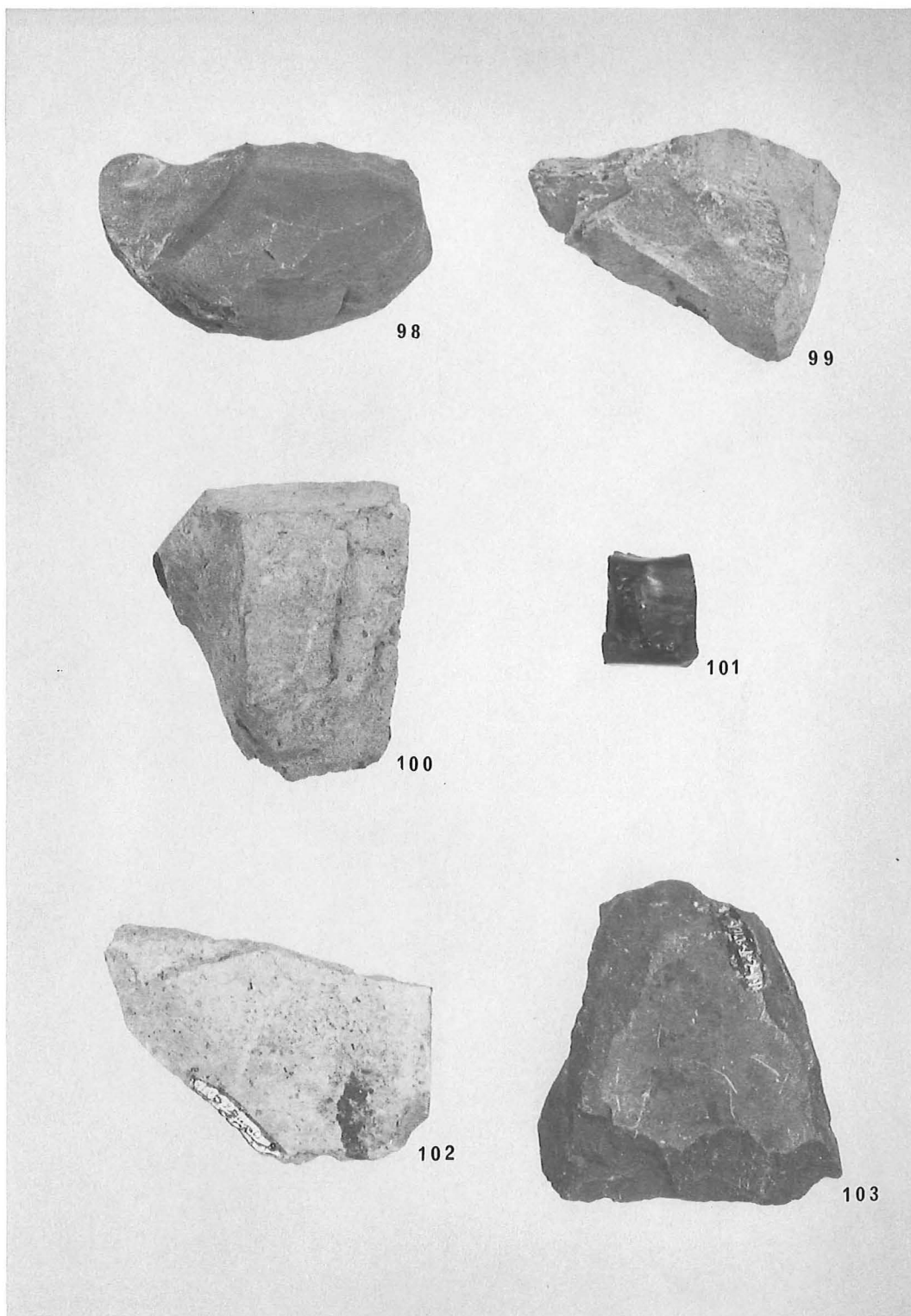
縄文時代の石器⑨ (1/1)



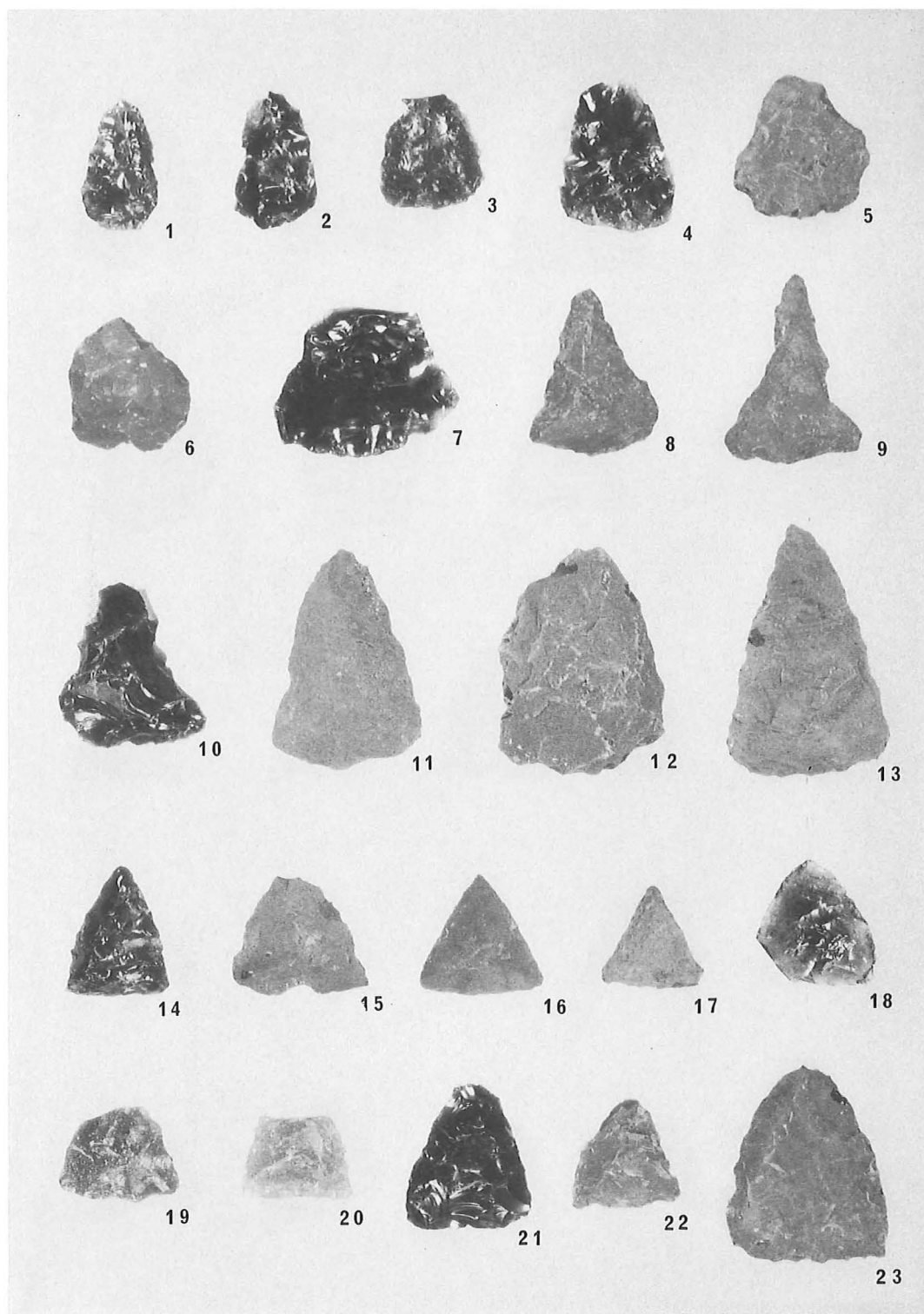
縄文時代の石器⑩ (1/1)



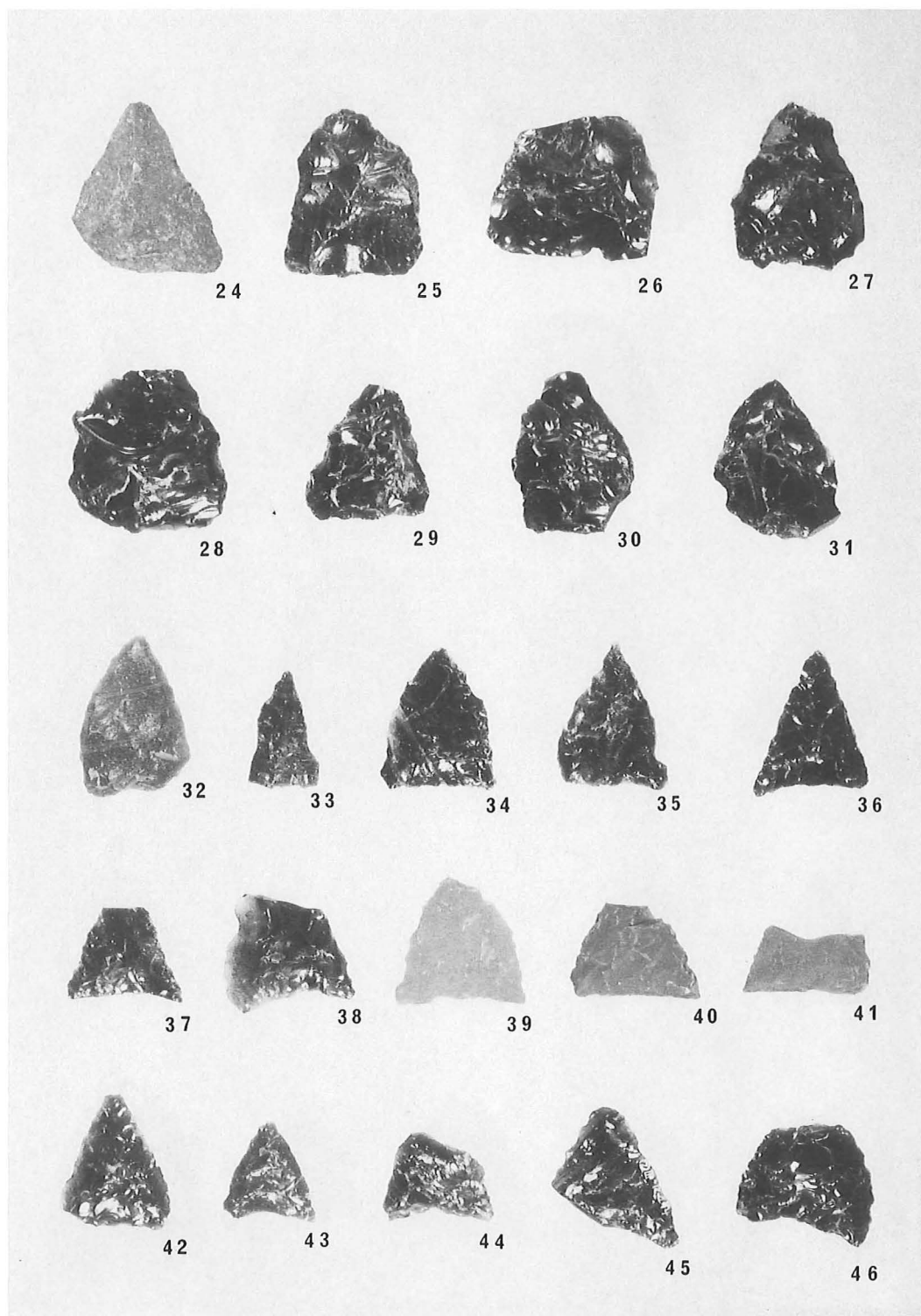
縄文時代の石器① (1/1)



縄文時代の石器⑩ (1/1)

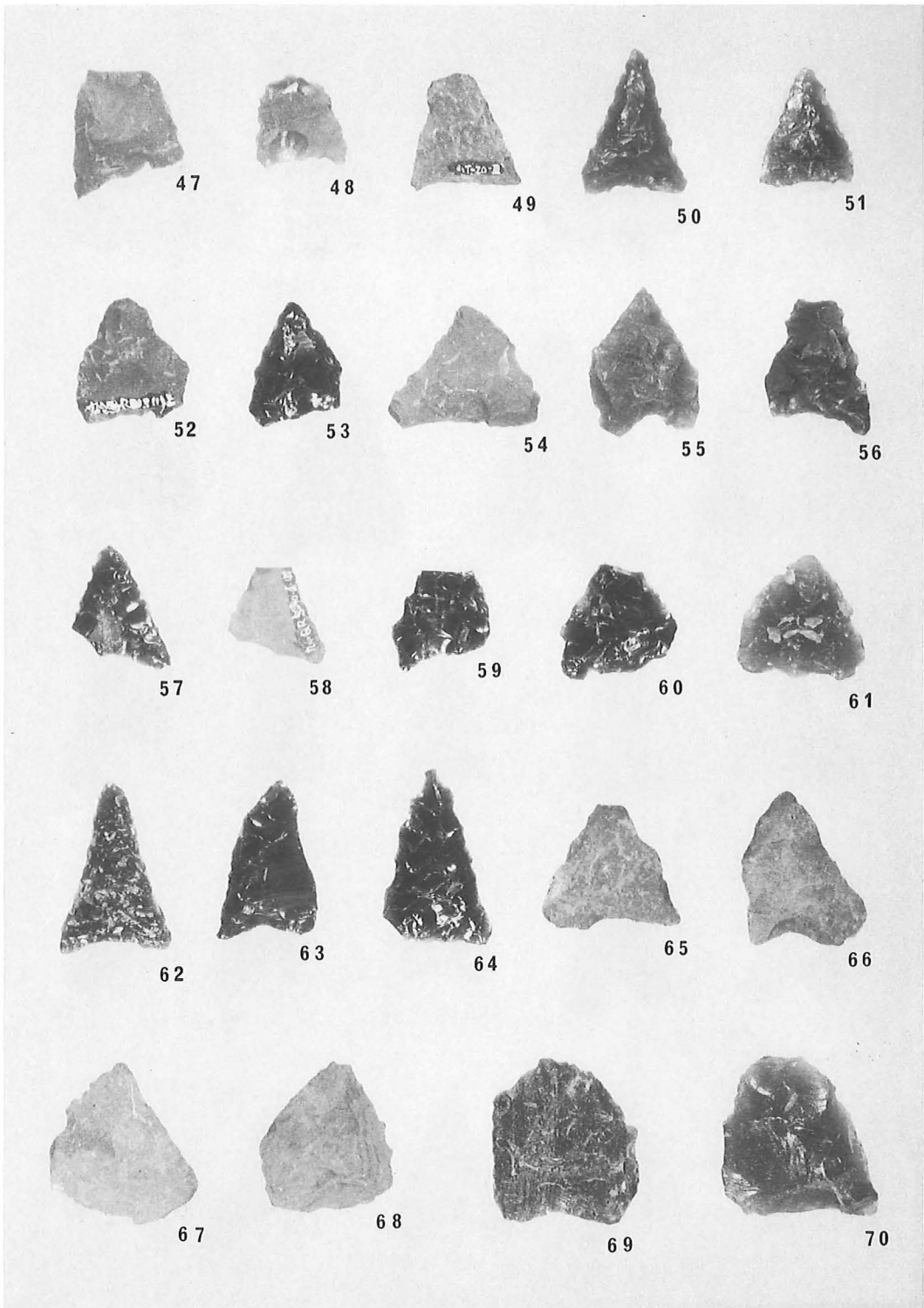


石鏃① (1/1)

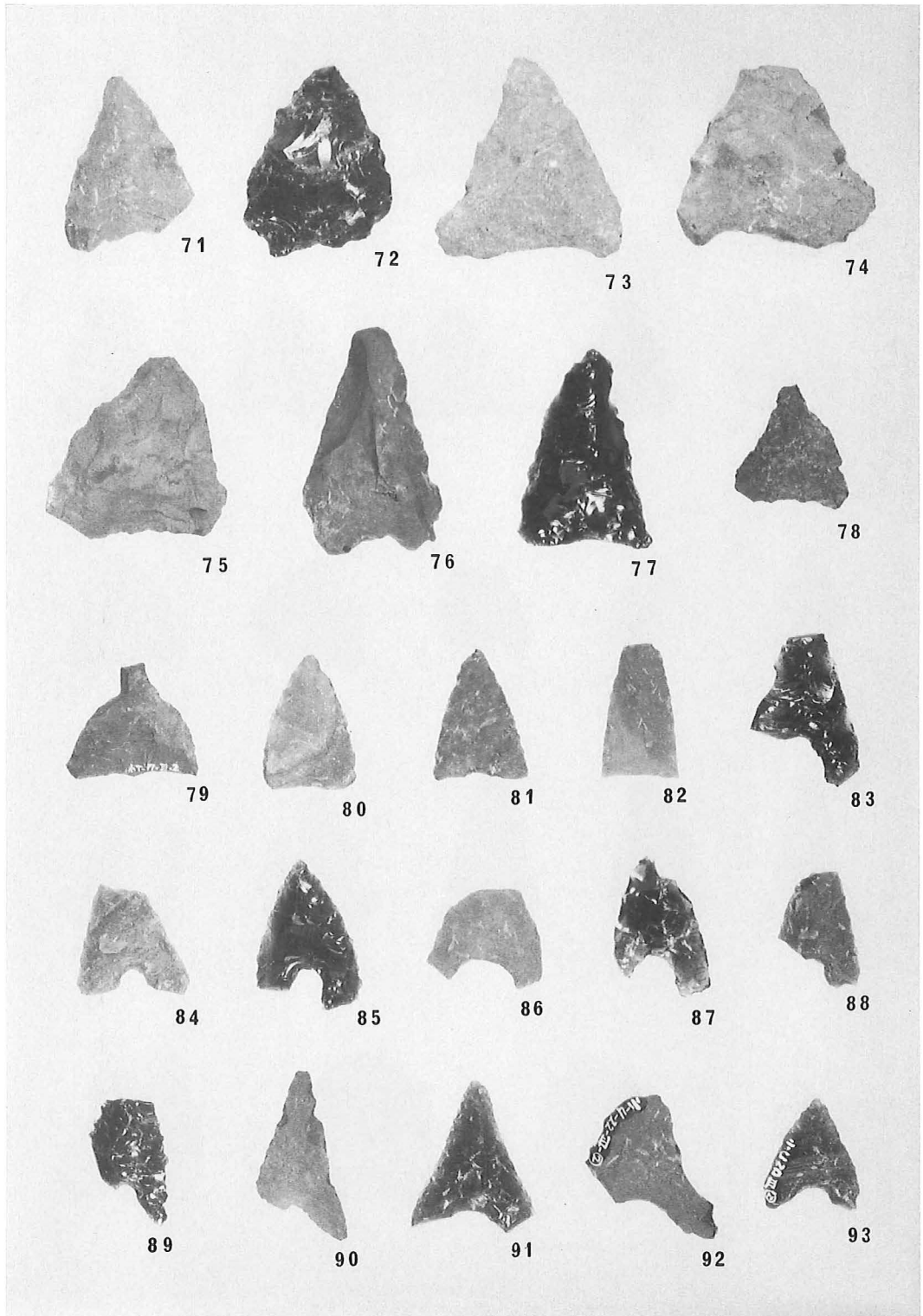


石鏃② (1/1)

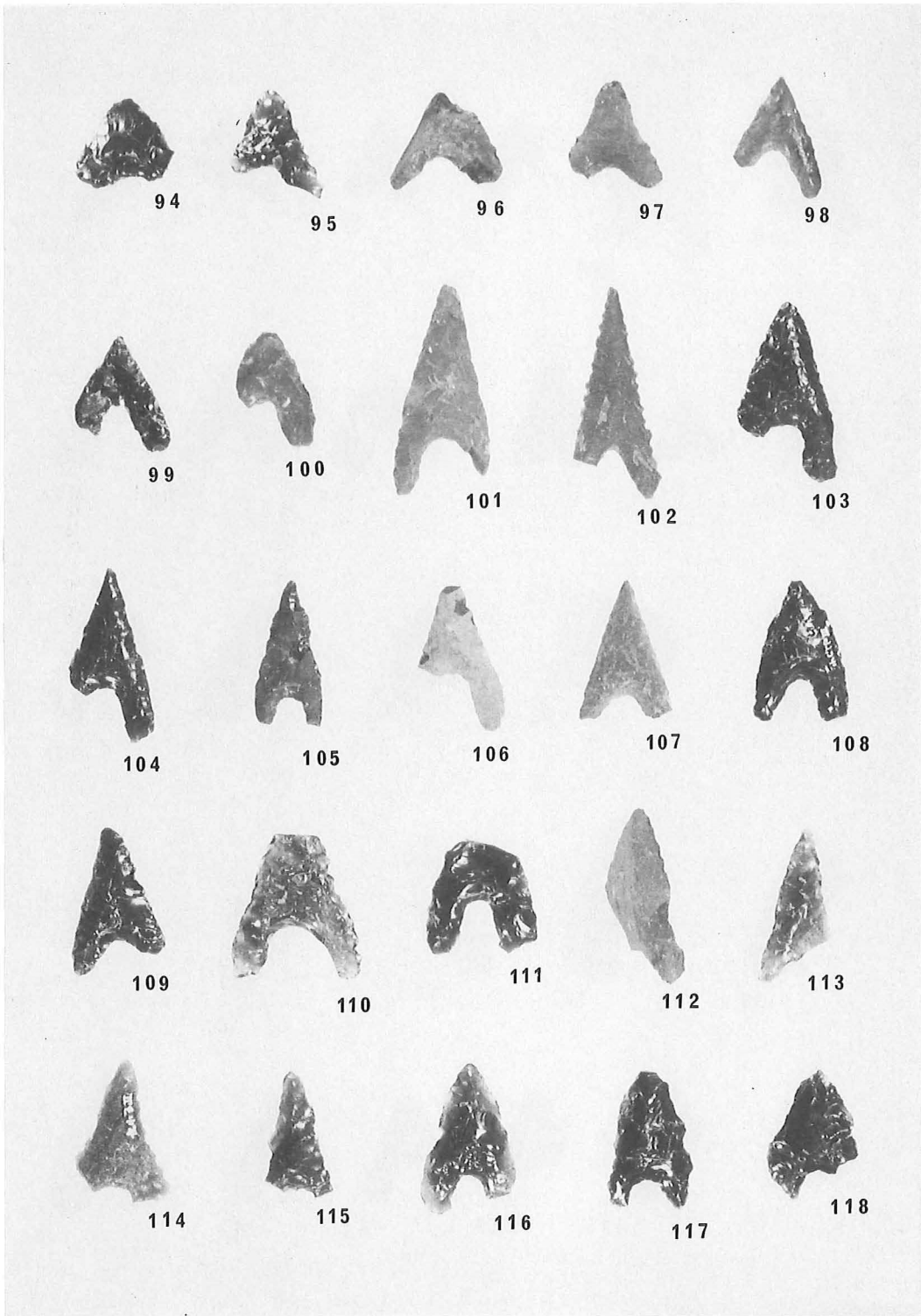




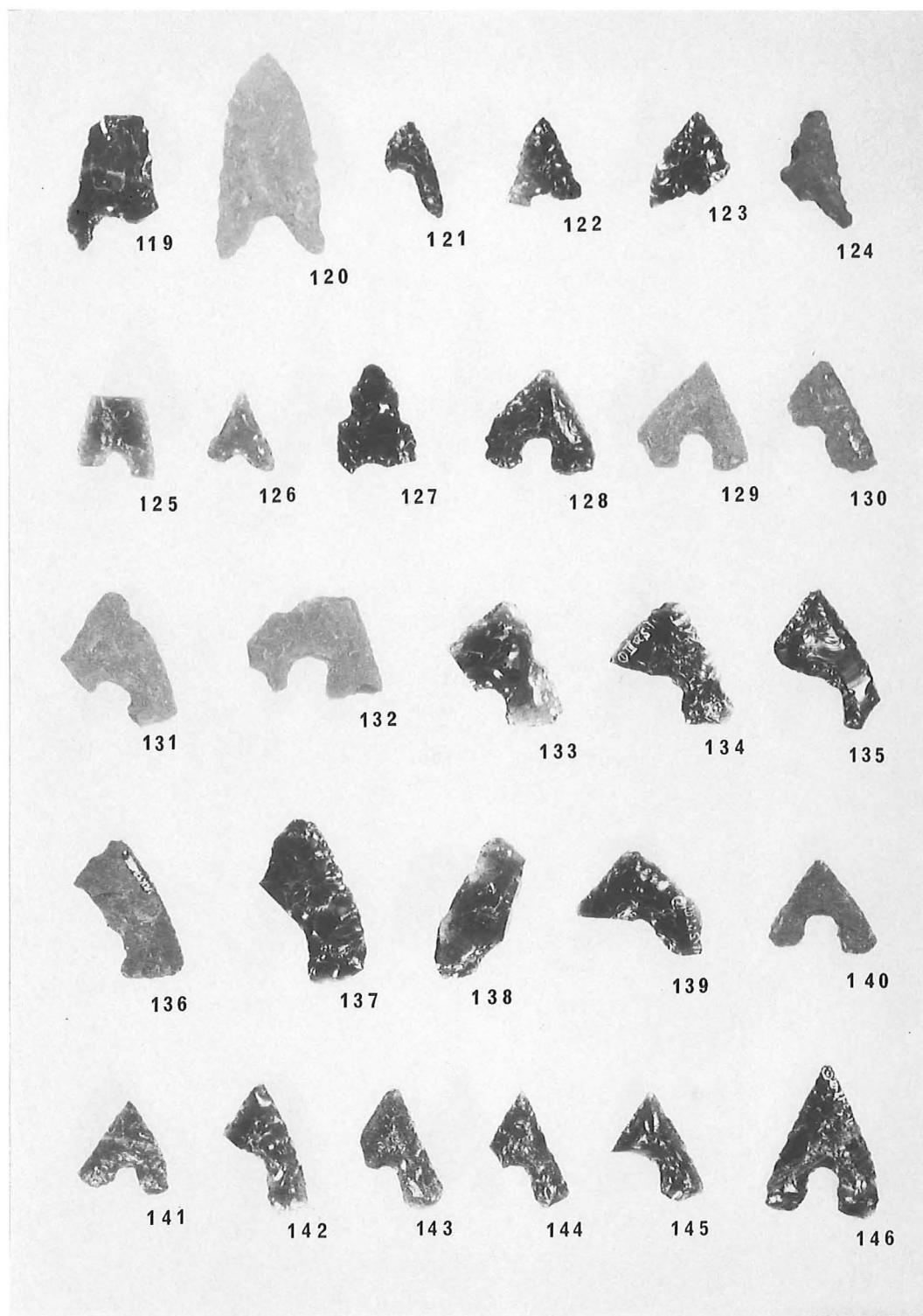
石鏃③ (1/1)



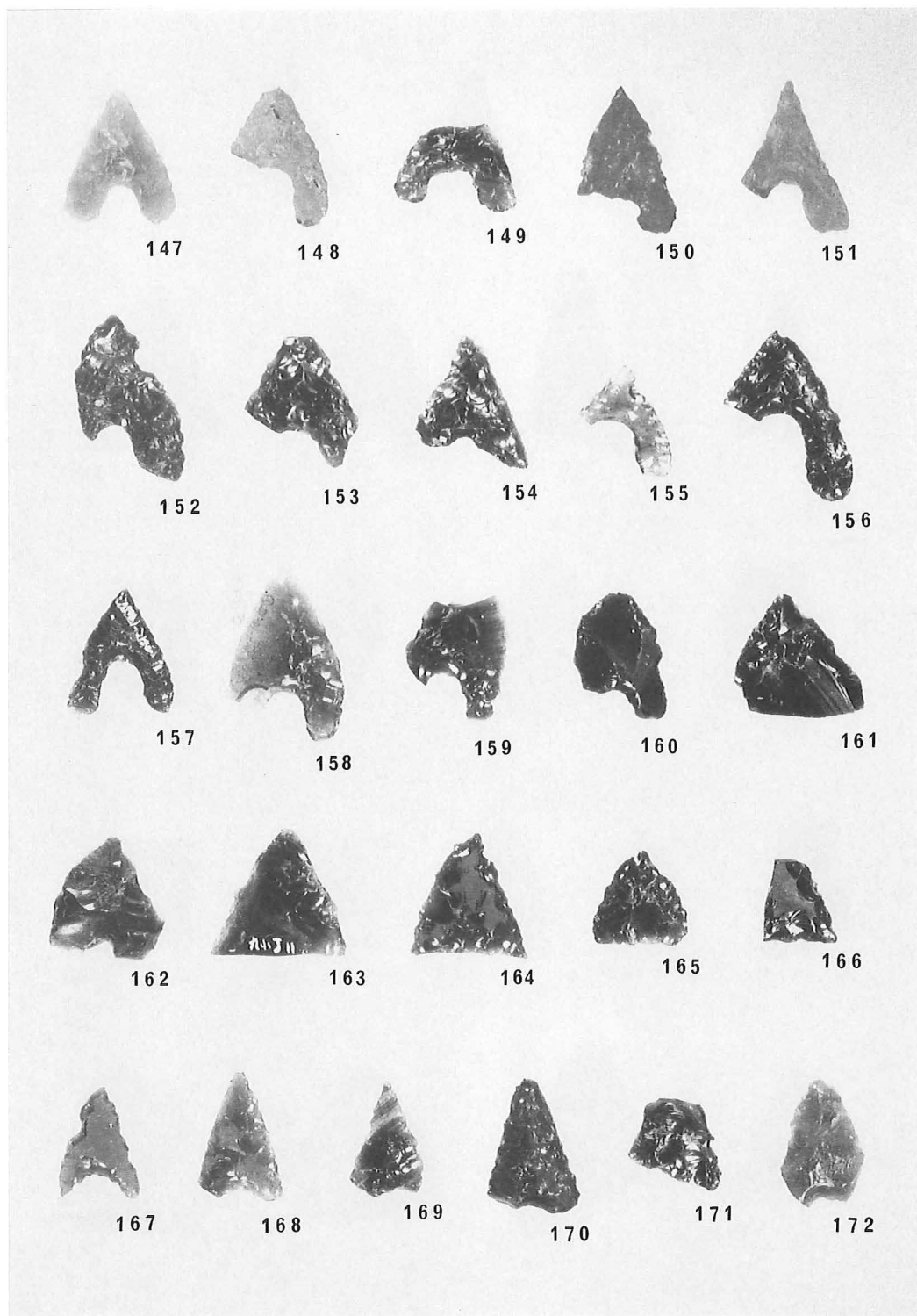
石鏃④ (1/1)



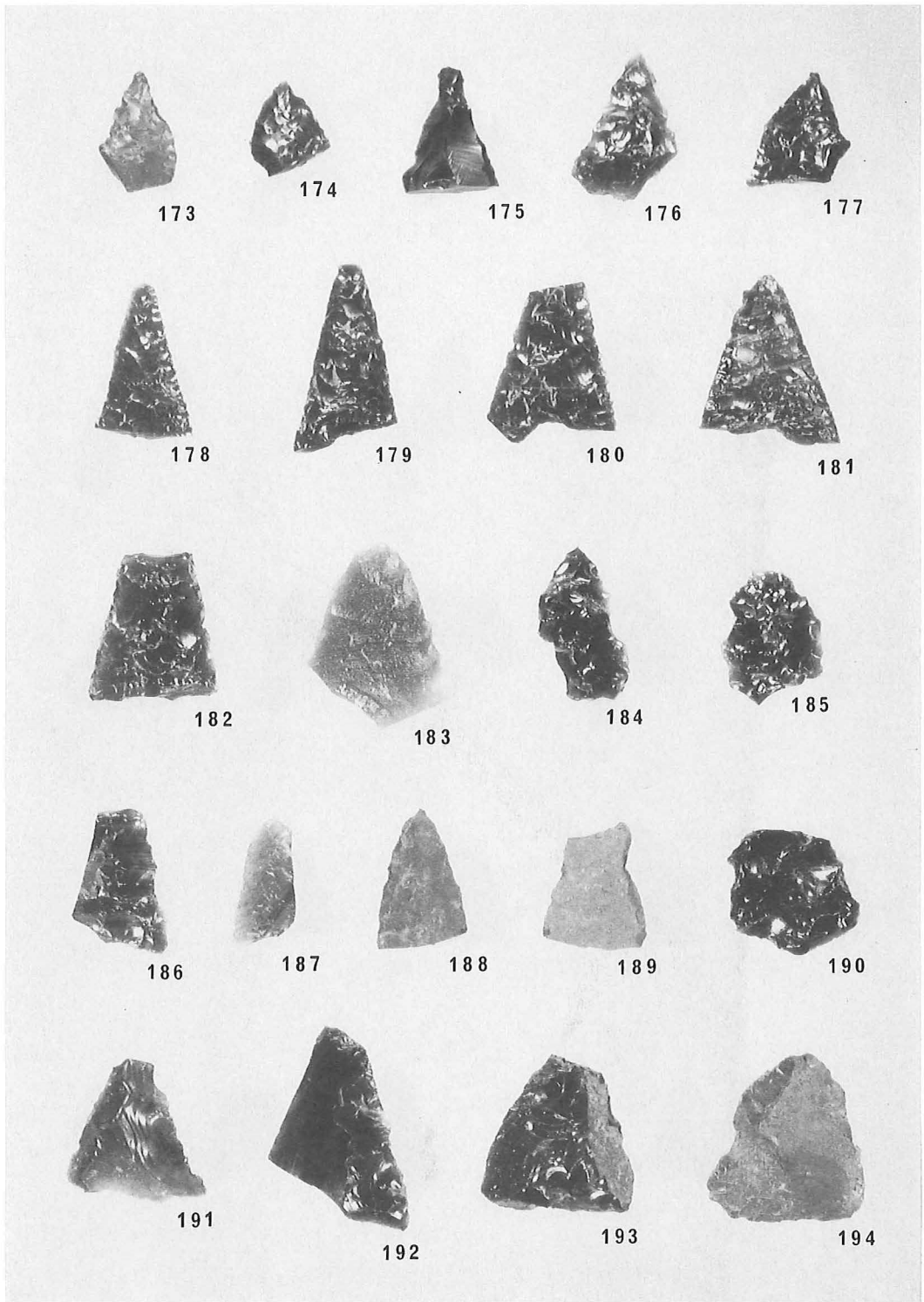
石鏃⑤ (1/1)



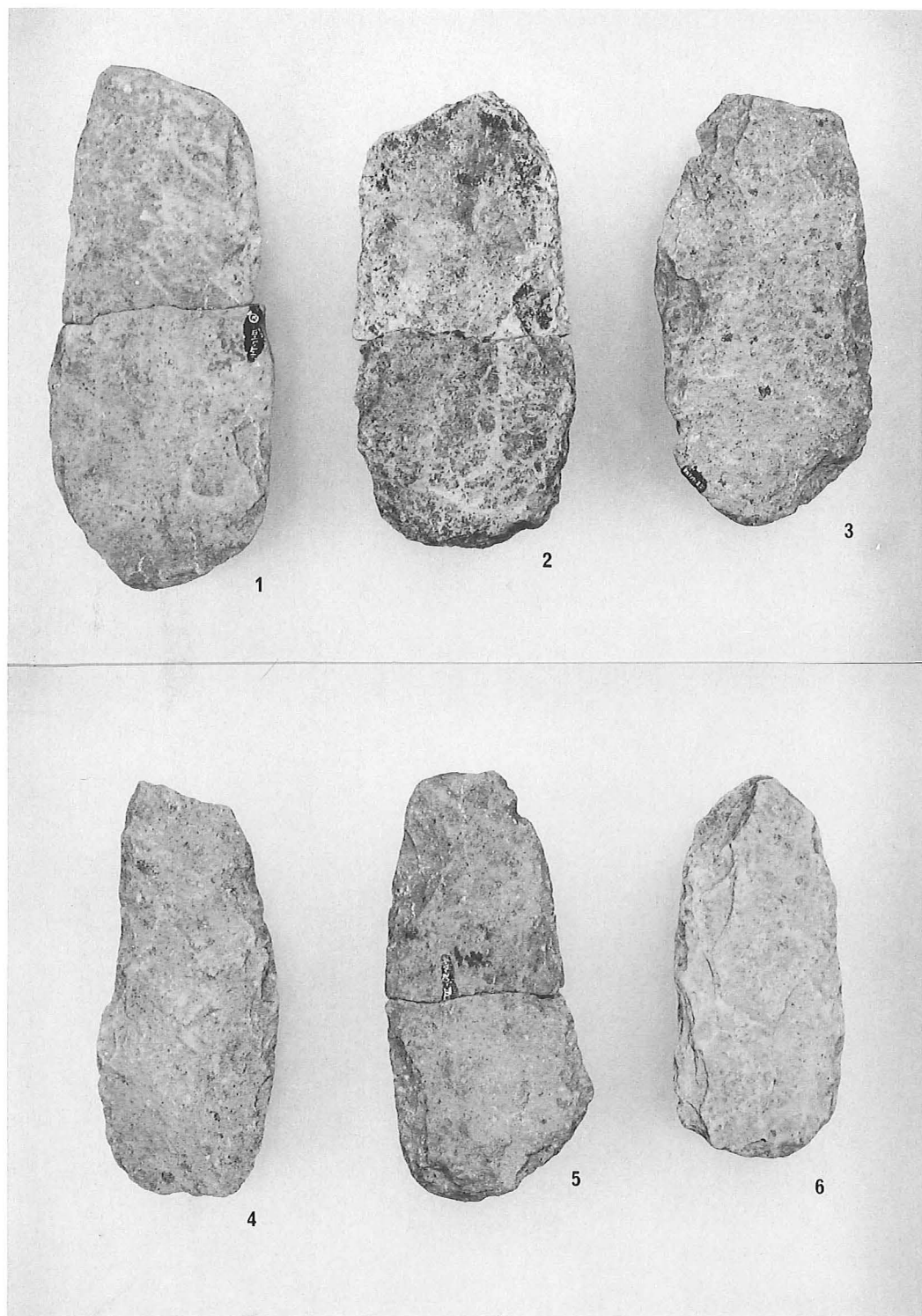
石鏃⑥ (1/1)



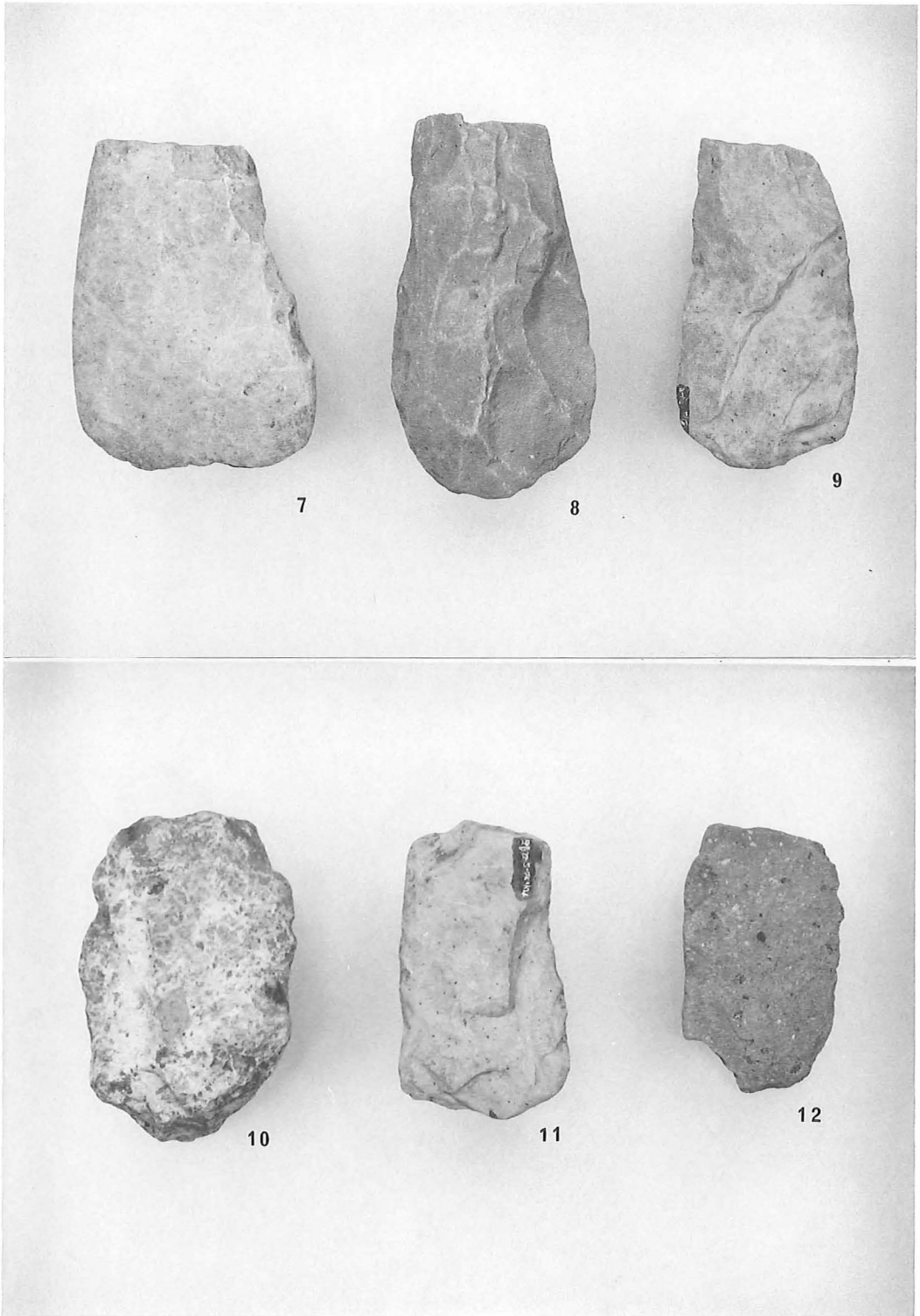
石鏃⑦ (1/1)



石鏃⑧ (1/1)

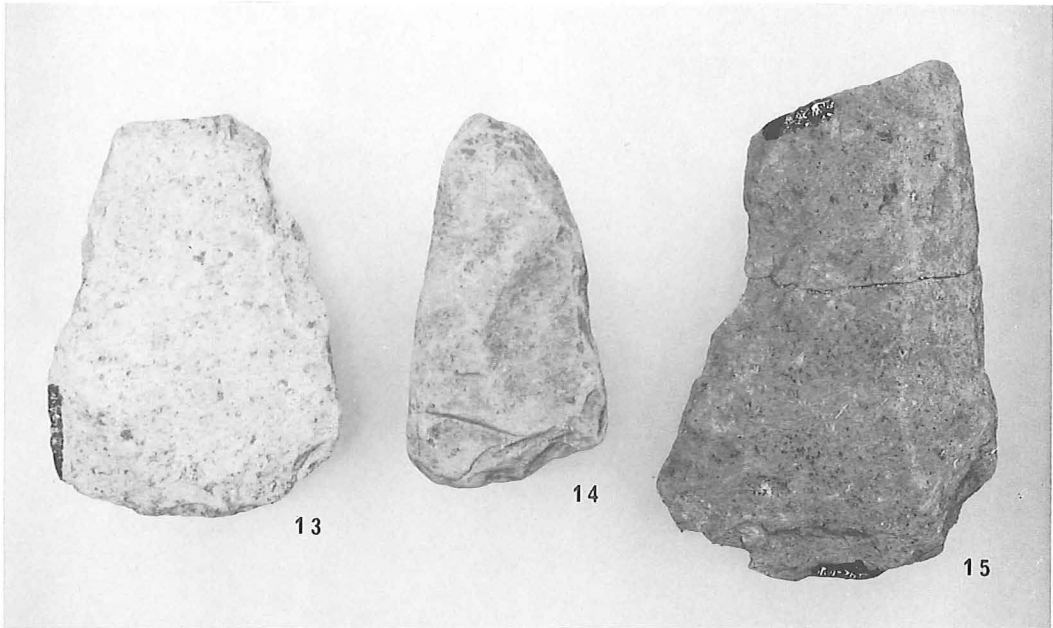


石斧① (1/2)

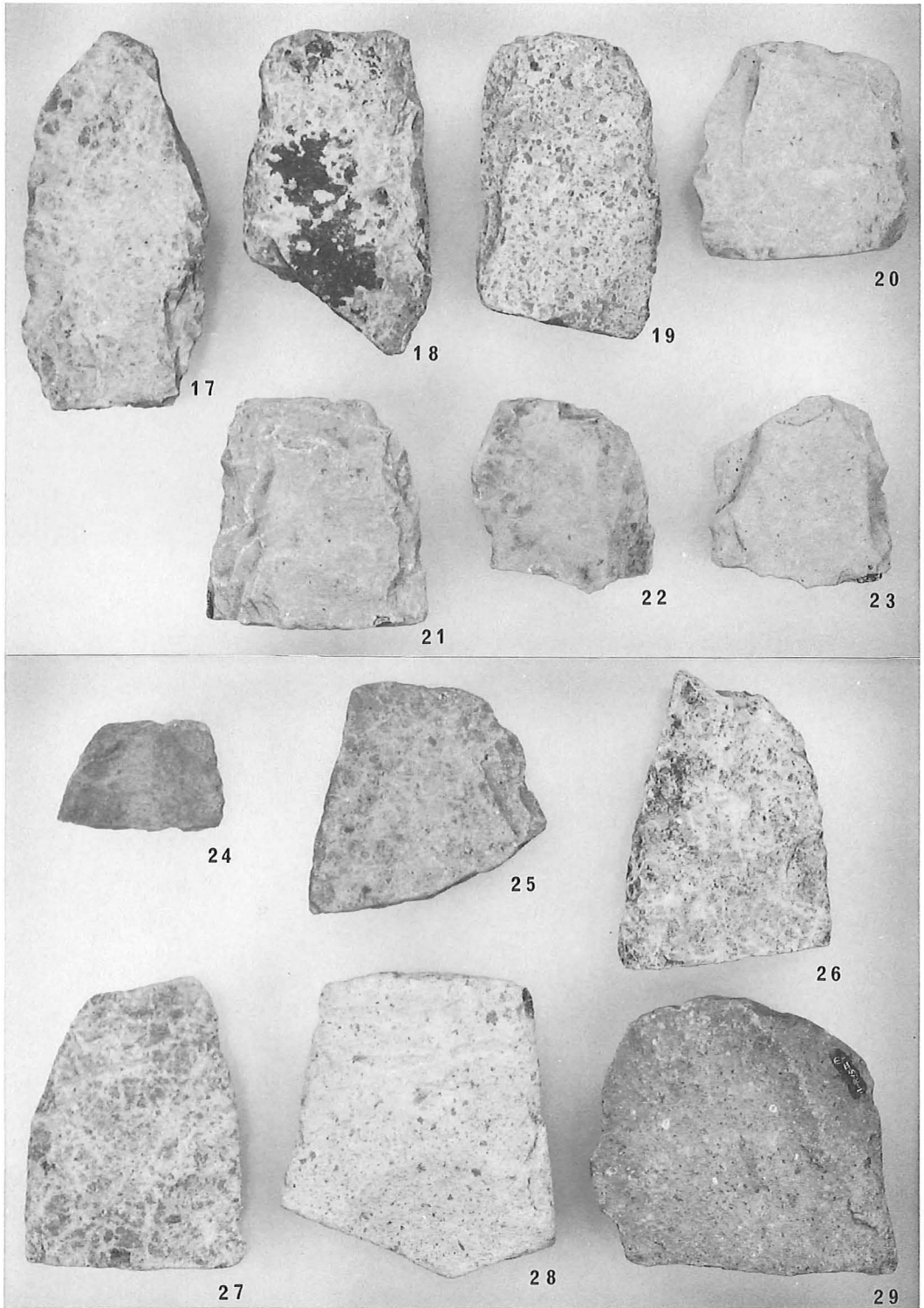


石斧② (1/2)

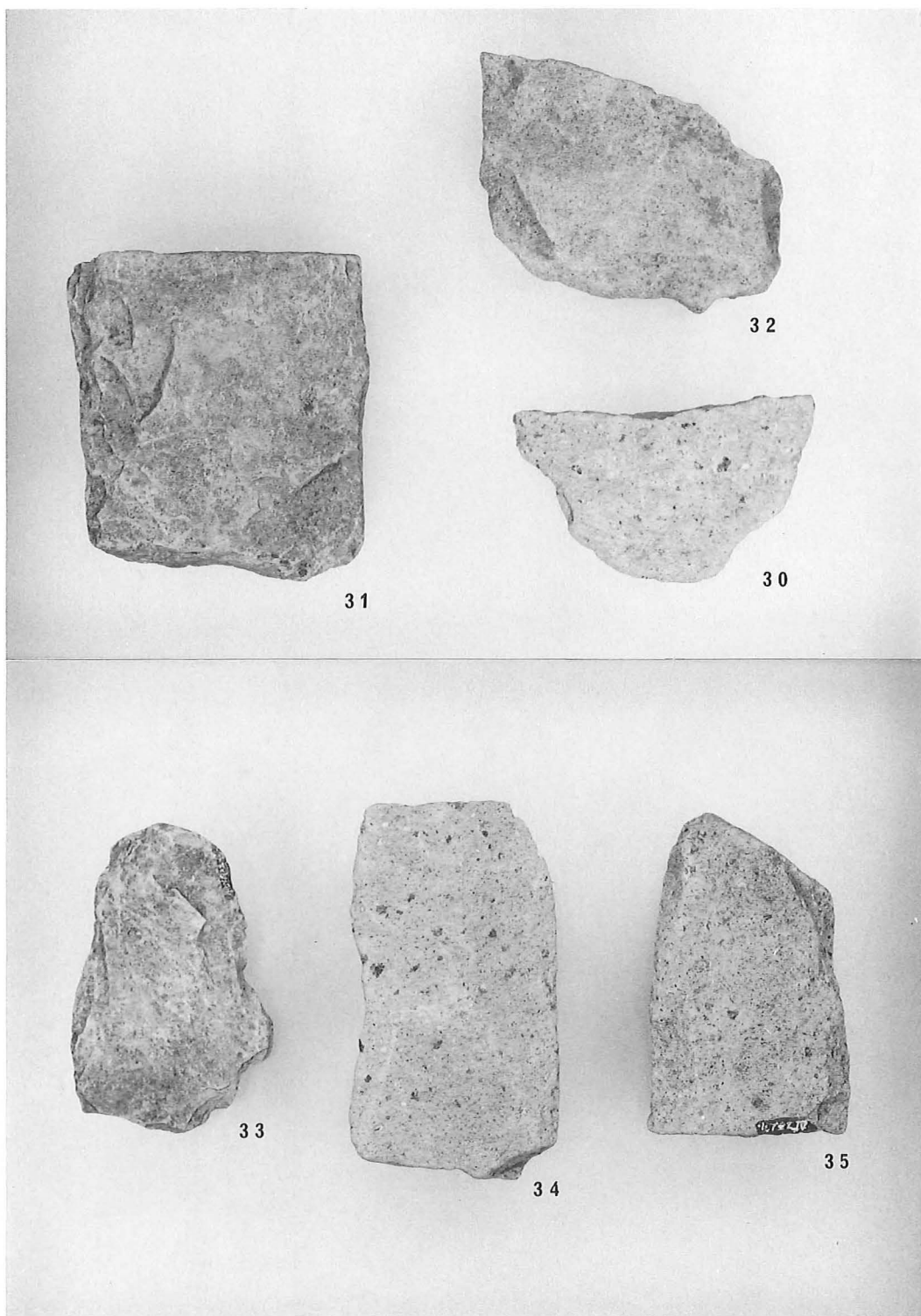




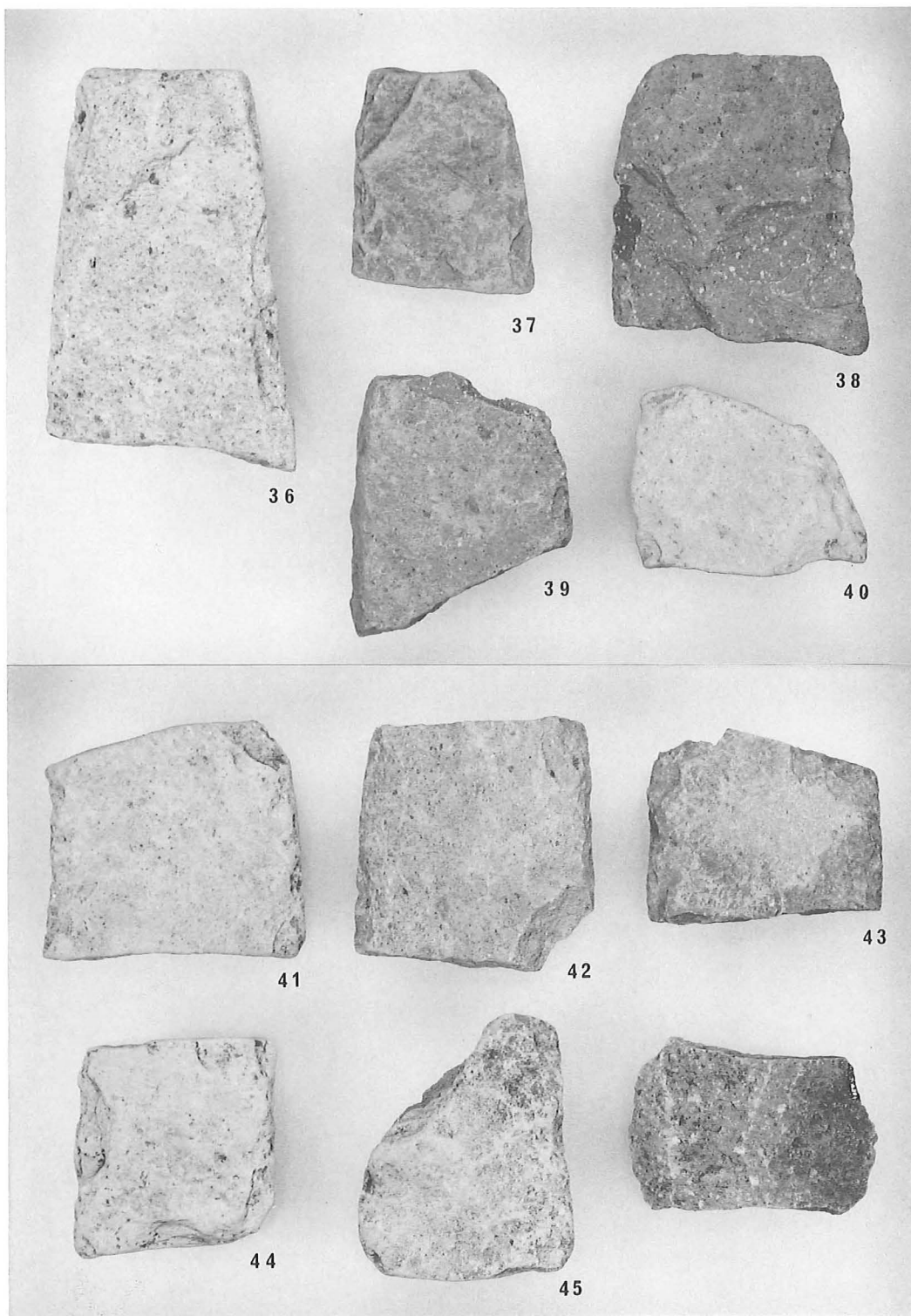
石斧③ (1/2)



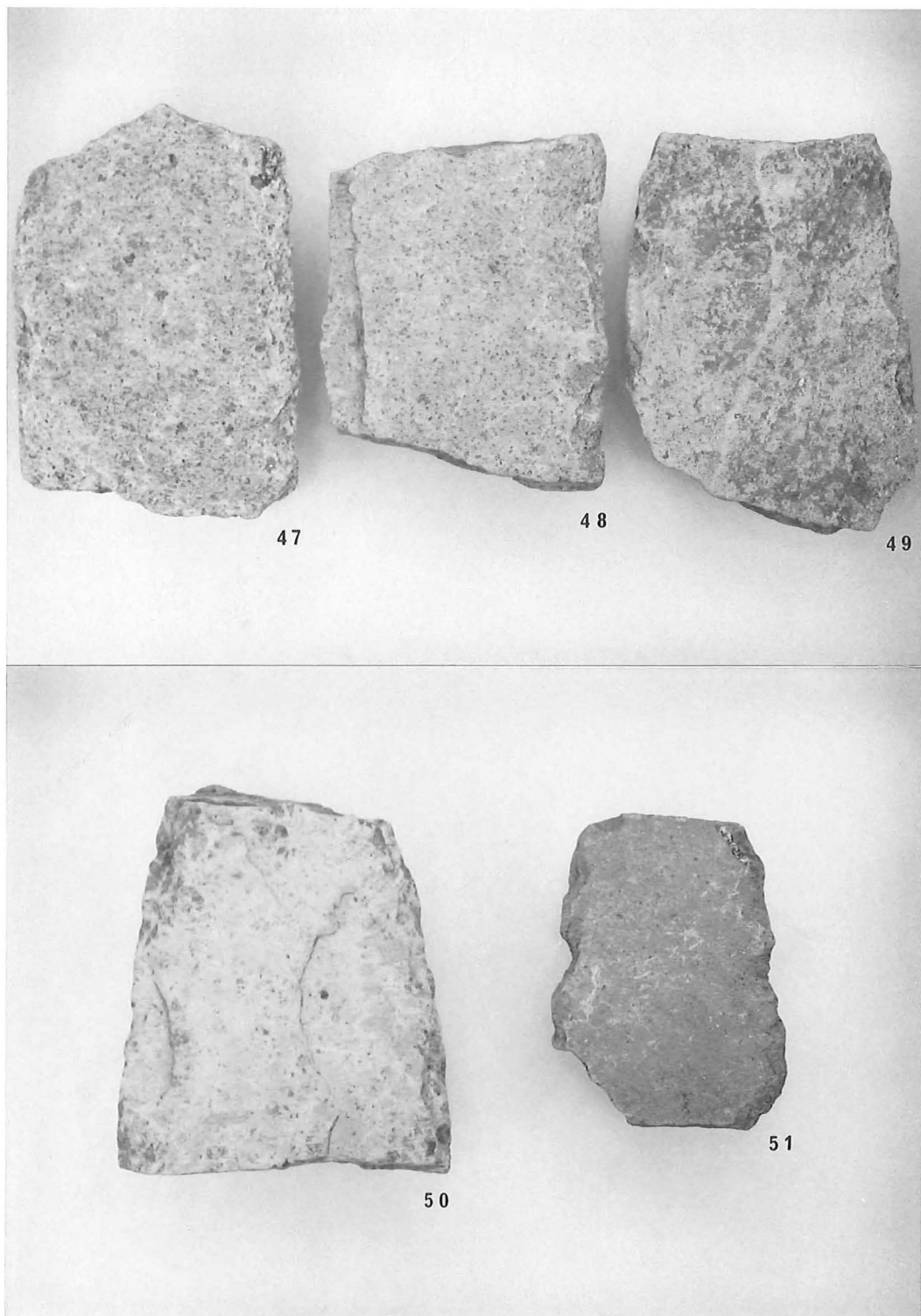
石斧④ (1/2)



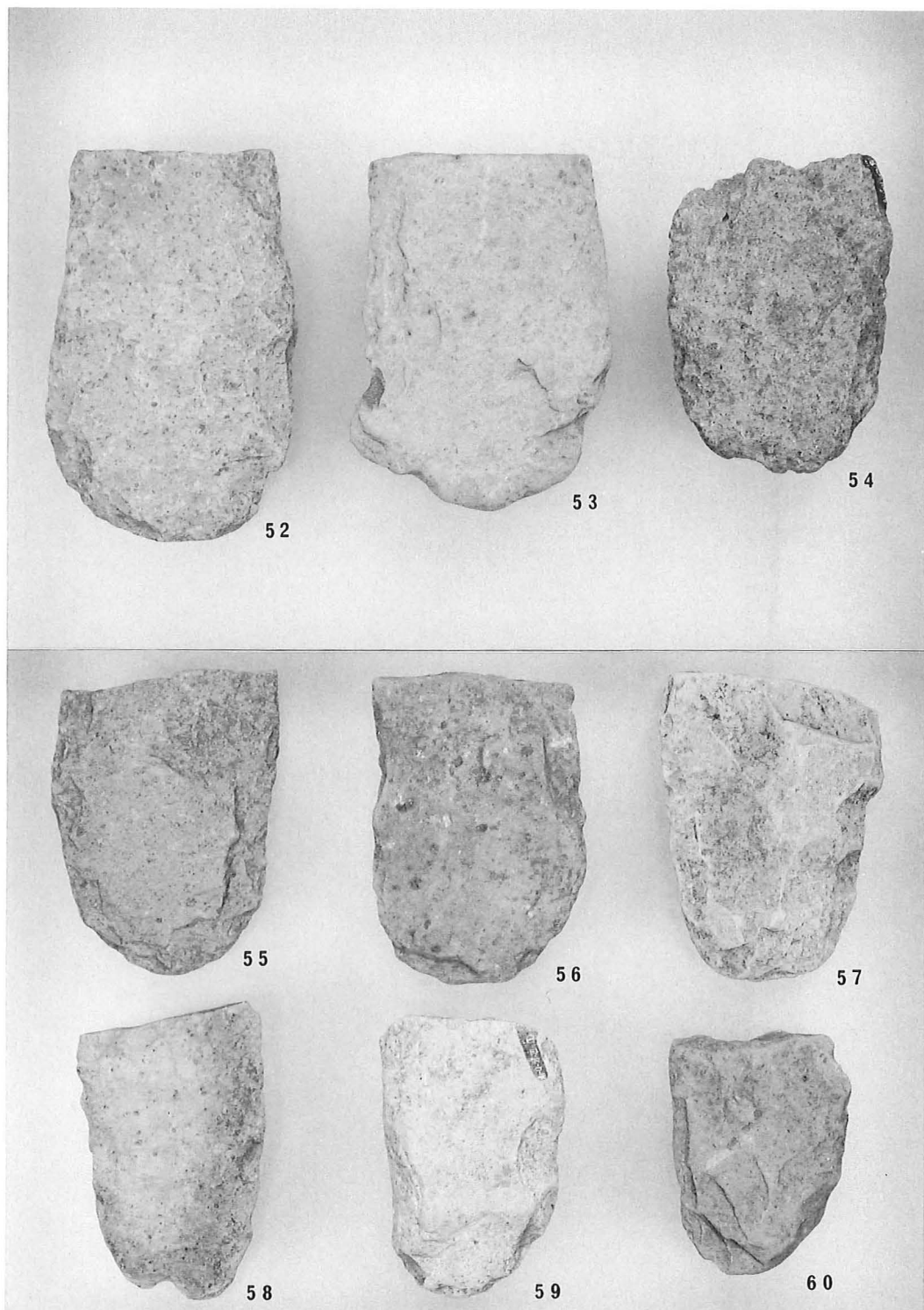
石斧⑤ (1/2)



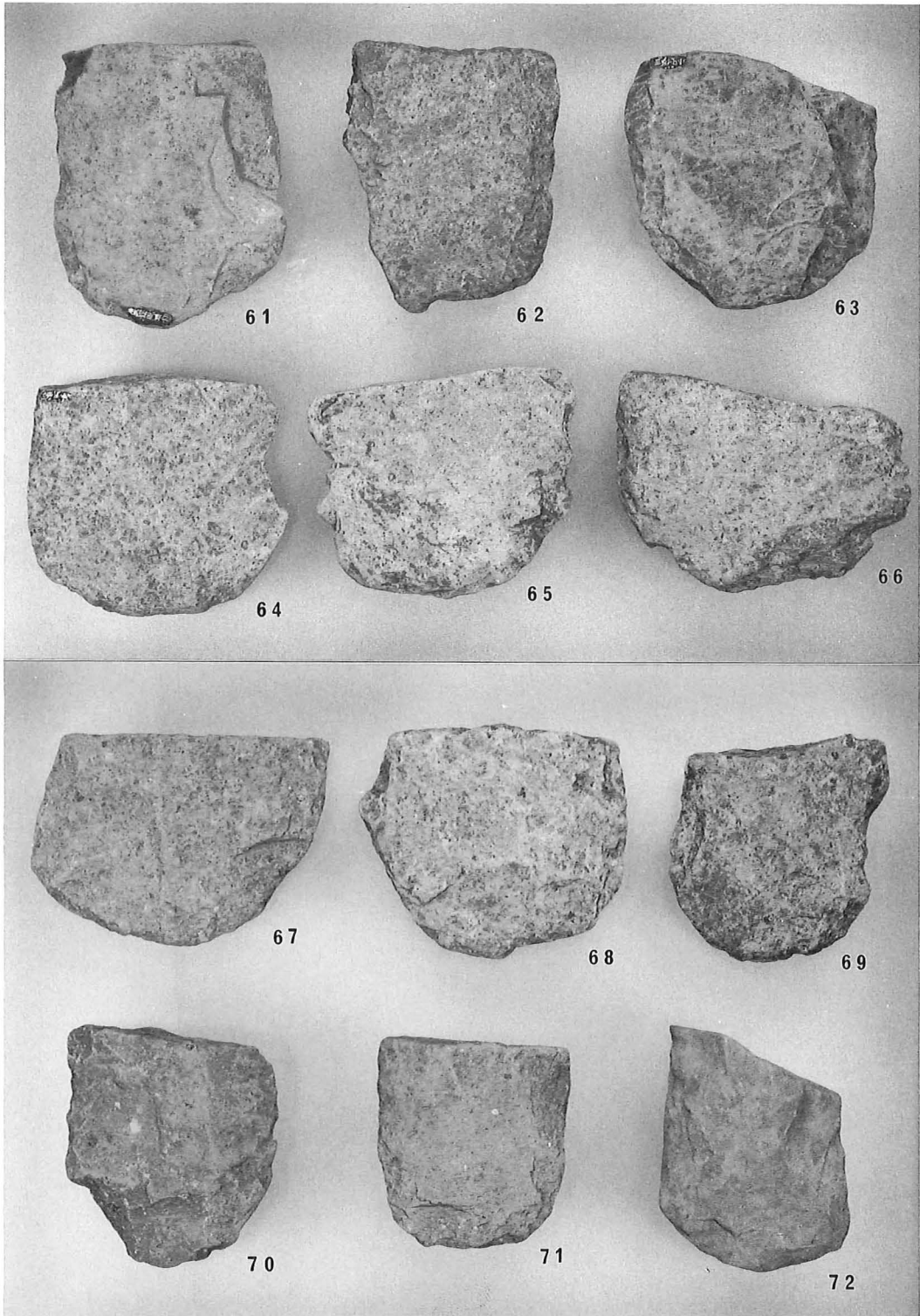
石斧⑥ (1/2)



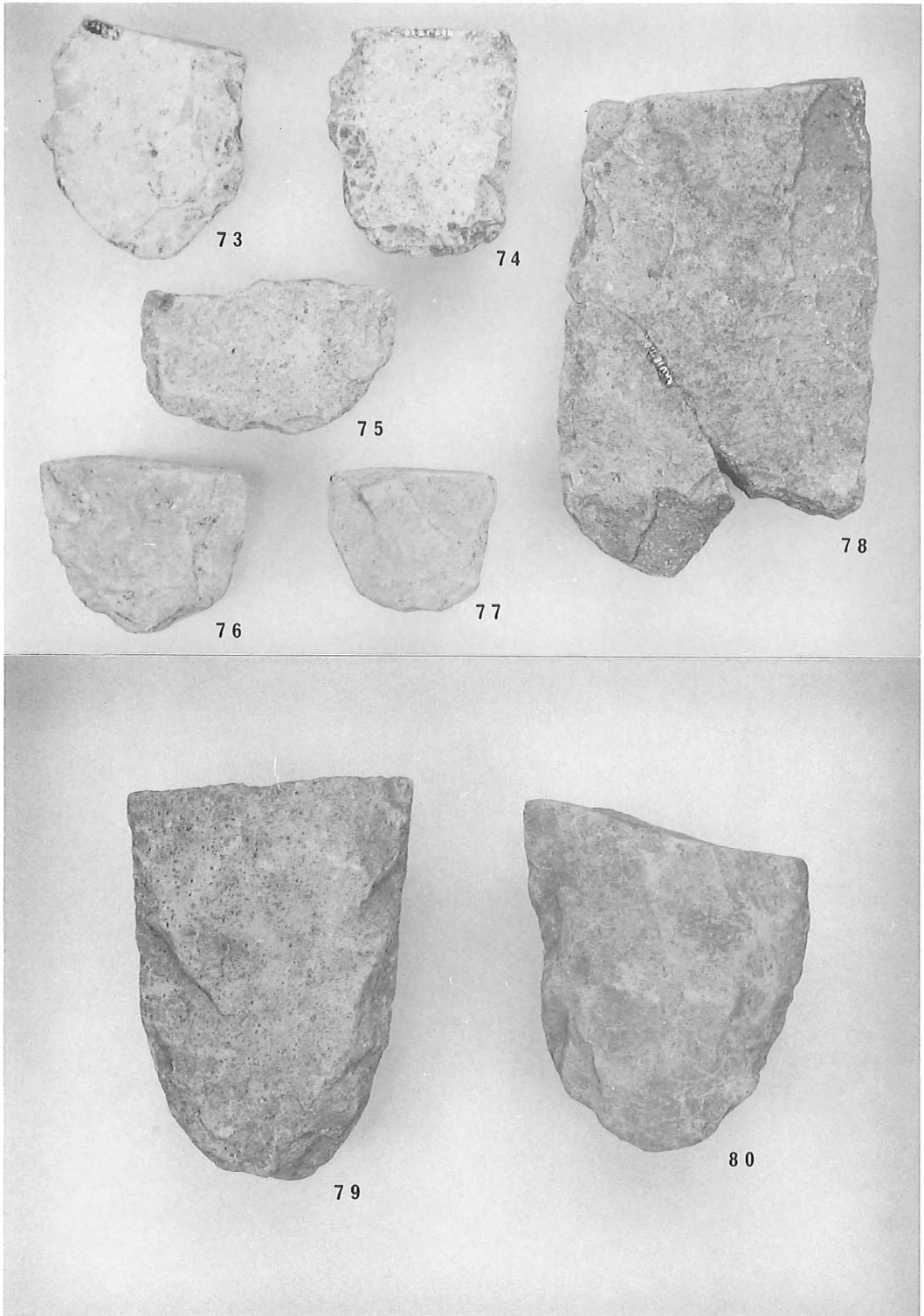
石斧⑦ (1/2)



石斧⑧ (1/2)

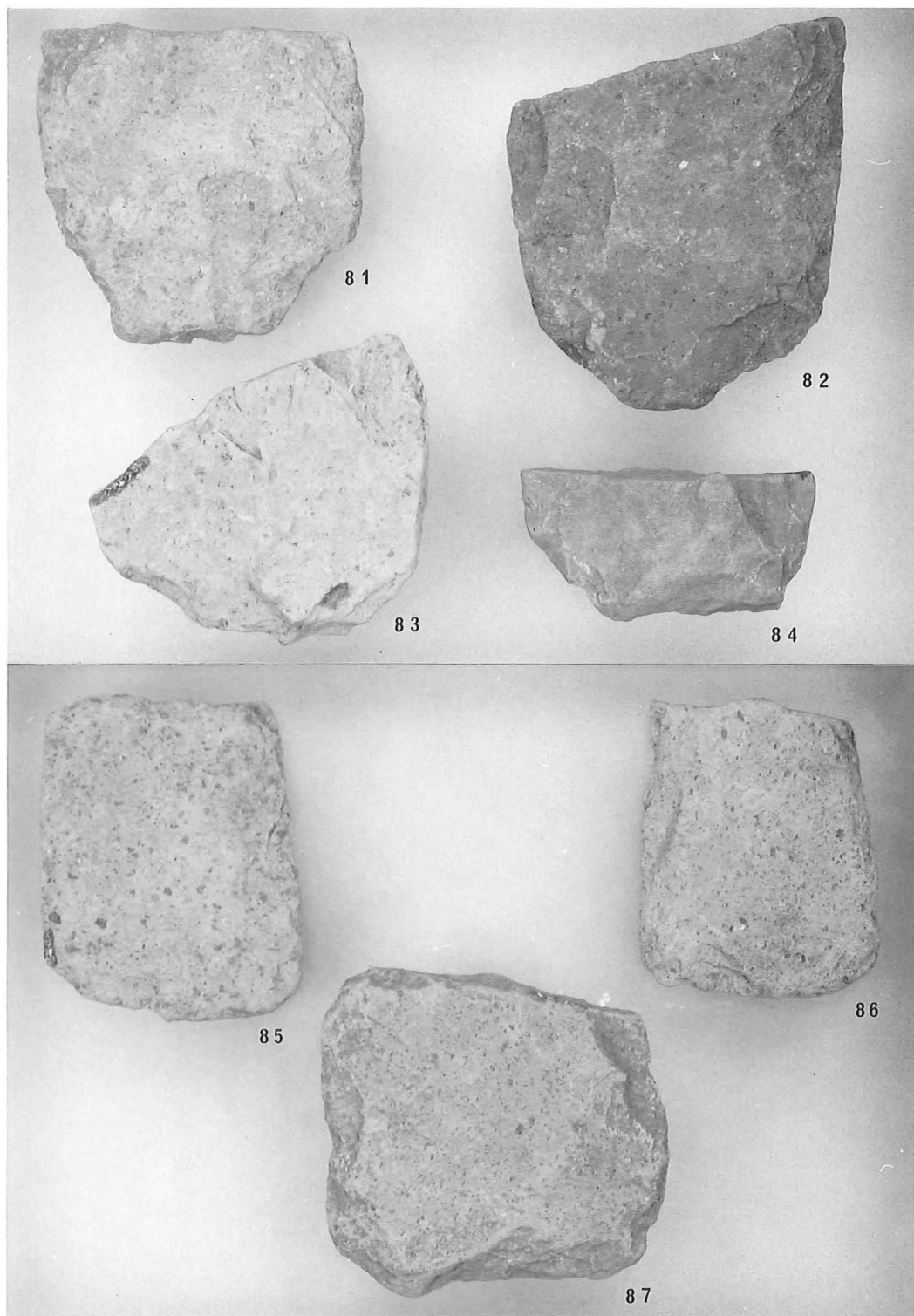


石斧⑨ (1/2)

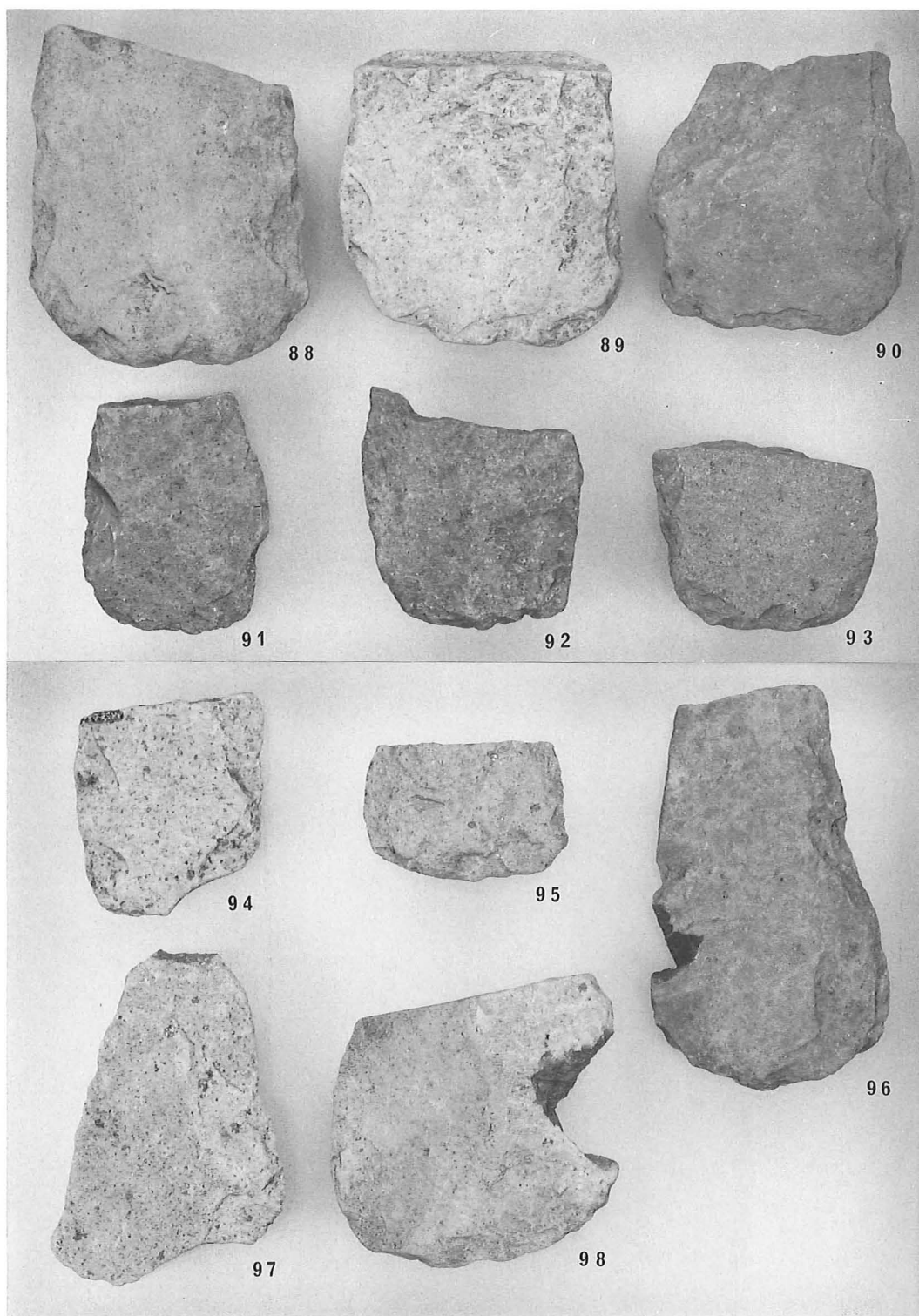


石斧⑩ (1/2)

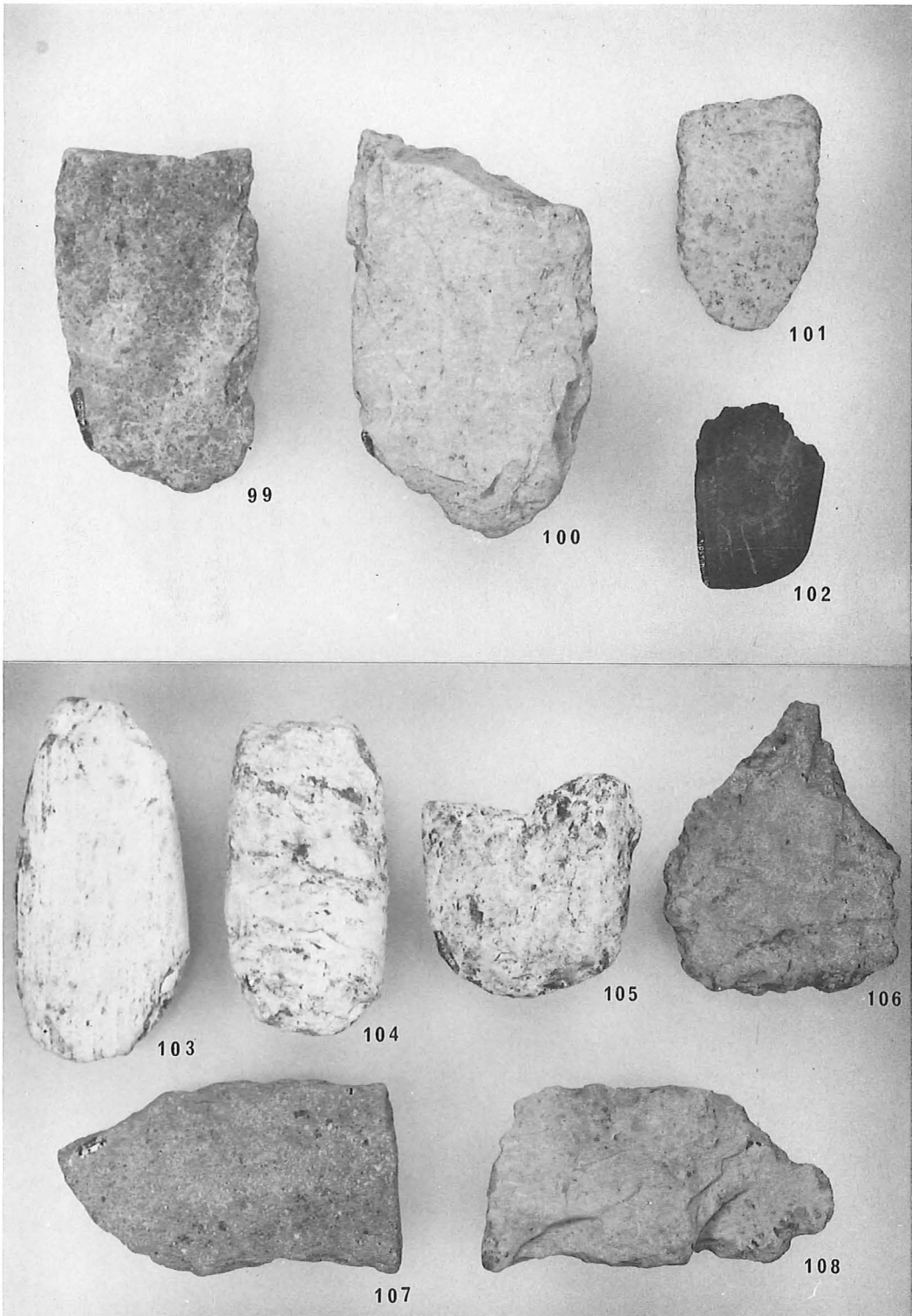




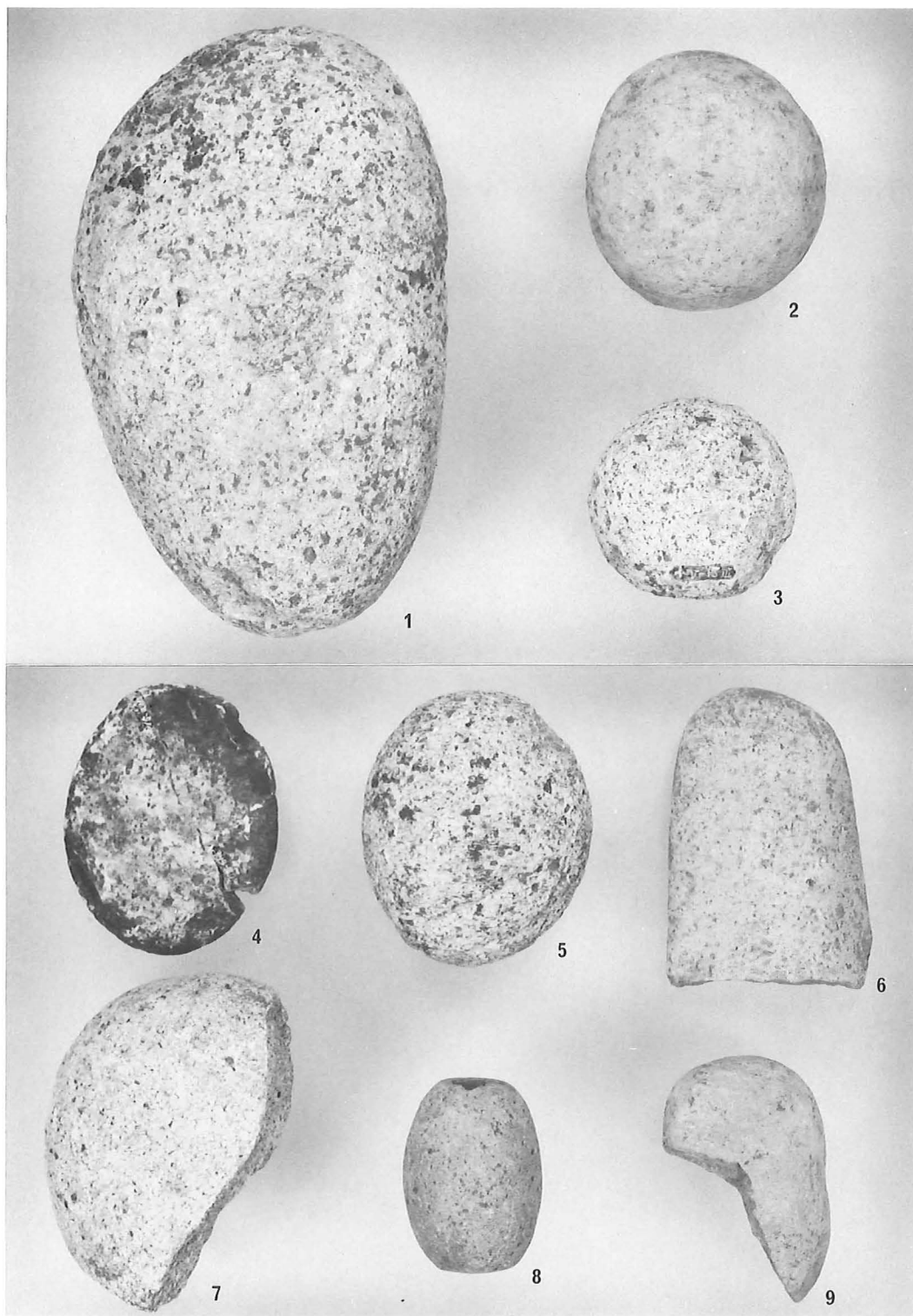
石斧⑩ (1/2)



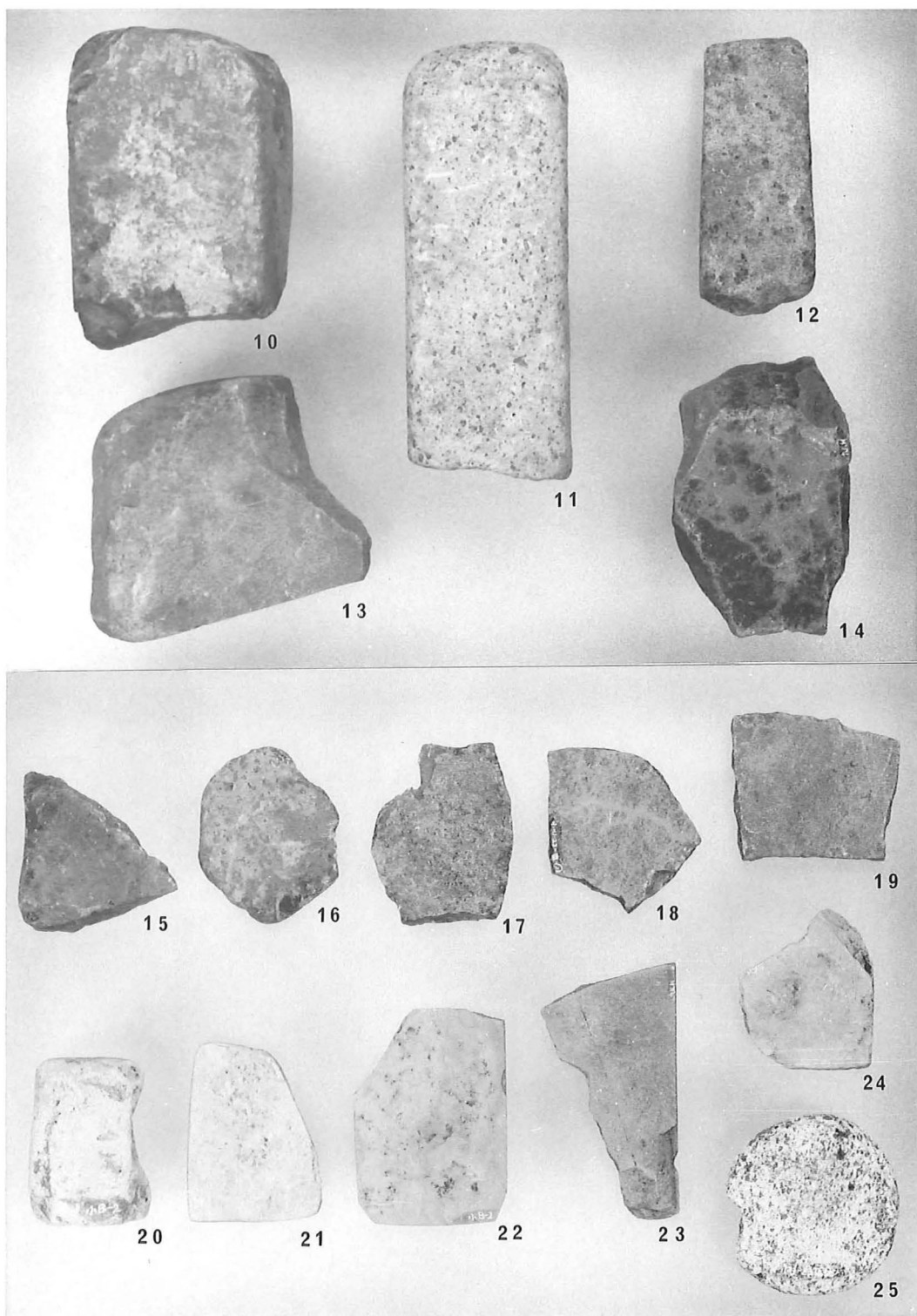
石斧⑩ (1/2)



石斧<sup>⑬</sup> (1/2)



礫器① (1/2)



礫器② (1/2)

# V. 附 篇

長崎県東彼杵町小藺城跡出土の中世人骨

# 長崎県東彼杵町小園城跡出土の中世人骨

松下 孝幸<sup>\*</sup>・佐伯 和信<sup>\*</sup>・小山田常一<sup>\*\*</sup>

キーワード：長崎県，中世人骨，保存不良，扁平尺骨

## はじめに

小園城（こぞのじょう）跡は長崎自動車道建設に伴って発見された遺跡で、長崎県東彼杵郡東彼杵町瀬戸郷字小園に所在する。発掘調査は1987年（昭和62年）に行われ、3基の土壙墓から人骨が検出された。人骨の残存量は比較的多い方であったが、骨質の残存状態は著しく悪く、取り上げて、計測することがかなり困難な状態であったため、現場でできる限り詳細な観察を行なった。人骨の残存部位やその観察の結果などを報告しておきたい。

## 資 料

今回検出された人骨は3基の土壙墓からそれぞれ1体分ずつで、合計3体分の人骨である。これらの人骨の性別・年齢は表8のとおりである。また、48 I 土壙墓には朝鮮通宝が副葬され

Tab. 8 資料 (Table 8. List of skeletons)

人 骨 番 号	性別	年 令
46 I 土壙墓人骨	女 性	不 明
47 I 土壙墓人骨	不 明	不 明
48 I 土壙墓人骨	男 性	壮 年

ていたことなどの考古学的所見から、これらの人骨は中世（15、16世紀）に属する人骨と考えられている。

\* Takayuki MATSUSHITA, Kazunobu SAIKI,

Department of Anatomy, Nagasaki University School of Medicine

[長崎大学医学部解剖学第二教室（主任：内藤芳篤教授）]

\*\* Jouichi OYAMADA

Department of Oral Anatomy, Nagasaki University School of Dentistry

[長崎大学歯学部口腔解剖学第二講座（主任：六反田篤教授）]





なお、歯の計測と齶歯の観察は小山田が行なった。

## 所 見

人骨の残存部は図8に示すとおりである。また、歯の計測値は文末に一括して掲げた。

### 46 I 土壌墓人骨（女性、年齢不明）

現場では歯、右側上腕骨、右側尺骨、右側橈骨が残存しており、特に右側上腕骨の保存状態は比較的良好であった。また、下肢骨は左右の大腿骨と脛骨とが残存していた。埋葬姿勢は肘関節および膝関節ともに屈曲状態で、仰臥屈葬であった。

歯は遊離歯で、現場では5本確認したが、いずれも保存状態が悪く、歯種を同定することができなかった。骨のうち最も保存状態が良かったのは右側上腕骨であったが、それでも計測はできなかった。観察したところでは、骨体や骨頭は細くて、小さいが、その割には三角筋祖面の発達をきわめて良好である。また、小さな滑車上孔が認められる。尺骨は右側の近位半が観察できたが、近位部はきわめて扁平である。その他、右側大腿骨の骨体近位部、左側大腿骨遠位端、右側腓骨体が観察できたが、いずれも小さく、細い。

頭蓋はほとんど残存していなかった。わずかに左側上顎骨の歯槽突起の一部を認めたにすぎない。

性別は四肢骨の径が著しく小さいことから、女性と推定したが、年齢は不明である。

### 47 I 土壌墓人骨（性別、年齢不明）

残存量も少なく、保存状態も著しく悪い。上顎骨のごく一部、遊離歯冠および下肢骨のみが残存していたようである。埋葬姿勢は不明である。

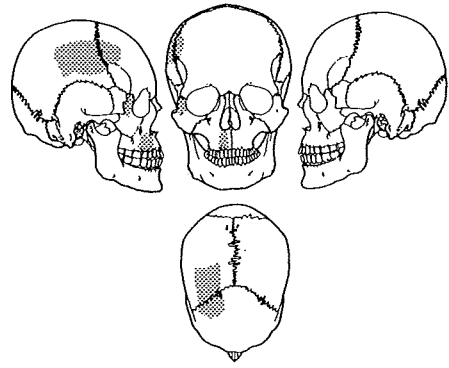
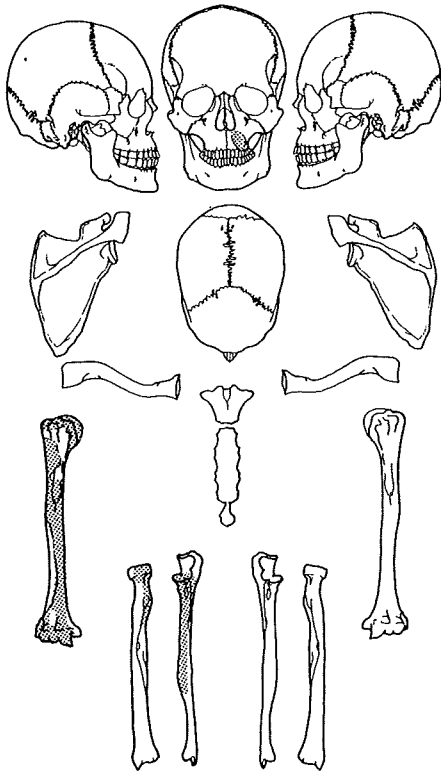
上顎骨は右側の歯槽突起の一部で、歯冠もほとんどが細片になっており、歯種を同定できたのはわずか1本のみで、これは下顎の右側第二小臼歯である。

歯槽の状態と残存歯を歯式で示すと、次のとおりである。

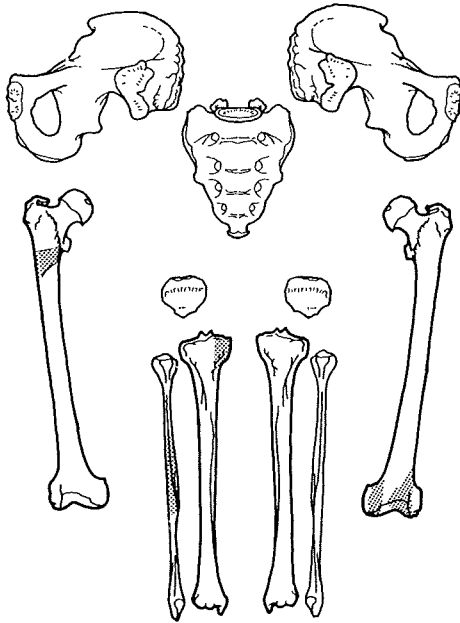
/// / * P <sub>2</sub> * P <sub>1</sub> C ///		/// / / / / / / / / / /	{ / : 不明 (破損) * : 歯根のみ }
/// / P <sub>2</sub> / / / / / / / / / /		/// / / / / / / / / / /	

四肢骨は脛骨と大腿骨とが残存していたが、取上げは不可能であった。従って、その様態は不明である。

性別、年齢はともに不明である。



48 I 土壙墓人骨 (男性・壮年)  
(Skeleton 48 I, young adult male)



46 I 土壙墓人骨 (女性)  
(Skeleton 46 I, female)

Fig. 8 人骨の残存部, アミかけ部分

(Fig. 8 Regions of preservation of the skeleton, shaded areas are preserved.)

48 I 土墳墓人骨（男性，壮年）

本例も残存状態は悪い。残存していたのは頭蓋，歯および下肢骨のみである。膝関節は屈曲状態で検出されたので，下肢は屈曲していたものと考えられる。

頭蓋は右側頭頂骨と右側頬骨の一部が残存しており，冠状縫合の一部の観察が可能であったが，この縫合は内外両板ともまだ開離している。また，右側上顎骨の歯槽突起の一部が残っており，遊離歯も残存していた。歯槽の状態と残存していた遊離歯を歯式で示すと，次のとおりである。

$M_3 M_2 / / \quad * P_1 C I_2 / /$	$/ / / / / / / / / / / /$	$\left[ \begin{array}{l} / / : \text{不明 (破損)} \\ * : \text{歯根のみ} \end{array} \right]$
$/ / / / / / / I_2 I_1$	$I_1 / / / / / / / / / / / /$	

咬耗度は Broca の 1～2 度である。歯の径は大きい。

四肢骨は下肢骨のみが残存しており，現場では寛骨，大腿骨および脛骨を確認することができたが，その様態は観察することもできなかった。

性別は，歯の径が大きいことから，男性と推定した。年齢は縫合がまだ開離していることや歯の咬耗が弱いことから，壮年と考えられる。

考 察

中世人は日本人の形質変化のなかでもきわめて特異な特徴を持つことを鈴木（1956）は材木座出土の中世人骨の研究の中で明らかにした。その特徴とは，「極端な長頭性」，「低顔」，「鼻根部の扁平性」，「歯槽性の突顎」で，いずれもその極限状態に達している。九州では内藤によって熊本県の尾窪遺跡（内藤，1973），大分県の立石遺跡（内藤，1974 b）から出土した中世人骨にも同様な特徴が認められることが指摘されている。その後，熊本県の塚原遺跡（内藤，1975），杉谷遺跡（内藤・他，1978），興善寺馬場遺跡（松下，1980）などから中世人骨が出土しているが，これらはいずれも保存状態が悪い。長崎県の例は諫早市の林ノ辻遺跡（松下・他，1983），長崎市の大塚遺跡（松下・他，1987）および対馬の仁兵島遺跡（内藤，1974 a）から出土しているぐらいで，例数はきわめて少ない。

本例は保存状態が著しく悪く，女性の上腕骨と尺骨の観察ができたぐらいで，他の骨の特徴などを知ることはできなかった。また，上腕骨も尺骨も計測はできなかったが，上腕骨は三角筋粗面の発達がよく，尺骨は骨体近位部が著しく扁平であった。仁兵島の女性も大柄で体格がよく，深堀中世人は男性であるが，これまた，四肢骨が大きく頑丈で，屈強な中世人であった。小園城中世人女性は決して大柄とは思えないが，筋付着部の発達がよいことや尺骨体に扁平性

が認められるなど上肢骨の発達の良いことが注目される。この被葬者がどのような社会的地位に属していたかは考古学的にはまだ明らかにされていないが、形質人類学的には少なくとも労働を免除されていたというようなことは考えにくいようである。

## 要 約

長崎県東彼杵郡東彼杵町瀬戸郷字小藪に所在する小藪城跡の発掘調査が1987年（昭和62年）に行われ、3基の土壙墓から人骨が検出された。保存状態は著しく悪いものであったが、人類学的観察の結果、性別や年齢などを推定することができた。その結果を要約すれば、次のとおりである。

1. 出土人骨は3体で、遺構はすべて土壙墓であった。
2. 埋葬姿勢は、仰臥で膝を屈曲した状態であった。
3. この3体の人骨は中世（15、16世紀）に属する人骨である。
4. 3体のうち性別を判別できたのは2体で、このうち1体（48 I 土壙墓人骨）は男性骨、残りの1体（46 I 土壙墓人骨）は女性骨であった。
5. 女性骨の四肢骨は細くて小さいが、三角筋粗面の発達は良好で、尺骨体近位部には著しい扁平性が認められた。また、女性上腕骨には滑車上孔が存在する。
6. 長崎県では中世人骨の出土例が少なく、本例は貴重な資料と考えられたが、保存状態が悪く、本中世人の特徴を細部にわたって明らかにすることはできなかった。しかし、女性は三角筋粗面の発達が良好で、尺骨体には著しい扁平性が観察された。

## 謝 辞

摺筆するにあたり、本研究と発表の機会を与えていただいた長崎県教育庁文化課の諸先生方に感謝致します。

Tab. 9 齒の計測値 (mm) (Table 9. Tooth, mm)

		小 齒 城		
		48-I		
		男 性		
		右	左	
上 顎	I <sub>1</sub>	—	—	
	I <sub>2</sub>	7.80	—	
	C	—	—	
	P <sub>1</sub>	—	—	
	P <sub>2</sub>	—	—	
	M <sub>1</sub>	—	—	
	M <sub>2</sub>	12.75	—	
頰 (唇)	M <sub>3</sub>	12.05	—	
	下 顎	I <sub>1</sub>	△	6.44
		I <sub>2</sub>	△	—
		C	—	—
		P <sub>1</sub>	—	—
		P <sub>2</sub>	—	—
M <sub>1</sub>		—	—	
M <sub>2</sub>		—	—	
舌 徑	M <sub>3</sub>	—	—	
	上 顎	I <sub>1</sub>	—	—
		I <sub>2</sub>	7.88	—
		C	—	—
		P <sub>1</sub>	—	—
		P <sub>2</sub>	—	—
M <sub>1</sub>		—	—	
M <sub>2</sub>		10.27	—	
近 遠 心	M <sub>3</sub>	10.22	—	
	下 顎	I <sub>1</sub>	△	5.88
		I <sub>2</sub>	6.79	—
		C	—	—
		P <sub>1</sub>	—	—
		P <sub>2</sub>	—	—
M <sub>1</sub>		—	—	
M <sub>2</sub>		—	—	
徑	M <sub>3</sub>	—	—	

計測不能 ; △

Tab. 10 齧 蝕 (Table 10. Caries of the teeth)

		小 齒 城		
		48-I		
		男 性		
		右	左	
上 顎	I <sub>1</sub>	/	/	
	I <sub>2</sub>	2	/	
	C	/	/	
	P <sub>1</sub>	/	/	
	P <sub>2</sub>	/	/	
	M <sub>1</sub>	/	/	
	M <sub>2</sub>	2	/	
下 顎	M <sub>3</sub>	2	/	
	上 顎	I <sub>1</sub>	/	○
		I <sub>2</sub>	/	/
		C	/	/
		P <sub>1</sub>	/	/
		P <sub>2</sub>	/	/
M <sub>1</sub>		/	/	
M <sub>2</sub>		/	/	
M <sub>3</sub>	/	/		

[ 1 ~ 4 : present, ○ : absent, / : unobservable ]

#### 参考文献

1. 松下孝幸, 他, 1983: 林ノ辻遺跡出土の中世人骨。林ノ辻遺跡(諫早市文化財調査報告書4): 34-37.
2. 松下孝幸, 他, 1987: 長崎市深堀遺跡出土の人骨。深堀貝塚発掘調査報告書: 45-56.
3. 松下孝幸, 他, 1980: 熊本県興善寺馬場遺跡出土の中世人骨。興善寺(熊本県文化財調査報告書第45集): 145-159.
4. 故松野 茂, 他, 1970: 熊本県宇土市緑川の中世時代早期の遺跡出土の頭骨について。熊本医学会雑誌, 44: 999-1016.
5. 永井昌文, 1965: 荒尾市浄業寺中世人骨について。浄業寺と小代氏(荒尾市文化財報告第1集): 51-53.
6. 内藤芳篤, 1973: 人骨。尾窪一熊本県下益城郡城南町尾窪中世墳墓群の調査一(熊本県文化財調査報告12): 62-78.
7. 内藤芳篤, 1974 a: 仁兵衛島出土の人骨。対馬(浅茅湾とその周辺の考古学調査)(長崎県文化財調査報告書17): 106-112.
8. 内藤芳篤, 1974 b: 人骨。立石貝塚(大分県文化財調査報告31): 39-45.
9. 内藤芳篤, 1975: 塚原中世墳墓・丸尾5号墳出土の人骨について。塚原(熊本県文化財調査報告第16集): 317-322.
10. 内藤芳篤, 他, 1978: 杉谷遺跡出土の中世人骨。大園山・杉谷遺跡(熊本県荒尾市文化財調査報告第3集): 116-122.
11. 佐熊正史, 1986: 中世九州人頭蓋の人類学的研究。長崎医学会雑誌, 61: 4-21.
12. 鈴木 尚, 他, 1956: 頭骨の形質。鎌倉材木座発見の中世遺跡とその人骨: 75-148. 岩波書店, 東京.

Human Skeletal Remains of the Medieval Period Excavated from the Kozonojo Site,  
Higashisonogi-cho, Nagasaki Prefecture.

Takayuki MATSUSHITA, Kazunobu SAIKI

[Department of Anatomy, Nagasaki University School of Medicine]

Jouichi OYAMADA

[Department of Oral Anatomy, Nagasaki University School of Dentistry]

Keywords: Nagasaki Pref., Medieval skeletons, Poor preservation, Flat ulna

Three human skeletal remains of the Medieval Period (15th or 16th century) were excavated from the burial pits at the Kozonojo site, Higashisonogi-cho, Higashisonogi-gun, Nagasaki Prefecture, in 1987. Due to the poor preservation of these skeletons, it is not possible to measure the bones, and only anthropological observation was conducted.

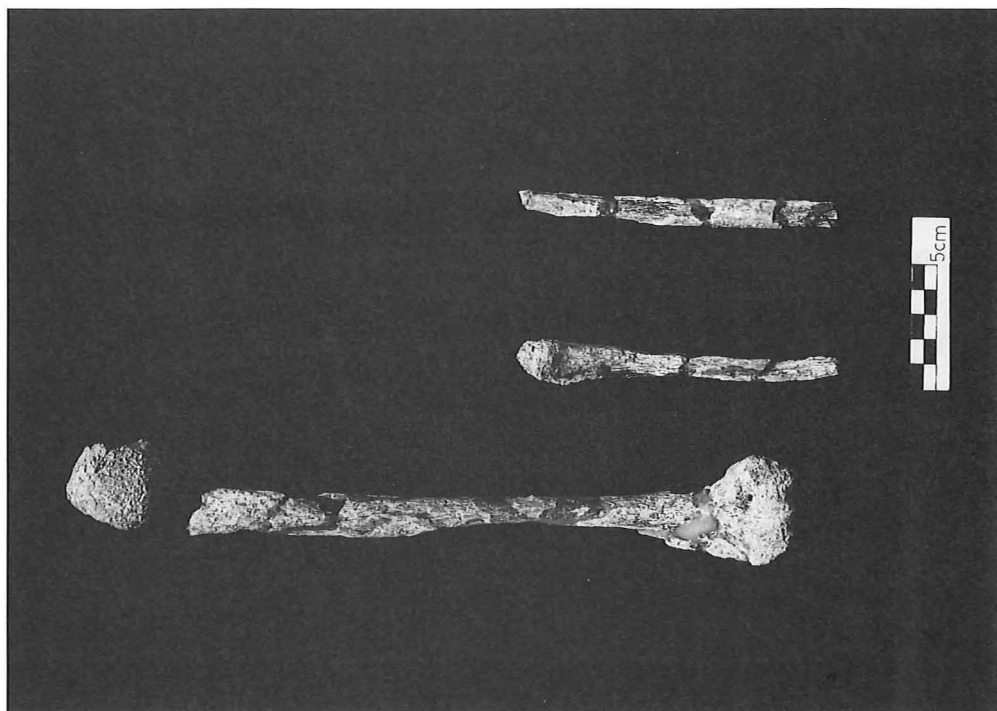
Skeleton 46-I is female, It has the developed deltoid tuberosity of the right humerus and the upper end of the shaft of the right ulna is flat.

Skeleton 47-I was poorly preserved, thus sex and age are unknown.

Skeleton 48-I is a young male.



48 I 土壙墓人骨 (男性)・頭蓋  
(Skeleton 48-I, male skull)



46 I 土壙墓人骨 (女性)・四肢骨  
(Skeleton 46-I, female limb bones)



長崎県文化財調査報告書第99集

九州横断自動車道建設に伴う  
埋蔵文化財緊急発掘調査報告書

VIII

1 9 9 1

発行 長崎県教育委員会 ©  
長崎市江戸町 2-13

印刷 日本紙工印刷株式会社  
長崎市興善町 2-6



Fig. ① 坂口館跡遺構配置図 (1/200)